太政官編纂
東京帝國大學藏版

復古記

第一冊

内外書籍株式會社發行

復古記序

王政維新の鴻業漸く緒に就くや、朝廷、府藩縣に布告して、嘉永六年、米艦渡來以來、國事に勤勞せし者の姓名鄉貫を錄上せしめ、死者は、妻子を錄上せしめたり。時に明治二年正月晦日なりき。是れ蓋し朝廷、國事勤勞者の事蹟を記錄して、以て其功を永く世に傳へんとするの趣意に出でたるものにして、後年復古記の編纂を計畫するに至りし精神は、夙く是時に發露したるを知るべし。

幾くもなく、朝廷大に修史の業を興さんと欲し、史局を舊和學講談所に置き、四月四日、勅して、輔相三條實美をして、修史の事を總裁せしめられたり。其詔に曰く、

修史は、萬古不朽の大典、祖宗の盛擧なるに、三代實錄以後絕て續なきは、豈大闕典に非ずや。今や鎌倉以降武門專權の弊を革除し、政務を振興せり。故に史局を開き、祖宗の芳躅を繼ぎ、大に文教を天下に施さんと欲し、總裁の職に任ず。須く速に君臣名分の誼を正し、華夷內外の辨を明にし、以て天下の綱常を扶植せよ。

後史局を昌平學校に移し、教授をして、編修を兼ねしめたり。然れども國事多端にして、未だ著手するに遑あらず、荏苒歲月を經過し、其事消たるが如くなりき。

明治五年十月四日、太政官正院に、歷史地誌の二課を置き、國史を編輯せしめたり。蓋し前年藩を廢して、縣を置かるゝことあり、國家統一の事業新に成りしを以て、爰に聖旨奉戴の實績を擧げんと欲し、此制定を見るに至りしならん。而して復古記の編纂亦其端を是時に發したり。然るに明治六年五月五日、皇城火あり、太政官廳も亦類燒し、國史編輯の爲めに、全國より蒐集せる記錄圖書の類、悉く烏有に歸したり。是に於て、更に諸省府縣舊藩主等に令して、史料を錄上せしめ、先づ力を王政復古の事蹟に效し、傍ら他の時代に及べり。

初め太政官に歷史課を置かるゝや、長松幹其首唱たり。太政官乃ち幹を其課長に任じ、專ら復古記編輯の事を擔當せしめたり。幹等博搜旁索、藩記私記の類にして、其記事荷も復古の歷史に關るものは、悉く之を網羅して、復古記三十餘本、復古外記二十餘本を編纂せり。而して淨寫の際、偶ま祝融の災に罹り、稿本原本を併せて烏有に付したりと雖も、幹等更に勇を鼓して、復古記再輯の事に當り、經營三年の後、纔に稿を成し、漸次脫稿上進せり。

明治九年六月、幹等始めて慶應三年十月十四日より二十五日に至る復古記貳卷を淨寫して、之を上進し、又別に其綱文及び明治三年に至る史料の綱文を集めて、明治史要第一編

を印刷上進せり。

明治十四年十二月、修史館の職制を改定し、從前の局科を廢して、新に五局を設けたり。是れ專ら力を六國史以後の編年史編輯に效さんが爲めにして、復古記編纂の如きは、將に中止せられんとするの勢ありき。翌年一月、幹、意見書を總裁三條實美に上りて、復古記編纂の事業を繼續せんことを乞へり。其書に曰く、

乞復古記編修議

近日本館職制更正の擧あり、編修の方亦隨て其端を改む。從前三科（後小松天皇以降後陽成天皇に至る史料一科、後水尾天皇以降先朝に至る史料一科、今上復古記府縣史明治史要西征始末等一科。）を擧て、一に後小松天皇以降國史編修の事に從ふ、是に於て、復古記一科主任する所なし。幹謹て按ずるに、今上御極朝權古に復す、其盛德大業前古比なし。而して當時朝廷積衰の餘を承け、兵馬の權なく、土地の富なく、其海內の命を制する、一の名義あるのみ。其際反亂相踵ぎ、兵結解けず、幸に今上叡明神武、在廷元老之を內に輔贊し、正議雄藩之を外に翼戴し、撥亂反正以て東京臨幸、大政歸一に至る。然れども兵馬倥偬の故を以て、朝廷記載備らず、其盛德大業、元勳偉烈の跡より、大列藩の向背反亂の情形に至るまで、其首尾顚末得て詳悉すべからず。是に於て、往年復古記（丁卯十月、大政奉還に起り、戊辰十一月、東京臨幸、鎭將府を廢し、大政歸一に終る。）編纂の命あり、幹之に承けて其事に從ひ、百方搜索、藩

記私記の類羅致粗備り、復古正記三十餘本、復古外記（東海東山北陸三道戰記）。二十餘本を編す。而して淨寫の際六年五月、祝融の災に罹り、稿本原記等を併せて、一瞬烏有に付す。再び諸記を博捜し、其事ありて其書なきは、其家若くは其人に就て之を問ひ、經營數年、僅に稿を成し、漸次脱稿上進せしもの一百有餘卷、其餘す所十の二三耳。是宜しく主任を置き、其業を畢べきなり。抑前世の史の如きは、之を修る諸舊記の在るあり、遲速必しも利害あらず。復古記に至ては、其書の據るべきなく、其事に就き、其人に問ひ、以て前後首尾を接續するもの極て多し。今にして修めざれば、其人亡びて、其事佚し、後來復手を下す所なからん、其遲速の利害に關するや甚大なり。因て願くは、本館の一部を分ち、舊に仍て其業を畢しめんことを。或曰、本館更革は、全力を前世修史に用ひるに在り、一部を分ち、一分の力を殺ぐは不可なりと。幹曰、全力既に前史に移す、一分の力を殺ぐは、唯其功程の一分を損するのみ、復古記遲速の利害に關すると其輕重如何ぞや。又曰、復古記材料完全ならず。是に據て之を修む、完全の史たるを得ずと。幹曰、材料完全ならざるは、書なきの故なり。故に其年を經る久からず、其人未だ亡びざるに及び、之が編修を速にし、以て其完全に至るを期せざる可らず。且夫本記は、前後通じて十有四月、大約一百五十卷、既成のもの十月、百有餘卷、今にして之を止む、唯所謂功一簣

に虧くのみならず、既成のものも、亦頭ありて尾なく、併せて無用の長物に屬す。況や本記編修を止むるの命なきに於をや。豈私に之を止むるの理あらんや。是一部を分て、其業を畢へんことを乞ふ所以なり。是幹敢て私情を訴るに非ず、蓋亦條理のみ。殿下幸に高裁を賜へ。悃願の至に勝へず。恐悚拜上。

明治十五年一月　　　　修史館監事　長　松　幹

三　條　總　裁　公

殿　下

と。六月に至りて裁可せられ、再び編纂に著手することゝなれり。

明治十九年一月、修史館を廢し、内閣に臨時修史局を置き、明治二十一年十月、臨時修史局を廢し、其著手の事業を、帝國大學に屬せしめ、臨時編年史編纂掛を設けたり。其間復古記編纂の事絕ゆることなく、明治二十二年十二月に至り、前後十六年八箇月を費して、復古記及び復古外記合せて二百九十八卷を完成せり。

この編纂については、長松幹終始其主幹たり。長熒、四屋恒之、中村鼎五、廣瀨進一等協修の事に當り、重野安繹、川田剛、巖谷修、依田百川、藤野正啓、久米邦武等之を檢閱せり。引用書一千二百十二種の多きに上り、原本の散逸或は燒失により再び獲べからざるも

の亦尠しとせず。而してこの浩瀚なる著作の原稿は、永く我史料編纂所の書庫に藏せられ、一部學者の外は之を知るもの多からず、之を利用するものに至つては更に甚だ稀なりとす。而して近時維新史研究の氣運大に勃興し、之に關する書籍の陸續刊行せらるゝは學界の爲め喜ぶべしと雖も、然も其の完備せる史料に至つては未だ出版せられしものあるを見ず。されば今の秋に方つて本書を公刊せんことは、一は之によつて學界の要望を充し、一は之によつて先輩の功績を顯揚すべき所以ならずばあらず。乃ち內外書籍株式會社をしてこの出版の事に任ぜしむ。庶幾くは王政復古の原委之によりて詳かなるを得ん歟。玆に刊行を了へんとするに臨み、編纂の由來を陳じて以て序とす。

昭和五年八月

東京帝國大學文學部

史料編纂所

例言

復古記は百五十卷（二百八冊附圖一册、附錄二册を含む）、復古外記（稿）は百四十八卷（百四十九冊）、通計二百九十八卷（三百五十七冊）あり。いま總稱して復古記といひ、別に編纂せる附錄と共に十五冊と爲したり。

引用書中、字句の疑はしきものも猥りに改竄を加へず、原本其他に據つて訂正し、なほ決し難きものは（……）又はマ、と傍註し、或は校訂者の按文を附したり。

本書中、假名書の名詞に限り濁點を施しゝも、外國語の中清濁の明らかならざるものは、原文のまゝとしたり。

原本に平出擡頭せるものは、今便宜に從ひ、特殊の場合を除くの外、凡て一字明きとして一行中に連記し、人名、地名等、別行に認めたるものも亦概ね二段或は數段に竝記せり。

附錄には、綱文を集錄し、また索引を附して檢索の便に供せり。

復古記第一冊目次

凡例……一
引用書目……三

卷一

慶應三年

十月

十四日 征夷大將軍徳川慶喜上表シテ、政權ヲ奉還センコトヲ請フ。……二
幕府、大宮御所造營費ヲ全國ニ課シ、其上納ノ節目期限ヲ定ム。……七
十五日 徳川慶喜ニ詔シテ、政權奉還ノ請ヲ允シ且政務委任ノ條項ヲ指令ス○十萬石以上ノ諸侯ヲ召集シ、又特ニ松永慶永、鍋島齊正、山内豐信、伊達宗城、島津久光ヲ召ス。……一一
十六日 加藤明實ヲシテ泉涌寺ヲ警衛セシム○明實京ニ至ル。……一三
十七日 幕府、政務委任ノ條項ニ就キ三事ヲ稟請ス。……一三
十八日 徳川慶喜、書ヲ上リ、在京諸侯及ヒ藩士ヲ召シ、外國事務ヲ商議センコトヲ請フ。……一三
本願寺光澤、大坂ノ支院ヲ以テ、三條實美等ノ旅寓ニ充ルヲ稟ス。……一三
徳川慶喜、十萬石以上ノ諸侯ヲシテ、京師ニ至ラシム○一萬石以上ノ諸侯ヲ招集ス。……一五
十九日 幕府、京都警備等八箇條、及ヒ三條實美以下五人ノ措置ヲ稟請ス。……一五
幕府、久松定昭ノ加判列上座ヲ罷ム。……一六
二十日 幕府稟議ノ、京都警備等八箇條及ヒ外國事務、三條實美以下ノ處分ヲ列藩ニ下示シ、各意見書ヲ上ラシム。……一六
正親町三條實愛等連署上疏シ、三條實美、三條西季知ノ義絶ヲ釋カンコトヲ請フ。……一七

松平慶憲疾ヲ謝シ老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ請フ。……一八
幕府、紙幣ヲ關以東ニ發行セントス。……一九
英國公使、自國軍艦水夫被害事件ニ就キ、幕府ト往復判論ス○幕府書ヲ公使ニ致シ、平山敬忠ヲ遣シテ、其事ヲ處分セシムルヲ告ク。……二五

卷二

廿一日　十萬石以下ノ諸侯ヲ召集ス。……三〇
德川慶喜、三條實美等ノ措置ヲ稟ス○諸侯ノ家臣各答議ヲ上ル。……三〇
廿二日　幕府申稟スル所ノ三事ニ批シ、八條ハ姑ク其舊ニ依リ、三條實美等ハ大坂ニ止メ、外國ノ事ハ數藩ト謀リ、諭シテ之ヲ紓フセシム○之ヲ、列藩ニ布告ス。……五三
久我通久等、書ヲ上リ、東久世通禧ノ義絕ヲ釋カンコトヲ請フ。……五三
德川慶勝、幕府ヲ匡輔スルコト能ハサルノ罪ヲ謝シ、其官爵ヲ貶黜センコトヲ請フ。……五四
市橋長義、京ニ至ル。……五五
廿三日　上京ノ諸侯ニ令シ、務テ從者ヲ減省セシム。……五五
幕府再ヒ、外國常事ノ措置、及ヒ課金、驛法、布告ノ事ヲ稟問ス。……五五
持明院基政等連署シテ、壬生基修ノ義絕ヲ釋カンコトヲ請フ。……五五
幕府書ヲ佛國公使ニ與ヘ、浦上村耶蘇教徒處分ノ事ヲ告ク。……五六
廿四日　德川慶喜上表シテ、征夷大將軍ヲ辭ス。……五八
甘露寺勝長ノ義子萬長ヲ堂上ニ班シ、松崎氏ヲ稱セシム。……五八
北條氏恭ヲシテ市橋長義ト共ニ、四塚關門ヲ守ラシム。……五八
廿五日　諸藩ニ申令シ、十一月ヲ期シテ京ニ至ラシム。……五九
幕府書ヲ上リ、使ヲ朝鮮國ニ遣ハシ、佛米二國トノ講和ヲ謀ランコトヲ請フ○宗義達、朝鮮國往復書

ヲ上リ、其事由ヲ上陳ス。……五九
井伊直憲等十二人ノ家臣連署シテ、廿二日批下ノ疑條ヲ稟シ、且外國ノ事ハ諸侯ノ會同ヲ待テ、之ヲ決センコトヲ請フ。……六五
山科言知等連署シテ、四條隆謌ノ義絶ヲ釋カンコトヲ請フ。……六七
加藤明實、藩ニ歸ル。……六八
幕府、攝津、播磨間ノ官道ヲ改ム。……六八
黒田齊溥、封内漂到ノ朝鮮人ヲ長崎ニ送致スルヲ幕府ニ報ス。……六八
薩、藝、長三藩兵ヲ上國ニ送リテ爲ス所アラントシ、薩兵ヲシテ先ツ京ニ入ラシム。……六九

卷三

廿六日　本田忠民家臣伏見警守事項ノ稟請及ヒ三條實美等待接ノ事ヲ幕府ニ請問ス。……七〇
幕府、邦内寄寓ノ支那人、及ビ條約未濟國人取締法ヲ設ケ、之ヲ各國公使、領事ニ告ク。……七一
廿七日　徳川慶喜ノ辭表ニ批シ、姑ク其舊ニ仍リ、諸侯朝會公議決裁ヲ待タシム。……七三
徳川慶勝、京ニ至ル○森忠典、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ入京セシメンコトヲ請フ。……七三
幕府、老中ノ江戸ニ在ル者、及ヒ十萬石以下ノ諸侯ニ令シ、其上京ヲ延期セシム。……七三
幕府、江戸開市場外國人居留規則及ヒ運送船等ノ規則ヲ定メ、之ヲ各國公使ニ諜ル○外人居留地域外夜行ノ際、我護衛兵ヲ附スルコトヲ告ク。……七三
廿八日　朽木爲綱、京ニ至ル○青山幸宜疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ請フ。……七八
宣命使日野資宗ヲ後月輪東陵ニ遣シ、造陵竣功、及ヒ大政復古ヲ告ク。……七八
廿九日　市橋長義歸藩ノ請ヲ聽ス。……七九
幕府令シテ、驛遞法、及ヒ大宮御所造營課金、姑ク其舊ニ仍ラシム。……七九
幕府書ヲ各國公使ニ致シ、大政奉還ノ意ヲ陳述ス。……八〇
幕府書ヲ各國公使ニ致シ、新潟開港ノ期ヲ改メンコトヲ報ス。……八五

晦日　淺野茂勳、毛利廣封ト周防新湊ニ會シ、島津茂久ノ至ルヲ待チ、倶ニ入京センコトヲ議ス。……八九

十一月

朔日　分部光貞、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ請フ。……八九

大給乘謨、稻葉正巳京ニ至ル。……八九

幕府、書ヲ各國公使ニ致シ、江戸開市期限ヲ改メンコトヲ報ス。……九〇

三日　松平慶倫、暫ク上京ノ延期ヲ請フ○批シテ本月ヲ限リテ會同セシム。……九一

徳川茂承等四人、病ニヨリ上京ノ延期ヲ請フ○小笠原貞孚、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコト請フ○戸田氏共、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ京ニ至ラシム○松平慶憲ノ警衛兵、京ニ至ル。……九二

幕府諸藩ニ令シテ、江戸郭内諸門ヲ警守ス。……九三

四日　幕府ニ命シテ、朝鮮、佛朗西二國ノ和議ヲ調停セシメ、宗義達ヲシテ、其事ヲ幹セシム。……九四

柳澤保申、京ニ至ル。……九五

幕府、書ヲ各國公使ニ致シ、貨約改鑄ノ事、期約ニ循フコト能ハサルヲ告ク。……九五

五日　山田奉行本田忠貫ノ請ヲ聽シ、老臣テシテ代リテ京ニ至ラシム。……九八

前田慶寧、阿部正方、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ。……九九

幕府、再ヒ諸藩ニ令シテ、江戸外郭及ヒ各處ヲ警守ス。……九九

徳川茂承ノ家臣江戸ニ在ル者、幕府ノ親戚譜第及ヒ諸藩士ヲ會シ、幕府ヲ扶持センコトヲ勸喩ス。……一〇一

六日　兵庫開港ノ期近キニ在ルヲ以テ、幕府、本地居留外國人ノ遊歩區域ヲ定ムルヲ布告ス。……一〇五

卷四

八日　九條尙忠、久我建通、千種有文、岩倉具視、富小路敬直ノ罪ヲ赦シ、各其家ニ歸ラシム。……一〇六

幕府、英國公使、將サニ横濱ヨリ兵庫ニ來ラントシ、其軍艦一隻、先至ルヲ稟ス。……一〇六

松平慶永、井伊直憲京ニ至ル。……一〇七

前田利鬯ノ朔平門前警衛ヲ罷メ、松平慶憲ヲ以テ之ニ代フ。……一〇九

十日　幕府、重ネテ外國事宜ヲ稟請ス、批シテ諸藩衆議ヲ待タシム。……一〇九
幕府、譜第諸侯ノ、職務及ヒ警衛ニ服シ、若クハ疾病幼弱ノ者ハ、老臣ヲシテ代リテ、朝召ニ應セシメンコトヲ請フ、批シテ警衛ヲ除クノ外、其事由ヲ上陳シテ朝裁ヲ請ハシム。……一一〇
松平武聰、疾ヲ以テ召命ヲ辭ス。……一一一
福岡孝弟、辻維嶽等、松永慮永ニ說キ、幕府譜第諸藩ノ爲ニ進退ヲ誤ルコト勿ラシム。……一一一
十一日　幕府、毛利敬親ノ支封主及ヒ老臣等上坂ノ命ヲ停メ、朝命ヲ待タシム。……一一三
脇坂安斐、櫻井忠興、京ニ至ル〇堀直虎、疾ヲ以テ召命ヲ辭ス。……一一四
前田利鬯ノ歸藩ノ請ヲ聽ス〇大給乘謨、稻葉正巳江戸ニ歸ル。……一一四
十二日　國事係近衛忠房等連署シテ、大政復古、綱紀確立ノ策問二道、太政官八省以下再興ノ議案ヲ上ル。……一一四
朽木爲綱、藩ニ歸ル。……一三一
十三日　有馬道純、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ、代リテ入京セシメンコトヲ請フ〇津輕承敍、疾ニヨリ上京スル能ハサルヲ以テ朝旨ヲ候ス。……一三一
十四日　本多康穰、京ニ至ル。……一三一
民間、符籙天ヨリ降ルト稱シ、奔走舞踏狂スルカ如シ〇京都町奉行、令シテ其狂躁雜還ヲ禁ス。……一三二
十五日　大政歸一、綱紀確立ノ策問ヲ德川慶喜及ヒ德川慶勝、松平慶永ニ下シ、尋テ之ヲ在京諸侯ニ下問ス。……一三三
酒井忠篤等書ヲ幕府ニ呈シ、官位ヲ朝廷ニ還シ、德川氏臣屬ノ義ヲ明ニセンコトヲ請フ〇安倍信發等二十四人書ヲ幕府ニ呈シ、朝召ヲ辭センコトヲ請フ。……一三三
賊アリ、坂本直柔、中岡道正ヲ刺ス。……一三五

卷五

十六日　德川慶勝引咎ノ請ヲ慰諭シ、奉仕故ノ如クナラシム。……一三五
大久保忠禮等三十七人、書ヲ幕府ニ呈シ、朝召ヲ辭センコトヲ請フ。……一三七
十七日　一柳頼紹、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ。……一三〇

尾、越二藩、幕府ノ親藩及ヒ係屬中、政權挽回ヲ議スル者アルヲ憂ヘ陰ニ之カ匡正ヲ謀ル。……一三一
土屋寅直等書ヲ幕府ニ上リ、朝召ヲ辭センコトヲ請フ。……一三五
幕府、書ヲ英國公使ニ致シ、航海術教導士官召聘ノ事ヲ謝ス。……一三六
十八日　前田利谿、本莊道美、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ。……一三九
島津茂久、三田尻港ニ至リ、毛利廣封ト前途ノ策ヲ議シ、直ニ上國ニ赴ク○廣封、之ヲ淺野茂長ニ報知シ、共ニ其兵ヲ東上セシメンコトヲ約ス。……一四〇
幕府、英國公使館附屬士官ニ危害ヲ加ヘントスル者ヲ逮捕擬刑シ、之ヲ英國公使ニ報ス。……一四〇
十九日　德川慶喜、綱紀確立ノコトハ諸侯會同ヲ待テ、之ヲ公議スヘキヲ稟ス。……一四五
德川慶勝、上書シテ、楠正成ニ神號ヲ贈リ、祀典ニ列シ、近古殉國者ヲ、從祀センコトヲ建議ス、命シテ死事者ノ姓名等ヲ錄上セシム。……一四五
織田信親、江戸ヨリ京ニ至リ、塚原關門ヲ守ルヲ稟ス○山内豐信疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ○南部信順疾ヲ謝シ、赴召期シ難キヲ稟ス。……一四七
幕府、紙幣ヲ畿內及ヒ旁近地方ニ發行ス○新潟ヲ開港場ト爲シ、其開港及ヒ江戸開市ノ期ヲ、明年三月九日ト爲スコトヲ布告ス。……一四七
二十日　北小路俊昌ヲ堂上ニ班ス。……一四八
戸田氏共、再ヒ疾ニヨリ、入京スルコト能ハサルヲ謝ス○松平定安、上京ノ延期ヲ請フ。……一四八
長崎奉行河津祐邦、薩摩藩ノ、佛國人モンブラン等ヲ、其軍事ニ參シ、又英國汽船ヲ購買シ、告ケスシテ歸藩スルヲ、幕府ニ報ス○幕府、書ヲ佛國公使ニ與ヘ、其事由ヲ問フ。……一四八
廿一日　豐岡隨資上書シテ、舊習ヲ除キ、紀綱ヲ張リ、人才ヲ擧ケ、公議ヲ採ランコトヲ建議ス。……一五三
松平頼英、同義勇疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ請フ。……一五六
廿二日　小出英尙、市橋長義、京ニ至ル○池田慶德等三人、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……一五六
幕府、橫濱外國人居留地取締規則ヲ設ケ、且英國人ヲ其取締役トナスヲ、各國公使ニ告ク。……一五六

米國公使書ヲ幕府ニ致シ、米國大統領、我使節ヲ朝鮮ニ遣リ、講和ヲ謀ラントスルヲ謝スヲヲ陳ス。…………一五八

卷六

廿三日 島津茂久京ニ至ル○黒田齊溥、久松定法、疾ニヨリ、赴召遲緩ヲ謝ス。…………一六〇
黒田齊溥、其管地肥前國内ノ耶蘇宗徒、長崎奉行ノ捕縛スル所ト爲ルヲ幕府ニ稟ス。…………一六〇
廿四日 明年正月、天皇首服ノ日ヲ卜定ス。…………一六一
左大臣近衞忠房、右大臣一條實良、上表シテ職ヲ辭ス。…………一六三
廿五日 松平定安、再ヒ上京遲緩ヲ謝ス○眞田幸民、織田信成等四人、病ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ○岡部長寛、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ請フ。…………一六四
土佐藩士、尾、越、肥後等ノ藩士ト議シ、在京諸侯ノ會議ヲ興シ、以テ幕府政權奉還ノ實ヲ擧ケンコトヲ謀ル。…一六四
幕府、東北諸藩ニ令シ、其士民ノ唐太島開拓及ヒ移住ヲ許ス。…………一六六
廿六日 柳澤保申、歸藩ノ請ヲ允ス。…………一六六
柳澤徳忠、幼且疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。…………一六七
柳澤政敬、書ヲ幕府ニ呈シ、朝廷ノ召命ヲ辭ス○幕府、之ヲ卻ク。…………一六七
廿七日 島津義久、京ニ至ル○淺野茂勳、國ヲ發シテ上京ス○毛利敬親ノ支封主、老臣等國ヲ發シ、藝藩兵ニ、御手洗港ニ會ス○淺野茂長、書ヲ上リ、長藩召命停格ノ令、途上齟齬スルノ狀ヲ稟ス。…………一六七
遠山友祿疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ。…………一六九
廿八日 淺野茂勳京ニ至ル○池田茂政以下十四人、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ○松平武聰、南部信順、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。…………一六九
松平慶永、薩藩ノ幕府ヲ疑フヲ憂ヒ、慶喜ニ說キ、西郷隆盛等ヲ招キ、其眞意ヲ諭サシメンコトヲ勸ム。…………一六九
幕府令シテ、脇往還ノ驛夫錢、渡船賃ヲ増加ス○江戸鐵砲洲ヲ外國人居留地ト爲シ、其居民ノ家屋ヲ、外人ニ貸與スルヲ許ス。…………一七一
幕府、兵庫地方ノ民、外國貨幣ニ慣ハサルヲ以テ、姑ク我銀貨ト兌換通行セシム○各國公使ニ移書シ、

其改鑄耗減費ヲ收ム。……一七二

廿九日　北條氏恭、京ニ至ル○堀直虎老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○榊原政敬以下九人、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ○九條隆備、再ヒ上京ノ延期ヲ請フ○稻葉久通等三人、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ上京セシメンコトヲ請フ。……一七三

晦日　左大臣近衛忠房、右大臣一條實良ノ官ヲ罷ム、國事掛故ノ如シ○權大納言九條道孝ヲ左大臣兼左近衛大將、內大臣大炊御門家信ヲ右大臣、權大納言廣幡忠禮ヲ內大臣兼右近衛大將ト爲ス。……一七三

幕府、鍋島茂實、松平定安ニ、明春京師警衛ヲ命ス。……一七六

毛利敬親ノ老臣等、兵ヲ率ヰテ打出濱ニ至リ、尋テ西ノ宮ニ次ス○淺野茂勳上書シテ其情由ヲ陳疏ス。……一七六

伊達慶邦等六人、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ○松平慶倫、再ヒ上京ノ延期ヲ請フ○松平頼英、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○丹羽長國以下六人、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ請フ○青木重義、病ヲ謝シ、佐竹義諶疾ヲ以テ上京スル能ハス、公事ハ佐竹義堯ニ傳諭センコトヲ請フ○奧平昌服ノ家臣、昌服、會同ノ期ニ後ル、ヲ稟ス。……一七八

是月　幕府ニ命シ、嚴ニ紀伊藩士等ノ黨議ヲ禁遏セシム。……一七九

井伊直憲書ヲ上リ、朝命及申牒等幕府ヲ經由センコトヲ請フ、聽サス。……一七九

幕府、關東八國ニ令シ、酒醬油等釀造三年ノ均額ヲ錄上セシム。……一八〇

神奈川奉行、米國商社ノ請ヲ許シ、煤氣燈ヲ横濱市街ニ設ケントスルヲ、幕府ニ稟ス。……一八〇

十二月

朔日　櫻井忠興、歸色ノ請ヲ允ス。……一八一

蜂須賀齊裕等十一人、疾ニヨリ、上杉齊憲ハ、道路難澁ニヨリ、竝ニ上京ノ延期ヲ請フ○徳川茂承等五人、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○酒井忠美等二人ハ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ請フ○溝口直正、老臣ノ代赴遲緩ヲ謝ス○伊達宗孝、大久保忠順、病ヲ謝ス○有馬慶頼等五人、在京ノ家臣、其主上京ノ遲緩ヲ謝ス。……一八二

二日　毛利敬親ノ老臣ニ命シ、大坂ニ詣テ後命ヲ俟タシム。……一八三
毛利敬親ノ老臣等、書ヲ薩藝二藩ニ致シテ其情ヲ陳ス、淺野茂勳之ヲ上ル。……一八五
岩城隆邦、疾ヲ講シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○黑田齊溥、鍋島茂實ハ道路遠隔ニヨリ、毛利高謙ハ病ニヨリ、竝ニ上京ノ延期ヲ請フ。……一八六
北條氏恭、市橋長義ニ代リ四塚關門ヲ守ルヲ稟ス。……一八六
幕府、櫻井忠興ニ命シ、長門藩士等ノ其封内ノ留次及ヒ經過ヲ聽ス。……一八六
三日　脇阪安斐、歸邑ノ請ヲ聽ス。……一八八
松平慶憲、汽船九隻、日章及ヒ薩藝長三藩ノ旗章ヲ掲ケ、封内近海ヲ過クルヲ、幕府ニ報ス○大州藩士ノ打出村ヲ戍ル者、長門藩老臣等ノ、其旁近ニ次スルヲ報ス。……一八八
藤堂高邦、京ニ至ル。……一八九
四日　山崎關門警守ノ津藩士、書ヲ上リ、毛利敬親ノ老臣等、關ニ至ラハ、之ヲ掃蕩センコトヲ稟ス○書ヲ幕府ニ呈シ、支封久居藩兵ノ都下守衞ヲ撤シ、共ニ山崎ヲ守ランコトヲ請フ。……一八九
池田政禮京ニ至ル○丹羽長國、病ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……一九〇

卷七

五日　松永慶永、徳川慶喜ニ勸メ、毛利敬親等ノ處置、一ニ朝裁ヲ仰カシム。……一九三
幕府堀直虎ヲ若年寄兼外國總奉行ト爲ス○譜第諸藩ニ諭シテ上京セシム。……一九三
幕府、大坂外國人居留規則及ヒ大坂兵庫間運送船等ノ規則ヲ設ケ、之ヲ各國公使ニ謀ル。……一九四
攝政二條齊敬、內旨ヲ徳川慶喜ニ傳ヘ毛利敬親等赦宥ノコトヲ告ク。……一九七
英國公使、書ヲ幕府ニ致シ、諸藩兵ノ大坂ニ輻湊スルヲ止メンコトヲ請フ、幕府其書ヲ上ル。……一九八
六日　伊東祐相、疾ニヨリ重臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○小笠原忠忱、同貞正、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメンコトヲ請フ○織田長易疾ニヨリ、上京遲緩ヲ謝ス。……一九九
幕府、石川成之ノ江戸郭門警衞ヲ罷メテ、西上セシム。……一九九

七　日　徳川慶喜、毛利敬親等、赦宥ノ内旨ニ答申ス○在京諸侯ニ令シ、明日悉ク朝參セシム。……二〇〇
津藩士ノ稟狀ニ批シ、毛利敬親ノ老臣等、闕ニ至ラハ之ヲ留メ、朝命ヲ請ハシム、……二〇一
幕府、植村家保ノ請ヲ聽シ、本多忠鄰ノ子釗八郎ヲ養フテ嗣ト爲サシム。……二〇一
兵庫港及ヒ大坂互市場ヲ開ク。……二〇二
八　日　毛利敬親其子廣封及ヒ支封主ノ官位ヲ復シ、入京ヲ許ス○淺野茂勳ヲシテ、敬親ノ老臣等ノ西ノ宮ニ在ル者ヲ、京ニ召サシム○三條實美等五人ノ官位ヲ復シテ、之ヲ召還シ、錦小路賴徳ノ官位ヲ復シ、澤宣嘉ノ義絕ヲ釋ス○九條尙忠、久我建通、千種有文、岩倉具視、富小路敬直ヲシテ復飾セシメ、建通以下四人ノ蟄居ヲ釋シ、滋野井實在、正親町公董、滋野井公壽、鷲尾隆聚ノ差控ヲ釋ス。……二〇三
中山忠能、岩倉具視等、將ニ大ニ更革ヲ行ハントシ、內旨ヲ島津茂久、淺野茂勳、山內豐信、徳川慶勝、松平慶永ニ傳フ○島津茂久、毛利敬親等赦命ノ事ヲ、敬親ノ老臣ニ報シテ、急ニ北上セシム。……二一四
是夜、中山忠能、密旨ヲ鷲尾隆聚ニ傳ヘ、兵ヲ率ヰテ潛ニ高野山ニ赴カシム。……二一九
藤堂高潔、京ニ至ル○遠山友祿、母ノ喪ニヨリ再ヒ上京ノ延期ヲ請フ。……二二〇

卷　八

九　日　薩尾藝越土五藩ノ兵ヲ徵シテ宮門ヲ守ラシテ、王政復古ノ令ヲ布ク○攝政、關白、征夷大將軍、議奏、傳奏、國事掛、守護職、所司代及ヒ內覽、攝籙、門流ヲ廢シ、新ニ總裁、議定、參與ノ三職ヲ置ク○大將軍徳川慶喜ノ請ヲ許シ、其職ヲ罷ム○攝政二條齊敬等二十六人ヲ罷メ、其朝參ヲ停ム○又守護職松平容保、所司代松平定敬ヲ罷メ、之ヲ歸藩セシム○小御所ニ開議シ、大政施設ノ方、及ヒ徳川氏處分ノ事ヲ議ス○徳川慶勝、松平慶永ヲシテ、辭官獻地ノ內旨ヲ、慶喜ニ諭サシム。……二二一
熾仁親王ヲ總裁ト爲シ、純仁親王、晃親王、中山忠能、正親町三條實愛、中御門經之、徳川慶勝、松平慶永、島津茂久、淺野茂勳、山內豐信ヲ議定ト爲シ、大原重德、萬里小路博房、長谷信篤、岩倉具視、橋本實梁ヲ參與ト爲ス○茂久、慶勝、茂勳、慶永、豐信ニ命シ、其藩士、參與ノ任ニ當ルモノヲ薦擧セシム○太政復古ヲ宮堂上ニ諭告ス○後宮ニ諭シテ、內行ヲ正フセシム。……二三〇

諸藩ノ衞兵ニ命シ、警備ノ事、今後朝命ヲ奉セシム○平戸藩兵ニ淸所門ヲ、十津川鄕兵ニ蛤門ヲ守ラシム。……二四〇
毛利敬親ノ老臣、及ヒ其支封主ヲ京ニ召スヲ、山崎戍兵ニ諭シ、敬親父子、及ヒ三條實美等五人ノ入京ヲ許スヲ、沿道關門ニ諭ス○敏親ノ老臣等、山崎ニ至リ、尋テ光明寺ニ次ス。……二四二
徳川慶喜ニ命シ、毛利敬親等赦宥ニヨリ、部下ノ黨議ヲ生スルモノヲ訓諭セシム○尾越二藩ニ內諭シ、二條城中ノ紛擾ヲ鎭撫セシム。……二四三
伊達慶邦等三十餘人ノ老臣、各英國公使書柬ノ答議ヲ上ル。……二四五
前田慶寧、京ニ至ル。……二五三
舊幕府、戸田忠行、秋元禮朝、鳥居忠定ヲシテ、下野出流山村ニ嘯聚スル者ヲ緝捕セシム。……二五三

卷九

十日
備前藩兵ヲシテ蛤門ヲ守リ、池田政禮ノ兵ヲシテ、之ニ屬セシム。……二五七
徳川慶勝、松平慶永、二條城ニ至リ、朝命ヲ徳川慶喜ニ傳フ○慶喜辭職ノ命ヲ奉シ、辭官獻地ノ事ハ、衆情鎭定ノ後ヲ待タンコトヲ請フ。……二五七
長門藩ノ老臣毛利親信、相國寺ノ薩營ニ入ル。……二五九
土方雄永疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ。……二五九
江戸市街中、劫盜横行ス、舊幕府、譜第諸侯ニ諭シ、鎭緝ノ方ヲ陳セシム。……二五九

十一日
禁內守衞兵ヲ除クノ外、戎服、九門內ニ入ルヲ禁ス○長門藩兵ヲシテ、九門內外ヲ巡邏シ、且正親町三條實愛、橋本實梁ノ衞兵ヲ出シ、因幡藩兵ヲシテ、長谷信篤ノ衞兵ヲ出サシム。……二六〇
榊原政敬、書ヲ上リ、命令、奏請、仍ホ徳川氏ノ手ヲ經由センコトヲ請フ。……二六一
松平慶永、舊幕府ノ麾下及ヒ譜第藩士等ノ暴發ヲ憂ヒ、姑ク大坂ニ赴ンコトヲ徳川慶喜ニ勸告ス。……二六一

十二日
參與ヲシテ、假ニ舊武家傳奏ノ事ヲ掌ラシメ、一乘院里坊ヲ以テ本衙ト爲ス。……二六二
西鄕隆盛、丹羽賢、辻維嶽、中根師質、後藤元燁等、薩尾藝越土五藩士十四人ヲ參與ト爲ス。……二六三
加藤明實再ヒ京ニ至ル、命シテ內侍所ヲ守衞セシム○津和野藩兵ニ、建春門ヲ守衞セシム。……二六四

山内豐信、書ヲ上リテ、公議ヲ與サンコトヲ請ヒ、且德川慶喜辭官獻地ノ事ハ、之ヲ松平慶永ニ委ネンコトヲ建議ス。……二六四
細川慶順等十人ノ老臣連署シテ、速ニ戒嚴ヲ解キ、且舊攝政、將軍以下、宜ク公議ヲ以テ、之ヲ處スヘキヲ建議ス。……二六五
德川慶喜、松平容保、松平定敬等ヲ率ヰ、大坂ニ赴ク○慶喜、德川慶勝、松平慶永ニ就キテ奏狀ヲ上リ、慶永、慶勝モ亦之ヲ慫慂スルヲ謝ス。……二六六
前田慶寧、藩ニ歸ル○久松定昭、大坂ニ赴ク。……二七〇
舊幕府、間部詮道ノ敦賀港守衛ヲ罷ム。……二七一
十三日　正親町公董、烏丸光德ヲ參與ト爲ス。……二七一
山城國取締松平信正、青山忠敏、本多康穰ヲ京都市中取締ト爲ス○九門ヲ除クノ外、悉ク禁內ノ守兵ヲ撤ス○薩尾藝土四藩兵ヲシテ、建春、建禮、朔平、淸所四門ヲ守ラシム○岡山藩兵等ノ蛤門守衛ヲ罷メ、長門藩兵ヲシテ之ニ代ラシム。……二七三
植村家保老臣ノ請ニヨリ、命シテ其藩兵ヲ召サシム。……二七六
薩尾藝越土五藩ヲシテ、仁和寺宮ノ衞兵、安藝藩ヲシテ、中山忠能ノ衞兵ヲ出サシム。……二七七
久留島通靖、京ニ至リ、其赴召遲緩ヲ謝ス○秋月種殷病ヲ謝シ、其子種、樹ヲシテ代リテ、上京セシメンコトヲ請フ○一柳末德、再ヒ上京遲延ヲ謝ス。……二七七
鷲尾隆聚、高野山ニ到リ、僧侶ニ告諭シ、又十津川鄉兵ヲ徵集ス。……二七七

卷　十

十四日　大政復古ヲ列藩ニ布告シ、各人材ヲ選擧セシム○朝廷ノ德川氏ニ於ケル、舊ニ異ナルコト無キヲ諭ス。……二八〇
禁門解嚴及ヒ市中取締巡邏ヲ置クコトヲ都下ニ布告ス○取締三藩ニ防火ノ事ヲ兼シメ、大州、平戶、津和野、水口、園部、高取六藩兵ニ市中ヲ巡邏セシメ、水口藩兵ノ內侍所守衞ヲ罷ム。……二八一
戶田忠至、溝口貞直、津田信弘ヲ參與ト爲ス、忠至之ヲ辭ス。……二八三

十津川郷兵ヲシテ、建春、宜秋、清所三門ヲ守衛セシム。……二八四
戸田忠至ヲシテ、舊ニ依テ宮中度支ノ事ヲ掌ラシム○忠至大坂ニ赴キ、徳川慶喜ニ說テ獻金セシム。……二八四
純仁親王、書ヲ上リ、朝堂ノ禮分ヲ正フシ、新進ノ藩士ニ、爵位ヲ賜フヘキヲ建議ス。……二八四
戸田氏共家臣、重臣京ニアル者ナキヲ稟シ、本日ノ召命ヲ辭ス。……二八五
鷲尾隆聚、書ヲ徳川茂承ニ遣リ、內旨ヲ奉シ、兵士ヲ糾合シテ、不虞ニ備フルヲ報ス。……二八六
舊幕府、譜第諸藩ニ令シ、城中蓄米ヲ江戶ニ運輸セシム。……二八七
十五日
三職朝參議事ノ時限、及ヒ參與上下ノ稱ヲ定ム。……二八七
純仁親王ヲシテ仁和寺宮ト稱シ、嘉彰ト復名セシム。……二八七
參與大原重德ヲ罷ム。……二八八
市中取締三藩、吏員ヲ藩ヨリ召シテ、其衙ヲ開カンコトヲ稟ス。……二八八
參與後藤元燁等、上下議事所及ヒ諸制度ノ條議ヲ上ル。……二八九
井伊直憲、藤堂高潔、病ニヨリ歸藩センコトヲ請フ○松平忠恕、上京遲緩ヲ謝ス。……二九三
徳川慶喜、大將軍ヲ罷ムルヲ以テ、令シテ其稱呼ヲ改ム。……二九四
舊幕府、大河內正質ヲ老中格、永井尙志ヲ若年寄ト爲ス。……二九四
十六日
凡ソ議定、常參ヲ須ヒス、事アレハ之ヲ宣召ス。……二九四
田宮篤輝ヲ參與ト爲シ、市尹ノ事ヲ總管セシム○牧野成憲ヲ徵ス。……二九四
松平慶永等、岩倉具視ニ就キ、徳川慶喜ノ處分、朝旨ノ在ル所ヲ領シ、之ヲ慶喜ニ諭サンコトヲ請フ○具視、奏狀ノ擬案ヲ內付ス。……二九五
長門藩ニ仁和寺宮、及ヒ正親町公董ノ衛兵、備前藩ニ烏丸光德ノ衛兵ヲ出サシム○安藝藩ノ仁和寺宮、及ヒ中山忠能ノ衛兵ヲ罷メ、山階宮ノ衛兵ヲ出サシム。……二九九
徳川慶喜、各國公使ヲ大坂城ニ延見シ、政體更革ノ事ヲ說キ、益情誼ヲ固フセンコトヲ陳ス。……三〇〇
井伊直憲ノ家臣、下野別邑旁近ノ浪徒ヲ俘獲スルヲ、舊幕府ニ報ス○大久保教義、浪士其邑ヲ剽掠ス

ルヲ以テ一橋門守衞ヲ罷メテ、其守ヲ固フセンコトヲ請フ。……三〇二
加藤明實ノ泉涌寺守衞ヲ罷メ、復タ内侍所ヲ衞ラシム。……三〇三

十七日

德川茂承、鷲尾隆聚ノ高野山ニ據ルノ狀ヲ稟ス、批シテ其朝旨ニ出ルヲ諭ス。……三〇四
長門藩士、仁和寺宮及ヒ正親町公董ノ衞兵ハ、後軍ノ至ルヲ俟タンコトヲ請フ〇中川久昭ヲシテ、公
董ノ衞兵ヲ出サシム。……三〇四
長門藩士、竊ニ時務條議ヲ、總裁熾仁親王ニ上ル。……三〇四
鷲尾隆聚、書ヲ植村家保、及ヒ五條代官中村勘兵衞ニ遺リ、内旨ヲ奉シテ、兵士ヲ糾合スルヲ報ス。……三〇五
舊幕府、譜第諸藩ニ令シ、江戸私邸ノ旁近ヲ巡邏シ、以テ劫盜ニ備フ。……三〇六

卷十一

十八日

大政復古ヲ外國ニ報スルノ擬案、及ヒ人材ヲ擧ケ、革政所ヲ設クル等ノ事ヲ議ス。……三〇八
諸侯ニ申令シテ、速ニ朝集セシム。……三一四
市中取締三藩ニ諭シ、兇徒横行制シ難キハ、巡邏諸藩ノ應援ヲ請ハシム〇都下ニ告諭シテ民情ヲ綏撫
ス〇公卿諸侯ノ家臣ニ令シテ、下民ノ請托ヲ受クルコト勿カラシム。……三一五
三岡公正ヲ徵士參與ト爲ス。……三一五
再ヒ島津久光ヲ召シ、又長岡護美、桂久武、木戸孝允、土肥實臣、小原忠寛ヲ徵ス。……三一六
加賀、薩摩、土佐、岡四藩兵ヲシテ市中巡羅セシム〇薩摩藩ヲシテ仁和寺宮ノ衞兵ヲ増シ、備前藩ヲシ
テ中山忠能ノ衞兵ヲ出サシム。……三一七
坂兵北上ノ報アルヲ以テ、德川慶勝、松平慶永ニ命シ、松平容保、松平定敬ヲシテ、速ニ藩ニ就カシム。……三一七
井伊直憲、藩ニ歸リ、老臣ヲシテ代ラシメンコトヲ請フ、聽サス〇藤堂高猷ノ老臣、其子高潔ノ爲ニ、
再ヒ歸藩ヲ請フ。……三一八
巡邏六藩、其分轄ノ區域ヲ定メ、且其措置ノ目ヲ稟ス。……三一九
松平慶永等、再ヒ岩倉具視ト謀リ、先ツ德川慶喜ヲ入覲セシメ、以テ擬案ノ事ヲ擧行セシメントシ永

井尙志ヲシテ、之ヲ慶喜ニ諭サシム。……三三〇
細川興貫、疾ニヨリ、上京遲緩ヲ謝ス。……三三一
酒井忠惇、入京ノ途大津ニ至リ、德川慶喜ノ大坂ニ在ルヲ聞キ、直チニ之ニ赴ク。……三三一
舊幕府老中稻葉正邦、譜第諸侯ノ江戸ニ在ル者ヲ城中ニ會シ、更革ノ朝命ヲ示シ、各意見ヲ陳セシム○土井利教等九人ヲシテ、兵ヲ率キテ、西上セシム○勝義邦、書ヲ正邦ニ贈リ、其妄動、主君ノ意ニ反スルヲ論ス。……三三一
戸田忠行、出流山屯聚ノ浪徒ヲ殺獲スルヲ舊幕府ニ報ス。……三三四

十九日

外國報告ノ議ヲ決シ、議定ニ命シテ、明日、告文ニ署印セシム。……三三四
十時維惠ヲ參與ト爲ス○池田茂政、池田政詮、鍋島齊正及小松淸廉ヲ召ス。……三三四
藤堂高猷ノ老臣、復前請ヲ申ス、之ヲ聽ス。……三三五
德川慶勝、自ラ大坂ニ赴キ、會桑二藩ヲ措置センコトヲ請フ。……三三五
市中取締三藩、舊東町奉行所、及ヒ附屬ノ簿書什器ヲ交付センコトヲ請フ。……三三六
德川慶喜上疏シテ、更革ノ事、一二藩ノ私意ニ出ルヲ論シ、又、家門譜第諸藩ノ兵ヲ徵ス○戸川安愛、戸田忠至ニ因テ、奏狀ヲ岩倉具視ニ呈ス○松平慶永等、具視ニ就テ其書ヲ請下シ、安愛ヲシテ歸テ慶　三三六
喜ヲ諭サシム。……三三〇
毛利元蕃ノ子元功、吉川經幹、老臣宮莊主水京ニ至ル。……三三〇

二十日

參與長谷信篤ヲ議定、西園寺公望ヲ參與、五條爲榮、柳原前光、西四辻公業ヲ參與助役ト爲ス。……三三〇
熾仁親王ヲ一品ニ叙ス。……三三一
准后玆性入道親王薨ス。……三三二
池田茂政ノ召命ヲ止メ、加藤泰秋ニ代テ西ノ宮ヲ守衞セシム○中川久昭ノ京都市中巡邏ヲ罷ム。……三三二
長門藩兵ノ、仁和寺宮守衞ヲ止メ、有栖川宮ノ衞兵ヲ增サシム○尾張藩兵ノ仁和寺宮守衞ヲ罷ム。……三三三
德川慶勝、松平慶永、淺野茂勳、山內豐信等、異議アルヲ以テ、姑ク外國告文ノ事ヲ止ム。……三三三

池田德澄、建部政世京ニ至ル。……三三五

卷十二

廿一日　熾仁親王ヲシテ除服朝參セシム。……三三七
長谷信成ヲ參與助役ト爲ス。……三三七
永井直諒及ヒ高松藩兵ニ命シ、孝明天皇ノ小祥忌祭ニ、泉涌寺般舟院ヲ守衛セシム○直諒ヲシテ京都防火ノ事ヲ掌ラシム。……三三七
舊幕府兵、猶伏見ニ在リ、會桑二藩兵モ亦稍々北上ス○田宮篤輝ニ命シ、伏見取締ヲ兼ネ、薩藝長土四藩兵ヲシテ巡邏警備セシム○藝土二藩、之ヲ辭ス。……三三八
植村家保ノ傳法川守衛ヲ罷メ、其師ヲ京師ニ召ス。……三三九
池田德澄ノ上京ヲ嘉奬シ、宗家ト共同從事セシム。……三四〇
大野藩兵ヲシテ、嵯峨關門ノ守備ヲ撤セシム。……三四〇
德川慶勝、松平慶永等田中輔、中根師質ヲ、大阪ニ遣リ、德川慶喜ヲ說カシム。……三四〇
德川茂承、入京ノ途病ヲ以テ大阪ニ留リ、姑ク藩ニ就カンコトヲ請フ、之ヲ聽ス。……三四二

廿二日　萬機ヲ親裁シ、博ク公議ヲ採リ、舊幕府ノ善政良法ハ、舊ニ仍テ變更セサルヲ告諭ス。……三四二
荒川良知ヲ參與ト爲ス。……三四三
德川慶勝ノ請ヲ允シ、自ラ大阪ニ赴キ、期ヲ刻シテ其功ヲ奏セシム、尋テ慶勝、其延期ヲ請フ。……三四三
山內豐信上書シテ、外國ノ報告ハ、列侯會議ノ後ニ付シ、姑ク德川慶喜ヲシテ、還政ノ事ヲ報セシメンコトヲ建議ス。……三四四

廿三日　林左門ヲ參與ト爲シ、參與三岡公正ヲシテ、會計ノ事ヲ監督セシム。……三四五
堀親義ヲシテ般舟院ヲ守衛シ、永井直諒ニ火元見役ヲ兼ネシム。……三四六
鍋島茂實、松平定安ノ家臣、明春、京都警衛ノ事ヲ稟問ス、批シテ前命ニ從ハシム。……三四六
京都市中取締三藩、防火ノ事、舊町奉行ノ例ニ因リ、專ラ巡視ヲ主トセンコトヲ稟請ス。……三四七

井伊直憲、疾ヲ力メテ京師ニ留リ、王事ニ服センコトヲ請フ。……三四八
牧野忠訓、京ニ至リ、上書シテ時事ヲ論シ、再ヒ政權ヲ徳川氏ニ委セント請フ、省セス。……三四八
永井尚志、徳川慶喜ノ旨ヲ含ンテ京ニ至リ、徳川慶勝、松平慶永等ト、慶喜入覲ノ事ヲ謀ル。……三五一
伊達宗城京ニ至ル。……三五四
舊幕府老中稻葉正邦等、譜第藩士ヲ江戸城ニ召シ、徳川慶喜ノ奏狀ヲ示シ、各、兵ヲ率ヰテ西上セシム
○江戸城二ノ丸火アリ。……三五四

卷十三

廿四日 徳川慶勝、松平慶永ヲシテ、辭官納地ノ命ヲ徳川慶喜ニ傳ヘシム。……三五七
入道尊秀親王ニ命シ、日ニ朝堂ニ入テ機務ヲ習ハシム。……三六一
毛利敬親ヲ召ス。……三六一
小笠原長守ニ命シ、竹田街道守衞ヲ撤シ、後命ヲ待タシム。……三六一
山内豐信、書ヲ上リ、政府ノ經費、宜ク之ヲ列藩ニ課スヘキヲ建議ス。……三六二
徳川慶勝上表シテ職ヲ辭ス、允サス。……三六三
戸田氏共、復タ上京延期ヲ請フ。……三六四
鷲尾隆聚、再ヒ書ヲ五條代官中村勘兵衞ニ與ヘ、其報答遲緩ヲ責ム。……三六四
廿五日 萬機親裁、公義博採ノ論旨ヲ、三條橋ニ揭示ス。……三六六
毛利廣封、同元周、同元純ヲ召ス。……三六六
舊幕府、莊内、松山、前橋、西尾、上ノ山ノ諸藩及ヒ陸軍ニ命シ、江戸薩藩邸ヲ包圍シテ之ヲ燒キ、支封
佐土原藩邸ニ及フ。……三六六
舊幕府、若年寄秋月種樹ノ職ヲ罷ム。……三七三
廿六日 再ヒ池田慶德、京極高厚ヲ召ス。……三七三
九條道孝ノ邸ヲ以テ、假ニ太政官代ト爲サントシ、三岡公正ヲシテ其事ヲ管セシム。……三七四

井伊直憲ノ請ヲ嘉奬シ、四塚關門ヲ守衛セシム。……三七四
本願寺光澤ニ諭シ、門徒ヲ倡率シテ、力ヲ王事ニ致サシム。……三七四
三輪田元綱等六人ヲ宥免ス。……三七五
長門藩ノ請ヲ許シ、文武館ヲ以テ屯營ト爲サシム。……三七五
堀親義大阪ニ赴キ、徳川慶喜ニ面センコトヲ請フ、許サス。……三七六
伊達慶邦等十一人ノ老臣、連署書ヲ上リ、徳川氏ヲ處スル、務メテ其部下ヲ鎭輯センコトヲ請フ。……三七六
毛利元功、及ヒ吉川經幹老臣宮莊主水參朝シ、毛利敬親父子等官位復舊ノ恩ヲ謝ス。……三七八
舊幕府、榊原政敬ヲシテ、前田利同等ト共ニ、東叡山ヲ警守セシム。……三七八

廿七日　卷十四

天皇、建春門ニ御シ、薩藝長土四藩兵ノ操練ヲ覽給フ。……三七九
參與岩倉具視ヲ、議定ト爲ス。……三七九
三條實美、三條西季知、東久世通禧、四條隆謌、壬生基修、筑前ヨリ至リ、朝恩ヲ謝ス○實美ヲ議定、通禧ヲ參與ト爲ス。……三八〇
熊野三山社家ニ命シテ、撿校宮ノ管理ニ屬シ、且ツ其還俗ヲ許ス。……三八〇
建部政世歸藩ノ請ヲ聽ス。……三八〇
松平慶倫、書ヲ上リ、徳川慶喜政權奉還ノ本意ヲ失ハサランコトヲ陳ス。……三八〇

廿八日

伊達宗城ヲ議定ト爲ス。……三八一
池田茂政ニ令シ、速ニ西宮守兵ヲ出サシム。……三八一
牧野忠訓大阪ニ赴ク○久松定法、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……三八一
徳川慶勝、松平慶永、大阪ニ赴キ、命ヲ徳川慶喜ニ傳フ○慶喜、奉命書ヲ二人ニ致シ、且政府ノ經費ハ、之ヲ全國ニ課セサレハ、部下ノ心ヲ鎭輯シ能ハサルヲ陳ス。……三八二
舊幕府、保科正益、戸田氏良ヲシテ品川驛關門ヲ守ラシム○關門ヲ江戸諸口ニ置キ、出入ヲ撿ス。……三八四

松平容保ノ子喜德、上國ノ報ヲ聞キ、書ヲ上杉齊憲ニ致シ、其協同救援ヲ請フ〇容保ノ老臣モ亦藩内士民ニ檄シ、守備ヲ請ス。……三八四

廿九日　市中取締三藩ヲシテ、伏見ヲ兼管セシム、三藩、之ヲ辭ス、聽サス。……三八六

戸田氏共ノ家臣、藩士小原忠寛、奉命遲緩ノ故ヲ稟謝ス。……三八八

植村家保、病ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……三八八

佛國公使、書ヲ舊幕府ニ致シ、西班牙國ノ商船、横濱港ニ來ルモノハ、其國船ト同視センコトヲ請フ、之ヲ聽ス。……三八八

晦日　天皇服除シ給フ〇祓禊ノ儀ヲ行フ。……三八九

百官及ヒ在京諸侯ニ令シ、明年新正ニ參賀セシム。……三九〇

本願寺光澤、書ヲ上リ、奉上ノ意ヲ陳シ、且即位ノ資ヲ獻セント請フ〇東本願寺光勝、奉上他ナキヲ陳ス〇興福寺ノ僧侶、米ヲ獻シ、且王事ニ從ハンコトヲ請フ之ヲ許ス、……三九〇

徳川慶勝、松平慶永、大阪ヨリ至リ、徳川慶喜ニ代テ、奉命書ヲ上ル。……三九三

永井直諒ノ家臣、本日以後、消防ノ役ニ服スルヲ稟シ、且其條款ヲ申請ス。……三九四

藤堂高邦、歸藩ノ請ヲ聽ス〇片桐貞篤、老臣ヲシテ代テ、京ニ至ラシム。……三九六

都下ノ豪商三井三郎助、島田八郎左衞門、小野善助等金ヲ獻スルコト差アリ。……三九六

江戸薩摩藩邸襲撃ノ事、漸ク傳播スルヲ以テ、舊幕府及ヒ薩摩藩ニ内諭シ、釁隙ヲ開クコト勿ラシム。……三九六

舊幕府、酒井忠惇ヲ加判下座ト爲ス〇岡田忠養ヲシテ、下總國布佐村陣屋ニ居リ、上總以下四國ノ事務ヲ管セシム。……三九七

是日　密旨ヲ親子内親王ニ傳ヘテ、其西上ヲ促ス。……三九八

蜂須賀齊裕ニ命シ、老臣稻田邦植ノ家臣三田昇馬等三人ヲ召ス。……三九九

松平定安、池田政詮、疾ヲ謝シ、上京遲緩ヲ稟ス。……四〇〇

卷十五

明治元年正月

元日　四方拜、百官朝賀ス、天皇御不豫ニヨリテ、臨ミ給ハス、且今年三節會ヲ停ム。……四〇一
池田政禮ニ命シ、兵ヲ出シテ伏見ヲ巡撫セシム。……四〇一
酒井忠氏、入京ノ途次、大阪ニ赴クヲ稟ス○本莊宗武、八幡守衛ノ任ニ赴クノ途次、疾ニ罹リ、復タ江戸ニ歸ル。……四〇一
舊幕府、大久保忠禮以下四人ニ令シテ、江戸薩摩藩邸逋逃者ノ、駿相間ニ赴ク者ヲ緝捕セシム。……四〇三
假ニ議事ヲ九條道孝ノ邸ニ開キ、德川慶喜ヲシテ、召命ヲ各國公使ニ傳ヘシメ、及ヒ慶喜ニ内諭シ、松平容保等罷歸ノ後、入覲セシムル等ノ事ヲ議ス。……四〇三
戸田氏共、其藩士小原忠寛ヲ、召命ニ赴カシムヲ稟ス。……四〇四
池田德定、京極高典、京ニ至ル。……四〇五
德川慶勝、松平慶永、山内豐信、伊達宗城等、坂兵ノ北上ヲ鎭輯センコトヲ謀ル。……四〇五
天皇、將ニ首服ヲ加ヘントシ、奉幣使藤波教忠ヲ伊勢神宮ニ遣シテ、之ヲ告ク。……四〇六
德大寺實則、久我通久、壬生基修、四條隆謌及ヒ廣澤直臣、井上馨、小原忠寛ヲ參與、穗波經度、坊城俊章ヲ參與助役ト爲ス、……四〇七
令シテ、江戸薩摩藩邸ノ事ヲ以テ、妄ニ擾動ヲ生スルコト勿ラシム。……四〇八
參與職ヲシテ、熊野三山ノ社家ヲ管セシム。……四〇八
三日　山内豐信、上書シテ、會桑二國歸國ノ前後ヲ問ハス、速ニ德川慶喜ヲ召シ、國是ノ基本ヲ定ムヘキヲ建議ス。……四〇九
市中取締三藩、篠山藩兵ヲ伏見ニ派遣スルヲ稟ス。……四〇九
四塚關ノ守兵ニ命シ、會桑二藩兵ノ經過ヲ停メシム。……四一〇
阿波藩ノ老臣稻田邦植ニ命シテ、其邑ヲ嚴守シ、且西ノ宮ノ衛兵ニ應援ノ出兵ヲ爲サシム。……四一〇
織田信親、加藤泰令ヲシテ、萬里小路博房、五條爲榮ノ衛兵ヲ出サシム。……四一一
細川喜延、京ニ至ル○織田信親、兵ヲ率キテ、塚原ヨリ京ニ至ル。……四一一

中根師質、岩倉具視ニ就テ、徳川慶喜入京ノ日、參朝任職等ノ目ヲ稟請ス。……四一一
徳川慶喜、討薩表ヲ艸シ、瀧川具知ヲ遣シテ之ヲ奏シ、又之ヲ諸藩ニ示シ、大ニ其兵ヲ徵ス○慶喜、兵士ヲ部署シ、會桑二藩兵ヲ先鋒ト爲シ、召命ニ赴クト稱シ、伏見、鳥羽二道ニ向フ○伏見、鳥羽ノ守兵之ヲ拒ミ、朝命ヲ俟タシム。……四一五
百官ヲ朝集シ、姑ク慶喜ノ入京ヲ停メ、參與四條隆謌ヲ伏見ニ遣シ、坂兵ニ退歸ヲ命シ、又、徳川慶勝等ヲシテ、之ヲ措置セシム○薩長土三藩ニ合シテ、伏見ノ守備ヲ嚴ニセシム○安藝藩兵ヲ伏見ニ、阿波、彥根、平戶、大州、大村、佐土原六藩ノ兵ヲ大津ニ派遣ス○平戶、大洲二藩ノ京都巡邏ヲ罷ム。……四二一
坂兵進テ鳥羽、伏見ニ迫ル、薩長二藩兵、之ヲ邀擊ス○京師戒嚴○內命ヲ宮中ニ傳ヘテ、密ニ乘輿ヲ遷スノ備ヲ爲ス○徳川慶勝、松平慶永、伊達宗城ニ禁闕、水戶藩兵ニ泉涌寺、宇和島、高鍋、高取三藩兵ニ諸門、備前支藩兵及ヒ岡藩兵ニ猿カ辻守衞ヲ命ス○井伊直憲ヲシテ、兵ヲ率ヰテ大津ニ赴カシム○因幡藩兵ヲシテ伏見ニ赴カシム○毛利敬親、鷲尾隆聚ヲシテ大阪ヲ攻擊セシメ、錦旗ヲ隆聚ニ賜フ○因幡、備前二藩兵ヲシテ征討兵ヲ備ヘ、且備前藩兵ヲシテ西宮ヲ嚴守セシム○徳川茂承ヲシテ官軍ヲ糾合セシム○藤堂高猷、稻葉正邦ヲ諭シ、方向ヲ誤ルコト勿ラシム。……四二五
議定嘉彰親王ニ軍事總裁ヲ、議定伊達宗城、參與東久世通禧、烏丸光德ニ軍事參謀ヲ兼ネシム○參與橋本實梁、參與助役柳原前光ニ大津口ノ兵ヲ、參與西園寺公望ニ、丹波口ノ兵ヲ督セシム。……四三一
徳川慶勝、松平慶永、調停至ラサルヲ以テ其職ヲ解カンコトヲ請フ。……四三三
本願寺光威、東本願寺光勝參朝シ、光勝金千兩ヲ獻ス○光威ヲシテ九門內外巡邏及ヒ猿ケ辻ヲ警守セシム○松平賴聰ノ家臣京ニ在ル者、見兵ヲ以テ事ニ從ハンコトヲ請フ。……四三三
慶喜、書ヲ大阪在留各國公使ニ致シ、薩摩藩ト交兵ノ由ヲ陳シ、其民人ヲシテ條約ヲ確守セシメ、軍艦兵器ヲ私賣シ及ヒ未開港場ニ至ルヲ禁ス。……四三四
舊幕府ノ軍艦、薩艦ヲ神戶海及ヒ土佐洋ニ砲擊ス○募兵、大阪薩藩邸ヲ襲ハントス、藩人、邸ヲ焚テ遁ル。……四三六

卷十六

軍事總裁嘉彰親王ヲ征討大將軍ト爲シ、旗錦節刀ヲ賜ヒ、參與四條隆謌、參與助役五條爲榮ヲ錦旗奉行ト爲ス、○參謀伊達宗城、征討ノ事宜、列藩ノ公議ヲ盡スヘキヲ論ス、淺野茂勳、山内豐信之ヲ助ク、廷議省セス○大將軍、出テ東寺ニ次ス、宗城、從ハス○大將軍、矢守平好、中沼之舜、高崎正風ヲ下參謀ト爲ス。……四四一
參與西園寺公望ヲ山陰道鎭撫總督ト爲シ、本道諸藩ヲシテ其指揮ヲ受ケシム○丹波、丹後、但馬ノ諸侯ニ諭シ、王事ヲ勤メシム。……四四二
三職以下徹夜事ヲ秉ル、是日、命シテ退休セシム。……四四四
薩摩藩兵ニ命シ、黑谷ノ會津藩邸ヲ伐タシム。……四四四
池田政禮ノ伏見巡撫ヲ罷メ、專ラ猿ケ辻ヲ守衞セシム○因幡、森、柏原三藩ヲシテ、正親町三條實愛等四人ノ衞兵ヲ出サシム。……四四五
本多康穰ノ請ヲ聽シ、歸邑シテ守備ヲ修セシム○平戶、大州二藩ノ請ヲ聽シ、大津警備ヲ罷メ、再ヒ京都ヲ巡邏セシム○備前藩兵ヲシテ大津ニ赴カシム。……四四五
本願寺光澤、金三千兩ヲ獻ス、書ヲ下シテ之ヲ賞ス。……四四六
篠山藩、伏見兵火ノ狀ヲ上報ス。……四四六
九鬼隆備、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ、京ニ至ラシム。……四四七
官軍、伏見、鳥羽ノ賊ヲ擊テ、之ヲ郤ク。……四四七
舊幕府老中、江戶傍近ノ諸藩ニ令シテ薩人ニ備ヘ、又諸關ノ守ヲ嚴ニセシム。……四四七
參與橋本實梁ヲ東海道鎭撫總督、參與助役柳原前光ヲ副總督ト爲ス○實梁、前光及ヒ山陰道鎭撫總督西園寺公望京師ヲ發ス。……四四七
德川慶勝ヲシテ二城城ヲ收管シ、城中ノ殘兵ヲ大阪ニ押送セシム。……四四八
四條隆平ヲ山崎ニ遣シ、守關ノ津藩兵ニ命シテ官軍ニ應セシメ、多度津藩ヲシテ、其衞兵ヲ出サシム。……四四八
諸藩ニ令シテ、京坂見兵ノ數ヲ錄上セシム。……四四九

九門守衛諸藩ニ命シ、譏察ヲ嚴ニセシム○因幡藩、九門警守ノ事ヲ上申ス。…………四五六
池田慶徳ニ命シ、山陰道鎮撫使ノ令ヲ奉シテ、本道不庭ノ諸藩ヲ討セシム○藝長二藩兵ノ尾道ニアル
モノヲ、京師ニ召ス。…………四五六
肥後藩兵ヲシテ、大津ニ赴カシム○池田政禮ノ猿ケ辻守衛ヲ罷メ、兵ヲ大津ニ出サシム○堀義親ニ伏
見取締ヲ命シ、尋テ更命シテ般舟院ヲ守衛セシム。…………四五七
秋月種殷ニ命シ、其子種樹ヲシテ速ニ上京セシメ、又大原重徳ノ衛兵ヲ出サシム。…………四五八
酒井忠氏ヲシテ、其京邸ニ上ラシム。…………四五八
興正寺攝信ニ命シ、門徒ヲ率ヰテ大津ニ至リ、東海道鎮撫總督ニ從ハシム。…………四五八
薩長二藩兵ノ戰功ヲ賞ス。…………四五九
東本願寺光勝ノ家臣、慶喜ニ通スルノ疑アリ、晃親王ヲシテ、之ヲ鞫サシム、光勝及ヒ其子光瑩誓書ヲ上ル。…四五九
議定伊達宗城、軍事參謀ヲ辭ス、之ヲ大將軍ニ請ハシム。…………四六〇
小出英尚、其邑園部ニ城カンコトヲ請フ。…………四六〇
鳥羽、伏見ノ官軍、進テ淀ヲ攻ム、賊兵、退テ八幡ニ據ル。…………四六一
瀧川具知、戶田忠至ニ因テ討薩表ヲ上ル○徳川慶喜、書ヲ徳川慶勝、松平慶永等ニ致シ、禁闕ヲ守衛セ
シコトヲ請フ○慶喜、又、近日ノ事情ヲ諸藩ニ陳辨ス。…………四六二
舊幕府老中、令シテ、諸船舶ノ品川港ニ入ル者ヲ檢シ、其搭客ヲ譏察ス。…………四六五
木梨恒準ヲ、東海道鎮撫總督參謀ト爲ス。…………四六五
公卿ノ涅齒黠眉、古制ニ非ルヲ以テ、必スシモ依遵セサルヲ令ス。…………四六五
申牌後ヨリ翌卯牌迄、九門ヲ鎖シ、出入印票ヲ以テセシム○越前藩兵ヲシテ、諸家ノ竇門ヲ守ラシム。…………四六六
櫻井忠興、永井直諒ニ命シテ、城守ニ嚴ニシ、織田信親ヲシテ白川越ヲ警守セシム○長備二藩兵ヲ召
スヲ以テ、忠興ニ命シ、其封內經過及ヒ糧食運搬等ノ便ヲ與ヘシム。…………四六六
篠山藩兵ノ伏見取締ヲ罷メ、多度津藩兵ヲ以テ之ニ代フ。…………四六七

六日

東本願寺光勝ニ命シ、大津ニ至リ、官軍ノ糧食ヲ措辨シ、且、東國ノ門徒ヲ勸勵セシム○興福寺ノ僧侶ニ命シ、伊賀一路東兵ノ狀ヲ諜セシム。……四六七
加茂兩社司ニ命シ、管地ノ壯丁ヲ出シテ、薩摩藩兵ノ使役ニ充テシム。……四六八
岡崎藩臣ノ京ニ在ル者、伏見衞戍ノ藩兵、戰後其之ク所ヲ知ラサルヲ以テ、別ニ兵ヲ藩ヨリ徵サンコトヲ請フ之ヲ聽ス○久松定法ノ老臣、其兵備ヲ缺クコトヲ定法ニ歸報セント請フ、命シテ、兵ヲ京師ニ出サシム。……四六八
九鬼隆備、病アルヲ以テ、先ツ兵ヲ京師ニ出ス○福岡藩臣ノ在京ノ者、見兵ヲ以テ守備ニ服センコトヲ請フ。……四七〇
官軍、賊兵ヲ橋本ニ破リ尾撃シテ、楠葉ニ至ル○征討府、下參謀高崎正風ヲ罷メ、大山綱良ヲ以テ之ニ代フ。……四七一
綾小路俊實、滋野井公壽京都ヲ出奔ス、相樂、武振等之ニ從フ。……四七一
德川慶喜、書ヲ各國公使ニ遣リ、敵軍來襲ノ勢アルヲ以テ、各其國旗ヲ保守センコトヲ陳ス○舊幕府老中大河内輝照、水野忠弘ヲシテ品川港砲臺ノ守ヲ嚴ニセシム。……四七二
德川慶喜、汽船ニ駕シテ東走ス、松平容保等之ニ從フ○老中格大河内正質、大坂城代牧野貞直等、江戸ニ走リ、松平忠誠ハ紀伊ニ赴キ、久松定昭、酒井忠氏ハ藩ニ歸ル。……四七三

卷十七

七日

德川慶喜征討ノ令ヲ發シ、諸侯ヲシテ其去就ヲ決セシム。……四七七
入道雄仁、尊秀二親王ヲシテ、蓄髮セシメ、尊秀親王ノ德川氏猶子ヲ停ム。……四八〇
因幡藩及ヒ支藩兵ノ伏見守衞ヲ罷テ、八幡、橋本ヲ警守シ、勝山藩兵ヲシテ闇嶺ノ警守セシム○永井直諒ノ請ヲ許シ洞嶺ノ守衞ヲ撤シテ、本城ノ守備ニ充テシム。……四八一
薩摩、筑前、因幡、彥根四藩兵ヲシテ、寺町門、下立賣門以北、諸家ノ賣門ヲ守ラシム○筑前藩ヲシテ、四條隆謌ノ衞兵ヲ出サシム。……四八二
鷲尾隆聚ニ內諭シ、姑ク阪城攻撃ヲ止メ、先ツ大和ヲ鎭撫セシム。……四八二

山陰道鎭撫總督及ヒ久居藩、宇治ノ守兵ニ諭シ、出雲藩兵ノ入京ヲ妨クルコト勿ラシム。……四八三
加藤泰令、京ニ至ル。……四八四
大將軍、進テ淀城ニ入ル。……四八四

八日

鷲尾隆聚、五條代官所ヲ收メ、傍近ノ諸藩ニ檄シテ、王事ニ勤メシム。……四八四
雄仁親王、一品ヲ辭ス、名ヲ嘉言ニ復ス○入道信仁親王ヲシテ昭高院宮ト稱セシム。……四八四
錦旗二旒ヲ建禮門ニ樹テ、尋テ又建春、宜秋二門ニ樹ツ。……四八五
高松、小濱、松山、大垣、鳥羽、宮津、延岡七藩士ノ九門ニ出入スルヲ禁ス。……四八五
筑前藩兵ニ石藥師、淸和院二門ノ間ヲ、長門藩兵ニ蛤、下立賣二門ノ間ヲ警守セシム、長門藩、之ヲ辭ス。……四八六
岡部長寛ノ老臣ノ請ヲ聽シ、藩兵ヲ京師ニ徵サシム。……四八六
松平賴聰ノ家臣京ニ在ル者、書ヲ上リ、賴聰ノ爲ニ辯疏ス○命シテ、賴聰ヲシテ自ラ其罪ヲ乞ハシム。……四八六
德川慶勝ノ請ヲ聽シ、其隣近諸藩ノ方嚮ヲ問ハシム。……四八七
參與小原忠寛ノ請ヲ聽シ、大垣ニ赴キ、藩主戸田氏共ニ說テ、自効セシム。……四八八
德川慶喜ノ家臣、妻木賴矩大坂ニ留リ慶喜ノ奏狀及ヒ坂城ヲ、尾越二藩ニ託ス○德川慶勝、松平慶永
其奏狀ヲ上ル。……四八八
戸田氏共ノ家臣、氏共、伏見守關兵ノ爲ニ扼セラレ入京スル能ハスシテ藩ニ歸ルヲ稟シ、後命ヲ請フ。……四九一
長門藩、小濱藩邸貯フル所ノ彈藥ヲ、借ランコトヲ請フ。……四九二
松浦詮、永井直諒京ニ至ル○松平慶憲、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ、入京セシムルヲ稟ス○出雲藩ノ
警衛兵京ニ至ル。……四九二

九日

大將軍、八幡ニ至リ、勅旨ヲ諸藩兵ニ傳ヘテ、其戰勞ヲ犒フ○伊達宗城ノ請ヲ許シ、其軍事參謀ヲ罷ム。……四九二
議定三條實美、岩倉具視ヲ副總裁、嘉言親王、德大寺實則ヲ議定ト爲ス○征討大將軍嘉彰親王ニ、外國
事務總裁ヲ兼ネ、實美及ヒ參與東久世通禧、岩下方平、後藤元燁ニ外國事務取調掛ヲ兼ネシム○德川
慶勝、松平慶永、伊達宗城ヲ議定ト爲ス○嘉言親王ノ園城寺長吏ヲ罷メテ、別當ト爲ス。……四九三

大將軍嘉彰親王ニ命シ、坂城ヲ以テ牙營ト爲シ、四方ヲ指揮セシム○東海道鎭撫總督橋本實梁ニ命シ、隣近ノ諸藩ヲ糾合シ、進ンテ桑名ヲ討タシム。……四九五
高倉永祜ヲ北陸道鎭撫總督、四條隆平ヲ副總督ト爲ス○岩倉具定ヲ東山道鎭撫總督、岩倉具經ヲ副總督ト爲ス。……四九七
松浦詮ヲシテ、守兵ヲ闇嶺ニ出サシメ、其京都巡邏ヲ免ス○柏原藩東久世通禧ノ衞兵ヲ罷メ、郡山藩兵ヲ以テ之ニ代フ。……四九七
舊京都守護職ニ給セル廩米ヲ、薩長二藩ニ賜ヒ、糧食ニ充ツ○東本願寺光勝ニ命シ、伏見、八幡、橋本ノ兵禍ニ罹リシ者ヲ賑恤セシム。……四九八
德川茂承、將ニ京師ニ覲セントシ、朝命ヲ賜ハランコトヲ請フ。……四九九
森忠典、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラセシム。……五〇〇
官軍ノ前隊長門藩兵、大坂城ヲ收ム○城中火起リ、焚燒、翌日ニ至ル。……五〇〇
鷲尾隆聚、使ヲ紀伊藩遣ハス、藩兵之ヲ抑留ス、隆聚書ヲ與ヘテ其無狀ヲ數ム○橋本戍兵、隆聚ニ復書シ、前日ノ諭告ニ答フ。……五〇三
薩長二藩兵、備後福山城ヲ徇ヘテ之ヲ下ス。……五〇三
舊幕府老中ノ江戸ニ在ルモノ、伏見ノ戰報ヲ聞キ、諸藩ヲ戒メ、急ニ西上ノ備ヲ爲サシム。……五〇三

卷十八

十一日

聖護院宮ニ令シ、其修驗道ニ關スル者ハ、管領宮ト稱セシム○知恩院宮ヲ改テ、華頂宮ト稱ス。……五〇五
德川慶喜、及ヒ松平容保、松平定敬、板倉勝靜等二十七人ノ官位ヲ褫キ、容保以下六人ノ邸ヲ沒ス○酒井忠氏等五人ノ入京ヲ禁ス。……五〇五
參與正親町公董ヲ大坂ニ遣シ、大政復古ヲ外國ニ報スル圖書ヲ、東久世通禧ニ付シ、通禧ヲシテ其事ヲ掌ラシム。……五〇七
揖取素彥ヲ參與、岩倉具經ヲ參與助役ト爲ス。……五〇八

徳川慶喜征討ノ令、及ヒ舊幕府領地ヲ直管ト爲スノ布告書ヲ、三條、荒神口二橋ニ揭ケ、士民ノ賊徒ニ通スルヲ禁ス、之ヲ諸道ニ揭示ス。……五〇八
兵ヲ列藩ニ徵シ、特ニ織田信學ヲ召ス。……五一〇
肥後、筑前、因幡、出雲、郡山、淀六藩ニ令シ、徳川慶喜征討及ヒ慶喜以下官位褫奪等ノ諸令ヲ、旁近ノ諸藩及ヒ衆庶ニ傳布セシム。……五一〇
徳川慶勝ニ命シ、舊幕府屬吏等ノ京ニ在ルモノヲ、草津ニ押送シテ之ヲ放タシム。……五一三
因幡藩兵及ヒ其支藩兵ヲシテ東海道鎮撫總督ニ屬セシメ、其橋本警守ヲ罷メ、肥後藩兵ヲ以テ之ニ代ラシム○柏原藩兵ヲシテ山陰道鎮撫總督ニ屬セシメ、其白川口警守ヲ罷メ、新發田藩兵ヲ以テ之ニ代フ。……五一四
平戸藩、守兵ヲ闇嶺ニ出スヲ以テ、郡山藩ノ向背ヲ稟請ス。……五一五
滋野井公壽、綾小路俊實、兵ヲ近江松尾山ニ集ム○二人、書ヲ上リ、命ヲ奉シテ賊ヲ討タンコトヲ請フ。……五一六
池田慶徳、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○戸田氏良、疾ヲ以テ、上京遲延ヲ謝ス○九鬼隆義、江戸ヨリ入京セントシ、疾ヲ以テ姑ク歸藩ヲ稟ス。……五一六
大將軍、大坂ニ至リ、本願寺支院ヲ以テ牙營ト爲ス。……五一七
備前藩兵、櫻井忠興ノ向背ヲ問フ、忠興ノ老臣、奉上貳ナキノ證書ヲ致ス。……五一七
舊幕府老中江戸ニ在ル者、討薩表及ヒ檄文ヲ諸藩ニ示ス○松平直克ヲシテ、江戸ヲ警守シ、阿部正靜ヲシテ薩摩藩ノ支邸ヲ收メシム○立花種恭ヲ老中格會計總裁ト爲ス。……五一七

十一日

尊秀親王ニ命シ、鎮西、西山ノ宗派ヲ管セシム。……五一八
石山基政、萬里小路通房ヲ、參與助役ト爲ス。……五一八
朝集會議ノ命ヲ止メ、諸侯ニ申令シ、兵ヲ率ヰテ入覲セシム。……五一八
安藝、備前、土佐三藩ニ命シ、福山、松山、高松、松山ヲ討チ、且備中、備後、讃岐、伊豫ノ舊幕府領地ヲ收メシム○征討府、薩摩以下六藩ニ令シ、高松、松山、大垣、姫路ヲ討タシム○薩長二藩兵ヲシテ兵庫ヲ管理セシム。……五一九

滋野井公壽、綾小路俊實ニ命シ、義兵ヲ召集シテ、東海道鎭撫總督ニ屬セシム○堂上ニ告諭シ、公壽、俊實ノ擧ニ傚フコト勿ラシム。……五二二

加藤明實ノ請ヲ聽シテ、內侍所建春門ノ守衛ヲ罷メ、歸藩シテ賊兵ヲ追擊セシム○肥後藩兵ノ橋本警守ヲ罷メ、加賀藩兵ヲシテ之ニ代ラシム○高田藩兵ノ京市巡邏ヲ罷メ、十津川鄕兵ヲ援ケテ、大和ノ殘賊ヲ勦セシム。……五二三

朽木爲綱將ニ入覲セントシ、道中ノ印票下賜ヲ請フ、命シテ、山陰道鎭撫總督ノ指揮ニ從ハシム。……五二五

池田慶德、德川氏ノ至親タルヲ以テ、上表シテ罪ヲ待ツ、池田德澄モ亦上表ス。……五二五

酒井忠氏ノ父忠義、召命ニ赴クヲ稟シ、且忠氏ノ爲ニ罪ヲ乞フ○戶田氏共、召ニ應シ、西上スルヲ稟ス。……五二六

牧野誠成、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……五二八

東海道鎭撫總督橋本實梁ニ命シ、舊大津代官石原清一郞、信樂代官多羅尾光弼ヲシテ、軍資ヲ供億セシム○實梁、光弼ヲシテ、舊ニ仍リ、其地ヲ管セシム。……五二八

山陰道鎭撫總督西園寺公望、酒井忠氏ヲ歸國ノ途ニ要シ、其兵器ヲ收メ、歸藩謹愼セシム。……五二九

備前藩老臣日置忠尙、西宮ニ赴クノ途、其從兵、外國人ト神戶驛ニ鬪フ。……五二九

舊幕府老中榊原政敬ノ東叡山守衛ヲ罷ム○米國公使館書記官、書ヲ舊幕府老中ニ致シ、上國變動措置ノ方ヲ聞キ、自ラ處センコトヲ請フ。……五三一

卷十九

十二日

詔シテ、島津茂久、淺野茂長、毛利敬親、池田慶德、山內豐範ノ、復古ノ動及ヒ征討ノ功ヲ賞シ、御劍各一口ヲ賜フ○藤堂高猷ノ戰功ヲ賞シ、茂久等五人ト、並ニ金幣ヲ賜ヒ、藩士ノ戰死者ヲ弔ス○德川慶勝、松平慶永、伊達宗城ノ復古ノ動、及ヒ細川喜延以下十九人ノ軍勞ヲ賞ス。……五三三

尊秀親王、細川喜延ヲ議定、土倉正彥ヲ參與ト爲シ、議定伊達宗城ニ、外國係ヲ兼ネシム。……五三八

滋野井公壽、綾小路俊實ノ使者相良武振、書ヲ上リ、官軍ノ徽章ヲ賜ヒ、且東征先鋒ノ命ヲ奉センコトヲ請ヒ、又、舊幕府領地ノ減稅ヲ建議ス○公壽、俊實ニ命シ、東海道鎭撫總督ノ約束ヲ受ケ、又、舊幕

府領地、今年租税ヲ半減セシム。……五三九
徳川茂承、本月三日ノ命ヲ領スルヲ稟シ、且大坂ノ敗兵、和歌山ニ至ルノ狀ヲ陳ス。……五四〇
市橋長義、四塚ノ守衞ヲ罷メ、他役ニ服センコトヲ請フ○朽木爲綱、山陰道鎭撫使ノ令ヲ奉シ、兵ヲ久美濱ニ出スヲ稟ス。……五四一
內藤政擧ノ家臣、尾張、肥後二藩ニ因リ、政擧ノ爲ニ辯疏シ、其入京ヲ許サレンコトヲ請フ。……五四二
本多康穰、再ヒ京ニ至ル○秋田映季、織田長易、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ入京セシム。……五四二
征討府、備前等五藩及ヒ稻田邦植ニ令シ、高松、姬路、松山征討ノ軍ニ應援セシム○薩藝長三藩兵ヲシテ大坂街市ヲ巡警セシム。……五四三
東海道鎭撫使橋本實梁、阿波藩兵ヲシテ、大津、信樂舊代官所轄ノ地ヲ管理シ、且、舊幕府及ヒ會、桑領地ノ旁近ニ在ル者ヲ檢セシム○膳所藩ヲシテ、賊兵ノ逃歸スル者ヲ要擊セシム。……五四四
松平定敬ノ老臣、書ヲ尾張藩ニ致シ、其寬宥ヲ申請センコトヲ求ム。……五四五
徳川慶喜、江戶城ニ還リ、東歸ノ情由及ヒ後日ノ形勢ニ因リ、再ヒ西上スルノ意アルヲ列藩ニ告ク○諸廓門ヲ鎖シ、之ヲ各國書記官ニ報ス。……五四五
各國公使等、兵ヲ出シテ、神戶驛ノ兩口ヲ扼シ、港內ニ在ル諸藩艦船ヲ拘留ス。……五四八

十三日

宣命使ヲ、山階、後月輪、弘化、後月輪東ノ四陵ニ遣シ、天皇、將ニ首服ヲ加ヘントスルヲ告ク。……五四八
假ニ九條道孝ノ第ヲ、太政官代ト爲ス○參與局ヲ宮中ニ移ス。……五四九
參與助役西四辻公業ヲ參與ト爲ス。……五五〇
石川成之ニ命シ、鈴鹿嶺及ヒ傍近ノ隘口ヲ扼シ、東海道鎭撫使ノ約束ヲ受ケシム。……五五〇
酒井忠義ヲ北陸道先鋒、戶田氏共ヲ東山道先鋒ト爲シ、功ヲ立テ自ラ贖ハシム。……五五〇
伊達宗城、藩兵ヲ以テ松山ヲ討チ、且、大阪駐在中、其臣某ヲシテ、參與局ニ候セシメンコトヲ請フ。……五五一
毛利敬親、書ヲ上リ、家臣木戶孝允ノ召命ヲ謝シ、其疾ヲ以テ、上京ノ延期ヲ請フ。……五五二
徳川茂承、再ヒ大阪敗兵ノ來投スル者ヲ、拒絕スルヲ上申ス。……五五二

新發田藩兵、白川越警守ノ命ヲ辭ス、郡山藩兵ヲ以テ之ニ代フ。……五五三
大村純熈、木下俊愿、京ニ至ル。……五五四
征討府、錦旗奉行四條隆謌ヲ軍事參謀兼中國四國征討總督、同奉行五條爲榮ヲ監軍ト爲ス、下參謀大山綱良之ニ屬ス。……五五四
鷲尾隆聚、高野山ヲ發シ、進テ大阪ニ入ル○德川茂承、使ヲ遣シ、守兵ノ無狀ヲ謝ス。……五五五
德川慶喜、板倉勝殷ヲシテ、碓氷嶺ヲ嚴守セシム。……五五五

十四日

參與助役長谷信成ヲ參與ト爲ス。……五五六
內旨ヲ親子內親王ニ下シ、其緩急護衞ノ命ヲ、大久保忠寛ニ傳諭セシム。……五五六
安藝、長門、備前三藩ニ令シ、山陽道諸藩ノ向背ヲ問ヒ、且、舊幕府ノ領地ヲ檢シ、本年租稅ノ半ヲ蠲カシム。……五五七
豐岡藩兵ヲシテ、桂御所ヲ守衞セシム。……五五七
宇和島藩ニ令シ、藩士ノ參與ト爲スヘキ者ヲ薦擧セシム。……五五七
池田茂政、日置忠尙、神戶驛爭鬪ノ事ヲ上申ス。……五五八
德川茂承、老臣水野忠幹ヲ、大阪ニ出スノ情由ヲ陳疏ス。……五五九
谷衞滋ノ老臣、京ニ至リ、衞滋入覲ノ途ニ上ルヲ稟シ、王事ニ從ハンコトヲ請フ○豐岡藩兵京ニ至ル。……五五九
薩長二藩、特賜ノ稟米ヲ辭シ、以テ兵備ニ充テンコトヲ請フ。……五六〇
備前藩兵、備中松山城ヲ徇ヘテ之ヲ下ス。……五六一
德川慶喜、太田資美等ヲシテ、駿府城ヲ警守セシム。……五六一
舊長崎奉行河津祐邦、上國ノ報ヲ聞キ、援ヲ各國領事ニ請フ○祐邦、後事ヲ筑肥二藩士ニ託シ、海路江戶ニ歸ル。……五六二

卷二十

十五日

天皇、元服ヲ加ヘ玉フ、詔シテ海內ニ大赦ス。……五六七
嘉言親王ヲ一品ニ敍シ、尊秀親王ヲ博經ト復名セシメ、二品ニ敍ス。……五七三

大勢ヲ察シ、世變ニ隨ヒ、新ニ外國ト和親ヲ結フヲ布告ス。……五七四

三道東征ノ師ヲ發スルヲ以テ、奥羽諸藩ニ命シ、六師ニ會セシム○宇和島藩ヲシテ、土佐藩松山討伐ノ兵ニ應援セシム。……五七五

高槻藩ニ命シ、所管ノ倉廩ヲ發シテ、兵禍ニ罹リシ者ヲ賑恤セシム。……五七六

徳川慶勝、歸藩シテ藩士ノ竊ニ徳川慶喜ニ應セントスル者ヲ鎭定センコトヲ請フ○慶勝ニ命シ、城守ヲ嚴ニシ、奸徒ヲ誅勦シ、且旁近ノ諸藩ヲ糾合セシメ、其子徳成ヲシテ、代リテ上京セシム。……五七七

酒井忠義、京ニ至ル、命シテ其ノ子忠氏ヲ幽シ、忠義ヲシテ立功自贖セシム。……五七八

建部政世ヲシテ、博經親王、醍醐忠順ノ衛兵ヲ出サシム。……五八〇

出雲藩警衛ノ器使、未タ具備セサルヲ以テ、姑ク服役ノ期ヲ緩ウセント請フ。……五八〇

松平武聰ノ老臣、書ヲ上リ、粮食ヲ給シ、兵器ヲ借ランコトヲ請フ。……五八一

小原忠寛、大垣ヨリ至リ、其藩事ヲ料理センコトヲ請ヒ、又討伐鎭撫ノ規律ヲ定メ、之ヲ諸道ノ軍ニ頒タンコトヲ建議ス。……五八二

京極明徹、京ニ至ル○松平慶憲、一柳頼紹、老臣ヲシテ代リテ入京セシム。……五八三

參與外國事務取調掛東久世通禧、各國公使ト神戸港ニ會シ、大政復古ヲ報スルノ國書ヲ致シ、且、神戸驛爭鬪ノ事ヲ判理ス○各國公使、神戸驛ノ守兵ヲ撤シ、拘留ノ船艦ヲ解ク○薩長二藩兵ヲシテ神戸驛ヲ守ラシメ、阿波藩兵ノ兵庫警守ヲ罷ム。……五八四

徳川慶喜、大久保忠禮ノ甲府城代ヲ罷メ、函根關ヲ嚴守セシム○書ヲ英國公使パークスニ致シ、條約履行ノ事、固ヨリ變替ナキヲ告ク。……五九二

卷二十一

十六日

親王ヲ三公ノ上ニ班ス。……五九五

宮堂上及ヒ諸官人ニ諭シ、舊習ヲ洗除シ、志操ヲ磨勵シテ實用ニ適セシム。……五九五

九條道孝、近衛忠凞等十七人ノ朝參ヲ許ス。……五九六

內旨ヲ佐竹義堯ニ下シ、奥羽諸藩ヲ糾合シテ東征ノ師ニ應援セシメ、其召命ヲ止ム。……六〇〇
戸田氏共、京ニ至ル、命シテ伏見從役者ヲ幽シ、氏共ヲシテ立功自贖セシム。……六〇一
郡山藩ノ請ヲ聽シ、平戸藩ト策應シテ闇嶺ヲ守備セシム。……六〇二
藤堂高邦、各所守衞ノ命ヲ奉シ、且其封、桑名ト相近キヲ以テ、京師ニ出兵スル能ハサルヲ稟ス。……六〇三
九鬼隆備、京ニ至ル〇渡邊章綱、織田信成、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……六〇三
外國事務總裁嘉彰親王、書ヲ各國公使ニ與ヘ、交際ノ事、舊幕府締結ノ條約ヲ遵守スルヲ諭シ、且其本官ト爲リ、三條實美等三人、之ニ副タルヲ告ク。……六〇三
各國公使、書ヲ東久世通禧ニ致シ、神戸爭鬪處分ノ目ヲ陳論ス。……六〇四
備前藩兵、播磨姬路城ヲ徇ヘテ之ヲ下ス。……六〇五
上杉齊憲、西上ノ途、慶喜敗歸ノ報ヲ聞キテ歸還ス。……六〇六

十七日

職制ヲ定メ、神祇、內國、外國、海陸軍、會計、刑法、制度ノ七科ヲ置キ、事務總督及ヒ事務係ヲ補任ス。……六〇六
蜂須賀茂韶ヲシテ、其父齊裕ノ遺封ヲ襲カシム。……六一三
鷲尾隆聚、大坂ヨリ至ル、召見シテ之ヲ慰勞ス〇隆聚及ヒ十津川鄉士ニ金穀ヲ賜フ。……六一三
市橋長義ニ命シテ、日ニ朝堂ニ參セシム。……六一四
伊達慶邦ニ命シ、獨力ヲ以テ會津ヲ討タシム。……六一四
柳澤保申ニ命シ、泉涌寺及ヒ洞嶺ヲ警守シ、且、石山基正ノ衞兵ヲ出サシム。……六一五
小出英尙築城ノ請ヲ聽ス。……六一五
興福寺僧侶ニ命シ、假ニ春日社領及ヒ舊奈良奉行ノ事務ヲ管セシム。……六一五
井伊直憲、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ桑名征討ノ役ニ從ハシメ、且、四塚ノ守衞ヲ罷メンコトヲ請フ、之ヲ聽ス。……六一六
分部光貞、疾ヲ謝シ、且兵ヲ京師ニ出スヲ稟ス、又、雲母坂警守ノ命ヲ得ンコトヲ請フ〇平戸藩、長崎茂木口ノ戍兵ヲ撤センコトヲ請フ。……六一七
京極高富ノ老臣、京ニ至ル、命シテ速ニ京師ニ出兵セシム。……六一九

櫻井忠興、京師出兵ノ命ヲ止ム。……六一九
池田茂政、兵ヲ發シテ、旁近譜第諸藩ノ向背ヲ問フヲ稟ス。……六二〇
松平賴聽、興正寺攝信ニ因テ、謝罪書ヲ上ル。……六二〇
東海道鎭撫總督橋本實梁、大津代官石原某ヲシテ舊ニ仍テ其地ヲ管セシム。……六二一
德川慶喜、戸田光則、大河内輝照ヲシテ碓氷關ヲ警守セシム。……六二二
十八日　議定正親町三條實愛ヲ大坂ニ遣シ、征討大將軍ノ印ヲ、嘉彰親王ニ授ケ、且大將軍及ヒ將士ヲ犒フ。……六二三
織田信親ノ請ヲ聽シ、塚原ノ守衞ヲ罷ム。……六二三
卷二十二
山内豐信、書ヲ上リ、征討ノ命令、一途ニ出テンコトヲ請フ。……六二四
海陸軍務總督島津忠義、上表シテ、其職及ヒ家臣西鄕隆盛ノ參與ヲ辭ス。……六二四
肥後藩ニ命シテ、延岡藩抗敵ノ狀ヲ責問セシム、肥後藩其供狀ヲ上ル。……六二五
本多忠貫、鷲尾隆聚、其別邑ヲ收メシ狀ヲ具シ、奉上他意ナキノ意ヲ陳ス。……六二六
石川成之等、京ニ至ル○岩城隆邦、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○片桐貞篤、兵ヲ京師ニ出シ、仙石久利、京極高厚、山陰道鎭撫使ノ令ヲ以テ、兵ヲ生野ニ出スヲ稟ス。……六二七
外國事務總督東久世通禧、書ヲ各國公使ニ贈リ、事務係岩下方平及ヒ伊藤博文等ヲシテ權ニ兵庫奉行ノ事ヲ管理セシムルヲ告ク。……六二八
土藩士佐々木高行、薩藩士松方正義等、舊長崎奉行所ヲ收メテ會議所ヲ開キ、權ニ内外ノ事務ヲ管理シ、之ヲ京都ニ奏シ、又各國領事ニ告ク。……六二九
舊幕府、諸藩ニ幽閉セル水戸降人ノ罪ヲ赦シ、之ヲ江戸ニ致サシム。……六四八
舊幕府麾下士勝義邦、官軍三道東下スルヲ聞キ、書ヲ沿道ノ諸侯ニ致シ、其兩端ヲ持スルヲ責ム。……六四九
卷二十三
十九日　假ニ會計事務裁判所ヲ學習院ニ置ク。……六五一

參與廣澤直臣、中根師質、神山君風ニ、內國事務掛ヲ兼ネシメ、直臣ノ海陸軍務掛ヲ罷ム。……六五一
池田慶德、引咎ノ請ヲ慰籍シ、命シテ入覲セシム。……六五一
德川慶篤ニ命シ、鈴木重棟、市川弘美等ヲ罰シテ、藩屛ノ職ヲ盡サシメ、其泉涌寺守衞ヲ罷ム。……六五二
都下ノ居民、賊徒ノ兵仗器具ヲ藏スルモノハ、悉ク之ヲ市中取締所ニ納メシム。……六五二
備前藩ノ老臣日置忠尙ヲ召ス。……六五三
永井直諒ニ命シ、舊ニ仍リテ舊幕府領地ヲ管シ、且昨年負欠ノ數ヲ錄上セシム。……六五三
九鬼隆義ニ命シ、舊ニ仍テ神崎川ヲ警守セシム○稻田邦植ノ家臣、書ヲ上リ、西ノ宮ノ守衞ヲ罷メ、專
ラ高松應援ニ從ハンコトヲ請フ、之ヲ聽ス。……六五四
毛利敬親父子、不日、坂城討伐ノ軍ヲ發スルヲ稟ス。……六五六
稻葉久通、織田長易、兵ヲ京師ニ出ス○長易、又、鷲尾隆聚ノ令ヲ以テ、守兵ヲ慈恩寺村ニ置クヲ稟ス。……六五六
金穀出納所三井三郎助、島田八郎左衞門、小野善助、金壹萬圓ヲ獻ス。……六五九
脇坂安斐、谷衞滋、永井直哉京ニ至ル。……六五九
長門藩兵、松平慶倫ノ向背ヲ問フ、慶倫ノ老臣、勤王ノ誓書ヲ致ス。……六六〇
德川慶喜、諸藩ノ老臣ヲ江戶城ニ召シ、救解ノコトヲ託ス○松平容保等、慶喜ヲ勸メテ再擧ヲ謀シム、
慶喜從ハス。……六六〇
伊達宗城等大坂ヨリ至リ、各國公使神戶ノ事ヲ論セシ書ヲ上ル、廷議、遂ニ其言ニ從フ○東久世通禧
ニ命シ、之ヲ各國公使ニ報シ、又池田茂政ニ諭ス。……六六五

二十日

戶田忠至ヲ參與兼會計事務掛ト爲シ、參與楫取素彥ニ制度寮事務掛ヲ兼ネシム。……六六七
參與酒井忠溫ヲ罷メ、北陸道鎭撫使ニ隨ハシム○小原忠寬ニ命シ、大垣ニ赴キ、官軍ノ糧食ヲ措辦セシム。……六六八
竹澤邦光ヲ美濃ニ遣ハス○郡上藩ニ令シ、邦光ト謀リ、旁近ノ舊幕府領地及ヒ士民ノ向背ヲ按撿シテ
鎭撫使ヲ迎ヘシム。……六六九
加藤明實、再ヒ京ニ至ル、命シテ內侍所及ヒ建春門ヲ守ラシメ、新谷藩ノ守衞ヲ罷ム。……六七〇

綾部藩ヲシテ舊ニ仍テ塚原口ヲ守衞セシム○平戸藩、征討府ノ令ヲ以テ、闇嶺守兵ヲ奈良ニ移スヲ稟ス。……六七〇
熾仁親王、牛車ノ永宣旨ヲ辭ス。……六七一
松平慶倫、書ヲ上リ、備前藩兵來討ノ聞アルヲ稟訴シ、其奉命ノ狀ヲ得ンコトヲ請フ。……六七二
本多忠鄰、京ニ至ル○大河内信古、遠山友祿、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○秋元禮朝ノ家臣、河内ノ別邑ニ在ル者、役夫ヲ發シテ事ニ從ハンコトヲ請フ。……六七三
北陸道鎭撫總督高倉永祜、副總督四條隆平京師ヲ發ス。……六七四
中國四國征討總督四條隆謌、明石城ニ至ル。……六七四
德川慶勝、藩ニ歸リ、渡邊新左衞門等ヲ誅ス。……六七四
松平賴聰、罪臣二人ノ首級ヲ征討府ニ獻シ、城ヲ出テ佛寺ニ屛居ス○土佐藩兵、高松城ヲ徇ヘテ之ヲ下ス。……六七七
花山院家理、浪徒ヲ率ヰテ周防室積港ニ至ル、其黨肥後天草、豐前四日市ヲ鹵掠ス○長門藩、吏ヲ室積ニ遣リ、家理ヲ拘留シ、長崎會議所モ、亦兵ヲ天草ニ遣リ之ヲ鎭撫ス。……六七七

卷二十四

廿一日

議事條規、及ヒ朝參放衙時限休暇日ヲ定ム。……六八四
臺鎭ヲ大和ニ置キ、參與久我通久之ヲ督ス○東園基敬ヲ參與ト爲ス。……六八四
池田慶德ノ請ヒニヨリ、支族池田喜通ヲシテ入覲セシム○小笠原貞孚ノ請ヲ聽シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシメ、且兵ヲ京師ニ出サシム。……六八五
加藤明實、大河内信古、東海道鎭撫使橋本實梁ノ令ヲ以テ、兵ヲ桑名ニ出スヲ稟ス○建部政世ノ請ヲ聽シ、姬路征伐ニ應援スルヲ以テ、在京ノ兵ヲ撤セシム。……六八五
毛利敬親父子、上表シテ、復官ノ恩ヲ謝シ、藩內兵禍後ノ爲、入覲遲緩スルヲ稟シ、且其占有セル豐前石見ノ地ヲ、上ランコトヲ請フ。……六八七
松平武聰、書ヲ上リ、屛居罪ヲ待ツヲ稟シ、且老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……六八九
東山道鎭撫總督岩倉具定、副總督岩倉具經京師ヲ發ス。……六九〇

外國事務總督東久世通禧、各國公使ニ移書シ、其國人ノ、兵器船艦ヲ、德川慶喜及ヒ其臣屬ニ販賣貸與スルヲ禁ス。……六九〇

廿二日

鎭臺ヲ大坂、兵庫ニ置キ、醍醐忠順ヲ參與兼內國事務掛ト爲シ、外國事務總督伊達宗城ト共ニ、大坂鎭撫臺ヲ督シ、外國事務總督東久世通禧ノ軍事參謀ヲ罷メ、兵庫鎭臺ヲ督セシム、忠順、內國事務掛ヲ辭ス。……六九一

大宮御所經營課金、二月ヲ限リテ之ヲ出サシム。……六九三

松平直克ヲ召ス。……六九三

郡山藩ヲシテ、植松雅言等五人ノ衛兵ヲ出サシム。……六九三

德川茂承、書ヲ上リ、更ニ入京ノ命ヲ請ヒ、且藩兵ヲ以テ東征ノ先鋒ト爲サンコトヲ請フ、之ヲ聽ス。……六九三

松平定安、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシメ、且出雲旁近地方檢査ノ命ヲ得ンコトヲ請フ。……六九四

松平慶倫、再ヒ書ヲ上リ、備前藩兵、東上ヲ止ムルヲ稟シ、入覲ノ朝命ヲ得ンコトヲ請フ。……六九五

竹澤邦光、美濃笠松ヲ收メ、其狀ヲ上ル。……六九六

澤宣嘉、長門ヨリ至ル……六九六

備前藩兵、津山城ニ至リ、其向背ヲ問フ、松平慶倫及ヒ老臣等、奉命他ナキノ證書ヲ呈ス。……六九七

德川慶喜、米國公使ノ要求ニ應シ、討薩表ヲ贈ル。……六九七

廿三日

議定嘉言親王ニ內國事務總督、博經親王ニ會計事務總督ヲ兼ネシム○寺島宗則、町田久成、五氏友厚ヲ參與兼外國事務掛ト爲シ、宗則ヲ兵庫ニ、久成ヲ長崎ニ派遣ス○木村貞通ヲ參與刑法事務掛ト爲ス。……六九八

參與會計事務掛三岡公正ノ建議ヲ納レ、公正ヲシテ紙幣製造ノ事ヲ掌ラシム。……六九九

暗殺ヲ嚴禁ス。……六九九

池田慶德ノ請ヲ聽シ、山陰道公文布達ノ事ヲ專掌セシメ、松平定安ノ分管ヲ罷ム。……七〇〇

本願寺光澤ノ請ヲ聽シ、近畿ノ門徒ヲ募化セシム。……七〇一

東本願寺光勝、書ヲ上リ、滋野井公壽、其門徒兵及ヒ糧食ヲ徵求セシ狀ヲ稟ス○光勝ニ命シ、東海北陸二道官軍ノ糧食ヲ措辦セシム。……七〇一

池田茂政、疾ヲ以テ、其弟政實ヲシテ松山征討ノ事ヲ督セシメシヲ稟シ、且備中、美作諸藩、歸順ノ狀及ヒ松山藩ノ老臣熊田短芳自刄ノ事ヲ奏ス。……七〇一
織田信成、鷲尾隆聚ノ令ヲ以テ、兵ヲ慈恩寺村ニ出スヲ稟ス。……七〇四
伊東長鮮、京ニ至ル〇五島盛德、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……七〇四
東海道鎭撫總督橋本實梁、四日市ニ至ル〇松平定敎、及ヒ老臣等、總督府ニ至リ、罪ヲ謝ス、命シテ定敎ヲ法泉寺ニ幽シ、龜山藩兵ヲシテ監守セシム。……七〇五
山陰道鎭撫總督西園寺公望、宮津城ニ至ル、其老臣等、奉命他ナキノ證書ヲ呈ス。……七〇五
德川慶喜、大給乘謨ノ陸軍總裁ヲ罷ム。……七〇五

廿四日

成瀨正肥、竹腰正舊、安藤直裕、水野忠幹、中山信徵ヲ藩屛ニ列ス。……七〇六
參與土倉正彥ニ、軍務掛ヲ兼ネシム。……七〇六
特旨ヲ以テ、島津忠義、毛利敬親ニ金各二萬兩、德川德成、淺野茂長、松平茂昭、山内豐範、伊達宗德ニ各一萬五千兩ヲ賜フ。……七〇六
綾小路俊實ニ命シ、大原氏ニ復歸シ、重德ノ嗣タラシム。……七〇七
宇和島藩ノ宜秋門及ヒ御旗守衞ヲ罷メ、阿波藩ヲ以テ之ニ代フ。……七〇七
郡山藩ニ令シ、東山基敬ノ衞兵ヲ出サシム。……七〇八
淸水谷公考ヲ召シテ、私ニ金ヲ叡山ニ募ルヲ責メ、其罪ヲ問ハス。……七〇八
島津忠義ノ請ヲ德シ、英國ノ醫生ヲ京ニ召シテ、兵士ノ瘡痍ヲ治セシム。……七〇八
織田長易、京ニ至ル。……七〇八
中國四國追討總督四條隆謌、姬路城ヲ檢シ、備前藩ヲシテ之ヲ監守セシム。……七〇八
長門藩兵、花山院家理ノ黨ヲ馬城峰ニ討テ之ヲ平ケ、旁近ノ諸藩ニ移檄シテ、其逋逃者ヲ逮捕セシム。……七〇九
德川慶喜、再ヒ榊原政敬ヲシテ、東叡山ヲ警守セシム。……七一二

廿五日　澤宣嘉ヲ參與兼九州鎭撫總督外國事務總督、木戶孝允ヲ總裁局顧問ト爲ス○鷲尾隆聚、及ヒ伊藤博文、林通顯ヲ參與ト爲シ、博文ニ外國事務係、通顯ニ海陸軍務掛ヲ兼ネシム。……七一三
苞苴私謁ノ禁ヲ嚴ニス。……七一四
黑田齊溥、鍋島茂實ニ命シ、舊ニ依リテ、長崎ヲ警守セシム。……七一四
上杉齊憲、南部利剛、佐竹義堯ニ命シ、伊達慶邦ニ應援シテ會津ヲ討タシム。……七一四
分部光貞ノ請ヲ聽シ、在京ノ兵ヲ撤シテ、專ラ叡山旁近ヲ警守シ、小泉藩兵ニ八幡山ノ間道ヲ警守セシム○因幡藩ヲシテ、長谷信篤ノ衞兵ヲ出サシム。……七一五
參與大久保利通、遷都ノ議ヲ上ル。……七一六
舊山田奉行本多忠貫、伊勢神宮及ヒ三別宮遷宮ノ經費ヲ稟請シ、尋テ三別宮ノ費ヲ獻センコトヲ請フ。……七一七
德川德成、柳生俊益、京ニ至ル○黑田齊溥、疾ヲ謝シ、其子慶贊ヲシテ入覲セシメントスルヲ稟ス。……七二〇
德川慶喜、江戶ノ諸郭門ヲ開キ、之ヲ各國書記官ニ報ス。……七二〇
各國公使、其國人ニ局外中立ヲ布告ス。……七二一
廿六日　大村純熙ニ命シ、九州鎭撫總督ト謀リ、長崎ヲ警守セシム。……七二六
高松實村、私ニ京師ヲ去リ、兵ヲ甲信ノ間ニ募ル、其父保實ニ命シテ、之ヲ召還セシム。……七二六
木下利恭、京ニ至リ、青山忠敏、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム○織田長易、大和鎭臺ヲ置クヲ以テ、其事ニ從ハンコトヲ請フ。……七二六
前橋藩、竊ニ同志ト議シ、德川慶喜ヲシテ謝罪セシメ、社稷ヲ存セント謀ル○松平慶永、岩倉具視ノ旨ヲ受ケテ、書ヲ前橋藩ニ致シ、其事ヲ陳論ス。……七二七
長門藩、征討總督ノ令ヲ以テ、山陽ノ兵ヲ轉シテ、松山征討ノ先鋒タルヲ稟ス。……七二六
北陸道鎭撫總督高倉永祜、小濱ニ至ル、城主酒井忠氏ノ老臣、奉命他ナキノ證書ヲ呈ス。……七二七
島津久光、檄ヲ西海道諸藩ニ傳ヘテ、其方向ヲ問フ。……七二七
德川慶喜、公議所ヲ置キ、其下ニ令シテ各所見ヲ陳シ、家政ヲ匡救セシム。……七二九

廿七日　太政官代ヲ二條城ニ移ス。……七四二
參與大久保利通ヲ、總裁局顧問ト爲ス。……七四三
大阪鎭臺ヲ改メテ裁判所ト爲シ、醍醐忠順ヲ總督、伊達宗城ヲ副總督ト爲ス○宗城ニ命シ、忠順ノ隨從及ヒ衞兵ヲ出サシム○岸和田藩ニ命シ、大坂市中ヲ巡警セシム。……七四三
東征ヲ議スルヲ以テ、大將軍嘉彰親王ヲ召還ス○滋野井公壽ヲ召ス。……七四四
東海、東山、北陸三道鎭撫使及ヒ淺野茂長等六人ニ命シ、舊幕府領地ノ東海、東山、北陸、山陽、山陰、南海ニ在ル者ヲ檢シ、其人民ヲ安撫シ、圖録ヲ上ラシム。……七四五
諸藩ノ九門警衞及ヒ征討兵ヲシテ、菊章ノ旗幕ヲ用ヒシム○諸侯ノ松平氏ヲ冒稱スル者ハ、其本氏ニ復セシム。……七四七
池田茂政ニ令シ、其沒收セシ所ノ舊幕府貢米ヲ、大坂ニ輸送セシム。……七四七
松平慶倫ノ請ヲ聽シ、命シテ入覲セシメ、又之ヲ池田茂政ニ諭ス。……七四七
細川慶順ニ命シ、姑ク舊ニ仍テ、豐後ノ四郡及ヒ日田、天草ヲ守衞セシム。……七四八
毛利敬親、其子廣封ヲシテ兵ヲ率ヰテ命ヲ闕下ニ待シムルヲ稟ス○敬親、上書シテ、諸藩ノ方向ヲ一ニシ、復古ノ基本立テ、而ル後、德川氏ヲ處置センコトヲ建議ス。……七四八
德川慶喜、書ヲ松永慶永、山内豐信等ニ致シテ、解救ヲ請フ、慶永、其書ヲ上ル。……七四九
池田茂政、松平武聰ノ家臣等、大坂ヨリ敗歸シ、其封内金岡港ニ至ルヲ以テ、之ヲ拘留スルヲ稟ス。……七五一
出雲藩兵、京ニ至ル○伊東長𧦅、兵ヲ姫路ニ出スヲ稟ス。……七五一
東山道總督岩倉具定、近江三上ヲ收メ、加藤明實ヲシテ其地ヲ管理セシム。……七五二
中國四國征討總督四條隆謌、大坂ニ歸ル。……七五二
廿八日　土佐藩兵、伊豫松山城ヲ徇ヘテ之ヲ下ス。……七五二
百官ヲ會シテ、東征ノ議ヲ決ス。……七五三

參與井上馨ヲ外國事務掛ト爲シ、九州鎭撫使ニ屬セシム。……七五二
毛利敬親ニ命シ、姑ク豐石占有ノ地ヲ管セシム。……七五三
大將軍嘉彰親王、大坂ヨリ凱旋シ、錦旗節刀ヲ上リ、其狀ヲ奏ス。……七五三
松平定安、其管地隱岐國租稅貢納ノ方ヲ稟請ス、命シテ、金ハ會計裁判所ニ入レ、穀ハ大坂ニ輸サシム。……七五三
池田茂政、米五千苞ヲ獻セント請フ、之ヲ聽ス。……七五四
山名義濟ノ請ヲ聽シ、命シテ入覲セシム。……七五四
長門藩ノ請ヲ聽シ、時々兵ヲ二條河東ニ操シ、且新選組ノ兵器、東本願寺ニ在ル物ヲ交附ス。……七五六
伊達宗城ノ請ヲ聽シ、大坂ノ舊奉行邸及ヒ桑名邸ヲ貸與ス。……七五七
松平武聰、再ヒ書ヲ上リ、其臣隷ノ伏見ノ事ニ與ルヲ以テ、屏居罪ヲ待ツヲ稟シ、其情ヲ陳疏ス。……七五七
酒井忠義、疾ヲ以テ、再ヒ從軍遲延ヲ謝ス。……七六〇
酒井忠惇ノ老臣、書ヲ上リ、忠惇ノ父忠績ヲ上京セシメ、且藩兵ヲ出シテ謝罪ノ實効ヲ表センコトヲ請フ。……七六〇
柳澤保申、再ヒ京ニ至ル。……七六一
東海道鎭撫總督橋本實梁、桑名城ヲ收メ、尾張、津二藩ヲシテ之ヲ管セシム、……七六一

廿九日

吉井德春ヲ、參與兼海陸軍務掛ト爲ス……七六一
福知山、出石、龍野三藩ニ命シ、假ニ舊幕府領地ノ其封內旁近ニ在ルモノヲ管セシム、尋テ福知山、出
石二藩ヲ罷ム。……七六一
肥後、筑前、島原三藩ニ命シ、花山院家理ノ餘黨ヲ追捕セシム。……七六五
會計事務總督中御門經之、淺野茂勳、京坂ノ豪商ヲ召シ、度支ノ事ニ服セシムルヲ諭シ、且紙幣準備金
三百萬兩ヲ課ス。……七六五
東海、東山二道鎭撫使ニ令シ、横濱居留ノ外國人ト釁隙ヲ開クコト勿ラシム。……七六六
池田茂政、再ヒ松山降伏ノ狀、及ヒ其藩情ヲ陳シ、且措置ノ目ヲ稟請ス。……七六六
島津忠義、日田、長崎地方鎭定ニヨリ、藩兵ヲ撤スルヲ稟ス〇青山忠敏、山陰道鎭撫使所屬ノ兵ヲ罷ム

ルヲ稟ス。……七六九
徳川慶喜、再ヒ書ヲ松平慶永等ニ致シ、退隱ノ意ヲ陳シ、救解ヲ請フ、松平慶永、其書ヲ上ル。……七七〇
松平定安、京ニ至リ、大村純熙、京ヲ辭シテ長崎ニ赴ク○本莊道美、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシメ、三宅康保、疾ヲ謝シ、上京ノ延期ヲ請フ。……七七一
徳川慶勝、使ヲ參遠駿信甲野七國ニ遣シ、諸藩以下ノ向背ヲ問ヒ、其老臣ヲ名古屋ニ來會セシム○松平乘秩ノ老臣、連署シテ勤王ノ證書ヲ致ス。……七七一
徳川慶喜、榊原政敬ヲ甲府城代ト爲ス。……七七三
是月 酒井忠經、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。……七七三

卷二十七

二月

朔日 大和鎭臺ヲ廢シ、久我通久ヲ大和鎭撫總督兼內國事務掛ト爲ス○內國顧問木戶孝允ニ、外國事務掛ヲ兼ネシメ大坂ニ派遣ス。……七七五
再ヒ、松平慶倫ヲ京師ニ召ス。……七七六
渡邊章綱ヲシテ、和泉海岸ノ警守ヲ撤セシム。……七七六
土御門晴雄ノ請ヲ許シ、江戶ノ天文方ヲ京都ニ移シ、暦法授時ノ事ヲ管セシム。……七七七
佐竹義堯ノ老臣京師ニ在ル者、書ヲ上リテ、本藩ノ討會應援ノ事ヲ申稟ス、令シテ、再命ヲ俟タシム。……七七七
日置忠尚、再ヒ神戶爭鬪ノ事ヲ上陳ス。……七七八
池田慶德、支族ノ江戶ニ在ル者ヲシテ、力ヲ王事ニ効サンコトヲ請フ。……七七九
關長克、兵ヲ出シテ、備中巡撫ノ備前藩兵ニ屬セシムルヲ稟ス。……七七九
丹羽氏中、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシムルヲ稟ス。……七八〇
東山道鎭撫總督岩倉具定、大垣ニ至ル。……七八〇
池田慶德、使ヲ出雲ニ遣シ、松平定安ノ向背ヲ問フ、留守ノ老臣等、奉命貳ナキノ證書ヲ致ス○山陰道

鎭撫總督西園寺公望鳥取城ニ至ル、定安ノ子直應、勤王ノ誓書ヲ呈ス。……七八〇
小笠原長國、老臣ヲ長崎會議所ニ遣リ、其子長行罪ヲ犯スヲ以テ、之ヲ廢シ、立功自贖セシコトヲ請フ。……七八〇
德川慶喜、阿部正靜ヲ陸奥白河ニ移封シ、棚倉城ヲ管セシム。……七八一
松平慶永、書ヲ德川慶喜ニ致シ、速ニ謝罪ノ意ヲ表シ、朝命ヲ待タンコトヲ勸ム。……七八一
太田資美、慶喜ノ命ヲ以テ、駿府城ヲ守リ、疾ヲ稱シテ、朝召ヲ辭ス○慶喜謝罪ノ狀ヲ聞キ、從兵ヲ留メテ其邑ニ歸ル。……七八八

二日

近衞忠房ヲ神祇事務總督、鷹司輔熙ヲ制度寮事務總督、小松清廉ヲ總裁局顧問ト爲シ、顧問參與大久保利通ノ顧問ヲ罷ム。……七八九
兵庫鎭臺ヲ改メテ裁判所ト爲シ、東久世通禧ヲ總督ト爲ス○長崎裁判所ヲ置キ、九州鎭撫總督澤宣嘉ニ、其總督ヲ兼ネシム。……七九〇
池田茂政及ヒ日置忠尙ニ命シ、外人ト神戶驛ニ爭鬪セシ隊長ヲ兵庫ニ押送シテ自刄セシメ且、忠尙ニ謹愼ヲ命ス。……七九〇
備前藩兵ノ西ノ宮警守ヲ罷メ、久留米藩兵ヲ以テ之ニ代フ○郡山藩ノ西洞院信愛ノ衞兵ヲ罷メ、愛宕通旭ノ衞兵ト爲ス○備前藩兵ヲ京師ニ徵ス。……七九三
大村純熙ニ申命シ、長崎警守ノ事ハ、裁判所總督ノ指揮ヲ受ケシム。……七九三
橋本關門警守ノ加賀藩兵、外國人經過措置ノ事ヲ稟請ス。……七九四
三浦弘次ノ家臣、弘次、藩兵ヲ發シ、美作駐在ノ備前藩兵ニ屬スルヲ稟ス。……七九四
鍋島茂實、其父齊正ニ代リテ京ニ至ル。……七九五
松平喜德、書ヲ上杉齊憲ニ致シ、其父容保ヲ救解センコトヲ請フ。……七九五

三日

天皇、太政官代ニ臨ミ、親征及ヒ大總督ヲ置クノ義ヲ定メ、列藩ニ詔シテ、軍備ヲ爲サシム。……七九五
職制ヲ更定シ、七科ヲ改メテ總裁局及ヒ神祇、內國、外國、軍防、會計、刑法、制度ノ七局ト爲ス。……七九八
議定中山忠能、正親町三條實愛ニ輔弼ヲ兼ネ、參與萬里小路博房ニ、制度事務局輔ヲ兼ネシム。……八〇一

復古記

凡例

此書、慶應三年丁卯十月十四日德川氏ノ政權奉還ニ起リ、明治元年戊辰十月二十八日東征大總督ノ解任ニ終ル、分テ若干卷ト爲シ、題シテ復古記ト曰フ、別ニ外記若干卷ヲ附シ、以テ征討ノ顚末ヲ詳ニス。

此書、日ヲ以テ月ニ繫ケ、月ヲ以テ年ニ繫ケ、每條其要ヲ揭ケテ綱ト爲シ、原文ヲ錄シテ目ト爲ス、要其實ヲ失ハサルニ在リ、故ニ原文ハ、敢テ一字ヲ加損セス。

復古ノ際、典章未タ備ラス、纔ニ兵革ヲ以テス、朝廷ノ記載、徵スルニ足モノナシ、間マ三職ノ手錄アリト雖モ、大率斷簡零紙ニ係ル、其餘ハ僅ニ言渡之記、非藏人日記アルノミ、戊辰二月、始テ太政官日誌、職務進退錄アリ、三月ニ至リ、宮中日記アリ、故ヲ以テ二月以前ハ、諸藩記、華族家記ヲ採拾シ、僅ニ其梗概ヲ知ルヲ得タリ、（三職手錄、癸酉ノ災ニ罹リ、今存セス、）爾後百官履歷表、鎭將府日誌、鎭臺日誌、諸道總督記、北征日誌、外務省記、各人ノ私記等ヲ參用ス、皆其出處ヲ註シ、事實ノ疑ハシキハ、之ヲ本人ニ質シ、或ハ考按ヲ附ス、月日異同アルハ、其最先ナル者ニ從ヒ、日ヲ闕クハ月末ニ收ム。

凡ソ官職任罷、太政官ハ、參與以上、諸官ハ長次官、府縣ハ長官ヲ限ル、但事故アルモノ、及ヒ閏四月改正以前、辨事判事等、參與ノ兼任ニ係ル者ハ、此限ニ在ラス。

凡ソ官職ヲ解ク、辭否ヲ問ハス、概シテ罷ト書ス、其事ニ坐スル者ハ、免ト書ス。

薨卒ハ、親王及ヒ在官ノ者（任罷ヲ載スル者ニ止ル、）ヲ限ル、餘ハ皆略ス、勅使臨弔、贈位恩典等ノ事アルハ、此限ニ在ラス。

人名始テ見ユル、其貫籍ヲ註ス、諸侯ハ藩名ヲ註ス、（藩名ハ當時ノ稱ヲ用フ、加賀藩、薩摩藩、肥後藩ノ類、）人名ハ概シテ名ヲ書シ、其詳ナラサルハ某ト書シ、通稱ハ其下ニ註ス。

宮、堂上、諸侯等ノ通稱ナキ者ハ、宮號若クハ官名ヲ塡ス、年少ナレハ幼名ヲ註ス、姓氏ハ必ス氏ヲ書シ、氏名皆當時ノ稱ヲ用フ、後ニ改ムル者ハ、其初稱ヲ註ス、但諸侯ノ松平氏ヲ冒スル、極テ混淆シ易シ、故ニ概シテ本氏ニ從ヒ、之ヲ註記ス。

宮、堂上、ト曰ヒ、親王、公卿ト曰フ、指ス所少異アリ、故ニ其原文ニ從ヒ、敢テ彼此ヲ混合セス。

凡ソ幕府ヲ書スル、丁卯十二月九日以後ハ、舊ノ字ヲ加フ。

取締、取扱、某掛、某心得、某加勢、某口總督、某改所、某會所、永預、永蟄居、謹愼、差控、閉門、石高、現石、本山、本寺、後見、判物等ノ字、雅馴ナラス、然レトモ其名詞ニ係ルヲ以テ、敢テ改易セス。

明治九年六月

引用書目

公卿補任　職務進退録（京都、東京二種）　官中日記（同上二種）　別本官中日記
太政官日誌（刻本）　行政官記　行政官傳達所日記　軍務官記
三職局叢書　總裁局記　總裁局叢書　参與局叢書
辨事局記　辨事局叢書　内國事務局記　内國事務局叢書
外國事務局筆記　外國事務局叢書　軍防局諸達留　刑法事務局叢書
制度事務局叢書　行政官叢書　留守官記　三條家叢書
林和靖間日記　言渡之記　非藏人日記　執次日記
大内記新作留　諸陵御祭典略抄　祭儀録　公文録御即位式
百官履歴表　驛遞司布告留　二條攝政記　徳川慶喜實記
嵯峨實愛切紙留　嵯峨實愛手記　日野資宗記　土御門晴雄日時勘文記
春嶽私記　皇族家記（八種）　皇族家譜（二種）　靜寬院宮記
靜寬院宮日誌　靜寬院宮上﨟日記　華族家記（三百五十種）　華族家譜（四百四十四種）
諸藩藩記（百四十三種）　指華入京日載　輦下日載　木戸孝允奏議録
木戸孝允手記摘要　甲東叢書　佐々木高行天草事記　香川敬三私記
水萍貽孫録　復古功臣事蹟（二十三種）　軍事勤勞事蹟（四十二種）　諸家從軍事蹟（六種）
諸藩戰死名簿　各藩戰功録　招魂社名簿　慶明雜録
晩翠樓叢書　坤儀革正録　吉田温苗見聞録　御東巡日録

東巡日誌（以下十一種刻本）
鎮將府日誌
公議所日誌
內務省記
海軍省記
宮內省記
京都府記
三府史料
日光山東照宮記
延暦寺記
寛永寺記
東京開成學校記錄
歳入出決算報告書
甲鐵艦收領顚末
逸事史補
橋本實麗手記
鈴木重嶺手記
竹內孫助筆記
大久保忠告筆記
行在所日誌
東京城日誌
市政日誌
大藏省記
文部省記
式部寮記
大坂府記
諸縣史料
本願寺記
興福寺記
自證院記
憲法類編（以下五種刻本）
工部省統計志
朝鮮交際始末
史館叢錄
五辻安仲手記
田中光儀手記
江川英武筆記
黑川秀波筆記
江城日誌
東征日誌
金川府日誌
陸軍省記
教部省記
東京府記
長崎縣記
男山八幡宮記
東本願寺記
高野山金剛峯寺記
諸侯參罷錄
文部省第一年報
海軍省報告書
朝鮮尋交始末
舊幕府記錄
河田景與手記
大槻文彦筆記
井東守常筆記
遠山正功筆記
鎮臺日誌
北征日誌
外務省記
陸軍省叢書
司法省記
東京府日誌
滋賀縣記
八坂神社記
興正寺記
興山寺記
華族明細短冊
條約類纂
戊辰局外中立顚末
印影叢
勝安芳日記（一名海舟日記抄）
吉井正澄手記
淀藩加藤某筆記
伊藤祐將筆記
南摩綱紀筆記

各人履歴書	各人手記	各人筆記	東征總督記
東征紀略	東海道先鋒記	東山道總督府諸記錄	北陸道先鋒記
海軍先鋒記	東北遊擊軍將府日誌	甲斐鎮撫日誌	甲州鎮撫概略
總房鎮撫日誌	平潟口總督日誌	澤爲量征討記錄附奥羽鎮撫使日誌	澤爲量筆記
醍醐忠敬手記	四條隆謌諸道記概略	大原重實手記附海軍先鋒日誌	四條隆平北征紀事
橋本實梁私記	柳原前光輒誌	正親町公董陣中日誌	鷲尾隆聚奥羽追討日誌
清水谷公考青森總督日記	西四辻公業私記	高野山出張概略	慶應出軍戰狀
慶應出軍雜記	京畿討幕錄	戊巳征戰紀略	伊地知正治日記
鹽小路光孚筆記	稻田邦植出兵記	鍋島茂昌陣中日記	津輕舊記
東山道戰記	東山新聞	米澤藩戊辰事情概旨	戊辰新聞記
慶應兵謀祕錄	奥越戰爭日記	苟生日記	斃休錄
義團錄	赤報記	若松記稿	麥叢錄

雜書八種

通計　一千二百十二種

復古記　巻一

慶應三丁卯十月十四日ニ起リ二十日ニ至ル

丁卯 慶應三年

今上踐阼ノ際、幕府委靡振ハス、海内多事、物情騒然、大將軍徳川慶喜、兵庫開港ヲ強請スルニ及テ、輿論大ニ起ル、松平慶永、山内豐信、伊達宗城、島津久光、建議シテ、開港ノ議ヲ後ニシ、毛利敬親父子（癸亥甲子ノ變罪ヲ獲テ、官位ヲ褫カル、）ノ處分ヲ先ニセンコトヲ爭フ、池田慶德、池田茂政等ハ、慶喜ノ反省自新ヲ規諫ス、言皆用ヒラレス、是時ニ當テ、紀伊、會津、桑名及譜第諸藩ハ、專ラ黨議ヲ制遏シ、幕威ヲ振張センコトヲ計ル、而シテ在廷ノ大臣、大率時勢ヲ觀望シ、能ク氣力ヲ出シテ、國家ノ大事ニ任スル者ナシ、既ニシテ、朝命、幕府ヲシテ敬親等ヲ寛典ニ處セシム、幕府、乃チ其支封主及老臣ヲ大坂ニ召ス、（本年七月ニ在リ、）

是ニ於テ、薩摩藩士ノ京師ニ在ルモノ、密ニ敬親及ヒ三條實美（時ニ遷謫シテ、太宰府ニ在リ、）等ニ謀シ、薩、藝ノ兵ヲ合シ、機ニ投シテ共ニ大阪ニ至リ、以テ更革ノ事ヲ謀ラントス、（指華入京日載、）是ヨリ先、實美、密使ヲ京師ニ遣リ、岩倉具視ト中興ノ策ヲ畫ス、時ニ具視戾ヲ獲テ屏居ス、乃チ竊ニ前大納言中山忠能、中納言中御門經之ニ說キ、内議ヲ賛成ス、議奏前大納言正親町三條實愛モ亦其謀ニ與ル、十月十三日、忠能等、密旨ヲ承ケ、敬親父子ノ譴責ヲ解キ、十四日、遂ニ密詔ヲ薩、長二藩ニ下シ、幕府ヲ討セシム、（島津忠義、毛利元德家記）會々豐信、書ヲ慶喜ニ致シ、政權ヲ一ニシ、國體ヲ定メンコトヲ勸ム、慶喜乃チ加賀、薩摩以下四十藩士（前田慶寧、島津茂久、伊達慶邦、徳川德成、德川茂承、細川慶順、黒田齊溥、淺野茂長、鍋島茂實、池田慶德、藤堂高猷、松平茂昭、池田茂政、蜂須賀齊裕、山内豐範、有馬慶頼、佐竹義堯、南部利剛、井伊直憲、松平定安、上杉齊憲、松平直克、柳澤保申、酒井忠惇、小笠原忠忱、久松定昭、松平頼聰、立花鑑寛、阿部正方、丹羽長國、奥平昌服、松平慶倫、前田利鬯、伊達宗德、津輕承昭、前田利同、松平忠誠、戸田氏共、眞田幸民、溝口直正等家臣○有馬頼咸家記）ヲ二條城ニ會シ、政權奉還ノ奏案ヲ示ス、（本月十三日ニ在リ、）薩、藝、備、土等ノ藩士、力ヲ極テ之ヲ慫慂ス、是日、慶喜表ヲ上ルト云フ。（山内豐範家記　春嶽私記）

○十月

十四日、征夷大將軍正二位內大臣兼右近衛大將德川慶喜、上表シテ、政權ヲ奉還セント請フ。

臣慶喜謹テ　皇國時運之沿革ヲ考候ニ、昔　王綱紐ヲ解キ、相家權ヲ執リ、保平之亂、政權武門ニ移テヨリ、祖宗ニ至リ、更ニ　寵眷ヲ蒙リ、二百餘年、子孫相受、臣其職ヲ奉スト雖モ、政刑當ヲ失フコト不少、今日之形勢ニ至候モ、畢竟薄德之所致、不堪慙懼候、況ヤ當今外國之交際日ニ盛ナルニヨリ、愈　朝權一途ニ出不申候而者、綱紀難立候間、從來之舊習ヲ改メ、政權ヲ　朝廷ニ奉歸、廣ク天下ノ公議ヲ盡シ、　聖斷ヲ仰キ、同心協力、共ニ　皇國ヲ保護仕候得ハ、必ス海外萬國ト可並立候、臣慶喜國家ニ所盡、是ニ不過ト奉存候、乍去、猶見込之儀モ有之候得者、可申聞旨、諸侯ヘ相達置候、依之、此段謹テ奏聞仕候、以上詢。

十月十四日　慶喜

二條攝政記
德川慶喜實記

○十三日慶喜諸藩ニ示ス書

我　皇國時運ノ沿革ヲ觀ルニ、昔　王綱紐ヲ解キ、相家權ヲ執リ、保平ノ亂、政權武門ニ移テヨリ、我祖宗ニ至リ、更ニ　寵眷ヲ蒙リ、二百餘年、子孫相受、我其職ヲ奉スト雖モ、政刑當ヲ失フ不少、今日ノ形勢ニ至リ候モ、畢竟薄德ノ所致、不堪慙懼候、况ヤ、當今外國ノ交際日ニ盛ナルニヨリ、愈　朝權一途ニ不出候テハ、綱紀難立候間、從來之舊習ヲ改メ、政權ヲ　朝廷ニ歸シ、廣ク天下ノ公議ヲ盡シ、　聖斷ヲ仰キ、同心協力、共ニ　皇國ヲ保護セハ、必海外萬國ト可並立、我國家ニ所盡不過之候、乍去、猶見込之儀モ有之候者、聊忌諱ヲ不憚可申聞候。

德川慶喜實記
細川護久家記

○同日老中副書

今般上意之趣ハ、當今宇內之形勢ヲ御洞察被遊候處、外國交通之道盛ニ開ニ至リ、御政權二途ニ相分候而者、　皇國之御綱

紀難相立ニ付、永久之治安ヲ被爲計候遠大之御深慮ヨリ被　仰出候儀ニ而、誠以奉感佩候、殊ニ從前之御過失ヲ御一身ニ御引受、御薄德ヲ被爲表、御政權ヲ　朝廷ヘ御歸被遊候御文言等、臣子之身分ヨリ奉伺候得者、何共以奉恐入、涕泣之至候、就而者、此上益以御武備御充實相成不申候而者、決而不相成儀ニ付、各ニ於テ聊氣弛無之、前文之御趣意相貫、御武備相張候樣、一際奮發忠勤、精々可被申合候。徳川慶喜實記　春嶽私記

○附錄春嶽私記ニ、板倉勝靜本月十日ノ書ヲ載ス、云、松平容堂ヨリ家來後藤象二郎出京爲致、去ル四日、別紙寫之通建白書差出、附錄ニ出ス、即今切迫之形勢故、寸刻モ早ク御採用之有無相伺度ト切迫ニ申聞候得共、當今、御國內人氣形勢ヲモ熟考致候得者、當節之御成行ニ而、必定平穩トノ見据モ無之、容堂之論至當ニモ可有之、乍去、只々御實行之處如何モノカ、御國體一變トハ重大之事件、此上モナキ儀、但御實行之利害得失如何ト、深焦心苦慮之至ニ御坐候、素ヨリ　天朝御尊崇　皇國ヲ御維持被遊候思召ニ而、御相續以來モ、日々夜々御苦心被遊候御儀ニ御座候、然處、一朝　王政ニ被復、　皇國必平穩上ハ、被安　宸襟、下萬民安堵、萬歲ヲ唱候樣相成儀等ニ候ハヽ、上ニ者御職掌者如何相成候トモ、　王政復古モ御本意トノ公明正大之尊慮ニ被爲在候、何分先之見据無之、容易ニ御決著モ被遊兼、衆議ヲ被盡候思召ニ御座候、依而、貴君之御見込モ十分御承知被遊度、從拙子申上候樣被仰付。下文略ス、

十月十日　伊賀守

大藏大輔樣

再白前文略ス、不遠長州家老モ上坂、三條始五人モ上坂、其中ヘ英公使モ上坂ナトノ薄々噂モ有之、百事輻湊、殆困難ヲ極メ、痛心之至御坐候、下文略ス、

十三日答書ニ云、前文略ス、扨、上ニハ　王政ニ被復、　皇國必平穩上ハ被安　宸襟、下萬民萬歲ヲ唱候樣相成候儀候得者、御職掌ハ如何相成候トモ、　王政復古モ御本意トノ公明正大之尊慮ニ被爲在候得共、先々之御見据無之而ハ、容易ニ御決著モ

被遊兼、衆議ヲ被盡候思召之程、乍恐難有奉感佩候、右ニ付、鄙意言上候樣被仰下奉畏候、此件ニ付而ハ、昨日之呈書ニモ粗陳述仕候通ニ而、私ニ於而ハ更ニ見込モ付兼候事ニ御坐候、畢竟　王政復古ト申儀、近年通議ニテ尤之樣ニハ相聞候得共、數百年前ノ舊制ニテ、御體裁之所モ一向ニ相心得不申、郡縣封建之差別ヲ始、國體時勢之變遷モ亦、霄壤之懸隔ニ相成候事故、二百餘年來、開闢以後地球上無比之太平ヲ唱候御盛業、實近之轍跡ヲ履マスシテ、茫乎タル　王家之舊制ニ相復候儀ハ、局量淺議之私輩ニ而ハ、更ニ根柢モ相立不申、不及了見儀ト、素ヨリ相決候事候得者、容堂之書面一應二應ニ而、中々淵底致兼候得者、御採用相成候而モ可然儀トハ難申上候、議論之正大ハ如何ニモ如被仰越、御實踐ニ於テ蹉ト御手覺不被爲在儀ハ御採用難相成ハ御當然之御儀ト、御同意至極奉存候、乍併、是ハ　王政之御制度不案内ニ而、目途付兼候、固陋寡力之偏見上ヨリ申上候事ニ而、決而完全具備之定見ニハ無之候得者、申上候迄モ無御坐候得共、如此斷然トシテ及建議候程之容堂之見込通リ、　朝野之人心ニモ、時運之體態ニモ、至當之事理ニサヘ有之候得ハ、速ニ御信隨御採用之思召テ以、懇々篤々御垂問御坐候而、申上候次第、實ニ至當至善之全策ニ而、御信用ニ相成候得ハ、急度治平之御見込御一定ニモ被爲在候ハヽ、御公平ニ其議ニ御隨ヒ、御變革可被遊ハ勿論之義ト奉存候、其節ニ方リ、固執ノ私議申立候所存ハ元ヨリ無之候、此上ハ何卒容堂使節之情意貫徹、遺憾無之處マテ、御虚懷ヲ以御下問ニ相成候樣竊ニ奉仰望候。不文略ス、

十月十三日第五字　　慶永

板倉伊賀守樣

又云、十一月九日、土藩福岡藤治來話、建白十月三日ノ建白書ヲ指ス　板倉伊賀守殿ヘ持出候處、趣意ハ至極尤候ヘトモ、重大ノ事件故、急ニ御採用ト申儀ハ、左樣ニ速ニ御決評ハ六ケ敷トノ答ニ有之ニ付、猶迫テ相伺候處、御採用ニモ可相成御模樣ナカラ、曖昧ニ有之內、卒然ト諸藩士ヲ被召、御英斷ノ被仰出ニテ、土州抔ニテモ意表ニ出、致愕然候事ノ由、扨御直聞モ可被成下トノ御事故、薩藩小松帶刀、藝藩辻將曹、土藩後藤象二郎、福岡藤治等、同志ノ事故、一所ニ拜謁相願ヒ候テ及言上候ハ、如斯御盛意、片時モ早ク　朝野ニ貫徹不仕候ハテハ不相濟事候ヘハ、明日ハ早々御參內ニテ　御奏聞ニ相成、又御英斷ニテ、諸

藩士ノ建議モ御聽上ケ、共ニ　御奏聞ニ相成候樣仰望仕候段申上候處、　奏聞ハ奏聞、御下問ハ御下問ニテ、別段ノ事也、參内早速ノ義モ御承知ニハ候ヘトモ、明後日ナラテハ御手順御出來難相成トノ上意候ヘトモ、唯一刻モ早ク御實跡ニ被施候樣仕度ト、斷テ言上候處、明後日ノ處ハ急度無相違候間、其處ハ致安心候樣トノ御意ニテ、退坐ノ上、猶又伊賀守殿ヘ同樣申立、明日御參　内ノ義相願候處、諸藩ヘ御下問ノ義ハ、子細モ無之事候ヘトモ、明日ノ御參　内ト申テハ、御所ヘノ御伺等ノ御手續相濟不申、別テ此度ノ事抔ハ、　朝廷ニテ　御聞恐チ被遊、容易ニ運ヒ付キ申間敷候ヘハ、明日ハ扠置、明後日モ無覺束、先達テ開港之義サヘモ、御迫リ被成候ト申世評モ有之次第、況テ此度ハ御身上ノ御儀ニモ候ヘハ、　朝廷ヘ御迫リ被成候樣ニテハ不相濟、夫故中々御聽入モ六ケ敷トノ御應對故、左候ハヽ、先ツ攝政樣ノ御手元ヲ、何モヨリ内調可仕哉ト申試候ヘトモ、左樣ニモ御決シ無之、猶再三ノ御應接ニテ、漸ク約ル處、明後日御參　内トノ被仰出ニ相成候、夫ヨリ殿下御手元ノ義モ、永井殿内意ニテ致周旋候樣申來ニ付、何モ殿下ヘ伺候ノ處、中々御聽受無之候ヘトモ、如此一大機會得失ノ境ト相成候事故、犯上ノ罪責ハ何モヘ引受、大亂目前ノ趣ヲ以御迫リ申上、漸ク御聞入ニ相成候事ノ由。

○附錄三日山内豐信慶喜ニ致ス書

誠惶誠恐謹テ建言仕候、天下憂世ノ士、口ヲ噤シテ敢テ不言ニ至リ候ハ、誠ニ可懼ノ時ニ候、　朝廷、幕府、公卿、諸侯旨趣相違フノ狀アルニ似タリ、誠ニ可懼ノ事ニ候、此二懼ハ我ノ大患ニシテ、彼ノ策於是乎成矣ト可謂候、如此事態ニ陷リ候ハ、其責任竟誰ニ可歸ヤ、併シ既往ノ是非曲直ヲ喋々辦難ストモ何ノ益カアラン、唯願クハ大活眼大英斷ヲ以テ、天下萬民ト共ニ同心協力公明正大ノ道理ニ歸シ、萬世ニ亘テ不愧、萬國ニ臨ンテ恥サルノ大根柢ヲ建テサルヘカラス、此旨趣、前月上京ノ砌ニモ追々建言仕候心得ニ御坐候ヘトモ、何分阻隔ノ筋ノミ有之、其内不圖モ舊疾再發仕、不得止歸國仕候以來、起居動作ト雖モ不隨意ノ事ニ成リ至リ、再上ノ儀、暫時相調不申候ハ、誠ニ遺憾ノ次第ニテ、只管此事ノミ日夜焦心苦思仕罷在候、因テ愚存ノ趣、一二家來共ヲ以テ言上仕候、唯幾重ニモ公明正大ノ道理ニ歸シ、天下萬民ト共ニ、　皇國數百年ノ國體ヲ一變シ、至誠ヲ以テ萬國ニ接シ、王政復古ノ業ヲ建テサルヘカラサルノ一大機會ト奉存候、猶又別紙得度御細覽被仰付

度、懇々ノ至情難默止、泣血流涕ノ至ニ不堪候。

慶應三年丁卯九月　　松平容堂

別紙、

宇内ノ形勢、古今ノ得失ヲ鑒シ、誠惶誠恐頓首再拜、伏惟　皇國興復ノ基業ヲ建テントト欲セハ、國體ヲ一定シ、政度ヲ一新シ、王政復古、萬國萬世ニ不恥者ヲ以テ本旨トスヘシ、奸ヲ除キ良ヲ擧ケ、寛恕ノ政ヲ施行シ、朝幕諸侯齊ク此大基本ニ注意スルヲ以テ、方今急務ト奉存候、前月四藩上京仕、一二獻言ノ次第モ有之、容堂儀ハ病症ニ因テ歸國仕候以來、猶又篤ト熟慮仕候ニ、實ニ不容易時態ニテ、安危ノ決今日ニ有之哉ニ愚慮仕候、因テ早速再上仕、右ノ次第一々乍不及建言仕候志願ニ御坐候處、今ニ至テ病症難澀仕、不得已微賤ノ私共ヲ以テ、愚存ノ趣乍恐言上爲仕候、

一天下ノ大政ヲ議定スル全權ハ　朝廷ニアリ、乃我　皇國ノ制度法則一切萬機、必ス京師ノ議政所ヨリ出ツヘシ、

一議政所上下ヲ分チ、議事官ハ上公卿ヨリ下陪臣庶民ニ至ル迄、正明純良ノ士ヲ選擧スヘシ、

一庠序學校ヲ都會ノ地ニ設ケ、長幼ノ序ヲ分チ、學術技藝ヲ教導セサルヘカラス、

一一切外蕃トノ規約ハ、兵庫港ニ於テ、新ニ　朝廷ノ大臣ト諸藩ト相議シ、道理明確之新條約ヲ結ヒ、誠實ノ商法ヲ行ヒ、信義ヲ外蕃ニ失セサルヲ以テ主要トスヘシ、

一海陸軍備ハ一大至要トス、軍局ヲ京攝ノ間ニ築造シ、　朝廷守護ノ親兵トシ、世界ニ比類ナキ兵隊ト爲ンコトヲ要ス、

一中古以來、政刑武門ニ出ツ、洋艦來港以後、天下紛紜、國家多難、於是、政權稍動ク、是自然ノ勢ナリ、今日ニ至リ、古來ノ舊弊ヲ改新シ、枝葉ニ馳セス、小條理ニ止マラス、大根基ヲ建ルヲ以テ主トス、

一朝廷ノ制度法則、從昔ノ律例アリト雖、方今ノ時勢ニ參合シ、間或當然ナラサルモノアラン、宜ク其弊風ヲ一新シ改革シテ、地球上ニ獨立スルノ國本ヲ建ツヘシ、

一議事ノ士大夫ハ私心ヲ去リ、公平ニ基キ、術策ヲ設ケス、正直ヲ旨トシ、既往ノ是非曲直ヲ問ハス、一新更始、今後ノ事ヲ

見ルヲ要ス、言論多ク、實效少キ通弊ヲ蹈ムヘカラス、

右ノ條目、恐ラクハ當今ノ急務、内外各般ノ至要、是ヲ捨テ、他ニ求ムヘキモノハ有之間敷ト奉存候、然則、職ニ當ル者、成敗利鈍ヲ不顧、一心協力、萬世ニ亙テ貫徹致シ候樣有之度、若或ハ從來ノ事件ヲ執リ、辨難抗論、朝幕諸侯、互ニ相爭ノ意アルハ尤然ルヘカラス、是則、容堂ノ志願ニ御坐候、因テ愚昧不才ヲ不顧、大意建言仕候、就テハ乍恐是等ノ次第、空シク御聽捨ニ相成候テハ、天下ノ爲遺憾不鮮候、猶又、此上寬仁ノ御趣意ヲ以テ、微賤ノ私共ト雖モ、御親問被　仰付度奉懇願候。

慶應三年丁卯九月

松平土佐守内
寺村左膳
後藤象二郎
福岡藤次
神山佐多衞

山内豐範家記
水萍貽孫錄

○幕府、大宮御所造營費ヲ全國ニ課シ、其上納ノ節目期限ヲ定ム。

大宮御所新規御造立相成候ニ付、御譜請御入用、御料所萬石以上領分、寺社領ヘ國役割被仰付、村高百石ニ付金三歩之割合ヲ以テ、御料ハ御代官御預所、私領ハ領主ニテ取立可相納旨被仰出候ニ付、拜領高竝込高改出、新田高共、巨細別紙案文之通相認、來ル二十日（案スルニ、二十日ノ上、月ヲ脱スルナルヘシ、又小笠原忠忱家記二十三日ニ作ル、）迄之内、町奉行所内御所御用取扱所ヘ可被差出候、右國役金懸改之儀ハ、爲替御用達別紙名前之者ヘ申渡候間、案文之通相心得、右御用達之内ヘ金子引渡相成候ハヽ、受取手形相添納、定日前、同所ヘ可被差出候、

右者、大久保主膳正、小栗下總守申達之、

別紙雛形、

上納申金子之事、

一金何程

右ハ、今般大宮御所御造立御入用、國役金高百石ニ付、金三歩之割合ヲ以テ可相納旨被　仰出候ニ付、領分村々ヨリ取立、書面之通上納申所、仍テ如件。

何之誰家來
何之誰印

年號月日

御勘定所

別紙名前書、

爲替三井組
三井三郎助
三井次郎左衛門
三井元之助

爲替方人組
竹川彦太郎
荒木伊左衛門
奥田仁左衛門
島田八郎左衛門
小野善助

右之通ニ有之候。

卯十月

大宮御所御造立ニ付、上納日限左之通、

毎月
朔日　六日　十一日　十六日　二十一日　二十六日
村高内譯等、急速巨細取調難出來分ハ、合高凡ニモ取調、日限通可被差出、且本紙之儀ハ、美濃紙竪帳ニ相認候事。
何ノ誰領分
何國
何國　村高國役金取調申上候書附
何之誰家來
何之誰
拜領高何程　何之誰領分
一村高何程　何國
何國　村々
内
高何程　無地高、其外云々、諸引
田方五分以上、荒地免除
殘
高何程　掛高
但百石ニ付
金三歩宛
此國役金
内譯　何國何郡
村高何程　何村
但、天保度御改之節、村高何程之處、其後新田高何程相增、
内

高何程　無地高、其外云々諸引
但、無地高、其他等之諸引有之分ハ、左ノ通相認候事、
田方何程
内荒田高何程但何分何毛ニ當ル何盞
内
畑高何程
但、田方五分以上之荒地無之分ハ、左之通相認、其餘ハ田畑内譯相認候ニ不及候事、
何國何郡
何　村
村高何程
但、右同斷之節書出候後、增減無御坐候、
内譯同斷
右之通御坐候。
何之誰家來
年號月日　何　之　誰印
十　月　黑田長知家記

○本件小笠原忠忱家記、十五日ニ在リ、堀親廣家記ハ十一月五日ニ載セ、文字小異同アリ、葢シ親廣ハ江戸ニテ達セシナルヘシ。

十五日、德川慶喜ニ詔シテ、其政權奉還ノ請ヲ允シ、命シテ、國家ノ大事、及ヒ外國ノ事項ハ、

衆議ヲ盡シ、諸侯ノ稟奏、及ヒ命令等ハ、議奏傳奏之ヲ掌リ、其他更革ハ、諸侯會同ヲ待テ之ヲ議定シ、支配地、及ヒ都下取締ハ、姑ク其舊ニ仍ラシム、乃チ十萬石以上ノ諸侯ヲ召集シ、又特ニ松平慶永、大藏大輔、春嶽ト號ス○越前藩主茂昭ノ父、鍋島齊正、前肥前守、閑叟ト號ス○肥前藩主茂實ノ父、時ニ松平氏ヲ稱ス、山內豐信、前土佐守、容堂ト號ス○土佐藩主豐範ノ父、時ニ松平氏ヲ稱ス伊達宗城、伊豫守○宇和島藩主宗德ノ父、島津久光大隅守○薩摩藩主茂久ノ生父、ヲ召ス。

祖宗以來御委任厚御依賴被爲在候得共、方今宇內之形勢ヲ考察シ、建白ノ旨趣尤ニ被思食候間、被　聞食候、尙天下ト共ニ同心盡力ヲ致シ、　皇國ヲ維持シ、可奉安　宸襟　御沙汰候事。二條攝政記　德川慶喜實記

○

大事件外夷一條ハ盡衆議、其他諸大名伺被　仰出等者、　朝廷於兩役取扱、自餘ノ儀ハ、召ノ諸侯上京ノ上御決定可有之、夫迄ノ處、德川支配地、市中取締等ハ、先是迄ノ通ニテ、追テ可及　御沙汰候事。二條攝政記　德川慶喜實記

○諸藩ヘ達書

別紙之通被　仰出候ニ付テハ、被爲在　御用候間、早々上京可有之旨　御沙汰候事。細川護久家記　池田章政家記

○特命ノ分

別紙之通被　仰出候ニ付而者、　御用被爲在候間、早々閑叟上京可有之候、若所勞上京難相成候半者、肥前守早々上京可有之旨　御沙汰候事。

十月　鍋島直大家記

○

別紙之通被　仰出候付テハ、　御用被爲在候間、伊豫守早々上京候樣、若所勞押テ上京難相成候ハ、、遠江守早々上京可有

之旨　御沙汰候事。

十月　伊達宗徳家記

○慶喜實記ヲ按スルニ、第二條文中、德川ノ二字ナシ、諸家記ハ皆攝政記ト同シ、蓋シ實記二字ヲ省略セシモノナラン、又末條、豐信、慶永、久光亦同シ、癸酉災後原記ヲ失シ、家記モ亦之ヲ逸ス、慶永ハ私記ニ雜掌ヲ以テ被仰聞ト記シ、原文ヲ載セス。

十六日、是ヨリ先、加藤明實能登守○水口藩主、食封二萬五千石、ニ命シテ、泉涌寺ヲ警衛セシム、是日、明實京ニ至ル。

○加藤明實家記ニ云、丁卯十月十六日、兼テ被　仰付有之候泉涌寺　御陵御守衛人數指揮之爲、上京仕候、同所悲田院ニ宿陣、周場等巡視仕候。

○明實家記ニ、此節京都市中動搖之趣傳聞ニ付、上京仕候、丁卯三月十八日ヨリ、泉涌寺御警衛被　仰付候トアリ。

十七日、幕府、十五日ノ朝命ニ就テ、其三事ヲ稟問ス。

一昨十五日、被　仰出候御別紙之内、盡衆議ト之御文言、

召之衆諸侯上京之上、公議ヲ被爲盡、差掛リ候儀者、詰合諸侯、諸藩士等ニ會議被　仰付候儀ニ御坐候哉、

諸大名伺被　仰出等者、於兩役取扱候ト之御文言、

諸侯ヨリ御兩役ヘ伺差出候節者、衆議ヲ被爲盡、　御決定之上、御兩役ヲ以被　仰出候儀ニ御坐候哉、

支配地ト之御文言、

山城國其他御領所之儀ニ御坐候哉、又者德川領地ヲ被　仰候儀ニ御坐候哉。

十月十七日　二條攝政記　德川慶喜實記

○批紙

第一條　書面之通、

第二條　尤重事ニ於テハ、衆議ヲ盡シ候上取扱候事、尋常小事ハ直ニ取扱之事、

第三條　支配地之義ハ、　禁裏御所領之義ニ候。（徳川慶喜實記）

十八日、徳川慶喜、書ヲ上リ、在京諸侯及ヒ藩士ヲ召シテ、外國事務ヲ商議セント請フ。

此度、　王政御決定被爲在候付テハ、召之諸侯參著之上、篤ト衆議ヲ被爲盡、御綱紀御確定可相成儀ニ候得共、外國御取扱之儀ハ、尤御至重之儀ニテ、時ヲ不計、各國ヨリ申達候事件無之共難申候、其砌、御相當之御取扱振相立居不申テハ、自然御不都合之儀モ可有之、其他件々御評決相立不申候而ハ、御差支之儀モ御座候間、差向詰合之諸侯、諸藩士被召集、被爲盡衆議可然哉ト奉存候、尤御沙汰次第、私儀モ參　内可仕奉存候、此段奉申上候、以上。

十月十七日　　慶喜

（二條攝政記 徳川慶喜實記）

○細川護久家記、御差支以下八字、朝威ニモ拘リ可申奉存ニ作ル。

○本願寺光澤、大坂ノ支院ヲ以テ、三條實美等（三條西季知、東久世通禧、壬生基修、四條隆謌、）ノ旅寓ニ充ルヲ稟ス。

口上覺、

長門國へ脱走之堂上、當時筑前、筑後、久留米、肥前、肥後、薩摩等之藩預リ有之處、上坂上京可被致候節、大坂表著所之義、御當方御掛所旅宿ニ拜借致度旨、右五藩家來申出候ニ付、其段當四月被仰入置候處、猶又右家來、別紙名前之者ヨリ、彌來ル二十日頃上坂、粗治定ニ付、必拜借致度義再應申出候旨、就而者、過日御屆被仰入置候毛利大膳、竝吉川監物使者應接之場所者、前顯之次第ニ候間、外方ニ而御用意相成候儀、大坂町奉行所ヨリ被達候旨等、同所津村御掛所留守居共ヨリ申登候ニ付、此段御屆被仰入候、以上。

本願寺御門跡御使

十月　　田中圭鈴

別紙、

松平美濃守内　中村左源太

細川越中守内　猪俣才八　橋本卓之允

有馬中務大輔内　雨森傳右衛門

松平修理大夫内　永井清左衛門　黒田彦衛門

松平肥前守内　山田嘉太夫　二條攝政記

○本年正月二十三日、五氏歸京ノ命アリ、而シテ歸ルヲ果サス、此ニ至テ忽チ此事アリ、蓋シ長門藩ノ支封、及ヒ老臣ヲ召スニ際シ、薩摩藩士大山綱良、長門及ヒ宰府ニ赴キ、同時入京ノ事ヲ謀ルニ因ル歟、本月二十一日、薩藩奉答書ニ、推テ上京ノ事有之間敷ト云モノハ、上國ノ形勢ニ由テ、前策少シク變スルモノナルヘシ、後文傳聞ヲ記シテ、悉ク信ス可カラスト雖モ、其梗概ヲ見ルヘキヲ以テ、此ニ附記ス、

坤儀革正錄ニ云、薩藩大山格之助事、先日御當地發途、長州ヘ下向仕、種々談合之由、太宰府ヘ罷越、五卿方ヘ御歸洛之義、只今眞好機會ニ候間、早々御上京可然、御船之義ハ弊藩ヨリ差出可申候、且　天幕之御命ヲ被爲受候樣ニテハ、所詮六ケ敷抔段々入說候處、五卿方竝隨從之者、水野慶雲齋始承知イタシ、不日上京ニ一決イタシ、其支度ニオヨフ、肥後、肥前、久留米、筑前等之警衛士ハ、　天幕ヘ今一應御伺申上候上、御歸洛之方可然趣申立候ヘ共、一統不相用、依之、筑藩東喜助、蒸氣船ニテ早速上坂、去ル十二日夕當地著、兩肥、久留米士示談之上、薩邸ヘ罷越、内田仲之助ニ面會、太宰府之趣逐一相談候處、仲之助答ニハ、先日大山事同所ヘ差遣候處、今以何之報知モ無之、一向次第柄承知不仕趣ニテ取合不申、四藩色色談合有之候處、如何之模樣ニ候哉、明七日、當地出立ニテ、三條家始三條西、東久世、壬生等之家々ヨリ、御家來共、大坂

表ヘ五卿御向トシテ下向候由、右ハ今般長州重臣上坂、先達入京イタシ、何カ策略モ有之哉之由。

○是ヨリ先、徳川慶喜、十萬石以上ノ諸侯ヲシテ京師ニ至ラシム、細川護久、池田輝知家記 是日、又一萬石以上ノ者ヲ招集ス。

口達、

不容易御時勢ニ付、太儀ニ思召候得共、宗十郎早々上京可致、此段可相達事。石川成徳家記

○成徳家記ニ、板倉伊賀守被渡トアリ、市橋長義家記ニ、板倉伊賀守ヨリ、御用候間早々上京可有之旨被達トアリ、諸家記、往々原記ヲ失スレ共、二十七日幕府ノ令ニ照セハ、盡ク之ヲ招クモノ疑ナシ。

十九日、幕府、上疏シテ、諸藩兵都下更番及ヒ諸口警備、供御地管轄及ヒ度支、大宮御所造營課金、驛遞法、供御地及ヒ攝家宮門跡領地ノ訟獄、刑法所司代以下ノ職務、紙幣發行ノ八條、及ヒ三條實美以下五人ノ措置ヲ稟請ス。

召ノ諸侯、上京迄ノ處取計向伺候廉々、

一當地二ケ月詰、並口々御固大名割、御兩役ニテ御取調之上、夫々御達相成候哉、又ハ是迄ノ手續ニテ取調申上候テ、達方ハ御兩役ニテ被成候哉、

一禁裏御料、並御入用筋之儀、御料所ハ小堀數馬ニテ取計、御入用筋ハ是迄之通ノ取扱ニ仕置可申哉、

一大宮御所御造立御入用國役金ノ儀ハ、既達濟ニハ相成居候得共、其後收方等取扱ノ儀、是迄之手續ニテ可然候哉、左候者、其段諸大名ヘ、御兩役ヨリ御達有之候様致度候、

一五街道脇往還宿々人馬之儀、先是迄之通被成置候儀ニ御坐候ハ、其段御兩役ヨリ御國中ヘ御觸達相成候儀可有之哉、

一山城、大和、近江、丹波四ヶ國、竝攝家、宮、門跡、堂上方御家領、其他寺社領、大名領分ニ關係致シ候公事出入、京都町奉行所ニテ取扱來ル廉々ハ、是迄ノ通取扱、呼出等ハ、其主人主人ヘ掛合可申哉、

一刑法ノ儀ハ、召ノ諸侯上京之上御取究可相成ト存候得共、夫迄ノ處ハ仕來ノ通ニテ宜敷候哉、

一所司代、竝戸田大和守御附兩人勤向ハ、先是迄之通ニテ宜敷候哉、

一兵庫開港ニ付、金札通用之儀ハ、諸人百姓融通ノ爲ニテ、既ニ申上濟ニテ、出來相成居候間、通用相成候樣仕度候。

十月　徳川慶喜實記　細川護久家記

○

脫走人實美已下五人、明後日、大坂表ヘ著之旨御屆申入候、且京都洛外謹愼之儀ハ、兼而御治定承居候得共、御反格ヲ以、朝廷思召出格之御沙汰可申付被　仰付迄、大樹ヨリ其儀申渡候テ宜敷候哉、且亦京都洛外宿所之邊、從大樹申付宜敷候哉、是モ早折伺度、大和守伺出候間相伺候事。

十月　晩翠樓叢書

○本條、文字謬誤アリ、措辭モ亦幕府ノ體ニ非ス、按スルニ、幕府ヨリ口上申出シテ、傳奏ヨリ伺出シモノナランカ、幕府ノ原書ナキヲ以テ、姑ク之ヲ存ス。

○幕府、久松定昭伊豫守○伊豫松山藩主、食封十五萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、ノ請ヲ許シ、其加判列上座ヲ罷ム。

松平伊豫守

内願之趣モ有之候間、御役被成御免候。　久松定謨家記

二十日、幕府稟議ノ京都警備等八條、及ヒ外國事務三條實美以下ノ處分ヲ列藩ニ下示シ、明日ヲ期シテ、各意見ヲ上ラシム。

外夷之事、幕府十八日ノ上書ヲ指ス、　實美以下脱走之五卿之事、　大樹申出之事、八條ヲ指ス、

同意之向者連名ニ而、大樹ヘ申出候事。　小笠原忠忱家記

○

一近々上坂ノ聞有之候實美以下脱走人ノ事、

一外國ノ事、

右、尚　召ノ諸侯上京、公論衆議ノ上、決定ニ相成候得共、先差向取扱ノ處尋被下候事。　小笠原忠忱家記　細川護久家記

○忠忱家記ニ、前條被達、同夜再ヒ後條ノ達アリト云フ。

○

今日被尋下候件々、明二十一日中、兩役之内ヘ必返答可有之事。　酒井忠祿家記　小笠原忠忱家記

○正親町三條實愛、前大納言、阿野公誠宰相中將、等、連署上疏シ、三條實美、三條西季知ノ義絶ヲ釋カント請フ。

右、先年依　御沙汰、一族一同致義絶候處、去五月、於長州モ寛典之儀被　仰出候事故、於兩人モ義絶　御免奉願存候、此段宜預御沙汰候也。

十月　　藤原季知

藤原實美

公義 姉小路	實文 川鰭
實延 花園	公紀 風早
公靜 園池	公香 武者小路
實潔 押小路	保實 高松
公誠 阿野	實愛 正親町三條

日野大納言殿

飛鳥井大納言殿　（阿野公誠家記 晩翠樓叢書）

○松平慶憲、（兵部大輔○明石藩主、食封八萬石、）疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代ラシメント請フ、批シテ、其少間ヲ待テ、速ニ上京セシム。

兵部大輔義上京仕候樣奉蒙　御沙汰、早々登京可仕義ニ御坐候處、病氣罷在候ニ付、不取敢、爲名代家老出京爲仕候而モ不苦義ニ御坐候哉、此段奉伺候、以上。

十月二十日

松平兵部大輔家來

友部權六

○批紙

病氣之趣ニ候得共、二三ヶ月詰モ被　仰付候儀、精々加養、少々ニ而モ快方ニ候ハヽ、速ニ上京可有之候事。（松平直致家記）

○二十四日上申書

御用被爲　在候間、早々登京可仕旨奉蒙　御沙汰奉畏候、然ル處、乍恐從來之病症痔疾、昨年來別テ不相勝、甚以難澀仕罷在候、此體ニテハ急速發足難仕奉恐入候、少モ快氣仕候得者、早速上京仕度奉存候、先不取敢御請奉申上候、此段御憐察被成下、宜御執成程奉賴上候、誠恐謹言。

十月　　松平兵部大輔

松平直致家記

○上條、批紙日ヲ失ス、直致家記ニ云、前書在京ノ家臣ヨリ差出シ、後日御呼出ニテ、御附札ヲ以テ御差圖ニ相成ルト、案スルニ、本條日ヲ署セス、タヽ二十四日差出ストアリ、然レハ批紙ハ其後ニ在ル可シ、別ニ據ル所ナキヲ以テ、此ニ併錄ス。

○諸侯參罷申告、及ヒ疾ヲ以テ上京ノ期ヲ延シ、或ハ代理ヲ出サント請フノ類、後皆其要ヲ揭ケテ原文ヲ擧ケス、事故アル者ハ之ヲ錄ス。

○幕府、紙幣貳百兩、百兩、五拾兩、貳拾五兩ノ四種、ヲ關以東ニ發行シ、己巳歲三月ヲ以テ限ト爲スヲ令ス。遂ニ果サス、

○十月二十日幕府達書

今度、御用金差出候者共へ、御用金高ニ應シ、金札可相渡候、右金札之儀ハ、來々巳年三月迄、都テ通用金銀同樣相心得、御年貢、其外諸公納ニ相用不苦候間、御府內、竝關東在方共無差支通用可致候、尤一時融通之タメ、通用被　仰出候儀ニ付、心得違致間敷、引替之儀ハ、來々巳年三月ヨリ三井八郎右衞門方ヲイテ、正金銀ト引替可相渡候、右引替ニ付テハ、步合減等一切無之候間、不取締無之樣取引可致候、

右之趣、關東筋御料、私領、寺社領共、不洩樣可被相觸候、

右之通可被相觸候。

十月　徳川慶喜實記　足利聰氏家記

○紙幣發行ノ事、之ヲ當時事ヲ執リシ者ニ質スニ、遂ニ果サスト云フ。

○

金札之儀ニ付申上候書付、

小栗上野介
小野友五郎
佐藤清五郎

今般、御用金差出候モノヘ、御用金高ニ應相渡候金札之儀、五拾兩以上ノ札御出來之積申上候處、當分之內通用被　仰出候ニ付、猶勘辨仕候處、金高多之札ニテハ、取引不辨ニモ可有之候間、貳拾五兩、五拾兩、百兩、貳百兩ト四等之金札ニ仕候方、必通用方可宜ト奉存候、依之、右見本札四枚相添、此段申上候、以上。

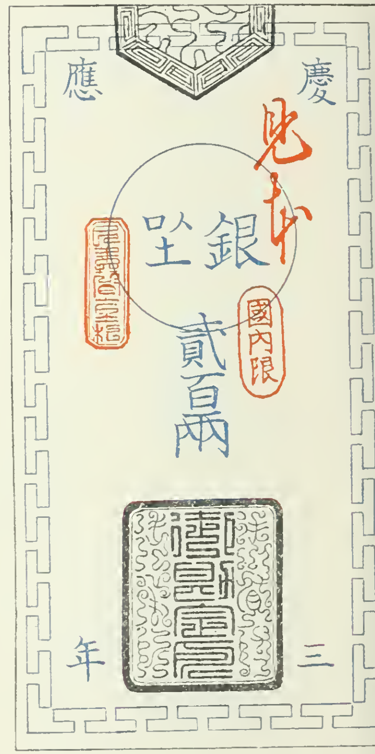
卯十一月

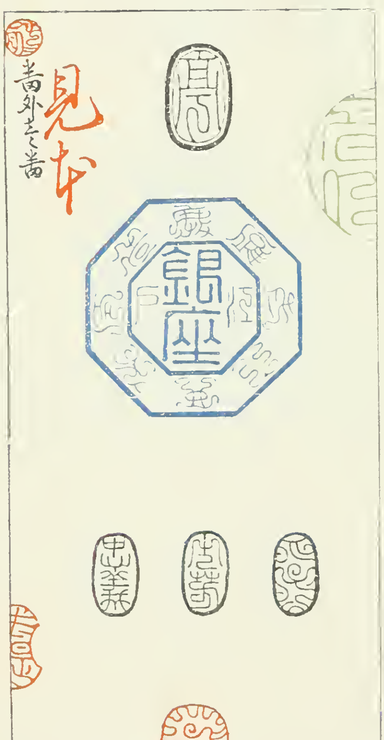
○

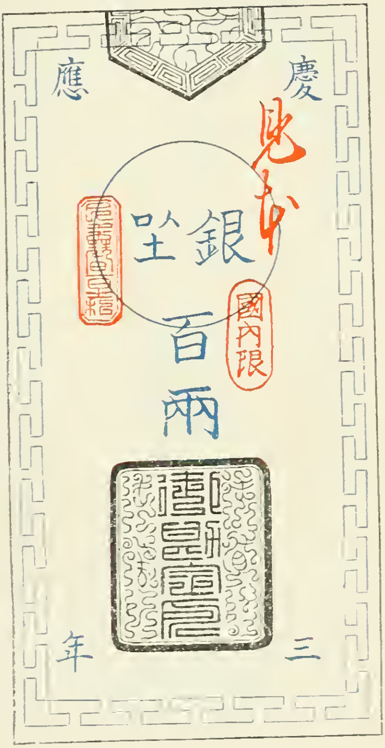
下紙、

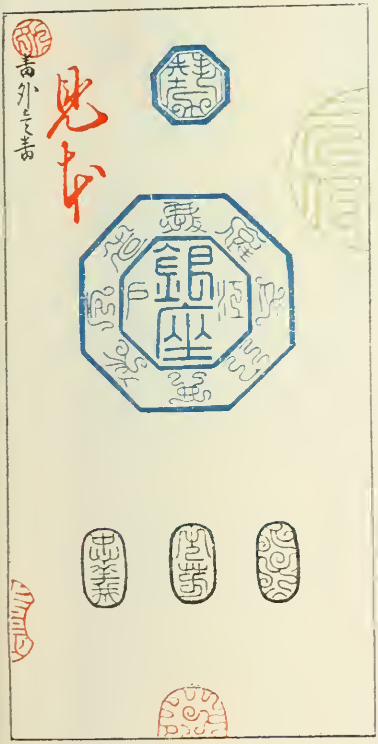
周防守殿卯十一月十九日被下　三藏殿。

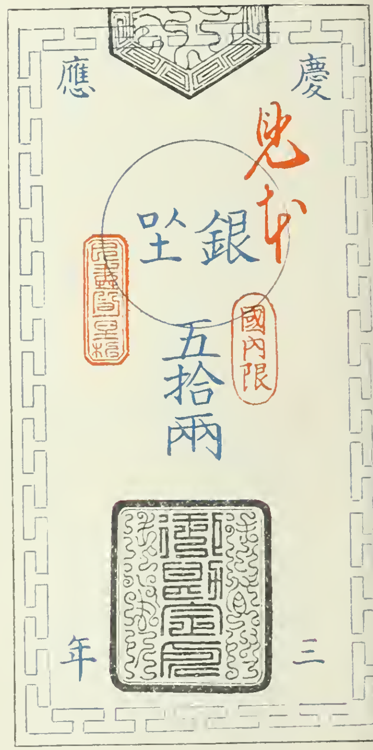
○紙幣見本

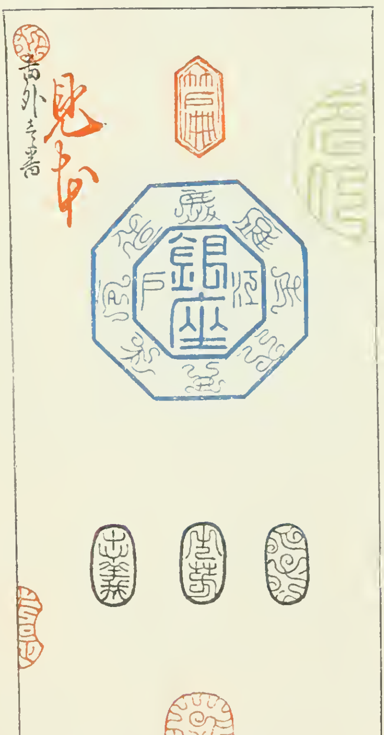

慶應
銀坐
貳百兩
國内限
三年

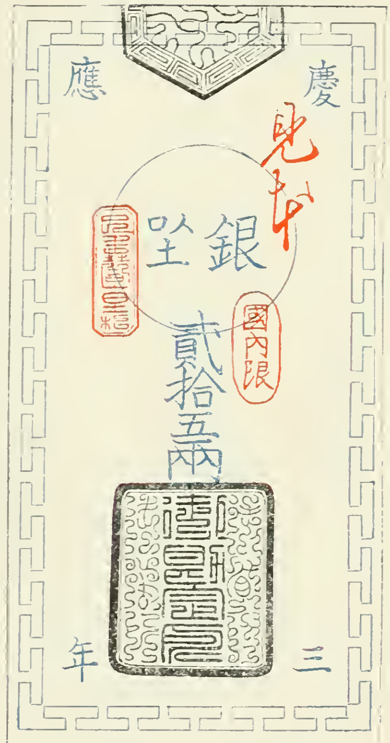


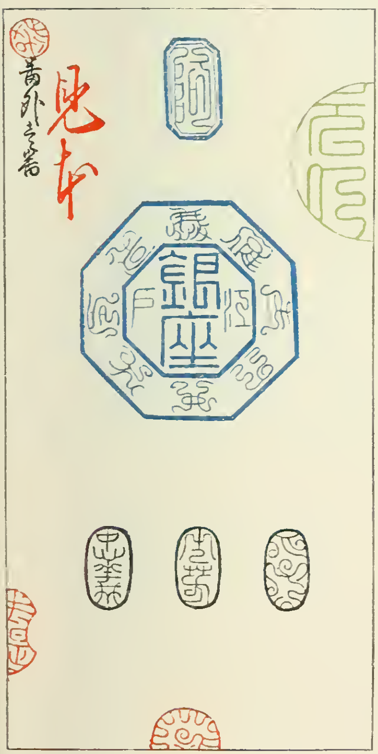

慶
應
銀坐
百兩
國内限
三
年




慶
應
銀坐
國内限
五拾兩
三
年




慶應
三年
銀坐
貳拾五兩
國內限



○是ヨリ先、英吉利國軍艦水夫ヲ長崎ニ横殺スル者アリ、（本年七月ニ在リ、）英國公使、幕府ト往復判論ス、是日幕府、書ヲ公使ニ致シ、平山敬忠（圖書頭○外國總奉行、）ヲ遣シテ、其事ヲ處分セシムルヲ告ク。

大貌利太泥亞特派公使全權
ミニストル兼コンシユルゼネラール
エキセルレンシースルハルリー、エス、パークスケシビヘ

以書翰申進候、今日三時半、其公使館へ可罷越處、不快ニテ何分難罷出、就テハ尊來モ請度候得トモ、左件ノ次第ニテ、態々尊來被成下候モ、閣下御多事ノ中御氣ノ毒ニ存候間、下條ノ趣御了解ノ上、御回答被下度候、一體長崎表ニ於テ、貴國人殺傷セラレ候事件ハ、犯罪人召捕方、疑案ノ者取調向等、長崎表ニオイテノ取扱振、委曲ノ顚末ヲモ、實地取調候儀ニ付、土州表ニオイテ閣下ノ懇請ニヨリ、平山圖書頭態々彼地へ出張、閣下ヨリハサトウ氏ヲ名代トシテ御差遣被成、且政府ニオイテ、鄭重ノ處置ヲモツテ兵隊ヲ差遣、新規ニ奉行ヲ撰任シ、是迄ノ奉行呼戻シノ命ヲ下シ、其外彼地ニ於テモ警衞ノ兵隊ヲ取立候儀ニ有之候處、一昨日、圖書頭歸府イタシ候ニ付、サトウ氏彼地退帆後、尙又取計候件々ヲモ、圖書頭同席ニテ閣下へ御面晤、委細御相談可及存候處、同人へハ御面會被成兼候趣ヲ以テ中坐セラレ、終ニ右委曲ノ事情ヲ盡シ兼候段、遺憾ノ至リニ候、且我國高官ノ者壹人、長崎表へ差遣シ可申トノ儀、昨日御申聞有之、其意味ハ更ニ御物語無之、左候テハ、閣下ノ御意衷徹底難致、乍不本意御卽答モ不致次第ニ候間、右趣意承知イタシ度旨、再應懇請ニオヨヒ候得トモ、錄々御申聞モ無之、殆ト當惑イタシ候、右事柄了解イタシ不申候ハテハ、御決答ニオヨヒ兼候次第ニ付、サトウ氏ト、圖書頭ト委曲御引合ノ上、面晤候ハヽ、情實徹底イタシ可申、若シ互ニ意衷ヲ悉シ、事實ヲ辨明セサルニオイテハ、雙方ノ意齟齬イタシ、遂ニ閣下ノ深意ニ適セサル事モアランカト、憂慮ノ餘リ申進候、拜具謹言。

慶應三卯年十月十八日　小笠原壹岐守

外務省記

○英公使答書

貴翰致披讀候、然ハ、本日午後第二時半、拙者へ面接ノ爲メ當公使館へ御出張可有之筈之處、御病氣ニ付、其義被成兼候趣承知セリ、然ル處、來示中、事實不當ノ廉數多御座候ヘハ、其非ヲ解明セサルヲ不得、其故ハ來書ニテハ、昨日、拙者義、平山圖書頭御面會致申間敷旨ヲ申、退出セシニ付、長崎表ニ於テ、右同人取計委曲ヲ盡シ候事難成趣ニ候得トモ、其實ハ、圖書頭ハ執政ヨリ下役ノ仁ニ付、外國事務總裁ヨリ承可申事柄ヲ、右同人ヨリ聞兼候趣申立候處、强テ圖書頭出席爲致、是非トモ面會セシメント被成シニ付、拙者一先退席セシ處、又候、圖書頭ハ最早退席セシ趣、閣下ヨリ承リ候ニ付、拙者義、猶又出席致候義ニ御座候、其上、閣下モ退席被成、丸一ト時ノ間、圖書頭ト談話被成候内、拙者義ハ相扣ヘ申候、既ニシテ閣下再應出座被成候、且又々一ト時ノ間、拙者ト談話ニ被及候義ニ候ヘハ、閣下モ圖書頭ヨリ御傳聞被成候事ノ委曲ヲ、拙者へ御申聞ノ暇ナキニシモ非スト存候、然ルニ、閣下ニハ、只々圖書頭義、長崎諸役人所業滿足不致候ニ付、同所ヲ退去シ、上京之上、大君へ其義ヲ言上被及候段、御申聞有之ノミニ候、且其節、貴國高官之者、長崎へ御差立有之度旨、拙者申立候處、來書ニハ、右高官差立候趣意柄、拙者ヨリ申立無之トノ趣、是又閣下心得違ト存候、其故ハ、昨日拙者再三申立候ハ、右ハ重大之事件ニ付、十分ナル盡力ヲ以テ所置ヲ施ス爲ニハ、長崎奉行位卑キノミナラス、加之、權威モ不足、且殺害有リシコト、最早三ケ月相經候ヘトモ、未タ罪人ノ探索ヲ遂ケ、相當ノ處置無之ヲ見レハ、同所長官ハ因循權ナキヲ知ルヘケレハ、高官ノ者被差立度趣、且貴國内政ノ義ニ付、重大ナル事件ヲ處置センカ爲メ、高官ノモノヲ毎度諸方へ差立候義有之候ヘハ、矢張外國急迫ノ事件ニ於テモ、右同樣切意ヲ以取行ヘキ筈、又長崎兩奉行、竝平山圖書頭等閑ニ付、我政府ヨリ貴國政府へ嚴敷掛合可致ノ道理有之候間、拙者ヨリ無理ニ非サル事ヲ申立候時ハ、貴政府ニ於テ、實意ヲ以テ日本ノ國辱トナルヘキ惡業ヲ行シ者共ヲ探索シ、罰ヲ與ン決心ノ證トシテ、早々此義御承諾可有之筈ト存候旨等、其節申立候、然ルニ、此一條ニ付、猶今一度拙者ニ面會被成度旨、且圖書頭義、サトウヘ引合被致度趣ニ候得ハ、則其意ニ應シ、明日第十一時、貴宅へ罷出可申候得ハ、若圖書頭、實ニサトウヘ面會被成度候半ハ、其前迄ニ御面會可被成候、且明日ハ彌以談判ノ上、決著致度候間、高官ノ者、長崎

へ不可差立義ニ於テハ、此後閣下へ此一條ニ付、面談致間敷候、拜具謹言。

ハルリー、エス、パークス

○

十月十八日

大貌利太泥亞特派公使全權
ミニストル兼コンシュルゼネラール
エキセルレンシー
スルハルリー、エス、パークスケシビへ

小笠原壹岐守敬閣下　外務省記

以書翰申進候、於長崎表、貴國人殺傷セラレ候儀ニ付、此程御越有之砌云々、御申聞ノ趣モ有之候ヘトモ、其節貴意ノ程了解難致、彼我ノ意中洞徹致シ不申候テハ、何分貴意ニ應シカタク候間、當十月十八日附ヲ以、委細申進候處、昨日態々御越有之、縷々御物語ニテ、具ニ氷解イタシ、御足勞ヲ重ネ候段、所謝候、就テハ右事件、團圓ノ運ヒニ至ラセ度、彌平山圖書頭ヲシテ支度出來次第、長崎表ニ差遣シ候事ニ決定致シ候間、此段御報告及度如斯候、拜具謹言。

慶應三卯年十月二十日　小笠原壹岐守

外務省記

○英公使再答書

昨日附ノ貴翰致披讀候、然ハ、我國軍艦イケラス水夫兩人殺害セラレ候一條ニ付、犯罪人召捕仕置爲果取度、平山圖書頭早速長崎へ差遣、且右事件ノ運ヒニ爲至度御心組有之候趣、大悦至極ニ存候、右ハ、大英國政府へ對シ、貴國政府ニ於テ公平ナル處置緊要ナル而已ナラス、貴國臣民ヲシテ政府ヲ尊シムル一端ト存候、乍然、平山圖書頭出立ノ日限、且十分事ヲ果取迄、長崎ニ滯在致シ、竝別ニ一人ノ高官ヲ附添、事宜次第、他所へ爲赴候旨書載無御座候間、猶一封ヲ以テ、右三ケ條被申越

候樣致度、將又貴國十八日附來書ニテハ、從來ノ奉行呼返趣ノ處、右ハ能勢大隅守、德永石見守兩人ヲ被呼返候哉承度候、其故ハ長崎街說ハ、兩人役向因循ノ罰ニハ無之、只々平常役替而已ニテ、被呼返事相聞ヱ候ナリ、此段伺申度如此御座候、拜具謹言。

十月二十一日

小笠原壹岐守敎　外務省記

ハルリー、ヱス、パークス

○本書、外務省記二十三日ニ作ル、然ルニ、書中昨日附ノ文アリ、且二十九日幕僚答書ニ、第十一月十六日附ト云フ、西曆十一月十六日ハ、卽チ我十月二十一日ナリ、故ニ之ヲ改ム。

○

大貌利太泥亞特派公使全權
ミニストル兼コンシュルゼネラール
ヱキセルレンシー
スルハルリー、エス、パークスケシビヘ

貴國第十一月十六日附貴簡落手、長崎表ニ於テ貴國水夫ヲ殺害イタシ候モノ召捕方ニ付、平山圖書頭、同表ヘ出立之比合、御承知被成度旨御申越承知イタシ候、右ハ閣下ニモ御承知之通リ、目今京師ヨリ申越候義モ有之候折柄、翔鶴丸歸船次第、右ヘ爲乘組、急速出帆爲致、京師御差圖相伺、長崎表ヘ罷越候樣相命申候、尤右事件落著迄ハ、在崎爲致、將附添之高士官ハ別紙之モノニ有之、末條長崎奉行之義ハ、交代等ニハ無之、呼戻シ之命下シ置候間、歸著之上、處置イタシ候積ニ有之候、右再貴答如此候、拜具謹言。

慶應三年卯十月二十九日

小笠原壹岐守花押

外務省記

○本條、別紙高士官姓名見ル所ナシ

復古記巻一終

總括兼纂修

一等修撰　臣長松　幹

校勘

一等修撰　臣長　　熒

一等協修　臣四屋恒之

校錄

一等書記　臣澤渡廣孝

繕寫

二等繕寫生　臣小川長和

二等繕寫生　臣小島　春

復古記　卷二

慶應三丁卯十月二十一日ニ起リ二十五日ニ至ル

○十月

二十一日、十萬石以下ノ諸侯ヲ召集ス。石川成徳家記

○達書、十萬石以上ト同シ、故ニ之ヲ略ス。

○徳川慶喜、三條實美等ノ措置ヲ稟ス、前田利鬯、飛驒守○大聖寺藩主、食封十萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、及ヒ島津茂久、修理大夫○薩摩藩主、食封七十七萬八百石、時ニ松平氏ヲ稱ス、徳川徳成、元千代○尾張藩主、食封六十九萬九千五百石、伊達慶邦、陸奥守○仙臺藩主、食封六十二萬五千六百石餘、時ニ松平氏ヲ稱ス、徳川茂承。中納言○紀伊藩主、食封五十五萬五千石、細川應順、越中守○肥後藩主、食封五十四萬石、黒田齊溥、美濃守○筑前藩主、食封五十二萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、淺野茂長、安藝守○安藝藩主、食封四十二萬六千石、時ニ松平氏ヲ稱ス、鍋島茂實、肥前守○肥前藩主、食封三十五萬七千石、徳川慶篤、中納言○水戸藩主、食封三十五萬石、池田慶徳、因幡守○因幡藩主、食封三十二萬五千石、時ニ松平氏ヲ稱ス、藤堂高猷、和泉守○津藩主、食封三十二萬三千九百五十石、池田茂政、備前守○備前藩主、食封三十一萬五千二百石、時ニ松平氏ヲ稱ス、蜂須賀齊裕、阿波守○阿波藩主、食封二十五萬七千九百石、時ニ松平氏ヲ稱ス、山内豐範、土佐守○土佐藩主、食封二十四萬二千石、有馬慶頼、中務大輔○久留米藩主、食封二十一萬石、南部利剛、美濃守○盛岡藩主、食封二十萬石、松平直克、大和守○前橋藩主、食封十七萬石、酒井忠篤、左衞門尉○莊内藩主、食封十七萬石、酒井忠惇、雅樂頭○姫路藩主、食封十五萬石、榊原政敬、式部大輔○高田藩主、食封十五萬石、久松定昭、小笠原忠忱、豐千代丸○小倉藩主、食封十五萬石、酒井忠氏、若狹守○小濱藩主、食封十萬三千五百五十八石、前田利同、稠松○富山藩主、食封十萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、宗義達、對馬守○對馬藩主、食封十萬石、松平忠誠、下總守○忍藩主、食封十萬石、眞田幸民、信濃守○松代藩主、食封十萬石、奥平昌服、大膳大夫○中津藩主、食封十萬石、戸田氏共、釆女正○大垣藩主、食封十萬石、松平慶憲ノ家臣モ亦各

答議ヲ上ル。

實美以下、若上坂仕候ハヽ、召之諸侯上京御決定迄之處滯坂可罷在、太宰府出船前ニ候ハヽ、追テ御沙汰御坐候迄同所ニ可罷在旨、五藩ヘ被　仰渡可然哉奉存候、此段奉申上候。

十月二十一日　　慶喜

徳川慶喜實記
本多正憲家記

○正憲家記二十二日載スル所ノ、自然上坂云々ノ批紙ヲ此文後ニ付シ、幕僚ヨリ達示トアリ、本條ノ文意ヲ考ルニ、慶喜モ亦諸藩ト共ニ下問アリテ、答議ヲ上リ、二十二日ニ至リ、批紙ヲ付下セシナルヘシ、慶喜ニ下問ノ事、別ニ據ル所ナシ、姑ク錄シテ參考ニ備フ。

○

一近々上坂之聞有之候實美以下脫走人之事、
大事件ハ盡衆議御主意ヲ奉伺之候ノ間、脫走人上坂之儀ハ、召之諸侯上京之上、衆議御聞糺之上、御所置御座候而モ宜哉ニ奉存候、夫迄之處ハ、是迄之通御留置候而モ不苦哉ト奉存候、

一外國之事、
召之諸侯上京、衆議御聞糺之上御決評可有之、夫迄ハ在來之通、德川ヘ御委任ニ相成、所置之儀者總而朝廷伺之上、取扱ニ相成候而モ不苦儀ト奉存候、

右兩條之儀、是迄相攜不申儀、別而不肖之私ニ御座候得ハ、情實會得仕兼候得共、不取敢見込之處申上候、以上。

十月二十一日　　松平飛驒守

大樹ヨリ伺之八ケ條、

右、如何體之御取扱ニ相成候共、異存無御座候。

十月二十一日　　松平飛驒守
前田利鬯家記

○

今般、幕府政權ヲ　朝廷ヘ奉還仕候次第、誠以復古ノ御大業、數百年來ノ英斷ニ御坐候而、　御國體御變革、宇宙間ニ　御獨立可被遊御基本ニ候ヘハ、　微賤ノ私共迄モ、深ク天下ノ爲メニ奉恐悅候、就而ハ衆庶議事ノ意ヲ以、諸藩士共被召出、廉々　御下問被　仰出候儀ニ付、謹而奉言上候、

一德川家取扱掛之廉々、當時伺出ノ通被　仰付置、召ノ諸侯會議ノ上、御確定被遊可然哉ニ奉存候、

一脫走公卿方、近々上坂ノ聞エ有之趣ニ御坐候ヘトモ、推而右等ノ次第ニ相成候儀ハ有之間敷、召ノ諸侯會議初發ニ　御裁斷被　仰出、長防御處置同時ニ相成可然哉ニ奉存候、

一外國取扱ノ儀ハ、暫時越方ノ通ニ被閣、召ノ諸侯會議之上、　皇國一體ヲ以テ　朝廷ノ御條約可被爲結、尤兵庫開港ノ處ハ、今般大改革ヲ以、　國體變換ノ次第談判ニ及ヒ、被差延候而可然哉ニ奉存候、

右件々、當時在京仕候三藩ノ者共同意仕候ニ付、乍恐連名ニテ申上候、尤書外猶又口舌ヲ以言上可仕候、誠恐誠惶頓首謹言。

丁卯十月二十一日

松平修理大夫内　關山糺
松平安藝守内　辻將曹
松平土佐守内　後藤象二郎
福岡藤次

神山左多衞

島津忠義家記
水萍貽孫録

○

謹而奉申上候、昨日被　仰渡候脫走人、竝外國之事件ハ、素ヨリ關係不仕儀ニ付、可否難申上候得共、脫走人到著ニモ相成候ハヽ、何方ニテモ著候處ヘ御差留、先言上之趣旨　御聞上被爲在、且外國御應接之儀者、御差延難被遊廉出來候分、其品御達之上、諸藩見込ヲモ御尋被爲在候方可然奉存候、誠恐誠惶謹言。

十月二十一日

尾州在京役
佐々鈇三郎

謹而奉言上候、昨日被　仰出候幕府ヨリ伺之件々者、過日御達之通、都而御召之諸侯上京迄御評定御差延、其内片時モ御猶豫難被遊廉ハヽ、先是迄之通手續ヲ以、爲御取計御座候方可然奉存候。

十月二十一日

尾州在京役
佐々鈇三郎

德川義宜家記
黑川秀波筆記

○

召之諸侯上京日決定迄之處、指向候事件ニ付、私共見込御下問被成下候趣奉畏、愚案之廉々左ニ奉申上候、

一外國事件之儀ハ、誠ニ重大之御所置ニ御座候得共、先達テ大樹公具ニ建言、且諸藩見込之趣モ被爲聞、衆議被相盡、已ニ開港御指許ニモ相成候上ハ、應接等都テ瑣細之事業ハ、當分大樹公ヘ御委任相成可然、乍併難被相任廉モ御座候ハヽ、兼テ外國之情實ニ通曉仕候公卿諸藩モ可有之、其向ヘ取扱被仰出可然奉存候、方今外患切迫之形勢ハ勿論之儀ニ候得共、尤所可先憂者、腹心之病ト奉恐察候、何分人心輯睦、萬國ニ御威信被爲立候御所置被爲在度奉存候、

一實美以下御所置之儀ハ、被處御寬典被召登候上ハ、別ニ異議モ有之間敷候得共、諸藩上京御決議迄之處、先暫之間入京被相扣置可然奉存候、

一大樹公伺之件々、諸藩上京迄之處、是迄之通御委任被遊可然、乍併御變換被成置候事件モ御座候ハ丶、尚御衆議之上御決定可然、全體錢穀之出納、刑獄之聽斷等ハ、局ニ依而古典舊習モ有之、有司ニ無之候得ハ、脉絡條理モ不相心得儀ニ而、空敷可奉論列樣無御座奉存候事、

右之條々御尋ニ付奉申上候、方今不容易折柄、數百年來ニシテ王政御宏復ニモ被爲成候上ハ、御中興之御初政ニテ、萬民刮目、御維新ヲ望居候機會ニ御座候間、萬々一御失體ナト被爲在候テハ、誠ニ恐入候御事ニ御座候間、幾重ニモ衆議被相盡、公平中正之御施行被爲在候樣奉希望候、恐懼頓首謹言。

仙臺中將內

十月二十一日　　松崎仲太夫

大槻文彥筆記

○

今般御改革ニ付、召之諸侯上京難被爲待件々、御下尋之趣、盛大之重事、御施爲之當否ニ寄リ、天下治亂之機、深御憂慮之段奉恐察、不憚言上仕候、抑王政ハ王政之規模アリ、武政ハ武政之綱紀アリ、皆天下自然之勢ニヨリ、沿革且大利之所在者必大害之所存、古今沿革之際程利害危難之機會無之候、其所以者新制未立、舊綱已ニ弛ミ、人心洶々、施爲紛紜之際ニ乘シ、奸雄激徒、一己之私略ヲ逞シ、天下之大亂不可收拾ニ至リ候事、古今之常證、是大害之所存、皆欲速之私心ヨリ出來候間、先其大害ヲ禦キ、大體ヲ存シ、然後、改革之大利可相生候、大害ヲ禦キ候新制未定候間ハ、舊綱ヲ不弛候外ニ道者無之、抑今日之御改革者、大樹公至誠至忠ヲ以、二百五十年之積權ヲ一朝ニ奉歸候美德、天下ノ賢明、無此上盛德ニ候間、斯大樹ヘ王政之規模組立總督ヲ被仰任、古今之沿革、時勢之變遷、萬國ノ形勢ヲ斟酌シ、人情時勢至當ノ大規模ヲ被爲立、萬國ニ卓立シ、

萬世ニ貫徹相成候御盛業被爲立度、右大規模相立候迄者、朝廷清肅之體ヲ不被爲失、從來之舊綱不相弛候樣、目前指掛候事件等ニ者少モ無御拘、一切幕府ニ御任被置候事、御當然之義ト奉存候間、外國之事件、實美以下之事者勿論、御別紙件々、其他一切幕府ヘ御任可被成、別段施爲之儀者御答不奉申上候、只々盛大之御趣意御貫徹御座候樣奉至願候、以上。

十月二十一日　　紀州

三浦休太郎

大槻文彦筆記
晩翠樓叢書

○

今般御下問ノ件々、重大ノ儀ニテ、差寄利害得失ノ見込付兼候得共、近々上坂之間有之候五卿方御取扱ノ儀ハ、既ニ洛外幽居迄ノ儀ハ、　朝廷御聞濟御許容被成置候儀ト奉存候得ハ、今更別途ニ言上仕候程之儀無御坐候、尤幽居後ノ御處置筋ハ、召ノ諸侯上京之上、御衆議モ可有之、且又外國事件、及大樹公ヨリ伺ノ廉々トモ差向候儀ハ、先幕府ヘ被任置、御差障不被爲在儀ハ、　召ノ諸侯參著迄ハ、從來之通ニテ被閣、其段兩御役ヨリ御觸出ニ相成候ハ、去十六日　御沙汰ノ大事件云々ノ御旨趣ニモ相叶可申歟ト奉存候、爲差定見モ無御坐、此段御請迄申上候、誠恐誠惶謹言。

十月二十一日　　細川越中守家老

三宅藤左衛門

第一條

此儀、　朝廷ニハ御手馴ニモ無之、御手ニモ被爲及間敷、萬一順番等狂候而ハ如何ニ付、幕府ニテ御取調ニ相成候ヲ、御兩役ニテ御達ニ相成候方可然見込申候、

第二條

朝廷ニハ、未タ御代官等夫々之御役方不被設候事ニ付、是迄通ノ御取扱ニテ無之候テハ御用辨兼可申候、

第三條
此儀モ前條同樣、夫々之御役無之、御手ニ難被及可有御坐哉ニ付、矢張是迄之御手續ニテ無之候テハ辨兼可申候間、其段諸侯方ヘハ、御兩役ヨリ被成御達方ト奉存候、
第四條
此儀是迄ノ振リニ違ヒ、領主領主ノ心々ニ相成候ハヽ、差寄、此節　召ニ被應候諸侯方ノ迷惑ニモ相成可申候間、右同斷、
第五條
朝廷ニ其御役被成御設候迄ハ、是迄之通ニテ無之候テハ、亂妨ノ基タルヘク候間、伺之通タルヘク奉存候、
第六條
御懲戒ハ暫モ難被廢候處、　朝廷往古ノ律ハ、方今ノ時宜ニ協不申儀モ可有之候間、追テ御取究迄ハ、仕來ノ通タルヘクト奉存候、
第七條
本文ノ役々、如何樣ノ勤向歟、委ク不奉承知候間、如何樣共見込付兼申候、
第八條
金札ハ輕便之物ニ有之候得共、現金ニテ融通不致譯ハ無之、自然ハ幕府ノ疲弊ヨリ起候儀ニハ無之哉、然ルニ政權奉還之上モ、其儘融通被仰付候ハ、列侯方各願立ニ相成候ハ必定ニテ、是又不被差許候テハ難相成、往往外夷ヘ被對候テハ、別テ混雜ヲ生シ可申歟、依之、追テハ當時ノ札ヲ　朝廷ノ御札ニモ可被成候得共、先此儘ニ被閣、列侯方ノ御願ハ堅被禁候方歟、
此一條ハ掛念不少奉存候間、篤ト御衆評ヲ奉仰候。細川護久家記

○
微臣等、辱ク御下問ヲ蒙リ恐懼之至ニ奉存候、然ル處、重大之事件、固ヨリ微臣等之敢テ跂テ及フ所ニハ無御座候得共、當

御時勢難忽事件御下問ニ付、卑陋之管見奉申上候、今般、大樹公自ラ御菲德ヲ御責被遊、政權ヲ朝廷ヘ御奉還被遊候事、固ヨリ一君萬民、全國一致、皇國之太平ヲ御期望被遊候御英斷ヨリ出候事ニテ、微臣等不堪感激奉存候、各藩諸侯右御盛意拜承仕候テ、不日ニ上京仕、協力同心、共ニ王朝ヲ保護仕、皇國昇平之基ヲ公議仕候儀、的然之事奉存候、乍然、今日、御下問五卿上坂、外國之事件、是皇國治亂之所關、當今之急務、一日モ難忽儀ニ奉存候、然ルヲ其事之顚末ヲ熟知セス、日々會議仕候共、衆言紛紜、勞シテ功無キ而已ナラス、萬一處置當ヲ失ヒ候ハヽ、災害目前ニ生シ、皇國ノ御爲ニ相成申間敷愚考仕候、就而ハ重大之事件ハ不及申、瑣小之事ニ至迄、諸侯上京迄ハ幕府ヘ御委任被遊候方、萬全之儀ト奉存候、右御下問ニ付、卑陋之管見奉申上候、誠恐頓首。

筑前宰相内
桐山作兵衛
井上六之丞

十月二十一日

黑田長知家記

○

一實美以下云々、

右者、當春五藩申立御聞濟之通、歸洛御取扱ニ而可有御座、尤御所置之儀者、長防ニ相準候事ト奉存候、

一外國之事、

右者大事件之儀ニ付、卒爾ニ見込難申上、何レ御召之諸藩方御著京、公議衆議ヲ被盡、御決定迄者、有形ノ通、幕ニ而御取扱之儀可然歟、尤御改變ニ付而者、條約調印之儀ヲ申立候哉モ難計候ニ付、　朝廷之御事盤御決定被成置度奉存候、

一幕府ヨリ御伺之件々、

御衆議御決定迄ハ、矢張幕府ニテ是迄之通、左無之候テハ、新規之御事柄、御役々御揃不相成候テハ、御差支筋可有之哉ニ

奉存候、

右之通、御尋ニ付、愚存之次第奉申上候、以上。

十月二十一日

松平肥前守内

百武作左衛門

鍋島直大家記
晩翠樓叢書

○

今般、　王政御復古被遊候ニ付、天下之公論廣ク被爲　聞召度、諸侯被召之處、差向御不都合之事件モ有之候ニ付、當時在京之諸侯並各藩士ヘ御下問被遊候段、誠以御至公之御次第ト奉存候得共、元來數百年來、廢弛之乾綱御再攬被遊候非常之御大業ニ被爲在候ハヽ、一時物情ニ觸レ、諸事不都合ノ事件モ勿論可有之筈ニ候ヘハ、眼前之節目ニ御泥ミ無之、皇國之御基本御立被遊候儀、尤御急務ト奉存候、參集會議被仰付、丁寧反覆熟議仕候而、自然天下之公論ニ歸著仕候道理ニハ御坐候得共、宇內之形勢、天下之事柄、沿革多端之折柄、隨而人々見込之相違モ可有之候間、召之諸侯上京迄之間ハ、當地三ケ月詰大名割等八ケ條之面、都而是迄之仕來被爲居置度、殊ニ外國交際之儀者、最重大之事件ニ御座候處、全體之御基本不相立內、萬一輕易之御所置、御取返シモ難被遊筋出來候而者、天下一新御發政之御砌、乍恐朝威ニモ御拘リ、不容易御次第ニ御座候間、差向御取扱筋者、矢張仕來之通被爲任、別而御厚重ニ御商議被爲在度、左モ無之、細目トハ乍申、御決定被遊候樣ニ而ハ、折角天下之公議ヲ被爲盡候光明正大之御盛業ニモ相戾リ申間敷哉、就而者道路之遠近御參考被爲在、諸侯著京之期限嚴重ニ被仰付、一齊參內、朝議之上、皇國之大御基本御決定被爲在候後、諸事御施行被遊候樣奉存候、尤脫走五卿上坂之儀ハ、差迫リ候次第ニ付、兼而洛外謹愼住居可被仰付トノ御決議モ被爲在候ハヽ、其通御取計被遊、尙諸侯上京之上、是亦公議ヲ被爲盡候樣奉存候、此段御垂問ニ付、不顧恐愚意建言仕候。

水戸中納言家來

十月二十一日　大場主膳正
晩翠樓叢書

○

一五卿方之事、

御歸京迄ノ御形跡ニ寄、至當ノ御所置可被爲在御儀ト奉存候、

一外夷之事、

外夷ヨリ差懸リ申立候箇條、大事件ハ衆議ヲ被爲盡、都而御取扱ノ處ハ、　召ノ諸侯上京迄ハ、先是迄ノ通幕府ヘ御委任被爲在可然ト奉存候、

一御別紙八ケ條ノ事、

召ノ諸侯、上京ノ上御決定ニモ可相成ニ付、朝政御基本被爲立候迄ハ、先是迄ノ通、幕府ヘ御委任可然御儀ト奉存候、

右之外存込候儀無御座候、此段申上候。

十月二十一日

松平因幡守内
眞野代次郎
河毛文藏
池田輝知家記
晩翠樓叢書

○

蒙御垂問恐惶之至奉存候、不容易御用筋ニ候故、不顧恐直樣奉申上候、抑政權武家ヘ御委任之事ハ、不得止之勢ニヨリ相歸シ候事ニ而、幕府力ヲ盡シ候而、海内治安二百五十年餘、今般、大樹公虛心政ヲ　朝廷ヘ奉歸シ候儀、御願之通海内人心之向背御定權モ可被爲在候得共、卒然如願被仰付候テハ、　輦轂騷擾難計、　皇國之亂階此ニ基可申ト奉存候、今日蒙　御垂

問候脫走之五卿上坂之儀、自然兵勢ヲ張リ、　朝廷ヲ脅シ、迫而入京之形勢有之候ハヽ、其罪ヲ重ネ候次第ニ付、速ニ御所置可然御儀ト奉存候、外國之事件ハ、今日ニ至候次第之處、　御廟議之模樣ニヨリ候而者、信ヲ外ニ失ヒ、內禍心ヲ包藏候者不生共難申、杞憂之至ニ奉存候、唯是迄之通、幕府御委任被爲在候樣仕度奉存候、猶其餘細事御箇條者申上候迄モ無御座、諸侯上京之上、御公論モ可被爲在候得共、於微臣ハ、是迄御委任之廉々、誠ニ御變革不可然奉存候事。

藤堂和泉守內
深井半左衛門
藤井鼎助

十月二十一日

藤堂高潔家記
晩翠樓叢書

○大槻文彥筆記、高潔家臣ノ答議ヲ載ス、其文異同アリ、併錄シテ參考ニ備フ、

微臣共蒙御下問恐懼之至ニ奉存候、不容易御用筋ニ候故、不顧恐直樣奉申上候、抑政權之歸不歸ハ、古來ヨリ自然之勢ニヨリ相歸候事ニ而、幕府政刑ヲ用候事二百五十年來、今般、大樹公、虛心政ヲ朝廷ヘ奉歸候儀相希候得共、是又自然之勢ニ無之而ハ、假令如願被仰付候共、京師忽紛擾ヲ釀候儀、皇國之治亂此ニ基キ可申ト奉存候、今日蒙御垂問候箇條、脫走之五卿上坂之儀、自然兵勢ヲ張リ、朝廷ヲ脅シ、迫而入京之形勢ニ有之候ハヽ、其罪ヲ重ネ候次第ニ付、速ニ其罪ヲ鳴ラシ、御追討被仰付可然ト奉存候、若穩ニシテ上坂致候得ハ、幕府ヘ御渡、先、坂地ヘ被廻置候樣仕度、外國之事件ハ、如舊幕府ヘ御委任被爲在候樣仕度、覬覦之藩、朝廷ヲシテ約ヲ結、始メ幕府之交際ヲ破リ、己レ交際之權ヲ恣ニ致サント計候意ニ出候間、是又、如舊幕府ヘ御委任被爲在候樣仕度、各國公使入京之儀願出候共、於幕府モ爲延候儀、不容易ト奉存候得共、自然御模樣ニヨリ、御沙汰次第、當今之形勢ニ候故、私共ヘ被仰付候得ハ、朝廷、幕府之爲ニ期限ヲ爲延可申奉存候、別段御渡ニ相成候數ヶ條之儀ハ、前同斷幕府ヘ御委任被爲在候樣仕度、揔而於朝廷、政ヲ被爲執候儀、乍恐大害之基ニ相成可申候故、斷然幕府ヘ御委任、覬覦之者之志ヲ斷候事緊要ト奉存候、御垂問ニ付、概略奉申上候、誠惶誠惶頓首敬白。

藤堂和泉守内
深井半左衛門

○

一脱走五卿ハ御歸京相成候上ハ、最早御殿御住居相成候ハヽ、萬事御都合可然御儀ト奉存上候事、

一外國之事ハ、此度大御變革ニ付而ハ、御國是御一定相成候迄ハ、第一外國之事一切御謝絕相成置不申候而ハ不被爲叶、一年、二年乃至三五年之間、一途ニ內地ヲ御整被遊、其上ニ而外國之事件改而御受掛ニ相成度奉存候、左ニ無御座、カヽル大變革未御落成モ無之內、右之事件差湊候而ハ、乍恐倉皇之御所置ニ相成、終天不可回之御國害ニ立至リ候ハ、瞭然之儀ト奉存上候、

一大樹公ヨリ御伺之儀ハ、衆議御決定迄ハ、先是迄之通可然、金札之儀ハ、外國御取扱未御決定無御座儀ニ候得ハ、如何可有御座候哉ニ奉存上候、

右ハ御下問ニ付、乍恐不取敢愚存之趣奉申上候。

十月二十一日

備前
牧野權六郎

大槻文彥筆記

○

昨日御下問被仰付件々委曲奉畏候、退而熟考仕候處、右者微臣之輩、敢而可奉申上候御事柄トモ不奉存候得共、御垂問ニ付、不顧恐惶奉申上候、抑脱走之實美以下、上坂之儀モ御座候得共、先滯坂被仰付置、御召之諸侯上著之上、御決議御所置被仰付候テ如何可被爲在哉奉存候、

一外國之儀者、尤不容易御大事件ニ候得ハ、殊更厚再三被爲盡衆議衆之所希望、人心和服之御所置無之而者、永世不朽之御

策ニ難被爲到奉存候、御召之諸侯上著之上、御斷決被仰付可然哉ト奉存候、其他　大樹公御伺之件々、即今於　朝廷御差支之儀ニモ可被爲在哉、是又諸侯上著之上、本根相立候樣御決議被仰付度、夫迄之處、是迄之通幕府へ御取扱被仰付候方可然奉存候、以上。

十月二十一日

松平阿波守內留守居
合田左源次
渡瀨浪江
寺西金右衞門

蜂須賀茂韶家記
晚翠樓叢書

○

一實美以下云々之事、

右者、近々上坂ニモ相成候ハヽ、先同所へ暫滯留、其上御決定之御都合モ可有御座哉ト奉存候、

一外國之事、

右者、大事件之儀ニ付、是迄諸侯追々建白モ有之候得者、此節　御召之諸侯上京之上御決定可相成、夫迄之處ハ、幕府ニテ御取扱可然哉ト奉存候、

一幕府ヨリ御伺ノ件々、

衆議ノ上御決定可有之候得共、夫迄ノ處ハ、矢張幕府ニテ御取扱可然哉ト奉存候、

右ノ件々御下問ニ付、不憚恐見込ノ趣奉申上候。

十月

有馬中務大輔內
柘植傳八

○

昨日、御達之趣奉畏候、然ル處、當今御變革、實ニ不容易儀ニ付、爰許限美濃守存入推量申兼候、且別段私共見込等無之候得共、御下問之件々、何レモ衆議御決定迄之處、都而大樹公ヘ被成御任候儀至當ニ奉存候、依之、御改政ノ折柄、人心安兼候儀モ難計奉存候間、一入厚御依頼被成置候樣奉存候、御尋ニ付不顧恐此段御答申上候、以上。

十月二十一日

南部美濃守内
西村久次郎
津田又六

南部利恭家記
晩翠樓叢書

○

御返答書、

昨日、御尋之儀ニ付、左ニ奉申上候、

一御書付之面八ヶ條之儀ハ、此度、　御召之諸侯御上京、御衆議御盡ニ相成候迄之處ハ、是迄之形ニ、武邊ヘ御任セ相成候テハ如何可有御座哉、

一兼テ西國御下リ之堂上於方、近々御上坂之御聞御座候趣、其御始末具ニ不相辨候得共、道路之風説ニテ承リ候場ヲ以申上候、西國御下リノ儀者、　御朝憲ニ被爲違候御事業ニ御座候得共、全赤心激發之趣ニ承候得者、御當節柄之儀、　寛大之御所置、御入洛被　仰出候而者如何可有御座哉、

一外國御取扱之儀者、　御召之諸侯御上京、衆議御決定迄ハ、是迄之形被差置、武邊御取扱向御托ニ相成、雖小議、外國ヨリ新規異事等申立候儀者、　官武被爲盡御商議、御取計被爲有候テハ如何可有御座哉。

松平大和守留守居

鎌田三郎大夫

十月

松平直方家記

○

御達之趣奉畏候、實美以下脫走人之儀ハ、　御召之諸侯上京迄之處、未出帆無之候ハヽ、太宰府ヘ其儘御差置、萬一出帆有之候ハヽ、大坂表ニ御留置ニテ可然ト奉存候、

一外國之儀ハ、是迄之通、御召之諸侯上京迄之處、都テ幕府ヘ御委任可然ト奉存候、

右御尋ニ付、見込之趣奉申上候、以上。

松平下總守家來

平野俊吾

酒井雅樂頭家來

青木平藏

榊原式部大輔家來

服部瀨兵衞

酒井左衞門尉家來

大野與一右衞門

十月二十一日

御別紙之件々ハ、都テ幕府ヘ御任セ之方可然奉存候、猶主人共上京之上、見込之儀モ御座候ハヽ、可奉申上候、以上。

名前同上

十月二十一日

榊原政敬家記

○

一實美以下脫走人之事、

右御所置振之儀ハ、御召之諸侯上京之上、衆議公論ヲ以御取計可被爲在御儀ト奉存候得共、不日上坂之趣ニ相聞候間、差向上坂候ハヽ、同所ヘ被差置、追而御沙汰可被爲在旨、五藩ヘ御達置ニ相成可然奉存候事、

一外國御取扱振之事、

一幕府ヨリ被相伺候召之諸侯上京迄之處、取計向件々之事、

右、外國御取扱向者勿論、其餘之件々迚モ、是迄於幕府被取扱來候手續有之、俄ニ御扱變リ相成候而者、如何之御不都合相生候哉難計奉存候、只此度伺ニ相成候件々而已ナラス、一日萬機之御政務、或者　朝廷於テ御取扱之事件有之、或者幕府ニ而被取扱候事件モ有之候而者、人心疑惑適從スル所ヲ不知、萬事凝滯可仕、全ク御綱紀不相立儀ト奉存候、　御政柄　朝廷ヘ御引取相成候上者、賞罰黜陟、財利斷獄、牧民治兵之官員、諸役局附屬吏徒ニ至迄夫々相備リ、萬機皆　朝廷ヨリ出不申候而者不相成候處、末々俄ニ其御備モ相立申間敷、追々諸侯上京之上者、不拔之御制度モ御確定相成候得共、夫迄之處者、萬事是迄之通、幕府ヘ御委任被成置候外有御座間敷ト奉存候、此段深御思惟被爲在、　皇國之御混亂ニ不立至候樣御遠謀奉仰候事。

松平伊豫守家老

十月二十一日　　鈴木七郎右衞門

久松定謨家記
晚翠樓叢書

○

御下問之件々、私式微賤之者、見込申上候ハ誠以恐懼之至奉存候、且又從來之顚末曲折篤ト伺得不申候付、目的難相立奉存候得共、御請不申上候而者、猶以奉恐入候付、管見之大意左ニ奉申上候、

近々上坂之聞有之候實美以下脫走人之事、

右者　勅許ニ而御上候哉、左モ無御座御上坂ニ相成候哉、　御趣意柄篤ト伺得不申候付、聢ト御請難申上候得共、若　勅許無御坐、押而御上坂之義ニ御坐候得者、先大坂表ヘ御留置、　召之諸侯上京之上、　御決議被爲在候而者如何哉ト奉存候、

外國之事、

三港竝兵庫共、開港　勅許之御義ニ御坐候得者、先是迄通之御運ニ而、　召之諸侯上京之上、猶後來之御規則斷然ト御評決被遊候樣乍恐奉存上候、若又外國ヨリ申立等、其外迫候義者、　朝廷御役向ヲ奉始、是迄御掛リ之御役々ニ而、御取扱被遊候而者如何哉ト奉存候、

大樹公ヨリ被仰上、　召之諸侯上京迄之處、御取計向御伺八ケ條、右廉々御伺被　仰上候御事ニ付、　朝廷之　思召ヲ以、御沙汰被爲在可然御義哉ト奉存候、

右之件々、乍恐御請奉申上候、稽首再拜。

十月二十一日

小笠原豐千代丸家來
二木武兵衞

小笠原忠恍家記

○

昨日、以御書取被　仰渡候件々、私共限リ御請可申上事件ニ無御座候樣相心得候得共、今日中必御請可申上旨被　仰出候上ハ、無據私共限リ見込左ニ申上候、

一大樹公ヨリ御伺ニ相成候件々ハ、夫々御政務ノ御綱領ニ而、其御ケ條ニ到リ候而者、御多端御事務故、於　朝廷御取調方未御全備相成不申候ハヽ、御召之諸侯御京著迄之處、是迄之通、幕府ニ而御取扱相成候方可然奉存候、

一實美以下近々上坂之儀ハ、今日迄之御取扱振リ相辨兼候得共、先同所ニ暫滯在、御召之諸侯上京之上、御衆議御決定被爲

在候方可然ト奉存候、

一外國御取扱振之儀ハ、重大之事件ニ付、私共身分ニ而者容易難申上、是亦御召之諸侯御著京之上御決定可然、夫迄之處、幕府ニ而御取扱有之候方可然ト奉存候。

十月二十一日

酒井若狹守内

山川五左衞門

酒井忠禄家記
晩翠樓叢記

○

昨日、御尋之二條拜考仕候處、不容易事件、前後辨別難仕、何等之存寄モ無御座候、此段申上候、以上。

十月二十一日

松平稠松家來

磯野新九郎

前田利同家記

○

召之諸侯上著迄之御取計向ニ付、御下問之次第、愚意之趣乍恐左ニ奉申上候、

一從大樹家伺相成候八ヶ條之儀、別而見込之愚意無御座、何レニモ御賢慮次第之御事ト奉存候、

一實美已下歸洛之儀、兼而警衞之諸藩ヨリ申立之越、御聞濟ニ至居候哉ニ傳承仕、大體防長御所置之儀モ、寬大之御趣意柄ニ奉伺候得者、是又寬仁之御沙汰被仰付度御事哉ニ奉存候、

一外國御取扱向之儀ハ、　御邦內ト違ヒ、俄ニ御變革相成候テハ、差向御行支ノ筋モ可有之御事ニ付、諸藩上京御決議迄之所、是迄之手續ヲ以、大樹家ニ於テ取扱候樣被仰付度御事哉ニ奉存候、

右、昨二十日御達之御旨ニ依、不顧恐愚意之趣謹而奉言上候、以上。

宗對馬守內　扇　源左衛門

宗重正家記
晩翠樓叢書

十月二十一日

○

一八ヶ條

此段御差向之處、別段申上方無御坐奉存候、然處、今般、大樹公深ク古今ヲ觀察セラレ、　御國家ヘ忠誠ヲ被爲盡、御政權ヲ　朝廷ヘ奉還セラレ候御事、誠以深ク奉感激候義、何卒、此上右條理益御貫徹被爲在度御事ト奉存候、乍恐　朝廷ニテ右被爲　聞食候上ハ、彌、大樹公之忠誠ヲ御顯彰、天下後世大國主命ト共ニ其美ヲ稱シ、　皇國御永世之御守護ト相成、尙乍恐　皇室ト共ニ永久繁榮セラレ候樣、其條理モ是亦御貫通被爲遊度御義ト奉至願候、

一近々上坂之聞有之候實美以下脫走人之事、

此段、右五卿御預リ之五藩ニハ、右一條ニ付、深ク苦慮モ可有之義ニ御坐候テ、前後之事情モ熟知可仕義ト奉存候、依之、右五藩申上之趣モ可有之、乍恐、尙五藩申上之趣ヲ御採擇被爲遊度御義ト奉存候、

一外國之事、

右尙　召之諸侯上京、公論衆議之上、御決定ニ相成候得共、先指向御取扱之處　尋被下候事、

此段乍恐一時御差向之義ニ御坐候共、深ク宇內古今之形勢情實ヲ御洞察被爲在、天下萬世ヲ御達觀御通視被爲遊、　皇國御維持之御大計御一定在セラレ、然ル後、一時御差向之義ニ候共、右御一定之御大計ニ障碍ヲ生シ不申、萬世一點御患害ニ不相成候樣、深厚ニ　御熟慮被爲遊、衆議ヲ盡サセラレ候上ニテ、御施行ニ不相成候テハ、無遠慮時ハ必近憂ヲ生シ候義ト奉存候、依之、乍恐聊存付候義、謹而左ニ奉申上候、

一明大義、　御國是ヲ御定被爲在度御事、

右自然モ利害ニ依テ　御國是ヲ議セラレ候節ハ、乍恐利害百端、衆議紛々、御一定之期有之間敷歟ト奉存候、重々乍恐、大義ニ依テ　御國是ヲ議セラレ候節ハ、多言ニ不及義歟ト被奉存候、右ハ漢土周代之滕文、小國ヲ以齊楚大國之間ニ居リ、深ク恐レ候ヨリ、之ニ處スル之方ヲ孟軻ニ問候節、對テ申候ニ、是謀非吾所能及也、無已則有一焉、鑿此池也、築此城也、與民守之、效死而民弗去、則是可爲也、又問候節、對テ申候ニ、昔者大王居邠、狄人犯之、事之以皮幣不得免焉、事之以犬馬不得免焉、事之以珠玉不得免焉、乃屬其耆老、而告之曰、狄人之所欲者吾土地也、吾聞之也、君子不以所以養人者、害人、二三子何患乎、無君我將去之去邠、踰梁山邑于岐山之下居焉、邠人曰、仁人也、不可失也、從之者如歸市、或曰、世守也、非身之所能爲也、效死勿去、君請擇於斯二者ト、孟軻之書ニ相見候、孟軻之書、不可取者多端ニ御坐候得共、右立論ニ至候テハ、是ヲ天地鬼神ニ質候テ、一點無疑者ニ御坐候テ、卽チ大義ニ依テ言ヲ立候義ト奉存候、異邦小國之事、且異邦人之言說ヲ取候テ奉申上候義、深厚奉恐入候得共、乍恐、何レ之世、何レ之國ニ候共、右二者之外、決シテ他ニ道ハ無之歟ト奉存候、右樣ニ御坐候處、堂々タル　天朝、外夷之覬覦ニ依テ、狄人之所欲此土地也ト、可被爲避之義、恐多クモ　皇祖日神ニ奉誓、決シテ無之御事ニ御坐候得ハ、乍恐、上下一心、死ヲ決シテ　御國ヲ奉守護之外、決シテ他ニ道ハ無之義ト奉存上候、君父辱ヲ受候時ハ、臣子死ヲ致シ候ハ、人道之大義ニ御坐候得ハ、　君父之　御國、萬一モ辱ヲ受サセラレ候樣之義有之候節ハ、凡　皇國之御臣子ニ候者、誰カ憤激決死不仕者可有之哉、悉ク效死候義、素ヨリ當然之義ト奉存候、依之、尙重々乍恐、攘夷之御大義、嚴然ト　御英斷、　御國是御決定被爲在度御義ト奉存上候、左候處、世上ニハ、攘夷ト鎖港トヲ混同仕候論說モ有之候哉ニ傳承仕候處、攘夷ト鎖港トハ、素ヨリ別段之義カト奉存候、鎖港ハ外國人　御國地ヘ來リ候ヲ一切御禁絕被爲在、外國人ト見懸候得ハ、善惡ヲ不問、追拂ヒ膺チ懲シ候義ニ可有之候處、攘夷之義ハ、右ト相違仕、外國人之實ニ善意ヲ以來候者ハ、是ヲ信好撫懷セラレ、來テ　御國ノ御患害ト相成候者ハ、是ヲ攘斥膺懲セラレ候義ト奉存候、依之、開鎖之義ハ、攘夷中之二大件ニ御坐候テ、時勢ニ隨ヒ、利害ヲ詳ニシ、可開時ハ之ヲ開キ、可鎖時ハ之ヲ鎖候義ニテ、開鎖之二端ニ、深ク拘泥可仕義ニハ有之間敷ト奉存候、左候處、外國人之來テ　御國之御患害ヲ仕、御讎敵トモ

罷成候者ハ、卽チ　朝敵ニ御坐候テ、之ヲ賊ト呼ヒ、夷狄ト名付候ハ、當然之義ト奉存候、其來テ　御國之御憂ト罷成候者ハ、　君父之大讎ニ御坐候テ、共不可戴天之　朝敵逆賊ニ御坐候、是擯斥膺懲候義、卽チ天下遵奉仕候樣、厚ク御處分被爲在度御義ト、乍恐深ク誠ニ奉至願候、

一詳利害嚴重御守備ヲ被爲設度御事、

右ハ深ク宇内之形勢情實ヲ御觀察在セラレ、時勢之變遷ニ隨ハセラレ、　皇國四邊之御守衞、御措置、御遺算無之樣嚴重御確定在セラレ、大義ヲ明ニセラレ、大ニ士氣ヲ御振作在セラレ、攻守之道ヲ詳ニセラレ、大ニ御兵制御兵略ヲ立サセラレ、城堡、船艦、大砲、諸般之兵器、烽燧、糧穀ニ至候迄、御全備御充實在セラレ、大ニ形勢ヲ張セラレ、海内之諸藩一心一致盡力守禦相成候樣、大ニ其道ヲ立サセラレ、天下之鋭氣　御國中ニ溢レ、餘威八表ニ震候樣、御處分被爲遊度御義ト、尙乍恐誠ニ奉至願候、

一正道義、御交際之御法則、御嚴重立サセラレ度候御事、

右ハ萬國之尊卑等第並通信通商之事實、交際之法則ヲ詳ニセラレ、禮制ヲ明ニセラレ、信義ヲ厚クセラレ、萬世御患害無之樣、御制則ヲ立サセラレ度、謹テ大地之形勢ヲ觀察仕、古今之沿革ヲ傳聞仕、萬國之尊卑ヲ通聽仕候ニ、　皇國ハ大地之元首、萬國之宗國ニ御坐候テ、　天朝ニハ宇内之至尊、世界人間之極尊ニ御座シマス、御國ハ　皇國ト奉稱候義ニテ、外國唱候所之帝國王國ト比倫セラル可キ御事ニハ有御坐間敷奉存上候、左候得ハ、外邦帝國ト唱候者モ、　皇國ニ奉交候ニハ、猶王國之帝國ニ交候禮節ヲ取候義、三才當然之修理ト奉存候、乍恐、　皇國ハ　天祖日神ヨリ被爲賜候　御國ニ御坐候テ、乍恐、　皇統ニハ實ニ　日神之　御神孫ニ被爲　在、　天位ヲ無窮ニ被爲　踐候御事ニ御坐候得ハ、世界萬國、誰カ比倫可仕者可有之哉、能ク此道義ヲ昭明ニセラレ、詳ニ外國ヘ御告諭有之候ハ、彼レ必ス敬服可仕義ト奉存候、何卒厚ク此大義ヲ明ニセラレ、　御國體御嚴立在セラレ、大ニ宇内ヲ御制御被爲遊候御大基本ヲ、今日ニ立サセラレ度御事ト奉存候、然ル上ニテ、通商貿易等之儀ハ、利害得失ノ道ヲ詳明ニセラレ、萬世御弊害無之樣、御信義ヲ不被爲失候樣、深

厚衆議ヲ盡サセラレ、御規則御確定在ラセラレ度御義ト、乍恐重々奉至願候、

右之段、微賤之私共へ　御尋被爲下候御儀、誠以感激伏泣之至ニ不堪、依之、不顧身分、不避萬死、重々乍恐、謹而此段御答奉申上候、誠恐誠惶頓首謹言。

十月二十一日

眞田信濃守家來

長谷川深美

眞田幸民家記

○

昨日、以御書付、小臣私等へ存念可申上候樣御下問之趣奉畏候、然ル處、右御ヶ條ハ、何レモ不容易御大件、殊ニ尊威ヲ御降シ朝廷ヨリ之御直問、大膳大夫罷在候共、御答方何分ニ相心得可申哉、況不肖之小臣、私等御直答申上候儀、如何ニモ以恐懼之至奉存候處、仰願ハ一應幕府之御手ヲ被爲經、御沙汰ニ相成候樣仕度、左候得ハ、見込之儀モ候ハヽ、幕府迄可及言上奉存候、左モ無御座候而ハ、實以天威恐多痛心之至ニ候、何卒宜御聞濟被成下候樣伏而奉冀候、以上。

奥平大膳大夫家來

桑名登

大槻文彦筆記

○

昨日、私共式へ　御下問之趣奉敬承候、然處、誠ニ大事件之儀御座候間、容易確定之見込モ付兼候間、乍恐一二之事件而已、左ニ申上候、

一五卿御歸洛之事、

此御一事件、取極評議者仕兼候得共、御著坂ニモ相成候ハヽ、理非曲直御糺明、　朝議御恐服之境御見留之上、御歸洛御

相當歟ニ奉存候、

一外夷之事、

朝廷御新政之儀ニ而、御裁斷難被差留被爲在候ハヽ、當分、是迄之姿ニ被成置、朝廷ヨリモ、御打混御所置被爲在候而、者、如何可有御座候哉、

一幕府ヨリ御伺候ケ條書之事、

此御儀モ、幕府ヨリ御差定之件々ヲ御伺相成候迄之儀ト奉存候間、御朝議ヲ以御決定相成候様仕度奉存候、

右之通御座候、以上。

十月二十一日

戸田采女正内
桑山豊三郎
井田五藏
市川元之助

戸田氏共家記
黒川秀波筆記

○

昨日、拜見被仰付候御書付之件々、見込之義可奉言上旨被仰付奉畏候得共、關係不仕義ニ御坐候得ハ、條理相辨兼候ニ付、見込難仕奉存候得共、乍恐、大體ハ萬機之御政務ニ被爲拘候御事柄モ可有御坐哉ト奉伺候得ハ、今般被爲召候諸侯上京、御公論御決定迄ハ、先御舊格之邊ニ被爲成置候テハ如何可被爲有候哉、御尋ニ付、不顧恐、愚衷奉言上候、誠恐誠惶謹言。

十月二十一日

松平兵部大輔家來
友部權六

松平直孜家記

○薩、藝、土三藩士、答議水莽貽孫錄二十五日トス、今廣島藩記ニ從フ、紀伊、水戸二藩士、建議家記皆載セス、傳寫ニ係ルヲ以テ、謬誤甚タ多ク、語意通シ難キ者アリ、然レトモ、之ヲ其家ニ質スニ、答議ヲ出セシハ疑ナシ、其餘加賀、米澤等諸藩ノ如キ、家記皆原記ヲ失ス、今考フル所ナシ。

二十二日、幕府申稟スル所ノ三事ニ批シ、八條ハ姑ク其舊ニ依リ、三條實美等ハ、大坂ニ止メ、外國ノ事ハ、其情ニ通スル數藩ト謀リ、諭シテ之ヲ紓フセシム、又之ヲ列藩ニ布告ス。

○八條批紙

右八ケ條、召ノ諸侯上京之上、被立規則候得共、其迄ノ處、是迄ノ通可心得事、

但、當地三ケ月詰、竝口々御固大名割ノ一條ハ、是迄ノ手續ニテ取調、於申渡ハ兩役取扱ノ事。

○實美以下ノ條批紙

自然上坂候得ハ、諸候上京迄ノ處、於浪花滯留之事、

但、從　朝廷可申渡候事。

○外國ノ條批紙

召ノ諸侯上京之上、御決定ニ可相成候得共、夫迄ノ處、差向候儀有之候得ハ、諸侯上京迄差延候儀、外國之情ニ通シ候兩三藩ト申合可取扱事。　細川護久家記　小笠原忠忱家記

○忠忱家記ニ云、御假建ニ於テ、御下問ノ件々、御附札被仰出旨口達被相渡。

○久我通久、中納言六條有容、中納言等、書ヲ上リ、東久世通禧ノ義絕ヲ釋カント請フ。

源　通　禧

先年脱走之次第ニ付、義絶仕候、然ル處、長防寛大御所置被　仰出候ニ付而者、何卒以　御憐愍義絶御赦免之儀相願度、宜預御沙汰候也。

十月二十二日　通久（久我）

日野大納言殿

飛鳥井大納言殿

源通禧

先年及脱走候次第ニ付、義絶仕候處、長防寛大之儀被　仰出候ニ付而者、何卒以　御憐愍之　御沙汰、義絶御赦免之事、従久我中納言相願候通、於一族中モ相願存候、此段宜預御沙汰候也。

十月二十二日

有任（千種）
雅言（植松）
具慶（岩倉）
通熙（久世）
通善（梅溪）
通富（中院）
有容（六條）

日野大納言殿

飛鳥井大納言殿　（久我通久家記）

○徳川慶勝、（大納言○尾張藩主、徳成ノ父、）幕府親藩ノ首ニ居リ、匡輔スルコト能ハサルノ罪ヲ謝シ、其官爵ヲ貶黜セント請フ。

謹而奉言上候、臣慶喜、頃日政權之儀ニ付、奏聞之趣被爲　聞食候旨、謹而伏承仕候、右者獨慶喜之罪ノミナラス、不肖臣慶勝久敷親藩之立場柄ニ乍在、輔翼之事不行屆、終ニ今日之形勢ニ立至候段、誠以惶懼戰慄之至ニ不堪、臣慶勝之罪不少奉存候、是迄者格別之　御寵遇ヲ奉蒙、過分之官爵ヲ汗居申候處、何卒御降奪之　御沙汰ヲ蒙、責而者萬分之一ヲモ償ヒ申度、只管奉伏罪候、臣慶勝誠惶誠恐頓首敬白。

十月　大納言慶勝

二條攝政記
德川義宜家記

○市橋長義、下總守○西大路藩主、食封一萬八千石、京ニ至ル、市橋長義參麗記

二十三日、上京ノ諸侯ニ令シ、務テ從者ヲ減省セシム。

諸藩上京之儀被　仰出候ニ付而者、京師モ狹小之儀、旅宿等モ不都合ニ候間、成丈ケ少人數ニ而、上京有之候樣可致候事。

十月　藤堂高邦家記
大岡忠貫家記

○幕府、再ヒ外國常事ノ措置、及ヒ課金、驛法布告ノ事ヲ稟問ス。

一外國之儀ニ付、御附紙之趣奉畏候、平常之儀者、是迄之手續ニテ取扱置候テ可然候哉、

一伺候八ケ條、御指圖之趣奉畏候、就テハ　大宮御所御造營ニ付、國役金收メ方手續並五街道人馬之儀、御規則相立候迄者、是迄之通タルヘキ旨、御兩役ヨリ諸大名ヘ御觸達相成候儀ト奉存候得共、爲念此段猶又奉伺候。

十月二十三日　德川慶喜實記
晩翠樓叢書

○持明院基政、六角能通等、連署シテ、壬生基修ノ義絕ヲ釋カント請フ。

藤原基修

去五月、長防之儀、寛大之　御沙汰被爲在候間、於藤原基修モ、以　御憐愍義絶被　免候樣奉願上度候、宜預御沙汰候也。

十月二十三日

基祥園
基文石山
宗有中御門號松本
基敬東園
保美高野
基安石野
能通六角
喜政持明院

日野大納言殿
飛鳥井大納言殿　園基祥家記

○幕府、書ヲ佛朗西國公使ニ與ヘ、浦上村耶蘇教徒處分ノ事ヲ告ク。

佛蘭西全權ミニストル
ヱキセルレンシー
レオンロッシュヘ

以書簡申入候、浦上鄕住民ノ事、竝ニ平山圖書頭、右事件ニ付、取計ヒ振リ等ニ付、小笠原壹岐守ヘ充テラレシ書簡チ、同人余カ方ヘ差越タリ、

一京都、長崎竝ニ江戶府トモ、互ニ遠路相隔絕シ、書翰ノ往復等モ自然遲延ニオヨヒ、殊ニ右緊要事件之落著方等、大ニ行違ヒチ生シ、計ラスモ餘程之手後レチ引起シタルモ、素ヨリ其許ヨリノ兩通ノ書翰、長崎ノ貴國コンシュル、及ヒ僧徒首

長ノ方ヘ、著スヘキ時ニ至リ達セサルニ因ルナリ、其許、右厳重成書翰ヲ認ラレシ、其趣意ハ余ニ於テ篤ト了解シ、深ク察シ入ル處ニシテ、萬一事ノ情實、其許ノ推考セラル、如クナルトキハ、其咎責ヲ受クヘキモノハ、余ト平山ノ兩人ナリ、然ルニ事全行違ヒニシテ、余等モ亦幸ヒニ其責ヲ脱スルノ餘地アリ、今此圖書頭ヨリノ書面ヲ一讀セラル、トキハ、事ノ情實亮然ト、其許ニモ了解シ給フヘシ、第一、其許ヨリ長崎ヘ遣ハサル、書翰差立方延引セシコトハ、余カ方ノ手落ナレハ、幾重ニモ其罪ヲ謝ス、右様所置セシモ、別ニ趣意アリテナセシコトニアラサルコトハ、天ノ鑒ミ知ル處ナリ、

一大君平山ヘ下命シ給ヒ、其許ノ方ニ至リ、右事件取計フトキニ當リ、種々ノ妨碍ニ逢ヒシ始末等ヲ委敷書記セシ、此書面ヲ其許ヘ呈シ、右ヲ一見セラル、時ハ、事ノ詐リナキ確證ヲシルコト、又難カラサルヘシ、就テハ、其許ニモ問ハル、廉アラハ、一々口上ニテ説明ニオヨフヘシトノ命ヲ蒙レリ、

一長崎ニオイテ、公然ト耶蘇教ヲ信仰シ、余國ノ大法ヲ破リシトイフヲ以テ、嘗テ入牢セシ日本人七十八人ノ内、七十七人ハ改心、又ハ國法ヲ破リシ過ヲ悔ユルトノ旨ヲ申出、外ニ言葉ヲ設ケス、唯改心トイフヲ以テ、盡ク赦罪セリ、跡一人ハ、右改心ヲ云フヲ否ミシニヨリ、歸村預申付置タリ、尤寛宥處置ノ方法ハ、尚可申入候、

一長崎奉行ノ組頭四人ノモノ、趣意ヲ述ヘ屈服セサルヲ憤リ、此者トモヲ打擊シ、奉行モ大君寛裕仁恕ノ趣意ニ甚タ反シタルコトヲ、平山ヘ告ケサリシヲ以テ、殿下此モノ等ノ職ヲ取揚クル而已ナラス、又此過失ニ相當ナル罰ヲ加フヘシト、決定シ給ヘリ、

右ハ、其許正理ヲ以テ愁訴セラル、苦情ヲ慰スルタメ、處置ニオヨハントスル事ニシテ、大君殿下ノ命ニヨリ、余其許ノ思ヲ安センカタメ、取計ハントスル事也、且余カ政府ニオイテハ、耶蘇教ノ事ニ付、悪意ヲ包藏スルニアラス、畢竟、當今國内ノ形勢多難ノ場合ニ當リ、無餘義、歐羅巴各國ニオイテハ、過激ノ處置ト人々思ハル、ナルヘケレトモ、日本ニオイテハ、豫メ後患ヲ察シ、國法ヲ重ンスルヲ以テ第一トスルコト、無據事情ナレハ、猶其許ヘ此事ヲ再述ニオヨヒ置様、殿下余ニ命セラレタリ、

一貴國ノ僧徒等、日本人ヲ教化セサル様、尙其許ヨリ申遣ハサレンコトヲ願フ、此事ニ付テハ、余等カ所思ヲ、猶平山ヨリ委細其許へ可申入候、拜具謹言。

慶應三卯年十月二十三日　板倉伊賀守花押

外務省記

○佛公使及ヒ平山圖書頭書簡ハ、原記ヲ失ス。

二十四日、德川慶喜、上表シテ、征夷大將軍ヲ辭ス。

臣慶喜昨秋相續仕候節、將軍職之儀、固ク御辭退申上、其後厚蒙　御沙汰候ニ付、御請仕奉職罷在候處、今般　奏聞仕候次第モ有之候間、將軍職御辭退奉申上度、此段　奏聞仕候、以上。

十月二十四日　慶喜

德川慶喜貫記
春嶽私記

○甘露寺勝長（左中辨）ノ義子萬長（高丸）ヲ堂上ニ班シ、松崎氏ヲ稱セシム。

○松崎萬長家譜略ニ云、慶應三年十月廿四日御取立、同年十一月一日賜號稱松崎。

○此事達書ナシ、其家ニ質スルニ、口達ニ出ツト云。

○北條氏恭（相模守○狹山藩主、食封一萬石）ヲシテ市橋長義ト共ニ、四塚關門（京師南郊ニ在リ）ヲ守ラシム。

○幕府上申書

四ツ塚御警衛御手薄ニ付、別紙之通取調候、於御兩役御達御座候様仕度候事、

北條相模守

四ッ塚關門御警衛之義、市橋下總守ヘ申合、相勤候様可致候。（晩翠樓叢書）

○本件達書、原記ヲ逸ス、因テ上申書ヲ補塡ス。

二十五日、諸藩ニ申命シ、十一月ヲ期シテ京ニ至ラシム。

御用之儀有之被　召候、期限來月中ニ必可有上著候事。

但、用意出來有之向ハ、不拘期限、早々上京可有之事。（松平直方家記・木下利恭家記）

○本條達書ノ日、諸家記異同アリ、蓋シ漸次發令セシモノナラン。

○初メ朝鮮國、佛朗西、米利堅ト釁隙ヲ開ク、（去年八九月ノ間ニアリ、）幕府、佛、米公使ニ說キ、將ニ使節ヲ朝鮮ニ派遣シテ、講和ヲ謀ラントス、是日、朝旨ヲ奉シテ、其事ヲ行ヒ、且宗義達ニ命シテ、使事ヲ幹セシメント請フ、義達モ亦朝鮮國往復書ヲ上リ、其事由ヲ上陳ス。

昨年朝鮮國ニ而、佛蘭西之教師ヲ致殺害候ニ付、佛國之水師提督軍艦數艘ヲ以及戰鬪候處、時寒氣ニ向ヒ、一ト先解兵、今年春暖ヲ待チ、大兵再擧之企有之趣相聞、且右戰爭之後、亞國之商船、朝鮮國之海岸ニ漂著候處、佛國ト謬認候哉、朝鮮人妄ニ舟中之人ヲ殺シ、其中ニ英人二名乘組居、同樣ニ被殺候由ニ付、三國申合、軍艦差向候聞エ有之、朝鮮國禮曹ヨリモ、戰爭之次第、宗對馬守ヘ及報知候、朝鮮國之義者、從來之舊好唇齒之國柄、彌三國合從ノ大兵ヲ向ケ、彼國滅亡ニモ至候ハヽ、皇國之大患トモ可相成、其上同國之義ニ付、去癸亥年、對馬守ヨリ申立候趣建言仕、　朝廷御聞濟ニモ相成居候旁、此度和議可取扱心得ヲ以、佛、亞兩國公使ト申談、尙朝鮮國ヘハ、爲使節若年寄、竝平山圖書頭、目付古賀筑後守差遣候積リ、對馬守ヲ以、先ニ彼國ヘ爲及掛合候間、內外多事之折柄トハ乍申、兩人差遣方、此上遲延相成候テハ、隣交之信義難立候ニ付、十一月中出帆之積リ、猶又爲掛合置申候、右之通リ之次第ニ而、兩人渡海期月差迫リ居候ニ付、是迄之手續ニ而取計候義ニ御座

候ハヽ、改而從　朝廷其段被　仰出、宗對馬守ヘモ同樣御達ニ相成候樣仕度奉存候、以上。

十月　慶喜

外務省記

○

昨年、朝鮮國、佛蘭西ト戰鬪ノ次第ハ、兼テ佛國ノ敎師潛ニ韓國ニ入リ、其邪敎ヲ廣メ、黨類日ニ繁ク、種々ノ奸邪國害ヲ釀候ヨリ、朝鮮國政府相議シ、其巨魁、竝敎師ヲ致殺戮候ニ相起リ、佛國ノ水師提督、復仇ノ爲軍艦數艘ヲ以、韓國ト及戰鬪候處、時寒氣ニ向、一ト先解兵、今年春暖ヲ待、大兵再擧ノ企有之趣、外國新聞誌中、具ニ相見、且右戰爭ノ後、亞國ノ商戰、朝鮮國ノ海岸ヘ漂著ノ處、佛國ト誤リ認候哉、韓人妄ニ舟中ノ人ヲ殺シ、其中ニ英人一名乘組居、同樣被害候由、右暴擧ニ依リ、三國憤怒、問罪ノ師差向候聞モ有之、然內、朝鮮國禮曹ヨリ、佛國戰爭ノ次第表立チ及報知、尙其顚末委曲、幕府ヘ轉達ノ儀ヲモ申越、隨テ朝鮮國ノ儀ハ、從來ノ御舊好、殊ニ唇齒ノ國柄、今日ノ危急於　皇國御傍觀可被爲有樣無之、彌三國合從、兵ヲ向候ニ至テハ、彼國亡滅旬月ヲ不出、擧國忽外夷ノ有ト相成、　神州ノ大患難勝數、其上同國ノ儀ニ付、去癸亥年、對馬守ヨリ幕府ヘ建言ノ主意、　朝廷御聞濟ニモ至居、旁、此度和義御取扱被下彼國危禍相免候ハヽ、　皇國ノ御仁恩深奉感戴、往々御德化ニ服從仕候御遠圖ノ御手始ト奉存候處、則於幕府和議御取扱方御決定ニ至リ、其趣、佛、亞兩國ヘ被及御說得、尙朝鮮國ヘハ、爲御使節平山圖書頭殿、古賀筑後守殿、圖書ヲ以渡海ノ手筈、前以彼國ヘ懸合置候樣、當四月幕府ノ命ニ依、不取敢其趣朝鮮表ヘ懸合罷在候內、淸國於上海、我國ノ漂人八戶順叔ト申者、無稽ノ妄說ヲ唱ヘ、右流言朝鮮國ヘ傳播致シ、韓人甚　皇國ヲ疑訝致候意味有之、當六月、禮曹ヨリ書翰ヲ以、右事件不審ノ趣申越候ニ付、事實辨白ノ返答向、幕府ヨリ內命ノ書面中、國使既行李ヲ戒メ、不日解纜渡海ノ趣相見候處、其後ニ至、御國使渡海方、又々數月相後レ、尤御邦內御用多ノ折柄、格別無御餘儀次第奉存候得共、兼々切迫相懸合置候末、其期限相扒候テハ、談判向ノ不都合ハ不及申、外國ヘ對シ御信義難相立、殆苦心罷在候處、本月初旬、圖書頭殿渡海ノ期限、來十一月中出帆可有之趣、朝鮮表ヘ懸合置候樣、追テ幕府

ノ命有之、右ニ付、詰合家來ノ內、急ニ歸國方御差圖ニ相成、今程ハ敏ニ彼國ヘ申達居候事ト奉存候、然ル處、今般御大政向不容易御變革被仰出、隨テハ右朝鮮國事件、委曲幕府ヨリ御伺ノ上、御取計ニ相成候義ト奉存候得共、是迄之手續、一ト通奉達　御內聽置候條、可然御聞通被爲下度奉希候、尙又朝鮮國來翰寫、其外ノ書類、御勘考ノ御爲別紙ノ通差上候、以上。

宗對馬守內
大島友之允

十月二十五日

禮曹告異樣船情形書、

朝鮮國禮曹參議任　晃鎬　奉書
日本國對馬州太守拾遺平公　閣下

玄英弸節、緬惟、
啓居珍毖、慰溯竝摯、竊以、敝邦與　貴國講信修好、垂三百年、凡係邊圉之政、疆場之事、未有不陳述、因由開示方略、知庋申　貴國書契者、卽所以申舊約、而敦隣誼也、西洋英佛諸國、遠涉重溟來、請交易於敝邦者、不止一再、而竟至於兵及相加、則其毒愈憯矣、本年春間有南鍾三。洪鳳周者、或簪紳邇列、或衣冠遺裔、傳習邪教、糾結匪類、潛引洋人、奉爲敎主、薰染旣久、煽惑益廣、奸跡掀發於緝捕之際、悖黨駢就於刑辟之下、夏秋間洋舶一艘、先泊於湖西海美縣前洋、次泊於畿內江華府近地、乍往旋來懇請通貨、敝邦嚴辭、牢拒終不聽允、則彼乃缺望而退、又於此際洋舶一艘、自西海轉入平壤府羊角島、剽掠商貨、殺害人畜、道臣設計火攻、盡行勦滅、八月十六日、洋舶二艘、自南洋直入京江、三宿而返、言語不通、情款相阻、行止莫詰、猲來自恣、乃於九月初六日、洋舶大小三十餘艘、又到京畿、我留碇於富平府前洋、或直向江華府甲串津、打破樓櫓、焚燬廨宇、殺害人民、攘奪牛畜、宬籍輓漕、盡爲剽劫著、巡撫使李景夏、開營戒嚴於輦下、先鋒中軍李容熙、陣于通津府、左先鋒將鄭志鉉、陣于濟物鎭、右先鋒將金善弼、陣于富平府、遊擊將韓聖根、陣于文珠山城、遊擊將梁憲洙、陣于鼎足山城、遊擊將李基祖、陣于廣城、鎭撫使申觀浩、召募使李元熙、陣于楊花津、召募使鄭圭應、陣于西江隘口、御營中軍權諮、京畿中軍白樂

賢、陣于幸州隘口、楊州牧使林翰洙、陣于礪峴隘口、招討使韓應弼、陣于延安府、防禦使柳琓、陣于 案ニ此處及州ノ下、恐クハ脱誤アラン、 坡州牧、都護使申櫶、陣于長湍府、移檄請戰、期日相見、賊盡並其衆聚保港汊、無意交鋒、沿浦舟楫、沒數燒燼間、或潛襲文珠、鼎足諸城、輒被守將擊却、敝邦斂數器使、修繕戰艦、又令三路舟師、合勢進攻、十月十二日、大小洋舶、仍卽捲還退、向外洋而去、此爲敝邦被兵之大略也、敝邦昇平日久、戎政弛而武備踈、未能長計制勝、使片帆不還、則雖有數三克捷、多少勦殪、固不足爲耀威武、而讋遠人、且夷情叵測、進退無常、未可以目下之紓急、永蠲方來之憂虞也、又有一事之不容、不據實相報者、敝邦之瀕海東南、與　貴國諸州涯涘、可辨牛馬、境界殆聞鷄狗、而自夏秋至于近日、無數帆檣、自西而南者、出沒於煙雲島嶼之間、封疆之臣、飛報日至、未知彼夷將欲起釁、而　貴國設備而待變歟、未知　貴國已與構兵、而彼夷左次而敗衂歟、又未知彼方恣睢潛伺、磨牙鼓吻、而　貴國或未覺悟、其閃祕之情狀、逆折其猋發之氣勢歟、敝邦用是憂慮、不印自恤、玆以控擧顚末、修牘展布、幸將右項事由、轉達　東武、是所深望統、惟　崇照肅此、不備、

丙寅年十月　日

禮曹參議任　冕鎬、

禮曹報異聞書、

朝鮮國禮曹參判李　沇應　奉書

日本國對馬州太守拾遺平公　閤下

花煦舒長、緬惟、

啓處冲裕、遡誦無射、敝邦與　貴國隣港之衣帶、只隔訊譯之冠蓋、相續爾來二百餘年之間、講信修好終始無替、今春節使自北京回言、得聞傳說、則有　日本國客人八戶順叔言、　日本江戶政府、督理船務將軍中濱萬次郎、月前特至上海、制造火輪船八十餘艘、近日已啓行回國、國中共有二百六十諸侯、至江戶會同議政、現有興師往討　朝鮮之志、八戶順叔者、不識爲何狀人、屬籍之的在、　貴國旣不可詳流寓之現因、何事又未必詰、而竊怪其揑造釁誣、恣意譸幻、公肆流播、無所顧畏、捘諸事

理實、是窮究不得者矣、噫　兩國之誠信日星可監、　先世之條約金石可透、百神共證不愉之盟、萬姓方邀、無量之福判、不當以一時驟聞之謠說、遽認實際、然義在永好、情出無隱、玆庸臚述耳、聞披展衷曲、幸將右項事實、轉達　東武、　明腸覆音、是所深企肅此、不備、

丁卯年三月　日

禮曹參判李　沇應

遣禮曹參議、答異樣船情形書、

日本國對馬州太守拾遺平　義達、　奉復

朝鮮國禮曹參議大人　閤下、

曩辱　華翰就諦、　啓居珍毖、傾慰良深、所　示戰鬪一款、臚列顚末、副以所見、旣已稟　啓　東武、則　廷議以爲、去秋法國之開釁也、實出于不虞、不啻脣齒相患、抑於　鄰睦世敦之誼、憂恤那有措哉、欲使　貴國永計綏安者、此　東武盛意所在地、不佞在職曷任感戢、今番有　使節至　貴國之　命、　東武官員身親開陳時務、則在　貴朝豈無宜當之處置耶、覼縷事實、要在　使節陳述、何待多及總、惟　照亮肅、此不備、

慶應三年丁卯六月　日

對馬州太守拾遺平　義達

遣禮曹參判答異聞書

日本國對馬州太守拾遺平　義達　奉復

朝鮮國禮曹參判大人　閤下、

遠承

芳緘憑審、

輿居淸廸、欣慰良深、所
示辭意斯速、轉

啓

東武、則其說果是荒誕虛妄、毫無形迹、此等流言囂々殆爲煩、　貴朝於我豈恝然耶、抑我　大君殿下、不撫區域、舊弊斯除、百度一新、文武庶員、贊成謀議、夙夜唯以張皇　國威、爲目今急、購其砲艦器械於海外、給我富國强兵之資者、往々皆然、安知非流言之所以由來哉、　本邦之於　貴國、世敦　鄰好、共換綏寧者、是　台慮所以睠々於今日也、至暴虎不法之訛言、不足信也、彰々矣、及聞法國戰鬪之事、鄰誼相孚、唇齒相依、豈可泛視于其間耶、用是恤念無措、欲使　貴國永蠲後來之憂虞也、故這回特　命　使節遠至　京畿、開陳宇內形勢、則在　貴國、亦當斟酌時務、處置適當者、此　東武盛意所存也、　使節旣戒行李超溟在近、　東武敦篤意、實總在陳述、則如彼僞妄無根之說、渙然氷解、　兩國交際、永歸不渝、　嚴命之下、如此、不佞在職實可感戢、餘冀　崇亮肅此、不備、

慶應三年丁卯八月　日　　　　　　宗　對馬守

對馬州太守拾遺平　義達

六月五日幕府ヨリ御渡ノ書付、

今度、朝鮮國禮曹ヨリ、其方ヘ書翰差送リ、八戶順叔ト申者、無稽ノ說ヲ唱候由、右者上海新聞中ニモ相見、何レノ漂民ニ候哉、更ニ不取留儀ニ有之、素ヨリ當三月中相達候通、彼國之艱難、於御隣誼難默止被思召、態々使節被差送、綏安之良策ヲモ被仰示度、厚キ思召候條者、旣ニ此程者於彼國モ諒解可有之儀ト者被存候得共、尙厚キ御趣意之趣、禮曹ヘ申通候樣可被致候、

朝鮮國ヘ返答向之主意柄、監察原市之進方ヨリ被相渡候書取一通、

來翰之趣、、江戸政府ヘ申立候處、被申越候說之如キ者、無根妄言不足取儀ニ而、右等浮說流言之爲メ、彼是心配ニ被及候段、實ニ氣ノ毒千萬被存候、尤大君御相續以來、百事御一新、文武諸吏ニ命シ、舊弊ヲ去リ充實ヲ務メ、日夜只國威之伸ン事ヲ謀リ、砲艦諸器械、凡百之富强ニ資スル者、遠ク海外ニ購リ候者相違モ無之儀ニ付、前件之狂說モ、夫等之事ヨリ起リ候ニモ可有之處、兼而隣好ヲ厚クシ、雙方安全ヲ祈候ハ、素々政府之宿志ニ付、客秋法國釁ヲ開キ、不慮之兵戰ニ被及候次第承リ及、唇齒之國柄深ク痛心被致、何卒後來　貴國之幸福ヲ求度ト、此程態々使節ヲ命シ、遠ク其王畿ニ至リ、方今之形勢、宇內之情態モ告知、適當之處置アラン事ヲ可申入、既ニ行李ヲ戒メ居候事ユヘ、不日解纜渡海可致、就テハ政府之好意、深實之處者、委曲使節ヨリ可及陳述、然ル上者、前件之僞妄モ總テ氷解、益兩國締交ノ厚誼、永久不渝之基本モ可相立ト、屈指西望ノ次第、不取敢可申入置旨被命候ニ付、此段爲回答如是候也。

丁　卯　六　月　宗重正家記
外　務　省　記

○井伊直憲、掃部頭○彥根藩主、食封二十五萬石、酒井忠篤、柳澤保申、甲斐守○郡山藩主、食封十五萬千二百八十八石、時ニ松平氏ヲ稱ス、榊原政敬、酒井忠惇、小笠原忠忱、松平賴聰、讃岐守○高松藩主、食封十二萬石、酒井忠氏、奧平昌服、松平忠誠、眞田幸民、戶田氏共ノ家臣、連署シテ、二十二日批下ノ疑條ヲ稟シ、且外國ノ事、姑ク幕府ニ委シテ、諸藩士ト協議セシメ、諸侯會同ヲ待テ、之ヲ決セント請フ。

昨日、於　御假建所演說ヲ以御伺、且愚存申上候件々、以書取左ニ奉申上候、

一御附札面ニ兩三藩ト御坐候ハ、何レ之藩ニ可有御坐候哉、御見込被爲在候處、奉伺度候事、

一兩三藩之處、於　朝廷御選被爲在候義哉、於幕府御選ニ相成候義哉、諸藩衆議ヲ以相選候哉、奉伺候事、

一外夷御取扱切迫之事件、諸藩上京　御決議ト御差延之義、成否如何歟、不容易御義ト奉存候、如何之御應接ニ而、御差延

相成候哉、萬一御差延難被成節者、如何之御處置被爲在候御義哉、一同奉懸念候付奉伺度事、
一召之諸侯上京、衆議　御決議相成候迄之處、是迄通、萬事幕府へ御委任被爲在、猶於幕府諸藩士被召寄、篤ト被盡衆議候樣被爲在度奉存候事、
右御伺、且愚存申上候件々、早々御沙汰被成下候樣仕度、奉懇願候、以上。

十月二十五日

井伊掃部頭内
北川德之丞
田邊全藏
酒井雅樂頭内
青木平藏
岩橋辰三
松平甲斐守内
安藤光太夫
松平讃岐守内
松山修輔
小笠原豐千代丸内
二木武兵衞
榊原式部大輔内
服部瀨兵衞
酒井左衞門尉内

大野與一右衛門

戸田釆女正内

市川元之助

奥平大膳大夫内

富士野彦右衛門

眞田信濃守内

長谷川深美

松平下總守内

平野俊吾

岡本金藏

酒井若狹守内

深栖務

小笠原忠忱家記
晩翠樓叢書

○晩翠樓叢書、兩三藩云々ト、外夷云々ノ二條ヲ合シテ一條トシ、文字少異同アリ、忠忱家記正ニ似タリ、故ニ之ニ從フ、連署ハ晩翠樓叢書ニ據ル。

○山科言知、前大納言、八等隆祐前中納言、等、連署シテ、四條隆謌ノ義絶ヲ釋カント請フ。

去ル五月、長防之儀、寛大御沙汰被爲在候間、於藤原隆謌モ以　御憐愍、義絶被　免候樣奉願上度候、宜預御沙汰候也。

藤原隆謌

十月二十五日

隆脩 西大路

隆詔　櫛笥
隆晃　油小路
隆祐　八條
言知　山科

日野大納言殿
飛鳥井大納言殿　山科言繩家記

○加藤明實、藩ニ歸ル。○加藤明實家記

○幕府、令シテ攝津、播磨間ノ官道ヲ改ム。○兵庫開港場ト爲ルヲ以テナリ、

松平兵部大輔家來へ

今般兵庫御開港ニ付、西國往還道附替、攝州住吉村ヨリ明石迄之道筋、御開道相成候ニ付テハ、兵部大輔領分之內、右道筋へ相掛リ候村々モ有之候間、委細之義ハ御勘定奉行申談候樣可仕候。　松平直致家記

○本條、布告書アルヘシ、今考フル所ナシ。

○黒田齊溥、封內漂到ノ朝鮮人ヲ長崎ニ送致スルヲ幕府ニ報ス。

十月九日、私領沖ノ島へ、朝鮮之漁船ト相見エ一艘漂著仕候、彼島ハ繫船之場所無之候ニ付、大島へ漕入候旨、同所定番之者ヨリ申越候ニ付、兼テ手當ノ人數、早速差遣シ、右ノ船相改候處、乘組五人有之、筆談不相整、言誤等モ相通シ兼候得共、朝鮮之漁船ニ相違無之、疑敷儀モ無之候ニ付、舊例之如ク、警固之者附添、於長崎河津伊豆守へ送越申候、此段御屆仕候、以上。

十月二十五日　　松平美濃守

黒田長知家記

○是ヨリ先、薩、藝、長三藩謀ヲ通シ、薩兵周防港ニ來會シ、本月六日ニ在リ將ニ藝兵ト倶ニ東上シテ計畫スル所アラントス、幕府大政奉還ノ表入リ、諸侯ノ召命新ニ出ルニ會ス、三藩乃チ其圖ヲ改メ、薩兵ヲシテ先ツ京ニ入ラシメ、又島津茂久若クハ久光ヲ其藩ヨリ迎フ。

○指華入京日載ニ云、六日夕ヨリ九日ニ至リ、薩艦三隻入港、第一艦大山格之助、其外乘組兵員四百人、後二艦、大約五小隊、二十一日夜、藝艦入港、廣澤兵助、福田俠平兩人、京師ヨリ薩藩小松帶刀、西鄉吉之助、大久保一藏、一同歸國、右ハ前日三藩合從、東上ノ風評ニ付テハ、上國餘程紛擾、加之、土藝等建白モ有之、旁、橋府急迫之樣子ニテ、朝廷ヘ建白、諸藩ヘ布告等有之、上國形勢大ニ變遷ニ付、小松等急速西下、華浦滯在ノ三艦兵隊ハ、飛船ヲ以テ差登シ、三艦ハ歸國致候テ、小松等兩侯ノ内御一人、急々隨從上京ノ手都合ニテ、二十四日曉出帆、二十五日朝、大山格之助、並二艦亦揚碇ス。

復古記 卷二 終

總括兼纂修
一等修撰　臣　長松　幹

校勘
一等修撰　臣　長　𦰩
一等協修　臣　四屋恒之

校錄
一等書記　臣　澤渡廣孝

繕寫
二等繕寫生　臣　小川長和
二等繕寫生　臣　小島　春

復古記　卷三

慶應三年丁卯十月二十六日ニ起リ十一月六日ニ至ル

○十月

二十六日、本多忠民美濃守○岡崎藩主、食封五萬石、家臣、伏見警守事項ノ稟請、及ヒ三條實美等待接ノ事ヲ幕府ニ請問ス、幕府、令シテ、稟請ハ姑ク其舊ニ依ラシム。

伏見御警衛之儀ニ付、諸事心得方之儀、今般諸御大名樣伺被　仰出等ハ、　朝廷於御兩役樣御取扱相成候、御沙汰之趣モ御座候付テハ、向後伺等ハ都テ傳　奏樣ヘ相伺可然哉、矢張是迄之通相心得居候テ宜敷御座候哉、右邊之處、兼テ心得罷在度、此段奉伺候、以上。

十月二十六日　　本多美濃守家來
安井藤九郎

○幕府批紙

書面之趣ハ、　御所ヨリ被　仰出之趣モ有之候間、先是迄之通相心得、達事ハ傳奏ヨリ相達候品モ可有之候。本多忠直家記

○

先年、長州表ヘ御下リ相成候堂上方五卿、近々御上京之風聞御座候、萬一急々御上京ニモ相成、若伏見御警衛關門御通行御座候ハヽ、何トカ御沙汰之趣モ可有御坐候哉、俄ニ御上京相成候節ハ、外ニ子細モ無御座候ハヽ、御通シ申候心得ニ罷在候、此段無屹度申上置候、以上。

本多美濃守家來
安井藤九郎
本多忠直家記

十月二十六日

○本條、忠直ニ質スニ、批紙ナシト云。

○幕府、邦內寄寓ノ支那人、及ヒ條約未濟國人取締法ヲ設ケ、之ヲ各國公使領事ニ告ク。

大貌利太泥亞公使館附
ヱルネスト、サトウヱスクワイルへ

以書翰申進候、然ハ支那人等取締ノ儀ニ付、先日公使ヨリ御心附ノ趣、拜謝ノ至存候、就テハ今般各國岡士へ、別紙ノ通書翰相達、且新聞紙ニモ布告ノ積ニ付、此段其公使、竝ロコック氏ヘ宜御賴申候、謹言。

慶應三卯年十月二十六日　水野若狹守

各國岡士へ

以廻章申進候、然ハ條約未濟國ノモノ取締ノ儀、英、佛、米、孛、蘭ノ諸公使、我閣老ト協議之上、規則取極候ニ付テハ、條約未濟國人民之內、就中支那國之人民多人數當港へ渡來居留スル故ニ、右取締之法ヲ設ル事、差當リテノ要務ナレハ、現今當港ニ在ル處ノ支那人、速ニ我方へ申出、其名字ヲ我役所ノ簿籍ニ載スル樣致度ニ付、漢文ヲ以示令スヘシ、且支那人ノ儀ハ、多分ハ條約濟各國人ニ雇ハレ居候義ニテ、夫々給料ノ多少可有之、何レノ國々ニモ屬セサル支那人迚モ、身分ノ厚薄可有之候間、三等ニ分ケ、其名ヲ名簿ニ加へ、公ケニ免狀相渡候節、上等之分（即伴頭又ハ商人、）ハ洋銀十五弗、中等ノ分（即家僕又ハ職人、）ハ同七弗、下等ニ至テハ（即人足等、）同三弗半宛、我方へ取立候積、尤右免狀ハ一ケ年每ニ改ムヘシ、且新渡ノモノ、直ニ其名ヲ名籍ニ載セシメンタメ、外國船ニ遣ス取締士官ニ、支那旅客、其住家並職業ヲ告ル迄ハ、支那旅客之上陸ヲ濫ニ許サヽル法ヲ設

クヘシ、右之外、酒店又ハ料理店等相開居候者モ有之候ニ付、相當ノ戸税銀ヲモ取立候積ニ有之、其許方、此書ニ同心アラレ候樣イタシ度候、謹言。

慶應三卯年月日　水野若狹守

外務省記

○附錄十一月七日英國書記官ヘ答書

大不列顚使臣館書記官
シッドニイ、ロコックヱクスワイルヘ

第十一月二十六日附之貴翰披見イタシ候、然ハ横濱ニ住居スル支那人、竝條約未濟國ノ人民取締ノ儀ニ付、去ル二十一日我十月二十六日、附ニテ、サトウ氏ヘ書翰ヲ以申進候趣、甚適當ナリト承知セラルレ共、各國岡士ヘ未タ書翰不差出候ハヽ、英、佛、米、孛、蘭公使ト約定セシトノ文章ヲ削リ可申、右ハ我政府ノ獨斷ニアリトノ事ノ由、申越サルヽ旨承知セリ、然ル處、右ノ書翰ハ、去月中、既ニ各國岡士ヘ差進候義ニ付、厚意ニハ候得共、既往ノ義ニテ如何共致シカタク、其公使ヘ宜敷申立置レンヲ欲ス、此段囘答如斯候、謹言。

慶應三卯年十一月七日　水野若狹守

外務省記

○書記官ノ來書ハ、之ヲ失ス。

二十七日、德川慶喜ノ辭表ニ批シ、姑ク其舊ニ仍リ、諸侯朝會公議決裁ヲ待シム。

諸藩上京之上、追而可有　御沙汰、夫迄之處、是迄之通相心得候樣　御沙汰候事。

藤堂高邦家記
春嶽私記

○本條、日ヲ失ス、春嶽私記、二十七日、御城ニ於テ大目附松平大隅守殿御渡トアリ、蓋シ幕府諸藩ニ告示スルノ日ナリ、姑ク此ニ收ム、高邦家記ハ二十八日ト爲ス。

○徳川慶勝、京ニ至ル、本人履歷書、森忠典、美作守○赤穂藩主、食封二萬石、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメント請フ。○森忠儀家記

○忠儀家記、指令ヲ失ス、他例ニ據レハ、疾ヲ以テ代理ヲ出シ、或ハ其期ヲ緩セント請フノ類ハ、總テ重臣ヲ出シ、御用可伺ノ指令アリ、疾ヲ以テ延期ヲ請フモノハ、療養少シク快方候ハヽ、速ニ上京スヘキノ指令アリ、本條モ亦同シカルヘシ、此類他故ナキモノハ、總テ指令ヲ掲ケス。

○幕府老中ノ江戸ニ在ル者、十萬石以下ノ諸侯ニ令シテ、其上京ノ期ヲ緩フセシム。

於二條、早々上京之儀相達候得共、追而相達候迄、出立見合候樣可仕事、

但、十萬石以上之面々ハ、　御所ヨリモ上京被　仰出候趣ニ付、上京候者勿論ニ候得共、十萬石以下者、於二條上京之儀相達候分ニ付、上京頃合、追而相達候旨申達候事ニ候段、爲心得相達ス。○石川成德家記 太田資美家記

○二十一日、十萬石以下ノ諸侯モ亦、召命アリ、蓋シ其事未タ江戸ニ達セス、故ニ此令アリシナラン。

○幕府、江戸開市場外國人居留規則、及ヒ運送船等規則ヲ定メ、之ヲ各國公使ニ諜リ、且外人居留地域外ニ夜行スルトキハ、必ス我護衛者ヲ附スルヲ告ク。

亞墨利加合衆國ミニストルレシデント

ヱキセルレンシー

アルビワンワルケンボルグヘ

以書翰申進候、先般、江戸外國人居留地規則書差進、御相談ニオヨヒ置候處、閣下竝ニ外公使ヨリ被申立候趣モ有之候ニ付、此程川勝備後守竝ニ江連加賀守ヨリ、閣下竝ニ英國公使ヘ爲及御談判候趣ヲ以取極度、右ニ付別紙貳通相添、猶御相談ニ

オヨヒ候間、否貴答有之度、且居留地外ヘ外國人夜行之義ハ、掛念不少候ユヘ、可成丈見合候樣致シ度、若不得止所用有之、出行ノ節者、其筋ヘ申立次第、護衛之者差出可申間、必ス同伴致シ候樣、其人民ヘ諭達可致旨、貴國コンシュルヘ兼テ御命令有之度候、此段申進候、拜具謹言。

慶應三卯年十月二十七日　　小笠原壹岐守花押

江戸表外國人居留スル規則、

第一條

別紙繪圖面ニ、朱色ニテ彩色セシ場所内ハ、條約濟ノ外國人、日本人ヨリ所持ノ家屋ヲ借リ、商賣ヲ稼クタメ、住居スル事ヲ得ヘシ、尤右一區ノ内、家屋ヲ所持スル日本人、若シ貸ス事ヲ不好時ハ、外國人ヘ無理ニ貸サシムル事ヲナスヘカラス、且又條約濟ノ外國人、開港場ニ於テ地面ヲ借リ、家屋ヲ建ヘキ條約ノ法則同樣ニ、右繪圖面ノ中ニ藍色ニ彩色セシ場所ヲ、自普請ノ爲ニ、日本政府ヨリ貸與フヘシ。

第二條

右自普請之爲ニスル地所、段々ニ塞リ、猶他ノ地所入用之節ニ至レハ、別紙繪圖面ニイト印記セシ場所ヲ日本政府ヨリ用意イタシ、廻リニ幅六間四尺以上ノ道路ヲ取設クヘシ、然ルニ、其後猶又地面入用ノ節ハ、赤色ニテ彩色セシ場所内ヲ、都合次第地續ヲ以段々廣クヘシ。

第三條

別紙繪圖面ニ藍色ニテ彩色セシ場所ハ、日本政府ニテ、來ル十二月七日迄ニ、在來ノ家屋ヲ引拂ヒ、其周圍ニ幅六間四尺以上ノ道ヲ開キ、十分ニ下水等ヲ設ケ、大坂、兵庫外國人居留地規則第六、第七、第八、第九ヶ條ノ趣ニ從テ、外國人ヘ貸與フヘシ。

第四條

別紙繪圖面ニ、朱色ニテ彩色セシ場所内ヲ通過スル堀等ハ、來ル十二月七日迄ニ、日本政府ニテ掃除シ、其跡絕エス掃除セシムヘシ、尤右堀等掃除ノ諸入費ハ、日本政府ヨリ出スヘシ。

第五條

別紙繪圖ニ、ロト印セシ場所ニテ、普請ニ取掛リ居候外國人、旅籠屋ハ、日本政府ヨリ命シ、來ル十二月七日迄ニ必落成セシムヘシ、尤旅籠屋ハ日本人ニテ取扱フヘシ。

第六條

別紙繪圖面ニ、ハト印セシ場所ニ於テ、都合宜敷水揚場ヲ日本政府ヨリ取設クヘシ、且各國人所持之荷物ヲ、日本陸揚、或ハ船積スルタメ、素倉（原註、雨露ヲ凌クタメノ小屋ニテ、暫時荷物ヲ置所、）ヲ取建置ヘシ、且江戸ハ開港場ニアラサレハ、外國商船等碇泊スヘカラス、尤外國人所持之荷物ハ、卽チ條約附錄交易規則ニ隨ヒ、横濱ニテ改メヲ受ケ、同所或ハ他ノ開港場ニ於テ、輸入稅ヲ納メタル上ニ非レハ、江戸ヘ陸揚スヘカラス、且江戸ニオイテ輸出稅ヲ取立ル事ヲ要スルニ至ル迄、當分ノ内、外國人江戸ヨリ輸出スル物產モ、横濱運上所ニテ改メヲ受ケ、輸出稅ヲ納メタル上ニ非レハ、同港ニ於テ外國船ヘ積込ムヘカラス。

第七條

本書附錄ノ規則、並ニ條約附錄ノ交易規則ニ隨ヒ、日本人、或ハ外國人所持ノ荷物運送船、引船或ハ乘合船等、帆前、蒸氣ノ差別ナク、江戸ト横濱ノ間ヲ往復スヘシ。

第八條

江戸ヘ出ル外國人ハ、官服ヲ著用シタル士官ノ外ハ、神奈川奉行一覽附アル鑑札ヲ、横濱在留ノ其國ノコンシュルヨリ受取、是ヲ六鄕渡場、或ハ江戸表ニ於テ、日本役人相改ムヘシ、尤鑑札ナク江戸ヘ出ルモノアラハ召捕ヘ、其國ノコンシュルヘ引渡スヘシ、其故ハ、外國人ニ江戸開市ノ趣意ヲ、條約面通リニ遵奉セシメンカタメナリ。

第九條

都而外國船、江戸ヘ著スル時ハ、白キ標木ヲ立タル兩臺場ノ間ヨリ入津スヘシ、尤臺場ノ眞中ヘ著スル時、日本役人乘船致スタメ相扣ヘ可申、其時江戸ヘ出ルタメ、乘組外國人姓名書、船長ヨリ納メ候上、猶鑑札ヲ見セシムル事、日本役人存寄次第タルヘシ。

第十條

兩臺場ヨリ、外國人居留場前マテ出入スル水筋ヲ追ヒ、日本政府ニ於テ澪杭、或ハウキヲ置ヘシ。

第十一條

江戸在留外國人、左ニ記セシ境界ノ内、遊歩勝手次第タルヘシ、卽新利根川原註、又江戸川トモ云、口ヨリ、北方金町ノ關所迄、西ノ方水戸街道ヲ沿ヒ、千住宿大橋迄、夫ヨリ隅田川以南川上ヘ登リ、古谷上郷迄、夫ヨリ小室村、高倉村、小矢田村、荻原村、宮寺村、三木村、田中村、諸村落ヨリ筋ヲ引、日野ノ渡場迄、夫ヨリ玉川口マテ、以テ限トスヘシ、

外國人ハ、江戸表ニ於テ、海陸往來スル事、日本人同樣差障ナカルヘシ。外務省記

○本條、所謂別紙規則書ノ一及ヒ第七條、本書附錄ノ規則ハ、蓋シ下條運送船規則ヲ指ス、繪圖面別ニ見ル所ナシ、

○

阿蘭陀ポリチーキアゲント兼コンシュルゼネラール

ヱキセルレンシー

ドデガラーフフアンポルスブルークヘ

以書翰申進候、先般、江戸外國人居留地規則書差進、御相談オヨヒ置候處、右規則中ノ儀ニ付、閣下並ニ外公使ヨリ被申立候趣モ有之候ニ付、別紙ノ通リ取直シ、且運送船等ノ規則ヲモ取設度、右ニ付、別紙規則書二通相添、猶御相談ニオヨヒ候間、否貴答有之度、且居留地外ヘ外國人夜行ノ儀ハ、懸念不少候故、可成丈見合候樣イタシ度、若シ不得已所用有之、出行ノ節ハ、其筋ヘ申立次第、護衛ノ者差出可申間、必ス同伴イタシ候樣、其人民ヘ諭達可致旨、貴國コンシュルヘ兼テ御命令有

之度候、此段申進候、拜具謹言。

慶應三卯年十月二十七日　　小笠原壹岐守花押

江戸ト横濱ノ間、引船荷物運送船、並ニ外國人乘合船ヲ設ル規則、

第一條

都テ引船、荷物運送船、或ハ乘合船等、兼テ日本長官ノ免許狀所持セサル者ハ、江戸ト横濱ノ間往復ナカルヘキ事。

第二條

免許狀願立者有之節ハ、神奈川奉行、並其筋ノコンシユル取調ノ上、免許狀可相渡、右免許狀ハ、雙方國語ヲ以テ、船ノ模樣等、精敷書加ヘ、神奈川奉行ヨリ相渡シ、コンシユルノ奧印可居事。

第三條

免許狀差出候テヨリ、一ヶ年ヲ過キ、奉行、並ニコンシユル勘考ノ上、免許ヲ差留ヘキカ、又ハ再應差出スヘキカヲ取極ムヘシ、尤最初ハ勿論、其後免許狀相渡候都度都度、手數料トシテ、一トンニ付金壹分宛、日本政府ヘ可納事。

第四條

運送船ハ荷物積込ミシ上、船足水入六尺以上ノ船ハ、免許狀相渡スヘカラス、且日本長官ヨリ別段ノ免許狀ヲ得ルモノニ非レハ、臺場外ニオイテ人、及ヒ荷物ヲ揚卸スヘカラス。

第五條

免許有之船ヘ、役人ヲ爲乘組候事、或ハ江戸、横濱ノ間往復ノ時、役人差添ル事等、都テ日本政府ノ勝手次第タルヘキ事。

第六條

横濱ニ於テ免許有之候船ヘ、荷物積込候節ハ、其品ニヨリ税濟證文、或ハ無稅證文ヲ、其持主ヨリ差添フヘシ、若シ證文ナシニ江戸ヘ陸揚セントスルモノ有之ニオイテハ、事宜次第取上ヘキ事。

第七條
江戸或ハ横濱ニ於テ、免許有之候船ヘ、荷物積込、陸揚ノ儀ハ、日本政府ヨリ差圖セシ波戸場、或ハ其タメニ日本政府ニ於テ免許有之候傳馬船ニ限ルヘキ事。
第八條
免許有之候船等ハ、江戸ト横濱ノ間ニ荷物、或ハ人ヲ運送、竝ニ引船ノ外、何用向タリトモ用ウヘカラス、且海上ハ外國船、亦ハ日本船、或ハ陸地等ヘ寄リ附クヘカラサル事。
第九條
免許ヲ得タル船ニ乘組ノ外國人船長ヲ除クノ外、水夫等ハ江戸ニ於テ上陸スル事ヲ許サス。
第十條
此規則、或ハ追テ可取極ノ規則ヲ違背スルモノアラハ、免許狀取上ル而已ナラス、其コンシュルヘ、兼テ其本國政府ヨリ、士民ヲシテ諸條約ヲ守ラシムル爲ニ與ヘラレシ權ヲ以テ、罰スヘキ事。外務省記
○本條、所謂別紙規則書二通、其一ハ蓋シ上條外國人居留規則ヲ指ス、案スルニ條約類纂二條規則、及ヒ下條新潟夷港規則決定交付、竝ニ十一月朔日ト爲シ、文字小異同アリ、之ヲ外務省ニ質スニ、編纂ノ際、事ニ害ナキ者ハ、文字ヲ删潤セリト、本書編纂、明治七年ニアリ、譯文ノ法モ亦其趣ヲ異ニス、今原文ニ從ヒ、當時ノ面目ヲ存ス。
二十八日、朽木爲綱、近江守○福知山藩主、食封三萬二千石、京ニ至ル、朽木綱鑑家記青山幸宜、峯之助○郡上藩主、食封四萬八千石、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代ラシメント請フ。○青山幸宜家記
二十九日、宣命使日野資宗、ヲ後月輪東陵孝明天皇、ニ遣シ、造陵功竣リ、及ヒ大政古ニ復スルヲ告ク。
宣命

天皇我　詔旨止掛畏岐後月輪東山陵爾恐美恐美母奏給止奏久　平安宮爾天下知食都留先乃　天皇乃大御代爾神乎敬比人乎慈美大坐弖絶在留神祭乎興復給比荒在留　山陵乎修理給比伎故今母亦古昔乃例爾復給弖山陵乎令營造給弊留隨爾功成奴禮其造仕奉終留奴事乎正二位行權大納言藤原朝臣資宗乎差使弖令奏給布此狀乎聞食弖天下乎平久安久護給弊幸給弊止恐美恐美母奏給止奏。

慶應三年十月二十九日　大内記　新作留

○

自外夷渡來而天下紛擾、日不安　宸襟數年、未至治平而　殂落、噫如何乎、今于此慶喜告欲、洞察時運之沿革、慙悔薄德、復歸權政奉戴廟議、與天下共勠力保護　皇國焉、斯稱其德許之、今日以往掌握萬機、而與衆謀宏張綱紀一新流弊也、謹奉告此狀、仰願　神靈照臨四表、海內一和、而不受外夷之侮、太平無窮、居萬民於泰山寧、護　祖業於悠久矣。　日野資宗家記　晚翠樓叢書

○市橋長義、暫ク歸邑セント請フ、之ヲ聽ス。十一月三日ヲ以テ途ニ上ル、

今般私儀急　御用召ニ付、差掛候家政向打捨置、不取敢上京仕候處、諸藩上著之期限被　仰出候ニ付テハ、未日數モ御坐候間、近邊之儀、一ト先歸邑仕、家政向荒增取締置、出京仕度奉存候、其內御用筋之儀御坐候得ハ、重役之者差置候間、御達被成下候ハヽ、一晝夜ニテ乘切上著仕候、右願之通被　仰付被下置候ハ　難有仕合奉存候、此段奉願候、以上。

十月二十九日　市橋下總守

○批紙

願之趣、無據次第被　聞食候、家政向取締置、猶又上京可有之候事。　市橋長義家記

○幕府、令シテ、驛遞法、及ヒ大宮御所造營課金、姑ク其舊ニ仍ラシム。

御政事向之儀ニ付、今般被　仰出之趣モ有之候處、五街道、並脇往還共、人馬賃錢拂方之儀、追而御規則相立候迄ハ、是迄之

通タルヘキ旨、御所ヨリ被　仰出候。

　十一月

御政事向之儀ニ付、今般被　仰出之越モ有之候處、大宮御所御造立御入用國役金之儀、追而御規則相立候迄者、是迄之手續ニ而取扱旨、御所ヨリ被　仰出候間、最前相達候通相心得、夫々納方可被致候、

右之通、御料、私領、寺社領共、不洩樣可被相觸候。

　十一月　榊原政敬家記

○政敬家記ニ、十一月八日、江戸ニ於テ稻葉美濃守相渡シ、去月二十九日、於京地被達候間、向々相觸トアリ。

○幕府、書ヲ各國公使ニ致シ、大政奉還ノ意ヲ陳述ス。

演述之覺、

先年亞墨利加合衆國大統領ノ勸誘ニ從ヒ、廣ク和親之條約ヲ結ヒシヨリ以來、我累世ノ　大君、人心開化ノ域ニ進マン事ヲ謀ルトイヘトモ、鎖國之舊習變シカタク、一種ノ兇徒隨所ニ蜂起シ、頑冥ノ暴人ヲ嗾カシ、外國人ヲ擯斥スルヲ以テ名トシ、或ハ隱然殺害シ、或ハ不敬之事ヲナシ、罪ヲ政府ニ負センコトヲ謀ルモノ不少、我政府、種々鎭定ノ方略ヲ盡シ、或ハ懲シ、或ハ諭シ、猶外國交際ノ妨害ヲ釀サン事ヲ憂ヒ、先年中、特ニ使臣ヲ各國ヘ遣シ、國內不得止之事情ヲ述シメ、兩都、兩港、開市開港之延期ヲ請ヒ、一旦之紛紜ヲ紓ヘ、人心ヲ開誘セント、多年心慮ヲ勞スト イヘトモ、野心ヲ抱テ交誼ヲ妨ケ、禍亂ヲ醸シ、非望ヲ遂ントスルモノ益休ムコトナシ、今大君大統繼嗣之始メ、宇內之形勢ヲ洞察シ、英、佛、米、蘭各國公使ヲ阪城ニ招キ、從來我政府ニ於テ、各國ヘ對シ誠實ナル意衷ヲ表セラレ、是迄延期相成居シ兩都、兩港ヲ開キ、其外條約面ノ通リヲ履行ヒ、我國之信義ヲ各國ニ失ハサル樣、親カラ斷決セラレ、爰ニ於テ多年辛苦セシ所之條約、盡ク施行スル事ヲ得テ、外國之交際、永遠不窮ニ傳ヘ動カサルモノトナレリ、然ルニ彼ノ不軌ヲ謀ラントセル輩、益其黨與ヲ連結シ、邪說暴行ヲ恣ニシ、政府ヲ誹リ、或ハ暴威ヲ以テ　御門ヲ歷シ、或ハ欺騙之術ヲ用ヒテ、己レ政柄ヲ擅ニスルト唱ヘ、或ハ開市貿易ノ利

ヲ專權スル等ノ讒誣ヲ放テ、動モスレハ公卿ヲ劫シ、　御門ニ迫リ、時ニ支吾ノ命令出ル事アリテ、良々政權二途ニ出ルニ近ク、我カ舊來ノ政體ヲ妨ケ、人心何分ニモ一致シ難シ、

一於是　大君御深慮被爲在テ、我國永遠各國へ對スル條約ニ於テ、既ニ大信ヲ立シ上ハ、只國內之治否ハ、天下ノ公議ヲ以テ、部內一致シ、政權一途ニ出ルニアラサレハ、無辜之生靈適從ノ路ヲ失ヒ、國內亂階ヲ生センコトヲ深ク憂ヒ、政體人心一致ヲ基本トスルハ、萬國ノ通義ナルニ從ヒ、今般我開祖　東照神君ヨリ連綿襲受セル政權、　御門ヨリ出ル樣建言アリシ處、許允アリテ、尙衆議ヲ盡シ候樣トノ旨ニテ候、

一我　大君政府ニ於テ、其國へ對シ懇親ナル意衷ハ、前ニ陳述セル通リ、海外ニ信義ヲ丕フセンコトヲ謀リ、多少之苦心ヲ盡セシ事明白ナレハ、尙此上和親友交ノ厚カルヘキハ疑ヲ容レサレトモ、一時國內變革ノ際ニ當リ、自然浮說流言等モ可有之、深ク懸念致候ニ付、是迄之成行推考イタシ、自拙者及演述候、尤此程書翰ヲ以テ申入置候通リ、追テ京師ヨリ委細ノ儀申越次第速ニ可申進候。外務省記

○

演述之覺、

我カ日本ノ　大君、祖宗以來二百五十餘年ヲ經、今日迄傳來セシ政權ヲ、　御門ニ歸シ給フ事ヲ自ラ英斷アリシニ依リ、余等コノ國勢變革ノ際ニ當リテ、或ハ流言浮說ノ起リテ、人心ヲ煽動スルヲ恐レ、各國へ其情狀ヲ演述センコトヲ要スル左ノコトシ、

目今ノ事情ヲ了悉センニ、古往ノ事蹟ヲ粗概說スルニアラサレハ、明晰ナラサルニヨリ、古ニ遡リテ申述候、

往昔二千年前、鴻荒ノ初、國祖天神ノ子孫、常ニ全國ノ政柄ヲ執リ來リ、コレヲ　御門ト稱ス、其後　御門ノ政始テ衰微シ、政權、宰相藤原氏ノ手ニ移リ、公家ノ內、文武ノ官名ヲ具ストイへトモ、文弱ニシテ、自ラ擐甲執銳シテ、不享ヲ制スル能ハス、國家有事ニ臨テハ、必武家ヲ援テ爪牙トナス、政令多岐ニ出サルヲ得ス、武家ノ棟梁ヲ源、平二氏トナス、日本ノ半國ヲ分テ、

東ノ武家ハ源氏ニ屬シ、西ノ武士ハ平氏ニ隷シ、保元、平治ノ亂、　皇子位ヲ爭テ二氏ヲ互ニ依賴シ、源氏亡ヒテ、平氏盛ナル殆二十年、權始テ武家ノ平氏ニ落ツ、ソノ暴横、藤原氏ノ時ニ勝ルヲ以テ、御門源氏ノ冑裔ヲ賴ミテ、平氏ヲ亡ス、源氏父祖ノ舊仇ヲ滅シテ、　朝家ヲ保護スルニヨリテ、　御門、全國兵馬ノ權ヲ擧テ武家ニ歸ス、是西暦千二百年ノ頃ニ當リ、所謂將軍家ノ始トス、卽累世大君職ヲ繼クヘキ德川家同流ノ大祖ナリ、　如斯モノ殆四百年、其間治亂アリトイヘトモ、將軍ノ職ニ任スルモノハ、　朝敵ヲ討伐シ、萬民ヲ安ンスルヲ任トスル故、　御門ヲ輔翼スルノ任ヲ受テ、其功アルモノハ、多ク兵力ト勤王ノ赤心ニ依テナリ、然シテ、時々小康アリトイヘトモ、國内猶靜謐ニ歸セサリシハ、國ノ政令一途ニ歸スルコト無キニヨリテ、各角立ノ風ヲナシテ、干戈止ム時ナク、人民塗炭ニ苦ミ、天下　主上アルヲ知ラサルモノ數百年ナリ、我カ　大君ノ開祖　東照宮、英邁ノ大德アリテ、自カラ汗馬ノ勞ヲ擔テ、大亂ヲ蕩平シ、國家始テ太平ヲ致シ、　御門ヲ安ンシ、　禁裏ヲ造營シ、大ニ供御料ヲ增シ、今ニ至ルマテ、朝紳安穩ニ生活スルヲ得ルハ、コノ勳勞ニ依レハナリ、　御門コノ功績ノ大ナルヲ感嘉シ、　東照宮ヘ政權ヲ擧テ全任シ、國家ノ政務一切預ラサル模範ヲ累代ニ垂レ給フニ依テ、東照宮ノ威權、日ニ烜赫ナルハ、前古將軍ノ曾テ見サル所ナリ、因テ大ニ全國ノ諸侯ヲ江戸ニ會シ、政府ノ基礎ヲ開キ給ヘリ、此時會同スル大小名等、皆其法ヲ仰キ戴カサルモノナク、江戸ニ邸ヲ置キ、隔年或ハ年ニ幾日間、江戸ニ參覲スル事ヲ確定シテ、一人モ異志アルモノナク、累代ノ法則トナレリ、

如斯ナレハ、我カ日本數百年間ノ大亂ヲ一統シ、二百五十餘年ノ太平幸福ノ基ヲ建立シ、其間大小名一人タリトモ、更ニ非望ヲ抱クモノ無キ樣、内亂ヲ鎭定セシハ、振古、　東照宮ノ右ニ出ルモノナシ、故ニ政權ノ歸シテ、其子孫累世ニ及フハ聊疑ヲ容ルヘキモノナシ、其後ニ至リ、宇内ノ形勢大ニ變遷シ、米船江戸灣ニ駛入セリ、爰ニ於テ、從來ノ舊習鎖國ノ規條ヲ廢棄スルコトハ已ムヲ得サルノ勢ナリ、

此時、西洋軍器兵法ニ長シ、我カ國二百餘年太平ノ民ヲ以テ、遽ニ無名ノ戰鬪ヲナスノ無策ヲ知ルノミナラス、世界一變、天涯比隣ノ如キ時世ニ當リテ、東洋ノ一島國ニテ、萬國ヲ仇トシテ自存スルノ事勢ナク、一天廣被ノ人民ヲ拒絕シテ、交ラ

サルノ公理ナキヲ早ク曉解シテ、各國ト交際ヲ開クノ條約ヲ取結フコトヲ決定セリ、

此時ニ當リ、追テ全國ノ大事件トナルヘキ新創ノ事ニシテ、闔國人民ノ思計ラサル事ナレハ、政府ニオイテ其議論ノ結局ヲ盡シテ、到底疑慮ヲ容サル樣處置セサルハ、今更遺憾ノ至リナリ、條約取結ノ初、苟且ニシテ、外國人ト我國人トノ交ヲ疎遠ナラシメハ、交際ノ間ニ誤ヲ生セス、鎖國ノ頑論漸ク銷磨シテ、自然染習ノ期モアルヘシトオモヒシハ、却テ奸民ノ奇貨トナリテ、卒ニ雙方ノ不平隔意ヲ釀成スルニ至リ、諸侯ノ最大ナル、此時ニ乘シ、　大君ノ權ヲ奪ハント謀リ、譎詐ノ點言ヲ逞フシ、京師ヲ欺騙シ、江戸政府ノ處置ヲ一々讒誣スルノ機會ヲ得タリ、

今、　先君政權ノ衰亂セシ緣由ノ種々ヲ枚擧スルハ、臣子ノ分忍ハサル所ニテ、却テ益無キニ似タレハ、爰ニ贅セス、我政府所置ノ宜ヲ得タリトハ謂難シトイヘトモ、遂ニハ鎖國ヲ唱テ、外國ヲ諱嫌フモノヲ漸々ニ抑壓シ、一旦外國ト取結ヒシ條約ヲ履行ハントノ宿志ハ、曾テ止事ナシ、

然トイヘトモ、斷然其約ヲ守リ、其業ヲ果セシモノハ、英敏偉烈ノ天資アル　東照宮ノ遺業ヲ中興スルモ亦、難カラサル天縱ノ　今、大君ノ新タニ政權ヲ掌握シ給ヒシニヨルナリ、然ラサレハ此約ヲ全フスルヤ否、イマタ知ルヘカラサルモノナリ、　今、大君ニハ、政令一途ニ出ルコト、國政ノ大體基本ナルヲ夙ニ洞察セラレ、繼統ノ初ヨリ、京師ニ久住シ、是迄政體ノ虧缺多キヲ見、久シク其職ヲ辭シ給ヒシカ、愈事情不容易ノ勢ニ迫リタルヲ以テ、無餘儀ソノ任ヲ受給ヒシモ、畢竟、是迄彼是ト條約遵奉趣意ニ合フモノ少ケレハ、今ヤコレヲ擧テ一々履行フハ、日本國ノ榮名ヲ保佑センカ爲ナリトイフ所ニ、深ク著眼アリテナリ、

各國公使ヲ大阪城ニ會集シ、懇親ノ情誼深ク、待遇ノ厚キハ勿論、條約施行ノ信ヲ固スル金石ノ如ク、節義ヲ重ンスル泰山ノ如ク、一々其約ヲ遂ケ、一モ欠ク所ナキハ、　今大君ノ大任ノ當然トハイヘトモ、百辛ヲ經テ、毫モ正理ヲ失フコトナキノ確證ヲ見ルヘシ、今日ニ至リ、既ニ條約ヲ全フシ、海外ヘ對シ、一點ノ愧慚ナク、信義ヲ十分ニ立シ上ハ、　大君直チニ國內ノ治否ヲ顧念シ、是迄人心ノ向フ所、求ムル所、總テ日月ノ久ヲ積ミ、自然ノ變化ニ任セリ、然ルニ百年以前、至美ノ政制

ト仰キシモノモ、今日ハ時勢轉變シテ適宜ナラス、宇内ノ形勢、日ヲ追テ一新スルニ當テ、手ヲ束ネテ故習ニ安ンスルハ、自カラ其身ヲ剔スルニ異ナラス、此新法ヲ建ルノ策、毎ニ余等モ討論セシ事不少、畢竟、此大事ヲ議決スルモノハ、英明在上、今大君ノ深衷英斷ニ依ラサルヲ得ス、大君ノ御意内ヲ奉推ニ、政府ノ威力ヲ振ンニハ、全國人心ノ向背ニ從ヒ、號令一途ニ出サルヲ得ス、各國ノ政體皆其意ヲ同フストイヘトモ、余カ國政制ノ未タ曾テ在ラサル所ナリ、今ニ當テ、力ヲ極テ此制度ヲ建立スルニアラサレハ、泰治ヲ成ス能ハス、人々當今ノ形勢ニ於テ急務ナルコト、及ヒ國難ノ由テ起ル所、其他報國ノ赤心ヲ披テ、其公議ヲ聽ヘキナリ、

祖宗傳來ノ權ハ　神宮へ歸シ、依テ　御門へ建言シテ、國内ノ大家巨室ヲ集會シ、今ノ形勢事情ヲ論盡シ、力ヲ共ニシテ政府ノ法ヲ建立シ、將來再ヒ動カスヘカラサルノ政體國律ヲ一定シ、日本全國ノ幸福ト、獨立ノ勢ヲ盛ニスルノ策ヲ議スヘシトノ深意、實ニ國ヲ憂ルノ深キ、古今比類ナキ所ナリ、是卽、當今形勢ノ情實ナリ、故ニ外國ト日本トノ交際ニ於テ、聊ノ難事アルコトナク、總テ是迄ノ如ク平穩ナレハ、必高慮ヲ煩ス勿レ、右樣國家多難ノ日ニ當リ、外國ト交際ヲ全フシ、其公理ヲ失ハサル旨意ナレハ、尙向來事業泰然成遂ルハ言語ヲ待サルヘシ、　大君ニ於テハ條約中之事ハ一句一言ヲ殘サス履行ヒ、約信ヲ全フスルノ榮名ヲ得タレハ、其招ニ應シ來會スル大小名ノ會議ニ於テ、外國事情ヲ辨論スル時ハ、其公平ノ意ニ聳從セサルモノ無カルヘシ、殊ニ指顧響應スル大小名、旗本、全國ノ十カ八九分ナルハ、擧論スルニ及ハサル事ナリ、余等、冀クハ外國政府ニ於テ、平生ノ情誼ヲ以テ、余等カ同心協力中ノ一タラン事ヲ深ク望ム所ナリ、今、如斯賛成輔翼ヲ冀望スルモノハ、他日我カ國ノ益隆盛ナル、卽貴國ノ盡力アリシ明徵ナルコトヲ、形影聲響ノ如クニ視ンコトヲ深ク願フ所ナリ、右ハ是迄ノ成行ヲ推考シテ、余等限リ及演說候、餘者過日書翰ヲ以テ申進候通リ、京師ヨリ申越次第、尙可及報告候。

外務省記

○

和蘭ポリチーキアゲント兼コンシュルゼネラール

エキセルレンシー
ドデガラーフ、ファンポルスブルークヘ

以書翰申進候、閣下ニモ兼テ稔知セラル、如ク、我國政權武門ニ移リシヨリ爰ニ數百年、其間國內群雄各方ニ割據シ、四分五裂ノ際ニ當リ、我　東照宮撥亂反正ノ功アルヲ以テ、人心ノ歸スル所、終ニ大權ヲ握リ、延テ今日ニ及ヘリ、然ルニ、今大君、宇內ノ形勢ヲ洞察セラル、ニ、萬國ノ交際日ニ盛ナルニヨリテハ、國家ノ政權一途ニ出ルニアラサレハ綱紀難立、且萬國公共ノ定格ニ依リテモ、交際ノ道或ハ全キヲ失フニ至ラント深ク思慮被致、從來ノ舊套ヲ改メ、政權ヲ　御門ニ歸シ、廣ク衆論ヲ盡シ、同心協力、維新ノ政ヲ行ハント欲スルノ意ヲ今般言上被及候處、　御門御許容有之候、抑貴國同盟以來、懇親ノ情日ニ切ニシテ、多少ノ告諭啓發ヲ受ケ、諸般ノ事務漸ク開化ニ向フニ至リシハ、全ク閣下等盡力ノ致ス所ト、我等ニ於テモ深ク感謝ニ不堪、此上猶一層ノ厚義尤所懇祈候、猶追々申入候件々モ可有之候得共、前件ノ旨趣報告ニ及ヒ度如此候、拜具謹言。

慶應三年卯十月　　小笠原壹岐守花印

外務省記

○外務省記、本條第一書ニ二十九日頃ト標シ、第二書ノ末ニ、外國奉行江連某等、是書ヲ英國公使館書記官ニ送致スルノ附箋アリ、十月二十九日ト署シ、文中小笠原壹岐守約束致シ候別紙演達覺書一通差進候トアリ、而シテ又第二書ノ首ニ朱書シテ云、舊幕府呈進ノ舊記ニ、十一月十四日、閣老小笠原壹岐守邸ニ蘭公使參向應接ノ後、壹岐守自身是書ヲ付與スト、然レハ漸次各國公使ニ送致セシナルヘシ、今其前ナル者ニ從ヒ、本日ニ收ム、第三書、其日ヲ知ルヘカラス、姑ク此ニ類集ス。

○幕府、書ヲ各國公使ニ致シ、新潟開港ノ期（十二月七日）ヲ改テ、明年三月九日ト爲サンコトヲ報シ、

且其條約書案ヲ示ス。

亞米利加合衆國ミニストルレシデント
ヱキセルレンシー
アルビワンワルケンボルグへ

貴國第十一月四日附貴翰、竝ニ和文トモ落手披見致シ候、西海岸開港場所ノ儀、七尾港ハ我國ニオイテ不都合ノ段御談判ニオヨヒ候處、我國ノ都合ヲ思慮被致、新潟港ニ御同意被成候段、御懇切ノ至リ深ク所謝ニ候、就テハ我政府ニオイテ、兩國ノ利益ヲ計リ、貿易ヲ盛大ニセンカ爲、新潟ヲ互市場ト定メ、佐渡ノ内夷港ヲ繋船場ト治定イタシ、來紙第三條中ニ掲載有之候蒸氣運送船ハ、差向先ツ壹艘相備ヘ可申、右開港場規則ノ儀ハ、閣下御差越シ有之候箇條ニ基キ、我政府決定ノ趣意ヲ參酌シ、別紙ノ通リ取極メ度、尤新潟竝ニ夷町ニ於テ、外國人居留ノタメノ用意イマタ整ハス、開港期限迄ニ間ニ合兼候間、貴國第一月一日ヨリ三ケ月後即千八百六十八年第四月一日ニ至リ、開港互市ノ手續ハ處置可致、去ナカラ其他ノ用意猶十分整兼候儀モ可有之間、閣下ニモ右之廉御承諾有之候樣、偏ニ望ム所ニ候、且貴翰末文ニ、新潟竝ニ夷港開港ノ儀ハ、我政府ノ都合ヲ計ラレ御承諾被成候儀ニ付、條約中右之廉ニ付テ、此後貴國政府ノ趣意ニ任セ、猶十分ノ御處置ヲ可被成トノ趣申越シ有之、政府ノ名代人取極メシ事ヲ公然許允スルノ理ハ、其政府ノ權ナレハ、政府ノ趣意ニ任セラル、トノ趣ハ、余ニ於テ聊異存無之儀ニテ、且貴國政府トイヘトモ、閣下ノ報信ヲ得テ、事情ヲ了解被致候事ト存候得者、是又、閣下同樣ノ好意ヲ以テ、余等協議シテ取極メシ事件ヲ承諾セラル、事ト遙察致シ候、實ニ雙方ノ利益ヲ全フスルモ、唯此事ニアリト存候、此段貴答ニオヨヒ候間、否御申越有之度候、拜具謹言。

慶應三卯年十月二十九日　　小笠原壹岐守花印

第一條

日本政府ハ、貿易ノ用ニ給スルタメ、佐州夷町ノ内ニテ相當ノ貸納屋ヲ取建、船來貨物ヲ積置カシムヘク、尤日數三十日ノ

間ハ、敷料ヲ取立サル事。

第二條

新潟ト夷港ノ沖ニ碇泊スル商船ノタメ、相應ノ端舟ヲ備置、右兩所ニ於テ荷物ヲ陸揚、又ハ船積セシメ、且新潟ト夷港ノ間ニ往來スル端舟ヲモ設ケテ、荷物無恙運送セシムヘシ、イツレモ相當ノ賃銀ヲ取立ヘキ事。

第三條

新潟ト夷港トノ間ヲ自由ニ渡航セシムルタメ、日本政府ニテ蒸氣船ヲ備置、往來ノ者並ニ荷物ヲ運送シ、又ハ荷積ノ端舟ヲ引カシムヘシ、尤相當ノ賃銀ヲ取立ヘキ事、併シ外國人所持ノ蒸氣船、或ハ端舟ヲ以、右所用ニ充ル事勝手タルヘシ。

第四條

若シ夷港海岸ニ於テ、荷物揚卸不便ナル節ハ、日本政府ニテ、夷町ノ後ロニアル湖水ヘ、海手ヨリ往來ノ通路ヲ開クヘキ事。

第五條

日本政府ニテ、新潟川口近傍ヘ相當ナル燈明臺ヲ取建、第一等ノ光ヲ點シ、且水戸口ヘ澪木、或ハ浮木ヲ備ヘテ、出入自在ナラシムヘキ事。

第六條

新潟ニ於テ、他ノ開港場同樣貸納屋ヲ取建、且荷物揚卸ヲ便利ニセンタメ、揚場ヲ取建ヘキ事。

第七條

新潟幷夷港ノ市中ニ於テ、日本人ト相對ニテ旅宿住宅、幷ニ倉庫ヲ借リ、又ハ買入、或ハ正當ナル所用ノタメ、地面ヲ借受ル事勝手タルヘシ、尤別ニ居留地ヲ定メス。

但、外國人地所ヲ借受ル廣狹ハ、新潟ニ於テ東北ハ海面、幷ニ川筋ヲ限リ、西南ハ當今奉行ノ支配所榜示杭アル場所ヲ限リトス、田畑其外政府ヘ年貢ヲ納ル地ハ、相對ヲ不許、前廣奉行所ヘ申立、免許ヲ受ヘシ。

第八條

條約濟各國ノ人民遊歩期程、新潟ハ奉行所ヨリ各方ヘ凡十里ヲ限ルトイヘトモ、其山川ノ都合ニヨリテ定ムヘシ、佐渡ハ全島其限程ヲ不立ヘシ。外務省記

○本條ノ外、各國公使ニ與フル者アリ、文意皆同シ、故ニ之ヲ略ス。

○十一月十二日米國辨理公使復書

千八百六十七年第十二月七日、江戸ニ在ル合衆國公使館ニ於テ、

江戸外國事務執政小笠原壹岐守閣下ニ呈ス、

余、謹テ、新潟及ヒ夷港ノ外國人居留地ノ爲ニ設クル規則書ノ板行ニセル者ヲ、閣下ニ贈ル、此規則ハ、余同僚ノ者ト共ニ同意セシ所ナリ○余、又亞墨利加ノ商人ニ觸流シタル書付モ、板行ニセシヲ以テ、之モ亦此書中ニ封入セリ、但シ此觸書ハ、閣下ノ望ニ從ヒテ告示セル者ニシテ、合衆國ト日本ト取結ヒタル條約ニ據レハ、江戸ノ開市、及ヒ日本西岸ノ新潟ト夷港トノ開港ハ、千八百六十八年第一月一日ニアルベキヲ、來ル第四月一日迄延期セルコトヲ記セシ者ナリ○此延期ハ、余、今日附閣下ニ贈リタル第九十八號ノ書狀中ニ述ヘタル趣ニ因テ、同意セシ者ナリ○余、合衆國政府ノ條約中ニ、日本ノ西岸ニ於テ開クヘキ港トシテハ、余カ新潟ト夷港トヲ撰ヘル取計ヒヲ良善ナリトスルコトヲ信ス、然レトモ我政府、余カ取計ヲ良善トセス、又穿鑿若クハ吟味ノ後、夷港ハ不安全ニシテ、港ト爲ニハ不適當ナルコトモアルヘケレハ、余、我政府ノ爲ニ、日本政府トノ條約ヲ更ニ十分ニ充足セシムルヲ望ムベキ理ヲ貯フ、恐惶敬白。

日本在留合衆國ミニストルレシデント

アルビワンワルケンビュルグ

外務省記

○各國復書、本條ノ外荷蘭アリ、今之ヲ略ス、餘ハ皆原記ヲ逸ス。

晦日、淺野茂勳、紀伊守○茂長ノ嗣子、毛利廣封敬親ノ嗣子、ト、周防新湊ニ會議シ、島津茂久ノ至ルヲ待テ、倶ニ入京セントス。○指華入京日載

○附錄指華入京日載ニ云、木戸準一郎、新湊會議後、直ニ藝州ニ罷越シ、打合書取左ニ、

一薩侯御一同、世子君原註、紀伊守様ヲサス、御上京被爲遊候トノ御事奉畏候。

但、三田尻ニ薩國ヨリ報知有之候ハヽ、早急御報知仕候樣ニトノ御儀承知仕候。

一敝國人數上坂之節、御一艦ヲ以御誘導被成下候ニ付テハ、發期申上次第御揚碇、御手洗港ニテ御待合可被下候段承知仕候。

別段、

一上國之模樣ヲ以テ、後陣陸地罷登リ候儀可有之ト奉存候事、

一上國之形勢萬一モ艱難之節ハ、天下忽兩瑞ト相成可申、恐多モ一旦　至尊雲霧ニ被爲隔候トモ、御同心勠力雲霧ヲ拂盡シ、　至尊ヲ奉迎、　朝廷御回復ヲ目的ト仕候儀ト奉存候事、

一上國之形勢ニヨリ、備後、備中之諸藩、又ハ雲州等、大義ヲ以テ御同樣ニ說諭シ、違反之節ハ、兵馬之覺悟御同前ト奉存候事。

○十一月

朔日、分部光貞、若狹守○大溝藩主、食封二萬石、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代ラシメント請フ。○分部光謙家記

二日、大給乘謨、縫殿頭○田野口藩主、後龍岡ト改稱ス、食封一萬六千石、時ニ松平氏ヲ稱シ、幕府老中、外國總裁タリ、稻葉正已、兵部大輔○館山藩主、正善ノ養父、時ニ幕府老中格、海軍總裁タリ、京ニ至ル。○二條攝政記

○幕府、書ヲ各國公使ニ致シ、江戸開市期限十二月七日ヲ改テ、明年三月九日ト爲ンコトヲ告ケ、且國内布告文案ヲ示ス。

大貌利太泥亞特派公使全權
ミニストル兼コンシユルゼネラール
エキセルレンシー
スル、ハルリー、エス、パークスケシビヘ

以書翰申進候、江戸表外國人貿易ノ爲、我カ十二月七日ヨリ居留可致、兼テノ約定ニ付、今般取極候規則書一通差進候處、右規則中ニ、外國人旅籠屋竝ニ自普請場ノ支度、右日限迄可爲捗取義ニ有之候ヘトモ、何分期限通リ出來シ難キ模樣ニ相成、且當今ノ形勢、江戸、大阪同日ニ相開キ候テハ、都テ不宜ト存候間、江戸開市ノ儀ハ、來ル貴國四月一日迄延期相成候樣イタシ度存候、御承諾有之候ハ、、別紙ノ通、國内ヘ普ク布告可致候、此上猶精々取急キ、右期限無相違成功致シ可申ト存候、此段申進度如此候、拜具謹言。

慶應三卯年月十一月二日　　小笠原壹岐守　花押

觸案、

來ル十二月七日ヨリ江戸開市ノ儀、兼テ相觸置候趣モ有之候處、御都合モ有之候ニ付、各國公使等ヘモ談判之上、來辰年三月九日迄延期相成候間、其旨可相心得候。外務省記

○十一月四日英國公使復書

千八百六十七年第十一月二十九日於江戸、

余、今月二十七日附、外國交易ノタメ、江戸市ヲ開ク事ヲ、來第四月一日迄差延サレ度儀ニ付キ申越サレタル閣下ノ貴翰、

竝ニ閣下右延期ヲ日本人民ニ知ラシムルタメニ、演述シタル別紙布告書ノ下案ヲ落掌セリ、

余、閣下ノ申越シタル趣ニ同意シ、而シテ余カ力ノ及フ丈ハ前文ノ如クナスタメ、日本政府ニ輔助ヲ與フ可キ好意ノ明證ヲ顯サント欲スル意ヲ閣下ニ報知ス、余、マタ江戸ニ在ル外國人居留地ノ諸工作ヲ怠ラシメサル樣、閣下ニ說勸メサルヲ得ス、何トナレハ、右工作來ル第四月一日ニ於テ成功セサル事アルニ於テハ、大ナル罪過、正サシク日本政府ニ歸スヘケレハナリ、

余、閣下ニ右別紙布告書ヲ遲延ナク發出シ、而シテ其公告ニナリタル日附ヲ、余ニ報告シ給ン事ヲ希望ス、恐惶謹言。

日本在留英國特派公使
兼全權ミニストル
ハルリー、エス、パークス

外務省記

○本件、各國ニ照會セシモノナレトモ、皆原記ヲ失ス、外務省記、承諾ノ答書、英國ノ外一二通アリ、其文意大同小異、故ニ之ヲ略ス。

三日、松平慶倫、三河守○津山藩主、食封十萬石、疾ニ罹リ、且長防ノ虞アルヲ以テ、上京ノ期ヲ緩セント請フ、是日、批シテ、本月ヲ限リ會同セシム。

去ル十五日夜、家來御呼出ニ而御渡ニ相成候御書付、昨二十二日相達拜見仕候、右　御書付之趣ニ付而者、被爲　在御用候間、早々上京可仕旨奉畏候、然處、私儀、昨年以來鬱症ニテ、今以聢ト不仕、何トモ奉恐入候、其上長防之趣、兎角不穩樣ニモ風聞承リ申候、乍去、屹度見留付候義無御坐候得共、萬一不慮ニ變事差起リ候節者、僅出雲國ヲ隔候而已ニ而、自國之義無心元、彼是兩條差湊ヒ甚以心配仕候、可相成義ニ御坐候得者、暫時發足之義御猶豫被成下候ハヾ難有奉存候此段奉願候、

以上。

十月二十三日　松平三河守

○本日批紙

當月中ニハ必上京可有之候事。二條攝政記 松平康倫家記

○徳川茂承、蜂須賀齊裕、小笠原忠忱、九鬼隆備、大隅守○綾部藩主、食封一萬九千五百石、疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ緩セント請ヒ、小笠原貞孚、幸松丸○安志藩主、食封一萬石、老臣ヲシテ代ラシメント請フ、二條攝政記 又戸田氏共、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ兵ヲ率テ京ニ至ラシメ、二條攝政記 松平慶憲ノ警衛兵モ亦京ニ至ル。○松平直致家記

○幕府、諸藩ニ令シテ、江戸郭内諸門ヲ警守ス。

外櫻田御門外 內櫻田御門前ヨリ坂下御門前通リ

酒井左衞門尉
井伊掃部頭　松平中務大輔　戸澤中務大輔
西尾隱岐守　松平伊豆守　戸田淡路守

半藏御門外

酒井若狹守　水野眞次郎　三宅備後守
前田丹後守　永井信濃守

田安御門外

眞田信濃守　久世出雲守　阿部駿河守

清水御門外

安藤理三郎　板倉甲斐守　米倉丹後守
森川內膳正　松平丹後守

雉子橋御門外

松平能登守　本多能登守　小出伊勢守
板倉攝津守

一橋御門外　青山左京大夫　内藤若狹守　板倉主計頭
本多豐後守
鍛治橋御門内　溝口誠之進　松平伊賀守　永井日向守
數寄屋橋御門内　土井大炊頭　森美作守　織田筑前守
上杉駿河守
山下御門内　分部若狹守　田村右京大夫　酒井下野守
丹羽長門守　有馬兵庫頭
神田橋御門内　松平刑部大輔　水野肥前守　伊東播磨守
建部三二郎
常盤橋御門内　津輕越中守　本多美濃守　加納嘉元次郎
吳服橋御門内　井上河内守　松平和泉守　細川玄蕃頭
田沼玄蕃頭
馬場先御門内　松平下總守
馬場先御門外　有馬遠江守　九鬼長門守　保科彈正忠
和田御倉門内　松平肥後守
同御門外　秋元但馬守　松前志摩守　增山對馬守
虎ノ御門内　遠藤但馬守　牧野伊勢守　一柳對馬守
稻葉備後守　内田主殿頭
日比谷御門内　間部下總守　遠山信濃守　安部攝津守

外櫻田上杉彈正大弼屋敷脇　渡邊丹後守
　　　　　　　　　　　　　阿部美作守
外櫻田通上杉彈正大弼屋敷脇　堀田相模守
外櫻田通リ松平中務大輔屋敷前　松平大和守
御本丸大手前　酒井雅樂頭

非常之節、人數差出可申旨、
右於美濃守宅、家來呼出達之。（晩翠樓叢書）

四日、幕府ニ命シテ、朝鮮、佛朗西ノ和議ヲ調停セシメ、宗義達ヲシテ其事ヲ幹セシム。

○幕府ヘ達書

兼テ御聞濟相成候儀ニ付、是迄ノ手續ヲ以使節差遣、和議ノ儀可然取扱候樣被　仰出候、對馬守ヘモ右ノ段可相心得旨相達候。（外務省記）

○

宗對馬守

朝鮮國之儀ニ付、幕府伺有之候、右者兼テ　御聞濟ニモ相成居候儀ユヘ、是迄之手續ヲ以使節差遣、和議可取扱　御返答被仰出候條、此段對馬守ニモ可心得旨、被　仰出候事。

十一月　（外務省記 宗重正家記）

○重正家記ニ云、韓、佛和議ノ儀ニ付、爲國使平山圖書頭、十一月中、渡韓發途ノ筈ニ付、朝鮮國掛合向等、精々爲相運置候樣、重正前職中指令有之、早急同國ヘ家來差渡シ、其向掛合ニ及置候末、十一月四日、更ニ朝命之御旨趣ニ依リ、十二月

九日、平山圖書頭彌發京渡韓之治定ニ至居候處、其砌京師不穩ノ勢ニ依リ、姑ク猶豫有之內、終ニ不容易御形勢ニ至リ、其儘國使渡海ノ御沙汰相止ミ、戊辰ノ春、遑テ朝鮮國交通ヲ掌候樣家役被命候。

○柳澤保申、京ニ至ル。柳澤保申家記

○幕府、書ヲ各國公使ニ致シ、貨幣改鑄ノ事、器械備具セサルヲ以テ、期約ニ循フコト能ハサルヲ告ク。

荷蘭ポリチーキアゲント兼コンシュルセネラール
ヱキセルレンシー
ドデガラーフ、フアンポルスフルークへ

以書翰申進候、外國貨幣引替之儀、差支無之樣處置可相成タメ、金銀吹立所取立、吹替方等、當卯十一月中ヨリ新定約書第六條ノ明文ニ基キ、右期限ヨリ施行可致筈之處、西洋法器械取寄ノ分到著相成候上、吹替場所等取立候儀ニ有之、然ル處、機械未タ到著不致、期限迄ニ取行候儀相成カタク、就テハ頃合ノ儀モ現今差定申入兼候、右ハ期限差迫リ居候儀ニ付、兼テ此段爲御心得申進候、拜具謹言。

慶應三卯年十一月四日　　小笠原壹岐守花押

外務省記

○各國ノ照會、原記ヲ失ス、本月二十三日、外國奉行上申書アリ、併錄シテ以テ參考ニ備フ。

貨幣鑄造器械之儀ニ付申上候書付、

外國總奉行
外國奉行

貨幣鑄造器械ノ儀ハ、新定約書第六條ノ明文モ有之候ニ付、既ニ右約書爲御取替之頃、御勘定奉行ヨリ佛國公使ヘ引合之上、御注文方取計候儀ト、私共一同兼テ心得罷在、先般右約書掲載之期限モ差迫リ候所、未タ右器械到著ノ儀モ承及ヒ不申、右取建場所等モ御治定無之哉ニテ、迚モ期限通御施行難相成儀ト奉存候ニ付、イツレニモ右延期之儀、御勘定奉行見込御尋ノ上、豫メ外國公使等ヘ以御書簡被仰入候方ニ可有之旨、當九月中申上候所、右ハ西洋法器械等御取寄ノ分、到著ノ上ニ無之テハ、御施行ノ期限差定メ難申上ニ付、豫メ各國公使ヘ御書簡被差遣候方可然旨、御勘定奉行下ケ札ヲ以申上候ニ付、同十月中、右書面御下相成候間、其趣ヲ以、各國公使等ヘノ御書簡、竝葡、白コンシユルヘ之書簡案共取調差上、當十一月初旬、夫々御達相成候儀ニ有之、然ルニ其後近江守佛國公使ヘ引合ノ砌、話次右器械ノ儀ニ相涉リ候所、是迄右器械同國ヘ御注文相成候儀ハ一切承知不仕旨、同公使申聞候ニ付、不取敢小栗上野介ヘ其趣ヲ以談判仕候所、同人儀ハ、去ル丑年中、柴田日向守、佛國ヘ罷越候節、彼地ニオイテ右御注文方取計候儀ト相心得罷在候旨申聞候ヘ共、日向守儀同國ニオイテ御注文方取扱候ハ、横須賀表ヘ御取建可相成製鐵器、竝其餘火藥製造器械而已、貨幣鑄造器械ノ儀ハ、同國滯留中御國事務取扱居候フロリヘラルトヨリ申立候趣ヲ以、聊與聞仕、銀貨雛形製造等ノ入用トシテ、佛貨六千フランク相殘シ來リ候迄ニテ、素ヨリ同人當地發程前、右之儀ニ付被仰渡等有之儀ハ承及ヒ不申候間、尙爲念取調候所、卽別紙顚末書ノ通ニテ、別段御注文方引受取扱候儀ニハ無之、將備中守上野介ヨリフロリヘラルトヘ往復仕候書簡ニ依リ推考仕候ヘハ、右御注文ノ儀、最初備中守、上野介兩人ニテ引受取扱罷在候哉ニ相見候得共、詰リ是迄右御用御委任ノ者モ無之、御勘定奉行、竝私共一同ノ間ニテ、全ク雙方ノ存込違ヒヨリ、右樣行違候上ハ、今更彼是辨論仕候共無益之儀ニテ、此儀各國公使等ヘ漏泄仕候テハ、第一新定約書第六條之趣ニ相戾リ、各國政府ヘノ御信義モ不相立、彼方ヨリ何樣申出候共、御說破可相成御辭柄モ無之次第ニテ、御不都合無此上儀ト奉存、剩ヘ右期限モ既ニ打過候程ノ義ニ付、急速右器械御注文有之、何トカ御所置無之テハ相成間敷、尤前條日向守巴里滯留中、フロリヘラルトヨリ申立候趣ヲ以、右器械圖、竝銀貨雛形製造等ノ爲メ、佛貨六千フランク相渡シ置候義ニ候上ハ、無論同國商社ヘ御注文相成候方ト奉存候ニ付、右御注文ノ儀、御勘定奉行ヘ被仰付、何レニモ

同國公使ヘ內談ヲ遂ケ、周旋ノ儀、同人ヘ相托シ候樣被仰渡可然奉存候、依之、別紙相添此段申上候、以上。

卯十一月　　　　　　　　　　連　　　　名

丑年中、柴田日向守、佛國御用中、貨幣改鑄器械之儀、御國事務取扱罷在候佛人フロリヘラルトヨリ申立候儀ニ付、取計候顚末、其外左之通、

一去ル丑年、横濱在留佛國公使ヨリ貨幣鑄造器械買入方、並右取建方ニ要用ナル諸職工等差添、早々差送可申旨申越候ニ付テハ、右委細ノ儀承知不致候テハ難取計間、旣ニ公使ヘ書簡ヲ以問合置候ヘ共、未タ回答無之ニ付、右指圖出來候儀ニ候ハヽ、質問イタシ度旨、日向守巴里滯留中、同人宛フロリヘラルトヨリ書簡ヲ以申立候ニ付、我政府ノ爲メ注意有之候段ハ感謝ノ至ニ候ヘ共、右ハ我國貨幣方之吏人ヨリ、横濱在留公使ヘ引合ニオヨヒシ儀ニテ、拙者關係イタシ候儀ニ無之間、質問ノ條件應答難致、依テハ、右公使ノ報答ヲ待テ、尙可然周旋有之度旨、日向守ヨリ返書差遣シ候所、然ル上ハ、公使ノ回答有之迄、器械買入方、其外見合置可申旨、尙又フロリヘラルトヨリ申越候趣ニテ、九月五日附書狀ヲ以、右往復書類、心得ノ爲メ江戶同役共ヘ差廻シ越候事。

一十月中、一兩銀雛形、此度御國ヨリ相廻リ候所、頗ル麤略ニテ模寫難致候間、右雛形ノ分合ニテ大形、且分明ニ寫取吳候樣、巴里ニオイテフロリヘラルトヨリ日向守ヘ申聞候間、右注文通支配向ヘ申付、爲寫取差遣シ候趣ノ事。

　但、右大形ニ寫取候上、寫眞鏡ニテ御國注文之分合通、縮寫イタシ候積ノ旨、フロリヘラルト申聞候趣之事。

一右貨幣雛形製造、並器械繪圖取調方等之爲メ、佛貨六千フランク入用ニ付テハ、右御出方ノ儀、江戶表ヨリ御廻シ相成候樣、公使方ヘ可申遣哉、又ハ製鐵所御入用金ノ內ヨリ差繰出方取計置可申哉之旨、フロリヘラルトヨリ日向守ヘ申出、其後十一月中ニ至リ、尙又書簡ヲ以申立候ニ付、日向守ヨリ製鐵所首長ウヱルテーハ示談ノ上、製鐵所御入用之內ニテ相渡、尤右六千フランク相托シ候ニ付テハ、追テ我政府ヘ右證書添、勘定書差送リ候樣イタシ度旨、支配向ノ者ヨリフロリヘラルトヘ書簡爲差送候處、右承知ノ旨返書差越候ニ付、寅二月中、日向守歸府ノ上、其段周防守殿ヘ申上、右往復書簡、

御勘定奉行ヘ御下相成候様仕度旨ヲ以、進達イタシ置候事。

一同月中、巴里ニオイテ、右一兩判銀貨雛形出來イタシ候旨ニテ、フロリヘラルトヨリ日向守ヘ差出候ニ付、同人歸府ノ節持歸差上候事。

一前段九月五日附、日向守ヨリノ御用狀、十一月十日江戸表ヘ相達シ候間、右書中ノ儀、御勘定奉行ヘ委細申談置候處、其後挨拶無之ニ付、右挨拶次第否可申遣旨、十二月二十九日附、返書差立候ヘ共、途中行違相成、日向守歸府後ニ至リ相戻リ來候事。

右之外、丑八月二十一日附、商社取組ノ儀ニ付、松平備中守、小栗上野介ヨリフロリヘラルトヘ差送候書簡末段、先頃相願置候貨幣器械ノ儀、宜周旋賴入候トノ文段有之、十一月中、巴里ニオイテフロリヘラルトヨリ右書簡、日向守ヘ差示シ候趣ノ事、

千八百六十六年二月十日附ヲ以、フロリヘラルトヨリ小栗上野介、星野備中守宛差送候書簡中、一兩判ノ見本ヲ既ニ差送、其外右貨幣ノ儀ニ付、日本政府ノ爲メ要用ノ儀ヲ報告セシ書簡ヲ、貴下等最早落手セシ儀ト存候旨、書載有之候事。　外務省記

五日、本多忠貫、伊豫守○神戸藩主、食封一萬五千石、山田奉行ノ職ニ在ルヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ入京セシメント請フ、之ヲ聽ス。

御書付拜見仕候、　御別紙之通被　仰出候ニ付テハ、　御用被爲在候間、早々上京可仕旨、御沙汰御坐候段、被　仰出候旨、被　仰渡承知奉畏候、然ル處、　兩宮之儀者、格別　御尊崇被爲在候ニ付、　御警衛向、近來別テ手厚ニ相心得候樣被　仰渡モ御坐候處、當節柄、私留守中、右御警衛之儀深心配仕候儀ニ御坐候、私爲名代、家老共上京爲仕候テ不苦儀ニ御坐候哉、此段御内慮奉伺候、以上。

十月二十七日　　　　本多伊豫守

別紙奉伺候儀ハ、兩宮御警衛筋深配慮罷在候儀ニ御坐候、且神領取締等、手厚ニ相心得罷在候處、此節於市中異事之取沙汰モ有之、神慮之程モ奉恐入候、右ニ付テハ、私留守中、御警衛幷取締等之儀深心配仕候間、格別之思召ヲ以、今般奉伺候儀早々御下知被下度奉存候、以上。二條攝政記 本多忠貫家記

十月二十七日 本多伊豫守

〇本日批紙

無據次第ニモ相聞、名代上京可有之候事。本多忠貫家記

〇前田慶寧、加賀守〇加賀藩主、食封百二萬二千七百石、時ニ松平氏ヲ稱ス、阿部正方、主計頭〇福山藩主、食封十一萬石、疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ緩セント請フ。二條攝政記

〇幕府、再ヒ諸藩ニ令シテ、江戸外郭、及ヒ各處ヲ警守ス。

大目付

御目付へ、

覺、

酒井下野守

内田主殿頭

伊東播磨守

右、芝山内御警衛相心得ニ付、下野守ハ山下御門内、主殿頭ハ虎之御門内へ非常人數出之儀被成御免候段相達候間、得其意、右組合之面々へ、其方共ヨリ可被達候事。

非常之節、昌平橋ヘ人數可被差出候、依之、神田橋非常人數出ハ被成御免候、委細之儀ハ御目付ヘ可被談候。

秋元但馬守

非常之節、東橋ヘ人數可被差出候、依之、和田倉御門外非常人數出被成御免候。

松平中務大輔

非常之節、人數出之儀相達ニ付テハ、右場所ヘ出張致シ、登城ニ不及候間、可被得其意候。

青山左京大夫

同文言、

秋元但馬守　内藤若狹守　松平能登守
水野肥前守　遠藤但馬守　堀　右京亮

同文言、

右之通相達候間、可被得其意候。

酒井紀伊守

非常之節、内櫻田御門前ヨリ坂下御門前通リヘ人數差出候樣、左衛門尉ヘ相達候間、左衛門尉申談、其方儀モ同所ヘ人數可被差出候、委細之儀ハ大目付、御目付ヘ可被談候。

永代橋　酒井左京亮　大橋　牧野遠江守　兩國橋　佐竹播磨守
東橋　秋元但馬守　淺草御門　大岡主膳正　下谷新シ橋　黒田筑後守
和泉橋　大久保三九郎　筋違橋御門内　酒井銈次郎　昌平橋　伊東播磨守
水道橋内　井上宮内　小石川御門内　松平大藏少輔　牛込御門内　植村駿河守
市ヶ谷御門内　京極飛驒守　喰違　松平攝津守　赤坂御門内　岡部筑前守

溜池邊
土方聟千代
水野日向守　山口長次郎

新シ橋
織田攝津守　片桐主膳正

幸橋御門内
井上辰若丸　北條相模守　織田出雲守
末下備中守　山内攝津守　稲垣若狹守
谷大膳亮　堀内藏頭　青未源五郎
松平主計頭　柳生但馬守　堀右京亮

右非常之節、書面之場所ヘ人數差出候樣相達候間、得其意、可然向ヘ其方共ヨリ可被達候之事。

丹羽左京大夫

非常之節、新橋ヘ人數可差出旨相達候間、得其意、非常人數出之面々ヘハ、其方共ヨリ通達可被致候。晩翠樓叢書

○德川茂承ノ家臣、江戸ニ在ル者、（榊原耿之介、竹内孫助謀主ト爲ルト云、）幕府ノ親戚譜第、及ヒ諸藩士ヲ其邸ニ會シ、德川氏ト君臣ノ義ヲ全フシ、幕府ヲ扶持センコトヲ勸喩シ、且其意見ヲ問フ。

一名分條理御正シニ付、御親藩、御譜代初、君臣之分一際相盡申度事、

一同心協力、兵制一致之事、

一今般御復政之擧、御曠世之御猛斷、大公至誠之御英圖ヨリ被爲出候御儀、實ニ不堪感泣御次第ニ候、併御連技、御譜代臣子之面々ヨリ奉論候得者、　九重御幼沖、輦下御動搖之折柄、御祖宗奕世之御大業、卒然一朝御辭解ニ相成候段、爭テカ坐視傍觀奉ルヘキ、悲憤痛惋此事ニ候、此上利害得失ヲ不顧、各爲德川氏益君臣之大義ヲ砥勵シ、以テ數百年之御厚恩ニ報シ候外無御坐候儀ト被存候、抑東照宮御武德ヲ以天下ヲ戡定被爲在、大ニ内外諸侯ヲ被封候テヨリ、何レモ君臣之分

相守リ候事、殆于今三百年、其功德之隆、前古以來御比例モ無之處、近年草莽不逞之徒、姦說ヲ鼓張シ、禍ヲ蕭牆之內ニ釀シ、次第ニ御羽翼ヲ奉殺、御孤立之勢ニ相成候ヨリ、既ニ近來討幕之企相唱候ニ至リ、又一變シテ今日之御場ニ奉陷候、剩、諸侯之進退ハ、今ヨリ兩役ニテ被取扱候旨被仰出、且又召之諸侯上京之上ハ、王臣ト相心得候樣御沙汰モ出候哉之趣風說モ有之、實以恐入候次第ニテ、一旦右朝命相下リ候上ハ、卽日幕府ト君臣之恩義相絕シ候得ハ、又候如何樣成異變出來候哉モ難計、實ニ寒心之至リニ被存候、夫子弟功臣ヲ建立シ、夫々大封等ヲ被宛行候儀ハ申迄モ無之事ニ候得共、偏愛之御私情ヨリ出候儀萬々無之、斯ル時コソ、飽迄扶持匡救之爲ニ被建置候處、昇平數百年、上下之情隔絕シ、君臣之恩義澆薄ニ趣キ、御連枝、御譜代之向迄モ各民土ヲ私シ、自ラ開拓封殖致候心得ニ相成、甚シキハ從來之姦說ニ籠絡セラレ、往々幕府ト君臣ノ大義ヲ忘レ、其御大難ニ臨ミ、不計モ不忠不義ニ陷入候モ難計、近年國家御多難之折柄、御親藩其外各天幕之間ニ周旋シ、聊臨機之御大權不被爲失、全御祖宗之御大業御恢復之一途ニ出候處、遽ニ臣僕之諸侯ト御比肩之德川家ニ被爲成候事、實ニ冠履顚倒、綱常拂地共可申、嗚呼、歲寒シテ松柏ノ後凋ヲ知ル、誰カ幕府ト君臣之大義ヲ明ニシ、寧、忘恩之王臣タランヨリ、全義之陪臣トナリ、益砥節奮武之目的相立候得ハ、卽チ依然タル德川氏ヲ不被爲失、世運挽回之期モ可有之哉ト被存候、猶御深算御見込モ有之候ハヽ、國家之爲譯テ御示シ有之度候事。

卯十一月五日　　晩翠樓叢書
水戸藩士小宮山綏介筆記

○佐倉藩老臣平野知秋手記ニ、本日ノ會議三日ト爲ス、又云、九日、紀州藩士榊原耿之介、竹內孫助二人來リ、過日諭示書中、寧忘恩云々ノ二句削去候ニ付、左樣相心得吳候樣申聞。

○德川慶篤答書

今般、御譜代大名衆之重職御呼出ニテ、御書取御渡ニ相成候儀、實以當今之御盛擧ニテ、幕府之御爲大義ヲ被唱候御先鞭不堪感佩候、右以來、諸藩ニテモ追々義勇ヲ鼓舞被致候趣相聞候、抑御當家之儀ハ、室町氏之末、天乃亂離ヲ被厭候砌、累世積德之御家ニテ、　東照宮被爲興、撥亂反正之盛勳偉業被爲立、海內億兆之黎庶ヲ水火之中ヨリ被拯出、莫大之御功德、天之

寵眷ヲ被爲蒙、皇國剖判以來、未曾有之泰平ヲ御開キ被下候儀ニテ、其御仍孫御遙冑ニ至ル迄、御福祉ヲ被爲受、千萬世之後迄モ盡期無之御儀ニテ有之處、貴論之通、近年草莽不逞之徒、恐多クモ勤　王討幕之邪說相唱、妄ニ　幕府ニテ天下ヲ私シ、　朝廷ヲ奉輕蔑候テ、富貴ヲ恣ニ被致候樣申觸、海內之人心致惑亂候類モ有之、是ハ全ク名義ヲ借リ、天下ヲ紛亂爲致候迄ノ儀ニハ候得共、其動亂ニ乘シ、大權ヲ奪候奸謀黠計モ難計儀、乍去、奸謀黠計ニテ一時天下ヲ驚擾爲致候共、人心ヲ令感服候儀ハ決テ相成間敷候、幾重ニモ道義之至誠ヲ以、累世恩波ニ浴居候者之義氣憤發爲致候ハヽ、貔貅百萬之兵モ、咄嗟之間ニ被指出候儀、仍テ當今之所、別テ御仁德ヲ被施候儀專要ト被存候、既ニ　東照宮ニテ討死之者、其子幼弱ニテ軍役勤兼候得共、父之祿其儘被下置候旨、甲斐武田家ニテ傳聞、德川家之仁德、後世必天下ヲ可取ト被評候由、況仁漸義摩之御親兵、彼名義ヲ借リ候奸徒之爲壓倒被致候儀、決テ無之道理ト存候、古ヨリ坂東八州之兵力、天下ニモ敵スルニ足レリト申候ヘハ、天時地利モ不及候人和ヲ養置候テ、草莽不逞之徒、奸謀黠計ヲ施候共、其術中ニ陷リ候者ハ有之間敷、將亦兵制之儀、素ヨリ一致ニ無之候テハ、不相成候所、遠藩ニハ頑陋之風習モ有之、砲銃ハ卒伍ノ兵使ニテ、士大夫ノ器械ニハ無之樣心得候者モ可有之候得共、今ノ砲銃ハ古ノ弓弩ニテ、唯古今之沿革有之處ト存候、古昔、上ハ將帥ヨリ下ハ士卒ニ至ル迄、弓箭ニテ致勝負候儀、當今迚モ弓箭刀槍ヲ廢候儀ニモ無之候得共、沿革之勢無據儀、砲銃ヲ以古ノ弓箭ト相心得候テ、列藩ノ兵制必定一致ニ可相成候、弊藩之儀ハ、奧羽之諸大藩ヘモ地勢聯接致候間、萬一上國ニテ騷亂ヲ生候儀有之候ハヽ、唇齒之勢ニテ相援合、　幕府ヲ輔翼可致ハ申迄モ無之、殊ニ御親藩被建置候ハ、　東照宮深御神慮被爲在候御事ト存候、御安危之御場合、各其一藩ヲ取纒置候テ、勿論幾重ニモ同心協力、是非於當節　幕府ノ御威權ヲ奉恢復、海內ヲ鎭壓致度、　幕府ノ御威權ヲ恢復ニ相成候得ハ、縱令跋扈猖獗之諸藩有之共、自然震慴畏縮、覬覦ノ企相止可申、然ル處、　幕威ヲ致恢復候得ハ、自然、　王室御衰微ニ被爲至候勢ニモ可相成ト申唱候者モ有之候得共、草莽不逞之徒、陽ニ尊　王ヲ唱候ハ、全ク名義ヲ借リ候迄之儀故、萬一志ヲ得候テ、乍恐　朝廷ヲモ如何可奉處置哉、左候ヘハ、矢張　幕府御恢復之所、却テ　王室御安泰之御基ト被存候、方今之形勢ニテハ、億兆之民殆水火之中ニ陷リ候哉モ難計候間、機會不相失、列藩麾下ヲ及糾合、

幕府之御威權ヲ奉恢復、厚ク敬上推戴之道ヲ盡シ、　王室ヲ泰山ノ安ニ奉置候樣仕度、是則、　幕府ハ申迄モ無之、御親藩中同心協力、　皇國ヘ奉報候大義ト奉存候事。

小宮山綏介筆記

○

今般、御復政名分條理御正ニ付テハ、御親藩、御譜代始、君臣之分一際盡申度、同心協力、兵制一致候樣御相談之趣、下總守ヘ曲ニ申聞候所、御適當之御論ト、聊異論之儀無之、御同意之事ニ候、既ニ上京之儀蒙　朝命候以來、如御談判利害得失ヲ不論、君臣之大義ヲ守、爲　德川家盡砥節奮武盡忠節、數百年之御厚恩報候外ニ一念無之決定、先達テ官位返上之儀相伺置候事ニ御坐候得共、元來小藩威力不足、殆痛心罷在候ニ付、希ハ微忠之一念御救助御協力被下候段、私共ヨリ申上候樣申聞候事。

松平下總守家來
山田求馬

小宮山綏介筆記

○

御達之趣謹テ拜誦仕候、右ニテハ被爲對　御宗家ヘ御心擧之段奉感服候、私ニ於テモ、二百餘年之御恩澤、爭カ遺失可仕哉、乍憚、領知差上候共、一分之忠勤相勵候志ニ御座候、就テハ是迄之通、幕府之御政權御掌握被遊、被奉安　宸襟之御籌策、私只管所望ニ候、乍併、討幕府之妄說相唱候輩ヲ惜ミ、王政復古モ異議致候私情ヨリ、　幕府ヲ擁立シ、　天朝ヲ捨ル之論ニ相響、却テ天下兩立之場ヲ開候間、御不爲ニ可相成、全以　天朝之御爲ヲ奉存、赤心飽迄貫徹候樣致度、此段深御賢慮奉願候、此外聊違存無御座候、以上。

十一月

片桐主膳正
堀內藏頭
九鬼長門守

武內孫助筆記

○慶篤、忠誠、貞篤等答書、竝ニ日ヲ失ス、故ニ此ニ收ム、其他諸藩答議、別ニ見ル所ナシ。

六日、兵庫開港ノ期近キニ在ルヲ以テ、幕府、本地居留外國人ノ游歩區域ヲ定ムルヲ布告ス。

此度、兵庫御開相成候ニ付テハ、外國人共、京地ヲ離事十里之地方ヲ除、其他兵庫ヨリ十里以内歩行可致候ニ付、若外國人ヘ關係致候引合之者有之節ハ、兵庫奉行差紙ヲ以テ呼出シ相尋候儀モ可有之候間、其段兼テ相心得、不都合無之樣可致候、右之通、兵庫最寄御料、私領、寺社領共、不洩樣可被相觸候。

十一月　森川俊方家記

○俊方家記ニ云、十二月朔日、小笠原壹岐守殿御渡、大目付ヘ云々、右之通、去ル六日、於京地相觸候間、當地ニオイテ可被相觸候ト、今京師現布ノ原記ヲ失スルヲ以テ、俊方家記ニ據リ之ヲ補フ。

復古記　卷三　終

總括兼纂修
一等修撰　臣　長松幹

校勘
一等修撰　臣　長炗
一等協修　臣　四屋恒之

校錄
一等書記　臣　澤渡廣孝

繕寫
二等繕寫生　臣　小川長和
二等繕寫生　臣　小島春

復古記 卷四

慶應三年丁卯十一月八日ニ起リ十五日ニ至ル

〇十一月

八日、是ヨリ先、九條尚忠、(入道前關白、)久我建通、(入道前内大臣、)千種有文、(入道前少將、)岩倉具視、(入道前中將〇具慶ノ子、)富小路敬直、(入道前中務大輔、)罪ヲ獲テ洛外ニ居ル、是日、命シテ、各其家ニ歸ラシム

別業住居之儀、尤是迄之通、且本宅、我ハ近邊別莊一宿之儀、可爲勝手事、
右之通、去二月二十七日被　仰出候得共、自今歸宅可爲勝手被　仰出候旨、攝政殿被命候事、

入道前關白

入道前内大臣
千種入道
岩倉入道
富小路入道

右、去二月二十九日、被免入京之節、住居洛外之事、
且月一度計歸宅不苦、一宿之外不相成候事、
右被　仰出候得共、自今歸宅可爲勝手被　仰出候旨、攝政殿被命候事。(五辻安仲手記)

〇幕府、英國公使將ニ横濱ヨリ兵庫ニ來ラントシ、其軍艦一隻先至ルヲ稟ス。

横濱表碇泊之英國軍艦一艘、同國士官乘組、一昨六日夜、兵庫津ヘ來著致候ニ付、其筋役人共ヨリ來意相糺候所、不日、同國公使横濱ヨリ罷越候ニ付、右來著迄碇泊罷在候旨申聞候趣、只今屆差出候、右ハ同所詰役人ヨリ應接爲及候上、猶可申上候得共、先此段申上候、以上。

十一月八日〔二條攝政記〕

○松平慶永、井伊直憲、京ニ至ル。〔二條攝政記〕

○春嶽私記〔十月二十八日ノ條〕ニ云、　朝幕之召命、旁早々御上京無之テハ不相適候得共、是迄度々之御上京、イツ迚モ始之程ハ幕府ヨリ御依賴候得共、次第ニ事之艱難葛藤ヲ生シ候ニ隨ヒ、御論モ合兼、遂ニハ御物別レニテ、御歸國ニ相成候樣之姿ニテ、此度ハ何分幕府之淵底反覆相伺候上、可然トノ御評定ニテ、二十日、十之丞差立、二十一日夜京著、翌二十二日、板倉殿拜謁之上、今般之御一條、御紙上之趣ニテ略拜察ハ仕候得共、猶此上前途之御見込モ如何之御儀ニ被爲在候哉、天下之公議ヲ御待被遊候御趣意ニハ御坐候得トモ、差當リ　朝廷萬機之御政道如何被遊候哉、是迄之小朝廷トハ御樣子モ違ヒ、乍恐　御當惑ニモ可被爲在歟ト奉想察候、萬一夫等之邊ヨリ、又々御戻シニ相成候樣之御儀ニ被爲運候テハ、以之外ナル御不都合ト申、且一時之御權謀ニテ、　朝廷御蔑如被爲在候御姿ニテ、天下之人心モ服シ申間敷、愈騷擾ヲ釀シ可申歟、第一此末御實踐之御見込ハ如何被爲在候哉、是等之御次第篤ト相伺ヒ候テ上京モ仕リ、涓涘一滴之微力モ可相盡覺悟モ仕度旨申述候處、板倉殿御答ニハ、御尤至極之御尋ニテ候、元來此度之御一擧、土州ニ御迫ラレ、無御據此場ヘ被爲運候樣ニモ相聞エ可申候得共、決シテ左樣之譯ニハ無之、政權一途ニ歸セスシテハ、御國内治リ兼候ト申ハ、前日ヨリノ御著眼ニテ、時機ヲ御見合セ被遊候處、此度時勢ニ乘シ、土州之建白好機會到來ニ付、日頃持滿之强弩ヲ御切發チ被遊候御儀ニテ、實ニ公平正大、只管天下之安全ヲ被爲量候台慮ニテ、一毫御鄙吝之御念頭ハ不被成御坐候、然ル處、老公御賢察之通リ、　朝廷ニテハ、是迄更ニ御手覺不被爲在候儀故、一小事之　御裁決モ御六ケ敷候故、矢張是迄之如ク、御相談之御模樣ニ有之、此處甚御困窮

之御場合ニテ、其御相談ニ御乘リ被遊、御差支無之樣御取計ラヒ有之候得ハ、御奉還ハ虛名ニテ、其實ハ御威權ヲ御手離シ無之ト申輿論モ可差起勢モ有之、又截然ト御振離シ、一切御取合無之候得ハ、御立派之樣ニハ候得共、　朝廷ニテ今日之御差支ト相成候得ハ、又奉還ヲ名トシテ、結局ハ　朝廷之御迷惑ヲ御引出被遊、朝廷御窘窮之所ヨリ、再ヒ御依賴御委任之時ヲ御待被遊候ト申嫌疑ナキニシモアラス、御進退ニ御谷リ被成候御運ヒニ付、　朝廷之御樣子モ御功者之御儀ト申、幕府ハ申迄モ無之候得ハ、此中間之御扱ヲ御賴ミ被成、御私ナク御奉還之御盛意モ相立、朝野之嫌疑消除イタシ、諸侯會同ヲ御待付ケ、公議ニ附セラレ候樣被成度トノ御趣意之由、悃々御物語有之ニ付、十之丞罷歸リ、仰之趣申聞、早々致上京候樣可仕ト及御請、二十五日夜歸著、一時ハ前途危難ノ論モ種々作レ𪜈、唯速ニ　朝幕之危難ニ不被爲趨候テハ、御大義ニオイテ御濟被成間敷ト、御上京御決定相成リシハ、實ニ二十八日ナリ、又云、十日登場、第一尊慮如何ト被仰上處、此度ノ義ハ土ノ建白ニ發候ニハ相違無之候ヘトモ、其節ノ景況左樣無之テハ、眼前ニ四分八裂ノ勢ヒニ相迫リ候故、事爰ニ及ヒタレトモ、其所置ニ至ツテハ、別ニ所見有之事ニテ、其譯ハ、是迄ノ御政體ニテハ、種々苦惱致候ヘトモ、如何ニシテモ政法兩途ニ相成候、總テ　朝廷ニテ御裁決相成候ヘハ、論モ無之候ヘトモ、夫ハ御六ケ敷、幕ニテ決候ヘハ、　朝ニ迫リ、或ハ　朝ヲ凌クノ說ヲ免レス、政兩途ニテ治ルヘキ所以無之事故、是非一途ニ相成候樣有之度ト申ハ、御承知ノ通宿昔ノ定見故、彼建白ト、時勢切迫トノ機會ニ當リ、兼テノ所見ヲ投セシナリ、　皇國如此ナラスシテ決シテ治リカタキト申見込ヲ立、治否如何ノ大體ヲ體認シテ所置ニ及ヒシニ、　朝廷ニテモ被　聞食、大ニ宜ク、此上ハ會同ノ公議ニ附シ、何トカ治體相立度、第一議事院等ノ事ニテ、帶刀、象二郎抔モ、夫々存寄モ有之可申出トノ事候ヘハ申談、兎モ角モ國是ヲ決候心算ニテ、當時ハ唯差當ル事共ヲ伺ノ上、取計居候迄ノ事也、容堂モ是非上京可有之候ヘハ、厚申談度抔上意ノ由、御扣處ニテ伊賀守殿ヘ御逢ノ處、御同人ハ何分口惜事ニ相成候ト吝惜ノ語氣甚敷、公ニハ如何ト御申ニ付、公モ神祖ノ御盛業御持張被成兼候處ハ、御殘念思召候ヘトモ、如此相成候上ハ、何ト可相成哉、此上ハ斷然トシテ鄙吝ノ心ヲ擲却シ、內府公ノ、　王國ノ爲ニ御家ノ御政權ヲ御拋被遊候御盛意ヲ遵奉シ、益以治安ノ策ヲ建候ヨリ外ハ無之ト御申候處、兔角餘リニ惜キ事故、玄蕃抔トモ色々

申見候ヘトモ、更ニ良策無之、何トカ致方ハ有之間敷哉ト被申ニ付、夫ハ死シタル子ノ齢ヲ數ヘ候譬ノ如ク、迚モ返ラヌ而已ナラス、却テ御盛德ヲ損スルニ至候ヘハ、各ニモ其心得有之、上樣ノ御鄙吝、或ハ御計策ノ樣ニ世上ノ眺有之候テハ、御大切至極ノ事ニ候ヘハ、決シテ左樣ノ義御口外ハ有之間敷ト御申ノ處、是迄吾輩ニオイテハ、幕府ヲ主位トシテ公論正義ノ賓客ヲ請待ノ心算候處、此度其邊御超越ニテ、總テ　朝廷ヘ御還シ相成候事ニ候ヘハ、御正理ハ無間然候ヘトモ、今後ノ見込ハ立兼候、何分一度御投出シノ上候ヘハ、此度ノ被仰出ヲトコ迄モ御食言ニ不被爲成樣仕度トハ存候ヘトモ、今日上ニオイテ何ヲスル事モ無之、誠ニ茫然タル者ニテ、殆當惑罷在候ト被申候由。

九日、前田利鬯ノ朔平門前警衞ヲ罷メ、松平慶憲ヲ以テ之ニ代フ。

○松平慶憲ヘ口達

人數揃之旨屆被出候ニ付、朔平御門前御固場人數支度次第、松平飛驒守方ト交代可致候、尤日限之義ハ、兩家示談之上取極可申候。松平直致家記

○利鬯家記ニ云、傳奏ヨリ朔平御門前警衞被免、爲代松平兵部大輔家來ヘ可相渡旨、口達ニテ仰渡サル、十一日引渡ス。

○幕府、前月二十二日外國事宜批紙中、所謂二三藩ハ、朝旨別ニ指定スル所アリヤヲ稟咨ス、是日、批シテ、別ニ指定スル所ナキヲ以テ、衆議之ヲ決行セシム。

○五日幕府上申書

外國取扱之儀、此程相伺候處、御附紙之兩三藩ハ、朝廷御見込モ被爲在候哉、差定兼候間、今一應諸藩衆議ヲ被爲盡候樣致度旨、年寄共申聞候事。大槻文彥筆記

○本日批紙

兩三藩之儀、於朝廷御見込不被爲在候、差向候儀有之節ハ、諸藩衆議之上、御決定可相成候事。大槻文彥筆記

○幕府、譜第諸侯ノ職務ニ就キ、及ヒ警衛ニ服シ、若クハ疾病幼弱ノ者ハ、皆老臣ヲシテ代リテ朝召ニ應セシメント請フ、命シテ、警衛ヲ除クノ外、各其事由ヲ上陳シテ、命ヲ請ハシム。

守護職

所司代

老中　板倉伊賀守　稲葉美濃守

松平周防守　松平縫殿頭

大阪城代　牧野越中守

若年寄　永井肥前守　松平左衛門尉

松平豊前守　石川若狭守

立花出雲守　平岡丹波守

京極主膳正　大關肥後守

戸田大和守

寺社奉行　土屋釆女正　戸田土佐守

駿府城代　本多紀伊守

甲府城代　大久保加賀守

山田奉行　本多伊豫守

陸軍奉行　戸田長門守

右者、夫々役儀被申付置候者ニテ、諸侯上京迄ハ、是迄之通ト之　御沙汰モ有之候得ハ、御國事之差支ニモ相成候間、在府之面々、且所々城代並奉行等者、當時上京爲仕兼候、右之趣、御兩卿へ可申入旨、年寄共申聞候事。

十一月　二條攝政記

○

今般、被　仰出之趣モ有之候ニ付、衆諸侯一同上京可致儀ニハ候得共、不殘上京候テ一體之警衛向差支之儀モ有之候間、當時在府之者之内、繰合難出來面々ハ、爲名代重臣共爲差出、國邑ニ罷在候モノモ、病氣幼少之輩ハ無據儀ニ付、是亦名代爲差出候樣可仕ト奉存候、尤名前之儀、猶取調可申上候、此段申上候、以上。

十一月八日　二條攝政記 晩翠樓叢書

○本日批紙

當時警衛之向ハ、名代重臣差登可申、且在府之者並國邑ニ罷在候モノ、幼少之輩ニテモ、銘々無據子細申立、時宜相伺可申事。晩翠樓叢書

○松平武聰、右近將監○濱田藩主、食封六萬千石、曩ニ封ヲ失ヒ、美作ノ別邑ニ寓ス、幕府假ニ貳萬石ノ地ヲ給ス、戊辰五月ニ至リ、貳萬七千八百石ヲ賜ヒ、後鶴田藩ト稱ス、疾ヲ以テ、召命ヲ辭ス。

○幕府ノ親戚譜第諸藩、陰ニ政權ヲ復センコトヲ謀ルモノアリ、福岡孝弟、藤治○土佐藩士、辻維嶽將曹○安藝藩士、等、松平慶永ニ說キ、其詿誤スル所ト爲ルコト勿ラシム。二條攝政記

○春嶽私記ニ云、九日夕、土州藩士福岡藤次參邸申出候趣意ハ、此度内府公御反正ノ思召立、稀世ノ御英斷ニテ、方今ノ御美事ニ相運ヒ候處、御三家並御親藩ノ内ニテモ、今一度幕威ヲ被復度抔ノ議論モ有之哉ニテ、種々ノ浮說流言モ有之ニ付、大夫等ノ先入御當方樣御聞込無之已前ニ、實際達御聽御疑惑不相生樣相願度ト、同志一同申談罷出候由ニテ、頃日來ノ事情申立候件々、最初土州老侯、後藤象二郎初ヨリ内府公ヘノ建白、事機今少早ク有之候歟ト存込候ヘトモ、過激輩ノ討幕論尤

織盛ニ相成、已ニ事ヲ擧ントスル勢ニ立至リ候故、討幕ノ名義モ不正、且　輦下ニ事ヲ生シ候テハ不相濟次第等、百方說得ニ及候ヘトモ、中々行届兼、殊ノ外骨折レ候事ニ有之候、其内漸間隙ヲ得候故、直樣及建白候事ニ付、無據御用捨ノ義モ極テ切迫ニ相伺候運ノ内、建白以前、永井玄蕃頭殿大盡力ニテ、此場ニ及候事ニテ、此度永井殿ノ功力多分ノ由、紀州抔ハ甚見込違ヒニテ、先達テ　朝廷ヨリ諸藩ヘ　御尋ノ節ノ御答書ニモ、此體ニテハ迚モ治リ不申間、御義理合ニモ御元返シニ可相成儀、畢竟ケ樣相運ヒ候モ、覬覦ノ藩有之候ヨリ起リ候ト申儀有之、覬覦ノ二字、於弊藩耳ニ懸リ候ヘトモ、役向ノ懸合ニ致候テハ、結局爭端ニ相成候テハ、無益故、書生輩ヘ申聞爲及議論候處、朝廷ヘ差出候奉書ニハ、左樣ノ儀ハ無之抔、不分明ノ應對ニテ、今以決著不致、會藩ハ其砌及一論候處、外島機兵衞、手代木直右衞門ノ兩人ハ、尤ト存候ヘトモ、猶衆議ノ上可及返答トノ事ニテ、三日ノ後、議論兩端ニ分レ候間、今暫待呉候樣トノ事ニテ、第八日ノ後、君前ニテ定論御同意ノ段及御挨拶候樣、會侯被命候由ニテ返答有之、表向同心候ヘトモ、油斷ハ出來不申候、津藩ハ一議論ニテ同意ニ相成由、會藩大野英馬、尹宮ヘ參上、不當ノ事トモ御議論申上候ヘ共、象二郎、尹宮ヘ伺候、夫々及論辨、尹宮モ土老侯御同意ト申候御事ニ被爲成由、扨今後ノ見込ハ何レニ議事院ヲ開キ、上院下院ヲ分チ、上ハ攝政公初、內府公御主宰ニテ、明侯御加リ、下ハ諸藩士ヨリ草莽輩モ出役ニ相成、何分　皇國ノ國體如斯ト御議定有之迄ノ事ニテ、大體ノ處ハ程モ可有之事候ヘハ、有名諸侯サヘ御會同ニ相成候ハヽ、其處ニテ篤ト御決議有之、　御簾前ニテ御誓約有之、御確定之上、外諸侯ヘハ如何ト　御垂問、欠席諸侯ヘハ　朝廷ヨリ御通達位ノ事ニテ相濟、違背ノ者ハ御追討ト申程成、正大公明ノ御基本相立不申候ハテハ相成申間敷トノ儀ハ、內府公ヘ申上、至極尤ニ思召候トノ御沙汰候ハヽ、此御方樣ニモ猶御參考被成下候樣トノ趣ナリ、間云、越前表抔ヘ相聞候ハ、討幕論盛ニ相成、幕ニテモ敵對ノ聲息有之トノ實否如何ト承ルニ、其通リ相違無之、實ニ危殆ノ形勢ニ相迫候事候ヘトモ、御反正ノ御英斷ニテ、一時ニ消沮ニ及ヒ、實ハ浮浪ノ徒、過激輩ハ失望ノ由、乍併、唯今ノ浮說旺盛ニ相成候ヘハ、暴黨又々時ヲ得、屯集ノ場ヘ可相運歟ト、甚心痛ノ由、又今更幕威ヲ御持被成候テハ、實ニ夫限ノ事ニ可相成由等物語レリ、同日藝藩辻將曹參邸、藤治同樣、浮說御聞込ニ不相成樣致度、既ニ尾、越ハ不同意故、上京無之トノ流言モ有之

處、此度御上京有之、同志大ニ副望ノ趣申達之。

十日、是ヨリ先、幕府　毛利敬親（長門藩主、食封三十六萬九千石餘、）ノ支封主、及ヒ老臣ヲ大阪ニ召スノ令（七月ニ在リ、）ヲ停メ、更ニ諸侯ノ公議ヲ經、朝命ヲ以テ、之ヲ召サンコトヲ請フ、之ヲ可ス、是日、幕府、淺野茂長ヲシテ敬親ニ傳諭シ、後命ヲ俟シム。

○幕府上申書

長防之儀、寛大之御處置可取計旨、當五月中被仰出候ニ付、家老竝末家吉川監物上坂候樣、松平安藝守ヲ以申達候處、末家監物ニハ不快ニ付、家老壹人上坂可致段届出候間、少ニテモ快候ハヽ、家老一同上坂可仕旨、猶又相達置候處、右ハ重大之事件ニ付、改テ衆諸侯ト公議之上、從朝廷御沙汰被爲在候儀ト奉存候、此段奉申上候。

十月廿四日　（大槻文彦筆記）

○九日批紙

家老以下上坂之事、從幕府沙汰有之候處、尚從朝廷御沙汰有之候迄、上坂可見合旨可被　相達候事。（大槻文彦筆記）

○文彦筆記ニ、批紙ヲ十一月十九日ト署ス、按スルニ、後條幕府達書ハ、批可ヲ得テ之ヲ發スルモノナレハ、十ノ字衍ナルコト明ナリ、故ニ之ヲ削ル。

○本日幕府達書

長防之儀、早々寛大之處置可取計旨、從　御所被　仰出候ニ付、申達候儀有之候間、末家之内一人、吉川監物竝家老一人致上坂候樣、毛利家へ可相達旨、當七月中相達置候得共、右ハ猶從　朝廷　御沙汰有之候迄、上坂可見合旨申達候樣、從　朝廷被　仰出候間、其段毛利家竝吉川監物ヘモ可被達候。（毛利元徳家記）

○脇坂安斐、（淡路守○龍野藩主、食封五萬千八十九石、）櫻井忠興、（遠江守○尼崎藩士、食封四萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、）京ニ抵ル、（二條攝政記）堀直虎、（内藏頭○須坂藩主、食封一萬五十三石、）疾ヲ以テ、召命ヲ辭ス。（堀直明家記）

十一日、前田利鬯、歸藩ヲ請フ、之ヲ聽ス、（十四日途ニ上ル、）大給乘謨、稻葉正已、江戸ニ返ル。（二條攝政記）

○十日上申書

飛驒守義、當四月爲御警衛上京仕、于今滯京罷在候、然ル處、九月二十六日、參　内御暇被下置候得共、去月十五日、御用被爲在候間、滯京可仕旨被　仰渡之趣モ御坐候得共、御警衛御場所モ御免被　仰付候得ハ、御用之廉ハ、定テ諸侯上京之上御尋之御儀ニモ可有御坐候ヘハ、飛驒守存體之儀ハ、本家ニ相隨ヒ可申儀ニ御坐候得ハ、何分加賀守ヘ一應面會不仕テハ、外可申上心底モ無御坐、且ハ無程、加賀守上京ニモ可相成、其上久々滯京罷在、在所表政事向行屆兼、人心折合之程モ難計、夫是難澀之次第モ不少候間、何卒一旦御暇歸邑被　仰付被下候樣、格別之御慈評ヲ以、速ニ御沙汰被成下候ハ、不日發途仕度、只管此段奉歎願候、以上。

松平飛驒守家來

松見勘左衛門

十一月

（二條攝政記）

○本日批紙

願之趣無據次第ニ候間、一先歸邑可有之候事。（前田利鬯家記）

十二日、國事掛近衞忠房、（左大臣、）一條實良、（右大臣、）近衞忠熈、（前關白左大臣、）鷹司輔熈、（前關白右大臣、）大炊御門家信、（内大臣、）九條道孝、（權大納言、）連署シテ、大政復古、綱紀確立ノ策問二道、太政官八省以下再興ノ議案ヲ上リ、

廷議豫メ一定スル所アラント請フ、批シテ、策問二道ヲ採納ス。

今度、應　召諸藩上京候上、諸事可相伺儀モ可有之候得共、於　禁中粗御居リ之處不被爲在候テハ、御不都合歟ト存候ニ付、見込之趣言上仕候間、此邊ヲ以、何卒諸藩ヘ被尋下候テハ如何可有之候哉、猶宜可有　聖斷存候事。

十一月

道孝
家信
輔熙
忠熙
實良
忠房

兩役中

大樹ヘ、

方今宇内之形勢ヲ考察シ、建白之旨趣、殊外國之交際日ニ盛ナルニヨリ、愈　朝權一途ニ於不出者、綱紀難立、舊習ヲ改メ、政權ヲ　朝廷ニ奉歸之趣、時勢難默止旨ヲ以、言上有之ニ付、則被　聞食候、然ル上ハ、自王制一途之綱紀可相立事勢ニ候、然ルニ王制復古之儀ニ至候而者、諸事班々朦昧之儀ニ而者、綱紀モ難相立、縱令者當今諸藩封建之儀抔、迚モ往古郡縣之儀ニモ難相成哉ニ被　思召、左候得者、　朝廷之綱紀、何邊一途ニ奉置候見込ニ有之候哉、過日言上之大意者被　聞食候得共、右封郡之事ニ不限、諸事見込之處被　尋下候事、

右邊之以御趣意、　被尋下候歟。

召之諸藩一同ヘ、

德川内大臣、方今之形勢ヲ考察シ、建白之旨趣、殊外國之交際日ニ盛ナルニヨリ、愈　朝權一途ニ於不出者、綱紀難立、舊習

ヲ改メ、政權ヲ　朝廷ニ奉歸之趣、時勢難默止言上有之ニ付、則被　聞食候、然ル上者、自王制一途之綱記可相立事勢ニ候、然ルニ王制復古之儀ニ至候而者、諸事班々曖昧之儀ニ而者、綱紀モ難相立、縱令者當今諸藩封建之儀等、迚モ往古郡縣之儀ニモ難相成哉ニ被　思召候、然ル時者、　朝廷之綱紀何邊一途ニ奉置候見込ニ有之候哉、右封郡之一事ニ不限、諸事見込之處、德川内大臣へ被　尋下候間、於諸藩モ、　朝權一途之見込可有言上候事、

右邊之以御趣意、被　仰出候歟、併可相成者　御再興之條々相顯シ、大樹竝ニ　召之諸藩へ被　尋下候方可然哉ニ奉存候間、先愚存見込之件々、乍不束左ニ申上候。

中務省使部七十人 直丁十人

大舍人寮舍人八百人 直丁二百人　使部二十人　　圖書寮使部二十人 直丁二人

内藏寮使部二十人 直丁二人　　縫殿寮使部二十人 直丁二人

陰陽寮使部二十人 直丁三人　　内匠寮

○太政官攝政、左大臣、右大臣、内大臣、員外内大臣、大中納言以下、

太政官則禁中也、撰器量之人、議奏之員數可被增歟、

大中納言正官御再興可有之歟、

式部省使部八十人 直丁五人　　大學寮使部二十人 直丁二人

治部省使部六十人 直丁四人　　雅樂寮使部二十人 直丁二人　　玄蕃寮使部二十人 直丁二人

○此寮頭一人、考察之國主可被任之歟、尤一ヶ年勤務之中在官、

諸陵寮使部十人 直丁一人

○從治部省到宮内省、大輔、權大輔之兩官、看察之國主ニ可被授歟、尤一ヶ年勤務中在官、

民部省 使部六十人 直丁四人　主計寮 使部二十人 直丁二人　主税寮 使部二十人 直丁二人

兵部省 使部六十人 直丁四人　隼人司 使部六人 直丁一人

○此司正一人、考察之藩主可被任之歟、尤一ヶ年勤務之間在官、

刑部省 使部八十人 直丁六人　囚獄司 物部四十人 物部丁二十人

○此司正一人、考察之藩主可被任之歟、一ヶ年在官、

大藏省 使部六十人 直丁四人 驅使丁六人　織部司 使部六人 直丁一人

宮内省 使部六十人 直丁四人　大膳職 使部三十人 直丁二人 驅使丁八十人

木工寮 使部二十人 直丁二人　大炊寮 使部二十人 直丁二人 驅使丁三十人

主殿寮 使部二十人 直丁二人 驅使丁八十人　典藥寮 使部二十人 直丁二人

掃部寮　正親司 使部十人 直丁一人

内膳司 使部十人 直丁一人　造酒司 使部十人 直丁一人

采女司 使部十二人 直丁一人　主水司 使部十人 直丁一人 驅使丁二十人

馬寮左右 使部二十人 直丁二人

○此寮左右之内、權頭一人、考察之國主ニ可被授歟、一ヶ年在官、

諸藩士之術ニ堪タル者ヲ取テ令看察歟、

兵庫寮使部二十人 直丁二人

○此寮頭一人、同前、八省之寮ニ准シ、兵器ニ委シキ者ヲ取テ可看察歟、

右八院

省以十萬石以上之主二人、爲看察、　寮以十萬石以上之家長一人、竝文筆算勘ニ堪タル者置之、　司同之

○省國主、准國主、一年交代ニテ、時務看察可成之、官者堂上地下之中人撰有テ可被任、武藩者專監察スヘキ歟、國主之家長、竝近側可然之士人撰有之、出頭扶助可成歟、使部、直丁等、同下部之者可當歟、

寮ニ總テ省ニ同シ、　司十萬石前後之主可看察歟、規則總テ省寮歟、

彈正臺使部三十人 直丁二人

撿非違使兼　衞門府物部三十人 直丁四人　使部三十人

兵衞府兵衞四百人 直丁二人　使部三十人　鑄錢司通寶、總テ於京師可被鑄歟、

○此司長官一人、考察之藩主可授之歟、一ケ年在官、

瀧口

右十萬石以上、同以下之主二人、看察之家長、其外武ニ堪タル者被置之歟、

鑄錢之義、是亦考察事ニ委敷者、同前。

○臺國主、准國主考察、竝家長藩士等人撰有之可出頭歟、一年交代ニテ、考之官人ハ堂上、地下人撰有之被授之歟、

撿非違使同上、　臺少弼一人被任國主歟、一ケ年勤番中在官、

京職左右　使部三十人 直丁二人

掌左京戸口名籍、字養百姓、糺察所部、貢擧雜徭、良賤訴訟、市廛度量、倉廩租調、兵士器仗、道橋過所、闌遺雜物、僧尼名籍事、

大國之主看察之、或ハ在來之役人糺察有之、舊弊無之樣、武藩ヨリ可撿證歟、

京師之工商、悉皆寮司ニ附屬之上者、京職考察之通、其寮司非違糺察可有之歟。

○京職國主、准國主、竝尾、紀、水、加之歟、一年交代ニテ、時勢考察之家長、藩士人撰ニテ出頭、使部、直丁等、殊ニ人撰可有之歟、官人ハ堂上、地下人撰有之被授官歟、

此職亮左右之中、一人國主ニ被授歟、尤一ヶ年勤務中在官、

市司東西　物部二十人 直丁一人　使部十人 價長五人

掌財貨交易、器物眞僞、度量輕重、賣買沽價、禁察非違事、

大國之主看察云々、准京職。

○市司國主、准國主云々、准京職。

○省寮、司職共、其局之御用途、年番、考察之諸侯ヨリ獻貢歟、臺又是ニ同シ、

總テ看察一ヶ年勤務之儀、諸侯近國遠國等有之、縱令者三五十里以下ハ行程費用等少分ニテ可相濟故、勤務之順次早ク相立、遠國ハ對是順次緩ニ可有之歟、國費公平ニ相成候樣可有之歟、

一諸國租税之事、　一萬石ニ十石歟、案スルニ、十ノ字千ノ誤カ、

一五畿內、　禁中之御賄ニ可被當歟、　付右五ヶ國之諸侯領分如何、代官所同斷、

一太政官者、不取敢　宮中則是也、又別ニ被置歟、

一八省　彈正　京職　市司其外夫々之局者、不取敢　御所近傍之里坊、夫々被借用歟、

一學習院者、被擬諸學院歟、

一六十餘州國府之事、
一國之中、大城ヲ國府代ト爲テ、其國之諸侯令集會、國事ヲ議シ、遙授介ニ付テ奏事可爲之歟、
遙授介古之如ク、人撰アリテ可被置歟、
一國書ニ委敷人體御撰擧有之、律令格式等之書可被爲講候事、
既ニ於學習院被行有之トイヘトモ、更ニ此事ヲ被　仰付歟、
一禁中御造作始、諸國寺社、道、橋、川其外、是迄徳川ヨリ取扱成來候事トモ如何、
省、寮、司之御用途、年番考察之諸侯ヨリ獻貢候ハヽ、右之事トモハ更徳川之課役ニ可被　仰出歟。
○一武家之官内大臣始、大中納言、參議、羽林是迄通リ、員外之儘可指置歟、
一武家侍從可被止歟、
一省、寮、司以下官、一ケ年勤務之人被任候得者、其他員外可被止歟、
八省ヲ始御再興ニ付テハ、

中山前大納言　三條前大納言　柳原大納言
廣橋大納言　橋本中納言　野宮中納言
八條前中納言　右大辨宰相　大藏卿
長谷三位　頭右中辨　藏人辨
柳原侍從

右之輩ヘ御用掛リ被　仰付、武家ト及示談候ヘハ、復古之條々行屆候樣奉存候事。　近衛篤麿家記　晩翠樓叢書
○批紙
第一條　右御文面之通大樹ヘ御尋、

第二條 中務省云々、以下御ヶ條、先御尋無之。晩翠樓叢書

○行頭圏ヲ加フル者ハ、悉ク附票ニ係ル。

○本件日ヲ失ス、之ヲ近衞、九條二家ニ質セトモ、記錄ノ徵スヘキナシ、嵯峨實愛雜記中、十二日建白書出スノ文アリ、故ニ此ニ收ム、又副書ノ署名、兩役中ノ三字、晩翠樓叢書ニ攝政殿ニ作ル。

○朽木爲綱、藩ニ歸ル。○朽木綱鑑家記

十三日、有馬道純、遠江守○丸岡藩主、食封五萬石、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代ラシメント請ヒ、津輕承敍、式部少輔○黑石藩主、食封一萬石、疾アリ、召ニ應スルコト能ハサルヲ以テ、朝旨ヲ候ス。○二條攝政記

十四日、本多康穰、主膳正○膳所藩主、食封六萬石、京ニ至ル、本多康穰家記

○是ヨリ先、民間、符籙天ヨリ降ルト稱シ、之ヲ獲ルモノ、以テ祥瑞ト爲シ、奔走舞踏、幾ト狂スルカ如シ、參尾ノ地方ニ始リ、近畿殊ニ甚シク、覃テ山陽、南海ノ諸道ニ及フ、時勢見聞錄是日、京都町奉行、令シテ、其狂躁雜遝ヲ禁ス。

○京都町奉行布令

先日來、降神ヲ祝候ト唱、無譯花美之衣類等ヲ著シ、中ニハ異形之風體ニテ大勢連立、町々躍リ歩行、座敷內等迄土足之儘、深更ニ至迄踊騷キ、理不盡之仕方、追々增長致シ、產業之差支相成、迷惑之者モ有之由相聞、以之外之事ニ候、祝酒振舞候義ハ格別、右體踊騷キ候樣之義ハ致間敷候、若不相用候ハヽ、急度可及沙汰次第ニモ可相成候間、其所々之役人共ヨリ、精々心付候樣、雜色ヨリ所々ヘ可申通候事。

卯十一月　時勢見聞錄

○附錄土御門晴雄内儀へ申上書

先頃以來、世上守札其餘種々之品下降仕候趣、右吉凶有無之事可申上旨謹奉候、中天之間、自然生形候而落降候物者、凡雨、雪、雷、雹、霰或流星、隕石、此餘降候物モ有之事候得共、今度者、守札或雜物降候趣、元來守札天上有之候品ニ無之、何分於諸社寺祈願仕、尊信之族へ授與候義候へハ、自天上猥守札降候道理無之、全邪法邪行之者之所爲可有之存候、吉凶之有無者何モ無之存候、自然散來候ハヽ、守札之被納置候御場所へ被納置、格別御信仰無之方御無難哉ト存候事。

十一月　晴雄

土御門晴榮家記

○晴榮家記ニ曰、十一月一日、内々御内儀ヨリ吉凶可申上旨被示、仍二日獻上、

十五日、大政歸一綱紀確立ノ策問ヲ、德川慶喜及ヒ德川慶勝、松平慶永ニ下シ、尋テ之ヲ在京諸侯ニ下問ス。

方今宇内ノ形勢ヲ考察シ、建白ノ旨越、殊ニ外國交際日ニ盛ンナルニヨリ、愈　朝權一途ニ於不出ハ綱紀難立、舊習ヲ改メ、政權ヲ　朝廷ニ奉歸ノ趣、時勢難默止旨ヲ以テ言上有之、則被　聞食候、然ル上ハ、自　王制一途ノ綱紀可相立時勢ニ候、然ルニ　王制復古ノ儀ニ至候テハ、諸事班々曖昧ノ儀ニテハ綱紀モ難相立、假令ハ當今諸藩封建ノ義杯迚モ、往古郡縣ノ儀ニモ難相成哉ニモ被　思召候、左候得ハ、朝廷ノ綱紀何邊一途ニ奉置候見込ニ有之候哉、過日言上之大意ハ被聞食候得共、右封郡之事ニ不限、諸事見込ノ處被尋下候間、朝權一途ノ見込可有言上候事。

春嶽私記　大槻文彦筆記

○春嶽私記ニ所藏、尾、越ニ下セシモノハ、文首ニ德川内大臣ノ五字ヲ冠シ、過日言上之大意ハ被聞召候得共ノ十四字ナシ、文彦筆記ニハ、右以下封建ノ事ニ不限、諸事見込ノ邊可有言上候事ニ作ル、十二日、近衞忠房等建白ニ、召ノ諸藩一同へ

ノ文案アリ、尾、越ノ外、諸家記見ル所ナシ、嵯峨實愛手記ニ、六公建白御下問、大樹ヘハ以松平越中守被尋下、書取武傳日野渡シ、尾、越ヘハ兩役列坐日野ヨリ、尾ハ成瀨、越ハ本多修理ナリトアリ、蓋本日ハ、幕府、尾、越ノミニ下問シ、諸藩ニハ十七日ニ至リ、下ニ收ムル政權之儀云々ノ文ヲ下タセシモノカ、實愛手記、及ヒ坤儀革正錄證スヘキニ似タリ。

○十七日下問書

大樹竝各藩ヘ

政權之儀、武家ヘ御委任以來數百年、於　朝廷廢絶之舊典、卽今難被爲行屆儀者、十目之所視ニ候、乍去、被　聞食候上ハ、神祇官ヲ始、太政官夫々舊儀御再興之　思召ニ候間、何レハ八省、其外寮司之內ヘ諸藩ヲ被爲　召加、年々交代可有勤仕、細目之儀者退々可被　仰出、　朝廷御基本ニ被爲在候間、右ニ基キ、見込言上可有之　思召候事、

一何レ往古郡縣之通ニハ難相成ニ付、封建之儘、名分明ニ相立候樣被遊度候、

一御政務筋、往古之通ニ者迚モ難相運被　思召候得共、總而新法而已之御政務ニ相成候而者、甚不宜候間、可成儀者、舊儀ニ基キ候樣被　思食候事。

十一月十七日（近衞篤麿家記・酒井忠祿家記）

○坤儀革正錄ニ云、十五日、幕府竝尾、越ヘ被仰出、十七日、改テ本條ノ御沙汰候事ト、故ニ此ニ併收ス。

○酒井忠篤、酒井忠惇、松平忠誠、大河內信古、（刑部大輔○參河吉田藩主、後豐橋ト改ム、食封七萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、）井上正直、（河內守○濱松藩主、後鶴舞ニ移封ス、食封六萬石、）本多忠民、（六人竝ニ幕府溜ノ間詰格、）連署シテ、書ヲ幕府ニ呈シ、官位ヲ朝廷ニ還シ、以テ德川氏臣屬ノ義ヲ明ニセント請ヒ、安部信發、（攝津守○岡部藩主、食封二萬二百五十石、後別邑半原ニ移リ、半原藩ト稱ス、）酒井忠强、（下野守○伊勢崎藩主、食封二萬石、）板倉勝弘、（攝津守○庭瀨藩主、食封二萬石、）渡邊章綱、（丹後守○伯太藩主、食封一萬三千五百二十石、）加納久宜、（嘉元次郎○一宮藩主、食封一萬三千石、）酒井忠美、（銈次郎○勝山藩主、食封一萬二千石、後加知山ト改ム、）

戸田忠行、長門守○足利藩主、食封一萬千石、 牧野忠泰、伊勢守○三根山藩主、食封一萬千石、後峯岡ト改ム、 米津政敏、伊勢守○長瀞藩主、食封一萬千石、後別邑大網ニ移リ、再ヒ龍崎ニ移リ、藩名ヲ改ム、 本多忠鵬、修理○西端藩主、食封一萬五百石、 山口弘達、長次郎○牛久藩主、食封一萬十七石、 田沼意尊、玄蕃頭○相良藩主、食封一萬石、後小久保ニ移封ス、 戸田氏良、淡路守○大垣新田、食封一萬石、後野村藩ト稱ス、 堀之美、右京亮○椎谷藩主、食封一萬石、 柳生俊益、但馬守○柳生藩主、食封一萬石、 稲葉正善、備後守○館山藩主、食封一萬石、 有馬氏弘、兵庫頭○吹上藩主、食封一萬石、 森川俊方、内膳正○生實藩主、食封一萬石、 蒔田廣孝、相模守○淺尾藩主、食封一萬石、 瀧脇信敏、丹後守○小島藩主、食封一萬石、後櫻井ニ移封ス、時ニ松平氏ヲ稱ス、 内田正學、主殿頭○小見川藩主、食封一萬石、 永井直哉、信濃守○櫛羅藩主、食封一萬石、 井上正順、宮内○高岡藩主、食封一萬石、 井上正己辰若丸下妻藩主、食封一萬石○以上竝ニ菊ノ間椽側詰、 モ亦連疏シテ、朝廷ノ召命ヲ辭シ、君臣ノ義ヲ失セスシテ、僭越ノ罪ヲ犯スコト勿ラント請フ。

○忠篤以下ノ書

御譜代家筋之儀ハ、井伊家ヲ始、萬石以上ハ大名ト唱來候得共、萬石以下御家來ニ替リ無之、御家御盛衰ニ隨、其唱替リ候迄ニ候ヘハ、此度被仰出候趣ニ付テハ、何レモ大名之字ヲ退キ、御家人同様ニ相心得、官位返上可仕、萬石以下官位モ同様ニ有之趣、朝廷ヘ被仰立候様仕度候事。

月　日　　　連　名

小宮山綏介筆記

○信發以下ノ書

今般、従　天朝被爲召、早々上京仕候様、兩奏衆ヨリ御達御坐候段、不肖之微臣、身ニ取候テハ實以意表之次第、冥加至極難有仕合ニ奉存候得共、抑此程御復政被爲仰立候儀ハ、高明正大之御實情ヨリ被爲出候御英斷ニテ、不堪感泣御儀ニ奉存候、年去、右ハ不容易大事件ニ付、一同悲痛慨歎仕罷在候、元來當席之儀ハ、御代々様ヨリ格別之蒙御愛遇、祖先ヨリ土地人民ヲ御宛行、數百年子々孫々安穩ニ相續仕候段、其恩澤之廣大、實ニ骨髓ニ通徹罷在、寸刻モ忘却不仕、斯ル御場合ニ相成候

上ハ、猶更以報恩盡忠、進退存亡、隨台命之外他念無御坐候、然ル所、今日ニ至リ禁闕ニ罷出候儀ハ、第一非分僭上之儀ニ相成、對御當家君臣之大義相立不申候間、不奉　朝命次第ニ相聞、不敬之罪科難遁奉恐入候得共、君臣之大義ヲ不失、上下名分正敷相立、大倫綱常明白相成候樣懇願罷在候、何卒微々ノ赤心奮發之程、御汲分被成下被仰立被下候樣仕度、此段幾重ニモ伏而奉願候、以上。

菊之間椽頰詰　一統

十一月十五日

安部信順家記
瀧脇信敏家記

○本多忠直家記ニ云、丁卯十一月下旬、於營中酒井忠篤以下同坐、閣老稻葉正邦、小笠原長行ヨリ談シ有之、一同異論無之、書面差出ノ儀ハ、上席ノ者ニ依賴致シ置、尤書面御受取ニ相成候哉否、同席ヨリ通達無之承知不仕ト、然レトモ、松平忠誠ノ德川茂承家臣ニ答フル書中ニ、先達テ官位返上之儀相伺置ト云フニ據レハ、其上書セシコト疑ナシ、但其日ヲ詳ニセス、今大河内信古家記、十五日頃ノ文ニ據リテ此ニ收ム、信古家記ニ又云、其節出席名前、松平忠誠、酒井忠惇、本多忠民、井上正直、酒井忠篤、稻葉正邦、松井康英、小笠原長行ト、案スルニ正邦以下三人、當時現ニ老中ト爲ル、恐ラクハ溜詰格ト連署スルノ理ナシ、唯其議ニ參スル者ナラン、故ニ之ヲ除ク、菊ノ間椽頰詰連署姓名、別ニ見ル所ナシ、姑ク本年正月ノ武鑑ニ據リテ、之ヲ塡ス。

○賊アリ、阪本直柔、龍馬、中岡道正慎太郎○並ニ土佐藩士、ヲ刺ス。

○春嶽私記ニ云、十六日、福岡藤次來話、昨夜坂本龍馬被及殺候由、相手ハ恐ラクハ新選組中ナラントノ事ノ由、先日來、間者浮浪輩中ニ入込居タル由、旅宿ハ河原町土邸隣ノ町家ナリ、夜中一人アツテ手紙ヲ持來リ、僕ヲ招出シ屆呉候樣申ニ付、僕二階ヘ上候後ヨリ、兩人ノ刺客附上リ、直樣龍馬居間ヘ切込候由、龍馬ハ側ニ置タル脇指ヲ拔キ合セントセシカト、深手ニテ不及其儀、最期之由、外一人ト對話中ノ事ニテ、此一人モ深手負候、僕モ同斷ナリ、二客ハ逃去リ不知行衞、夫カ爲ニ種

種嫌疑ヲ起シ、大ニ心痛ノ由。
○晩翠樓叢書ニ云、才谷梅太郎ト相聞候者、全坂本龍馬ノ變名ニテ、同人儀、先達テ一旦脫走中ノ人ニテ、此度右樣變死ニ逢ヒ候、依テ實名相知候由、坂本龍馬紀直柔、年齡二十七歲、若黨藤吉十九歲、今一人來士ハ中岡愼太郎道正變名石川誠之介、三十歲、右才谷、中岡ノ二士、高名博論ノ人ニ有之候。

復古記　巻四　終

總括兼纂修
一等修撰　臣　長松幹

校勘
一等修撰　臣　長炗
一等協修　臣　四屋恒之

校錄
一等書記　臣　澤渡廣孝

繕寫
二等繕寫生　臣　小川長和
二等繕寫生　臣　小島春

復古記　卷五

慶應三年丁卯十一月十六日ニ起リ二十二日ニ至ル

○十一月

十六日、徳川慶勝引咎ノ請ヲ慰諭シ、奉仕故ノ如クナラシム。

今度、大樹守内之形勢ヲ考察シ、奉歸政權候儀ニ付、格別親藩之故ヲ以、彼是心配之趣、尤ニ候得共、先年來勤　王之儀モ　聞食有之儀故、必懸念無之、是迄之通出仕可有之事。徳川義宜家記

○大久保忠禮、加賀守○小田原藩主、食封十一萬三千百二十九石、堀田正倫、相模守○佐倉藩主、食封十一萬石、酒井忠氏、眞田幸民、戸澤正實、中務大輔○新莊藩主、食封六萬八千二百石、相馬季胤、因幡守○中村藩主、食封六萬石、松平乘秩、和泉守○西尾藩主、食封六萬石、石川成之、宗十郎○龜山藩主、食封六萬石、岡部長寛、筑前守○岸和田藩主、食封五萬三千石、松平忠禮、伊賀守○上田藩主、食封五萬三千石、内藤信民、豐前守○村上藩主、食封五萬石、有馬道純、水野忠敬、出羽守○沼津藩主、食封五萬石、後菊間ニ移封ス、西尾忠篤、隱岐守○横須賀藩主、食封三萬五千石、後花房ニ移封ス、土岐頼知、隼人正○沼田藩主、食封三萬五千石、松平親良、中務大輔○杵築藩主、食封三萬二千石、諏訪忠誠、因幡守○高島藩主、食封三萬石、鳥居忠寶、丹波守○壬生藩主、食封三萬石、松平直已、佐渡守○廣瀬藩主、食封三萬石、稻垣長行、平右衞門○鳥羽藩主、食封三萬石、松平信庸、伊豆守○上山藩主、食封三萬石、植村家保、駿河守○高取藩主、食封二萬五千石、酒井忠良、紀伊守○出羽松山藩主、食封二萬五千石、後松嶺ト改ム、松平忠恕、大藏少輔○小幡藩主、食封二萬石、保科正益、彈正忠○飯野藩主、食封二萬石、内藤文成、金一郎○擧母藩主、食封二萬石、本多忠紀、能登守○泉藩主、食封二萬石、本多助成、豐後守○飯山藩主、食封二萬石、水野勝知、日向守○結城藩主、食封一萬八千石、堀田正頌、攝津守○佐野藩主、食封一萬六千石、内藤政養、長壽麿○湯長谷藩主、食封一萬五千石、堀田正養、豐前守○宮川藩主、食封一萬三千石、三宅康保、備後守○田原藩主、食封

一萬二千石、柳澤光昭、伊勢守○黒川藩主、食封一萬石、丹羽氏中、長門守○三草藩主、食封一萬石、柳澤徳忠、彰太郎○三日市藩主、食封一萬石、松平直哉、主計頭○母里藩主、食封一萬石、松平直靜、日向守○清崎藩主、食封一萬石、○以上幕府帝鑑間席ト稱スルモノ、連署シテ、書ヲ幕府ニ呈シ、朝召ヲ辭センコトヲ請ヒ、若シ採納ヲ得サレハ、直ニ奏狀ヲ議傳兩局ニ上ラントス。遂ニ果サス、

此度、從　朝廷被爲　召候旨、傳奏衆ヨリ御直達御座候得共、私共儀ハ、　朝廷ヘ奉對候而者陪臣之身分ニ而、公儀ヲ被差置、御直ニ御用可有之筋者有之間敷處、此度之御大改革ニ付、定而意外之御用向モ可有之哉、萬一御沙汰之品ニ寄、御當家ヘ奉對、臣節ヲ失ヒ候場合ニ立至リ候而者、上者神君樣以來御歷代樣御神靈ヘ奉對、下者私共祖宗先靈ヘ對シ申譯無之、且被　召寄候上者、　朝廷ヨリ御政務向御下問被爲在候樣承知仕候間、右一々御答申上候樣成行候而者、陪臣之身分相立不申、何分ニモ御請之儀當惑仕候、右次第柄ニ付、應　召上京仕候モ其詮無之、依而、乍恐家老一人ヲ以、此段哀訴仕候、幾重ニモ傳奏衆マテ被　仰達可被下候、伏而奉懇願候、以上。

十一月　　　　連　　　名　姓名下ニ見ユ

堀田正養家記
吉田温苗聞見錄

○温苗聞見錄ニ云、右家々重役、或ハ使者ヲ以テ上京爲致、閣老マテ差出シ、若御取用ニ不相成段御沙汰ニ候ハヽ、左ノ文面ヲ以テ傳奏衆ヘ差出候事。

○傳奏ニ出ス奏狀案

謹而奉申上候、此度、私共　御用被爲　在候ニ付、上京可仕旨御達御座候得共、從來私共儀者、徳川家累代之家人ニ而、　朝延ヘ奉對候而者陪臣之身ニ而御座候間、主家ヲ差置、　御直御用御請申上候而者、第一君臣之大義ニ相戾リ候姿ニ相成、何共以奉恐入候、且被召寄候上者、御政務向御下問被爲　在候樣承知仕候、右一々御答申上候樣成行候而者、陪臣之身分相立不申、何分ニモ御請之儀當惑仕候、右次第柄ニ付、應　召上京仕候而モ其詮無之、依而、乍恐隷臣一人ヲ以、此段哀訴仕候、

何分ニモ螻蟻之微衷御洞察被下置、都而是迄之通、徳川家臣僕之御取扱ニ被成下候様、泣血奉懇願候、恐惶誠惶頓首敬白。

十一月十六日　連　名（姓名下ニ見ユ）

石川成徳家記
吉田温苗聞見録

○成徳家記ニ云、此書遂ニ不差出ト。

○十九日、連署人ヨリ幕僚ヘ申告書

此度、従　御所被爲　召候御請等之儀ニ付、先達而申上置候通、在府同席別紙名前之者重役、去ル十六日ヨリ十八日迄、三日之割合出立上京爲仕、伊賀守方ヘ書面差出候儀ニ御座候、此段私共ヨリ申上置候、以上。

十一月　諏訪因幡守　松平中務大輔
戸澤中務大輔　松平攝津守
本多能登守　三宅備後守

別紙

諏訪因幡守　酒井若狹守　松平中務大輔　有馬遠江守
戸澤中務大輔　大久保加賀守　松平和泉守　堀田相模守
眞田信濃守　相馬因幡守　石川宗十郎　岡部筑前守
松平伊賀守　内藤豊前守　水野出羽守　西尾隱岐守
土岐隼人正　鳥井丹羽守　松平伊豆守　稻垣平右衛門
松平佐渡守　酒井紀伊守　植村駿河守　内藤金一郎
本多豊後守　松平攝津守　本多能登守　水野日向守
三宅備後守　堀田攝津守　保科彈正忠　内藤長壽麿

堀田豐前守　柳澤伊勢守　丹羽長門守　柳澤彰太郎
松平主計頭　松平日向守

牧野駿河守儀者、篤ト熟考仕候上申上度旨申聞候ニ付、除名仕候。淀藩士加藤某筆記

○佐倉藩老臣平野知秋手記ニ云、十一月五日、紀州邸ヘ同意ノ趣決答、本日同邸ニテ、在府御同席中方、御上京可否ノ議論囂然紛起遂ニ決セス、既ニシテ重臣名代ノ議ニ一決シ、奏文即本書ナリ、ヲ草シ、帝鑑間御取締諏訪因幡守殿ノ内閲ニ供シ候處、御同人ヨリ内々閣老小笠原侯ヘ御相談ニ及ハレ、苦シカラサル旨ナリ、右ニ付、本書ハ自分持参、原稿ハ若州重臣岡見左膳持登リ、但シ同人ハ自分ヨリ兩三日前ニ上途ス、十八日江戸ヲ發シ、中略、晦日著京、岡見左膳ヘ面會、左膳左ノ大意申述、京著後、同役阪圖書ノ存意承リ、且本地ノ事情ヲ熟察スルニ、江戸ニテノ想像トハ天壌ノ相違ニテ、只今斯ル御書付等差出候テハ、却テ公邊ノ御不都合ニ相成可申、公方樣ニハ、日々内藩諸侯ノ上京ヲ御待ノ事云々ノ儀ニ付、藩論幡然改轍相成、就テハ大目付様ヘモ事情相伺候處、同様ノ事ニ付、御同席詰合丈ニテ集議ノ上、御同席様御上京期限御猶豫ノ事ノミ、昨夜板倉侯ヘ願書差出候處、宜含置候間、別段傳奏ヘ申出候ニ不及トノ事ナリ、且又御申合ノ御書、其儘打棄候モ不本意至極ニ付、本書ハ差置、寫ヲ以テ板倉侯ヘ入御内覽候處、御預リ置ニ相成候トノ事、岡見ハ明日早追ニテ、江戸ヘ君侯ヲ迎ニ下リ候由、十二月二日、御取締重役ヨリ廻文ニテ、御演達申度儀有之趣申來候ニ付、参會ノ處、去ル二十九日夜、入御内覽候御書付、昨朔日板倉様ヨリ御取締重役ヘ御下ケニ相成、箇條書等種々有之、演說ノ大意ニ云、二條ヘ罷出テ、書面公方樣ヘ奉入御内覽候處、譜代ノ面々、斯迄忠悃ノ段、滿悅致ス、然シ太政奉還ノ儀ハ、我等ノ眞情ヨリ出候事ニテ、決シテ外面ヲ裝飾スルニ非ス、卽今箇様ノ書面差出候テハ、却テ我等ノ本意ニ悖リ、且何如ナル不都合ヲ釀成候モ難計候間、何レモ早々上京致候様トノ上意ナリ、就テハ役當リ無之面々ハ、早々上京可致、病氣幼年ノ者ハ名代可願、役當リ有之者ハ重臣可差出、且又以後傳奏ヘ直達ニ不及、拙者迄差出候ヘハ、兩卿ヘ宜ク申上ヘキ等ノ事件ナリ、右ノ挨拶ニテ、使節ノ役ハ相濟候。

十七日、一柳賴紹、因幡守○小松藩主、食封一萬石、疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ緩セント請フ。二條攝政記

○幕府ノ親藩、及ヒ僚屬中、往々政權挽回ヲ議スル者アリ、尾、越二藩、其事ヲ敗ランコトヲ恐レテ、陰ニ之ヲ匡正スルヲ謀ル。

○春嶽私記ニ云、十日、尾州犬山ノ藩老小池奥左衞門參邸、申出候ハ、過日奥御右筆澀澤成一郎、成瀨隼人正方ヘ參リ、永井殿内旨ノ由ニテ、神祖二百年來ノ御鴻業ノ傳說長々敷申陳、約ル處、第三家竝親藩ノ兵力タニアラハ、政權ノ取戻方モ可有之モノヲトノ趣ニテ、諷諫ラシキ口氣ニ付、隼人ハ唯々諾々ニテ不及返答相濟由、此兵力タニアラハ、政權ヲ復サントノ意味如何樣ノ事ニ可有之哉、御當家樣ヘ右樣ノ說ハ相聞ヱ不申哉トノ事ニ付、唯今迄ハ曾テ相聞ヱ不申、畢竟、討幕ノ論盛ンニ、時機殆切迫ニ至リ候モ、政權ヲ御歸　朝アリシカハ、群議喧囂、寂然ト相成候ニテモ可知事ニテ、今更政權御手ニ復候ハヽ、討幕論モ再興可致ハ必然ナルヘシト相答候處、御尤至極ニテ、私共方ニテモ一同左樣存候處、右等ノ說ヲ唱候ハ、更ニ難解次第ニ候ト、十四日、此頃ノ風說、薩州ヨリ人數二千人著阪、八千人ト唱ル由、内六百人ハ十二日淀川ヲ上リ、上京ノ由、長人モ相交リ居可申トノ聞ヱ有之ニ付、昨日青山小三郎ヲ探索ニ被遣、薩藩吉井幸助ト對談ノ次第、内府公一時ノ御英斷ニテ、激徒屛息致候ヘトモ、散走致タルニハ無之、會議ノ上、御實行ノ見ハレ候ヲ伺居候形勢故、唯案勞致候ハ、内府公ノ御腹心ニテ、實ニ政權ニ執著無之ハ永井計ニテ、松山以下ニハ、必復古ノ臆念有之歟トノ嫌疑有之、萬一左樣ノ事ト相成時ハ、忽地再亂ニテ、譯モナキ事ニ可相成勢ナレハ、早速大綱領ヲ御議定有之、夫ニ背ク者ハ討ツテ取ル外ニハ無之見込ノ由、右等ノ事情ニ付、御邸議ノ趣ハ、外藩ノ形勢、内府公ニハ疑念無之候ヘトモ、中間ニ疑ヒ有之、夫ヨリシテ前途曖昧ノ事ト相成候テハ、内府公ノ御反正モ徒善ト相成、忽討幕ノ義ニモ至リ可申、其節ニ及ンテハ御所置甚御困難ノ事ニ可相成候ヘハ、唯今ノ内板倉殿初反正動搖無之樣、御取固メ置無之テハ難相成儀ト御評議有之、猶尾老公ヘモ可被仰合ト被決、十五日、雪江、澀澤成一郎ヲ訪フ、同氏ノ立說ハ、御三家御家門大憤發シテ、兵威ヲ盛ンニシ、抵抗力ヲ以御盛意ノ貫徹スヘキ樣ニ御手傳申上ル事、此節ノ急務ナレハ、先ツ尾、越ニオイテ人數引寄セ、味方ヲ鼓舞スル時ハ、御譜代ノ面々大ニ力ヲ得、

同心戮力、御盛業ヲ補賛奉ルニ至リ候ハヽ、外諸侯ハ恐ルヽニ足ラス、往日ハ已ニ兵力ヲ以迫リ奉リ、私説ヲ遂ル末故、此後モ同轍ナラン事ハ、追々人數繰入ノ手段ニテモ現然タリ、畢竟、幕ヲ初、親藩ノ威力衰弱ヨリ如此體態ニモ立至リタル事ナレハ、此度奮激セスシテ何時ヲカ期スヘキト、切迫激勵ノ説得甚敷、紀藩等ハ既ニ今日迄ニ二大隊上著ノ報告有之由等ヲ申シ越、老公ニハ如何程御人數御引率ニ相成候哉トノ尋ニ付、此度ハ兵馬ニ付テノ　徵命ニモ無之、殊ニ隱居ノ身分候ヘハ、日田ノ家來共ノ外、兵備ハ一人モ無之段相答候處、以ノ外不滿ノ顏色ナリキ、津藩ノ知邸深井半左衞門モ來會シ、是モ澀澤同論ニテ、弊藩日頃因循ト言レシ耻辱ヲ雪クハ此時ナルヘシ、戰テ後信ヲ諸侯ニ示サン事ヲ欲スル由、當時京地ニ二十小隊アリ　近々若侯兵ヲ引テ上京、末家佐渡守モ同樣ナリ、何分兵力ナクシテ三寸計ニテハ道理モ立難キ由ヲ强辨シ、十九日、二十日比ニハ、必事アルヘシトイヘリ、又永井殿ヘ罷出對話ノ次第ハ、上樣ニハ大方ノ御見込モ有之、先ツ大體ノ處ハ粗立候、諸侯會集ノ上ニテ、上樣ノ御見込書ヲ　御奏聞ニテ、夫ヲ衆議ニ被懸候樣被仰上、扨衆議ノ上、彼ノ善ハ無御固執御隨順ニ相成候ヘハ、夫ニテ大略相決シ可申、天下ノ見ル處、其樣ニ變リタル事可有之樣モ無之候ヘハ、大同小異ニテ相定リ可申ト存候、夫カ大綱ニテ、已下ノ細目ハ、追々ノ事ニ可有之、何卒當年中ニ、其邊ノ埒明候樣致度心算ノ由、又坂本龍馬、昨夜モ參リ申候、象二郎トハ又一層高大ニテ、説モ面白ク有之、彼カ申處至極尤候ヘトモ、未タ時機不至ト申聞候處、夫ハ薩、土ニ任セ候ヘハ必行ハレ可申トノ事故、例ノ兵威ヲ以テ事ヲ成候テハ、　朝廷ヘ對シ不相濟、夫故ニ時至ラスト申譯ナリト申候ヘハ、兵力ニヨラスシテ可被行條理アリト申候故、然レハ兎モ角モト申置候トノ物語ナリ、原註、私云、龍馬ノ祕策持論ハ、内府公闕白職ノ事カ、　澀澤ノ説及物語候處、彼輩ムヤミニ氣張候故、其處ハ常々誡メ置候事、已ニ今日モ御藩ニ兵備一人モ無之トノ事ヲ彼是論シ居候、畢竟、薩兵ヲ千人繰込メハ、此方ニモ千人ノ心當可致ト申ハ甚敷小見、薩モ味方ナリ、少シニテモ多人數引入候事ハ歡フヘキ事ナルヲ、其處ハ如何ニ申聞セ候テモ、中々合點行キ不申候、夫故、一等ノ論ニ致候ヘハ、何方モ兵備アツテ惡敷事モ無之故、先ツ夫ニ爲任置候、薩、土ニテモ何方ニテモ、此度ハ敵味方無之ト見スシテハ相成不申候トノ事故、紀ハ如何ト問フ、是モ甚卑ク困リ申候、乍併、是モアレ程ニ思ヒ込候ハアシキ事ニハ無之故、相應ニ養ヒ置候事ニテ、腰ヲ

折候テハ相成不申候、夫故、何方ニテモ伊賀殿或ハ拙者ノ意抔ト申、主張ノ向モ可有之哉ト致心配候、夫ニハ大ニ意味有之、寛容致置候ヲ、信隨候樣ニ取違ヘ候事ニテ候、薩ノ帶刀抔安心難致ト申者ヲ、強テ異心ナシト辨候テモ無益故、夫ニ任セ置候ヘハ、是以拙モ同論ノ樣ニ心得候姿、象二郎モ同樣ノ事、彼兩人抔モ、過激浮浪ノ制馭ニハ中々苦心ノ事共モ可有之ト體察致候、定テ今以討幕論ヲ唱居候事抔モ可有之ト思ハレ候、是ハ時勢無據次第ニテ、拙者抔モ幕軍ヘハ其通ニテ、何時ニテモ不逞ノ徒ハ討ネハナラヌ事ニ勵シ置候、左ナクシテ、干戈ヲ動シテナラヌ抔ト申、本意ヲ申聞候ヘハ、ヨキ事ニ致シ、忽チ懈惰ニ安シ候勢故、無是非其邊ノ釣リ合ヲ付置候事ニテ、當路ノ苦心何方モ同等ト被察候由、十七日、雪江、尾藩田宮如雲ヲ訪ヒ及論談候處、所見如合符節、御盛意ヲ貫通スル盡力ノ外ニ道ナキニ決ス。

○附錄春嶽私記ニ云、二十日御登城、伊賀殿ヘ即今御事業御手下シ之處、御尋問之處、當惑ノミニテ聢トシタル了見ハ無之、何分上樣御直ニ御伺被成候樣ニト被申ニ付、內府公ヘ御對顏有之、猶又、今後御事業之御見込御伺之處、方今之形勢ケ樣無之而者不相叶ト、御定見被爲立事候ヘハ、政權ヲ御還シ、政令ヲ一ニシテ、　皇威ヲ復セラレ、天下ノ心ヲ合セ、諸侯ヲ會同シ、公議ヲ興シ、天下之疑ヲ去リ、　皇國ノ維持ニ御一世ノ御力ヲ被爲盡、御紀綱御振起被遊、神祖之尊王至治之御鴻業ヲ御繼述被遊度之外、御餘念不被爲在趣ニ付、公モ何分被爲在ン限之御心力ヲ被盡、御盛意御奉戴御輔賛可被及御忠勤ト、御契合之御悃話之由、其前日梅澤孫太郎來話、元來、如此御運ヒニ相成候ニ付テモ、其以前、大小監察初、諸有司ヲ御前ニ被召、御書付御開示ニテ、我等最早是ヨリ外ニ見込ハ無之、其方共ハ如何オモフ、神祖以來ノ鴻業一朝ニ廢候處ハ、奉對御先靈恐入候姿候ヘトモ、畢竟、天下ヲ治メ、奉安　宸襟候カ、即神祖ノ御盛業繼述ト申モノ也、方今、德川氏武備衰弱シテ、天下ノ諸侯ヲ制馭スルノ威力無之而已ナラス、二十年來ノ非政ヲ數ヘ立ラレ候ヘハ、一言之申譯無之次第、此時ニ當ツテ、空敷神祖覇圖ノ形迹計ヲ執著シ、此儘ニ持堪エントスレハ、無理計多クナリ、罪責ハ益增加、遂ニハ奪ハルヽニモ至ルヘキハ必然ト見切リ申候、依之、今政權ヲ　朝廷ニ還シ奉リ、政令ヲ一途ニシ、德川氏ノ有ン限リ、力ノ及ン丈ケハ、天下諸侯ト共ニ朝廷ヲ輔ケ奉リ、日本全國ノ力ヲ戮セ、外夷ノ侮リヲ禦キ候事ニ相成候ハヽ、　皇國今後ノ目的モ定リ可申、乍併、是迄モ

見込之事ニテ、急度見居ヘ通リニ行クカ行カヌカ、其處迄ハ見貫キ難ク候ヘトモ、先ツ治ルヘキ條理丈ケハ如此ト存候、又是迄通リト申事モ、出來サヘスレハ致間敷ニモ無之候ヘトモ、是ハ決シテ出來ヌ事ト慥ニ致覺悟候、何モ存寄アラハ申セトノ御意故、一同感服ノ姿ニハ候ヘトモ、矢張幕權執著ノ向モ多ク、彼是ト呼キ合候迄ニテ、上意ヲ返シ奉ル程成明辨モ無之、呶々喃々罷在候處、又上意ニ、此節潛伏之徒、事ヲ謀リ候趣相聞エ、夫カ爲ニ恐怖シテ、俄ニ大權ヲ擲チ候樣ニ存候向モ有之、潛伏ノ徒如何程アリトモ、多寡ノ知レタル事ニテ、討ハ討ツヘク候ヘトモ、此處ヲ能思慮スヘシ、我等如此在京セルハ何ノ爲ソヤ、カヽル時勢ユヘ、　輦下ノ騷擾ヲ鎭定シ、　叡慮ヲ安シ奉ランカ爲メナリ、然ルニ、非德ノ我等罷在候故、右等ノ禍根ヲ釀シ來リシナルヲ、又干戈ヲ動シ是ヲ討ニ至ツテハ、　宸衷ヲ驚動シ奉リ、生靈ヲ困苦セシム、其罪重大ニシテ、一ツトシテ義理ニ當ラス、忠貞ノ素志モ空敷事ニ相成候、從來我等菲才不德ニシテ、大統ヲ繼クニ堪エサルヲ知ル、故ニ昨年モ相續ヲ辭シタル事ハ、何モ承知之通候ヘトモ、不得止事繼キタルモ、亦承知之譯ニテ、其節モ我等相續ニオイテハ、迚モ此體ニテハ難差置、大變革ヲヤラネハナラヌ、夫テモヨイカト申候處、伊賀初承知ノ事故、其以來端々取懸リ、旗本抔ノ事モ當時ノ處マテヤリ候ヘトモ、中々是式ノ事ニテ行クモノニモ無之、何分非常ノ事業ニ無之テハ不相適ト存込候ハ、決テ昨今ノ事ニハ無之、根底深ク有之候、又將軍職ノ義モ、固辭候ヘトモ、是以　先朝ノ叡慮モ有之、不及是非候處、果シテ不堪其任、事々此ニ及タル事候ヘハ、憤然自ラ反シテ已ヲ責メ、私ヲ去リ、從前ノ非政ヲ改革シテ、至忠至公ノ誠心ヲ以テ、天下ト共ニ　朝廷ヲ奉輔翼候儀、乍恐神祖ノ神慮ニモ適ヒ可申、神祖ハ天下ノ安カランカ爲ニ、政權ヲ被爲執タルニテ、天下ノ政權ヲ以、德川氏ニ私セラレタルニハ無之候ヘトモ、我等ハ又天下ノ安カランカ爲ニ、德川氏ノ政權ヲ　朝廷ニ還シ奉ルナリ、取捨異ナリト雖モ、天下ヲ治メ、　朝廷ニ奉スルノ意ハ一ナリ、汝等モ亦能此主意ヲ體認スヘシト、又上意ニ、神祖ノ御時代ト違ヒ、外國ノ交際如形事ト相成候ヘハ、是迄ノ體ニテ交リヲ全フシカタシ、外國モ次第ニ日本ノ事情ヲ詳ニスレハ、今日ト相成候テハ、外國ヘ遣ス所ノ使節ハ、德川氏ノ臣僕ニシテ陪臣ナリ、陪臣ヲシテ帝或ハ王ニ使ス、外國ニテモ既ニ其說アリ、然レトモ政令一途ニ出レハ、假令陪臣タリトモ　朝命ヲ奉シテ使スレハ、卽チ　朝使ナリ、禮典ニオイテ缺

ル所ナシ、已ニ當夏外國公使、華城櫻門内マテ乘馬セシメシヲ、彼是批判スルト聞ケリ、外國ノ情ニ通セスシテ、　皇國ノ尊ヲノミ知ルモノハ左モ有ルヘキナレトモ、日本臣外國ヘ到レハ、陪臣ニテモ玄關前マテ騎付ル事ナリ、然ルヲ彼ヲ下馬ニテ下馬セシムル時ハ、此方ノ使節モ、和蘭如キ小國ニ至ツテモ、外郭ヨリ下馬セスシテハ不相適、其國辱ヲ外國ニ曝スナリ、大小輕重イツレソヤ、又往復書翰ノ書法、文例ニ至ルマテ、一ツトシテ禮ニ當ラス、自ラ尊大ニシテ傲慢甚シ、彼モシ儼然トシテ其失禮ヲ責問スルニ至ラハ、一言ノ返スヘキナシ、今兵庫開港一新ノ時ニ當ツテ、政令ヲ一ニシ、此等ノ非禮ヲ改革シ、信義禮讓ヲ以テ交ラサレハ、イカテカ其誼ヲ全フスヘキ、此開港ノ事モ、　朝廷ニテモ開クヘシ、諸侯モ開クヘシ、幕ヨリモ開カント乞ヒ、一ノ異議ナキ事ナリシニ、　勅許ノ際ニ當ツテ、不被爲得止事ノ文段アリ、是カ爲ニ大ニ物議ヲ起シ、迫ツテ許サレタリト云、是等皆二途ニ出ルノ大弊ニシテ、交際ヲ全クシカタキ所以ナリ、又諸侯割據ノ說ヲ唱フル者アリ、今已ニ割據ニ非スヤ、徳川幕府ノ威令行ハレス、召セトモ事ヲ左右ニ托シテ不來、是幕府而已ナラス、　朝命トイヘトモ亦爾リ、割據ナラスシテ何ソヤ、此時ニ當リテ　朝威ヲ翼ケ來リ、　諸侯ト共ニ　王命ヲ奉戴シテ、全國侮禦ニ力ヲ盡サスンハ有ルヘカラスト、遂一ノ御明辨ニヨツテ、何モ一言ノ異說ナシ、敬服ニ及ヒタル事ノ由。

○土屋寅直、采女正〇土浦封主、食藩九萬五千石、土井利與、大炊頭〇古河藩主、食封八萬石、戸田忠友、土佐守〇宇都宮藩主、食封七萬七千八百五十石、本莊宗武、彈正忠〇宮津藩主、食封七萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、青山忠敏、左京大夫〇篠山藩主、食封六萬石、秋元禮朝、但馬守〇館林藩主、食封六萬石、太田資美、總次郎〇掛川藩主、食封五萬三十七石、後柴山ニ移封ス、久世廣文、出雲守〇關宿藩主、食封四萬八千石、間部井道、下總守〇鯖江藩主、食封四萬石、永井直諒、日向守〇高槻藩主、食封三萬六千石、內藤頼直、若狹守〇高遠藩主、食封三萬三千石、板倉勝殷、主計頭〇安中藩主、食封三萬石、黒田直養、筑後守〇久留里藩主、食封三萬石、板倉勝己、甲斐守〇福島藩主、食封三萬石、後重原ニ移封ス、安藤信勇、理三郎〇磐城平藩主、食封三萬石、大岡忠貫、主膳正〇岩槻藩主、食封二萬三千石、土井利教、淡路守〇刈屋藩主、食封二萬三千石、增山正修、對馬守〇長島藩主、食封二萬石、阿部正恒、駿河守〇佐貫藩主、食封一萬六千石、水野忠順、肥前守〇鶴牧藩主、食封一萬五千石、牧野康濟、遠江守〇小諸藩主、食封一萬五千石、內藤正誠、志摩守〇岩村田藩主、食封一萬五千石、遠藤胤城、但馬守〇三上藩主、食封一萬二千石、後吉見ト改ム、酒

井忠經、左京亮○敦賀藩主、食封一萬石、後鞠山ト改ム○以上、幕府雁間詰第席ト稱スルモノ、連署シテ、朝召ヲ辭センコトヲ幕府ニ請フ。

今般、以御英斷御復政被仰立候段、定シ深キ思召モ被爲在候御儀ト奉存候得共、實ニ感慨之至奉存候、折柄從傳奏衆上京可仕旨、同席共ヘ御直達有之、不肖之微臣共、蒙　朝徵御用之筋難計御座候得共、元來當席之儀者、格別之以御寵遇、數百年來奉蒙御恩澤候段、骨髓ニ通徹罷在、進退存亡隨君命之外、更ニ他念無御座候、就而者、今日ニ相及不俟君命、直ニ奉　朝諚候儀者過等之至、誠ニ以奉恐入候、只々君臣之大義ヲ不失、報恩盡忠之旨趣相立候樣仕度、一同奮發罷在候間、何卒微衷之赤心幾重ニモ御洞察、宜被仰立被下候樣仕度、此段奉懇願候、以上。

十一月　　　在府雁間

本莊宗武家記
板倉勝達家記

別紙姓名、

土屋采女正	青山左京大夫	土井大炊頭	戸田土佐守
松平彈正忠	秋元但馬守	太田總次郎	久世出雲守
間部下總守	永井日向守	內藤若狹守	板倉主計頭
黑田筑後守	板倉甲斐守	安藤理三郎	大岡主膳正
土井淡路守	增山對馬守	阿部駿河守	牧野遠江守
水野肥前守	內藤志摩守	遠藤但馬守	酒井左京亮

外ニ

阿部美作儀ハ、京都表ヘ重役差出シ、松平右京亮、松平能登守儀ハ、別段申上、水野眞次郎、青山峯之助、大久保三九郎儀ハ伺候儀モ御坐候ニ付、除名仕候。　板倉勝達家記

○是ヨリ先、幕府、航海術教導士官ヲ英國ヨリ雇フ、英國公使、書ヲ致シテ、其接待資給ノ事ヲ

申ス、是日、復書シテ、之ヲ謝ス。

千八百六十七年第十二月五日　於江戸

日本政府ノ士官、及ヒ船乘ニ航海術ノ諸學科業前、及ヒ規律ヲ指南スルタメ、英國政府ニテ撰ミタル處ノ士官、竝ニ下等士官等、江戸ニ到著シタルニ付キ、日本政府ノ名代人ナル閣下ト、英國政府ノ名代人ナル余トノ間ニ談ヲ遂ケ、彼等ノ爲ニ任職ノ期限ヲ記載スルコト緊要ナルニ至レリ、

右士官、竝ニ下等士官勤務ノ儀ハ、英國政府ニテ、日本政府ヨリノ申出ニ任セ、二個年ノ期限ニ定メタリ、斯ノ如ク雇ハルル間ハ、右士官、竝ニ下等士官、イツレモ下ニ記シタル割合ノ給料ヲ受取ルヘシ、右ハ日本政府ニテ、陸軍教授ノタメ雇ヒタル佛國士官等ヘ宛行ヒタル割合ニ照合セシ者ナリ、

前文給料ノ儀ハ、各種ノ入用ヲモ其内ニ籠メタリ、サレハ住居ノ什具、馬ノ飼立ヨリ、薪炭燈火等ニ至ルマテヲ併セ、生活上ノ諸費用ハ、其節士官、竝ニ下等士官等自身ニ因テ取賄ハルヘシ、

士官ノ分、

教師頭取一人、毎月百二十ポンドステルリング、

教授方士官三人、毎月八十ポンドステルリング宛、

下等士官ノ分、

第一等士官二人、毎月二十八ポンドステルリング宛、

第二等士官一人、毎月十八ポンドステルリング宛、

第三等士官五人、毎月十四ポンドステルリング宛、

右之給料ハ、各士官日本ヘ到著シタル日附ヨリ相始メ、而シテ洋銀ニテモ、マタハ通用ノ兩替相場ニ應シタル日本貨幣ニテモ、歐羅巴各月ノ最終日ニ於テ、其拂フ可キ分丈ケヲ渡シ、其外不相當ノ入用ヲ、右士官、並ニ下等士官ノ内、誰人ニモ掛

ル事アルヘカラス、

日本政府、右士官、並ニ下等士官等ノタメ、各其位級ニ應シ、良好ニシテ、且都合能住居ヲ宛行フ可シ、然シナカラ、此事柄ニ付テノ緊要ナル約定、イマタ取極メラレサリシニ付、日本政府、目今一時ノ都合向ヲ計ラレ、家具、並ニ食事道具等ヲ彼等ノ自身入用ニ任シタリ、然シナカラ、此品物ハ日本政府ニ屬スル者トスヘシ、而シテ本住居ノ取備ニ付テハ、同樣ナル手續ニテ取計ヒアルヘカラス、此士官、並ニ下等士官ハ、英國船ノ壹艘ニテ、英國ヨリ香港迄送屆ケラレタレハ、同處迄ハ路用ヲ要セス、然レトモ、彼等ハ皆日本政府ニ仕フルカ爲ニ來レル者ニテ、英國政府入用外ノ者ナレハ、途中於テ英國ヘノ拂方、其外入費ハ英國政府ヨリ出スヘキ理ナシ、故ニ日本政府ヨリ拂フ可シ、別紙ニハ右給金等ノ總高ヲ認タリ、其高千百六十三ポンドステルリング十九シルリング十一ペンスナレハ、洋銀壹枚ノ相場ハ四シルリング三ペンスニ當ルヲ以テ、洋銀五千四百七十七枚六十二セントナリ、此士官、並ニ下等士官、若シ私便蒸氣船ニテ來レルトモ、香港迄ノ路用マタ右同樣ナルヘシ、香港ヨリ右士官等、私便蒸船ニテ横濱ニ來レリ、其費用洋銀千六百枚ナリ、是亦日本政府ヨリ拂フヘシ、

教授必用ノタメニ買上ケ、而テ甲必丹フラシー自身ニ携來タル所ノ書籍、並ニ諸器械ノ費用五百二十五ポンドステルリング十七シルリングハ、是亦、英國政府ヨリ、日本政府ヲシテ拂ハシメサルヲ得ス、

右器械並ニ書籍ノ目錄ハ、別紙ノ如シ、

右器械並ニ書籍ハ無恙到著シタリ、而テ固ヨリ日本政府所持ノ物ナリ、

若シ日本政府、右士官並下等士官ノ仕ヘヲ要セスンハ、日本政府ヨリ私便蒸氣船ニテ歟、或ハ來レル時ノ如キ手立ヲ以テ、彼等ヲ英國ニ歸ラシムヘシ、

余、小笠原壹岐守閣下、此條々ヲ承諾シ、且ツ五千四百七十七ドル六十二セント、千六百ドル並ニ五百二十ポンドステルリング十七シルリングノ三口ノ合高ヲ、余ニ拂フ可キ貴答ヲナシ、而テ英國政府ニ此費ヲ償フ可キヲ希望ス、恐惶謹言。

英國特派公使兼全權

ミニストル
ハルリー、エス、パークス

外務省記

○給金總高ノ別紙、器械、書籍目錄ノ利紙、並ニ原記ヲ失ス。

○答書

大貌利太尼亞特派公使全權
ミニストル兼コンシュルゼネラール
ヱキセルレンシー
シエルハルリー、エス、パークスケシビヘ

貴國第十二月五日附之貴翰披見イタシ候、然者、我政府ヨリ、貴國政府ヘ御賴申候海軍術教導士官、並ニ下等士官等到著イタシ候ニ付、閣下ト我等談判ヲ遂ケタル諸事件御申越之旨、逐一領承イタシ候、種々御手數之段忝存候、右諸士官在留之期限、並ニ給料之定員、生活之諸費用、給料渡方之時限、寓舍之事、並ニ英國ヨリ香港迄之諸費用、及ヒ香港ヨリ横濱迄飛脚船之入用、及ヒ教導必用之書籍、諸器械之代價等、閣下ヘ御渡シ申ヘキ總高者、其筋之モノヨリ御渡申候樣可致候、此段貴答如此候、拜具謹言。

慶應三卯年十一月十七日　　小笠原壹岐守花押

外務省記

十八日、前田利豁、丹後守○七日市藩主、食封一萬石、本壯道美、宮內少輔○高富藩主、食封一萬石、疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ緩セント請フ。前田利昭本莊道美家記

○島津茂久、三田尻港周防ニ至リ、毛利廣封ヲ見テ、前途ノ策ヲ議シ、直ニ上國ニ赴ク、廣封、淺野茂長ニ報知シ、共ニ兵ヲ出シテ、東上セシメンコトヲ約ス。

○指華入京日截ニ云、十七日午後、薩侯御艦入港、十八日楫取素彦、山田一之允等、薩藩西郷吉之助ト合議、廉書左ニ、

一三藩共、浪華根據之事、

一根據守衞薩藩一小隊へ、長、藝之内相加候事、

一薩侯御一手ハ、京師ヲ專任トス、

一長、藝之内、一藩京師ト應援ス、

一薩侯御著坂二十一日ニ而、二十三日御入京、二十五日三田尻出浮候兵出帆、二十八日西ノ宮著、薩藩ヨリ京師之模樣報知之上進入之筈、

右ニ付、卽刻藝藩へ手筈申遣ス、如左、

修理大夫様、昨十七日巳刻、三田尻港御著艦被爲在候而、今十八日、長門様御會合以來之御處分御示談相濟、修理大夫様御事、今晩ヨリ御揚碇、二十一日大坂御著、二十三日御入京之御手筈ニ付、此御方御人數者、來ル二十五日當三田尻港發船、二十八日西ノ宮著之段御打合相成候間、御前約之通其御方樣御一艦、右之御含ヲ以、御手洗港ニ而御待合被成下候樣仕度候云々。下略、

○是ヨリ先、英國公使館附屬士官サトウ、掛川驛遠江ニ泊ス、人アリ其室ニ闌入シテ、將ニ之ヲ刺サントス、果サス、本年四月二十五日ニ在リ、幕府、逮捕擬刑シ、是日、之ヲ英國公使ニ報ス。

大貌利太泥亞特派公使全權

ミニストル兼コンシュルゼネラール
エキセルレンシー
スルハルリー、エス、パークス、ケシビヘ

以書翰申進候、先般、貴國公使館附屬ノ士官壹人、其餘英國人壹人、遠州掛川驛宿泊之節、其旅宿ヲ襲擊致シ候罪人囚捕ノ上、夫々吟味ニオヨヒ候處、右罪人之内、魁首林式部、山田主殿兩人、遠州掛川驛ニ於テ、貴國旅宿ヘ亂入致シ候儀之處、右ハ外國人ヲ連參リ、宿役人ヨリ金子ネタリトリ可申心底ニテ、外國人ヲ殺害スヘキ所存ニハ無之旨申立候得共、既ニ白刄ヲ攜、旅宿ヘ亂入致シ、蚊帳ヲ切、其外亂妨致シ候上ハ、殺害スヘキ心底ニ相違有之間敷旨、吟味詰候處、申披無之旨申之、其餘道中筋ニ於テ、士道ニ欠ケ、金子ネタリ候儀ニモ有之、死刑難遁モノニテ、兩人トモ不屆ニ付、主殿ハ死罪、式部ハ存命ニ候ヘハ死罪、永瀨衞門、植田内記、加多野隼人、清水右近儀ニモ、外國人可及襲擊儀同意致シ候ヘトモ、魁首ニ無之ニ付、四人共遠島ノ内ヘ流罪、金八ハ右之者共奴僕ニテ、襲擊之場ニ携リ候儀ニ無之間、急度叱リ置候積リニ有之候、依之、別紙名前書、竝刑名書付相添、此段申進候、拜具謹言。

慶應三卯年十一月十八日　　小笠原壹岐守花押

死罪　元櫛笥家來ニテ、暇出、京都上河原中筋丸太町上ル二丁目町中借家ニ罷在候、　病死　林式部

同　元今城家來ニテ、出奔致シ候、　山田主殿

遠島　元三室戸家來ニテ、京都寺町御門上ル上ノ切通梅小路家長屋借宅、　永瀨衞門

同　元清閑寺家家來ニテ、暇出、京都筵屋町智惠光院西ヘ入町山形屋ウラノ方同居、　植田内記

同　元冷泉家家來ニテ、暇出、　加多野隼人

同　元武者小路家來ニテ、暇出候、　清水右近

急度叱り　淺草寺地中覺善院地借利兵衛店、　金

○再度報告書

八　外務省記

大貌利太泥亞特派公使全權
ミニストル兼コンシユルゼネラール
エキセルレンシー
スルハルリー、エス、パークスケシビヘ

貴國十二月十六日附貴翰落手披見致シ候、先般、掛川驛ニ於テサトウ氏ヲ襲撃及候黨與ノモノ、罪狀申渡書寫、御受取被成度トノ段承知致候、右ハ町奉行方ヨリ、其公使附士官迄差進シ候様、同奉行ヘ下命致シ候、右回答如此候、拜具謹言。

慶應三卯年十一月二十三日　小笠原壹岐守花押

申渡

元三室戸家家來ニテ、京都寺町御門上ル上之切通シ梅小路家長屋借宅、　永瀬衛門

元清閑寺家家來ニテ、暇出、京都笹屋町知惠光院西ヘ入町山形屋ウラノ方同居、　植田内記

元冷泉家家來ニテ、暇出、　加多野隼人

其方共儀、主家武者小路公香、日光例幣使旅行中、靑士ニ被抱、供イタシ候道中筋宿々等ニオイテ、品々不法之所業ニオヨヒ、剩、遠州掛川宿泊リ之節、同宿甚右衛門方ニ外國人止宿致シ居候趣ニ付、林式部其外之者共俱ニ罷越、實否見屆可參旨、清水右近差圖致候節、内記ハ旅宿ニ相殘、衛門、隼人ハ何ノ心付モ無之同意致シ、跡ヨリ可罷越ト支度致シ候内、式部其外足輕、中間等多人數拔及、又ハ木切等攜罷越、亂入致シ候次第ニ相成、其方共ハ途中迄罷越候迄ニテ、場所ヘハ不攜候共、右始末旁不屆ニ付、三人共遠島申付ル、

但、出帆迄在牢申付ル。元武者小路家家來ニテ、暇出候、

清水右近

其方儀、主家日光例幣使旅行中供致シ、道中筋宿々等ニオイテ、靑士林式部其外者共、品々不法之所業ニオヨヒ、剩、遠州掛川宿泊リ之節、同宿甚右衞門方ニ外國人旅宿致シ候趣承リオヨヒ、宿役人へ相尋候處、答方紛敷候迚、實否見屆ケ可參旨、夜中林式部其外之者共呼寄、差圖致シ候故、同人共心得違致シ、輕輩ノモノ等多人數引連、拔刄、木切等攜へ、甚右衞門方へ押掛參リ、入口戸ヲ押破リ、襲擊可致ト亂入致シ候次第ニ至リ候段、其方差圖致シ候ヨリ事起リ、右始末旁不屆ニ付遠島申付ル。

但、出帆迄在牢申付ル。

八

淺草寺地中覺善院地借利兵衞店、金

其方儀、日光例幣使歸京之節、道中打物持ニ被雇、道中筋宿々ニオイテ、靑士林式部其外ノモノ共、品々不法之所業ニ及候儀ヲ見受ナカラ、申立モ不致罷在、其上遠州掛川宿泊リ之節、右ノモノ共、外國人旅宿へ亂入イタシ候砌、其場ニ乍罷在、怖敷存候共隱レ居候段、右始末不埒ニ付、急度叱リ置、

一元櫛笥家家來ニテ、暇出、京師上河原中筋丸太町上ル貳丁目町中借屋ニ罷在候林式部、今城家家來ニテ、出奔致候山田主殿儀、日光例幣使旅行中、靑士ニ被抱供致シ候道中筋、宿々等ニオイテ、品々不法之所業ニ及、剩、遠州掛川宿泊リノ節、同宿甚右衞門方外國人旅宿致シ居候ヲ、同家來清水右近承及ヒ、宿役人へ相尋候處、答方紛敷候トテ、式部、主殿見屆トシテ可罷越旨差圖致シ候ヲ、不容易儀ト乍心付、外國人ヲ連參リ候上、宿役人共相違申立候始末嚴敷察度致、尙金子ネタリ可取ト同意致シ、式部並ニ山本左近恐クハ山田主殿ノ誤ナルヘシハ、刀ヲ拔キ、其外足輕、中間等一同木切等ヲ攜へ、甚右衞門方へ押懸ケ參リ、入口戸ヲ破リ、襲擊可致ト亂入イタシ候處、野口富藏儀、短筒ヲ以テ立向ヒ候ニ付、逃去候段不法之至リ、右始末兩人共、旁不屆ニ付、主殿ハ死罪、式部ハ死罪可申付處、病死致シ候間、其旨可存、

一武者小路家家來田宮主膳、山本右近義ハ出奔イタシ、行衛相知レス候間、其旨可存。

卯十一月二十一日　外務省記

○附錄二十六日孛國公使照會書

千八百六十七年第十二月十九日横濱ニテ、

江戸外國事務執政

小笠原壹岐守閣下ニ呈ス、

先般、不列顛公使館按スルニ、此間ノ士官一人、其餘英國人ノ十字ヲ脱スルナラン一人ヲ襲ヒシ、日本ノ士官ヘ申渡シタル罪狀ノ事ニ付、十一月十八日附之貴簡ニテ、同國公使ヘ報告ノ趣ニ由リ、余、次件ヲ承知シタリ、右士官之内、四名之モノハ外國人ヲ襲ヒシ發黨人ニハアラサレトモ、其事ニ一味セシヲ以テ、遠島ノ罪ニ處セラレシ由ナリ、

右ノ次第ヲ以テ考レハ、先般、孛漏生公使館ノミニストルスネルヲ殺害セントセシ三橋サカヘ罰シ方之儀ニ付、日本政府ノ存意ヲ閣下ヨリ報シ給ヘル罪狀ヨリモ、右四人之者ハ更ニ嚴罰ニ處セラレタリ、

故ニ、閣下好意ヲ以テ余ニ報告シ給ハルヘシ、日本ノ刑法ヲ施スニ、何ノ故ヲ以テ斯ク相違スルコトアル哉、且又、九月五日附貴簡ノ趣ニテハ、ヒズハイネス大君ヨリ決定ノ報告モ來ルヘキ筈ニテ　余ハ之ヲ企望スレトモ、今ニ至ルマテ其報告ナキヤ、三橋サカヘノ罰シ方ハ、斯ク延引シ、就テハ外國人ヲ慥ニ保護スルコトモ出來ス、且又、孛漏生ト日本トノ交際ヲ固クスルコトモ出來サルナリ、拜具謹言。

孛漏生國王マゼスチノシヤルヂダフヘールス

フヲンブランド

外務省記

○本條、答書原記ヲ失ス。

十九日、徳川慶喜、朝綱ヲ一定スルハ、事體重大ナルヲ以テ、宜シク諸侯會同ヲ待テ、之ヲ公議スヘキヲ稟ス。

政權之儀ニ付、過日言上之大意被　聞食候得共、諸事曖昧ニ而者綱紀難相立候間、見込之趣可申上旨奉畏候、綱紀御一定之儀者、實ニ重大之事件ニ付、聊愚見之趣モ御坐候得共、猶熟慮仕、衆諸侯上京之上建言可仕候間、公議ヲ被爲盡、萬機之御基本被爲立候樣仕度奉存候、此程　御沙汰之趣モ御坐候間、先此段奏申上候、以上。

十一月十八日　二條攝政記

○本文、十八日ト署ス、蓋シ草文ノ日ナリ、二條攝政記、十九日ニ收ム、今之ニ從フ。

○徳川慶勝、上書シテ、楠正成ニ神號ヲ贈リ、祀典ニ列シ、近古國事ニ死スル者ヲ從祀センコトヲ建議ス、乃チ命シテ、死事者ノ姓名事蹟、及ヒ營祠ノ地ヲ錄上セシム。

謹而奉言上候、方今　皇道一新之初、群賢輻湊之砌、臣慶勝闇劣駑鈍之性、謝罪脩省之餘ヲ以、彼是子細奉建言候者、誠以恐懼戰慄之至奉存候得共、鄙懷之一事默止ニ難忍、敢而奉汚　天聽候、臣慶勝誠惶誠恐頓首頓首、臣慶勝竊ニ思惟仕候ニ、培養能ク根柢ニ到レハ技幹自榮ニ向ヒ、恩恤深ク泉骸ニ及ヘハ人心隨テ和ヲ感ス、是必然之理奉存候、謹而古典ヲ考候ニ、勞ヲ以テ國ヲ定者ハ祀ル、死ヲ以テ事ヲ勤者ハ祀ルトモ相見申候、先臣楠正成一門之者共、忠節ヲ　皇家ニ盡シ、武功ヲ古今ニ顯シ、其終一死ヲ以殉國候段、誠以臣子之龜鑑、祀典ニ被列相當之者ト奉存候、然ルニ未　御旌表之　御沙汰モ不奉伺、遺憾奉存候、何卒新ニ神號ヲ降賜リ、祀典被列、　皇都之内可然地ヲ相シ、一社御建立被爲在候樣仕度、且又近古以來、國事之爲ニ身ヲ亡シ、未　御收恤ヲ不蒙者、其數不少、一念爰ニ及フコトニ惻怛悽愴之至ニ不堪奉存候、是等之幽魂托スルニ無處、自然天地之和氣ヲ破候ヨリ、邦内之不靜謐ヲ引出候儀トモ奉存候間、仰願クハ、此者共之精靈ヲモ被慰、合祀シテ一之攝社トナシ、右楠社境内ニ安置被爲在候樣仕度奉存候、左候得者、獨一時之御盛典ノミナラス、萬祀洪基之　御守トモ相成、

且ハ敵愾仗義之風尚ヲ乍左感發作興之一助トモ可相成、是賤臣多年之宿願ニ付、伏而奉言上候、萬一愚者之一言　御聖擇ヲモ奉蒙候ハヽ、感恩之至ニ不耐奉存候、臣慶勝誠恐誠懼頓首敬白。

十一月　　　大納言慶勝上

二條攝政記
徳川義宜家記

○批紙

建白之趣、近古爲國事身ヲ亡シ、未御收恤ヲ不蒙者共、人名事蹟不洩樣取調、早々可申上候事、

但、見込之地所等、前同樣可申上候。徳川義宜家記

○批文、義宜家記、日ヲ失スルヲ以テ、此ニ附ス。

○慶勝奉答書

謹而奉言上候、楠社之一條ニ付、頃日奉建言候書面ニ御附札ヲ以、蒙　仰候近古以來國事ヲ以身ヲ亡シ、未御收恤ヲ不蒙者共人名事蹟不洩樣取調、早々可申上旨奉拜承候、　皇國節烈之士縷數枚擧ニ遑アラス、青史ニ載有之候事ハ瞭然指掌ニ候得共、其外曖昧難考索儀モ不少、且青史之事蹟モ一朝ニシテ能搜盡スヘキニアラス、正史野乘、閭閻口碑之說ヲ雜取、强而博綜ヲ極、纖芥ヲ不遺事ヲ欲スル時ハ、玉石混淆、遺漏誤脫之失ヲ生シ不可然ト奉存候、天下更始之時ニ當而、國步之艱難ニ身ヲ殉候者、忠魂義魄ヲ御祭祀被遊、褒崇之典ヲ明示シ、人名之區別ヲタヽス、死者瞑目生者立志候樣至要ト奉存候、猶更宜　御廷議御裁決被遊候樣奉願候、

但、右御建立所之儀モ御下問被爲在奉拜承候、右者何レニ而モ別段見込之場所迚ハ無御座候得共、神樂岡邊抔相應之地ニモ候半歟、尤是ハ　御廷議次第之御儀ト奉存候事。

十一月　　　大納言慶勝上

徳川義宜家記
晩翠樓叢書

○奉答書、義宜家記、日ヲ署セス、故ニ此ニ附ス。

○織田信親、出雲守○柏原藩主、食封二萬石、江戸ヨリ京ニ至リ、塚原山城乙訓郡丹波口ト稱ス、關門ヲ守ルヲ稟ス、又山内豐福、攝津守○高知新田、食封一萬三千石、疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ緩セントヲ請ヒ、二條攝政記南部信順、遠江守○八戸藩主、食封二萬石、疾アリ、赴召期シ難キヲ稟ス。南部榮信家記

依召、去ル六日江戸表發途、今日到著仕候、因テ城州塚原在陣罷在候、此段御届申上候、以上。

十一月十九日　織田出雲守

織田信親家記

○幕府、紙幣ヲ畿內、及ヒ旁近地方ニ發行シ、庚午歳十一月ヲ以テ限ト爲スヲ令シ、遂ニ果サス、又新潟ヲ開港場ト爲シ、其開港、及ヒ江戸開市ノ期十二月七日、ヲ改メテ、明年三月九日ト爲スヲ布告ス、

今般、金貨融通之タメ、五畿內、近國當分之內通用被　仰出候金札之儀、當卯年ヨリ來ル午年十一月迄、三ヶ年之間、正金銀取交通用之筈ニ付、右ヲ限リ正金銀ト引替可相渡候、

右之趣、五畿內、近國御領、私領、寺社領共可被相觸候。森川俊方家記

○

來十二月七日ヨリ江戸開市之儀、兼而相觸置キ候趣モ有之候處、御都合モ有之候ニ付、各國公使等ヘモ談判之上、來辰年三月九日迄延期相成候間、其旨可相心得候。

十一月　外務省記　黒田長知家記

○

西海岸開港場所之儀ハ、新潟ト御治定相成リ、貿易之爲外國人居留之筈ニ候間、諸事神奈川、長崎、箱館之振合ヲ以テ、諸國之産物手廣ク搬運、勝手ニ可遂商賣候、尤來ル十二月七日ヨリ開港可相成處、御都合モ有之候ニ付、各國公使等ヘモ談判之上、來ル辰年三月九日迄延期相成候間、其旨可相心得候。

十一月　外務省記　黒田長知家記

○土井利與家記ニ、本條延期布告ヲ以テ二十二日トス、誤ナリ、外務省記ニ、小笠原長行、英國公使ニ答ル書柬ヲ載ス、云ク、江戸開市、新潟開港延期ノ儀、今十九日國内ニ布告致候。

二十日、北小路俊昌中務大丞○藏人極﨟、ヲ堂上ニ班ス。

北小路極﨟
大江俊昌

依有　思食、從今日被加堂上列候旨、被仰出候事。北小路俊昌家記

○俊昌家記ニ、未半刻、於議奏前廊下、傳奏日野資宗卿、議奏萬里小路博房卿、同加勢堤哲長卿等列座、傳奏日野演舌トアリ。

○戸田氏共、再ヒ疾ヲ以テ、入京スルコト能ハサルヲ謝シ、戸田氏共家記　松平定安、出羽守○松江藩主食封十八萬六千石、上京ノ期ヲ緩セント請フ。松平定安家記

○長崎奉行河津祐邦、薩摩藩ノ佛國人モンブラン等ヲ雇フテ、其軍事ニ參シ、又英國汽船ノ長崎港ニ在ル者ヲ購買シ、告ケスシテ其藩ニ歸ルヲ幕府ニ報ス、是日、幕府、書ヲ佛國公使ニ與ヘテ、其事由ヲ問フ。

佛蘭西全權ミニストル
ヱキセルレンシー
レオンロセスへ

以書翰申進候、別紙之趣、長崎奉行ヨリ申立候就テハ、貴國人モンブランド等、兼テ薩州家へ被相雇居候儀ハ、貴國政府之免許ヲ受候儀ニハ有之間敷被存候ニ付、閣下ニオイテ何トカ御所置有之候儀ニ候哉、右御見込モ候ハ、承知致シ度存候、此段申進候、拜具謹言。

慶應三卯年十一月二十日　　小笠原壹岐守花押

長崎奉行ヨリ申立候趣、

今般、薩州家ニ於テ、長崎港碇泊ノ英國蒸氣商船キヤンスー船號、買入度旨、同家家來ヨリ長崎奉行へ願出、當月八日朝、發船致シ候節、貴國人モンブランド儀、兼テ薩州家之需ニ應シ、同所鹿兒島へ被相招、同家軍務ニ關係致シ、先頃中ヨリ用便ノタメ長崎表へ滯在致シ居候處、此度右船へ乘組、其他外國人共一同、鹿兒島表へ相廻リ候。外務省記

佛國人モンブラン儀、松平修理大夫買入候手船へ乘組、鹿兒島表へ罷越候趣、取調候儀ニ付、再應申上置候書付。

河津伊豆守

長崎表へ先達テ中ヨリ滯在罷在候佛國人モンブラン儀、薩州へ被相招、軍務之儀ニモ關係可仕哉之趣相聞候ニ付、私儀、先年佛國ニオイテ度々面會仕候緣故ヲ以、面會對話仕、松平修理大夫家來相糺シ候、委細ノ事情ハ此程申上候儀ニ有之、然ル處、同家手船平運丸、先月廿五日、大阪表出帆候趣ニテ、同廿七日、當港入津以來、彼等ノ擧動別テ懸念ノ儀モ不少候間、精々探索爲仕候折柄、國許急用向有之候趣ニテ、英國蒸氣軍艦買入候旨、同家用達ノ者ヨリ屆書差出候處、右ハ新約書御掲載之趣モ有之、屆書ニテハ不都合ニ付、其段相達、書面差戻候處、猶又、買入方相願度段、同家家來ヨリ書面ヲ以申出、無餘儀相聞候間、是迄諸家ニオイテ外國武器類買入候節ノ振合ヲ以、役々立合檢査之上引渡可申旨、附札ヲ以テ相達置候處、當月八日朝

六ツ時頃、當港碇泊ノ英國蒸氣商船キヤンスー號船へ、薩州藩士之趣ニテ、乘組出帆ノ模樣ニ付、兼テ勤番罷在候本船番ノ者、差止候チモ不聞入、直ニ出帆致シ候趣、以之外ノ儀ニ付、夫々相糺候處、右蒸氣船之儀ハ、最前修理大夫家來ヨリ買入方相願候船ニテ、自儘ニ出帆、殊ニ外國人共モ乘組罷在候趣、重々不都合之次第ニ付、早速當地藏屋敷詰家來、運上所へ呼出相糺候積相達候處、左右ニ事寄不罷出、尤兼テ當地ニ相詰候聞役ノ者ハ、折節不詰合候得共、最初船買入方願出候家來罷在候ニ付、猶御役所へ可罷出段相達候處、急用向ニテ俄ニ旅行仕候趣、同家用達ノモノ申出、旁以不都合之至ニ付、右用達へ委細ノ次第可申立段相達候之處、右ハ國許急用向ニテ買入候儀ニ有之候處、船方ノ者共、諸事不心得ニテ、夫々御扱振有之儀チモ不辨、出帆仕候儀ト存候ヘ共、外國人乘組之儘出帆致候儀ハ、一切承知不仕候旨、不取留儀而已申立、事柄相分リ兼、尤兼テ探索申付置候モンブラン儀モ同船へ乘組、其他外國人共、一同鹿兒島表へ罷越候趣、勿論風聞迄ニハ有之候ヘトモ、不容易目論見モ有之哉ニ相聞、懸念不少奉存候、右樣モンブラン儀ハ勿論、多人數ノ外國人共、一同ニ不開港場へ召連候始末、御條約面ニモ相觸候儀、如何ニモ不都合之次第ニ付、同家家來出崎ノ上、嚴敷相糺、委細ノ事柄追テ可申上奉存候、尤萬一、彼地オイテ不慮ノ儀等出來仕候節ハ、御交際ニモ關係仕候儀ニ付、佛國岡士へ委細談判可仕候處、當節滯在無之、諸事英國岡士ニテ取扱候ニ付、委曲談論チ盡シ、是又追テ可申上候ヘトモ、先不取敢右等ノ次第爲御含、別紙風聞書、其外書類相添、此段申上置候、以上。

卯十一月　河津伊豆守

卯十一月八日、佛國人モンブラン、薩州鹿兒島へ罷越候次第、探索仕候風聞書、

一モンブラン者有名ノ人ト承及候間、面會致シ度段、當地滯在同國人チルトマンヱ何トナク相話候處、右ハ今朝キヤンスー船ニテ薩州鹿兒島へ向ケ出帆致シ候、乍去、折々當港へモ往復可致候間、其節面會相成候樣周旋可致段申聞候、

一右之次第ニ付、猶又委細ノ事情相尋候處、總體ニテ佛人十二人罷越候ヘトモ、名前ハ不殘ハ覺ト存不申、尤右之内モンブランハ博識ノ人ニテ、其他コニー人名、エレアル人名、先ツ此三人重立候人ニ有之、何レモ産物、鑄物、分析等、諸術ニ長シ、

此度モンブラン之外十一人ハ、薩州ヨリ給料相受候趣、殊ニ次ノ月ニハ、右モンブラン儀ハ、日本天子ヨリ御雇相成候ニ付、定テ上京可致ト存候、是モ薩州ノ紹介ニテ、上京致候儀ニ有之趣申聞候、

一佛商ヒンヤトル方ヘ罷越、前文ノ始末猶又探索仕候處、右ハ一向承知不致候旨申聞、尤モンブラン身分之義ハ、日本諸侯ニ均キ譯ニハ無之、多ク地面ヲ所持イタシ、且博學ニシテ富貴ノ人ニ有之趣申聞候、

一猶其外探索仕候所、佛國ヘ先達テ罷越居候薩州醫師兩人、モンブラントハ至極懇意ノ由ニテ、先達、佛國ヨリモンブラン一同當地ヘ罷越、右醫師曾テ噂イタシ候ニハ、モンブラン義、以前ハ佛國ニテ相應ノ地ヲ領シ、日本奉行職ノ業ナル[illegible]ニ有之候處、其後過失アリテ、其職ヲ被廢候由申聞候趣ニ有之候。

十一月八日

卯十一月八日、佛人モンブラン等、薩州ヘ罷越候次第、其筋探索仕候趣、左ニ申上候。

薩州家老 新納刑部
卯三十四歲
家來三人

當八月ヨリ外浦町田中屋勝右門方ヘ止宿イタシ候、

同藩之由 淺倉某
卯廿三四歲ニテ
小男

此者、名前不分明、三四ケ年前ヨリ佛國ヘ罷越居、昨年頃當地ヘ渡海、西濱町邊ヘ止宿イタシ居候義モ有之、總テ西洋人ノ風俗ニテ、モンブランノ附屬ノ樣ニ相成、先般、佛國ヨリモンブラン等同道、當地ヘ罷越、兼テ宿所ノ儀モ、外國人方ヘ同居致シ候由、

右刑部旅宿ヘ、モンブラン淺倉某同道、先達中ヨリ日々罷越、對話致候由ニテ、昨八日、刑部主從四人、淺倉共モンブラン一同、此節薩州ニテ買入候英船ヨリ、薩州ヘ罷越候由、

但、此外ニモ薩人等、其他乘組罷越候哉、總人數ノ義ハ相分リ不申、尤同藩五代才助義ハ、于今當地ニ相殘リ居候由、

一五代才助、其他同藩數人、當九月頃支那ヘ罷越、右英船ヲ買受居候由ニテ、其船當港ヘ入津イタシ候ヲ、薩藩等相待居候趣ニ有之候處、當節入津致シ候ニ付、則昨八日乘込、出帆致シ候義ニ有之候由御坐候。

十一月九日

一昨九日探索後、猶承込候趣、左ニ申上候、

書面淺倉某儀ハ、薩藩醫ニテ、元田中靜岳ト名乘、同藩中村宗建ト申モノ一同、先達テ中、精得館ヘ醫道爲修行罷越居、其後主命ニ依テ、佛國ヘ爲修行罷越、當時迄十五ヶ月罷在候處、此節モンブランヲ薩ヘ呼趣候ニ付、通辨旁附添參リ、宗建ハ今ニ佛國ニ罷在候由ニ御坐候、

當港佛國岡士館ニ兼テ罷在候當時薩州ヘ被抱入候柴田敬藏義モ、此節一同キヤンスー船ヘ乘組、薩州ヘ罷越候趣、且來春二三月頃ニハ、猶又當港ヘ罷越候趣、敬藏佛學門弟相話候趣ニ有之候。（外務省記）

○

當港碇泊ノ英國軍艦船號キヤンスー、此度國許就入用買請申度御坐候間、御免被　仰付被下度、此段別紙相添奉願候、以上。

十一月六日　松平修理大夫内　森清助

附札、

書面ノ趣承屆候、請取候節ハ、役々立會候義ト相心得、運上所掛ヘ可被談候。（外務省記）

○法蘭西代岡士ヘ照會書

松平修理大夫方ニテ買入レタル蒸氣キヤンスー船號ヘ、先達ヨリ當港ヘ滯在ノ法國人モンブラン、其外十人餘ノ外國人乘組、本月八日出帆、薩州鹿兒島ヘ罷越候趣ニ承及ヒシ間、足下法國代岡士被心得候故、及談判候處、更ニモンブランヨリ相屆候義無之、出帆後右ノ段被承及候由被相答、右ハ開サル港ニ付、果シテ罷越候得ハ、モンブラン始一同、條約違犯ノ罪遁

レ難ク、再ヒ當港ヘ歸來ノ節ハ急度被相糺、相當ノ罰ニ處セラレ候義ハ勿論ノ事ト存候得共、江戸表ヘ申立候間、後來處置如何被致候哉承リ度、速ニ回答有之候樣存候、此段申入候、謹言。

慶應三卯年十一月廿六日　　　河津伊豆守花押

法蘭西代岡士

マルクスフロール

エスクワイルヘ　外務省記

○薩摩藩士ヘ達候書付

覺、

一軍艦買入方ノ儀ニ付テハ、新御條約書第八ケ條ノ趣モ有之候ニ付、受取渡ノ節ハ、役々立會候筈相達置候處、其儀無之、自儘ニ出帆イタシ候儀ハ、如何ノ心得有之候哉、

一當月八日、キヤンスー船出帆ノ節、兼テ勤番罷在候本船番差止メ候處、有無ノ挨拶モ無之、遂ニ致出帆候趣、尤右船ハ軍艦ニ無之處、兩度トモ軍艦ト申立候ハ、如何ノ心得ニ候哉、

一右船中ニハ、十餘人ノ外國人乘組有之趣、右ハ何處ヘ向ケ連越候儀ニ有之候哉、

一右等ノ始末爲承糺、森清助儀御役所ヘ罷出候樣相達候處、其儘旅行イタシ候趣、如何ノ心得ニ有之候哉、

右ノ條々、下ケ札ヲ以、早々可被申聞候、以上。

卯十一月　外務省記

二十一日、豊岡隨資大藏卿上書シテ、舊習ヲ除キ、紀綱ヲ張リ、人才ヲ擧ケ、公議ヲ採ランコトヲ建議シ、其日二十九條ヲ陳ス。

臣等燕雀ノ淺見、元ヨリ鴻鵠ノ大志ヲ知ラストイヘモ、近來國體ノ事件ニ於テハ、寤寐ニ忘ル、閒ナク、至情默止難ヨリ、妄慮ヲ顧ス、聊カ管見相認建言仕候、過日、大樹建白ノ趣意柄熟考仕候處、抑鎌倉覇府別業以來、當德川氏ニ至リ已ニ二百有餘年、柄權掌握致シ來リ候處、近來內憂外患相踵キ候ヨリ、政事紀綱傾頽シ、今日ノ形勢ニ立到リ、天下ニ號令一モ行レ難ク、且ツ國用莫大ニ相費、人心自ラ離叛致シ候ヨリ必至當惑、止事ヲ得ス國政ヲ　朝廷ニ歸シ奉リ候次第ト存候、就テハ朝廷要路ノ方々、只掌ヲ反スカ如キノ御返答而已ニテハ、譬ヘ勤　王ノ諸藩如何樣ニ盡力仕候共、迚モ其甲斐有之間鋪候、然シナガラ、熟ラ世上ノ形勢ヲ伺ヒ視ルニ、頗ル名分モ相開ケ、且ツ萬民實ニ幕政ニ飽苦ミ、　朝廷ニ政權ノ歸シ奉ル事ヲ、自然渴望相樂ミ候模樣ニ相見エ、千歳再ヒ來ラサル大機會ト奉存候間、　朝廷要路ノ方々、何卒大活眼御開キ、是迄ノ舊弊御一洗、因循姑息ノ儀一切無之、只々公平眞實ヲ以、國家ノ爲ニ只管御盡力有之度、第一諸社ノ祭禮、　御元服、御卽位以下、御大禮ノ有職ノ事而已專務ニ被遊候テハ、　朝威赫然御振興相成候儀無覺束奉存候、何卒、今般大樹建言ノ旨趣ニ本ヅキ、號令一途ニ出、且ツ土州建白ニ所言ノ如ク、吳々モ公明正大、天下蒼生ニ被爲對、判然著明、一モ間然私議不仕候樣ノ御所置振無之候テハ、　王政復舊ノ儀ハ差置、不可言災害難計、歎ケ鋪ト奉存候、何卒大賢ノ堂上、諸藩武臣ヲ始、草莽間處士ニ至ル迄、格別ノ人才御選ミ御登用被爲在、聊カ私論ヲ不交、天下ノ太政、天下ト共ニ御議シ被遊候儀、大專務ト奉存候、且ツ又、當今急速ニ御施行被爲在度候條件、乍愚考大略左ニ相記シ候、宜鋪御取捨被下度候、

一此度御復政ニ付、諸臣一統、所存御尋問被爲在度事、
一太政官御再興、國事ヲ官武內外ノ無差別打寄、腹藏隔意ナキ樣、一和御評議有之度可被爲在候事、
一天下士庶人輩ニ至ル迄、言路ヲ可被開ノ事、
一賞罰ハ衆ヲ御スルノ大基本ト存候間、明白ニ被行度候事、
一無實ノ有職、從來ノ弊風ヲ停メラレ、君臣實用ノ禮儀ヲ可被爲行事、
一朝政、以後早旦ニ可被爲行事、

一此後ハ官武無差別一途トタテ、　朝廷ノ御直臣トシテ可被召使ノ事、

一武家ノ輩ヲシテ、堂上同樣ニ被　思召、大小名ニヨラス、人才ヲ御採用被遊、　宮中ニ交代勤番被仰付候樣仕度候事、

一兵庫開港事件、諸人建言ノ上、盡公議可被爲在御取計事、

一蠻夷ト通商公平ノ御所置ニ相成候上ハ、夷人參　朝ノ事モ難計候間、古ノ鴻臚館ノ如キ、御再興、且ツ　朝廷御不外聞ニ不被爲在候樣、嚴重ニ御備被爲在候樣仕度候事、

一宮方、法親王、攝家、華族、大臣家、家柄、本家株等ノ權柄ヲ御除キ、唯々人才ヲ御選御登用被爲在度候事、

一議奏、傳奏御役ヲ被停、英才ヲ御選、　朝政樣ノ名目ヲ被置、被任用候樣被遊度候事、

一宮、攝家方、小番勤仕可被　仰付候事、

一法親王還俗ノ上、同小番勤仕ノ事、

一非藏人、執次等、總テ可然御取扱御所置可被爲在ノ事、

一大學寮御再興、人才御養育之事、

一堂上地下ニ至ル迄、往古ノ風習ニ立戾リ、皇國固有ノ武ヲ錬リ、弓馬劍鎗砲術等、勉勵稽古被致候樣有之度候事、（原註、但シ指南ハ諸藩ノ內、能藝ノ者可被選候事、）

一天皇、晝ノ間表　出御、（原註、堂ノ御物男方奉仕、）入夜御內儀へ　入御可被爲在樣奉存候事、

一天皇、弓馬武術被遊候樣奉存候事、

但シ、御師範ハ大樹、竝ニ諸大名ノ內、勘能ノ者可被選事、

一天皇御學問、淸、菅兩家之外、天下ノ碩儒ヲ被召、講釋ヲ被聞召度候事、

一天皇御詠歌御師範、有、飛、冷三家之外、（原註、天仁遠波、）相心得居候人體、地下タリト雖モ、御相談被爲在度事、

一天皇管絃御師範、堂上ノ外、藝能名譽ノ伶倫ヲ被　召、御相手被　仰付度事、

一禁中御賄ハ、普天王土之意ニ本ツキ、諸國ノ貢獻ヲ以、御用度公大ニ可被　仰付ノ事

一臣下末々ニ至ル迄、大小祿夫々御處置ノ事、是迄宮家薄祿ニ付、家來向甚ダ不宜風儀モ有之、如斯舊弊、速ニ一新出來候樣有之度事、

一中古以來、　天子院號ヲ被爲廢、御謚號ヲ可被　奉候事、

一先帝山陵御再興被爲在候ニ付テハ、先不取敢　光格帝、　仁孝帝御改葬被爲在、　山陵御築造被爲在度候事、

一先帝山陵御再興被爲在候ニ就テハ、　先朝ニ勤仕ノ女房三仲間ニ至ル迄、薙髮ヲ被止、　山陵守護可被　仰付候事、

一法親王ハ勿論、諸國ノ僧尼、末々ニ至ル迄、還俗被　仰出、神道ニ相化候樣仕度候事、

一死者取扱、並祭儀等、尤神道儒禮取捨シ、改革可有之事、

右ケ條之外、尚件々可被爲在候得共、何分總テ舊例ニ不被爲泥、諸事公平ヲ旨トシテ、御改革御施行被爲在度、猶又、無益ノ虚飾ヲ御省キ、實用專務ニ被爲遊候ハヽ、質素之風下民迄モ推及ヒ、自ラ物價等モ相弛ミ、萬民飢渴之困苦ヲ相免カレ、自然　王化ニ靡キ、竟ニ　皇威萬國ニ輝候樣相成可申歟、實以憂苦之至ニ堪ス、不顧斧鉞之誅、隨資恐懼謹言。

慶應丁卯年十一月　豐岡健資家記　晩翠樓叢書

○松平賴英、左京大夫○西條藩主、食封三萬石、松平義勇、範次郎○高須藩主、食封三萬石、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代ラシメント請フ。二條攝政記

二十二日、小出英尙、伊勢守○園部藩主、食封二萬六千七百十一石餘、市橋長義京ニ至ル、小出英尙、市橋長義家記　池田慶德、佐竹義堯、右京大夫○秋田藩主、食封二十萬五千八百石、井上正直、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。二條攝政記

○幕府、横濱外國人居留地取締規則ヲ設ケ、且英國人ヲ雇ヒ、取締役トナスヲ各國公使ニ告ク。

亞墨利加合衆國ミニストルレシデント

エキセルレンシー

アルビワンワルケンボルクへ

以書翰申進候、横濱表外國人居留地取締、竝ニ道路掃除ノ儀ニ付、過日、閣下英、蘭、孛公使ト御協議相成候規則書、英國公使ヨリ被差越候ニ付、余ニオイテモ御同意致シ、且居留地取締ノ爲メ、當分ノ内英國コンシユル館附マルチンドウメン相雇候、依之、右規則書相添、此段申進候、拜具謹言。

慶應三卯年十一月廿二日　　小笠原壹岐守花押

横濱外國人居留地取締規則、

第一條

日本政府ハ、横濱ニ於テ、別ニ居留地取締役所ヲ取建、神奈川奉行ノ差圖ヲ受クヘキ外國人壹人ヲ雇ヒ、取締役ト相定メ候事。

第二條

神奈川奉行支配ノ取締役ハ、横濱外國人居留地ノ内ニアル道路、下水ノ修復、掃除ノ事ヲ心附ケ、其仕上ヲ見分スヘシ、且取締向、竝ニ道路、下水ノ事ニ付、外國人ヨリ右役所ヘ申立ヘキ訟ヲ聞、又不法ノ外國人有之時ハ、神奈川奉行ノ差圖ヲ受ケ、其國コンシユル目前ニテ糺明可致事。

第三條

神奈川奉行支配ノ取締役ハ、横濱居留地内ノ外國人ヲ保護シ、又神奈川港内ノ外國人不法ヲ働クモノヲ取押ユヘキ、外國見廻方ノ取締ヲ心得、竝ニ差圖ヲナスヘシ、右取締役、及ヒ神奈川奉行支配ノ日本人、又ハ外國人ノ見廻方ノ者、條約濟外國人ノ不法ナル者ヲ召捕ヘシ時ハ、直ニ其國ノコンシユルヘ引渡スヘシ、コンシユルハ其者ヲ受取、吟味濟迄、已ノ方ニ差置クヘキ事。

第四條

横濱居留地、又ハ神奈川港内ニ居住スル支那人、或ハ條約未濟ノ外國人取締向、竝刑法ハ、神奈川奉行ヨリ右取締役存寄ヲ

尋ネ、且外國コンシュルヘモ相談ノ上取計フヘキ事。

第五條

外國人ヨリ可差出地租ハ、其收納ノ期限ニ至リ、右取締役人ヨリ速ニ取立、若シ納方遲滯スル時ハ、其國ノコンシュルヘ可相達事。

第六條

各國公使ハ、衆人ノ生産ヲ害セサルタメ、居留地、或ハ神奈川港内ニアル飲食、遊戯ノ商家、及ヒ酒類ヲ商フ者ノ數ヲ減少スヘキ旨ヲ、其國ノコンシュルニ命スヘク、且向後右商業ヲ免許セシ時ハ、コンシュルヨリ其書付ノ寫ヲ、速ニ神奈川奉行ニ差出スヘク、若シ私ニ右商業ヲ營ム者アル時ハ、右取締役人ヨリ其コンシュルヘ相達スヘキ事。

第七條

日本政府ハ、外國人ノ安全ナランカタメ、神奈川港内ヘ輸入スル物品ノ内、火薬、竝ニ自然發火スヘキ物等ノ類ハ、相當ノ敷料ヲ出シテ積置クタメ、相應ノ場所ヲ取設クヘシ、又各國公使ハ、其國人等、右諸品ヲ他所ヘ貯ル事無之樣可取計事。

外務省記

○本件、各國公使ニ報スルノ書東アルヘケレトモ、米國ノ外見ル所ナシ。

○米國公使、書ヲ幕府ニ致シ、本國大統領、我使節ヲ朝鮮ニ遣リ講和ヲ謀ラントスルヲ謝スルヲ陳ス。

千八百六十七年第十二月十七日、日本ニ在ル合衆國ノ公使館ニ於テ、

江戸外國事務執政小笠原壹岐守殿閣下ニ呈ス、

本年第五月、余謹テ御老中ノ一書翰ヲ我政府ヘ送リタリ、但シ、其書翰ノ意ハ、高麗（コレア）ニ於テ、曾テ亞墨利加人ニ爲セル如

キ曲事ヲ、向後ナス事ヲ防クノ趣意ヲ以テ、日本政府ヨリ高麗亞ヘ公使ヲ贈ルヘキ由ヲ述フル者ナリ、

余ヨリ我政府ヘ贈レル文通ノ返書ニ、合衆國ノ大統領ハ、貴政府ノ懇親ナル所置ヲ大ニ善トスルコトヲ余ニ申來レリ、是ヲ以テ、余閣下ニ之カ謝辭ヲ述フヘシ○余又、閣下ニ左件ヲ告クヘキヲ命セラレタリ、若シ高麗亞ニテ十分ノ言譯、卽チ詫言ヲナスコトナキトキハ、合衆國ノ政府ハ如何シテ其正當ナル償ヲ得、且ツ其恭敬ヲ失ハサルヘキヤ、之ヲ考フルヲ要スヘシ、

余、貴國政府ヨリ高麗亞ニ送ルト定メシ公使ノナセル手續ニ就キテハ、閣下ヨリ其報告ヲ得ハ、余之ヲ我政府ニ申送ルヘシ、恐惶敬白。

日本在留合衆國ノミニストルレシデント
アルビワンワルケンボルク

外務省記

復古記　卷五　終

總括兼纂修
一等修撰　臣　長松　幹

校勘
一等修撰　臣　長　炭
一等協修　臣　四屋恒之

校錄
一等書記　臣　澤渡廣孝

繕寫
三等繕寫生　臣　小川長和
二等繕寫生　臣　小島　春

復古記　巻六

慶應三年丁卯十一月二十三日ニ起リ十二月四日ニ至ル

○十一月

二十三日、島津茂久、京ニ至ル、久光疾アルヲ以テ之ニ代ル○島津忠義家記 黒田齊溥、久松定法、内膳正○今治藩主、食封三萬五千石、時ニ松平氏ヲ稱ス、疾ヲ以テ、赴召遲緩ヲ謝ス。○黒田長知、久松定弘家記

○附錄春嶽私記ニ云、青山小三郎儀、吉井幸助方ヘ罷越承候處、小松帶刀儀、先達テ著薩之砌ヨリ、持病之足痛發動、人手ニ掛リ漸致歩行候仕合ニ候得者、是非御供ト乍存難相適、無據相殘候テ、温泉ヘ罷越、快氣次第馳上リ候種ニテ、實痛相違無之、夫故、土州ヘハ無據大久保一藏罷出候由申出候段、小三郎罷歸申上、右之節、幸助云、追々諸侯御上京ニ付テハ、何卒少モ早ク公議之御運ヒ付キ不申候テハ、遷延之内、如何成事變モ難計、別テ近來暴逆之徒横行、坂本龍馬ヲ始、不慮之事有之、七條ニテ伊東甲子太郎暗殺抔モ可惜事ニテ、彼ハ頗有志ニテ、先達テ之建白抔者、一々尤至極同論之事共之由、又追々之御手順御見込、大藏大輔樣ニハ如何ト申ニ付、御盛意御擴充ヨリ外ニ御見込無之、公明正大之御雄圖、御直ニモ再度御伺ヒ、御感服御安心之旨相答候處、如何ニモ上樣ニオイテハ、可奉疑樣ハ無之、永井殿抔モ御同樣之由候得共、唯板倉侯等ニハ、矢張久戀之心底有之哉ニモ疑フ者有之、修理大夫樣ニモイツレニ御相談モ被成度、兎角御手後レニ不相成樣、來月十四日比迄ニハ、大綱丈ケハ御据リニ不相成候テハ不相適、イツレ之道ニモ、此度之機會ヲ失フ時ハ、土崩瓦解ト焦思候由。

○黒田齊溥、其管地肥前國内ノ耶蘇宗徒、長崎奉行ノ捕縛スル所ト爲ルヲ幕府ニ稟ス。

美濃守御預所肥前國彼杵郡山里郷内之者、邪宗門之儀ニテ、御奉行ニ御召捕ニ相成候末、黨類之者モ不少由ニ御座候、就テ

ハ右邪宗ニ相關リ候儀ハ、初發ヨリ御奉行所ニテ御取捌ニ相成、統テ關係不仕處ニ相心得罷在候段ハ、其砌御奉行所ヘ申達置候、然ルニ邪宗門之儀ハ、重キ御制禁ニテ、不容易事件ニ付、猶此以後宗門之儀ニ付、疑敷相聞ヘ候者御座候節ハ、前條同様相心得申度旨、猶更長崎御奉行所ヘ申達候、此段申上候樣國許ヨリ申越候、以上。

十一月　　松平美濃守家來

大野辨太郎

黒田長知家記

二十四日、明年正月天皇首服ノ日ヲト定ス。

御元服定、

當日奉仕直廬裝束、

以西面六箇間爲其所、四方懸簾、〔北東南三方垂之、西方卷之、〕北東南三方傍簾立亘四尺屏風、北第一間〔奥方、〕逼屏風、設高麗端疊爲座、〔不加茵、無對座、〕其邊置御硯、〔右方、〕同第二間以南敷同端疊、〔奥端相對、〕各三帖爲公卿座、

攝政出自簾中著座、

其儀直衣五位職事二人褰簾、

先覽北廂御調度、

奉行職事參候于長押下、〔資生候六間長押下、〕

攝政被仰北廂御調度可持參由、〔其儀御目歟、〕

豫自納殿運置於直廬便所、

其儀小御所南庇設置辛櫃二合、〔朱塗赤綱染緒、〕二辛櫃納御唐匣同臺、

一辛櫃納御冠筥同臺、御泔坏同臺、

次五位職事二人、相互持參御調度、
其儀先六位藏人四人、相互舁之、辛櫃二合、西庇第二間、開蓋退入、次五位二人、資生進第北方、一辛櫃前取出、御冠筥盛臺、入二間置攝政座右方退、次經理取出泔坏盛臺、入二間置攝政座中央退、次資生第二辛櫃取出、御唐匣盛臺、置攝政座左方、仰蓋退入、候六間長押下、
攝政覽畢、如元返置便所、
其儀依御目參進、被仰可撤之由、直資生取唐匣如元納辛櫃、次經理納泔坏、資生納御冠筥退入、次六位四人、如元舁辛櫃納本所、
此間攝政著束帶、
次攝政自簾中出、褰簾如初、
此間公卿參集伏座、
奉行職事參候于長押下、資生、
攝政被仰可招公卿之由、
其儀攝政公卿之參否ヲ被尋、各申參入之由、被仰可召之由、
次奉行職事出陣召公卿、
其儀資生自小御所南、女官階代下殿、經十八間、廊下下行、道出於陣召諸卿、著軾仰于左相其詞
次公卿自便宜所參著直廬座、
其儀諸卿經十八間廊下下行、道昇小御所南階、自便所著直廬座、
左相端一大納言著于奥、第三帖次ニ相分著座、
次藏人頭參候于長押下、俊政朝臣、
攝政召座前、被仰何來年正月　御元服日次事、
可問陰陽師之由、

其儀攝政召頭右中辨、頭右中辨參進跪座前、左方攝政仰來年正月中旬可有御元服、日次令勘申ヨ不及勘文、頭右中辨稱唯起座、

次藏人頭於殿上問日次事、

其儀出殿上著奥座、陰陽師、兼著端座、頭右中辨日于陰陽師、陰陽師參座下仰、仰詞如攝政、則申云御元服日次之事十四日癸亥、十五日甲子後宴、十五日甲子、十六日乙丑、兩日之中被用歟、

豫召儲陰陽師一兩人、

次藏人頭歸參進申云々、

其儀頭右中辨歸參申、攝政如陰陽師詞、攝政仰云、兩日之中優劣重々尋申セ、則出殿上仰云、優劣重令申ヨ、陰陽師答曰、十四日、十五日兩日之中、强雖無優劣、十五日殊可宜歟、歸來申云々、

攝政被仰諸卿可令定申由、

其儀攝政被仰兩日之間、被定申ヨ、左相被日于次座參議、參議定申、次二個條、攝政被仰之後、直ニ參議定申、

次諸卿自下﨟定申條々、俊政朝臣、資生等候、長押下歟、俊政朝臣日次議定之後退入歟、

次公卿起座、

其儀條々定畢之後、攝政被仰今ハカリ、次公卿起座、寫先下﨟、

次攝政入簾中給。式部寮記
土御門晴雄日時勘文記

○左大臣近衞忠房、右大臣一條實良、上表シテ職ヲ辭ス。

不肖之臣、厚蒙　朝恩在官候處、頃日、脚氣之症相發、不堪久座難澀、且方今不容易時勢、　朝廷憲法重大之事件、追々可被議行之處、日々參　朝無覺束、其上明春　御理髮、竝御遊御用、其外公事參仕等、自然不進退之儀有之候而者、旁深不堪恐懼候間、當官隨身兵丈等辭申度、乍然、國事御用之儀者不堪傍觀、扶所勞精々可令勤仕心底候間、於辭官之儀者、格別之以　御

憐愍、速被　聞食候様偏願存候事。

忠房

近衛篤麿家記

○

方今不容易時勢、　朝廷憲法重大之事件、過日可被議行之所、臣不肖暗弱之質、徒高官一事汙朝議候儀有之候而者、實以恐懼之至候間、當官辭申上度、何卒速被　聞召候様伏而希候、乍然、即今形勢不忍傍觀、國事御用之儀者、微力之限勉勵、聊可奉報　天恩心底ニ候、於辭官之儀者、先以出格之御憐愍、速被　聞召候様只管賴存候事。慶明雜錄

○一條忠貞家紀ニ、實良辭表原書不相分ト云フ、慶明雜錄二十四日、左府公、右府公參內御辭退上表ト題シ、此書ヲ載ス、蓋シ實良ノ上ツル所ナルヘシ、故ニ此ニ收ム、文字寫誤アリ別ニ考正スヘキナシ。

二十五日、松平定安、再ヒ上京遲緩ヲ謝シ、眞田幸民、前田利同、池田德定、相模守○因幡藩支封主、後若櫻藩ト為ル、食封一萬五千石、時ニ松平氏ヲ稱ス、織田信成、筑前守○柳本藩主、食封一萬石、疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ延ヘ、二條攝政記、前田利同、池田德定家記岡部長寛、老臣ヲシテ代ラシメント請フ。岡部長職家記

○土佐藩士、尾、越、肥後等ノ藩士ト議シ、速ニ在京諸侯ノ會議ヲ興シ、以テ幕府政權奉還ノ實ヲ擧ケンコトヲ謀ル。

○春嶽私記ニ云、二十五日夕、土藩後藤象二郎、福岡藤次、神山左多衞參邸拜謁、象二郎ヨリ是迄之手續申上候處ハ、粗先日藤次ヨリ申上候ト同趣ニテ、扨、今後之儀ハ、小松帶刀ト深ク申合セ候儀有之、象二郎國許ヘ罷越、帶刀モ歸國之上、國許同論ト相成、修理大夫様モ御上京ニ相決候得者、帶刀ハ直樣出帆、土州ヘ立寄、尙又、象二郎申談、同船ニテ上京之契約ニ候故、

於國許屁指相待居候處、帶刀ハ足痛ニテ旅行難相成ニ付、湯治罷越、御跡ヨリ罷上リ候由ニ候、併帶刀之足痛甚失望而已ナラス、且ハ異數、自然於國元帶刀之説不相立事ト相成候ヘハ、帶刀ハ乍恐内府公ヲ奉初、私共迄ヘモ面目無之、迚モ難罷出筋ニ候由、就テハ一日モ早ク御上京之名侯丈ケ御會議相始リ、至公至中之大本相立候ヘハ、其上誰彼物數奇立テノ出來候モノニモ無之、モシ物數奇ヲ出シ候トテ、立行モノニモ無之、自然ト公論ナラテハ不相適事ニ相成候樣ニ押寄セ度、夫モ、此度之御盛意奉戴、公明正大之同論藩、堂々ト旗ヲ立候ヘハ、夫ニテ勝算ハ定リ候ト申モノ、其上ニテ公卿方ト申中ニモ、正三卿ハ御格別候ヘハ、此卿ヘ熟ク入説イタシ、先ツ上京諸侯ヲ被召、意見御尋ニ相成、其御答之御次第、御簾前之御誓ヒニ相成リ候ハヽ、夫ニテ大本相定可申候、夫ヨリ議事院等之事ニ相成、種々條目ニ亘リ、公議可相立儀ト被存候由、於控所猶又雪江、十之丞、小三郎ニ前文之次第反覆討論、此方樣ヨリハ尾、肥ヘ可申談、土藩ヨリハ藝、薩ヘ可申談、因、備ヘハ藝ヨリ可爲談、藝ハ素々同論ニテ、聊嫌疑無之由、薩ヘハ明日ニモ可申談、愈小松ト約定之通ニ運ヒ候ヘハ、何之子細モ無之、同志藩丈ケハ整々堂々之正論ヲ立候テ可然、何分明朝ハ永井殿ヘ參上、猶御内意之處モ相伺ヒ、其模樣可及案内、其上ニテ同論藩樞要之向會合、篤ト手續迄モ及示談、夫ヨリ公卿方ヘ手ヲ入候樣可致ト申談ス、從是ハ、明朝早々尾、肥ヘ打合可申ト談シタリ、二十六日、今朝、雪江、田宮如雲旅寓ヲ訪ヒ、昨夕之次第、土藩見込之趣等、逐一及物語候處、都テ同論ニテ、聊モ異議無之、何分正大之御盛意貫徹スヘキ爲ニ御上京之事ニテ、是等之次第素ヨリ所願候ヘハ、尾侯ニモ決テ御同意無論之由、此時ト成テハ、同志藩ハ同志丈ケ之正論主張之外ハ無之、及反覆談論タリ、同日、肥後邸ヘ酒井十之丞罷越、津田山三郎ヘ逢對、靑地源右衞門モ來會、夫ヨリ申談之次第一々徹底、第一内府公御英斷御特立、老公御直ニ御伺之御模樣等拜承、何モ新聞之由ニテ、群疑氷解感泣奉戴ハ勿論ニテ、同志藩一致、公大正明之立論ニ悉ク同意、夫ヨリ藩老溝口孤雲宅ヘ會シ示談之處、是以異議無之、早速兩公子之内御上京之儀、明日飛脚指立可申、總テ同意同論候得共、猶及衆評、明日孤雲參上、御返答可申上トノ事也、翌二十七日、孤雲參邸、一邸悉御同意之趣申上、仍之、肥後表ヘモ越中守樣、良之助樣被仰合、御上京ニ相成候樣爲申上、昨日飛脚差立候由、今朝、雪江、後藤象二郎ヲ訪ヒ、永井殿消息承候處、則今朝參謁陳啓之處、同氏モ尤

同論ニテ、當時勢ニ付、往々之見込ハ夫々有之候候得共、手初之處、幕ヨリ端ヲ開キ候テハ嫌疑ニモ亘リ候ヘハ、此處外藩ニテ緒ヲ引出シ候ヘハ、大ニ都合宜候間、一日モ早ク取懸リニ相成候樣致度ト、殊之外大悅ニテ有之由、此運ヒ候ヘハ、彌以手ヲ廣ケ、同論多ク相成候樣致度トノ事故、尾、肥兩藩ヘ示談、同論之趣及物語處、大ニ安悅セリ、容堂樣二十三日御出帆、來月二日三日ニハ御上京可相成候ヘハ、夫迄ニ精々同志之藩語ヒ置、猶御談申上公卿方ヘ出懸候積之由、今朝永井殿之咄ニ、日本終ニハ郡縣ニ可相成トノ上樣御見込之由、是ハ英國往古封建ナリシカ、公議之上、郡縣ナラテハ强國トハ難相成ト決シ、郡縣ト相成候事故、日本モ夫ニ類シ可申トノ御說之由。

○幕府、東北諸藩ニ令シ、其士民ノ唐太島ヲ開拓シ、及ヒ其他ニ移住スルヲ許ス。

蝦夷地御開拓之儀ハ、先年以來厚御世話モ有之、就中唐太島之儀ハ、北門樞要之地ニ付、向後同島ヘ出稼望之者ハ、勝手次第御差許可相成候條、有志之者ハ、早々箱館奉行ヘ可被申立候、右之趣、東國、北國筋ニ領分知行有之面々ヘ、不洩樣可被相觸候。

十一月　柳原政敬家記

○

蝦夷地御開拓之儀ハ、先年來厚御世話モ有之、就中唐太島之儀ハ、北門樞要之地ニ付、向後同島ヘ出稼勝手次第御差許ニ相成候ニ付、土井能登守、酒井銈次郎等之振合ヲ以、萬石以上以下トモ、產業取開方有志之面々ヘハ、見込之場所爲御任ニ相成候條、得其意可被申立候、猶委細之儀、箱館奉行可被承合候、右之趣、東國、北國筋ニ領分知行有之面々ヘ、不洩樣可被相觸候。

十一月　柳原政敬家記

二十六日、柳澤保申歸藩ノ請ヲ允ス。二十八日途ニ上ル、

○批紙

願之趣無據次第ニ候間、家事取締置、尙又上京可有之事。（柳澤保申家記）

○保申家記ニ云、願書ハ二十五日差出セトモ、原記ヲ失スト。

○柳澤德忠、幼ニシテ且疾アルヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。（柳澤德忠家記）

○榊原政敬、書ヲ幕府ニ呈シテ、朝廷ノ召命ヲ辭シ、若シ許允ヲ蒙ラスンハ、爵位ヲ奉還シ、以テ陪隷ノ列ニ就カント請フ、幕府、之ヲ却ク。

今般、御政權　朝廷ヘ御歸シ、且御辭職之御事件、千古之御英斷ニテ、御遠圖モ被爲在候儀トハ奉存候得共、君臣之身分ニテハ、感慨涕泣不知所言候、且過日傳奏ヨリ御達書之內、諸大名伺被仰出等ハ於兩役取扱云々ト有之、然處、拙者家筋之儀今更申述候迄モ無之候得共、三河以來之御譜代ニテ、數百年無量之御洪恩奉感戴今日ニ至候處、不圖モ、爾後於兩役伺被仰出等被取扱候テハ、御當家ヘ奉對無何ト比肩之形相成、君臣上下之名分條理不相立、從來之素意ニ相背キ、臣子之鄙情不堪痛哭候次第ニ付、仰願ハ、都テ是迄之通遵守奉命仕度奉存候、萬々一於　朝廷御允容無之候ハヽ、出格之御寵遇ヲ以蒙仰候官位ニ候得共、速ニ返上、退テ無位陪臣之員ニ列シ、祖先以來之遺志ヲ繼、微臣之小節ヲ全フイタシ度、一途ニ存込候間、切迫之愚衷深御垂憐被成下、是等之旨趣　朝廷ヘ宜敷被　仰上被下候樣奉懇願候、尤登京之上、詳悉御願申上度存念ニ御座候處、不快ニ付、發途致遲延候間、不得止以書中申上候、宜敷御執成可被下候、以上。

十一月二十六日　　榊原式部大輔

（榊原政敬家記）

○政敬家記ニ云、夕刻、差戻ニ相成ルト。

二十七日、島津茂久既ニ京ニ入ル、淺野茂勳二十四日ヲ以テ國ヲ發シ、毛利敬親ノ支封主老臣

等、二十六日ヲ以テ藝兵ニ御手洗港ニ會ス、(指華入京日載)是日、茂長、敬親ノ報狀ヲ上リ、且召命停格ノ令、途上齟齬スルノ狀ヲ稟ス。

毛利家ヨリ別紙之通、使者ヲ以テ申越候、尤此儀ニ付テハ、從　朝廷　御沙汰有之候迄、上坂可見合旨申達候樣、從　朝廷被　仰出候ニ付、其段毛利家、並吉川監物ヘ相達候樣、去ル十日從幕府達有之ニ付、早速以使者申達候得共、全行違ニテ差越申候間、一應御屆仕候、此段可然御執　奏被成下候樣奉願候、以上。

十一月二十一日　安藝少將

別紙、

先達、從　朝廷御召登之段御達有之候砌、末家中氣分相罷在、重大之　御沙汰筋、等閑打過候儀奉恐入候ニ付、不取敢、家老中計發途爲仕候段及御達置候處、末家之内少シニテモ病氣快候ハヽ、一同大坂表ヘ可罷出トノ御事ニ付、種々保養相加候得共、今以聢々無之、追日遲延仕候テハ重々恐入候儀ニ付、淡路名代毛利平六郎、監物名代宮庄主水、並家老毛利内匠一同上坂爲仕候間、旁之趣、　朝廷向宜御取計致御賴候。(春嶽私記 指華入京日載)

○毛利敬親淺野茂長ニ贈ル書

過ル十日、板倉伊賀守殿ヲ以御達相成候由ニテ、別紙之趣致承知候、此儀ニ付テハ、前日以使者致御達候樣、(本條ヲ指ス、)末家共外、既ニ國元發船以後ニ付、途中迄申越候心得ニハ候得共、自然大坂表著岸後ニモ相成候ハヽ、行形同所ニ差扣、何分之御沙汰奉待候心得ニ罷在候間、此段　朝廷向ヘ宜御取計致御賴候。(指華入京日載)

○指華入京日載ニ曰、二十五日、各艦乘組如左、鞠府丸、(毛利内匠、並諸官員、右田一手四十八、)癸亥丸、(整武隊、振武隊、)丙辰丸、(銳武隊、以上二艘鞠府丸引之、)丙寅丸、(右田一手、)乙丑丸、(第二奇兵隊、丙寅ニテ引之、)滿珠丸、(銳武隊、)庚申丸、(奇兵隊、遊擊隊、膺懲隊、滿珠丸引之、)二十六日、御手洗港著、藝藩誘導船昨日著船、會議左之通、

一役方之者四五人、諸艦ニ先チ西ノ宮ヘ著、揚陸致シ、大洲藩ヘ懸合、迎ヘ舟、其外諸仕構之事、
　但、藝州御船ハ只今ヨリ揚碇、其便リヲ借リ度候事、
一諸艦ハ淡路島ニ於テ一同待合候筈ニ付、過日紀伊守様御上京御供船之内、一艘ヲ以船揃置候地迄、引舟トシテ御差下シ被下度候事、
一西ノ宮ヲ著船場所ト相定、本船ヨリ陸地迄ハ、彼地之小舟ヲ雇ヒ、第一ニ兵士、第二器械、第三諸道具相運候積リ、
一三藩申合、蒸氣一艘宛、神戸海ヘ殘置度候事、
一フラフハ御當藩之分、薩藩ト取交相用ヒ度、尤七艘之内二艘分位ハ、弊藩之分ヲ相用度候事、
前條之都合ニ付、國貞直人、石部祿郎、小荷駄方役人神田源兵衛手子一人、下人二人、鉄屋定次郎一同、藝藩誘導船ヘ乘組、夜八ツ時ヨリ出船致候事、藝艦役附左之通、諸兵總督岸九郎兵衛、參謀湯川清次郎、監察野崎喜右衛門、國事掛リ黑田益之允、小荷駄取締島本金之助、應接役川合三十郎。

〇遠山友祿、美濃守〇苗木藩主、食封一萬二十一石、疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ緩フセント請フ。〇遠山友祿家記

二十八日、淺野茂勳、京ニ至ル、〇淺野長勳家記 池田茂政、備前守〇備前藩主、食封三十一萬五千二百石、時松平氏ヲ稱ス、 南部利剛、上杉齊憲、彈正大弼〇米澤藩主、食封十八萬七千二百四十八石、 伊達宗城、水野忠弘、眞次郎〇山形藩主、食封五萬石、後朝日山ニ移ル、 土井利恒、能登守〇大野藩主、食封四萬石、 九鬼隆義、長門守〇三田藩主、食封三萬六千石、 牧野誠成、豐前守〇丹後田邊藩主、食封三萬五千石、後舞鶴ト改ム、 木下利恭、備中守〇足守藩主、食封二萬五千石、 木下俊愿、鐵次郎〇日出藩主、食封二萬五千石、 片桐貞篤、主膳正〇小泉藩主、食封一萬千百石、 九鬼隆備、南部信民、美作守〇七戸藩主、食封一萬千石、 伊東長𧰼、播磨守〇岡田藩主、食封一萬三百四十二石、 疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ延ヘント請ヒ、松平武聰、南部信順、疾アリ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。〇二條攝政記

〇徳川慶喜、既ニ大政ヲ還ス、而其實未タ擧ラス、松平慶永、薩藩ノ大ニ幕府ヲ疑フヲ憂ヒ、慶

喜ニ說キ、西鄕隆盛吉之助○薩摩藩士、等ヲ招テ、其眞意ヲ諭サンコトヲ勸ム

○春嶽私記ニ云、二十七日夕、大久保一藏被召呼、今後之見込御尋ニ相成候處、此時　朝廷之御基本不相立シテハ不相適事候處、兎角　朝廷ニ御人材乏敷、其處甚苦心之由、會議公論之儀モ、孰レニ正大ニ歸スヘキ事ナカラ、御手下シ之次第如何相成可然哉、邸議一定不仕、決定之上ハイツレニ相伺候、心得之由申上之、依テ內府公御英斷之御樣子等被仰聞候處、今一層御實行ニ不相顯候テハ疑惑難晴、紀、會、桑等之雜說モ有之候ヘハ、何卒一日モ早ク御實跡相顯ハレ候樣願ハシクト反復申上之、二十八日朝、會藩手代木直右衞門ヲ被召呼、此度之御一件、御英斷之御次第逐々御承知ニテ、御盛意無御間然御同意ニ付、トコ迄モ御奉戴被成度、夫ニ付、肥後守殿御見込等如何有之哉、御家來共ニオイテハ、今後之處如何相心得候哉ト御尋之處、直右衞門申上候ハ、御盛意貫徹希望仕候ハ、肥後守ハ元ヨリ家來共モ一同御同然之儀ニ御坐候得共、唯々今後之見込ニ於テハ甚心配仕候、畢竟肥後守在職已前ヨリ存込居候ハ、德川家之政權ハ、　朝廷ヘ被歸、幕府ニテハ　王命ヲ奉シ、順正之御政道ニ相成候ハ、、可然ト存居候處、此度之御一擧ニテ、年來之誠心モ違却仕、失望之極地ニ御坐候、政權ヲ一途ニ被歸候ハ、乍恐御尤至極之御儀奉存候得共、幕府迄御捨被成候テハ治リ方附キ申間敷、公議ト申モ如何之運ヒニ可相成哉、更ニ見詰無之、議事院ト申テモ、外國之制度通リニハ中々急々可相運トモ不被存、人材御擧用モ御美事ニハ候得共、如何程之人材出候而モ、何事モ取扱ヒ馴レ不申テハ、今日之御用ニハ立不申候、是モ舊幕府之御役人ナラテハ迚モ行屆キ不申、又朝廷トテモ乍恐御人材無之、中々　王政復古抔思ヒモ寄不申候、彼ヲ思ヒ是ヲ思ヒ候テモ、舊幕之御制度ヨリ外ニ、治平之見込ハ無之、過日　御所ニテ、太政官初八省御取建之御見込御垂問之御書付、尾、越ヘ出候トノ事ニテ致拜見候得共、是等モ畫餠同樣御儀タルヘク抔、唯舊幕制ナラテハ難相適、意味反復懇々申上之ニ付、公ニハ何分上樣御盛意行違無之致徹底候樣有之度、外藩ヨリ見入レ候テモ、親藩中ニ上旨ヲ取違候テハ貫通不致、却テ致妨害候樣ニ被思候テハ相濟不申、此處、一藩之示談十分行屆候樣被成度ト御申聞ニテ退坐セリ、控所ニテ御勤役共出會申談候越意ハ、上樣如形御立派之御英斷ニテ御打出、大公至正之尊王旗ヲ被建候事候ヘハ、親藩一同、一心同力整々堂々、葵章之旗ヲ建ラレ、尊王之御味方申上候ハ

ハ、今後誰アッテ抵抗スル者有之間敷、國初之形勢ニテモ可想像事ニテ、其時ニ當リ彼是ト私說ヲ主張致候向ハ、異論之徒候ヘハ、夫ハ討ツテモ天下ノ許ス處ナリ、然レハ當時之見込ハ、公議之時ヲ待テ可申出儀ニテ、方今ハ開是非之論ハ箝口シテ、唯只管ニ、御公正之御趣意ヲ何處迄モ押通ス同一體ニ相成度ト及議論處、一心同力、異論ヲ討ツ之儀ニ至ツテハ、其大體ヲ了解シ得タレハ、猶熟考之上、追々及示談度由、最初後藤トモ及談論、正大丈ケハ無論候得共、公議之未見込無之、其節頻ニ同意可否之返答ヲ被責候得共、幕府之御都合難計ニ付、一藩限之挨拶ニモ及兼、暫時甚困窮之次第ニ有之由、午後御登城、伊賀殿ヘ御逢、兎角薩藩之嫌疑氷解セスシテハ、今後之御手順不恰好、昨日モ一藏御呼出、御直ニ御談之處、疑念深ク有之哉候間、吉之助、一藏等被召呼、御直ニ御說得有之候ハヽ、夫々安著ニモ可至歟ト御存寄之處、御申入之處、可達　上聽トノ事ニテ申上ニ相成處、至極御尤ニ思召候旨、被召出候儀ハ、尚御考可被成トノ御儀之由、伊賀殿ヨリ此節英船渡來、上樣ヘ拜謁相願候得共、當御時態御下坂モ難被成ニ付、永井被遣候、英入京申立候ハヽ、如何致候半心痛之由御談ニ付、公、當時ト相成候テハ、何ノ御苦勞モ無之、其段　朝廷ヘ御伺可然ト被及御挨拶由。

○幕府、令シテ凡ソ脇往還、明年正月以後、驛夫錢ハ六倍五分、渡船賃ハ二倍ヲ增加セシム、又江戸鐵砲洲ヲ以テ、外國人居留地ト爲シ、其居民ノ家屋ヲ外人ニ貸與スルヲ許ス。

諸國脇往還、人馬賃錢等、是迄割增申付置候宿村モ有之候得共、右ニ不拘、來正月ヨリ一般元賃錢之上ヘ、人馬賃錢六倍五割增、川場之分ハ二倍割增ヲ、當分之內御定賃錢ニ申付候間、其通可請取候、尤高札掛改方之儀ハ、其筋ヘ可申立候事、

一御用ニ付、旅行之面々ヘ被下候人馬、並右之向持參、且諸向ヨリ差立候御用物等、都テ無賃繼立御免、人馬川場共夫々御定賃錢相拂旅行致シ、差添無之御用物ハ、貫目ニ應シ賃錢相添差立候筈ニ候條、可得其意候、尤京家之向、且前々人馬被下來候分、並證文相添差立候狀箱、或ハ御用物、又ハ諸向ヨリ差立候御用狀等ハ、是迄之通無賃ニテ繼立可申事、

一御用旅行之面々、木錢米代、又ハ安旅籠拂等相止、當分之內、上下ニ不拘、一人一泊錢七百文、一晝同三百文宛相拂候筈ニ

候、尤手輕ニ取賄可申事、
一御用旅行之向通行之節、爲案内罷出候役人多人數ニ不及、一人罷出候樣可致、杖拂之儀モ、御朱印等重品柄、並諸役人旅行之節ハ格別、其餘ハ見計不差出候テモ不苦候事、
右之通、脇往還繼場有之候村々、御料、私領、寺社領共、不洩樣可被相觸候。

十一月　榊原政敬家記　土井利與家記

○黑田長知家記ニ云、右之通ニ付、高札懸改案文願出、且賃錢受取ノ期相尋候處、高札懸改ヲ待タス、正月ヨリ觸面通リ心得ヘク案文ハ、其筋ヘ申達スヘキトノコトナリト。

○

江戶表外國人居留地之儀、鐵砲洲、船松町二町目、並同所十軒町ニ御定相成候間、可得其意候、就テハ本願寺橋ヨリ南小田原町、數馬橋通、南八町堀四町目、五町目、夫ヨリ本湊町海岸通リ、明石町、南飯田町、上柳原町、南本郷町之内ニオイテ、所持之家作等、外國人ヘ相對ニテ、貸渡之儀御差許相成候、尤貸ス事ヲ好マサルモノハ、强テ貸サシムル事ヲナサストノ規條ニ候間、勝手次第對談致シ、約定之節、鐵砲州町奉行役所ヘ可申立候、
右之趣、向々ヘ可被相觸候。

十一月　土井利與家記

○幕府、兵庫地方ノ民、外國貨幣ニ慣ハサルヲ以テ、姑ク我銀貨ト兌換通行セシム、因テ各國公使ニ移書シ、其改鑄耗減費二分ヲ收ム。

和蘭ポリチーキアゲント兼コンシユルゼネラールエキセルレンシードデガラーフフアンポルスブルツクヘ

以書翰申進候、兵庫開港ニ付テハ、同所之人民、外國貨幣ニ慣レサレハ、當分之内、我銀貨ト引替使用差支ナキ様可取計處、右引替ニ付、從來四分吹減シ取立來候得共、今般英公使請求之趣モ有之ニ付、同所開港之日ヨリハ、二分之吹減シ取立候様可致候、此段申進シ度如是候、拜具謹言。

慶應三年卯十一月廿八日　　小笠原壹岐守花押

（外務省記）

二十九日、北條氏恭、京ニ至リ、堀直虎、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム、榊原政敬、酒井忠氏。大河内信古、加藤泰秋、（遠江守○大洲藩主、食封六萬石、）京極朗徹、（佐渡守○丸龜藩主、食封五萬千五百十二石、）相良頼基、（遠江守○人吉藩主、食封二萬二千百石、）關長克、（伊勢守○新見藩主、食封一萬八千石、）織田長易、（攝津守○芝村藩主、食封一萬石、）一柳末德、（對馬守○小野藩主、食封一萬石）疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ緩フセント請ヒ、九鬼隆備、再ヒ延期ヲ請ヒ、稻葉久通、（右京亮○臼杵藩主、食封五萬六十石、）松前德廣、（志摩守○松前藩主、食封三萬石、）本多忠鄰、（肥後守○山崎藩主、食封一萬石、）疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代ラシメント請フ。（○二條攝政記　稻葉久通家記）

晦日、左大臣近衞忠房、右大臣一條實良ノ請ヲ允シテ、其官ヲ罷ム、國事掛並ニ故ノ如シ、權大納言九條道孝ヲ以テ、左大臣兼左近衞大將左馬寮御監ト爲シ、內大臣大炊御門家信ヲ右大臣ト爲シ、隨身兵仗ヲ賜ヒ、權大納言廣幡忠禮ヲ內大臣兼右近衞大將右馬寮御監ト爲ス。

○忠房へ達書

辭左大臣之事被　召止度被　思召候處、依所勞辭退之趣、無是非候間、不得止被　聞食候事。（近衞篤麿家記）

○實良へ達書

辭右大臣云々。以下、同上文、一條忠貞家記

○

正二位行權大納言藤原朝臣道孝、

從二位行權大納言藤原朝臣長順　宣、奉　敕件人、宜令任　左大臣者。

慶應三年十一月三十日　大外記兼助教中原朝臣師身奉

○

從二位行權大納言藤原朝臣長順　宣、奉　敕左大臣、宜令列　右大臣上者。

慶應三年十一月三十日　大外記兼助教中原朝臣師身奉

○

左大臣藤原朝臣、

從二位行權大納言藤原朝臣長順　宣、奉　敕件人、宜令兼任　左近衞大將者。

慶應三年十一月三十日　大外記兼助教中原朝臣師身奉

○

左大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣、

從二位行權大納言藤原朝臣長順　宣、奉　敕件人、宜爲　左馬寮御監者。

慶應三年十一月三十日　大外記兼助教中原朝臣師身奉

以上竝九條道孝家記

○

內大臣藤原朝臣、

從二位行權大納言藤原朝臣長順　宣、奉　敕件人、宜令轉任　右大臣者。

慶應三年十一月三十日　　大外記兼助教中原朝臣師身奉

○

從二位行權大納言藤原朝臣長順　宣、奉　敕、以左右近衞番長各一人、近衞各三人、宜爲右大臣隨身者。

慶應三年十一月三十日　　大外記兼助教中原朝臣師身奉

竝大炊御門家信家記

○

正二位權大納言源朝臣忠禮、

從二位行權大納言藤原朝臣長順　宣、奉　敕件人、宜令任　內大臣者。

慶應三年十一月三十日　　大外記兼助教中原朝臣師身奉

○

內大臣源朝臣、

從二位行權大納言藤原朝臣長順　宣、奉　敕件人、宜令兼任　右近衞大將者。

慶應三年十一月三十日　　大外記兼助教中原朝臣師身奉

○

內大臣正二位兼行右近衞大將源朝臣、

從二位行權大納言藤原朝臣長順　宣、奉　敕件人、宜爲　右馬寮御監者。

慶應三年十一月三十日　　大外記兼助教中原朝臣師身奉

以上竝廣幡忠禮家記

○凡ソ叙任宮三公、及ヒ維新後功勞ヲ以テスル者ヲ除クノ外、常例ノ舊官位ニ係ル者ハ、以下皆略シテ錄セス。

○幕府、鍋島茂實、松平定安ニ明春京師警衛ヲ命ス。

松平出羽守
松平肥前守

來辰正月ヨリ三月迄、京都三ヶ月詰御警衛被　仰付之。（二條攝政記）

○毛利敬親ノ老臣毛利内匠、等、兵八中隊ヲ引キ、船艦七隻ニ駕シ、艦頭薩藝等ノ徽章ヲ掲ケ、昨夜打出濱（攝津菟原郡）ニ至リ、是日、遂ニ西ノ宮ニ次ス、（豫メ大洲藩打出ノ戍兵ト約ス、戍兵爲ニ導ヲ爲ス、）淺野茂勳、乃チ上書シテ、其情由ヲ陳疏ス。

先達テ、長州ヨリ以使者申越候書面ヘ、添書ヲ以申上候通、板倉伊賀守ヨリ之達書行違ニ相成、毛利淡路名代等、一同領内御手洗ヘ著仕候間、右達之旨趣委細申聞候處、兼テ必至之國情、一旦出帆、中途ヨリ引返シ候テハ、大ニ闔藩人心ニ關係仕候儀ニ付、其儘登坂、何分之　御沙汰相待度旨申聞候辨ニ付、任其意、家來附添、於西之宮停泊仕候ニ付、家來之者、昨夜著坂仕候旨、只今申越候間、此段不取敢申上候、可然御執　奏被成下度奉願候、以上。

十一月二十九日　　松平記伊守

（二條攝政記）

○本條、二十九日ノ字、下ノ指華入京日載ト事實合ハス、蓋シ豫メ商議スル所ニ因リ、實報ヲ待タスシテ上申セシヲ以テ、此抵牾ヲ致スモノナルヘシ。

○指華入京日載ニ云、二十九日朝、藝州萬年丸誘導罷越候事、同日、西宮著船之手筈之處、直人打出陣所ヨリ報知致候趣ハ、

關東歩兵二百人計、關東罷下候由ニテ、西ノ宮ヘ泊リ之由、彼是混雜之廉モ出來可致ニ付、打出ヘ一應著陣可然トノ事ニ付、打出海濱ヘ碇泊、同夜ヨリ晦日曉ニ至リ諸兵揚陸、

但、本陣親王寺諸兵隊ハ打出下町割宿、總而大洲藩人同道ニ而心配致吳候事、

同夜、薩藩黑田嘉右衛門、同了介村田新八、船中ヘ來訪致候、其趣ハ、薩侯御上京後事件ニ付、來月五日ヲ期限トシ、何歟御處分モ可有之旨、公卿間ヨリ密ニ御内諭有之ニ付、夫迄之處、西ノ宮滯在、何分ノ報知相待候樣トノ事、又十二月三日、薩邸内ヨリノ報告ニ、別紙之通、二日ノ批紙ヲ指ス、昨夜御沙汰相成候處、昨日朝廷ヘ御屆書面之趣モ有之、又候轉陣等仕候テハ、大ニ人心ニ關係致候間、西ノ宮ニ於テ御沙汰相待候間、宜御執奏相願ト申處ニテ、來六日、七日ノ頃、薩、藝兩藩ヨリ差出ス都合ニ仕置候云々。下略、

○附錄長藩西ノ宮地方告諭ノ文

今般、御所ヨリ御沙汰之御旨有之、末家、竝家老、當表罷越候、然處、昨年、藝州ニ於テ幕府ヨリ召出相成候家老、其外無故ニ兵威ヲ以テ拘留セラレ、遂ニ戰爭ニモ及候段ハ、世間承知之事ニ候處、當度　御所ヨリ被　仰出候御儀ニ付、不取敢罷出候得共、又候、關東ヨリイカ樣之御仕向可有之モ難計ニ付、爲警衞人數召連候次第ニテ、全以此方ヨリ兵端相開キ候儀毛頭無之、暫ク當所ニ於テ何分之御沙汰相待候心得ニ付、少シモ懸念ナク、各其職業相勤候樣、夫々預告諭度候者也、

條々、

一兵士陣外出行、不法之所行致候者有之節ハ、逐一本陣ヘ可訴出候事、

一兵士ト僞リ、有德之家ニ立入、金錢等無心ケ間敷儀申者可有之モ難計、右樣ノ者於有之ハ、早急本陣ヘ可訴出候事。

指華入京日載
晩翠樓叢書

○淺野茂勳攝政ニ致ス密啓

此度、長州家老竝末家名代、監物名代共、一同上坂爲致候テ、　御沙汰相待候樣之次第、表向御達申上候得共、極内實ハ、兵

庫開港之期日モ最早差迫リ候ニ付、此度幕府政權ヲ　朝廷ヘ復歸候ニ付テハ、外夷御取扱之儀モ、何レ　朝廷ヨリ可被仰出御儀ニ御坐候得共、兵庫開港之儀ハ、　先帝ヘ被爲對候テモ、一先御延引可被　仰出儀歟ニ奉恐察候、然ル節、外夷共、イツレ　朝廷ヘ相迫リ、御應接ニヨツテハ、自然暴擧之儀無之トモ難申、幕府ニハ征夷之職掌ヲ被蒙候得共、從來外夷ト和睦被相結候上ハ、爭カ干戈ヲ被爲交可申哉、左候ハヽ、後日、萬一　玉體御動被爲在候テハ、誠以驚愕至極之次第ニ御坐候、大膳父子未　御沙汰之通、實ハ承知不仕候得共、右樣之節ニ相臨ミ、誓テ傍觀仕間敷、粉骨碎身仕候テ、微忠ヲ盡シ、一方之御防ハ仕度ト之寸志、則紀伊守ニオイテモ難默止、此段極内々、歷　尊聽申置候事。

十一月晦日　　松平紀伊守

（春嶽私記）

○薩、藝、長三藩合從規畫ノ事、中山、正親町、三條、中御門、岩倉四氏ノ密議ニ係ル、蓋攝政モ亦之ヲ知ラス、故ニ本條、茂動ノ密啓モ亦假託スル所アルナリ。

○伊達慶邦、（陸奥守○仙臺藩主、食封六十二萬五千六百石、時ニ松平氏ヲ稱ス、）池田政詮、（信濃守○備前新田、食封二萬五千石、後鴨方藩ト稱ス、）細川興貫、（玄蕃頭○谷田部藩主、食封一萬六千三百石、）京極高厚、（飛驒守○豐岡藩主、食封一萬五千石、）土方雄永、（犇千代○菰野藩主、食封一萬千石、）京極高典、（下總守○多度津藩主、食封一萬石、）疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ緩フセント請ヒ、松平慶倫、再ヒ延期ヲ請ヒ、松平賴英、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシメ、丹羽長國、（左京大夫○二本松藩主、食封十萬七百石、）堀直賀、（左京亮○村松藩主、食封三萬石、）六鄉政鑑、（兵庫頭○本莊藩主、食封二萬二十一石、）織田信學、（左近將監○天童藩主、食封二萬石、）大田原勝清、（銈丸○大田原藩主、食封一萬千四百石、）小笠原貞孚、老臣ヲシテ代ラシメント請ヒ、靑木重義、（源五郎○麻田藩主、食封一萬石、）病ヲ謝シ、佐竹義諶、（播磨守○岩崎藩主、食封二萬石、）疾ヲ以テ、會同スルコト能ハス、公事ハ宗家佐竹義堯ニ傳諭センコトヲ請ヒ、奧平昌服ノ家臣、昌服海路ニ從フヲ以テ、會同ノ期ニ後ルヽヲ稟ス。（二條攝政記、小笠原貞孚、細川興貫家記）

是月、幕府ニ命シ、嚴ニ紀伊藩士等ノ黨議ヲ禁遏セシム。

今般、國體復古之御大業ハ、大樹至誠至當之方寸ヨリ出候テ、鎌倉以來數百年之流弊モ、一時ニ脫却致シ候事、　皇國之幸福不過之候、然ル所、在關東之諸侯、官位返上、忘恩之王臣タランヨリ、全義ノ陪臣タラント欲スル族モ有之、冠履顚倒、名分曖昧、大樹之美意ニ戾リ候事ハ不及申、抑　皇國億兆之人民ハ、天祖之所胚胎、（此間二字殘缺）トハ雖モ、御專制難被遊事勿論ニ候、然ヲ陪臣之義ハ、　皇國之土地人民ニ（此間四字殘缺）度候、大罪ハ　皇憲之所不許、大樹速ニ加理解、其上於不用ハ、可被加誅戮候、國事繁多之折柄、軍旅行屆兼候ハヽ、西國之大諸侯ニ命シ、速ニ王憲ヲ可被正旨　御沙汰之事。（小宮山綏介筆記）

○綏介筆記ニ云、右ニ付、大樹御答、御沙汰之趣、薄德所致、命令行屆兼候段不堪慚懼之至、一應在關東之臣下ヘ申付候上、御答可申上事。

○本件、日ヲ失ス、故ニ此ニ收ム、蓋本月十五六日ノ間ニ在ルヘシ。

○井伊直憲、書ヲ傳奏ニ上リ、祖先德川氏ニ依テ家ヲ立ルヲ以テ、朝命及申牒等、仍幕府ヲ經由セント請フ、既ニシテ其書ヲ請下ス。

今般、從幕府政權ヲ奉歸候ニ付、諸侯伺被　仰出等ハ、於御兩卿御取扱相成候旨被仰出、謹テ奉拜承候、然ル處、從來格別之天恩感戴罷在、　御沙汰之趣一應遵奉仕候事勿論之儀ニ御坐候、然ル處、是迄德川家之取立ヲ以、藩屛之任ニ備リ居候私家之儀ニ付、伺向被　仰出等、向後迚モ從幕府執達有之候樣仕度奉願候、微衷御汲取被成下度、宜御執成之程奉懇願候、以上。

十一月　　井伊掃部頭

（晩翠樓叢書）

○直憲家記、本條ヲ逸ス、之ヲ其家ニ問フニ、當時會津藩諸藩ニ迫リ、共ニ幕權ヲ挽回センコトヲ計ル、藩內用事者之ニ應セントス、有志ノ徒大ニ之ヲ爭フ、此書ヲ上ルニ及ンテ、有志ノ徒、密ニ傳奏飛鳥井雅典ニ詣リ、暫ク上進スルコトナ

キヲ請フ、既ニシテ藩論一變、遂ニ此書ヲ請下セリ、故ヲ以テ家記之ヲ載セス、且其日ヲ詳ニセスト云、故ニ此ニ收ム。

○幕府、關東八國ニ令シ、酒醬等釀造、三年ノ均額ヲ錄上セシム。

關東筋於在々、醬油、味噌、味淋、酒、酢又ハ濁酒等造込、五穀ヲ潰シ候渡世柄之者、並穀類取扱候渡世之者猥ニ相成候趣相聞、凶歲等之節御取締筋ニ拘リ候間、以來鑑札相渡、稼方差免候積リニ付、右取調之者廻村爲致候間、醬油造、其外之者ハ、一ヶ年造石高、穀屋共ハ賣捌石數三ヶ年平均高、取調可申立候、

右之通、關東八ヶ國御料ハ御代官、私領ハ領主地頭ヨリ、不洩樣可相觸知モノ也、

右之趣、向々ヘ可被相觸候。

十一月　森川俊方家記

○本件、日ヲ失ス、俊方家記、十一月二日ニ收ム、然トモ回達ノ日ニシテ、發令ノ日ニ非ス、故ニ此ニ收ム。

○神奈川奉行、米國商社ノ請ヲ許シ、煤氣燈ヲ横濱市街ニ設ケントスルヲ幕府ニ稟ス。○遂ニ果サス、

横濱表居留ノ米國商人、ガス製業ノ儀ニ付、同國コンシュル申立候趣申上候書付、

神奈川奉行

横濱表居留ノ米國商人共、同國サンフランシスコヨリ仕出シ、當地ニテガス社中ヲ結、今般ガスヲ製スル事ヲ企望シ、右器具全備之上、開業ノ日ヨリ五ヶ年ノ間、獨リ其業ヲ占有シ、外ニ同業ノ商社ヲ開キ度者有之候トモ、右ヲ相禁シ、獨業ヲ以テガス商賣ノ儀差許可吳旨、同國コンシュル申立候ニ付、右ガス製ノ儀、段々仕方承合候處、ガスランプト相唱、道路ヲ鑿チ、管ヲ縱横ニ埋メ、元場所一ヶ所取設ケ、石炭ヲ燃シ、右精氣ヲ管ヨリ通シ、人家之房室、其他軒先、市街等ヘ數百ヶ所燈火ヲ列ネ、暗夜ノ頃トテモ晝之如ク、通路更ニ差支無之、歐羅巴ニテハ專ラ被行候由之儀ニテ、便利至大ノ良法ニ御座候間、今般居留地各國人、何レモ右講中ニ入リ、家毎ニ燈シ候積ニ付、官道ヘ右ノ裝置イタシ度、勿論入費莫大相掛リ候間、開業

ノ日ヨリ其商社五ケ年ノ間、獨リ其業ヲ占有シ、外ニ同業ノ商社ヲ開キ候者有之候テハ利源ヲ漏シ、右ノ入費容易ニ仕埋兼候間、獨業ノ儀相願候旨申立候ニ付、勘辨仕候處、彼方同志講中有之、右之裝置ヲ設候ハ勝手次第ニ候得共、右ハ一國ヘ許候事ハ、各國ヘモ可許定約ニ付、他國人ヘ同樣之儀申立候節ハ、差留ヘキ辭柄無御座候間、右ノ趣ヲ以及說諭候處、强テ獨業之儀申立候ニ付、各國コンシユルヘ右之儀承リ合候處、異存無之旨書翰ヲ以申聞候、就テハガスノ氣管ヲ縱橫地中ヲ鑿ヲ埋込候トモ、道路ハ元形ニ復シ候儀ニハ有之候得共、外商賣ノ筋トモ譯違ヒ候間、相當ノ冥加爲納可然哉ノ處、人家ヘガスヲ引候外、往來ヘ數十ケ所常夜燈ヲ照シ候儀ハ、則市中取締之一端ニテ、其入費ハ當方ヨリ差出當然之旨、同國コンシユルハ勿論、英國公使ヨリ申立候義モ有之候得共、右入費ハ多數ニ付難承屆、就テハ道路ヘガス之氣管埋込候トモ、彼方ニオイテ冥加不差出上ハ、常夜燈ヲ照シ候積ニ候トモ、燈火ノ入費ハ當方ニオイテハ不差構候旨及談判、前書申立ノ趣承屆申候、勿論御國ハ各國ト風俗違ヒ、右樣ノ裝置施シ候テハ、火業ヲイタシ候惡徒ノ懸念有之候得共、是迄迚モ外國人居留地ニハ、門口等ヘ燈火ヲ連ネ居候間、右ト同樣ニ付差許候義ニ御座候、且ガス製所地所拜借ノ儀相願度、勿論新埋立地之內見立置候旨申立候得共、同所ハ貸渡可申餘地無之、殊ニガス製所近邊ハ、石炭油ノ臭氣甚敷趣承及候間、人煙稠密ノ場所ニテハ不都合ニ付、新堀割向山寄リノ方、可成丈人家懸隔候地所見立、貸渡候見込ニテ、右器械著港之節、相當ノ稅取立候積御座候、依之、立會御勘定方申談此段申上候、以上。

卯十一月

水野若狹守

依田伊勢守

外務省記

〇十二月

朔日、櫻井忠興歸邑ノ請ヲ允ス。三日途ニ上ル、

今般、私儀早々上京仕候様被　仰付候ニ付、不取敢上京仕候處、差向被　仰出候品モ不被爲在候ハヽ、此節柄、在所表取締仕度儀モ御坐候ニ付、重臣之者差置、何卒一先歸邑仕度奉願候、尤　御用之節ハ、近場之儀ニ付、御達次第、一日餘ニテ急速上京可仕候、此段奉伺候、以上。

十一月二十九日　　松平遠江守（二條攝政記　櫻井忠興家記）

○本日批紙

願之趣無據次第ニ候間、家事取締置、猶又上京可有之事。（櫻井忠興家記）

○蜂須賀齊裕、松平直克、松平忠誠、松平忠和、（主殿頭○島原藩主、食封七萬石、）松平忠禮、龜井茲監、（隱岐守○津和野藩主、食封四萬三千石、）遠山友祿、大岡忠敬、（越前守○西大平藩主、食封一萬石、）永井直哉、本壯道美、建部政世（三二郎○林田藩主、食封一萬石、）ハ、疾ヲ以テシ、上杉齊憲ハ、雪中道路通シ難キヲ以テ、上京ノ期ヲ緩セント請ヒ、德川茂承、立花鑑寛。（飛驒守○柳河藩主、食封十一萬九千六百石、）戸田氏共、淺野長厚、（近江守○安藝支封主、食封三萬石、）植村家保、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシメ、酒井忠美、山口弘達、新莊直敬、（下野守○麻生藩主、食封一萬石、）老臣ヲシテ代ラシメント請ヒ、溝口直正、（誠之進○新發田藩主、食封十萬石、）老臣ノ代赴遲緩ヲ謝シ、伊達宗孝、（若狹守○伊豫吉田藩主、食封三萬石、）大久保忠順、（三九郎○烏山藩主、食封三萬石、）病ヲ謝シ、有馬慶頼、松浦詮、（肥前守○平戸藩主、食封六萬千七百石、）大村純熈、（丹後守○大村藩主、食封二萬七千九百七十石、）島津忠寛、（淡路守○佐土原藩主、食封二萬七千七十石、）鍋島直彬、（備中守○鹿島藩主、食封二萬石、）在京ノ家臣、各道路遠隔、其主會同ノ期ニ後ルヽヲ以テ、寛假ヲ請フ。（二條攝政記　上杉茂憲家記）

○茂憲家記中、上奏ノ日ヲ失ス、姑ク此ニ類聚ス。

二日、毛利敬親老臣等ノ西宮ニ至ルヤ、會、桑二藩、攝政二條齊敬、前左大臣、國事掛朝彥親王彈正尹賀陽宮、○ニ迫リ、西歸ノ命ヲ下サシメントス、國事掛正親町三條實愛、密ニ中山忠能、前權大納言、中御門經之、權大納言、岩倉具視、入道前中將○具慶之子、及ヒ薩、藝二藩ト謀リ、之ヲ爭フ、夜ニ至リ、遂ニ淺野茂勳ノ奏狀十一月二十九日ニ在ル、ニ批シ、大阪ニ詣テ、後命ヲ俟シム。

可被 仰出儀モ被爲在候間、各登阪 御沙汰可相待事。指華入京日載

○指華入京日載ニ云、昨夜二日ノ夜ヲ指ス、之 朝議、尹宮攝關之處ニテハ、是非歸國之命令ヲ下ス論ニテ、餘程烈シク候處、漸ク議奏邊之處ニテ、登阪 御沙汰可相待トノ處ニ决シ候ヨシ、尹宮攝關之處ヘハ、會藩ヨリ餘程迫リ候ヨシ。

○春嶽私記ニ云、朔日、此頃、長州人多勢上阪、追々入京モ可致趣風聞有之、 朝野之人心不穩ニ付、今朝被命雪江、梅澤殿ヲ訪ヒ、長人上阪之虛實承調處、大分之人數、攝州西宮邊迄罷越候由、右者御指留之 朝命ト行違ヒニ相成リ上リ來ル由ナリ、藝ヨリ 奏聞モ有之、猶歸國之上、諸侯會議之評決ヲ待候樣降 命之處、國情無據譯合有之ニ付、其儘滯阪之儀ヲ願出タル趣、藝ヨリ再達有之、元來長州ハ、近來自ラ正義之國ト誇稱致シナカラ、如此ノ 朝命ヲ拒ミ、國情申立候儀、第一之不義ナリ、藝ハ左樣之不義ヲ隣國之好ミニ說得ハ不致、其願書取次タルモ亦不屆ナリ、諭告之上モ歸ラス、願書指出候トモ、不受取候ヘハ事濟ムヘキヲ、不義ノ取次ハ相聞エス、其儀及詰問度、辻將曹呼出候得共、不快之由ニテイマタ出不申トノ事故、押テ上京セハ、是非共抑留セントノ風說ハ、實事ニ候ヤト問フニ、畢竟夫ハ 朝廷之御取計ヒニ有事ナリ、急度歸國候樣被命候而可相濟事ナルヲ、御捨置被成候ハヽ、如何成不法ヲ働キ候半モ難計、素々謀反之國ナル事ハ、先年堺町之一亂將ニ發セントスル際、於伏見表、福原越後之反狀ヲ推究シ嚴敷及詰問、隱謀無相違趣ヲ吐カセタル事アリ、先年以下、事實齟齬疑シケレ共、原文ニ從フ、此度モ其節之轍迹ナレハ、不法ハ元ヨリノ事ナリ、押登ニ當ツテ、道路關門守衞ニ手向ナト致候ハヽ、指留ルハ勿論ニテ、時

宜ニヨリ騷動ニモ可相成ト被申ニ付、夫ハ守衛之向ナレハ不及是非候得共、自然會等出懸候勢ニハ相成間敷歟ト申候ヘハ、長人ハ洛中ヘ入レ不申樣、兼テ命令モ有之事候得ハ、會迚モ相手ニナリ申間敷トモ難申、元來押登ルトイフカ、長ノ不義候ヘハ、法之通リニ取扱フ、則公正之道ニテ、更ニ指支無之勿論、幕府ニテハ進退共ニ聊關係無之、傍觀スル迄、總テ　朝廷之思召次第ナリトノ事ニ付、幕ニテモ彼是御指揮之事ニ候ハヽ、一言可獻ト存候得共、　朝廷ヘ御任セト拜承候テハ、安心之至ニテ、別ニ可申條無之ト答ヘタリ、此夜二更後、板倉殿ヨリ御直書ニテ、長人追々入京之沙汰相聞エ、此節不容易次第ニ付、御相談之儀有之候間、明日四時比御登城相成候樣御申越ニ付、邸議之趣ハ、何分此度幕府之動靜ハ、天下之動靜ニ拘ル處之一大事ナレハ、一點御動搖之聲息無之、寂然正ヲ踏ンテ御進止可然ト相決シ、其段明早朝梅澤殿申入候樣、雪江ヘ被命之、二日早朝、雪江、梅澤殿ヲ訪ヒ、長人入京一件ニ付、公旨、並邸議之次第申入候處、梅澤殿モ同論ニテ、長ノ擧動ハ、幕ノ動靜ヲ試ルノ施策タル事ヲ推察セシ故、不虞之備ハ手當セシカト、形迹ニオイテハ曾テ轉動セサルヲ示スナリ、津藩ヨリ山崎關門固メノ伺モ打ヘキナレ氐、　朝廷ヘ伺之上可然ト指圖セシト答ヘラレタリ、四時御登城之處、長人一件之御評議種々之內、先ツ諸侯會集迄、大阪ニ罷在候樣、　朝命ニ相成可然トハ被決候得共、右ヲ　朝廷ヘ被仰上方之御意味、色々御斟酌有之、眞ニ御心附之樣ニ無之而ハ、矢張幕意ニ歸スル故、板倉殿考按ニテ、戸田大和守殿ヨリ正三卿ヘ入說之御手續ニ相成候由、津藩ヨリ山崎關門警固ニ付テ之伺、津ニテハ幕命ニ任セ度趣ニ相聞候得共、幕ニテハ　朝命ニ附セラルヘキ筋故、傳奏ヘ伺之上ニ可相成事ト被決由、但シ此儀ハ公之御心付ニテ、長人入京指留候事ハ、兼テ　朝命有之事故、關門ニテ其次第申聞差留之、其上ニモ是非上京ヲ願候ハヽ、其段　朝廷ヘ相願ヒ、朝廷ヨリ、津藩ヘ通行イタサセ候樣降命ナラテハ難相通段、トコ迄モ申聞セ、其上ニモ押テ通行セハ、不得止事打拂可申ト、名義ヲ立申間候方可然ト被決事之由、會ハ在京諸侯參　內被命、　朝議ニ相成候樣尹宮ヘ入說、宮モ御同意歟候得共、左樣之事ニテハ、却テ動搖之姿ニ付、此事ハ御取消ニ相成候樣、會侯モ承引ニテ不被行相濟由、兎角行違ヒ出來ニ付、明日者、板倉殿ヘ手代木呼出、諭告ニ相成候樣御談之由、辻將曹ヨリ三宅萬太夫ヲ以、板倉殿ヘ申出シハ、長人ノ義御差留之　朝命不心得罷出候事候得ハ、改テ　朝命如此ト申聞セ候

方至當ナルヘク、幾度モ同樣ニ申聞候テ、其上ニモ抗命之節ハ、夫ハ其時之事トイタシ、是非承服致處マテ申聞度、藝ヘ被命候テ、十分盡力可仕トノ事至當之正論、上樣始甚感服ニハ候得共、期後レ、最早大阪迄トノ儀、夫々御達ニモ可相成刻限ニ付、難被行シテ相濟由、此夕、大阪ニテ　朝裁相待候樣、　朝廷ヨリ被　仰出タリ。

○毛利敬親ノ老臣等、西宮ニ在ルモノ、書ヲ薩、藝二藩ニ致シテ、其情ヲ陳ス、是日、淺野茂勳、之ヲ上ル。

別紙之通、西宮碇泊罷在候長藩之者共ヨリ、松平修理大夫桜ヘ差出候趣ニテ、御同方桜ヨリ被指越候間、不取敢其儘差出申候、此段奉申上候、以上。

十二月二日　　安藝少將内
　　　　　　　熊谷兵衛

先達テ、從　朝廷御召出之段御達有之砌、末家中氣分相罷在、重大之　御沙汰等間(閑歟)ニ打過候儀奉恐入候ニ付、不取敢家老中計發途爲仕候段及御達置候處、末家之内、病氣少々ニテモ快候ハヽ、一同大阪表ヘ可罷出トノ御事ニ付、種々保養相加候得共、ハキト無之、餘リ遷延仕候テハ、幾重ニモ奉恐入候ニ付、淡路名代毛利平六郎、家老毛利内匠、監物名代宮庄主水、一同上阪爲致度、兼テ藝州桜御誘引之御約束ニテ罷居候處、御手洗ニ於テ重テ　朝廷ヨリ御沙汰被爲在候迄之間、上阪被止候段承リ候得共、今般、於　朝廷大政被聞召、猶列藩公議ヲ被盡、御基本可被爲建被仰出候旨傳承仕、　皇國大慶不過之奉存候、然ル處、是迄弊邑之儀、奉蒙典憲、意外之干戈ニ相及候次第、毫末奉對　天朝異心無御座、大膳父子ニ於テハ恐縮ニ不奉堪候得共、武門不可止之場合ト相成、右及事宜申候、父子勤　王之至誠不愧天地ト、四民一途ニ思込候情義難默止、屢御取傳ヲ以幕府ヘ及言上候得共、微衷徹上仕兼、必定、中間壅閉暗雲掩天日候儀ト、晝夜泣血罷在候處、豈計、今日之御機會ト轉變仕、實ニ大旱之雲霓ヲ望ミシ思ヲナシ、西宮迄到著仕、御沙汰相待罷在候間、此上幾重ニモ宿志貫徹仕樣候相願候、旁之趣、朝廷向宜御取計御願致候、以上。

長藩

丁卯十二月　楫取素彥
國貞直人

薩州御藩
京詰御當役中樣
藝州御藩
京詰御當役中樣　春嶽私記

○岩城隆邦、左京大夫○龜田藩主、食封二萬石、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム、岩城隆邦家記黑田齊溥、鍋島茂實ハ、道路遠隔ヲ以テシ、毛利高謙、伊勢守○佐伯藩主、食封二萬石、ハ病ヲ以テ、並ニ上京ノ期ヲ緩フセント請フ。二條攝政記

○北條氏恭、市橋長義ニ代リ、四塚關門ヲ守ルヲ稟ス。

今般、私儀上京仕候ニ付、先達テ家來之者ヨリ伺濟ノ四ツ塚關門御警衛人數召連、今日同所へ差出、市橋下總守人數ト交代勤番爲仕候、此段御屆以使者申上候、以上。

十二月朔日　北條相模守使者
朝比奈清

二條攝政記

○櫻井忠興、長門藩士等ニ、其封内留次、及ヒ城下經過ヲ許スノ可否ヲ幕府ニ稟ス、是日、幕府、其留次經過、妨ケナキヲ令ス。

別紙申上候長州人止宿之儀、如何取計可申哉、且又城下通行候事モ有之候ハヽ、其節如何取計候テ宜敷候哉、此段奉伺候、以上。

十二月朔日　松平遠江守

別紙、

今晦日晝九ツ時、長州御藩中ト被仰、毛利内匠樣、竝御同勢凡千人計御召連、一兩日御止宿被成度由御賴ニ付、段々御斷申上候得共、御聞入無御坐、達テ御賴被成候ニ付、如何可仕候哉、此段御伺奉申上候、御下知被爲成下候ハヽ、難有仕合奉存候、以上。

慶應三年十一月晦日　上ヶ原新田庄屋　七右衞門

年寄　平左衞門

○本日幕府批紙

毛利内匠、其外之者、此度上阪致シ候ニ付、止宿又ハ城下通行爲致候儀ハ不苦候間、不取締無之樣可被致候。

○附錄　忠興申報

昨朔日御屆申上候遠江守領分上ヶ原新田ニ止宿罷在候長州藩中之者共、昨朔日夜中、西ノ宮驛海淸寺へ引移申候段、上ヶ原新田村役人共ヨリ申出候ニ付、此段不取敢御屆申上候、以上。

十二月二日　松平遠江守家來

青谷榮三

櫻井忠興家記

三日、脇阪安斐、歸邑ヲ請フ、是日、之ヲ聽ス。六日途ニ上ル、

今般、私儀依　御召不取敢上京仕候處、此節家政向改革等申付候折柄ニ御坐候間、重臣之者差置、一先歸邑仕度、尤程近義ニ付、　御用之節ハ、御達次第晝夜兼行、速ニ上京可仕候、此段奉伺候、以上。

十一月二十九日　脇阪淡路守

二條攝政記

○本日批紙

願之通無據次第ニ候間、家事取締置、猶亦上京可有之事。脇阪安斐家記

○松平慶憲、前月二十九日、汽船九隻、日章及ヒ薩、藝、長三藩ノ旗章ヲ掲ケテ、封内ノ近海ヲ過クルヲ幕府ニ報シ、大洲藩士ノ打出村ヲ戍ル者、長門藩老臣等ノ、來リテ其旁近ニ次スルヲ報ス。

卯十一月二十九日午刻過、蒸氣船十艘、兵部大輔領分明石浦西沖ニ相見候、内一艘ハ、淡州クサカ明神之岬沖邊ヨリ、西ヘ向乘戻シ候、九艘ハ東ヘ向、追々致通船候、尤見留候船印左之通相建候、

日ノ丸御印　一艘　薩州ノ印　二艘

藝州ノ印　二艘　長州ノ印　三艘

但、此三艘ハ蒸氣ニテハ無之、異國形帆船ニテ、右薩、藝之蒸氣船ニテ漕登候、

右九艘上筋ヘ通船之内、日ノ丸御印之分一艘、明石浦舞子沖ヘ致繋船、無程亞米利加之印建替、小舟ニ乘致上陸、掛リ役人之者ヨリ相尋候所、長崎ヨリ初テ相登、磯邊不案内ニ付、水先キ相頼候趣申聞候間、則水先案内之者兩三人差出、夫々水先相濟引取申候、其餘相替儀モ無御座、同晦日辰ノ刻、東ヘ向致退帆候趣申越候間、此段御屆申上候、以上。

松平兵部大輔家來
十二月三日　友部權六
〔松平直致家記〕

○大州藩申報

去月二十八日、長州末家德山藩兩三人、打出村陣屋へ被參、先般、從幕府末藩之者京都へ被召候ニ付、不快ニテ名代爲差登候哉之處、相伺候所、全快次第出京可致旨御沙汰ニ付、則此度、德山侯世子御總督ニテ、本藩御家老毛利內匠隨從、其內著岸可相成、萬端御依賴被成度被申出、續テ二十九日、晦日、凡御人數千人餘著岸ニ相成、楠ヶ原、其外處々止宿相成申候、此上ハ薩州邸、藝州邸御周旋ニテ被　仰出次第、御上京之趣ニ候得共、夫迄之處、同所御止宿之趣、御警衛所重役之者ヨリ申越候ニ付、此段一應御屆申上置候。〔指華入京日載〕

○藤堂高邦、〔佐渡守○久居藩主、食封五萬三千石、〕京ニ至ル。〔藤堂高邦家記〕

四日、毛利敬親老臣等東上ノ事、稍ク傳播ス、時ニ津藩兵山崎關門ヲ守ル、藩士、乃チ書ヲ上リ、老臣等兵勢ヲ張リ、關ニ抵ラハ、直チニ之ヲ掃蕩センコトヲ稟ス、又其支封久居藩兵ノ都下守衞ヲ撤シ、共ニ山崎ヲ守ランコトヲ幕府ニ請フ、幕府、特ニ宇治ノ兵ヲ分ツヲ許ス。

防長御處置、兼テ寬大之　御沙汰ハ被爲在候得共、長人入京之儀ハ、　勅許ニモ相成居不申、山崎街道筋罷登候節ハ、差留候心得ニ御坐候、自然兵勢チ張罷登候ハヽ、無論戰爭之覺悟ニ相心得可然哉、此段急速奉伺候事。

藤堂和泉守家來
十二月四日　深井半左衞門

○

藤堂高潔家記　晩翠樓叢書

此度長州人之趣ニテ、一昨日昨日ト、凡千人計、攝州打出濱ヘ上陸、西宮邊ヘ宿陣致シ候趣相聞候ニ付、伊州表ハ近畿之儀、兼テ援兵差出候筈ニ有之候得共、一兩日出兵之隙モ有之、且御警衞三ヶ所ニ相成、兵勢相分レ候故、山崎街道、自然今明日之間使入モ難計候ニ付、素ヨリ山崎表警衞人數ハ備置候得共、猶モ兵數增加仕度、依テ内分佐渡守宇治御警衞所、竝下立賣御門御警衞所相撤シ、上牧、竝高濱等、川陸御關所防禦仕度、臨時不得止候儀ニ付、急速御許容奉願候事。

十二月

藤堂和泉守家來
深井半左衞門

晩翠樓叢書

○幕府批紙

下立賣御門御警衞人數引揚候儀ハ難相整、宇治御警衞人數ハ引分ケ、山崎表ヘ相廻シ候樣可被致候事。

晩翠樓叢書

○池田政禮、丹波守○備前新田、食封一萬五千石、後生阪藩ト稱ス、京ニ至リ、池田政禮家記丹羽長國、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。丹羽長裕家記

復古記　卷六　終

總括兼纂修
一等修撰　臣　長松　幹

校勘

一等修撰　臣　長　　　炎

一等協修　臣　四屋恒之

校錄

一等書記　臣　澤渡廣孝

繕寫

二等繕寫生　臣　小川長和

二等繕寫生　臣　小島　春

復古記　卷七

慶應三年丁卯十二月五日ニ起リ八日ニ至ル

五日、中山忠能、正親町三條實愛、中御門經之等、島津茂久、淺野茂勳ト謀リ、先ツ毛利敬親等赦宥ノ命ヲ發シ、繼テ更革ノ事ニ及ハントス、時ニ國事掛近衞忠房、九條道孝、廣幡忠禮等、松平慶永ト、敬親等寬典ノ事ヲ謀ル、會、桑及ヒ津藩士、二條齊敬、朝彥親王ニ說テ、之ヲ拒ム、是日、慶永、德川慶喜ニ勸メ、會、桑諸藩ニ諭シ、敬親等ノ處置、一ニ朝裁ヲ仰カシム、

○春嶽私記ニ云、三日午後、近衞前殿下之櫻木之亭へ被爲入タリ、左府公モ御同席、廣幡內府公御來會ナリ、長州ヲ唯今之處ニテ寬大ニ被處候テハ如何アラントノ御談、廣幡公ハ　朝廷之御處置決シテ彼是ハ申間敷ト御申ニ付、公ハ天下之大事ヲ議セラレント被召寄之、諸大名如何可存哉、是程之大事ト相成有之儀ヲ、　朝議計ニテ御決シニ相成候程之事候ハヽ、諸侯之會議モ無用、上京ニモ及ハサリシト申事ニハ相成申間敷カト被仰上候ヨシ、此件モ諸卿大抵御同論候得共、殿下尹宮御不承知之由、會、桑兩藩ヨリ御同意無之樣、迫ツテ入說有候故之事ニテ、外之公卿方モ、迫リニ來ランカト御恐怖甚敷由、此節津藩ヨリ山崎關門固之儀、嚴敷伺方ニテ御當惑之由、津ハ頻ニ幕へ阿附之勢之由、四日、雪江登營、梅澤殿へ對接、昨日櫻亭ニテ御談論之次第、公之被仰付ニテ及詳達、逐條會得有之、其上ニテ申サレシハ、會之入說モ松山之內意ヲ伺タル樣ニモ聞エタル故、夫ハ其坐ヨリ取返シニ殿下へ出タリ、唯今モ殿下ヨリ召候テ、可致參上候カ、定テ藤堂伺之一件ナルヘク候

得共、決シテ一己之見込等モ申上間敷旨、上樣ニモ嚴敷被命候ト物語ナリ、此日板倉殿ヘ被遣御内書、櫻亭之御次第御細記之末ニ、如左、

扨又、今日、長州ヨリ薩、藝ヘ差出候書付、以所司代攝政殿ヘ御差出シ相成候由、寫於前殿下、小生竊ニ拜見仕候、乍極密、前左府公ヘ藤堂留守居ヨリ御内々申上、右書出候ニ付テハ、上御始、在京之諸侯、　朝廷ヘ被爲召、衆議有之樣、御盡力可被成旨申上候由ニ御坐候、且又會、藤、萬一事チ誤候テ、長チ防禦スル等之一戰、會、藤ヨリ相始候テハ不相濟ト、甚御懸念候由ニ御坐候、不取留風聞之事候得共、今日承込候儘、有體及陳啓候云々、下略、

五日午時御登城、御談之次第ハ、會藩之妄動鎭撫一條之由、會藩ヘ通達之御書面出來、會侯ヘ御渡ニ相成、如左、

長防御所置之儀ニ付テハ、妄ニ堂上ヘ立入、周旋ケ間敷事有之候テハ、此後御所置之品、從　朝廷出候共、御眞意ニ無之樣相當恐入候儀ニ付、　朝廷之聖斷チ可奉仰事、

右會ヨリ紀藩、御親藩、御譜代申通之事、會ハ平山圖書頭殿ヨリ手代木ヘ說得有之。

○幕府、堀直虎ヲ以テ、若年寄兼外國總奉行ト爲ス、堀直明家記 又譜第諸藩帝鑑間、雁間、菊間席、ニ諭スニ、會同ノ命、朝廷ニ出テ、而シテ幕府之ヲ傳フ、則僭越ノ嫌アルニ非ス、宜ク速ニ西上スヘキヲ以テス。

帝鑑ノ間席ヘ

今般、從　御所上京候樣被　仰出候處、同席中被申合之上、上役共上京、於彼地伊賀守ヘ書面被差出候段、被申聞候趣ハ有之候得共、猶京地ヨリ申越候品モ有之候間、御門番、竝御曲輪最寄御警衛等、被相勤居候面々之外、何レモ同席申合、當地御警衛之爲相應之人數殘置、早々上京候樣可被致候、尤堀田相模守、鳥居丹波守、竝當時御門番前書御警衛等被相勤候面々、且病氣幼少之者、爲名代家老上京爲致可被申候事。堀田正養家記

○四養家記、十一月五日トス、然レ共、同席合議上京ノ事、十一月十六日ニアリ、本條十一月ナルコト疑ナシ。

○

各通　雁ノ間席へ

菊ノ間席へ

今般、御所ヨリ上京候樣被　仰出候處、先達テ同席一同見込ノ趣、京地ヘ相達候處、被申立ノ件々尤ノ筋ニハ候得共、御所ヨリ被　仰出、其通相心得候樣相達候上ハ、則　台命ニ隨ヒ候儀ニテ、　台命ヲ差越上京ト申譯ニモ無之候間、御門番・竝御曲輪寄御警衞等、被相勤候面々ノ外ハ、何レモ同席中厚被申合、當地御警衞ノ爲メ相應ニ人數殘シ置、早々上京候樣可被致候、尤土井大炊頭、菊ノ間ハ酒井下野守、加納嘉元次郎、柳生但馬守、内田主殿頭ニ作ル、竝當時御門番前書御警衞等被相勤候面々、且病氣幼少ノ者ハ、爲名代家老上京爲致可被申候。阿部正功家記　安部信順家記

○幕府、大坂外國人居留規則、及ヒ大坂、兵庫間運送船等規則ヲ設ケ、之ヲ各國公使ニ諜ル。

亞墨利加合衆國ミニストルレシデント

エキセルレンシー

アルビワンワルケンボルクヘ

以書翰申進候、大坂、兵庫外國人居留地ノ儀ニ付、昨四日、御面晤ニテ御相談ニオヨヒ候通取極申度、依之、別紙規則書差遣シ候間、諾否ノ御囘答有之候樣存候、右申進度如此候、拜具謹言。

慶應三卯年十二月五日

板倉伊賀守花押

大坂表外國人居留スル規則、

第一條

大坂ハ開港場ニアラサレハ、外國商船等碇泊スヘカラス、尤外國人所持ノ荷物ハ、卽チ條約附錄交易規則ニ隨ヒ、兵庫ニテ改メテ受ケ、同所或ハ他ノ開港場ニ於テ、輸入稅ヲ納メタル上ニ非サレハ、大坂ヘ陸揚スヘカラス、且大坂ニ於テ輸出稅ヲ

取立ル事ヲ要スルニ至ル迄、當分ノ内、外國人大坂ヨリ輸出スル物産モ、兵庫運上所ニテ改ヲ受ケ、輸出稅ヲ納メタル上ニアラサレハ、同港ニオイテ外國船ヘ積込ムヘカラス。

第二條

本書附錄之規則、並條約附錄ノ交易規則ニ隨ヒ、日本人或ハ外國人所持之荷物、運送船、引船或ハ乘合船等、帆前蒸氣ノ差別ナク、大坂ト兵庫ノ間ヲ往復スヘシ。

第三條

大坂在留外國人、左ニ記セシ境界ノ内、遊步勝手次第タルヘシ、卽南ハ大和川ヲ界ニ舟橋村迄登、夫ヨリ敎興寺村佐太迄横切、堺市中ハ大和川ノ外ナレトモ遊步ヲ免ス。

但、大坂ヨリ兵庫ノ往復道筋ハ、京師ヲ去ル事十里ヲ以テ限リトス、外國人ハ大坂表ニオイテ海陸往來スル事、日本人同様差障ナカルヘシ。

第四條

右之件々ハ、六ケ月試ミシ上、尙再議スヘシ、時宜次第、其以前ニモ再議スヘシ、

大坂ト兵庫ノ間、引船、荷物運送船、並外國人乘合船ヲ設ル規則、

第一條

都テ引船、荷物運送船、或ハ乘合船等、兼テ日本長官ノ免許狀所持セサル者ハ、大坂ト兵庫ノ間往復ナカルヘキ事。

第二條

免許狀願出候者有之節ハ、兵庫奉行、並ニ其筋ノコンシユル取調ノ上、免許狀可相渡、右免許狀ハ雙方國語ヲ以、船ノ模様等精敷書加ヘ、兵庫奉行ヨリ相渡シ、コンシユルノ奥印居ヘヘキ事。

第三條

免許狀差出候テヨリ一ヶ年ヲ過キ、奉行、並コンシュル勘考ノ上、免許ヲ差留ヘキカ、又ハ再應差出ヘキカヲ取極ムヘシ、尤最初ハ勿論、其後免許狀相渡候都度都度、手數料トシテ、一トンニ付金壹分宛、日本政府ヘ可納事。

第四條

運送船ハ荷物積込シ上、船足水入八尺以上ノ船ヘハ、免許狀相渡スヘカラス。

第五條

免許有之船ヘ役人ヲ爲乘組候事、或ハ大阪、兵庫ノ間往復ノ時、役人差添候事等、都テ日本政府ノ勝手次第タルヘキ事。

第六條

兵庫ニ於テ免許有之候船ヘ、荷物積込候節ハ、其品ニヨリ税濟證文、或ハ無税證文ヲ其持主ヨリ差添フヘシ、若證文ナシニ大阪ヘ陸揚セントスル者有之ニ於テハ、事宜次第取上クヘキ事。

第七條

大阪、或ハ兵庫ニ於テ免許有之候船ヘ、荷物積込陸揚ノ儀ハ、日本政府ヨリ差圖セシ波戸場、或ハ其爲ニ日本政府ニ於テ免許有之候傳馬船ニ限ルヘキ事。

第八條

免許有之候船等ハ、大阪ト兵庫ノ間ニ、荷物或ハ人ヲ運送シ、並ニ率船ノ外、何用向タリトモ用ユヘカラス、且海上ハ外國船、又ハ日本船、或ハ陸地等ヘ寄リ附ヘカラサル事。

第九條

免許ヲ得タル船ニ乘組ノ外國人船長ヲ除クノ外、水夫等ハ、大坂ニ於テ上陸スル事ヲ許サス。

第十條

此規則、或ハ追テ可取極之規則ヲ違背スル者アラハ、免許狀取上ル而已ナラス、其コンシュルヘ兼テ其本國政府ヨリ、士民

チシテ諸條約ヲ守ラシムルタメニ與ヘラレシ權ヲ以テ、罰スヘキ事。外務省記

○附錄十一月二十五日和蘭領事書柬

千八百六十七年十二月二十日、於神奈川大坂ニ在ル外國事務執政板倉伊賀守閣下ニ呈ス、

江戸外國人居留規則、並江戸、横濱之間之運送船、乘合船、牽船之規則、大阪ォイテモ採用スヘキ儀、尊慮アラン事ヲ謹白ス、

恐惶敬言。

日本在留荷蘭ポリチーキアゲント

兼コンシュルゼネラール

ドデガラーフフアンポルスブルツク

外務省記

六日、近衛忠房等、攝政二條齊敬ニ逼テ、毛利敬親等赦宥ノ議ヲ決シ、直ニ之ヲ徳川慶喜ニ諭サシメントス、果サス、是日、議始テ決ス、乃チ戸田忠至大和守○宇都宮藩支封主、食封一萬石、後高徳藩ト稱ス、ヲシテ内旨ヲ慶喜ニ諭サシム。

○春嶽私記ニ云、五日、櫻木御殿ヨリ御呼出ニ付、雪江參上之處、長人頻ニ迫リ入ル風說有之、山崎關門ニテ抑留之儀、津藩ヨリ伺書出、時機甚御懸念之次第ニ付、三公之御方々御内談、唯今之内、寬大之御所置被仰出候ハヽ、鎭靜可相成トノ御評議候得共、攝政尹宮御承引無之、會ヨリモ專ラ致入說候故、今日三公ヨリ御發シニテ、俄ニ攝政家ヘ御會集、御席ニテ御決評、入說之間隙無之樣ニ御發表之御積リ、右御決議之上ニテ、戸田和州ヲ以幕ヘ御相談相成筈ニ付、其節幕ニテ異儀無之樣、公ニテ御周旋有之樣被成度候得ハ、其段可申上トノ仰ナリシ故、幸ヒ登城致居候得ハ、從是直樣可申聞ト及御請、登營之上申上之、此夜二更頃、櫻木御殿ヨリ雪江御呼出ニテ、參上之處、今朝被仰聞タル長州一件ニ付テノ御會集之御觸出、兩役ニ

テ彼是申出、明日ニ相成候付、此段早々大藏大輔ヘ申聞度、モシヤ城中ニテ大和守ヲ待テハ居ヌカト懸念故、夜中ナカラ呼出申聞候トノ仰ナリ、戸田忠至家記ニ云、六日、二條攝政殿ヘ忠至被爲召、舊按、舊字追稱ニ係ル、以下皆同シ、長州入京參　朝可被免一條ニ付、舊幕府慶喜存意御尋御使、御同人於御宅舊宮方、並傳議奏列坐ニテ被　仰付候ニ付、忠至即刻二條城ヘ相越候處、用部屋ニハ舊老中、若年寄、並會津、桑名並居、御使之趣意等申出候ヘハ、忽チ議論沸騰、不穩事ニ立至リ候半ト存候形勢ニ付、萬一朝意不貫樣ニテハ、御爲不相成義ト深ク心配、是非朝意貫キ、天下有志喜悦仕候樣ニト相考、舊老中板倉伊賀守ヲ別席ニ招キ、御尋之義申談候處、何レニモ慶喜ヘ篤ト可申聞旨、同人答ニ依テ則慶喜ヘ能々申談候處、於同人ハ入京參　朝共被爲免候義、强テ存意無之樣子ニ候ヘ共、何分會津、桑名、其外衆吏之議論ニ深致心配候體ニテ、夫ヨリ會津、桑名、舊老中ヲ始、舊幕吏評議有之候、其節、忠至愚存申述候ニハ、政權返上之上ハ、都テ　朝議遵奉可致義至當ニ有之、然ハ右入京參　朝共、朝議次第被　仰出候樣ニト、御答申上候テ可然旨及議論候、其後、舊幕吏紛々之評議爭論同樣之體モ御坐候ヘ共、忠至ニ於テハ右之處ニ決心仕、衆議一決ヲ待チ、二條城ヘ相扣、返答有之樣ニト度々及催促候得共、六日夜ハ遂ニ決セス。

○英國公使ハルリー、エス、パークス、諸藩兵ノ大阪ニ輻湊スルヲ止メンコトヲ幕府ニ請フ、幕府、其書ヲ上ル。

此度、英國公使パークス著阪、板倉伊賀守ヘ面會致度候間、同人下阪候樣申立候付、四日、致面會之處、今度兵庫開港、大阪開市ニ付、外國人共數多移來、大阪並兵庫邊ニ、諸侯ノ兵隊多人數召連罷越居候趣、自然殺傷等混雜可相生ハ必然ニテ、御交際ニモ相礙、不容易儀ニ付、早々引拂候樣致度旨申立候付、右ハ諸侯銘々分限ニ應シ召連、且大阪ニハ夫々藏屋舖モ有之、從來人數モ差置候儀ニテ、强テ爲引拂候樣ニハ難相成候旨相答候處、左候ハ横濱並香港等ニ罷在候兵卒多人數呼寄、自國人ヲ警衛爲致候外無之候間、早々御挨拶有之候樣申聞候付、決答難致候間、歸京ノ上相伺可申旨答置候、就テハ早々御差圖被成下候樣仕度、此段奉申上候、猶又今朝ニ至リ、別紙書翰壹封到來仕候間、本紙並譯文共、其儘奉入御覽候、以上。

十二月六日

以書翰申進候、然ハ貴國諸侯ノ兵多人數當地ヘ上リ、猶日ヲ追テ別ニ人數來著可有之ト相聞候、此方ニテモ甚心配スル處ニテ、右兵士共ハ主命不行屆、取締十分ナラサルニ依テ、此度各國人當地ヘ集來候折柄、何カ行違起候哉モ難計候間、早々外國人ヘ軋合、氣遣無之場所ヘ爲引退候儀、必用タル事、貴國政府ニ於テモ深察被成候事ヲ望候、一體條約濟外國人、貴國ヘ參リ候ハヽ、安堵シテ住居致シ、無障業ヲ相遂候道理ナレトモ、貴國中誰人ニテモ此理ヲ犯候事有之時ハ、懇親ノ交際永久難續事顯然ナリ、是申迄モ無之ト存候、尤右兵士共取締等不宜、且當地町奉行ノ支配ヲ不受モノナレハ、如何成罪ヲ犯候テモ、罪ヲ蒙ル恐無之候間、是迄商市場タル大阪ノ市街、忽然其者共ノ巣窟ト成ルハ不幸之至ニ存候、萬一此者トモ、追々來著ノ外國人ヘ對シ、暴惡ノ所行ニ及ヒ候節ハ、其主人ハ勿論、其時ノ貴國政府タル者モ、必然其罪ヲ遁ルヘカラス、未タ惡行無之內、早々爲引退、災難無之樣所置可被成ト存候、拜具謹言。

十二月五日　　ハルリー、エス、パークス

板倉伊賀守殿
閣下　細川護久家記　池田輝知家記

○伊藤祐相、左京大夫○飫肥藩主、食封五萬千八十石、疾アリ、重臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシメ、小笠原忠忱、小笠原貞正。近江守○小倉新田、食封一萬石、後千束藩ト稱ス疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代ラシメント請ヒ、織田長易、疾ヲ以テ、會同愆期ヲ謝ス。伊東祐歸、小笠原忠忱家記　小笠原貞正、織田長猷家記

○祐歸家記上申書、十一月十六日ト署シ、上達ノ日ヲ失ス、故ニ路程ヲ計リ、此ニ類聚ス。

○幕府、石川成之ノ江戸郭門警衛ヲ罷メテ、西上セシム。

石川宗十郎ヘ

馬場先御門番被相勤居候間、上京ニ不及旨、昨日相達置候處、京地最寄之儀ニ付、上京被致候方宜旨、猶又伊賀守ヨリ申越候間、早々上京候樣可被致候、尤上京被致候心得被有之候ハヽ、御門番ハ御免被成下ニテ可有之候間、否早々可被申聞候事。

石川成德家記

○成之答書

馬場先御門番相勤居候ニ付、上京不及旨、一昨五日被相達候處、京地最寄之儀ニモ有之候間、上京仕方宜旨、猶又伊賀守殿ヨリ被申越候、依之、早々上京候樣、尤上京可仕候心得有之候ハヽ、御門番　御免被成候旨、否早々可申上旨奉畏、早々上京可仕候、右御請申上候、已上。

十二月七日　石川宗十郎

石川成德家記

七日、德川慶喜、內旨ニ答ヘ、毛利敬親等赦宥ノ事、宜ク諸侯ノ公議ニ付スヘク、若シ聖斷ニ出テシメハ、固ヨリ異議ナキヲ稟ス、乃チ在京諸侯ニ令シテ、明日悉ク朝參セシム。

○慶喜奉答書

防長御處置之儀ニ付、御內尋之趣拜承仕候、右ハ私ヘ　御尋御坐候儀ニ候得ハ、兼テ被仰出候通、衆議ヲ被爲盡候上、被仰出候方ニ可有御坐、眞之　御英斷ヲ以被　仰出候儀ニ候ハヽ、別段存寄無御座候、以上。

十二月六日

嵯峨實愛手記

○傳奏ヨリ達

頃日、在京之諸侯者自身、在京無之面々者重役、又者重役詰合無之向者留守居、明八日午刻、　禁中御假建所ヘ可被罷出候事。

但、重役以下者、熨斗目麻上下著用之事。松平頼英家記

○戸田忠至家記ニ云、翌七日曉ニ至リ、　朝議次第ニテ可然旨、慶喜ヨリ御返答申上候、卽刻二條殿ヘ罷出、右之段復命仕、無滯相勤候事。

○津藩士ノ稟狀ニ批シ、毛利敬親ノ老臣等、或ハ闕ニ抵ラハ、懇諭シテ之ヲ留メ、以テ朝命ヲ請ハシム。

○批紙

登坂　御沙汰可相待旨、過日相達候間、押懸入京有之間敷、強テ入京申立候ハヽ、鎭靜申諭、差留置、　御沙汰可相伺事。

藤堂高潔家記

○植村家保、本多忠鄰ノ子釼八郎ヲ養フテ、其嗣ト爲サンコトヲ幕府ニ請フ、是日、幕府、之ヲ許ス。

養子奉願候覺、

大和國高取城主

高二萬五千石　植村駿河守　當卯三十二歲

養子奉願者　本多釼八郎　當卯二十一歲

私儀、末男子無御座候ニ付、由緒モ御座候間、本多肥後守六男釼八郎儀、養子仕奉存候、尤右之外、同姓、異姓、親類、遠類、並續遠同姓之内ニモ養子可仕相應之者無御座候間、右釼八郎養子被　仰付候樣奉願候、以上。

慶應三丁卯十二月五日　　植村駿河守印

板倉伊賀守殿

稻葉美濃守殿

松平周防守殿

小笠原壹岐守殿　植村家壺家記

○幕府達書

植村駿河守奉願候通、本多釗八郎養子ニ被　仰付候。植村家壺家記

○兵庫港ヲ開テ貿易場ト爲ス、又大坂互市場ヲ開ク、兵庫碇泊ノ各國船艦、皆祝砲ヲ發ス。指華入京日載

大阪町奉行

兵庫奉行へ

御觸案、

兼テ相觸置候通リ、十二月七日ヨリ、外國交易之爲メ、大坂御開市、兵庫御開港相成候間、交易筋勝手ニ取引イタシ可申、尤御掟相守リ懇信ヲ不失樣可心得候事、

右之通、可被相觸候。

卯十二月

大阪町奉行へ　各通

兵庫奉行へ

御觸案、

大阪御開市ニ付テハ、外國人使用之タメ、相對ニテ雇ハレ候儀、勝手次第タルヘキ事、

右之通、市中ヘ可被觸候。

卯　十二月　（外務省記）

○兵庫ハ、兵庫御開港云々ニ作ル、本條、布告ノ日未タ詳ナラス、今、各國公使ニ照會スル草案ヲ取テ、此ニ附記ス。

○外務省記永井尚志、本日英國公使ニ贈ル書束ニ云、前略、然者、貴國新年之日、正ニ今日ニ當リ、祝賀之至リニ御座候、殊ニ我國兵庫開港、大阪開市之期日ニ逢ヒ、彌以兩國之御親睦ヲ重ネ候證兆ト存候、右祝詞申進度如是御座候。

八日、毛利敬親父子支封主赦宥ノ事、及ヒ英國公使ノ書（六日呈シセ者、）ヲ參朝ノ諸侯藩士ニ下示シ、赦命ハ直ニ答議ヲ上ラシム、是夜、遂ニ宸斷ヲ以テ、毛利敬親其子廣封及ヒ支封主毛利元周（長門府中藩主、食封五萬石、）毛利元蕃（徳山藩主、食封四萬十石、）毛利元純（清末藩主、食封一萬石、）ノ官位ヲ復シテ、入京ヲ許シ、淺野茂勳ヲシテ敬親老臣等ノ西ノ宮ニ在ル者ヲ京ニ召サシメ、三條實美、三條西季知、東久世通禧、四條隆謌、壬生基修ノ官位ヲ復シテ、之ヲ召還シ、錦小路頼徳（甲子ノ年、長門ニ死ス、）ノ官位ヲ復シ、澤宣嘉ノ義絶ヲ釋ス。（宣嘉所在詳ナラス、）又九條尚忠、久我建通、千種有文、岩倉具視、富小路敬直ヲシテ、復飾セシメ、建通以下四人ノ蟄居ヲ釋シ、滋野井實在（中將、）正親町公董（少將、）滋野井公壽（侍從、）鷲尾隆聚（侍從、）ノ差扣ヲ釋ス。

○赦宥書案

今度、大樹奉歸政權、　朝廷一新之折柄、彌以天下之人心居合不相付候ニ於テハ、追々復古之典モ難被行、深被惱　宸襟候、且來春　御元服並立太后、追々御大禮被爲行、且又　先帝御一周ニ相成候ニ付、猶更人心一和專要ニ被　思食候間、先年來

防長之事件、彼是混雜有之候得共、寛大之御處置被爲在、大膳父子末家等被免入洛、官位如元被復候旨、被　仰出候事。

卯十二月八日　島津忠義家記 指華入京日載

○指華入京日載、載スル所、猶吏ノ二字ナク、所謂、既往不咎之御時節候故、ノ十二字アリ、春嶽私記モ亦同シ、蓋シ本條ハ、後ニ改竄セシモノナリ。

○

此度、英國公使パークス著阪云々。本書、副書トモ既ニ六日ニ見ユ、故ニ略ス、

○傳奏ヨリ副達

御四ッ折赦宥書ヲ指ス、之儀ハ、今晩卽答可有之、重臣名代參上候得ハ、其者見込ニテ、以書取言上ノ事。

但、同意之輩ハ、連名ニテ可然候事。　細川護久家記 池田章政家記

○諸藩士答議

此度、　朝政一新ニ付、天下人心不居合ニ於テハ、復古之典モ難被爲行、殊ニハ御大禮等被爲近寄、彌以人心一和仕候樣被爲　思召候ニ付、防長之事件、寛大之御所置被爲有、大膳父子末家等被免入洛、官位如元被復候旨、被　仰出候、右之趣、御書付御渡見込可申上旨、被　仰渡奉畏候、素ヨリ　朝政御一新之折柄、至當之御所置ト奉伺候、別ニ存意無御坐候、此段御請申上候、以上。

十二月八日

松平備前守家老　土倉修理助

池田信濃守留守居　矢吹卯三二

池田丹波守重役代　澤井權次郎　池田章正家記

○

今日、被　仰出候趣奉畏候、別ニ見込無御座候、此段御請申上候、以上。

十二月

松平因幡守内
河毛文藏

池田輝知家記

○

御沙汰之趣奉畏候、私共何等之見込無御座候得共、猶主人へ可申聞候。

十二月八日

松平讃岐守内
北原直左衛門

松平下總守内
平野俊吾

酒井雅樂頭内
青木平藏

本多美濃守内
井上九兵衛

井上河内守内
大石括之丞

榊原式部大輔内
服部瀬兵衛

松平刑部大輔内
岩上九兵衛

酒井左衛門尉内
中村右門

酒井忠賓家記

○

御達之趣奉拜承候、私共見込之儀別段無御座候、猶主人へ申聞、見込モ御座候ハヽ、言上可仕候、以上。

十二月八日

松平和泉守家來
北村耕之助

松平伊豆守家來
山村縫殿介

小笠原左衛門尉家來　　保科彈正忠家來
黑柳大六　　大須賀貞右衛門　松平信安家記　松平乘承家記

○

御達之趣云々。文上ニ同シ、但見込モ以下ノ十二字ナシ、

帝鑑間席

十二月八日　　四十四藩　堀田正倫家記　水野忠敬家記

○本條堀田正倫家記ニ、連名四十四藩ト記シ、水野忠敬家記ニハ、連名差出トアリ、正倫家士平野知秋垷ニ其事ニ與ル、之ヲ本人ニ質スニ、當時御假建中雜遝スルヲ以テ、只四十四藩ト署シテ、姓名ヲ詳錄セストト、案スルニ、四十四藩ハ、卽チ十一月十六日ノ條ニ載スル所ノモノナリ。

○

今般、　御朝權御一新之折柄、人心居合之儀、深被爲惱　宸襟、殊ニ來春追々御大禮被爲行、且又　先帝御一周ニモ被爲成、旁防長之事件、御寛大之御處置振、以　御書附被　仰渡、卽刻見込奉申上候樣　御沙汰之趣奉謹承候、於私共、別段言上仕候儀無御座候、此段御請奉申上候、以上。

松前志摩守家來　　堀左京亮家來
島田興　　治外記
六鄕兵庫頭家來　　大田原銈丸家來
石井安夫　　權田峯藏

堀　内藏頭家來　　織田左近將監家來

中野五郎太夫　　宮城惣右衛門

青木源五郎家來

岩田啓藏　　六鄉政鑑家記

○

御書付之趣謹テ奉拜承候、然處、重大之御事件、差當卑賤微力之私共、別段所存可申上樣無御坐候、此段御請奉申上候、恐惶頓首敬白。

十二月八日

小笠原豐千代丸家來　　小笠原佐渡守家來

淸水勘解由　　山田勘右衛門

小笠原近江守家來　　小笠原幸松丸家來

小林正之輔　　志水五右衛門

小笠原忠忱家記

○

御書付拜見被　仰付候中、御四ツ折之儀ハ、卽刻見込之趣申上候樣　御沙汰御座候得共、右ハ不容易事件ニ付、於私共見込言上仕候樣無御座候、此段申上候、以上。

十二月八日

丹羽左京大夫留守居

增子現藏

丹羽長裕家記

○

御書付拜見云々。〇文、上ニ同シ、

十二月八日

松平兵部大輔家來
友部權六

松平直致家記

〇

御書付拜見被　仰付候中、御四ッ折長防一條、卽刻見込申上候樣御沙汰ニ御座候得共、右ハ不容易事件ニ付、於私共見込言上可仕樣無御座候、此段申上候、以上。

十二月八日

溝口誠之進內
寺田喜三郎

溝口直正家記

〇

御四ッ折之儀、外ニ存寄モ無御座候、尙主人共ヘ可申聞候得共、不取敢御請奉申上候、以上。

十二月八日

松平彈正忠家來
森田重兵衞

阿部美作守家來
能見伊助

間部下總守家來
大鄉卷藏

青山左京大夫家來
坂東篤之輔

牧野豐前守家來
伏木熊吉

永井日向守家來
鈴木次三郎

朽木伊豫守家來
中野齋

青山忠誠家記

○
今般、被　仰付候御書附中、御四ツ折之儀、卽刻見込奉申上候樣　御沙汰之趣奉畏候、右ハ不容易事件ニ付、於私共見込言上仕候樣無御座候、此段奉申上候、以上。

柳ノ間席

留守居一同連名

十二月八日

仙石政固家記

○本條、柳間席留主居一同トアレトモ、松前德廣等ハ七人連署シ、堀親義、藤堂高邦、九鬼寧隆等ハ、各自奉答書アリ、則其餘ノ諸藩ナルヘシ、然レトモ姓名原記ヲ失ス。

○
四ツ折　御達之趣奉拜承候、微賤之私式、何共可奉申上樣無御坐候、乍去、重大之御事件ニ付、可相成ハ、召之諸侯上京之上、被爲盡衆議候テ　御決議被爲在候方、人心居合可宜御儀歟ト奉存候。

松平遠江守家來　服部清三郎

戸田采女正家來　大高金右衞門

石川宗十郎家來　堀池幸助

戸田氏共家記

○
長防之儀ニ付、御下問ノ趣奉畏候、右者不容易事件ニ付、麤忽ニ言上仕候テハ奉恐入候次第ニ付、篤ト熟考仕、明日中申上候樣仕度、此段奉願候、誠恐誠惶頓首謹言。

細川越中守内

十二月八日　三宅藤右衛門

細川護久家記

○

御達之趣奉敬承候、御受之儀ハ重大之御事件ニ付、當時佐渡守　御召ニテ在京中ニモ御坐候得ハ、一應申聽セ候上ニ無御座候テハ、何分私ニハ御請難奉申上御座候事。

藤堂佐渡守家來

十二月八日　青木藤太

藤堂高邦家記

○

四ツ折御書付、竝御口達之趣謹テ承知仕候、無ル處、防長御所置之義ニ付、存意之有無、敝藩ニテハ何分申上兼候、御憐察奉仰願候、此段申上候、以上。

松平右近將監家老

尾關隼人

松平武聰家記

○

今曉拜見被　仰付候御書付中、御四ツ折之儀ハ、卽刻見込申上候樣　御沙汰之趣奉畏候、右ハ不容易事件ニ付、於私見込言上仕候儀無御座候、此段奉申上候。

九鬼大隅守内

十二月九日　内田武左衛門

九鬼寧隆家記

○

今度、大事件之儀御達相成奉得其意候、不容易御儀御座候間、得ト熟考仕候上、存意モ御座候ハヽ、追テ可申上候、此段以使者申上候、以上。

十二月九日　　堀左衛門尉

堀親廣家記

○議傳ヨリ口達

先刻、御下問ニ相成候防長御所置之儀、各申出之趣、大同小異ニ付、御決定被　仰出候事、

右ニ付、此御書附之通被　仰出候間、左様相心得候様トノ御事、

外夷之儀見込、兩三日之内可申出旨相達候處、大樹ヨリ切迫之趣申立候間、明九日巳之刻マテニ、兩役之内可申出トノ御事。

池田章政家記

○水野忠敬家記ニ、夜ニ入リ御達、仍テ同意ノ向連名御答、翌九日未明ニ至リ、議傳列坐、先刻云々ノ御書御渡トアリ。

○毛利敬親以下赦宥書

今度大樹奉歸政權。前ニ見ユ、

○淺野茂勳ヘ達書

御達之儀有之候間、早々可有上京、長州家老、竝末家名代之輩ヘ可達之旨、被　仰出候事。　指華入京日載

○三條實美以下赦宥書

頃年、天下紊亂、人必不和ヲ生シ、況外國之交際日々隆ニシテ、國家之安危危急之秋ニ候、然ニ今度、朝政一新、追々舊典復古、且明春御大禮被爲行候御時節ニ候間、人心一和ヲ先務ト被爲遊、近來幽閉之輩ヲ被爲解、往々無怨志人和一齊シ、沿革

大成、整内制外之次第可相立ト被　思召候間、奉戴　御趣意、上下和親シ、　皇國之情態可存事。　細川護久家記　池田章政家記

○

各通　三條西季知

三條實美

東久世通禧

壬生基修

四條隆謌

右先年、以一族可義絶被　仰出候處、今度被止其儀、入洛復位被　仰出候事、

於官位ハ可稱前官、尤入洛之上、闕官節追々可被復候事。　有栖川宮家記　島津忠義家記

○慶明雑録ニ云、本文、十二月九日朝被　仰出、御迎船春日丸、同十四日博多著、同十九日四ツ時、御出立相成候事。

○

藤原季知

藤原實美

源　通禧

藤原基修

藤原隆謌

右今度、以思召被免　勅勘、復本位候間、速ニ入京可勵忠勤旨、被　仰出候事。　嵯峨實愛手記

○本條、各家記見ル所ナク、實愛手記前條ヲ載セス、之ヲ實愛ニ質スニ、本條ヲ以テ本人ニ達スル者ト云、因テ此ニ併録ス。

○錦小路頼徳

既雖死去、被止義絶之儀、可稱元官位、被　仰出候事。有栖川宮家記

○澤宣嘉

往居雖不分明、被止義絶候旨、被　仰出候事、
往居分明候ハヽ可言上事。有栖川宮家記

○入道前關白尚忠九條

還俗被　仰出候事。

入道前内大臣建通久我
千種入道有文
岩倉入道具視
富小路入道敬直

以上被　免蟄居、還俗被　仰出候事。有栖川宮家記

○滋野井中將實在
正親町少將公董
滋野井侍從公壽

鷲尾侍從隆聚

右被　免差控候事。有栖川宮家記

○以上二條、皆口達ナリ。

○毛利敬親等ノ赦命既ニ發ス、中山忠能、正親町三條實愛、中御門經之、岩倉具視等、內旨ヲ奉シテ、將ニ大ニ更革ヲ行ハントス、具視、旨ヲ島津茂久、淺野茂勳、山內豐信、德川慶勝、松平慶永ニ傳ヘテ、明早朝參シ、且兵ヲ出シテ、禁門ヲ嚴守セシム、是日、茂久、豫メ赦命ノ事ヲ毛利敬親ノ老臣ニ西宮ニ報シテ、急ニ北上セシム。

○薩尾藝越土達書

應召早速登京　御滿足候、隨而不容易大事御評決之儀有之、唯今參　朝可有之旨　御沙汰候事。

十二月九日　德川義宜家記　春嶽私記

○

守衛覺悟之條々、

一日ノ御門、竝穴門四ヶ所內外、

一御臺所御門、竝北之方穴門二ヶ所內外、

一參內殿、竝奏者所等之前、

一神仙門往返人數改取締所、

一公家門前桑名固被免、跡引替、外ニ

御座所檐下詰、任撰十人之事、
御拜道廊下檐下詰、從僕之事、
右薩州、
一公家御門、竝南北穴門二ヶ所内外、
一南門、竝東之方穴門二ヶ所内外、
一局口中門之前、
一御池庭四枚戸内、御文庫前切戸、
一蛤御門會津固メ被免、跡引替、
外ニ
御座所檐下詰、任撰十人之事、
御拜道廊下檐下詰、從僕之事、
右土州、
一准后御門内外、
一准后局口中門、
一朔平御門、竝東西穴門二ヶ所内外、
外ニ
御座所檐下詰、任撰十人之事、
御拜道廊下檐下詰、從僕之事、
右藝州、

一御座所檐下詰、任撰十人之事、
一御拜道廊下檐下詰、從僕之事、
一九門内堂上亭裏門通行被止候ニ付、家々ヘ右之趣相傳、直ニ三人、或者四五人宛詰取締之事、

東南

萬里小路家　甘露寺家　櫛笥家　柳原家
園家　富小路家　御下リ御殿　桂御所
高丘家　外山家　唐橋家　鷹司家
九條家

右尾州、

一御座所檐下詰、任撰十人之事、
一御拜道廊下檐下詰、從僕之事、
一九門内堂上亭裏門通行被止候ニ付、家々ヘ右之趣相傳、直ニ三人、或者四五人宛詰取締之事。

西北

花園家　八條家　烏丸家　穗波家
勸修寺家　石山家明地　庭田家明地　一條家
近衞家　閑院家　藤波家　竹屋家
毘沙門堂里坊　賀陽宮

右越前、

王政復古大變革ニ付テハ、何時非常之儀出來モ難計、依之、右御場所、藩兵ヲ以嚴重警衛可有之旨　御沙汰候事、

但、九門内ハ勿論、　禁内ニ至リ、兵士戎服之儘可爲參　朝候事。五家各通

當日覺悟之事、

一卯一點、必參　朝之事、

一同刻、兵士繰込之事、

一御門總テ大門閉、穴門ヨリ通行之事、

一公家門、御臺所門之外ハ、准后御門ト雖モ悉ク閉切之事、　但、守衞兵士通行之儀ハ格段之事、

一被止參　朝候宮、公卿、見誤無之樣心得之事、

一宮、公卿參　朝之輩、主人之外、家來向ハ悉ク御門外限不許入事、　但、隨身物、或文通之類ハ、使番仕丁等ニテ、非藏人口ヘ傳送之事、且三職家來、鑑札ヲ以テ通行之事、

一御門御門出入人體見定之爲、非藏人一二人出張之事、　外ニ　使番三人　仕丁五人

一會津、桑名、藤堂、大垣見廻役新選、其外斥候之事、

一非常之儀有之、注進之儀出來之節ハ、四方共ニ非藏人口ヘ可申出之事、　但、非藏人口南談之間、堂上、非藏人詰可有之事、

一各藩屯所、竝從者休息等之事、

日華門外廻廊　　月華門同斷　　承明門同斷　嵯峨實愛手記 春嶽私記

○　　薩州

公家門前、桑名守衞之儀被止候間、其場所速嚴重可警衞之旨、　御沙汰候事。島津忠義家記

○嵯峨實愛手記ニ、會、桑守衞被止候跡固メ、某藩ニ被命云々ノ草案アリ、土州ニモ蛤御門、會津守衞云々、本條同文ノ達シアリシナルヘシ、家記原記ヲ失ス。

○春嶽私記ニ云、八日、雪江、十之丞同行、土邸ニ到リ、神山ヘ逢對、福岡藤治モ來會談論中、薩邸ヨリ中山正三、中御門三卿、昨日ヨリ長州御所置一件ニ付、在　朝御手透無之、仍之、岩倉卿ヘ罷出候樣、中山殿ヨリ之書簡ヲ以通有之、仍之、神山同道、岩倉卿ヘ罷出、尾藩尾崎八左衞門、丹羽淳太郎同道ス、岩下佐次右衞門、大久保一藏ハ、先達テ罷出居候、夫ヨリ無程卿御對面有之、（原註、尾藩ト一席也、）扠演說有之、大旨ハ、近年幕府之政治威權次第ニ委弱ニ就キ、萬民困窮ニ落入、殊ニ外國之取計等、以之外成體態ニ付、王政復古之　叡慮御確定ニテ、我々ヘ　御內勅有之、一點無私之御體裁ヲ以、　王政之御基本被相建事ニ候、就テハ尾、越、薩、土四藩之儀ハ、多年勤　王之志深厚ニ付、殊ニ　御依賴思召事ニ付、未發之御密旨御打明シ、此度之御大業、事故ナク被行候樣被遊度トノ　叡旨之旨、其次第ハト被申候テ、御書附御一紙御渡有之、（一紙ハ、應召早速登京云々ノ達書ナリ、）明九日卯一點、御參　內有之候ヘハ、夫ヨリ追々御所置被仰出候事ニ候、尾、越兩藩ハ德川之親族故、德川家ヘ之御使御賴被成度、且會津、桑名之職掌モ御廢止ニ相成候付、此御使ハ尾之臣下ヘ御賴被成、尤會ハ　思召有之、國許ヘ罷歸、御指圖相待候樣、桑・ハ思召有之、所司代被廢旨被仰出候事ニ候、其餘之儀ハ、右件相濟候上、追々被仰出御手順之由、仍之、寅ノ一點、假建ヘ重役呼出、右御書附兩卿ヨリ被相渡筈候得共、左候テハ手後レモ難計ニ付、其趣ヲ以、爲心得、今日兩卿代リ岩倉卿ヨリ被相渡事之由、外ニ被相渡一紙、（本條、守衞越前ノ分ヲ指ス、）右御書面拜受、皆々席ヘ取下リ熟見之處、御主意解兼候處モ有之付、今一應御逢相願伺度ト尾ヘ申談候處、尾ハ不及其儀トノ事ニ付、兩人再會相願ヒ、尚又伺取候趣、如左、

一右ケ條之內、十人詰之什長、名元書付早速指出候樣、

一九門內堂上方裏門ハ、通行止之番人ニテ、警衞ニハ不及、自然暴客有之候ハヽ、最寄警衞所ヘ注進候樣トノ事、

一右兵ヲ集候得共、決テ兵ヲ被動候ニハ無之、唯萬一之妄動ニ被備候迄之由。

○指華入京日載ニ云、八日、薩藩大山彌助、京邸ヨリ來報之趣ニ付、彌出發相決シ、未下刻ヨリ奇兵、遊擊兩隊前鋒トシテ、順ニ諸兵進行、郡山驛ヘ夜半著陣、前鋒ハ中後軍著直樣發向、九日朝、芥川驛ヘ薩使罷越ス、西鄕吉之助、八日夜ノ書ニ、今夕景、別紙之通（敕命書ヲ指ス、）被仰出候付、明朝闕門御通行ノ節、御談判ノ御用ニモ可相成ト相考、早々寫ヲ以テ差出候、自然藝藩

ヨリ御達可相成歟モ難計、云々。下略、

○是夜、中山忠能、密旨ヲ鷲尾隆聚ニ傳ヘ、潛ニ高野山ニ赴キ、十津川郷士ヲシテ之ニ從ハシム、諸藩士モ亦行ニ從フ者アリ。

國家之形勢甚タ相迫候、精々鎭撫ハ勿論ニ候得共、若シ反逆之賊有之時ハ、率有志之輩、速ニ征伐拔群之精勤可有之事。

丁卯十二月

鷲尾侍從殿 高野山出張概略

○

鷲尾侍從、外夷渡來後、憂國之志不淺、兼テ十津川郷士其外有志之士同力、爲 皇國抛身命可盡忠誠見込ニ有之候處、頃日形勢不容易、彼是言上之次第、臣子之至情實ニ難默止事ニ候、乍去、憤激之餘リ、萬一於 輦下輕擧妄動有之候テハ、赤心却テ賊子之名ヲ得ルニ至ル歟、遺憾旁以偏ニ堅固沈靜ニシテ、非常之警衛無怠慢、專ラ勉勵可有之、別紙之通被 仰渡候事。

高野山出張概略

○高野山出張概略ニ云、是ヨリ先キ、幕府兵ヲ置キ、隆聚ノ邸ヲ監護スルヲ以テ、此夜潛ニ後墻ヲ踰エ、正親町家ニ至リ、後門ヨリ入ル、土藩白川邸ニ潛居セル香川敬三、大橋愼三、藤村四郎、田中顯助等ヲ始トシ、四十餘名來集ル、中山儀、同密旨ヲ奉シ、正親町少將之ヲ傳宣ス、十津川郷兵出張事錄ニ云、前田雅樂等四十六人、京師ヨリ鷲尾殿ニ隨從ス。

○

方今時勢切迫ニ付、鎭靜ハ勿論、對 朝廷反逆之賊徒於有之ハ、十津川擧郷征伐可抽忠勤趣、御沙汰候事。

十二月 十津川郷兵出張事錄

○出張事錄ニ、內勅中山大納言取次、吉田俊男、前田雅樂之ヲ奉ストアリ、隆聚出張概略ニハ、十三日檄文ト、一同內勅ヲ

十津川ニ傳ヘシ事ヲ記シ、方今時勢以下ノ十字ヲ、國家之形勢不容易、精々鎭撫ノ十五字ニ作リ、論ノ下ニ、候得共ノ四字アリ、又征伐可抽以下ヲ、速ニ征伐拔群之精勤可有之事ニ作リ、十二月ノ上丁卯ノ二字アリ。

○藤堂高潔、大學頭○高猷ノ嗣子、京ニ至ル、藤堂高潔家記遠山友祿、母ノ喪ヲ以テ、再ヒ上京延期ヲ請フ。遠山友祿家記

復古記　卷七　終

總括兼纂修
一等修撰　臣　長松幹

校勘
一等修撰　臣　長　莢
一等協修　臣　四屋恒之

校錄
一等書記　臣　澤渡廣孝

繕寫
二等繕寫生　臣　小川長和
二等繕寫生　臣　小島春

復古記 卷八

慶應三年丁卯十二月九日

○十二月

九日、昨日來百官事ヲ執リ、明ニ至テ皆退朝ス、獨國事掛議奏正親町三條實愛、長谷信篤、及ヒ德川慶勝、淺野茂勳、松平慶永、留テ內ニ在リ、乃チ薩、尾、藝、越、土五藩ノ兵ニ令シテ、內外諸門ヲ分守シ、會、桑ノ衞兵ヲ撤ス、是時、熾仁親王、太宰帥○有栖川宮、晃親王、常陸大守○山階宮、入道純仁親王、御室宮、中山忠能、中御門經之、岩倉具視、大原重德、宰相、萬里小路博房、右大辨宰相、橋本實梁、少將○實麗ノ子、先入テ朝議ヲ賛ス、豫メ內旨徵召ニ係ル、既ニシテ、入道尊秀親王、知恩院宮、正親町實德、大納言、正親町公董、橋本實麗、大納言、四辻公賀、宰相中將、淸閑寺豐房、右大辨宰相、澤爲量、澤宣種、主水正、西園寺公望、中將、堀川康隆、穗波經度、高倉永祜、滋野井實在、滋野井公壽、園池公靜、少將、五條爲榮、少納言、山本實政、少將、富小路敬直、長谷信成、美濃權介、岩倉具綱、侍從○具視ノ子、岩倉具定、大夫○具視ノ第三子、具綱ノ嗣トナル、四條隆平、大夫○隆謌ノ子、石山基正、右兵衞權佐○基文ノ子、西洞院信愛、大夫○信堅ノ子、西四辻公業、大夫○公恪ノ子、萬里小路通房、右少辨○博房ノ子、大原重朝、左馬頭○重德ノ子、裏松良光、中務權少輔○恭光ノ子、中山忠愛、中將○忠能ノ子○昨夜忠能等ノ傳旨徵召ニ係ル、及ヒ島津茂久、山內豐信モ亦朝ス、豐信此日入京、是ニ於テ、攝政、關白、征夷大將軍、議

奏、傳奏、國事掛、守護職、所司代等ノ官職、及ヒ內覽、勅問、攝籙、門流ヲ廢シ、新ニ總裁、議定、參與ノ三職ヲ置ク、（嵯峨實愛手記、春嶽私記）乃チ大將軍德川慶喜ノ請ヲ許シ、其職ヲ罷メ、攝政二條齊敬、國事掛九條道孝、大炊御門家信、朝彥親王、近衞忠煕、近衞忠房、鷹司輔煕、德大寺公純。（前右大臣、）一條實良、廣幡忠禮、議奏國事掛柳原光愛、（大納言、）葉室長順、（大納言、）傳奏國事掛日野資宗、（大納言、）飛鳥井雅典（大納言、）ヲ免シ、皆其朝參ヲ停メ、議奏加勢中院通富、（中納言、）倉橋泰聰、（治部卿、）池尻胤房、（宮內卿、）錦織久隆、（刑部卿、）交野時萬（左京大夫、）ヲ罷メ、廣橋胤保、（大納言、）六條有容、野宮定功、（中納言、）久世通煕（宰相中將、）ノ朝參ヲ停メ、豐岡隨資、伏原宣諭、（三位、）裏辻公愛（中將、）ノ朝參ヲ停メテ、謹愼セシメ、守護職松平容保、（肥後守〇會津藩主、食封二十八萬石、）所司代松平定敬、（越中守〇桑名藩主、食封十一萬石、）ヲ罷メテ、歸藩セシム、晡ニ及ヒ、議ヲ小御所ニ開キ、大政施設ノ方及ヒ　德川氏處分ノ事ヲ議ス、遂ニ慶勝、慶永ヲシテ、辭官獻地ノ內旨ヲ慶喜ニ諭サシム、時ニ薩摩藩士大久保利通、（一藏、）岩下方平、（佐次右衛門、）土佐藩士後藤元燁、（象二郎、）神山君風、（佐多衛、）尾張藩士田宮篤輝、（如雲、）丹羽賢、（淳太郎、）田中輔、（國之輔、）越前藩士中根師質、（雪江、）酒井忠溫、（十之丞、）安藝藩士辻維嶽、久保田秀雄（平司、）モ亦其議ニ參ス。

〇德川慶喜へ達書（春嶽私記）

辭將軍職之事、被　聞召候事。

〇二條齊敬へ達書

王政復古ニ付、攝政職被廢候事、
王政復古ニ付、御沙汰有之候迄、參　朝被止候事、
攝政、關白、內覽等、自今被廢候事、
勅問御人數被止候事、
門流被廢候事。（二條齊敬家記）

○

左大臣（九條道孝）

御沙汰有之候迄、參　朝被止候事、
王政復古ニ付、
國事掛自今被廢候事、
勅問御人數被止候事、
門流被廢候事。（九條道孝家記）

○

右大臣（大炊御門家信）

御沙汰云々、同上文、
王政復古ニ付、國事掛、自今被廢候事。（大炊御門家信家記）

○

彈正尹宮

御沙汰云々、同上文、

王政復古ニ付、國事掛被廢候事。（伏見宮家記）

○

近衛前關白左大臣忠熙

御沙汰云々、
王政復古ニ付、
國事掛云々、
勅問云々、
門流云々。並ニ九條道孝ト同文、（近衛篤麿家記）

○

前左大臣（近衛）忠房

同上文。但門流ノ一條ヲ除ク、（近衛篤麿家記）

○

前關白右大臣（鷹司）輔熙

朝參之儀、御沙汰被爲在候迄被止候事、
王政復古ニ付、
國事掛云々、同上文、
內覽被止候事、
勅問云々、同上文、
攝籙被廢候事、

○門流被廢候事。鷹司輔熙家記

一條前右大臣實良

御沙汰云々。九條道孝ト同文、一條忠貞家記

○案スルニ、齊敬、道孝、忠熙、實良四人ノ達書モ亦、攝籙ノ條アルヘシ、蓋シ之ヲ逸ス。

○

各通

徳大寺前右大臣公純

御沙汰云々。大炊御門家信ト同文、徳大寺實則家記 廣幡忠禮家記

内大臣忠禮

○

各通

柳原大納言光愛

御沙汰云々、同上文、

葉室大納言長順

王政復古ニ付、議奏、國事掛、自今被廢候事。柳原前光家記 葉室長順家記

○

各通

日野大納言資宗

御沙汰云々、同上文、

飛鳥井大納言雅典

王政復古ニ付、武家傳奏、國事掛、自今被廢候事。日野資宗家記 飛鳥井雅典家記

○

中院中納言通富
倉橋治部卿泰聰
池尻宮内卿胤房
錦織刑部卿久隆
交野左京大夫時萬

識奏加勢被免。
○本條、各家記ニ、中御門ヨリ口達トアリ。

○

廣橋大納言胤保
野宮中納言定功

御沙汰有之迄、参朝被止。
○本條、二人家記、口達トアリ。

○

六條中納言有容

自今被止参　朝候事。六條有容家記

○

久世前宰相中將通熙

御沙汰有之候迄、被止参　朝候事。久世通熙家記

○

各通

豐岡大藏卿隨資

伏原三位宣諭

裏辻中將公愛

御不審之筋有之、參　朝被止候間、謹愼可有之候事。（豐岡隨資家記　裏辻公愛家記）

○松平容保、松平定敬ヘ達書

思食有之候間、早々歸國、可待　御沙汰候事。

但、禁門始メ固之儀被免候間、早々人數可引取候、且　王政復古ニ付、守護職、所司代役、自今被廢候事。（嵯峨實愛手記）

○徳川慶喜稟請書二通

松平肥後守、今日役儀差免候ニ付、蛤御門御警衛人數爲引拂候樣可仕哉、此段奉伺候、以上。

松平肥後守

松平越中守

右、今般在所ヘ之暇早々遣シ度、此段奉願候、以上。

松平肥後守

松平越中守

○慶喜ヘ達書

右、今般在所ヘ之暇早々遣度、願之通被　聞食候事。（三職局叢書）

○以上三條、三職局叢書ニ載ス、思召有之云々ノ達ト齟齬スルニ似タリ、然レトモ下ノ春嶽私記ニ據レハ、實愛手記載スル所ノモノ、或ハ發令ニ至ラスシテ止ム者ナランカ、姑ク此ニ併録ス、三職局叢書、災ニ罹ル、今、復古學要中ニ收録スル

モノヲ採ル。

○指華入京日載ニ云、夜四ツ半時、世良脩藏、薩邸ヨリ來報之趣ハ、昨夕御國御處置相成、公卿方ニモ徹夜御參　內ニ有之、就テハ今日期限ニ付、差懸候勢ニ付、押テ薩兵二千餘人、野戰十數門ヲ以テ、乾御門ヨリ繰入、藝藩一千二三百、土藩一千計、備前千二三百人、尾州モ多勢、越前等同斷ニテ、日御門、南門、公卿御門相固メ、非藏人ヲ以テ薩兵付添、正議公卿ノミ參內爲致、餘ハ參　內ヲ差留メ、各侯御參　內ニテ、五卿方、竝壬戌已來幽閉之公卿方御免相成、五卿方ニハ御歸洛被　仰出、差當リ岩倉炭抔ハ卽刻ヨリ御參　內、萬端御周旋相成、公卿方原註、凡五人、竝御守衛兵薩兵二小隊等迄相揃居、砲聲一發之後ハ、鳳輦相備、直樣御遷シ申上候樣、都テ御手配相成居候趣、且又尹宮關白參　朝被差停候旁ニテ、幕軍、會、桑甚窮迫之趣ニテ、會藩ハ兵ヲ率ヰ、御門外マテ來候故、直樣御門ヲ鎖候處、空シク引去候テ、會、桑、紀、大垣、其外譜代之面々、右往左往ニ二條城ニ楯籠リ、誠ニ切迫之勢相見エ、此上モ彌會藩ヘ屹度御嚴責、順々條理ヲ以テ被　仰出候御手組ニテ、承服不致候得ハ、討伐ト申處ニテ、各扼腕相待居候由。

○春嶽私記ニ云、追々大御變革御發表之御模樣ニテ、御用無之候間、諸官散　朝可致旨被　仰出、各退　朝後、攝政殿以下宮方公卿之出仕ヲ被止候、夫ヨリ諸藩之兵隊ヲ以、　宮垣之內外ヲ警固シ、中山殿、中御門殿、正親町三條殿御居殘リ、岩倉殿、大原殿等急參　內ニテ、萬機御取計有之、諸候ハ在京之分、卽刻參　內ヲ被命、其中、尾、越、藝之三侯ハ昨夕ヨリ在　朝、土州老侯ハ今日御上京、御旅裝之儘御參　內、薩侯ハ午後ニ至リ御參有之、夫ヨリ暮時前ニ至リ、於小御所會議相始ル、帥宮、山階宮、仁和寺宮、中山殿初、公卿方左方ニ御列席、尾、越、土、藝、薩之諸侯ハ右方ニ御列坐、諸藩臣ハ御三ノ間御敷居際迄相詰タリ、干時、中山殿ヨリ、今般德川氏ヨリ政權奉還ニ付、大政御一新之御基本被相建度　叡慮之趣、御發言有之、夫ヨリ公卿諸侯、取リ取リ御評議有之、又夫ヨリ德川內府公御辭官、竝御領地御獻納可有之儀ニ御僉議有之、結局、尾、越兩老侯御引受ニテ、明日條城ヘ御出御、辭職被聞召旨ハ、公ヨリ御傳達、御官祿之御兩條ハ二侯御含ニテ、德川內府公ヨリ御內願之筋ニ相成候樣、御周旋可有之トノ御決議ナリ、會、桑二藩モ、　朝廷ヨリ免職之　御沙汰ニ可相成御評議モ有之處、幕府

ニテ罷免之取計有之ニ付、不被及御沙汰相濟タリ、
又云、小御所議事之次第、如前說上下已ニ班列ニ著クノ後、中山殿ヨリ、先一點無私之公平ヲ以、王政之御基本被爲建度
叡旨之趣御發言ニテ、夫ヨリ德川氏之弊政、殆違勅トモイフヘキ條々不少、今內府政權ヲ還シ奉ルトイヘトモ、其出ル處之
正邪ヲ辨シ難ケレハ、實蹟ヲ以之ヲ責讓スヘシナト、縉紳諸卿議論アルニ、土老侯大聲ヲ發シテ、此度之變革、一擧陰險之
所爲多キノミナラス、王政復古之初ニ當ツテ、凶器ヲ弄スル甚不祥ニシテ、亂階ヲ倡フニ似タリ、二百餘年、天下太平ヲ致
セシ盛業アル德川氏ヲ、一朝ニ厭棄シテ疎外ニ附シ、幕府衆心之不平ヲ誘候、又人材ヲ擧ル時ニ當ツテ、斯ノ政令一途ニ出、
王業復古之大策ヲ建、政權ヲ還シ奉リタル如キ大英斷之內府公ヲシテ、此大議之席ニ加ヘ給ハサルハ、甚公議之意ヲ失セ
リ、速ニ參　內ヲ命セラルヘシ、畢竟、如此暴擧企ラレシ三四卿、何等之定見アッテ　幼主ヲ擁シテ、權柄ヲ竊取セラレタ
ルヤ、抔トシタ、カニ中山殿ヲ挫折シ、諸卿ヲ辨駁セラレ、公モ亦諄々トシテ王政之初ニ刑律ヲ先ニシ、德誼ヲ後ニセラレ
候事不可然、德川氏數百年隆治輔贊之功業、今日之罪責ヲ掩フニ足ル事ヲ辨論シ給ヒ、諸卿之說漸ク屈セントスル時、大久
保一藏席ヲ進ンテ申陳シハ、幕府近年悖逆之重罪而已ナラス、此度內府之所置ニオイテ、其正姦ヲ辨スルニ、強テ尾、越、土
侯之立說ヲ信受スヘキニアラス、是ヲ實事上ニミルニ如カス、先其官位ヲ貶シ、其所領ヲ收メン事ヲ命シテ、一毫不平之聲
色ナクンハ、其眞實ヲ見ルニ足レハ、速ニ參　內ヲ命シ、　朝堂ニ立シメラルヘシ、モシ之ニ反シ一點扞拒ノ氣色アラハ、是
譎詐ナリ、實ニ其官ヲ貶シ、其地ヲ削リ、其罪責ヲ天下ニ示スヘシトノ議論ヲ發ス、岩倉殿其說ヲ慫慂シ、正邪ノ分、空論ヲ
以辨析センヨリ、形迹ノ實ヲミテ知ルヘシト論辨ヲ極メラレ、二侯亦正論ヲ持シテ相決セス、三宮、尾侯ハ默然タレハ、中
山殿、尾侯ハ如何ト詰ラル、ニ、容堂ノ說ノ如シト答ヘラル、薩侯ハ如何ト問ハル、ニ、一藏云フ處ノコトシト答ヘラレ、
藝侯ハ又土老ニ同ス、岩、大二氏、猶正邪ヲ實行ニ證セン事ヲ強辨シテ屈セス、諸藩士ニ議セラル、ニ、尾ニテハ田宮如雲、
丹羽淳太郎、田中邦之輔、越ハ中根雪江、酒井十之丞、土ハ後藤象二郎、神山左多衞、薩ハ岩下佐治右門衞、大久保一藏、藝ハ
辻將曹、久保田平司ニシテ、薩ヲ除クノ外ハ、悉ク越、土二侯ト同論ナリトイヘトモ、共ニ是ヲ主張セハ、君臣合議雷同之嫌

疑ヲ生シ、却テ事ヲ害セン事ヲ恐ル、ノ意衷、期セスシテ同一ナレハ、各顔ヲ見合セテ抗セス、唯々諾々タリ、象二郎ハ吾公之說ヲ推シテ、陰險ヲ排シテ、公正ニ出ン事ヲ論シテ止ス、二侯モ餘リニ極論シ給ハヽ、實事ヲ見ン事ヲ厭フテ、內府公ニ姦アルヲ掩ハントシ給フニ似タレハ、止事ヲ得ラレスシテ、尾、越擔當アツテ、明日御登城之上、將軍職御辭退ヲ　聞召之條、吾公ヨリ御達有之、官祿之二條ハ、二侯御含之御談ヲ以、內府公ヨリ御內願之筋ニ御周旋アルヘキニ決セリ、又會、桑二藩ノ職ヲ解カレスシテ不相適故、其事ヲ幕府ヘ降命アラハ、二藩忿怒シテ如何成暴擧妄動アランモ難計ト、朝議困難ニ及ヒタリ、折柄、兩藩ハ、幕府ニオイテ職務罷免セラレ候由、戶田大和守ヲ以奏上アリ、於是難議一頓ニ解釋シテ、會ハ歸國シテ　御沙汰ヲ待チ、桑ハ速ニ歸國スヘキ由ヲ命セラルヘキニ決シテ、議果タルハ已ニ三更ヲ過キ、四更前散　朝トナレリ。

○慶明雜錄ニ云、御朝議中、容堂侯ヨリ太守樣島津茂久ヲ指ス、ヘ御論候ハ、德川內府官一等ヲ下リ、領地返上不仕內、直ニ議定職ニ被仰付度、內府者天下之人傑、當時難得之者候得ハ、此節衆議之所歸ヲ取テ、公平正大之御所置御施行被遊候御趣意ニ候ハヽ、是等第一之御急務ニ候ト被仰懸候處、公卿方一人モ御答無之、併何レモ不同意ノ由ニハ候得共、指テ御論之向モ無之候付、太守樣御答ニ、內府官一等ヲ下リ、領地返上被仰付候儀、此節政權ヲ奉歸候第一肝心成兩條御座候得ハ、即今此儀御所置、尤御急務ニ御座候、然ハ其人之御所置ニ付、追々　朝議モ可有之存候得ハ、只今內府ヲ議定ニ被召出候テハ如何可仕哉、勿論其後之行事、是社至當ト可申ケ條モ無之、歸順不分明候付、御論之儀ハ承服難仕、何レ右兩條內府御請之上、御評議可然ト之段被仰答候處、土侯例之暴言、何トカ獨リ言ナト被仰候由、外ニ岩倉少將、太守樣御同意ニ御論被爲有之由、其後大久保市藏被罷出、土侯ヘ强ク其暴言ヲ被咎候處、尤トノ御事候由、條理分明ユヘ御承服之御姿ニ御座候由、夫ヨリ又々後藤ヘ、大久保氏ト議論ニ相及候處、內府之儀、兩條御請之上、何分御評議之處ニ相決シ、夜ニ入、又々　御朝議之節、屹度御決議爲相成ト之事。十六日、奏狀擬案內付ノ條下、大久保利通書柬ト參觀スヘシ、

○熾仁親王ヲ以テ、總裁ト爲シ、二品ニ叙シ、隨身兵仗ヲ賜ヒ、純仁親王、晃親王、中山忠能、正

親町三條實愛、中御門經之、徳川慶勝、松平慶永、島津茂久、淺野茂勳、山内豐信ヲ議定ト爲シ、二親王ヲ二品ニ叙シ、隨身兵仗ヲ賜ヒ、純仁親王ヲシテ復飾セシメ、大原重徳、長谷信篤、岩倉具視、橋本實梁ヲ參與ト爲ス、又茂久、慶勝、茂勳、慶永、豐信ニ命シ、其藩士參與ノ任ニ當ルモノヲ薦擧セシム、是日、太政復古ヲ宮堂上ニ諭告ス、又後宮ニ諭シテ、内行ヲ正フセシム。

有栖川宮

總裁　宸翰　有栖川宮家記

○

三品熾仁親王

右可二品

中務、才調内整、英聲外明、既拔衆庶能護禁城、宜申階級式加寵榮、可依前件、主者施行。

慶應三年十二月九日

二品行中務卿熾仁親王　宣

從四位下行中務大輔臣卜部朝臣敎久　奉

正四位行中務少輔兼左大史算博士小槻宿禰輔世　行

正二位行權大納言臣實徳

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣　　從二位行權大納言臣
正二位行權中納言臣　　正二位行權中納言臣
正二位行權中納言臣　　正二位行權中納言臣　通富
正二位行權中納言臣　實則　　從二位行權中納言兼右衞門督臣
正三位行權中納言臣　通久　　正三位行權中納言臣　公正
正三位行權中納言臣　等言

制書如右、請奉　制附外施行、謹言。

慶應三年十二月九日

正四位上行大外記兼助教中原朝臣師身

左中辨勝長

制可

月日辰時

太政大臣闕　　左大臣正二位兼行左近衞大將
右大臣正二位　　內大臣正二位兼行右近衞大將
二品行式部卿邦家親王　　正三位行式部大輔在光
參議從三位行左大辨豐房
告二品熾仁親王、奉　制書如右、符到奉行。
正四位下行式部少輔兼備前守義脩
大錄　行正
少錄　友也

少録

○慶應三年十二月九日　有栖川宮家記　大内記新作留

正二位行權大納言藤原朝臣實德宣、奉
勅、以左右近衛番長各一人、近衛各三人、宜爲二品太宰帥熾仁親王隨身兵仗者。
慶應三年十二月九日　大外記兼助教中原朝臣師身奉
有栖川宮家記

○
二品太宰帥熾仁親王
正二位行權大納言藤原朝臣實德宣、奉
勅、件親王宜聽帶劍者。
慶應三年十二月九日　大外記兼助教中原朝臣師身奉
有栖川宮家記

○
議定　宸翰　山階宮家記
無品晃親王、
右可二品
山階宮

中務、能護宮闕亦固藩屏、精誠無懈、令聞既馨宜授崇爵、式示褒奬、可依前件、主者施行。

慶應三年十二月九日

二品行中務卿熾仁親王　宣

從四位下行中務大輔臣卜部朝臣敎久　奉

正四位上行中務輔殿甗左大史算博士臣小槻𥟖輔世　行

山階宮家記
大内記新作留

○三公、納言連署、御璽等上ニ同シ、故ニ略ス、但式部大輔闕ク、又告ノ下、二品晃親王ニ作ル。

○

正二位行權大納言藤原朝臣實德宣、奉

勅、以左右近衛番長各一人、近衛各三人、宜爲二品常陸大守晃親王隨身兵仗者。

慶應三年十二月九日

大外記兼助教中原朝臣師身奉

山階宮家記

○

二品常陸大守晃親王

正二位行權大納言藤原朝臣實德宣、奉

勅、件親王宜聽帶劍者。

慶應三年十二月九日

大外記兼助教中原朝臣師身奉

山階宮家記

○

慶應三年十二月九日　宣

入道一品純仁親王

復飾止一品

叙二品

職事　長邦　東伏見宮履歴書　嵯峨實愛切紙留

〇

仁和寺宮

〇

議定　宸翰　東伏見宮履歴書

無品嘉彰親王

右可二品

中務、爲擁邦國既出緇林、德行全備名譽殊深、宜加朝奬式穆寵榮、可依前件、主者施行。

慶應三年十二月九日

二品行中務卿熾仁親王　宣

從四位下行中務大輔臣卜部朝臣敎久　奉

正四位上行主殿頭兼左大史算博士臣小槻宿禰輔世　行

東伏見宮家記　大内記新作留

〇三公、納言連署、御璽等上ニ同シ、但、右大臣、内大臣ニ員闕ク、告ノ下、二品嘉彰親王ニ作ル。

〇山階宮、東伏見宮兩家記ニ、宸翰御學問所ニ於テ御手賜之、御三折トアリ、又三親王叙品ノ宣示ヲ授クルハ十七日、隨

身兵仗帯劔ノ宣示ヲ授クルハ二十日ニアリ、按スルニ、純仁ヲ嘉彰ニ作ルモノ、其復名十六日ニアルヲ以テ、此誤ヲ致セシモノナルヘシ。

○

正二位行權大納言藤原朝臣實德宣、奉

勅、以左右近衛番長各一人、近衛各三人、宜爲二品嘉彰親王隨身兵仗者。

慶應三年十二月九日

大外記兼助教中原朝臣師身奉

東伏見宮家記

○

議定職被　仰下候事、

各通　中山前大納言

正親町三條前大納言

中御門中納言

口宣、追テ下賜候事。

嵯峨實愛手記

○

議定職被　仰下候事、

各通　尾張大納言　越前宰相

薩摩少將　安藝少將

山内容堂

口宣、追テ下賜候事。

島津忠義家記
春嶽私記

○

各通　大原宰相　萬里小路右大辨宰相
長谷三位　岩倉前中將
橋本少將

參與職被　仰付候事。橋本實梁家記

○慶勝以下五人へ達者

其藩中、可然仁兩三輩、爲參與卽時可差出旨、　御沙汰候事。島津忠義家記　春嶽私記

○宮堂上へ諭告

德川內府、從前御委任大政返上、將軍職辭退之兩條、今般斷然被　聞召候、抑癸丑以來未曾有之國難、　先帝頻年被惱　宸襟候御次第、衆庶之所知候、依之、被決　叡慮、　王政復古、國威挽回之御基被爲立候間、自今攝關、幕府等廢絕、卽今先假ニ總裁、議定、參與之三職ヲ被置、萬機可被爲行、諸事神武創業之始ニ原ツキ、縉紳、武弁、堂上、地下之無別、至當之公議ヲ竭シ、天下ト休戚ヲ同ク可被遊　叡念ニ付、各勉勵、舊來驕惰之汙習ヲ洗ヒ、盡忠報國之誠ヲ以、可致奉　公候事、

一內覽　勅問御人數、國事御用掛、議奏、武家傳奏、守護職、所司代、總テ被廢絕候事、

一三職人體

總裁　有栖川帥宮

議定　仁和寺宮　山階宮　中山前大納言
正親町三條前大納言　中御門中納言　尾張大納言
越前宰相　安藝少將　土佐前少將
薩摩少將

參與　大原宰相　萬里小路右大辨宰相　長谷三位
岩倉前中將　橋本少將　尾藩　三人
越藩　三人　藝藩　三人　土藩　三人　薩藩　三人

一太政官始、追々可被爲興候間、其旨可心得居候事、
一朝廷禮式、追々御改正可被爲在候得共、先、攝籙門流之儀被止候事、
一舊弊御一洗ニ付、言語之道被洞開候間、見込之向ハ、不拘貴賤無忌憚可致獻言、且人材登庸第一之御急務ニ候故、心當之仁有之候ハ、早々可有言上候事、
一近年物價格別騰貴、如何トモ不可爲勢、富者ハ益富ヲ累ネ、貧者ハ益窘急ニ至候趣、畢竟政令不正ヨリ所致、民ハ王者之大寶、百事御一新之折柄、旁被惱　宸衷候、智謀遠識救弊之策有之候者、無誰彼可申出候事、
一和宮御方、先年關東ヘ降嫁被爲在候得共、其後將軍薨去、且　先帝攘夷成功之　叡願ヨリ被爲許候處、始終奸吏之詐謀ニ出、無御詮之上ハ、旁一日モ早ク御還京被爲促度、近日御迎公卿被指立候事、
右之通御確定、以一紙被　仰出候事。嵯峨實愛手記 二條齊敬家記

○初メ岩倉具視、玉松眞弘ノ才學ヲ聞キ、延テ門客ト爲ス、其中山忠能等ハ内勅ヲ受テ更革ヲ謀ルニ當リ、眞弘モ亦密議ニ參ス、眞弘、古今ノ成敗得失ノ跡ヲ論シテ、更革ノ議數條ヲ草ス、其要、維新ノ業、神武ノ創業ニ基キ、攝關以下ノ官ヲ廢シテ、新ニ總裁、議定、參與ノ三職ヲ設ケ、職制ヲ簡ニシテ、章程ヲ詳ニシ、門閥ヲ廢シテ、人才ヲ徵スル等ニアリ、具視大ニ之ヲ善トス、蓋シ更革ノ事、專ラ具視等ノ規畫贊成ニ出ツ、而シテ詔勅、官制等、皆眞弘ノ草スル所ニ係ルト云。

○後宮布告
德川内府、二百六十餘年委ヲ置レシ大權返シ奉レルマヽ　聞食サレヌ、今ヨリ　朝廷ニテ天下ノ政執行ハセラルヽニ付テハ、准后御方ヲ始メ、内ノ女房三仲間ノ者ニ至リ、内行ヲ正フシ、嫉妬ヲツヽシミ、女ノ分ニ應シ、忠心ヲ盡シ仕ヘ奉ルヘシ、

殊ニ年來ノ有樣驕リ高フル事常トナリテ、中ニハ得モイハレサル振舞モ聞ユ、アハレ古ヘヲカウカヘ、今ヲカヘリミ、人々互ニタスケ正シテ、婦道ノ鑑トナランコトヲ思フヘシ、若シ假ニモ御政ノ上ヲ誹リ、或ハ佞人ノ賴ミヲ容レ、故ナキ事ヲモ曲テ竊ニ　奏シ奉ル事ノ如キアランニハ、嚴ニ罪ナハルヘキナリ、返ス返スモ深ク意ヲ用ユヘクナム、

右之通被　仰出候間、末々迄不漏樣可被傳候事。　嵯峨實愛手記

○本條、日ヲ失ス、姑ク此ニ類收ス。

○

三職之輩、爲心得被渡下候一紙、

一御評議所始メ御場所假設之事、

一御評議所　小御所

一總裁、議定詰所　麝香間

一同休所　水鳥間

但シ、宮、公卿奥ノ座、列藩端ノ座、且總裁、議定一列ニ坐スルト雖モ、總裁ニ於テハ一席ヲ隔ツヘキノ事、

一參與詰所　御色紙部屋二間

一同休所　同東ノ間　於藩士ノ向ハ諸大夫間假建

但、公卿奥ノ座、列藩端ノ座、藩士向座、

一議定之輩一人ツヽ、是迄議奏ノ如ク詰　林和靖間

一宮公卿、列藩奏下所　林和靖間

一神社寺院、諸藩士以下奏下所　虎之間

一三職之輩、家來二人乃至五七人、御拜道廊下南ノ檐下ニ詰ルノ事、其道射場ヨリ長橋ヲ經參仕、但シ出入嚴重取締之事。

嵯峨實愛手記

○五藩薦擧人名

薩藩

岩下佐次右衛門　西郷吉之助　大久保一藏

尾藩

（國元罷在早々呼登可申候）荒川甚作　丹羽淳太郎　田中邦之助

藝藩

辻將曹　櫻井與四郎　久保田平司

越藩

中根雪江　酒井十之丞　毛受鹿之助

土藩

後藤象次郎　神山左多衛　福岡藤次　春嶽私記

○本條、三職局叢書ニ載ス、災後之ヲ失ス、今、春嶽私記、本日三職降命ノ條、及慶勝家記ニ依テ採入ス。

○諸藩ノ衛兵ニ命シ、警備ノ事、今後朝命ヲ奉セシム、平戸藩兵ヲシテ淸所門（即御臺所門）ヲ守リ、十津川鄕兵ヲシテ蛤門ヲ守ラシム。

大政御一新ニ付、守衛之輩、自今　朝命ヲ奉シ可致進退、諸事心得違無之様　御沙汰候事、

但、今日　召之列藩兵士戎服之儘參　朝候得共、非常御手當而已、必動搖無之様爲心得申渡候、尤御守衛之儀ハ、一際嚴重ニ取締可致事。池田輝知家記　春嶽私記

○

蛤御門御守衛被　仰付候事。

十二月九日　十津川郷兵出張事録

○松浦詮家記ニ云、御臺所門御守衛被仰付候旨、岩倉殿ヨリ田村文右衛門へ御口上ニテ御直達相成、薩州藩ヨリ請取相固メ候事。

○附録警衛記九日以前ニ通シテ、一切ノ警衛ヲ記スルモノ、

一堺町御門　越前　　一下立賣御門　藤堂
一蛤御門　備前及十津川郷士　　一中立賣御門　因州
一乾御門　薩州　　一今出川御門　有馬玄蕃頭
一石薬師御門　彦根　　一清和院御門　備前
一寺町御門　肥後

九門内警衛

一南門向側　阿州　　一日御門前　尾張
一同向側　紀州　　一猿ケ辻向側　中川修理大夫
一朔平御門向側　明石　　一御臺所御門向側　松浦肥前守
一公家御門向側　土州　　一新在家　高松
一大宮御所西中程　加州

右ハ舊來之番所ニテ、建物有之處ナリ、九日朝繰入ノ薩、藝、土ノ兵隊ハ築地廻ニテ、

一南門　薩州　一日ノ御門　薩州
一公家御門　土州　一御臺所御門ヨリ朔平御門邊押廻シ　藝州
右ハ幕張假建物等、或ハ何モナク、野宿モ有之、晝夜嚴重警衞ス、其外、
一近衞殿御門前　藩州　一中立賣御門前　同
一堺町御門前　同
右同様、野宿幕張篝火ヲ焼キ、晝夜間斷ナク固ム、
諸門ハ兼テ胡服著用、九門内ヘ入候事不相成候儀ニ付、九日朝、諸隊繰入之節ハ、皆乾御門ヨリ入込候事、藝、土ハ支度モ不調、旅装之儘ナリ。戊辰新聞記

○毛利敬親ノ老臣、及ヒ其支封主ヲ京ニ召スヲ山崎戍兵ニ諭シ、又敬親父子、及ヒ三條實美等五人皆入京ヲ許スヲ沿道關門ニ諭ス、是日、敬親ノ老臣等、島津茂久ノ報ヲ得テ、山崎ニ抵ル、守兵、朝命ナキヲ以テ納レス、頃アツテ、朝命至ル、乃チ入テ光明寺乙訓郡粟生村ニクリ、ニ次ス。

○山崎戍兵ヘ達書
山崎街道警衞之儀ニ付、過日、伺付札ヲ以相達候處、今度、寛典ニテ被免入京候旨被　仰出候ニ付、其儀ニ不及候事。藤堂高潔家記

○沿道關門ヘ達書
頃日、播州西宮表滯在之長藩末家、竝家老等、御沙汰之儀有之、只今入京可致旨被　仰出候、且長門宰相、同少將、宰府五卿各被免　勅勘候、依之、尋常之通通行可致候間、道筋關門警衞之輩、此段可相心得旨、被　仰出候事。嵯峨實愛手記

○本條、諸家記見ル所ナシ、姑ク錄シテ後考ニ備フ。

○

今般、　御召ニ依、末家淡路名代毛利平六郎、吉川監物、名代宮庄主水、家老毛利内匠共、西ノ宮罷出、御差圖奉待候處、可被仰出儀モ被爲在、入阪　御沙汰可相待旨御達ニ相成、重テ入洛被　仰出、猶官位如元之御旨御達有之、難有仕合ニ奉存候、依之、卽刻粟生光明寺迄罷出申候間、其段可然御取計奉賴候、以上。

十二月九日

楫取素彦

國貞直人

薩州御藩　御當役中樣

藝州御藩　御當役中樣

指華入京日載

○指華入京日載ニ云、前件之通進軍ニ付、先、山崎關門藤堂固處ヘ寺內暢三使者トシテ、楢木良助副之、口上覺書持參、今般、御召ニ依、淡路名代毛利平六郎、吉川監物、名代宮庄主水、家老毛利內匠共、西ノ宮迄罷出、御差圖ヲ奉待候處、可被仰出儀モ　被爲在、入阪　御沙汰ヲ可相待旨御達ニ相成、引續　御所ヨリ被爲召、　御沙汰之旨被仰出、一同致入京候間、關門通行之儀及御挨拶置候、以上。

十二月

猶、後藤深造一中隊ヲ引率、土藩ト稱シ、奇兵隊ヲ誘導シ、關門通行之儀、藤堂藩柳田猪之助、梅田小兵衛エ應接ニ及候處、朝廷ヘ相伺居候得共、未タ何分之御達不相成候ニ付、通行難叶段相拒ミ候テ、應接餘程手間取候ニ付、中軍、並第二奇兵隊、膺懲隊、振武隊、柳谷通リ進軍、整武、鋭武兩隊、櫻井ヨリ天王山之麓ヲ繞リ出、然處、後藤ハ是非誘導トシテ罷越、通行不得致而ハ不相濟ニ付、兵力ニ而モ通行可致旨申入、此方ニモ兵隊ヲ整列シ、藤堂兵モ砲臺ニ懸リ居候處、　朝廷ヘ伺之者只今罷歸リ、御通行相成候樣トノ事ニ付、何モ不苦トノ趣ニ相成、堂々二隊通行致シ、追手搦手同刻ニ光明寺著致候、搦手ハ柳谷差懸候處、山中處々藤堂兵罷居、猶關門有之候得共、無異議通行相成候事。

○德川慶喜ニ命シ、毛利敬親等赦宥ノ故ヲ以テ、部下ノ黨議ヲ生スルモノヲ誠諭セシム、又二

條城中紛擾ノ狀アルヲ以テ、尾、越二藩ニ内諭シテ、之ヲ鎭撫セシム。

防長寛大御所置可被爲有　思召ニ付、向々御尋有之候處、所存申上候輩モ無之候間、叡慮之通被　仰出候、就テハ異儀申上候族モ、決テ無之筈ニ候得共、萬一異存之輩モ有之、騷動ニ及候儀モ候ハヽ、　御幼君ニモ被爲在、殊ニ御元服未ダ不被爲濟候折柄、唯今自然右樣之儀有之候ハヽ、　御驚動ハ勿論之儀、　皇位モ如何可被爲成哉ト、深ク被惱　叡慮候次第ニ候間、何卒鎭撫有之、說得之儀力ヲ盡候樣、呉々モ　御沙汰候事。藤堂高潔家記　酒井忠祿家記

○本條、忠祿家記ニ、幕府ヨリ重臣呼出シ達有之トアリ、蓋、幕府ニ命アリテ、幕府ヨリ其部下ニ傳示セシナルヘシ、高潔家記ニ、傳奏日野大納言殿御渡書付トアリ、恐クハ謬ナリ。

○春嶽私記ニ云、此日夕申刻前、岩倉殿、大原殿、尾、越之重役ニ御逢被成度トノ事ニ付、尾之田宮如雲、毛受鹿之助兩人罷出候處、兩卿被申出候ハ、何カ傳聞之趣ニテハ、旗下及會、桑、竝譜代之諸侯等、二條城ヘ馳集リタル由、畢竟、今般　御所ヘ兵ヲ被集候ハ、全ク他之盜ノ爲ニスル警備ニテ、承知之通リ、決テ討幕等之儀ニハ無之事ナルニ、萬一旗本ヲ始メ諸藩心得違出來、不慮之動亂ヲ生候テハ、不容易次第候ヘハ、何卒條城鎭靜相成候樣、尾、越ニテ厚心配之儀御賴被成旨ニ付、其段兩公ヘ申上、尾之茜部小五郎、田中邦之輔同道、鹿之助登城、板倉殿ヘ請謁、右御口上之趣申上、且　宮中之形勢及詳達候處、板老ニモ此件々ハ殊更御按勞之由、何分内府公ヘモ委細及言上、指向候處ハ精々可致鎭撫候得者、其段　御所ヘ御答可申上、併此上　朝廷ヨリ御無體成被　仰出等有之候テハ、其上之事情ハ如何可相運哉、何共難計候間、此邊ハ尾、越ニテ御配慮被成下候樣、兩卿ヘモ宜申上旨御申聞有之、夜六時過退城、直ニ參　朝シテ、板老被申聞候趣、兩卿迄申上タリ、此節、條城之形勢、旗下竝諸藩之兵士、竹葦ノ如ク、各戎裝ニテ兵器ヲ携ヘ、營中草鞋ハキニテ往來シ、唯今ニモ討テ可出氣色ニテ、控處ニモ御譜代藩井伊、藤堂ヲ初多勢相詰、隊長等同伴セルモ有之、御一麾之御指揮次第、二百餘年之洪恩ヲ可奉報トノ義勢決然タル有樣ナリキ。

○伊達慶邦、細川慶順等、三十餘人ノ老臣、各英國公使書束ノ答議ヲ上ル。

此度、英國公使著阪、兵庫開港、大坂開市ニ付、外國人共數多移來、大阪竝ニ兵庫邊ヘ諸侯ノ兵隊多數差出置、自然混雜相生、不容易儀ニ付、兵卒多人數呼寄、自國人警衛仕候外無之由申立候ニ付、見込御下問ノ趣奉畏候、外國事件ノ儀ハ、重大ノ御所置ニ候ヘトモ、根元開港御差許相成候上ハ、諸藩人數ノ儀ハ、何樣ニモ御取扱樣モ可被爲有、當節、外國人警衛ノ兵士等、數多入阪仕候ハヽ、人心動搖仕間敷物ニモ無之、何レ外國交際ニ萬國公法モ可有御坐、右ヘ御基キ御所置被遊候外有御坐間敷、外ニ見込ノ次第モ無御座候、此段申上候、以上。

十二月　　松平陸奥守名代

伊木土佐

戊辰新聞記

○

於大阪英人申出ノ趣ニ付、御下問ノ次第、邸内役筋之者共評議仕候處、浪華港之儀ハ、日本第一之大通津ニ付、諸藩詰込之人數、或增或減、何レモ國々ノ都合次第候得共、此節ニ至リ、殊更ニ減却致サレ候儀ハ相成間敷、攝州西宮邊ヘハ、長州人多勢滯留罷在由候得共、是ハ今般別途御用向ニ付テ罷出、外國ニ致關係儀ニハ無之、彼是、彼ヨリノ賴談之通ニハ何分運兼可申、且又行違礙合等ノ儀ハ、癸丑以來ノ有樣モ各國案内ノ通ニ付、精々御沙汰ニハ可相成候得共、絕テ無之ト請合ハ難被爲出來勿論、此節屹度取締ハ可被示ト、在ノ儘被仰渡、左候テ御國中ヘモ、此節　勅許開港ニ相成候而已ナラス、王政一途ニ歸候上、萬一、對外國人不都合ノ筋モ有之候テハ、實ニ　朝廷之御失體相成難相濟候間、向後愈以相愼可申旨、御沙汰被爲在候テハ何程ニ可有御座哉、全體洋外之事情モ得ト相辨不申、藩臣共重疊奉恐入候得共、御下問之趣難默止、乍不束此段御請申上候、誠恐誠惶謹言。

細川越中守家老

十二月九日　溝口孤雲
三宅藤右衛門
細川護久家記

○

今度、兵庫表ヘ入津外夷之儀ニ付、御書面拜見被仰付、見込可申出旨奉畏候、抑諸侯兵隊多人數召連、同所ヘ致出張候儀、固ヨリ官命ヲ奉シ、當地警固之爲出張候哉、如何ノ情態ニ御座候哉、不相辨候得共、兵士本ヨリ丁壯鋭氣之者、動モスンハ外國人ト相軋リ、遂ニ大害ヲ釀シ候樣立至リ候モ難計、左スレハ、實ニ方今內外多端ノ折柄、如何ノ變動ヲ生シ候モ難計奉存候、夫故、一先右人數別地ヘ御引退ケ被成、尙當地御取締筋ハ別段一二諸侯ニ命シ、嚴重警固被仰付候方可然ト奉存候、此段御下問ニ付、差向愚見之趣奉申上候、以上。

十二月九日　松平美濃守內
東郷吉作
黒田長知家記

○

外國人ヨリ申立候儀ニ付、昨夜　御沙汰之趣奉畏候、右者御當地詰合之面々、別ニ見込之儀無御座候、此段申上候、以上。

十二月九日　松平因幡守內
河毛文藏
池田輝知家記

○

此程、英國公使ハルクス著阪、板倉伊賀守應接之次第、竝彼ヨリ指越候書翰譯文寫拜見被　仰付、見込之趣可申上旨奉畏候、

右ハ不容易事件御座候得共、指向候テ、何トカ御處置無御座候テハ相成申間敷、乍併、彼ヨリ申立候ニ任セ、諸侯之兵隊爲御引退被成候テハ人氣ニモ指響、且如何樣之異變出來候モ難計奉存候間、是等ハ其儘御差置被成候儀可然ト奉存候、右ニ付、彼レ兵隊多人數呼寄候ハヽ、夫々御警衞人數御增ニ相成、不虞之變ニ御備被成候樣奉存候、尤彼ヨリ兵端相開不申候ハヽ、此方ニモ決テ暴動仕間敷旨、出張之向ヘ厚御示諭有御座度、其內、外國事情ニ通シ候藩々ヘ被　仰付、開港延期之應接御委任ニ相成候樣奉冀望候、右ハ御下問ニ相成申候ニ付、不取敢奉申上候。

十二月九日

松平備前守家老　土倉修理助

池田信濃守留守居　矢吹卯之二

池田章政家記

○

外國人ヨリ差出候書翰寫拜見被　仰付候得共、於私共見込無御座候、此段申上候、以上。

十二月九日

酒井左衞門尉內　中村右門

酒井忠賓家記

○

外夷一件　御下問之處、私共素ヨリ外國事情不案內之儀ニ付、別段見込ハ無御座候得共、既ニ條約　勅許相成候上ハ、縱令多人數入込候共、御不取締之儀無之候ハヽ、可然御儀ト奉存候、以上。

小笠原佐渡守家來　山田勘右衞門

小笠原豐千代丸家來　淸水勘解由

水野出羽守家來　名　闕

松平内膳正家來　花安專左衛門

小笠原幸松丸家來　志水五右衛門

松平伊豆守家來　山村縫殿介

小笠原近江守家來　小林正之輔

小笠原忠忱家記
久松定弘家記

○水野忠敬家記ニ、同席三十二藩連名トシ、松平信安家記ハ、三十四家トス、之ヲ一家ニ質スニ、藩名原記ヲ失スト云フ。

○

外夷御所置之儀ニ付、見込之趣、今巳刻迄ニ兩御役之内へ可奉申上之旨、被　仰渡奉畏候、然處、於幕府、是迄之手續モ御座候之間、定テ見込之次第モ可有御坐ト奉存候、於私ハ別段可奉申上見込モ無御座、何卒幕府へ御委託被成下置候様仕度奉存候、此段奉申上候、以上。

十二月九日　戸田釆女正家老　大高金右衛門

戸田氏共家記

○

外國之儀ニ付テ之御書付拜見仕候、篤ト愚勘仕候得共、何分不容易御事件ニ付、一己ニ如何共難奉申上候、此段奉申上候、以上。

十二月九日　松平兵部大輔家來　友部權六

松平直致家記

○

謹テ奉申上候、於大坂板倉伊賀守、英人應接書取、且英人書翰拜見被　仰付、御下問之御次第奉畏候、乍恐、得ト勘考仕候

得共、素外異之情實ハ聢ト相辨不申候儀ニ付、取極奉申上候程之心得ハ無御座候得共、此度御改革御初政大切之御機會御座候、條理判然、 御國情貫徹仕候樣、兼テ異情熟知罷在候大藩御選ヲ以テ、 應接被 仰付、何卒 皇國之御基本相立候樣有御座度奉存候、然上、若不法之擧動モ御座候ハヽ、猶又時宜ニ應シ、相當之御處分モ可被爲在御儀ト乍恐奉存候、此段謹テ御請奉申上候、誠恐誠惶頓首。

十二月九日　　松浦肥前守家來

田村文右衞門

淺山九郎左衞門

松浦詮家記

○

外國一件御下問之處、素ヨリ彼ノ事情不案内之儀ニ付、別段見込ハ無之候得共、既ニ定約 勅許相成候上ハ、彌 皇國之信義相立、差當リ候處、騷擾不生樣御所置相成可然哉ト奉存候、尤主人見込之程難計御坐候得共、 御沙汰ニ付、詰合候私共限奉言上候、誠惶敬白。

十二月九日　　松平和泉守家來

菅三左衞門

秋山祐助

松平乘承家記

○

外異一條ニ付テ之御書付拜見被 仰付、委詳奉敬承候、然ル處、外異一條ハ、事實不案内之儀ニ付、別段見込等ハ無御座候、猶早々左京大夫ヘ可申聞候、以上。

十二月九日

青山左京大夫家來
阪東篤之輔

青山忠誠家記

○

外國事件　御下問之趣奉敬承候、微臣素ヨリ其事情不案內之儀ニテ、御所置振更ニ其見込無御座候、此段奉申上候。

十二月九日

脇阪淡路守內
井口金右衛門

脇阪安斐家記

○

此程、英國公使ハルケス(マヽ)始、此度兵庫開港、大阪開市之儀ニ付、外國人數多移リ來リ候處、諸侯之兵隊多人數罷越居、自然殺傷等之混雜可相生ハ必然之儀ニ付、早々引拂致シ度旨申立候ニ付、段々御說諭モ被爲在候得トモ、猶又再應之申立モ有之、書簡拜見被　仰付、見込之次第以書取奉申上候樣、被　仰渡候趣奉謹承候、右者不容易大事件之儀ニテ、不肖之私共、見込言上可仕樣無御座候、何卒　皇國之御爲、且ハ人心居合、至當之御處置乍恐奉仰候、右御請奉申上候、以上。

十二月九日

松前志摩守家來
島田興
堀左京亮家來
治外記
六鄕兵庫頭家來
石井安太夫
堀內藏頭家來
中野五郎太夫
織田左近將監家來
宮城捴右衛門
青木源五郎家來
岩田啓藏

六鄕政鑑家記

○

大阪表ニ罷在候外夷一條ニ付、被仰出之趣奉畏候、右ハ重大之事件ニ付、於私別ニ見込奉申上候次第無御座候、此段御請申上候、以上。

十二月九日

仙石讃岐守家來
作　齋　宮

仙石政固定記

○

此程、英國公使ハルクス（マヽ）、板倉伊賀守ト應接之次第、竝彼ヨリ指越候書翰譯文拜見被　仰付、見込之趣可申上旨奉畏候、右ハ本家重臣ヨリ存意申上候通ニテ、別ニ見込無御座候、此段不取敢奉申上候、以上。

十二月九日

池田丹波守

但、委曲之儀ハ、本家ヨリ書上有之候。

池田政禮家記

○

昨夜中、尙又外夷一條之儀ニ付、御書取ヲ以卑賤之私共迄拜見被　仰付、其上見込之儀モ御座候ハヽ、厚相心得可奉申上之旨、御沙汰之趣冥加至極難有仕合奉存候、右ハ不容易事條ニ付、何分愚昧ニテ辨別仕兼、見込言上仕候樣無御座、此段乍恐奉申上候、以上。

十二日九日

織田攝津守家來
坂井權右衛門

織田長猷家記

○

外國之事件、　御書取ヲ以テ被　仰渡候趣謹テ奉拜承候、別段見込之儀モ無御坐候、奉蒙　仰候間、乍恐此段御請奉申上候、

以上。

十二月九日

本庄宮内少輔家來
村瀨與三右衛門

本庄道美家記

○

外國之事件、御書取ヲ以テ被仰渡候趣謹テ奉拜承候、別段見込ノ儀モ無御坐、此上迚モ奉隨御所置候外無御坐候、奉蒙仰候間、乍恐此段御請奉申上候、以上。

十二月九日

山口長次郎重臣
岩倉助右衛門

山口弘道家記

○

此度、兵庫並大阪開市ニ付、英國使節ヨリ申立之事件、御書付拜見被仰付、見込之趣以書面申上候樣奉畏候處、是迄外國人取扱振深ク承知不仕候間、可申上程之見込無御座候、此段申上候、以上。

十二月十日

溝口誠之進内
寺田喜三郎

溝口直正家記

○

此度、兵庫並大阪開市云々。溝口直正ト同文

丹羽左京大夫内

十二月十二日

○前田慶寧、京ニ至ル。○前田慶寧家記

○戸田忠行、米倉昌言、丹後守○金澤藩主、食封一萬二千石、後六浦ト改ム、薩摩藩士ト稱シ、下野出流山村ニ嘯聚スルモノアルヲ舊幕府ニ報ス、舊幕府、忠行、及ヒ秋元禮朝、鳥居忠寶ヲシテ之ヲ緝捕セシム、既ニシテ、宗義達モ亦其事ヲ報ス。○出流山村義達ノ別邑ニ係ル、

増子現藏
丹羽長裕家記

長門守領分下野國都賀郡櫔木村表ヘ薩州藩竹内啓、會津元助、兩人名前ニテ急用向有之趣、去月二十五日、千住宿ヨリノ先觸ヲ以、同二十七日夕、人數十六人、櫔木町脇本陣源兵衛方ヘ止宿、翌二十八日晝頃、同所出立、出流山之方ヘ罷越之趣、右ニ付、平常之旅人體ニモ不相見旨、且ハ此節柄之儀ニモ御座候ニ付、彼地役場詰之者ヨリ申越候、此段各樣迄御聞置可被下候、以上。

十二月九日　　戸田長門守家來
　　　　　　長島猪三郎

坤儀革正錄
淀藩加藤某筆記

○

私領分野州安蘇郡上永野村役人共ヨリ申出候ハ、去月二十八日、薩州藩ト唱候由、拾八人程、宗對馬守領分出流村ヘ罷越、致滯泊居候處、同晦日、右上永野村名主玉次郎ト申者宅ヘ罷越、玉次郎始、外役人共呼寄候上、連判帳取出、昨春中、新田家來ニ致加入候者共、名前申聞呼出、致加入候抔ト强談ニテ、一同驚入致歎願、又々出流村ヘ罷越候之由、然ル處、追々人數相

集、最寄致徘徊、當分退散之姿相見ヱ不申、殊ニ日々黨類相增候樣子、此上何樣之變事出來可申モ難計、村々一同難澀至極之旨訴出申候、當時非常之節、人數出被　仰付置候得共、無餘儀場合ニ付、右人數之內差繰、領分爲取締差遣シ申候、此段御聞置可被下候、以上。

十二月九日　米倉丹後守

晩翠樓叢書
淀藩加藤某筆記

○舊幕府達書

戸田長門守
秋元但馬守
鳥居丹波守

野州出流山邊へ、賊徒多人數屯集之趣ニ付、在所有合之人數差出、召捕候樣可被致候、尤手餘リ候ハヽ、打捨切捨等不苦候。

秋元興朝家記
坤儀革正錄

○

今般、薩州家中ト相唱、十一月二十八日、上下二十一人、對馬守領分野州都賀郡出流村へ立越、觀音參詣之由、尤入用之儀有之、人數買物之爲ニモ有之、少々之內逗留仕度候間、必心配ニ不及旨ニ而、同村へ止宿、是ヨリ異變之振合モ有之候ヘ共、追追他領近村ヨリモ罷越、人數相加リ、今程百人餘ニ相及、逗留數日ニ相成候ヘ共、未引取之樣子モ不相見、段々多人數ニ相成ニ付テハ、此先如何之擧動有之哉モ難量、尤、近々野州眞岡宿ヨリ今百五十人程モ出流村へ著之積、左候得者、一同常州太田宿へ立越候風聞之趣、注進仕候ニ付、此段御屆申上候、就テハ、此末之動靜モ難量事故、人數等差出、取締方可仕之處、追々御屆申上置候通、御當地詰人數、役掛リ之者外差置不申、右役掛リ之者モ、昨今少人數詰之事故、兼テ取締方駈引、野州領分人數ヲ以手當罷在候得共、猶又、此節無手拔申付、領中不及紛擾樣嚴重手配仕罷在候、此段宜御聞置被下候樣奉申上候、

以上。

十二月十一日　宗對馬守内　山崎東助

淀藩加藤某筆記

○鳥居忠文家記、二十日、舊幕府へ屆書中ニ出兵ノ處、浪徒行衛難相分ニ付、兵隊引取トアリ。

○附錄流山浪士概略

今朝、探索人共ヨリ申出候ハ、出流山之浪人共、櫔木宿戸田侯御役所ニ懸合筋有之趣ニテ、凡拾人罷越、内兩人ハ押田ト申役所ニ相控、八人之者共、宿役人へ案内申付、櫔木役所之頭役へ面談申込候ニ付、則代官役前野司、竝足利陣屋表へ相詰候士分一人差添、兩人ニテ面會之處、浪人共申出候ハ、拙者共出流山ニ相集リ候儀ハ、横濱へ押出可申含、然ル處、軍用金差支候間、金三千兩借用申度、且當分、此邊之寺院等旅館ニ借受度、御答次第一戰ニ可及ト申入候由、戸田侯ヨリ右之御挨拶ハ如何相成候哉、浪人共、一旦押田へ引取、夕七ツ時前、猶又浪人共二十人程ニ相成、櫔木宿へ入籠候、且又、合戰場宿ニモ數十人相集居候、

一出流山屯集之人數三百人ト相唱候得共、全クハ百人ニハ不足ニ御座候、右屯集之内、士分之姓名、左ニ、

總大將之由　當時江戸表三田上屋敷へ罷越候由　村上四郎

軍師　文益ト申醫師　常田與市

同　專乘ト申法印　高橋渡

目附役　西山健之進　川田吉之助　大谷法印

祐筆兼勘定　儒者之由　赤尾清三郎　安達幸太郎　龜山常右衛門　古橋某

田中光次郎　高田傳司　瀬山内藏吉　龜山孝次郎

同　常右衛門　外ニ　家來二人ツヽ、

頭役　惣髮ニテ四十歳位　竹内啓　會津元助

吉原長左衛門　植竹行造　茅原茂

吉島駒吉　同　馬之丞　多田茂市
古橋又左衛門　菅井藤七　荻原久米次郎
醫師　關齋　忠兵衛

右之外、壬生浪人福永ト申者モ加入、此者ハ物頭悴、四五年前退藩之由、
一此程、金談ニテ對州領之名主半兵衛、竝幸藏、江戸三田上屋敷へ罷越候、往來共、對州家來之先觸差出、駕籠駄荷等繼立候、尤駄荷ハ金子之由、扨歸村之節、江戸表之者十七人同道ニテ歸村之由、日限ハ去五日ニ候、
一去ル六日、浪人十四人、葛生ト申所ヨリ駕籠十挺ニテ出流へ罷越、是ハ上州表之者共ニ候由、
一櫪木宿へ申付、旗ハ中黑、提灯紋類ハ⊕印、下ニ山道付候、且烏帽子、直垂等、十二人分申付、
一浪人共出向候場所ハ、上州ト申趣ニ候得共、表向ハ横濱ト相唱候由。晩翠樓叢書

復古記　巻八　終

總括兼纂修
一等修撰　臣　長松幹
校勘
一等修撰　臣　長炗
一等協修　臣　四屋恒之
校録
一等書記　臣　澤渡廣孝
繕寫
二等繕寫生　臣　小川長和
二等繕寫生　臣　小島春

復古記　卷九

慶應三年丁卯十二月十日ニ起リ十三日ニ至ル

○十二月

十日、備前藩兵ヲシテ蛤門ヲ守リ、池田政禮ノ兵ヲシテ之ニ屬セシム。

○池田章政家記ニ云、十日、重役呼出シ、蛤御門御警衛土州ヘ被　仰付候處、同家モ九門内御固メ被　仰付、難手合、十津川郷士ヘ被　仰付候、人少ニ付、其藩爲加勢淸和院御門人數分配致シ、竝池田丹波守人數差加、手合セ可申旨被　仰渡。

○池田政禮ヘ達書

蛤御門御固、本家打込相勤候樣、被　仰付候事。池田政禮家記

○徳川慶勝、松平慶永、命ヲ傳ヘテ二條城ニ到ル、城中兵馬塡咽、麾下ノ士、皆甲ヲ擐シ、兵ヲ執リ、譜第諸侯ハ、兵ヲ率ヰテ城外ニ列ス、徳川慶喜、其衆變ヲ激センコトヲ恐レ、日昳ニ至テ決セス、會マ朝旨二人ヲ促ス、慶喜、乃罷職ノ命ヲ奉シ、辭官獻地ノ事ハ、衆情鎭定ノ後ヲ待タント請フ、夜ニ及テ、二人復命ス。

奉歸政權、將軍職辭退之儀被　聞召候上ハ、官位モ一等ヲ奉辭、且御政府御入費モ差上度段申上候心底ニハ候得共、卽今手元人心居合兼、痛心之譯柄モ御座候ニ付、鎭定次第奉願上度候間、此段相含、於兩人可然樣及執奏吳候樣申聞候事ニ御座候間、於慶永、天地ニ誓ツテ御請合申上候間、徳川内府内願之筋、御聞屆被下候樣奉願上樣。

慶永　春嶽私記

○春嶽私記ニ云、十日巳刻、御登城有之、尾侯モ御同様ナリ、然ル處、昨日來　朝廷御變革一件ニ付、幕下之人心大ニ動搖シ、旗本之面々、何レモ兵器ヲ携ヘ、甲冑ニテ登城、御譜代衆ハ各兵ヲ率ヰテ御城下ヘ相詰、鼎沸之勢ニテ、城中之人心折合兼、洶々タル有様故、内府公モ御誠意ヲ以、御自身御說得等有之、聊鎭定之姿ニハ有之候得共、御持參之筋抔御披露ニ相成候得ハ、一時ニ暴發之機現然ニテ、尾、越之二侯ヲ嫌惡スル事、讐敵ノ如キ次第ニ付、先ツ内府公ヘノミ御密談有之處、内府公ニハ聊御異心無之、總テ被任　朝命候御心得ナカラ、前書之運ヒニテ、更ニ御發表難相成候付、其段藝州知邸三宅萬太夫詰合ニ付、是ヲ以、御在朝之藝世子迄、其筋ヘ右等之趣御內達ニ相成候樣御申越有之、尚尾侯、竝成瀨隼人等ト種々御談判有之候得共、御辭職被　聞召之　勅詔被爲受候ニ付テハ、御衣冠ニ無之テハ不相適、夫等之邊、外見ニモ相觸候事故、猶更御手間取ニモ相成、暮時頃、尾之尾崎八右衞門、御所ヨリ御請御催促トシテ來リ、殆困窮、依之、是ト行違ヒタル趣ヲ以テ、田中國之輔ヲ遣シ、無程御復命可有之段被　仰上置、夫ヨリ漸クニシテ　勅諚御受モ相濟、其他之御談ハ迚モ御整ヒ難被成ニ付、御辭職被聞召、其他モ於内府公ハ聊御異心不被成御坐候得共、旗下之人心、如何ニモ御收斂難被成ニ付、御請言上之儀ハ、暫御延引ニ相成候段御聞濟可相成、御取計ニ相成候樣トノ御談濟ニテ御退出、夫ヨリ直ニ御參　內有之、猶又下參與之面々ヘモ御談之上、御復命之儀被　仰込、御衆議席相立候テ被指上候、保任書ヲ指ス、右御書面之趣、總裁御始御廻覽之上、御聞濟相成候ニ付、尚又必近日　奏上之運ヒニ相成候樣、御受合之旨被　仰上、尾侯御復命ハ、何分爲御任被下候樣被　仰上、御復命之一段相濟、私云、尾侯御一處ニ御參　內ニ相成、御復命之御書面、不廉立樣之御文段ニ被仰上度ト、下參與之向ヘ御談相成處、西鄕、大久保之兩人、何分御領地御返上之一條不慥候テハ、實跡不相顯候得ハ、此程聢ト被仰上候半テハ、其詮無之トノ激論モ有之候得共、左候テハ、條城之沸騰ヲ增長シ、暴發難計、如何トモ不可爲之勢ニ立至ルニ付、公大ニ御奮激ニテ、百方御辨駁有之、漸クニシテ如前御請ニ及ハレタリ、尾侯ハ事之難ニ付、唯尾、越ヘ爲御任ニ相成候樣被仰上度トノ

御論ニテ、御合一ニ相成兼、愈御手間取ニモ相成候付、御銘々御存分之御願ニ可相成ト御引分レニテ、如本文、二侯兩端之御達シニ相成シナリ。

○慶明雜錄ニ云、十日、内府、前條二件之御受六ヶ敷、當人ハ　朝命ニテ候得ハ、則御受可仕候得共、會、桑竝旗下之下々ニ到リ、鎭靜出來兼、右兩條直ニ御請イタシ候得ハ、會、桑等如何樣暴動モ難計迚、内府モ別テ窮シ居候由之處、今晩、越侯於　御所、大久保、西鄕、後藤三人一同被召呼、德川家之儀、拙者親藩トシテ、卽今之形勢ニ立到リ候テハ、拙者辱クモ議定職蒙　仰、旁致省察候處、内府へ兩條之御請爲致候儀、拙者決心シテ說得候儀、其任ニ可有之存候付、是ヨリ直ニ二條城へ馳向ヒ、會、桑以下へモ死ヲ以テ說得イタシ、兩日中成功ナクンハ、再城ヲ退ストノ覺悟、各々如何相心得候哉、存意承度トノ御沙汰、三人謹テ、御下向之次第、幾重ニモ奉恐入候得共、至當之御英斷御血誠感服ニ難堪旨、被申上候處、今夜直ニ二條へ御向ヒ被成候ト之事。

○長門藩ノ老臣毛利親信、内匠、是夜、兵二中隊、ヲ率ヰテ相國寺ノ薩營ニ入ル。指華入京日載直ニ召テ、之ヲ慰勞ス。

多年勤　王、今度應召速ニ登京、　御滿足　思召候事、
警衞場所之儀ハ、追テ可有御沙汰候事。毛利元德家記

○元德家記ニ云、十日夜、毛利内匠御所被召出、中山殿口達、御書付ハ、翌日薩邸ヨリ被傳。

○土方雄永、疾ヲ以テ、上京延期ヲ請フ。土方雄志家記

○江戸市街中、劫盜横行スルヲ以テ、舊幕府、譜第諸侯ニ諭シテ、鎭緝ノ方ヲ陳セシム。

先達テ中ヨリ、市中ニオイテ徒黨ヲ結ヒ、押借强盜等有之、不穩候ニ付、夫々厚手當ヲモ被　仰付、種々御探索等モ有之候

得共、今以分兼不穩候ニ付テハ、　御留守中、京都表ヘ對シ不取締筋ニモ相聞心配被致候ニ付、市中一際嚴重ニ御取締被致度、就テハ見込之儀モ候ハヽ、今日中可申出トノ事ニ候。間部詮道家記

○本件、答書間部詮道ノ外見ル所ナシ、詮道答書モ亦、略シテ載セス。

十一日、禁內守衞兵ヲ除クノ外、戎服九門內ニ入ルヲ禁ス、又長門藩兵ヲシテ九門內外ヲ巡邏シ、且ツ正親町三條實愛、橋本實梁ノ衞兵ヲ出シ、因幡藩ヲシテ長谷信篤ノ衞兵ヲ出サシム。

尾州
越前
土州
薩州
藝州

右　御所御警衞被　仰付、戎服之儘、九門內通行被　免候得共、何分御達無之輩者可差留候事。藤堂高潔家記

○

長州

不容易非常御所置ニ付テハ、九門內外見廻リ、且緩急ニ任セ、精勤可有之　御沙汰候事。毛利元德家記

○

長州

正親町三條殿
橋本少將殿

右家ヘ爲警衛、人數十人ッ、可被差出候事。毛利元德家記

○

因州

長州

谷殿

右家ヘ爲警衛、人數十人宛可被差出候事。池田輝知家記

○諸藩兵ヲ以テ宮堂上家ノ守衛ト爲スモノ、下皆繁ヲ避テ達書ヲ載セス。

○榊原政敬、書ヲ上リ、德川氏ノ世臣タルヲ以テ、命令奏請、仍ホ其手ヲ經由セント請フ、報セス。

今般、御用被爲在候ニ付、　御召之趣謹テ拜承仕、不取敢御請奉申上置候、然處、私家之儀者、乍恐御承知被爲在候通、三河以來德川譜代之家來ニ御坐候、爾後　御直ニ御用奉伺候樣相成候テハ、尊卑ハ可有之候得共、主家ト比肩同列之姿ニ相成、累代重恩ヲ請候君臣之禮ヲ失ヒ、臣子之情ニオイテ、幾重ニモ難相忍次第、痛心當惑仕候ニ付、恐懼之至奉存候得共、深御垂憐被成下置、何卒是迄之通、都テ主家ヨリ執達相成候樣仕度、此段只管奉歎願候、宜敷御執成之程奉願候、誠惶頓首。

十二月　　榊原式部大輔

榊原政敬家記

○政敬家記ニ云、書面御落手迄ニテ、其後何等ノ御沙汰無之。

○舊幕府ノ麾下、及ヒ譜第藩士等、更革ノ事ヲ聞キ、二條城ニ集ル者一萬人、是夜訛言アリ、薩兵來襲スト、是ニ於テ、或ハ砲門ヲ城壁ニ穿チ、或ハ迎戰ノ備ヲ爲ス、德川慶喜、頗ル制馭ニ苦

ム、適マ松平慶永、城中ニ在リ、其變アランコトヲ慮リ、慶喜ニ說キ、松平容保、松平定敬等ヲ率ヰテ、姑ク大坂ニ赴カシメントス。

○春嶽私記ニ云、十一日巳刻御登城相成處、昨日之御次第何トナク漏泄シ、旗下之人心益奮激ヲ增進シ、一旦引取タル御譜代衆モ又々登城、營中處々屯集シテ、各大聲暴論ヲ發シ、就中講武所、劍槍隊抔ハ、今ニモ討テ出ヘキ勢ニ付、内府公、夫々頭領御呼出ニテ被仰聞シハ、我等割腹スト聞カハ、汝等如何樣トモスヘシ、我等カクテ在ラン限リハ、決シテ妄動スヘカラスト、嚴重之御諭告有之、閣老初要路之面々モ、鎭撫心力ヲ盡ス折柄故、御請之御談等ハ先ツ被指置、只々鎭定之御談ニ御加ハリ被成候得共、可然御好手段モ不被成御坐、兎角シテ夜ニ入ルヘキ運ヒニ付、過激輩、竝會、桑等、御城外ニ在ツテ暴發氣遣ハシキ向ヘハ、夜中御用之程モ難計候間、登城候樣被命、幕兵五千計、會兵三千計、桑兵千五百計、御城内ニ被籠置候事ト相成、今夜之處ハ先ツ危亂暴動ニハ及間敷候得共、明日ト相成候テハ如何可有之哉、此混雜中、關東ヨリ兵隊抔押出來候テハ、實ニ至難之事ト相成候得ハ、須臾、聲焰ヲ被避、御下阪被成候テハ如何アラン、阪地ニ候ヘハ、少シ遠隔致居候得ハ、御鎭撫モ被成安キ事情モ可有之候得ハ、左樣ニハ相成間敷哉等之御談ニ相成、亥刻比御退出ナリ、私云、此夜、薩兵御城下ニ迫ルノ浮說盛ンニナリ、誰人ノ指圖トモナク、大手廻リ之土塀ニ矢狹間ヲ切リ開ク之騷動アリ、監察衆是ヲ聞テ、喫驚シテ速ニ制止アリ、御門御門之通行、入ル者ヨリハ出ル者之檢查、殊ニ嚴密ナルハ暴擧ヲ恐レテナリ、城内之混亂、是等ヲ以想察スヘシ、會藩手代木直右衞門、雪江、十之丞ヘ對シテ云、薩兵既ニ城ヘ迫ルノ報知アリ、先ンスル時ハ人ヲ制ス、今討スンハ戰機ヲ失シテ敗ヲ取ラントス、如何思フト、血眼ニナツテ詰問ス、兩人、萬犬之吠聲決シテ實事アル事ナキ所以ヲ說テ、稍靜定シテ退キタルニ、暫クシテ又走リ來ツテ、薩兵今已ニ竹屋町通リヨリ押來ルト斥候之者ヨリ申出タリ、如何セント騷動スル故、前說ヲ反覆シテ、妄動シテ闕下ニ亂階ヲ引出シテハ、 朝敵モ同前タラン事ヲ辨論シテ、又漸ク點頭セリ、總テ城中之變動不測ニシテ、狂人ノ如クナル者多カリキ。

十二日、參與ヲシテ假ニ舊武家傳奏ノ事ヲ掌ラシメ、一乘院里坊ヲ以テ、本衙ト爲ス。

今度、武家傳奏御役被廳候ニ付テハ、差當リ候處、參與御役ニ於テ取扱ヒニ相成候、但シ石藥師以一乘院里坊、假ニ右役所ニ被設、且參與役所ト被稱候間、是迄武家傳奏取扱之廉々、右役所ヘ可申出事、

但、右掛リ之方々、

大原宰相
萬里小路右大辨宰相
長谷三位
岩倉前中將
橋本少將

右以名前可差出候事、

別紙之通可相達旨、參與衆被仰渡候、以上。

十二月十二日　參與役所

有栖川宮家記
藤堂高邦家記

○岩下方平、西鄉隆盛、大久保利通、丹羽賢、田中輔、辻維嶽、櫻井元憲、與四郎○安藝藩士久保田秀雄、中根師質、酒井忠溫、毛受洪、鹿之助○越前藩士後藤元燁、神山君風、福岡孝弟ヲ以テ、參與ト爲ス。

參與人體各注進之通被　仰付候、御改革之御時勢、萬事盡力可有精勤候事、

但、御政事規則相立候迄、一同辰刻參集、夜分ハ申合、四五人宿直可有之候事。

島津忠義家記
酒井忠溫履歷書

○岩下方平履歴書ニ、九日參與拜命、十二日本條ノ通仰付ラルト、蓋シ當時紛紜ノ際、九日口達、本日ニ至リ更ニ達セラレシモノナラン、辻維嶽履歷書ニ十一日トス、恐クハ十二日ノ誤ナラン。

○加藤明實、再ヒ京ニ至ル、命シテ、內侍所ヲ守衞セシメ、津和野藩兵ヲシテ建春門ヲ守衞セシム。〇龜井茲監家記

能登守儀、京都御警衞被　仰付有之、今般　御召ニ付、今日上京致候段、被遂　奏聞　御滿足　思召候、因茲卽刻參　內奉窺　天機、當時節柄ニ付、　敏之宮樣　警衞被　仰付候。

十二月

伺　天機、並敏之宮樣御警衞之旨相達候得共、可爲　內侍所御警衞、更被　仰付候事。

十二月十二日　　　參　　與

加藤能登守殿　加藤明實家記

○明實家記ニ云、前條御達相成、猶又後條ノ通御達有之ト、茲監家記、達書原文ヲ失ス。

○山內豐信、書ヲ上リ、更革ノ事、基本略定ル、宜ク速ニ戒備ヲ紓ヘテ、而シテ公議ヲ興スヘク、德川慶喜辭官獻地ノ事ハ、之ヲ松平慶永ニ委センコトヲ建議ス。

事ハ密ヲ以成ルノ理ニ因テ、僅ニ三四藩ト謀リ、宮門ヲ閉チ、兵衞ヲ置キ、非常ヲ戒メ、　朝廷大御變革御基本被爲建、攝關、兩奏國事掛共ニ廢セサセラレ、新ニ三職被立置、官武一途議事ノ意ヲ興シ候儀幾乎　御創業ノ功ニ齊シク、實ニ　御盛事不過之ト奉存候、然ニ右御發顯後、唯幕、會、桑而已之視ルノ形勢有之、既往ヲ不忘、聊更始一新ノ意ヲ闕キ、此儘ヲ以日ヲ重子候テハ、禍視ル所ニ反シテ不測ニ生スル事アレハ、注目偏ナルヘカラス、早ク議事ノ體ヲ起シ、召ノ諸侯大ナル者ヲ會シ、

其末タ來會セサル者ハ急ニ之ヲ召シ、且三職評議ノ規則ヲ建テ、徒ニ精神ヲ弊シ候儀無之樣、朝廷之意、實ニ公明正大ニシテ偏固ナラサル所以ヲ顯ハスヘシ、乍恐、堂上方ヨリ被仰下候筋、專會、桑暴擧ノ聞エヲ以、頻ニ警戒斥候等ノ事被命候ヘ共、多浮說流言ニ歸シ、空ク驚動スルノミト相成申候、是等ハ既ニ五六藩命ヲ請、兵備戒嚴ノ上ハ、進攻防戰共ニ相整候譯ニテ、御委任可然候、德川内府爵一等ヲ下リ、政府御入費ヲ差上候儀勿論、政權ヲ奉還、將軍職拜辭ノ上ハ、德川始諸侯共左モアルヘキ筈ナレトモ、從來ノ體裁ヲ以、急遽之ヲ爲ス、徒ニ暴動ヲ促スノミ、緩急斟酌アルヘキ儀ニテ、越前宰相ノ取扱ヒヘ御任セ被遊、第一議事公平之體、早々御顯シ肝要ト奉存候、此段若採用ニモ掛リ候ハヽ、則御評議所ニテ決ヲ奉仰候、誠恐誠惶頓首頓首。

丁卯十二月十二日　　松平容堂

山内豐範家記
水萍貽孫錄

○細川慶順、黑田齊溥、鍋島茂實、蜂須賀齊裕、有馬慶賴、南部利剛、丹羽長國、立花鑑寛、宗義達、溝口直正ノ老臣、連署シテ、速ニ戒嚴ヲ解キ、人心ヲ安シ、且舊攝政將軍以下、宜ク公議ヲ以テ、之ヲ處スヘキヲ建議ス。

先般、大非常之御變革被　仰出候儀ハ、既往之事柄一切被爲捨、萬事公平、正大衆議之所歸ヲ以テ、一途ノ御政道相立、速ニ神州治安ノ御鴻基ヲ被爲開候　叡慮之旨奉拜承、實ニ雀躍ニ堪不申、上下目ヲ刮テ　御沙汰ヲ相伺居候内、去九日ニ至リ、俄ニ　召之列藩兵士戎服之儘參　朝、就テハ何ト無ク　闕下騷々敷、何方モ驚愕罷在候處、先帝以來御當職ノ二條殿下ヲ始メ、宮家數十人除職ノ上、御門出入迄モ被差止、且將軍家モ除職解官、而已ナラス頓テ削封モ可被仰出趣相聞、右ハ必定御譴責之御譯モ可有御座哉、其儀ハ篤ト相辨不申候得共、將軍家祖宗以來世襲之大權被差上、只管御自責ヲ以、聖業ヲ被奉輔度トノ御趣意ハ、末々迄モ感賞仕候折柄、右樣之御所置被爲在候テハ、更始　御一新ノ御手初、他日如何樣之御都合

ニ成行可申哉、實ニ杞憂之至奉存候、依之、仰願クハ、差寄　御所内外戎服等之儀、至急ニ被止、一刻モ早ク人心鎮定ノ御沙汰ニ相成、隨テ攝政殿下ヲ初メ、御取扱ノ儀モ、公平正大、衆議ノ所歸ヲ以御施行有之、往々彌以御改革ノ御趣意、屹ト相貫候樣被爲在度、幾重ニモ奉懇願候、昨今形勢、所謂百尺竿頭一歩ヲ進ムルノ御時節ト奉存候間、重疊恐入奉存候得共、寸衷奉言上候、誠恐誠惶頓首百拜。

十二月十二日

松平阿波守内　蜂須賀信濃
松平美濃守内　久能四郎兵衛
細川越中守内　溝口孤雲
有馬中務大輔内　山村源太夫
南部美濃守内　西村久次郎
立花飛驒守内　十時攝津
丹羽左京大夫内　田邊市左衛門
松平肥前守内　酒井平兵衛
宗對馬守内　扇源左衛門
溝口誠之進内　窪田平兵衛

細川護久家記
有馬賴咸家記

○是夜、徳川慶喜、松平容保、松平定敬、板倉勝靜伊賀守備中松山藩主、食封五萬石、後高梁ト改ム○舊幕府老中、等、及ヒ部下ノ兵ヲ率ヰテ、大阪ニ赴キ、梅澤亮孫太郎○大目付、ヲシテ二條城ヲ守ラシメ、發後奏狀ヲ上ル、徳川慶勝、松平慶永モ亦、其之ヲ慫慂スルヲ謝ス。

防長御處置之儀ニ付、向々御尋之上、　叡慮之通被　仰出、異儀申立候族モ無之筋ニハ候得共、萬一異存之輩モ有之、騷動ニ及候儀モ候ハヽ、御幼君ニモ被爲在候折柄、自然右樣之儀有之候ハヽ、御驚動ハ勿論、　皇位モ如何可被爲在哉ト深被惱叡慮候御次第ニテ、鎮撫說得之力ヲ盡候樣、御沙汰之趣奉畏、其後　宮闕戎裝ヲ以御固之上、非常之御變革被　仰出候ニ付テハ、別テ鎮撫方深ク痛心仕候、兼々諸役人初、今日迄ハ精々相諭シ置候得共、何分多人數之鎮撫方深ク心配仕候、乍不

背誠意ヲ以尊　王之道心ヲ盡シ罷在候モ、徒ラニ下輩之粗忽等ヨリ水泡ニ屬候樣相成候テハ、此上深奉恐入候儀ニ付、右人心折合候迄、暫時大阪表ヘ罷越申候、右ハ全ク末々之モノ鎭撫致シ、　禁闕之下御安心之御場合ニ仕度迄之儀ニ御座候間、微衷之程御諒察被成下度候、尤伺濟之上出立可仕儀ニハ候得共、彼是手間取候内、萬々一輕輩之過誤ヨリ、國家之御大事ヲ引出シ候テハ却テ奉恐入候ニ付、直樣出發仕候儀ニ御座候、依之、此段申上置候、以上。

十二月十二日

徳川慶喜

徳川家達家記
徳川慶喜貫記

○

今度、内府政權奉歸候儀ニ付、旗下輕輩ニ至リ、心得違之者有之、自然　輦轂之下紛擾相成候テハ、　御幼帝ニモ被爲在候折柄、別テ奉恐入候間、人心居合候迄、暫時下阪、精々鎭靜行屆候上、速ニ上京、　御沙汰奉待候方可然カニ奉存候、會、桑二藩之儀モ一同召連、一ト先下阪、海程歸藩爲仕候筈御座候、右ハ伺濟之上發程可仕候得共、彼是ト機會ヲ失シ、萬一不慮之儀出來候テハ、　皇國之大害ニ付、不得止事、卽今發程爲仕申候、内府ニオイテモ、伺之上取計候心得候處、兩人ニテ機會熟察相勸申候、右之儀、全ク臣等兩人之取計ニ候間、　御譴責モ御座候ハヽ、謹テ奉甘受候心得候事。

十二月十二日

尾張大納言
越前宰相

別紙、
官位貢獻二事件ハ、下阪鎭靜次第、迅速申上候約定ニ御座候。

十二月十二日

尾張大納言
越前宰相

徳川義宜家記
春嶽私記

○義宣家譜ニ云、徳川慶喜政權奉還之後、領地之内返還スヘキハ至當也、然ルニ、其事未タ上達セサルヲ以テ、慶勝頻リニ勸進スレトモ、遲疑シテ決セス、是ニ於テ、慶勝二條城ニ到ル、此時會津、桑名ノ二藩ヲ率テ、阪城ニ退カントス、其行裝嚴整也、慶勝兵刄ノ際ヲ冒シテ入、板倉伊賀守ニ對シテ曰、宗家困極、名義不相立、慶勝モ身ヲ措處ナカラン、請、吾封内ヲ宗家不足ノ内ニ加ヘント、手書シテ是ヲ投ス、伊賀守不肯、遂ニ空ク歸ル、同十二日、慶勝、松平大藏大輔慶永ト謀リ、這般、慶喜ニ一旦大阪ニ下リ、鎭靜ノ時ヲ得テ入京奉命スヘク、且會、桑二藩モ共ニ下阪、海程歸藩スヘキヲ勸ムルヲ獻言ス。

○春嶽私記ニ云、十二日、公御所勞ニ付、御參　内御登城共ニ無之、尾侯御登城之處、愈御下阪ニ被決候付、其段　朝廷へ被仰上之儀、老侯へ御賴託之由ニテ、御屆書御持參、御參　朝ニ付、尙又參與ニハ評議之處、御屆捨ニテハ名義モ不穩ニ付、御談之上、尾、越二侯ニテ御下阪相成候樣、人心鎭定之爲御勸メニテ、其御運ヒニ相成候趣ニ御書取被指上之、別ニ官位竝貢獻之儀、人心居合次第早速可被　仰上御約定ニテ、御下阪之旨御書取、何モ二侯連名ニテ御達相成、内府公ニハ暮時過御出城、會、桑モ一處ニ被召連、淀堤通リ御下阪相成。

○慶明雜錄大久保利通二十八日ノ書柬ニ云、大御變革、十二日迄之形勢略申上置候通ニテ、其后之模樣ハ別紙差上候、徳川氏爲鎭撫下阪、未　朝命奉戴之實行擧リ不申候、尾、越兩公御周旋之處、正月元日之期日ニ御座候間、夫迄ニ結局相分可申候、外國へ徳川氏ヨリ返詞之書面等一見イタシ候得ハ、恭順之趣意相見得不申、眞實　朝命ヲ奉シ、　反正ニイタリ候事ハ無覺束被存申候、乍去、尾、越、土公之御趣意ハ、是非輕裝ヲ以テ徳川氏ヲ上京セシメ、兩事件御受之奏聞ヲナサシムルトノ御見込ニテ、此範、御達之御文面モ、尾、越之御願通、　朝廷ヨリ被相下候間、必定上京ト申場ニハ相成候ハント被伺候、朝命通リ無異議御受ニ相成候得ハ、重疊之事候得共、旁熟觀仕候得ハ、意底不可測候得ハ、必安心難仕事ニ御座候、固ヨリ會、桑歸國等之一事モ、無事ニハ治リ相付間敷カト愚考仕候、　朝廷之處、岩倉公御一人ニテ、餘ハ不足取、實ニ心痛之次第御座候、三條卿御上京相成、大ニ力ヲ得候事ニ御座候、是ニハ　朝廷一層ノ御氣力相增、御同慶此事ニ御座候、勤王之藩モ段段相起リ、戰ニ相成候テモ、　朝廷御兵力ハ十分ニテ、決テ懸念無御座候、外國之處モ、サトーへ寺島ヨリ引合セ、彼之口氣

モ舊幕ヲ助ケ候儀ハ無御座候、今日ニ相成候テハ、下一同之人心、今般德川氏右底之所爲ヲ惡ミ候樣相成、大幸之至御座候、兎角結局之次第ハ追々可申上候、平運丸就開帆、別紙二冊相添、大略之形行申上候、奉達御聽候儀、可然御取計可被下候、御伺旁、公私取交草々如此御座候、頓首。

十二月二十八日　　大久保一藏

蓑田傳兵衞殿

○別紙

一十二日迄ノ形勢、町飛脚ヨリ申上候通ニ御座候、同日、尾老公二條城御登城ニテ、御參　朝ニテ言上之趣、兩事件（原註、辭官、領地返獻之事、）於慶喜ハ謹テ　御内意之御趣奉拜伏候得共、臣下一同沸騰イタシ、鎭撫之所實ニ心痛仕候、仍テ尾州、越前兩人ヨリ、　禁闕ノ下ニ於テ聊ノ事ヨリ變動ヲ生候テハ、乍恐　主上御幼弱、殊ニ外夷相迫リ候砌、甚奉恐入候付、今晩慶喜、會、桑ヲ引下阪仕候、右ハ御伺之上可取計之處、大罪ハ兩人ニ引請候賦ニテ相決候トノ御事ニテ、御斷書、並下阪之上ハ、早々鎭撫、兩事件屹度奏　聞相成候儀ハ、御受トノ御紙面二通御差出、被　聞食置候ト被　仰出候事、

一十二日夜中、德川氏會、桑ヲ引、上下大勢御當地發足、下阪相成候事、

一下阪之儀、大ニ謀略有之、華城ニ根據シ、親藩譜代ヲ語ラヒ、持重ノ策ヲ以テ五藩ヲ離間シ、薩ヲ孤立ノ勢ニナシ、隱ニ朝廷ヲ謀リ挽回セントノ密計ニ候由、異說紛々タリ。

○別紙、各條下ニ分收ス。

○桑名藩士中村武雄手記ニ云、十二月九日ニ至リ、薩藩遽ニ兵ヲ以テ　禁闕ヲ擁シ、二條殿下ヲ始トシ、前將軍、會津侯、我公ニ至ル迄、盡ク朝參ヲ禁シ、諸門之御守衞迄盡ク之ヲ代ヘ玉ヘリ、麾下有志ノ士、會津我藩等憤怒ニ堪エス、已ニ三百年ノ政權ヲ解キ、一切天下ト之ヲ共ニスルノ公論ニ基キ玉ヒシヲ、今日ニ至リ薩、土、尾、藝、越等ノ數藩ヲ以テ天下之事ヲ處シ、數年勤勞ノ人々ヲ無殘ニ處セラレシハ、吳々モ遺恨ナリ、是ハ全ク一二權謀家ノ所爲ニ出テ、究竟我等ヲ死地ニ措サレ

ハ不已ノ意ナルヘシ、如此反覆變詐ノ處置ニテハ、天下興隆抔思モ寄ラス、此上ハ斷然一決シ、君側ノ奸ヲ掃ヒ、當初至公ノ意ニ基カサレハ、　神州ノ大體決シテ定ルヘカラストテ、迅速干戈ヲ起シ、君側ヲ清メント奮ヒシカトモ、前將軍承引シ玉ハス、十日ニ至リ、前將軍及ヒ會、桑兩侯京師ヲ去リ、各、國ニ就クヘシトノ命アリ、案スルニ事實誤アリ 關東方有志ノ人々申シケルハ、兵ヲ用ル機アリ、今般無殘ノ御處置ヲ蒙リ、我カ兵怒ルコト火ノ如シ、コノ時ニ當リ益其氣ヲ振ヒ、勝敗ヲ一擧ニ決シナハ、大功必ス成ルヘシ、一度京師ヲ去ル時ハ兵氣沮喪シ、再ヒ其鋒ヲ用ユルコト難カラン、今日實ニ得難キノ機ナリト痛論ニ及ヒシカトモ、前將軍亦從ヒ玉ハス、十二日ノ夜、逃ルカ如ク京師ヲ去テ浪華ニ下リ玉ヒ、我公、會津侯、板倉侯、盡ク隨從セラレ、獨リ梅澤孫太郎ニ步兵原記、字闕、大隊ヲ添テ、二條城ニ遺シ置カレタリ、元帥已ニ下阪ニ及ヒシカハ、餘藩ノ兵如何トモナシ難ク、十三日、遺恨ナカラモ京師ヲ出テ浪華ニ赴ケリ。

○附錄加藤明實家記ニ云、十二日、會、桑之家族共、京都邸引拂候樣被　仰付候ニ付、道路ニ迷ヒ、追々東海道ヨリ歸國致候者續々不絕、荷物運漕等頗困難之樣子ニ御座候、此日、德川譜代留主居之者、洛東月輪ヘ集會、異變之節、二條城ヘ援兵差出可申談判有之、右ニ付、斥候之者差出置候テ、其旨老中迄相屆置度之由相談有之ニ付、能登守儀ハ　天朝幕府ヨリ被仰付、御陵警衞致居候ニ付、素ヨリ小藩少人數、迚モ其手當出來不申旨相謝申候。

○前田慶寧、書ヲ上リ、大兵ヲ領シテ、都下ニ居ラハ、誤テ事ヲ生センコトヲ恐ル、ヲ陳シ、京ヲ發シテ國ニ赴ク、是日、久松定昭モ亦大阪ニ赴ク。○久松定謨家記

私儀、今度依　召早々上京可仕處、其以來之病氣、不得止御猶豫奉願置候通ニ御座候處、少々快方ニモ相向、誠ニ不容易大事件之儀ニ付、押テ前月二十九日國許發途、當月九日著京仕、直樣傳奏議奏ヘ以使者御屆申上置候、然處、同日、大御變革被仰出候御樣子ニ付、是迄之御役々ヲモ御廢止ニ相成候由ニテ、萬端伺等モ可仕、手筋モ承知不仕、當今形勢ヲ見聞仕候處、德川內府ニ於テハ、被　仰出之趣奉畏可罷在候ヘトモ、於家臣主意ニ反シ候者可有之哉ニ承候ニ付、　御幼君之御事ニモ

被爲在候ヘハ、萬一心得違之者出來、於　闕下動搖可仕儀モ可有之候、右樣ニ相臨候時ハ如何ニモ奉恐入候ニ付、此段厚說得ヲ加ヘ、先暫下阪之儀申勸、將亦私儀多人數召連居候ニ付テハ、自然心得違ノ者相生シ可申哉、然ル時ハ、先以奉對　朝廷恐縮奉存候次第ニテ、折角　朝規御一新之折柄、滯京ハ詮モ無之、却テ御爲ニモ不成儀ニ奉存候、旁、先不取敢一日國許ヘ引取申候、重テ御用ノ節ハ、早々上京可仕候ニテ可有御座候、此段可然樣御取扱宜言上之程御賴申候、以上。

十二月　　加賀宰相中將

前田慶寧家記

○舊幕府、間部詮道ノ敦賀港守衛ヲ罷ム。

御改政之折柄ニ御座候得ハ、兼テ被　仰付置候越前國敦賀表海岸御警衛人數、一先引取可申哉、此段奉伺候、以上。

間部下總守家來

十二月　　大鄕卷藏

○舊幕府批紙

伺之通可相心得候。

間部詮道家記

○詮道家記ニ云、十三日、於京地板倉伊賀守ヘ出スト、然ルニ、十三日ハ伊賀守既ニ京師ヲ去ル、故ニ本日ニ收ム。

十三日、正親町公董、烏丸光德侍從、ヲ以テ參與ト爲ス。

參與職被　仰付候事。

各通　正親町少將

烏丸侍從

正親町公董事蹟
烏丸光德事蹟

○山城國取締松平信正圖書頭○丹波龜山藩主、食封五萬石、青山忠敏、本多康穰ヲ以テ京都市中取締ト爲シ、市尹ノ事

ヲ掌ラシム、是日、九門ヲ除クノ外、悉ク禁内ノ守兵ヲ撤シ、更ニ薩、尾、藝、土ノ四藩士ヲシテ建春、建禮、清所、朔平四門ヲ守リ、岡山藩兵等ノ蛤門守衛ヲ罷メ、長門藩兵ヲシテ之ニ代ラシメ、其九門内外巡邏ヲ罷ム。

○松平信正等家臣ヘ口達

今般、徳川氏奉歸　朝權就テハ、町奉行役所等引拂相成、今日之處、　輦轂之下民百姓共不知所歸向、擾亂不大方候趣可憐之至ニ候、追テハ　御新政ニテ、京兆尹等被差置候樣御運ニモ可相成候得共、方今、先假リニ其任無之テハ萬民不安堵之儀、依之、從來町奉行所ニテ取扱候通、公事訴訟ハ勿論、萬端各三藩ヘ被　仰付候間、當地町奉行役ト相心得、三藩申合、何分ニ無忌諱、時宜ニ所置有之候樣被　仰出候、尤、今日之處、一刻モ所歸向無之テハ、萬民如何計不安心可愍之至、此上動搖モ難計候ニ付、今夜中ニモ、　輦轂之下ヘ右之段被　仰渡、萬民安堵候樣ニトノ　叡慮ニ付、銘々共ニテ是非共御請可申上候、御請之上ハ、卽時御觸達ニモ可相成、左スレハ叡慮ニモ相叶可申事。青山忠誠家記

○本條、口チ記スルチ以テ、三家記スル所詳略一ナラス、忠誠家記、稍詳ナルチ以テ之チ採ル。

○

去ル九日、被　仰付候御警衛之向ハ勿論、在來御警衛於御場所モ、九門之外悉被　免候得共、今度改、

日御門	土　州	御臺所御門	薩　州
南門	尾　州	朔平御門	藝　州

右之通、御警衛之儀被　仰付候事。

十二月十三日　淺野長勳家記　徳川義宜家記

○諸藩守衛罷免ノ達書

薩州

一日ノ御門並穴門四ヶ所内外　一御臺所御門並北之穴門二ヶ所内外
一參内殿並奏者所等之前　一御座檐下詰
右御守衛之儀被免候間、明朝人數可引拂候事。
十二月十三日　島津忠義家記

○

尾州

一御座候下詰　一九門内堂上亭裏警衛
右御守衛之儀被　免候間、明朝可引拂候事。
十二月十三日

尾州

日御門前御守衛之儀被　免候間、明朝人數可引拂候事。
十二月十三日　德川義宜家記

○

藝州

一准后御門内外　一准后局口事門
一朔平御門並東西穴門二ヶ所内外　一御座所檐下詰
右御守衛之儀被　免候間、明朝可引拂候申。
十二月十三日　淺野長勲家記

○　土州

一公家御門竝南北穴門二箇所內外　一南門竝東ノ方穴門二箇所內外
一局口中ノ門ノ前　一御池庭四枚戸同御文庫前切戸
一蛤御門會津固メ被免跡引替　一御座檐下詰
右御守衞ノ儀被　免候間、明朝引拂候事。
十二月十三日　山內豐範家記

○春嶽私記、九日ノ條ニ、御警衞十四日ニ至ツテ解嚴ト記シ、本日、罷免ノ達書ヲ載セス。

○　紀州

日御門前御守衞之儀被　免候間、明朝人數可引拂候事。徳川茂承家記

○茂承家記ニ云、舊幕府ノ令ヲ以テ、丙寅年ヨリ服事ス。

○　阿州

南門前御守衞云々。同上文、蜂須賀茂韶家記

○茂韶家記ニ云、甲子歲正月二日、傳奏ヨリ達ニヨリ守衞ス。

○　明石

朔平御門前御守衞之儀被　免候間、明朝人數可引拂候事。

○

十二月十三日　松平直致家記

中川修理大夫

日御門前北御守衛之儀被　免候間、明朝人數可引拂候事。中川久昭家記

○久昭家記ニ云、本年七月朔日、傳奏ヨリ口達ニヨリ守衛ス。

○

各通　備州

池田丹波守

十津川

蛤御門御守衛之儀被　免候間、明朝人數可引拂候事。

十二月十三日

追テ、跡御守衛、長州ヘ被　仰付候間、同家ヘ可引渡候事。池田章政、池田政禮家記 十津川郷兵出張事錄

○

長州

御築地内外見廻之儀被　免、蛤御門御守衛被　仰付候間、明朝人數可差出候事。

十二月十三日

追テ、是迄備前十津川ヘモ被　仰付有之候間、右人數ニ可引替候事。毛利元德家記

○

高松

新在家南御守衛被　免候間、明朝人數可引拂候事。松平賴聰家記
○賴聰家記ニ云、本年四月、舊幕府ノ令ニヨリ守衛ス。

○

松浦肥前守

御臺所御門御守衛被　免候間、明朝人數可引拂候事。
○本條、松浦詮家記、十四日朝引揚候樣御沙汰ト記シ、達書ヲ逸ス、故ニ他ノ文例ニ據テ之ヲ補入ス。
○小出英尙家記ニ云、准后殿後警衛ノ事、本日英尙參朝、直ニ命セラレ、十四日曉、解兵ノ口達アリ。

○植村家保老臣ノ請ヲ以テ、命シテ其藩兵ヲ召サシム。

覺書、

此度、駿河守儀、在江戸、且所勞ニ付、名代内藤伊織以下之者上京罷在候、然ル處、不容易御模樣奉伺上奉恐入候、不取敢在京之者、左之通御用伺仕候、猶人數可召登次第　御沙汰奉伺度、御取扱之程偏ニ奉希上候、以上。

十二月十三日

内藤伊織
寺田織衛
草川太忠
村田丈四郎
濱田半次

植村駿河守　植村家壼家記

○達書

在府中所勞ニ付、重臣之者速ニ登京、尙又人數召登之儀伺出候段、神妙ニ被　思召候、事務追々靜謐ニハ候得共、相應之人數可致登京、御用之儀ハ追テ可有　御沙汰候事。植村家壺家記

○薩、尾、藝、越、土五藩ヲシテ仁和寺宮ノ衞兵ヲ出サシメ、又安藝藩ヲシテ中山忠能ノ衞兵ヲ出サシム。○島津忠義、淺野重長勳、山內豐範家記

○久留島通靖、伊豫守○森藩主、食封一萬二千五百石、京ニ至リ、其赴召遲緩ヲ謝ス、秋月種殷長門守○高鍋藩主、食封二萬七千石、疾アリ、其子種樹右京亮、ヲシテ代リテ京ニ至ラシメント請ヒ、秋月種殷家記 一柳末德、再ヒ上京遲延ヲ謝ス。○一柳末德家記

臣通靖

誠恐誠惶頓首再拜、臣通靖、先般　勅命ヲ奉シ、十一月二十四日發途仕、今日著京仕候、十一月之期限被　仰出候得共、延引仕候段深ク奉恐入候、敢テ遷延濡滯仕候ニハ無御座候得共、秋以來不快ニ罷在、且東西往復海路百數十里、風波ニ被阻候、彼此ニテ延引仕候段、按スルニ脫文アラン、臣通靖幼弱之身、闇劣之材、加之、小藩微力、御用ニハ相立申間敷候得共、先般　勅命有之且非常之節ハ、單身ニテモ　宮闕御守衞之末ニ罷在度微衷至願、不取敢上京仕候、臣通靖、誠恐誠惶頓首敬白。

十二月十三日　久留島通靖

久留島通靖家記

○種殷稟請書家記ニ、十一月十八日ト署シ、上達ノ日ヲ失ス、故ニ道程ヲ計リ、此ニ類集ス。

○鷲尾隆聚、昨夜高野山ニ到ル、高野山出張概略 是日、僧侶ニ告諭シ、又十津川鄕ニ牒シテ、之ヲ徵集ス。

方今時勢不容易切迫ニ付、鎭靜ハ勿論ニ候得共、若對　朝廷反逆之賊徒於有之ハ、有志之輩ヲ率ヰ征伐、可抽忠勤趣、重キ蒙　勅命出張致候間、於當山之衆徒モ、奉　勅可被盡誠忠候事。

丁卯十二月　鷲尾侍從

高野山總分中各通

同　學侶中

同　聖方中　（高野山出張概略）

○

方今時勢切迫ニ付、鎭撫ハ勿論、對　朝廷反逆之賊徒於有之ハ、有志之輩ヲ率ヰ、速ニ征伐、又可抽忠勤趣、重キ　勅命ヲ蒙リ出張致候間、鄕中之面々、神速ニ高野山迄參著可有之候事。

丁卯十二月十二日　鷲尾侍從

十津川鄕

諸士中

別紙之通相達候條、當十七日迄ニ參著可致候事。（高野山出張概略・十津川鄕兵出張事錄）

○十津川鄕兵出張事錄ニ云、鄕中ヨリ六百人繰出ス。

復古記　卷九　終

總括兼纂修

一等修撰　臣長松　幹

校勘

一等修撰　臣　長　　　　　　　　　　　　　　　　熒
一等協修　臣　四　屋　恒　之
校　　錄
一等書記　臣　澤　渡　廣　孝
繕　　寫
二等繕寫生　臣　小　川　長　和
二等繕寫生　臣　小　島　　春

復古記　巻十

慶應三年丁卯十二月十四日ニ起リ十七日ニ至ル

○十二月

十四日、大政復古ヲ列藩ニ布告シ、各人材ヲ選擧セシム、且朝廷ノ徳川氏ニ於ケル、舊ニ異ナルコト無キヲ諭ス。

徳川慶喜云々。九日、宮公卿ノ諭文ニ同シ、但三職人名、及ヒ和宮ノ二條ヲ除ク、

右之通、御確定被　仰出候就テハ、六十餘州之大小藩ハ申ニ不及、陪臣吏卒之末ニ至迄、御趣意厚相心得候様　御沙汰候事、

御受之儀、明十五日、参與御役所へ可申出候事、

別紙御布告ニ相成候御趣意ハ、全　皇國御維持被遊候譯ニテ、　朝廷、徳川家之御中、少モ異事被爲在候儀ハ無之候間、其段可相心得候、

但、人才選擧之儀ハ急務ニ付、早々可申出候事。藤堂高潔家記　六鄕政鑑家記

○本件、嵯峨實愛手記ニ、諸藩へ被仰渡一紙、宮公卿へ被仰渡同文ニシテ、右之通云々、以下右之通御確定被仰出候ニ付テハ、六十餘國ノ大小藩ハ申ニ不及、陪臣吏卒ノ末ニ至ル迄、厚キ御趣意ヲ會シ、國體ヲ辨ヘ、　朝廷ニ服事スベキハ勿論ニ候、萬一大義ヲ謬リ、私恩ヲ執シ、違背ノ輩有之ニ於テハ、叛人ノ黨類可爲同様候、但シ向後、徳川家ハ諸藩ニ被列候間、家門譜代ノ者共、疑惑ヲ生シ、心得違無之様　御沙汰候事ニ作ル、然ルニ、諸家記載スル所皆本條ニ同シ、下ノ春嶽私

記ニ據テ之ヲ考レハ、蓋實愛手記ハ原案ニシテ、本條ハ改定セシモノナラン、又毛利元德、松平直致、藤堂高邦等ノ家記ニ、十五日トシ、加藤明實家記ニハ、十七日ニ收メ、三職人體ノ一條ヲ加フ、或ハ兩日ニ發シ、或ハ輪達ヲ以テ遲延セシモノナラン。

○附錄春嶽私記ニ云、十三日、三職巳ノ刻之參集ナリシカ、諸務多端ニシテ、夜三更ニ及ンテ漸議事始マレリ、是ハ專ラ此度御變革御基本之御趣意可被仰出儀ニ付、御布告御文面之評論ナリ、紛々擾々五更ニ近クシテ、稍相定リ、明日御發表ニ相決セリ、私云、當時　朝廷之體態、官家之議定、參與ハ奧向ニ參集、武家之議定、參與ハ表之方ニ參集、各別ニ庶務ヲ談論シテ、大凡談寄ニ相成タル時、官武一席ニ會合シテ評議スルヲ、議事ト唱ヘタリ。

○禁門解嚴、及ヒ市中取締巡邏ヲ置キ、取締ヲシテ假ニ市尹ノ事ヲ掌ラシムルヲ都下ニ布告ス、又取締三藩ニ命シテ、防火ノ事ヲ兼シメ、大洲、平戶、津和野、水口、園部、高取ノ六藩兵ヲシテ市中ヲ巡邏セシメ、水口藩兵ノ內侍所守衛ヲ罷ム。

今度、御一新大變革ニ付テハ、非常御手當ノ爲メ、禁門警固之儀、列藩へ被　仰付、兵士戎服ノ儘ニテ被　召入候得共、素ヨリ干戈ヲ被爲動候御趣意ニハ毛頭無之候上、兼テ御洞察之通、彌以平穩ノ次第ニ付、卽今日ヨリ總テ解兵被　仰出候間、各安堵致シ、產業ヲ營ムヘク候、且奉行所之事、追々御取調ニテ、新規御取立之筋モ有之候得共、卽今之處、靑山左京大夫、本多主膳正、松平圖書頭等へ、市中取締之儀被　仰出候間、訴訟以下每事、右三藩へ可申出事、

一前文三藩ニモ、先假ニ是迄ノ町奉行所ニ於テ、萬事取計致候事、

一加藤遠江守、加藤能登守、松浦肥前守、小出伊勢守、植村駿河守、龜井隱岐守、右六藩へ市中鎭撫ノタメ、見廻ノ儀被　仰付候間、爲心得申達候事。

十二月十三日　細川護久家記 戊辰新聞記

○有栖川宮家記ハ、本文第一條ヲ略シ、松平圖頭等三人ヲ署シ、右卽今市中取締云々ニ作リ、第二條ヲ但書ノ體トシテ、本文、三藩先假ニ是迄云々ニ作リ、第三條ナシ。

○取締三藩ヘ口達

京都御火消被　仰付、右勤向之儀ハ、是迄之通相心得候樣可致候、且又別紙之面々、洛中洛外見廻リ役被　仰付、心得迄ニ別紙相渡候間、申談候樣ニト被　仰渡。

別紙、

洛中洛外見廻リ役被　仰付候面々。

龜井隱岐守	加藤遠江守
加藤能登守	松浦肥前守
植村駿河守	小出伊勢守

青山忠誠家記

○

加藤遠江守	加藤能登守
松浦肥前守	小出伊勢守
植村駿河守	龜井隱岐守

右市中見廻リ之儀被　仰付候、御時節柄、亂妨之輩不少之趣モ相聞候ニ付、六藩申合、嚴重取締見廻リ可致事、

尙以、是迄町奉行所ニ於テ取計之儀、且市中取締等、篠山、龜山、膳所等ヘ被　仰付有之候間、心得迄ニ申達置候、委細之儀ハ參與役所ヘ罷出、可問合候事。　小出英尙家記　植村家壺家記

○附錄伺書

此度、市中見廻之儀被　仰付難有奉畏候、然處、只今詰合候人數之儀ハ、當用相辨候迄ニテ、至テ少人數之上、晝夜之守休モ無御座候テハ難相勤候ニ付、一度侍五六人、足輕十四五人宛位ハ、指廻候儀モ出來可仕候得共、右樣少人數ニテ、疎忽ニ御請申上候テハ、取締方行屆兼可申、第一　御威令ヲ相損候樣成行候テハ、重々奉恐入候儀ト深懸念仕候、就テハ無程肥前守ニモ著京可仕、然ル上ハ、乍微力、聊之人數ハ召連候ニ付、夫迄之處、御猶豫被　仰付候儀ハ何分可有御座哉、尤少人數ニテモ不苦儀ニ御座候ハヽ、精々相勤可申奉存候、右之次第ニ付、此段奉伺候、以上。

松浦肥前守家來

十二月十四日　　熊澤右衛門八　　松浦詮家記

○詮家記ニ云、十五日、參與御役所ヘ御呼出、少人數ニテモ不苦、早々見廻候樣御達有之。

○

水口藩

一內侍所

右御警衛之儀被免候間、明朝人數可引拂候事。　加藏明實家記

○戸田忠至、及ヒ溝口貞直、孤雲、津田信弘山三郎、肥後藩士、竝ニヲ以テ、參與ト爲ス、忠至之ヲ辭ス。

參與職被　仰付候事。　溝口孤雲履歷書　津田信弘履歷書

各通　溝口孤雲

津田山三郎

○信弘履歷書、十六日トス、今嵯峨實愛手記中、十四日晚、仰付ラルノ文ニ據ル。

○忠至家記ニ云、參與ノ命、中山忠能口達、辭表ハ原記ヲ失ス。

○十津川郷兵ヲシテ建春、宜秋、清所三門ヲ守衛セシム。

十津川郷士

日御門　唐御門　臺所御門

右、御警衞被　仰付候事。

十二月十四日　十津川郷兵出張事錄

○是ヨリ先、戸田忠至、宮中度支ノ事ヲ管ス、是ニ至リ、舊ニ依テ之ヲ掌ラシム、時ニ府庫匱乏、度支急ヲ告ク、忠至、乃大坂ニ赴キ、徳川慶喜ニ説テ、之ヲ供給セシム。

○戸田忠至家記ニ云、十三日、御用召ニ付參朝ノ處、元來、宮中御臺所向御用奉仕候儀ニ付、引續是迄ノ通相勤候樣、長谷殿御達有之、忠至其任ニ堪エサルヲ以テ奉辭候處、强テ御請申上候樣被仰渡、時ニ宮中日々御用途差湊候處、金子御手薄ニテ、實ニ御差支之儀恐懼ニ不堪、依テ此上ハ慶喜ヘ申談、出金爲致候ヨリ外手段無之ト決死覺悟、十四日出立、翌十五日朝著坂、直ニ城中ヘ罷越候處、中々出金等之義難申出形勢、言語ニ述盡シ兼候、夫ヨリ慶喜ヘ面會、宮中御差支之稜、且慶喜實父以來尊王之儀等申述及談判候處、於慶喜ハ御差支之稜奉恐察、忠至申分承知候得共、總體人氣騷立居候間、出金之手筈六ケ敷候得共、再三再四、御差支之稜申談、且　孝明天皇御一周忌御祭典モ、出金無之候テハ難被爲行、實ニ恐懼之次第、具ニ申談候處、金子出方、勘定奉行星野豐後ヘ可申聞旨、慶喜答ニ付、同人ヘ申談候處、小堀數馬方ヘ收納金可有之ニ付、右金子爲差出、如何樣ニモ御賄可仕樣ニト、豐後申聞候ニ付、漸金策相整、其夜乘船歸京仕、右之段小堀數馬ヘ申達、追々出金爲致、丁卯十二月ヨリ辰正月御出兵、御用途多端之所、無御差支相勤申候。

○純仁親王、書ヲ上リ、朝堂ノ上、上下尊卑ノ禮分ヲ正フシ、新進ノ藩士、宜ク爵位ヲ賜フヘキ

ヲ建議ス。

大政樞要之三職ト雖モ、上中下之有差等、十分定衆議上等之裁斷決定候義當然候、ヒソカニ顧ニ、下等ニ於テ上等跋扈之機相見エ、深憂ル處候、雖然、不肖純仁、突然還俗、重職蒙仰候得共、是迄不在之官職未熟之儀、其弊ヲ正シ教諭スル事不能、其事不止、追々增長ニ於テハ、三職中自然不平相生シ、遂ニ以御失體之基ト可相成ト深恐入候、禮義不正、則諸事輕易ニ相成、既ニ過日以來、御評議之節非常之儀、殊ニ參與之列ト雖モ、諸藩布衣士等御所へ被爲召儀ハ、全一時之權道ト推知候得共、此儀流弊ニ被相成候テハ、朝廷御闕典、千載青史ヲ穢シ、實ニ歎息之至リ、併人才御選擧之儀ハ、國家之大幸不過之候間、相當之官位御推任敍度爲在度、夫迄之所、尊卑混雜不被爲在場所ヲ以、即今假ニ議事所ヲ被設候樣致度候、何分諸事恭謹、朝廷之尊ヲ不失候樣、嚴重御沙汰之儀所願候、此段奏聞願入候、謹言。

十二月十四日　純仁

晩翠樓叢書

○戸田氏共家臣、重臣京ニアル者ナキヲ稟シ、本日ノ召命ヲ辭ス。

此度被爲　召候處、采女正儀兼テ御屆申上置候通、所勞ニ付、上京不仕候、依之、去ル八日參上仕候重臣之者、參上可仕之處、幕府へ相伺、一昨十二日夜召連候人數共歸藩仕候、右ニ付、重臣代之者參上可仕筈ニ御座候得共、當節病氣ニテ平臥罷在候間、無據不參之儀御斷奏申上候、此段御屆申上候、以上。

戸田采女正家來

十二月十四日　吉田園平

戸田氏共家記

○氏共家記ニ、右披露ニ及候處、重臣代ノ心得ニテ、御布告拜見被仰付トアリ。

○鷲尾隆聚、書ヲ徳川茂承ニ遣リ、内旨ヲ奉シ、兵士ヲ糾合シテ、不虞ニ備フルヲ報ス。

去ル九日、　王政復古之大號令、斷然　天朝ヨリ被　仰出候、然ルニ近來昌平驕慢之舊習甚敷、眼前之小節ニ泥滯シ、　皇國臣子之大義ヲ忘却シ、私意之僻論ヲ主張候族不鮮候ニ付、萬一　御國體之大復古ヲ拜見致シ候時ハ、管見之輩愕然ニ不堪、如何ナル輕擧ニ及ヒ、　朝廷ヲ奉危候モ難計候、依之、深ク被惱　叡慮候テ、今般、鷲尾侍從殿重キ　御沙汰被爲蒙、當山ヘ御出張ニ相成、爲　天朝嚴重ニ不虞之備ヲ被整候、且十津川擧郷ヘモ御同樣、重キ　勅命ヲ被爲下候故、首トシテ多人數應シ奉リ、御守衛申上、尚又追々致戮力、　王事ニ勤勞可仕旨誠意ヲ表シ候、勿論鷲尾殿被統候兵士ニ於テハ、一人モ干戈ヲ妄動シ、人民ヲ令惱亂候樣之儀ハ爲致不申候間、必無疑念御安心可被成候、若御懸念ニ御坐候半ハ、斷然　朝廷ヘ御奏聞有之度、左候得ハ御係念之廉モ御冰解可被成ト奉存候、先ハ不取敢此段御報告申上候、頓首不具。

丁卯十二月十四日

鷲尾侍從殿

執　事

紀伊中納言殿

御重役衆中

高野山出張概畧

○答書

去ル九日、王政復古之大號令被　仰出候處、僻論主張、如何ナル輕擧ニ及ヒ候族モ有之間敷哉ニ付、今般高野山ヘ御出張、不虞ニ御備、無妄ニ干戈ヲ動シ候樣之儀ハ無之、委細御申越之趣承知致候、迅速中納言ヘ可申達候、御誠意御勤勞之次第、定テ滿足ニ可被存候、依之、御報如斯候、恐々不備。

十二月十五日

紀伊中納言内

小　林　文　八

鷲尾侍従殿

執事御中　高野山出張概畧

○舊幕府、譜第諸藩ニ令シ、城中蓄米所謂城詰用米石高ニ課シテ、各藩ニ儲蓄シ、以テ江戸城ノ不虞ニ備フルモノ、ヲ江戸ニ運輸セシム。此事遂ニ果サス、

今般、城詰御用米有高不殘、江戸廻シ之上、淺草御藏納被　仰付候間、當時圍有高早々取調差出可被申候、尤御米廻シ方儀ハ、御勘定所ヘ可被申上候。

別紙、

一城詰御用米之儀、淺草御藏納之積リニ候間、手船又ハ雇船ヲ以相廻シ候向ハ、廻船運賃等被下候之間、早々取調可被差出候、尤廻船付方等差支ノ分ハ、江戸、大坂其外最寄ニテ、廻船積湊ヘ差向可申候間、御米積湊ヘ差出置候様可被致候事、

一御米津出無之場所、又ハ運輸不便之地所ハ、其場所之相場ヲ以、石代金納イタシ候歟、兩様之内勝手次第可被申立候、

一右御用米之内、先般歩通ヲ以江戸廻シ相成候得ハ、殘石之分、不殘江戸廻シ之積リニ候間、猶又石數取調、早々可申立候事。　本多正憲家記　松平信古家記

十五日、三職朝參議事ノ時限、及ヒ參與上下ノ稱ヲ定ム。

一總裁以下巳刻參集、午刻評議之事、

一參與之儀、自今堂上向、上ノ參與ト稱シ、諸藩士、下ノ參與ト稱候事。　島津忠義家記　春嶽私記

○純仁親王ヲシテ仁和寺宮ト稱シ、初メ一ニ御室宮ト稱ス、嘉彰ト復名セシム。復名ハ翌日ニ在リ、

仁和寺宮

更ニ稱號被仰出右ノ如シ。　東伏見宮家記

○

慶應三年十二月十六日　宣、
純仁親王
復名嘉彰

職事長邦
嵯峨實愛切紙留
東伏見宮家記

大原宰相

○參與大原重德ノ請ヲ允シテ、其職ヲ罷ム

參與職、依所勞辭退被　聞食候事。
五辻安仲手記
大原重實私記

○三職局叢書ニ、十四日、參與職辭退ノ原書アリ、災ニ罹テ之ヲ失ス。

○市中取締三藩、吏員ヲ藩ヨリ召シテ、其衙ヲ開カンコトヲ稟ス、命シテ、現員ヲ以テ、速ニ事ヲ執ラシム。

今度、市中御取締、公事訴訟等、萬端是迄町奉行相勤來候通、銘々共三手ニテ心得候樣被　仰出候ニ付、早速在所表ヘ申遣、掛り役人共爲呼登候上、手都合次第、役所相開候儀ニ付、先夫迄之處、雜色共役所ヘ爲相詰申候、此段御屆申上候。

十二月十五日

本多主膳正家來　大江新右衛門
青山左京大夫家來　坂東篤之助
松平圖書頭家來

皆川誠藏　青山忠誠家記

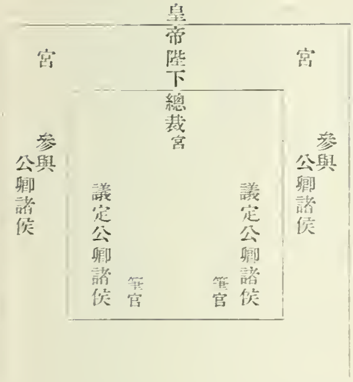
○批紙

市中御取締奉行所之儀ハ、大事件ニシテ、民命ニモ關係致シ候儀ニ付、早速被　仰出候事故、暫モ難差置候之間、即今在京之重役以下相詰、雜色共ニモ召寄、早々役所相開、諸事可取計候事。青山忠誠家記

○參與後藤元燁、福岡孝弟等、上下議事所、及ヒ諸制度ノ條議ヲ上ル。

一大政改革之事、
　但、王政封建中、郡縣ノ意ヲ加ヘ、和漢西洋古今ヲ參酌シ、公平簡易ヲ旨トスル事、
一公武官位差等並衣冠ノ事、
一廷臣陪臣差別比等ノ事、
一三職總裁參與議定差等分課ノ事、
一徵士貢士差別ノ事、
一太政官議事所規則ノ事、
一諸侯會同盟約ノ事、
一革制局ノ事、
一京兆尹彈正臺ノ事、
一外國事務ノ事、
一驛路事務ノ事、
一金幣事務ノ事、

一修理職竝貢獻ノ事、
一海陸軍局ノ事、
一學校ノ事、
一松平稱號ヲ始メ、總テ姓氏ヲ賜フヲ止メ、本氏ヲ稱スヘキ事、
　附、菊桐ノ徽章、拜賜ノ外、武器ト雖トモ禁之、
一革制局、即今所用書籍、
　令義解　職原抄　文獻通考　西洋事情　雲上明覽　大武鑑
　太政官議事所假設
一議事所、上下二ツニ分ツ、
　上ノ議事所
皇帝　宮　公卿　諸侯會議ノ所、
宮、總裁、議定ヲ分ツ、但、公卿中參與ノ者、亦此ニ會ス。公卿中參與ノ者ヲ上ノ參與ト謂フ、



總裁一員中ニ坐ス、議定公卿、諸侯、各四員兩側分坐、參與ノ公卿四員議定ノ後、諸侯ノ上ニ分坐、公卿諸侯建議ノ時、其人總裁ノ前ニ進ミ、議定ノ中ニ出ツ、

下ノ議事所

諸藩徵士、貢士及都鄙有才ノ者、會議ノ所官裁判（議定職、公卿、諸侯各一員、此任ニ充ツ、）參與ヲ分ツ。徵士中、參與ノ者ヲ下ノ參與ト謂フ、



裁判一員中ニ坐ス、參與（公卿二員、徵士四員、）兩側ニ分坐、徵士、貢士建議ノ時、其人裁判ノ前ニ進ミ、參與ノ中ニ出ツ、

皇帝陛下臨時出御、三職（總裁、議定、參與、）及徵士、貢士常參、

但、五日一休、（一六ヲ休日トス、）

一每日巳刻會集、午刻會議、未刻退散、

一議事ノ次第、前日上ノ議事所ヨリ事ヲ懸ケ題ヲ設ケ、翌日下ノ議事所ニテ、徵士、貢士建議、裁判聞之、筆官書之、討論セス、言ヲ盡スノミ、（書面上申亦許ス、且題外建白ノ筋ハ、許ヲ乞テ後申之、）

一決議ノ次第、上ノ議事ニ於テ衆建議ヲ執リ、議定職覆議、總裁職其宜キニ從テ斷之、筆官書之、

今般、大御變革ヲ以、更始一新ノ御制度被為建候ニ付、三職被立置、太政官議事所御設ケニ相成、天下ノ公議ヲ執リ、御政務被遊候御旨趣ニ候ヘハ、早々　皇居ノ外、議事所御建造ノ筈ニ候ヘトモ、急速御整ニモ難相成、因テ當事御假設ヲ以、九條

殿御借入ニ相成、假ニ御規則相立、上ノ議事所、下ノ講事所御取分ケニテ、官武一途、公平簡易ヲ旨トシテ、御大政相始リ候樣可被　仰付ト奉存候、右ニ付、三職分課ノ次第ヨリ、諸藩士被召出ノ次第相立不申テハ紛雜可仕候、勿論上ノ議事所ニ於テハ、三職ノ外、當事在京ノ諸侯モ、事ニ依テ建議可仕樣被　仰付、下ノ議事所ニ於テハ、諸藩士可被召出、然ニ過日來參與ノ者、四五藩ヨリ三人宛差出居候ヘ共、此上得ト御調ニテ、徵士、貢士ノ御取分ケニ相成、御選擢ノ者ハ始メヨリ徵士ト被命、參與職或ハ一局ノ役等ヲモ被　仰付、年限ヲ立被召遣候テ可然、其餘公議ヲ執ルヲ主トシ、被召出候者ハ貢士ト被命、諸藩ヨリ二三人或四五人差出候テ、下ノ講事所ニ於テ、事ニ依テ建議仕樣被　仰付可然ト奉存候、則此旨趣ヲ以、愚案ノ儘、當分御假設ノ規則相認奉差上候間、猶宜　御評議ヲ被爲盡度、尤九條殿御假設ニテハ、廣ク天下ノ公議ヲ御執被成候體相立不申、追々新タニ議事所御建立之儀、御評議被爲在度奉存候。

卯十二月

一御政體ノ事、

列侯會盟議事ノ體ト可被仰付哉、

一三職分課之事、

軍務　用度　外國　制度

大體、右四課ニ可被仰付哉、

一列侯會盟始之事、

期限ヲ立テ、諸侯召命嚴敷可被仰付哉、

一外國應接之事、

御國體變換ノ次第、急々御布告可被仰付哉、

一德川慶喜御處置之事、

慶喜問ノ次第ニ依リ、　勅使御差向可被仰付哉。水萍貽孫錄

○本條、日ヲ失ス、然レトモ十八日ノ議事此ニ基ス、故ニ前後ノ景況ヲ考ヘ、暫ク此ニ收ム。

○井伊直憲、藤堂高潔、疾ヲ以テ暫ク藩ニ就カント請ヒ、松平忠恕、疾ヲ以テ、上京遲延ヲ謝ス。松平忠恕家記

掃部頭儀、依　召病氣押テ登京仕、先達テヨリ在京罷在候處、病氣時々指引モ有之、聢ト不仕、此程參　内モ難仕次第ニ付、追テ諸藩上京、衆議ヲ被爲盡候御儀モ御坐候節ハ、何時モ登京可仕候ニ付、一先病氣養生之爲メ歸邑被致度、此段相願候樣、掃部頭申付候、以上。

十二月十五日　　井伊掃部頭内

今村忠右衛門

井伊直憲家記

○

私儀

此度、風邪推テ上京仕候處、途中ヨリ再感仕、其上持病之痱鬱症差起リ、且風土モ相變候故哉、手厚ニ療養仕候得共、何分日ニ相勝レ不申、迚モ急ニ出勤モ難仕次第ニ付、恐縮之至ニ御坐候得共、此上相募リ不申中ニ、一先歸國養生仕度、此段伏テ奉冀候、尤、

一門家老

藤堂歸雲

相殘シ置候間、何等　御用之儀モ被爲在候ハヽ、被　仰付被下候樣偏ニ奉願上候、以上。

十二月十五日　藤堂大學頭

藤堂高潔家記

○徳川慶喜、大將軍ヲ罷ムルヲ以テ、令シテ、其稱呼ヲ改ム。

將軍職御辭退　御聞届相成候ニ付、以來下ヨリ上樣ト可奉稱候、　御臺樣御事、以來御簾中樣ト可奉稱候。加藤明實家記

○舊幕府、大河內正質豐前守○大多喜藩主、食封二萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、ヲ以テ、老中格ト爲シ、永井尚志玄蕃頭○旗下士、ヲ若年寄ト爲ス。○森川俊方家記

十六日、凡ソ議定常參ヲ須ヒス、事アレハ之ヲ宣召ス。

議定之輩不及日參、　御用被爲在候節ハ可被　召候間、必參勤可有之、且臨時　御用有之、被　召候節ハ、速ニ可有參　朝候、尤非常之節ハ早速可馳參候事。春嶽私記

○田宮篤輝ヲ以テ參與ト爲シ、市尹ノ事ヲ總管セシム、又牧野成憲權六郎○備前藩士、ヲ徵ス。

田宮如雲

參與被　仰付。徳川義宜家記

○如雲履歷書ニ云、當時、京都ニ町奉行無之候ニ付、總御取締ノ儀、厚心得相勤候樣御演達有之。

○附錄十八日達書

田宮如雲

市中取締懸リ參與之議、三藩ヘ御達相成候處、御請ニ付、右之所ヘ出張、萬事可相談合事。徳川義宜家記

○

角田久次郎
大塚龜治郎
佐々鉄三郎
吉田喜太郎
鳥居久之丞
久野良藏

田宮如雲、市中取締懸リ參與被　仰付候ニ付テハ、其方共六人ヘ、右助役被　仰付候、心得方ハ如雲ヘ可申合候事。徳川義宜家記

○池田茂政ヘ達書

牧野權六郎

今般、無偏無黨公平之御處置ヲ以テ、與天下更始被遊候ニ付、人才御撰擧之筋ヲ以テ、兼テ達　叡聞候輩ハ、博ク御諮詢被爲在候ニ付、其藩右人體御登用被爲遊候間、早々登京致候樣可申付旨　御沙汰候事。池田章政家記

○松平慶永等、岩倉具視ニ就キ、徳川慶喜ノ處分、朝旨ノ在ル所ヲ領シ、以テ之ヲ慶喜ニ諭サント請フ、是日、具視、奏狀ノ擬案ヲ内付ス。

○春嶽私記ニ云、内府公御下坂之上ハ、無程御請書可被指上之處、方今舊幕下之人心如形之折柄故、容易ニ其御運ヒニモ成兼可申、將御請之御次第モ、成丈ケ徳川氏臣子之情懷ニ悖戾不致樣之御振合ニ不相成候テハ、是ヨリ又大患モ引起シ可申勢ニ付、御官位之儀モ、何程之御辭退ニテ　朝意ニ御相當ニ可有之哉、又御領地御獻納之儀、是モ御含可有之儀故、夫等之邊、　朝廷御内意之處御垂示ニ相成リ、夫ヲ以テ坂地之内情モ御内調モ被成度ト、土老侯ト御談之上、戸田大和守殿モ御加ハリニテ、岩倉殿ヘ御逢對、前段之趣御申入、徳川氏興廢之境御汲察ニテ、品能御評議相成候樣御懇談ニ被及候處、卿ニ

モ、二侯之御情實篤ト御測底ニテ、何分御内評之上、御書面御出來、猶又御相談可被成トノ御挨拶ニ有之由、御官位之儀ハ御辭官ニテ可然、是ハ當官御辭退之儀ニテ、類例モ比々有之、別ニ御下降之譯ニハ無之、只前之一字ヲ被添、前内府ト被稱候而已之御事ナル由、御物語有リシト也、十五日、公御參朝無之故、昨日岩倉殿ヘ御内談之末、象二郎申談及内調候樣被命候付、同人ヘ申談被仰出ニ可相成、御書面内々拜見之儀申達候處、御内々御出來之御書面爲御見有之、原註、私云、此書面散逸不知所在、然ル處、右之内、領地モ指上之文字、甚坂地之人心ニ關係之筋ニ付、何トカ引直シニ相成候樣申談試候得共、肝要之字面改删ハ難相調、且此書面、今夕ニモ尾、越重役呼出被相渡候積之由相聞候ニ付、左樣ニ表向之事ト相成、萬一於坂地彼是有之候テハ、不容易次第ト相成候得ハ、一應坂地之方、内調之上相願度ト申入候處、此儀ハ承知有之、時宜ニヨリ御請書之方ニ相成候テモ宜趣ニ付、尾藩田中國之輔ヘモ申談、右書面本紙相下リ候ハヽ、明朝ヨリ下坂イタシ周旋可取計ト申合罷歸候上、右等之次第達上聽候處、昨日之御約束ニテハ、土老侯ト御兩人ヘハ御草稿ニテ御内談可有之筈之處、無其儀而已ナラス、御沙汰之御請無之樣之認方ニテハ、尾、越兩藩之周旋ニテ、内府公之御内存承リ可申トノ御趣意ニ相背候故、此處認直ニ可相成廉ト申、領地之文字モ不穩候得ハ、イツレニ明日ハ御參　内之上、猶又御直談可被成候間、土老侯ニモ御參ニ相成候樣、明朝青山小三郎被遣、後藤象二郎、辻將曹ヘ一應内談之上ニテ、土老侯ヘ申上候樣被命、十六日朝、青山小三郎、後藤象二郎寓居ヲ訪ヒ、昨夜被命之次第ヲ以及内談候處、象二郎申候ハ、此件ハイツ迄モ密談之筋ニテ貫度事ニ付、御參内抔有之候テハ却テ不可然候、老公思召之御文意ハ、如何ニモ御尤ニ拜承仕候得ハ、御引直シ之儀ハ、何樣ニモ可致心配候間、今日之處ハ、雪江、十之丞兩人、參與ニテ申談候方可然トノ見込ニテ候、此儀御同論ニテ、容堂樣ヘハ御參之御沙汰無之樣仕度トノ談ニ相成由、夫ヨリ辻將曹方ヘ罷越申談候處、象二郎同按ニテ、御參無之方可然、素々此件之當否抔ハ、議定之御職掌ニテ、公議ニ御打出シ、總參　内之公論可然ト申居候由、此等之趣歸邸申上候付、公ニモ御參　内ハ御延引相成思召相含、雪江、十之丞參　朝之上、象二郎申談、書面相認、象二郎ヲ以岩倉殿ヘ内調候處、難問反復及數度候付、殊之外手間取、點燭之頃漸クニ相決シ、書面御渡シ有之、

今般辭職被　聞召候ニ付テハ、辭官仕度、且　王政復古ニ付、政府御用途之儀モ、天下之公論ヲ以テ、所領ヨリ差出候樣仕度奉存候事、前條御渡之御書面、先ツ永井殿ヘ内談可然ト象二郎等申談候處、永井殿ヨリ雪江被指出度段被申上之由、公ヨリ御沙汰ニ付、得便宜候事故、暮時過、散　朝ヨリ直ニ永井殿ヘ罷越候處、逢對之上、先ツ　宮中形勢如何トノ尋ニ付、近況荒増物語候處、何ニシテモ恐入候事共、先刻モ其筋之者來リ、御膳米竭ントス、如何可仕哉ト申ニ付、夫ハ誠ニ恐入タル儀ナリ、何分御指支無之樣、是迄之手續ニテ可取計旨申聞候事候得ハ、二十日三十日ハ御支ヘモ有之間敷、御貯金大分有之ニ、何地ヘカ散逸シ、寡少之事ニ相成タル由、第一指當リタル　御一周之御法會等御出來被成間敷、如何被成候御事ヤラン、京市中之混雜、伏見、大津之廢驛、行旅之難澁、イヤハヤ王政トコロニモ無之、此邊如何トノ事ニ付、則種々心配而已ニテ手廻不申候、頗當惑之次第ニ有之候ト相答候處、左モ可有之、決テ行ク事ニハ無之ト冷笑被致居候付、坂地之模樣ハ如何候哉ト承候處、中々六ケ敷勢ニテ、一統心配而已、此體ニテハトコ迄ト云事モナク、激家モ愈盛リニ相成事トノ答故、　朝命之書面指出、ケ樣之被　仰出ニモ可成哉之内議ニテ候、如何可有之哉ト申談候處、一覽之上、トウテモ可然事ヲ、御好被成候ト申物ナレハ、彼是申モ無詮事トノ答ニ付、全ク左樣之儀可有之樣モ無之、精々平穩ヲ存シ、漸此處マテ談付ケ候事ニ候ト申處、左樣カモ不存候得共、元來、此書面抔モ更ニ道理無之、將軍ニ付キタル御官位ニモ無之處、御職ヲ辭セラレタリトテ、御辭官ト申モ一向ニ當ラス、又御領地之儀モ、今更不被　仰出共、御指支ヲ御傍觀可被成樣モ無之、精々御盡シ被成候思召ハ、則政權御歸ノ節モ、　朝廷ヨリ諸侯ト共ニ同心協力、　皇國維持之　詔命萬々御奉戴之思召候得共、如此疎外之御取扱ヒニテハ、如何トモ被成方無之、畢竟降官削地之儀ヲ品能書取タル迄之事ニテ、有罪之姿ハ免レ不申、長州サヘモ入洛御免之折柄、上樣ニハ何ノ御罪有之哉、尤上樣ニハ何樣之儀ニテモ御違背無之思召候得共、先第一ニ伊賀、拙者初不承知ニテ候、ケ樣之書面ヲ相當ト思召候事ニヤ、大藏大輔、容堂何ヲシテ居ル抔、坂地之風説モ紛々有之候ト、イツニ變リテ以之外之放言ニ付、サラハ如何イタシ、坂地之人心ニ適シ可申哉ト申候處、　朝廷過去ヲ悔ヒ、九日以前ヘ被返候ハヽ、夫ヨリ又仕方モ可有之、ケ樣成不都合ヲ工ミ出候根元ハ、二賊之所爲候ヘハ、彼二賊ヲ除候事、方今之急務、大藏大輔樣ニモ此處ヲ御心

配被下度、薩邸へ打込ム勢ハ十分ニ有之、少シニテモ激候ヘハ直樣暴發可致ト、殊之外切迫之論ニ付、今日之御用何事ニ候ヤ、一賊ヲ除キ候御相談ニ哉ト申候處、如何ニモ其儀ナリ、宜申上候トノ事ニテ罷歸、右之次第申上候處、玄蕃迄カ左樣之心得ニテハト、御大息被爲在タリ、右之次第、以手簡象二郎迄概略申遣シ、明朝永井殿ヘ罷越、及一議論候樣賴託ス、田中國之輔ヘモ申越、明朝之下坂延引ス。

○大久保利通書翰ニ云、十三日、第一等、第二等ノ大策確斷シテ言上イタシ候樣、岩倉卿ヨリ於　宮中御達有之、評議之上、第二等ニ決シテ及言上候事、

但、第一等ハ四藩ノ議論離合ニ拘ハラス、薩長ノ兵力ヲ以テ、何ク迄モ干戈ヲ以テ朝廷ヲ奉護シ、成敗ヲ天ニ任セ、戰ヲ一圖ニ決ス等ノ事、第二等ハ暫ク尾、越ノ周旋ヲ見、德川氏於大坂鎮定ノ上、兩事件御受、眞ニ反正ノ實行擧リ候ハヽ、寬大ノ御處置ヲ以テ既往ヲ咎メス、議定職ニテモ御採用、從テ公卿上ニ於テ攝政尹宮等ヲ除ク之外、大ニ御採用、其餘列藩トイヘトモ、廣ク御用ヰ、冰炭相合シテ、皇國ヲ護持スル等ノ事、

一右兩條ハ、九日一擧御定算之通、萬事　叡斷ニ出テ、一戰ト相成候上ハ、第一等ニ出ルノ外無之候得トモ、八日ヨリ徹夜之　朝議ニテ、九日十字比御退散相成候時宜合ニテ、尾、越、藝三卿ハ其儘ノ參　朝ニテ、容堂公四時比御參、夫ヨリ　小御所ノ衆評トナリ、越、土卿大ニ德川氏ヲ助ケ、卽夜參　朝ヲ被命、御評議席ニ被召加度トノ意外ノ御大論、殊更、土藩後藤ナル者、必死ニ是ヲ推助シ、殆ト危キニ至ル、反正ノ實行擧リ候上ナラテハ、御採用不可然云々、賢クモ太守ニ御建言被爲仕候、尙紛々トシテ不決、御勘考トノ事ニテ、一旦御開キニ相成、此間後藤ナル者、頻ニ周旋盡力ス、臣等、太守公ヲ奉助、碎身シテ是ヲ論破シ、一藩ヲ以テ漸ク是ヲ拒クヲ得、終ニ尾、越公兩事件御内諭之趣ヲ奉シ、德川氏ヲシテ反正ノ實行ヲ擧ケシムルノ周旋ヲ御受ト相成、再度於　小御所御評議、尾、越卿御受之趣被遂言上タル御都合ナリ、故ニ第二等ニ出ルニ非サレハ致方ナシ、

一十四日、土、越卿參　朝、於　小御所御評議席、華城ノ情態如何ニヤ、段々浮說流言被相行、物情騷然、不可謂之變モ難圖

候得ハ、早々周旋ノ功擧リ候樣被　思食候云々、御詰詞ニテ、越卿何トモ恐入仕合ニ御座候、家來ハ下坂爲致置候付、兩日中ニハ報知可有之云々、御答ニ被及候、

一同夜、後藤ヲ以テ岩倉卿ヘ、越侯、土公ヨリ御頼之儀、於御評議席御詰詞ニ相成、胸中如割奉存候、就右御内談申上度候ニ付、御面會申上度云々ト、岩倉卿御答ニ、御決定ノ大事件、一人ヘ御内談トハ御當惑ニ思食候間、御斷被成タシト、後藤叩頭シテ頻ニ乞フ、不得止御面會之處、越卿、土卿ヨリ華城一條ニ付テハ、兎角六ケ敷甚心痛仕候、何卒御勘考被爲在間敷ヤト、岩倉卿曰ク、以之外ニ被存候、既　先帝顧命ノ次第モ被爲在、當今確斷ヲ以テ被　仰出候一令ニ候ヲ、鎭撫ノ不行屆ヲ以テ被曲候テハ、所謂朝令夕改ノ譯、　御新政ノ今日ニ當リ、必定　皇威不振ノ基ト相成候、大藏大輔殿ニハ、決死ヲ以テ御受ニモ被及、滿朝感伏、必ス成功ノ奏アラン事ヲ今日迄モ一同欣慕イタシ候次第ニ候、然ルニ、不存寄　御伺ト覺候云々ノ御答ニ閉口ノ由、頻ニ内訴百端、然ラハ　朝廷斷然　御沙汰ノ外無ト御答候處、イタシ方ナシトノ向ニテ引取ノ由、

一十五日、後藤ヨリ岩倉卿ヘ、兩事件御達之紙面草稿、容堂直筆ニテ相認候、其趣、所領之内ヲ御用途ニ年々差出候樣可仕云々、此通ナラテハ迚モ鎭撫行屆不申候間、是非此通ニテ御沙汰相成候樣、若御採用無之候ハヽ、歸國御暇之外イタシ方ナキ趣ヲ以テ奉迫、岩倉卿御答ニ、萬々左樣ニハ參兼候、就テ容堂爲儀ハ、柱石ト　御依賴思食候、然ルニ御採用ナケレハトテ、歸國御暇ト申シテ天下ニ面目アラハ、勝手ニ可致、早々御暇可被下候ト御突切相成候處、閉口シテ引取、亦々申出候ニハ、容堂ヘ申聞候處、夫ニテハ相濟不申候、左樣ナラハ、此通奉願トテ、大同小異ノ草稿持參イタシ、是ヲ御同意ニハ不被存候得共、御勘考ノ段御答ニ相成タル由。

○長門藩ヲシテ、仁和寺宮、及ヒ正親町公董ノ衛兵ヲ出シ、備前藩ヲシテ烏丸光德ノ衛兵ヲ出サシメ、安藝藩ノ仁和寺宮、及ヒ中山忠能ノ衛兵ヲ罷メ、山階宮ノ衛兵ヲ出サシム。毛利元德、池田章政、淺野長勳

家記

○徳川慶喜、佛朗西、英吉利、伊太利、亞米利加、孛漏生、荷蘭公使ヲ大坂城ニ延見シ、政體更革ノ事ヲ説キ、各國交際ノ事、仍自ラ之ニ任スルヲ以テ、益情誼ヲ固フセンコトヲ陳ス。

○外務省記ニ云、十六日、黒書院御上段立御、各國公使一同出座、佛公使口上振、佛文讀之、

此度、日本政體大ニ變革スル場合ニ至テ、條約濟各國公使共申述度旨趣ハ、是マテ上樣勉勵信義ヲ以テ、右條約無相違被爲遂候ヲ忝致感服候、然ルニ、當時在坂之各公使ニ於テハ、現在互ニ政體ヲ討論スル事ニハ一切關係無之、只望ム所ハ政體堅固ニ被立、國民歸服シ、外國ヘ對シ信義ヲ不失之事ニ候、且又本國之事務ニ付、引合用向有之時ハ、何レノ政府ヘ引合ヘキカ、公然之吹聽有之候ハ當然之儀ト存候、依之、上樣ニ於テハ、右之兩條諒察被爲在、此以後何レノ政府ヘ諸事引合ヘキヲ、無遲滯吹聽被成候樣望之候、

譯文ヲ伊賀守請取之、讀了テ上ル、上意畢テ上意書、

我祖宗　東照公、日本國ノ政體ヲ立シ事、大綱立チ、萬目擧リ、二百餘年、上　天子ヨリ下庶人ニ至ルマテ、其德ヲ仰ヒ、其澤ニ浴セサルモノナシ、然ルニ、宇内ノ形勢一變シ、外國ト條約ヲ結ヒシ以來、全美之良法モ虧欠アルヲ免レス、余纎統之始ヨリ此事ヲ熟考シテ、京師ト協議シ、此法ヲ改革セントス、コレ他念アルニ非ス、偏ニ憂國愛民之赤心ヨリ、余カ祖宗以來傳承之政權ヲ擲チ、廣ク天下ノ諸侯ヲ聚メ、公議ヲ盡シ、輿論ヲ採リテ、余國政府ノ建法變革ヲ定メントト、信約ヲ以テ　朝廷ニ寄セタリ、此鴻業ヲ成サン爲メ、　先帝ヨリ遺命アリテ、　幼主ヲ扶翼スルノ攝政殿下ヲ始、宮堂上方數名、余カ政權ヲ歸スル事ヲ諾シ、乍去諸侯之公議相決スル迄、諸事是迄之通リ政權ヲ執行フヘシトノ　勅命ナルニヨリ、専ラ其會議ノ期ヲ待チ、斷然其席ニ臨マントセシニ、豈料ランヤ、一朝數名之諸侯、兵仗ヲ帶シテ　禁門ニ突入シ、先帝顧命之攝政殿下ヲハシメ、宮堂上ヲ放逐シ、　先朝譴斥之公卿等ヲ引入テ代ラシメ、最前　勅命之旨ヲ變シ、公議ヲ

待タス、將軍職ヲモ廢止スル事ニ至レリ、余カ旗下譜代之諸藩大ニ憤激シ、日本ノ大法ヲ壞リ、皇國民心ニ背キシ暴戾之罪ヲ責メ、兵ヲ擧ルノ外他ナシト、日夜余ニ迫レリ、然レトモ、最初政權ヲ投歸セシハ、畢竟上下之人心ヲ一和スル爲メナルニ、右樣ノ過激ニ及フハ素志ニアラス、假令如何ナル正理アリトモ、余ヨリ亂階ヲ釀ス事、決然爲スニ忍サル所ナリ、故ニ余此禍亂ヲ避ンカ爲メ、一ト先下坂ニ及ヒシナリ、然レトモ、此事他人ヨリ視ル如キ事情ニハアラス、余カ國ヲ憂ヒ民ヲ愛スル情ヨリ、彼兇暴之所業ヲ見ルニ、　幼主ヲ挾ミ、　叡慮ニ托シ、私心ヲ行ヒ、萬民ヲ惱マスハ見ルニ忍ヒス、何分國之爲ニ辨論セサルヲ得ス、萬一異見之向ヲモ告諭シ、公議輿議ヲ問ヒ、偏ニ我國之隆治ヲ祈ル、是祖宗東照公愛民ノ餘靈ニ依リ、　先帝ノ遺志ヲ繼ント欲シ、天下ト同心協力シテ、正理ヲ貫キ、事業ヲ遂ケ、公議ヲ定メント希フノ外他ナシ、就テハ、余カ國ト和親ノ條約ヲ結ヒシ各國ハ、國內ノ事務ニ關係スルニ及ハス、都テ條理ヲ妨クル事ナキヲ要ス、余、既ニ條約ノ箇條殘ル所ナク履ミ行ヒシナレハ、猶此上トモ令譽ヲ失ハサル樣、各國之利益ヲ扶ケ、追々全國之衆論ヲ以テ、我カ國ノ政體ヲ定ルマテハ、條約ヲ履ミ、各國ト約セシ諸件ヲ一々取行ヒ、始終ノ交際ヲ全フスルハ、余カ任ニアル事ナルハ諒セラルヘシ、

伊賀守ヨリ佛公使ヘ渡之、各公使ヘ一々上意畢ル、御會釋阿蘭陀公使マテ相濟、御復座、上意有之、

佛公使ヘ、

不相替親睦致シ度候、陸軍之儀モ宜、

英公使ヘ、

不相替親睦致シ度候、海軍之儀モ宜、

伊太利公使ヘ、

初テ面會、大慶、此末共各國公使同樣宜、

亞米利加公使ヘ、

不相替親睦致シ度、先頃使節差遣シ候節モ厚ク世話致シ呉、大慶、本國政府ヘ宜、

孛漏生公使ヘ、

初テ面會、大慶、コンシユル勤候節ヨリ名前聞及ヒ、今般面會滿足、其國强國ト相成候由、

蘭公使ヘ、

舊來之交誼、此末トモ親睦之程、開陽丸モ出來形大慶、各國公使共、別ニ面會致度候ハヽ、用間之節面謁、

一同ヘ御會釋、各國公使退座、畢テ入御、

右畢テ、於殿上間、御茶御菓子被下之、老中若年寄出座。

○井伊直憲ノ家臣、下野別邑旁近ノ浪徒ヲ俘獲スルヲ舊幕府ニ報ス、大久保教義、出雲守○荻野山中藩主、食封一萬三千石、浪士其邑ヲ剽掠スルヲ以テ、一橋門守兵ヲ罷テ、其守ヲ固フセント請フ。

井伊掃部頭領分野州安蘇郡佐野近領新里村、出流村、櫃木村、皆川村等ニテ、去ル十二日、關東御取締出役、賊徒取締有之由之處、首七ツ、生捕十人、佐野表ヘ相預候段、右出役澁谷鷲郎ヨリ掛合有之、囹入差置候旨、且又同日ヨリ領分境ヘ掃部頭役人共出張取締罷在、胡亂之者召捕相糺候處、左之通、

野州澁乘村安左衞門悴
　市太郎

長州藩井上作左衞門悴之由
　井上十郎

越後無宿
　吉五郎

野州粕尾出生
齋藤泰助
元野州堀米村
貞右衛門

右ハ、出流山屯集之賊徒相加リ候趣申立候ニ付、入牢申付候處、澁谷鷲郎ヨリ今般手配之者ニ付、引渡候樣申聞候段、彼地役人共ヨリ申越候間、懸合之通引渡候趣申付越候、此段御屆申上候、以上。

十二月十六日

井伊掃部頭内
萩原與總次

坤儀革正錄

○

私領分相州荻野山中陣屋ヘ、昨十五日暮六ツ時頃、浪人體之者五六十人程、何レモ鐵砲等所持、陣屋之口々ヘ向ヒ致砲發候ニ付、夫々手配仕候内、長屋向七棟程、砲火ニテ燒失仕、右浪人體之徒、陣屋近邊ニ屯集仕候趣、此上如何樣之可及亂妨哉モ難計御坐候間、不取敢人數差出申候、然處、今曉六時頃、近村同州川入村ヘ立去候由ニハ御坐候得共、未領内所々徘徊仕居候趣、猶又領分役人共ヨリ申越候間、追々人數繰出シ申度奉存候ヘ共、當時一橋御門番中、非常御警衛之儀、少人數ニ付不行屆ニテハ恐入奉存候間、右御門番御免被成下候樣仕度、尤御當地萬一非常之節ハ、殘人數召連、盡力仕候心得ニ御坐候、此段奉願候、以上。

十二月十六日

大久保出雲守

坤儀革正錄

十七日、加藤明實ノ泉涌寺守衛ヲ罷メ、復タ內侍所ヲ衛セシム。

加藤能登守

泉山御守衛被免、　内侍所非常守衛之儀、永々被　仰付候、右ハ格別之御場所柄ニ付、一際嚴重取締可有之、被　仰出候事、

但、平常人數不及差出候事。（加藤明實家記）

○徳川茂承、鷲尾隆聚ノ高野山ニ據ルノ狀ヲ稟ス、批シテ、其朝旨ニ出ルヲ諭ス。

鷲尾侍從殿ト稱シ、百人餘高野山ヘ罷越候筋ヨリ、別紙（十四日、隆聚之書面ヲ指ス、）之通リ、國許役人共ヘ申來リ候得共、從前、公卿方國内御通行等之節ハ、爲指御儀ニ無御座候テモ、在京役人共ヘ御通達御坐候處、此度ハ御同家執事中ヨリ之文通之儀ニ付、闔國之人心ニモ相拘リ、且十津川郷中鎭撫方之儀ハ、昨年厚　御沙汰之儀モ御坐候、旁、彼是心配仕候間、右御趣意之程奉伺候樣申越候之旨、否早々被　仰聞候樣仕度奉伺上候、以上。

十二月十七日　　紀伊中納言家老
戸田金左衛門

○批紙

伺之通リ候、

但、被　仰付候御沙汰之旨モ有之候間、其分可心得、尤輕擧暴動等之儀、決テ無之筈候事。（徳川茂承家記）

○長門藩士、兵寡少ヲ以テ、仁和寺宮、及ヒ正親町公董ノ衛兵、後軍ノ至ルヲ竢タント請フ、乃チ中川久昭（修理大夫○岡藩主、食封七萬四百四十石、）ヲシテ公董ノ衛兵ヲ出サシム。（毛利元徳 中川久昭家記）

○長門藩士、竊ニ時務條議ヲ總裁熾仁親王ニ上ル。

一徳川内府下坂致候ハ、實ニ彼之上策ニシテ、進退ニ窮シ、又ハ下之鎭撫ニ困リ候譯ニハ決テ無之、浪華ヲ根據トシ、兵庫、

西ノ宮等之地ヲ占メ、軍艦ヲ以テ海路ヲ絶候時ハ、京師數萬之生靈、不日ニ飢渇ニ可及ハ必然ニ御座候、萬一其策不被行候テモ、海路ヨリ東下、關東ヘ割據スル時ハ、所謂虎ヲ野ニ放ツノ勢ニテ、是又如何トモ致方無之、今日之勢、彼之利ニシテ、京地之不利、眼前ニ有之候事、

但、内府ニ於テハ、屹度復古之實行可顯存念ニテモ、親藩之者、決テ折合不申、何レ一大戰ニ不及テハ、皇威御囘復之御目途ハ相立申間敷候、

一京地ハ狹隘ニシテ、多人數繰込候テモ不成用候ニ付、第一、山崎、八幡、宇治、大津、其外之入口ヘ嚴重ニ御堅メ差出サレ、縱ヒ少人數ニテモ、兵器ヲ携ヘ入京之輩ハ、先以朝廷ヘ屆出、御許容之上、入京被差免度事、

但、四方御堅メ嚴重被仰付候テモ、會、桑其外親藩、京師ニ居候テハ其詮無之事ニ付、早々引拂候樣沙汰有之度事、

一德川内府之大政ニ與ルト否トハ暫差置、先級ヲ降リ、諸侯之列ニ被加、削封等之實效御責有之、會、桑之輩、速ニ歸國謹愼御沙汰相待候樣、尾、越兩公ヘ御督責有之度候事、

一諸藩參與之内ニハ、是迄之幕議ヲ補助シ、朝議不服之族モ有之、實ニ玉石混淆之樣ニ被相伺候ニ付、二人ニ限ラス、一人ニテモ至當之人才御精選之上モ、御精選有之度事、

一京師ハ四方狹隘之地形、格別要害トテモ無之、況ヤ、方今ノ如ク　輦下用武之巷ト相成候樣ニテハ、　至尊御安座可被爲在御場所ニテモ有之間敷候、旁、非常之御沿革ヲ幸ヒ、伏見桃山ヘ御遷都、内裏御造營之御胸算被爲立度候事、

一外國ヘ速ニ被就御手、改テ　王政復古之御布告被爲在度候事、

一乍恐、公卿方固陋之御見識ヲ破リ、尙　朝廷繁冗之御格式等、追々御改正被爲在度候事。指華入京日載

○指華入京日載ニ云、品川世良、師宮ヘ參殿、氣付、別紙ノ通申上候。

○鷲尾隆聚、書ヲ植村家保、及ヒ五條大和、代官中村某勘兵衛ニ遣リ、内旨ヲ奉シテ、兵士ヲ糾合スル

ヲ報ス。高野山出張概略 植村家壺家記

○本書、皆、德川茂承ニ贈ル者ト同シ、故ニ之ヲ略ス、但シ、第十二行、候ニ付ノ下、列藩ノ有志モ隨テ雲集ヲ爲シノ十三字ヲ加フ、又家壺家記ニ副書アリ、左ノ如シ。

今般、　王政復古被　仰出候ニ付テハ、昌平驕慢之舊習ニ滯泥シ、君臣之大義ヲ取失ヒ、反逆之徒有之モ難測、依之、鷲尾殿、撫降討逆之重キ　御沙汰ヲ被爲蒙、高野山ヘ御出張ニ相成、天下之動靜ヲ被爲測候事ニ候、萬一、賊徒夷戎ト睦ヒ、　朝命違背候節ハ、一藩擧テ悉ク奸賊ヲ征伐シ、上ハ奉安　宸襟、下ハ萬民塗炭之苦ヲ救ヒ候樣致度申入候事。

○復書

今般、從　天朝王復古之大號令被　仰出候ニ付テハ、近來驕慢管見之輩、如何成輕擧ニ及ヒ、　朝廷ヲ奉危候モ難被爲測、深被爲惱　宸衷候テ、鷲尾殿、重キ　御沙汰ヲ被爲蒙、高野山ヘ被遊御出張候ニ付、有志之士、隨テ雲集、不虞之備嚴重ニ被整、且十津川擧鄕ヘモ御同樣重キ　御沙汰被爲下候ニ付、多人數應シ奉リ御守衛申上候ニ付、鷲尾殿被爲統候兵士ニ於テハ、干戈ヲ妄動シ、人民ヲ令惱亂候儀毫モ無之候間、決テ驚動仕間敷樣御申諭可有御坐旨、別段被仰出候間、拜承可仕樣被仰越委細奉畏候、右御請爲可申上如斯御坐候、以上。

植村駿河守内
中谷榮二郎
林傳八郎
内藤伊織

十二月二十一日

鷲尾殿執事御中

高野山出張概畧 植村家壺家記

○舊幕府、譜第諸藩ニ令シ、江戸私邸ノ旁近ヲ巡邏シ、以テ劫盜ニ備フ。

市中强盗暴行致候ニ付、銘々屋敷最寄七八町ヲ持場ニ相定、晝夜巡邏候樣可被致候、廻リ場相定候上ハ、其段御目付ヘ可被相届候、尤非常之節ハ、兼テ相達置候場所ヘ、人數集合候樣可被致候。

秋元興朝家記
森川俊方家記

復古記 卷十 終

總括兼纂修
一等修撰 臣 長松幹
校勘
一等修撰 臣 長炗
一等協修 臣 四屋恒之
校錄
一等書記 臣 澤渡廣孝
繕寫
二等繕寫生 臣 小川長和
二等繕寫生 臣 小島春

復古記　卷十一

慶應三年丁卯十二月十八日ニ起リ二十日ニ至ル

○十二月

十八日、大政復古ヲ外國ニ報スルノ擬案、及ヒ人才ヲ擧ケ革政所ヲ設クル等ノ事ヲ議ス。

御用之儀候間、今十八日午刻參　朝可有之事。

十二月十八日　　參與

尾張大納言殿　各通

越前大藏大輔殿

追テ、今日參　朝之上、御評定之儀ニテハ候得共、外國事件急務ニ付、旁、先爲參考、御用向廉々荒增書取、別紙一帖爲見被下候事。

別紙、

外國事件、

一外國掛

三條前中納言

松平大藏大輔竝家來之內一人

土藩

後藤象二郎

薩藩
岩下佐次右衛門

卽今之處、右之通被　仰出候思召ニ付、先御内意御下問候間、見込之趣早々可有言上候事。

○外國掛人名中、三條前中納言ハ大納言ノ誤ニシテ、正親町三條實愛ヲ指スナリ、是時、三條實美ハ未タ京ニ還ラス、慶明雜錄大久保利通書柬ニ、廿日、外國御布令一條御決定、議定職、外國掛、正三卿云々トアルヲ以テ證スヘシ、其正親町ノ字ヲ去ルハ、蓋當時ノ慣習ニシテ、猶柳原氏大納言タレハ、日野大納言ト署スルカ如シ。

○

海外各國へ御變革布告一紙、薩藩ヨリ差出分、

朕ハ大日本天皇ニシテ、同盟列藩ノ主タリ、此誥ヲ承クヘキ諸外國帝王ト、其臣民ニ對シ、祝辭ヲ宣フ、朕、將軍ノ權ヲ朕ニ歸サンコトヲ許可シ、列藩會議ヲ興シ、汝ニ告ルコト左ノ如シ、

第一、朕、國政ヲ委任セル將軍職ヲ廢スルナリ、

第二、大日本ノ總政治ハ、內外ノ事共ニ、皆同盟列藩ノ會議ヲ經テ、後有司ノ奏スル所ヲ以テ、朕之ヲ決スヘシ、

第三、條約ハ大君ノ名ヲ以テ結フト雖モ、以後朕カ名ニ換フヘシ、是カ爲ニ朕カ有司ニ命シ、外國ノ有司ト應接セシメン、其未定ノ間ハ、舊トノ條約ニ從フヘシ、

右薩州布告一紙ニ付　朝議ノ一紙、

大日本國太政官、海外各國ノ公使等ニ移ス、　天子、諸外國帝王ト、其臣民ニ對シ、祝辭ヲ宣フ、天子、酋帥有司ト詢リ、汝ニ告ルコト如左、

第一、往年、國政ヲ委任セル將軍ノ職ヲ廢スルナリ、

第二、大日本ノ總政治ハ、內外ノ事共ニ、皆酋帥有司ノ會議ヲ盡シ、奏スル處ヲ以テ、天子之ヲ決スヘシ、

第三、條約ハ大君ノ名ヲ以テ結フト雖モ、以後太政官ニ換フヘシ、是カ爲ニ有司ニ命シ、外國ノ有司ト應接セシメン、其未定ノ間ハ、舊ノ條約ニ從フヘシ。

右、從　朝廷外夷御應接初之儀、實以不容易大事件ニ付、宜ク熟考ヲ被遂、參　朝之上、見込之旨言上可有之事。

御任選　御沙汰ニ付言上之向、

列藩

徳川内府　松平閑叟

松平備前守　伊達伊豫守

秋月右京亮　脇坂淡路守

池田信濃守　長岡良之助

諸藩士

徳川

永井玄蕃頭　戸田大和守

平山圖書頭　勝安房守

大久保一翁　西周助

山岡鐵太郎　松岡萬

薩州

小松帯刀　高崎兵部

高崎左京　五代才助

桂右衛門

覺、

右、土州參與其外、彼是同意ニ付差出候寫、

肥後　横井平四郎

越前　三岡八郎

柳川　十時攝津

大垣　小原仁兵衞

長州　木戸準一郎（桂小五郎事）

因州　土肥謙藏

備前　牧野權六郎

德川　平山圖書頭

勝　安房守

大久保越中守

薩州
小松帶刀
越前
三岡八郎
長州
桂小五郎

右、立花内十時攝津言上之寫、

前文之人體參與ニ被　召加候　思召ニ候得共、猶議定、各藩、且下參與之輩、遂評定所存之趣、無忌憚可爲言上之事、

革政所御取建之事、

右、取建之儀ハ大急務ト　思召候ニ付、不取敢、土藩福岡藤次取調方被　仰付候、尤總督公卿ニテ一人、猶又官家之向ニテモ見込之人體候ハヽ、可被差加儀ニテハ候得共、各藩ニモ其人選擧可有之候、但、尾藩丹羽淳太郞言上之處、

三代之禮經ニ明ナル者、天下獨歩共可稱樣ニ奉存候、
安井忠平

皇朝律令ニ多年刻苦仕候者ニ付申上置候、
尾藩
植松庄左衞門

尾藩神主
神谷内藏介

前條如何可有之、尙又右事件ハ別段之儀ニテ、可遂衆議事ハ勿論候得共、大略之處ハ、總督以下其人ニ御委任之方可然哉見込之旨、言上可有之候事、

市中取締方之事、

是迄町奉行所ニテ取計向之儀、爲替當分之處、不取敢兼テ山城國中取締被　仰付置候本多主膳正、青山左京大夫、松平圖書頭等、市中御取締被　仰付候、尚又市中見廻之儀、

龜井隱岐守　加藤遠江守
加藤能登守　小出伊勢守
松浦肥前守　植村駿河守

右、六藩ヘ被　仰付候、然處、御變革御混雜之虚ニ乘シ、惡徒横行之聞モ有之候ニ付、加州、土州、薩州、中川等ヘ、洛中洛外巡邏之儀被　仰付候、

右、京兆之尹之儀ニ付テハ、追々御取調御取建之儀モ可有之候共、民命之係ル處、一日モ不可忽之大事ニ付、即時前條之通候、且三藩之外、尾藩田宮如雲其餘總取締方被　仰付候、尤總督公卿ニテ一人、尚又官家之向ニテモ見込之人體候ハヽ、可被差加儀ニテハ候得共、各藩ニモ其人選擧可有之候、但、右事件ハ別段ニテ、可遂衆議事ハ勿論候得共、大略之處ハ、總督以下其人ニ御委任之方可然哉、見込旨言上可有之事、

太政官代之事、畢竟議事院ナリ、

即今之處、施藥院三雲宗順被借召候御評決ニ候、三雲儀御請之事ニハ候得共、元徳川家支配之儀ニ付、一應、二條在留重役ヘ御尋問可有之方候哉、尚又見込之儀モ言上可有之候事。　徳川義宜家記　春嶽私記

○徳川慶勝答議

御書面之趣奉拜承、夫々勘辨仕候處、海外各國ヘ御布告之御書面ハ、初ケ條之方可然奉存候、其餘之條々ハ異存之品無御座候、其內藩中田宮如雲事參與被　仰付、市中總御取締之儀、厚心得相勤候樣御達御座候付テハ、右之趣、本多主膳正始六藩、且見廻之六藩、竝巡邏之向々ヘモ、從　朝廷御沙汰被成下候樣仕度奉存候、依之、謹テ御請奉申上候。

十二月　　大納言慶勝上

徳川義宜家記

○淺野長勳答議

一人撰之儀ハ、悉心得居候儀ニハ無御座候得共、諸藩ヨリモ銘々見込ヲ以申上候儀ニモ候得ハ、其主人主人ヘ　御沙汰被爲在、速ニ御呼出被爲在度儀ト奉存候、

一外國御布告之儀、御一紙得ト拜見仕、御尤至極之御儀ニ御坐候得共、外國事情ニ疎キ儀ニ御坐候間、是非得失、何共見込之儀モ無御坐候得共、御大事件之儀ニモ御坐候得ハ、其事情ニ通達之者ヘ御推問被爲在、御決議相成度儀ト奉存候。

淺野長勳家記

○大久保利通書翰ニ云、十六六恐クハ八ノ誤、日、外國御布令一條御評議有之、此方ヨリ草稿差出候、原註、モンブランノ一紙ヲ取捨シ、寺島著述イタシ候御布令一條ハ、サトーヨリ相通候趣モ有之、仍テ言上相成候、參與一同異論無之トノ事ニテ、岩下佐次右衞門、後藤象二郎ト外國掛迄モ被仰付候、四藩議定職ヘ別段御下問モ被爲在候處、異存不被在トノ御答ニ相成候由。

○答議、尾、藝ノ外見ル所ナシ、下問ハ土モ亦一様ナリシコト、二十日、連署ヲ辭スルノ書ヲ以テ見ルヘシ、外國報告文案ハ、有栖川宮家記、十九日ニ收メ、加藤明實家記ハ、前ノ一通ノミヲ錄シテ、二十一日ニ收ム、蓋漸次ニ下問アリシナルヘシ。

○諸侯ニ申令シテ、速ニ朝集セシム。

第一新變革ニ付テハ、　御下問之義被爲在候ニ付、迅速上京可有之、更被　仰出候事、

但、兼テ去十一月中、登京之儀　御沙汰モ有之候故、旁速ニ上京可有之、若所勞之人體モ候ハヽ、爲名代重職之者可差出候事。

池田章政家記
藤堂高邦家記

○演說書

是迄之傳奏ヨリ被相達候上京、竝名代等有之候得共、此度、御變革御一新ニ付、更被　召候間、以前之屆有之分モ取調可差

出候事。池田章政家記 青山忠誠家記

○市中取締三藩ニ諭シ、意見アレハ、之ヲ管掌ノ參與ニ陳シ、兇徒横行制シ難キ者ハ、巡邏諸藩ノ應援ヲ請ハシム、又都下ニ告諭シテ、民情ヲ綏撫シ、公卿諸侯ノ家臣ニ令シテ、下民ノ請托ヲ受ルコト勿ラシム。

○市中取締三藩へ達書

○

御大政御一新之折柄、萬事手拔無之樣氣ヲ張、夫々心附候儀ハ、懸リ參與職へ申出、右職之意見ヲ得取計可申事。

竊盜、其外普通之惡黨追捕ニ付候儀、常々三藩ニテ手張候事件出來之節ハ、諸藩巡邏之兵ニテ加勢取計可申事。

○京都市中へ告諭書

徳川内府願之通被　聞食、於　朝廷萬機御一新被遊候ニ付テハ、天下之民ヲシテ、各其家業ヲ安セシメ、倶ニ憂樂ヲ同センコトヲ第一トシテ、是迄之御制度、民之疾苦ナラサル儀ハ、其儘被差置候間、此段奉拜承、銘々其職業相勵可申候、是迄人心動搖之砌、世上之流言モ不少候間、以後ハ心配之事共承リ込候ハヽ、無差扣支配役所へ可伺出候、且惡黨共市中徘徊、障碍モ有之候處、防禦之御手當モ、諸大名へ御指揮有之間、旁以安堵可致候事。

○公卿諸侯家臣へ達書

町人共公事訴訟、其外何事ニヨラス、支配筋ヲサシ置、官家、武家之家來筋等へ内訴歎願イタシ候者有之候節、一切取合不申、支配へ申出候之樣、急度可導遣事。以上並青山忠誠家記

○三岡公正八郎○越前藩士、ヲ徴士參與ト爲ス。

三岡八郎

徵士參與職被　仰付候事、

但、任滿歸藩之儀ニテハ候得共、期限之儀ハ、追テ御治定之上御沙汰之事。由利公正履歴書

○是ヨリ先、藩士ノ參與タルモノ、名ハ朝官タレトモ、其實ハ居然タル藩士ナリ、公正登庸ノ內旨アルニ及ンテ、朝士、藩士ノ別ヲ請問ス、是ニ於テ、始テ徵士ノ目アリト、此事春嶽私記ニ見ユ、災後重編私記中、之ヲ佚ス。

○凡ソ藩士ノ參與ニ任スルモノ、皆徵士ト稱ス、後之ヲ略ス。

○再ヒ島津久光ヲ召シ、又長岡護美、良之助、後右京亮○細川慶順ノ弟、桂久武、右衛門○薩摩藩士、木戸孝允、準一郎○長門藩士、土肥實臣、謙藏○因幡藩士小原忠寛二兵衛○大垣藩士、ヲ徵ス。

御一新御變革ニ付テハ、從來、　叡慮遵奉之次第モ有之、旁以御下問之儀被爲在候間、早々上京可有之、更被　仰出候事、

島津大隅守

但、應　召、修理大夫モ早速上京ニハ候得共、尙又思召之旨モ有之、本文之通　御沙汰候事、島津忠義家記

○

長岡良之助

今般、御改政御一新ニ付、廣ク天下ノ人才御登用被爲在候、其方兼々被　聞食候儀有之候間、早々登京可致　御沙汰候事。細川護久家記

各通　桂右衛門

桂小五郎木戸準一郎舊名

○島津茂久以下四家ヘ達書

土肥謙藏
小原二兵衛

今般、無偏無黨公平之御處置ヲ以テ、與天下更始被遊候付、人才御撰擧之筋ヲ以、兼テ達　叡聞候輩ヲ博ク御諮詢被爲在候ニ付、其藩、右人體御登用被爲遊候間、早々登京致候樣可申付、旨　御沙汰候事。

十二月十八日　島津忠義以下四家家記

○加賀、薩摩、土佐、岡四藩ノ兵ヲシテ市中ヲ巡邏セシメ、津和野等、六藩故ノ如シ、薩摩藩ヲシテ仁和寺宮ノ衞兵ヲ增シ、備前藩ヲシテ中山忠能ノ衞兵ヲ出サシム。○島津忠義、池田章政家記

各通　加州
薩州
土州
中川修理大夫

頃日、御變革御混雜ノ虛ニ乘シ、惡徒横行ノ聞エ有之候ニ付、洛中洛外巡邏ノ儀、被　仰付候事、

但、是迄、町奉行取計向ノ儀、爲替當分ノ所、不取敢、兼テ山城ノ國中取締被仰付置候本多主膳正、青山左京大夫、松平圖書頭ヘ市中取締被　仰付候、尚又、市中見廻ノ儀、龜井隱岐守、加藤遠江守、加藤能登守、小出伊勢守、松浦肥前守、植村駿河守、六藩ヘ被　仰付置候得共、尚又薩州、土州、中川等ヘ洛中洛外見廻リ被　仰付候間、此段爲心得申達候事。

前田慶寧以下三家家記

○但、書中、藩名互ニ用フ。

○松平容保、松平定敬、猶大坂ニ留リ、又兵ヲ出シテ、北上スルノ報アリ、是日、徳川慶勝、松平

慶永ニ命シ、容保、定敬ヲシテ速ニ藩ニ就シム。

尾　　越へ

德川内府下坂以後、鎭撫方之儀被　命置候處、會、桑于今滯坂、此頃、山崎邊人數繰出シ候哉之聞有之、人心動搖、萬一年若之徒、無故發事候テハ甚不宜候間、會、桑二藩、早々歸國可取計、急度可有盡力、更　御沙汰候事。德川義宜家記 春嶽私記

○附録大久保利通書翰ニ云、德川氏下坂后、鎭撫之儀ハ扠置、直樣伏見へ新撰組、並歩兵千人餘繰出シ、奉行所へ入込ミ横行イタシ、町中苦情甚敷、四藩へ巡邏ヲ被命、直樣御固人數被差出、長モ同斷、然處、德川氏兵士ハ奉行所へ相構へ、一人モ外出不致、此方人數ハ所々宿陣ニテ、對陣ノ形トナル、

一淀城内へ戸川伊豆守一番一聯隊千二百人、町宿陣、或ハ寺陣、

一橋本へ銃兵三百人位、大砲三四挺、

但、西融寺、外二ヶ寺へ百五十人位ツヽ、十八日夕方繰込ム、

一西之宮へ歩兵五百人位、

一兵庫へ若州勢千人位、

右之通、處々分配シ、殊ニ京師近邊迄、戎兵ヲ繰出候儀、絕言語候次第也、

但、必定鎭撫不相調形ヲ見セ、且ハ兵威ヲ示シ、壓倒セントノ意ニ出ルナラン。

○井伊直憲、假ヲ賜ヒ藩ニ歸リ、老臣ヲシテ代ラシメント請フ、許サス、諭シテ、病ヲ京師ニ養ハシム、藤堂高猷ノ老臣、其子高潔ノ爲ニ、再ヒ歸藩ヲ請フ。

私儀、病氣ニ付、歸邑養生之御暇奉願置候得共、家老共上京爲致置候間、相當之御用被　仰付候樣仕度奉願候、以上。

十二月十七日　　井伊掃部頭

○本日批紙

思召之旨モ有之候間、精々加保養、今暫滯京有之樣　御沙汰候事。井伊直憲家記

○

大學頭儀

痛氣ニ付、一先歸國養生仕度旨、過日奉願候處、右差圖モ無之内、再願仕候段奉恐入候得共、昨今何分相勝不申候ニ付、此上相募不申候内、歸國養生爲仕度、何卒速ニ御暇被下置候樣、於私モ偏ニ奉願上候、以上。

十二月十八日

藤堂和泉守家來
藤堂歸雲
藤堂高潔家記

○巡邏六藩、其分轄區域ヲ定メ、且其措置ノ日ヲ稟ス。

覺、

丸太町ヨリ北不殘、　龜井隱岐守　植村駿河守

丸太町ヨリ南五條限、烏丸ヨリ東不殘川東共、　加藤能登守　加藤遠江守

丸太町ヨリ南、烏丸ヨリ西不殘、五條ヨリ下不殘、　松浦肥前守　小出伊勢守

右、請持場一ヶ所一日、兩藩之内一藩宛、晝夜見廻仕候樣仕度奉存候、此段御屆申上候、以上。

龜井隱岐守内

十二月十八日　神野務

○

一亂妨之者、手餘リ候節ハ、打捨候テモ宜御座候哉、
一失火之節ハ、如何相心得候テ宜御座候哉、
一士分體之者、不法之擧動有之、不得止事節ハ、繩掛候テモ不苦儀候哉、
　但、召捕候者、何レヘ差出候哉之事、
一見廻リ先、急場御用有之節、堂上方御行違候テモ、馬乘之者、下馬不仕候テモ宜御座候哉之事、
一見廻リ先、別事無御座候得ハ、別ニ御屆不仕心得ニ御座候、
右之通、六藩申合、爲心得伺置度、宜　御差圖奉願上候、以上。
　十二月十八日　六　藩
○批紙
第一條　伺之通、
第二條　出火近邊見廻候事、
第三條　不苦候、
同　上　市中取締之藩ヘ可引渡事、
第四條　非帶急用之節ハ、伺之通。並加藤明實家記
○松平慶永等、再ヒ岩倉具視ト謀リ、先ツ徳川慶喜ヲシテ入覲セシメ、以テ擬案ノ事ヲ擧行セシメントス、乃チ永井尙志玄蕃頭○舊幕府若年寄、ヲシテ之ヲ慶喜ニ諭サシム、是日、尙志、田中輔、中根師質ト大坂ニ赴ク。
○春嶽私記ニ云、十七日、雲江參　朝ノ上、象二郎逢對、今朝、永井殿之樣子承候處、則罷越、段々及議論候處、大ニ落意有之、

何分下坂一ト周旋可致、夫ニ付、越侯ヘ罷出、御相談申上度トノ事ニ候間、早々歸邸可然、象二郎モ追付可罷出トノ事ニ付、詰合之田中國之輔ヘモ參邸候樣申聞、早々歸邸、象二郎モ參上ニ付、直ニ被召出、今朝之樣子御尋之處、申上候ハ、永井殿之暴論之如クニテハ、干戈　闕下ニ動キ、亂階ト可相成事ニテ、御大事至極候得ハ、此時ニ當リテハ、先ツ人心鎮定之段被仰上候趣ニテ、御上京有之、尾、越兩侯ヲ以、過日之御請被仰上候得ハ、夫ヲ　聞召ト一處ニ御參　內被仰出、速ニ御參　朝ニ相成候ヘハ、夫ニテ頃日來之混雜モ御居リ合ニ相成候得ハ、夫ヨリ後ハ、思召次第ト申物ニ有之段、反復辨論仕候處、永井殿モ大ニ會得ニテ、其筋ナレハ一ト盡力致シ可申、越公ヘモ御談申、下坂可致ト被申由、逐一申上之、其內、永井殿尾館ヘ被罷出由相聞候付、卽刻、尾館ヘ御出有之、雲江、象二郎モ參上、永井殿モ陪席ニテ御談論有之、約ル處、內府公御上京之上、御辭官、並御領地之儀共、內府公御口上ニテ、兩侯ヘ御演達ニ相成候ヲ、兩侯御書取、御奏達ニ相成、夫ヲ　聞召、直ニ參　內被　仰出ト申御手順ニ決シ、御受書之草稿等御出來ナリ、草案ハ、二十二日、田中輔等、板倉勝靜ト應接ノ條ニ見ユ、今朝、岩倉殿、象二郎ヘ被申候ハ、何分、內府公御上京ナラテハ不相適事ト相成候得ハ、是非共、其運ヒニ周旋候樣被申聞候付、右之御手順申談候處、其儀ハ何樣ニモ心配可致トノ事之由、象二郎申出ニ付、前段之御談ト相成、且御參　內御當日ハ、尾、越、土三侯モ御參　內ニテ、三宮、中山正三等之御談ニテ、速ニ御取極メ、岩倉卿之ヲ周旋シ、卽時之御取扱ヒニ相成候積ニ御內談濟、永井殿、明日下坂被致候間、雲江、國之輔ニモ下坂可致ト申談ス。

○細川興貫、疾ヲ以テ、上京遲延ヲ謝ス。○細川興貫家記

○酒井忠惇、江戸ヨリ將ニ京ニ入ラントス、大津ニ至リ、徳川慶喜大坂ニ在リト聞キ、直チニ之ニ赴ク。○酒井忠邦家記

○舊幕府老中稻葉正邦、美濃守○淀藩主、食封十萬二千石、譜第諸侯ノ江戸ニ在ル者ヲ城中ニ會シ、更革ノ朝命ヲ示

シテ、各意見ヲ陳セシム、又土井利教、岡部長寛等九人ヲシテ急ニ兵ヲ率テ西上セシム、其疾アモルノハ、其子若クハ重臣、之ニ代ル、旗下士勝義邦、安房守○軍艦奉行書ヲ正邦ニ贈リ、其妄動主君ノ意ニ反スルヲ論ス。

○舊幕府老中、譜第諸藩ニ示ス書

昨十七日、御目付著府ニテ、別紙書付寫持參、京師當今形勢、口上ニテ委細申聞、是迄、追々被仰立候儀ハ、御誠實之御意衷ヨリ被爲出候儀之處、現今之御次第ニ至奉恐入、不堪泣血之至候、此上ハ愈以　御當家之爲ニ身命ヲ抛チ、赤心ヲ以テ　皇國ニ報シ奉ル外無之、一同ニ於テ決心イタシ候、就テハ各心底承度候間、別紙、篤ト熟覽、聊忌諱ヲ不憚、十分ニ書面ヲ以テ、明日中、御申聞可有之候事。

十二月　太田資美家記　板倉勝達家記

○別紙ハ、八日宮門戒嚴ノ達、九日大政復古、攝關、幕府廢止ノ達、二通ナリ。

○老中達書

各通　土佐淡路守　岡部筑前守
青山峯之助　松平伊豆守
加納嘉元次郎　本多修理
柳生但馬守　蒔田相模守
永井信濃守

上京被仰付候間、早々發足可被致候、尤、岡部筑前守、青山峯之助、松平伊豆守、加納嘉元次郎、本多修理、柳生但馬守、蒔田相模守、永井信濃守ヘモ同様相達候間、得其意可被申合候、

別紙之通、此度、上京被仰付候處、病氣、幼年等ニテ旅行難致候者、嫡子、並家老、爲名代人數差登候心得ニテ、其段屆申聞

候樣可仕候事。土井利教家記 加納久宜家記

○各通、姓名互ニ用フ、久宜家記ニハ、十六日トス。

○

今日之大計ハ鎭靜ト戰鬪之二途ニ不出候、君上雄大之遠圖ヲ以テ、御職掌御返上有之、皇國大御變革可被遊思召ニ出候儀ユヘ、此御旨ニ違ヒ、漫ニ干戈ヲ動シ候ハ、君上之御焦慮ニ奉反、君ヲシテ無稽無止事ヨリ、御英斷爰ニ出候形ニ相成、其恐萬萬不少恐入候儀ト奉存候、若此英意ヲ御繼述被遊候儀ニ候ハヽ、妄動之御擧無之、御指令務メテ正大、暫都下、並八州之御鎭撫ヲ以テ、益厚ク御所置有御坐度ト奉存候、此儀、則鎭靜之一途ニテ、已ヲ治テ天下之安危ヲ心トシ、黎首塗炭ニ陥ラシメサルノ道ト奉存候、戰鬪之一途ハ、臣愚竊ニオモフ、今之侯伯、其膽識遠圖、我君上之右ニ出候者無之、天下之大政衆議ニ出候ハヽ、是ヲ主裁スル者亦何人ソ、必君上ヲシテ大御主裁タラシムヘシ、君上モ亦御焦思御苦心、往時ニ倍シ、皇國一和協力、同心之大政ヲ以テ御任ト可被遊ト奉存候、然ルヲ若其英特遠大之御旨ヲ忌憚シ、或ハ其左右ヲ剗弱シ、或ハ其御失策ヲ算シテ、衆議至當ヲ不得、恣ニ　天朝之御名ヲ鳴ラシテ、黎首ニ害有ル歟、或ハ　天朝ニ奉對、偏頗之御名ヲ以テ奉爲負候樣ナル儀、顯然相生候ハヽ、毫末モ無二念、向上國一兵ヲ進メ、上　天朝之御名ヲ濯キ、下萬民之爲ニ枉邪ヲ討伐不可不成候、今速ニ西上仕候トモ、其名不正、且君上之御大名節ニ相反可申哉、萬々難計、前文之如キ形勢相顯候ハヽ、師名正々堂々、一兵ヲ以テ千奸萬邪ヲ驅可申儀ト奉存候、元ヨリ小臣區々タルノ趣、荒増奉申上候、以上。

十二月十八日　　勝安房守

勝安芳日記

○勝安芳日記ニ云、此書付、閣老稻葉殿上達ヲ乞フ、然ルニ諸官我進退ヲ疑ヒ、タエテ事ヲ明サス、其上達如何ヲ辨セス、東都之諸士憤激シテ、唯上國ニ兵ヲ送ルヲ以テ大策トシ、是ヲ支止スル者ハ逆臣ナリトイツテ、其勢當ルヘカラス、然リトイヘ共、今日ニ當テ、是等之愚憎ト同歟、其說ヲ共ニセン哉。

○戸田忠行、出流山屯聚ノ浪徒ヲ殺獲スルヲ、舊幕府ニ報ス。

私領分野州都賀郡欟木最寄出流山邊ヘ、多人數屯集罷在候者之内、去十一日夕、欟木町ヘ罷越及强談候ニ付、最寄廻村關東御取締出役宮内左右平方ヘ、同所陣屋詰家來ヨリ兼テ折合セ、同人手勢一同申合捕押可申處、手餘リ候ニ付、家來手ニテ四人討取、生捕一人、其外家來一人戰死、輕卒一人手負候趣、在所役場ヨリ申越候、猶委細之儀ハ、追々可申上候得共、先此段御屆申上候、以上。

十二月十八日　戸田長門守

戸田忠行家記

十九日、外國報告ノ議ヲ決シ、議定ニ命シテ、明日告文ニ署印セシム。

一今日之　御沙汰之趣、各其主人ヘ申入、否明朝可申出事、

一右承知之上ハ、加判之爲ニ、明日午刻、何レモ參　朝之事、

一越、土、薩家來一人ツヽ、公卿同伴、應接之事、

一公卿ニテ　勅使二人之事。春嶽私記

○春嶽私記ニ云、十八日、於宮中、外國ヘ御告諭應接ノ議事有之、勅書御治定、御璽及ヒ總裁議定加判、勅使可被發遣ト被決由、十九日、勅使發遣ノ旨被仰出、於御所家來御呼出、御達之趣如右。

○嵯峨實愛手記ニ云、外國ヘ御布令書決、衆議之後、議定、三宮、三卿等、參御前言上、被天許了、又云、同上勅使公董、光德朝臣ヘ伺定、御内意申渡了。

○十時維惠、攝津○柳河藩士、ヲ以テ、參與ト爲ス、十時維惠履歷書　又池田茂政、池田政詮、鍋島齊正、及ヒ小松淸廉帶刀○薩摩藩士ヲ召ス。

各通　松平備前守　池田信濃守
鍋島閒(閑)叟　小松帯刀

今般、御改政御一新ニ付、廣ク天下之人才御登用被爲在候、其方兼々被　聞召入候儀有之候間、早々登京可致　御沙汰候事。

十二月十九日

島津忠義、池田章政、鍋島直大家記

○藤堂高猷ノ老臣、復前請ヲ申ヌ、之ヲ許ス。

大學頭儀

病氣ニ付、一先歸國養生仕度旨奉願候處、何分相勝不申候ニ付、何卒速ニ　御暇被下置候樣、昨日再願仕候上、猶亦奉願候段、重々奉恐入候得共、何卒速ニ　御暇被下置候樣、偏ニ奉懇願候、以上。

藤堂和泉守家來

十二月十九日　藤堂歸雲

藤堂高潔家記

○高潔家記ニ云、十九日、歸國ノ儀、無據ニ付、不得已一先御暇願之通御聞濟ト、按スルニ、高潔ハ歸國ヲ許シ、井伊直憲ハ否ラス、蓋當時彥根藩上ニ一黨アリ、當路者ハ專ラ德川氏ニ從ハントシ、一黨ハ之ヲ拒ミ、密ニ勤王ノ事ヲ謀ル、藤堂氏ノ如キハ闔藩一意、德川氏ヲ奉ス、是ヲ以テ差異アルナリ。

○德川慶勝、自ラ大坂ニ赴キ、會、桑二藩ヲ措置セント請フ。

德川内府旗下之者共鎭撫方、會、桑二藩蒙　嚴命、早々歸國可取計旨、更ニ　御沙汰御座候趣、謹テ奉拜承候、右ハ兼テ　御沙汰之趣御座候付、精々周旋仕候處、何分遲延相成候ヨリ奉惱　聖慮、蒙再度之　命候段恐懼之至ニ奉存候、猶更精々盡力、早々歸國爲仕候樣可仕候、依之、御請奉申上候。

十二月十九日　徳川義宜家譜

○義宜家譜ニ云、右ニ因テ慶勝下坂、御主意徹底、鄙誠ヲ盡シ、鎭撫センコトヲ請フ。

十二月十九日

○市中取締三藩、舊東町奉行所、及ヒ附屬ノ簿書什器ヲ交付センコトヲ請フ。

今般、市中御取締被　仰付、就テハ是迄之於東町奉行所役所相開候様被　仰出候ニ付、右役所建物向ハ勿論、在來之諸品書物類等、悉皆三藩へ引渡相成候樣仕度奉願候、以上。

十二月十九日

本多主膳正家來　中神齋之助
青山左京大夫家來　坂東篤之輔
松平圖書頭家來　皆川誠藏

青山忠誠家記

○徳川慶喜、上疏シテ、近日更革ノ事、一二ノ藩幼帝ヲ挾ミ、私意ヲ逞スルニ出ルヲ論シ、其臣戸川安愛伊豆守○時ニ大目付タリ、ヲシテ齎シテ京ニ至ラシメ、又大ニ家門譜第諸藩ノ兵ヲ徴ス、是日、安愛、戸田忠至ニ因リ、奏狀ヲ岩倉具視ニ呈ス、松平慶永等、之ヲ聞キ、其大事ヲ敗ランコトヲ恐レ、安愛ニ說キ、歸テ慶喜ヲ諭サシメ、而シテ具視ニ就テ、其書ヲ請下シ、之ヲ中根師質ニ報ス、時ニ師質、既ニ大坂ヲ去レリ、

○慶喜奏狀

臣慶喜、不肖之身ヲ以テ、從來奉蒙無踰之寵恩、恐惑悚戴之至リニ不奉堪、乍不及夙夜不安寢食苦心焦慮、宇内之形勢ヲ熟察仕、政權一ニ出テ、萬國竝立之　御國威相輝候爲メ、廣ク天下之公議ヲ盡シ、不朽之御基本ヲ相立度トノ微衷ヨリ、祖宗繼承之政權ヲ奉歸、同心協力、政律御確定有之度、普ク列藩ノ見込可相尋趣建言仕、猶將軍職御辭退モ申上候處、召之諸侯上京、衆議相決候迄、是迄之通可心得旨　御沙汰ニ付、右參著之上ハ、同心戮力、天下之公議輿論ヲ採リ、大公至平ノ御規則相立度奉存候之外他念無之、鄙衷不空ト感戴仕、日夕企望罷在候所、豈料ンヤ、今度、臣慶喜ヘ顚末之　御沙汰無之而已ナラス、詰合之列藩衆議タニモ無之、俄ニ一兩藩戎裝ヲ以テ　宮闕ニ立入リ、未曾有之大御變革被　仰出候由ニテ、　先帝ヨリ御遺託被爲在候攝政殿下ヲ停職シ、舊眷之宮堂上方ヲ無故擯斥セラレ、遽ニ先朝譴斥之公卿數名ヲ拔擢シ、陪臣之輩猥ニ玉座近ク徘徊致シ、數千年來之朝典ヲ汚シ、其餘之　御旨意柄、兼々被　仰出候　御沙汰之趣トハ悉ク霄壤相反シ、實以テ驚愕之至ニ奉存候、假令　聖斷ヨリ被爲出候儀ニ候共、可奉抽忠諫筈、況ヤ當今　御幼冲之君ニ被爲在候折柄、右樣之次第ニ立至リ候テハ、天下之亂階、萬民之塗炭眼前ニ迫リ、兼々獻言仕候素願モ不相立、金甌無缺ノ　皇統モ如何被爲在候哉ト奉恐痛、臣慶喜目今之深憂此事ニ御座候、殊更、外國交際之儀ハ、　皇國一體ニ關係仕候不容易事件ニ付、前件之如キ聖斷ヲ矯候輩、一時之所見ヲ以テ御處置相成候テハ、御信義ヲ被爲失、後來　皇國之大害ヲ釀シ候儀ハ必然ト、別シテ深憂仕候間、最前眞之　聖意ヨリ被　仰出候　御沙汰ニ隨ヒ、天下之公論相決候迄ハ、是迄之通取扱罷在候、鄙言之趣　御聞受被成下、兼テ申上候通、公明正大、速ニ天下列藩之衆議ヲ被爲盡、正ヲ擧ケ奸ヲ退ケ、萬世不朽之御規則相立、上ハ奉寧　宸襟、下ハ萬民ヲ安シ候樣仕度、臣慶喜千萬懇願之至ニ奉存候、此段謹テ　奏聞仕候。

十二月　　　　慶喜

徳川慶喜實記
春嶽私記

○舊幕府諸藩ヘ達書

別紙　御奏聞狀、此度御差出シ相成候ニ付テハ、思召之程奉感激候面々ハ、人數召連、早々上坂候樣可被致候事。春嶽私記

○春嶽私記ニ云、十九日、戶川伊豆守殿、內府公ヨリノ御奏聞狀持參、昨夜上京、永井殿へ可被談積之處、御同人ハ下坂不在ニ付、無據戶田大和守殿へ被申談候處、不容易大事件故、明朝迄熟考可被致トノ事ニ而、今朝迄延引候得共、豆州ハ是非可指出ト被申立故、和州ヨリ岩倉殿へ被及內談由、何卒公ニモ御周旋ヲ以テ、御趣意御貫徹相成候樣トノ御沙汰モ有之趣被申上候得共、公ハ此頃中必至之御盡力ニテ、漸已ニ成功ニモ可相成眞際ニ及ヒ、於坂地ケ樣之御運ヒニテハ、甚以御當惑御殘念ニモ思召候故、猶御熟慮可被成候間、表向御奏聞之儀者暫見合セ候樣御挨拶ニテ退出ニ相成、豆州、吾藩邸ヨリ土老侯へ被罷出、御同樣御周旋之儀被相願候、容堂君モ御當惑ニテ、象二郎へ被仰聞、岩倉殿へ御內談之處、奏聞狀ハ今朝戶田和州ヨリ被致承知候得共、彼書面披露相成候テハ、自分迄モ最早夫切之事ト相成候故、和州へ申談、中山、正三之兩卿へハ內內被入一見候得共、其餘ハ決テ他見無之、岩倉殿ニテ掌握被致置候積之由、何分唯今之內、內府公御參　內之運ヒニ不相成候テハ不相適候へハ、象二郎等モ十分盡力致候樣、自然永井ニテ心配不行屆候ハヽ、尾、越ニ土侯指添下坂ニテ、御迎取ト申儀ハ相成間敷哉抔ト、被申聞候程之儀ニ有之由、戶川未刻ニ至リ參邸有之、土老侯、大和守殿モ御會集ニテ、坂地積鬱排泄ノ餘リニ出候除姦之拙策ヨリハ、岩倉殿迄モ如形御上京翹望之機會ト申、　朝意御奉戴之御誠意ヲ以テ、速ニ御參　內ニ相成候得ハ、天下之安堵、　朝廷之御安心、此上之御長策ハ有之間敷ト、代ル々々御說得相成候處、豆州モ大ニ落意感服ニテ、如何ニモ御同意奉存候間、御奏聞之使命ハ是切ニ仕、此表御盡力之御趣意ヲ以テ、坂地之方精々周旋可仕トノ事ニテ、即刻下坂有之、又德川家之周旋方穗積亮之助、荒井健次拜謁成願ヒ、內府公御上京之儀御盡力被爲在候樣懇願ニ付、公モ素ヨリ御同論ニテ、例之御含モ被成御坐候テ被仰聞候處、兩人雀躍悅服、健次ハ、直樣戶川殿ト一處ニ下坂可及周旋ト申上テ退去セリ、御奏聞狀之儀ハ、戶川殿御談之上、今夕尾、越兩侯へ御預ケ之事ニ相成、御奏聞之儀相止候ニ付、猶又、於坂地可及盡力段、鹿之介ヨリ雪江へ以急飛申越ス處、於彼地ハ、雪江御奏聞狀御差出ニ付周旋、不及力シテ歸京セルト行違ヒニナレリ、此日、於坂地辰半刻比、田中國之輔、雪江旅宿へ來訪、永井殿モ昨夜著坂相成由、右ニ付、猶又相談之上、巳刻比登城、

國之輔ト一處ニ永井殿ヘ逢對申込相待居候、御目附榎本對馬守殿、雪江ヘ逢度旨ニテ、於御目附部屋前、今度御奏聞ニ相成候御書附之由ニテ一通被相渡、右ハ昨日、戸川伊豆守殿ヲ以テ御奏聞ニ相成候、拜見之上、猶見込有之候ハヽ、申達候樣、拜見且寫取候事ニモ候ハヽ、大廣間御下段邊可然トノ事故、落手之上於御下段拜見、外ニ別紙有之、諸藩ヘ觸書ヲ指ス、御書面之御主意、誠以不容易御次第柄ニ付、一應寫取候上、尙又榎本殿ヘ逢對、御書面返上之上申達候者、御趣意之趣ハ一々無御據御次第ニテ、可申上樣モ無之候得共、　朝廷ニオイテ御採用之處ハ何共至難之儀ト奉存候、是ハ何方ヘ御指出ニ相成候哉ト申候處、帥宮ヘ戸田和州ヲ以被指出候御積之由被申候ニ付、宮又ハ其餘ニ兼テ御差含之御方ニテモ有之事ニ候哉ト申候處、夫ハ何モ無之トノ事故、夫ニテハ無策ト申物ニテ、御仕遂ケ難被成而已ナラス、　朝廷之御爲、御家之御爲ニモ不相成事ト奉存候、右故、京地之御評議ニテハ、何分御平穩ニ御上京奉願候積ニ候ヒシカト、此御書面出候テハ、最早十日之菊ト相成、何共當惑至極之段申述處、何トカ此上ハ御奏聞之趣、御採用之手段ハ有之間敷歟トノ尋ニ付、此上ハ此書面ヲ公議ニ被附候樣被遊ヨリ外ハ無之、左候ハヽ、御後難モ被爲在間敷歟ト申候得ハ、如何ニモ夫ヨリ外ハ有之間敷候得ハ、其處ヲ公ニモ御盡力被下候樣可被申上、此書面ハ大藏大輔樣、容堂ヘモ一通ツヽ差上候筈ニ申談置候ト申事ニ付、尾州ヘモ申談候テ不苦候哉ト申候處、諸藩之內拜見被仰付候向モ有之候ヘハ、聊不苦トノ事也、扨、何分鎭定難計事ト相成候ト被申候ニ付、伏見其外ヘ御人數被指出候ハ如何之譯候哉、如斯御書面被指出候ヘハ、猶以御恭順ニ不被爲在候テハ相濟不申、諸藩之人心モ、其御恭順之御美德ニ服從致居候事ニ有之候段申候處、　朝議之次第被尋候付、近況之形勢夫々申達ス、又被申候ハ、伏水ハ宿驛被廢ニ付、人馬並船賃等、妄ニ高價ヲ貪候ニ付、爲取締御人數被差出置、兵庫、西宮等ハ外國人モ致徘徊候付、御固之姿ニテ、實ハ兵力ヲ所々ヘ分チ、持口ヲ與ヘ、妄動ヲ禁候策之由、二條ニテモ、十二日ニハ二條通リヘ二十人計、竹屋町通リヘ七十人計脫走ニ付、其隊之頭々馳付立塞リ、先ツ我ヲ殺セト申遮リ止候程之事ト相成、最早被成方無之ト御下坂ニ被決候、會三千、桑千五百、幕五千計ヲ條城ヘ籠居サセヨトノ仰ニテ、一點之御動搖無之故、已ニ死ヲ以テ諫メ奉ラントセシ者モ有之程ニ及候得共、猶御動キ不被遊候ヒシハ、今日ト相成致感服候、御出城之砌モ、此處ヲ御明退キニテハ最早戰期無之ト、御

玄關前ヲ立塞キ御抑留申上候勢故、無御據御後門ヨリ御出ニ相成候、今ニモ聊タリ共激候得ハ直樣破裂、拙者共モ難制候ガ、江戸ヨリ三兵押來リ候ハヽ、嘸々ト唯今ヨリ心配之儀等物語有之、退坐之上、右御書面國之輔ヘ開示、此趣ニテハ持參之策ハ迚モ行ハレ不申、永井殿モ周旋處ニハ有之間敷ト申合候內、永井殿逢對ニテ、右御書面戶川豆州殿持參ニテ、上京之上、永井殿ヘ申談指出候樣トノ御仕向ニ有之處、行違ヒニ相成ル事ニテ、此處ヘ餘事申出候テモ詮ナキ事故、彼一策ハ主張無之由、扨御書面ハ如何可相成哉トノ尋ニ付、公議ニ附スル見込申達候處、如何ニモ左樣ニ有之度、其處折角御周旋相願度トノ事ニ付、一通ハ正面ニテ諸侯議定之方ヘモ御指出シ相成候樣致度、夫ヲ以テ周旋之致方モ可有之ト申談候處、其運ヒニ相成有之歟モ不存候得共、今一通寫可被相渡トノ事也、物語之次手ニ、高野山ヘ鷲尾殿屯兵、御代官所ヘ通達、並村人注進等之書面被示、ケ樣之儀有之故、愈沸騰難制候、是等ハ如何致シ可然トノ事ニ付、是モ議定ヘ御指出、御伺之方可然ト申談、寫一通被相渡候事ニ決ス、從是ハ御書面御指出ニ付テハ、益御恭順被爲在度ト申儀ヲ懇々相願ヒ退坐、永井殿ハ今暫滯坂之由、平山殿逢對ニテ御奏問狀寫一通被相渡、見込被相尋候付、公議之外見込無之、今四五日御見合セ被下候ヘハヨロシカリシニト申達候處、好機會ヲ失ヒ殘念之由ニテ、種々議論有之、兎角降官削地之不當ヲ被申立候付、今日ト相成候テハ、決シテ夫等之儀ハ無之ト論辨ヲ盡シ、稍點頭ニ及ヒシカトモ、猶被申候ハ、右之儀ハ跡ニイタシ、先ツ特　命ヲ以被爲召候テハ如何トノ說有之ニ付、京地之事情一々申達退坐、右等之次第ニテ、於此表周旋之致方モ無之、且京都之樣子モ懸念ニ付、國之輔申談シ、十二字後、解纜歸京ス。

○毛利元蕃淡路守ノ子元功、平六郎、及ヒ吉川經幹監物○食邑六萬石、後岩國藩ト爲ル、老臣宮莊某、主水、京ニ至ル、毛利元德家記

二十日、參與長谷信篤ヲ以テ、議定ト爲シ、西園寺公望ヲ參與ト爲シ、五條爲榮、柳原前光、侍從○光愛ノ子、西四辻公業ヲ參與助役ト爲ス。

議定　　長谷三位

參與　西園寺三位中將
參與助役　五條少納言
柳原侍從
西四辻大夫
右之通被　仰出候事。有栖川宮家記
○附錄二十一日參與役所ヨリ心得達
萬里小路右大辨宰相　長谷三位
右、是迄名宛之處、以後
萬里小路右大辨宰相　烏丸侍從
右之名宛ニテ、可被差出候事。有栖川宮家記

○幟仁親王中務卿○有栖川宮、ヲ一品ニ敍ス。

二品幟仁親王
右可一品
中務、常授筆道、勵勤無窮、子荷重任、公武賞功宜授榮階、式光寵章、可依前件、主者施行。
慶應三年十二月二十日
二品行中務卿幟仁親王宣
從四位下行中務大輔卜部朝臣敎久奉
正四位行中務輔殿頭左大史算博士小槻宿禰輔世　行
有栖川宮家記
大內記新作留

○三公納言連署、御璽等、九日所載、熾仁親王二品宣旨ニ同シ、告ノ下、一品幟仁親王ニ作ル。

○准后慈性入道親王輪王寺宮退職後、大樂王院ト號ス、薨ス、十一月二十四日、本日ヨリ三日朝ヲ輟ム、時ニ内閣多事、議參事ヲ執ル常ノ如シ、

輪王寺准后宮薨去ニ付、今二十日ヨリ三ケ日廢朝被　仰出候事。有栖川宮家記

○池田茂政ノ召命ヲ止メ、加藤泰秋ニ代テ、西ノ宮ヲ守衛セシメ、中川久昭ノ請ヲ允シテ、京都市中巡邏ヲ罷ム。

備前少將

昨十九日、上京之儀　御沙汰ニ相成候得共、深　思召之旨モ被爲在候ニ付、在國ニテ彌可奉公、更ニ被　仰出候事、

但、西ノ宮札之辻固之儀、是迄大洲ヘ被　仰付置候處、此度御免相成候間、其跡可相替　御沙汰候事。

十二月二十日　池田章政家記

○加藤泰秋家記ニ云、警衛罷免ノ達書ハ原記テ失ス、備前藩兵ト現ニ交代セシハ、明年正月十一日ニアリ。

○

一昨日御呼出、御書渡御座候洛中洛外見廻被　仰付奉畏候、然ル處、是迄、日御門前御守衛場ニ相詰候人數ハ、僅ニ士分之者二十人餘、且足輕之者少々附屬仕候位ニテ、迚モ御受難申上奉存候、其上去ル十七日、正親町少將殿爲御警衛、士分之者差出候樣被　仰付、御受申上、右人數ヲ以テ隔日交代爲相詰候儀ニ付難行屆、依テ見廻之儀蒙　御免候樣奉歎願候、此段宜鋪御採揚之程奉願候、以上。

中川修理大夫内

佐野源太郎

丁卯十二月十九日

○本日批紙

願之通、見回被　免候事。中川久昭家記

○長門藩兵ノ請ヲ允シテ、仁和寺宮守衛ノ命ヲ止メ、有栖川宮ノ衛兵ヲ增サシメ、指華入京日載尾張藩兵ノ仁和寺宮守衛ヲ罷ム。徳川義宜家記

○淺野茂勳、松平慶永、上書シテ外國告文ノ異見ヲ陳シ、德川慶勝、署印ヲ辭シ、山内豐信モ亦別ニ所見アルヲ以テ、之ヲ辭ス、是ニ於テ、姑ク其事ヲ止ム。

今般、外國御布告之儀ニ就テハ、過日御下問被成下、其節愚意之趣奉申上候處、御決議被爲在候御草稿ヲ以テ、委細家來共ヘ　御沙汰之趣奉畏候得共、御文中左之件々、如何可有御座哉、心附之儘奉申上試候、

一列藩會議ヲ興シテ、汝ニ告ルコト云々、

右ハ、列藩ト御坐候得共、即今、在京之藩纔ニ四五藩ニ過不申、過日奉申上候通リ、斯ル御大事ニ候得ハ、爾々之御文面相當可仕、尤御差急之儀ニ候得ハ、藩々在京之重臣ナリト　御沙汰被爲在候テハ、如何可有御坐哉、

一其未定之間ハ、舊トノ條約ニ從フヘシ、

右ハ、是迄之條約、得ト御承知被爲在候儀ニ可有御坐候ヘトモ、近況之次第運合モ可有御坐候得ハ、夫等之所　御糺問之上、御布告ニ不相成候テハ、却テ御不都合相生候儀モ難計、第一御國體ニ關係仕候御大事之儀ニ御坐候得ハ、深　御遠慮被爲在度、尤御急務之事件ニハ可有御坐候得共、呉々モ不容易御儀ト奉存候間、猶又愚意之處奉申上候、以上。

十二月二十日　　安藝新少將

淺野長勳家記

○松平慶永答議

昨日被仰出候趣、大藏大輔奉謹承候、外夷ヲ見ル、尙古ノ漢土ノ如シトノ　叡慮乍恐奉感佩候、不肖之大藏大輔、職ヲ議定ニ承候ニ付、外夷ヘ御布告ニ　御諱御璽ヲ被爲藏候末ヘ加判仕候儀、蒙命恐汗之至奉存候、萬世　皇國之基礎ヲ被爲建候御大事ニテ、愚衷可默止儀ニ無御坐候ニ付、差向可申上候、今般御大政更始之折柄、外夷モ刮目罷在候處、諸藩列侯僅ニ五藩而已ニテ、夫モ多クハ隱居又ハ世子等ニ候ヘハ、即今之不束、外夷國情通知之事故、全ク天下ノ會議ヲ　聞召テノ御處置トハ不奉存、御手薄ニ可奉存哉、深憂ニ不堪奉存候、御告文之内ニ、列侯會議之上ト被爲在候通リ、段々列藩モ上京可仕候間、仰願クハ會議ヲ被爲待、篤ト公議之上御布告ニ相成候共、敢テ不遲哉ト奉存候、夫迄之處ハ、外夷ヨリ迫テ不伺出樣ニハ、如何樣共被成方モ可有御坐哉、何分　勅使御下向、一度降命有之候上ハ、直ニ世界之通法ヲ以テ、都下ニミニストル指置候儀可奉願、且是ヨリ誰人カ應接可仕哉、參　朝モ仕度、其儀モ奉願候ナト申出候ハヽ、甚御煩敷儀ト奉存候、呉々、當分之處ハ兎モ角モ御諭置ニ相成、尙厚ク天下之議ヲ被爲盡候樣幾重ニモ奉願度、今日、此處ニ遺憾無之樣御盡シ無御坐候テハ、後日之大害難測、至重至大之儀、恐懼之餘リ、不憚忌諱、議定之廉ヲ以テ、右之趣、微臣兩人ヲ以奉申上候。

酒井十之丞
毛受鹿之介

春嶽私記

○

外國ヘ御布告書加判ノ儀ニ付、今日午刻參　内仕候樣被　仰付奉畏候、然ニ右應接ノ次第、御國體變換御初政ノ時ニ當テ、内外危疑未定、萬國ヘモ關係致シ候事柄、實ニ以テ不容易、就テハ書面加判等ノミノ儀ニテ無之、厚ク愚考之筋モ有之候得共、猶志慮ヲ盡不申テハ急速言上難仕御坐候、依テ、今日參　内ノ儀ハ御斷申上、次日獻言可仕樣被　仰付度奉存候也。

十二月二十日　松平容堂

山内豐範家記

○春嶽私記ニ云、今朝御所勞ノ趣ヲ以テ御斷被仰上シニ、調印御違背ニ於テハ、勅使可被指向ナト橋本殿被申出由ニ付、十之丞、鹿之介ヲ以テ被及御建議候處、趣意書取指上候樣御差圖ニ付、兩人ヨリ差上ル、又私云、此調印之儀、尾侯ハ御斷リ被仰上、土老侯ハ御熟考之上ナラテハト被仰立、相調ヒ難ク、　勅使指添被命候後藤象二郎、三岡八郎モ御斷申上ニ付、此一件ハ遂ニ御遷延ニ相成タリ。

○大久保利通書柬ニ云、二十日、外國御布令一條御決定、議定職、外國掛正三卿趣之之處ニ御治定被爲在、今日、爲御加判五藩被命參　朝候處、段々異論相立、越卿ハ外國掛モ御斷、後藤モ同斷、容堂卿御建白モ有之、終ニ不相行候、必定、德川氏ヲ憚リ候テノ事ト被伺候。

○池田德澄、修理○因幡藩支封主、後鹿奴藩ト爲ル、食封三萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、建部政世、京ニ至ル。建部撰家記

○池田慶德上申書

是迄傳　奏御方ヨリ被相達上京、並名代等有之候得共、此度御變革御一新ニ付、更ニ被爲　召候間、以前御屆有之分モ取調可申上旨、分知松平修理方ヘ御演達御坐候之旨奉畏候、右修理儀、折節江戸表ヘ相詰罷在候ニ付、國元本家ヘ往復彼是手間取候次第モ有之、被仰出之期限延引仕恐入奉存候段、傳　奏御方ヘ御斷申上置候處、去ル五日、江戸表出立、今日京著仕候筈ニ御坐候、依之、此段申上候。

十二月二十日　池田德澄家記

復古記卷十一　終

總括兼纂修
一等修撰　臣長松幹

校勘
一等修撰　臣　長　　　　熒
一等協修　臣　四屋恒之
校錄
一等書記　臣　澤渡廣孝
繕寫
二等繕寫生　臣　小川長和
二等繕寫生　臣　小島　　春

復古記　巻十二

慶應三年丁卯十二月二十一日ニ起リ二十三日ニ至ル

○十二月

二十一日、熾仁親王、伯父慈性親王、ノ喪ニ居ル、特命シテ、除服朝參セシム。

慶應三年十二月二十一日　宣

熾仁親王

除服出仕

雖廢　朝中無除服出仕之例、非常御時節、且爲總裁職間、以格別之　思召、別　勅出仕被　宣下。嵯峨實愛切紙留 有栖川宮家記

○長谷信成ヲ以テ、參與助役ト爲ス。○長谷信成履歴書

○永井直諒、及ヒ高松藩兵ニ命シ、孝明天皇ノ小祥忌祭ニ、泉涌寺般舟院ヲ守衛セシム、又直諒ヲシテ京都防火ノ事ヲ掌ラシム。

永井日向守

來ル二十八日、二十九日、於泉涌寺　孝明天皇御一周忌御法會被行候ニ付、山内爲警衛、右場所ヘ相詰可申事。

永井日向守

自今、京都火役被　仰付候、御時節柄之儀、早々上京滯在勤仕可有之事、

猶以、本多主膳正、青山右京大夫、松平圖書頭等へも被　仰付置候間、萬端可申合事。（永井直諒家記）

○松平賴聰家記ニ云、來ル廿八日、廿九日、於般舟院　孝明天皇御法會ニ付、御警衛被　仰付、人數差出申候。

○舊幕府兵、（新選組及ヒ歩兵千餘人）猶伏見ニ在リ、會、桑二藩兵モ亦稍々北上ス、乃チ田宮篤輝ニ命シテ、伏見取締ヲ兼ネ、薩、藝、長、土四藩兵ヲシテ巡邏警備セシム、既ニシテ、藝、土二藩之ヲ辭ス。

○田宮篤輝へ達書

伏見市在、彼是混雜之趣モ相聞候ニ付、早々出向、可致取締　御沙汰候事、

但、京師取締之儀被　仰付置候上之事ニハ候得共、卽今之處、兼勤可有之、且長州、土州、薩州、藝州等へ巡邏被　仰付候間、爲心得相達候事。（德川義宜家記）

○

各通　薩州　藝州　長州　土州

伏見表今度御變革、彼是多端之虛ニ乘シ、狼藉之者橫行、人心不安趣相聞候ニ付、急度巡邏鎭定可有之　御沙汰候事。

但、伏見市在取締之儀ハ、田宮如雲へ兼勤被　仰付候、尚又巡邏之儀、長州、土州、藝州同樣被　仰付之間、爲心得相達候事。（島津忠義家記 毛利元德家記）

○嵯峨實愛手記ニ云、廿三日、藝、土、伏見巡邏斷候事。

○書中、藩名互ニ用フ、山內豐範家記、二十二日トス、又伏見ノ警備ヲ辭セシコト、二家家記竝ニ之ヲ佚ス。

○（附記）春嶽私記ニ云、去ル九日、變革已來、伏水廢驛ニ相成候ヘ共、奉行屋敷ニハ千餘人罷在、加之新撰隊、竝會兵等坂地ヨリ被指出被置候處、近日　朝廷ヨリ薩、長二藩へ巡邏被命故、嚴重之警備ニテ、兵隊戎裝ニテ辻々相固メ、唯今ニモ事ノ起ル

へキ形勢故、市中老若離散、器械取片付、砲聲一響ニ及候ハヽ、立地ニ戰場ト可相成有樣ナリキ。

○植村家保ノ請ヲ允シテ、傳法川守衛ヲ罷メ、其兵ヲ京師ニ召ス。

主人駿河守儀、攝州傳法川元松平備前守警衛之場所、昨寅年ヨリ警衛被　仰付、人數差出置候、先日來、駿河守儀、江戸表ニテ所勞罷在候ニ付、在京詰合之者ヨリ、非常御用奉伺候處、市中見廻之爲人數可差登旨被　仰付、難有仕合奉存候、方今不容易之形勢ニ付、攝海防禦嚴重ニ仕候得共、小藩少人數ニ付、不行屆之儀無之樣ニ苦心罷在候砌、今般市中見廻被　仰付候ニ付テハ、傳法川警衛之儀被　免、右場所出張人數登京仕、一手ニ見廻リ仕候ハヽ、少ハ御奉公之一助ニ仕度奉存候、誠ニ小藩ニテ文道武術甚以未熟ニテ、御用ニモ難相立ト奉恐入候、何卒萬一之御高恩奉報上度、日夜苦慮仕候ニ付、攝海防禦追テ各藩へ被　仰付儀ト奉存、大和高取ハ近鄰之地ニ付、御親兵等被差向候ハヽ、弊藩城内ヲ御本陣被　仰付候ハヽ、駿河守儀外宅仕候テ、些細之御用ニ至ル迄、一々被　仰付候ハヽ、乍不及拔テ盡力仕度奉存候、何卒小藩之儀、深　御賢察被成下置、傳法川警衛被免、且弊藩城内　御本陣之御用意被　仰付候ハヽ、駿河守所勞中ニ御座候得共、押テ早々參京仕候樣申遣度奉存候、右之段奉願上候、以上。

植村駿河守家來

十二月二十日　　村田丈四郎

植村家壹家記

○本條、文意通暢ナラス、蓋シ誤脱アラン。

○本日達書

傳法川固之儀被　免候間、人數引揚、京師詰タルヘク被　仰出候事。

十二月　　植村駿河守

植村家壹家記

○池田德澄ノ上京ヲ嘉奬シ、宗家ト協同從事セシム。

於關東申付候用向モ有之處、重　朝命迅速上京神妙　思食候、他日御用之儀モ候得共、差向之處本藩申合、奉公可有之　御沙汰之事。池田德澄家記

○是ヨリ先、大野藩兵嵯峨關門ヲ守ル、慶應元年ニ在リ、關門、原長防ノ爲ニ設ク、是ニ至リ、去就ヲ稟請ス、令シテ、其戍ヲ撤ス。

能登守嵯峨御警衛關門之儀ハ、先年長防御所置御取掛リニ付被　仰付、自後御守衛第一嚴重相守罷在候之處、今般毛利家寛大之御所置被　仰出候上ハ、兼テ被　仰出候　御趣意、猶以相守可申儀トモ不被奉存、其上、昨今關門近所天龍寺、並隣寺壽寧院等、右毛利家ヨリ申込、既ニ借請相成候由、能登守人數屯所藏光庵迚モ、何時人數立退呉候樣、庵主ヨリ强テ申出候哉モ難計、左候時ハ、能登守人數屯所之儀、甚以當惑之至、實ニ進退相極可申、就テハ時宜ニ寄リ、無據人數一旦引拂不申候テハ不叶場合モ可有御座、其期ニ臨ミ、右之通取計候テ不苦儀ニ御座候哉、此段奉窺候、以上。

土井能登守家來

吉田拙藏

十二月十九日

○本日批紙

窺之通、是迄之警衛被免候事。並土井利恒家記

○德川慶勝、松平慶永、既ニ德川慶喜ノ奏狀ヲ請下ス、乃チ田中輔、中根師質ヲシテ、再ヒ大坂ニ赴カシム。

○春嶽私記ニ云、雪江、二十日夜酉半刻比上著之處、亥刻後、國之輔ヨリ御奏聞狀二侯ヘ御預ニ付テハ、前議之通リ、今一應

申上度ニ付、明朝ヨリ下坂之積リ相談ニ付、其段相伺フ處、雪江ニモ下坂候樣被命候、二十二日朝、雪江、國之輔著坂、登城之處、永井殿、戸川殿上京不在ニ付、平山殿ヘ逢對、御上京無之テハ不相適次第、國之輔ヨリ逐一ニ申述、夫ヨリ京地之形勢等及詳說、漸ク聞込ニ相成、雪江儀ハ拜謁之上、見込之次第及言上度申達候處、平山殿ニハ　朝廷ヨリ御上京被仰出樣被致度趣ニ付、其議ハ隨分周旋行屆可申段申談退坐、午後伊賀殿、豐前殿、平山殿、雪江ヘ逢對、見込之趣被尋候付、　朝廷諸卿、並諸藩士之事情形勢等委曲詳辨、何分好機會候ヘハ、此時御上京ニテ、大勢御挽回御靜定無之テハ不相適趣反復申陳候處、何レモ大ニ落意ニテ、　朝廷之　御沙汰次第御上京ニ可相成トノ談判決著ニ付、御官祿御一條モ御決議被下候樣ニト申述候處、夫ニテハ六ケ敷、其儀モ共々ト申事ニテハ、此方ヨリ之被仰上ハ速ニ　聞召ニ相成、彼方ヨリ之　御沙汰ハ無之ト申樣之事ニ相成時ハ、其場ニ及ヒ何共被成方無之事ト可相成候、欺ヲ受テハ後悔詮ナシ抔ト疑念論ニ相成、難相決ニ付、下書指出シ、

今般、辭職被　聞召候ニ付テハ、辭官仕度、且　王政復古ニ付、政府御用途之儀ハ、天下之公論ヲ以テ、所領ヨリ指出候樣仕度奉存候事、

ケ樣之御次第ヲ以テ、尾、越迄御請ニ相成候ヘハ、尾、越ニテ、又夫ヲ品能書取、指出候樣之御都合ニ相成候テハ、如何ト申談候處、サラハ是ヲ以テ談見可申トノ事ニテ被引入、良久有之、豐前殿、平山殿逢對ニテ、二侯ヘ御談ニ可相成書面、十分之幕意ヲ以テ認タルヲ被示、ケ樣ニテハ如何ト被申候付、國之輔ト共ニ種々辨論、文面之圭角悉ク減削致加筆候處、夫ニテ談見可申トノ事ニテ被引入、又良久有之、伊賀殿、豐前殿、平山殿逢對ニテ、先頃官位一等ヲ降シ、領地二百萬石ヲ被削候段、降　勅之風聞書致流布、夫ヨリ猶更氣立居候處故、先刻之書面筆削之通相成候テハ、迚モ落合難出來、原文之通リナラテハ鎭撫ニ難及ト被申出ニ付、全國高割云々之文段、尾、越ニテケ樣之趣之書取ニ相成候テハ如何ト、猶又潤色イタシ申達、其談ニテ被引入、又良久有之、伊賀殿、豐前殿逢對ニテ被申候ハ、種々ト申談見候得共、一字之增減モ不相適、原文之儘ナラテハ落付不申候事ニ相成候間、何分此通リニテ御盡力相成候樣致度ト、困難無體之談ニ付、兩人猶又申談之上、セメテハ文段前

後ニ相成候様致度ト及談處、伊賀殿矢立ヲ取立サレ、加筆之上被引入、右原文加筆如左、

辭官之儀者、　朝廷之御沙汰次第ニ可仕、且政府御用途之儀ハ、〔全國之高割ヲ以相供シ至當之儀ニ付〕追而以天下之公論（全國ノ高割ニテ相供候様）御決定相成可然事、原註、私云、朱書ハ伊賀殿加筆ノ趣ヲ寫ス○勾畫及行間ノ細書十一字ハ朱書ニ係ル、今之ヲ畧書ス、

良久有之、書面文段申立候通リ、前後ニ引直シタルヲ御目附設樂備中守殿ヲ以被相渡、亥刻過退出ス、但、上京　朝命ニ出候様トノ周旋之爲ニ、戸川殿又々被上候事候得共、段々兩人申立候趣ニテハ、御官祿一件未定之内、　朝命候テハ甚御不都合、大難ヲ來シ候ニ付、兩人上京候迄、戸川殿滯京示談相成候様、急便被申越由、伊賀殿物語有之、雪江、二十三日夜亥刻過京著。

○徳川茂承、將ニ京ニ至ラントス、疾ヲ以テ大坂ニ留リ、荏苒日ヲ彌ル、乃チ姑ク藩ニ就テ疾ヲ養ハント請フ、是日、之ヲ許ス。

私儀病氣罷在候得共、押テ當月九日國許出立仕候處、道中寒氣相襲、持病再發仕候ニ付、無據滯坂、精々加養仕候得共、兎角爾々不仕、旅中ニテハ十分之醫療モ難行屆、自然上京遲々相成、誠ニ以奉恐入候ニ付、一ト先歸國之上、精々加養仕、少々ニテモ快候ハヽ、速ニ上京仕度奉存候、乍恐、情實　御汲察被成下、一ト先歸國之儀、　御許容之程伏テ奉懇願候、誠惶謹言。

十二月　　紀伊中納言

○本日批紙

願之通被　聞食候、但、所勞快氣次第早々上京可有之候。（竝徳川茂承家記）

二十二日、萬機ヲ親裁シ、博ク公議ヲ採リ、舊幕府ノ善政良法ハ、舊ニ仍テ變更セサルヲ告諭シ、直言讜議シテ、忌憚スル所勿ラシム。

徳川内府、宇内之形勢ヲ察シ、政權ヲ奉歸候ニ付、　朝廷ニオヰテ萬機　御裁決被遊候ニ付テハ、博ク天下之公議ヲ取リ、

偏黨ノ私ナキヲ以テ、衆心ト休戚ヲ同フシ、徳川祖先之制度美事良法ハ其儘被差置、御變更無之候間、列藩此　聖慮ヲ體シ、心附候儀ハ不憚忌諱極言高論シテ、救繩補正ニ力ヲ盡シ、上勤　王之實効ヲ顯シ、下民人心ヲ失ハス、　皇國ヲシテ一地球中ニ冠超セシムル様、淬勵可致旨　御沙汰候事。徳川義宜家記 藤堂高邦家記

○添書

別紙之通被　仰出候ニ付、其領内不洩様、領主ヨリ篤ト可申渡候事。諏訪忠禮家記

○高邦及諸家記、二十五日トス、蓋漸次發令セシモノナラン。

○荒川良知甚作○尾張藩士ヲ以テ、參與ト爲ス。○徳川義宜家記

○義宜家記、宣旨ノ原記ヲ失ス。

○徳川慶勝ノ請ヲ許シ、自ラ大阪ニ赴キ、期ヲ刻シテ、其功ヲ奏セシム、慶勝、其期ヲ緩セシコトヲ請フ。

尾張大納言

頃日被　仰含置候筋ニ付、段々盡力之處、華城往返彼是難行屆次第モ有之、自身下坂、死生之間ニ立候テモ、御趣意御徹底ニ可至様志願之趣ニテ、今日ヨリ御暇願度旨、始終出格之心得神妙ニ被　思召候間、願之通被　仰付候、但、去九日以來、日日物議ヲ生候事論、尾、越周旋之廉不擧之故ニ付、此上ハ、來二十五日中、三日ヲ限リ成功可有之候、右期日ニ至リ尚是迄之如ク遲延之儀被申出候テモ、於　朝廷情決テ不行屆件々モ有之候間、前件之通、彌以精々盡力可致被　仰出候事。徳川義宜家記 春嶽私記

○

願之趣モ有之、別紙之通被　仰出候、随テ復古之初ヨリ、偏ニ被爲的目候儀ハ、尾、越周旋、徳川内府ヨリ言上之廉成否ニ有

之候間、各其分可心得候、尚又海外各國御布令之事ニオヰテハ、迅速御所置可然御確定之上、段々言上之向モ有之、旁、昨今之御運ヒニ至候得共、越、土、藝初、下参與輩被（此間脱誤アラン）出建言之次第、其情實モ亦難默止被　思召候間、急場右期日ヲ限トシ、御所置可被遊候、此段爲心得被　仰下候事。（春嶽私記）

○春嶽私記ニ、尾老侯、兼テ御沙汰モ有之、御周旋ノ會、桑歸國件、今以遷延相成候ニ付、御下坂御暇御願ニ相成處、別紙ノ通御指圖濟ニ相成ト見ユ、案スルニ、達書中、尾、越周旋不擧之故等ノ語ニ據レハ、專ラ會、桑歸國ノ事ノミニ非サルニ似タリ、然レトモ、辭官獻地ノ事ニ關スレハ、慶勝、慶永二人ニ命セラルヘシ、決シテ慶勝一人擔當スルノ理ナシ、且之ヲ岩倉、嵯峨二氏ニ質スニ、會、桑ノ事ヲ主トセシ様ニ覺フト、因テ錄シテ後考ヲ俟ツ。

○

謹テ御請奉申上候、臣慶勝下坂仕、御趣意徹底仕候様、鄙誠ヲ相盡度奉願候處、蒙　勅許難有仕合奉存候、然處臣慶勝等周旋之廉不擧故ヲ以テ、此上ハ來ル二十五日中、三日ヲ限リ成功可仕旨　勅意之趣、誠ニ以恐懼之至奉存候得共、坂城ニオヰテ多人數之儀ニ候間、一々說諭仕候テ、一言之間ニハ難行屆、且道程往返之時刻モ御坐候間、御刻日數ニテ可奏成功ハ難行屆奉存候、臣慶勝熟考仕候ニハ、今般　皇國御維持之爲　朝政御一新之御趣意ニ被爲在候得ハ、不動干戈、天下之蒼生得其所候様相運候方、時日遷延仕候共、　天意ニ相叶候儀ト奉存候間、何卒日數遲速之儀ハ、別段之　天恩ヲ以テ　御許容被下置候様偏ニ奉懇願候、臣慶勝不堪呼　天闕哀訴之至、誠恐誠惶頓首頓首。

十二月　　大納言慶勝上

（徳川義宜家記）

○山内豐信、上書シテ、外國ノ報告ハ、列侯會議ノ後ニ付シ、姑ク徳川慶喜ヲシテ還政ノ事ヲ報セシメンコトヲ建議ス。

當時御政體御變革ニヨリ、速ニ外國ヘ御布告當然ノ御事、右御告文ハ　朕ハ列侯會盟ノ主ト被遊候御儀、乍恐今日ニ於テ事理的當ノ御文體ト奉拜見候、然ルニ、此儀　朝廷御新政ノ始、尤重大ノ事件ニ付、猶又反覆愚考仕候處、只今ノ形ニテハ、未タ御政體維新ノ鴻基、夫々御順序相立不申、殊ニ闕下ニ相會候諸侯、僅ニ五六藩而已ニテ、御告文列侯會盟ノ主ノ御本意、未タ全ク被行不申、且外國應接ハ、是迄幕府ヘ御委任ニ付、其取扱ノ次第モ可有之、然ルニ、只今此儘ニテ俄ニ御布告ニ相成候テハ、御文體ト御事實ト致齟齬、却テ外國ニ於テモ疑惑ヲ生シ可申、依テ申迄モ無之候得共、德川內府モ向後ハ列侯ノ地位ニ被閣候上ハ、歸洛有之、廷議ニ相參シ、召ノ諸侯モ未致到著者ハ、迅速致上京候樣被命、內府ハ勿論、天下諸侯ノ衆議、朝廷ニテ御參考、御國體至當ノ公議ニ御審決、後日毫髮ノ遺憾無之樣被遊、其上ニテ早々御布告ニ相成候ハヽ、誠ニ以テ列侯會盟ノ主ノ御事實被相行、皇威外國ニ致光輝可申ト奉存候、先其迄ハ、幕政ヲ　朝廷ニ奉還候德川內府ヨリ一應外國ヘ演舌置候樣被命、可然儀ト考慮仕候。

十二月二十二日　　松平容堂

山內豐範家記
晚翠樓叢書

○本日、加藤明實モ亦奉答書ヲ上ル、異議ナキヲ以テ略ス、其餘諸藩原記ナシ。

二十三日、林某左門○尾張藩士、ヲ以テ、參與ト爲シ、參與三岡公正、及ヒ某ヲシテ、會計ノ事ヲ管督セシム。

今度爲徵士參與職被　仰付、御用金穀取扱方之儀、取締可致　御沙汰候事。

十二月　　林左門

追テ、學習院ヲ以テ、卽今之處假ニ金穀出納所ト被定候間、同所ヘ出勤可有之候、

但、越藩三岡八郎外ニ執次二人、同役ニ被　仰付候間、右申合勉勵可有之候事。德川義宜家記

○　三岡八郎

聞食入候儀有之、御用金穀取扱之儀、取締被　仰付候、尤參與之儘勤仕可致　御沙汰候事。由利公正履歴書

○堀親義左衛門尉○飯田藩主、食封一萬五千石、ヲシテ般舟院ヲ守衛シ、永井直諒ニ、火元見役ヲ兼シム。

○　堀左衛門尉

般舟院警衛被　仰付候事。堀親廣家記

永井日向守

右、自今火元見役被　仰付候事。永井直諒家記

○鍋島茂實、松平定安ノ家臣、明春京都警衛ノ事ヲ稟問ス、是日、批シテ、仍ホ前命ニ從ハシム。

肥前侍從内

來正月ヨリ三月迄、京都三ヶ月詰御警衛上京被　仰付旨、去ル朔日被　仰渡候、右ハ何レ之場所御警衛仕儀ニ御座候哉、此段奉伺候、以上。

十二月十五日　百武作右衛門

○本日批紙

三ヶ月詰ハ是迄通候間、人數上京可有之、場所之儀ハ追テ　御沙汰之事。鍋島直大家記

○

主人出羽守儀、來辰正月ヨリ三月迄、京都三ヶ月詰御警衛上京被　仰付旨、當月朔日傳奏衆ヨリ御達有之候處、御政務御改革ニ付テハ、右御警衛上京之儀、如何相心得候テ宜敷御座候哉、此段奉伺候、以上。

出露少將留守居
津川六郎右衛門

十二月十五日

○本日批紙

三ヶ月詰ハ云々。文大ニ同シ、鍋島直大ニ同シ、松平定安家記

○案スルニ、二家稟請スル所異ニシテ、批文ハ則同シ、蓋シ其同一ノ事ニ係ルヲ以テ之ヲ別タサルノミ。

○京都市中取締三藩、防火ノ事、舊町奉行ノ例ニ因リ、専ラ巡視ヲ主トセンコトヲ稟請ス。

永井日向守殿ヘ、自今京都火消之儀被　仰付、御時節柄早々御上京、御滯在勤仕可有之、且三藩ヘ可申合旨被　仰出候趣ニ御座候得共、三藩火役之儀ハ、是迄町奉行所ニテ勤來候邊之振合ヲ以テ、市中御取締方専一ニ相心得候樣仕度ト奉存候、此段奉伺候、以上。

本多主膳正家來
中神齋之助
青山左京大夫家來
坂東篤之輔
松平圖書頭家來
皆川誠藏

十二月二十三日

青山忠誠家記

○忠誠家記ニ云、永井日向守消防道具不揃ノ旨申出候ニ付、四五日乃至十日位、是迄之通可心得旨、即時橋本少將殿ヨリ

口達有之。

○井伊直憲、疾ヲ力メテ、京師ニ留リ、王事ニ服セント請フ。

私儀病氣今以快起不仕候ニ付、爲養生歸邑之儀、且御用柄等被　仰付被下度奉願候處、思食旨モ被爲在候御趣ヲ以テ、精々加保養、今暫滯京可仕旨被　仰出畏難有仕合奉存候、謹テ　御沙汰之趣熟考仕候ニ付テハ、最早歸邑可仕御時節柄ニテハ無御坐、乍病中モ斷然奮發、死力ヲ盡シ　禁闕ヲ守衞仕度奉存候ニ付、御用筋被　仰付度、此段奉願候、以上。

十二月二十三日　井伊掃部頭

井伊直憲家記

○附錄大久保利通書柬ニ云、紀州勤　王ヲ唱候事、

右ハ、是迄尊幕ヲ主張シ候三浦久太郎、津田某暗殺ニ逢ヒ、死ニイタラスシテ歸國イタシ、正議之論相立、安藤ノ類等、國論ヲ盛返シ、有志ノ者ヲ擧ケラレ、横井次大夫ト申者抔上京ニテ、追々面會イタシ候處、隨分模樣ハ變シ候樣子ニ御座候、紀州モ此節依召大坂迄出掛リ候處、稱病氣滯坂、歸國之御暇願出被免候、兩端ニワタリ候歟モ不被圖候得共、歸國イタシ候得ハ、德川氏勢ハヨホト弱リ候場合ニ御座候、

一彥根モ同樣勤　王ヲ唱ヘ、公卿方ヘ愁訴歎願之由、

一因州モ同斷、

右、三條實行ヲ御責相成候事、

一備前モ大ニ國論變シ、　王師擧リ候得ハ、打テ出候迄ニ決定之由、

一其餘畿內小藩等、頻ニ　王事ニ勤勞セン事ヲ願出候事。

○牧野忠訓、駿河守○長岡藩主、食封七萬四千石、京ニ至ル、二十日ニアリ、是日、上書シテ、時事ヲ論シ、再ヒ政權ヲ德川氏ニ

委セント請フ省セス。

乍恐謹テ奉申上候、

今般從　朝廷被爲　召難有御事ニ奉存候得共、陪臣疎賤之身分、蒙　御直命候ハ、唯々德川氏ヘ斟酌而已之儀ニ無之、奉對朝廷禮義ヲモ失ヒ恐入候儀ト進退迷惑仕候得共、如何ニモ御政權奉還之儀、　御内慮奏聞之旨ニハ候得共、不日ニ　勅許有之候御事柄、無此上大事件、容易ニ御取扱被遊候樣、上下擧テ驚愕仕、天下爭亂、萬民塗炭ニ苦候モ自是起候儀顯然ト奉存候得ハ、彼是斟酌仕候モ不忠之儀ト、不顧恐上京奉建言候、抑保平以來、政權武門ニ移リシヨリ、屢　御企モ有之候得共、終ニ　御成業モ不被爲在ハ、權與力全クシテ始テ可制御天下、權與力不全シテ、徒ラニ空名而已ニテ、不能制御天下ハ自然之勢、歷世之事變人情昭然相分候儀、德川氏ニ至リ數百年間之亂ヲ撥ヒ、萬民ヲ塗炭ニ救ヒ候程之英明、古今之事情洞察ニテ、天下之治安不出此事故、　朝廷ニモ萬事御委任被爲在候御儀ト奉存候、德川氏撥亂治平ニ至リ候後、若政權　朝廷ヘ奉歸候ヘハ、今日之治世ハ有之間敷、昇平萬國ニ無比ハ　神國之御威光、德川氏祖宗之功業、天下之萬民、今日太平之澤ニ浴シ候モ不外儀ト奉存候、昇平久敷打續、人心偷惰驕奢ニ趣候儀、古今一轍ニ御坐候ヘハ、德川氏祖宗天下ヲ平治被致候規模、無比類盛業、其後中興之功業モ相立、時々改革モ有之候得共、何分太平之弊風上下共ニ偷安苟且ニ流候ハ、特ニ政令之不届而已之儀ニモ無之、是又自然之勢ト可申、殊ニ嘉永以來、外國渡來、和戰之兩議ヨリ、　公武之御間柄彼是ヲ生シ、時論不定、姦雄其虛ニ乘シ、巧ニ尊　王之名ヲ借リ、浮浪之激徒無深長之慮、狂暴醸亂、幾人トナク非命ニ陷リ候次第、慷慨決死之心底ハ可憐事ニ候得共、全一心之私憤ニ出、義理之當然、國家治安之道ヲ不辨、不好犯上而好作亂者未之有ト浩歎之至リニ御坐候、爾來物情紛々、世上不穩、續テ長防之事件モ相起リ、終ニ今日ニ至リ候ハ可悲事ニ御坐候ハスヤ、外國和戰之儀、天下之諸侯種々異說モ御坐候得共、追年事情モ相分リ、既ニ　先帝御治世之砌、交際御許ニモ相成、唯今ニ至リ候テハ、始攘夷ヲ唱ヘ候者モ、反テ彼ト和親ニ及ヒ、今日之形勢、徒ラニ攘夷之出來サルハ分明仕候儀、然ハ則、　朝廷ニモ先後之御命令御通徹ト申御儀ニモ無之、乍恐御反省可被爲在御事ト奉存候、總テ朝議ヨリ出候而已ニモ有之間敷、尊　王之名ニ託シ、攘

夷攻戰ヲ唱ヘ候輩ヨリ、多クハ此ニ至リ候御儀ト奉恐察候、是等之人々、只今ニ至リ、猶攘夷ヲ唱ヘ候哉、自己之明暗ヲ不省、先後之反覆ヲ不耻シテ、猶德川氏而已ニ責ヲ歸候ハ、仁義有道之人々ト可申哉、大凡物大ナレハ難治、小ナレハ易治、如何ニモ天下之廣大ナル、國初ト違ヒ、別テ多事ニ相成、夫々居兼候處モ有之候得共、追々奮勵被致、實意ニ更張御坐候ヘハ、始終大亂ニ不至シテ、自然之强國ニモ可相成、當時之有樣攻守之勢異ナリト申樣ナル勢御坐候テ、不振樣相見候得共、自是切迫仕候ヘハ、强國ニ相成可申、如何トナレハ、天下之尊敬ヲ受ケ、深殿之中ニ生長ニテ、下情ニ不通之弊モ御坐候得共、今日ニ至リ左樣之儀ニテモ不相濟、奮勵モ有之、親藩、譜代モ追々發憤仕候樣可相成、然ハ則、關西之武士必强ト申譯ニモ無之、關東之者弱ニ終ル之理モ無之、多勢之中必人傑モ可生、四分五裂ニ至リ候ヘハ、天下之心、德川氏之恩澤ヲ思出シ候半歟、外ニ誰人ヲ思出可申哉、其威之盛ナル中ハ臣服從順シテ、安穩無事之恩ヲ忘レ、太平偷惰之時ニ乘シ、借名釀亂之人々ニハ、假令力不足ニ一旦威壓セラルヽモ、天理之自然、決シテ心服ハ仕間敷、近頃西洋變革之說ヲ羨ミ、變亂反テ開强之基ト云說モ一理ナキニハ無之候ヘ共、制度モ違ヒ、萬國無比之太平ヲ、開强之說ヲ唱ヘ、變亂ヲ釀シ候ハ、天理人心之所不容、悲憤慨歎ニ不堪次第、天下之諸侯、德川氏ヘ臣服シ、數百年太平之恩澤ヲ不忘却之義心有之候テ、　朝廷之不安ハ無之、徒ラニ尊　王之名ヲ借リ、不平ヲ懷キ、時勢ニ乘シ、徒義ヲ唱ヘ、或ハ私利ヲ營ミ候樣ナル人心ニテ、　朝廷之安事可有之哉、朝廷、德川氏ヘ御依賴之厚ク、彌權勢ヲ被爲益候ト、御委任之名而已ニテ、威權ヲ御殺被遊候ト、　朝廷之御爲如何可有之哉、富國强兵、　皇國治安之御命令、先年ヨリ度々有之難有御事ニハ御坐候得共、太平偷惰之風習、中々以テ急速之可改ニ無之、内外多難之時ニ當リ、國是未定、政令未整内、譬ヒ難有　御命令ニ御坐候トモ、緩急其宜ヲ不被爲得處有之候テハ、其名甚美ナリト雖モ、其實ハ德川氏之疲弊、隨テ天下之諸侯無益之奔命ニ疲レ、無用之財力ヲ費シ候儀、外國而已之儀ニ無之、公武之御齟齬ヨリ出候儀ニモ可有之哉、　皇國第一大ナル德川氏之疲弊ハ、其疲弊ニ非スシテ、　皇國之疲弊ナルヲ能々御了解不被爲遊候テハ、彌覬覦輕侮ヲ被爲受候樣可相成、得ト被爲盡　叡慮、暫時尊崇之虛名ヲ御悅ナク萬民塗炭ノ苦ヲ憂御慮被爲在、任而疑者亂之階ナルヲ御鑒、是迄之通、萬事德川氏ヘ御委任被爲在候ヨリ、治安之道ハ無之儀ト奉存候、一

且被　仰出候御儀、間ナクシテ御改被爲在候ハヽ、彼是六ヶ敷申立候者モ可有之候得共、其段ハ　朝廷ヨリ御教戒被爲在、爲　皇國安危治亂之際、厚ク相辨ヘ、幾重ニモ一和一定致シ、奉安　宸襟候樣被　仰聞候得ハ、御違背仕候者モ有之間敷、御英斷之上、速ニ御所置可被遊御儀ト奉存候、　奏聞之上被爲聞食候御儀、疎賤之分トシテ不憚忌諱、犯逆鱗候ハ斧鉞之誅難逃、假令　寛宥之　御沙汰奉蒙候モ、狂暴好亂者有之候ヘハ、亦生還スル不能儀ト歎敷奉存候得共、天下萬民之安危ニ係リ候御儀、懼罪逃死默止罷在候モ、　皇國有生之道ニ背キ可申ト、乍不及決死極諫、無量之御高恩萬分之一ヲモ報シ候得ハ、死モ猶生ニ勝リ候儀ト不顧恐奉申上候、不肖之者、天下事情之詳悉承知仕候ニモ無之、妄昧疎漏之至恐入畏縮罷在候得共、封土相當之家來ヲモ召仕、一同助力勤勵敢テ奉申上候、唯無彼我之別、一毫之求ナキ愚忠之心事、御採用モ被成下候ハヽ、難有仕合奉存候、誠惶誠懼頓首敬白。

慶應三卯年十二月　　牧野駿河守

牧野忠毅家記

○徳川慶喜、戸川安愛ノ歸報ヲ得、永井尙志ヲシテ先ツ京ニ至ラシム、尙志、松平慶永、山內豐信等ト、慶喜入覲ノ事ヲ謀ル、慶永等、公然朝命ヲ奉シテ、大坂ニ趣キ、先ツ辭官納地ノ事ヲ決シ、後ニ入覲ヲ議セントス、是日、慶永、德川慶勝ト同ク朝命ノ擬案ヲ上ル、廷議、領地返上ノ文字ヲ用ヒント欲ス、慶永等、之ヲ爭ヒ、辨論數囘、明ニ至テ決セス。

○春嶽私記ニ云、二十一日夜、永井玄蕃頭殿坂地ヨリ上京有之、二十二日朝、毛受鹿之助、永井殿ヘ罷出、雪江、昨朝ヨリ下坂、亦復行違ニ相成趣、且京狀申達候テ、坂地之模樣承候處、於彼地ハ、過日來已ニ御奏聞一條ニ相成有之處、戸川殿歸坂ニテ、京地之次第申上ニ相成候付、御再評之上、御奏狀御差扣ニ相成候上ハ、京地之形勢ニ被任、御上京モ可被遊トノ御儀ニ

相成、其件爲取調永井殿歸京ニ相成事之由、坂地之人心ハ今以困難之趣ニ物語有之、此夕五字後、後藤象二郎參邸、永井殿、容堂樣御旅館ヘ被罷出居候間、公モ御來臨被下候樣トノ旨ニ付、卽刻土老侯大佛之御旅館ヘ被爲入、御同處ニテ二公竝永井殿、象二郎、福岡藤治被召連、修理、十之丞、鹿之助モ御一席ニテ、種々御相談有之候得共、何分指當リ御官祿之御一件形付不申内ハ、御上京相成候テモ却テ不都合ニ付、先ツ此件之御目的相立候樣被成度、就テハ京阪隔地之往復候間モ相掛リ、段々遲引ニモ相成候ヘハ、結局　朝廷ヨリ之御沙汰ニ相成、夫ヲ御持參、尾公ト御一處ニ御下坂ニテ被仰上、御請之御模樣次第、御上京之儀モ其節之御談ニ相成候方可然候ヘハ、明日ハ三職揔參内之儀御申立、尾侯ト御一所ニ可被仰立トノ御談濟ニ相成、卽席ヨリ十之丞、鹿之助、尾侯御旅館ヘ被遣候處、尾侯ニモ御同意有之、依テ會、桑歸國ノ件ニ付、老侯御暇御指圖濟ニ相成、明日御下坂可被成ノ處、前條ノ次第ニ付、御見合ノ儀被仰入御承知、二十三日朝、永井殿ヨリ呈書如左、

一翰奉呈上候、然ハ唯今坂地急騎使ヲ以テ、兼テ御内諭御坐候一ケ條之儀ニ付申越候趣ハ、雪江、國之輔兩人再下坂ニテ、削地辭官之儀ニ付云々被申聞候付、別紙之通、御内答書出來、兩人モ一覽致シ、加筆通リ取直相成候樣致度トノ旨ニ付、其通リ取直シニ相成申候、右加筆通之書面ニテ宜候ハヽ、早速御差出ニ可相成候得共、左モ無之テハ、所詮御上京之運ヒニ相成兼候、尤右ハ公然御旗本之士ヘモ相示候樣不相成候テハ、必大沸騰、不可鎭撫勢ニ立至候段申越候、昨夜御内談之趣モ御坐候間、不取敢別紙相添、此段申上候云々、下文略ス、

無程永井殿モ御來會、象二郎モ被仰遣、御書中之趣反覆御討論之上、坂地ヨリ相廻候御書取、猶又御添削ニテ御書面御出來ニ相成、御所ヘハ今日尾、越被仰合、御申立之儀有之間、三職總參　内相成候樣、御家來共ヲ以テ御達有之、未半刻過、御參内被遊、尾侯、土老侯、藝、若侯モ御參　内、薩侯ハ御斷リ也、於　小御所總裁始御揃之御席ニテ、尾侯ト御一同ニ德川氏官祿之儀、從　朝廷之御沙汰ニ相成、夫ヲ御持參ニテ御下坂、德川氏ヘ御達有之、御請濟ニテ御上京相成候樣御周旋被成度趣、今日ハ德川氏支族之御場合ハ御離レ、議定御職掌之上ニテ、　皇國萬安之爲被仰上候段御申立ニテ、御相談之御書面御指出ニ相成候處、政府御用途トシテ、領地返上之文段ニ不相成候テハ、御奉還之實効難相立トノ事候得共、御領地返上抔トノ

趣意相成候テハ、坂地之鎮撫難出來譯ニテ、廷議殊之外困難ニテ、中々御一席之御評決ニハ難至、再三御休席ニテノ御論談ナリ、是ハ政權奉還候上ハ、領地共ニ返上無之候テハ、御誠意モ不相顯、御名分モ難相立トノ論、上院ニ盛ニ、文字上ニオイテ義理之當否ヲ爭ヒ、眼前闕下ニ動亂ヲ發スルヲ顧ミサルヲ非トスルノ議、下院ニ專ラ也、二侯ハ　朝野之安危、時變之緩急ヲ御辨折アツテ、頻リニ成敗之所決ヲ御催促アリトイヘトモ、兎角之御挨拶無之、夜將ニ明ナントスルニ及ンテ、イツノ間カ、宮始上院之御方々御退朝トナリケレハ、二侯モ無御據、二十四日朝卯半刻比御退散ナリ。

○大久保利通書柬ニ云、二十三日、尾老卿、昨日御暇相成居候處、今日ハ尾、越卿ヨリ言上ノ趣被爲在、御一同御參　朝御願、總御參　内ニテ言上之趣ハ、尾、越卿共ニ下坂仕、必死ノ盡力仕度候付、從　朝廷御沙汰之　御紙面頂戴仕度言上、尤前條之通リ、草稿ヲ以テ、御願相成候得共、別テ朝議六ケ敷及徹夜候、

但、是迄於　小御所御評議之節ハ、下參與一同列席ニテ候處、此御評議ヨリ越卿、土卿ヨリ言上之旨有之、列席無之候事。

○附錄春嶽私記ニ云、二十三日朝、戸川殿並御目附保田鈼太郎來邸、戸川殿ヨリ内府公御直書呈進有之、如左、

一翰呈進、扨ハ戸川伊豆下坂、御地之模樣委細致承知候、何分ニモ早々上京致候樣ニトノ趣云々致承知候、素ヨリ誠意ヲ以テ　皇國之御爲ニ致度、微衷ハ追々建言モ致候儀ニ付、此度之儀迚モ、　皇國之御爲ニ相成儀候ハヽ、速ニ上京、協力同心、正議ヲ盡度素志情願候得共、先比既ニ大變革之節、家來共鎮撫之爲、大坂へ引取候次第ニテ、漸ク說諭ヲモ相加へ鎮定ニハ相成候得共、此度爲天下上京致候共、家來共承候ハヽ、一向ニ危地ニ臨候樣存取、又々沸騰難留ニ可到ト熟知致候間、此上之御盡力ニテ、可相成ハ　御所ヨリ御用有之候付被爲召候樣相成間敷哉、左候ハヽ、家來ニモ如何樣トモ鎮撫說諭イタシ、早々上京候樣可致、委細ハ伊豆申含、玄蕃打合セ可及御細話候間、深ク御諒察可給候、右上京之節ハ、人數モ召連候事故、兼テ、　宮闕ハ勿論、市中末々迄、誤解イタシ猥ニ騷動不致樣、鎮撫方之儀モ御心附可有之候、餘ハ兩人之口吻ニ託シ、草々閣筆不悉。

十二月二十一日夜認　　内　府

大藏大輔殿
容堂殿

○本書、京師ノ議ト齟齬スルヲ以テ、畫餅ニ屬セシナリ、然レトモ、當時ノ狀態ヲ見ルヘキヲ以テ此ニ附ス。

○伊達宗城、京ニ至ル。〔伊達宗徳家記〕

○舊幕府老中稻葉正邦等、譜第藩士ヲ江戸城ニ召シ、徳川慶喜ノ奏狀ヲ示シ、各兵ヲ率ヰテ西上セシム、是日、江戸城二ノ丸火アリ。

帝鑑間席
雁之間席
菊之間席

別紙〔十九日ノ達書ヲ指ス、〕之通相達候得共、當地御守衛之御都合モ有之候間、差向家々人數合併致シ、急速出張可被致候、就テハ是迄相嗜候家々之兵制、竝可差出人數之多寡、早々可被申聞候、委細大目付御目付ヘ可被談候事。〔水野忠敬家記 板倉勝達家記〕

奏聞狀寫、

臣慶喜云々。〔十九日ノ部ニ見ユ、〕

○

此度於京都表不容易變動有之、時勢彌切迫之趣、是皆治世之極ヨリ斯ク事變之出來致候譯ニ付、此度所詮穩便ニハ相成間敷、從來殆三百年之間、徳川家之恩澤ヲ不蒙共難申、就テハ主人主人其心得可有之候得共、各一際勉勵致シ、力ヲ其主人ヘ人ニ盡シテ、　皇國之御爲ニ相成候樣可被致候。〔藤堂高邦家記〕

○附録黒川秀波筆記ニ云、二十三日、西城於大廣間、稻葉美濃守、小笠原壹岐守、稻葉兵部大輔列座、一席分ニテ一同呼出、美

濃守達ニ、當今京地之御模樣、各追々傳聞モ可有之、實ニ不容易御時體ニ付、上樣ヨリ御奏聞之御次第モ有之候間、銘々右之趣心得居候ハネハナラサル事ニ付、右御書付寫相渡申候、續テ壹岐守演舌ニハ、京師不容易形勢之所、昨今實ニ切迫之極ニ立至リ、迚モ此末無事平和ニ相治リ候勢、決テ有之間敷、實ニ　皇國之御安危御存亡ハ此時ト存候、各忠勤ヲ可盡ハ今日ニ可有之、就テハ上樣ニモ深ク御配慮被遊、　皇國之御爲メ御憤發被爲在候勿論、自分共ニモ眞ニ心痛罷在候、此旨主人ヘ申聞、是迄三百年來、太平之御恩澤ヲ忘却不致、銘々大憤發ニテ、　皇國中眞ニ公平至當之衆議ヲ盡シ忠勤可致、又家來共ニモ、各其主人主人ヲ補佐シ、其分々ヲ以テ忠誠ヲ勵ミ可申、銘々分限ハ替ルト雖モ、何モ　皇國之御爲メニ候間、貴賤上下之別チナク相倶ニ盡力致シ、是迄　皇國太平之御恩澤ニ奉報度事ト存候。

○附録二十四日堀田正倫答書

昨夜御達之趣ニ付、見込モ有之候ハヽ、無遠慮可申出旨奉畏候、今般之御大事件ニ就テハ、臣子之情分、何事ヲ打捨候テモ、一刻モ早ク上京候儀急務ト奉存候、乍然、御當地ハ御根本之地ニ付、御時節柄如何樣變事出來候モ難計候間、御譜代數ヲ盡シテ上京候モ却テ無謀ニモ可有之哉、右ニ付、愚存ニハ、兼テ上京用意之向ハ勿論、御役相勤候分モ、先差向、面々力次第人數急速差出、諸家合從之兵隊組立、右ヲ閣老參政之内御一人宛ニテ御引纒相成、今明日ニモ早々御上京相成候ハヽ、諸藩一同登京之先陣ト申儀ニモ相聞、一時之聲援ト相成可申哉、何分ニモ機會ニ後レ候テハ、其詮無之儀ニ付、早々右邊御取極相成候樣仕度、引續キ一同申合、一人モ餘計ニ上京仕候樣致候ハヽ、如何可有之哉、就御尋愚存之趣申上候。晩翠樓叢書

○正倫家記、及ヒ叢書、二十五日、留守居依田七郎大目付ヘ差出ストアリ、按スルニ、文首昨夜ノ字アリ、五ハ四ノ誤ナルヘシ。

○酒井忠寶家記ニ云、明六時頃、御城二ノ丸長局ヨリ出火ニ付、左衛門尉人數召連出馬、中略、四時過鎮火。

○慶明雜錄ニ云、舊臘二十三日、江戸西ノ丸二ノ丸ノ誤、城中出火有之、翌二十四日、天璋院樣故大將軍德川家定ノ夫人、島津齊彬ノ女、御附女中御暇ニ相成、譯柄不相分故、花川被差越承候得共、不相分、基ハ右出火ニ付テハ、嫌疑ヨリ右時機ニ相及候歟。

復古記卷十二終

總括兼纂修
一等修撰　臣長松幹

校勘
一等修撰　臣長炭
一等協修　臣四屋恒之

校錄
一等書記　臣澤渡廣孝

繕寫
二等繕寫生　臣小川長和
二等繕寫生　臣小島春

復古記　卷十三

慶應三年丁卯十二月二十四日ニ起リ二十六日ニ至ル

二十四日、廷議、遂ニ領地返上ノ文ヲ用フルヲ止メ、辭官納地ノ命ヲ下シ、德川慶勝、松平慶永ヲシテ、之ヲ德川慶喜ニ傳ヘシム。

一今般、辭官被　聞召候ニ付テハ、　朝廷辭官之例ニ傚ヒ、前内大臣ト被　仰出候事。

一政權返上被　聞召候上ハ、御政務用度之分、領地之内ヨリ取調之上、天下之公論ヲ以テ御確定可被遊候事。

右兩件、心得迄　御沙汰候事。　春嶽私記 指華入京日載

○德川義宜家記ニ、二條ヲ合シテ一トシ、文字少異同アリ、按スルニ、私記日載ヲ是ナリトス、日載、又ヨリヲ夫々ニ作リ、之上ノ二字ナク、末文、右兩事件爲心得相達候樣御沙汰候事ニ作ル。

○春嶽私記ニ云、二十四日午刻、第參　内、藝、若侯ト御兩人ナリ、於　宮中廷議内景御探索ノ處、昨來徹夜故、宮始御草臥ニテ、御評議御出來兼、今朝之處御散朝相成事故、今日ハ是非御決評ト申御運ヒ、畢竟之處、官武内外之落合、疑懼ヲ懷テ決兼候次第ニ付、下參與周旋之向ヨリ、夫等之處ハ尾、越ヘサヘ御委任相成候得ハ、坂地之儀ハ急度御安心之旨ニテ致慫慂、先ツ夫ナレハト申趣ニテ、漸ク決シカケ、頓テ事定リ可申勢之内ナリシカ、無程、下參與不殘呼出ニテ、御書面御決定候間、拜見之上存寄有之候ハヽ、猶又申上候樣トノ事ニテ、御書面御渡ニ相成處、右御文段之内、矢張領地返上之文字有之ニ付、參與之内尾、越之面々ヨリ、於尾、越ハ尚相願度儀有之段申達シ、諸藩ハ默々トシテ退席ス、是ヨリ禁句ハ引直シニ相成候

様、公ニモ御沙汰有之、土、藝參與等、頻ニ東西周旋、國之輔、雪江ハ岩倉卿ヘ申立候處、内情殊之外險急之趣被申聞候ニ付、當時之議論家中御門、正親町、長谷、萬里小路等之諸卿ヘ御逢對之儀申入候處、良久シテ四卿御揃御出會ニ付、國之輔ヨリ返上之二字有之テハ、阪地輕輩之人心ニ關係シ、如何ニモ落合兼、鎭撫難儀之趣、諄々申述候處、諸卿被申候ハ、一應ハ尤ニ相聞候得共、御決定之上之事候ヘハ、最早動シカタキ趣等談之内、或卿ヨリ、政權返上之上ハ、領地モ返上無之テハ名分名義難相立、内府誠意之發見モ無之トノ論ヲ被發候ニ付、雪江、十之丞申陳候ハ、其仰セコソ名分不明ト奉存候ヘ、德川氏關八州ハ豐臣氏之比、三、遠、駿、甲ト振替ニ相成候事ニテ、武功ヲ以テ伐リ取候モ同然、其外之土地迚モ、其比之世態ニテ、朝廷ヨリ賜ハリ候ト申事モ無之、夫々之由緒有テ領シ來候事ニテ、政權ニモ將軍職ニモ附キ不申、又祖先之世ニハ、天下之人心盡ク德川氏ニ歸服致候故、政權モ自ラ手ニ落候事ニテ、誰ノヲ奪ヒシトモナク、何方ヨリ讓ラレタルニモ無之候、又將軍職之儀ハ、再應御辭退申上シカト、强テ被命候事ニテ、願ヒタル事ニハ無之、夫ヨリ已來ハ、代々、右之振合ヲ以、二百餘年相承繼致候事ニテ、官位ニ付候譯モ更ニ無之、然ルニ唯今ト相成、右政權ヲ返上奉リ候德川氏ハ、領シ居候土地迄モ返上致候半テハ不適次第ト相成、又政權ニ關ラヌ諸侯ハ、依然トシテ舊封ヲ領シ居候テハ、德川氏ハ代々政權御預リ申上、心ヲ勞シ力ヲ費候丈ケ之不幸ト相成候道理ニ當リテ、素々政權ト領地ト、將軍職ト官位トハ、各自別段ニテ、更ニ名義ニ相拘係スヘキ物ニハ有之間敷歟ト申上候處、夫故昨日モ、諸侯一同領地返上スヘキカトノ論モ起候ヘ共、夫ハ不宜トノ事ニテ相止タリト被申ニ付、御尤之次第ニ候、諸侯一同領地返上ト相成候ハヽ、天下之惑亂ト相成可申、今德川一家タリトモ、人心ハ同シ事候ヘハ、イカテカ故ナク承伏仕ルヘキト申候ヘハ、例ノ普天率土ヲ被申出候付、如何ニモ一天下王土ニハ相違無之候得共、王土ナレハトテ、　王ノ御勝手次第、御私ニ御引上ケ被成候譯ノ物ニハ無之、土地人民程、大切成動カシ難キ物ハ無之、如何ニ　叡慮ニテモ、御無理ハ決シテ行ハレ不申筈ニ候ヲ、个樣ニ名分名義モ立サル事ヲ被　仰出、末ノ詰リヲ如何被成候哉、舊幕之長州再討ヲ御覽ナサルヘシ、名議不相立候故、結局致シ方モ無キ事ト相成候、此度モ德川氏ヘ御仕向ケ之次第ニヨリ、　朝命トイヘトモ、如可相成哉難計候、德川氏ハ長州抔トモ違ヒ、類葉廣ク、譜代モ數多候ヘハ、　皇國之大亂

ニモ可相成事候ヘハ、私共モ德川氏之爲ニハ、支族臣子之分ヲ以テ、宗家存亡之境、只管御憐評ヲ相願候、又　皇國　朝廷之御爲ニハ、數ナラス候ヘ共、參與之廉ニテ御諫爭奉申上候ト、悃々陳啓ニ及フ處、夫ナレハ、今一應可及評議トノ事ニテ被引入、夫ヨリ下院之内ヨリ、諸方ヘ力ヲ盡シ周旋致居ル内、鑿枘齟齬、又々返上之二字、愈決定シ發表有之、談判殆ト困極ニ至リシカトモ、百方手ヲ盡シ、漸クニシテ御政務御用途モ可有之ニ付、領地返上之儀ハトイヘルヲ、御用途之分ハ、領地之内取調之上ト取直シニ相成、公論ヲ以可被仰出トイヘルヲ、公論ヲ以御確定可被遊ト改リ、長各卿ヨリ尾、越之兩人ヘ被示ニ付、確定之字面ハ奉畏候得共、領地之内ノ内ノ字ノ下ニ、(ヨリ)ノ字ヲ被加度ト申達候處、是亦評議難澀シ、更ニ承引無之、尾ヨリハ橋本卿迄嚴達ニテ、内外之勢頗ル及切迫候得共、尾、越愈以前說持重之處、遂ニ岩倉殿ヨリ(ヨリ)ノ字ノ事ヲ申達候得共、此處ヲ(ヲ以テ)ト相成候テハ如何可有之哉、夫レトモ(ヨリ)ニテ無之テハ不相適儀候哉ト推問ニ付、兩藩ニテハ是非トモ(ヨリ)ト相成候樣ニト及懇願處、左候ハヽ、其通リニ相決シ、其上ニテ御書面改テ御渡可被成旨ニテ、追テ於小御所三職御列坐、　朝廷ヨリ内府ヘ　御沙汰之旨ニテ、總裁宮ヨリ別紙公ヘ御渡有之、御拜見之上、早速下坂、德川内府ヘ可申聞候ト御請被仰上、其席ヘ尾侯御名代成瀨隼人御呼出、右同樣御演達、大納言ヘ可相渡旨ニテ、宮ヨリ隼人正ヘ御渡有之相濟、御退散ハ亥刻ヲ過タリ。

○大久保利通書柬ニ云、二十四日曉天退散、八字比、岩倉卿ヨリ被召、尾、越、土、三卿ヨリ頻被相迫、後藤從テ盡力、德川氏ヲ助ケ、實ニ意外ノ次第ニ候、今日ハ何レノ筋、御決定ナクテハ不叶候間、御達之御紙面ニ付、不可動之議ヲ決シ、是ヲ以テ御受難出來候ハヽ、最早不得止候ニ付、尾、越周旋ハ差置、　朝命ヲ以テ、斷然可被相達趣ヲ以テ、御押切可相成候間、草案相認差上候樣就　御沙汰、左之通ヲ以テ、一字一點モ御添削不被爲在樣、言上差出候。

一今般、辭職被　聞食候付テハ、　朝廷辭官之例ニ倣ヒ、前内大臣ト被　仰出候事、

一政權返上被　聞食候上ハ、　御政務用途之分、德川領地之内、夫々取調之上、天下之公論ヲ以テ返上候樣、可被　仰付候事、

右、朝議被相決、御草稿被爲調、下參與中一同拜見仕候樣、御下ケ相成候、

一今日、越卿、尾卿御名代成瀨隼人正參　朝、於　小御所御評議被爲在、右御文字三四字御改被下度趣、大ニ御迫リ、左樣候上、於德川氏奉違背候得ハ、迚モイタシ方無之、其上ハタトヒ追討ヲ被命候共、不得止候付、　朝命ノ儘可奉畏、親藩ノ義モ夫切ト存候間、其段ハ御一同樣ヘ明白ニ申上置候間、何卒言上通ニ被仰付度、尤二十五日ヨリ一七日ヲ限リ御受可奉申上、若其期日ヲ相迦レ候ハヽ、斷然　朝命ヲ以テ追討ヲ被　命候トモ、如何ニモ思召通被成度トノ言上ノ由、

一後藤ニハ内輪ヲ周旋シ、言上通御文面御改被下候上、若違背仕ニオヰテハ、是迄ハ色々申上候得共、德川氏ヲ見捨候外無御座候間、最早斷シテ追討ノ先鋒可奉願候、尤伏見巡邏モ直樣差出可申、原註、巡邏ノ一條ハ、伏見ヘ新撰組、奉行所ヘ入込、段々横行之次第有之、土、藝、長御國ヘ鎮撫ノ爲、巡邏被仰付候處、土、藝御斷申出候由、國元ヘモ乾退助等、兵隊ヲ取寄候手筈ニ付、是非奉願通御許容被下度、云々、

一右ニ付、岩倉卿等ハ別テ御盡力ニ候得共、議定職中ニオヰテ、中山卿始動キ候テ、勢不得止、左之御文面ニ相改候由、

一辭職之條、同、

一政權返上被　聞食候上ハ、御政務用途之分、德川領地之内ヨリ夫々取調之上、天下之公論ヲ以テ御確定可被爲在候事、

右、爲心得相達候樣　御沙汰候事、

十二月二十四日

右之通御決定ニテ、越卿御受、尾卿ハ成瀨御受、明二十五日ヨリ御下阪、一七日ヲ限リ御達相成候旨、下參與中ヘ被　仰聞候事。

○附録本日德川慶勝奏議

德川内府ヲ始、諸侯一般不殘領地差上、普下率濱、悉皆　王土之體裁ニ相成候上、新ニ　朝廷ヨリ土地ヲ裂キ、封疆ヲ被定候ハヽ、　皇化御一新之境モ、判然ト相立候　御處分ト奉存候、是ハ　皇國永世之御制度ト申ス者ニ付、卽時急遽ノ御取計ニハ如何可有之哉、依テハ先々救急權道之旨ヲ以テ、今日之處ハ別紙　御沙汰書案之振ニ被爲行、時之御變通ヲ被相立、天下

億兆、焦眉塗炭之急ヲ被爲救候上、稍海外之御交際モ宜ヲ得、邦內人心モ安定之上、前條永世不易之　御制度ヲ被立候テハ如何候半哉、尤是ハ三百諸侯參集、會議ニテ御手丈夫ニ御決定可被在カト奉存候、若順序ヲ被誤候テ、一時救急之權道ト、永世不易之　御制度ト、其時ヲ不擇シテ被兼施候テハ、天下人民、惑亂不可救ニ至リ可申ト、深ク心痛仕候付、不顧恐奉獻言候。

十二月　　大納言慶勝上

永世不易之典ト申ハ、周制ノ如キニ可有之、是ハ文王、武王、周公三聖、歷代年序ヲ經候上ニテ差定候事、漢高祖、四海昇平ヲ致シ候日ニモ、爰ニ及フ事不能候、然ルニ今、外夷侵侮、　皇國日蹙之時ニ當リテ、何ノ餘力アリテ爰ニ可及哉、強テ被遊候ハヽ、三百諸侯主從トモ大ニ惑亂、折角今迄公卿方ノ御苦心モ事破レ、天下土崩瓦解、目前ト奉存候。德川義宜家記

○慶勝履歷書ニ云、慶喜ヘ可被仰出御沙汰書案、御渡相成候ニ付、此二書ヲ上ル。

○入道尊秀親王ニ命シ、日ニ朝堂ニ入テ、機務ヲ習ハシム。

○口達

宮、愛國之志達御聽、此度國事見習之爲メ、日參被仰出候事。華頂宮家記

○毛利敬親大膳大夫、ヲ召ス。

長門宰相

一大新御時節、早々上京、精々盡力、奉公可有之御沙汰候事。毛利元德家記

○小笠原長守左衛門佐○越前勝山藩主、食封二萬二千七百七十七石、ノ家臣、竹田街道守衛ハ、幕府ノ令ニ係ルヲ以テ、其撤否ヲ稟請ス、是日、命シテ、之ヲ撤シ、後命ヲ待シム。

當四月中、從幕府、竹田街道御警衛之儀、左衛門佐ヘ被　仰付、尙于今番兵差出置申候、然ル處、今般御一新御變革之折柄、幕府御名義御廢止相成候ニ付テハ、旬トカ改テ被　仰渡候御儀ニ可有御坐歟ト、私ニ奉仰待居候得共、未タ何等之御沙汰モ不奉蒙、卽今、右進退等御指揮可蒙所モ承知不仕、自然孤闕之姿ニ相成申候、就テハ、前條幕府御廢止之御趣意ニ相準シ、右御警衛モ御免之儀ニ相心得、人數等爲引拂、其段當御役所迄御屆申上候樣ニテ可然儀ニモ御座候哉、以後之處、如何ニモ心得方當惑仕候間、此段以書取、從私奉窺候、宜御指圖可被成下候。

小笠原左衛門佐家來

十二月二十三日　黑柳大六

小笠原長守家記

○本日批紙

陣所等引拂候テ、重テ之御沙汰可奉侍候事。小笠原長守家記

○再申書

去二十四日御附札ヲ以テ、竹田口御警衛陣所引拂候樣、御達御坐候ニ付、夫々爲引拂申候、就テハ右同所ニ出來置候關門、竝面番所等モ取拂候テ可然儀ニ御坐候哉、此段奉窺候、以上。

小笠原左衛門佐家來

十二月二十七日　島田清右衛門

小笠原長守家記

○二十八日批紙

關門之儀、其儘差置候事。小笠原長守家記

○山內豐信、書ヲ上リ、政府ノ經費、宜ク之ヲ列藩ニ課スヘキヲ建議ス。

政府御用途之儀ハ、御新政之御急務ニ付、徳川内府ヨリ差上ル段御請申上候ハヽ、速ニ列藩諸侯ヘハ、天下之公議ヲ以テ貢獻之次第、相立候樣被　仰出可然ト奉存候、

右ハ容堂職分ヲ以申上候儀、如何御決定可被　仰付哉、奉伺候、以上。

十二月二十四日　春嶽私記

○批紙

右書面之趣御内定候。　春嶽私記

○春嶽私記ニ云、此頃政府之御用途ハ、徳川氏返上之領地ヲ以テ御取賄ニ可相成トイヘルハ上院之建議、又日本全國之總高割ニテ可供給トイヘルハ下院之建議ニテ、兩端未決ニ有之候處、今日、土老侯ヨリ天下總高割ニ相成候樣トノ御建白、侯、御所勞ニテ後藤象二郎ヲ以テ被指上之、且象二郎自分口上ニテ、何分阪地之御請濟次第、總高割之儀モ可被仰出ト御内定之御書附頂戴、容堂ヘモ安心爲仕度段、嚴重及演說ニ付、御建白之通リ御内定之段、御附紙ニテ被仰出由ニテ、右寫相廻ル、右ハ御領地之内ヨリ被差出候儀、阪地之人心ニ怫戾之廉故、右樣之御建白有之シハ、專ラ阪地鎭定之筋御周旋之御廉ナリ。

○徳川慶勝、上表シテ、職ヲ辭ス、允サス。

謹テ奉言上候、臣慶勝不才闇劣之性、議定職之大任蒙　仰候段、恩寵不堪感荷奉存候、其砌、謹テ御請ハ奉申上候得共、猶退テ熟思仕候得ハ、此度王政一新之折柄、大任之職ニ列候儀、素ヨリ微力ニシテ難堪負荷、且宗家旗下之者鎭撫筋之儀、彼是遲延相成候段、誠ニ以恐懼戰慄之至奉存候、加之、宗家臣慶喜辭職奉願候處、御許容モ被爲在候折柄、臣慶勝其支流ニ罷在、重大之職務ヲ汙居候段、千萬恐懼之至ニ奉存候間、議定職之儀　御免被　仰出候樣仕度、伏テ奉懇願候、臣慶勝、誠恐誠惶頓首頓首。

十二月　徳川義宜家記

○批紙

深思食有之候ニ付、議定職辭退之儀ハ被　召止候事。徳川義宣家記

○戸田氏共、復タ上京延期ヲ請フ。

私儀、先般御用之儀御座候趣ヲ以テ、被爲　召候付、早速上京可仕之處、折節所勞罷在候間、段々延引仕候、然ル處、尙又去十八日以　御書付、御一新御變革ニ付テハ、　御下問之御儀モ被爲在候間、迅速上京可有之、且所勞之人體モ候ハヽ、　爲名代重職之者可差出旨、更ニ被　仰出候段、御達之趣承知仕奉畏候、然ル處、當今年末ニモ相成候、旁家政向モ差湊、且私儀未若年之儀ニ御座候間、御下問被成下置候テモ、何等之御請モ奉申上兼候次第、何共奉恐入候、就テハ自由ケ間敷儀ニテ重々奉恐入候得共、差掛リ候御用品モ被爲在候ハヽ、當時詰合罷在候家老、並桑山豐三郎ト申者ヘ御沙汰被成下置候テ、私上京之儀、何卒今暫御猶豫被成下置候樣、只管奉願上度、此段奉申上候、以上。

十二月二十四日　戸田采女正

戸田氏共家記

○氏共家記ニ云、二十七日、去ル二十四日差出候書面之趣、御落手ニ相成候旨口達有之。

○鷲尾隆聚、再ヒ書ヲ五條代官中村某ニ與ヘ、其報答遲緩ヲ責ム、某答書シテ、其由ヲ陳謝ス。

今般鷲尾侍從殿、高野山ヘ御出張被遊候御趣意、過日書中ヲ以テ御報告ニ及ヒ候通ニ候、其節使之者ヘ文箱御落手之御書附御渡シ相成候ニ付、多分追テ御答有之、御用向ヲモ可被伺出ト存居候處、今以何等御挨拶モ無之段、如何之御趣意ニ候哉、抑方今、宇內開闢以來未曾有之時勢ニ候得ハ、海內一和、外寇膺懲之儀急務候處、多年奸吏跋扈、正邪混淆紛亂之時態ニ立至リ、遂ニ外患之至大ヲ忘却シ、兄弟相鬩キ、遂日夷狄之胸算ヲ逞フセシメ、　皇國之御大辱ヲ釀候事、臣子之憤懣ニ不堪處ニ候、然ルニ今般、　天朝御憤發、大號令被　仰出、舊弊御一洗、　皇武御恢復之御基業顯然シ、誠ニ以感泣之至リニ奉存候、然ル處、近時之如ク　皇威退縮ニ被爲至候モ、畢竟大義ヲ辨別セサル姦吏共、朋黨橫議候ヨリ起ル譯ニ候、右樣之族ハ、

此時ニ當リ動モスレハ私怨ニ眩惑シ、如何ナル陰謀ヲ企テ、　天朝ヲ奉壅蔽候者有之候モ難測候、依之、御豫備之爲メ、侍從殿重キ　御沙汰ヲ被爲蒙、山河ヲ御跋渉、風雪凛冽之際ニ御滯陣被爲在候儀ニ付、苟モ名義ヲ辨別致シ居候者ハ、風ヲ聞テ參集致シ、御安否ヲモ可奉伺筈、況ヤ一片之飛書到來致候ハ、早速伺出候儀當然ニ候、卽紀伊中納言殿ヘモ、其御許ヘ差出候同文ヲ以テ報告ニ及ヒ候處、不取敢使ヲ以テ返書有之、尚又追テ執政ヨリ藩士某ヲ以テ、御用向等被伺出候ニ付、當方ヨリモ有志之者罷リ越シ、一和勤王之誠意ヲ相通シ、彼是盡力中ニ御座候、將タ高取ヨリモ同樣返書到來致候、然ルニ、其御許御挨拶遲緩ニ被及候ハ如何之御趣意ニ候哉、或ハ頻ニ武備御取調、人數御動搖之趣モ飛說致風聞候、尤兵隊精練、武備充實ハ方今之急務ニ候得共、姑ク名分條理ヲ被差置、右等之擧動有之候テハ、　天朝ヘ被爲對、御嚮背ニ於テ御疑心無之事不能候ニ付、近日使節ヲ以テ御應接ニ可被爲及候得共、今一應以書中、御誠意致承知候樣被　仰付候條、如斯御坐候、以上。

鷲尾侍從殿

十二月二十四日　　執事

中村勘兵衛殿　高野山出張概略

○二十五日答書

御兩度之御報告、敬伏奉得其意候、然ル處、私儀賤郡吏、奉對御高官、直ニ御請奉恐懼候ニ付、幸阪地ニ重役之者相詰候間、是ヘ申立、御請差出候積、夫故御請遲延仕候儀ニ御座候、且陣內守衛向御疑念之趣御尤ニ奉存候、右ハ去ル亥年、亂妨之儀有之、下民共手懲動搖仕候間、夫ヲ取鎭メ、一時之取計ニテ、小吏ノ私、軍備相立候樣無之、御賢察被下度候、依之、不取敢御請書支配向之者ヘ爲持上候間、可然御執達奉願候、以上。

十二月二十四日　　中村勘兵衛

鷲尾御殿

御執事御中　高野山出張概略

二十五日、萬機親裁、公議博採ノ諭旨ヲ、三條橋ニ掲示ス。
徳川内府、宇内ノ形勢ヲ察シ、政權ヲ奉歸候ニ付、　朝廷ニオヰテ萬機御裁決被遊候ニ付テハ、博ク天下ノ公議ヲ取リ、偏黨ノ私ナキヲ以テ、衆心ト休戚ヲ同フシ、徳川祖先ノ制度美事良法ハ、其儘御變更無之旨被　仰出候間、人々公明正大之聖意ヲ奉戴シ、各安心シテ其家業ヲ營ミ候樣可仕者也。
慶應三卯年十二月　戊辰新聞記
○此事、田宮篤輝ノ建言ニ出ルコト、三職叢記ニ見ユ、災後原記ヲ失ス。
○毛利廣封、長門守毛利元周、左京亮毛利元純讃岐守ヲ召ス。
各通　長門少將
毛利左京亮
毛利讃岐守
一大新御時節、早々上京、精々盡力奉公可有之　御沙汰候事。
十二月　毛利元德家記　毛利元敏家記
○毛利元純家記ニ云、召命會ハ本家宰相ヘ束テ御達ニ相成候ニ付、此ニ記セス。
○是ヨリ先、浪士相、野二國ノ間ニ出沒ス、魁首相良武振、總三、明ニ小島四郎ト稱ス、舊幕府麾下酒井金之丞ノ臣、其黨百五十許人ト江戸薩摩藩邸ニ在リ、是日、舊幕府、莊内、松山出羽、二藩兵ニ令シテ、之ヲ捕ヘ、陸軍及ビ前橋、西尾、上ノ山等ノ藩兵ヲシテ、應援セシム、邸吏拒テ納レス、遂ニ火ヲ放チテ、之ヲ挾擊シ、支封佐土原藩邸ニ及フ、殺傷捕獲百餘人、武振等遁レテ上國ニ走ル、是夜、諸郭ヲ鎖シ、令シテ

餘黨ヲ捕ヘシム。

松平修理大夫様三田屋敷、竝島津淡路守様三田小山屋敷ヘ、浪士體之者潛伏、市中暴行砲發等致シ候趣ニ付、取締方之儀、昨夜御沙汰ニ付、左衞門尉人數ヘ酒井紀伊守ゟ人數差加ヘ、且爲應援、陸軍方御人數、竝松平大和守様、松平和泉守様、松平伊豆守様御人數共、今明六ツ時過罷越、種々談判仕候得共、不聞入、却テ彼ヨリ叉暴發候ニ付、不得止發砲等仕、打合切捨降人召捕人等有之、且右兩屋敷共砲火ニテ燒失仕候、尤左衞門尉人數之內ニモ討死手負等有之、總人數ハ々七ツ半時頃引揚申候、委細之儀ハ、猶取調可申上候得共、先以此段御屆申上候、以上。

酒井左衞門尉家老

十二月二十五日　松平權十郎

淀藩加藤某筆記
黑川秀波筆記

○

打死　一名　手負　八名　打取　薩邸十六人　末家二人

生捕　薩邸一人　末家三十二人　降人　薩邸四十二人

右之通御座候、以上。

酒井左衞門尉内

十二月二十七日　岡田五十馬

淀藩加藤杢筆記

○

一昨二十四日夜、大目付木下大内記、御目付長井筑前守ヨリ、重役之者西丸ヘ呼出達有之候ニ付、松平修理大夫上屋敷ヘ酒井左衞門尉家來申談、人數差出、私儀モ爲指揮出馬仕、修理大夫屋敷南裏手松平阿波守下屋敷內ヘ繰込、大小砲放發致候處、

敵方ヨリモ同様及砲發、追々接戰相成候處、敵討取人數討死手負、別紙之通御座候、此段御届申上候、以上。

十二月二十六日　松平伊豆守

別紙、

打取　十二人　打死　八名　手負　八名

淀藩加藤茉筆記

○

生捕　十五人　打取　四人

右ハ昨二十五日、本家酒井左衞門尉人數へ加リ、薩州三田屋敷打立候様被　仰付候ニ付、私人數之儀ハ表門ヨリ相破、前書之通相働申候、此段御届申上候、以上。

十二月二十六日　酒井紀伊守

淀藩加藤茉筆記

○

兼テ被　仰付置候通、市中爲巡邏、昨曉卯刻頃差出候家來之者ヨリ、芝三田松平修理大夫屋敷放火之趣、注進有之候ニ付、右ハ巡邏持場近邊之儀ニモ御座候間、不取敢増人數、赤羽根橋迄出張爲仕、同所相固居候處、酒井左衞門尉家來之者ヨリ、手薄場所モ有之候ニ付、援兵之儀頼來候ニ付、任其意、松平伊豆守人數合併ニテ、松平阿波守中屋敷、右人數繰込候處、俄ニ薩州方ヨリ及發砲候ニ付、此方ヨリモ大砲小銃ヲ以テ頻ニ及接戰、暫時向方人數多分打倒申候、尤モ私人數之内、打死手負人等モ有之候ニ付、一先人數、赤羽根橋迄繰上ケ休息仕居候處、降参人有之候間、町奉行所迄相送可申旨、御目付阿部邦之助差圖ニ付、松平右近將監、鳥居丹波守家來申合、駒井相摸守御役宅へ差出候處、評定所へ可相送様被申聞候ニ付、又々附添、途中無異儀、同所へ相送、今曉寅ノ刻過、人數引取申候、此段御届申上候、以上。

十二月二十六日　間部下總守

別紙、

打死　三名　　手負　八名

間部詮道家記
淀藩加藤某筆記

○酒井忠寶家譜ニ云、十二月二十四日、松平權十郎西城ニ被召、執政少老ノ人々列座シテ、島津修理大夫三田ノ邸ニ浪人共多ク潛匿シ、市中暴行、野州出流山ニテ捕得セル竹內披等ノ言ニモ、薩邸ヘ同志之者多有之趣、加之、昨二十三日夜、左衛門尉巡邏人數屯所ヘ暴發イタセシ者共、不殘薩邸ヘ立入ノヨシ、市中取締ハ素ヨリ左衛門尉御委任之事故、人數ヲ差遣シ應接之上、返答次第踏込テ打取ルヘシ、加勢トシテ陸軍方可被遣、松平大和守、松平伊豆守、松平和泉守ヨリモ人數可差出被命間、速ニ可罷向、朝倉藤十郎、長阪血鎗九郎、水上藤太郎、檢使トシテ被遣旨被仰渡、會津藩士卄利源治、薩邸ノ案內能存タル故、案內者ニ被遣、同二十五日黎明、家人石原倉右衛門、主將トシテ西城下ヨリ押出シ、先ツ使者ヲ以テ、近頃市中暴行ノ浪士多ク、當邸ニ潛匿之趣、野州出流山ニテ捕得セル竹內披カ言ニモ有之、且ツ一昨夜、三田同朋町ニ於テ、左衛門尉市中巡邏ノ人數屯所ヘ、發砲ノ賊徒モ入居事、彼是其證分明ナリ、速ニ右ノ者共搦捕ヘキ旨、仰ヲ承リテ罷向ヒヌ、疾ク渡サルヘシトソイハシム、天下ノ形勢實ニ憂危ノ秋ナレハ、主家深キ心ヨリ浪士共集至ト雖モ、右等之致所業モノ當邸ニハ一人モコレナキ趣返答ス、猶應接ニ及處、篠崎彥十郎、關太郎ト申者、兩人對面シテ答フルニハ、惡浮浪ノ徒、實ニ當邸ニ潛匿等不致、本藩ニオヰテハ、公邊ニ對シ御敵可仕結構更ニコレナキヨシヲ陳シ、事ヲ左右ニ託シ、時ヲ延シ、用意ノ事アルニ似リ、使者因テ多言ヲ用ヒス、直ニ打入ヘキヨシヲイツテ歸ル、邸中頗ル狼狽ノ體ナリケレハ、三田西北ノ角ヘ大砲ヲ一發スルヤ否、大小砲ヲ打込、燒玉等彈射ス、火、邸中ニ發ス、支封酒井大學頭ノ兵、一番ニ進入、一隊ノ賊徒、松平中務大輔ノ固ル處無勢トヤ見テケン、無二無三ニ切拔ケ、四五十人品川ノ方ヘ逃去ヌ、降人ニ出ル者四十二人、討取處ノ首二級、島津淡路守邸ヘハ新徵組ヲ遣シ、有合處ノ人數盡召捕ヌ。

○赤報記ニ云、十二月廿五日、辰上刻、賊兵襲來、猥ニ發砲、遂ニ放火、既ニ邸中ヘ亂入、我兵憤發擊破之、賊兵散亂、我兵間ヲ得テ邸ヲ出テ、爲防禦策、高輪品川邊所々放火シ、鮫洲村ヨリ以小舟本藩蒸汽船ニ乘込、但小船三艘之中二艘、本船ヘ不

能近付、終ニ武州羽根田ヘ上陸、是賊以軍艦烈敷發砲之故也、賊、益我蒸汽船ヘ砲發、船中諸具大ニ破傷、晩景ニ至リ、賊船終ニ逃去、廿六日、豆州小浦湊ヘ入津、船並船具破傷修復、遠州灘ニ航ス、戌刻頃ヨリ暴風、船中益破傷、廿七日、暴風倍烈敷、終日徹夜無止時、船頭船子不殘斷髮禱冥助、蒸汽車ヘ碇綱卷付、進退極ル、廿八日、烈風少敷止、今曉ヨリ雨、廿九日未中刻頃、紀州九鬼浦ヘ入津、卅日巳刻頃、水原次郎、板田三四郎、伊牟田尚平、陸地ヨリ抵京師、慶應四年正月元日未明、九鬼浦出帆、二日申刻、兵庫湊ヘ入津。

○

馬場先御門	雉子橋御門	一ツ橋御門	呉服橋御門	鍜冶橋御門
幸橋御門	山下御門	赤坂御門	市ケ谷御門	牛込御門
新橋御門	喰違御門	水道橋御門	昌平橋御門	和泉橋御門
下谷新橋御門				

右之ケ所、今夜ヨリ當分之内〆切可申旨、稻葉美濃守殿被　仰渡候、依之、爲心得申達候、以上。

十二月二十五日　　長井筑前守
　　　　　　　　　木下大内記

坤儀革正錄

○

大目付ヘ

當節、悪徒共市中致暴行、且野州其外ニオイテ徒黨ヲ結ヒ、不容易事共取巧候ニ付、此程夫々御召捕相成候處、右同志之者共、松平修理大夫屋數内致潜伏居、去二十三日夜、市中爲御取締出張罷在候酒井左衞門尉人數屯所ヘ亂入致、砲發候所業難捨置、同人ヨリ召捕引渡之儀及掛合候處、理不盡ニ發砲ニオヨヒ候ニ付、無餘儀戰争相成候、就テハ猶脫走之輩モ難計候間、

右樣之モノ及見聞候ハヽ、速ニ召捕、自然手餘リ候ハヽ、討捨之上、早々訴出候樣可致、萬一見聞候共、其儘ニ差置候者ハ可被處重科候、右之趣、御料、私領、寺社領共不洩樣可被相觸候。

右之通、萬石以上以下之面々へ可被達候。　本多正憲家記　森川俊方家記

○附錄 薩邸襲擊概略

先達テ中ヨリ薩藩ニ御不審有之、御探索相成候處、第一天璋院樣ヲ奪出サン手立有之、種々策ヲ回ラシ、遂ニ一昨二十三日、二丸炎上ニモ相成、是全薩之策ナリ、其上浮浪之徒邸内ヘ潛伏爲致、夜々市中暴行、押借强盜盛ニ相成、御府内一體不穩ニ付、嚴ク御吟味相成候處、同藩ニ相違無之ニ付、御留守居御呼出御尋之趣モ有之候處、左樣之者無之ト申張リ、種々御談判中ニ、同日、芝三田久留米侯御門前通、莊内侯屯所相成候場所ヘ馬上ニテ乘來、不意ニ發砲イタシ候ニ付、直ニ追懸候處、薩屋敷ヘ逃込候哉ニ見請、依之、御屆ニ及ヒ候處、昨二十四日、會藩何某ト申者申出候ニハ、先達テヨリ薩藩ヘ入込、浮浪人ニ加入相成、遂探索候處、全ク陰謀相違無之、市中ヨリ奪取候金子凡二十萬兩程、蒸氣船ヘ積入、明後二十六日ニハ出帆之見込ニ付、此圖ヲ不討シテハ最早時節無之、速ニ御糺問之上、御所置可有之ト申出候ニ付、莊内重役松平權十郎西城ニ罷出、閣老ヘ斯々ト申述候處、少々御不承知ニモ相見エ、御差留ニモ相成候處、會藩之間者、委ク探索確證ヲ握リ候事ユヘ、少シモ猶豫不相成、此儀强テ御留ニ相成候ハヽ、是迄御締向被仰付候詮モ無之事、藩士一同切腹可仕ト頻ニ相迫リ候ニ付、則免許ニ相成、夫々御手配、諸家ヘ討手被仰付、莊内侯人數百人計リヲ初トシテ、二十四日ヨリ押出シ到著之上、同侯番頭邸内ヘ入込、重立候者ニ面會、不正之者有之趣ニ付、召捕被差出候樣致度、尤不被差出候ハヽ、無據此方ヨリ踏込召捕候旨及談判候處、答ニ曰、御不審之者一切無之、此上御不承知ニ候ハヽ、勝手ニ召捕候樣、隨分御相手ニ可相成ト手切ノ口上有之否、兼テ用意之發砲ニ及候ニ付、莊内手ヨリ砲發、大砲ニテ門打破リ繰込、直ニ及接戰候處、左右ヨリ頻ニ小銃打立、雙方烈シク相戰、其内破裂玉ナド打込、放火ニ及ヒ、長屋長屋悉ク火移リ、彼ヨリモ共ニ火ヲ懸ケ候由、雙方トモニ死傷數不知、薩人四十人餘モ召捕ニ相成候由、乍然、重立候者一向不相見、御隣家阿州侯御屋敷邊、伊豆守樣御軒下之處、同所塀ヲ五百人許リ

乘越、酒井人數ト詭リ出、直ニ切掛候ニ付、同所ニテ見張、間部侯ニ有之所、是モ友崩ニテ敗走ス、兩君侯ニモ御手疵被蒙候由、表門通之砲戰難叶、奥庭小山蔭ヘ逃込、少々打合候處、間合詰リ、何レモ筒ヲ捨、拔連、裏通リ固メ居候撒兵歩兵之中ヘ切込候處、一發モ不放、サツト開通シ候ニ付、脱走スト云フ、右之内ト相見エ、三十人計リ田町通リヨリ高輪邊、血刀ヲ提ケ、何レモ謡ヲウタヒナガラ靜々ト落去、羽根田ヨリ乘船イタシ、内一人乘後レ候哉、近郷ニテ船ノ周旋致候處、無之ニ付、東海道三島宿迄參リ候處、農兵ニ被圍、召捕ニ相成、其外ハ品川邊ヨリ小船ニテ落去、是等ハ追手ヨリ數十發打懸候得共、遂ニ無難ニ沖合ヘ出候由、右戰爭始リハ二十五日朝、諸家人數引揚ハ夕七ツ時過、鎭火ハ二十六日曉六ツ時ナリ、右屋敷跡土藏計リ殘リ、長屋類ハ不殘燒失、先キ先キニ六七人程死骸有之、馬二疋半死ニテ有之、御分家島津侯屋數ヘモ及應接候處、少々手向之趣ニ付、直ニ發砲致シ候處、早々降參召捕ニ相成候由、町家燒失ハ金杉海手迄田町之内二丁程、高輪通別條ナク、品川驛橋向燒失、是ハ落人、道々何ニ寄ラス火ヲ付ケ町家ヘ投入候由、夫ヨリ燒出ス、右討手御名左ニ、

酒井左衛門尉殿　松平大和守殿　間部下總守殿　松平和泉守殿
松平伊豆守殿　松前志摩守殿　堀田相模守殿　三宅備後守殿
鳥居丹波守殿　酒井紀伊守殿　牧野伊勢守殿　遠藤但馬守殿　黒川秀波筆記

○附錄、慶明雜錄西郷隆盛書翰ニ云、昨夜、十二月晦日ヲ指ス、出羽秋田藩高瀨權平、楠英三郎ト申者、御留守居付役遠武吉、二方ヘ參リ申出候ニハ、兩人之者共外五人、君侯御上京之論偏ニ相立候處、用人之奸物相拒ミ、迚モ勤　王之道不相行、終ニ斬奸ニ及ヒ、身ヲ御邸内ニ相投シ、田町御屋敷ヘ潜匿イタシ居候テ、蒸氣船之出帆ヲ相待罷在候處、二十八日出帆被相究、右折柄二十五日朝、關七郎參申聞候ハ、只今、酒井左衛門尉手勢、竝歩兵上御屋敷ヲ取卷、御留守居面會致度段承候、就テハ此内ヨリ御屋敷内ヘ被召置候浪人共、可引渡トノ趣ト相見得候付、穩ニ談判可致含ニハ候得共、如何樣變ヲ引出候モ難計、此上ハ七人之御身上、大事ヲ抱居ラレ候御方之事故、暫ク邸内ヲ相迦呉候樣承候ニ付、無據相去候折柄、早田町ヘ掛候時分、砲聲相起、品川邊ヘ參候節ハ、最早火手モ起候ニ付、直樣其儘上京仕候次第ニ御坐候、外五人之者共ニハ、跡之形行得ト見屆候

上、罷登候樣申付罷越候トノ趣ニテ、大ニ驚駭イタシ候仕合ニ御座候、右樣之變動故、一左右可申越道モ有之間敷、畢竟、二十三日、御城出火、翌二十四日迄燒通候由ニ御座候、就テハ右出火之起リ、浪士共ヘ不審相掛義故、甚暴動之次第ニ御座候得共、何分樣子不相分候付、早々探索之者差出候義ニ御座候、於江戸諸方ヘ浪士相起リ、動亂ニ及候趣ニ相聞候間、必諸方ヘ義擧イタシ候事カト相察セラレ申候、京師ニオヰテモ相響候趣ト相聞エ、爰許ニテ壯士之者暴發不致樣御運御座候得共、イマタ譯モ不相分、何レヲ可正筋モ無之、其內決テ暴動ハ不致段、御屆申出置候義ニ御座候、全體九日以來之處、大ニ舊幕之輩相惡居候義ニ御座候得ハ、早ク江戸浪士ヲ倒シ候策カト相察スル義ニ御座候、百五十人計罷居候テ、決テ暴擧イタシ候賦トハ不相見、京師之擧動ニ依リ、如何樣共可致トノ樣子ニテ、乙名敷罷在候趣ハ、近比迄相聞得居候處、右等之恐レ有之、先チイタシ候者カ、殘念千萬之次第ニ御座候、何分細事不相分候ニ付、委敷相分候ハヽ、又々可申上候、蒸氣船之義ハ、其節ニ臨ミ出帆イタシ候共、又々燒亡ニ及候共申事ニ御座候得共、虛實不相分事ニ御座候。

○又云、翔鳳丸ハ定府下シ方トシテ品川ヘ碇泊之處、右同日、御屋敷人數、又ハ浪士等切拔、小舟ヨリ右船ヘ乘移ル所ヲ、德川軍艦四艘ヨリ砲發故、翔鳳丸ヘ乘移ルモ有リ、打沈マレタルモアリ、其儘出帆之處、軍艦二艘ニテ神奈川沖迄付來、砲發少々當レリ、夫ヨリ彼モ引取リシナリ、何トカイフ港（赤報記ニ云、豆州小浦港、）ヘ碇泊、痛所修覆之上、此二日攝海ヘ著船ナリ、右浪士ハ、已前ヨリ御館內ヘ潛伏之二百人計之內ナリ、兼テ御屋敷出入等モ嚴重互ニ相締リ、遊所抔ヘ差越候者ハ、直ニ切捨候程之由ナリ。

○舊幕府、若年寄秋月種樹ノ請ヲ許シテ、其職ヲ罷ム。（秋月種殷家記）

二十六日、再ヒ池田慶德、京極高厚ヲ召ス。

因幡中將

先達テ上京之儀、被　仰達候儀ニテハ有之候得共、此間中上京之輩、報國之旨趣追々被聞食入候次第モ有之、旁以一段盡力、

士氣奮勵、早々參著可有之、更ニ　御沙汰候事。池田輝知家記

○

京極飛驒守

先達テ上京之儀、被　仰達候儀ニテハ有之候得共、在江戸之趣、且追々被　聞食入候次第、旁早々參著候樣更ニ　御沙汰候事。

十二月　京極高厚家記

○九條道孝ノ邸ヲ以テ、假ニ太政官代ト爲サントス、三岡公正ヲシテ其事ヲ管セシム。

三岡八郎

九條殿、假太政官代御用掛被　仰付候事。由利公正履歷書

○井伊直憲ノ請ヲ嘉奬シ、四塚關門ヲ守衞セシム。

井伊掃部頭

病氣ニ付歸邑之儀出願之處、御沙汰之趣有之在京、此内中熟考、最早歸邑可致御時節ニテハ無御座、乍病中斷然奮發、盡死力　禁闕ヲ守衞仕度、隨テ御用筋被　仰付度、言上之件々神妙之至、不斜　御滿足候、依之、四ツ塚關門警衞可致被　仰付候事。

十二月

追テ四ツ塚警衞之儀、是迄市橋下總守ヘ被　仰付置候儀ニ付、同人申合、總テ都合可致候事。井伊直憲家記

○本願寺光澤ニ諭シ、門徒ヲ倡率シテ、力ヲ王事ニ致サシム。

勤王志願ニ於テハ、兼テ被　聞食入候處、猶又當御時節柄、門徒末々ニ至リ奮勵之趣、神妙ニ被　思食候、依之、　御用向被仰付候筋モ有之候ニ付、彌以勠力可致奉公被　仰出候事。

猶又御下問之儀有之候ニ付、門徒之内一兩輩、並家來重役之者、早々非藏人口へ可差出候事。（本願寺記）

○初メ三輪田元綱（綱一郎○伊豫松山、日尾八幡社祠官、）等六人、足利氏ノ木像ヲ梟首セシ罪ヲ以テ、各藩ニ禁錮ス、（文久癸亥ノ歲ニ在リ、）是日、之ヲ宥ス。

藤堂佐渡守預り
　青柳健之助
　建部建一郎
各通
松平伊賀守預り
　師岡節齋
　大場恭平
小笠原左衞門佐預り
　野呂久左衞門
京極飛驒守預り
　三輪田綱一郎

去ル亥年、足利木像梟首事件ニ付、禁錮有之候處、今度政令御一新ニ付、被　免候旨被　仰出候間、此段可取計候事。

十二月　（藤堂高邦以下四家家記）

○長門藩、文武館ヲ借リ、以テ屯營ト爲サンコトヲ請フ、之ヲ許ス。

今般、蛤御門御守衞、並ニ伏見表巡邏等被　仰付、國元ヨリ人數モ追々罷登居候處、右屯住所、尙諸器械置附場モ無御座差閊候折柄、二條城近邊文武館有之由、何卒右館ヲ拜借被　仰付度、其外ニテモ相應之場所有之候ヘハ、拜借被　仰付候樣、被

遂　御評議可被下奉至願候、以上。指華入京日載

○　　　　　　　　長州

二條近邊文武館拜借、願之通被　仰付候間、引渡方萬事、戸田大和守へ可申談候事。指華入京日載

○堀親義、大坂ニ赴キ、德川慶喜ニ面センコトヲ請フ、許サス。

德川内府、先達テ大坂表へ被相越候處、私儀ハ兼テ　朝廷ヨリ被爲　召候儀モ御座候ニ付、其儘滯京罷在候、是迄相勤候役前奏者番、ニ付、取扱懸ケ候儀モ御座候間、一日下坂仕、卽上京仕度奉存候、此段以使者奉伺候、以上。

十二月二十四日　　堀左衛門尉

堀親廣家記

○本日批紙

般舟院御警衛モ被　仰付有之候間、今暫滯京候樣被　仰出候事。堀親廣家記

○伊達廣邦、細川慶順等、十一人ノ老臣、連署書ヲ上リ、復古ノ際、情勢ヲ察シ、緩急ヲ量リ、德川氏ヲ處スル、務メテ其部下ヲ鎭輯センコトヲ請フ。

於　朝廷萬機御裁決被遊候ニ付テハ、天下之公論ヲ被爲採候間、心附候儀ハ不憚忌諱極言仕候樣トノ趣、委曲　御沙汰之旨難有奉畏候、就テハ不束ノ存意ニ候得共、默止罷在候テハ　御趣意ニ違却仕候間、乍恐左ニ言上仕候、去九日以來、稜々大非常ノ御變革、柱礎ハ被相立候形ニ付、此上ハ精々被爲盡衆議、名實相反不申樣御施行被爲在度、擧テ奉懇願候内、德川前内府公、輕隊ニテ速ニ上京有之候樣、御内沙汰被爲在候趣ニ傳承仕、同公ハ疾御了解ノ御樣子ニ付、素ヨリ　勅意ノ通御心得可被成候得共、卽今ノ形勢、臣下ニ取候テハ、御上京一條、何分心遣ニ堪兼候ハ必然ニテ、又々紛擾難計、夫モ夫々ノ

忠心ヨリ出候譯ニ付、其儀ハ　朝廷ヨリモ深御洞察、御猶豫被爲在度、殊ニ德川家ハ癸丑以來、失體ノ稜モ不少趣ニ候得共、右ハ專先代ニ關係イタシ候儀ニテ、當公ニ相成候テハ、二百五十年來ノ政權職掌被奉辭候モ、一意ニ　朝廷ノ御爲筋ヨリ發候果斷ニ候ヘハ、今般更始御一新ノ折柄、總テ人心ノ動搖ニ係候儀ハ、成丈御斟酌被爲在、漸ヲ以テ復古ノ御政體取固相成候樣被爲在度奉存候、一向ニ公平正大ト申候テモ、時處位ニ因テ緩急之差別モ無之候テハ相成申間敷、追々難有被　仰出モ有之候得共、何分今日ノ形勢ニテハ、約リ列藩割據ノ姿トモ成行可申哉、加之、外國ノ覬覦モ難計、　皇國治安ノ譯ヲ以テ、却テ　皇國ヲ傷害スル筋ニ相成候テハ、全體ノ　御趣意ニ致相違、苟モ祖先ヨリ　王化ニ浴候身分、實ニ泣涕憂苦ニ堪不申、戰兢罷在候、依之、鹵莽ヲ不省、差當危急ノ條々、廟堂御衆議ノ端ニモ可相成哉ト申上試候間、三人占時ハ二人ノ言ニ從フト申ス古語モ有之、何卒其員ニ御加被下、一刻モ早ク御鎭撫ノ御處置ニ相成、猶此上ノ儀モ、衆議ノ所歸ヲ以テ御裁決被爲在、萬民安堵之場合ニ至候樣、重疊奉願候、誠恐誠惶、頓首敬白。

十二月二十六日

松平阿波守内　長江播磨
松平美濃守内　久野四郎兵衛
松平陸奥守内　但木土佐
細川越中守内　三宅藤右衛門
藤堂和泉守内　藤堂歸雲
有馬中務大輔内　山村源太夫
立花飛驒守内　藤谷小六兵衛
丹羽左京太夫内　増子現藏
松平肥前守内　酒井平兵衛
宗對馬守内　平田爲之允

溝口誠之進内　窪田平兵衛（細川護久家記 有馬頼咸家記）

○毛利元功、（平六郎○元蕃ノ子）及ヒ吉川經幹老臣宮莊某、（主水）参朝シ、毛利敬親父子、及ヒ支封主官位復舊ノ恩ヲ謝ス。○毛利元功、吉川經健家記

○舊幕府、榊原政敬ヲシテ前田利同、南部信順、本多忠紀ト共ニ、東叡山ヲ警守セシム。○榊原政敬家記

復古記　巻十三　終

總括兼纂修
一等修撰　臣　長松幹

校勘
一等修撰　臣　長炗
一等協修　臣　四屋恒之

校錄
一等書記　臣　澤渡廣孝

繕寫
二等繕寫生　臣　小川長和
二等繕寫生　臣　小島春

復古記　卷十四

慶應三年丁卯十二月二十七日ニ起リ晦日ニ至ル

○十二月

二十七日、天皇建春門ニ御シ、薩、藝、長、土四藩兵ノ操練ヲ覽ル。

○二十六日達書

明日巳刻、於建春門前調練有之候間、必動搖有之間敷候事。有栖川宮家記

○島津忠義家記ニ云正親町三條、前大納言正親町少將ヨリ薩、長、藝、土兵隊調練、來二十七日巳刻、日之御門前ニ於テ被遊叡覽候段被仰出候間、人數取調可申出、當分諸所ヘ警衞人數ハ引揚ニ不及、手明ノ人數可罷出、且當時ノ事ユヘ砲發致シ候テハ、人氣動搖モ可有之ニ付、砲發無之樣ト御達有之。

○慶明雜錄ニ云、日ノ御門脇穴門ヘ玉座ス、又阿久根某ノ書柬ヲ載ス、云、一番ニ土州ノ備ハ二十人位宛二備ニテ、實ニ小人數、二番藝州三備、是モ二十人計宛、三番長州一大隊、凡四百人位モ候半、見事ニ候、四番此御方樣備一大隊、六百人餘、私モ此備ニ加ハリ、一通リ調練、其後又一大隊十小隊ヲ一ツニ致シ、凡人數千人ヲ越候半、諸卿番兵込ニテ御座候云々。

○指華入京日載ニ云、五中隊於日御門前調練、備天覽、畢テ於鶴間、四藩頭立者致召出、伊丹酒二十樽、松魚代白銀二百枚被下。

○參與岩倉具視ヲ以テ議定ト爲ス。岩倉具視事蹟

○宣旨、家記原記ヲ失ス。

○三條實美、前中納言、三條西季知、前中納言、東久世通禧、前少將、四條隆謌、前侍從、壬生基修前修理權大夫、筑前ヨリ至リ入朝恩ヲ謝ス、三條實美等五家家記乃チ實美ヲ以テ議定ト爲シ、通禧ヲ參與ト爲ス。○實美通禧兩家記

○慶明雜錄大久保利通書柬ニ云、二十七日、五卿御著京、一同御參朝、但壬生卿御所勞御不參ト、實美、通禧家記、宣旨ノ原記ヲ失ス、案スルニ、嵯峨實愛手記ニ云、實美ハ御前相願思召段々伺申候、五宮被伺候被申含仰之趣御請候、於通禧ハ予ヨリ申渡候ト、之ニ據レハ、二人皆口達ニシテ、宣旨ナキニ似タリ。

○熊野三山社家ニ命シテ、撿校宮聖護院宮、ノ管理ニ屬シ、且ツ其還俗ヲ許ス。

熊野三之山社家

自今、可爲撿校宮支配之事。

同前

自今、兩部之風習一洗、各如願還俗之事。坤儀革正錄

○建部政世、歸藩ノ請ヲ聽ス。○建部揆家記○明年正月七日、藩ニ歸ル、上途ノ日詳ナラス、

○松平慶倫、書ヲ上リ、太政更始ノ際、親裁空名ニ屬シ、政令多門ニ出テ、徳川慶喜政權奉還ノ本意ヲ失ハサランコトヲ陳ス。

以不肖之身亦藩屛之列ニ罷在、恐多モ　先帝在天御時、厚ク蒙寵眷、殊ニ國家盡力官武一致内　勅被爲下置難有仕合奉存候、如何セン愚昧不肖之上、時勢變遷之故ヲ以テ無寸分之功、恐縮待罪之日ニ至テ、忽地萬國ヲ被爲棄候條、泣血慟哭之至ニ不堪候、早速上都　山陵ニ拜哭、御詫可奉申上處、今日迄延引罷在、何共恐入奉存候、今又潜龍新ニ九五ニ被爲昇候ニ當リ、武門專制六百八十年來之政權、一時　朝廷ニ被爲歸、皇政復古之盛典ヲ被爲擧、萬機被遊　親臨候御事、恐悦至極奉存候、

臣此際ニ遭ヒ、辱モ寵名之數ニ預リ候段不堪感泣、宿痾養護、近々述職可仕奉存候、乍去、大樹公辭表ヲ觀ルニ、深ク大政之二樣ニ出ルヲ憂ヒ、萬機一途ニ不歸候ハテハ、方今多事之天下不相治段洞觀セシメ、一家相傳二百六十年之政柄無慳戀被差上候儀ト推察仕候、奉恐入候ハ官武轉換、殊ニ御親視之折柄、九重深遠　御幼沖ニ被爲在候間、萬々一、萬機　親臨ハ御空名ニテ、却テ大政多門ニ出候樣相成候テハ、愈以不可然、大樹公返上之本意ニ有之間敷奉存候、仰願ハ此上四聰ヲ被爲發、博ク群言ヲ格シ、是カタメニ不被爲惑、萬機必　御神斷ニ出テ、御政柄多門ニ不移樣有御座度、伏テ奉懇願候、但臣之不肖、亦德川氏遠裔之身ニ候間、一家之私情今日ニ至リ歔泣嗚咽言ニ不忍者ニ御座候、召之同列追々朝覲參會之上ハ、廉々救問可相成奉恐察候得共、此外見込申上候樣無御座候、唯々　山陵ニ拜哭、　御登極奉壽候ノミニ御座候、誠惶誠恐頓首頓首。

十二月十七日　　美作中將臣慶倫

松平康倫家記

二十八日、伊達宗城ヲ以テ、議定トス。

宇和島少將

議定職被　仰付候事。　伊達宗徳家記

○池田茂政ニ令シテ、速ニ西宮守兵ヲ出サシム。

備前少將

西宮守衛、是迄加藤遠江守へ被　仰付置候處、當時彼是混雜之趣相聞候、素ヨリ小藩ニテハ御掛念之儀ニ付、過日守衛被　仰付置候得共、尚又早々出兵取締可有之　御沙汰候事。　池田章政家記

○牧野忠訓、大坂ニ赴ク、牧野忠毅家記久松定法、内膳正、○今治藩主、食封三萬五千石、時ニ松平氏ヲ稱ス、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ京ニ至ラシ

ム。久松定弘家記

○徳川慶勝、松平慶永、大阪ニ赴キ、命ヲ徳川慶喜ニ傳フ、二十六日ニ在リ、是日、慶喜、奉命書ヲ二人ニ致シ、且政府ノ經費ハ、之ヲ全國ニ課スルニ非レハ、以テ部下ノ心ヲ鎭輯スヘカラサルヲ陳ス。

○春嶽私記ニ云、二十六日丑半刻御著阪、午半刻頃御登城相成、尾侯ハ御船中ヨリ御發瘧ニテ御手間取有之、暮時前御著船ナリ、公御登城之上、先ツ伊賀殿、永井殿ヘ御逢、夫ヨリ内府公ヘ御對面、　朝廷ヨリ御渡之御書面、御直ニ被指上、伊賀殿、豐前殿、玄蕃殿侍坐有之、相濟候テ、　廷議以之外艱難之運候處、土侯、竝下院之有志、周旋盡力之次第、逐條被仰上候得ハ、内府公ニモ殊ニ御感激ニテ、夫程ニ時機到來之事候ヘハ、坂地之儀ハ如何樣ニモ被成、御請モ品能可被仰上、御上京モ可被成ト、御内談ハ粗御取極ニ相成候得共、餘リ速ニ御發表相致候テハ、却テ御輕易之姿ニテ、人心如何ト御斟酌ニテ、明日ナト御請可然歟之御談之由、尾侯ハ御所勞ニ付、爲御名代成瀬隼人正登城、御目見被仰付、從　朝廷御沙汰之御書面御直ニ指上之由、永井殿、戸川殿、雪江ヘ逢對、京狀被相尋ニ付、二十三日、二十四日之　廷議、竝結局迄之次第、逐一委曲ニ及物語候處、如何ニモ危急千萬之形勢ナリキト驚歎セラレ、其模樣ニテハ是非共御上京無之テハ難相濟トノ示談ナリ、二十七日巳刻、西本願寺掛所尾侯御旅館ヘ被爲入、昨日、營中ニテ内府公ト御直談之御次第御物語ニテ、二侯迄之御書面御差出ニ相成候ハヽ、夫ヲ二侯ニテ御引直シ、御書取御　奏聞ニ相成可然トノ御談ニ相成、夫ヨリ直ニ御登城ニテ、伊賀殿初ヘ御逢御談之處、唯今於御前、永井、平山兩參政執筆ニテ、御書面御取懸リニ相成居、未定之事ニ御坐候間、今日ハ御退出、明日御登城之上トノ御談ニ相成、扨、麾下モ大半鎭定ニモ相運ヒ候間、御上京モ御都合次第、緩急共御請可被成御模樣之由ナリ、二十八日午刻、御登城之處、内府公御所勞ニ付、御請書之儀ハ、伊賀殿ヲ以御差出有之候、如左。

○辭官之儀ハ、前内大臣ト可稱、御政務御用途之儀ハ、天下之公論ヲ以テ御確定可被遊ト之　御沙汰之趣、謹承仕候段、可然可被申上候事。

○御政務御用途之儀ハ、天下之公論ヲ以テ御決定、　皇國　高割ヲ以テ相供候樣不相成候テハ、臣子之鎭撫行屆不申、容易ニ御請モ難申上候間、其段厚御心得、御盡力有之樣致度候事、

尾侯ヘ之御請ハ、成瀨隼人正ヘ御渡ニ相成由相濟、於御床御對面有之、右御請書ハ兩侯ヘ之御書面故、尾侯ト御相談御引直御書取ニ相成候上、御奏聞可被成ト被仰上由、此節御上京之御程合御伺之處、如此相成候上ハ、京地之御都合御安心之段、兩侯御請合ニテ御申越被成候得ハ、何時ニテモ御上京可被成旨、御上京之上御參　內迄之處、等閑ニ御日間取レ候樣ニテハ、又人心ニ關係致候間、其御程合御見据ヘニテ、雪江ヲ以テ被仰越候樣ト御直約被爲在、御退出相成、右之次第、尾侯ヘ被仰入、御請書モ御廻ニ相成候處、大ニ御安悅、明朝御歸京之御積之由、夜半比、尾侯ヨリ中村修之進被遣、過刻御廻ニ相成候御請書ハ、公御持參ニテ御上京相成候樣御賴ニテ、御返却ニ相成ル。

○附錄又云、二十六日朝、田中國之輔御旅館ヘ罷出、尾侯、伏水御著之折柄、阪地ヨリ被指出置候新撰隊之內、無賴之徒有之致橫行候ニ付、薩、長之巡邏ヨリ嚴制之模樣、動モスレハ爭端可惹出勢、甚危急ニ付、阪兵一日モ早ク引取候得ハ、巡邏之方ハ尾藩田宮如雲、當時京尹之勤方ニテ、伏水モ管內ニ付、如雲ヨリ朝廷ヘ申上、尾、越ノ兵ト引替候樣被成度ト、尾侯御旅館ヘ新撰隊之頭被召呼、早々引取候樣御直談ニテ御垂諭有之候得共、阪命ニテ罷出居事候ヘハ、阪命サヘ有之候ヘハ引取可申、左樣無之テハ引取兼候趣及御答候ニ付、被成方無之、御捨置被成候ヘハ、大事之前ニテ、蟻穴之妨害眼前之勢ニ付、尾侯御登城被成候ハヽ、御談之上御取計可被成御含之處、御登城難被成ニ付、御家來共ヲ以テ御達ニ相成候間、公御登城之上、猶又御助勢被成御坐候樣御賴談之旨ニ付、則於營中永井殿ヘ御談之處、隊兵何レモ恭順ニテ、聊妄動無之筈候得共、猶嚴重可申越、無賴之徒ハ先日隊中脫走之者二三十人有之、其者共之橫行ハ、於隊長モ如何共取計方無之次第之由、此輩之爲ニ不律モ無之、兵隊今更引取候樣申越候テモ、何カ不首尾之姿ニモ相當候故、決テ引取申間敷抔申上、御談整兼候由、夜子刻比、尾藩荒川甚作御旅館ヘ罷出、伏水一條、今朝ヨリ唯今迄、監察三位ト及議論候得共、監察衆之方ニテハ更ニ可爲引取謂レ無之ト、水懸論ニテ一向不相決、三人共被引入仕舞ニ付、無據退出致候次第候間、何卒明日御登城之上、精々御助聲被成下樣、相

願候旨申達候由。

○舊幕府、保科正益、戸田氏良ヲシテ、品川驛關門ヲ守ラシム、保科正益家記又關門ヲ江戸諸口ニ置キ、出入ヲ撿シテ、印票ヲ付シ、各地ノ關守ニ令シテ、印票ナキ者ノ經過ヲ禁ス。

市在取締之爲、當分之內御府內出口所々へ關門御取建相成、諸士之分ハ其主人、又ハ重役ヨリ、何方へ家來幾人差遣候旨斷書、百姓町人ハ、所役人之添書持參無之ニオヰテハ、出入共一切通行差留、尤斷書、添狀ハ關門ニテ相改、疑敷子細モ無之候得ハ、於同所切手相渡候間、關門相越候テ、右切手所持不致旅人ハ、御府內ハ勿論、道中筋、竝在々ニテモ決テ旅宿爲致間敷、且右改ヲ不受、押テ通行可致ト仕成、又ハ旅行切手所持不致旅人ハ、無用捨召捕、若手向ニオヨヒ候ハヽ、切捨候筈ニ候、尤當時出府途中ニテ、關門通行方不相辨者ハ、關門ニオヰテ篤ト相糺シ、疑敷筋無之候得ハ、相通候筈ニ候、

右之趣、御料、私領、寺社領共、不洩樣可被相觸候、

右之通、萬石以上以下之面々へ可被達候。板倉勝達家記

○

關所關所之通方、是迄印鑑引合通行之分、以來其儀ニ不及旨、當七月中相達候得共、今般相觸候趣モ有之候ニ付、當分右之心得ヲ以テ、出口關門ニ於テ相渡候切手ニ致加印、最寄領主地頭家來、其外ヨリ斷書差出候分ハ、通切手不相渡、右切手、又ハ斷書所持不致モノ共ハ不相通、尤當時旅行中ニテ、今般相觸候趣不相辨分ハ、得ト糺シ之上、怪敷儀無之候得ハ、右切手所持不致候テモ相通候筈ニ候、

右之趣、關所御預之面々へ可被相達候。

十二月　板倉種家記

○松平容保ノ子喜德、若狹守上國ノ報ヲ聞キ、書ヲ上杉齊憲ニ致シテ、其協同救援ヲ請フ、其老臣

モ亦藩内士民ニ檄シ、太政更革ハ奸邪ノ矯勅ニ出ツ、其或ハ兵ヲ我ニ加フルコトアラハ、宜ク一心同力、誓テ奸邪ヲ翦滅スヘキヲ諭ス。

○米澤藩戊辰事情記ニ云、會津容保嗣子、若狹ヨリノ使者武井寛平、清水作右衛門、米澤ニ來ル、用人木滑要人、倉崎七左衛門面接ス、使旨ニ云、京畿近狀彌切迫、　皇國ノ爲メ協心戮力、偏ニ所企望ナリ、現今藩ヲ悉シ上京、國内更ニ空虚、如シ不虞ノ變アラハ、隣好依頼ノ外他ナシ、伏テ救助ヲ仰クト、但別ニ親書アリ。

○會津藩告諭書

恭惟癸丑甲寅以來、夷虜航海シテ猖獗ヲ恣ニシ、物價ノ騰湧日々益シ、月々甚シク、終ニ人心乖戾ニ至ル、其原ヲ尋ルニ、幕府ノ失體ヨリ起ル、　天皇深ク之ヲ憂悶シ給ヒ、何トナク公武ノ間一和セサルノ勢アリ、幕府其罪ヲ悟テ、舊弊ヲ除キ、遵奉ノ典ヲ興シ、衆ニ選テ我公ヲ以テ京師守護ノ職ニ任シ給フ、然ルニ京師ノ事情如何、　叡慮如何ト云フコトヲ知ラス、分ヲ量リ力ヲ料テ、其任ニ勝エサランコトヲ畏レテ、敢テ當リ給ハス、衆論紛々トシテ一定ナラス、時ニ幕府ノ内命ニ依テ、人ヲ遣シテ京師ノ狀ヲ探ラシメ、髣髴トシテ　叡慮ノ在ル所ヲ知リ給ヒ、今此職ヲ奉シテ輦轂ノ下ヲ護リ、言若シ信用セラルヽトキハ、公武ノ間ヲ和シ、徳川家ノ危急ヲ救フコト、此時ニ在リ、縱ヒ任ニ勝エスシテ身ヲ失フトモ、西上シテ京師ヲ以テ墳墓ノ地ト定メ、上ハ　叡慮ヲ安シ奉リ、下ハ萬民ヲ救ハント、斷然決心シテ上京シ給フ、其以來精忠ヲ抽テ給フニ依テ、　天皇深ク依頼シ給ヒ、大樹ノ愛寵又厚シ、是ヲ以テ、危難ノ事或ハ之アリト雖モ、必利運ニ轉シ、今ニ至ルマテ六年ノ間、誠忠不渝、終始如一、　天皇叡感ノ餘リ、幾度トナク　宸翰ヲ下シ賜ハリ、公嘗テ病スルトキ、辱クモ自ラ　内侍所ニ於テ祈願シ給フニ至ル、其寵遇實ニ無比類ト云フヘシ、今春モ　先帝叡慮遵奉、長々守護ノ職掌相勵、其功不少、　叡感不斜トノ褒賞ニテ、參議　御推任モ有之、元來長州ハ、先年ヨリ外ハ　尊王攘夷ニ託シテ、實ハ不軌ノ志ヲ懷キ、　王室ヲ誘ヒ、幕府ヲ欺キ、其罪枚擧スヘカラス、甲子七月ニ至リ、終ニ大兵ヲ擧テ　禁闕ノ下ヲ襲ヒ、銃丸　御所ノ屋簷ニ及フニ至

リ、其逆亂ノ罪誅シテモ猶餘アリ、　天皇大ニ逆鱗、大樹亦深ク之ヲ惡ミ給フト雖モ、遂ニ寛典ニ従ヒ、纔ニ官位ヲ脫剝シ、
領地ヲ削リ、其命ヲ用ヒサルニ至テ、其罪ヲ聲シテ之ヲ伐ツ、　然ルニ　天皇崩御、大樹薨去、大喪打續キ、國家多難ノ時ニ
逢ヒ、姑ク兵ヲ解クノ處、姦邪其隙ニ乘シテ、無勿體モ　幼主ノ明ヲ闇マシ奉リ、事ニ託シテ長州ノ罪ヲ赦シ、官位舊ニ復
シ、　先帝ノ勅勘ヲ蒙リシ公卿ヲ用ヒ、陪臣ヲシテ參與セシメ、攝政殿下ヲ始メ奉リ、大樹、我公、桑名侯、皆其職ヲ免シ、正
邸地ヲ易ヘ、忠姦處ヲ易フルニ至ル、是　先帝ノ意ニ非ルノミナラス、亦　今上ノ意ニ非ルコト明白ナリ、嗚呼一抔ノ土未
タ乾カサルニ、　今上ヲシテ父ノ道ヲ改メシムルコト、大惡不道ノ至リト謂フヘシ、其他、和州ノ一揆ヲ釀シ、英夷ニ降テ
其力ヲ頼ムノ類、其罪亦輕カラス、此上ハ幕府、竝我公ニ汚名ヲ負ハセ、兵ヲ加ヘンコト亦知ルヘカラス、我公多年ノ誠忠、
空ク水ノ泡トナリ、殘念ト云フモ愚ナルコトナラスヤ、實ニ膽ヲ甞メ薪ニ臥スノ時ニシテ、君辱シメラルレハ臣死スルノ
期至レリ、苟モ人心有ル者、臣子ノ情ニ於テ、豈片時モ安スヘケンヤ、
禁廷ニ對シ奉テ弓ヲ引クハ決シテ爲スヘカラスト雖モ、姦邪ノ徒、若シ　綸旨ヲ矯テ兵ヲ加フルコトアラハ、關東ト力ヲ
戮セ、義兵ヲ擧ケテ君側ノ姦邪ヲ除カサルコトヲ得ス、夫レ公ノ忠誠貫徹セスシテ、今如此ノ勢ニ至ルハ、抑盡クサヽル所
アルカ、是畢竟、臣民公ノ意ヲ戴任スルノ全カラサルニ由ル、恐多キノ至ニアラスヤ、然レハ闔藩ノ四民、貴賤上下トナク、
祖宗以來德澤ニ浴スル者、面々此意ヲ領掌シ、力ヲ合セ、心ヲ一ニシテ、兵起ラハ早ク國家ノ敵ヲ誅滅シ、武威益天下ニ輝
カサンコトヲ期シ、日夜肝ニ銘シ、暫時モ忘ルヽコトナク、國論一途ニ歸シ、萬人ノ心一人ノ如クナラハ、我公ノ精忠天地
ヲ貫キ、神明ノ擁護アリテ、再ヒ青天白日ヲ仰クコト、豈疑アランヤ、縱ヒ身死ストモ、厲鬼ト爲テ祟ヲナシ、姦賊ヲ滅絕ス
ルノ心ナキ者ハ、天地ノ神祇具ニ之ヲ殛セヨ。吉田温苗聞見錄

○喜德ノ手書、之ヲ二家ニ問フニ、皆原記ヲ失ス、又告諭ノ事、聞見錄戊辰正月二日ト爲ス、然ルニ文中、今春云々ノ文ニ
據レハ、是月ニアルコト疑ナシ、故ニ此ニ合敍ス。

二十九日、市中取締三藩ニ命シテ、伏見ヲ兼管セシム、三藩事務繁劇ナルヲ以テ、之ヲ別藩ニ

命センコトヲ請フ、聽サス。

本多主膳正

家　　來

青山左京大夫

家　　來

松平圖書頭

家　　來

田宮如雲ヨリ申出候次第有之候間、三藩申合、一藩伏見表ヘ早々出張可有之候、且如雲ヘ示談ニテ可取計候事。青山忠誠家記

○

伏見市中御取締之儀、從御當地懸離候場所ニモ有之、且ハ御當所取締御用、竝火消方ヲモ被　仰付置候儀ニ付、三藩ニテ掛持ニ仕候テハ、御役當リ多端ニテ、迚モ十分御取締モ難行届ト心配仕候、殊ニ同所之儀ハ、御當地咽喉之場合ニモ有之、旁相應之御藩ヘ御一手ニ被　仰付、萬端御委任相成候ハヽ、御取締モ行届可申ト奉存候間、依テ此段奉願候、以上。

本多主膳正家來

十二月十九日

中神齋之助

青山左京大夫家來

坂東篤之輔

松平圖書頭家來

皆川誠藏

青山忠誠家記

○本條、忠誠家記、十九日トス、然ルニ田宮如雲伏見取締ノ命アルハ二十一日ナリ、此事、其前ニアルノ理ナシ、十ノ上、恐クハ二ノ字ヲ脱ス、又忠誠家記ニ、三藩申談之上、正月元日、忠誠人數出張トアリ、此請蓋シ許可ヲ得サリシナルヘシ。

○戸田氏共ノ家臣、藩士小原忠寛奉命遲緩ノ故ヲ稟謝ス。

釆女正家來小原二兵衛御登用之儀ニ付、先達テ被　仰出之趣、不取敢大垣表ヘ具ニ申遣置候處、誠ニ出格之御事柄ニ付、内實ハ釆女正ヨリ一應徳川内府ヘ相伺候上、御請申上候心得ニテ、大坂表ヘ相運ヒ置候處、今日迄、彼地ヨリ有無之儀不申來、年内餘日モ無御座、第一從　朝廷被　仰出之趣ヲ等閑置候樣ニモ相當リ、誠ニ當惑心配仕候、定テ今明日ニハ、彼地ヨリ否申運ヒ候事トハ奉存候得共、全ク前條之續ニ御座候間、今暫御含置被下置候樣奉内願候、以上。

戸田釆女正内

十二月二十九日　吉田團平

戸田氏共家記

○附錄坤儀革正錄ニ、板倉マテ奉命可否内慮伺候處、差圖ナキニ付、更ニ朝命ニ從ヒ一旦差出置候、此上ノ儀ハ、差圖次第進退可致段、届出ツトアリ。

○植村家保、病ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。○植村家壺家記

○佛朗西國公使レオンロッシュ、書ヲ舊幕府ニ致シ、西班牙國條約未濟國ノ商船、横濱港ニ來ルモノハ、其國船ト同視センコトヲ請フ、是日、幕府、之ヲ許ス。

日本之大君殿下、第一等執政　板倉伊賀守閣下ニ呈ス、

支那ニ在留スル意斯波泥亞國女王マゼステー之全權ミニストルヨリ、今度右政府　大君殿下ト交際ヲ新ニ結ハントノ事、

及ヒ右ニ關係セル事件ニ付、余ニ充テシ書翰之書抜ヲ爰ニ封シ入レ、閣下ニ呈スルノ榮アリ、佛國ト同盟和親之國ニ對シ、右樣之事ニ付、余周旋ヲナシテ益アルニオイテハ、余カ國帝政府ニアリテ至極満足ニ思フヘシ、殊ニ、今兩國ノ交誼友睦ナレハ、大君ニオイテモ、貴國ニ關係スル事ニ付、余カ主君之意ヲ助ケ、總テ處置アランコト確然ナルハ、余ニオイテモ更ニ疑ヲ容レサル處ナリ、就テハ閣下政府之趣意ヲ表セラレ、別紙書抜中ニイフ意斯波泥亞船ハ、佛國船ト心得ル樣、横濱ニアル諸官吏ヘ、要用ナル命令ヲ今日ヨリ傳ヘ置カレンコトヲ望ム、右船ハ、則チ余カ國商船之條約面ニ從ヒ、其便宜ヲ得ルカ如ク、凡テ同樣タルヘシ、謹言。

日本在留
佛國全權ミニストル
レオンロッシュ
外務省記

○

御書狀、並別紙トモ落手致披見候、然ハ、是班牙商船、近日之内横濱港ヘ向ケ渡來可致ニ付、入港之節ハ貴國商船同樣取扱可申樣、神奈川奉行ヘ可申達旨御請求之趣委細承知イタシ候、尤、是班牙國ハ我國トハ條約未濟之國ニハ有之候得共、貴國ト同盟國ニテ、殊ニ支那在留同國全權ミニストルヨリ書通之趣モ有之候ニ付、御周旋被成候事故、我國政府之芳心ヲ貴國政府ヘ表スル爲メ、御申越之趣ニ從ヒ、貴國之條約面通可取扱旨、神奈川奉行ヘ申達候、右御報可得御意如斯御座候、以上。

板倉伊賀守花押

十二月二十九日

レオンロッシュ閣下
外務省記

別紙ハ、原記見ル所ナシ。

晦日、天皇服除ス、是日、祓禊ノ儀ヲ行フ。公卿補任

○百官及ヒ在京諸侯ニ令シ、明年新正ニ參賀セシム。

○在官へ達書

年始御禮、元日辰刻參　朝可有之候事。島津忠義家記

○在京諸侯へ達書

正月元日辰刻、御禮被　仰出候間、參　内之事。

但、衣體衣冠著用之事。堀親廣家記

○本願寺光澤、書ヲ上リ、奉上ノ意ヲ陳シ、且ツ卽位ノ資ヲ獻セント請ヒ、東本願寺光勝モ亦奉上他ナキヲ陳シ、興福寺ノ僧侶、米千石、ヲ獻シ、且ツ王事ニ從ハント請フ、是日、光澤上言ノ意ヲ嘉奬シ、興福寺獻米ノ請ヲ許ス。

方今、復古御一新ニ就テハ、兼テ勤　王之志　願一際盡力可仕御時節ニ候得ハ、萬一非常御立退之節ハ、三門主之內家來門末召連、何方迄モ御隨從奉申上度、尤無二忠誠之赤心ニ御座候、其餘何成共、寺門相應之　御用モ御坐候ハヽ、被　仰付度奉存候、猶又、來辰年、御卽位御大禮被爲行候趣ニ付テハ、疇昔　三帝御卽位料調獻之儀モ御座候間、何卒當度右　御用途之內獻備奉願度、御手傳被　仰付候ハヽ、冥加至極難有奉存候、以上。

慶應三年丁卯十二月二十九日

下間大進　下間大藏卿
島田陸奥守　島田右兵衛少尉
富島頼母　上原數馬
岡田多仲　鈴木沖見

在京院家

安養院　勝解院
上善院　恭敬院
泥洹院　深達院
正住寺　光岸寺
往還房　明福寺
專修寺　江州淨源寺
筑前明蓮寺　本願寺記

○

昨日御下問之趣奉恐入候、不容易之時勢ニ付、　先帝ヘ申上候儀モ有之、門主心得方可奉申上旨委細敬承仕候、方今、一方ナラサル形勢トモ奉恐察候得共、御趣意柄モ深不心得、且寺門之致參出候程ノ場合トモ不奉存、差控候儀ニ御座候、勿論先朝ヘ奉申上置候通、決テ異變無御座候、此段御返答可申上旨申付候、以上。

十二月二十九日

東本願寺門主內

下間治部卿

川那邊左近

東本願寺記

○本願寺記ニ云、二十七日、總代安養院以下七人、家來下間大藏卿以下三人參　朝、西園寺殿、烏丸殿ヨリ御達ノ御趣意、從來勤　王之志願厚神妙之至、於當今深御滿足　思食候、依之、此節柄被　仰付候筋モ有之候ニ付テハ、彌以戮力可致奉公被　仰出候、猶又門徒家來ニ至迄參　朝被　仰付候ハ、別儀ニテモ無之、過ル九日以來、王政御一新御變革間合モ無之

御事ニテ、王化モ未被爲宇内ニ行屆折柄ニ候得ハ、　聖慮御安靜之御場合ニモ不被爲至御儀厚奉恐察、當節柄、一廉之勤王忠誠之程承度旨御演達、依之、引取示談之上、御答可申上旨御請、二十九日、趣意言上スト、東本願寺記ニ、二十八日、於非藏人口、西園寺殿、岩倉殿ヨリ斯ル形勢ニ付、門主心得方如何哉御尋ニ付、翌日、口上書差上クトアリ。

○

謹言上、

今般、　王政復古被　仰出候趣拜承仕、古今之御美事、於一山之輩モ、乍恐踊躍恐悦至極ニ奉存候、因玆雖萬分之一、聊奉報天恩度、玄米千石奉獻納候、若、御用筋之御一端ニモ相成候得ハ、冥加至極難有仕合奉存候、尙微力之義ニハ候得共、一山相應之御用被爲在候得ハ、被　仰付候樣奉願上候、此段、宜　御聽濟之程伏テ奉願上候、謹白。

興福寺一山

卯十二月二十七日　　學頭中

參與御役所　興福寺記

○本日本願寺へ達書

累年勤　王之志願旨趣、被　聞知食候儀ニテハ有之候得共、今般　御一新ニ付、尙又言上之廉々、殊更良實純忠之至、深御滿足被　思食候、爲　王事彌抽丹誠、盡力可致奉公　御沙汰候事。

十二月　本願寺記

○本日達書

興福寺

今般、就　御復政、一山之輩爲報恩獻穀仕度段、神妙　思召候、願之通可令獻上　御沙汰候事、

尙以、方今形勢、　御用伺之事、　御滿足　思食候、追テ　御沙汰之品モ可有之候、且代金割納之儀、同被　聞食候事。

○德川慶勝、松平慶永、大阪ヨリ至リ、德川慶喜ニ代テ、奉命書ヲ上ル。

今般、御沙汰御坐候兩事件之趣、慶喜へ申聞候處、謹承仕候旨申出候、此段申上候。

十二月　　尾張大納言
越前宰相

春嶽私記

○春嶽私記ニ云、二十九日歸京、爲御案内、雪江、昨二十八日暮、大阪出船、此日午刻比、上京御復命之儀爲申上、參朝之上、岩倉殿拜謁、内府公無異儀、御請書モ尾、越兩人迄被指出候付、今夕乘船、明日上京、午後參内、可及復命ニ付、右爲御案内、雪江差出候段申達候處、卿ニオイテモ御安心、御大慶之旨、早速可申上ト御申聞有之、又内府公御上京之儀、如何ト被相尋候付、鎭撫出來次第、上京之儀ハ、兼テ申上置候事ニテ、即今御請モ相濟候事候ヘハ、何時ニテモ上京之心組之樣子候得共、又　朝廷之御都合モ可被爲在ニ付、其儀ハ大藏大輔相含、イツレニ明夕可申上ト申述退出ス、晦日巳半刻過、毛受鹿之介御先へ著邸、申聞候ハ、夜來逆風ニテ御船進ミ兼ネ、今朝辰半刻過、伏水へ御著船相成候得共、御供船ハ多分著不致由、依之、何レニ御入京御延引ニ可相成候ヘハ、申半刻迄ニハ御參　内可被遊、萬一夫ヨリ後レ夜ニ入候テモ、是非御參　内ハ可被遊旨ヲ相含罷越候由ニ付、昨夜之爲御答、永田儀兵衞ヲ以テ、上院參與迄御屆指出シ、尾侯へハ伊藤友四郎ヲ以テ、前文之次第被仰入、御參　内難被成候ハヽ、御請書御文段筆削之全權ヲ爲御持、隼人正御指出ニ相成候樣被仰遣之、午後、尾侯ヨリ御參　内難被成ニ付、隼人正被指出段、田中國之輔ヲ以被仰越之、申刻比、公御歸邸、申半刻過御參　内有之、然ル處、總裁宮御初、已ニ御退散、中山卿御殘之由ニテ、御一人之御請ニテモ可然哉、又御評議之筋ニテモ有之事候ハヽ、宮始可被召集哉ト、雪江迄御尋ニ付、今日ハ復命迄之儀ニテ、別段御評議相願候筋ハ有之間敷ト及御答候處、無程、於　小御所中山殿並御居殘之議定、參與御列席、公、成瀨隼人正ト御一處ニ御出席、中山殿迄御復命御書面御差出ニ相成、中山殿御落手之

上、御列坐之御方々ヘ御廻シ有之、中山殿ヨリ徳川内府ヨリ之御請書、明元日、總裁宮始御申談、可被及御　奏聞段々、御周旋御行屆之旨御挨拶有之由、公ヨリ内府公御辭官御手續御伺之處、追テ從　朝廷可被仰出歟、又ハ此御請書ニテ相濟可申哉、尚又御評議可被成トノ御答之由。

○永井直諒ノ家臣、本日以後消防ノ役ニ服スルヲ稟シ、且其條款ヲ申請ス。

日向守火消人數、昨夕參著仕候間、今日ヨリ相勤可申候、此段御屆申上候、以上。

十二月晦日　永井日向守家來
吉田恒左衛門

永井直諒家記

○

一出火之節、火元見之儀、火事羽織著用仕候儀哉、麻上下胸當ニテ相勤可申儀ニ御座候哉、

一騎乘ニテ、若黨得付キ不申節ハ、刀、御敷臺下ニ差置候テ宜御坐候哉、

一武家御玄關ニテ、御取次中ヘ言上仕候儀哉、

但、手札之上ニ、出火場所相記言上候テ宜御坐候哉、

右之通奉伺候、以上。

十二月晦日　永井日向守家來
吉田恒左衛門

永井直諒家記

○批紙

第一條　火事羽織ニテ宜敷候、
餘條　伺之通。永井直諒家記

○

火役被　仰付候ニ付伺書、

一萬一出火之節、致消防候ハヽ、其段參與御役所、竝市中御取締役所ヘ御屆申候テ宜敷御坐候哉、

但、出役先ヨリ水ノ手之騎馬、鞋之儘相勤候事故、御役所ノ口ヨリ申上置、引取候テ宜敷御座候哉、

一宮樣方、堂上方樣ヘ、自然御行逢之節、可成丈下馬仕候心得ニ御座候得共、時宜ニ寄リ、片寄控居、御通行相濟、往來仕候テ宜御坐候哉、

但、御場所柄、火勢之模樣ニ寄候テハ、人數繰出候節ハ、下馬不仕、片脇乘通リ候テモ不苦候哉、

一御所四町四方之出火ト見受候ハヽ、太鼓、半鐘打交、人數繰出候テ宜敷御坐候哉、

但、當屋敷四町四方モ打交、人數繰出候テモ不苦御坐候哉、

一洛外之出火ハ一番手丈差出、二番ハ洛中境ニ控居候心得ニ御座候、併火勢之模樣ニ寄リ、二番手モ洛外ヘ繰出、消防爲仕候儀モ可有之候、

一傾城町、非人小屋、穢多村之儀ハヽ、人數掛リ不申、其口々ニ控居、自然外々ヘ火移リ候模樣ニ候ハヽ、踏消可申候、

但、四條河原芝居、川中之茶屋等、前同斷相心得、若町家ヘモ火移リ可申樣子ニ候ハヽ、是又踏消可申心得ニ御坐候。

右之通奉伺候、御指圖可被下候、以上。

永井日向守家來

十二月晦日　吉田恒左衞門

永井直諒家記

○批紙

第一條　伺之通、

第二條　伺之通、但、鎮火之節、引取掛ケハ、下馬禮節可有之候、

餘條　伺之通。永井直諒家記

○藤堂高邦、暫ク藩ニ就カント請フ、是日、之ヲ聽ス、是夜途ニ上ル、片桐貞篤、老臣ヲシテ代テ京ニ抵ラシム。○片桐貞篤家記

今般、私儀依　御召上京仕候處、風邪ニテ引籠罷在、漸頃日出勤仕候ニ付、一昨日ハ參　内奉伺　天機難有仕合奉存候、就テハ此後、追々　御垂問之御儀モ可被爲在ト奉恐察候得共、何分若輩之私故、萬事本家和泉守之存念ニ相隨候而已ニテ、別段一己之管見申上候儀ハ聊モ無之、且傍近之儀ニ御座候故、又候何時ニテモ上京可仕候間、一ト先ツ在所へ之御暇被下置候樣奉伏願候、尤家老横田地六右衛門差殘置候間、自然　御用之儀被爲在候ハ、被　仰付被下候樣奉願候、以上。

十二月二十八日　藤堂佐渡守

藤堂高邦家記

○高邦家記ニ云、晦日、御暇願之通御付紙、但シ、原記ヲ失ス。

○都下ノ豪商三井某等四人、金ヲ獻スル差アリ。○三井三郎助、島田八郎左衛門各千兩、小野善助、小野善右衛門二名千兩○京都府記

○江戸薩摩藩邸襲撃ノ事漸ク傳播ス、是夜、舊幕府、及ヒ薩摩藩ニ内喩シテ、爲ニ釁隙ヲ開クコト勿ラシム。

○春嶽私記ニ云、晦日暮時過、肥後藩參與津田山三郎、下院へ出勤申談之次第ハ、去ル二十五日、江戸表薩邸出火有之處、其

節莊内之人數、舊幕之命ヲ受ケ、薩人ト砲戰有之由之風聞書、過刻東報有テ到來之内、頓テ處々ヨリ當地へ可相聞處、此節坂薩氣立居候折柄故、如何成事變可相發モ難計、卽今之内未然ヲ防クヘキ所置有之度トノ事ニテ、尤之心付ニテ、下院ヨリ公へ申上之處、公ヨリ中山卿へ、東都之概畧被仰述、不取留風聞トハ午申、自然一犬之吠虚ヨリ、平地ニ風波ヲ起候テハ、不容易事ニ可立至モ難計候得ハ、未發之處ニテ、雙方心得違妄動無之樣、御内諭可然歟ト被仰達、於下院モ同議ニテ、不事立内、雙方へ急度　御沙汰有之度ト、上院へ申達處、上院參與衆何モ退散ニテ、被居殘候ハ西園寺殿、五條殿計ニ付、屹度致候被仰出ハ、御評議之上ナラテハ御取計ニ難被及トノ御相談ニテ、是以無據次第ニ付、猶下院商議之上、無急度御口達ニテ、薩ハ薩之參與岩下佐次右衞門、坂地之方ハ尾之參與田中國之輔御呼出ニテ、五條殿ヨリ云々御内諭有之、散朝ニ相成、夫ヨリ國之輔儀、毛受鹿之介同道、戸田殿へ右之趣申入候處、御同人モ風聞承知ニテ、懸念之折柄故、幸便モ有之、旁、早々坂地へ可申達トノ事ナリ。

○舊幕府、酒井忠惇ヲ以テ、加判上坐ト爲ス、（酒井忠邦家記）又岡田忠養（安房守○舊幕府旗下士、）ヲシテ下總國布佐村陣屋ニ居リ、上總、下總、安房、常陸四國ノ事務ヲ管セシム。

今般、下總國布佐村陣屋へ岡田安房守在陣、安房、上總、下總、常陸國支配國ニ被仰付、公事出入、其外小給所取締向等之儀、先達テ木村飛驒守上州岩鼻へ在陣ニ付、追々相觸候通リ、安房守儀モ同樣取扱筈ニ候間、得其意、同人へ可被談候、

右之通、安房、上總、下總、常陸國御料、竝領分知行有之面々、寺社領共、不洩樣可相觸候。

十二月

今般、下總國布佐村陣屋へ岡田安房守在陣被仰付、安房、上總、下總、常陸國、御仕置筋之儀取扱候ニ付テハ、萬事差圖可被請候、萬一非常之節ハ勿論、平常トモ人數入用之節ハ、最寄居城、竝陣屋有之面々へ相達ニテ可有之候間、兼テ其段相心得、達次第人數可被差出候、

右之通、安房、上總、下總、常陸國ニ領分知行有之面々ヘ、可被相觸候。

十二月　土井利與家記

○木村勝教筆記ニ云、關東郡代起源ハ年古ク、文久ハ再興ニ候、尤以前ノ郡代トハ、聯掌大同小異、徳川氏入國以來、關内八ヶ國、伊奈家代々支配、伊奈家斷絶、久世丹後守、中川飛驒守、關東郡代ト爲リ、支配ニ代官五人有之、馬喰町郡代屋敷ニテ用向取扱候、乍然、其節勘定奉行支配ノ代官モ有之、郡代ハ地方諸般取締向、惡黨追捕、公事裁判等致シ候ヘトモ、萬石以上以下領地ノ事ニハ不拘、其後中絶、代官ハ悉ク勘定奉行支配トナル、再興ノ郡代ハ、支配國ヲ定メ、徳川料收納筋ハ勿論、取締筋ニ拘リ候儀ハ、萬石上下領地モ一般處置致シ、公事裁判モ支配、國中ハ都テ郡代ニテ取計候、私儀ハ上野、下野國竝武藏ノ内支配、最初上野群馬郡岩鼻村ニ在陣、其後武藏國埼玉郡羽生町ニ新規陣屋取建引移候得共、落成ニ不至轉役、其節同役岡田忠養ヲ云、一手ハ、下總國布佐村原註、葛飾郡カ、陣屋取建、在陣ノ積リ候得共、是モ落成ニ不至候、又丁卯正月十二日ノ記ニ云、關東郡代ノ名目差支有之、役名ヲ改メ、在方掛リト相成候迄ニテ、勤向ハ是迄ノ通ナリ。

是月、密旨ヲ親子内親王靜寬院宮○前大將軍徳川家茂夫人、ニ傳ヘテ、其西上ヲ促ス。

上略去ル十月以來、　仰出サレ候　宮様御上洛ノ御事、元攘夷ノ儀ニ付、公武御一和ノ御爲メ御入城アラセラレ候處、其趣意通セラレス、追々御不都合ノ御事ノミニテ、　先帝様ニモイカ、トオホシメサレ、色々御沙汰モアラセラレ候折柄、去冬、恐入候御次第、　當今様ニモ種々御心配様共ノ御事ノミニハアラセラレ候ヘ共、何事モ過去リ候御事ヲ、彼是　仰出サレ候モ詮ナキ御事故、何事モ　御沙汰アラセラレス、去ナカラ、御縁約ノ節ヨリ、御上洛ノ御事ハ、カネテ御約定アラセラレ候御事、　仁孝天皇様、　新朔平門院様又　先帝様山陵ヘモ御參拜ノ御爲メ、　當今様御幼年ノ節、御ワカレ遊ハシ候御事故、一度御對面モ被遊度、カタカタ、來月上旬、御地御發途ニテ、御上洛アラセラレ候様、ヨロシク申入候様トノ御事ニアラセラレ候、其上ハ御都合次第御歸府相成候マ、、御地ノ人々、右ノ通リ厚ク相心得候様、御サトシ被遊候様ニトオホシメシ

候。下略、静寛院宮日記

○静寛院宮日記ニ云、本書、御所ヨリ正月二日出御使、八日著ト、然レトモ、書中、去ル十月云々、去冬云々等ノ文ニ據レハ、其丁卯十二月ニアルコト疑ナシ、今其日ヲ知ル可カラサルヲ以テ、月尾ニ收ム。

○蜂須賀齊裕ニ命シ、老臣稻田邦植九郎兵衛、ノ家臣三田某昇馬、內藤某彌兵衛、林兼善轍之丞、ヲ召ス。

阿波宰相内
渡瀬浪江
合田左源治
寺西金右衛門
森甚作

去ル二十二日、返書之趣、彼是御掛念之筋モ有之候ニ付、　思召之趣必徹底候様可取計候、尚又九郎兵衛家來三田昇馬、內藤彌兵衛、林轍之丞、右之輩早々上京可有之　御沙汰候事。

十二月　稻田邦植出兵記

○二十二日云々ノ事、之ヲ蜂須賀茂韶ニ質スニ、原記ヲ失シテ事實詳ナラス。

○松平定安、池田政詮、疾ヲ以テ、上京遲緩ヲ稟ス。○松平定安池田政保家記

復古記　卷十四　終

總括兼纂修

一等修撰　臣　長松　幹

校勘

一等修撰　臣　長　炗

一等協修　臣　四屋恒之

校錄

一等書記　臣　澤渡廣孝

繕寫

二等繕寫生　臣　小川長和

二等繕寫生　臣　小島　春

復古記 卷十五

明治元年正月元日ニ起リ三日ニ至ル

戊辰明治元年。慶應四年○九月八日改元、

○正月

元日、四方拜百官朝賀ス、是日、天皇不豫、臨ムヲ果サス、且今年三節會元日、白馬、踏歌、ヲ停ム。

○公卿補任ニ云、四方拜原註、設御座、無出御、奉行藏人頭左中辨勝長朝臣、嵯峨實愛手記ニ云御風邪ニ付無出御、簾中出御也、親王以下公卿、殿上人原註、親王中段、公卿下段、殿上人入庇、等著座、先是出御ナリ、各一同一拜、了先下﨟退入、了次武家原註、公卿各不參、殿上人計ナリ、仍於南庇拜、了有中次、出座、原註、南庇、次下參與等著于庭中打板、各著了一拜、了退入、了次醫者南庇無拜診、次非藏人南簀子、以上各申次有之、了入御、後退出、了補任、又云、今年三節會、依思食被止之。

○池田政禮ニ命シ、兵ヲ出シテ、伏見ヲ巡撫セシム。

○政禮家記ニ云、伏見表鎭撫可相勤旨御內沙汰、橋本少將ヲ以テ被仰渡。

○酒井忠氏、將ニ江戶ヨリ京ニ入ラントス、德川慶喜大阪ニ在ルヲ以テ、直ニ之ニ赴クヲ稟ス。

又本莊宗武、將ニ八幡山城、守衞ノ任ニ赴カントス、途ニシテ疾ニ罹リ、是日、復タ江戶ニ歸ル。

本莊宗武家記

私儀、先頃上京可仕旨　仰出奉畏候處、春來病氣引籠罷在、旅行難仕御坐候ニ付、不得止上京御猶豫被成下度段、去月二十八日奉願候處、御許容被成下、難有仕合奉存候、其後病體指引モ御坐候得共、追々遲延仕奉恐入候ニ付、去十一日、押テ江戸表出立仕候處、尙又今般、改テ上京儀御達御坐候段、家來共ヨリ申越、是又奉畏候處、此程之形勢ニ依テ、德川內大臣儀、人心鎭撫方心配仕候趣ニテ下坂仕候折柄、私儀上京仕候テハ、何共奉恐入候ニ付上京指控、不取敢下坂仕候、尙上京之儀ハ、坂地ヨリ奉伺度、此段宜御執　奏被成下度奉願、以上。

丁卯十二月三十日　　酒井若狹守

酒井忠祿家記

○舊幕府、大久保忠禮、水野忠敬、太田資美、本多正訥紀伊守○田中藩主、食封四萬石、後長尾ニ移ルニ令シテ、江戸薩摩藩邸逋逃者ノ蹤、相間ニ赴ク者ヲ緝捕セシム。

○水野忠敬ヘ達書

松平修理大夫屋敷內ニ潛伏致シ居候浮浪輩御追討之節、脫走之者共、駿州駿東郡御厨屋邊ヘ押入、發砲ニオヨヒ、舊臘二十九日、酒井左衞門尉家來之由申僞、箱根御關所近ニ罷越候趣ニ付、早々在所有合之人數差出、他領ヘ迄踏込召捕候樣可被致候、若手餘候ハヽ、打捨不苦候、尤大久保加賀守、太田總次郎、本多紀伊守ヘモ同樣相達候間、可被得其意候事。水野忠敬家記

○忠禮、資美、正訥家記、原記ヲ失ス。

二日、假ニ議事ヲ九條道孝ノ邸ニ開キ、時ニ宮中神事アリ、總裁熾仁親王、喪期未タ終ラサルヲ以之ヲ避クルナリ、德川慶喜ヲシテ召命ヲ各國公使ニ傳ヘシメ、及ヒ慶喜ニ內諭シ、先ツ松平容保、松平定敬ヲ罷歸シテ、後ニ入覲セシムル等ノ事ヲ議ス。

御用之儀有之候間、明二日巳刻、九條家へ參集可有之事、

但、四脚門往返之事、

追テ總裁宮依服中、宮中御神事中御參朝難被成ニ付、被用九條家候事。

正月一日　島津忠義家記 春嶽私記

○附錄、有栖川宮家記ニ云、就來正月二日由奉幣發遣日時定、竝發遣等、從一日晚至五日朝御神事候事。

○公使召命下問書

大政御執行ニ付テハ、外夷事件於　朝廷御所置被遊候ハ勿論、且重大急務之筋ニ付、此間中段々　御沙汰モ有之候得共、其廉モ未行實ニ一日不可忽之次第ニ付、別紙之通、德川內府へ被仰下候儀ニ　御確定候、此段　御沙汰候、併猶所存之趣モ候ハヽ、言上可有之事、

但外國事務掛初、夫々其人體、不日可被置候間、是又心得迄ニ申入候事。

○別紙

政權返上被　聞召候上ハ、外國交際之儀、於　朝廷條約御取結可被爲在儀當然ニ候間、百事　御治定之上、猶御談判之品モ可有之、差當　王政ニ被爲復候御廉、御布告被遊度　思召候ニ付、兵庫滯留各國公使、京地へ御呼登ニ相成候間、是迄之手續モ有之事候得ハ、各國公使上京候樣可申達　御沙汰候事、

但、來十日迄上京候樣被　仰出候間、御請之御屆、早々可申出候。島津忠義、德川義宜家記、春嶽私記

○尾越へ內諭書

尾張大納言
越前宰相

兩藩迄　御內意之廉、德川內府愈奉行可致之趣、全盡力之事被　思召候、依テハ兩事件、上京自分言上ハ勿論之儀、其上參

朝御沙汰ニモ可相成候得共、外ニ兼テ言上之會、桑歸國之儀、早々及處置候後、上京可然、則鎭定之道顯然ニ付、旁此段取計有之候樣　御內命候事。島津忠義家記 徳川義宜家記

○徳川慶勝答議

各國公使上京方之儀ニ付、　御尋之趣拜承仕候、右ハ元來固陋夷情不案內ニ付、別段見込モ立兼申候得共、何分　王政御復古之始、　內裏之御設張、鴻臚館等之御全備モ未被爲在候處、自然輕侮之心ヲ招候樣之儀ハ有之間敷哉ト頗心配仕候、併素ヨリ不案內之儀、猶熟練之人體ヘ御謀御座候得ハ、强テ存寄ハ無御座候事。

正　月　徳川義宜家記

○春嶽私記ニ云、此頃總裁宮御服穢ニテ御參　內難被成ニ付、今日指當リ徳川氏之議事御指支ニ付、俄ニ九條殿御借上ケ、假議事院ト相成、宮初官武議定上下參與、巳刻ヨリ會集ニ相成、內府公近々御上京有之ニ付、其節御取計振之御集議ナリ、其內會、桑歸國之上ニテ、御上京可然トノ議起リ候得共、是ハ難事ナルヘキ論有之、不相決ニ付、右件坂地ヘ降命ニ可相成御書面、下院ヘ御下ケ、衆議之處、會、桑　朝廷ヘ對シ何等之罪有テ如此御譴責有之哉、可斥罪惡無之上ハ、公論ヲ以テ、會、桑モ共ニ被召登可然トノ建議ニ相成、愈不相決、案スルニ、前ノ內諭書ニ據レハ、此事決議セシナルヘシ、本書蓋シ結局ヲ佚ス、又外國ヘ御布告御書面御出來、議案御下ケ相成、右ハ御至當之御儀ナルヘシト、下院同論ニ決シ、其段上院ヘ申達。

○戸田氏共、其藩士小原忠寛ヲシテ召命ニ赴カシムルヲ稟ス。

釆女正家來小原二兵衛御登用之儀ニ付、去冬十二月十八日被　仰出之趣、早速在所表釆女正ヘ申遣候處、微賤不力之者ニ御座候間、深奉恐入候、併　朝命ニ違背ハ難仕筋ニ御座候間、可然御沙汰被成下置候樣、可奉申上旨申付越候、尤二兵衛儀、此節登京罷在候、以上。

正　月　二　日　　戸田釆女正家來

吉　田　圓　平

○池田徳定、京極高典、京ニ至ル。○池田徳定京極壽吉家記

○是夜、徳川慶喜、兵ヲ發シテ北上セシムルノ報アリ、徳川慶勝、松平慶永、山內豐信、伊達宗城等、竊ニ之ヲ鎭輯センコトヲ謀ル。

○春嶽私記ニ云、夕七時頃、伊藤友四郎、岩倉家ヘ參殿、密ニ申達候ハ、唯今小原二兵衛方ヘ罷越、同人申聞候ハ、一昨晦日夜、於華城御達有之候ハ、上樣近々御上京之御運ヒニ付、御先勢追々御繰出ニ相成候間、在坂諸藩之人數モ指出候樣トノ儀ニテ、事ノ爲體以之外切迫危險ニテ、專ラ伐薩之御模樣ニ有之、昨朔日ヨリ追々御出勢ニ相成ルトノ事、坂地ヘ指出置候兵隊之向ヨリ、報知有之ニ付、此節左樣之御事柄極テ御失策ト存シ、則微意爲建言、井田五藏指出候得共、迚モ行屆申間敷、何分御不策千萬ト存候間、其段老公ヘモ申上呉候樣トノ事ニ付、不取敢參殿之由也、仍之下院之面々申談候ハ、此節ケ樣之御妄動無之樣、御抑止可被成ハ勿論候得共、事爰ニ及ヒ切迫之次第ニ付其段申上、公ハ御所勞之趣被仰立、御歸邸ニ相成、戸田殿ヘ下坂之支度ニテ、藩邸ヘ被罷出候樣、爲御使雪江被遣、肥後藩老溝口孤雲、津藩老藤堂歸雲モ參邸候樣被仰遣、雪江ハ暮時過戸田殿ヘ罷出、大略及談判處、戸田殿ハ於舊幕兼々御所贔屓ト申唱ヘ嫌疑有之、下坂致候テモ行屆不申、夫ヨリハ有力之藩老ヲ被遣方可然、何分爲御相談、直樣參邸可有之トノ事ナリ、夫ヨリ公モ御歸殿、兩藩老モ參上、宇和島老侯、戸田殿モ來邸、尾侯ヘモ被仰越處、爲御名代成瀨隼人正罷出、後藤象二郎モ參上ニテ種々御評議有之候得共、孰レノ道ニモ御失體無之樣御諫諍之外無之候付、孤雲、歸雲ハ唯今罷歸リ、支度次第下坂可仕、象二郎モ同樣可罷越處、下院御用有之ニ付、土藩老深尾鼎御指出可相成、尾州ヨリハ田中國之輔、中村修之進下坂可然トノ御談ニ相成候得共、兩人罷下リ候テモ、非力之及フ所ニ無之趣ニテ固辭、不及御請、尙老侯思召相伺候上ト申事ニ相成退出セリ、明日ハ公、土、豫兩老侯ト御一所ニ御願ヒ可被成トノ御談極ニテ、何レモ御退散ニ相成リシハ曉原書、闕ク、刻計リナリ、雪江モ早々下坂、諸藩老申談候樣被命之、柳川藩士

時攝津ハ、下院ヨリ直ニ下坂之心得ニテ退出セシ由、右坂地一件爲取調、靑山小三郎ヲ穗積亮之助ヘ被遣處、亮之助申聞候ハ、坂地ヨリ監察妻木多宮、御上京之御都合取調、且伐薩一條相含上京ニ付、先刻ヨリ大議論ニ及ヒ、遂ニ輕擧暴發ハ當今之大失策ナル事ニ論決シ、唯今引取タル由ニ付、小三郎ヨリ邸議之趣及論談處、總テ同意ニテ、伏見邊之儀ハ猶多宮ヘモ可申談トノ事之由、小三郎罷歸申上候ニ付、多宮同道、亮之助參邸候樣、再小三郎ヲ以被仰遣候處、妻木殿ハ不快之由ニテ亮之助計罷出、戶田殿ヘ妻木殿被含越候密謀之不策ナル由ヲ物語リ、何分穩便之所置ニ相成候樣、御盡力有之度ト必至及賴談タリ、又云、後ニ聞ク、晦日、大目附瀧川播磨守、其外江戶表ヨリ兵隊ト共ニ汽船ニテ著坂有之、東地薩藩之惡說、且二十五日薩邸攻擊之始末等敷演有之、此表之奸狀ヲ合セテ、伐薩之儀ヲ主張シ、下地除姦之說モ起リタルヲ、内府公御恭順之御誠意ヲ以テ、無理無理ナカラ御鎭壓被成置タル坂地麾下之人心ヲ、一擧ニ煽動誑惑セラレシカハ、滿城立地ニ鼎沸之勢トナリ、憤慨激烈之黨奮興シテ、板閣其他ヲ壓迫說倒シ、事遂ニ敗レニ歸シ、形勢一變、專ラ伐薩除姦之兵事ニ及ヒ、内府公トイヘトモ、如何トモ成シ給フヘカラサルニ至リシナリトソ。

○中村武雄手記ニ云、諸軍已ニ浪華ニ下リシ後ハ、兵氣委靡シ、其惰慢ナル者ハ浮靡遊蕩ニ流レ、其慷慨ナル者ハ益憤嘆ヲ懷クノミニテ、大計更ニ定ラス、果々シカラヌ事共ナリ如此ニテハ、速ニ江戶城ニ還ラセ給ヒ、關東ノ地ニ據リ、徐々天下ノ勢ニ依リ、其策ヲ施サルヽノ外有之間敷ト論スレトモ、事亦此ニ一決セス、紛々雜沓中ニ日ヲ送ルノミニテ、有志ノ人々、此末如何アラント、憂ヒヌ者モナカリケリ、是時薩藩ハ益幕府ヲ激シ、兵端ヲ開カシムルノ意ニヤ、浮浪ノ士ヲ集メ、江戶ニ於テ亂暴狼籍頻リナリ、遂ニ十二月二十五日ノ事、速ニ大坂ニ報アリ、前將軍已ニ此ニ至リシ上ハ、勢不得已ト思召シシニヤ、又ハ江戶ノ捷ヲ得テ事謀ルヘシト思ヒ給ヒシカ、親書シテ薩藩ノ罪ヲ責メ、遽ニ出兵ノ令ヲ下シ給ヒケリ、時ニ戊辰正月元日ナリ、嗚呼敵ノ計ル所ニ陷リ、其勝算ヲモ定メス、卒然出兵ニ決シ給ヒシハ、何等ノ輕忽ナル事ニヤ。

三日、天皇將ニ首服ヲ加ヘントス、奉幣使藤波教忠、河越種弘、ヲ伊勢神宮ニ遣シテ之ヲ告ク。

宣命

天皇我、詔旨止、掛畏岐伊勢乃度會乃五十鈴乃河上乃、下津磐根爾大宮柱廣敷立氐、高天原爾千木高知氐、稱辭定奉留、天照座皇太神乃廣前爾、恐美恐美毛申賜波久止申久、親王公卿等相共爾議奏久、冠儀者禮乃始爾志氐、人主乃所重爾奈利、夫毛正月爾令行賜布者、古今乃通儀爾志氐、我朝乃嘉例爾奈利、依行氐、今正月乃吉日良辰乎擇定氐、首服乎加賜布、掛畏岐皇太神厚岐恤美深岐助乎垂賜比、無事久無故久此乃禮乎令遂行賜比氐、長久寶祚乎令保賜牟止所念行須、故是以氐、王從五位下種弘王、中臣從一位行神祇大副大中臣朝臣教忠等乎差遣氐、忌部正五位下齋部宿禰能弘加弱肩爾太繦取懸氐、禮代乃御幣乎持齋利令捧持氐、奉出賜布、此狀乎平久安久聞食氐、天皇朝廷乎寶位無動久、常磐堅磐爾夜守日守爾護幸賜比、食國乃天下者安穩泰平爾護助賜倍止、恐美恐美毛申賜波久止申。

慶應四年正月三日 大内記新作留

○徳大寺實則、中納言○公純ノ子、久我通久、壬生基修、四條隆謌、及ヒ廣澤眞臣、兵助、井上馨、聞多○眞臣、馨並ニ長門藩士、小原忠寛ヲ以テ、參與ト爲シ、穗波經度、坊城俊章侍從○俊政ノ子、ヲ參與助役ト爲ス。

徳大寺中納言
新源中納言久我
前修理權大夫壬生
四條前侍從
穗波三位
參與御役被仰付。

○

坊城侍從

參與助役被仰付。中御門經之家記

毛利大膳大夫家來

廣澤兵助

下參與被　仰付候事。廣澤眞臣履歷書

○眞臣ヲ除クノ外、皆宣示ナシ、實則等四人口達ノ事、家記ニ見ユ、忠寛履歷書ニ云、正月三日、夜半　御所ヘ御呼出シ、參與職被　仰付候旨、議定衆ヨリ御口達有之、磬ハ之ヲ面質スルニ、眞臣ト同日拜命セリト。

○令シテ、江戸薩摩藩邸ノ事ヲ以テ、妄ニ擾動ヲ生スルコト勿ラシム。

於江戸表、酒井左衛門尉人數押出、松平修理大夫屋敷取圍、砲擊致候趣相聞エ、是全ク私鬪之儀候間、追テ取糺之上、急度御沙汰之筋可有之候得共、右形勢ニ付、方向相惑、擾亂無之樣、孰レモ鎭靜ニ可罷在、萬一暴擧有之輩ハ、可為　朝敵事。春嶽私記

○參與職ヲシテ、熊野三山ノ社家ヲ管セシム。

○

熊野三之山社家

自今、參與支配、可為撿校、宮御執奏事。聖護院宮家記

熊野三山社家

自今可為參與支配候事、

但、過日御達書少々行違有之候間、更ニ本文　御沙汰候事。徳川茂承家記

○案スルニ、二家家記少異同アリ、孰レカ是ナルヲ知ラス、但シ茂承家記但書ニ據レハ、丁卯十二月二十七日ノ達書ハ之ヲ廢セラレシナルヘシ。

○山内豊信、上書シテ、會、桑二藩歸國ノ前後ヲ問ハス、宜ク速ニ徳川慶喜ヲ召シテ、國是ノ基本ヲ定ムヘキヲ建議ス。

徳川内府ノ儀ニ付、昨日廷議、會、桑兩藩大坂ヨリ致歸國候上、内府可被召　御沙汰ノ旨奉領意候、然ニ先般モ申上候通、内府早々被爲召、　朝廷ノ御規則、速ニ被爲議定、四海寧謐ノ基本相立候儀、今日ノ急務ニテ、會、桑歸藩ノ遲速ハ、全ク小事ト奉存候間、是ニ不拘、一日モ早ク、内府歸洛ノ　御沙汰被爲在候儀、當然ノ御事ト奉存候。

正月三日　松平容堂　山内豊範家記

○豊範家記ニ云、初三日ノ夕、豊信參　朝ス、然ルニ前文建白ノ趣意アルヲ以テ、初ヨリ戰爭ヲ好マス、故ニ衆議ト諧ハスシテ退出セリ、然ルニ徳川、會、桑ノ暴擧、彼自ラ國賊ニ陷ルヲ以テ、是ヨリ關東ヲ征討シテ、其巢窟迄芟鋤セムト決意ス。

○市中取締三藩、篠山藩兵ヲ伏見ニ派遣スルヲ稟ス。

御用之儀ニ付、田宮如雲ヨリ申出候次第有之候間、三藩申合、一藩伏見表ヘ早々出張可有之候、且如雲示談ニテ可取計旨、舊臘廿九日御達ニ付、同晦日ヨリ一昨元日立ニテ、青山左京大夫家來追々同所ヘ出張仕、丹波橋通東大黒町大榮寺ニ假御役所取建相詰罷在候、此段御屆申上候、以上。

正月三日　本多主膳正家來　中神齋之助

青山左京大夫家來
坂東篤之輔
松平圖書頭家來
皆川誠藏
青山忠誠家記

○四塚關ノ守兵、西大路藩兵、會、桑二藩兵經過ノ許否ヲ稟ス、命シテ之ヲ停メシム。

四ツ塚關門ヘ今曉七ツ時頃ヨリ、長州人數追々操出、薩州人數モ出張、同所御警衛被仕候ニ付、尙申談、御守衛嚴重ニ相心得罷在候、就テハ關門通方之儀如何相心得可申哉、會、桑之兵暴發不致候內ハ、行先人員承リ、關門差通不苦儀哉、爲心得御內慮奉伺候、以上。

市橋下總守內
大津忠右衞門
正月三日
市橋長義家記

○批紙

伺之趣尤ニ　思食候、會津藩士上京之儀ハ素ヨリ無之筈ニ候、右ハ先達テ歸國願モ相濟有之候次第、旁通行之儀不相成候、且德川前內府、段々言上之旨趣モ有之候處、右樣押テ上京抔之子細決テ有間敷事ニ候間、尙精々穩便應接、其上强テ押通候樣之儀ニ至リ候ハヽ、不得止儀、可爲打拂旨、被　仰出候事。

市橋長義家記

○阿波藩ノ老臣稻田邦植ニ命シテ、其邑淡路洲本、ヲ嚴守シ、且兵ヲ出シテ、西ノ宮ノ衞兵ニ應援セシメ、又家臣ノ譴責ヲ受ケシ者ヲ釋サシム。

稻田九郎兵衛

御一新大御變革ニ付テハ、不容易形勢ニ押移リ候モ難計、就テハ其地之處、殊ニ咽喉緊要之場處柄候間、爲 王事嚴重兵備有之候樣被 仰出候事、

但其藩中是迄爲 王室奔走之輩、マヽ譴責有之趣モ相聞候ニ付、早々解閉候樣 御沙汰候事、

正月 稻田家出兵記

○

稻田九郎兵衛

累年、不一方勤 王之旨趣被 聞食候ニ付、頃日本藩、並其藩士等ヘ 御沙汰之趣モ有之候次第、旁以昨今之形勢、神速十分之人數差出、西ノ宮表備前警衛之輩應援、緩急勉勵奉公可有之旨、被 仰出候事。

正月三日 稻田邦植従軍事蹟

○織田信親、加藤泰令出雲守○新谷藩主、食封一萬石、ヲシテ、萬里小路博房、五條爲榮ノ衞兵ヲ出サシム。○織田信親加藤泰令家記

○細川喜延、右京大夫○慶順ノ子、○京ニ至ル、細川護久家記 織田信親、兵ヲ率ヰテ塚原ヨリ京ニ入ル。○織田信親家記

○中根師質、岩倉具視ニ就テ、徳川慶喜入京ノ日、參朝、任職等ノ目ヲ稟請ス。

○春嶽私記ニ云、雪江、元日暮時過、岩倉殿ヘ參殿、坂地之模樣一ト通リ御尋ニ付、概略之處申上候處、卿御申ニハ、當時之形勢、薩ハ干戈ヲ以テ御奉公之積ニテ出京之處、左樣之運ヒニモ無之故、過激輩、以之外憤怒之樣子ニ有之、長モ是非干戈ヲ用ヒスシテハ、舊弊難除ト夫々手配モ致置候次第ニテ、長之幕ヲ怨ムル事、眞ニ骨髓ニ入リ、仇讐並ヒ立サルノ勢、夫ト云モ長ハ始終攘夷ヲ奉行シ、幕ハ最初ヨリ交際ヲ專ラニセシ行違ヒヨリ、近年之騷動ニモ相成候次第ニ候カ、幕ノ長ヲ視ル事如何有ルヘキ、何分此邊解ケ合ヒ和熟不致シテハ、今後迚モ 御安心ハ難相成、尾、越之周旋モ此處迄行候儀、今更手離

モ殘念故、余ハトコ迄モ前議ヲ執リ、押通シ候積候得共、頗ル暴論モ有之、余カ說行ハレ難キモ多々ナル故、三條、東久世ニ及議論之處、是迄長州ヨリ一方ナラサル援助ヲ受ケラレタル譯モ有之候處、幸ニ余ト同論ト相成、大ニ力ヲ得、何分干戈ニ不及樣致度ト、折角內談致居事ナリ、幕之方ニテサヘ遺恨無之候得ハ、此處ハ土、豫ニ周旋サセ解キ方モ有之、已ニ今朝豫州ニ談見候處、同意之趣ナリ、薩之方モ又何トカ手段可有之候得共、第一之幕ノ方、程合知レ兼候テ、手下シ致シ惡ク候、其邊如何之見込ナルヘキ、雪江限リ申試候樣トノ事ニ付、雪江申候ハ、幕ハ元ヨリ正大公明之題號ニ候得ハ、長、薩ニ對シ何之私怨ヲ挾ミ可申哉、彼藩ニテ異議無之候得ハ、幕ノ方ニ何事之候ヘキト及御答候處、長ハシラス、薩ハ幕ノ目當タルハ、先日坂地ヨリ出タル書面ニテ相分リ有之、彼書面モ大阪ニテ肥後藩ヘ寫見候由、此表ニテモ端々致流布候得共、余ハトコ迄モシラヌ振リニテ通シ居候カ、アレカ再發致候時ハ大變至極ニ候得ハ、急度秘物ニ致シ仕舞度候、乍併薩ノ方ハ兎モ角モ取計方可有之、何分孰レモ居リ合、同心戮力之場不相運シテハ、　皇國之見込付キ不申、如何シテ其所ニ運ヒ可申哉、今ト成リテハ內府參　內無之テハ不相適候間、ケ樣相成候ハ、可然ト申、存分一杯之處可申聞、上京之運ヒ等ハ如何ト御尋ニ付、此度ハ坂地之衆議種々相分レ候ヘ共、約ル處、內府手前鎭撫出來故、上京ト申一筋ニ相決シ申候、乍然上京致候テ、空敷日ヲ經候樣ニテハ、又々人心動搖ニ及候故、其處深ク心配之模樣候得ハ、上京直ニ參　內ト申都合候テ、何時ニテモ子細ハ有之間敷ト申上ル處、其儀ハソノ手續ニ相成ルニ相成ルニ相違無之ト御申故、議定職ニモ可被仰付哉ト相伺候得ハ、夫ハ勿論之事ト御申ニ付、左候ハ、政府御用途、全國割之儀ハ如何可相成哉、是モ早速ニ被　仰出度ト申上ル處、夫ハ內府參　內ニ付、直ニ辭官、並領地之儀申上ニ相成候ヘハ、夫ヲ　聞食、夫ヨリ直ニ議定ニモ可被命、全國割モ可被　仰出ト御申ニ付、其御次第ニ候ハ、　御沙汰之趣、此間之御請書指上候ニテ、相濟可申譯ニハ無之哉ト申候得ハ、アレハ尾、越ヘ之　御沙汰ニテ、上ヨリ直々之　御沙汰ニ相成候テハ、罪アル姿ト相成候故、下ヨリ申出候樣ニ周旋可致トノ趣意書ニテ、內府ニ罪ナキ事ニ相成申候、內府方ヨリ癸丑以來、幕府前代ノ不體裁ヲ現今之一身ニ引受ケ、辭官之運ヒニ相成、且五畿內指上度トカ、幾大隊又ハ軍艦幾艘指上度ト申樣ナル事ニ相成候得ハ、誠意モ十分ニ相貫キ候事ニ相成、諸侯モ夫ニ準シ、一段ハ領地

指出、兵隊モ指上、九門之警固ニ充候抔ト申樣ニ有之度トノ御旨趣之由御申ニ付、夫等之處ハ追々之御手續ニモ可有之、指向キ內府公、御上京御參內モ相濟ミ、御役ニテモ可被　仰付候ト申處カ、治リ口ニモ可有御坐哉ト申候處、何分雪江之見込十分之通及熟考、明朝可申聞、及ハヌ事ナレハ、夫迄ニテ退クヨリ外無之、出來ル事ナレハ、早キカ宜候間、早速申聞候樣御申ニ付、重大之事件、中々一存ニハ及兼候得共、精々愚考ヲ盡シ、明朝御答可申上ト申テ退出セリ、右談判之次手被申候ハ、當時干戈之世トナリ、其極縱令外國之有ニ相成ルニモセヨ、德川氏如從前候得ハ、余輩モ討幕之持論押通シ候得共、政權返上ハ實ニ愕然ニテ、內府之人材タルヲ感悟セシ故、其以來ハ余輩而已ナラス、卽今彼人ヲ擧スシテハト申論ニ變シ、左樣ナクテハ何事モ行ハレ難キニ決セシ故、　皇國ノ爲ニ形ノ如ク盡力致ス事ナリト、御物語有之、雪江罷歸、右之次第共申上、參政へモ御內評ニ相成候處公仰ニハ、何分夫程之實事ニ相運ヒ候ハ、重疊可賀ノ至リ、夫ニ付テハ指當リ、雪江見込ハ如何ト御尋ニ付、雪江申上候ハ、別ニ良考モ無御坐候カ、當前之御上京ヨリ、御參內等之御手續ヲケ條書ニイタシ、卿へ御伺ヒケ條每ニ許可之御附紙ヲ願ヒ、夫ヲ以テ證據トシ、坂地へ被仰上候ハヽ、諸有司始麾下之疑惑モ釋ケ、遂々ノ御運ヒモ付キ可申歟、第參　內之上、表向御辭官云々等之儀ハ、　內府公之御心腹ニ被爲置候テ、於坂地ハ御相談不被爲在方、可然哉ト存候段申上、猶種々御評議ニ相成上、如何ニモ證據ノ書付ヲ取リ爲見候ハヽ、夫テハ必行屆可申トノ御決評ニ相成、明朝迄ニケ條書認試候樣、雲江へ被命候ナリ、雪江見込ケ條書、

一午刻前、上京相成候ハヽ、直ニ參　內、午刻後、上著相成候ハヽ、翌朝直ニ參　內致候樣可相成哉、

一參　內之上、表向辭官之御手續相濟候上ハ、政府御用途全國高割之儀モ、卽日列藩へ御布告ニ可相成哉、

一參　內之卽日、職掌可被　仰付哉、

但、

一上京之節、相應之人數引率之事、

一參　內之節、九門外迄、是迄之通兵隊引率之事、

一九門内ヘ、是迄ヨリハ人數多ク召連可申事、　尤上下著之向ニテ、兵仗ハ無之、

右之通相認、二日巳刻前、假議院ヘ參殿、岩倉殿ヘ書面指出、御附紙ヲ以テ御指圖相願フ處、一應評議之上可及挨拶ト御申聞、御落手有之、三日朝、雪江下坂前、今一應岩倉殿ヘ罷出、公御下坂御都合モ相伺候樣被仰付候ニ付、五時前、參殿之處、長人ヘ逢對中ニ付扣居候處、無程長人退座、引續薩邸内田仲之助拜謁、暫シテ退座之上、雪江ヘ對面アリ、卿被申候ハ、今朝ヨリ坂兵、并會、桑兵甲冑ヲ帶シ、伏見ヨリ次第ニ亂入之趣ニ付、打懸ケ可申哉ト、薩、長兩藩ヨリ三遍伺出候得共、及指圖迄ハ、決シテ手出シ致間敷ト嚴敷指揮シ置候、伏見邊之形勢如何哉ラン、雪江斥候致シ、三條殿迄申達候樣ト御申聞ニ付、雪江ハ下坂被命、唯今罷下リ候積リ、大藏大輔モ相願ヒ、尾、土、豫之三侯同道下坂、此上ニモ鎭撫方取計度積ニ御坐候間、斥候之儀ハ御免相願候段申達候處、夫ナレハ不及是非候得共、何分干戈ニ相成候テハ不相濟ト、三條モ同論ニテ、大ニ力ヲ得タル事ナリ、唯今總參　內被　仰出、大藏大輔殿初參集、總評定ニ相成事候間、其段御主人ヘモ申上、早々參　內相成候樣致度ト御申ニ付、其儀ハ委細承知仕可申聞候カ、此體ニ相成候テモ、內府上京ト相成候ハヽ、此頃中御內談之御手續ニ可相成哉ト相伺處、夫ハ勿論之事、何卒上京有之度、左候得ハ、事速ニ治リ可申ト御申ニ付、左候ハヽト、

一午刻前、上京相成候ハヽ、午刻後、直ニ參　內可被　仰付哉、

一午刻後、上著相成候ハヽ、翌朝直ニ參　內可被　仰付哉、

一參　內之上、表向手續相濟候ハヽ、卽日職掌可被　仰付哉、

右三ケ條之書面指出、此通御受合被下候カト迫リテ相伺候處、熟覽之上、初二ケ條ハ此通リ萬々受合申候、任職之儀ハ昨日モ議論有之、長ト同時ニ致度、片落ニ相成候テハ不可然ト申事ニ相成、是モ內府ヘ卽日ニ下命、長ヘモ同日ニ被　仰出ニ可相成哉、又長之上京ヲ待チテ之事ト可相成哉、其處未決故、何トモ難申ト御申ニ付、其儀ハ不及是非、何分是ヨリ下坂上京候處ヲ周旋仕見可申ト申候得ハ、卿御申ニハ、是迄尾、越之盡力無殘處候ヒシニ、ケ樣相成リシハ無是非事ニテ、決シテ尾、越之不行屆ニハ無之、御主人此節下坂ニテハ、品ニヨリ上京難相成場ヘ相運ヒ候半モ難計候得ハ、下坂ハ決シテ不可然、且兩

家之儀ハ、徳川氏ニ於テ一ト通リナラサル親族候得ハ、徳川ヲ討テトモ難被命、左候得ハ、先ツ卽今余ノ見込ニテハ、兩家ヘハ　玉體之御守護ヲ被命度、左スレハ徳川氏ニ取リ申分ハ無之、且ハ是迄盡力之功勞ヲ慰シ候姿ニモ有之、旁左樣相成候テ、先ツ雪江之存寄如何ト被尋ニ付、段々御手厚之御沙汰ト申、別テ　玉體之御守護ト御座候テハ、誠以冥加至極之仕合ニ候得ハ、誰アツテ異議ヲ可申上哉ト及御受處、夫ナレハ大ニ宜敷、決シテ大藏大輔殿下坂ハ不宜、何分早々參　内之儀申上候樣ニト御申聞ニ付、奉畏段及御請、早々退出歸邸之上、前條之始末申上候處、指當、伏水之形勢危急ニテ、事破レ候テハ、是迄　朝廷宗家之爲ニ被爲盡候千辛萬苦之御忠義モ、一掃水泡ニ歸シ候而已ナラス、天下大亂之端トモ可相成事故、此時ニ當リテ御所置如何ト、種々邸議候得共、一向ニ全策無之故、先ツ梅澤殿被仰遣、指向キ坂兵之鎭撫ヲ被命可然、又尾藩ト申合セ、兩家之兵隊ヲ坂、薩之中間ニ竝列シテ垣トナシ、是非ヲ不論、雙方ヘ引分ケ可然ト被決候得共、倉卒之間、事遂ニ不被行。

○徳川慶喜、既ニ徳川慶勝、松平慶永ヲシテ、奉命書ヲ上ラシム、適、江戸薩摩藩邸襲撃ノ報ヲ得タリ、是ニ於テ、討薩表及ヒ薩人ノ罪狀ヲ艸シ、瀧川具知（播磨守○大目付、）ヲ遣シテ之ヲ奏シ、又之ヲ諸藩ニ示シテ、大ニ其兵ヲ徵集ス、（具知、遂ニ京ニ入ルヲ果サス、退テ淀城ニ留ル、五日ニ至リ、戶田忠至ニ因テ奏狀ヲ上ル事、五日ノ條ニ見ユ、）慶喜、又兵士ヲ部署シ、會津、桑名二藩兵ヲ以テ、先鋒ト爲シ、召命ニ赴クト稱シテ、伏見、鳥羽二道ニ向フ、大河內正質、（豐前守○大田喜藩主、食封二萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、○老中格、）鳥羽ノ兵ヲ統ヘ、竹中重固、（丹後守○陸軍奉行、）伏見ノ兵ヲ統フ、重固伏見ニ抵リ、書ヲ薩營ニ贈テ、將ニ京ニ入ラントスルヲ告ク、答書シテ朝命ヲ俟シム、鳥羽ノ守兵モ亦、其朝命ナキヲ以テ之ヲ止ム。

臣慶喜、謹テ去月九日以來之御事件ヲ奉恐察候得ハ、一々　朝廷之御眞意ニ無之、全ク松平修理大夫奸臣共、陰謀ヨリ出候

ハ天下之共ニ所知、殊ニ江戸、長崎、野州、相州處々亂妨及劫盗候モ、同家家來之唱導ニヨリ、東西響應シ、 皇國ヲ亂リ候所業、別紙之通ニテ、天人共ニ所憎ニ御座候間、前文之奸臣共、御引渡御座候樣 御沙汰被下度、萬一御採用不相成候ハヽ、不得止誅戮ヲ加ヘ可申候、此段謹テ奉 奏聞候。

正月　慶喜

○別紙

薩藩奸黨之者罪狀之事、

一大事件盡衆議ト被 仰出處、去月九日、突然非常御改革ヲ口實トシ、奉侮 幼帝、諸般御所置私論ヲ主張シ候事、

一主上御幼冲之折柄、 先帝御依托被爲在候攝政殿下ヲ廢シ、止參 內候事、

一私意ヲ以テ、宮堂上方ヲ恣ニ黜陟セシムル事、

一九門其外御警衞ト唱ヘ、他藩之者ヲ煽動シ、兵仗ヲ以テ 宮闕ニ迫リ候條、不憚 朝廷大不敬之事、

一家來共浮浪之徒ヲ語合、屋敷ヘ屯集、江戸市中押込强盗致シ、酒井左衞門尉人數屯所ヘ砲發亂妨、其他野州、相州處々燒討劫盗ニ及候ハ、證跡分明ニ有之候事。（春嶽私記、黑田長知、酒井忠寶家記）

○慶喜諸藩ヘ達書

先般、獻言之次第モ有之處、豈計ンヤ、松平修理大夫家來共、要 幼帝、不盡公議、矯 叡慮、天下之亂階ヲ釀シ候件々、不暇放擧、依之、別紙兩通之 奏聞ヲ遂ケ、大義ニ依テ 君側之惡ヲ掃ヒ候ニ付、速ニ馳參、軍列ニ可相加者也。（春嶽私記、黑田長知、酒井忠寶家記）

○長知家記、別紙ノ末ニ、正月慶喜ノ四字アリ、又速ニ以下ヲ、勤王同志之面々速ニ驅登、爲皇國共ニ盡力可被致候事ニ作ル、大槻文彥筆記モ亦同シ、別ニ城中御供ノ面々ヘ御達トシテ、末文ヲ、速ニ馳登軍列ニ可相加者也ト作ルノ文アリ、

又堀田正倫日錄抄ニ左ノ文アリ、錄シテ參考ニ備フ、

予、宇內之形勢ヲ熟考シ、政權ヲ奉歸 朝廷、王政一途ニ出、萬國ニ並立ン事ヲ欲ス、豈料、薩藩奸賊、奉要 幼帝、不盡公

議、矯　叡慮、僞　勅ヲ下シ、恣ニ公卿ヲ黜陟シ、天下之亂階ヲ醸シ候件々、不暇枚擧、依之、別紙兩通之奏聞ヲ遂ケ、大義ニ依テ　君側之惡ヲ誅戮シ、自然本國ヲ征討可及候ニ付、國々之諸大名、速カニ馳登、軍列ニ可相加者也、尤軍賞之義ハ、平定之後、鋒先之勳勞ニ應シ、土地ヲ可割與候事。

○瀧川具知所持軍配書

一奈良街道小堀口　　牧野駿河守

一御城近傍一圓市中巡邏　　撒兵組

一福王駿河守、莊勘兵衛附屬一大隊

　右者、大津ヨリ三條大橋マテ繰込候事、

一松平讃岐守人數　　黑谷同斷

一稻垣平右衞門人數　　大佛兵糧護衞

一松平伊豫守　　天保山

一御城廻リ巡邏　　會藩板倉伊賀守人數

一松平刑部大輔　　御門々勤番　但、戸田釆女正ヘ交代

一紀伊殿人數　　天王寺眞田山、竝ニ市中巡邏

一御城廻リ開門十四ヶ所　　小林端一歩兵一大隊　外ニ、外國人旅宿廻リ巡邏之事、

一大坂御城御警衞

　戸田肥後守、大久保能登守奥詰銃隊八小隊　　杉浦八郎五郎、三浦新十郎銃隊四小隊

　撒兵四小隊　但、御城御門々勤番二小隊ニテ相心得候事、　　天野釣之丞守城砲

一大坂藏屋敷

天野加賀守、塙健次郎撒兵九小隊　吉田直次郎砲兵二門　會藩四百人

一兵庫

須田敬一撒兵半大隊　大砲二門

一西之宮

酒井雅樂頭人數、松平阿波守人數半大隊　撒兵一中隊　頭取一人

一橋本關門

酒井若狹守、松平下總守人數

一淀本營　騎兵三騎　別手組十人

松平豐前守出張差圖次第、京都へ繰込候事、

松平豐前守一小隊四十人　室賀甲斐守二小隊　戸田釆女正人數五百人

一鳥羽街道

竹中丹後守

秋山下總守歩兵一大隊　小笠原石見守歩兵一大隊　谷　土佐守砲兵二門

桑名四中隊　砲兵六門　騎兵三騎　築造兵四十人　松平右近將監家來三十人

右、攻撃當朔、鳥羽ニ出張、東寺へ向候事、

一伏見

城　和泉守

窪田備前守歩兵一大隊　大澤顯一郎歩兵一大隊　間宮銕太郎砲兵六門　新撰組百五十人　騎兵三騎　築造兵

四十人

右、攻撃前日、出張之事、

一二條御城

大久保主膳正

德山出羽守歩兵二大隊　砲兵四門　騎兵三騎　佐々木只三郎見巡組四百人　本國寺二百人　築造兵四十人　騎兵四騎

右、攻撃前々日、出張繰入候事、

一大佛

高力主計頭

横田伊豆守歩兵二大隊　砲兵二門　騎兵三騎　範造兵四十人　會藩四百人　砲兵一座

右、攻撃前日、大佛へ出張之事、

一黑谷

佐久間近江守

河野佐渡守歩兵二大隊　騎兵三騎　安藤璆太郎砲兵四門　築造兵四十人　會藩四百人　砲一座

右、攻撃前日、黑谷へ出張之事、三職叢記

○本條、三職叢記中、當時板刻ノ原書アリ、災ニ罹リ之ヲ失ス、今復、古學要中抄錄ノモノヲ採ル。

○中村武雄手記ニ云、伏見口ハ會津千餘人先鋒ニテ、幕兵原記、字闕、大隊、新撰組、濱田等ノ兵ニテ竹中丹後守總督タリ、鳥羽口ハ我桑名ヲ先鋒ト定メ、其人々ニハ兵藤八右衛門一小隊、久德隼人二小隊、岩崎又四郎二小隊、菅谷橘之丞二小隊、井上八郎右衛門大砲二門、河合小七郎大砲二門ナリ、其餘幕兵原記、字闕、大隊、見廻組、大垣等ノ兵ニシテ松平豐前守總督タリ、手分已ニ定リシカハ、正月二日、我藩兵モ一心寺ノ屯所ヲ發シ、諸軍ト共ニ大坂城外ニ整列シ、各隊次第ヲ以テ進發セリ、三日、淀

川ニ泝リ、申ノ半刻、淀ニ著ス、歩兵、見廻組等ハ、我藩ヨリ前ニ上陸シ、瀧川播磨守、前將軍ノ建白書ヲ持シ、四塚迄至リシニ、肥後ノ兵ハ先立テ入京セリ、繼テ入ントセシニ、薩州勢、四塚ノ關ヲ固メ、幕府、會、桑ノ兵ハ入京ヲ許サス。

○案スルニ、二道ノ總長武雄手記、軍配書ト異同アリ、蓋シ軍配書ハ豫定セシモノニシテ、手記ハ其實ヲ記ス、且ツ竹中重固、書ヲ伏見ノ薩營ニ贈リシ事アリ、今手記ニ從フ。

○

以手紙致啓上候、然ハ今般、徳川内府被致上京候ニ付テハ、先供ノ人數、竝會津、桑、名共致通行候間、爲御心得此段申進候、以上。

正月三日　　竹中丹後守

薩州御屋敷

御役人中樣　京畿討幕録

○

御手紙致拜見候、然ハ徳川内府樣御入京ニ付、御先供ノ人數、竝會津侯、桑名侯被致通行候旨致承知候、然處、右ハ　朝廷ヘ伺出置候間、何分御差圖有之迄ハ御差扣被下度旨、昨夜會津御役人衆迄御引合申上置候間、御差圖被爲在候迄ハ御扣被下度、此段御返答旁申進候、以上。

正月三日　　薩州　島津式部

竹中丹後守樣　京畿討幕録

○輦下日載ニ云、三日朝、林半七伏水出張ノ參謀、薩藩淵邊直右衛門、有馬藤太、土藩谷兎毛江ヘ申合、會津本陣ヘ罷越、應接ニ及ヒ候所、徳川入京ニ付、先手トシテ罷越候トノ事ニ付、三藩ヘハ未タ朝廷ヨリ、爲何御沙汰モ無之ニ付、伺取候迄差扣居可申

段申聞候所、承知イタシ候。

○山内豐範家記ニ云、三日、伏見出張ノ交代トシテ、澀谷傳之助、山田健一、二小隊ヲ率ヒ伏見ニ來ル、時ニ會、桑ノ兵、德川内府先供ト稱シ、水陸共ニ進ミ伏見ニ著ス、勢ヒ甚タ迫ル、是以テ山田喜久馬、吉松速之助等止テ不返、竹田街道ノ沿邊ヲ守ル、當是時、會兵時ニ來リ通行ヲ許サンコトヲ乞フ、其ノ朝命ナキヲ以テ敢テ不許、先是、薩藩及長ノ林半七、我屯所ニ來リ云、會、桑ノ勢已ニ如此、然ルニ彼レ朝命ヲ奉セス推參ニ付キ、先ツ平穩ニ談判シ、之ヲ止ムルニ如カス、薩、長ノ如キハ殊ニ會、桑ニ於テ嫌疑アレハ、願クハ貴藩發言セヨ、乃チ小監察八木側作等、薩、長兩人ト共ニ會兵ノ營ニ至リ、朝命ナキ限リハ、當地通行相斷ル由ヲ述タリ、當時倉卒ノ間、兵事ニ關スル者、皆會、桑上京ノ原因ヲ知ラス、前後困却不少ト云。

○慶明襍錄ニ云、上鳥羽手前迄致到著候處、見廻組ト相見エ百人位、手鎗、甲胄、陣羽織等ニテ、馬上ノ者一人對陣ノ處、敵方ヨリ四人應接ニ參リ、京師迄通行致候テ不苦候哉否ノ旨、　朝廷ヘ御伺ニ相成居候哉ト尋掛候處、其通伺置候段返答相成候、左候ハヽ、右之趣相分リ次第、何分爲知呉候樣、夫迄ハ一往兵隊ヲ引取候樣可致旨申出、上鳥羽ヨリ三十丁位川向ヘ引退ク。

○阪兵、北上ノ事聞ス、午牌、俄ニ百官ヲ朝集シ、姑ク慶喜ノ入京ヲ停メ、參與四條隆謌ヲ伏見ニ遣シ、阪兵ニ令シテ退歸セシメ、遂ニ行ヲ果サス、又德川慶勝、松平慶永ヲシテ之ヲ措置セシメ、薩、長、土三藩ニ令シテ、伏見ノ守ヲ嚴ニシ、安藝藩兵ヲシテ急ニ伏見ニ赴キ、阿波、彥根、平戸、大洲、大村、佐土原ノ六藩兵ヲシテ大津ニ赴カシメ、平戸、大洲ノ京都巡邏ヲ罷ム。

○參朝達書

自昨日至今曉、坂兵追々伏見表ヘ出張、其實如何難計候得共、何分不容易形勢ニ付、早々參　朝可有之、總裁宮　御沙汰候

事。

正月三日

追テ、參與召連、早々參　朝可有之事。島津忠義 徳川義宜家記

○慶喜ヘ達書

先達テ下坂ニ付、尾、越兩藩ヘ鎭定之儀被　仰付、御請申上候處、今日大兵伏見表ヘ押出候趣、如何ニ被　思召候、都下人心動搖ニモ可及候間、　御沙汰有之候迄、上京之儀可見合候事。三職叢記

○災後、原記ヲ失ス、今復、古擥要中抄錄セシモノヲ採ル。

○四條隆謌諸道記概略ニ云、正月三日、伏水ヘ出張ノ阪兵、早々引取候樣蒙勅使、四日、將ニ途ニ上ラントス、適阪兵敗歸ノ報至リ、赴クヲ果サス。

○

尾張大納言

越前大藏大輔

昨日ヨリ今曉ニ至リ、坂兵、戎服大砲等携ヘ、追々伏見表出張之趣、如何之儀ニ有之候哉、不容易進退、其儘難被指置ハ勿論候得共、尙前々周旋之筋モ有之、旁右人數早々引拂候樣取計可致候、若不奉　命候得ハ、不被得止之場合ニ付、爲　朝敵ヲ以テ御處置可被爲在候事。

正月三日　春嶽私記 徳川義宜家記

○附錄春嶽私記ニ云、參　朝之儀被　仰出候付、御相談被爲在候間、御參　內掛ケ御來邸御座候樣、土、豫兩老侯ヘ早乘御使者被遣之、豫侯ハ午後御出有之、土侯ハ御持病之由御使ヲ以テ御斷ニ付、猶又御直書ヲ以テ至急之御困難、梅澤殿ハ追付御出、豫侯ハ已ニ御入來有之候間、御勉强御枉駕之義被仰遣處、頓テ御出被成候段、御使者ニテ御返答有之處、又々御使者ヲ

以テ御參　內被成候間、御來邸ハ無之段被仰越、象二郎被仰遣處、參　朝ニ付、御用濟次第可罷出旨、神山左多衞參上シ、辻將曹モ罷出、種々御談有之候得共、緊要之梅澤殿、漸夕七時頃參邸ニ付、早速御評席ヘ御加ヘ、公ヨリ、伏水之形勢危急切迫之趣ニ候間、早々坂兵鎭撫引取方取計之義御申談候處、梅澤殿被申上候ハ、伏水之儀ハ、坂地ヨリ嚴敷御下知有之事候得ハ、決テ兵端ニハ及ヒ申間敷トノ事ニ付、公、又被仰聞候ハ、事之爲體、中々不容易運ヒニ御聞及被成候得ハ、坂兵ヨリ萬々一、壹發ニテモ致候樣之事ニ相成候テヘ、御名義ニ於テ內府公モ御濟不被成候間、何トカ盡力之方便モ有之間敷歟ト、諄々御說得被爲在候處、御答被申候ハ、凡ソ名義ハ既往ニ於テ相立候事ニテ、畢竟、內府公御入京、奸賊ヲ御芟除ト相成候得ハ、名義ハ自ラ相立候道理候得共、卽今之如ク內ニ奸黨アツテ、外ニ名義之立ヘキ所謂無之候間、何分早々、內府公御上京ニ相成候樣、御配慮可被成下、已ニ舊藩水戶表之事ニテモ經歷之手覺エ有之、イツトテモ正議之黨ハ名義ニ拘候故、機ニ後レ、奸黨之爲ニ被壓倒候ハ每々之事候得ハ、兎角機變ニ應シ、大勢ヲ會得候專要ニテ、名義ハ跡ヨリ如何樣トモ相立候抔、座上之議論迂濶不通之有樣故、將曹初侍坐之十之丞、鹿之介等迄堪エ兼ネ、種々嚴敷及論談候得共、時ヲ移シテ更ニ落意ニモ相成兼ネ、暮近ク相成候處、伏見ニ當リ出火之注進有之、公ニモ事已ニ去レリト御大息、一同モ驚歎之處、梅澤獨リ頑然トシテ、兵火ニハ有之間敷、必定尋常之火事ナルヘシト强辨セル故、公、三階ニ御登リ御遠望之處、伏水邊炎煙衝天、砲聲響動、兵燹ニ相決處、梅澤ハ茫乎漠然、呆癡之如キ爲體故、最早御相談之所詮モ無之時態ト相成ニ付、公ハ暮時頃ヨリ御參　朝ニ付、梅澤始モ怏々トシテ退出ナリ、豫老候ハ七半時頃、御相談之御席ヨリ御參　朝ナサレタリ。

○

各通　薩　州
　　　長　州
　　　土　州

坂兵出張不容易趣、追々言上ニ付、猶又伏水表防禦筋、精々盡力可有之、尤早々人數相加、嚴重警備可致、被　仰出候事。

正　月

追テ、長、土、藝ヘモ同様、被　仰出候事。

○追書、藩名互ニ用フ。

島津忠義家記
輦下日載

○

各通　薩　州
長　州
土　州
藝　州

別紙上ノ尾、越達書ヲ指ス、之通、尾、越兩藩ヘ被　仰出候ニ付テハ、坂兵可引取候得共、萬一押テ發京之儀申立候モ難計、其節ハ穩便應接ハ乍勿論、不得止時機ニ至リ候ハヽ、別紙御趣意之次第ヲ以テ、處置可有之候事。

正　月　三　日

但、長、土、藝等ヘモ被　仰出候間、尙申合處置可有之候事。

○但書、藩名互ニ用フ。

島津忠義家記
輦下日載

○

兼テ被　仰付置候伏見表巡邏之儀、此節人數京著ニ付、彌可相勤哉伺之趣被　聞食候、然ル處、別紙之通、尾、越ヘ　御沙汰候昨今之形勢ニ付、速ニ伏見表ヘ人數差出、緩急盡力可有之　御沙汰候事。

正　月　三　日

但、長、土、薩ヘモ被　仰付置候間、猶申合奉公可有之事。

淺野長勲家記

○

各通
彦根
大洲
平戸
大村
佐土原

追々切迫之形勢ニ押移、東兵上京之風聞モ有之候付、爲御警衛、先大津驛ヘ出張可有之、但、德川内府ヘ　御沙汰之次第モ有之ニ付、猥麤暴之儀ハ有之間敷候得共、猶精々穩便掛合、其旨趣可有言上、乍然、若押テ上京亂暴等之儀有之候ハヽ、其節ハ不得止之儀、可爲　朝敵ニ付、速ニ可致其處置　御沙汰之事。

但彦根、平戸、大洲同樣被　仰付候間、尚申合處置可致候事。

正月　大村純熙家記 井伊直憲家記

○但書、藩名互ニ用フ、彦根藩ハ文末ニ、猶又外御警衛モ被　仰付置候儀、苦勞ニ被思食候得共、東海道方角之儀、旁以被命候儀ニ付、深盡力可有之御沙汰候事ノ文、平戸ハ尚又市中見廻ハ被免候事ノ文アリ、阿波ハ蜂須賀茂韶家記之ヲ佚ス、但二月ニ至リテ罷免ノ令アリ、且柳原前光輒誌本月五日ノ條ニ、大津警衛阿波、彦根云々ノ文アリ、佐土原ハ但書ナシ、故ニ本條但書モ亦、佐土原ノ字ナシ、平戸ハ請ニ因テ守衞ヲ免シ、舊ニ依テ市中見廻ノ事ニ服ス。

○

加藤遠江守

右市中巡邏被　免候事。島津忠義家記

○日晡、阪兵、益進テ鳥羽、伏見ニ迫ル、薩、長二藩兵、邀テ之ヲ撃ツ、是ニ於テ、京師戒嚴ス、

酉牌後、令シテ、神事ヲ解キ、且內命ヲ宮中ニ傳ヘテ、密ニ乘輿ヲ遷スノ備ヲ爲ス、又德川慶勝、松平慶永、伊達宗城ニ命シテ、禁闕ヲ守衞シ、水戸藩兵ニ泉涌寺ヲ守リ、宇和島、高鍋、高取三藩ノ兵ニ諸門ヲ守リ、池田政禮ノ兵ニ岡藩兵ト共ニ猿カ辻ヲ守リ、井伊直憲ニ兵ヲ率ヰテ急ニ大津ニ赴キ、因幡藩兵及ヒ其支藩兵ニ伏見ニ赴キ、毛利敬親、父子ノ中一人、鷲尾隆聚ニ大阪ヲ攻擊セシメ、錦旗ヲ隆聚ニ賜ヒ、因幡、備前二藩ヲシテ征討兵ヲ備ヘ、且備前藩ニ西宮ヲ嚴守シ、德川茂承ニ官軍ヲ叫合セシム、又藤堂高猷、稻葉正邦ヲ諭シテ、方向ヲ誤ルコト勿ラシム。

○慶明雜錄ニ云、七ツ時分、又々歩兵一大隊餘、騎馬三人押來リ候間、先鋒迄應接ニ參リ、何分御沙汰無之內ハ、御通シ申儀不相成旨朝命ヲ蒙リ、相固メ罷在候ニ付、御扣居被成候樣申述候所、彼方ヨリ申出ニハ、此方ニモ前內府殿上京ニ付、先鋒被申付、　朝命同樣ノ譯ニ付、押テ罷通候段、頭役ヨリ申付候旨申出候、左候得ハ、何レ無是非時宜合ニ候間、此方ニモ相當ノ會釋可致旨申置候テ罷歸、此上ハ無致方ニ付、號令發砲ス。

○凡ソ戰陣ノ事、之ヲ外記ニ詳ニスルヲ以デ、唯其要ヲ略叙ス、後之ニ效フ。

○春嶽私記ニ云、宮中戒嚴被仰出、諸藩之兵隊禁闕之內外ヲ警衞シ、紛擾尤モ甚シ。

○有栖川宮家記ニ云、酉半刻、御神事被爲解。

○宮中ヘ內達

大政御復古ニ付テハ、深被廻　御遠慮、各藩衆庶、一點之遺憾ナカラシメ、上下戮力、偏ニ御國威維持可被爲遊御趣意ニテ、去月九日來、尾州、越前等ヘ懇ニ御沙汰之趣モ有之、兩藩ニモ出格盡力、追々鎭定之道相立、追々思召之通可運之趣言上モ有之候處、從昨日到今曉、坂兵追々伏見表出張、其實如何難計候得共、不容易進退、其儘難被差置次第ニ候、乍去、尚又、尾、越

兩藩ヘ被仰付候廉モ有之、此上盡力鎭定可致旨言上候間、旁平穩ニハ可至哉ニ候得共、何分前條件々意外之形勢ニ付、御油斷不可有之儀、萬一之節ハ當今彈丸戰爭之情態、不被爲得止、一時叡岳ヘ　御遷座之　思召ニ候間、心得迄ニ被　仰渡候、
但緩急其期ニ臨ミ狼狽無之樣、兼テ覺悟可有之候事。
但、卽今猥不可有動搖候事、尙又三番所非藏人取次以下口向一同諸官人ニ至リ、各半ハ供奉、半ハ此御所可爲留守候ニ付、其番々ニテ兼テ可申合置事。非藏人日記
大槻文彥筆記

○春嶽私記ニ云、伏見、鳥羽之兩路共、追々劇戰ニ相成趣相聞エ、火光天ヲ照シ、砲聲地ヲ動ス勢ニ付、宮中大ニ動搖ヲ生シ、公卿方之慌忙不一方、桂内親王モ　禁裡ヘ可被爲成段々御運ヒニヨツテ、　鳳輦叡岳ヘ遷幸可被爲在トノ御義ニテ、其節ニ御守衞、尾、越ヘ御意モ有之、堂上方縱橫奔走、御支度被取急、已ニ　御板輿モ庭上ヘ舁居エ、心之外成騷動ニ付、公、豫老侯ト御談シ、山階宮ヘ決シテ御妄動被遊間敷、表ヨリ申上無之内ハ、遷幸等之御儀ハ勿論、敏宮之御動座モ無之樣御切諫ニテ、宮ヨリ公卿達ヘモ被　仰出、御鎭撫有之、公ハ猶又、岩倉殿ヘモ御鎭靜之儀被仰談、下院ヨリモ申立候樣、八方御周旋有之、已ニ叡岳　遷幸之御沙汰モ出ツヘカリシモ、御取消ニナサレタリ、薩侯ハ夜半ニ及ヒ御參　内アリ、其他在京小諸侯、各思ヒ思ヒ之戎裝ニテ參趨之有樣、延元以來之大變ニテ、恐歎驚愕ニ不堪時態ニ及ヒタリ。

○

尾張大納言

越前大藏大輔

大政復古ニ付テハ、　御沙汰之趣モ有之、去月來出格盡力之次第、神妙之至ニ被　思召候、然ル處、今曉來、伏見表之事件不容易模樣ニ押移、最早萬不得止形勢ニ付、此上ハ多年勤　王之旨趣、彌勉勵、禁闕警衞可有之旨被　仰出候事。

正月

追テ、　思召之儀モ有之候間、若人數不足候ハヽ、早々國元ヨリ繰出候樣　御沙汰候事。徳川義宜家記
春嶽私記

○　宇和島少将

昨今不容易形勢ニ押移候ニ付テハ、多年勤王之旨趣、彌勉勵、　禁闕警衛可有之被　仰出候事。

正月　伊達宗徳家記

○徳川昭武家記ニ云、滯京ノ人數、更ニ泉涌寺御警衛被　仰付。
○伊達宗徳家記ニ云、公卿門邊人數少ニ付、人數差出候樣　御沙汰有之。
○高鍋藩記ニ云、有合之人數ヲ以テ、相應之御用奉願候處、乾御門警衛ヘ相加リ候樣被　仰付。
○植村家壺家記ニ云、於伏見邊戰爭ノ砌、　御所御唐門前ヘ人數差出ス。
○池田政禮家記ニ云、伏見表不容易形勢ニ付、人數出之儀奉伺候處、猿ヵ辻御警衛、中川修理大夫申談、可相勤旨被　仰付候。
○以上五條、皆口達ナリ。

○　井伊掃部頭

隨從ノ人數召連、早々大津驛ヘ出張、盡力可有之　御沙汰候事。

正月　井伊直憲家記

○別段演達

此頃乍病中、別テ大儀ニ思食候得共、切迫之折柄ニ付、精々盡力可致樣トノ　御沙汰ニ候。　井伊直憲家記

○附録彦根藩申請書

東兵上京之風聞モ有之候ニ付、爲警衛、大津驛ヘ出張可仕候樣、御書付ヲ以テ被　仰渡奉畏候、然ル處、是迄石薬師御門御警衛、且此頃四ッ塚關門御警衛被　仰付置、相當人數モ差出候、右三方ヘ分隊仕候テハ、切迫之折柄、御警衛向行屆不申候

テハ恐入候儀ニ付、右之内四ッ塚關門之儀ハ、方角手遠ニモ御坐候間、右御警衛ハ御免被　仰付候様仕度、此段奉願候、以
上。

正月三日　井伊掃部頭

井伊直憲家記

○直憲家記ニ云、四ッ塚警衛之儀、卽今混雜中、何レヘ可被　仰付目的モ無之ニ付、是迄之人數ニテ三家申合、相勤候様
被　仰出候。

○　荒尾駿河

本藩家老始メ人數上著、竝ニ松平相模守、松平修理等追々登京、　王事ニ勤勞之段　叡感不少候、然ル處、昨今ノ形勢以ノ
外ノ次第、遂ニ伏水表戰爭ニ及候、隨テハ薩、長、土、藝、防禦盡術之儀ニテハ候得共、在京之人數、伏水表出張、右四藩戮力
警備可有之旨被　仰出候事。

正月三日

但、別紙、下ノ大政御復古云々ノ達書ヲ指ス、早々本藩ヘ可有通達、是亦　御沙汰候事。　池田輝知家記

○　松平相模守　松平修理

本藩云々、同上文。上著以下十四字、及ヒ但書ナシ　池田徳定家記

○毛利敬親ヘ達書

徳川軍兵伏見表ニ出張、反逆之色顯然ニ付、追討官軍可被差向ニ付、宰相父子之中、大兵引率、急速發途、華城襲撃可有之様

御沙汰候事。（輦下日載）

○　鷲尾侍從

兼テ　御沙汰之趣モ有之候處、坂兵伏見表出張、叛逆之色顯然、不得止之情態ニ付、高野山屯集、同心戮力、速ニ華城ヲ可乘落候旨　御沙汰候事。

正月

追テ別紙下ノ、（兼テ鎭靜云云ノ達書ヲ指ス、）之通、紀伊中納言ヘ被　仰出候旨、精々申合、盡力勉勵可有奉公候事。（高野山出張概略 徳川茂承家記）

○出張概略ニ又云、齋原治一郎、京師ヨリ晝夜兼行ヲ以テ著陣、背上ニ錦御旗、竝ニ勅書ヲ負ヒ來ル。

○　因州

大政御復古ニ付テハ、深　思召之趣モ被爲在、各藩彼是盡力鎭定之次第モ有之候處、不計モ坂兵伏水表出張、開兵端、叛逆之色顯然ニ付、追討ノ兵被差向候間、各用意　王事ニ勤勞可致被　仰出候間、偏ニ盡力可有之候旨　御沙汰之事。

正月三日（池田輝知家記）

○　備前

大政云々、同上文。

尚以、西宮之儀咽喉之地ニ付、兼テ被　仰付置候儀ニテハ候得共、今日ニ至リ彌以御大切之御場所ニ付、尚又盡力警衞可有之　御沙汰之事。（池田章政家記）

○章政家記ニ又云、四日、西四辻大夫ヨリ西ノ宮御警衞、長州申合、早々人數指出、嚴重ニ可相守旨御沙汰候事。

○兼テ鎭靜　御沙汰之趣モ候處、坂兵伏見表出張、叛逆之色顯然ニ付、官軍相募同心戮力、　王事ニ勤勞可致　御沙汰候事。

正　月

紀伊中納言

○追テ、別紙（上ノ、兼テ御沙汰云云ノ達書ヲ指ス、）之通、高野山屯所之官軍ニ　御沙汰候間、心得ノ爲メ申達候事。（德川茂承家記　高野山出張概略）

深　思食之旨モ有之候間、不失方向、宜敷　王事ニ可勉勵被　仰下候事。

正　月　三　日

藤堂和泉守

○但、昨今之形勢、下立賣門警衛之儀、彌嚴重ニ警備可有之被　仰下候事。（藤堂高潔家記）

正議之心得方、兼々神妙ニ被　思召、猶此上決シテ心得違無之樣　御沙汰候事。

正　月　三　日

稻葉美濃守

（稻葉正邦家記）

○夜半、議定嘉彰親王ヲ以テ、軍事總裁ヲ兼ネ、議定伊達宗城、參與東久世通禧、烏丸光德ニ軍事參謀ヲ兼ネシム、又參與橋本實梁、參與助役柳原前光ヲシテ大津口ノ兵ヲ督シ、參與西園寺公望ヲシテ丹波口ノ兵ヲ督セシム。

軍事總裁被　仰付。（東伏見宮家記）

○本條、蓋シ御前親命ナルヘシ、參謀以下モ亦宣示ナシ、春嶽私記ニ云、此夜、仁和寺宮ヘ軍事總裁ヲ被命、東久世少將、烏丸侍從、參謀被仰下、伊達宗德家記ニ云、宗城於禁中軍事參謀被仰付、實梁家記ニ、總裁宮口達ト記ス、前光輒誌ニ云、大津口東兵襲來難計、依是、實梁朝臣、余等發向可指揮内命、公望卿丹波口發向内定ト。

○

仁和寺宮ヘ軍事總裁被　仰出候ニ付、御守衛兵士奉　御指揮進退可致事。島津忠義家記 春嶽私記

○德川慶勝、松平慶永、調停至ラサルヲ以テ、其職ヲ解カント請フ。

城華鎭撫之儀ニ付、追々蒙　朝命、焦心苦慮努力仕候處、遲緩ニ及ヒ、其内江門之事件ヨリ一層之激盛ヲ増シ、竟ニ今日ニ至候段、奉對　朝廷恐懼之至リニ奉存候、付テハ徒ニ汚高官居候曠命之罪、御譴責被下置、議定職　御免竝官爵ヲモ御削相成、如何樣ニモ確當之御處置有之候樣、謹テ奉伏罪候、萬死多咎、誠恐頓首。

正月　尾張大納言上

徳川義宜家記

○

只今、伏見表及兵爭候趣承候、兼テ私共ヘ盡力之儀被　仰付置候處、無其詮、今日之場合ニ至候儀、全盡力不行屆故ト重々奉恐入候、此上ハ早速、御役　御免被成下候樣奉歎願候、然ル上ハ、如何樣之御譴責被　仰付候共、謹テ奉甘受候。

正月　越前宰相

春嶽私記

○附錄、春嶽私記ニ云、尾侯御名代成瀨隼人正ヲ以、御伺樣被　仰立、土、豫、藝之三侯モ兼テ議定之御職掌被蒙候事候得ハ、御不肖ナカラ如何樣ニモ御盡力可被成ハ勿論候得共、是迄從　朝廷追々之被　仰出等一切御沙汰無之、今日之事件ニ相成候テモ、御同然ニ候ハ全ク御不才御不堪故、御談ニモ不被加御儀ト御推量被成、　朝廷之御爲ニモ不被爲成候得ハ、今日ヨ

リ御職掌被免候樣、御一同御嚴達有之由、私云、右之御次第ニハ有之候得共、追テ議定職御免御願之儀、不被　聞召捉被仰出之。

○本願寺光威、光澤ノ子、東本願寺光勝、門徒ヲ率ヰテ參朝シ、光勝、金千兩ヲ獻ス、光威ニ命シテ、九門内外巡邏及ヒ猿ケ辻警守ヲ爲シム、松平賴聰家臣ノ京ニ在ル者モ、亦兵ヲ以テ事ニ從ハントス請フ。

本願寺

累年勤　王之志徹底、今日之急ニ當リ、人數隨從神速參　朝、殊ニ別事　御沙汰之趣モ奉行、旁　叡感不少、尙又、賴被　思召候旨被　仰出候事。

正月三日　本願寺記

○

本願寺

九門内外列裝不飾、内々巡邏、且火用心以下萬事取締可有之事、

但、親王家、大臣家以下、表町ニ通シ候處々表裏、夫々同上取締之事。本願寺記

○本願寺記ニ云、伏見邊不容易大變ノ趣ニ付、不取敢人數召連、新門主參朝候處、右ノ　御沙汰ヲ蒙リ候事、又云、參與御口達ニテ、人數飛鳥井家ヘ可相詰、猿ケ辻御手薄ニ付、同所御守衞專可致旨ニテ、四月八日迄相勤、別ニ達書ナシト、但シ別事　御沙汰云々ハ考フル所ナシ。

○

東本願寺

御沙汰之趣、迅速奉行、金千兩獻上、尚又言上之件々、神妙之至ニ被　思召候、殊ニ人數召連參　朝之次第、旁　御感之旨御沙汰候事。

正月三日　東本願寺記

○五日達書

本願寺

從來精勤、殊ニ舊冬以來度々言上之趣、　叡感御事ニ候、然ル處、方今形勢、　九重御警衛重大之御事ニ付、早々門末以下之兵ヲ催シ出仕、尚此上丹誠之忠勤ヲ可抽由、被　仰下候事。本願寺記

○本條、達書ノ事之ヲ本寺ニ賴スニ、飛鳥井、猿ケ辻警衛ノ命、口達ニ出テ、門徒ニ示スヘキモノナキヲ以テ、更ニ此達書アリト云。

○

舊臘　御法會ニ付、般舟院御警衛被　仰付候人數、乍少々未タ御當地ニ罷在候處、今夕伏見方角出火ニ付、相應之御用モ被爲在候ハヽ、被　仰付被下候樣奉願上候、此段申上候。

松平讃岐守內

正月　北原直左衛門

高松藩記

○是日、慶喜、書ヲ大阪在留各國公使ニ致シ、薩摩藩ト交兵ノ由ヲ陳シ、其民人ヲシテ條約ヲ確守セシメ、軍艦兵器ヲ私賣シ、及ヒ未開港場ニ至ルヲ禁ス。

以書狀致啓上候、松平修理大夫家來共、國內之變革ニ乘シ、奸宄之擧ニ及候ニ付、夫々鎭定方處置可及ト存候、就テハ兼テ

條約中掲載セル通之禁ヲ犯シ、貿易ヲナシ、軍器兵艦等、都テ日本政府之外、他人ニ不可賣渡、且開港場之外、船ヲ寄ルヲ許サス等之諸ケ條ヲ嚴重ニ相守候樣、其國臣民ヘ御布告有之候樣致シ度、右等之ケ條、無事之日ニアリテハ一箇之約條ニ候得共、内亂之時ニ當リ候テハ、最大之緊要事ニ有之、故ニ前之場合モ有之、怪過タルモノモ（原文誤アリ）、後ノ場合ニアリテハ、萬國公法上ニ於テ大ナル違背之廉ト可相成候、貴國竝御同僚御一同、國内之事ニ付テハ關係不被成旨、過日我　大君殿下ヘ御申立有之候通、貴國人民條約面之趣ヲ一々相守候樣、相當之御處置有之度存候、兇徒鎭定方、不得止時ハ力ヲ用ヒ、服從セシメ候儀可有之候、且海軍諸船之指揮官等之、條約ヲ破ル船々之有無ヲ嚴敷檢査スル樣下命致シ置候間、貴國ニ於テ、其事之發スルニ及テ、正理ニ基キ、貴國之仕來ヲ以テ、同意御處置有之候樣致シ度、右松平修理大夫ニ屬セル諸船軍艦商舶之無差別、見掛次第捕押、萬一强テ防禦ニ及候節ハ、力ヲ用ユル樣既ニ下命ニ及ヘリ、若右船中、外國人乘合居候節ハ、勉メテ危難ニ逢サル樣取扱ヒ、其上ニテ其國官吏ヘ引渡スヘシ、若又力ヲ用ユル節ハ、氣之毒ナカラ其者之不了簡ヨリ出シ事故、多分ハ命ヲ危フスル事可有之、貴國軍艦之指揮官等ヘハ、其船々之近傍ニ於テ、　大君政府之船ト賊船ト放發之事ニ至リ候儀有之候トモ、決シテ其場ヘ立障ル事無之樣、御處置被成候儀ハ素ヨリ疑ヲ容レサル處ニ候、右　大君殿下之命ニ依テ、此段可得御意、如斯ニ御座候、以上。

正月三日　　松平豐前守
　　　　　　板倉伊賀守
　　　　　　酒井雅樂頭

スルハルリー、ヱス、パークスケシビ閣下　外務省記

○外務省記ニ云、舊幕府ノ書翰、皆各國公使館ニアリ、各同文言ナリ、故ニ餘ハ之ヲ略ス。

○四日米字二國公使書柬

日本ニアル合衆國使臣館

千八百六十八年第一月二十八日、於太坂、

酒井雅樂頭
板倉伊賀守　閣下
松平豐前守

余、今昨夜之貴翰ヲ落手セリ、書中合衆國人民ニオイテハ、執中之法ヲ守ルヘキ爲メ、緊要之處置ヲ爲ン事ヲ余ニ乞ヘリ、
余、我國民ニ揭示シ、之ニ隨ハシムル事ヲ正理ナリト決シ、ソノ請書面ヲ正シクセンニハ、余ニ次條ヲ報告アラン事肝要ナリ、

日本政府ハ、今誰ヲ敵トシテ戰ヲナセル歟、政府ニ抗敵スルモノハ松平修理大夫一人ナル歟、

或ハ、其會約同盟之者アル歟、

且ツ日本政府、我國民、竝ニ條約ニ於テ、彼等ニ許セル理ヲ保護セントノ意衷企望アル而已ナラス、之ヲ事實ニ行フヘキ旨ヲ「事實ニ於テ果シテ然ラハ」原文詳ナラス、余、我國人ニ告示サント決定セリ、
余、可成ハ明日、江戶ヘ向ケ發行セン事ヲ望ムニヨリ、閣下コノ條ニ付、今日中ニ余ニ報告セラルヘシ、拜具謹言。

日本在留合衆國ミニストル、レシデント、
アルビウワン、フアルケンボルグ、

外務省記

○

御書狀致披見候、然ハ當今、我國內變有之、不得止、兵力ヲ用ヒ候場合ニ至リ候ニ付、貴國人民ニ於テ、總テ關係不被致候樣、貴扱ヨリ御布告有之度段御賴申候處、賊徒之名前ヲ委敷御承知被成度旨、云々、御申越之趣委細承知致シ候、時今、我政府ニ於テ討伐ヲ加ヘ候不臣ノモノハ、全ク松平修理大夫一藩而已ニ有之候、乍併、若以後同藩ニ黨與致シ候者有之候節ハ、共

ニ誅戮イタシ候積ニ付、其節ハ名前等委敷可申進候、尤右徒黨之者、何處ヘ潜伏致シ、非謀ヲ巧候哉モ難計候間、條約外國人ヲ保護致シ候方法ハ、夫々嚴重手配致シ置候間、其段ハ御安意有之候樣存候、全鎭靜致シ候迄ハ、可成丈遠行等無之樣御心附賴入候、右御報可得御意如斯御座候、以上。

正月四日

板倉周防守花押
酒井雅樂頭花押

米國公使閣下 外務省記

○

千八百六十八年第一月二十八日、於大坂、

大坂ニアル　外國事務執政閣下、

余謹テ、慶應四年第一月三日附之貴翰ヲ落手セリ、書中日本政府ト薩摩侯ト戰爭中、普魯社臣民之可相守行狀ヲ云ヘリ、余、コノ答トシテ、今日余ヨリ横濱、大坂、長崎、箱館、並上海在留之普魯社コンシュルヘ宛差遣シ、布告號令セシメタル書面之譯文ヲ尊覽ニ呈ス。

布告

日本外國事務執政ヨリ、余ヘ報告セル趣ニテハ、日本政府ト薩摩侯トノ間ニ戰爭ヲ始メタリ、就テハ普魯社臣民注意シテ、普魯社ト日本ト之條約中之明文ヲ相守ルヘシ、其取極ニテハ、不開港場ヲ尋訪シ商賣ヲナス事、及ヒ日本政府之外餘人ヘ、軍器軍艦ヲ賣ル事ヲ禁セリ、且薩摩侯ニ屬セル船中ヘ止ル事ヲ禁ス、犯ストキハ、右之船ト日本政府之軍艦ト戰爭ニ至レル時ニ當リ、最モ可恐危難ニ遇フヘシ、拜具謹言。

普魯社國シヤルゼダッフエール、

フォンフラント手記
外務省記

○外務省記ニ云、合衆國ハ前條ノ往復ノミニシテ、禁令布告報知ノ記録ナシ、普魯社ノ布告アルヲ以テ考フレハ、各國一同布告セシニヤ、別ニ記録ノ據ルヘキナシ。

○昨夜、舊幕府ノ軍艦、薩艦ヲ神戸海及ヒ土佐洋ニ砲射ス、是夜幕兵、又其大阪藩邸ヲ襲ハントス、藩人、邸ヲ焚テ遁ル。

○慶明雜錄ニ云、今二日、平運丸大坂出帆イタシ、神戸沖へ日入時分通船イタシ掛候處、幕艦二艘、前後ヲ囘轉イタシ、樣子如何イフカシク見受候内、平運丸ニハ、始、和田岬へ參掛候折柄、幕艦囘陽丸ヨリ一發砲發イタシ候處、其玉的中不致、再一發ヲ發候處、士官室打貫、此方ヨリハ全ク放發不致、直ニ後退ヲ掛、囘陽丸方へ爲迯候處、最早日沒候時分ニテ、夫形放發ヲ止候由ニテ、夫ヨリ當港へ入碇イタシ、五ツ時分申出候折柄、英國岡士代ダウダ、並日本語通辨人ウエールトソン、夕方ヨリ參居候、則白山始承リ申立候趣ニテハ、開港地港内ニテ放發イタシ候儀ハ、甚以不條理、萬國之公法ニ相掛無之儀ニ候條、若シ明日ニテモ放發イタシ候ハヽ、必ス港内ニテハ不可應、白旗ヲ立テ幕艦へ乘付、何ニ故へ港内ニ於テ放發イタシ候哉、兵仗ヲ可主筋アラハ、港外ニ於テ可戰ト云ヒ可置、其上不相變放發イタシ候ハヽ、各國軍艦之内何レニテモ差越、云々之次第申聞候樣可致トノ事ニテ、カナラス港内等ニテ暴發イタスヘカラストノ事ニ有之候、拙者ニモ翔鳳丸、一左右モ有之、眼前放發ヲ受候段承屆候儀ニ付、片時モ默止罷在難忍候得共、當港五艘程碇舶イタシ居候折柄、無謀ニ兵端ヲ相開候テハ、則薩、幕私之兵亂ヲ開候譯ニテ、當節柄名義モ難相立候付、斯迄彼ヨリ暴發手ヲ出候共、御地議事院ニオヰテ公論ヲ盡シ、堂堂タル　朝廷ノ命ヲ奉シ、其罪ヲ正候テモ遲キト申場合ハ有之間敷、前後深ク勘考ニオヨヒ候儀モ有之候、白山及ヒダウダ抔之申出通ニモ人心參リ兼候付、明日之時機次第、臨機應變之所置イタシ度、此段早々及御掛合候ニ付、此方之動靜ニ不

關御盡力可給、此段御掛合申越候、以上。

新納刑部

島津伊勢 判

岩下佐次右衛門 判

○又云、三日、使節士官二人、和田彦兵衛、玉川藤助、差立、砲發之次第尋問ニ及候處、船將榎本和泉守出會ニテ返答ニハ、於江戸戰爭ニ及候付、最早敵國之船故、此兵庫港不通樣ニ砲發イタシ候由ナリ、四日、春日丸、御軍艦、翔鳳丸、平運丸、一緒ニ出帆、翔、平共病船、遲シ、決シテ彼ヨリ砲發致スヘシ、左候ハヽ、此方ヨリモ望所、四方ニ眼ヲ配リ居候得共、未明之事ニテ、五艘之軍艦一モ不相見得故、幸ヒニ平運丸ハ四國外ヲ乘行候處、阿波沖ニテ德川軍艦ト相見得、遙跡ニ煙見ユ、仍テ翔鳳丸ハ病船故、土佐ヲサシテ乘行、春日丸ハ洋中ニワサトウロウロトシテ翔鳳丸ヲ見送リ、最早懸念ナシト決著、追々彼モ近寄候付、船ヲ留候處、彼モ又船ヲ留ル、雙方旗印無之故ナラント、御紋付差揚候處、直ニ彼ヨリ砲發、此方ヨリモ拾八發、内一發ハ見事ニ打込候ト見ユ、彼ヨリハ二十五發、一モ不當、夜ニ入雙方引取ナリ、翔鳳丸ハ無難ナルヘシ、平運丸ハ其行所ヲタシカニ不知ナリ。

○外務省記川勝近江守、石川河内守、書柬ニ云、且今四日曉、當地大坂、薩州藏屋敷ヘ陸軍隊ニテ取圍、一个所ハ燒失、一个所ハ乘取候處、米砂糖等夥敷貯畜有之候由、兵庫表ニ於テハ昨日、薩州蒸氣船一艘、開陽艦ヨリ砲發打沈メ候趣ニ有之、尤右何レモ聢トイタシ候儀相分ラス、尚追々模樣可申進候得トモ、不取敢此段申進候。

○春嶽私記ニ云、雪江、大坂、中島邸ヘ著船ノ處、昨夜ヨリ薩邸火攻ノ聞エ有之、嚴重ノ御手配ニテ、彼方角殊之外騷ケ敷抔物語罷在候内、忽然トシテ地雷二發ス、是必ス薩邸ナルヘシト樓上ヨリ望ムニ、果シテ薩邸ニ當リ失火セリ、後ニ聞クニ薩邸ニテハ勢ヒ遁レ難キヲ知リ、昨日來、老幼ヲ爲立退、諸具ヲ他所ヘ搬ヒタル後、火藥ヲ以テ自燒セリトソ。

復古記 卷十五 終

總括兼纂修
一等編修官　臣　長松幹
校勘
一等編修官　臣　長炗
一等掌記　臣　四屋恒之
校錄
六等掌記　臣　澤渡廣孝
繕寫
二等繕寫　臣　小川長和
二等繕寫　臣　小島春

復古記　卷十六

明治元年戊辰正月四日ニ起リ六日ニ至ル

○正月

四日、軍事總裁嘉彰親王ヲ拜シテ、征討大將軍ト爲シ、議定、故ノ如シ、錦旗節刀ヲ賜ヒ、參與四條隆謌、參與助役五條爲榮ヲ以テ、錦旗奉行ト爲シ、參與及ヒ助役、竝ニ故ノ如シ、薩、藝、長三藩兵ヲシテ之ニ從ハシム、參謀伊達宗城、征討ノ事、宜ク列藩ノ公議ヲ盡スヘキヲ論ス、淺野茂勳、山內豐信モ亦、其議ヲ助ク、廷議省セス、午後、大將軍出テ東寺ニ次ス、宗城從ハス、大將軍、矢守平好、對馬守○仁和寺宮諸大夫、中沼之舜、了三○學習院儒官、高崎正風左京○薩摩藩士、ヲ以テ、下參謀ト爲ス。

慶應四年正月四日　宣

二品嘉彰親王

補征討大將軍

職事俊政　嵯峨實愛
切紙　留

○東伏見宮家記ニ云、於八景間、賜征討將軍宣旨、於御休所錦旗御頂戴、於御學問所賜節刀、又云、東寺迄出馬之樣朝命ノ所、當今戰爭之意ハ薩、長兩藩而已、其他諸藩ハ其意無之、若唯薩、長ニ御依賴被爲在候テハ、朝議一ニ薩、長ノ旨趣ニ出候樣ニ相成、實ニ歎息之至、何卒被爲從諸藩之議論ノ上、公平至當之御所置ノ樣ト宇和島侯被及言上、且土、藝二侯同議論ニ候ヘ

トモ、尚モ東寺迄出馬之樣、再三勅命アリ、又云、矢守對馬守、中沼了三、高碕左京、下参謀被仰付。
○四條隆謌履歷書ニ云、總督宮大阪御出陣ニ付、錦旗奉行被　仰付。
○五條爲榮履歷書ニ云、征討將軍嘉彰親王出陣ニ付、錦旗奉行被　仰付候事。

○　各通　薩　州
　　　　　長　州

仁和寺宮、爲征討將軍御出陣ニ付、人數一小隊急々指出候樣　御沙汰候事。
　正　月　島津忠義家記　毛利元德家記

○　藝　州

仁和寺宮、爲征討將軍御出陣ニ付、人數三小隊差出候樣　御沙汰候事。
　正月四日　淺野長勳家記

○案スルニ、毛利元德家記、隨行ノ達書ヲ載スレトモ、現ニ兵ヲ出スノ事ヲ記セス、東伏見宮家記ニ、騶從ヲ略記シテ、亦長藩兵ヲ載セス、蓋シ見兵少キヲ以テ、之ヲ辭セシナルヘシ。

○參與西園寺公望ヲ以テ、山陰道鎭撫總督ト爲シ、參與故ノ如シ○西園寺公望家記　薩、長二藩兵ヲ以テ之ニ屬シ、本道ノ諸藩ニ令シテ、其指揮ヲ受ケシム、又丹波、丹後、但馬ノ諸侯ニ諭シテ、王事ヲ勤メシム。

各通　薩　州
　　　長　州

西園寺三位中將、爲鎭撫總督、丹波口ヘ出張ニ付、急々人數一小隊、可指出旨　御沙汰之事。

正　月　島津忠義家記
輦　下　日　載

○

西園寺三位中將、爲山陰道鎭撫總督出張被　仰出候間、追々指揮之次第モ可有之候間、此段爲心得申達候事。

正　月　四　日　小出英尙家記
京極高厚家記

○

丹　波

各通　青　山　左　京　大　夫　　松　平　圖　書　頭

朽　木　近　江　守　　小　出　伊　勢　守

織　田　出　雲　守　　九　鬼　大　隅　守

谷　　大　膳　亮

丹　後

松　平　彈　正　忠　　牧　野　豐　前　守

京　極　主　膳　正

但　馬

仙　石　讚　岐　守　　京　極　飛　驒　守

大政御復古ニ付テハ、深厚　思食之旨有之、各藩ヘ被　命、彼是盡力之次第モ候處、昨今ニ至リ、不計モ坂兵伏見表出張、突然兵端ヲ開キ、終ニ不可止之形勢ニ押移候ニ付テハ、各名分條理ヲ踏ミ、可勤　王事ハ勿論、尙又追々　御沙汰之次第モ可有之候間、其節ハ急度勉勵盡力可致旨被　仰出候事。

但、登京出來候ハヽ、速ニ人數隨從上著可致　御沙汰候事。　青山忠誠家記　仙石政固家記

○三職以下、徹夜事ヲ秉ル、是日、命シテ退休セシム。

不容易御時節ニ立至リ候儀ニテハ候得共、此上如何共難計、依之、宜敷氣力ヲ養ヒ、緩急奉公可有之候間、今日ハ退出、明日ヨリ各巳刻參　朝、御用有之節ハ、別段伏見表事件同様之事ニ候得ハ、伺之上退出可致候事、

正月四日

但、下參與之輩ニモ同様、日々巳刻一應相揃、本文之通ニ退出可有之、乍去、一藩一人ツヽ晝夜相詰居候様可致事。　春嶽私記　織田信親家記

○薩摩藩兵ニ命シテ、黑谷ノ會津藩邸ヲ伐シム。

薩州へ

黑谷邊會兵潛匿之趣、不容易儀ニ候、早々可打拂　御沙汰候事。　春嶽私記　藤堂高潔家記

○諸藩へ達書

右之通前條ヲ指ス、薩藩へ　御沙汰相成候間、此段相達候事。　春嶽私記　藤堂高潔家記

○春嶽私記ニ云、右御達ニ付、薩兵、大砲ヲ以テ黑谷ヲ攻撃セシ故、災、蕭牆之中ニ發セシ歟ト、洛中一時騷擾ヲ起セリ。

○附錄長門藩士建白書

二條城、黑谷賊徒巢窟故、急速御掃攘被　仰出度候事。

但、自今已後、賊類私ニ潛伏爲仕間敷旨ヲ、洛中へ精細御布告之事、

右へ御手ヲ被下候上ハ、山崎關門取締方御吟味之事、

掃攘御手當トシテ、一中隊差出可申候事。

○池田政禮ノ伏見巡撫ヲ罷メテ、專ラ猿ケ辻ヲ守衛シ、因幡、森、柏原三藩ヲシテ正親町三條實愛、德大寺實則、穗波經度、東久世通禧ノ衞兵ヲ出サシム。○久留島通靖織田信親家記

○池田政禮家記ニ云、西四辻大夫ヲ以テ、是迄蒙御内命候、伏見表鎭撫之儀ハ被免、更ニ猿ケ辻警衞一手持ニ被仰付候間、猶可致盡力旨口達アリ、池田輝知家記ニ云、長州兵、三日夜、鳥羽口救援ヲ以テ、實愛ノ警衞ヲ辭シ去ル、故ニ之ニ代ル。

○本田康穰、其邑東國ノ要衝ニ當ルヲ以テ、歸テ守備ヲ修セント請フ、之ヲ聽ス、又平戸、大洲二藩ノ請ヲ允シ、大津警備ヲ罷メ、再ヒ京師ヲ巡邏セシメ、備前藩兵ヲシテ大津ニ赴カシム。

○本多康穰上申書

方今、不容易形勢ニ付、東國ヨリモ追々罷越候風聞御座候ニ付、大津表御固之儀、外藩々へ被　仰付候趣承知仕候、就テハ主膳正居城之儀ハ、東海道咽喉之地ニ御座候間、守城堅固ニ申付度、時宜ニ寄リ右藩々へ掛合候儀モ可有御座候ニ付、一先歸邑仕度、尤御當地御取締之儀ハ、家來共殘シ置、是迄之通三藩申談、手拔無之樣可仕奉存候、仍此段御屆申上候。○本多康穰家記

○康穰家記ニ云、右申上候處、至極尤之儀、願筋被　聞召候間、早々引拂、致守城候樣被　仰出、在所へ引取ト、又二日ニ此書ヲ出ストスレ共、諸藩大津守備ノ命、昨夜ニ在ルヲ以テ、本日ニ收ム。

○

謹テ奉申上候、追々切迫之形勢ニ押移リ、東兵上京之風聞モ有之候ニ付、爲警衞、先大津驛へ出張仕候樣被　仰付、且市中見廻之儀ハ被差免候旨蒙　仰、難有奉畏候、一應ハ御請奉申上候得共、何分少人數ニ御座候テ、大津驛へ出張仕候テモ守衛

仕候丈之手當無御座候得ハ、却テ　御武威モ通徹不仕候儀ハ必然之儀ニテ、深ク奉恐入候次第ニ御座候、兼テ肥前守申付置候儀モ御座候間、何卒於　闕下、相當之御奉公被　仰付被下置候樣奉願候、左候ハヽ、拋身命、御奉公奉申上度奉存候、肥前守、未著京モ不仕候ニ付、乍恐、右之趣從私奉歎願候、何卒程能御聞濟被成下置候樣奉願候、誠恐誠惶謹言。

松浦肥前守家來

正月三日　田村文右衛門

松浦詮家記

○詮家記ニ云、三日夜願出、翌朝願之通御免被成下、市中見廻、是迄之通リ相勤候樣、岩倉殿ヨリ御差圖アリ、又加藤泰秋家記、願書、御達書、原記ヲ失ストアリ。

○備前藩ヘ達書

大津表御警衛被　仰付候間、早々人數差出、嚴重御警衛可致旨　御沙汰候事。

池田章政家記

○本願寺光澤、金三千兩ヲ獻ス、書ヲ下シテ之ヲ賞ス。

本願寺

御沙汰之趣拜戴、速ニ金三千兩奉獻、毎事勉勵之次第、神妙ニ被　思食候、此段申達候事。

正月　本願寺記

○篠山藩、伏見兵火ノ狀ヲ上報ス。

伏見驛動搖ニ付、同所爲取締三藩申談、一藩彼地ヘ罷越候樣御達ニ付、同驛ヘ差出置候左京大夫家來之者ヨリ、注進申越候趣、凡左ニ申上候、一昨二日夜ヨリ多人數追々入込、市中動搖、不容易形勢之處、御固之御人數御警衛有之候、然處、昨三日夕、京橋邊、竝鳥羽邊ニテ一時ニ火之手上リ、追々砲聲嚴敷、火口多端ニ相成、市中之者共動搖不大方候ニ付、立退方致指揮

候得共、何分砲丸、竝火勢强ク、取鎭方術計モ無御座趣、尤今曉ニ至リ候テモ鎭火不致候由、彼地ニ罷在候者ヨリ申越候ニ付、此段不取敢御屆申上候、以上。

青山左京大夫家來

正月四日　坂東篤之輔

青山忠誠家記

○舊幕府老中、江戸傍近ノ諸藩ニ令シテ、薩人ニ備ヘ、又諸關ノ守ヲ嚴セシム。

○官軍、伏見鳥羽ノ賊ヲ擊テ、之ヲ郤ク。○輦下日載

○九鬼隆備、疾アリ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。○九鬼寧隆家記

此程、野州邊暴行イタシ候者共、御召捕御糺問有之候處、右ハ松平修理大夫家來之由申立、其餘惡黨共、江戸屋敷内ニ潛伏罷在候趣ニ相聞、既ニ去ル二十三日夜、市中爲取締出張罷在候酒井左衞門尉人數、屯所ヘ及發砲候儀モ有之、難捨置、右亂妨人引渡方之儀、修理大夫家來ヘ掛合候處、其節モ理不盡ニ砲發、無餘儀戰爭、去ル二十五日之事件ニ相成候ニ付テハ、此上彼方ニオイテ何樣之企致間敷トモ難申、同人家來共、江戸表ヘ暴出イタシ候儀可有之モ難計候間、領分宿驛取締方嚴重行屆、若右樣之儀有之節ハ、召捕切捨打捨等勝手次第、取締付候樣可被致候。

右ニ付、御關所所持候ハヽ、是又別テ嚴重御取締申付、去ル七月相弛ミ候以前ヨリ、一際御警衞筋嚴重申合候樣可被致候。

右ハ都テ伺屆等ニ不及候間、面々存分取締申付候樣早々可申達旨、稻葉美濃守殿差圖ニ付相達候。○大河内輝聲家記

五日、參與橋本實梁ヲ以テ、東海道鎭撫總督ト爲シ、參與助役柳原前光ヲ副總督ト爲ス、○二人、參與故ノ如シ是日、二人、山陰道鎭撫總督西園寺公望ト皆京師ヲ發ス。○嵯峨實愛手記

○實梁、前光、皆宣示ナシ、輒誌ニ云、議定實美卿傳宣、實梁朝臣東海道總督、余副將被　仰下、尙一道政務御委任、公望卿亦今朝進發ノ由。

○德川慶勝ニ命シテ、二條城ヲ收管シ、城中ノ殘兵ヲ大坂ニ押送セシム。

尾張大納言

二條城殘兵速ニ退城可致、下坂可申達候、若不承服之節ハ、討伐掃除可有之旨　御沙汰候事。

但、二條城之儀、即今之處、其藩ヘ被預候間、其分可相心得候事。德川義宜家記

○

只今、二條城無故障請取、城中人數盡爲引拂、殘兵護送方取計候樣可仕候。

正月六日　尾張大納言

德川義宜家記

○

二條御城之儀、今度尾張大納言ヘ御預被　仰出候ニ付、私儀爲同人名代、今日登城之上、監察梅澤孫太郎ヨリ請取之、大納言人數差置退出仕候、此段御屆申上候、以上。

正月六日　成瀨隼人正

參與御役所　犬山藩記

○四條隆平ヲ山崎ニ遣シ、守關ノ津藩兵ニ命シテ、官軍ニ應セシメ、多度津藩ヲシテ其衞兵ヲ出サシム。京極壽吉家記

藤堂和泉守

今般、德川内府上京先手之家來ト稱シ、戎服大砲等ニテ伏見迄押出候儀、意外之進退、不可言之次第ニ候、右ハ兼テ懇々御內諭、且言上之次第モ有之候處、從　朝廷警衞被　仰付置候御場所、不相憚突入之妄擧、實ニ不得止之時機、被及掃攘候、最早叛逆之色顯然候ニ付、進軍追討官軍被差向候間、山崎關門之儀、樞要之地ニ候條、官軍救應、守關之大任勤勞候樣被　仰付候事。

正　月　五　日

但、頃日　御沙汰モ有之候通、深賴思召候次第、偏ニ盡力奉公可有之候事。藤堂高潔家記

○四條隆平手記ニ云、五日夜第十二字、勅ヲ奉シテ山崎ニ抵リ、重臣藤堂采女ヲ見テ、其兩端ヲ持スルヲ責メ、速ニ賊兵ヲ擊シメ、又陣中ヲ巡視シ、天明、天王山ニ登テ戰狀ヲ觀レハ、賊兵遂ニ大ニ敗走ス。

○

去ル五日、於山崎表御達被成下候、德川內府御追討官兵御差向ニ相成候付、御關門之儀樞要之地ニ候故、官軍救應守關之大任、勤勞仕候樣、勅命之趣奉敬承、右御請申上候、以上。

正　月　九　日　　　　藤　堂　和　泉　守

藤堂高潔家記

○諸藩ニ令シテ、京阪見兵ノ數ヲ錄上セシム。

○本條、達書ナシ、稻葉久通家記ニ云、五日、參與御役所ヨリ家來被召呼、京都、大坂詰合人數取調、卽刻差出候樣被申聞ト、井伊直憲家記ニハ、參與役所ヨリノ文通トアリ。

○諸藩上申書

中立賣御門御警衞人數　凡百八拾人餘　銃兵三拾人餘

正親町三條殿へ　貳拾人

長谷殿へ　貳拾人
伏見表へ出張罷在候人數　凡貳百五拾人餘
家老
荒尾駿河家來　凡三拾人餘
右之通御座候、此段申上候、以上。

因幡中將内
野村儀左衞門

正月五日

池田輝知家記

○

在京人數
家老　壹人　留守居　壹人
醫師　壹人　祐筆　壹人
定詰　壹人　家老家來　拾貳人
留守居家來　四人
〆、貳拾壹人
大坂藏屋敷詰人數
留守居　壹人　目付　壹人
勘定方　壹人　書記役　壹人
水夫足輕之者　五人　小者　貳人

〆、拾壹人

大坂木津川口詰人數

家老	壹人	物頭	貳人
目付	壹人	士分	拾人
醫師	壹人	銀方	壹人
徒目付	壹人	祐筆	壹人
徒士	四人	賄方	壹人
小頭	貳人	足輕	拾五人
中間	貳拾人	又者	貳拾人

賄方手附之者　五人

〆、八拾五人

已上、

稻葉右京亮内

正月五日　　村瀬角衞

別紙三箇所詰之内、大坂木津川口御警衞所詰之儀ハ、當表ニテ取調難行屆、大概如是御座候、此段申上候。

稻葉右京亮内

正月五日　　村瀬角衞

稻葉久通家記

○

覺、
一侍分　二拾人　一足輕　拾二人
右之通、在京人數ニ御座候、以上。
正月五日
堀左衞門尉内
關口參之助
堀親廣家記

○

覺、
伊勢守在京之人數
凡、三百人
内、精兵貳百人内外、
右人數ヲ以、此節被　仰付候御役儀、專相勤罷在候、別段殘兵ハ無御座候、御尋ニ付、此段御請申上候、以上。
正月
小出伊勢守家來
大崎奧左衞門
小出英尙家記

○

久留島伊豫守人數覺、
重役　一人　用人　一人　足輕頭　一人
馬廻リ　十二人　小姓　十人　徒士　十三人

小頭　一人　足輕　二十人　手廻リ小者　十九人　久留島通靖家記

○

一士分　七十九人

　內御守衛　六十七人　宿陣詰　十二人

一士分以下　五十一人

　內御守衛　四十一人　宿陣詰　十人

一總中間小者　九十人

　但、御守衛場所、竝宿陣之內ニ有之候事、

右之通御坐候、此段御屆申上候、以上。

成瀨隼人正內

吉田莊左衞門

正月五日

參與御役所　犬山藩記

○多度津藩上申

一戰士九拾人

　內　重役一人　大岡藤左衞門　戰士拾人　外ニ仲間共少々

右、四條殿供奉ニ差出申候、

卽今殘人數七十九人、

此外ニ內證方、竝ニ仲間共五拾人餘、

右之通御坐候間、此段御屆申上候、以上。　京極壽吉家記

○

掃部頭家來在京之人數、御警衛箇所箇所へ差出置候人數共、何程有之候哉、御尋ニ付、左ニ申上候、

一石藥師御門御警衛人數　上下四百人

一四ツ塚關門御警衛人數　上下百人

一爲　御親兵盡力可致ニ付、中山□へ差出候人數、　御所へ相詰居候、　上下二百人

右之通ニ御坐候、此段御答旁申上候、以上。

正月六日

井伊掃部頭内

高木鉉太郎

井伊直憲家記

○

少將家來人數何程、御警衛箇所箇所相廻有之候人數何程、卽今殘在候人數何程有之哉、早々書取ヲ以テ可申上旨、　御沙汰御坐候ニ付、取調仕候處、別紙之通御坐候間、此段申上候、以上。

正月六日

宇和島少將内

加幡又市

覺、

一士分總人數百二十四人

内　公卿御門御警衛人數八十二人、半隊ッ、替合、殘り人數四十二人、

一足輕總人數九十五人

内　公卿御門御警衛人數九十人、半隊ッ、替合、殘り人數五人、

右之通御坐候、以上。（伊達宗徳家記）

○

相模守當所ヘ召連候人數、左之通ニ御坐候、此段申上候。

松平相模守留守居
田中恩三

正月六日

侍　以上　百五人　内十七人、伏見表ヘ出張、

徒士以下　二百十人　内二十二人、伏見表ヘ出張。（池田徳定家記）

○七日、池田徳澄上申

私此度、當所ヘ召連候人數、左之通ニ御坐候、此段御屆申上候。

手當人數士分　二隊合　三十四人

右御番所受

内一隊　十八人　當時伏見ヘ出張

同　銃卒　十五人　當時伏見ヘ出張

外ニ、軍事役懸士分　九人

右御番所受

内　五人　當時伏見出張

供受士分　二十三人　徒士以下供受　十五人　手當供受士分　五人

同徒士供受　十人　諸役徒士以下　三十二人（池田徳澄家記）

○此外、諸藩原記ヲ失ス、又兵員ナキノ上申書ハ、繁ヲ避ケテ錄セス。

○九門守衛諸藩ニ命シテ、譏察ヲ嚴ニセシム。因幡藩、九門警守ノ事ヲ上申ス。

賊徒潛伏投火ノ惡謀有之由、旣ニ昨夜、兩所ニテ召捕候趣ニモ相聞候ニ付、警衛諸藩、九門内外其場所申合、嚴重ニ取締候樣可致候事、

正　月　五　日

掟、

一九門内、妄ニ雜人徘徊致候ニ付、各行先問糺シ、其上通行可許候事、

一從申半刻至翌卯半刻、九門〆切ノ事、　但、同刻ヨリ同刻迄、執銃之兵士、並參　内供廻ノ外、九門内往來禁止之事、

一當用向之節ハ、印鑑ヲ以テ通行之事、　但、印鑑所持ノ者ヨリ、人數何程ト相屆候ハヽ、相改可通事、

一九門内篝火ノ事、　但、九門守衛ノ藩ヨリ可設候事。

正　月　五　日　　　　輦下日載　池田輝知家記

○

昨今、近畿變動ニ付、九口御門嚴戒被　仰出、出張ノ人數、陣中同樣相心得罷在候處、市人男女平生同樣通行仕候テ、間ニハ軍裝見物旁、態ト往來仕候向モ有之哉、右等ニ付テハ、此節如何樣之間諜等徘徊仕候程モ難計候間、凡テ通行人取締方ノ儀、嚴重ニ被　仰出候樣仕度奉存候、此段奉伺候、以上。

正　月　五　日　　　　因幡中將内　山　田　宗　平

池田輝知家記

○池田慶德ニ命シ、山陰道鎭撫使ノ令ヲ奉シテ、本道不庭ノ諸藩ヲ討セシメ、安藝、長門二藩

兵ノ尾道（備後）ニアルモノヲ京師ニ召ス。

○

因州

山陰道爲鎭撫、西園寺三位中將出張ニ付、萬一不服王化者於有之ハ、總督之命ヲ奉シ、早々可奏掃攘之功　御沙汰候事。

正月五日　（池田輝知家記）

○

藝州　各通

長州

備後尾道出張之兵士、御用有之候間、急々從便路登京可致　御沙汰候事。

但、道中相遮候者於有之ハ、可打拂候得共、精々穩ニ可通行候事。

正月五日　（淺野長勳家記　毛利元德家記）

○肥後藩兵ニ命シテ、大津ニ赴カシメ、池田政禮ノ猿ケ辻守衞ヲ罷メ、亦兵ヲ大津ニ出サシム、又堀親義ニ伏見取締ヲ命ス、親義、辭スルニ般舟院ノ守衞ヲ以テス、之ヲ許ス。

○

肥後

橋本少將、柳原侍從、大津口爲鎭撫總督出張ニ付、人數急々相成候丈繰合セ、可指出候樣　御沙汰候事。　（細川護久家記）

○

池田丹波守

昨日、猿ヶ辻御固被　仰付候處被　免、大津表出張被　仰付候間、本藩申合、粉骨防戰可相勵旨　御沙汰候事。　（池田政禮家記）

堀左衛門尉

伏見御取締被　仰付候事。（堀親廣家記）

○堀親廣へ達書

願之趣承届候、般舟院御警衛、是迄之通被　仰付候事。（堀親廣家記）

○親廣家記ニ云、口上ヲ以テ、少人數ニ付、伏見御取締ノ方、御斷申出ツ。

○秋月種殷ニ命シ、其子種樹ヲシテ速ニ上京セシメ、又、大原重徳ノ衛兵ヲ出サシム。（秋月種殷家記）

秋月長門守

昨年被召候處、所勞ニ付、名代トシテ秋月右京亮上京可致旨ニ候得共、上京無之候間、早々上京可有之事。

正月（秋月種殷家記）

○酒井忠氏ヲシテ、其京邸ヲ上ラシム。

若州

其藩屋敷御用ニ候間、早々明渡可申事。（酒井忠祿家記）

○附錄輦下日載ニ云、若州屋敷、此御方御引請ニ相成、右田一手請取罷越候處、一橋ノ器械彈薬等如山有之候由、若州之分ハ之ヲ與へ候事。

○興正寺攝信ニ命シ、門徒ヲ率ヰテ、大津ニ抵リ、東海道鎭撫總督ニ從ハシム。

興正寺

爲東海道鎭撫總督橋本少將、同爲副柳原侍從等出張有之候得共、何分樞要之地ニ付、其方兼テ被　聞食候次第モ有之、深御頼　思食候條、門末引率、早々大津表へ押出、總督ヲ補翼致シ、防禦筋盡力可有之　御沙汰候事。

○六日本願寺へ達書興正寺記

右之通、興正寺へ被　仰付候間、右寺門末之輩隨從可從下知、早々可有申付樣　御沙汰之事。本願寺記

○薩、長二藩兵ノ戰功ヲ賞ス。

一昨夜以來及苦戰、賊徒速ニ退散之趣、御滿足被　思食候、尙又精々盡力可有之事。輦下日載

○

一昨夜已來及苦戰、打死手負等注進、忠勇　叡感之御事ニ候、右之輩、猶追テ　御沙汰之次第モ有之候間、厚取扱可有之候事。輦下日載

○輦下日載ニ云、五日夜、德大寺中納言御口達ヲ以テ被仰渡候　朝命、尙又御願仕リ、左ノ通御書取本文ヲ指ス、ニテ御渡相成候ト、薩摩藩出軍戰狀ニ云、朝廷ヘモ御屆相成候處、初戰ヨリ一統相働キ　叡感ニ被思召、尙此上致盡力候樣、御褒詔奉承知候事ト、但シ之ヲ三日ノ條ニ收ム、案スルニ、此事、原口達ニシテ、文書アルニ非レハ、或ハ別日ニ出ルカ、將タ出軍戰狀ヲ編セシモノ、後事ヲ追記スルヤ、錄シテ後考ヲ俟ツ。

○東本願寺光勝、德川氏ノ猶子タリ、而シテ其家臣、慶喜ニ投スルモノアリ、其貳アルヲ疑フヤ、是日、晃親王ヲシテ往テ之ヲ糺サシム、光勝及ヒ其子光瑩、誓書ヲ上ル。

朝廷遵奉之儀光勝、光瑩、ヲ始メ、門末一統、更ニ異心無之候、德川家由緒之儀ハ輕ク、　天恩之儀ハ重ク候邊、決テ心得違申間敷候、然ル上ハ、如何體之御用ヲモ拜承仕度、此段宜御執奏奉願上候、仍テ誓狀如件。

慶應四年正月五日　　光勝

東本願寺記

○東本願寺記ニ又云、元家來松井外記儀、癸亥、將軍上洛之節、德川慶喜、本寺旅宿致候因ヲ以テ、舊幕臣ニ交ヲ結ヒ、其後新撰組ト志ヲ合シ、竊ニ佐幕之策ヲ議シ候由、遂ニ大政返上之時ニ至リ、新撰組ヨリ相逼リ、拘誘致候ニ付、丁卯十二月十一日、本寺ヘ退身之儀申立置、大坂ヘ脫走、慶喜ニ屬シ、翌年正月、慶喜東走ノ節、隨從致候、右脫走ハ、素ヨリ一己之存意ニテ、本寺關係無之候ヘトモ、之カ爲ニ御嫌疑被爲有候趣ニ付、戊辰正月五日、山階宮御入相成、誓書可差上旨御示諭有之、依テ光勝、光瑩ヨリ右之誓書差上候。

○議定伊達宗城、軍事參謀ヲ辭ス、之ヲ大將軍ニ請ハシム。

昨朝、軍事總裁宮御發向之儀ニ付、御垂問御坐候故、不顧管見、愚意之趣反復陳述仕候處、廟議御決著、終ニ御進發相成候處、重大之御事件、著眼齟齬仕候ハ、畢竟不肖庸昧、事理洞察之見無御坐故ト奉恐入候、依テ此儘奉　命罷在候テハ、爾後奉汚朝威、失事機候儀出來可仕、染々恐悚當惑、片時モ難相安奉存候故、何分參謀御役御免被　仰付度奉懇願候、尤此頃不容易形勢、且一昨夜、　御沙汰之趣モ被爲在候得ハ、　禁闕御警衛之儀、少人數ニ候得共、粉骨碎身相勤候心得ニ御坐候、以上。

正月五日　　宇和島少將

伊達宗德家記

○宗德家記ニ云、參與役所ヘ差出ノ處、仁和寺宮ヘ差出スヘキ旨ニ付、淀御本陣ヘ差出ス。

○小出英尙、其邑園部ニ城カント請フ。

小出伊勢守先祖伊勢守儀ハ、元但馬國出石城主ニ御坐候處、元和年中、關東之命ニ依リ、丹波國園部表開基仕、出石城ヨリ引移リ、　帝都爲御守衛、一旦新城築建ニ取掛リ、塀狹間櫓臺二重堀迄モ出來仕候得共、不德ニテ終ニ成功不仕、城地繩張、

其儘二百有餘年之星霜ヲ經、累代之憂苦遺念ニ御坐候、然ル處、近來之御時勢、乍小藩、萬一非常出兵之御用等被仰付候歟、或ハ領内惡黨共入込候節、園部表ハ、別テ　帝都御程近衛要之御場所ニ付、早速人數出張ハ勿論、時宜ニ寄リ必死防戰、取鎭方肝要相心得候得共、何分城郭巣穴丈夫ニ無之テハ、於場所士氣相弛、進退不行屆御坐候テハ奉恐入候ニ付、近來海防之爲メ松前、五島御兩家築城被免候ニ付、於伊勢守モ爲御守衛、構内ヘ多門櫓其餘、今一段之成功御許容被成下候樣、抑五箇年以前ヨリ、數々御守護職御所司代迄、家來共ヨリ奉願、猶又、御老中方ヘモ伊勢守ヨリ直願仕候處、去十月ニ至リ、願意年内御免可相成御内意御坐候得共、斯ル御時節ニ押移リ、其儘御沙汰止ニ相成候、當時　御大政御一新之折柄、奉恐入候得共、不得已、猶又奉願候次第、厚被成下御賢察、　御聖斷之上、前件願之通、奉蒙御許容候ハ、彌以御警衛向、主從一致ニ盡力御奉公勵勤仕度奉存候、此段宜御執成之程奉願候、已上。

正月　　　　小出孫兵衛

小出英尙家記

○鳥羽、伏見ノ官軍、大ニ賊ヲ敗リ、進テ淀ヲ攻ム、賊兵、大橋ヲ火シ、退テ八幡ニ據ル。○輦下日載

○瀧川具知ノ討薩表ヲ齎シテ鳥羽ニ至ルヤ、入ルヲ果サス、具知、退テ淀城ニ留リ、戶田忠至ニ因テ之ヲ上ル、是日、德川慶喜、書ヲ德川慶勝、松平慶永等ニ致シ、其禁闕ヲ守衛センコトヲ請フ、又近日ノ事情ヲ諸藩ニ陳辨ス。

○春嶽私記ニ云、三日午後、雪江發京、橋本驛ニテ日暮レ、驛南之臺場ナル關門ヲ過キ、數丁ニシテ從者砲聲之聞ユルヲ告ルニヨツテ、一驚囘顧スルニ、男山ヲ隔テ、火光ノ天ヲ衝クヲ見ル、於是、釁已伏水ニ啓タルヲ知ル、下坂無益ニ屬ストイヘトモ、宗家之御安否、且華城之形勢ヲモ可相窺ト、强忍氣ヲ勵シテ前進シ、戌刻頃、牧方驛ニ至ル、漸ニ坂兵之乘リ棄タル

一船ヲ買得テ、亥刻過、纜ヲ解キタリ、船中ヨリ回視スルニ、火光益熾ンニシテ、大坂ニ至ル迄炎々タリ、四日曉、大坂中島
邸著、知邸代岡本晋太郎申達候ハ、過刻、東町奉行小笠原伊勢守殿ヨリ御呼出ニテ罷出候處、兩町奉行出座、諸藩士列席ニ
テ左之御書付、討薩表明日御奏聞相成旨ニテ拜見被仰付、但於營中、大目付衆ヨリ御達可相成處、夜中御城内出入モ混雜ニ付、
右之通、於御役宅御達ニ相成候間、左樣可相心得旨、伊勢守殿御演達有之由、右御書面之御趣意ニテ、天下之公道ニオイテ、
御名義更ニ不相立事ト相成、竊ニ浩歎之外無之、加之、此地之近況ヲ聞クニ、專ラ伐薩之御催ニテ、朔日已來、御人數モ逐ニ
御繰出ニ相成、市中居民家財取片付、老幼所緣之田舍へ指遣シ、丁壯計居留之由、如斯形勢ニテ、人心之洶々タル事譬ルニ
物ナシ、卯刻、雪江登城、永井殿へ逢對申陳候ハ、昨日下坂之途中、伏見之火光ヲ望見候テハ、爭端已ニ開ラケ、百端既往、總
テ無益ニ屬シ候得共、下坂之旨趣モ一應ハ申上、且卽今、此地之御樣子モ拜承仕度ト及登城候段演達シ、朔日已來、京都之
事情申述候處、永井殿モ大息、顰眉而已ニテ、遺憾千萬ナリトノ挨拶ニテ被申聞候ハ、此間老侯御下坂之節、御請之御廉
モ有之、京師ヨリ之御左右次第、御上京之御積故、其節御人數多分ニ召連候モ如何ニ付、御先供トシテ一大隊、大久保主
膳正引纏出立被命、且瀧川播磨守ヲ以、別紙　御奏聞書被差出、右ハ二日朝條城へ著、御奏聞書御本紙ハ戸田大和守へ相
渡、御奏上ニ相成寫一通ツヽ、尾、越へ御渡之分ハ、則、雪江呼出、播州ヨリ相渡積ニ有之、然ル處、同日、細川右京大夫上著、
二大隊之隨兵引連レ入洛ニ付、播州ハ夫ニ引續キ罷越處、四ツ塚關門ニテ、細川勢ハ異儀ナク通シ候得共、播州ハ德川氏之
家來故、通シ難キトノ事ニテ抑止ニ付、彼是及懸合候得共、約ル處、爭論ニ相成ヨリ外ハ無之勢ニ付、無是非引取、大久保へ
申談シ、同人之兵隊ニ引副ヒ通行之積之處、大久保モ指留ニ付、一二問答之内、早ヤ彼方ヨリ打懸候ニ付、此方ヨリモ打懸、
忽砲戰相始リ候次第ニテ、誠ニ意外千萬之事共ニ相成、播磨モ今以、淀表ニ滯留罷在候間、雪江彼地へ罷越、　御奏聞書、竝
御直書モ有之候間、播磨ヨリ受取之、直ニ上京イタシ、　御奏聞書ハ戸田和州へ指出シ吳候儀ハ相成間敷哉トノ賴談ニ付、
御申聞之趣承知ハ致候得共、雪江輩、　御奏聞書持參ト申モ不體裁、且道路ノ障碍モ難計、萬一德川氏ノ密使抔ト被怪候テ
ハ、此節柄、主人迄モ不都合ニ相成候テハ迷惑仕候間、此儀ハ御免奉願度候、愚按ヲ申試候得ハ、御用狀成共御仕立、肥後家

老溝口孤雲罷出居候得ハ、此方ヘ御托シニ成候テハ如何有之ヘキ哉、外藩之方、嫌疑モ有之間敷ト申談候處、如何樣其方モ可然カト承引ナリ、雪江又申候ハ、扨箇樣ニ事破レニ相成候テ之御策略ハ、如何候哉ト詰リ候處、誠ニ不意ニ出タル事故、更ニ術計無之、上樣モ殊之外御當惑、隨テ何レモ無策、如何相成可然哉トノ模樣ニ付、乍恐、夫ニテハ御濟被成間敷、萬一御人數等、勢ニ乘シ　輦下ヲ騷カシ候樣之事ニハ相成申間敷歟ト申候處、其處ハ念ヲ入レ、毎々嚴敷申越候事故、決テ其氣遣ヒハ有之間敷候得共、ケ樣相成候ニ付テモ、猶又　御奏聞之筋、行屆キ候筋有之間敷哉ト、頻ニ垂問有之ニ付、今日ハ申合セ、外藩四家之家老共致登城筈ニ候得ハ、猶又、申合見可申ト申達退坐セリ、少頃、溝口孤雲、藤堂歸雲、十時攝津登城、扣所ニオイテ對談之處、孰レモ昨夜中ニ著坂、少々ツヽ遲速ハ有之候得共、途中ニテ砲聲火光ヲ見聞シ、不可救之勢ト相成候ヲ知リ、愕然失措、而已ナラス於坂地、昨夜之御布告ヲ拜見シ、再度吃驚、駟馬難追次第ト相成、挽回之道絶果タルハ、四人同歎之至ニテ、猶此上ニモ御名義之可相立條理可有之哉ト、蹙額議論致試候得共、更ニ開明之良策無之、當惑罷在内、三老之面々、追々閣老初詰合、有司對談ハ有之候得共、滿城拂地之無策ニテ、唯　御奏聞之貫通、或ハ前途之意見垂問之外、一之定論モ無之ニ付、三老モ愈以慨歎ヲ極メ、卽今ト相成候テハ、總テ一點之見込モ無之趣申達、申刻頃ヨリ逐々ニ退出セリ、孤雲ヘハ　御奏聞書傳達之義ヲ頼談有之候得共、御家門之方可然趣申立、不及御請由、如形兵端已ニ開ケシ上ハ、四人歸路之通塞難計ニ付、孤雲ハ今朝伏見邊之形勢爲取調、家來指遣シタル故、歸城之次第ニヨリ、歸京之見込ヲ立候積之由、歸雲モ同樣、前路見分之者指出シ候由ニ候得共、雪江ハ十里外之消息、坐待モ焦思之至ニ付、イツレノ道ニモ支度次第發船、淀邊迄遡リ、其上ニテ進止可相決ト、其段永井殿ヘ及申談處、左候ハヽ、是非共、　御奏聞狀、竝御直書共持參致呉候樣トノ事ニテ、酒井雅樂頭殿、板倉伊賀守殿ヨリ戸田大和守殿迄ヘノ御用狀ニ仕立、被相渡ニ付受取之、退出セシハ申半刻頃ナリ、此節、淀川船留ニテ通船無之ニ付、御目付榎本殿指圖ニテ、四藩之分ハ舟會所ヨリ印鑑ヲ出サレタリ、雪江ハ昨夜留置タル船ニテ、酉半刻頃發船セシカト、乘棄タル大船ナル故、船脚疾カラス、五日曉、漸クニシテ牧方ニ至リ、暮時過著邸、直ニ御前ニ出、坂地之事情申上、御直書左ノ如シ、

奏聞之次第ハ有之候得トモ、輦轂之下ニオイテ干戈ヲ動カサヽル樣、兼テ兵隊之者トモヘ申諭置候得共、彼ヨリ已ニ砲發之上ハ、此上之形勢心配致候間、呉々モ鳳輦守護被致候儀、厚ク御賴申候、已上。

慶喜

尾州　藝州
越前　宇和島殿
土州　細川

正月四日八字認

御老中ヨリ戸田殿ヘ之御封物ハ、鹿之助ヲ以テ戸田殿ヘ指出處、御同人申候ハ、御奏聞狀ハ瀧川播州、大垣之藩士ニ托シ、今朝相達セシ故、封之儘直ニ朝廷ヘ被指上由、仍之、雪江持參セシハ重複ニ相成ニ付、戸田殿手元ニ被預置段、被申聞タリ。

○大目付平山敬忠演達書

去卯十二月十二日、旗下之者共鎭撫之爲メ、內府公下坂被致居候處、舊臘中ヨリ尾、越、土三老侯、屢御上京之儀御申越、尾、越兩公ニハ兼テ御內沙汰有之候辭官、竝御政務御用途之儀モ、夫々周旋ヲ以テ運ヒモ付候間、此上ハ京地之御模樣、越公ヨリ被申越次第、御上京御座候積ニテ、尤當節柄之儀、御戒心モ有之候ニ付、御上京之節ハ兵隊多分御召連不相成候テハ、臣子之者安心モ不相成候間、其段可然朝廷ヘ申立可被置旨、越侯ヘ被申談、承知ニテ歸京ニ相成申候、乍去、御上京之節、一時ニ大兵御召連相成候テハ、當節柄、彼是物議モ可生、漸々ニ先供兵隊被繰出候方、見聞モ穩ニ可有之ト、去々日ヨリ先供之兵隊一隊ハ二條城中、一隊ハ伏見驛、一隊ハ淀ヘ繰入候積、追々出發致シ、大目附瀧川播磨守ヘ奏聞狀爲持被差出候處、四ツ塚關門ニ長人出張罷在候ニ付、內府公近々上京被致候先供之旨、及斷致承知候ニ付、無異議通行可致處、同所詰合之薩藩罷出、上京之勅命無之內ハ、先供トテモ入京不相成段、嚴重差留候、然處、此方ヘハ何之御沙汰モ無之候間、夫是及掛合候

内、薩兵左右ヨリ俄ニ相起リ、大小砲亂發、伏見之方モ先供兵隊著船致シ候處、是亦從彼方發砲ニ及ヒ、兩所共不意ヲ被擊戰爭ト相成、只今以テ日々爭鬪罷在候、尤輦轂之下ニテ干戈相動カシ候テハ、兼テ之内府公御趣意ニモ致相違候故、今曉モ戰爭先ヘ書取ヲ以テ、相戒被申候間、兵士之面々モ一時之機ニ乘シ、右樣之儀ハ決テ致間敷ト被存候得共、兼テ鎭撫方心配被致候壯年之者共、萬一心得違有之候テハ、不相成候ト、甚心配被罷在候、此度之一條、右之通之始末柄ニ候、能々御了察有之度候事。黑田長知家記

○舊幕府老中、令シテ、諸船舶ノ品川港ニ入ル者ヲ檢シ、其搭客ヲ譏察ス。

大目付へ

此度、御府内御取締筋之儀被　仰出候ニ付テハ、諸家手船、竝商人共所持ノ船共、品川沖ヘ入津之節ハ、蒸氣帆前ノ無別、其筋ノ者差遣、乘組人ハ勿論、來港ノ趣意等爲承候筈ニ付、兼テ其心得可罷在候、

右之趣、萬石以上ノ面々ヘ不洩樣可被相觸候。

正月　鳥居忠文家記

六日、木梨恒準精一郎長門藩士ヲ以テ、東海道鎭撫總督參謀ト爲ス。

木梨精一郎

東海道鎭撫總督參謀被　仰付候事。

輦下日載　木梨恒準履歷書

○公卿ノ涅齒點眉、古制ニ非ルヲ以テ、必シモ依遵セサルヲ令ス。

男子鐵漿、上古無之儀ニ候、以後可任所存被　仰下候事。

但、若年作眉之事同上。有栖川宮家記　中御門經之家記

○申牌後ヨリ翌卯牌後ニ至ルマテ、九門ヲ鎖シ、出入印票ヲ以テセシメ、又越前藩兵ヲシテ、諸家（下立賣、寺町二門ノ間、）ノ賓門ヲ守ラシム。

九門、七ッ半時ヨリ翌卯半刻迄、鎖切ニ相成候間、以印鑑往來之事、
但、銘々印鑑ニテ通行爲引合、御門ヘ可差出事。（島津忠義家記　加藤明實家記）

○春嶽私記ニ云、九門外公卿方穴門有之分、警衛被　仰付之處、少人數ニテ三十四家不殘ハ難持ニ付、下立賣御門ヨリ寺町御門迄ノ間、十四家分御持相成ル。

○櫻井忠興、永井直諒ニ命シテ、城守ヲ嚴ニシ、織田信親ヲシテ、白川越（阪本口、）ヲ警守セシム、又長、備二藩兵ヲ召スヲ以テ、忠興ニ命シテ、其封內經過、及ヒ糧食運搬等ノ便ヲ與ヘシム。

各通　櫻井遠江守
永井日向守

當今、不容易形勢ニ付テハ、西ノ宮ヨリ山崎關門迄之內、別テ樞要之地ニ付、宜本城堅固ニ守備、　王事勤勞候樣　御沙汰之事。（櫻井忠興家記　永井直諒家記）

○
織田出雲守

白川越坂本口ハ樞要之場所ニ付、堅固ニ警衛可有之旨　御沙汰之事。（織田信親家記）

○櫻井忠興家記ニ云、今度長、備被爲　召候間、追々可罷登、就テハ西宮邊通行、或ハ滯留可致儀モ可有之、且粮米運送等之儀無差支樣可被致、尚又當節不容易形勢ニ付、本城堅可相守樣口達アリ。

○篠山藩兵ノ伏見取締ヲ罷メ、多度津藩兵ヲ以テ、之ニ代フ。

申出候趣尤ニ付、三藩共伏見出張候儀ハ被免候、京都市中嚴重ニ手宛候樣被　仰付之。

但、追テ交代之者被差出候迄ハ、是迄之通相心得候樣仰付之。青山忠誠家記

○忠誠家記ニ云、伏見戰地近邊救助取締、夫々取計、市民安定ニ付、京都ト兩地ヘ人數分配、自然行屆兼候段、言上、依テ此口達アリ、十二日、取締ハ田宮如雲ヘ、巡邏ハ京極下總守ヘ引送ル、京極壽吉家記ニ云、十二日、伏見ヘ士卒差出候節、達書ハ之ヲ失スト。

○東本願寺光勝ニ命シテ、大津ニ至リ、官軍ノ糧食ヲ措辦シ、且ツ東國ノ門徒ヲ勸勵セシム、又興福寺ノ僧侶ニ命シ、伊賀一路東兵ノ狀ヲ諜セシム

東本願寺

東兵上京之風聞有之ニ付、大津表　官軍出張被　仰付候、方今之形勢、何時及干戈候モ難量、萬一兵士糧米闕乏之儀於有之ハ、不安次第ニ付、其節ハ其方以盡力差支無之樣、所置被　賴思召候間、速ニ出向可致指揮被　仰下候事。

正月六日　東山道總督府叢紙 東本願寺記

○東本願寺記ニ云、六日、光瑩參內之節、御書下本條ヲ指ス、御達、尤東國筋ヘ下向、門末教諭可致樣トノ御口達モ有之、依之、卽刻江州路ヲ始メ、美濃尾張ヘ下向、教諭盡力可仕旨、口上ヲ以テ申上置候。

○附錄九日達書

尾張大納言

當御時節柄ニ付、門末爲教諭、東本願寺東國下向之儀　御沙汰有之候間、爲心得申達置候事。

正月　東本願寺記

○同日沿道諸藩へ布達書
今般　御用ニ付、東本願寺近江路、美濃、尾張出向候間、途中差障無之様可致申達候事。
参與役所
東本願寺記

○
興福寺
學頭
不日東兵、伊賀越襲來之風聞候ニ付、遠ク斥候ヲ出シ、逐一言上可有之　御沙汰候事。
正月
但、專務御用筋ニ付、僧侶之輩、直チニ諸大夫之間、假館へ可罷出候事。
興福寺記

○加茂兩社司ニ命シ、日ニ管地ノ壯丁三十五人、ヲ出シテ、薩摩藩兵ノ使役ニ充シム。
薩州
思召有之、運送爲一助、下鴨百姓連日十人ツヽ、上賀茂百姓二十五人ツヽ、爲人夫罷出候樣、一社中へ被　仰付候間、此段申達候事。
正月六日
但シ、不用之節ハ、尤勝手ニ指揮可致、尙又不足候ハヽ、可申出候事。
島津忠義家記
○加茂社司ノ達書ハ、原記ヲ失ス。

○初メ岡崎藩兵、伏見豐後橋、ヲ戍ス、戰後、其之ク所ヲ知ラス、是日、藩臣ノ京ニ在ル者、別ニ兵

ヲ藩ヨリ徵サント請ヒ、久松定法ノ老臣、兵備ヲ缺キ、王事ニ從フコト能ハサルヲ以テ、之ヲ定法ニ歸報セント請フ、竝ニ命シテ、兵ヲ京師ニ出サシム。

兼テ伏見御警衛被　仰付置候處、當三日夕、於同所戰爭相始リ、御番所燒失相成候趣承リ候ニ付、不取敢、當地詰家來之者遣シ、御警衛場所見分爲仕候處、右燒失跡ニ、小者兩三人罷在候而已ニテ、人數何レヘ罷越候哉、又ハ戰死仕候哉、何分難相分、御警衛場所明置候儀、甚以奉恐入心配罷在候、依之、急速在所表ヘ申遣シ、代リノ人數呼寄申度、如何可仕哉、宜敷御差圖被下度、此段奉伺候、以上。

正月六日

本多美濃守家來

安井藤九郎

本多忠直家記

○批紙

官軍追々進擊ニ相成候間、豐後橋不及御警衛、國許ヘ早々申遣シ、相應之人數可差登候事。本多忠直家記

○

私儀、内膳正爲名代在京仕居候處、昨今、伏見邊不容易形勢押移リ、實以奉恐入候、然處、人數召連罷在不申候ニ付、御警衛向等モ相整苦敷、此儘空敷滯京仕候テハ、益奉恐入候間、一先引取、内膳正ヘ此趣申聞度奉存候、依之、速ニ出立仕度、此段奉伺候間、乍恐、急速御差圖之程奉懇願候、以上。

正月四日

松平内膳正家老

服部外記

久松定弘家記

○指令

右、同人助役之者、一旦歸國イタシ、相應之人數召連、早々上京可致被　仰出候事。

辰正月六日

松平内膳正家老
服部外記

久松定弘家記

○九鬼隆備、病アルヲ以テ、先ツ兵ヲ京師ニ出シ、福岡藩臣ノ京ニ在ル者、見兵ヲ以テ守備ニ服セント請フ。

私儀

依　御沙汰、速ニ上京可仕之處、何分病氣不相勝出立仕兼、段々及延引奉恐入候ニ付、人數計上京爲仕候、此段奉申上候、以上。

正月六日

九鬼大隅守

參與御役所

九鬼寧隆家記

○

頃日不容易形勢ニ付テハ、屹度多人數ヲモ差出シ、御所御警衞等仕度心底ハ萬々御座候得共、即今當地ヘ詰合候人數、誠ニ聊ニテ、輕輩ニ至リ纔百人餘リニ御座候得ハ、何等ノ御用ニモ相立不申候得共、此節柄、相應之御場所ヘ、右有合之人數ヲ以テ御警衞仕度奉存候條、右之趣御含被爲置、宜御指圖被成下度、此段奉願候、以上。

正月

松平美濃守内
井上六之丞

○官軍、進テ八幡ヲ攻ム、津藩ノ山崎衛兵、官軍ニ應シ、橋本（宮津藩兵之ヲ守ル、）ヲ横撃ス、賊兵大ニ敗ル、官軍、尾撃シテ楠葉ニ至ル、（華下日載、藤堂高潔家記、）是日、征討府、其下參謀高崎正風ヲ罷メ、（東伏見宮家記、）大山綱良（格之助○薩摩藩士、）ヲ以テ、之ニ代フ。（大山綱良履歴書）

○是夜、綾小路俊實、（前侍從○有長之養子、）水口藩士等十數人ヲ率ヰテ、京師ヲ出テ、書ヲ庭田重胤（大納言、）ニ遺シテ、報効ノ意ヲ陳シ、代リテ上奏センコトヲ請フ、滋野井公壽モ亦出奔ス、會相樂武振等、江戸ヨリ來リ、都下ノ薩邸ニアリ、俊實等ノ擧ヲ聞キ、追テ之ニ從フ。

中興之御機會、臣子安眠之時ニ非ス、於俊實モ勤王之微忠聊相盡申度、今夕脱走仕候、固ヨリ籠居之身分ヲ不憚段、太以恐懼之至ニ候ヘ共、非常之御時節ニ差當リ、粉骨碎身不仕候テハ、從前無上之天恩ニ奉報候事難ク、實ニ不得已之微忠、深御憐察成給度、此段宜ク御執奏奉庶幾候也。

慶應四戊辰正月七日　俊實

庭田大納言殿　（大原重實履歴書）

○加藤明實家記ニ云、藩士油川錬三郎、速水湊以下十六人、勤王非常ノ功績相立度ニ付、綾小路前侍從殿ニ從ヒ、江濃ニ出張ス。

○公壽從者植村直一筆記ニ云、正月六日、御邸御出門、其夜、西江州坂本民家ニ泊ス。

○赤報記ニ云、六日酉下刻、二本松藩邸ニ至ル、此夜綾小路、滋野井兩朝臣、東征先鋒ノ爲メ京地御脱走、依之、我兵大ニ雀躍、藩邸ヲ發ス。

○徳川慶喜、書ヲ各國公使ニ遺リ、其兵利アラス、敵軍來襲ノ勢アルヲ以テ、各其國旗ヲ保守センコトヲ陳ス、是日、舊幕府老中、大河内輝照右京亮○高崎藩主、食封八萬二千石、水野忠弘ヲシテ、品川港砲臺ノ守ヲ嚴ニセシム。

以書狀致啓上候、然ハ我國政體變革之儀ニ付、兼テ御面唔ニオヨヒ置候通、大君殿下、千辛萬苦、誠意ヲ以御盡力被遊候得共、松平修理大夫家來之暴行、愈熾ニ相成、就テハ此程、兩度迄モ奏聞ニオヨヒ候上、近々御上洛可被遊迚、不取敢御先供發途、去ル三日、鳥羽街道ヘ行掛候節、修理大夫家來共、無謂差止候而已ナラス、發砲ニオヨヒ候ヨリ、遂ニ戰爭相成、互ニ勝敗有之候處、昨今、僞勅ヲ以テ諸藩ヲ煽動シ、逆威大ニ張リ、官軍少シク不利ニ有之、賊徒追々侵來之趣ニモ相聞候ニ付、精々防禦追討之手配、益嚴重イタシ候得共、自然當表迄モ襲來致候哉モ難計候ニ付、此方ニ於テハ勿論、十分之力ヲ盡シ御保護可及候得共、貴君方ニテモ、貴國之御旗章御守護之方略有之度、右ハ今日之場合、別テ御懇親之衷情相表シ度、此上增々御懇親之段ハ、雙方之最祈念スル所ニ候條ハ、言語ヲ待サル所ニテ候、右ハ昨今之形勢可及御報告、旁此段申進候、右可得御意、如斯ニ御座候、以上。

正月六日　板倉伊賀守

酒井雅樂頭

英、佛、米、蘭、孛、伊、公使名當閣下　外務省記

○外務省記ニ云、舊幕府於大坂各國往復書翰留記中ニ、本書六日下ル、御上ニテ御手調ト書入アリ。

○稻葉正邦ヨリ達書

松平右京亮

内海御警衛、三之御臺場御預、伊達遠江守御免ニ付、代リ其方ヘ被　仰付候間、防禦之手筈兼テ嚴重可被申付候、尤内海御

警衛之面々可被申合候、芝金杉伊達遠江守陣屋地家作共、御臺場付爲陣屋地被下之。大河内輝聲家記

○稻葉正邦ヨリ水野忠弘ヘ達書

御臺場詰人數省略方、兼テ相達置候處、當時御府内其外不穩折柄、當分持場相應之人數爲相詰、大砲打試等致シ置、不慮之御備、屹度相立候樣可被致、尤品川沖ヘ兼テ軍艦御備置相成候間、非常之節ハ、右應援モ相心得候樣可被致候。水野忠弘家記

○是夜、德川慶喜、汽船ニ駕シテ、大坂城ヲ去ル、松平容保、松平定敬、板倉勝靜、酒井忠惇等、之ニ從フ、慶喜去ルニ臨テ、東歸ノ故ヲ布告シ、翌日、諸藩兵ヲ遣歸ス、老中格大河内正質、大坂城代牧野貞直、越中守○笠間藩主、食封八萬石、及ヒ大河内信古、牧野忠訓等、皆江戸ニ走ル、松平忠誠ハ紀伊ニ赴キ、久松定昭、酒井忠氏ハ藩ニ歸ル。

先般、尾張大納言、松平大藏大輔ヲ以テ可致上洛旨、　御内諭ヲ蒙リ奉リ候間、去ル三日、先供之者四塚關門迄罷越候處、松平修理大夫家來共、無謂ニ通行ヲ拒ミ、兼テ伏兵之手配致シ置、突然彼ヨリ及發砲、兵端ヲ開キ、粗暴之擧動ニ及ヒ候條、修理大夫家來共一己之所業ニ有之、剩矯　叡慮、　朝敵之名ヲ負セ、他藩之者ヲ煽動シ、人心疑惑ヲ抱キ、戰利アラス、此分ニテハ、夥多之人命ヲ損シ候ノミナラス、可奉寧　宸襟誠意モ不相貫、紛紜之際、曲直判然不相立候テハ、不本意之至、深ク心痛致シ候、就テハ深キ見込モ有之、兵隊引揚ケ、軍艦ニテ一先東歸致候、追々申聞候儀モ可有之候間、銘々同心戮力、爲國家可抽忠節候事。　華下日載

○

今般、當地御東下被遊候ニ付テハ、在來諸持所御警衛之面々、人數引揚、江戸表又ハ在所表等ヘ都合次第罷越不苦旨、豐前守殿被仰渡候間、其旨相心得、別紙之面々ヘ早々順達可有之候、此段申達候、以上。

正月七日　御目付
大目付
堀田正倫日録抄
柳澤保申家記

別紙、

筑前　紀州　濱田　大垣　小濱　阿州　郡山　鳥羽　高松　松山　牧野駿河守　彦根　朽木近江守
大洲　高取　古河　森駿河守　稻葉右京亮　岡部筑前守　小田原　明石　三田　吉田　忍　柳生但馬守
大槻文彦筆記

○春嶽私記ニ云、六日、於坂地佛國公使登城、御應接有之、相濟退城之後、伊賀守殿、公使旅館ヘ被罷越、夫ヨリ無程、内府公佛國火船ヘ被召、御東下被遊候由、按ニ、佛國火船ト爲ルハ、開陽艦ノ誤ナリ、同廿二日ノ條ニ云ク、十一日夜半、濱殿ヘ著、十二日五半時、會、桑板倉伊賀、酒井忠惇等ト共ニ入城。

○中村武雄手記ニ云、初メ敗軍ノ旨、大阪ヘ聞エケル時、前將軍、麾下諸藩ノ士ヲ會シ諭シ玉ヒケルハ、今日ノ事、固ヨリ朝廷ニ敵シ奉ルノ心ナキハ申スニ及ハス、惟フニ事ノ此ニ至リシモ、畢竟、君側ニ奸邪ノ臣アルヲ以テナリ、之ヲ除クニ非レハ、天下ノ事爲スヘカラス、右ハ前日、建白書ニ詳カニセシ事ナレハ、今更申スニ及ハス、然ルニ不幸ニシテ軍敗レ、危殆ノ勢ニ至リタレトモ、其誠心ハ自ラ天ノ照鑒アラン、此城、縱ヒ焦土トナルトモ、死ヲ以テ守ルヘシ、寡人、此所ニ死セシナラハ、關東忠義ノ士、必ス其志ヲ繼ク者アラン、然ル上ハ、毫末モ恨ムル所ナシ、汝等堅ク寡人ノ志ヲ體シ、益報國ノ道ヲ盡スヘシト宣ヒケレハ、並居ル諸士、盡ク感泣悲慟セサルハナク、各決心シテ、死ヲ此ニ致スヘシト覺悟シケリ、然ルニ、舌ノ根未タ乾カサルニ、人ニモ告ス、關東ヘ逃下リ玉ヒシハ如何ナル事ニヤ、天魔ノ所爲トモ云ヘキカ、今度ノ軍、先手ハ脆ク敗レタレトモ、大坂ハ天下ノ堅城ナリ、城中ニハ數萬ノ精兵アリ、兵粮ヨリ器械彈藥ニ至ル迄、盡ク備レリ、力ヲ盡シテ籠城セハ、京方如何程猛シトモ、遽ニ拔クコト叶フマシ、連延決セサル中ニハ、關東勢、東海、東山ノ諸道ヨリ進發シ、海軍ハ山陽、四國、九州ヲ擾ラハ、鳥羽、伏見ニ破ルト云トモ、之ヲ大阪ニ復スルコト難カラサルニ、前將軍ノ遽ニ逃去リ玉ヒシハ、武門衰茶シテ、王政復古ノ時至リシナラン。爰ニ榎本和泉守ハ、初メ攝海ニ於テ薩船ヲ打破リ、速ニ上陸シテ大坂城ニ入リ、大計ヲ論セントセシニ、前將軍已ニ江戸ニ走リ玉ヒ、重器秘書等ニ至ル迄、坐間ニ狼藉シタリケレハ、泉州、天ヲ仰テ嘆息シ、盡ク之ヲ收拾シテ港ニ至リシニ、其乘ル所ノ開陽艦ハ、又前將軍ノ爲ニ奪ヒ去ラレケレハ、泉州、益痛哭シ、急ニ他艦

長鯨艦ニ乘シテ關東ヘ歸リ、再擧ノ事ヲ謀リケル、彼ノ梅澤孫太郎カ二條城ニ在テ、戰起ルノ時、內ニ應スル能ハス、軍敗ルト聞テ、罪ヲ會、桑ニ歸シテ歸國セシトハ雲泥ノ違ヒト云ヘシ、大坂ノ城中ニテハ、前將軍ノ逃去リ玉ヒシ事ハ夢ニモ知ラス、夜明テ後、始テ其事ヲ知リ、上ヲ下ヘト反セトモ、今更及フヘクモアラス、詮方ナク所々ニ備ヘタル大砲抔モ、或ハ毀チ或ハ堀ニ投ケ込テ、其々ニ落行ク支度ヲナシニケリ、此時、我藩ノ高野一郎右衛門ハ、縱ヒ將軍落行キ玉フトモ、猶此城ニ閉籠リ、千騎カ一騎ニナルトテモ、籠城スヘシト足スリシテ論シケレトモ、崩レ立タル味方ノ習ヒ、人々落支度ノミニテ、籠城ノ事抔思ヒモ寄ス、遂ニ七日申ノ下刻、大坂城ヲ立出テ泉州路ヘト落チ往キ、其夜ハ堺ニ宿シタリ。

○苟生日記ニ云、七日早起、平野町高氏ヲ過キリ、家書ヲ其僕順之助ニ託ス、同氏家眷、絶テ舍ニ在ラス、僕一人而已、余、怪テ子細ヲ問フ、僕云、既ニ紀州ニ赴クト、予、大ニ驚キ歸リ、再ヒ奉行所ヘ入レハ門開キ、中ニハ寂寞人ナシ、同心一人、所以ヲ尋ヌ、他モ亦何等ノ故ナルヤ、知ラスト云フ、愈驚ク耳、既ニシテ田阪直次郎、松井騎太郎外一人ニ逢フ、直次郎子細ヲ解セス、是モ亦驚クヨリ外ナク、騎太郎言ルニハ、今朝奉行ヨリ一同ヘ暇出タリト、聞ク者只呆ル、計リ、更ニ言語ナク相分レ、予獨、總年寄今井與惣右衛門ヲ訪フ、與惣モ又奉行組頭ノ處置ヲ呆レ、且笑ヒ且詈ルノ外ナシ、辭シテ屯舍ニ歸レハ、谷土佐守云フ、大君、今曉、汽船ニテ歸府被爲成タリ、依之一同、是ヨリ一ト先、紀州ヘ退ヘキ旨達シナリト、余曰ク、今夕、紀州公當地ヘ御下リノヨシ、サスレハ大君御歸府相成共、一同ハ此地ニ留リ、紀公ヲ待テ、進退ヲ決シナハ如何ト演說シケレトモ、大君ノ歸府ニ一同托言シ、大軍ノ總潰ヘ更ニ支ヘ難ク、言論聞入ナク風鶴ヲ恐レ、八公ヲ驚キ周章狼狽シテ、一同坂地ヲ捨テ去レリ、余、薄暮發程、堺ヲ過ルコト一里餘ニシテ、天既ニ明ケタリ。

○大河內正質家記ニ云、正月元日、上洛之前驅被申付、卽日大坂出立、淀止宿、翌日、前隊於伏見事起リ、遂ニ朝敵之名ヲ受、大坂ヘ立歸リ、夫ヨリ紀州ヘ立退、諸隊都テ江戸ヘ相戻シ、其後同所ヨリ軍艦ニテ駿州江尻ヘ著港、東海道下向、二月朔日、江戸ヘ歸着。

○牧野貞寧家記ニ云、六日夜ニ至リ、麾下某走リ來リ、竊ニ貞直ニ告テ曰ク、將軍今夜城中ヲ脫シ、乘艦東歸スト、臣愕然、卽チ獨行シテ城ニ入ル、已ニ人影ナシ、適、松平刑部大輔ニ遭ヒ、共ニ退キ去ル、臣等、其意趣ヲ解セス、閣老ニ面シ相謀ント欲シ、二三士ヲ携ヘ、刑部大輔ト與ニ天保山ニ赴ク、方ニ天明、將軍ノ艦已ニ洋中ニ走ル、會々若年寄平山圖書頭、淺野美作守ヘ面ス、曰ク宜ク開城スヘシト、頃クアリ、家士走リ來リ云、諸家ノ兵奔散、城中瓦崩スト、臣如何トモナス可ラサルヲ

知リ、重臣等ニ旨ヲ傳ヘ、刑部大輔ト共ニ微行シテ、十九日江戸ヘ歸邸ス。

○大河内信古家譜ニ云、正月六日、雖自大和路欲出京、山道險隘、數日跋渉、遂不得通路、且宿病再發、心神惛勞難堪、是以不得止、同十二日航海到居城三州吉田。

○牧野忠毅家記ニ云、忠訓、徳川家ヘ忠諫仕度心底ニテ下坂仕候處、同所殊ノ外混雜、寸志ヲ陳述スル場ニ至ラス、事既ニ伏見之變ニ及ヒ、徳川家又東ニ走ル、不得止、正月七日夜同所發足、同廿三日江戸ヘ歸著。

○松平忠敬家記ニ云、忠誠、正月元日、大坂表ヘ著、尚暫時療用中、伏見表ニ於テ粗暴之事件相發候趣、依テ慶喜ヘ諫爭ヲモ可仕存、押テ登城仕候所、最早退城、紀州之方ヘ立退候風聞ニ付、同月七日紀州筋ヘ追掛、其主意柄聞糺シ候上、上京仕候心得ニテ出發仕候。

○久松定謨家記ニ云、定昭、正月七日發足、同十日、松山表ニ著ス。

○酒井忠禄家譜ニ云、忠氏、正月三日、著坂ノ處、其後、徳川慶喜關東ヘ引取候趣ニ付、同八日、大坂出立、十五日、若州表ヘ歸著。

復古記　巻十六　終

総括兼纂修
一等編修官　臣　長松幹

校勘
一等編修官　臣　長熒
一第掌記　臣　四屋恒之

校録
六等掌記　臣　澤渡廣孝

繕寫
二等繕寫　臣　小川長和
二等繕寫　臣　小島春

復古記　巻十七

明治元年戊辰正月七日ニ起リ九日ニ至ル

〇正月

七日、百官諸侯ヲ會シテ、德川慶喜ノ反狀ヲ告示シ、征討ノ令ヲ發シ、諸侯ヲシテ其去就ヲ決セシム。

德川慶喜、天下之形勢不得已ヲ察シ、大政返上、將軍職辭退相願候ニ付、　朝議之上、斷然被　聞食候處、只、大政返上ト申而已ニテ、於　朝廷、土地人民御保チ不被遊候テハ、　御聖業難被爲立候ニ付、尾、越二藩ヲ以テ、其實効御訊問被爲遊候節、於慶喜ハ奉畏入候得共、麾下竝會、桑之者共承服不仕、萬一暴擧可仕哉モ難計ニ付、只管鎭撫ニ盡力仕居候旨、尾、越ヨリ及言上候間、　朝廷ニハ、慶喜眞ニ恭順ヲ盡シ候樣被　思食、既往之罪不被爲問、寛大之御所置可被仰付候處、豈圖ランヤ、大坂城ヘ引取候ハ、素ヨリノ詐謀ニテ、去ル三日、麾下之者ヲ引率シ、剩前々御暇被遣候會、桑等ヲ先鋒トシ、　闕下ヲ奉犯候勢、現在彼ヨリ兵端ヲ開キ候上ハ、慶喜反狀明白、始終奉欺　朝廷候段、大逆無道、最早、於　朝廷御宥恕之道モ絶果、不被爲得已、追討被仰付候、兵端既ニ相開候上ハ、速ニ賊徒御平治、萬民塗炭之苦ヲ被爲救度　叡慮ニ候間、今般、仁和寺宮征討將軍ニ被任候ニ付テハ、是迄、偷安怠惰ニ打過、或ハ兩端ヲ抱キ候者ハ勿論、假令賊徒ニ從ヒ、譜代臣下之者タリ共、悔悟憤發、爲國家盡忠之志有之候輩ハ、寛大之　思食ニテ、御採用可被爲在候、依戰功、此行末德川家之儀ニ付、歎願之儀モ候得ハ、其筋ニヨリ御許容可有之候、然ルニ、此御時節ニ至リ、不辨大義、賊徒ト謀ヲ通シ、或ハ潛居爲致候者ハ、　朝敵同樣、嚴刑ニ可被處候間、心得違無之樣可致候事、

但、征討大將軍ヲ被置候上ハ、即時、前件號令可被發ハ勿論ニ候得共、猶旗下粗暴之徒壅蔽爰ニ至リ候事哉ト、彼是深重之　思食ヲ以テ御遲延之處、三日ヨリ今七日ニ至リ、坂兵日々雖敗走益出兵、呉々不得止、斷然本文之通被　仰出候、各藩陪從吏卒ニ至ル迄方向ヲ定メ、爲天下奉公可有之候事。春嶽私記、有栖川宮、島津忠義家記

○春嶽私記ニ云、今日、議定、參與、在京諸侯等、申刻、總參　内被　仰出、一同揃ノ上、小御所ニ於テ、帥宮御讀渡相濟、岩倉殿御演達有之趣ハ、如斯被　仰出候上ニテ、歸國致度向ハ歸國、大坂ヘ罷越度向ハ可罷越、又勤　王追討之向ハ其通リ、何レモ方向ヲ定メ、明日辰刻迄ニ及御請候樣御申渡有之、畢テ又被申候ハ、是迄、　朝廷之御爲、何卒慶喜改心反正有之候樣ニト存シ、蔭ナカラ種々及周旋候儀モ有之處、今日之姿ニ立至候テハ、　朝廷ヘモ無申譯、深ク奉畏入候ト、改テ宮樣ヘ御演達有之、又是ハ事已ニ去リタレトモトテ、德川氏　奏聞狀ヲ列座之上席ヘ御渡有之。

○諸藩受書

德川慶喜麾下、竝會、桑等之者共承服不仕、只管鎭撫之名ヲ以テ、一旦大坂城ヘ引取候ハ、素ヨリ詐謀ニテ、去三日、麾下之者ヲ引率シ、剰前ニ御暇被下候會、桑等ヲ先鋒トシ、　闕下ヲ奉犯候勢、現在彼ヨリ兵端ヲ開候ニ付、速ニ　御追討可被遊御旨精細被　仰出趣、謹テ奉拜請候、此段御執　奏可被下候、以上。

正月八日　　薩摩少將

島津忠義家記

○

德川慶喜大逆無道ニ付、追討被　仰付候御儀、不辨大義、賊徒ト謀ヲ通シ、或ハ潜居爲仕候者ハ、　朝敵同樣嚴刑ニ可被處候間、心得違無之樣可仕旨等、被　仰出之趣拜承奉畏候、仍之、謹テ御請奉申上候、誠恐誠惶頓首頓首。

正月　　大納言慶勝

德川義宜家記

○
徳川慶喜事ニ付テ、昨夜、名代重臣之者ヘ被　仰渡候御書付之趣奉畏候、此段御請申上候、以上。

正月八日　　細川右京大夫

細川護久家記

○
昨七日、所勞ニ付、爲名代家老本多修理參　朝爲仕候處　御書付ヲ以テ、御達之趣奉拜承候。

正月八日　　松平大藏大輔

春嶽私記

○春嶽私記ニ云、御請書、元ヨリ勤　王一途之旨可被仰上事ニ候得共、萬一、坂地追討抔被　命候節ハ、御斷リ不被仰上候テハ不相適、夫ニテハ御請之御趣意ト齟齬之姿ニ可相成ユヘ、唯何トナク御承知ト計御請ニ相成候ハヽ、御趣意不分明故御尋モ可有之、其節ニ至リ、勤　王一途ハ勿論ニテ申上迄モ無之候得共、御用之次第ニヨリ相願候儀モ可有之ト、夫トナク御答置ニ相成可然トノ御評議ニテ、御請書出來、修理持參指上候處、書面ニ付申上候儀ハ無之哉ト御尋ニ付、書面ニ付、申上候儀ハ無之候得共、書面ニ付御尋モ御坐候ハヽ、御答申上置度儀有之趣申上候處、左様候ハヽ、最早御用無之、萬里小路殿御落手之段、非藏人ヲ以被　仰聞候。

○
徳川慶喜形迹今日ノ如キニ至リ候ニ付、討伐　勅定ノ御趣奉承畏候、勿論　皇家ノ爲メ可奉盡微衷候間、此段御請申上候。

正月八日　　松平容堂

山内豐範家記

○

御達之趣、謹テ奉拜承候、猶盡身命勤　王仕候、以上。

正月七日　連名

加藤明實家記

○明實家記ニ云、連署、原記ヲ失ス、小出伊勢守、池田修理、市橋下總守、北條相模守、久留島伊豫守、大澤侍從ノ外、臆記スル所ナシト。

○

昨夜、於　小御所、家來共迄御渡ニ相成候御書付之趣奉謹承候、不肖之私ニハ御坐候得共、乍恐、兼テ爲　朝廷粉骨碎身盡忠可仕志願ニ御坐候間、素ヨリ違存無御坐候、此段御請奉申上候、以上。

正月八日　京極下總守

京極壽吉家記

○

徳川内府大逆無道ニ付、追討被　仰付候御儀、不辨大義、賊徒ト謀ヲ通シ、或ハ潜居爲仕候者ハ、　朝敵同様嚴刑ニ可被處候間、心得違無之樣可仕旨等、被　仰出之趣拜承奉恐入候、右ハ尾張大納言ヨリ言上仕候通、於私モ奉畏候、仍之、謹テ御請奉申上候、以上。

正月　成瀬隼人正

犬山藩記

○諸藩ノ受書、此外見ル所ナシ。

○入道雄仁、聖護院宮、尊秀二親王ニ命シテ、蓄髪セシメ、尊秀親王ノ徳川氏猶子ヲ停ム。

聖護院宮

依有　思食、復飾被　仰出候事。聖護院宮家記

○　　　　　　　　知恩院宮

同上文。

徳川猶子被止候事。

正月七日　華頂宮家記

○因幡藩及ヒ支藩兵ノ伏見守衛ヲ罷テ、八幡、橋本ヲ警守シ、勝山（越前）藩兵ヲシテ闇嶺（大和河内ノ境ニアリ）ヲ警守シ、永井直諒ノ請ヲ許シテ、洞嶺（河内）守衛ヲ撤シテ、本城ノ守備ニ充テシム。

松平因幡守

松平相模守

松平修理

是迄、伏見表出張被　仰付置候處、今般被　免、八幡、橋本邊守衛、竝同所關門警衛被　仰付旨　御沙汰候事。

正月七日　池田輝知家記　池田徳定家記

○小笠原長守ヘ達書

小笠原左衛門佐人數、和州闇峠ヘ早々出張、盡力可致旨　御沙汰候事。

正月　小笠原長守家記

○

昨日御書付ヲ以テ、日向守本城堅固守備、　王事勤勞候樣　御沙汰之趣奉畏候、洞ケ峠邊、大阪方人數、戰爭之後、不殘引拂

候樣承知仕候ニ付、同所固人數引揚ケ、自國ノ守衛嚴重ニ手當仕度、此段奉願候、以上。

永井日向守家來

正月七日　　吉田恒左衞門

永井直諒家記

○直諒家記ニ云、同夜、留守居呼出、願之通御聞濟ノ段被仰出ト。

○薩摩、筑前、因幡、彦根四藩兵ヲシテ寺町門下立賣門以北諸家ノ竇門ヲ守ラシム、島津忠義以下四家家記又筑前藩ヲシテ四條隆謌ノ衞兵ヲ出サシム。

○筑前藩へ達書

四條前侍從出張ニ付、爲附添士分十人、速ニ差出候樣被　仰付候事。黑田長知家記

○

四條前侍從爲警衞、人數拾人指出之儀、御受申上候ニ付テハ、早々淀へ可罷出候事。

正月　黑田長知家記

○鷲尾隆聚ニ內諭シ、姑ク阪城攻擊ヲ止メ、先ツ大和ヲ鎭撫セシム。

○高野山出張概略ニ云、十一日、京師ヨリ十津川鄕士中島磯之進、前倉右衞門到著、正親町少將殿之口狀書ヲ齎シ來ル、今度、其官軍ヲ以テ、華城ヲ乘落スヘキ旨　御沙汰候得共、何分少人數之事故、先和州ヲ鎭撫セラレ、追テ之　御沙汰ヲ待ツヘキト云々、且西鄕吉之助ヨリ書柬、如左、

前略、去ル三日、不計モ賊軍ヨリ兵端ヲ開キ、一時ハ混雜致候得共、終ニ打抽、日々戰爭、官軍每ニ勝利ヲ得、昨日迄、八幡之賊巢ヲ責拔、橋本迄打拔候事ニ御坐候、就テハ此上ハ、華城一段ニ相成候間、得ト廟算ヲ立攻掛候程ニ御坐候間、只今、

其許ニ屯集之兵暴擧ニ及ヒ候テハ、大ニ官軍之人氣ニ相拘リ候ニ付、京地之官軍ト一時ニ手筈ヲ合シ、倶ニ攻寄セ候樣仕度御坐候間、何卒期限ヲ定メ可申上候、其内必御動搖不被爲在樣御申上置被下度、態々以書面奉得貴意候間、宜ク御取成被下度御頼ミ申上候、以上。

正月七日　　　　　　　　西郷吉之助

本田勘解由樣

○出雲藩京都警衛兵、將ニ丹波若クハ宇治ヨリ京ニ入ラントス、是日、山陰道鎭撫總督及ヒ久居藩宇治ノ守兵ニ諭シテ、其經過ヲ妨クルコト勿ラシム。

京都三ケ月詰御警衛人數、舊臘ヨリ追々國許出立爲致候旨申越、初立之者ハ、最早京著之日積リニ候處、當節道中筋不都合之譯モ可有之歟、イマタ著込不申候、尤大坂ヨリ之通行六ケ敷趣ニ候得ハ、自然滯リ可申モ難計、仍テ速ニ登京仕候樣申遣置候間、宇治之方、或ハ丹波路ヨリ入込候樣可相成歟ニ奉存候條、武器等モ有之、同所御固之藩々へ、　御沙汰被成置被下度奉願候、以上。

正月六日　　　　　　　　松平出羽守留守居

津川六郎右衛門

松平定安家記
藤堂高邦家記

○久居藩へ達書

別紙上條ヲ指ス、之通申出候間、其心得ヲ以テ、相支へ候儀無之樣申達候事。

正月

藤堂高邦家記

○鎭撫使へハ留守家臣へ口達ノ事、西園寺家記ニ見ユ、災後、原記ヲ失ス。

○加藤泰令、京ニ至ル。○加藤泰令家記

○大將軍、進テ淀城ニ入ル。○東伏見宮家記

○鷲尾隆聚、五條大和、代官所ヲ收メ、六日ニアリ○高野山出張概略是日、傍近ノ諸藩ニ檄シテ、王事ニ勤メシム。

○檄文

從　天朝兼テ　御沙汰之御趣意被爲在候處、此度浪華之兵、伏見表へ出張、叛逆之色相顯レ候ニ付テハ、官軍御差向之處、已ニ及戰爭、朝敵顯然ニ候、依之、速ニ征伐可致旨、再度被爲蒙　勅命、竝錦　御旗被相渡候條、四方之士民、普天率土之大義ヲ辨明シ、　王事ニ勤勞可致事。

戊辰正　月　　鷲尾侍從殿

執　　事

別紙之通、四方へ布告ニ相成候間、其藩々ニ於テモ同心戮力、速ニ奉　勅、數千年之奉報　天恩候樣可被成候事。

戊辰正　月　　鷲尾侍從殿

執　　事　高野山出張概略　高木正善家記

○出張概略ニ云、紀州橋本番所竝岸和田、伯太、郡山、小泉、高取、丹南、田原本等へ相達候事。

八日、雄仁親王、一品ヲ辭ス、之ヲ聽シ、舊ニ仍テ聖護院宮ト稱シ、其附弟入道信仁親王泰宮、ヲシテ照高院宮ト稱セシム、是日、雄仁親王名ヲ嘉言ニ復ス。

○聖護院宮家記ニ云、一品辭退之書被差出候處、勘解由小路殿、宮へ出會被聞召候旨御達、又、宮、議定衆へ面會ニテ、以來、

稱號從前ノ通聖護院宮ト相稱候テモ可然哉、且實名ハ、童名嘉言ト可稱哉ノ旨被伺候處、思召不被爲在旨御達ノ事。

○

聖護院宮復飾後、被稱舊號、同新宮被稱照高院候事。　有栖川宮家記

○征討ノ令ヲ發スルヲ以テ、錦旗菊章、二旒ヲ建禮門ニ樹テ、水口藩兵ヲシテ之ヲ守ラシム、翌日、又之ヲ建春、宜秋二門ニ樹テ、宇和島藩兵ニ宜秋門ヲ守リ、水口藩ニ建春門ヲ守ラシメ、新谷藩兵ヲ以テ、建禮門ノ守兵ニ代フ。

○加藤明實家記ニ云、參與衆ヨリ御守衛隊長ノ者御呼出、久我中納言殿ヨリ金菊章錦御旗二本御渡ニテ、南門ノ左右ヘ被爲建置、御守衛被仰付、尤夜分ハ卷揚可申樣被申達、翌日、日ノ御門ヘ同樣被爲建、御守衛被仰付、其後、南門ノ方ハ新谷藩被仰付、引渡ス。

○伊達宗徳家記ニ云、徳川御追討ニ付、錦御旗二本、公卿御門ヘ被爲建、御守衛被仰付。

○

加藤出雲守

南門御旗、警衛申付候事。

正月　加藤泰令家記

○高松、小濱、松山伊豫、大垣、鳥羽、宮津、延岡七藩ノ兵、賊軍ニ從フヲ以テ、其人士ノ九門ニ出入スルヲ禁ス。

讃州高松　若州小濱

豫州　松山　　濃州　大垣
志州　鳥羽　　丹後　宮津
日州　延岡

右、御門通行停止之事、（池田輝知家記 藤堂高潔家記）

○筑前藩兵ヲシテ石藥師、淸和院二門ノ間ヲ警守シ、長門藩兵ニ給、下立賣二門ノ間ヲ警守セシム、長門藩、見兵ナキヲ以テ之ヲ辭ス。（黒田長知家記 鞏下日載）

○岡部長寛ノ考臣。藩兵ヲ京師ニ徵サント請フ、命シテ、之ヲ徵サシム。

一昨六日、於　御所御假建所、當時、在京人數有無御尋ニ付、滯在無之旨申上候處、追テ　御沙汰可被爲在候趣被　仰出候得共、不容易形勢ニ付、人數呼出可申哉、猶又此段奉伺候、以上。

岡部筑前守名代

正月八日　　岡部結城

○批紙

窺之通、人數可呼寄事。（岡部長職家記）

○松平頼聰ノ家臣京ニ在ル者、書ヲ上リ、伏見ノ事、頼聰ノ與リ知ル所ニ非サルヲ辨シ、頼聰ヲシテ上京セシメンコトヲ請フ、乃チ姑ク收邸ノ令ヲ停メ、頼聰ヲシテ自ラ其罪ヲ乞ハシム。

去ル三日、大坂滯在人數、當節柄ニ付、　天朝御用之程モ難計奉存、登京仕掛ケ、伏見迄罷登候處、不計會藩同時ニ相成、入京難出來、併當形勢ニ敝藩關係仕候事ハ毛頭無御坐、素ヨリ何等之御趣意モ心得不申、麤忽ニ進退モ難出來、早速下坂仕候

ニ相違無御座ト奉存候處、其後浪華表風聞承候得ハ、深ク恐入候風聞モ御坐候ニ付、在京之面々一統當惑至極奉恐縮候、右ハ全、大坂表滯在之者共之失策ニテ、於讃岐守ハ少シモ存不申儀ニ御坐候間、此段幾重ニモ御詫奉申上候、讃岐守儀ハ、昨年以來被　召罷在候處、兼テ申上置候通、大病ニテ上京延引、深心痛仕候折柄、此度之御大變ニ付テハ、乍病中押テ上京、奉蒙御用度、此程在所表出帆仕居候處、無存掛、浪華表家來共不都合之次第風聞承知仕候ニ付、同處家來共咎方ハ速ニ申付候樣可仕ト奉存、見合罷在候由申越候、兼テ　天朝御厚恩之程奉戴、乍不及微忠奉報度存候間、何卒速ニ上京仕候樣　御沙汰奉蒙候得ハ、大病中ニハ御座候得共、押テ上京仕、相應御用向奉蒙度奉存候、右樣被　仰付被下候得ハ、重々　天恩之程冥加至極難有仕合奉存候、此段偏ニ宜　御沙汰之程、伏テ奉願上候、以上。

正月八日

松平讃岐守内

北原直左衛門

高松藩記

○達書

當月三日以來、錦旗ニ向砲發致候者、　朝敵ト唱、其屋敷屋敷地決地ニ相成候得共、其方ヨリ歎願書有之故、先指留置候間、昨日、被　仰渡書拜見之上、主人ヨリ歎願書可指出樣、急々運相付可申候。高松藩記

松平讃岐守

○德川慶勝、其隣近諸藩ノ方嚮ヲ問ハント請フ、之ヲ可ス。

昨夜、被　仰出之趣ニ付テハ、領分近隣諸藩之意底、勤　王不勤　王之境モ難辨候付、精々勤　王之道ニ相誘、若異存之輩モ有之、差拒ミ候節ハ、兵力ヲ用ヒ候儀モ可有之、此段爲念申上置候事。

正月

大納言慶勝

○批紙

總テ伺之通被　仰出候、精々勤　王之道ニ誘候樣、被　仰付候事。徳川義宜家記

○參與小原忠寛、大垣ニ赴キ、藩主戸田氏共ニ說テ、自効セシメント請フ、之ヲ聽ス。

謹テ奉内願候、私儀過日參與職被　仰付、誠以分外之仕合冥加至極難有奉存候、然處、徳川家人數戰爭之儀、今以相止不申、遂ニ　宮樣御出運御運ヒニ迄差及奉恐入候、折柄敝藩人數、兼テ大阪表ニ罷在、徳川内府上洛ト申事ニテ、右之供被申付、彼、地出立致シ候處、豈圖、今日之事ニ立至リ、依之、不取敢一封書ヲ馳セ、此上ハ大義ヲ分別仕、徳川内府ヘ死ヲ以直言仕候ヨリ外無之段申遣候事ニ御座候、其後、當藩之人數、接戰ニハ不及歟之趣ニモ承及候ヘ共、何分、今日迄確報モ無御座候間、參與之御席ヘ出勤仕候モ深奉恐入候、且釆女正ハ大垣ニ罷在候事故、當地之時情モ相分申間敷、萬一心得違罷在候テハ、重々奉恐入候間、私儀暫時御暇被下置候ハヽ、卽刻大垣表ヘ罷越、　朝廷之御趣意柄、釆女正始ヘ篤ト申聞候樣仕度奉存候、依之、可相成ハ暫時之御暇被下置候樣、偏奉願上候、以上。

正月八日　　小原二兵衛

戸田氏共家記

○許可ノ達書原記ヲ失ス。

○徳川慶喜ノ東走スルヤ、其臣妻木賴矩多宮○目付役、ヲ留テ、奏狀及坂城ヲ徳川慶勝、松平慶永ニ託ス、是日、二人其奏狀ヲ上ル。

此度、上京先供途中、偶然之行違ヨリ、近畿騷然ニ及候段、不得止場合ニテ、素奉對　天朝他心無之段ハ、兼テ御諒知之通ニ候、併、聊タリトモ奉惱　宸襟候段恐入候儀ニ付、浪華城ハ尾張大納言、松平大藏大輔ヘ相託シ、謹テ東退仕候。

正月　　徳川慶喜

徳川家達家記

○

此度、上京先供途中、偶然之行違ヨリ、近畿騷然ニ及候段、不得已之場合ニテ、素奉對　天朝他心無之段ハ、兼テ御諒知之通ニ候、併、聊タリ共奉惱　宸襟候段恐入候儀ニ付、謹テ浪華城、各ヘ相預、退去歸東ニ及候間、右之趣可然御執成、　御奏聞有之度賴存候。

正月七日　慶喜

尾張大納言殿

松平大藏大輔殿 春嶽私記

○春嶽私記ニ云、八日午後、坂地ニ罷在候岡本晉太郎罷歸リ申上候次第ハ、昨七日、御城ヨリ申來リ罷出候處、御目付妻木多宮殿逢對ニテ、昨六日、上樣御城御明退キニ付、尾、越兩藩ヘ御託シ、　御奏聞狀竝御書有之ニ付、兩家之衆ヘ可相渡所、尾邸ニハ一人モ詰合無之候付、晉太郎ヘ被相渡由、且御城モ引渡被申度トノ事ニ付、晉太郎申候ハ、重キ　御奏聞狀等、私式之者拜受仕候儀ハ恐入、御請難仕、且御城受取之儀ハ、猶以可及手關樣モ無之候間、御免被下候樣申達候處、　御奏聞狀ハ是非共致持參吳候樣、御城之儀ハ早々受取人指出候樣可致、薩、長迫リ來候ヘハ、御城ハ元ヨリ、土地可及放火、左候ヘハ、諸民之難儀トモ可相成儀ニ付、其處ヲ思召、御開城ニモ相成事ニ候ヘハ、此譯合モ、歸路、薩、長陣所ヘ罷越申諭キ、止戰之儀申入候樣トノ賴之由、肥後首藤某ヘモ止戰申通候儀、賴有之趣ニ候ヘ共、首藤ハ戰地罷越候儀懸念候ヘハ、京都ヘ申遣シ、京都ヨリ指留ニ相成候樣可取計トノ緩計ニテ、持取申間敷樣子故、晉太郎申達候ハ、ケ樣之時節候ヘハ、成敗ハ難量候ヘ共、何分指向ヒ可申候間、　御奏聞狀御寫一通御渡被下度、夫ヲ以懸合可仕、尤御城之儀ハ、尾、越ヨリ　奏聞濟、受取人指上候迄ハ、(枚闕)御受取申候トハ難申上ト相答ヘ、　御奏聞狀竝御寫共受取罷歸、夫ヨリ支度相整、北上之處、途中按外ニ兵士等見受不申、牧方迄無何事到著、彼是深夜ニ相成ニ付、暫時休息罷在候處、長陣ヨリ之巡邏六人入來リ、通行之趣意等相糺ニ付、有體申答ヘ、陣所ヘ案內相賴ミ、橋本驛之陣營ニ至リ、隊長ヘ面會、　御奏聞狀寫爲見、多宮殿賴之趣申演候處、仁和寺宮御本

陣ヘ申上候樣トノ事ニ付、淀表ヘ罷出候處、參謀伊知地正治逢對ニ付、前條申述處、尤之次第候ヘハ、宮ヘ相伺ヒ思召次第ニ可致トノ事ニテ、慇懃ニ慰勞之挨拶致シ、相歸シ候、右等之次第ニテ、彼是手間取之由申達、　御奏聞書一封指出、御一封ハ尾侯御連名ニ候ヘ共、先ニ御開封、右ニ付、尾ヨリ成瀨隼人正、御家ヨリ酒井與三左衞門、夜ニ入參　朝、公卿之議定衆迄被指出候。

○妻木多宮筆記ニ云、正月七日八半時頃、松平豐前守始役々立拂候後、　御奏聞狀竝御兩家ヘ之御直書共、京師ヘ之運ヒ方取計候ニ付テ、御兩家大坂詰御家來呼出候處、同日七時過、越前御家來岡本晉太郎罷出、尾州家衆ハ詰合不申ニ付、私一人罷出候趣申立候間、左候ハヽ、次筆ニハ候得共、貴殿ヘ御賴申候間、此　御奏聞狀御自書共、京師ヘ御廻シ被下、且當城御受取被成候樣ニト申談候處、答ニ、京師表ヘ運ヒ方之儀ハ委細承知仕候間、卽刻早馬ニテ私持越可申、御城受取之儀ハ、一應主人之申付承リ、明日中ニハ立歸リ可申候間、夫迄之處、御猶豫被下度段、達テ申聞候間、任其意、尤御奏聞竝御自書表ニテハ、當城ハ兩公ヘ御託シ濟之ツモリ、被仰置之御文言ニ付、貴樣ト之御引合ハ私ツク、表向ハ既ニ御引渡濟之格ニ御心得被下度段、具ニ申談、晉太郎相返シ申候、同日薄暮頃、尾州御家來淺野辰藏罷出、先刻御呼出シ之處、他行中ニテ延引イタシ候段申聞候間、過刻、越前衆被罷出、御藩ニハ御詰合無之トノ事故、無據、岡本晉太郎一人ヘ　御奏聞狀御直書共相託シ、同人卽刻上京被致候、尤御城之儀ハ、兩公ヘ既ニ御引渡シ之積心得居候旨申聞候處、辰藏委細承知、左候ハヽ、明日、越前衆被罷越次第、御沙汰被下候ハヽ、私儀モ同時登城可仕旨申聞引取申候、此夜五半時頃、城外レ向小屋ヨリ出火、御城風下ニテ、城内松樹ヘ火移リ、一時動搖、消防方ハ御城代殘リ居候家來ヘ命シ、半時餘ニテ鎭火致候、八日晝後ト覺候、尾州御家來中村修之進、鬼頭健二郎兩人、四半、幟爲持、人數七八人召連登城イタシ、昨日、淺野辰藏ヘ被仰聞之儀モ御座候間、罷出候趣ニ付、猶前書之趣申聞、未タ越前衆ハ不罷出候得共、尾州公ニハ御初筆之儀故、貴樣ヘ御引渡申度段申談候處、同人申候ニハ、辰藏申口少々不分明ニ付、猶委細之儀伺トシテ罷出候得共、御受取方之儀ハ、御城附之モノ京地ヨリ呼下シ候上ナラテハ取計兼候間、只今直ニ其段急飛ヲ以テ京師ヘ申遣候旨ニテ、殿中ニテ書狀認、飛脚差出候樣子ニ見受申候、右相濟、健二

郎一ト先引取度段申聞候得共、昨日、早馬ニテ晉太郎上京致候義ニ候得ハ、最早歸坂可致頃合ニ付、貴樣被引取候テハ、又候欠遣、御引渡方遲延可致、其儘乍御迷惑越前衆也、其御城附也、被罷出候迄、當城へ御詰切有之度段申聞候處、承知ニテ、健二郎、修之進相留リ、人數ハ不殘返シ申候、同日夕、淺野辰藏モ再登城、尾州衆都合三人相成、局中在合之酒肴支度等（原註、酒ハ御立拂之節、上向ヨリ給リ、飯ハ多宮旅宿賄人呼寄申付之、）差出、越前衆相待居候處、此日ハ終ニ京師ヨリ沙汰無之、三人共天井間へ一泊爲致、多官義ハ次ノ間ニテ休息イタシ候、夕刻、御城外所々ニテ、何者トモ不知、城中虚實探リ之爲ニモ候哉、小銃相發シ候趣、斥候之者申出候。

○戸田氏共ノ家臣、氏共伏見ノ變ヲ聞キ、將ニ兵ヲ出シテ京師ノ守衛ニ供セントス、守關兵ニ扼セラレ入ルコト能ハスシテ、藩ニ歸ルヲ稟シ、後命ヲ請フ。

釆女正儀、於大垣表、方今之形勢不容易趣承知仕、　朝廷爲御警衛人數追々繰出候處、御固場所通行差支、無餘儀引戻リ候、此上、御用品モ被爲在候ハヽ、　御下知次第速ニ出張爲仕可申候、此段御屆申上候、以上。

戸田釆女正家來

正月八日　吉田園平

戸田氏共家記

本日、大垣藩士ノ九門出入ヲ禁スルノ令アリ、此書ヲ上リシハ、蓋シ發令前ニアリシナルヘシ。

○附錄小原忠寛ヨリ正親町三條實愛へ申請書

私儀、今日出立可仕ト奉存候、就テハ毎度同樣之儀申上奉恐入候得共、於釆女正儀テハ、　朝廷へ精勤之志實以他念無御座候、此段幾重ニモ御諒察奉希上候、大坂表へ其以前ヨリ出張罷在候當藩之人數、俄ニ徳川内府上洛之供被申付、出立仕候處、豈圖、今日之場ニ立至リ奉恐入候、過日一信申付候後ハ、定テ内府へ直言之一途ニ盡力仕候儀ト奉存候、私歸藩仕候上ハ愈

以申達、精勤爲仕可申候間、何卒今朝御届奉申上候　朝廷爲御警衛、一旦繰出シ候人數、當御地ヘ罷出、何トカ御用品被仰付被下置候樣ニハ相成申間敷哉、此段御宗家樣之御緣故ヲ以、幾重ニモ御高配奉願候、以上。

正月八日　戶田氏共家記

○長門藩、彈藥缺乏スルヲ以テ、小濱藩邸貯フル所ノモノヲ借ラント請フ。

國元ヨリ輸送之彈藥、大坂川口邊迄廻船仕候所、賊兵抄略仕候哉ニ相聞エ、今以到著不仕、然處、數日之連戰、有合之彈藥致拂底候折柄、若州屋敷ニテ圍置候彈藥有之哉ニ御座候間、　朝廷御要用之分トシテ、拜借被　仰付候樣奉願上候、已上。

正月八日　長門宰相內　寺內暢三　輦下日載

○松浦詮、永井直諒、京ニ至ル、松浦詮、永井直諒家記 松平慶憲、病ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシムルヲ稟ス、松平直致家記 出雲藩ノ警衛兵、京ニ至ル 松平定安家記

○大將軍、八幡ニ至リ、東伏見宮家記 勅旨ヲ薩、藝、長、因、津五藩及池田德澄、池田德定ノ兵ニ傳ヘ、戰勞ヲ犒フ、又伊達宗城ノ請ヲ許シ、其軍事參謀ヲ罷ム。

累日之交戰、屢得勝利候趣被　聞食、　叡感不斜候、依之、軍勞ヲ被慰賜候事、

但、後日屹度　思食モ被爲有候儀ニ付、死傷之輩、巨細ニ可記置候事。

正月八日　輦下日載、淺野長勳以下各家家記

○輦下日載ニ云、酒拾六挺、スルメ五拾束賜之、薩、藝、藤堂、因州ヘモ同樣被仰出候事ト、東伏見宮家記ニ六日トス、誤ル

ニ似タリ。

○池田輝知、池田徳定家記、本條ノ外ニ數日勇戰云々（本條ノ文ト大同小異、）ノ達書、參與ヨリ被渡トアリ、或ハ一事兩樣ニアリシモノカ、然レトモ薩、藝、土、其事ナシ、疑フヘシ。

○伊達宗城願書（五日ニ見ユ、）批紙

願之通、軍事參謀被　免候樣、被　仰出候事。（伊達宗徳家記）

九日、議定三條實美、岩倉具視ヲ以テ、副總裁ト爲シ、（並ニ議定故ノ如シ、）嘉言親王、參與徳大寺實則ヲ議定ト爲シ、征討大將軍嘉彰親王ヲ以テ、外國事務總裁ヲ兼ネ、實美及ヒ參與東久世通禧、岩下方平、後藤元燁ヲ以テ、外國事務取調掛ヲ兼シム、又徳川慶勝、松平慶永、辭官ノ請ヲ聽サス、伊達宗城ト並ニ議定ト爲ス、是日、嘉言親王ノ園城寺長吏ヲ罷メテ、別當ト爲ス。

三條前中納言
岩倉前中將

右副總裁（有栖川宮家記）

○本條、御前親授ナルヘシ。

嘉言親王ヘ勅旨

議定宸翰（聖護院宮家記）

○聖護院宮家記ニ、於御前トアリ。

○

議定職 有栖川宮家記

○　徳大寺中納言

東久世前少將

外國事務取調掛兼帶可致、被　仰下候事。

正月九日 東久世通禧家記

○實美及ヒ方平、元燁ハ達書ヲ佚ス、嵯峨實愛手記ニ、仁和寺宮外國總裁、實美同取調掛、通禧同上被仰出ト、又島津忠義家記ニ、方平、元燁ヲ以テ實美通禧ニ連書シ、以　叡慮被仰出トアリ、嘉彰親王ヘノ達書ハ、坂城進入ノ達ト一文ナリ、後條ニ收ム。

○　各通　尾張大納言

越前宰相

先達テヨリ所勞ニ付、議定職辭退歎願之儀不被　聞食、今度、更ニ被　仰付候間、此段可相心得候。

但、華城出張中、御役前相勤候儀、御用捨相成候事。 春嶽私記

宇和島少將

議定職、更ニ被　仰付候事。 伊達宗徳家記

○附錄春嶽私記、八日ノ條ニ云、昨日、反狀明白御發令有之、最早御盡力之御筋道モ絕果、被對天下御面皮モ不被爲在、過日御辭表被指出置候御儀モ被爲在、旁御歸國トノ思召ニ相決、御參　內御都合抔御評議中、晉太郎到著ニ付、右　御奏聞狀　御奏達之跡ニテ御願可被遊トノ思召モ被爲在候得共、尾侯ヘ御懸合ニ相成候ハ、、夜ニモ入可申次第ニ付、御參　內ハ明朝ニ

被決　御奏聞書ハ御家老中ヲ以被指出候事ニ相成、然ル處、夜ニ入、三岡八郎退　朝ヨリ、直ニ參上申上候ハ、今朝參與役所へ出勤ノ處、岩倉殿御逢被成度トノ事ニテ、御對面有之、御申聞之趣ハ、此間容堂殿迄申達置候次第、大藏大輔殿ニハ爾後御參　内無之ニ付難申上、段々延引ニ相成候故、今日八郎迄御申聞有之由、抑舊臘已來之御忠實御盡力ハ、滿　朝徹底感服之事ニテ、此上徳川氏如何樣之變故ニ及候共、尾、越兩家ヘハ徳川氏ニ向ヒ戟ヲ取ラセ候樣之義ハ決シテ無之候、其代リ五畿内之政治、此頃迄ハ内府公御參　内之運ヒニモ相成候ハヽ、是迄之振合モ承知候事故、何トカ可相成ト、實ハ夫ヲ憑ミ等閑ニ致置候姿之處、今日ト相成候テハ、追々之世態、一揆抔起リ候テハ不取締之事ニモ候ヘハ、何卒、大藏殿、伊豫守被仰談、御家來二十人ナリ、十人ナリ御指出、此所之御政道御取締之儀、御頼被成度トノ御内評ニ有之、依之、明日辰刻、御參内有之度、左候得ハ、兼テ御役御免ノ御内願ハ御許容無之、更ニ議定ニ被命候御運ヒナル由、御内話有之旨ニテ、前記之御落膽御屈度被游候御見込トハ、思召懸モナキ　朝廷之御評議有之趣相聞エ、左樣之御折柄、御一量見ニテ、强テ御勇退被遊候ハヽ、是迄御盡力柄鑿齟齬、遂ニ今日之世態ニ至候ヲ御憂慚之餘リ、最早御嘉遁トノ御趣意ハ不相貫、却テ徳川氏ノ御爲ニ、何トカ思召モ有之、御歸國被仰立候樣、　朝廷之御嫌疑ヲ被爲受候テハ、多年、　朝幕之爲ニ御心力ヲ被爲盡候御忠貞ノ御瑕瑾ニモ被爲成候半歟ト、今更御殘念ニ思召、先ツ明日ノ處ハ、御參　内ニテ、無異儀御奉命、猶御深考モ可被爲在トノ御事ニ被決タリ。

○　　　　　　　　　　聖護院宮

被止園城寺長吏、　更可爲同寺別當、被　仰下候事。　聖護院宮家記　有栖川宮家記

○大將軍嘉彰親王ニ命シ、坂城ヲ以テ牙營ト爲シ、四方ヲ指揮セシメ、徳川慶勝、松平慶永ヲシテ坂城ヲ點撿シ、大將軍ヲ迎ヘシム、又東海道鎭撫總督橋本實梁ニ命シ、隣近ノ諸藩ヲ糾合

シ、進テ桑名ヲ討セシム。

○征討大將軍ヘ達書

別紙慶喜ノ奏状ヲ指ス、ノ通、尾、越ヨリ言上候、此上ハ速ニ進軍、華城ヲ以テ本陣トシ、尚四方指揮宜鎭撫可有之候、且今日ニ至リ候テハ、海外各國ノ御處置急務候條、外國事務總裁ノ義兼帶、夫々應接可有之、被　仰出候事。

正月

但シ、外國事務掛ノ義、三條前中納言、東久世少將ヘモ被仰付候間、尚申合可取計候事。東海道先鋒記

○

尾張大納言

越前宰相

慶喜東歸ニ付、言上之趣被　聞食候、隨テハ將軍宮御進軍、華城ヲ以テ可爲本陣被　仰出候間、兩藩共ニ迅速下坂、城中點撿、可奉迎旨　御沙汰候事。

正月

但、若シ及遲々候テハ、甚以御不都合ニ付、呉々速ニ下坂可致事。春嶽私記　徳川義宜家記

○春嶽私記ニ云、華城ノ儀、命ヲ蒙リ、所勞ニ付、名代酒井與三右衛門竝青山小三郎ヲ遣ハス、尾亦名代ナリ、時ニ坂城回祿ニ付、本願寺掛處御宿陣ニ相成。

○東海道鎭撫使ヘ達書

別紙慶喜ノ奏状ヲ指ス、ノ通、尾、越ヨリ言上候、此上ハ大津驛發途進軍、桑名城襲擊陷落可致、隨テハ隣國ノ大小名、迅速應官軍可致進發、指揮可有之樣　御沙汰候事。

正月九日　東海道先鋒記

○高倉永祜ヲ以テ、北陸道鎮撫總督ト爲シ、四條隆平之ニ副ス、岩倉具定ヲ東山道鎮撫總督ト爲シ、岩倉具經八千丸○具視ノ子、之ニ副ス。

○岩倉具視及具經家譜ニ云、正月九日、具定東山道總督、具經副總督被仰出。

○四人皆宣旨ナシ、嵯峨實愛手記、九日ノ條ニ、東山、北陸鎮撫總督岩倉孫二男、高倉ヘ申渡ストアリ、北陸道總督雜記ニ、九日夜、總督發向御内意アリト、又柳原前光輒誌九日ノ條ニ、東山道總督具定、副將八千丸、北陸道總督永祜卿、副將隆平被仰下由トアリ、然ルニ永祜備忘錄ニハ、十二恐クハ一ノ誤、日、北陸道鎮撫總督勅使被仰出候事ト記シ、隆平ノ北征記事ニハ、十一日トス、蓋シ本日ハ内達ニシテ、十一日ニ至リ公達アリシモノナラン、因テ姑ク本日ニ收ム。

○松浦詮ニ命シ、守兵ヲ闇嶺ニ出サシメ、其京都巡邏ヲ免ス、又柏原藩東久世通禧ノ衞兵ヲ罷メ、郡山藩兵ヲ以テ之ニ代フ。○柳澤保申 織田信親家記

松浦肥前守

和州闇峠之儀ハ、 京攝之間要路ニ候、早々出張盡力可有之 御沙汰候事。

但、小笠原左衞門佐ヘモ同所出張被 仰付候間、共々盡力可有之候事。

正月 松浦詮家記

○

謹テ奉申上候、和州闇峠之儀ハ、 京攝之際要路ニ候間、早々出張盡力可仕旨、蒙御沙汰奉畏候、素ヨリ僻遠之小藩、微力ニテ諸事行屆兼、殊ニ不案内之場所柄、如何可有御座哉大切至極恐念仕候得共、不容易形勢、格別之蒙 仰候義ニ付、乍少人數、出張盡力爲仕可申奉存候、此段御請奉申上候、以上。

正月九日　松浦肥前守

松浦詮家記

○

別紙之通、闇峠出張被　仰付候ニ付、市中見廻之義ハ　御免被成下候義トハ奉存候得共、御沙汰無御座候ニ付、爲念此段奉伺候、以上。

正月九日　松浦肥前守

○批紙

市中見廻被　免候事。

松浦詮家記

○舊京都守護職ニ給セシ所ノ廩米ヲ以テ、薩、長二藩ニ賜ヒ、糧食ニ充ツ、又東本願寺光勝ニ命シ、倉ヲ發シテ、米一千五百石、伏見、八幡、橋本ノ兵禍ニ罹リシ者ヲ賑恤セシム。

長州
薩州

是迄守護職勤仕中、爲手當會津へ遣置候知行所、別紙之趣ニ候間、兩藩儀ハ殊ニ頃日連戰、彼是　思召之次第モ有之候ニ付、右村々積米之分、糧米トシテ下賜候間、速ニ出張所置可致候事。

正月九日

追テ、兩藩申合取計可致候事。

韡下日載
島津忠義家記

○別紙

一高四拾壹石四斗壹升六合　山城國愛宕郡西賀茂村

一高貳拾石九斗貳合三勺　田中村
一高三百八拾五石五斗壹升四合八勺　岩倉村
一高五拾六石八斗七升七合三勺　市原村
一高四拾三石貳斗八升四合五勺八才　同國葛野郡　小北山村
一高四拾壹石四升壹合　木辻村

島津忠義家記

○東本願寺へ達書

米千石

右伏見表へ可差出事、

五百石

右八幡、橋本邊、

尾州　荒川甚作　田宮如雲
町人　上田精兵衛　熊谷久右衛門

右之者共出張致居候間、直ニ相談致シ、運送所何レ可然哉、宜様可取計候事。東本願寺記

○徳川茂承、將ニ京師ニ覲セントス、道路紛擾ヲ慮リ、上書シテ、朝命ヲ賜ハンコトヲ請フ。

當月三日以來、上方動揺之趣傳聞仕候付、　朝廷爲御警衛、早速上京可仕處、未持病難堪候付、不取敢、爲名代家老共差登候處、於大坂表、徳川慶喜觸達之品モ有之候間、彼是談判中、同七日、内府俄ニ東下仕候趣承知仕候、就テハ今病中、速ニ上京

仕奉伺　天氣度奉存候處、追々官軍御差向ケ之折柄、於道路事情相混シ、動搖等ニ立到候テハ深奉恐入候間、奉蒙　御沙汰、早々上京仕度奉存候、何卒　御許容被成下候樣、伏テ奉懇願候、誠恐誠惶頓首謹言。

正月　紀伊中納言

徳川茂承家記

○森忠典、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。森忠儀家記

○官軍ノ前隊長門藩兵、大坂城ヲ收ム、時ニ城中火起リ、焚燒翌日ニ至ル。

○輦下日載ニ云、佐々木次郎四郎、徳山岩國兵隊ヲ率ヰ、昨日舟ニテ下リ、今朝、先華城ニ入込候處、旗下士妻木多宮殘居候テ、城ハ尾、越へ渡スト申居候、時ニ尾、越兩藩ヨリモ少少參合居候處、何トカクスクス申候故、然ハ此方ニ請取可申ト應接致居候内、地雷發シ、城内燒始候事。

○妻木多宮筆記ニ云、九日朝五ツ時頃、城外東北之方ヨリ、破裂丸ト覺シキ大砲一二聲相響キ候ニ付、襲來之者有之義ト相心得、斥候差出置、直樣、尾州御家來寢所ニ罷在候三人ヲ呼起シ、其段申聞候内、青屋口小屋ヨリ出火之趣ニテ、御城風下相成、火煙盛ニ相掛リ候間、夫々用心、人少ナカラ御城代足輕ニ申付相防候内、斥候之者罷歸リ、只今、長州之印相附候兵隊、追々御城へ近附候趣申立候ニ付、萬一空城ト不心得發砲等致候テハ、以之外之義ニ付、鬼頭健次郎並御徒目付へ申含、鐵鞭之先へ白布結附、大手外ニテ相振ラセ、敵方其意ヲ知リ、發砲見合セ候處へ參リ、當城ハ子細有之、空城同樣相成、尤既ニ尾、越兩家へ引渡濟ニハ候得共、監察役之者モ罷在候間、御來意之程穩ニ應接有之度段爲申聞候處、敵方隊長ト覺シキ者ヨリ、長州參謀佐々木二郎四郎、坂井勉ト認候名札差出、兵隊ハ不殘御城外へ差置、隊長二郎四郎外兩人而已入城候ニ付、天井間へ相通シ、妻木多宮重立、尾州御家來同道、支配向召連應接致候處、二郎四郎申聞候ニハ、　勅命ニ寄當城進擊罷越候趣ニ付、當城之儀ハ、内府事云々之趣意有之、一昨七日立拂後、尾、越兩家へ引渡候旨申聞、則奏聞狀並兩家へ之御直書寫相見セ

候處、二郎四郎ハ委細承知イタシ候ヘ共、貴殿ニハ何故引拂不申候哉ト申聞候ニ付、尾、越兩公ヘ内府ヨリ之引渡ハ、書面上ニテ相分リ居候得共、兩家家來ヨリ京師ヘ申遣候義有之、彼表ヨリ其筋之者相越候上ナラテハ受取兼候趣、達テ申聞候間、無據、拙者滯在罷在候旨相答、依之、二郎四郎、尾州衆ヘ引合居候内、石之間邊ニ當リ俄ニ發火イタシ、忽火勢激烈ニ相成、溜リ兼候間、二郎四郎同道ニテ、大手内大番所迄引揚、原註、此時既ニ南方ニ當リ、二ケ所程火相發シ、三方一時ニ燒出申候、多宮ヨリ二郎四郎ヘ向ヒ、拙者儀、只今ヨリ上京、奏聞狀、直書共彌上徹致候哉否相伺、且當城炎上之次第等、尾、越兩公ヘ申立度候間、其義取計被呉度、且右伺相濟候上ハ、一日モ早ク歸府復命致度候間、道路梗塞之患無之様トノ周旋モ賴入候處、二郎四郎承知致シ、尤急速返答ハ致兼候間、旅宿ニテ相待可申旨申聞候ニ付、則健二郎其外同道ニテ退城、大手外ニテ引別レ、旅宿備後町四丁目蓮原書、不明、寺ヘ引取申候、一昨日早馬ニテ上京致候越前衆岡本晋太郎義、今朝迄モ消息無之、猶昨日急飛ニテ京師ヘ差立候尾州家否モ勿論相分リ不申内、長州人侵擊之次第ニ立至申候、十日夕七時頃、長州斥候寺島秀之助、多宮旅宿ヘ罷越、昨日於城中二郎四郎ヘ御託シ之二ケ條、周旋致候處、上京之儀ハ迚モ不相叶儀、尤一日モ早ク復命被致度ニ付、道路梗塞無之樣トノ御賴之旨ハ、御尤之儀ニ候得共、最早八方道路相塞リ、一々布告モ出來兼候儀、折角之御託シ故盡力イタシ、堺筋ヘハ其段申遣置候間、二郎四郎口上ヲ以テ、通行被致候ハヽ、無滯御通シ可申、尤因循被致候テハ、御爲メ不宜候間、今夜ニモ當地御立拂可被成旨、秀之助申述候ニ付、好意之段相對シ、則其言ニ從ヒ卽夜出立、堺口ヨリ信樂筋行歸府致候、前文相認候長州人應接最中、石之間邊ト覺シキ所ヨリ、俄ニ發火之緣由何分相分不申、私共始之愚案ニハ、大砲一二聲相發候節、破裂丸既ニ城中ヘ迸入、右ヨリ燃上リ候歟、左モ無之候ヘハ、城外步兵小屋之出火風烈ニモ候間、飛火イタシ、城中ニ散亂致居候火藥等ヘ點火致候歟、又ハ前假建物ヘ移リ候歟之内ト存候、尤下說ニハ兼々異志相貯候者、人足ニ紛レ忍込、御臺所邊ヘ火藥仕懸置候モノ有之、全ク右ヘ引移リ候抔申唱候得共、難信說ニ御座候、尤、去十二月廿六日夜、陸軍局ヨリ出火、餘程燃上リ候節モ、怪敷體有之候間、前件之事柄決テ無之トハ難申候、水野彥三郎殿聞込之說ニハ、長州人亂妨ニ分捕等致候ヲ、黑鍬之者見ルニ不忍、殘念之餘リ、火藥ヲ以差火イタシ候トノ由、是ハ左モアルヘキ說ニ候得共、篤ト相糺シ候處、九日迄、黑鍬之者居殘リ候儀

一切無之、尤御代官方人足ハ、前日夕迄少々入込候間、下賤之儀、不良之所業イタシ候哉ニモ相聞候間、右ヲ掩ヒ候爲メ仕掛火イタシ置候哉ハ難計、長州人之儀ハ、最初兵隊不殘城外へ差置、隊長其外兩人而已入城、現在應接モイタシ候程ニテ、軍律整々ト相立居、總兵繰入候節ハ、大手炎上致候後ニ候得ハ、長州ニ限リ、右樣之所業ハ決テ無之義ト一同申居候、又自燒不致證據ハ、左之通、

自燒之所存有之候ハヽ、七日、一同立拂之節相行ヒ候儀勿論之事、然ルヲ態々相止リ、空城預リ之任首尾能相仕舞掛ル場合ニテ、右樣之始末致候テハ、夫迄之骨折モ無ニ相成候ハ勿論之義、自燒不致之一證ニ御座候、

此時迄ハ城內ニ而已罷在候事故、舊幕府、朝敵之名相蒙候事トハ毛頭不存寄ニ付、一時御兩家へ御託シ相成候共、終ニハ御戾シ相成候時モ可有之ト而已存込居候儀故、火ノ元精々念入心附候次第、自燒不致二證ニ御座候、

殿中諸向立拂跡、實ニ亂妨狼藉之始末、假令御親藩へ御引渡相成候共、餘リ之御不體裁故、無人中ニモ骨折掃除致シ候儀ハ、御詰合之衆ニモ御承知之事、自燒不致三證ニ御座候、

八日夜、種々事件有之、九日曉、纔ニ休息致候儀故、九日朝、遲ク起出、間モナク長州人侵擊、且火發之一段ト相成候、若今少少眠リ居候ヘハ、眼前燒死モ可致歟、自燒不致四證ニ御座候、

內府公御手元御文庫之御書類、其他御用部屋、御右筆所、御勘定所等之諸書物中ニハ、人目ニ觸レ不體裁之品モ有之候間、立跡ニテ燒捨候樣、松平豐前守申渡有之候處、八日ニ至リ、風烈ニテ煙立候義ハ掛念ニ付、御城代家來へ申付、夫々取始末爲仕、井中へ沈メ申候、若自燒之所存有之候ハヽ、其儘ニ打捨置、右樣餘計之手數ハ不致筈、自燒不致五證ニ御座候、

若自燒之跡分明ニ候ハヽ、　朝命ニ寄リ請取候城之儀故、長人ヨリ私共始、尾州公御家來等差留置、火發之次第逐一可及吟味筈之處、其義一切無之候ハ、出火之體怪敷儀モ不相見、全ク飛火、或ハ砲火之內ト見極メ居候ヨリ之義ト被存候、是又自燒不致之證分明ニ御座候。

○初メ鷲尾隆聚、使ヲ紀伊藩ニ遣ハス、藩兵岩出ヲ戍スルモノ、之ヲ拘留ス、是日、隆聚、書ヲ與ヘテ、其無狀ヲ數ム、又橋本戍兵、隆聚ニ復書シテ、前日ノ諭告ニ答フ。

抑、方今、皇國之形勢切迫ニ付、深被爲惱　宸襟候テ、爲御豫備、鷲尾侍從殿重キ　御沙汰ヲ被爲蒙、當山ヘ御出張被遊候處、浪華滯在之兵、伏見邊ニ於テ朝敵之色顯然ニ候、依之、追々官軍御差向御征伐被爲在候ニ付、去ル三日夜、再度重キ　勅命ヲ被爲蒙、速ニ反賊征伐可致、尚其上錦御旗ヲモ下シ賜リ、粉骨碎身可抽忠誠云々、則同夜御同樣、紀伊中納言殿ヘモ重キ　勅命ヲ被爲下候、一々御文中ニモ戮力協和王事ニ勤勞可致云々被　仰出候、然ルニ、此節、橋本始岩出等ヘ非常人數出張ニ相成、且紀之川筋等、不殘渡船御引塞、往返之者ヲモ遮リ被拒、加之、今般再度之　勅命ヲ被爲下候ニ付、御守衛之內、藤村四郎、齋原治一郎兩人、中納言殿ヘ御使節被　仰付、若山表ヘ出張致候處、於其見張所、妄ニ行路ヲ遮リ拘留被致候趣、甚以無禮千萬之事ト存候、右等之態勢ニテハ、官軍ヘ抗敵被成候御疑念無之トモ難申候、此上ハ中納言殿之御底意承知仕度、御決答之時宜ニ因リ、決然一戰仕度候間、此邊之旨趣、今一應詰問可致旨被申聞候ニ付、速ニ御酬報致承知度、此段可得貴意如斯候、不具。

正月九日　　鷲尾侍從殿　執事

岩出御出張所　御重役中　高野山出張概略

○

王事ニ御勤勞可被成旨　勅定有之、尚又紀伊殿ヘモ同樣　御沙汰候ニ付、同所詰之番士共、御人數ニ對シ不都合ニ無之樣可相心得旨、御申越之趣承知仕、右ニ付テハ申迄モ無之候得共、其御手ニモ其御不都合無之樣、夫々ヘ爲御心得御達有之度候、依テ御報如斯候、以上。

正月九日　　橋本固所詰

鷲尾殿御雜掌中

御別紙御布告之趣委細相畏、夫々遵奉之心得ニ御坐候、依テ爲御報如斯候、以上。

正月　橋本固所詰

鷲尾殿御雜掌中　高野山出張概略

○薩摩、長門二藩兵、○時ニ備後尾道ニ在リ、備後福山城阿部正方ノ治所、ヲ徇ヘテ、之ヲ下ス。○葦下日載阿部正桓家記

○舊幕府老中ノ江戸ニ在ルモノ、伏見ノ戰報ヲ聞キ、諸藩ヲ戒メテ、急ニ西上ノ備ヲ爲シム。

去ル三日以來、於伏見邊戰爭之趣相聞候、何分不容易儀ニ付、不取敢相達候、就テハ急速上坂被　仰付候儀モ可有之候間、早々支度相整、出立被　仰付候テモ差支無之趣、兩三日中可被申出候事。板倉勝達家記 淀藩加藤某筆記

復古記　巻十七　終

總括兼纂修
一等編修官　臣　長松　幹

校勘
一等編修官　臣　長　炭
一等掌記　臣　四屋恒之

校錄
六等掌記　臣　澤渡廣孝

繕寫
二等繕寫　臣　小川長和
二等繕寫　臣　小島　春

復古記　巻十八

明治元年戊辰正月十日ニ起リ十一日ニ至ル

○正月

十日、聖護院宮ニ令シ、其修驗道ニ關スル者ハ、管領宮ト稱セシム、又知恩院宮ヲ改テ、華頂宮ト稱ス。

○　聖護院宮

以來、於修驗道、被稱管領宮候事。有栖川宮家記　非藏人日記

知恩院宮

自今、被稱華頂宮候事。有栖川宮家記　非藏人日記

○華頂宮家記ニ、十一日ニ錄シ、口達ト爲ス。

○徳川慶喜、松平容保、久松定昭、松平賴聰、松平定敬、板倉勝靜、大河内正質、及ヒ舊幕府屬僚永井尙志以下二十人ノ官位ヲ褫キ、容保以下六人ノ邸地ヲ沒シ、酒井忠氏、戸田氏共、本莊宗武、内藤政擧、備後守○延岡藩主、食封七萬石、稻垣長行ノ入京ヲ禁ス。

徳川慶喜　奥州會津　勢州桑名　讚州高松

豫州松山　備中松山　上總大多喜

若年寄

永井玄蕃頭

若年寄並

平山圖書頭（兼外國總奉行）　竹中丹後守（兼陸軍奉行）　塚原但馬守（兼外國總奉行）

大目付

戸川伊豆守　松平大隅守（舊大坂町奉行）

目付

新見相模守　設樂備中守　榎本對馬守　牧野土佐守

岡部肥前守（舊禁裏附）　大久保主膳正（舊京都町奉行）　小栗下總守（舊勘定奉行）　星野豐後守（舊禁裏附）

高力主計頭（舊京都町奉行）　小笠原河内守（舊京都見廻役）　大久保筑後守（舊禁裏附）　大久保能登守（不詳）

戸田肥後守（歩兵奉行）　室賀甲斐守（側役）

右、今度、慶喜奉欺　天朝、反狀明白、既ニ兵端ヲ開候ニ付、追討被仰出候、依之、右之輩隨從于賊徒、反逆顯然候間、被止官位候事。

奥州會津　勢州桑名　讚州高松　豫州松山

備中松山　上總大多喜

右、慶喜同意、反逆顯然候間、悉屋敷被召上、殘兵追放被　仰出候事。

但、殘兵、敵地迄可相送候事。

若州小濱　濃州大垣　志州鳥羽

右、御不審之次第有之ニ付、被止入京候事。

正月　島津忠義家記　春嶽私記

○附錄島津忠義家記ニ云、會津始六藩屋敷召上、殘兵追放ノ儀、土、藝、長、肥ト五藩人數、大工頭中井主水同道、屋敷有品、同人ヘ引渡候樣御達ニ付、一藩或ハ二藩請持相改、主水ヘ相渡候筋相伺候處、其通可取計旨、將亦殘兵ハ、洛外ヘ追拂、諸関場ヘ宛、書狀相渡旨伺候處、其通取計候樣御達アリ、松平賴聰家記ニ云、正月十日夕、島津修理大夫人數、其外　官軍、京都屋敷ヘ押寄參リ、朝命ニ付、屋敷差上、人數引拂樣申聞ニ付、屋敷相渡、即夜人數引拂、大坂モ同樣、細川護久家記ニ云、會、桑等ノ諸邸官沒、依之、薩、長、土、藝ト其命ヲ蒙リ、鬮ヲ探テ千本街ノ桑邸ヲ獲タリ、之ヲ改ムレハ空邸ナリ、卒ヲ置テ守ラシム。

○參與正親町公董ヲ大阪ニ遣シ、大政復古ヲ外國ニ報スルノ國書ヲ東久世通禧ニ付シ、通禧ヲシテ其事ヲ掌ラシム。

日本國天皇、告各國帝王及其臣人、嚮者將軍徳川慶喜請歸政權、制允之內、外政事親裁之、乃曰、從前條約雖大君名稱、自今而後當換以天皇稱、而諸國交際之職、專命有司等、各國公使諒知斯旨。

慶應四年

戊辰正月十日　睦仁　大日本國璽　葦下日載　春嶽私記

○葦下日載ニ云、右檀紙ヘ認メ、同紙上包　布告　二重箱入ト、春嶽私記、戊辰ノ字ナシ。

○　東久世前少將

兵庫表外國人應接被　仰付候事。東久世通禧履歴書

○公董手記ニ云、十一日、國書持參、東久世通禧、朝臣ヘ爲御使、浪華ヘ下向候事。

○通禧履歴書、十三日トス、辨九日外國事務取調掛ノ條下ニ見ユ、今國書ノ銜日ニ從ヒ、本日ニ收ム。

○楫取素彦長門藩士ヲ以テ、參與ト爲シ、岩倉具綱ヲ參與助役ト爲ス。

楫取素彦

右、下參與被　仰付候事。

辰正月　輦下日載

○

岩倉侍從

參與助役被　仰出候事。岩倉具綱履歴書

○德川慶喜征討ノ令、所謂制札、及ヒ舊幕府領地ヲ以テ直管ト爲スノ布告書所謂農商布告、ヲ三條、荒神口二橋ニ揭ケ、士民ノ賊徒ニ通スルヲ禁ス、又之ヲ諸道ニ揭示ス。

制札、

德川慶喜、天下之形勢不得已ヲ察シ、大政返上、將軍職辭退相願候ニ付、斷然被　聞食、既往之罪不被爲問、列藩上座ニモ可被仰付之處、豈圖ランヤ、大坂城ヘ引取候旨趣、素ヨリ詐謀ニテ、去ル三日、麾下之者ヲ引率シ、剩ヘ、歸國被　仰付候會、桑等ヲ先鋒トシテ、　闕下ヲ奉犯候勢、現在彼ヨリ兵端ヲ開候上ハ、慶喜反狀明白、始終奉欺　朝廷候段、大逆無道、其罪不可逃、此上ハ於　朝廷御寛恕之道モ絶果、不被爲得已、御追討被　仰出候、抑、兵端既ニ相開候上ハ、速ニ賊徒誅戮、萬民塗炭之苦ヲ被爲救度　叡慮ニ候間、今般、仁和寺宮征討將軍ニ被任候ニ付テハ、是迄偷安怠惰ニ打過、或ハ兩端ヲ抱キ、或ハ賊

徒ニ從ヒ居候者タリトモ、眞ニ悔悟憤發、國家之爲メ盡忠之志有之輩ハ、寛大之　思召ニテ、御採用可被爲在候、尤、此御時節ニ至リ、不辨大義、賊徒ト謀ヲ通シ、或ハ潜居爲致候者ハ、朝敵同樣、嚴刑ニ可被處候間、心得違無之樣可致候事。

戊辰正月　　　　參與

東海道先鋒記
東山道總督府叢紙

農商布告、

德川慶喜、天下之形勢ヤムコトヲ得サルヲ察シ、大政返上、將軍職辭退奉願候ニ付、其旨被　聞食候處、兼々大政返上ト申ノミニテ、土地人民返上ノ實効モ無之候ニ付、尾、越二藩ヲ以テ　御沙汰之次第モ有之候處、其節慶喜ニ於テハ奉畏入候得共、麾下竝會、桑之者共承服不仕、萬一如何樣之事出來候哉モ難計候ニ付、取押之儀精々盡力仕居候旨、言上ニ及ヒ候間、朝廷ニハ慶喜誠ニ恭順罷在候儀ト被　思召、是迄ノ罪ハ不被爲問、列藩之上座ニモ可被　仰付候哉ノ處、豈ニ計ンヤ、鎭撫之爲トテ大坂城中ヘ引取候ハ、元ヨリ僞リノ謀ニテ、去ル三日、麾下之者ヲ引連レ、剩ヘ前ニ歸國被仰付候會、桑等ヲ先鋒トシテ、　闕下ヲ犯シ奉ル勢、現在彼ヨリ兵端ヲ開キ候上ハ、慶喜之謀叛明白ニ相分リ候、尤始終朝廷ヲアサムキ奉リ候段、大逆無道、其罪ノカレカタク、最早、　朝廷ニ於テ御宥免被遊候道モ絕果テ、ヤムコトヲ得サセラレス、御追討被　仰出候、一度兵端相開キ候上ハ、速ニ賊徒誅戮、萬民塗炭ノ苦ミヲスクハセラレ度　叡慮ニ候間、今般、仁和寺宮征討將軍被　仰付候ニ付テハ、是迄、前後之心得モナク打過、或ハ二心ヲイタキ、或ハ賊徒ニ從居候者タリ共、實ニ悔悟イタシ、　朝廷御用ニ相立度存込候者ハ、寛大之　思召ニテ御取用可被爲在候、且、是迄、德川支配イタシ候地所ヲ天領ト稱シ居候ハ、言語道斷之儀ニ候、此度、往古ノ如ク、總テ　天朝之御料ニ復シ、眞ノ　天領ニ相成候間、左樣相心得ヘク候、尤、此時ニ至リ、大義ヲ辨ヘテ、賊徒ト謀ヲ通シ、或ハ殘黨ヲカクシ置候者ハ、朝敵同樣、嚴刑ニ可被處候間、心得違無之樣可致候事。

東海道先鋒記
北陸道先鋒記

○春嶽私記ニ云、同十日、三條大橋、竝荒神口大橋辻ヘ被揭制札、及農商布告。

○柳原前光輒誌ニ、八日、橋本大夫爲勅使入來、制札號令等持參、依テ、德川內府掛置候制札撤却、右掛替畢トアリ、蓋シ

東海道ヘハ先ツ發シ、都下ハ本日ニ至リテ掲示セシナルヘシ、東山、北陸二道ハ、漸次之チ掲示ス、先鋒記ニ見ユ。

○大ニ兵ヲ列藩ニ徵シ、特ニ織田信學ヲ召ス。

今般、御下問之儀有之被　召候得共、今日之形勢ニ至リ候間、大號令御趣意相心得、國力相應之人數可差出候事。藤堂高邦家記 稻葉久通家記

○

織田左近將監

先祖以來格別ノ家柄ニ付、先般被　仰出候通、速ニ上京御用相伺可申樣、更ニ　御沙汰候事。

但、病氣ニ候得ハ、息、上京可致候事。織田信敏家記

○肥後、筑前、因幡、出雲、郡山、淀六藩ニ令シ、德川慶喜征討、及ヒ慶喜以下官位褫奪、會津以下邸地沒收、酒井忠氏等入京禁停ノ令ヲ旁近ノ諸藩、及ヒ衆庶ニ傳布セシム。

別紙慶喜征討以下四條ノ令ヲ指ス、前ニ見ユ、之通申渡候間、五畿、七道大小之輩末々ニ至ル迄、漏脫無之樣可相觸候事。黑田長知家記

○

西海道

右、筑前、肥後兩家ヨリ、夫々達方取計候樣、被仰付候事。

正月　黑田長知家記

○細川護久家記ニ云、右御書付慶喜征討以下四條ノ令ヲ指ス、ニ、左ノ御書付西海道云々ノ書ヲ指ス、モ御添、一同渡サル。

○池田輝知家記ニ云、山陰道諸藩ヘ觸達ノ儀、雲州藩持分ケニテ相達候樣、御口達有之。

○柳澤保申家記ニ云、稻葉美濃守、柳澤甲斐守ヘ、別紙御書付四通御渡有之、大和、和泉、河內、攝津四ケ國中、末々ニ至ルマ

テ觸達可仕旨、被仰渡候。

○長知家記、十一日トシ、池田輝知以下四家家記、十二日ニ收ム、蓋シ漸次ニ發セシナリ、今、護久家記ニ據ル、又七道皆此事アルヘシ、然ルニ六藩ノ外見ル所ナシ、按スルニ、地方ヲ分チ、其大藩ヲシテ命令傳布ノ事ヲ掌ラシム、是レ諸藩觸頭ノ權輿ナリ、二月八日ニ至リ、始テ觸頭二十四藩ヲ定ム。

○附錄郡山淀二藩申請書

五畿、七道ヘ觸達仕候樣御達之趣奉拜承候、就テハ左之件々奉伺候、

一京屋鋪詰合之向ヘ、爰元ニテ相觸可然哉之事、

一大坂市中並寺社領、是迄御代官所之分觸達可仕哉之事、

右之分、如何可仕哉奉伺候、以上。

正月十二日

松平甲斐守內　小牧文作

稻葉美濃守內　岡鋤之助

○批紙

第一條　京屋鋪詰合之向ニテ宜候、

第二條　伺之通。　稻葉正邦家記

○

五畿七道ヘ觸達仕候樣、去ル十二日御達之趣奉畏候、右ニ付、　宮御門跡、比丘尼御所等ヘ觸達之儀、如何仕候テ宜御座候哉、此段奉伺候、以上。

柳澤甲斐守内
小牧文作

正月十六日

○批紙

此儀觸達ニ不及候。柳澤保申家記

○附錄因幡出雲二藩申請書

此度被　仰付候山陰道觸達之儀ニ付、左之條々、如何相心得可申哉、

一御所御領

右、山陰道ノ内ニ御座候ハヽ、御直觸ニ相成可申哉、

一宮堂上方御領

右、御領主ヨリ夫々御達シニ相成可申哉、

一德川領

右ハ、別紙三冊、石州等之代官所迄、最寄之諸藩ヨリ相觸候樣、申達候テ可然哉、

但シ、隱岐國ハ、兼テ雲州預リ所ニ御座候事、

一別紙之通、兩藩ヨリ相觸可申、其内石州濱田領之所、如何相心得可申哉、

一交代寄合旗本領

一寺社領

右、最寄之諸藩ヨリ相觸候テ、相達候康々、追テ申上候樣仕度、

右奉窺候、以上。

因幡中將內

正月十六日

野村儀左衛門

出雲少將内

別所武三郎

別紙、

丹州小堀數馬 丹後但馬 久美濱代官所 但州生野代官所 石州大森代官所

篠山 龜山 福知山 園部 柏原 綾部

山家 田邊 峯山 宮津除之 豐岡 出石

右、因州ヨリ相觸申候、

隱州 雲州預リ所 石州 津和野

右、雲州ヨリ相觸申候。

○批紙

石州濱田之儀ハ、長州ヨリ相觸サセ申候。池田輝知家記

○徳川慶勝ニ命シ、舊幕府屬吏等ノ京ニ在ルモノヲ草津ニ押送シテ、之ヲ放タシム。

尾張大納言

徳川慶喜旗下之者共、江戸表へ差下之儀ハ、草津迄護送、自夫放逐可致候事。

五月 徳川義宜家記

○十二日慶勝上申書

大坂へ護送之分

目付 梅澤孫太郎 勘定格徒目付 内藤貫助

普請役格小人目付　伊藤八三郎

小人目付　宇佐美新太郎　小島政三郎　平山竹之助

黑鍬之者　笹間榮藏

草津迄護送之分

玉藥奉行並　長谷川織江家族五人

同人支配之者　拾三人家族十四人

藏奉行　神尾安太郎　中村雅太郎

玉藥奉行　西村鐵太郎

同組　大森平三郎　森　金三郎

陸軍附調役　石橋半平

同下役　鈴木鉡三郎　岡田障太郎

目付書役　新井鎌二

騎兵方取締　岩瀨萬助　栗栖悅太郎

永井玄蕃頭家族　拾三人　德川義宜家記

○因幡藩及ヒ其支藩兵ニ令シテ、東海道鎭撫總督ニ屬セシメ、其橋本警守ヲ罷メ、肥後藩兵ヲ以テ之ニ代ヘ、柏原藩兵ヲシテ山陰道鎭撫總督ニ屬セシメ、其白川越警守ヲ罷メ、尋テ新發田藩兵ヲ以テ之ニ代フ。

橋本關門御警衛被　仰付置候處、東海道警衛御手薄ニ付、速ニ大津出張、總テ總督ノ指揮ニ可從　御沙汰候事。

正　月　（池田輝知家記）

○　　　　　　松　平　相　模　守

右、橋本關門之固被　仰付置候處、被免候間、早々大津表へ出張、總テ總督之指揮ニ從ヒ、可致進退　御沙汰ニ候事。

正　月　十　日　（池田德定家記）

○細川護久家記ニ云、十日、橋本關門守衛ノ御下命有之、隊長步卒共八十餘人出張ス。

○　　　　　　織　田　出　雲　守

山陰道鎮撫總督西園寺三位中將爲守衛、出張可致　御沙汰候事。

但、進退緩急之儀、總テ總督之指揮可隨事。（織田信親家記）

○　　　　　　織　田　出　雲　守

白川越坂本口御固被免候間、速ニ引拂、山陰道鎮撫總督西園寺三位中將手ニ屬シ、宜抽軍功旨、被　仰下候事。

正　月　十　日

追テ、西園寺三位中將へ別段御沙汰無之候間、著之上此旨可申候事。（織田信親家記）

○十二日新發田藩へ達書　　　　　　溝　口　誠　之　進

白川越坂本口ハ咽喉樞要之御場所ニ付、堅固衛護可致　御沙汰候事。（溝口直正家記）

○平戸藩守兵ヲ闇嶺ニ出スヲ以テ、郡山藩ノ向背ヲ稟請ス。

此度、闇峠守衞被　仰付候ニ付、人數出張爲仕可申候處、郡山藩之儀ハ、關東特恩之家筋ニモ可有之、旣ニ人數出張罷在哉ニモ風聞仕候、右ハ　王命遵奉之筋ニ御坐候哉、正邪分明不仕候ニ付、心得方ニモ仕度、此段奉伺候、以上。松浦詮家記

○詮家記ニ云、十二日、郡山藩ハ勤王ノ段、參與穗波殿ヨリ達セラルト。

○滋野井公壽、綾小路俊實、兵ヲ近江松尾山ニ集ム、是日、書ヲ上リ、命ヲ奉シテ賊ヲ討センコトヲ請フ。

伏惟、京攝之間　朝敵追討之儀、勤　王之諸藩日々奏功、實以恐悅奉存候、就テ東方之處、如何被爲在候哉ト心痛仕、於江州愛知郡松尾寺村松尾山金剛輪寺學頭妙壽院、爲勤　王義勇之士ヲ相募リ候處、不期シテ志士蜂ノ如ク起リ、雲ノ如ク集リ、昨今忽二百人ニ餘リ候、是全ク　朝威ノ赫々タル所以ト深奉感戴候、此上、追々誠義之徒蟻集可仕候、若王命ニ不隨之賊於有之ハ、速ニ退治可仕存候間、此段言上仕候、或卽今可追討所モ有之候得ハ　朝命奉戴、如何成强賊ヲモ誅戮可仕候、所集ノ兵士ノ儀ハ、實ニ水火モ不相避者共ニテ、於公壽、俊實モ、固ヨリ決意ノ事ニ有之候得ハ、可然　御沙汰奉希度、此段宜御執奏奉願候也。

正月九日　俊實　公壽

議定

參與御中　大原重實事蹟書

○池田慶德、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシメ、池田輝知家記戸田氏良、疾ヲ以テ、上京遲延ヲ

謝ス、戸田氏良家記九鬼隆義、江戸ヨリ京ニ至ラントス、疾ヲ以テ、姑ク藩ニ歸ルヲ稟ス。九鬼隆義家記

○大將軍、大坂ニ抵ル、本願寺支院ヲ以テ牙營ト爲ス。

○東伏見宮家記ニ云、辰刻、牧方驛ヨリ御乘船、御下阪御入城ノ御覺悟ノ處、巳刻、華城出火、依之、以本願寺假坊爲御本陣。

○備前藩兵、櫻井忠興ノ向背ヲ問フ、忠興ノ老臣、奉上貳ナキノ證書ヲ致ス。岡山藩記

○舊幕府老中ノ江戸ニ在ルモノ、討薩表及ヒ檄文ヲ諸藩ニ示シ、酒井忠寶家記松平直克ニ令シテ、江戸ヲ警守シ、阿部正靜美作守○棚倉藩主、食封十萬石、ニ薩摩藩ノ支邸ヲ收メシム、又立花種恭出雲守○下手渡藩主、食封一萬石、ヲ以テ、老中格會計總裁ト爲ス。立花種恭家記

松平大和守へ

京坂之間、不容易事態ニ相成、當地之儀ハ御根據ニテ、當地之動靜ハ、總テ彼地總軍之氣勢ニ關係致シ候間、一際御取締不相立候テハ不相成次第、就テハ御府内御警衛筋之儀、兼テ苦心被致候儀ニ付、諸事申立候儀モ有之候ハ、都度都度登　城致シ、無斟酌可被申聞候、尤當今之御場合、上坂之上可抽忠節筈之處、御根據堅實專要之儀ニ付、於爰元必至盡力致シ、酒井左衛門尉厚申談、御警備嚴重相立候樣可被致候。淀藩加藤某筆記

○

阿部美作守へ

松平修理大夫奸臣共、兵仗ヲ以テ　宮闕ニ迫リ、　奉侮　幼主、私論ヲ主張シ、　先帝御依託之攝政殿下ヲ廢シ、恣ニ宮堂上方ヲ黜陟シ、或ハ家來共浮浪之徒ヲ語合、屋敷ヘ屯集、江戸市中押込強盜致シ、酒井左衛門尉人數屯所ヘ砲發亂妨、其他野州、相州等、所々燒討、劫盜ニオヨヒ候證跡分明ニ有之、殊ニ此程　御上洛之前路ヲ遮リ、砲發亂暴、終ニ京坂之間不容易

事態ニ押移候段、畢竟修理大夫奸臣共之所業ニ出候事ニ有之、依之、各邸共被召上、在府之家來共者一同、急速國許退去候樣可致候、

右之趣、松平修理大夫家來共ヘ可被達候。島津忠義家記

○阿部正功家記ニ云、稻葉美濃守ヨリ達ニ付、幸橋御門内ニ罷在候修理大夫家來ヘ卽時相達、一ト先、伊皿子大圓寺ヘ爲引取候事。

十一日、尊秀親王ニ命シテ、仍鎭西、西山ノ宗派ヲ管セシム。

知恩院宮

今度、復飾被　仰出候得共、其宗門之儀ニ付、　思食モ有之候間、卽今之處、一宗鎭西、西山兩派共、　是迄之通、支配更ニ被

仰出候事。華頂宮家記

○案スルニ親王、昨日既ニ華頂宮ト改ム、而シテ本書仍ホ知恩院宮ト署ス、蓋シ其改稱ニ際スルヲ以テ、偶然失誤セシナルヘシ。

○石山基正、萬里小路通房ヲ以テ、參與助役ト爲ス。

石山右兵衛佐

萬里小路右少辨

參與助役被　仰出候事。石山基正履歷書 丹羽氏中家記

○通房ノ宣旨、原記ヲ失ス、氏中家記同達書中ニ、基正ト連書スルヲ以テ、此ニ收ム。

○朝集會議ノ命ヲ止メ、諸侯ニ申令シ、兵ヲ率ヰテ入覲セシム、因テ在京ノ藩臣ヲシテ各其期ヲ上申セシム。

兼テ被　召設候儀ハ、至公平ノ衆議ヲ可被爲採　思召之所、豈圖ランヤ、突然干戈ニ至リ、終ニ大號令被發候通ニ付、各國力相應人數引纒、速ニ上京可有之　御沙汰候事。

正　月

但、危急之御時節ニ付、速ニ上京勿論ニ候得共、路程遠近モ候事故、凡之所、在京重役或ハ留守居共見込之趣可申出、其上御沙汰之旨モ可有之、猶又當主所勞等ニテ上京難致向ハ、名代又ハ家老之者可差出候事。

前田慶寧家記
黒田長知家記

○

兼テ被召設衆議可被爲採　思召之處、突然干戈ニ至リ候ニ付、國力相應人數引纒、速ニ上京可仕、尤路程遠近モ有之候ニ付、凡ノ處見込申上候樣、且當主所勞等ニテ、上京難仕候ハヽ、名代又ハ家老之者可差出旨、委細御達之趣奉畏候、右之趣、急速國許ヘ可申越候、然ルニ海陸相隔リ候ヘハ、遲速ノ程何共難申上候ヘ共、凡十五日前後ニハ必國元ヘ相達可申、左候時ハ、御達之趣承知仕候上ハ、速ニ上京可仕候樣相見込申候、此段愚考之儘申上候、以上。

正　月　　　　松平美濃守内

井上六之丞

黒田長知家記

○此外、秋田、盛岡、米澤、二本松、對馬、宇土藩臣等ノ上申書アリ、其甚タ緊要ナラサルヲ以テ之ヲ略ス。

○安藝、備前、土佐三藩ニ命シテ、福山、備後○阿部正方ノ治所、松山、備中○板倉勝靜ノ治所、高松、讃岐○松平頼聰ノ治所、松山、伊豫○久松定昭ノ治所、ヲ討シ、且ツ備中、備後、讃岐、伊豫ノ舊幕府領地ヲ收ム、因テ各菊章旗ヲ賜フ、征討府モ亦薩摩、安藝、長門、因幡、土佐、津六藩ニ令シテ、高松、松山伊豫、大垣、美濃○戸田氏共ノ治所、姫路播磨○酒井忠惇ノ治所、ヲ討ス、又薩、長二藩兵ヲシテ兵庫ヲ管理セシム。

安藝少將

德川慶喜反逆妄擧有之上ハ、備中國河邊以西、備後國福山始、是迄ノ幕領、總テ征伐沒收可有之被　仰出候、宜軍威ヲ嚴ニシ、速ニ可奏追討之功之旨　御沙汰候事。

正月十一日

○

安藝少將

追テ、兩國中幕領之儀ハ勿論、幕吏卒之領地ニ至迄、總テ取調言上可有之候、且人民鎭撫、偏ニ可服　王化樣可致處置候事。

淺野長勳家記
阿部正桓家記

○

征討被　仰出候ニ付、　御紋御旗二流下賜候事。

正月

淺野長勳家記
阿部正桓家記

○

備前少將

備中松山板倉伊賀儀、德川慶喜反逆之妄擧ヲ助候條、其罪天地不可容ニ付、征伐之儀被仰付候、且同國倉敷、其外國中、是マテ幕領之分、總テ沒收可有之被　仰出候、宜軍威ヲ嚴ニシ、速ニ可奏追討之功之旨　御沙汰候事。

正月十一日

追テ備中國中幕領之儀ハ、勿論幕吏之領地ニ至リ、摠テ取調言上可有之候、且人民鎭撫、偏ニ可服　王化樣可致所置候事。

池田章政家記

○

備前少將

征討被　仰付候ニ付、　御紋御旗二流下賜候事。

正　月　池田章政家記

○

土　州　少　將

德川慶喜反逆妄擧ヲ助候條、其罪天地不可容ニ付、讚州高松、豫州松山、同川ノ井始、是迄幕領、總テ征伐沒收可有之被　仰出候、宜軍威ヲ嚴ニシ、速ニ可奏追討之功ノ旨　御沙汰候事。

正　月　十　一　日

但、兩國中、幕領ノ儀ハ勿論、幕吏卒ノ領地ニ至リ、總テ取調言上可有之、且人民鎭撫、偏ニ可服　王化樣可致所置候事。山内豐範家記

○豐範家記、御旗下賜ノ達書ヲ佚ス、高知縣史料ニ、十九日曉、樋口眞吉、錦旗ヲ護シ姫驛ニ著ス、書二字、全軍丸龜ニ達ストアリ。

○征討府達書

藝　州　長　州

土　州　藤　堂

因　州　薩　州

高松　　松山　　大垣　　姫路

右四藩、從來奉輕蔑　天朝候儀不少候處、剩、今度慶喜叛逆ニ與力シ、官軍ニ敵シ候段、大逆無道、依之、征罰之軍被差向候事。

正　月　十　日

別紙、四藩征伐之砌、甲兵ヲ退ケ、伏罪致シ候節ハ、十分寛典處置可致候事。

正月十日　毛利元德家記　松平賴聰家記

○本書、十日ト署ス、而シテ其發セシハ本日ノ曉ニアリシコト、廣島藩記ニ見エタリ、災後原記ヲ失ス。

○征討府達書

薩、長兩藩申合、兵庫表鎭撫取締方可致、被　仰付候事。

正月十一日　毛利元德家記

○滋野井公壽、綾小路俊實、京ヲ去ルノ罪ヲ宥シ、命シテ義兵ヲ召集シ、東海道鎭撫總督ニ屬セシム、又堂上ニ告諭シテ、公壽、俊實ノ擧ニ傚フコト勿カラシム。

○公壽俊實ヘ達書

不憚朝憲脱走之儀、追々　朝裁被爲在候、然ルニ、時勢ヲ察シ、兵ヲ擧ケ脱走之儀、深被爲在　叡感候、猶、皇軍奮興義徒召諭、厚鎭撫致可申事。　大原重實家記

○

來翰令披見候、方今中興之機會、不忍座視傍觀之忠志ヨリ被及脱走候條、犯朝憲候儀ハ、甚不容易儀ニ候得共、勤　王之爲メ不顧身命憤發、被及義擧候段ハ神妙之儀、　叡感思召候、然ルニ、頃日、追討ノ諸兵決死奮戰之力ニヨリ、賊徒速ニ敗亡、德川慶喜遂ニ東奔ニ及ヒ、南方一旦鎭定ニ及候上ハ、其地屯集之義徒等、厚被加鎭撫、彌以淬勵、赫々　皇軍之威光ヲ被輝候テ、必輕動無之様可被致、猶、征東之官軍不日進發ニ可及候間、東海道鎭撫總督實梁朝臣之手ニ屬シ、應援戮力、桑名城ヲ襲撃可有之候、彌以勉勵、奉安　宸襟候様可有奉公旨、總裁宮御沙汰有之候、仍テ回答如此候也。

正月十一日　議定

滋野井侍從殿

綾小路前侍從殿 大原重實家記 東海道先鋒記

○告諭書

滋野井公壽、綾小路俊實脫走、犯　朝憲候條、不容易儀ニ候得共、賊勢强盛之際ニ當リ、不顧成敗奮發及義擧候段ハ、神妙之事候間、以非常之　思召不被爲咎候、然ルニ、頃日、慶喜東奔、賊徒等既ニ及退散候上ハ、猥ニ公壽、俊實等之擧動ニ傚ヒ、勢ヲ見テ進退致候輩於有之ハ、屹度可被糺　朝典候間、心得違無之樣、總裁宮御沙汰候事。 有栖川宮家記 東海道先鋒記

○加藤明實、其邑賊兵ノ走路ニ當ルヲ以テ、京市巡邏兵ヲ罷歸シテ、賊ヲ追擊セント請フ、乃チ併セテ其內侍所、建春門ノ守衞ヲ罷メ、明實ヲシテ歸藩セシメ、明實、十二日途ニ上ル 新谷藩兵ヲシテ代リテ內侍所及ヒ建春門ヲ守ラシム、又肥後藩ノ橋本警守ヲ罷メ、加賀藩兵ヲ以テ之ニ代ヘ、高取藩兵ノ京市巡邏ヲ罷メ、十津川鄕兵ヲ援ケテ、大和ノ殘賊ヲ勦セシム。

今十一日曉、在所重役之者ヨリ以急飛脚、昨十日早朝、領分近邊ニ大砲發聲仕候ニ付、卽刻斥候之者差出候處、賊徒共、白大和路宇治信樂ヘ脫走致來、追々在所表ヘ近寄候旨申來候、何分素ヨリ微力之處、能登守過半人數召連、舊臘上京仕、留守中、老幼微弱之者而已、計策更ニ無之、痛心焦慮仕候、且殘黨追々集合仕候哉モ難計旨申來候、別テ領下要害阨地モ無之、實以目今燃眉之窮迫ニ付、市中巡邏之儀被成下　御免、右人數ヲ以テ賊徒追討仕度奉存候、猶時機注進次第、能登守儀モ歸邑之儀可奉願上候得共、卽今、不取敢、市中巡邏被成下　御免候樣、偏ニ奉懇願候、以上。

加藤能登守家來

正月十一日　西村均兵衛　加藤明實家記

○加藤明實へ達書

在所表賊兵追々狼藉之趣、速ニ討伐可致、依之、　内侍所御警衛、市中巡邏等被　免候間、早々歸國、東海道總督之指揮ニ從ヒ、進退可致事。

正月十一日　加藤明實家記

○　加藤出雲守

内侍所御警衛申付候事、

日ノ御門御警衛申付候事、

但、南門御警衛其儘。加藤泰令家記

○新谷藩記ニ云、内侍所警衛並日御門御旗御守衛、加藤能登守代被仰付候ト。

○細川護久家記ニ云、橋本關門御守衛、十二日達書到達ノ日ナルヘシ、被免ト、但達書ヲ佚ス。

○　加州

橋本關門固被　仰付候間、早々人數差向、嚴重可相守　御沙汰候事。

正月十一日　前田慶寧家記

○　植村駿河守

和州表賊徒殘兵狼籍之聞ェ有之候處、十津川鄕士微力、誅伐行届兼候趣ニ付、同心盡力、速ニ追討可致　御沙汰候事。

正月十一日　植村家壺家記

○家壺家記ニ云、右ニ付、市中巡邏之儀被免候間、一先人數引拂、鎭靜之上、早々上京可仕旨、被仰渡候ト。

○朽木爲綱、將ニ入覲セントス、其家臣京ニ在ルモノ、印票ヲ賜ヒ、以テ道路ノ障礙ニ備ヘント請フ、命シテ、山陰道鎭撫總督ノ指揮ニ從ハシム。

當今之形勢ニ付、不取敢近江守人數少々、去ル八日登京仕候、途中丹波國檜山邊ニテ西園寺樣御宿割薩州藩壹岐清兵衛、長州藩中山九八郎ト申仁ニ出會候處、執銃ニテ上京ハ御差留ニ付、近江守ニモ近日奉伺　天機候存意ニ御坐候故、右樣、若シ途中ニテ御差留相成候テハ不都合ニ候間、一先引取、近江守ヘモ其旨可申聞候間、上京少々遲延相成候段、右西園寺樣迄御斷申上置候趣、家來之者途中ヨリ申越候、何卒相成儀候得ハ、御印鑑樣之品ニテモ御下被成下候樣奉願度、左候ハ、右ヲ以テ早々上京仕候樣取計度、此段私ヨリ奉願候、以上。

朽木近江守家來

正月十一日　中野齋

○批紙

印鑑之儀ハ難相成、總督之儀、原文誤脫アリ、入京延日候共、西園寺命令ニ可隨之事。　朽木綱鑑家記

○池田慶德、德川慶喜ノ至親タルヲ以テ、上表シテ罪ヲ待チ、禁門守衛ハ故ノ如クナランコトヲ請フ、池田德澄モ亦同ク表ヲ上ル。

德川慶喜儀、去ル三日ヨリ、麾下ノ士ヲ始メ、會、桑等ヲ先鋒トシテ、可奉犯　闕下、反逆ノ所業傳承仕候ニ付テハ、骨肉ノ

臣慶德ニ於テハ、奉對　朝廷謝罪之道無御座、深奉恐入候、依之、恐懼奉待罪候間、何分之　御沙汰被爲下候樣、宜御執　奏冀入奉存候。

正月七日　　因幡中將

池田輝知家記

○

別紙以書取奉言上候通、恐懼謹愼罷在候得共、御時節柄之儀ニ付、中立賣御門御警衛ハ勿論、追々人數繰出シ、相應之御用爲相勤申度奉存候、此段申上候樣、國許ヨリ申付越候、以上。

正月　　因幡中將家老
荒尾駿河

池田輝知家記

○池田德澄待罪書

本家ヨリ奉言上候通、於私儀同樣奉恐懼候ニ付、旅宿ニ差扣謹愼罷在候間、何分之　御沙汰被爲下候樣、宜御執成奉希入候、別紙之通奉言上候之處、恐懼謹愼罷在候得共、御警衛人數、其儘御用爲相勤申度奉存候、此段申上候。池田德澄家記

○德澄家記ニ云、十二日、差扣ニ不及、只今參朝被仰付ト、慶德批答ハ十九日ニ在リ。

○酒井忠氏ノ父忠義、右京大夫、兵ヲ率ヰテ召命ニ赴クヲ稟シ、且忠氏ノ爲ニ罪ヲ乞フ、戸田氏共モ亦召ニ應シテ西上スルヲ稟ス。

私儀、去ル八日被爲　召候ニ付、人數召連速登京可仕候、從來　先々帝樣ヨリ格別之奉蒙　御懇命、素ヨリ盡力忠勤仕度赤心ニ御座候、何卒、相應之御用被　仰付候樣、偏ニ奉願候、若狹守ヘモ兼々同樣申付相心得居候處、無據次第ニ付、江戸表ヨ

リ直樣下坂仕候折柄、當今之御場合ニ相成、終ニ出京モ不仕候段、甚以恐入候次第ニ御座候、右ニ付、　朝廷ヨリ　御沙汰次第、如何樣共處置可仕候、右御請申上候、以上。

正月十一日　　酒井右京大夫

酒井忠禄家記

○案スルニ、小濱、京師ヲ距ル二十五里、此書卽日上達スルノ理ナシ、蓋シ在京家臣ノ代作ニ係ル、此類、後一々之ヲ辨セス。

○

今般被爲　召候ニ付、右京大夫上京之儀、明十二日、若州表出立仕、平常ニ候得ハ、早々上京可仕候處、此頃、殊之外深雪ニテ、旅行果敢取不申候ニ付、來ル十六日京著之積ニ御坐候、就テハ道中筋御固所通行差支無御座候樣、其御筋ヘ御達被下置候樣奉願候、以上。

酒井右京大夫家來

正月十一日　　深栖務

酒井忠禄家記

○

私儀、去ル八日被　召候付、人數召連レ、早速登京可仕ト奉存候、素ヨリ　朝廷ヘ無二之忠勤ヲ盡シ可申心底ニ御座候、何卒相應之御用向被　仰付被下置候樣、偏ニ奉願上候、右御請申上候、以上。

正月十日　　戸田采女正

戸田氏共家記

○

今般被爲　召候付、采女正上京之儀、明十二日出立、來ル十六日、京著之積リニ御座候旨申越候、就テハ道中筋御固場所通行差支無之候樣、其御筋ヘ御達シ被下置候樣、奉願上候、以上。

正月十一日　　戸田采女正家來
吉田園平

戸田氏共家記

○小濱、大垣二藩、昨日入京ヲ止メラレ、本日此書ヲ上ル、相矛盾スルニ似タリ、案スルニ、入京ヲ禁スルノ達書、忠祿家記、十二日越藩ヨリ回達ト記シ、小原忠寛私記及ヒ本莊宗武家記モ亦、十二日トス、是ニ由テ之ヲ觀レハ、此書ハ、未タ達書ヲ受ケサルノ前ニ上リシモノナラン、忠祿家記又云、八日、岩倉殿ヨリ右京大夫人數召連可登旨御達シ、十一日請書差出スト、氏共家記ニ云、八日、正親町三條、岩倉二卿ヨリ被爲召候ニ付、吉田園平罷出、御尋問ノ次第逐一申出、御聞届相成、采女正早々上京、勤王ノ誠意言上候樣、在所ヘ大急可申達ノ旨被仰付ト、本書中、被召ノ字ハ、蓋シ此内意ヲ指ス。

○牧野誠成、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ京ニ至ラシム。

先般來、追々御達之趣、豐前守承知仕奉畏候、右ニ付、不取敢重臣上京申付、唯今著京仕候、且一隊之人數追々差登申候、猶著之上ハ御屆可申上候間、相應之御用被　仰付被下候樣仕度、尤豐前守儀ハ、舊臘被爲　召候節奉願候通、從來之宿疾、迅速上京モ難出來奉存候、併當節柄之儀ニ付、少ニテモ快方候ハヽ、速ニ上京可仕候間、御聞置被下候樣仕度奉存候、此段申上置候樣申付越候、以上。

正月十一日　　牧野豐前守家來
伏木熊吉

牧野弼成家記

○是ヨリ先、東海道鎭撫總督橋本實梁ニ命シ、舊大津近江、代官石原某、清一郎、信樂近江、代官多羅尾光

彌（織之助）ヲシテ軍資ヲ供億セシム、（橋本實梁私記）是日、實梁、光彌ヲシテ、舊ニ仍リテ、其地ヲ管セシム。

○光彌ノ達書、原記ヲ失ス、柳原前光輯誌十三日ノ條、光彌ニ命スル事ヲ載ス、然ルニ光彌俸祿故ノ如ナランコトヲ請フノ書、載セテ先鋒記十一日ノ條ニアリ、輯誌恐クハ追錄ニ係ル、故ニ姑ク本日ニ收メテ、光彌ノ書ヲ附記ス。

○

私儀、今般御代官被　仰付、是迄支配仕來候江城河勢州村々、支配可仕旨被　仰渡、冥加至極難有仕合奉存候、然ル所、是迄右四ヶ國ニテ拾萬四千石餘ノ内、高七萬四千石餘ハ諸入用金六百五十兩九十人扶持、高貳萬四千石餘ハ百兩貳拾人扶持、高四千石餘ハ五千石未滿ニ付、諸入用無之定ニテ、都合、諸入用金七百五十兩百十人扶持請取來候儀ニ付、以來共、是迄ノ通被下置候樣仕度、此段奉願候、以上。

辰正月　　多羅尾織之助

光彌　禹

東海道先鋒記

○山陰道鎭撫總督西園寺公望、酒井忠氏ノ大阪ヨリ逃レ歸ルヲ聞キ、之ヲ途ニ要シテ、其情ヲ問フ、是日、忠氏、謝罪書ヲ上ル、乃チ其兵器ヲ收メ、藩ニ還テ謹愼セシム。○西園寺公望家記

○備前藩ノ老臣日置忠尙、（帶刀、）兵ヲ率ヰテ西宮ニ赴ク、是日、其從兵外國人ト神戸驛ニ鬪フ。

○池田章政家記ニ云、丁卯十二月、攝州西ノ宮警衛被仰付候ニ付、右警衛家老日置帶刀ヘ申付、帶刀儀、戊辰正月四日、同勢召連岡山出立、十一日、攝州神戸町通行之砌、先手共既ニ外國人居留地ヘ差掛リ候折柄、外國人兩人、横合ヨリ猥ニ同勢之中ヘ割込候ニ付、種々相制候得共、聞入不申候處ヨリ、無據及刺擊、遂ニ發砲ニ至リ、彼ヨリモ兵隊繰出、一時拵合候得共、

素々不慮之事ョリ差起候儀ニ付、帶刀儀ハ山手へ引揚、物分レニ相成申候。

○爭鬪概略

千八百六十八年第二月四日火曜日、同勢百五十人ニテ、九ツ半ノ比、乘物官道ヲ通ル、之ヲ尋ルニ、肥前大村侯長崎ヨリ登坂之由、行列甚靜謐ナリ、次ニ來ル者ハ大ニ是ト異ナリ、午後、直ニ日本人百九十人計、鎗ライフルヲ以テ固メ、且小野戰砲ヲ曳テ兵庫ヨリカーベニ入ル、此中一人奇麗ナル者、高官ノ者ト見エタリ、騎馬之士ハ備前ノ家臣池田伊勢也、又一人ハヘイキ帶刀也、本陣凡六百人兵庫ニ在リ、又人數若干一里餘後ニ在リ、先陣カーベノ官道ヲ通ル比、コルリンストイフ外國人、立テ穩ニ之ヲ見テ在ル時、下ニ居レノ聲ヲ聞ニ、土人皆地ニ膝マツク、役人コルリンスノ立タルヲ見テ、一人來リテ令ヲ繰返シ、銃口ヲ以テ彼ヲ墻ニ壓ス、然レトモコルリンス逃去タリ、又シルハルリパークスノ騎兵二人、日本僕一人從フテ、徒ニテ銃ヲ携ヘス在リ、役人カノ僕ヲ引止メ、二人ノ外國人ハ兵卒ナルコト、彼ハ僕人ナルコトヲ聞キ、銃ヲ僕ノ腹ニ突當テ引金ヲ引タレトモ、幸ニ火移ラス、僕逃レ去タリ、

佛水手二人ヘイトリーリニサルノ家ヨリミンカルトノ店ニ行タリシニ、行列ノ通リ終ルヲ待コトヲ欲セス、行列ヲ横キリテ通リタリ、家臣ノ家來、馬ヲ飛下リ手ヲ以テ下知ス、土人皆膝マツキ、鎗ヲ携フル者鞘ヲハツシ、佛水手ノ一人ニ逼リ、殆ント之ヲ刺ントス、一人ノ水夫、手ヲ以テ鎗ヲ握リ、疵ツキナカラ友ヲ救フテ遁ル、日本人銃ヲ放發シ、差別ナク外國人ヲ見テ放發ス、然レトモ幸ニシテ外國人死スルモノ二人ニ過キス、佛水手一人傷ヲ被ムリ、合衆國方ネイダ船ノ年十八原文、脱誤アリ、肩ニ銃丸中リ、昨日迄ハ之ヲ拔コト能ハス、此放發中、シルハルリーパークス護卒一人從ヘテ在シニ、銃丸數度近ツキタリ、パークスコンシュル館ニ行テ事件ヲ告ケ、外國人騷ク原文、脱誤アラン、彼人列ヲ離レテ放發ス、一人ノ銃丸覘ヒ高ク、外國旗ヲ撃カト思フハカリ、又或外國人白刄ノ鎗ヲ見テ怪シク思ヒ、走リテ其朋友ニ告クル、此ニオイテ風聞諸方ニ廣マル、

英コンシュル館ヨリ合圖アリ、リウテナントブラッドショウ、リウテナントブリウス、第九ノ部兵ヲ卒シテ居留地ニ驅來リ、二隊ニ分レ、ブリウスハ官道ヲ下リ、ブラッドショウハ大坂街道ヲ進ム、一里ハカリ進ンテ日本兵ニ追及フ、日本兵返

シ戰ヒ、暫シテ小部分ニ分レ、山ノ方ヘ逃去タリ、英軍ノ左ニ亞佛海軍アリ、シルハルリーパークス、騎兵ヲ以テ日本兵ヲ追ヒ、小野戰砲二門ヲ奪フ、此時、英兵上陸、亞兵ト共ニ日本兵ヲ追フ、日本兵餘程狼狽セシト見エ、荷物打捨アリ、陣笠鞋マテ遺シタリ、外國兵數時間徘徊シタレトモ、敵ニ出會セス、カーベニ返ル、カーベノ一方ニ在リシ備前本陣、翌朝二字比裏路ヨリ近キ山ニ遁レタリ。（慶明雜錄）

○此書、蓋外國人ノ草スル所ニ係ル、且訛誤讀ミ難キモノアリ、他書ノ參考スヘキナキヲ以テ、姑ク原文ニ從フ。

○

今日、松平備前守家臣池田伊勢、ヘイキ帶刀、カーベ通行之節、其從者、サシタル事件ナク、鎗銃砲ヲ以テ外國人ヲ殺傷セリ、由テ早々來リテ次第申聞シコトヲ欲ス、若此罪償ハスンハ、各國ノ敵タルヘシ、此儀、只備前一國ニ係ルニ非ス、日本ノ迷惑トナルヘシ、

右、千八百六十八年第二月四日、（即チ正月十一日、）兵庫ニオイテ各國ミニストルヨリ出ス。（慶明雜錄）

○

日本松平備前守家臣池田伊勢、日置帶刀兩人、神戶通行之節、右兩人供之者ヨリ、無故銃砲器ヲ以テ外國人ヲ襲フ、如何ナル故ニ討哉、早速申譯罷出可申、若各國外國ニモ滿足スル樣申譯於不相立ハ、彌外國ニ對シ干戈ヲ動スニ至ルト見定メ、尙外國ヨリ所置ニオヨヒ候ヘハ、唯備前藩ニ不限、總テ日本國中之大災ト可相成事。

正月十一日

右、日置帶刀小者、夷人ヘ召捕、色々及詰問居候ヲ放逐セシメ候節、相渡候書面。（慶明雜錄）

○舊幕府老中、榊原政敬ノ東叡山守衛ヲ罷ム、（榊原政敬家記）是日、米國公使館書記官エアルセホルトメン、書ヲ舊幕府老中ニ致シ、上國變動措置ノ方ヲ聞キ、以テ自ラ處セント請フ。

千八百六十八年横濱合衆國公使館ニテ

江戶外國事務執政

小笠原壹岐守閣下

大坂ニ於テ近頃變事起リ、且余カ得タル報告ニ就テ考フルニ、大君殿下之仇敵ハ、速ニ江戶竝當港ニ來ランカト思ヘリ、故ニ余此地ニ於テ米里堅ニ關ル切要ナル守護ヲ用意センカ爲メ、閣下ヨリ自今之形勢ニ於テ大君殿下之取用ヒ給ヒシ處置ヲ、速ニ余ニ告知シ給フ樣ニ希フコト、余カ當然ノ職務ナリ、恐惶敬白。

エアルセホルトメン

外務省記

○外務省記ニ云、來翰ノ文意、返書ニ盡シ難キヲ以テ、外國奉行連署ノ書ヲ以テホルトメンヲ招ク、之ヲ領シ、十四日江戶ニ來ントス、適外國奉行竝杉浦武三郞、橫濱ニ出張ノ事アツテ、ホルトメンニ會話、事濟タリ、故ニ壹岐守ヨリ別段囘答ナシト。

復古記　卷十八　終

總括兼纂修
一等編修官　臣　長松幹
校勘
一等編修官　臣　長炗
一等掌記　臣　四屋恒之
校錄
六等掌記　臣　澤渡廣孝
繕寫
二等繕寫　臣　小川長和
二等繕寫　臣　小島春

復古記　巻十九

明治元年戊辰正月十二日ニ起リ十四日ニ至ル

○正月

十二日、詔シテ、島津茂久、淺野茂長、毛利敬親、池田慶德、山內豐範ノ復古ノ勳、及ヒ征討ノ功ヲ賞シ、御劍各一口ヲ賜ヒ、又藤堂高猷ノ戰功ヲ賞シ、茂久等五人ト並ニ金幣ヲ賜ヒ、以テ藩士ノ戰死者ヲ弔シ、德川慶勝、松平慶永、伊達宗城ノ復古ノ勳、及ヒ細川喜廷、蜂須賀齊裕、井伊直憲、松浦詮、本多康穰、加藤泰秋、龜井茲監、毛利元功、池田德澄、大村純熙、島津忠寬、小出英尙、加藤明實、池田德定、織田信親、市橋長義、池田政禮、久留島通靖、京極高典ノ軍勞ヲ賞ス

各通

薩摩少將

安藝少將

毛利大膳大夫

因幡中將

土佐少將

其藩事、積年抱勤　王之志、勳勞不少候處、應　召登京、　朝議之旨速ニ奉行、彼是周旋、遂ニ使　王道復前古、殊ニ八去三日、逆賊突然北上之砌、於伏見表防禦、其後連戰、處々ニ追擊、軍威之盛ナルコト、實ニ前古ニ不愧也、而テ遂ニ巨魁慶喜落

膽、捨浪華城遁去之趣、達　宸聽　天感不斜候、愈以勵兵勢、居其巢穴、可耀　皇軍稜威於內外候、依之、御劍一振、卽今恩賞迄ニ下賜候旨　御沙汰候事。島津忠義、池田輝知家記、輦下日載

○豐範家記、原文ヲ佚ス。

○

各通

薩藩戰死人

藝州戰死人

長藩戰死人

因幡藩戰死人

土藩戰死人

今度、就兵革、其藩士之輩、殉國戰死者共、具ニ達　天聽、被爲愴　叡情候條不淺、宜厚其葬禮、恤其親眷、慰忠魂于九原之下、依之、營辨之貲賜金五百兩候、藩士ヨリ可頒與之旨　御沙汰候事。

但、設一社、聚其忠魂、永可被命祭、被　思召候事。島津忠義、池田輝知家記、輦下日載

○藝、因、土三藩ハ、賜金三百兩ニ作ル。

○島津忠義家記ニ云、今日、大守樣御衣冠ニテ御參　內ノ處、小御所ニ於テ被拜　天顏、勅書一通總裁宮樣ヨリ、御劍一振西四辻大夫樣ヨリ御渡、同御廊下ニテ御金五百兩、勅書一通、岩倉前中將樣ヨリ御渡相濟候テ、已前之御控席ヘ御復座候處、御取肴御二盃、御酒一樽、御頂戴被　仰付候。

○毛利元德家記ニ云、二月十二日、長門守參內之節、於　小御所御下段、議定中山卿、正親町卿御列座、中山卿御演達之書取、去月三日、逆賊慶喜上京之砌、防戰盡力、賊勢速ニ退散之儀、　叡感之至　思召候、於御褒詞ハ、先達テ毛利平六郎ヘ被仰渡候得共、今日參內之間、御劍賜之候事、

但、拜領之御劍銘陸奥守藤原兼信、御仕立赤銅金小緣、地眞七子、金菊桐御紋。

○
藤堂和泉守

其藩事、去ル六日、賊徒襲來之砌、於山崎拒戰追擊、遂ニ巨魁慶喜落膽、捨浪華城遁去之趣達　宸聽、天感不斜候、愈以勵兵勢、屠其巢穴、可耀　皇軍稜威於内外旨　御沙汰候事。藤堂高潔家記

○津藩賜金ノ達書、藝、因ニ同シ、故ニ略ス。

○
各通
尾張大納言
越前大藏大輔

國家多難之砌、應　召登京、　朝議之旨速ニ奉行、彼是周旋、遂ニ使　王道復前古候段、　叡感不斜候、愈以勵忠志、可爲　皇室之維城旨　御沙汰候事。春嶽私記 德川義宜家記

○
宇和島少將

國家多難之砌、度々周旋盡力、遂使　王道復前古候段、　叡感不斜候、愈以勵忠志、可爲　皇室之維城旨　御沙汰候事。伊達宗德家記

各通
細川右京大夫
松浦肥前守
久留島伊豫守

其藩事、從前報國之志不淺、應　召登京、屬官軍候段、叡感不斜候、尚此上可勵忠勤旨　御沙汰候事。細川護久、松浦詮久留島通靖家記

○

各通　阿波宰相

　　　井伊掃部頭

其藩事、屬官軍、賊徒襲來之砌、人數致出張候段、神妙ニ候、尚此上可勵忠勤旨　御沙汰候事。

正月十二日　蜂須賀茂韶井伊直憲家記

○

各通　本多主膳正

　　　小出伊勢守

　　　加藤能登守

　　　織田出雲守

　　　市橋下總守

　　　京極下總守

其藩事、今度屬官軍、賊徒襲來之砌、爲防禦致出張候段、神妙ニ候、尚此上可勵忠勤旨　御沙汰候事。

正月十二日　本多康穰等各家家記、柏原藩記

○加藤明實家記ニ云、能登守歸邑中ニ付、十八日ニ御達有之。

○

各通　加藤遠江守

　　　津和野侍從

其藩事、多年報國之志不淺、賊徒襲來之砌、人數致出張候段、　叡感不斜候、尙此上可勵忠勤旨　御沙汰候事。

大村丹後守

○

正月十二日　加藤泰秋、龜井茲監、大村純熙家記

其藩事、多年報國之志不殘、殊ニ去六日、賊徒襲來之砌、於山崎防戰盡令退散候段、　叡感不斜候、猶此上勵忠勤、可爲　皇家之干城旨　御沙汰候事。毛利元功家記

毛利平六郎

○

各通　松平修理

島津淡路守

松平相模守

其藩事、從前報國之志不淺、殊ニ、今度、賊徒襲來之砌、爲防禦致出張候段、　叡感不斜候、尙此上可勵忠勤旨　御沙汰候事。池田德澄、島津忠寬、池田德定家記

○忠寬家記ニ、從前ノ字、多年ニ作ル。

○

池田丹波守

其藩事、今度屬官軍、賊徒襲來之砌、爲防禦致出張候段、神妙ニ　思召候、尙此上可勵忠勤旨　御沙汰候事。池田政禮家記

○嵯峨實愛手記ニ云、出御於小御所、三職列座、

越前　薩摩　安藝

右、御對面、賜御褒詞書竝御劍、

但、越前ハ御褒詞計也、御褒詞ハ總裁宮賜之、御劍ハ公業渡之、

宇和島以下十一人、竝平六郎、修理、（原註、右兩人鎧直垂也、以別儀召於南庇賜之、具視朝臣渡之、）

右、御對面、賜御褒詞書、

容堂、成瀨（原註、上下也、仍無御對面、入御之後賜之、總裁宮被渡之 ○按スルニ、成瀨正肥ハ、德川慶勝ノ名代ナルヘシ、）

薩　長　藝　因　土　藤堂

以上六藩戰士等ヘ賜之、於庇下兩職渡之。

○博經親王及ヒ細川喜廷ヲ以テ議定ト爲シ、土倉正彦（修理介備前藩士）○ヲ參與ト爲シ、議定伊達宗城ヲ以テ外國掛ヲ兼シム。

○博經親王ヘ達書

議定　宸翰　（華頂宮家記）

○華頂宮家記ニ云、於御前拜受。

○

議定被　仰付候事。　（細川護久家記）

細川右京大夫

○

下參與被　仰付候事。　（土倉正彦履歷書）

土倉修理介

○伊達宗徳家記ニ云、宗城御用ニ付參內仕候處、外國掛被仰付候旨、御口達有之。

○滋野井公壽、綾小路俊實ノ使者、相良武振書ヲ上リ、官軍ノ徽章ヲ賜ヒ、且東征先鋒ノ命ヲ奉センコトヲ請ヒ、又舊幕府領地ノ租稅ヲ減センコトヲ建議ス、乃チ公壽、俊實ニ命シテ、東海道鎭撫使ノ約束ヲ受ケ、又舊幕府領地今年租稅ノ半ヲ免セシム。

滋野井侍從
綾小路前侍從

其手ニ屬シ候草莽士、從前勤　王之志願不淺趣、殊ニ關東民情辨知之聞エモ有之候間、旁以盡力可仕、三道官軍、關東打入之節ハ、御印之品　朝廷ヨリ可下賜候間、其節ハ速ニ東下、億兆士民　王化ニ服シ候樣、嚮導先鋒可致候、夫迄之處、蓄兵力儲粮食、機會到來ヲ相待、尤過日被　仰出候通、東海道鎭撫使ノ隨指揮候樣可申付、　御沙汰ニ候事。

正月

但、今度、不圖干戈ニ至リ候儀ニ付テハ、萬民塗炭之苦モ不少、依之、是迄幕領之分、總テ當年租稅半減被　仰付候、昨年未納之分モ可爲同樣、來巳年以後之處ハ、御取調之上　御沙汰可被爲在候儀ニ候間、右之旨分明可申聞事。

赤報記、大原重實事蹟書

○武振申請書

方今御東征之儀ニ付、滋野井侍從殿、綾小路前侍從殿、江州松尾山正明寺迄御出張被成候處、御人數追々馳加リ、一方之御助ニモ可相成思召候ヨリ、其段御屆申上、官軍之御印且御東征先鋒之御願ニ相成候處、官軍之儀ハ　勅許ニ相成候得共、御印且先鋒之儀不被命候、官軍之儀ニ候ハヽ、是非其御印無之候テハ、全軍之居合等ニモ相懸リ、且賊ヲ討伐仕候ニモ、都テノ儀ニ付不都合之次第ニ候間、此情實逐一御憐察被下置、歎願之兩樣急速　勅命ヲ蒙リ度奉存候、歎願之筋相叶候得ハ、今、賊之巢穴ヲ不結內先鋒仕、速ニ寸功ヲ可奉奏候、以上。

赤報記
大原重實事蹟書

○武振建白書

誠恐誠惶謹言、艸莽卑賤之身ヲ以テ建言仕候ハ、甚恐入候次第ニ候得共、此度綾小路殿、滋野井殿兩卿之御勢ニ加リ、先登仕候ニ付、愚存之儀、萬死ヲ犯シ建白仕候、當時、賊勢既ニ浪華ヲ去候趣意ハ、必關東割據之所存ニテ、唯今之處ニテハ、賊之餘燼無之樣ニ候得共、關東ハ固ヨリ彼之巣窟ニ候間、彌東下仕候ハヽ、是則虎ヲ山ニ放チ候患ト奉存候、東海道ハ小田原之城ニ據リ、兵ヲ函嶺ニ出シ、中山道ハ高崎ニ據リ、臼嶺ニ出シ、要地ヲ塞キ防禦被致候テハ、甚蹈破リ難ク、實ニ斧ヲ用ルノ悔可有之候間、賊ノ不意ニ出テ、兩卿之內、速ニ御征伐被爲在度奉存候、加之、今黠夷之輩、我隙ヲ覬覦致シ居候儀故、此鷸蚌之弊ニ可乘モ難計、是又一大事之儀ニテ、兎角、急ニ御東征被爲在度奉存候、尤、右御東征之儀ニ付、定テ御廟算ハ數々可有之候得共、當時之處、是迄、幕府ニ於テ、關東筋ハ甚暴斂ヲ極メ、民心皆奸吏之肉ヲ喫ハント存居候儀故、幕領之分ハ、暫時之間、賦稅ヲ輕ク致シ候ハヽ、　天威之難有ニ歸嚮シ奉リ、假令賊ニ金湯之固有之候トモ、倒戈之者、賊之蕭牆ニ起リ、必以御東征之御一助ニモ可相成ト奉存候、乍恐、右等之條々ハ、卑賤之者之建言仕候迄モ無之、定テ　朝議モ有之儀ト奉存候得共、滋、綾兩卿之思召ニ於テモ、此儀深ク御心痛被遊候儀故、不憚申上候、以上。

（赤報記　大原重實事蹟書）

○德川茂承、本月三日ノ命ヲ領スルヲ稟シ、且大阪ノ敗兵、和歌山ニ至ルノ狀ヲ陳ス。

臣茂承謹テ奉　勅答候、兼テ鎭靜　御沙汰之趣モ御坐候處、坂兵伏見表ニ出張、叛逆之色顯然ニ付、官軍相募リ、同心戮力、王事ニ勤勞可仕　御沙汰之段被　仰出之趣奉畏候、且又、鷲尾侍從殿へ　御沙汰之趣モ奉恭承候、同心戮力、近國手配等盡力可仕候、誠惶謹言。

正月　　紀伊中納言

（德川茂承家記）

○

去ル八日八半時比、坂兵貳百人許、和歌山へ立入候付、目付差出及應接、加太浦ヨリ泉地へ立退候樣談判致、其餘追々差臨

候間、國境關門相鎖、不爲立入樣手配之儀、折角盡力仕罷在、其段不取敢奉申上候樣被申付、林一平太罷登候儀ニ御坐候、尤同人儀ハ八日應接中出立仕候處、道中彼是差障リ、本道難通越、漸唯今著仕候儀ニ御坐候、就テハ過刻被 仰聞之趣モ御坐候付、猶殘兵等無之候哉、爲見屆大橋左衛門御當地出立、早驅ニテ歸國仕候、尤、見屆次第速ニ上京、委敷可奉申上、先右之段奉申上候、以上。

紀伊中納言内
横井次大夫
中島三郎左衛門

正月十二日

徳川茂承家記

○大阪ノ敗兵、和歌山ニ入ルノ報アルヲ以テ、紀伊藩士ヘ詰問ノ事、三職叢書ニ見エタリ、災後、原記ヲ失ス、本書中、過刻被仰聞之趣云々トハ、此ヲ謂フナラン。

○市橋長義、小藩寡兵ヲ以テ、四塚ノ守衛ヲ罷メテ、他役ニ服センコトヲ請フ、朽木爲綱、山陰道鎭撫使ノ令ヲ奉シテ、兵ヲ久美濱ニ出スヲ稟ス。

私儀、四ッ塚關門御警衛、去ル丑年ヨリ相勤居候處、今度 御一新ニ付更ニ奉蒙 御沙汰、其上井伊掃部頭御差加被成下難有仕合奉存候得共、右御場所之儀ハ、先般家來奉建白候通、攝海之要路ニ付、何分微祿小身ニテハ、自然不行屆之儀モ可有御坐哉ト、甚苦心至極恐入奉存候、可相成儀ニ御坐候ハ、 禁中咫尺之内ニテ、奉蒙 御用度懇願ニ御坐候、何卒赤心之儀、御垂憐被成下、相應之御場所ヘ御繰替被 仰付被下置候ハ、尙以難有仕合奉存候、此段乍恐奉願候、以上。

市橋下總守

正月

市橋長義家記

○
丹後國久美濱、竝近邊麾下領取締相心得候樣、御使節ヨリ御談有之候ニ付、久美濱表ヘモ昨十一日爲取締人數少々差出申候、右兩條御屆申上候。

正月十二日　　朽木木工允

朽木近江守家來

朽木綱鑑家記

○内藤政擧ノ家臣、尾張、肥後二藩ニ因リ、藩兵德川慶喜ノ爲メニ野田口ヲ守ルハ、政擧ノ與リ知ル所ニ非サルヲ陳シ、其入京ヲ許サレンコトヲ請フ。

去冬、備後守依　御召上京之筈ニテ、既ニ先供坂地ヘ到著仕候折柄、野田口警衞被申付候ニ付、人數差出候由御座候、然ル處、德川内府上京先供之行違ヨリ、斯ル御時態ニ立至候段、重々奉恐入候、尤重役之者、戰爭之始末辨ヘ不申ヨリ、警衞之人數輕卒差出候段、重疊奉恐入候、右ハ備後守聊承知不仕處ニテ、何共恐入奉存候、此段幾重ニモ　御憐察被成下、備後守入京御差免被成下候樣、泣血奉懇願候、左候得ハ、早々上京、萬々御詫可奉願上候、尤御用之儀ハ、乍不行屆幾重ニモ相心得可申候、此段、只管御執成之程奉歎願候、以上。

正月十二日　　池内善藏

内藤備後守家來

内藤政擧家記

○政擧家記ニ云、歎願書、尾州竝肥後藩ヘ差出スト。

○本多康穰。再ヒ京ニ至ル、本多康穰家記秋田映季、万之助○三春藩主、食封五萬石、織田長易、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ

京ニ至ラシム。三春藩記 織田長猷家記

○征討府、備前、龍野、阿波、丸龜、宇和島五藩及ヒ稻田邦植ニ令シ、高松、姫路、松山伊豫、征討ノ軍ニ應援セシメ、又薩摩、安藝、長門三藩兵ヲシテ大阪街市ヲ巡警セシム。

備前
龍野
阿州
丸龜
稻田
宇和島

○播州姫路討伐之師被指向候間、爲應援人數可指出旨、被　仰出候事。

正月　岡田藩姫路討伐記 脇坂安斐家記

○讚州高松討伐之師被指向候ニ付テハ、爲應援人數可指出旨、被　仰付候事。

正月十二日　蜂須賀茂韶家記 京極高德家記

○豫州松山討伐之師被指向候ニ付テハ、爲應援人數可指出旨、被　仰付候事。

正月十二日　伊達宗德家記

薩、長兩藩等申合、市中取締方、嚴重ニ可致事。

正月　淺野長勳家記　慶明雜錄

○藝藩ハ薩州、長州等申値ニ作ル。

○東海道鎭撫使橋本實梁、阿波藩兵ヲシテ大津信樂舊代官所轄ノ地ヲ保管シ、且舊幕府及ヒ會津、桑名領地ノ旁近ニ在ル者ヲ撿セシム、又膳所藩ニ令シテ、賊兵ノ逃歸スル者ヲ要撃セシム。

○橋本實梁私記ニ云、近日當地進發ニ付テハ、阿州藩ヘ人數居殘リ、口々警衛可致、就テハ大津、石原支配所、信樂多羅尾支配所、別シテ入念可取締、且又舊幕領、會、桑領等、當地方近傍ニ有之分取調、官軍ノ立札致シ置クヘク旨、重臣合田左源次召出シ申渡ス。

○

今般、朝敵、會、桑其外ノ賊兵等、伊賀越、其他所々間道ヨリ東海道筋ヘ蹈越、各歸國ノ聞有之候間、神速人數差出、加藤能登守ヘ引合、賊兵悉打取、勤　王可有之候事。

正月

副將　前光

總督　實梁

本多主膳正殿　東海道先鋒記

〇本多康穰家記ニ、十一日トス。

〇松平定敬ノ老臣、謝罪書ヲ尾張藩ニ致シ、其寛宥ヲ申請センコトヲ求ム。

今般、大坂表之始末柄、在所表ヘ相聞、深奉恐入候ニ付、上下一同謹愼罷在申候、抑尊　王之大義ハ、兼テ厚相心得罷在候處、不圖モ今日之形勢ニ至候段、恐懼戰栗、悲歎之外他事無御座候、何卒平生之心事御了解被成下、大納言樣御手筋ヲ以テ、乍恐　朝廷ヘ御取成、寛大之　御沙汰只管奉歎願候、誠恐誠惶謹言。

正月

酒井孫八郎
吉村又右衛門
澤　釆女
三輪權右衛門
大關五兵衛
服部石見
松平帶刀

成瀬隼人正樣　松平定教家記

〇定教家記ニ云、此歎願書、大納言歸國ニ相成、上達ヲ不得趣、後ニ承知仕候。

〇德川慶喜、松平容保、松平定敬、板倉勝靜、酒井忠惇等ヲ率ヰテ、江戸城ニ還リ、東歸ノ情由及ヒ後日ノ形勢ニ因リ、再ヒ西上スルノ意ヲ列藩ニ告ク、又諸郭門ヲ鎖シ、之ヲ各國書記官ニ報ス。

藤堂高邦家記
東海道先鋒記

上様御事、御軍艦ヘ被爲召、今十二日、西丸ヘ著御被遊候、此後動靜ニ寄、速ニ御上坂被遊候思召ニ候。

○

先般、尾張大納言云々。六日大坂ノ布告ト同文、　藤堂高邦家記　東海道先鋒記

○

上様御事、去ル六日御乗船、同八日御出帆、今明四ツ時、被遊御還御候、右ノ御趣意ハ、尾張前大納言殿、松平大藏大輔下坂、上様被遊御上洛、京都御取締被遊候様被　仰出、其後御催促有之候ニ付、御上洛ノ思召ニテ、去ル三日、御先手御人數、鳥羽街道ヨリ御差登ノ處、四ツ塚關門ニテ長州、薩州人數相固居、差通不申候ニ付、御先詰ノ譯ヲ以テ談判中、彼方ヨリ砲發ニ及候間、其儘ニモ差置難ク、不得止事戰爭相成候ヘトモ、不意ヲ被討候故、遂ニ敗走繰引ニ引取候、然ル處、　朝廷ヘ薩、長ヨリ幕府謀叛ヲ起シ候様及　奏聞候様子ニテ、　朝敵ノ旨御沙汰ノ趣、大坂ニテ被成御承知、全　朝敵被爲成候譯ハ無之候ヘトモ、一應被　仰出候上ハ、彼是被仰立候テモ申譯ノ樣ニ有之、戰爭ハ猶更不宜候間、御使ヲ以テ、戰ヒ引上候樣トノ御下知ニ相成、一先還御ノ上、御策略モ可有之、篤ト御評議ノ上、猶又御上坂、　朝敵ニ無之趣被仰上、奸賊御掃被遊候思召ニテ被遊還、御實ニ恐入候事ニ付、此以後、猶更奮發盡忠候樣可被致事。

辰　正　月　東海道先鋒記

○本書、家記、藩記中見ル所ナシ、先鋒記ニ、大村藩士江戸ヨリ持歸ルモノトアリ。

○勝安芳日記ニ云、正月十一日、開陽艦品海ヘ錨ヲ投ス、使アリテ拂曉濱海軍所ヘ出張、御東歸之事、初テ伏見之顚末ヲ聞ク、會津侯、桑名侯トモニ御供中ニアリ、其詳說ヲ問ハムトスレトモ、諸官唯青色、互ニ目ヲ以テシ、敢テ口ヲ開ク者無シ、板倉閣老ヘ附テ、其荒增ヲ聞クコトヲ得タリ、從是シテ、日ニ空議ト激論ト、唯日ヲ空クスル而已、敢テ定論ヲ聞カス。

御供之役々　○印ハ御供ニテ東歸

○會津肥後守　○松平越中守　○板倉伊賀守　○酒井雅樂頭

總將　松平豐前守	參政　永井主水正	副將　竹中丹後守	同　○平山圖書頭
副將　塚原但馬守	陸軍奉行　大久保主膳正	陸軍奉行　戸田肥後守	歩兵奉行　高力主計頭
歩兵奉行　城　和泉守	大目付　○戸川伊豆守	大目付　○松平大隅守	同　瀧川播磨守
目付○設樂備中守	同　○榎本對馬守	目付　安田作太郎	同　木城安太郎

○

以書狀致啓上候、然ハ近來、江戸市中ニ尚匪徒潜伏致シ居候徴候モ相見候ニ付、當分之内、別紙之場所〆切、往來差留相成候間、其旨在府、並此節出府イタシ候士官等ヘ、普ク御通達有之候樣致シ度、此段可得御意如斯御座候、以上。

正月十二日　　杉浦武三郎花押
　　　　　　　平岡和泉守花押
　　　　　　　菊池丹後守花押
　　　　　　　江連加賀守花押

エルトケレインチース樣

○別紙

〆切場所、

馬先門場　雉子橋門　一橋門　呉服橋門　鍛冶橋門　幸橋門　山下門
赤坂門　市ケ谷門　牛込門　新橋　喰違　水道橋　昌平橋
和泉橋　下谷新橋　外務省記

○外務省記ニ云、此書ハ蘭館所藏ノ寫ナリ、舊幕各國往復書翰取扱記ニ、十二日、瑞、魯、佛、米、孛、蘭、伊ノ岡士ヘ、御門〆切ノ報告書翰、神奈川表ヘ差立トアリ。

○各國公使、昨日爭鬭ノ故ヲ以テ、兵ヲ出シテ神戸驛ノ兩口ヲ扼シ、兵士及ヒ佩刀者ノ往來ヲ絕シ、又諸藩船艦ノ港內ニ在ル者ヲ拘留ス。

○輦下日載ニ云、兵庫ヨリ片野十郎報知之趣ハ、夷人番兵ヲ東西ニ置キ、其守リ頗嚴重之由ニ申來ル。

○各國公使神戸港ヘ布告書

昨日、松平備前守人數亂妨イタシ候ニ付、各國ヨリ夫々處置ニ及ヒ候得共、決テ町方村方之者共ニハ關係無之ニ付、夫々安穩ニ致渡世、騷敷儀一切無之樣可致事。

正月十二日　外務省記

○

昨日、備前人數亂妨ニヨリ、各國軍艦ヨリシテ兵庫港內碇泊之日本人所持之蒸氣船差押候、右ハ昨日、各國公使ヨリ被申出候通、備前藩ニ不限、總テ日本國中諸藩ヘ關係有之ニ依テ也。

正月十二日　外務省記

○

昨日、松平備前守家臣亂妨ニ付、各國ヨリ夫々警衞致居候得トモ、兵器ヲ攜ヘ候モノ、並ニ帶刀人之外ハ無滯通行可致事。

正月十二日　外務省記

○外務省記ニ云、右三條、英國公使館所藏ニ依テ抄錄ストアリ。

十三日、宣命使中院通富、三室戸陳光、ヲ山階、天智天皇、後月輪、光格天皇、弘化、仁孝天皇、後月輪東、孝明天皇、ノ四陵ニ遣シ、天皇將ニ首服ヲ加ヘントスルヲ告ク。

○山階陵宣命

天皇我詔旨止掛畏岐山階山陵爾恐美恐美毛奏賜止波久奏久親王公卿等議奏久今春正月爾吉日良辰乎擇定氐隨令爾首服乎奉加良波天下乃公民乃望爾將適止奏利夫毛加冠乃禮乎行布止告乎山陵爾告申波往古乃佳例奈利故亦今度毛遣使氐其由令告申賜布掛畏岐山陵乃厚岐御恤深岐御助爾依氐志無事久無故久此乃禮乎令果行賜倍止爲氐卆奈正二位行權中納言源通富乎差遣氐禮代乃御幣乎令捧持氐奉出賜布此狀乎平久安久聞食氐天地日月止共爾寶位無動久常磐爾堅磐爾護賜比恤賜倍止恐美恐美毛奏賜久波止奏。

慶應四年正月十三日 （大內記 新作留）

○後月輪陵宣命

天皇我詔旨止掛畏岐後月輪山陵爾恐美恐美毛奏賜止波久奏久親王云々（同上文）參議從二位藤原朝臣陳光乎差遣氐云々。（同上文、）

○弘化陵宣命

天皇我詔旨止掛畏岐弘化山陵爾恐美恐美毛奏賜止波久奏久親王云々。（以下後月輪陵ト同シ、）

○後月輪東陵宣命

天皇我詔旨止掛畏岐後月輪東山陵爾恐美恐美毛奏賜止波久奏久親王云々。（以下弘化陵ト同シ、） （大內記 新作留）

○案スルニ、公卿補任、是日又使ヲ畝傍陵ニ發スルノ事アリ、然レトモ、京畿騷擾ヲ以テ、延テ二月十日ニ至リシコト、新作留ニ見エタリ、二月十日ノ條ヲ參觀スヘシ。

○假ニ九條道孝ノ第ヲ以テ、太政官代ト爲ス、明日、參與局ヲ官中ニ移ス。

○十二日達書

一明日ヨリ太政官代九條家之事、
一連日巳刻參集、申刻ヲ限リ退出之事、
一各獨辨當持參之事、　春嶽私記

○

一乘院里坊ヲ以テ參與役所ニ被用候處、今十四日ヨリ西殿町九條家裏方ヘ相移候間、總テ是迄通リ取扱候事、

正月十四日　有栖川宮家記

○參與助役西四辻公業ヲ以テ、參與ト爲ス。

西四辻大夫

參與職被　仰出候事。　有栖川宮家記

○石川成之ニ命シ、鈴鹿嶺伊勢、及ヒ旁近ノ隘口ヲ扼シ、以テ東海道鎭撫使ノ約束ヲ受ケシム。

石川宗十郎

今般、徳川慶喜奉欺　天朝反狀明白、既ニ兵端ヲ開候ニ付テハ、何時東軍襲來モ難計、依之、於鈴鹿切處、其外手寄緊要之場所御固被　仰付候、尤東海道鎭撫總督指揮ヲ受ケ、萬事應援致シ、急度盡力可仕旨　御沙汰候事。

辰正月　石川成徳家記

○酒井忠義ヲ以テ北陸道先鋒ト爲シ、戸田氏共ヲ東山道先鋒ト爲シ、功ヲ立テ自ラ贖ハシム。

若州小濱

濃州大垣

右者、此迄御不審之次第有之候ニ付、被止入京候處、謝罪之道追々相立、今度賊徒追伐被　仰出、鎮撫使御發相成候ニ付、北陸、東山二道之先鋒、兩藩ヘ被　仰付、成功之後、別段　思食可被爲在儀ニ候間、其旨可相心得様　御沙汰候事。

正　月　有栖川宮家記 酒井忠祿家記

○附錄忠義受書

此度、御不審之次第被爲在候ニ付、入京之儀御差留ニ相成候處、謝罪之道追々被爲　聞召分、此度賊徒追伐被　仰出、鎮撫使御發シニ相成候ニ付、北陸道先鋒被　仰付、成功之上、別段　思召可被爲在候段被　仰出奉畏、冥加至極難有仕合奉存候、右御請申上候、以上。

正　月　十　五　日　　酒　井　右　京　大　夫

酒井忠祿家記

○戸田氏共家記ニ云、主人儀、東山道鎮撫使先鋒被仰付、二十一日御當地出立ト。

○伊達宗城、藩兵ヲ以テ松山伊豫ヲ討シ、且大阪駐在中、其臣某等ヲシテ參與局ニ候セシメント請フ。

豫州松山、此度　朝命違背、德川慶喜ヘ隨從仕候段、反狀明白御坐候上ハ、御征伐可有御坐、敝藩同州之儀、猶更傍觀罷在候テハ不堪恐悚候間、何卒、乍微勢討手被　仰付被成下候ハヽ、武門之面目難有仕合奉存候、右遠江守在邑ニ付、此段私ヨリ奉願候、以上。

正　月　十　三　日　　宇　和　島　少　將

伊達宗德家記

○

私儀下坂中、議定御用筋承知不仕候テハ、罷歸候時分不都合之儀モ可有御坐ト奉存候ニ付、下坂中、兼テ機密掛申付置候家來之者、別紙名元之兩人爲伺御用、下參與御役所ヘ差出度奉願候、以上。

正月十三日　宇和島少將

別紙名元

重臣清水飛驒　機密掛林玖十郎　伊達宗徳家記

○毛利敬親、書ヲ上リ、家臣木戸孝允ノ召命ヲ謝シ、其疾ニ罹ルヲ以テ、上京ノ期ヲ緩フセンコトヲ請フ。

今度、無偏無黨公平之御所置ヲ以テ、與天下更始被遊候ニ付、人才御撰擧之筋ヲ以テ、達叡聞之輩ハ博ク御諮詢被爲在候ニ付、家臣桂小五郎事御登用被爲遊候間、早々登京致候樣可申付旨、御沙汰之段、敬親父子、尙家臣小五郎ニオヰテモ難有奉肝銘候就テハ速ニ登京可仕儀御坐御處、近來多病、且舊臘以來被閉寒氣不快罷在候間、今暫之間御猶豫之程奉願候、此段宜御執　奏奉仰候、誠恐誠惶頓首謹言。

正月　長門宰相　華下日載

○徳川茂承、再ヒ大阪敗兵ノ來投スル者ヲ拒絶スルヲ上申ス。

徳川慶喜初、會、桑等敗兵共、紀州表ヘ入込候段、此程　御沙汰之趣ニテ、追々在京之家來共罷歸リ注進仕候ニ付、　御不審之段、於茂承モ深奉恐入候、右ハ去ル八日、敗兵共入込候處、應接之上速ニ泉地ヘ爲相退、其餘潰來候者共モ御坐候之處、其邊ヨリ夫々爲致退散、最早國内ヘ入込候者一人モ無御坐候、此段可奉申上旨被申付、伊達五郎儀、只今上京仕候、依之、右之

段奉申上候、以上。

正月十三日

紀伊中納言内
横井次大夫
中島三郎右衛門

徳川茂承家記

○附録十七日上申書

和歌山城下邊ニ大坂敗兵共潛伏、最早無之段此程奉申上候、以後、猶又、和河、泉國境等ヨリ竊ニ入込候者モ有之、且小船ニ乘組候者、風波ニテ漕歸リ候テ、城下外海邊ニ滯留候者共御坐候趣ニテ、中納言深憤怒、追拂之儀嚴敷指揮致候ニ付、城下近海之者ハ悉皆追拂、鎭靜仕候儀見聞仕、和歌山表發足仕候儀ニ御坐候、右之段、中納言上京之上可奉奏上候得共、私儀、今日御當地ヘ著仕候ニ付、先不取敢、此段奉申上候樣申付候儀ニ御坐候、以上。

遠海浦々等ヘ風波ニテ漕歸リ、滯船之者モ無之候哉、取調サセ罷在候儀ニ御坐候、萬一右等之儀御坐候ハヽ、速ニ追拂候樣嚴敷申付、浦々ヘ役人共差遣シ、探索仕ラセ罷在候儀ニ御坐候、以上。

紀伊中納言家老

正月十七日

垣屋十郎兵衛

徳川茂承家記

○新發田藩、見兵寡少ヲ以テ、白川越警守ノ命ヲ辭ス、尋テ郡山藩兵ヲ以テ、之ニ代フ。

白川越坂本口ハ咽喉樞要之御場所ニ付、堅固衛護可仕旨　御沙汰之趣、冥加至極難有仕合奉存候、然處、此程御尋之節奉申上候通、舊冬重役上京之儀ハ、全ク御用窺一ト通之儀ト相心得、人數並大砲等持越不申、乍去、當節柄御斷申上候儀奉恐入候ニ付、兎ニ角、一應實地見聞仕候得共、何分重役手勢而已ニテハ防禦難行屆ニ付、此度無餘儀御斷奉申上候、尤一昨日被

仰渡、國力相應之人數申遣置候ニ付、右京著次第、相應之御用被仰付候樣仕度奉願候、以上。

溝口誠之進内

正月十三日　　寺田喜三郎

溝口直正家記

○直正家記ニ云、御斷書面差出候處、尤ニ被聞込、書面落手相成、其後別段御指令無之。

○郡山藩へ達書

柳澤甲斐守

白川越坂本口、京師咽喉ニ候間、早々人數出張致シ、嚴重警固可致事。

正月十四日　　柳澤保申家記

○大村純熈、木下俊愿、京ニ至ル。○大村純熈 木下俊愿家記

○征討府、錦旗奉行四條隆謌ヲ以テ、軍事參謀兼中國四國征討總督ト爲シ、錦旗奉行五條爲榮ヲ監軍ト爲シ、參與壬生基修、代テ錦旗奉行ヲ兼ヌ、下參謀大山綱良之ニ屬ス。○東伏見宮家記 大山綱良履歴書

此度、中國、四國追討之總督、四條前侍從へ申附候事。

慶應四年戊辰正月　　二品親王嘉彰

諸道記概略

○

此度、追討之軍事總テ總督四條前侍從へ委任候間、從軍諸藩申合、臨機之處置可致候事。

○鷲尾隆聚、高野山ヲ發シ、遂ニ進テ大阪ニ入ル、高野山出張概略是日、徳川茂承、使ヲ遣シ、岩出守兵ノ無狀ヲ謝ス。

去ル四日、從　朝廷被　仰出候　王事勤勞之儀、尚又、今般再度之　勅命相降リ候ニ付、御守衛之中、藤村、齋原之二士爲御使節御差立之處、見張所ニ於テ番兵拘留、且渡シ舟引揚之擧動、無禮千萬ト申、官軍抗敵之狀勢御疑念ニ付、決答次第御決戰之宣議ニ付、重テ御詢問之趣不堪恐懼次第ニ御坐候、勿論勤　王之正義ニ於テハ、始終二念無之候得共、華城覆滅之一擧ニ於テハ、大義害親之情實、衆說異同不居合ヨリ、其末少シ行違ヒ有之、番兵渡舟等之不都合、御不審之段恐懼之至ニ有之、尚又、卽今坂地潰兵之内、弊藩依賴ヲ申立、國中ヘ立入、是又、窮鳥入懷之情態、所置之當否ニ寄リ候テハ、釀事變候モ難測、左候テハ、鎭靜御趣意ニ差障リ、彌以多罪ニ付、心中之紛亂、貴答延滯ニ相成候得共、勤　王之誠意ニ於テハ、國論全ク一定、此程　勅答ヲモ差上置御坐候間、自今御戮力之儀、時宜ヲ以テ可被仰下候、旁以使者御回報如斯御坐候、不宣。

紀伊中納言　使

高野山出張概略

○徳川慶喜、板倉勝殷ヲシテ碓冰關上野碓冰郡ノ守ヲ嚴ニセシム。

○大目付戸川安愛口達之寫

上樣還御被遊候ニ付テハ、碓冰關門嚴重相守、驛場ニテモ旅人改方入念可申、尤風俗計ニテハ相分リ兼候儀モ可有之候間、夫等ハ臨機應變ニ相糺候樣可致、且當今之形勢ニ付、在所表ニテモ武備相立候樣可致、右之趣ハ兼テモ相達置候得共、尚亦

拙者共ヨリ相達候様、御老中方被仰聞候。

辰正月　板倉種家記

十四日、參與助役長谷信成ヲ以テ、參與ト爲ス。

長谷美濃權介

參與被　仰出候事。　長谷信成履歴書　丹羽氏中家記

○內旨ヲ親子內親王ニ下シ、其緩急護衛ノ命ヲ大久保忠寬越中守○舊幕府會計總裁、ニ傳諭セシム。

○內親王へ書簡

近日之模樣穩ナラヌ次第ニ付テハ、深ク御苦慮被爲在候得共、御警衛ノ事、兼テ夫々被仰渡候樣ノ運ヒニイタラセラレカタク、旁別紙之通被仰出候間、萬一非常之節ハ、　叡慮ノ御旨被仰傳、偏ニ偏ニ賴ミ被遊候樣トノ、御沙汰ニ被爲在候事。

尙々、御女儀ノ事、又治亂ノ間モハカリカタク、カタカタ、一封ニテカネテ御渡シ置被遊候樣トノ御事ニアラセラレ候事。

辰正月十四日　大久保一翁手記

○內達書

大久保越中守

和宮御事、往年天下之爲ヲ以テ御東下ノ處、其御旨趣總テ畫餠ト成リ、既ニ、　先帝御遺憾之　御沙汰モ被爲在之次第、方今ニ至リ實以不容易形勢、萬一不慮之時變難測、於　今上モ不可言之　御苦慮被爲在、其方誠忠之儀兼テ被　聞食入ノ間、緩急御守衛、海陸便宜ニ隨ヒ、御歸京之處置深賴被　思召候旨、被　仰下候事。

辰正月十四日　大久保一翁手記

○安藝、長門、備前三藩ニ令シ、山陽道諸藩ノ向背ヲ問ヒ、且舊幕府ノ領地ヲ檢シ、本年租稅ノ半ヲ蠲カシム。

備州
長州
藝州

今般御復古ニ付、卽今之處、山陽道取調被　仰付候間、三藩共申合、作州津山、其他諸藩之情實糺問之上、巨細言上可仕、尙卒急之儀ハ、將軍宮ヘ相伺候樣可致　御沙汰候事。

但、諸國之內、是迄天領ト稱シ居申德川氏之采地、其他賊徒之所領等、別テ入念調可仕、右ハ從前苛政ニ苦ミ居リ候哉ニ付、當年租稅之儀ハ半減被　仰付、去年未納之分モ可爲同樣、來巳年以後之處ハ、御取調之上　御沙汰可被爲在儀ニ候間、右之旨申諭、億兆人民　王化ニ服候樣、精々盡力可仕　御沙汰候事。池田章政家記　松平康倫家記

○豐岡藩兵ヲシテ桂御所ヲ守衞セシム。

京極飛驒守

桂御所御警衞被　仰付候間、御警衞向之儀ハ、同殿家來ヘ打合可申旨、被　仰付候事。京極高厚家記

○宇和島藩ニ令シ、藩士ノ參與ト爲スヘキ者ヲ薦擧セシム。

其藩中相調、兩三人爲參與可差出候事。

正月十四日　伊達宗德家記

○宗城上申書

私家來兩三人、爲參與差出候樣　御沙汰御坐候ニ付、別紙名元書ノ通差出候間、此段御屆申上候、以上。

正月二十一日　宇和島少將

別紙、

覺、

須藤但馬

西園寺雪江

留守居兼　林玖十郎

右之通御坐候、以上。伊達宗德家記

○池田茂政、日置忠尙、神戶驛爭鬪ノ事ヲ上申ス。

此度、西之宮御警衛被　仰付候ニ付、人數出張爲致候處、去ル十一日、家老日置帶刀同勢召連、攝州神戶町通行之砌、外國人ヨリ理不盡之所業有之候處ヨリ、互ニ及發砲候段申越候、委細之儀ハ帶刀ヨリ可申上候得共、右之趣、不取敢御屆申上候、以上。

正月十四日　備前少將

池田章政家記

○附錄二十二日上申書

過日於兵庫表、外國人ト行違之儀ニ付、應接之儀奉伺候處、此度ハ於　政廷御取扱ニ相成候、　御裁許之儀ハ公法ヲ以被處候　思召ニ被爲在候間、御請之儀申上候哉ト御尋之趣、十四日ニアリ、早速國元ヘ申遣候處奉畏候、元ヨリ於　朝裁彼是申上候心底無御坐候、此段御請申上候樣申付越候、尤國情之儀ハ重役ヨリ可申上候間、宜　御亮察奉希候、以上。

正月廿二日　備前少將內

澤井宇兵衛

池田章政家記

○章政家記ニ云、右國情ノ儀ハ、癸亥以來攘夷ノ　叡慮奉戴仕候ヨリ、一藩敵愾固結仕、外國人ノ爲越度ニ相成候テハ、御國辱無此上儀ト、御處置振一同仰望罷在候間、此邊ノ情實、御斟酌被下度段申上置候。

○德川茂承、老臣水野忠幹大炊頭○食封三萬五千石、紀伊藩附家老、後新宮藩ト爲ル、ヲ大坂ニ出スノ情由ヲ陳疏ス。

水野大炊頭天王寺ヘ出張之儀、德川慶喜奉對　朝廷不恭順之儀有之候ニ付、右諫爭之爲メ、且殘置候弊藩人數引上旁出坂仕候儀ニ御坐候、此段奉申上候、以上。

正月　横井次大夫

中島三郎右衛門

德川茂承家記

○書意ヲ案スルニ、責問ニ答ヘシモノニ似タリ、然レトモ記載ノ徵スヘキナシ。

○谷衛滋大膳亮○山家藩主、食封一萬八十二石、ノ老臣、兵ヲ率ヰテ京ニ至リ、衛滋入覲途ニ上ルヲ稟シ、王事ニ從ハント請フ、豐岡藩兵亦京ニ至ル。

此度不容易形勢ニ付、早速出張御用筋可奉伺之處、過日御屆申上候通リ、大膳亮、去四日、江戶表發足上京仕候段申越、此節柄之儀、道中筋差支之程如何可有御座哉、深心配仕、人數差出方延引仕奉恐入候、兼テ大膳亮ヨリ異變之節ハ、迅速人數引纏罷出、御用筋奉伺候樣申付越居候間、乍少人數引連、唯今參著仕候、此旨可然御執成ヲ以テ、相應之御用向被仰付被下置候ハヽ、誠ニ以テ難有仕合奉存候、此段奉願上候、以上。

谷大膳亮重臣
河田右衞門

正月十四日
參與御役所

谷衛滋家記

○

去ル四日、御達之趣、急速飛驒守へ申遣、尙在所表へモ申遣候處、不取敢二十人餘參著仕候、依之、此段御屆奉申上候、以上。

京極飛驒守家來
窪田逸作

正月十四日

豐岡藩記

○薩、長二藩、特賜ノ廩米ヲ辭シ、以テ兵備ニ充テント請フ。

今般、薩、長連戰、軍費夥敷段　御洞察被爲在、此迄守護職爲御手當會津へ被下置候粮米若干石、御附立之前テ以テ、兩藩へ可被下旨、重疊難有次第ニ付、尖ニ拜納可仕之處、以往之御爲筋熟考仕候得ハ、　朝權御收許原記誤寫、相成候上ハ、御兵備十分被爲整度、就テハ　禁兵御募聚、軍艦御購入等、殊ニ　御急務ニ御座候故、今日籍沒之國力ハ、不殘御兵備之御用度ニ被爲充度、依之、粮米兩藩へ被下置候儀ハ御斷申上候、尤、此後軍費闕乏之節拜借申出候儀ハ可有之、此段被　聞召屆候樣奉願候、以上。

長門宰相內
寺內暢三

正月十四日

薩摩少將內
內田仲之助

島津忠義家記
毛利元德家記

○備前藩兵、備中松山城板倉勝靜ノ治所ヲ徇ヘテ、之ヲ下ス。○板倉勝弼家記

○池田茂政二十九日上申書ニ、十四日哀訴仕候ニ付、十五日歎願書受取トアリ。

○附錄二十日茂政奏狀

過日以書付御屆申上候十七日ノ上申ヲ指ス、以後、家老伊木若狹、其外番頭物頭等、備中ヘ出張爲致、松山城取圍及應接候處、一藩謹愼、朝命奉戴實効之爲メ、城地領內共預置可申旨申出候處、征討之儀被　仰付候ニ付、直樣人數繰込、松山城受取、落城相成候段注進申越候間、不取敢御屆仕候、委細之儀ハ、取調候上可申上候、此段宜樣御執奏奉希候、以上。

正月十八日　備前少將

池田章政家記

○徳川慶喜、太田資美、水野忠敬、田沼意尊ヲシテ駿府城ヲ警守セシム。

非常之節、駿府表御警衛被仰付候間、在所在合之人數揃置、本多紀伊守、佐久間鐇五郎ヨリ相達次第、速ニ人數出張爲致、御警衛行屆候樣可被致候、尤、水野出羽守、田沼玄蕃頭ヘモ同樣被仰付、松平丹後守ヘハ、兼テ御警衛被仰付置候間、可被申合候、且又、歩兵頭多賀上總介始、歩兵隊、砲兵隊トモ被差遣候間、御警衛筋之儀、紀伊守、鐇五郎、竝上總介指揮ヲ請候樣可被致候。

太田總次郎

太田資美家記

○資美申請書

總次郎儀、非常之節、駿府表御警衛被仰付候間、在所在合之人數揃置、本多紀伊守殿、佐久間鐇五郎殿ヨリ御達次第、速ニ人數出張イタシ、右御兩人竝歩兵頭多賀上總介殿御指揮ヲ請候樣、以御書付被仰出候處、右御警衛之儀ニ付、心得方大目付戶川伊豆守殿ヘ、昨十四日以書面差出候處、即刻以御付札、當地御警衛ハ不被仰付候間、駿府表之方專務ニ相心得、總次郎儀

モ速ニ出張、同所御警衛行屆候樣可仕旨、美濃守樣御差圖御座候、就テハ總次郎儀出張仕候上ハ、紀伊守樣外、御兩人之御指揮ヲ請ケ進退仕候心得ニハ無御坐候得共、右御方々拙へ被申合之上、御充分之御警衛筋行屆候樣可仕心得ニ御坐候、右之段、駿府表へモ御達相成候樣仕度旨、各拙迄申上置候樣、總次郎被申聞候、以上。

太田總次郎家來

鹽川政之丞

正月十五日

御付札、

書面之通相心得候樣可仕候、尤、本多紀伊守、佐久間鐇五郎、多賀上總介へ總次郎申談、十分ニ御警衛行屆候樣可致旨、猶又相達候間、可被得其意候。太田資美家記

○資美家記ニ云、資美、十六日江戸發途、二十三日駿府ニ著スト、水野忠敬以下ハ原記ヲ失ス。

○舊長崎奉行河津祐邦、伊豆守上國ノ報ヲ聞キ、其變アランコトヲ恐レ、援ヲ各國領事ニ請フ、是日、後事ヲ筑、肥二藩士ニ託シ、屬吏ヲ率テ海路江戸ニ歸ル。

○十三日祐邦各國領事ニ贈ル書

以書翰申入候、然ハ我國中一二兇暴之諸侯、日本政府ヲ襲擊ニ及候段ハ、定テ承知之儀ニ可有之、隨テ賊徒等、於此地粗暴之擧動可致哉之風聞モ有之付テハ、夫カ爲メ自然兩國人民所持品危險ニ掛リ候モ難計、然ニ此地之儀ハ、從來商賣之港ニシテ、防禦モ手薄之儀ニ付、自然非常之儀モ有之候節ハ、救援之儀賴入度、此段及賴談候、速ニ囘答有之度存候、謹言。

河津伊豆守

各國岡士宛各通　吉井正澄手記

○各國領事答書

在長崎孛漏生殿下岡士館
千八百六拾八年第二月七日　辰正月十四日
長崎鎭臺
慶應四年正月十三日、尊翰へ貴答トシテ申上候ハ、孛漏生殿下之チャージダエフファールノ命ニ隨ヒ、條約濟之各國岡士、及ヒ長崎政府ト熟談之上、長崎平和ヲ守リ、規則ヲ立テ、且當港ニ在ル外國人之取締ニモ、我最上之盡力ヲ爲スヘシ、右恭敬申上候。

尊下恭謙從者
孛漏生殿下ノ岡士
リチヤルトリンドウ
吉井正澄手記

○

於長崎表合衆國岡士館
千八百六十八年第二月七日
長崎鎭臺河津伊豆守尊下
昨日貴翰致落手候、日本政府ニ對シ、大名共彌烱勞二字寫誤、ヲ起シ候、就テハ當港在留之外國人ヲ守護スル權アラサル事ヲ御告知相成、無據場合ニ至リ候得ハ、拙者ヨリ扶助可致哉、御尋相成候得共、在日本合衆國公使之命令無之内ハ、當港ニ在ル亞米利加人ヲ保護致ス爲ノ、要用之手段無之候、右御答申上候、拜具。

合衆國副岡士
ディエルムール

吉井正澄手記

○

在日本長崎港合衆國蒸氣船セサントー、

日本政府ニ對シ、大名共一揆ヲ起シ候儀、今朝御告知相成、右無餘儀場合ニ至候得ハ、扶助可致哉御尋相成、御答申上候ハ、亞米利加配下之者ニ命令シテ、扶助保護致候之外、軍務ニ一致致候儀ハ、我政府ヨリ拙者へ任居不申儀ニ有之候、拜具。

恭敬從者

合衆國蒸氣船セサントー

指揮役船將次官

ウヰーゼスミテル

吉井正澄手記

○

第八號、

於長崎表瑞西國岡士廳

千八百六十八年第二月七日　正月十四日

尊下へ

一慶應四年正月十三日附ノ尊翰致落手候、然ル處、御通達之趣承知、笑止千萬ニ存候、

一尊方ニ於テ、瑞西從民之タメ警衛向御届兼之由、隨テ余可相成丈所持品、及ヒ從民共ノ安全ヲ可取計候得共、今般ノ戰爭ヨリ生スル損失利足等ハ、日本政府ヨリ引受御取扱可有之儀ト存候、此段尊下へ致告知候、拜具。

瑞西國岡士勤方

エフペトムブリンキ

長崎鎭臺尊下へ 長崎縣記

○

於長崎表和蘭岡士廳

千八百六十八年第二月七日 正月十四日

尊下へ

一慶應四年云々。以下、瑞西國ト同シ、

一尊方ニ於テ和蘭從民云々。以下、瑞西國ト同シ、

和蘭岡士勤方

エフペトムブリンキ

長崎鎭臺尊下へ 長崎縣記

○本日祐邦筑肥二藩士ニ贈ル書

松平美濃守

松平肥前守

番　頭

聞　役へ

當今不容易趣相聞候ニ付、一ト先、江戸表へ支配向召連引取候間、右留守中、長崎表之義、當分兩家御預リ所ト相心得、地下取扱方ハ勿論、御成箇筋、竝外國商法、稅銀取立方之義、都テ取計ヒ候樣可被致候、尤、地役之者ハ其儘相殘候間、是又申談候樣可被致候、尤、製鐵所取扱方之義ハ、支配定役格本木昌造へ申付置候間、此段モ可被心得候、

右ハ、兼テ小笠原壹岐守殿御差圖之趣モ有之、當番年之義ニ付、差向、美濃守殿方ニテ御取扱可有之候事、

辰正月 長崎縣記

○祐邦再ヒ各國領事ニ贈ル書

以書翰申入候、然ハ當今國内之形勢ニ付、追々人心致動搖候間、土地騷擾爲無之、右樣之節ハ、肥、筑兩家之内ヘ土地相預ケ、一ト先在勤之者引上候樣可致旨、兼テ命令モ有之候間、諸事右差圖ニ隨ヒ致歸府、就テハ以來貴國人民談判之義ハ、當番年ニ付、筑前家ニ於テ、差向條約之通取行、且是迄取扱候在住支配向、通辭等ハ、其儘ニ相殘シ置候、此段申達候、謹言。

慶應四年辰正月十四日　河津伊豆守　花押

各國岡士宛各通　吉井正澄手記

復古記　卷十九　終

總括兼纂修
一等編修官　臣　長松幹

校勘
一等編修官　臣　長炗
一等掌記　臣　四屋恒之

校録
六等掌記　臣　澤渡廣孝

繕寫
二等繕寫　臣　小川長和
二等繕寫　臣　小島春

復古記 卷二十

明治元年戊辰正月十五日

○正月

十五日、天皇、元服ヲ加フ、詔シテ海內ニ大赦ス。

平明、所司奉仕御裝束、

辰刻、著束帶參　內、

巳刻、諸卿著仗坐、

權大納言、（正親町實德）醍醐大納言、（忠順）橋本大納言、（實麗）新宰相、（大原重德）源宰相中將、（梅溪通善）左大辨宰相、（淸閑寺豐房）等著、

權大納言、令官人敷膝突召外記、外記昌言來、權大納言、問諸司具否、

此間行事藏人（五位六位）、開御厨子取出御調度、以二階一脚、立東御屛風前、其北並立御調度

天皇著御童服、渡御南殿北廂、著御（絲鞋）、

著御大床子御座、（東向御）、

藏人頭候御裾、

內侍二人、持劍璽候前後、左右近衛次將（扶持之）、

女房、供奉如常、

藏人頭以下候簀子、

次五位藏人二人、取唐匣泔坏等、置草墩北方、唐匣在北、泔坏在其北、
次奉行職事、坊城俊政、依　天氣召能冠人、
次能冠人藏人頭甘露寺勝長、參上、奉調御髻、奉結御幘退出、
次奉行職事、依　天氣問吉時於陰陽師、倉橋泰清候殿上、歸參申時至之由、
天皇著御帳中御座不脫御絲鞋、
劒璽留北廂大床子上、
權大納言、起使座於陣後著靴、
先是、式部卿伏見宮邦家、親王、於同所著靴、
醍醐大納言以下次第ニ起座、便宜所ニ徘徊、
次式部卿親王、入宣仁門、經宜陽殿壇上、立軒廊西第一間、南面、　權大納言、經同路、立軒廊東第一間、南面、
次式部卿親王、出西二間、進立庭中版位東、北面、　權大納言、出東二間、進立親王東、北面、
次式部卿親王、直渡馳道、到西洗器下洗手、
主水正、內藏助等役之、
次權大納言、歸入軒廊、直到東洗器下洗手、
主水佑、內藏允等役之、
次式部卿親王、昇西階、當西第二間立簀子、東面、
次權大納言、昇東階、當東第二間立簀子、西面、
次內侍、持唐匣不加臺、出東御屏風內、南頭、

權大納言、昇長押參進受唐匣、進昇御帳臺奉脫御幘、訖退下、立御帳臺西邊、東面、
次內侍、持御冠 居宮蓋、出西御屛風內、南頭、
式部卿親王、進受御冠、到御帳前、奏祝詞曰、
掛毛畏支天皇我朝廷、令月乃吉日爾御冠加賜比天、盛爾美支御貌人度成利賜奴、天神地祇相悅比護利福倍奉賜比弖、御壽長久、寶位無動久御坐世度、
申訖、昇御帳臺、奉加御冠、退下立本所、
次權大納言、參進御帳臺、取刷奉理御髮、退下本所、召能冠人令理御鬢、
天皇、入御北廂、式部卿親王、權大納言等磬折、式部卿親王、權大納言、降東西階退去、親王、假候殿上、奥座、權大納言、假候仗座、
次女官、進取御帳中唐匣、退於御帳後、授內侍、內侍取之、置臺上、
次采女、敷簀薦、小机二脚並立於御帳中、
天皇、更出御帳中、黃櫨染縫腋御袍、御草鞋、
藏人頭勝長、候御裾、
劍璽猶留北廂、
次權大納言、就東洗器下洗手、昇東階、自簀子渡御前、就酒臺下取盃、盛醴加面葉、立西二間邊、東面、
次式部卿親王、降殿上小板敷、出無名門、就西洗器下洗手、昇西階立、權大納言北取、權大納言所持盃、參進御帳前、奏祝詞曰、
御酒惟厚久、御肴惟嘉之、芳之支寂花乎敬祭利賜波、諸神達悅歆太萬比、遺乃味乎嘗賜波、御體平介久御坐弖、天地乃休事
手、日月度共爾受保賜比、手長乃御世乃遠岐御世爾、貴比戴加禮御坐度、
申訖、昇御帳臺、跪奉御盃、

天皇受盃、令置机東簀子薦上給、
　式部卿親王、退下、降西階、進立庭中版位、（版位西二許丈、東面、）
次權大納言、參進、昇御帳臺、取肴物（干鯛、）奉之、退候臺下、
天皇、先祭後嚌、權大納言、更昇御帳臺、
天皇、返賜肴物、權大納言受之、如元置御机上、退下降東階、渡馳道、立式部卿親王南、（東面、）
天皇、祭醴、（先祭後嚌、）
　式部卿親王、權大納言、相共再拜、
天皇、入御北廂、
　式部卿親王、退候便宜所、權大納言、歸入軒廊、復仗坐、（經階下、）
次采女、撤帳中小机簀薦等、南廂机同撤之、
　內藏、主水、撤洗器巾等、
次女官、供例御裝束、撤帳中平敷御座立御倚子置物御机等、　裝束使辨監臨之、
　掃部寮、南階東西、敷殿上人、政官等座、
　近衛官人、南階東西立胡床、
　此間少納言、辨、外記、史、著日華門外南腋床子、（近代無此事、）
左右近衛、引陣、
天皇著御倚子、（著御靴、）
　藏人頭勝長、候御裾、
　內侍、取御劍璽、置置物御机、

近仗稱警、
次政官、著階下座、
次王卿著外辨座、不問諸司、
先是、醍醐大納言以下、出敷政門、經御輿宿西入鳥曹司、著靴、如例節會、
次開門、　闈司分居、
次外記、差近衞官人、告王卿可參入之由、少納言無召儀、
次醍醐大納言、忠順、難波大納言、宗弘、橋本大納言、實麗、冷泉中納言、爲理、源中納言、中院通富、新源中納言、愛宕通祐、新宰相、重德、源宰相中將、通善、左大辨宰相、豐房、治部卿、倉橋泰聰、左京權大夫、北小路隨光、新侍從三位、飛鳥井雅望、等、次第起座、直入承明門東戸、無雁列之儀、列立標下、西上北面、異位重行、各立定醍醐大納言以下拜舞畢、自上首次第退出、
天皇還御本殿、
近仗稱蹕、
闈司歸入、
近仗退出、
中殿御遊今度被略之、
此後、新冠者大江俊茂、十三歲、藏人北小路俊昌男、於諸大夫間有元服之儀、加冠藏人頭勝長冠者、於神仙門外拜舞賜祿、拜舞退出、
次供尋常御膳、藏人頭爲陪膳、御元服式
○赦令書
今般、　朝政御一新之御場合、今十五日、　御元服之御大禮被爲行、　御仁恤之　聖慮ヲ以テ、天下無罪之域ニ被遊度候間、

是迄有罪不可容者ト雖モ、　朝敵ヲ除之外、一切大赦被　仰出候、於國々モ不漏様、施行可有之候、尤向後、彌以賞罰嚴明ニ被遊度候ニ付、厚　御趣意ヲ體認致シ、行屆候様可仕旨　御沙汰候事。

正月十五日　徳川茂承家記　黑田長知家記

○附錄九日達書

來十五日、就　御元服、自十四日十六日中、淺黄奴袴著用之人々、薄色奴袴著用可然候事。　有栖川宮家記

○附錄十一月達書

御元服ニ付、來ル十六日後宴並赦令等、依御時勢御延引、追テ可被　仰出候事。

但シ賀表、右ニ付不被爲在候事。　有栖川宮家記

○赦令ハ赦令傳宣ノ儀ヲ謂フ、赦ヲ止ムルニ非サルナリ。

○附錄十一日達書

來十五日、就　御元服、參賀獻物、可爲如安永度之通候事、

同上ニ付、重服者參賀獻物、可爲如安永度之通候事。

但シ於重服者、當日參賀可憚候事。　有栖川宮家記

○附錄本日達書

就御元服

一太刀　壹腰

一馬　一疋

馬代　公卿　白銀三枚　殿上人　白銀二枚

右爲恐悅、獻上可有之候事、

准后御方ハ恐悅可申上、不及獻上物候、

但名代、以重臣可相勤、日限之儀ハ、可爲隨意候也、

右之通可相達旨、參與衆ヨリ被申渡候、仍テ申入候也。

正月

黑田長知家記
本莊道美家記

○嘉言親王ヲ二品ニ敍シ、隨身兵仗ヲ賜ヒ、尊秀親王ヲシテ、博經ト復名セシメ、三品ニ敍ス。

無品嘉言親王、

右可二品、

中務、才華馥郁、性質溫淳、能抽忠誠、旣揚名譽、宜加崇爵、式示寵光、可依前件、主者施行。

慶應四年正月十五日

一品行中務卿幟仁親王宣

從四位下行中務大輔臣卜部朝臣敎久奉

正四位衛務輔跋躝左大史算博士臣小槻𥜿輔世　行

聖護院宮家記
大內記新作留

○三公、納言連署御璽等、丁卯十二月九日所載、幟仁親王二品宣旨ニ同シ、告ノ下ニ二品嘉言親王ニ作ル。

○

正二位行權大納言藤原朝臣實麗宣、奉　敕、以左右近衛番長各一人、近衛各三人、宜爲二品嘉言親王隨身兵仗者。

慶應四年正月十五日

大外記兼助敎中原朝臣師身奉

聖護院宮家記

○

復名博經親王。華頂宮家記

○

無品博經親王、

右可三品、

中務、地居磐石、望重維城、敦序茂親、有深恒典、宜授朝粋、用照龍光、可依前件、主者施行。

慶應四年正月十五日

一品行中務卿幟仁親王宣

從四位下行中務大輔臣卜部朝臣教久奉

正四位衛務輔𨶹蹔左大史算博士臣小槻禰輔世　行

華頂宮家記。

○三公、納言連署御璽等、上文ニ同シ、告ノ下、三品博經親王ニ作ル。

○宣旨ヲ現授スル、博經親王ハ十八日ニアリ、嘉言親王ハ十九日ニアリ、家記ニ見ユ。

○大勢ヲ察シ、世變ニ隨ヒ、新ニ外國ト和親ヲ結フヲ布告ス。

外國之儀ハ、　先帝多年之　宸憂ニ被爲在候處、幕府從來之失錯ニ依リ、因循今日ニ至リ候折柄、世態大ニ一變シ、大勢誠ニ不被爲得止、此度　朝議之上、斷然和親條約被爲取結候、就テハ上下一致、疑惑ヲ不生、大ニ兵備ヲ充實シ、國威ヲ海外萬國ニ光輝セシメ、　祖宗　先帝之神靈ニ對答可被遊　叡慮ニ候間、天下列藩士民ニ至ルマテ、此旨ヲ奉戴シ、心力ヲ盡シ、勉勵可有之候事。

但是迄、於幕府取結候條約之中、弊害有之候件々、利害得失公議之上、御改革可被爲在候、猶外國交際之儀ハ、宇內之公法

ヲ以テ取扱可有之候間、此段相心得可申事。

正月　徳川茂承家記　黒田長知家記

○三道東征ノ師ヲ發スルヲ以テ、奥羽ノ諸藩ニ命シテ、六師ニ會セシム、又宇和島藩ヲシテ、土佐藩、松山伊豫、討伐ノ兵ニ應援セシム。

陸奥

各通　仙臺中將　盛岡中將　丹羽右京大夫

相馬因幡守　秋田万之助　田村右京大夫

松平大學頭　南部遠江守　津輕式部少輔

出羽

各通　佐竹右京大夫　上杉彈正大弼　酒井左衛門尉

戸澤中務大輔　水野眞次郎　松平伊豆守

酒井紀伊守　六郷兵庫頭　織田左近將監

米津伊勢守

就徳川慶喜叛逆、爲追討、近日　官軍、自東海、東山、北陸三道可令進發ノ旨、被仰出候附テハ、奥羽之諸藩、宜知尊　王ノ大義、相共謀、援六師征討ノ勢旨　御沙汰ニ候事。　仙臺藩記佐竹義脩以下各家家記

○本條、阿部正靜、津輕承昭、板倉勝巳、本多忠伸、安藤信勇、内藤政養、南部信民、立花種恭、佐竹義諶、岩城隆邦ノ家記、達書、原記ヲ佚ス。

○

別紙之通、十一日、土佐藩ヘノ達書ヲ指ス、土州ヘ被　仰出候ニ付テハ、同國之儀、宜土州申合、出兵應援可致旨　御沙汰候事。伊達宗徳家記

宇和島少將

○附録十七日再達書

今度、豫州松山追討被　仰出候ニ付テハ、土州申合、應援出兵可致旨相達候得共、將軍宮ヨリ命令被出候次第有之由ニ付、自今征討筋ニ於テハ、同宮ヘ萬事可伺出旨　御沙汰候事。伊達宗徳家記

宇和島少將

○高槻藩ニ命シ、所管ノ倉廩舊幕府領地ヲ發シテ、兵禍ニ罹リシ者ヲ賑恤セシム。

薩州
長州ヘ

別紙、永井日向守預地ノ内、鄉藏兩藩ヨリ封印付ニ相成候趣、右鄉藏ニ有之候内、米千五百石、淀、八幡、橋本邊ヘ御救米御用ニ相成候間、封印相解可引渡候事。

正月

覺、

一米百三十石　攝州島上郡　廣瀬村
一米百二十七石　宮田村
一米二十七石　宿名村
一米百二十石　河州茨田郡　走谷村
一米十七石　泥町村
一米四十石　岡村
一米七十四石　東大寺村
一米七十七石　奈佐原村
一米六百石　富田村
一米十二石　牧方村
一米八十石　三矢村
一米二百六十八石　出口村

一米四百九十三石　中振村
一米四十七石　攝州島下郡　澤良宜濱村
一米六十二石　穂積出作
一米百五十九石　島村
一米三十九石　乙辻村
一米五十八石　太中村
一米二百八十五石　伊加賀村
一米五十一石　新在家村
一米二百二十八石　一津屋村
一米二十四石　鶴野新田
一米百十九石　小坪井村
〆米三千百三十八石
内　米千五百石　此度御用米ニ可相成分
殘米千六百三十八石、
右之通御坐候、以上。

永井日向守家來
鈴木治三郎
岸田長次郎

輦下日載
島津忠義家記

○高槻藩ヘノ達書、原記ヲ失ス。

○尾張藩士、竊ニ徳川慶喜ニ應センコトヲ謀ル者アリ、徳川慶勝、其狀ヲ聞シ、藩ニ歸リ之ヲ鎮定セント請フ、乃チ慶勝ニ命シテ、城守ヲ嚴ニシ、奸徒ヲ誅鋤シ、且旁近ノ諸藩ヲ糾合セシメ、其子徳成ヲシテ、代リテ上京セシム。

今度慶喜反形顯然之上、東歸致候付、逆徒相催、再擧西上モ難計候付テハ、尾國封疆之儀、東海、東山之二道ニ當リ、賊衝ニモ候間、警備十分ニ無之テハ難相成、且國中姦徒虚ヲ窺ヒ、不良之志ヲ逞セントスルノ勢モ有之趣ニ相聞候付、兼テ　禁闕之守衛被　命候得共、不得止、暫時御暇ヲ賜リ候間、早々歸國、姦徒誅戮、近國ノ諸侯ヲ慫慂シ、勤　王ノ志ヲ奮發セシメ、藩屏ノ任ヲ第一ニ相心得、歸國中、元千代名代トシテ上京、　禁闕守衛相勤候樣　御沙汰候事。

正月　徳川義宜家記

○義宜家記ニ云、在國家老列渡邊新左衛門、大番頭榊原勘解由、馬廻頭格石川内藏允等、坂城ト竊カニ聲氣ヲ通シ、朋黨ヲ結ヒ、金穀兵器ヲ備貯シ、幼冲ノ義宜徳成、後ニ義宜ヲ擁シ、慶喜ニ應援セント相謀ル、一藩ノ士、之カ爲ニ煽動セラレ、殆ト大事ニ及ハントス、留守ノ重臣等、急ニ使ヲ馳セテ、其狀ヲ慶勝ニ報ス、因テ其情實ヲ　朝廷ニ奏聞シ、一旦歸國シテ之ヲ處分センコトヲ乞フ、正月十五日、特命之ヲ聽ス。

○酒井忠義、京ニ至リ、途中遷延ノ由ヲ稟シ、且忠氏ノ罪ヲ乞フ、明日、令シテ、忠氏ヲ幽シ、忠義ヲシテ立功自贖セシム。

私儀、被爲　召候ニ付、去ル十二日、若州小濱表出立仕候處、折節深雪ニテ、道中筋果敢取不申、精々差急キ、一昨十三日夕、江州河原市驛迄罷越候、然ル處、分部若狹守領分大溝ニテ、未何之御沙汰モ無御坐候間、通行難爲致旨ニ付、色々掛合モ爲仕候得共、同所ヨリ相伺可申候間、夫迄之處、兎角相待可申旨ニテ、不得止、右河原市驛滯留罷在候處、昨十四日夕、通行仕候テ宜趣申越候ニ付、卽刻同驛出立仕、只今到著仕候、此段御屆申上候、以上。

正月十五日　酒井右京大夫

酒井忠禄家記

○

同氏若狹守儀、此度不圖、不都合之次第ニ相成恐入候段ハ、過日申上候事ニ御坐候、然ル處、私在所表出立仕候迄ハ、未著不仕候處、此程領分迄罷歸候由ニ付、不取敢、右罷歸候次第相糺候處、去ル十一日、丹州於福住、　勅使西園寺殿ヘ御行逢ニ相成候節、別紙書付指上、猶又委細申上候處、夫々御承知ニ相成、若狹守儀ハ直ニ一ト先歸國仕、人數之內　勅使御供可仕旨依御沙汰、重臣一人、其外少々之人數相殘シ、若狹守儀ハ歸國仕候趣申越候ニ付、屹度相愼可罷在旨申付遣候、猶御沙汰相待、如何樣共處置可仕候間、御差圖被成下度奉存候、依之、別紙指添、此段申上候、以上。

正　月　十　五　日　　　　　　　　　　　　酒　井　右　京　大　夫

酒井忠祿家記

○別紙

私儀存意、蒙　御尋問奉恐入候、累代格別　天恩ニ沐浴候儀、勤　王之外、素ヨリ他念無御座候、　勅命尊奉之儀ハ、今更申上候迄モ無御座、愈勤勞仕候覺悟ニ御坐候、德川氏ヘ奉公仕來候儀ハ、是又祖先以來之恩義ニ報候臣子之情分ヲ盡シ候迄ニテ、　朝敵ニ荷擔仕候存念、毫毛無御坐候、微衷之程、幾重ニモ　御亮察被成下、宜御執　奏之程奉懇願候、以上。

正　月　十　一　日　　　　　　　　　　　　酒　井　若　狹　守

酒井忠祿家記

○十六日達書

其藩事、從前、德川之家隷トシテ、　朝廷ヘ奉對、如何之儀モ有之候處、謝罪之道相立、歸順之儀御許容被爲在度旨、段々歎願之旨被　聞食候、隨テ今度爲東征、北陸道鎭撫將軍ヲ被置候間、右先鋒被　仰付、其功勞ニヨリ前罪御宥免可相成候間、奮勵戰鬪可仕候、右謝罪之實功相顯候迄、若狹守儀、其方ヘ御預ケニ相成候、其旨可相心得　御沙汰候事。

正　月　十　六　日　　　　　　　　　　　　酒　井　右　京　大　夫

酒井忠祿家記

○附録忠義申請書

此度、北陸道爲鎭撫、　勅使御下向ニ付、私儀、右御先鋒被　仰付、誠以難有仕合奉存候、然ル處、從來持病之痔疾ニテ、乘馬ハ勿論、乘輿モ甚困難仕候、此度押テ上京仕候ニ付テモ、強ク相障、起臥モ不自由罷在候次第、長途之出馬甚以無覺束、深ク心痛仕候、右ニ付、不本意之至、自由ケ間敷、重々奉恐入候得共、爲名代一門酒井直江ヘ篤ト　御趣意申含、人數差添御先鋒爲相勤、私儀ハ爰許ニテ療養相加、少々ニテシ快候ハヽ、跡ヨリ出馬可仕候、此段御聞置被成下度、偏ニ奉懇願候、以上。

正月十九日　酒井右京大夫

酒井忠祿家記

○家記ニ、指令書無之、願之趣ハ御聞届トアリ。

○建部政世ヲシテ、博經親王、醍醐忠順ノ衛兵ヲ出サシム。○建部攅家記

○出雲藩、警衛ノ器仗、未タ備具セサルヲ以テ、姑ク服役ノ期ヲ緩センコトヲ請フ。

御警衛人數之内到著仕候段、別紙之ヲ佚ス、之通御届仕候得共、先達テ以來、道中筋通行不都合ニ付テ、器械等未タ著揃不申品モ御坐候間、右人數御遣口被　仰付候儀、暫御猶豫被下候樣仕度奉存候、此段御沙汰申上置候。

正月十五日　出雲少將留守居

津川六郎右衛門

松平定安家記

○附録十七日上申書

三ケ月詰御警衛人數之内、上京仕候得共、道中筋通行不都合ニ付、器械等不揃之趣申上置候處、今日迄ニ追々著揃申候、此段御届仕候、以上。

出雲少將留守居
津川六郎右衛門
松平定安家記

正月十七日

○松平武聰ノ老臣、書ヲ上リ、武聰、德川慶喜至親ノ私情ヲ去テ、將ニ大義ニ徇ハントス、因テ粮食ヲ給シ、兵器ヲ借ランコトヲ請フ。

德川慶喜、是迄奉對　朝廷、恭順ヲ盡シ候樣被　思召候處、此度之擧動、反狀明白ニ付、不被爲得止、御追討被　仰出候趣、右ニ付テハ賊徒雖譜代臣下之者、悔悟憤發、爲國家盡力之志有之輩ハ、御採用可被爲在旨被　仰出候趣、謹テ奉拜承候、右近將監家筋之儀ハ、德川支屬ニ候上、小藩微力ニ候間、德川氏ヘ隨從盡力仕候儀、則　皇國ヘ忠勤ト相心得罷在候處、不圖モ德川氏　朝敵ト相成候段、驚愕之至御坐候、前文之通之家筋、且右近將監儀、慶喜ト之間柄ニモ御坐候事故、承知仕候ハハ深恐入可申奉存候、附テハ諸藩ヨリモ一際憤發仕、聊私親之念無之、勤　王之志相顯候樣仕度奉存候ハ勿論之事、於私共、何卒右之本意相立候樣仕度奉存候、依テ御達書、當地詰合之者、早速作州ヘ持參仕候間、不日右近將監ヨリ御受可申上ト奉存候、夫ニ付テハ、不取敢人數差出、御差圖次第、如何樣之御奉公ヲモ爲相勤度候得共、一昨秋退城、領地相失候後、勝手向必至之困難ニテ、一藩糊口ニモ差支、甚當惑仕居候、乍併、如何トカ差繰リ候テ、少々ニテモ、人數差出候都合ニ可相成ト奉存候、附テハ征討將軍樣御下坂中ニ候得ハ、人數出張之上ハ、大坂ニテ奉蒙　御差圖候樣可仕哉、又ハ御當地ヘ爲差登可申哉、兼テ窺定置度奉存候、只々困窮中ニ御坐候故、多人數差出候事出來兼可申ト恐入、呉々殘念至極ニ奉存候、若格別之御憐愍ヲ以テ、出張中御賄被成下、玉藥等モ拜借被仰付候事ニ御坐候得ハ、方今右近將監儀、何之要害モ無之、作州之一農家ニ寓居仕、其上大病ニ御坐候得ハ、右ヲ警衛之家來而已相殘、其他擧藩出張、微力之限リ忠勤ヲ盡シ可申、左候得ハ右近將監ハ申迄モ無之、一藩之本懷、無此上難有事ニ奉存候、此段奉伺候テ、猶作州表ヘ申遣度奉存候、何分急速御差圖被成下

候樣、只管奉歎願候、以上。

正月十五日

松平右近將監内
伊東平馬

松平武脩家記

○小原忠寛、大垣ヨリ至リ、暫ク其藩事ヲ料理センコトヲ請フ、又豫メ、討伐鎭撫ノ規律ヲ定メ、之ヲ諸道ノ軍ニ頒タンコトヲ建議ス。

私儀、暫時御暇奉願上、大垣表へ罷越候處、昨夜歸京仕候、此段御屆奉申上候、然處、主人采女正儀、此度東山道鎭撫　御勅使之先鋒被　仰付、已ニ明日ハ入京仕候續ニ御坐候テ、右一件之用向、殆差湊申候、依之、重々奉恐入候へ共、今暫之處、御暇中之心得ニ罷在候樣奉願上度、尤御用等御坐候節、又ハ可相伺次第モ御坐候節ハ、參與御局中へ出勤仕候樣仕度、是又奉願上候、以上。

正月十五日

戸田采女正内
小原二兵衞

坤儀革正錄

○

此度、寛大之御評議ヲ以テ、主人采女正儀、東山道鎭撫　御勅使之先鋒被　仰付、冥加至極難有仕合ニ奉存候、右ニ付、出先戰鬪之儀ハ、臨機之處置ニ御坐候へ共、御追伐御鎭撫一體之　御主意ヲ、豫テ奉伺置度奉存候、定テ諸道へ御差向之儀ト奉存候間、御處置一定不仕候テハ、必竟紛擾ヲモ釀可申ト奉存候、是等之儀ハ、屹ト御決議之御事ト萬々奉存候へ共、可相成ハ、　御征討之御軍律、御鎭撫之御律例ヲ御一定ニテ、其御書面ヲ諸手へ御渡ニ相成候上、諸道一時ニ御發向ト申御次第

ニ相成候ハヽ、却テ速ニ御成功可相成哉共奉存候、僭言奉恐入候得共、心付候儀ニ付奉申上候、以上。

戸田采女正家來

正月十五日　小原二兵衛

坤儀革正錄

○

謹テ再言上仕候、昨日、御軍律、御律例等之儀ヲ奉申上候ハヽ、諸道御發向之方々樣、御心得方一定之御規律ヲ奉申上候義ニ御座候、然處、御鎭撫之義ニ就テハ、干戈ヲ用ヒス、先彼ヲシテ公道ニ甘服セシムルヲ以テ、御聖算之第一儀ト奉存候、因テハ迅速ニ、　朝廷之御新政、復川氏之得失、公明至正之御檄文ヲ以テ、海内ヨリ海外之諸蕃ニ至ル迄御布告相成、敵トナク味方トナク、一統感泣シテ　聖道ニ遵奉セシメ、而後、關東ヘハ特ニ　勅使ヲ御差向、云々ヲ御詰問被爲在、諸道ヘノ鎭撫使ヲ被差向候御手順、可然哉ト奉存候、右御檄文之御草案ハ、先ツ征討大將軍樣御手許ヲ始メ、諸道ヘ御發向之御方々樣ニモ、御銘々樣之御見込ヲ御取調、御一同御突合遊ハシ、公議ヲ以テ得失御取捨御一定之上、上梓シテ遍ク御布告被遊候御儀、當今之御急務ト奉存候、微臣之僭言、多罪萬死。

正月十六日　小原二兵衛

坤儀革正錄

○京極朗徹、京ニ至ル、（京極高德家記）松平慶憲、一柳賴紹、老臣ヲシテ、代リテ京ニ在ラシム、（松平直致一柳賴明家記）

○參與外國事務取調掛東久世通禧、佛國全權公使レヲン、ロッシユ、英國特派全權公使兼總領事スルハルリー、ヱス、パークス、伊國特派全權公使コントドラ、トウール、米國辨理公使アル、ビー、フォン、フアルケンボルク、孛國代理公使エム、フォン、ブランド、蘭國公務代理總領事ド

テクラフ、ファンボルスブロックニ、神戸港ニ會シ、大政復古ヲ報スルノ國書ヲ致シ、且神戸驛爭鬪ノ事ヲ判理ス、參與岩下方平、及ヒ寺島宗則、陶藏、吉井德春、幸輔〇並ニ薩摩藩士、伊藤博文、俊介、片野瑜、十郎〇並ニ長門藩士、陸奧宗光陽之助〇紀伊藩士、之ニ參ス、是ニ於テ、各國公使、神戸驛ノ守兵ヲ撤シ、拘留ノ船艦ヲ解ク、乃チ薩、長二藩兵ヲシテ、神戸驛ヲ守ラシメ、阿波藩兵ノ兵庫警守ヲ罷ム。

應接概畧、

勅使、曰ク、今日ハ　天皇ヨリ各國ヘ布告ノ爲ニ參リタリ、

右御演舌アリテ、御布告書、各國公使ヘ渡サル、布告書ハ十日ニ見ユ、

佛公使、曰ク、佛國公使ハ、日本ニ在留スルコト尤モ多年ナルヲ以テ、客國公使ニ代リ、應接ヲ演舌センコトヲ願フ、乃曰ク、

自今　天皇、御國政ヲ執リ、御全國治平ニ及ハヽ、各國共ニ悦フ所ナリ、

勅使、曰ク、

天皇、親ラ國政ヲ裁スルニ於テ、固ヨリ全國信服スルハ論ナキナリ、

各國公使、曰ク、

天皇、親ラ政權ヲ執ルノ以後、其政令、既ニ全國ニ及ヒシヤ、亦有司ニ命シ、外國事務ヲ司ラシム、何人カ其任ヲ得タルヤ、

勅使、曰ク、仁和寺宮、外國事務總裁ヲ蒙リ、其餘、京師ニ於テモ、其任ヲ蒙ルモノアリ、且政令ノ事ハ、近日、德川慶喜反逆ノ次第アリテ、未タ政令ヲ全國ニ布クニ至サレトモ、不日ニ追討平定セン、

此間ニ、外國事務掛公卿諸侯等ノ姓名ヲ達ス、

各國公使、曰ク、御布告ノ文ニ、德川氏政權ヲ返ス云云ト云フ、然ルニ今、勅使ノ言ニ曰ク、德川慶喜反逆云云、然ルニ今日

猶、内亂中ナルヤ、
勅使、曰ク、慶喜、江戸ニ歸リ、罪ヲ待ツト云フ、然ルニ未タ、其服從スルノ狀ヲ見ス、
各國公使、曰ク、徳川慶喜、江戸ニアリ、罪ヲ待ツト云フ、然ルニ猶征討セラル丶ヤ、
勅使、曰ク、今現ニ使節ヲ江戸ニ遣ス、而ルニ未タ其返答ヲ得ス、
各國公使、曰ク、今日差當リ、此地ニ一事件アリ、其譯ハ先日、備前侯ノ家臣、途中云々ノ事アリ、故ニ不得止事、各國兵士ヲ出シ、警固シテ安全ヲ圖ル、此ハ總體ノ規則ニモナケレトモ、止ヲ得サルノ事ナレハ、此ノ處置ハ如何ナルヤ、
勅使、曰ク、以後、日本政府ヨリ當地ヲ警衛スヘシ、
各國公使、曰ク、政府ヨリ御警衛アレハ、如何樣ノ事件起リテモ、政府ニ引受ラル丶ヤ、
勅使、曰ク、固ヨリナリ、
又曰ク、今日ノ布告ノ勅書ハ、直ニ各ノ本國、帝王臣民ニ布告セラル丶ヤ、
各國公使、曰ク、唯今御尋ノ一條ハ、追テ貴答可致ナレト、前ニ云ヘル備前ノ事ハ、猥リニ各國人ヘ亂妨云々、以後　天皇御親政ノ事ナレハ、必ス政府ニ於テ御所置ニナルヤ、
勅使、曰ク、固ヨリ然リ、
各國公使、曰ク、備前亂妨ノ事ニ及テハ、談スルモ怒ニ堪サル次第ナリ、況ヤ、各國公使ニ對シ砲發ノ事情等、全ク文明ノ國ニ於テ有ル可ラサルコトナリ、
勅使、曰ク、此處置ハ、各國ノ公論ニ任セ、且ツ　天皇ノ親裁ヲモ受ク可シ、
各國公使、曰ク、備前亂妨所業ハ、下賤ノ者ノ作業ニモ非ス、乃チ一大諸侯ノ大臣自ラスル事ナレハ、今ハ外國守固ノ兵ヲ解クノ後、日本政府ノ守衛ヲ得レハ、決テ右樣ノ亂妨ノ事有ル間敷ヤ、
勅使、曰ク、今日當所警衛ノ事、薩、長兩國ニ命ス、以後右樣ノ義、決テ有ル可ラ丶、

此間ニ、薩、長ニ命セラレタル御書付ヲ、各國公使ニミセル、此書、下ニ見ユ、
各國公使、曰ク、然ハ自後、如何樣ノ事出來スルトモ、　天皇ノ政府ニ於テ御引受ナルヤ、
勅使、曰ク、然リ、
各國公使、曰ク、此六人ハ六國ノ公使ナレハ、貴國ト和親交信センコト幸甚ナレトモ、自後若シ御違約等ノ事アレハ、大ニ貴國ノ大事ニ及ハン、
勅使、曰ク、固ヨリナリ、然レトモ今日談判スル所ハ、特ニ兵庫港ノミニ就テ云フノミ、横濱其餘ノ諸港ハ、未タ政令ノ行レ難キモアラン、併シ是等モ、不日ニ　天皇ノ政府ニ歸スルヤウアルヘシ、
各國公使、曰ク、固ヨリ、　天皇御政令ノ行ハル、ノ土地ニ就テ云フナリ、
又曰ク、今日薩侯、長侯ニ當地ノ警衞ヲ命セラレタルコトヲ、市中村中ニ觸レラレタシ、且備前亂妨ノ事ハ、各國ノ公論ヲ受ケ、　天皇ノ親答アル可キノ仰ナレハ、唯今直ニ口舌ヲ以テ申演難シ、近日ノ中、熟考ノ上、書取ヲ以テ申上ヘシ、
勅使、曰ク、諾、
又曰ク、以後、薩、長兩藩ヲ以テ當地ヲ警衞スレハ、外國人ノ安全ハ勿論ノ事ナレハ、願クハ當地在留ノ外國人ヨリモ、日本人ヘ對シ亂妨ナキヤウ、各ヨリ達セラレタシ、
各國公使、皆曰ク、早速相達スヘシ、
勅使、曰ク、近日、日本諸侯ノ蒸氣船六艘ヲ、外國ヘ取押ヘラレタルノ事ハ、如何ノ所置ナルヤ、
各國公使、曰ク、先日備前亂妨ノ砌ハ、未タ政府ノ御布告モナキ間ナレハ、先ツ右ノ船ヲ引留置タリ、併シ今日ヨリ、萬事政府ニ御引受トナレハ、早速夫々返却スヘシ、
又曰ク、東久世卿ニ、兩三日間ハ、當地ニ在留致サル、コトヲ願フ、其譯ハ、各國人ヲシテ安心セシメンカ爲ナリ、

勅使、曰ク、諸、猶此地全權ノ者、交代スルマテハ滯在スヘシ、
各國公使、曰ク、先日ヨリ各國ノ公使、商人、大阪ニ滯在スル處、彼地ノ變ニヨリテ此處ニ來ル、然ルニ、當所ニハ在留ノ家モ無之故ニ、速ニ歸阪センコトヲ願フ、猶再ヒ御案内ヲ待ツヘキヤ、
勅使、曰ク、彼地モ未タ混雜相止サル中ノ事ナレハ、追テ此方ヨリ案内スヘシ、
各國公使、曰ク、然ハ御案内マテ待ツヘシ、然レトモ歸坂ノ上ハ、當地同樣御守衞等アルヘキヤ、
勅使、曰ク、諸、然リ、
各國公使、曰ク、先刻ノ御談判ノ、政令未タ行ハレサル開港ノ諸港トハ、何等ノ土地ナルヤ、
勅使、曰ク、横濱、長崎、箱館ノ三港ナリ、尤モ長崎ハ速ニ處置スヘケレトモ、横濱ハ何時ヨリ支配スルコトヲ言ヒ難シ、
各國公使、曰ク、長崎ハ近日ヨリ御處置ニナルナレハ、彼地ニ住スル外國人ヘ、怪我等無之樣ニ、其長官ニ命セラレタシ、
勅使、曰ク、諸、
各國公使、曰ク、今日ノ御應接ニヨリテ、各國公使モ大ニ安心シ、幸甚ナリ、
勅使、曰ク、彼ノ布告ノ勅書ハ、直チニ本國ニ送ラル、ヤ、
各國公使、曰ク、諸、速ニ達スヘシ、
勅使、曰ク、今日應接スル處ハ、先、前條ノ如シ、猶貴方ヨリ、談判ノ事アレハ承ルヘシ、
各國公使、曰ク、今日ハ先、別條申上ルコトナシ、
勅使、曰ク、今日ハ各國公使ニ面會イタシ、甚タ滿足ニ存ス、猶、委細速ニ　天皇ニ奏聞スヘシ。外務省記 華下日載
○案スルニ、此時、魯國未タ公使ヲ我邦ニ置カス、閏四月、淸水谷公考、箱館ニ赴クニ及ヒ、乃チ國書ヲ其政府ニ贈致ス。
○通譯報告書東

本月十五日、從第十二字乘船、神戸運上所ニテ、六ヶ國公使ヘ別紙（應接概略ヲ指ス、）之通應接談判相遂ケ、至極都合宜、大綱領ハ相濟、細目ハ隨テ可遂談候、

一兵庫市中、竝外國人取締、薩、長ヘ別テ嚴重ニ相命候、

一阿州兵庫表御固メ、是ハ被免可然存候、薩、長ニ被命候上ハ、他藩入雜リ混雜ヲ生シ候間、通禧ヘ御委任之邊ヲ以テ、隊長呼出シ、大坂表ヘ人數繰上候樣申渡候間、左樣御承知可被下候、

一神戸、兵庫人民、居合候樣觸示候、

一宇和島ハ直ニ、兵庫表著上相成候樣、御運相願度候、

一宇和島著迄ハ、當地ヲ引拂兼候間、左樣御承知可被下候、

一御布告書、外國六ヶ國ヘ一通宛相渡ネハ、本國ヘハ不相通由ニ候間、急々外五通御認、官人位之處ニテ御手輕ニ御指越可被下候、

御實名之方、可然ト相極候、右ニ付テハ、兼テ御趣意之處窺居候間、國印計ニテ可濟ト申候得共、夫ニテ承知不仕旨ニ付、不得止、右之次第ニ相成候故、

御實名之方五通、急々御指越、外筥ハ桐、紫紐計ニテ宜候、一日ニテモ早キ方宜候間、早々御運相成候樣希入度候、委細ハ陸奧陽之助指上候間、御聞取可被下候、德川閣老ト多年應接有之候得共、今日之如キ、斷然タル應接ハ無シト、公使共申居候、全　皇威之然ラシムル處トハ申ナカラ、岩下、伊藤、寺島、岸（岸ハ吉井ノ誤ナラン、）之周旋ニヨリ程能候間、不取敢、宮ヨリ被下之趣ヲ以テ、一人前貳千疋宛、酒肴料遣置候、各宿屋ニ居候間、酒呑候也、尙又御指含可被下候、通禧、舌頭一轉、治亂之堺ニ關係致シ、實ニ不肖之身、心痛無此上候、

一山陰、山陽通路相開候、御進軍御都合次第ト存候、

一夷人ヨリ取押候日本戰艦、（原註、久留米、越前、宇和島、筑前、肥後、平戸六藩船返與候、）今日卽刻解兵候、尤外國人出張、神戸之兵隊解兵候、

一右御布告相成候譯柄、日本國中御布告相成度候、

一公使、京師上京之儀ハ、彼ヨリ何共不申候、御混雜中不都合出來候テハ不宜故、是ヨリ不申出候、何レ上京致度ト可申出候、

一書外事件、陽助之ヘ御尋被下度、將軍參謀御一覽之上、陽之助ニ託シ、此書狀副總裁ニ御呈被下度候、

正月十六日第六時、兵庫驛認、　通禧

三職叢書
外務省記

○吉井德春書束、

昨日之御問合、相違條々致承知候、御布告一條申上候通、切迫之勢ニ御坐候處、昨日、勅使御下向、則各國ヘ御掛合相成候處、今日十二字ヨリ於神戸、御談可申上トノ事ニテ、今日十一字兵庫御發船、各國ヨリ兵庫ヘノ御迎船差上候、神戸御著之處、何レモ御警衛多ク、兵隊繰出、イト嚴重ナル事ニ御坐候、扨御布告相成次第、左之通御坐候、

佛	東久世殿
英	岩下
伊太	寺島
米利	陸奥
孛漏	伊藤
阿蘭	吉井
	片野

右之通、主客席順ニテ、御布告狀御渡、各國大ニ喜悅、上都合候也、

一備前一條之儀、彼ヨリ申出シ、外國兵隊ヲ以テ神戸相固メ候得共、是ハ法則ニ不叶儀ニ候、如何可致哉ト云、御答、薩、長兩

藩警衛申付候間、其方人數引揚度、彼、左樣ナラハ幸之事也、何時ニ御固御差出可被成ヤ、此時二字也、幸助云フ、四字ニ固場可請取ト、彼、諾ス、則長藩片野十郎、馳歸テ二小隊ヲ繰出ス、洋兵數百人群集セリ、入代テ生田口ノ關門ヲ請取リ、七字、兵庫口ヲ相固ム、此四五日、市中大ニ苦居候處、　勅使之御談判ニテ、一時ニ通路相開ケ、市中愁眉ヲ開キ、兩藩ヲ尊敬スル甚敷、大ニ面目ヲ施セリ、生田口關門、纔一町計之所ニ元勝カ塾アリ、一小隊ハ十分ニ宿陣ス可シ、明日ヨリ繰込、兵粮焚出シ等下知ヲ加ヘ、一小隊ヲ兵庫ヘ殘置、明後日方、歸坂可致候間、左樣御承知可被下候、

一蒸氣船六艘モ則差返ス、依テ今晩、直ニ其藩々ヘ請取候樣御達ニ相成候、　朝命ヲ以テ御取返ニ相成、何共氣味能次第ニ御坐候、藩々モ大ニ難有カリ可申、

一備前處置之處、如何致シ候ハヽ、各國滿足可致哉承リ候テ、　朝廷ヘ可相窺旨、　勅使ヨリ御申掛被遊候處、是ハ書取ヲ以テ可申上トノ事ニテ、格外之事モ有之間敷クト被存候、

一幕府、是迄、公家ニハ何モ出來ヌ者ノ樣ニ申居候得共、中々左樣ニハ無之、談判モ是程早決致候儀、幕ニテ一向無之ト、公使等申入候由、實ニ恐悅無限、今晩ハ祝酒共酌申候、

先ハ、右御左右爲可申上、如斯御坐候、以上。

正月十五日　　吉井幸輔

伊地知正治樣　（三職叢書　外務省記）

○以上二條、三職叢書、災ニ罹リ原書ヲ失ス、今復、古學要中收錄ノモノヲ採リ、外務省記ニ據テ補正ス。

○輦下日載ニ云、片野十郎、兵庫表ヨリ浪華歸著、過ル十一日、兵庫罷越候節、於途中外國人四五名出來リ、飛轎ヲ要シ、左右ヨリヒスチ押付、何人ニ哉ト相尋候故、長州ト相答候處、長州ナレハヨシト申、直樣引連、サトウ等ノ所ヘ參候處、薩州吉井モ參居候付、種々談判致候得共、何分備前暴動、甚以不相濟、元來行軍ヘ失禮致候ニモセヨ、佛蘭西マトロスノ事ニ付、其者ヲ如何樣ニ致候トモ異論無之候得共、其跡ニテ各國留館ヘ銃撃致候段、何共不相心得、今般日本政府改革ノ趣ニ付テハ、

決テ破約ノ國論ニ相成候故ト推察致候トノ事、右ニ付、兵庫、東西ヘ各國ヨリ守兵ヲ置キ、砂嚢ヲ以テ砲臺ヲ築キ、猶諸藩在港ノ軍艦、原註、五六艘モ有之候、悉ク器械取擧ケ、取卷置候勢ニテ、猶又彼等申分ニハ、國論變換ニ付テハ、是迄長州トハ懇親致居候得共、今日ヨリハ全ク敵ト相心得トテ、林宇一等モ大ニ疎外致候模樣ニテ、何分難近付勢ニ有之、其日ハ片野モ一應引取候由、必竟、彼等ノ申分ハ、各國政府、改革ノ事有之候得ハ、一時ヲ不待、闔國布令、萬事處分致候事ニ候處、徳川氏政權返上以後、既ニ數十日ニモ相成、外國ヘ爲何儀モ無之央、此度ノ暴動ハ、國論變換可知トノ事ニテ、此度薩、長二藩、守衛ト申候テ參候共、薩、長ヨリ守衛ヲ受候道理無之、何モ日本政府ヨリノ御仕向ナラハト申、一向引受不申ニ付、皆々手ヲ措候、其後東久世樣、　勅使トシテ御下向相成候故、各國人モ大ニ氷釋、各國ヨリ兵隊ヲ出シ御迎ヘ、應接所ヘ引受、御應接ニ相成、　天皇ヨリ云々ト被　仰候處、公使等悉ク帽ヲ脱シ、立テ禮ヲ致シ、前ニ錄シ有之通リ御應接相濟、各國公使等、餘程悅服致シ、樂ヲ奏シテ御歸リヲ送リ候後、サトウ等咄ニ、兼テ徳川役人共ヨリ聞及候ニハ、公卿ト申者ハ大抵愚ナリト、然ルニ今日ノ應接ハ、日本ヘ來リシ已來、始テ如此斷然タルヲ觀シナリトテ、甚悅ヒ居候由、十郎、談話ニ有之候事。

○附錄外國新聞紙拔抄

勅使、昨日、外國ミニストル方ヘ御入、今午後御達、是迄タイクーン預リ居候政事、　ミカドニ返リシコト御達、

本月四日、千八百六十八年二月、備前人暴發ニ由テ、居留地警衛ノタメ、軍艦ヨリ上陸セシ兵ヲ引カハ、　ミカド、舊ニ依テ外國人ト懇親ノ義、沙汰アルカ如ク見ヘル也、

此度ハ、如此キ暴人ヲ制スルコト、タイクーンニ勝レルト思ハレル、

今、日本首長ノダイミヨウ、權門ノ人、合國一致ノ基トナル政府ヲ立ントス、然ハ備前人ノ如キ暴客アリテハ、國民、及ヒ外國人安カラス、

勅使、左ノ令ヲ出ス、

外國交際ハ最大切ナル故、萬般親睦ニ罷成度　叡慮ニ付、當所通行ノ者、外國人ニ對シ不法無之樣可致候。慶明雜錄

○

各通
薩州
長州

此節、外國御交際之儀、格別御大切之場合ニ付、專信義ヲ本ト被遊候、　御趣意ニ就テハ、外國人居住地通行之節、彼ヘ對シ無禮不法之振舞無之樣、嚴重ニ取締可致事。

正月十五日　東久世前少將

禁下日載

○阿波藩兵ヘ口達

兵庫表警衞之儀被　免、人數之儀ハ、大坂表ヨリ御達次第、進退可致候事。徳島藩記

○徳川慶喜、大久保忠禮ノ甲府城代ヲ罷メ、歸リテ函根關ヲ嚴守セシム、又書ヲ英國公使パークスニ送リ、其書記官前日ノ問ニ答ヘ、條約履行ノ事ニ至リテハ、固ヨリ變替ナキヲ告ク。

其方御預箱根關門之義ハ、東海道咽喉之地ニモ有之、當節柄、別テ嚴重不相成候テハ、難相成場所、在甲ニテハ十分御警衞行屆間敷哉ト被思召候ニ付、甲府御城代ハ御免被成候、依之、早々歸城、領分中取締ハ勿論、關所御固等之儀、都テ御委任被成候間、御警衞向勉勵行屆候樣可致旨、被　仰出候條、可被存其趣候、恐々謹言。

正月

小笠原壹岐守
長行
松平周防守

稻葉美濃守　康英

板倉伊賀守　正邦　勝靜

酒井雅樂頭　忠惇

大久保加賀守殿 大久保忠良家記

○

以手紙致啓上候、然ハ一昨十三日、貴國公使館書記官シドニーロコック氏、閣下之名ヲ以テ會晤致候處、云々被申聞候趣有之、其上、同氏ヨリ書翰ヲ以テ如斯後、　女帝陛下之ミニストルハ、條約遵奉之事ニ付、誰ト引合ニ可及哉、且兵庫、大坂ニオヰテ條約違背之事アラハ、誰ヘ訴出、誰ヲ以テ其責ニ任スヘキ哉等、疑問ノ條々承知致シ、則閣下ヘ御答ニ及ヒ候、一體條約之趣意ヲ以テ、外國諸般之事務ハ、我客歲十二月中、於大坂城　大君殿下ヨリ、閣下ヘ御演述被爲遊候通ニテ、相替候儀無之處、松平修理大夫家來共、國內變革之際ニ乘シ、京師ニアリテ上下ヲ鉗制シ、專縱自恣之擧多ク、天理ニ悖リ、民心ニ戾レル事不少ヲ以テ、其罪狀ヲ數ヘ、　御門ニ奏シ、在京奸惡之徒ヲ除キ、名義ヲ正シ、曲直ヲ明ニシ、天下ノ公論ヲ採テ、生民之自主ヲ佐ケ、國內不易之基礎ヲ建立セント計リシ次第ハ、已ニ御承知之事故、縷述不致候、扠右之譯ヲ以テ、　大君殿下上洛之爲メ、其先供ヲ前發セシメシ途中、松平修理大夫家來共、差拒ミ發砲セシヨリ、交戰トナリシ處、我兵ハ事不意ニ起リ、地勢之利ヲ失ヒシ故、竟ニ勝利アラスシテ退却シ、暫ク大坂ヲ引拂テ紀州ニ入タリ、何レニモ奸兇之徒ヲ斥ケ、其地ヲ鎭撫イタシ候迄ハ、同所之儀ハ、貿易通商出來兼候間、閣下ニモ其段御承知、可然御處置有之度、兵庫之儀ハ、各國御同

儀ニテ御引請御坐候事故、公正之御處置ニ御任セ申候、抑條約ヲ變シ候儀ハ、不容易重件ニテ、一旦之成敗ヲ以テ、忽永世之盟ヲ渝エ、曲直之理ヲ論セスシテ、速ニ不朽之信ヲ破リ候儀無之段ハ、是迄之親睦ニ對シ、毫モ疑ヲ容レサル處ニ候得ハ、閣下ニモ御懇親之意ニテ、正大之御處置可有御坐儀ト存候、此段可然御推察有之度、右御答、可得御意如斯御坐候、以上。

正月十五日　小笠原壹岐守

シエル、パルリー、エス、パークスケシビ

閣下　外務省記

○書中、所謂書記官ノ書束、原記ヲ失ス。

復古記　卷二十　終

總括兼纂修
一等編修官　臣　長松幹

校勘
一等編修官　臣　長莢
一等掌記　臣　四屋恒之

校錄
六等掌記　臣　澤渡廣孝

繕寫
二等繕寫　臣　小川長和
二等繕寫　臣　小島春

明治元年戊辰正月十六日ニ起リ十七日ニ至ル

○正月

十六日、親王ヲ三公ノ上ニ班ス。

自今、親王　宣下相濟候方ハ、座次可爲三公之上候事、

但、尚追テ可被改儀モ有之候得共、方今先如之、

一親王、大臣任職之輩、八景繪間可爲參入事、

一親王、大臣、麝香間可爲參入事、

一是迄非大臣ニシテ麝香間參入之人々、自今以後、內々番所小番勤仕可有之事、

一牛車　宣下相濟輩、於宜秋門壇上下乘、　宣下無之人ハ、於檜垣外下乘勿論之事、

一雖親王、丞相、自今陪膳可爲非藏人事、

一禮節之事、

諸家一同同樣、可因其人之官位事。鷹司輔熙家記　有栖川宮家記

○有栖川宮家記ニ十八日トシ、大槻文彦筆記ニ十五日トス、今輔熙家記ニ從フ。

○宮、堂上及ヒ諸官人ニ諭シ、舊習ヲ洗除シ、志操ヲ磨勵シ、以テ實用ニ適セシム。

今般、賊徒追伐被　仰出、　皇威漸盛ニ被爲成候ニ付テハ、上親王、公卿ヨリ、下非藏人、諸官人ニ至ル迄、感激奮發、　朝廷

之御爲、擲身命忠勤可仕之處、傍觀坐視、尺寸之功モ無之輩、剰自己之利祿ヲ貪リ、行々大祿ヲモ可賜哉抔ト、噂仕居候者モ有之哉ニ相聞エ、以之外之事ニ候、諸家世襲之祿ニ至リ候テハ、時宜ニヨリ被爲減少候トモ、加增被　仰付候儀ハ無之、但シ此上、奉公之廉ニヨリ、功勞有之候向ハ、其身限リ加祿ヲモ可賜儀ニ候、官位ニ至候テモ、同樣世襲ノ舊弊ハ御改革被遊、人材ニ應シ御補任可被爲在儀ニ候間、一同其心得ニテ文武之事業、精々勉勵可仕候、從前在　朝之人々、武ハ唯武家之業ニテ、於　朝廷御用ヒ不被爲在事ト存シ、一切致廢棄候而已ナラス、文藝ニ至候テモ、固陋拙劣、艸莽布衣之士ニハ萬々不相及、徒ニ軟媚之風ヲ喜ヒ、上品抔ト稱シ、華奢風流ヲ專ト致シ候ニヨリ、滿　朝婦人ノ如ク、遂ニ紀綱衰弛、　皇道陵夷ニ至リ候段、實以、可愧可歎之至ニ候、向後、讀書撃劍ヲ始メ、文武之大道ニ至リ、旦夕講究可仕、精熟之上ハ應其材、夫々御登庸可被爲在　思召ニ候間、無懈怠可心掛候、尤此時節ニ至リ、官武之差別無之儀ニ候間、武家之輩ニ對シ倨傲不遜、萬一、確執ヲ生シ候テハ不容易儀ニ候間、呉々可相心得、家來下部等ニ至迄、朝廷之御威光ヲ假リ、勤　王ヲ口實トシテ世人ヲ欺キ、金穀ヲ貪リ候者モ有之哉ニ付、急度可申付候、且今度赦令被行、有罪之者モ夫々寛大之御處置被爲在候ヘトモ、尙此上怠惰悖戾之徒ハ、不撰貴賤嚴罰可被　仰付儀ニ候間、此旨、兼テ可相心得樣　御沙汰之事。

正月　大槻文彥筆記　島津忠義家記

○忠義家記、二十二日ニ收ム、蓋シ回達ノ日ナリ。

○九條道孝、大炊御門家信、近衞忠熙、近衞忠房、鷹司輔熙、德大寺公純、一條實良、廣幡忠禮、日野資宗、柳原光愛、廣橋胤保、飛鳥井雅典、葉室長順、六條有容、野宮定功、久世通熙、豐岡隨資、伏原宣諭、裏辻公愛ノ朝參ヲ許ス。

各通　九條左大臣
大炊御門右大臣

一條前右大臣

廣幡内大臣

日野大納言

葉室大納言

一時被止參　朝、可被及　御沙汰筋モ有之候處、　大政御一新、且　御元服大禮被爲行候、旁自今、出仕可有之旨、被　仰出候事。（九條道孝等各家家記）

○

各通　日野大納言

葉室大納言

辭官、竝被　加本番所小番御免列候事。（日野資貴家記・島津忠義家記）

○葉室長順家記、此達書ヲ佚ス。

○

各通　近衛前左大臣

近衛新前左大臣

鷹司前右大臣

頃年、逆賊慶喜、竝奸吏、會、桑等之申請ニ隨ヒ、失　朝威件々不少、屹度御糺明モ可被　仰付候得共、數百年來流風、太平遊懦之弊ヨリ今日ニ至候、此度　大政御一新、且　御元服大禮被爲行候、旁格別之以　思召被宥恕、參　朝被　免候事。（近衛篤麿家記・鷹司輔熙家記）

○

各通　徳大寺前右大臣
六條中納言

頃年、逆賊慶喜、並奸吏、會、桑等申請ニ隨ヒ、失　朝威件々不少、屹度御糺明可被　仰付候得共、此度　大政御一新、且　御元服大禮被爲行候、旁格別之以　思召被宥恕、參　朝被　免候事。徳大寺實則家記 六條有容家記

○　六條中納言

辭官可相願事、　被加本番所小番御免列候事。六條有容家記

○　柳原大納言

頃年來、賊慶喜、並奸吏之處分ニ隨ヒ、　朝議ヲ誤候件々ハ勿論、或ハ正議ヲ唱ヘ、曖昧タル心底、全營私利候所業、其罪不輕、屹度嚴重ニ可被　仰付之處、　大政御一新、今度　御元服大禮被爲行、旁格別厚　御憐愍ヲ以テ、自今參　朝被　免候事。柳原光愛家記

○　柳原大納言

辭官、並被加本番所小番御免列候事。柳原光愛家記

○　各通　飛鳥井大納言
廣橋大納言
野宮中納言

久世前宰相中將

頃年來、賊慶喜、竝奸吏等企望ニ任セ、萬端行横道、蔑 朝憲、營私利候件々、不容易次第、嚴重可被 仰付之處、 大政御一新之折柄、今般 御元服大禮被爲行、旁格別之厚 御憐愍ヲ以テ、自今參 朝被 免候事。（飛鳥井雅典等各家家記）

○ 各通 飛鳥井大納言 廣橋大納言 野宮中納言

辭官、竝被加本番所小番御免列候事。（飛鳥井雅典等各家家記）

○ 久世前宰相中將

被加本番所小番御免列候事。（久世通熙家記）

○ 豐岡大藏卿

始終趨走于權門、以私心破公議、且利欲之心不少、彼是御不審之筋モ有之、旁屹度御糺明可有之處、 大政御一新、且今度御元服大禮被爲行候折柄、厚 御憐愍ヲ以テ、自今參 朝被 免候事。（豐岡健資家記）

○ 豐岡大藏卿

辭官、竝本番所參勤之事。（豐岡健資家記）

○ 伏原三位

員外之身トシテ、漫リニ要路ニ交通シ、大臣ヲ愚弄シ、私利ヲ恣ニスルノ條、其罪不輕、屹度可被處極刑之處、　大政御一新、且今般　御元服大禮被爲行候折柄、格別厚　御憐愍ヲ以テ、自今參　朝被　免候事。

但、本番所參勤之事。　島津忠義家記

○　裏辻中將

員外之身、云々、伏原宣諭ト同シ

辭官之事。　裏辻公愛家記

○内旨ヲ佐竹義堯ニ下シ、奥羽諸藩ヲ糾合シ、以テ東征ノ師ニ應援セシメ、其召命ヲ止ム。

秋田中將へ

就德川慶喜叛逆、爲追討、近日官軍、自東海、東山、北陸三道可令進發之旨、被　仰出候、其藩東北雄鎭、奕葉名家、深知尊王之大義者、然ルニ奥羽之諸藩、未辨君臣之分者往々有之、其藩宜鼓舞之、相共謀、可被援六師征討勢旨、内々　御沙汰候事。

追テ、大小藩可有登京旨、先般被　仰下候得共、右應援戮力之向ハ不及其儀、各在國蓄兵力備粮食、可被專軍國之務候也。

正月　佐竹義堯家記

⊙義堯老臣受書

今般、御内意之趣承知仕奉畏入候、抑、　朝廷御復古之折柄、叛逆之者有之、奉惱　宸襟候段、於私共モ深奉恐入候、就テ右京大夫儀、年來國役多端、領内疲弊ニ及ヒ、此節微力ニ罷在候得共、舊來大祿ヲ賜ヒ、厚ク奉蒙御國恩居候儀ニ御座候得ハ、聊報恩之爲メ、羽州一國之儀ハ、速ニ恭順欽奉候樣可仕候、乍去、元來遠境之儀、　王化之イマタ及兼候向ハ、教諭鎭撫ヲ加エ可申、若又順服不仕候者於有之ハ、斷然討伐モ可仕候、尤國内勤　王之諸藩ハ、大小ニ不抱(拘歟)、夫々談合可仕候、總テ今般、正明寬大之　御仁政、難有奉敬承候儀ニ御座候得ハ、御趣意ニ違ヒ不申樣、精勤可仕候、右ハ大事件之儀ニ御座候得ハ、早

早右京大夫へ申遣シ、追テ委曲申上候樣可仕候得共、右之趣、不取敢、私ヨリ御受奉申上候、以上。

正月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　秋田中將家老

眞崎兵庫

佐竹義脩家記

○戸田氏共、京ニ至リ罪ヲ乞ヒ、且伏見從役者ノ處分ヲ稟ス、明日、令シテ、從役者ヲ幽シ、氏共ヲシテ立功自贖セシム。

私儀、去ル十二日、大垣表發足、唯今京著仕候、依之、旅宿淸光寺ニ差扣罷在候、此段以使者御屆申上候、以上。

正月十六日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　戸田采女正

戸田氏共家記

○

私家來、兼テ大坂表御取締被申付、同所ニ罷在候處、先般德川慶喜上洛之節、俄ニ供被申付、罷登候途中、不圖戰鬭之事起リ驚入、淀表ニ差扣罷在、三日四日兩日ハ決テ手合ニ加リ不申候處、五日朝ニ至リ、無餘儀場合ニテ、先手之者共一小戰ニ及候趣、其後宮樣御出進之儀拜承仕候ニ付、速ニ人數引纏、大坂天王寺迄引退候趣ニハ御座候得共、何分及一戰候段奉恐入候、依之、右人數引取來候節、城外ニテ兵器取揚、爲相愼置申候、此上ハ處置如何可仕哉、御沙汰被成下置候樣奉願上候、以上。

正月十六日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　戸田采女正

戸田氏共家記

○十七日達書

戸田采女正

其藩事、従前徳川之家隷トシテ、　朝廷ヘ奉對如何之儀モ有之候處、謝罪之道相立チ、歸順之儀御許容被爲在度旨、段々數願之旨被　聞食候、隨テ今度爲東征、東山道鎭撫將軍被置候間、右先鋒被　仰付候、其功勞ニヨリ前罪御宥免可相成候間、奮勵戰鬪可仕候、右謝罪之實効相顯レ候迄、出坂其家來之向ハ御預ケニ相成候、此旨可相心得　御沙汰候事。

正月　戸田氏共家記

○郡山藩、既ニ守兵ヲ闇嶺ニ置ク、且其封内ニ屬スルヲ以テ、平戸藩兵ト相策應スルノ命ヲ得ント請フ、之ヲ聽ス。

大和國倉銀峠之儀ハ、甲斐守領分ニモ有之、且兼テ御達之儀モ御座候ニ付、殘黨爲召捕、過日以來人數差出置申候、然ル處、今般、松浦侯同所御固メ被　仰付候ニ付テハ、兼テ甲斐守人數差出置候儀ニ付、相持之心得ヲ以テ、互ニ應援等モ仕度存意ニ御座候間、何卒雙方申合相勤候樣、表立御達等被成下置候ハヽ、益　御威光ヲ以テ、格段行屆可申哉ニ奉存候、以上。

柳澤甲斐守内

正月十六日　小牧文作

○批紙

相互ニ應援可致候。　柳澤保申家記

○平戸藩ヘノ達書ハ見ル所ナシ。

○藤堂高邦、各處守衛ノ命ヲ奉シ、且其封桑名ト相近キヲ以テ、兵ヲ京師ニ出スコト能ハサルヲ禀ス。

去ル十日、　御假建ヘ佐渡守重臣御呼出ニテ、此度之御趣意相心得、國力相應之人數可差出旨、被　仰出奉畏候、早速在所ヘ申遣候處、兼テ宇治御警衛被　仰付、人數差出置候處、今日之形勢故、猶亦増人數差出、御警衛筋嚴重ニ申付候、然ル處、

在所表ハ神宮ヘ相接、同所手當仕、南海竝東國ヨリ　皇威ヲ相犯、不慮之者御座候テハ恐入、且接近之柔名、敵地ト相成候事故、右等之手當ニテ、差向人數差出候儀行届兼、奉恐入候、此段不取敢申上置候樣、在所佐渡守ヨリ申付越候、此段申上、候以上。

正月十六日　　藤堂佐渡守家來
宇野純三
藤堂高邦家記

○九鬼隆備、京ニ至ル、九鬼寧隆家記渡邊章綱、織田信成、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。渡邊章綱織田信及家記

○外國事務總裁嘉彰親王、書ヲ各國公使ニ與ヘ、交際ノ事、悉ク舊幕府締結ノ條約ヲ遵守スルヲ諭シ、且其本官ト爲リ、三條實美、東久世通禧、伊達宗城、之ニ副タルヲ告ク。

今般、　天皇自ラ條約被取結候ニ付テハ、以來是迄之通之條約、總テ遵守可致旨蒙　勅命候、且又拙者儀、外國懸總督ニテ、三條前中納言、東久世前少將、伊達伊豫守等、右之副ニ相成候、此段爲御知申入候、以上。

正月　　二品親王嘉彰

英公使
ハルリー、エス、パークス閣下
外務省記

○外務省記ニ云、英館及ヒ外各館ノ所藏皆同文ニテ、皆二十日ト署シ、米館ハ二十一日トス、外國事務局日記中ニハ、正月十六日二品親王嘉彰花押トアリト、按スルニ、十七日、七科總督ヲ置キ、嘉彰親王ヲ以テ海陸軍務總督ト爲シ、十九日、

正親町三條實愛、大坂ニ至リ命ヲ傳フ、十八日ノ條ニ詳ナリ、然レハ、二十日以後、此事アルノ理ナシ、故ニ事務局日記ニ據リテ、本日ニ收ム。

○佛、英等六國公使、書ヲ東久世通禧ニ致シ、神戸爭鬪處分ノ旨ヲ陳論ス。

去ル十一日、松平備前守家來、神戸町、竝外國人居留地通行之節、不意ニ各國公使、竝當所在留人民ヘ對シ致暴發候段、昨日、御門陛下之使節東久世前少將閣下ヘ申述候處、右一條、　御門陛下ヘ奏聞被成候間、如何ナル處置ニテ各國公使トモ滿足可有之哉、委細書面ニテ可申進旨、閣下ヨリ被申聞候間、則左之通申進候、

一無故外國公使、竝其人民ヲ襲ヒシ段、　御門陛下之政府ヨリ以書面、各國公使公使ヘ十分詫入、且此以後、　御門陛下之領分ニテ、在留スル外國人ニ向テ、決シテ右樣之暴行、再度有之間敷段、急度請合可申事、尤公使共ヨリ、夫々國許政府ヘ通達可有之筈ニ候、

一外國公使共、竝在留諸外國人ヘ對シ、發砲スル樣下知致セシ士官ハ死罪之事、尤各國公使館附屬士官立合ニテ仕置スヘキ事、

右之通、如斯惡行之者共、無遲滯境然ニ罰セサレハ、以後不法之暴行ヲ防カサルノミナラス、雙方懇親之交際ヲ全スル仕方無之ニヨリ、　御門陛下之政府ニ於テ、右申立之當然タル事ヲ御承知被成候趣、早速各公使共承度候、右之段爲可得貴意、如斯御座候、以上。

正月十六日

佛國公使
レオン、ロッシュ

英國公使
ハルリー、エス、パークス

伊國公使
コントドラトウール
亞國公使
アルヒー、フヲンフアルケンボルク
孛國公使
エムフオン、ブランド
和蘭公使
ドテクラフ、フアンボルスブロック

東久世前少將
閣下 外務省記

○按スルニ、本文飜譯ニ係ルト雖モ、月日ハ彼ノ紀元ヲ署スヘシ、別ニ考證スヘキ書ナキヲ以テ、姑ク原文ニ從フ。

○備前藩兵、播磨姫路城酒井忠惇ノ治所、ヲ徇ヘテ、之ヲ下ス。酒井忠邦家記

○附錄備前藩奏狀

先達テ、備前守御届申上候儀ニ付、姫路表ヘ兵馬指向、去就糺問仕候折柄、今度討伐之　命被　仰出候旨、於出先、去ル十六日拜承仕、最早猶豫難仕、直ニ攻掛及砲發候處、速ニ降伏仕、向後大義滅親、　朝命奉戴之外他念無之段申出、爲實効證人指出候ニ付、同十七日、城地、並砲器等相預、堅固ニ取締仕居申候段、出先之者ヨリ右證書寫相添、不取敢御届申上候、尤將軍宮ヘハ於大坂表申上、可奉伺候、此段宜敷御執　奏奉希候、以上。

池田備前守家來
深井宇兵衛
正月二十日

○證書寫

今度、王政復古被　仰出候折柄、主人儀、奉對　朝廷實ニ奉恐入候仕合ニ付、尊藩等ヘ被爲命、討伐之師御指向相成候段奉恐入、只々悲泣愁歎、大義滅親之外無御座、御軍前ヘ降伏開城之上、砲器悉御預申上、且別紙名前之者共、爲證人差出、王師ヲ奉迎、以後　朝命奉戴之外、餘念無御座候、微臣共、連印誓書奉指上、只管哀哭歎訴仕候、以上。

慶應四戊辰年正月十七日

高須隼人印
本多意氣揚印
松平孫三郎印
本多驛之助印

別紙名前、

高千三百石　家老　大河内帶刀　高千石同　松平數馬
高三百石　忠惇再從兄弟年寄三代目席上座　酒井又七郎　岡山藩姬路討伐始末

○上杉齊憲、徳川慶喜ノ奏狀丁卯十二月十九日、上リシモノ、ヲ得テ、將ニ西上セントシ、福島陸奧、ニ到ル、是日、慶喜敗歸ノ報ヲ聞キ、直ニ引キ還ル。

○戊辰事情ニ云、齊憲、十五日ヲ以テ發途、十七日、福島ニ至ル、會々家老竹股美作、江戸ヨリ來リ、幕軍伏見ニ敗レ、大阪城陷ル等ノ狀ヲ報シ、齊憲ニ勸メ、歸藩熟議以テ進退セシム、齊憲、其言ニ從ヒ、速ニ旋歸ス。

十七日、職制ヲ定メ、神祇、内國、外國、海陸軍、會計、刑法、制度ノ七科ヲ置キ、議定之ヲ分督シ、參與之ヲ分掌ス、乃チ議定中山忠能ヲ以テ、神祇事務總督ヲ兼ネ、議定正親町三條實愛、德大

寺實則、松平慶永、山內豐信ニ內國事務總督ヲ兼ネ、參與辻維嶽、大久保利通、田宮篤輝ニ內國事務掛ヲ兼ネ、議定副總裁三條實美、議定晃親王、伊達宗城、參與東久世通禧ニ外國事務總督ヲ兼ネ、參與後藤元燁、岩下方平ニ外國事務掛ヲ兼ネ、議定副總裁岩倉具視、議定嘉彰親王、島津忠義初名茂久、ニ海陸軍務總督ヲ兼ネ、參與廣澤眞臣、西鄉隆盛ニ海陸軍務掛ヲ兼ネ、議定副總裁岩倉具視、議定中御門經之、淺野茂勳、參與西四辻公業ニ會計事務總督ヲ兼ネ、參與三岡公正、小原忠寬ニ會計事務掛ヲ兼ネ、議定長谷信篤、細川喜廷ニ刑法事務總督ヲ兼ネ、參與十時維惠、津田信弘ニ刑法事務掛ヲ兼ネ、參與萬里小路博房ニ制度事務總督ヲ兼ネ、參與三岡公正、福岡孝弟、田中輔ニ制度事務掛ヲ兼シム、又熾仁親王、白川資訓三位、ヲ以テ、神祇事務總督ト爲ス。○二人議定ニ非ス、又六人部是愛、樹下茂國、谷森種松ヲ事務掛ト爲ス、亦參與ニ非ス、竝ニ特選ナリ、

三職分課

總裁宮　萬機ヲ總裁シ、一切ノ事務ヲ決ス、

議定宮 公卿 諸侯　事務各課ヲ分督シ、議事ヲ定決ス、

內國事務總督　京畿庶務、及諸國水陸運輸、驛路關、市都、城、港口、鎭臺、市尹ノ事ヲ督ス、

外國事務總督　外國交際、條約、貿易、拓地、育民ノ事ヲ督ス、

海陸軍務總督　海軍陸軍、練兵、守衛、緩急軍務ノ事ヲ督ス、

會計事務總督　戸口、賦役、金穀、用度、貢獻、營繕、秩祿、倉庫ノ事ヲ督ス、

刑法事務總督　監察、彈糺、捕亡、斷獄、諸刑律ノ事ヲ督ス、

制度寮總督　官職、制度、名分儀制、撰敍、考課、諸規則ノ事ヲ督ス、

參與　事務ヲ參議シ、各課ヲ分務ス、

內國事務掛　外國事務掛　海陸軍務掛

會計事務掛　刑法事務掛　制度寮掛

徵士、無定員、

諸藩士、及ヒ都鄙有才ノ者、撰擧拔擢、參與職ニ任ス、下ノ議事所ニ在リ、則議事官タリ、又分課ニ因テ、其課ノ掛トナル者、其事ヲ專務ス、

撰擧ノ法、公議ヲ執リ拔擢セラル、則徵士ニ命ス、在職四年ニシテ退ク、廣ク賢才ニ讓ルヲ要トス、若其人、當器尙退クヘカラサル者ハ、又四年ヲ延ヘ、在職八年トス、衆議ニ執ルヘシ、

貢士、大藩三員、中藩二員、小藩一員、

諸藩士、其主ノ撰ニ任セ、下ノ議事所ヘ差出者ヲ貢士トス、則議事ニ與リ、輿論公議ヲ執ルヲ旨トス、貢士、定員有テ年限ナシ、其主ノ進退スル所ニ任ス、又其人ノ才能ニ因テ、徵士ニ撰擧スヘシ、

諸侯議定職、徵士參與職、共ニ改テ、今年正月ヲ以テ受命ノ月トナシ、以後年限ノ見付、且月給ノ次第、之ヲ以テ定ムベシ、下參與、徵士ノ命ヲ受ケサル者ハ、改テ貢士トナスヘシ、且新ニ、大中小藩ノ定員ヲ以テ貢士ヲ置クヘシ、

大藩、四十萬石以上、　中藩、十萬石以上、三十九萬石ニ至ル、　小藩、一萬石以上、九萬石ニ至ル、　水萍貽孫錄

○此書、神祇ノ一科ヲ闕ク、蓋シ前日ノ草案ニ係ル、其宣布ノ日ヲ失スルヲ以テ、此ニ併錄ス、又藩級貢士等ノ制ヲ發スルハ、二月十日、及ヒ十一日ニアリ。

○中務卿宮

神祇事務總督、被　仰付候事。有栖川宮家記

○越前大藏大輔 各通
土佐前少將

內國事務總督、被　仰付候事。春嶽私記 山內豐範家記

○山階宮 各通
東久世前少將

外國事務總督、被　仰付候事。山階宮家記 東久世通禧家記

○仁和寺宮 各通
岩倉前中將
薩摩少將

海陸軍務總督、被　仰付候事。東伏見宮家記 島津忠義家記

○東伏見宮家記、二十三日トス、然レトモ、嵯峨實愛手記大坂紀行、十九日ノ條ニ、宮外國掛辭退被聞召ノコト、海陸軍總督被仰下、一紙相渡ストアリ、家記、蓋シ誤ナラン。

○

安藝少將

會計事務總督、被　仰付候事。淺野長勳家記

○

細川右京大夫

刑法事務總督、被　仰出候事。細川護久家記

○

廣澤兵助

海陸軍務掛、被　仰付候事。輦下日載

○

小原二兵衛

會計事務掛、被　仰付候事。小原忠寛履歴書

○中山忠能以下ノ宣旨、皆原記ヲ失ス、因テ三職分科回達書ヲ下ニ附記ス。

○三職分科回達書

總裁

有栖川帥宮

副總裁

兼外國事務總督　三條前中納言

兼海陸軍務會計事務等總督　岩倉前中將

神祇事務總督

同掛
有栖川中務卿宮　中山前大納言　白川三位
六人部雅樂　樹下石見守　谷森大和介

內國事務總督
正親町三條前大納言　德大寺中納言　越前大藏大輔　土佐前少將

同掛
辻將曹　大久保市藏　田宮如雲

外國事務總督
山階宮　三條前中納言　東久世前少將　宇和島少將

同掛
後藤象二郎　岩下佐次右衛門

海陸軍務總督
仁和寺宮　岩倉前中將　薩摩少將

同掛
廣澤兵助　西鄉吉之助

會計事務總督
中御門中納言　岩倉前中將　安藝少將　西四辻大夫

同掛
兼制度掛三岡八郎　小原仁兵衛

刑法事務總督　長谷三位　細川右京大夫

同掛　十時攝津　津田山三郎

制度寮總督　萬里小路右大辨宰相

同掛　福岡藤次　田中國之助　三岡八郎

有栖川宮家記
東山道總督府叢紙

○附録會計掛伺書

私共儀、會計事務御用掛ト被　仰付候ニ付、差掛リ候事件、先ツ一二三ヶ條、左ニ書取奉伺候、

一參與席之外ニ、會計事務裁判所ト申一局ヲ、先ツ假ニ早々御取立被下置候樣仕度奉存候、

一天朝御料所之御收納米金、其外諸運上等之儀ニ拘リ候義ハ、都テ右裁判所ヘ申出候樣、御總督ヨリ一同ヘ御觸達被成下度奉存候、

一右裁判所御用向之件々、私共ニオヰテ巨細取調、御總督ヘ申上、尙又御總督ニテモ御評議之上、廢立候義ハ、外參與中ヘモ御垂問被成下置、可否御一定之上、御下知ニ隨ヒ、裁判所ニテ御取計可仕候、尤事柄ニヨリ候テハ、御總督ヨリ御處置被成下候樣ニモ可奉願上候、

右之通、先ツ小口之順序ヲ御立被下置候ハヽ、委細之義ハ追々取調、可奉伺上候御事。

會計御用掛

正月　　三岡八郎
　　　　小原二兵衛

國內ヘ御觸面案、

王政復古、萬機一新ニ付、是迄德川氏領分、向後　天朝御領ト可心得者也。

附公事訴訟ハ、內國事務裁判所ヘ申出、租稅法運上等之義ハ、會計事務裁判所ヘ可申出事。

改元可然、　　內國事務總督印

□□紀元正月　　會計事務總督印

坤儀革正錄

○此伺書、及ヒ草案、其施行セシヤ否ヲ詳ニセス、且日ヲ失ス、姑ク附記シテ參考ニ供ス。

○蜂須賀茂韶淡路守ヲシテ、其父齊裕本月六日卒ス、ノ遺封ヲ襲カシム。蜂須賀茂韶家記

○茂韶家記ニ云、齊裕存生ノ內、奉願置候通、家督無相違被下旨、久我中納言被仰渡、御朱印御渡ノ儀ハ、今度御一新御變革ノ折柄、列侯ヘ追々御渡可相成、其節一同ニ被下ニ相成旨、別段御演達アリト、又茂韶家督ノ願、齊裕病死ノ屆等、原文ヲ失ス。

○鷲尾隆聚、兵ヲ率ヰテ大阪ヨリ至ル、十六日ニアリ、是日、隆聚ヲ召見シテ、之ヲ慰勞シ、高野山出張概略明日、隆聚、及ヒ十津川鄉士ニ金穀ヲ賜フ。

鷲尾侍従

今度、奉　御內勑、紀州ヘ出張、苦心盡力、　御沙汰之趣ヲ相守候段、神妙ニ　思食候、依之、　爲御褒美、別紙之通下シ賜候事。

戊辰正月

別紙、

一金　五百兩也　一現米　五十石也　高野山出張概略

○出張概略ニ云、右下賜候ニ付、早速兵士一統ニ分與セラルト。

○

十津川郷士

今度、奉　御内勅、和州へ出張、苦心盡力、　御沙汰之趣ヲ相守候段、神妙ニ被　思召候、尚此上可勵忠勤　御沙汰候事。

正月十八日　十津川郷兵出張事錄

○市橋長義ニ命シテ、日ニ朝堂ニ參セシム。

市橋下總守

從來勤王之志深ク、　御滿足被　思召候、殊ニ舊臘九日以來、動搖之砌、　召ヲ不待而上京、厚ク　御喜悅被　思召候、仍テ每朝參朝仕候樣被　仰出候事。

正月十七日　市橋長義家記

○伊達慶邦ニ命シ、獨力ヲ以テ會津ヲ討セシム、尋テ錦旗二旒ヲ賜フ。

仙臺中將

會津容保、今度德川慶喜ノ叛謀ニ與シ、錦旗ニ砲發シ、大逆無道、可被發征伐軍候間、其藩一手ヲ以テ本城襲擊、速ニ可　奏追討之功之旨　御沙汰候事。仙臺藩記

○仙臺藩記ニ云、二月十七日、錦旗二旒御渡相成、小性頭坂本大炊、護持歸國仕候。

○藩記、又云、初メ御渡ノ御書付ハ、其藩一手ヲ以テ可襲撃本城之趣出願、不失武道憤發之條、神妙之至、御滿足ニ被思召候、依之、願之通被仰付候間、速ニ云々ニ作ル、然レトモ請願ノ事ナキヲ以テ、二十日ニ至リ、本書ト御引替ニ相成レリ。

○柳澤保申ニ命シテ、泉涌寺、及ヒ洞嶺ヲ警守シ、且石山基正ノ衛兵ヲ出サシム

柳澤甲斐守

一泉涌寺爲警衛、速ニ人數出張可致事、

一洞ヶ峠爲警衛、速ニ人數出張可致事、

右之通　御沙汰候事。

正月　柳澤保申家記

○保申家記ニ云、泉涌寺ヘ五十人、洞ヶ峠ヘ百人、石山ヘ六人、差出スヘキ旨口達アリ。

○小出英尙、築城ノ請ヲ聽ス。

小出伊勢守

爲　帝都御守衛、在所園部表城地成功、以　叡慮、願之通被　仰付候事。小出英尙家記

○興福寺僧侶ニ命シ、假ニ春日社領、及ヒ舊奈良奉行ノ事務ヲ管セシム。

興福寺
學侶中

今般、　王政復古、逆徒御追討之折柄、御繁多ニ付、　春日社領、竝附屬之向、且是迄、徳川政務致來候筋、當分之處、興福寺ヘ御委任被　仰付候間、別當評議之上、可有所務候、隨テハ雖僧侶、勤　王之道、盡力可有之旨被　仰出候事。

正月

但、專務御用筋ニ付テハ、僧侶之輩、直チニ諸大夫之間、假館ヘ可罷出候事。興福寺記

○附錄興福寺記ニ云、十六日、烏丸殿ヨリ、奈良奉行小俣伊勢ハ、崇德寺ニ謹愼御沙汰ヲ待シメ、組與力同心ハ、市中見廻リ申付ラル、二十日、奈良奉行以下ヲ招寄セ、事務御委任ヲ申聞セ、歸順ノ赤心ニ候ハヽ、誓紙血判可差出申聞候處、皆々畏服、寺門隨從致度ト實忠相顯候、因テ二十一日、與力同心ニ元役所書記類悉皆、及武器等付立差出、猶市中見廻鎭撫、精々心懸ケ取調候樣申付候、同二十九日口達書ニ云、今般　王政御復古、御繁多之折柄ニ付、春日社領、並附屬之向、且是迄、德川家政務仕來之筋、當分之處、興福寺可有所務之旨被　仰付候、尙近々、大和國鎭臺御下向之上、諸向御取調之義モ可有之候得共、夫迄之處、急務訴訟筋之義有之候ハヽ、元役所ヘ可申出候事、但元役所ニ於テ、諸向定格扱方、且呼狀等ハ、是迄通ニ當分可被相心得候、且又事柄ニヨリ候ヘハ、東室評定所ヘ相招候義モ可有之、此段兼テ相達候事。

○井伊直憲、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ桑名征討ノ役ニ從ハシメ、且四塚ノ守衛ヲ罷メント請フ、之ヲ聽ス。

今十七日、於大津驛、御總督橋本少將樣、柳原侍從樣御本營ヘ家來之者御召呼ニテ、桑名城爲御追討、明十八日ヨリ、右御兩卿樣御進發被成候ニ付、掃部頭ニモ追討被　仰付候間、人數召連、同日ヨリ出張可仕旨被　仰渡候ニ付、精々人數召連候樣仕度、右ニ付、四塚關門御警衛　御免被　仰付候樣仕度、急速　御沙汰御坐候樣、此段奉願候、以上。

井伊掃部頭內

正月十七日　田中土岐太郎

井伊直憲家記

○

今般、桑名征伐被　仰出候ニ付、明十八日ヨリ出陣之儀、日割ヲ以テ大津表ヘ御出張之段、御總督被　仰出奉畏候、然ル處、私儀、長々病氣罷在、捗々不仕候ニ付、御醫師福井豐後守ヘ診察相賴候處、別紙容體書之通ニテ、其後モ時々指引有之、出陣

人數指揮方、難行屆奉存候ニ付、御用柄ニ指向御願申上候段恐入候儀、且ハ不堪遺憾候得共、居殘養生仕、少モ快方次第、速ニ出陣仕度旨、御總督ヘ相願候處、病氣之情實御憐察被下、御窺ニ可相成趣ニ付、不得止人數指揮方之儀ハ、家老共ヘ厚申付遣シ、私儀ハ居殘リ養生仕度、此段奉願候、以上。

正月十七日　井伊掃部頭

井伊直憲家記

○直憲家記ニ云、前條願書指出候處、御承知之趣、卽刻被仰出、後條モ卽日歸城養生可致樣、萬里小路ヨリ演達アリ、然ルニ居殘養生ノ願ニ付、歸城ノ儀、爲念相伺候處、病氣ノ儀兼テ御承知ニ付、無懸念歸城養生、快方ニ候ハヽ、早速出張可致、今般ハ家老人數引率、勉勵セシムヘキ旨演達アリ。

○分部光貞、其疾ヲ謝シ、且兵ヲ京師ニ出スヲ稟ス、光貞、又雲母坂（叡山ノ麓）ニ在リ、警守ノ命ヲ得ント請ヒ、平戶藩、長崎茂木口ノ戍兵ヲ撤セント請フ、皆之ヲ聽ス。

此度、御假建ヘ重臣之者被召呼、國力相應人數差出候樣奉蒙　勅命、冥加至極難有仕合奉存候、私儀上京、精之限御奉公仕度奉存候得共、先年來ヨリ半身不遂、兎角同篇御座候テ、今日ニ出立仕兼、且微祿之儀、誠ニ少人數ニテ、猶更奉恐入候得共、以　御憐愍、乍此上、人數相應之奉蒙御用度、此段謹テ懇願仕候、御序之砌、宜御執　奏奉賴候、以上。

正月　分部若狹守

參與御役所

分部光謙家記

○

去ル十日、御假建所ヘ重臣之者被召呼、御渡被成候御書付一通、且國力相應人數可差出旨、御口達之趣難有奉畏候、然ル處、私儀先年來ヨリ京都御警衛罷在候雲母坂道叡山邊、嚴ク可申付段、所司代ヨリ被申渡、乍少人數嚴重申付、御警衛罷在候、

且今般、入京御差留之諸藩モ有之、私陣屋下、並ニ領分之儀ハ、北國街道之儀ニ付、見張番所取建人數差出、是又嚴重申付、萬一異變之儀モ御座候得ハ、早速御注進申上候心得ニ御座候、旁右之仕合ニ付、少祿之儀、人數引足不申、深當惑心痛仕居候、依之、乍少人數、先不取敢、以別紙御屆申上候通上京爲仕候、此段宜御聞置被成下候樣奉賴候、以上。

正月　分部若狹守

參與御役所

別紙、

今般、國力相應人數差出候樣、奉蒙　仰候ニ付、士分三拾五人、足輕四拾人、總同勢參著仕候、此段御屆申上候、以上。

正月十七日　分部若狹守

分部光謙家記

○

去ル文久三亥年、京都御警衛被　仰付、場所之儀ハ雲母坂道叡山邊ト相心得、諸事嚴重相勤候樣、其節所司代ヨリ被申渡、當時相勤罷在候、今般一新之折柄ニ付、何卒乍恐、從　朝廷改テ蒙　御沙汰候得ハ、猶更以テ難有仕合、少人數之儀ニハ御座候得共、精之限御奉公仕度存心ニ御座候、此段宜御執　奏奉賴上候、以上。

正月十日　分部若狹守

參與御役所

○本日批紙

更ニ被　仰付候事。　分部光謙家記

○

於長崎茂木口、番所警衛、從徳川家被申付、人數出張罷在候得共、此度之　御改正、殊ニ肥前守上京仕候ニ付、小藩人數少々

ニテモ引分候テハ、在所海岸、別テ手薄御座候間、茂木口人數之儀ハ、爲引拂申度奉存候、此段奉伺候、以上。

松浦肥前守内

淺山九郎左衛門

正月十七日

○批紙

伺之通。松浦詮家記

○京極高富、主膳正○峯山藩主、食封一萬千百四十四石餘、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ、代リテ京ニ至ラシム、是日、命シテ、速ニ兵ヲ京師ニ出サシム。

口上覺、

今般、御下問之儀被爲在候ニ付、主膳正、速ニ上京可仕之旨奉畏候、然ル處、舊冬ヨリ不快罷在、難澀仕候ニ付、全快次第、迅速上京可仕候得共、就右不取敢、家來差出申候間、相應之御用モ被爲在候ハ、被仰付被下候樣奉願上候旨申越候、以上。

京極主膳正家來

今井多門

正月十六日

京極高富家記

○高富家記ニ云、十七日、早々人數上京候樣、口達被仰渡。

○櫻井忠興、兵ヲ京師ニ出サントス、本城守備ノ前命アルヲ以テ、其進止ヲ請フ、令シテ之ヲ止ム。

當今、不容易御時節ニ付、於洛中、相應之御用等モ御坐候ハヽ、相勤度奉存候得共、去ル六日、於御假建所、西宮ヨリ山崎關

門迄之間、別テ樞要之地ニ付、本城堅固ニ守備仕候樣之御達モ御坐候間、如何可仕哉奉伺上候樣、遠江守申含越候ニ付、此段申上候、以上。

松平遠江守内

服部清三郎

正月十七日

○十八月批紙

不及此儀候事。櫻井忠興家記

○池田茂政、兵ヲ發シテ、旁近譜第諸藩ノ向背ヲ問フヲ稟ス。

今般、坂兵於伏見表開兵端、叛逆之色顯然ニ付、追討被　仰出奉畏候、就テハ近傍德川譜代之諸藩、去就難相分候間、勤　王之藩々申合、人數指出、同心戮力、鎮定仕度奉存候、此段可然御執　奏奉希候、以上。

正月十七日　備前少將

岡山藩姫路討伐始末

○松平賴聰、興正寺攝信ニ因テ、謝罪書ヲ上ル。

臣賴聰、今般、朝敵ニ付、御追討被　仰出候段、重々奉恐入候、右ハ慶喜上京ニ付、食料警固被申付、從來之形行不得已、在坂之人數出張候由之處、去ル三日、於伏見表混亂中、　官軍トモ相辨不申、誤テ砲發仕候趣ニ付、右樣被　仰出候儀ト奉恐察候、全賴聰所存ニ毛頭無御座候得共、偏ニ平日、家來共教諭不行屆故之儀ト、後悔奉畏入候、素ヨリ先非悔悟仕候間、何卒既往之儀、　御宥免被成下候ハヽ、向後奉對　天朝、屹度抽忠勤、奉報　御厚恩度、方今更始御一新之折柄、賴聰微衷御諒察之上、從前之罪過　御寛容之程、伏テ奉歎願候、誠恐誠惶、頓首謹言。

賴聰判

○頼聰家記ニ云、十七日、興正寺御門跡ヘ御頼ミ、朝廷ヘ御歎願書、御差出ニ相成ル。松平頼聰家記

○東海道鎭撫總督橋本實梁、大津代官石原某ヲシテ、舊ニ仍テ其地ヲ管セシム。

○實梁雜記ニ云、石原清一郎參陣、是迄通支配被　仰付、冥加至極難有仕合奉存候旨、御禮申上候事。

○達書、原記ヲ失ス、案スルニ、本月九日、清一郎上書シテ、前職ヲ奉センコトヲ請ヒ、及ヒ十五日、自ラ京ニ詣リ、其貳心ナキヲ陳疏センコトヲ請フ等ノ事、實梁雜記ニ見ユ、蓋シ是ニ至リ、始テ復任セシナルヘシ、但柳原前光輒誌十二日ノ條、清一郎今度歸順、更ニ當所代官被仰付、支配致居候得共、行届兼候間、阿州出張兵ニ取締合力申付ノ文アリ、雜記ト合ハス、之ヲ實梁ニ質セトモ、其日詳ナラス、姑ク本日ニ收ム。

○徳川慶喜、戸田光則丹波守○松本藩主、食封六萬石、時ニ松平氏ヲ稱ス、ヲシテ、碓冰關ヲ警守セシム、尋テ又、之ヲ大河内輝照ニ命ス。

上州碓冰關所御警衛被　仰付候間、板倉主計頭申談、警衛行届候樣可被致候。

松平丹波守

戸田光則家記

○光則家記ニ云、同月二十三日、中山道櫻澤警衛被申付、碓冰ノ方ハ被差免候。

○二十日達書

松平右京亮

碓冰關所之儀、兼テ板倉主計頭ヘ被　仰付置、猶松平丹波守ヘモ御警衛被　仰付候處、同所之儀ハ、中山道筋緊要之場所ニモ有之、當節柄、別テ十分御警衛行届候樣被成度候ニ付、陸軍奉行並ハ被成御免候間、在所ヘ罷越、枝道間道ハ勿論、關所御警衛筋等之儀、丹波守、主計頭申合、格別勉勵、實備相立候樣可被致候。

大河内輝聲家記

○附錄二十五日板倉勝殷申請書

今般、碓氷御關所、松平右京亮、主計頭兩人ヘ、嚴重御守衛被仰付候付、如何樣ニモ勉勵仕、通行等相改可申候得共、京都表ヨリ之御使ヘ、萬一藩士多人數隨從、兵器ヲ携通行仕候歟、又ハ　勅命之由ヲ以、薩、長其外之藩士罷通候節、通方如何相心得可申哉、右之段差向奉伺候、急速御圖被成下候樣仕度、奉存候、以上。

板倉主計頭家來

正月廿五日　田邊潤之助

○附札

京都御使ハ、勿論　勅命ニ候得ハ、各藩ニテモ相通可申、尤粗暴之所業等有之候ハヽ、臨機之取計可有之候。板倉種家記

復古記　卷二十一　終

總括兼纂修
一等編修官　臣　長松幹

校勘
一等編修官　臣　長炭
一等掌記　臣　四屋恒之

校錄
六等掌記　臣　澤渡廣孝

繕寫
二等繕寫　臣　小川長和
二等繕寫　臣　小島春

復古記 巻二十二

明治元年戊辰正月十八日

○正月

十八日、議定正親町三條實愛ヲ大阪ニ遣シ、征討大將軍ノ印ヲ嘉彰親王ニ授ケ、且大將軍及ヒ將士ヲ犒フ。

○東伏見宮家記ニ云、十八日子刻頃、以　勅使正親町三條前大納言、自大將軍以下至兵士賜酒肴、自　天朝賜征討大將軍御印章、圖如左



（朱印原寸二寸角）

○嵯峨實愛手記大阪紀行ニ云、十八日、命ヲ奉シテ將軍宮ヘ御使下向、十九日、宮、海陸軍務總督被仰下一紙相渡、又宮、參謀以下軍卒等ヘ酒肴被下料金三百五十兩。

○織田信親ノ請ヲ聽シ、塚原ノ守衛ヲ罷ム。

依願、城州塚原御警衞被　免候事。　織田信親家記

○信親家記、申請書原記ヲ失ス。

○山内豐信、書ヲ上リ、征討ノ命令一途ニ出テンコトヲ請フ。

今般、德川領、川ノ井始松山、高松等御追討被仰付、土佐守ヘ四國筋御委任、錦旗頂戴被　仰付候ニ付、國許ヘ相達次第　勅命遵奉、早速出陣可仕ト奉存候、然ニ此頃拜承仕候ニハ、將軍仁和寺宮、御都合ニヨリ四國筋ヘ御發向ノ趣ニモ粗奉伺候、左候時ハ、於出先、萬々一如何ノ行違モ出來可仕哉ト、於私深ク心痛仕候、何分厚御詮議ノ上、御命令御一途ニ出候樣、急速御沙汰被　仰付度奉存候。

正　月　十　八　日　山　内　容　堂

山内豐範家記

○指令、原記ヲ失ス。

○海陸軍務總督島津忠義、表ヲ上リ、其職及ヒ家臣西鄕隆盛ノ參與ヲ辭ス。

昨日海陸軍總督之奉蒙　命令、武門之冥加不過之、難有御受可仕儀御座候得共、得ト熟考仕候處、兵馬之權不容易　皇國之大事件ニ御座候得ハ、若年不才之者、全ク其任ニ不當、只員ニ備候而已ニテハ、　朝廷之御失禮深奉恐入候ニ付、　何卒御斷申上度御座候間、宜敷御執　奏奉願候、以上。

正　月　十　八　日　薩　摩　少　將

島津忠義家記

○

西　鄕　吉　之　助

右者、先達テ參與被　仰付、且今度可爲徵士被　仰付候旨、　御沙汰相成候得共、吉之助儀手許差支之儀モ有之候ニ付、相當之者不日爲交代差出可申候間、何卒御免被　仰付被下度奉願候、此段宜敷御執　奏奉賴候、以上。

正月十八日　　　薩摩少將

島津忠義家記

○二書ノ批答、考フル所ナシ。

○是ヨリ先、肥後藩ニ命シテ、延岡藩兵抗敵ノ狀ヲ責問セシム、是日、肥後藩其供狀ヲ上ル。

內藤備後守家來池內善藏ヨリ、備後守入京被免被下候樣トノ願書取次、頃日差出申候處、備後守人數、官軍ニ向ヒ及發砲候哉之御聞込モ被爲在候ニ付、尙得ト承糺申上候樣被　仰聞奉畏承糺候處、大阪詰之家來原小太郎ヨリ、別紙書付差出申候、右ハ弊藩迄之書付ニ付、其儘ニテハ文體不都合之儀候得共、引取書ニ仕、萬一趣意違トモ相成候テハ奉恐入候儀ニ付、其儘差出申候、備後守人數、華城警衛トシテ野田口迄差出候迄ニテ、官軍ニ向ヒ發砲仕候儀ハ毛頭無御座趣、別紙之通ニ付、何卒願之通、備後守入京被免、相應之御用被　仰付候樣奉願候、以上。

正月　　　細川越中守内

池邊悰右衛門

○別紙

去冬、備後守被爲　召候ニ付、先供之人數、乍少々爲差登、舊臘著阪仕候處、其砌伏見表ニテ、新撰組等隱然干戈之意ヲ相含居候哉ニ承リ及ヒ、從來之御恭順、下輩之疎忽ヨリ不容易次第相成候テハ、御復政之思召ト相戾リ可申、實ニ御大切之段、閣老ヘ罷出申上候處、追々人數モ爲引取候樣可致トノ御模樣ニ有之、其後、去ル二日、大造之御人數北行之趣傳聞仕候ニ付、同夜塚本右衛門ト申者、參政ヘ差出、是迄御恭順之道モ被爲盡、爰ニ至リ御不條理之儀有之候テハ不可然段、屢々申上候處、決テ左樣之筋ニ無之、尾、越兩老侯御下阪之砌御勸メ之儀モ有之、俄ニ御上京被仰出候哉ニ付、其時ニ至リ御猶豫御願ニテ

ハ、且又御不恭順ニ相成候間、不得止次第ト被答候、同四日曉、野田口警衞被申付候ニ付、穗鷹内藏進ト申者登城、監察ヘ御逢申上、上樣御据相伺、萬々一御不恭順之儀ニ押至リ候テハ、是迄之儀水之泡ニ歸可申、御見込如何哉ト相伺候處、曖昧之御挨拶候得共、譜代家之儀、且御執掌中不得止情實モ有之、御城中御警衞丈ケ之儀ハ御受可仕段申上、北ニ向候テハ一歩モ不進心得ニテ引取候上、同日夕、乍少々人數差出、戰爭之始末ハ不相辨候得共、前後甚タ懸念之意モ有之、御恭順之御筋ハ一層御盡シ不被遊候テハ、御素意ニ相戻リ候段、反覆閣老ヘ申上候處、同七日、豈圖哉、御空城ニ相成候旨承知仕候間、其儘人數引取申候、然ル處、此度　天朝ヨリ御不審之筋被爲在、被止入京候旨御沙汰有之、誠ニ以奉恐入候、全赤心貫徹不仕、德川家此度之次第ト相成候段、其罪不可遁、加之、警衞之人數倉卒ニ差出候段重々奉恐入候、勿論備後守儀ハ聊承知不仕、出先ニ於テ輕卒之取計ヨリ右之次第ニ相及、何共恐入奉存候、依テ阪邸ヘ相愼罷在候、此段幾重ニモ御憐察被成下、備後守入京御差免、相應之御用被　仰付候樣、貴藩ヨリ御執成被成下候樣、只管御依賴申上候、以上。

内藤備後守家來

正月十八日　原小太郎

内藤政擧家記

○本多忠貫、鷲尾隆聚、其別邑ヲ收メシノ狀ヲ具シ、奉上他ナキノ意ヲ陳ス。

當月十一日、鷲尾侍從殿、御使ヲ以テ、河内守領分河州長野村役場詰家來之者、御呼出ニ付罷出候處、今般、　勅命之趣御請可仕哉之段御尋ニ付、役場家來之者御請難申上ニ付、早速主人河内守ヘ申聞候上、御請可仕候間、勢州神戶表ヘ引取、夫ヨリ山田表河内守ヘ申聞候ニ付、遠路之儀故、十日之御日延奉願候處、御聞屆ニ相成、右役場之儀ハ一旦御引渡申上、同所ニ有之候品々御附立、御封印之上御預リ相成候段申出候ニ付、河内守具ニ奉敬承候、右　勅命之儀奉背候存意毛頭無御坐候ニ付テハ、早速爲御請上京可仕之處、兼々　兩宮之儀ハ、被　仰出候御儀モ有之、御守衞之儀ハ勿論、神領取締等仕候ニ付、上京難仕、依之、使者ヲ以テ御請奉申上候、以上。

本多河内守使者
神谷平左衛門
本多忠貫家記

正月十八日

○石川成之、森俊滋、（對馬守○三日月藩主、食封一萬五千石、）京ニ至リ、（石川成之參罷記、森俊滋家記）岩城隆邦、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム、（岩城隆彰家記）片桐貞篤、兵ヲ京師ニ出シ、仙石久利、（讃岐守○出石藩主、食封三萬石、）京極高厚、山陰道鎭撫使ノ令ヲ以テ、兵ヲ生野（但馬、）ニ出スヲ稟ス。

今般、於　御假殿、國力相應之人數可差出旨被　仰渡奉畏候、依之、在所有合之人數、竝泉州海岸ヘ出張罷在候者共引揚ケ、昨夕到著仕候、此段御屆奉申上候、此上相應之御用向被　仰付被下候ハヽ、難有仕合奉存候、以上。

片桐主膳正家來
川上爲右衛門

正月十八日

參與御役所
片桐貞篤家記

○

但馬國生野銀山代官元締共、妻子ニ至迄召捕候樣、京極飛驒守家來ヘモ申越、人數差出候樣、西園寺樣附添之向ヨリ被相達候ニ付、當月十四日、在所表ヨリ人數差出候段申越候、此段御屆申上候、以上。

仙石讃岐守家來
島村慊甫

正月十七日

仙石政固家記

○

但馬國生野銀山代官家族共召捕候樣、出石藩ト申談、人數差出候樣、西園寺殿御附添之向ヨリ被相達候旨申通ニ付、當月十四日、人數差出候趣、在所表ヨリ申越候、此段御屆奉申上候、以上。

正月十八日　京極飛驒守家來
窪田逸作

豐岡藩記

○附錄豐岡藩上申書

先般、西園寺殿御附添之向ヨリ御達ニ付、但馬國生野銀山表ヘ人數差出候處、於彼表御捕押相我候ニ付、人數引取候樣、猶又御達有之、去十六日、人數引取候旨、在所表ヨリ申越候間、此段御屆申上候、以上。

正月二十日　京極飛驒守家來
窪田逸作

豐岡藩記

○附錄出石藩上申書

去ル十七日、御屆奉申上候但馬國生野銀山表ヘ人數差出候處、同所取押モ相濟候ニ付、人數差出候ニ不及旨、於途中其向ヨリ被相達候ニ付、去ル十六日、在所表ヘ人數引揚候旨申越候、此段御屆申上候、以上。

正月二十一日　仙石讚岐守家來
島村慊甫

出石藩記

○外國事務總督東久世通禧、書ヲ各國公使ニ贈リ、事務掛岩下方平及ヒ伊藤博文等ヲシテ、權

ニ兵庫奉行ノ事ヲ管理セシムルヲ告ク。

以手紙致啓上候、然ハ岩下佐次右衞門、伊藤俊助、中島作太郎、寺島陶藏ヘ兵庫、神戸町運上所ニ於テ、諸事取扱之役場申付候間、兵庫奉行ト可申名目之役場相立候迄之間、御方ニ於テ奉行同樣諸事引合可被成候、尤、右四人内ニテ、太陽日之外、神戸ヘ爲相詰可申候間、左樣御承知可被下候、以上。

辰正月十八日

東久世前少將通禧
花押

米里堅公使
セネラールフアルケンボルク閣下　外務省記

○外務省記ニ云、此書ハ米館ノ所藏ニ係ル、他館モ亦皆之アリ。

○是ヨリ先、舊長崎奉行河津祐邦官守ヲ棄テ去ル、時ニ上佐藩士佐々木高行、三四郎、薩摩藩士松方正義助左衞門、等、本地ニ在リ、變ヲ聞キ、馳セテ奉行邸ニ抵リ、僚吏ヲ諭シ、衆庶ヲ安撫シ、肥、筑以下十三藩士ト謀リ、會議所ヲ置キ、權ニ内外ノ事務ヲ管理シ、急ニ狀ヲ京師ニ奏ス、是日、又之ヲ各國領事ニ告ク。

○十六日會議所布告書

當地奉行引拂候ニ付テハ、土地一體之事件、追テ御下知有之候迄ハ、諸事各藩竝土地之役人衆議之上、萬事西役所ニオヰテ相決候間、浮說等不申觸致、安心商業相營可申候事。

辰正月十六日



長崎縣記
吉井正澄手記

○十五日各國領事肥筑二藩士ニ贈ル書

肥前
筑前大守へ

政府之命令ニ依テ、長崎奉行退帆後、市中警衛向兩所へ相渡候儀、長崎滯在之條約濟各國コンシュルへ、正月十四日附、長崎奉行ヨリ之書翰落手セリ、隨テ何方ニテ公之事務取扱相成候哉、我等へ告知アラン事ヲ希フ。

於長崎千八百六十八年第二月八日

葡國岡士　セーローレイロ
英國岡士　マルキユスフロウル
孛國岡士　リチャルトリンドー
亞國岡士　テーエルモール
佛國岡士　ヱルレーキ
白國岡士　セーアテリヤン
蘭國瑞西國兼岡士　エフペートンフリング
テネマルク國岡士　ハーシキフ

長崎縣記
吉井正澄手記

○肥筑二藩士答書

千八百六十八年第二月八日附之書翰落手セリ、長崎奉行退帆後、公之事務、何方ニテ取扱候哉承知被致度旨被申越、承知セリ、右ハ朝廷ヨリ其任職之モノ被差越候迄、西役所ニオヰテ在崎之各藩、竝土地之役々申合、諸事是迄之通取計候儀ニ有之候、此段及回答候。

慶應四年正月十六日

肥前藩

筑前藩

各國岡士宛

長崎縣記
吉井正澄手記

○十五日各國領事書柬

長崎　運上所司長

一明日運上所ニテ、各國岡士集會可致儀御廻文有之、右御答申上候ハ、拙者共面會致候國主御姓名、竝集會之事柄、最前承知致度候。

千八百六十八年第二月八日

葡岡士　セーロウレイロ
米岡士　マルキユスフロウル
孛岡士　リチヤルトリンドー
白岡士　セーアテリヤン
和蘭岡士　ヱフペーンブリンク
佛岡士　リキー
丁抹岡士　ハーシキフ

長崎縣記
吉井正澄手記

○書中、所謂廻文原記ヲ失ス。

○運上所答書

千八百六十八年第二月八日附之書翰落手披見セリ、右ハ鎭臺當地引拂候ニ付、朝廷ヨリ其任職之モノ被差越候迄ハ、在崎之各藩、並土地之役々申合、諸事是迄之通取計候儀及告知タメ、左之人數面會致候儀ニ有之候、此段及回答候。

慶應四年正月十六日　長崎運上所

各國岡士宛

薩州藩　沖直次郎　肥後藩　宮村莊之丞
筑前藩　栗田貢　藝州藩　石津藏六
肥州藩　重松善左衛門　土州藩　佐々木三四郎
對州藩　岩崎浪江　宇和島藩　井關齋右衛門
島原藩　石川治部右衛門　平戸藩　服部源五右衛門
唐津藩　杉江會輔　大村藩　稻垣治部右衛門
五島藩　奈留帶刀

長崎縣記
吉井正澄手記

○

辰正月十七日、於運上所、英岡士ト筑前栗田貢、肥前副島次郎、薩州松方助左衛門、土州佐々木三四郎應接、

コンシユル、

奉行之沙汰ニハ筑前、肥前ニ預ケ置候趣承知罷在、諸國ヨリ御預リノ儀承知致居不申、

其儀ハ諸藩談判ノ上治定致筈ノ處、無其儀奉行被引拂候ニ付、差當リ奉行代勤無之テハ不相叶候ニ付、諸藩申談取計候、

尤、京都ヨリ御下知迄之處、

何時京都ヨリ委任ノ御方被參候哉、

其儀ハ定テ難申、原註、凡二十日、三十日之内ニハ被參候積、

左候ヘハ、其御許方ニテ取締被致候哉、

其儀ハ諸藩一統申談取計致シ候、既ニ此程、書翰ヲ以テ掛合候通リ、

薩摩、筑前、土佐、肥前ニテ御取計相成候哉、

左樣ニテ無之、昨日之書翰中ノ名前之モノ、在留ノ十四四恐クハ三ノ誤、人ニテ取計候、

交易ハ是迄ノ通ニ候哉、

何レ京都ヨリ御沙汰迄ハ、是迄ノ通、

只今迄御咄ノ趣、各國岡士ヘ御告知被成候方可然、

昨日此方ヨリ遣シ候書翰被差返候ハヽ、委ク書載相送可申、

此節應接致候事件ハ、奉行猥ニ被引拂候儀不相分、當地之儀ハ外カ國トハ違ヒ、各國交易ノ地ニ付、不都合有之候テハ不相濟候ニ付、我々西館ヘ罷越候處、最早奉行被引拂候後ニテ、地役人申談、是迄之通取計可申候、尤、當地取計之儀、當十五日早朝、都ヘ申送リ、速ニ奉行代被參候樣申遣シ候、交易其外取締之儀、諸藩竝地役人申談取計候、尤、肥、筑預リノ儀ハ、奉行被申殘候迄ニテ、未タ兩國承知不致内被引拂候ニ付、無據居合之諸藩、竝地役人申談取計候事、

今日罷出候ハ、只今ノ趣承リ度タメ罷越候、穩便ノ御取計大慶ニ存候、

各國ヘ對シ迷惑相掛間敷爲ニ付、右ノ趣各國岡士ヘ通達可被致事、

其許方ニテ交易、其外萬事是迄奉行被取計候通ニ候得ハ、宜敷、

於英ハ、日本内亂ニ不相拘候事、

英人ニ對シ事有之節ハ、諸藩見當ニ致候、御許方多人數ニテ、面倒相掛リハ不致候哉、

其儀ハ一人ニ相談相成候得ハ、一統申談候事、

書翰抔ハ一人ニ御當ニテ宜敷、其儀面倒ニ候得ハ、運上所當テニ相成候テモ宜敷、尤姓名御入用ニ候ハヽ、今日ノ四人當テニ相成候テモ宜敷、

運上所司長宛書翰差出可申旨ノ書翰、御遣シ被下度、又運上所司長ヨリ書翰參リ候ハヽ、諸藩御申談ノ事ト相心得候事、

事柄ニ寄リ一兩人ニ御逢願候儀モ可有之、

其儀ハ宜敷、

奉行被引拂候ニ付テハ、各國交易、竝人命ニ相拘リ候義、御請合之書翰申請度候、

其許ヨリ只今迄應接之趣、書翰ニテ差出可申候、

兎モ角、各國コンシュル當ニテ、書翰御差出可被下事、

人命之儀ハ、外國人不法相働候節ハ、夫々手當可致候事、

其儀ハ事柄次第ニテ、今日申立候次第ハ、是迄ノ通ノ義ヲ相尋候迄ニ御座候、

其許方之御取扱相成候儀ハ、御國主之命ニ候哉、

左様、

帝ヨリ勅定有之候迄ハ、都テ是迄ノ通ト申儀之御書翰相願候、

其許方ニテ、運上御取立ニ相成候哉、

只今迄申立候義ハ、ミニストルヨリ命令有之候迄之儀ニ御座候、

此方モ同様、

各國商人共、其許方ヘ運上相納候様可申聞候事、

不時之義有之節ハ、急速ニ岡士ヘ為御知可被下候事、

當地ニ、兵士何程有之候哉、

凡六百人モ有之、其外諸國ヨリ多分ノ兵士參リ居候ニ付、安心可被致事、

其儀承リ安心致候、各國岡士ヘ、其趣爲相知可申候、

頃日ハ見廻リ無之樣見請申候ニ付、商人共終夜番兵致居候、

其儀ハ、是迄ノ通見廻リ候樣達置候得共、全ク不行屆之儀ト存候ニ付、早速、是迄ノ通見廻リ候樣相達候ニ付、商人番兵之義ハ被差止可然候。

長崎縣記
吉井正澄手記

○

正月十八日、薩州、肥後、筑前、肥前、土州藩士通辨平井義十郎調役、竝高木清右衞門、福田大之丞、定役山口源之進、佛岡士ヘ應接書、

彼

奉行出帆ノ節、肥、筑之兩家ヘ御頼ニ相成候由、御引請ニ相成候哉、

此儀、肥、筑之兩家ヘ達ハ有之候得共、奉行差急キ乘船相成、國許ヘ掛合置候得共、遠路之儀ニ付、未タ主命無之、何レトモ主人ニオイテモ　天朝ヘ伺不申テハ、預リ候儀モ有之間敷、今暫ハ延引可致、

當節、長崎政府ハ、何方ト心得可申歟、

奉行ハ無之候トモ、政府ハ有之候儀ニ付、在崎之諸藩、土地ノ役々申合、其處置取計、何レ共　天朝ヨリ命令有之候迄、外國交際ノ地ニ付、差支無之樣取計候事ニ候、

帝都ニアルトイフ事、只今承リテ知ル事也、各各疑クハ兩ノ謬、藩ニテ長崎警衞有之候ハ、申分ハ無之、外藩ト御申合有之儀ニ候ハヽ、我商民トモヘモ申聞、兵庫ヘ罷越可申、尤、兩家ニテ御引請御取計有之候ハヽ、自分ニオイテ申分ハ無之、公使ヘ申通スヘシ、

只今、國主ヘ伺置有之、差圖無之候テハ、左右聢ト申カタシ、奉行明キ中ニ付、諸藩打寄取計候義ニ有之、日本ハ都ニ　帝アリ、大ヨリ大君ヘ預ケアル職ナリ、何事モ　帝ヨリノ命令ニ隨フヘシ、政府ハ大君ニ限ル事ニアラス、　朝廷ヨリ差圖無之内ハ、何レニモ取計候事ナラス、公使ヘ伺候事ハ勝手タルヘシ、

條約ヲ結タルハ、大君ヨリノ條約ヲ結ヒ、其人ヨリノ達ヲ自分ハ相守リ居ルナリ、自分ニテハ肥、筑ノ兩家ヘ御引合仕候、

肥、筑ヨリ外、諸藩ヘ御談相成候儀ハ、勝手タルヘシ、

肥、筑ノ大守ヘ相伺、差圖有之上ハ、卽日ヨリ引合可申、イマタ差圖無之ニ付、拙者ヨリ聢ト返答致シカタシ、

公使ヨリモ命令アレハ、外諸侯ト引合ナリカタシ、何方ヨリ之カタメニ兵ヲ起シ候哉モ難計、依之、他之人ヘハ引合難致、

且、我等大君アルヲ知テ、朝廷アルヲシラス、

奉行各方ヘ長崎御預ケニ相成候事ハ、御承知ニ相成候哉、

兵ヲ起スハ何ノ名義ニテ候哉、抑一昨年頃カ、　朝廷ヨリノ條約ニ相成居候事ハ承知ニ候ハヽ、必、　朝廷アル事ヲシルヘシ、

成程、奉行ヨリハ預ケ度趣、達ハ有之候得共、國元ヘ掛合、國主之命無之内、乘船脫走イタシタリ、依之、聢ト事柄引繼致サス、

御兩家ニテ長崎御引受之儀ハ、自分ニテハ大慶ニ存セリ、其他藩トハ引合カタク存候、

國元主人ヨリ差圖無之內ハ、聢ト引受候儀申カタク、肥、筑兩家ノ儀ハ、長崎土地ノ警衞向受持候儀ハ有之候得共、政府ヲ預ル權兼テ無之、都ヨリ差圖有之迄ハ、在崎ノ各藩申合取計候也、

肥、筑國元ヨリ申來候間ハ、何方ヲ政府ト心得可申哉、

西役所ヲ政府ト知ルヘシ、

其政府ニテ事ヲ計フモノハ、誰ニ候歟、

此處ニアル土佐、薩摩、肥、筑、其餘ノ諸藩士、土地ノ役々ナリ、

兩家ノ有事ハ承知ニ候得共、其餘ノ有事ハ不知、其旨ヲ公使へ告クヘシ、其間ハ稅銀ハ自分手許へ留置、聢ト政府相極リ候上、其政府へ納ムヘシ、公使ヨリ命モ有之候事故、斯ク談シ候事也、兵起ル時モ何方ヘ兵ヲ起シ候哉、不相分候故、斯ク談スルナリ、

兵ヲ起シ候ト申儀ハ、如何ナル名義ソ、扠稅銀不納候ナラハ、商法モ止ムヘシ、

此儘ニテ商法止候法ハ無之筈、稅ハ岡士ニ預リ置候得ハ、不納ト申儀ニ無之、只今大君職ヲ辭シ候事未タ不知、政府相極リ候上稅納スヘシ、

大君之政府ト申儀ニ無之、大君ハ猶ミニストルノ如キ者ニテ、時々進退アルヘシ、長崎政府ハ則　朝廷屬ノ政府ニテ候得ハ、一日モ稅納セサル理ナシ、

只今被參候人ハ、何方之藩ニ候哉、

土州藩ナリ、

土州藩ニ候ハヽ、話止ヘシ、

土藩士云

今日ハ佛岡士ニ用事ハ無之、外岡士ニ逢候爲メ出席イタシ候、

自分ニテハ子細モ無之故、滯座スヘシ、

左候ハヽ、滯座スヘシ、

大君、政府之權無之事、未タ承知不致、奉行ヨリ引繼ト申方へ引合候事ト存候、若此後暴徒有之節ハ、何方ニ申出候哉、肥、筑兩家へ引合候事ト存候間、斯ク申ス事ナリ、萬一此處ニ殺害等ノ事件アル時ハ何方ヘ可屆哉、

西役所へ可屆出、

誰カ一人、或ハ兩人引請候ナラハ、其人へ宛テ屆ヘシ、

未タ主人ノ命無之故、諸藩ニテ取計候、誰ト差極候事成カタシ、依之、衆議ヲ以テ取計、告候名前宛テ可申出、
都テ公使ノ命ヲ請候通ニイフナリ、
姓名布告スルナリ、彼文意ニ不承知モ候ハヽ、商法可止、
各國々ノ人ヘ向テ事ヲ取計フコト致シカタシ、肥、筑兩家ニテ事ヲ引請候ハヽ、可然哉、
主人ノ命無之テハ、取計成カタシ、
是迄條約結ヒアル處、奉行ヨリモ兩家ヘ預ルト承リ候處、卽今兩家ニテ引受ル事成カタシト承リ候故、其段公使ヘ申遣シ度、今日四字頃出帆之船有之候間、夫ヨリ告度存スルナリ、
土藩士云
今日應接之事柄ハ、日本ノ事件ニ付一通リ事情相述度存候ガ如何、
承ルヘシ、
根元各國岡士ヘ申聞候次第ハ、奉行退去ノ事承リ、當港ノ儀ハ外國交際ノ土地ニテ、諸事引受取扱候者無之テハ、外國ヘ對シ如何ナル不都合ノ事件、各國人民迷惑ノ事等相生シ候テハ不相成ト存シ、一時モ早ク保護致シ度存候故、奉行退去、直ニ西役所ヘ罷越承リ候處、一體ノ儀、兩家ヘ托シ有之趣ニ付、肥、筑ヘ問合候處、奉行ヨリ一應談ハ有之候得共、未タ其段國元ヘ掛合モ無之內、奉行ハ速ニ退去、此儘難差置候ニ付、在崎之諸藩、土地之役々申合、土地之人民安堵イタシ候樣、夫々取締致シ置、其儀都ヘ申立、命令ヲ受ケ取計候積リ、夫迄ハ一同申合、公平ノ處置ヲ以テ取計、交易筋其外トモ、是迄奉行仕置ノ通、不相變取行度存スル所ナリ、夫迄ハ土地ノ役々ト申合、外國向ノ儀ハ、別テ差支無之樣取計度存スル所、肥、筑而已ニ逢度トノ趣ニ候得共、如斯諸藩ニオイテモ心配罷在候儀、既ニ昨日、英國岡士ヘモ申談處、尤ノ事ト了解被致候儀ニ有之、其旨得ト承知有之度存スル所ナリ、
都テ公使ヨリ之命令ニ隨テ取計候故、自分心得ヲ以テ所置致ス權無之、

税銀ヲ不納事ハ如何、公使ヨリノ命令ニモ有之間敷、税銀不納候ハヽ、商法可留、

　商法ヲ差留候ト申事ハ大事件ニ候、時宜ニ寄リ戰爭ニモ及可申、

税銀不納商法取行候公法有之歟、如斯平穩ヲ計ヒ、奉行在勤中ノ通リ不相變取計候處ニ、税銀ハ不納、商法ヲ取行候儀ハ、外國ニオイテ其法有之哉、公使ヨリ命令アル迄ハ不相變筈之處、税銀ハ不納ト申事件不心得、

　萬事説之一決不致故、公使ヘ相伺候事ナリ、商法ヲ留ル事ハ大事件ニ候、

税納之事件ハ如何、

　今晩出帆、

税銀之儀ハ如何、

　今晩參リ候處ハ如何、（上條、及本條答辭誤脱アラン）

税納ハ如何致シ候哉、

　今晩出帆イタシ候故、是迄ノ通税銀ハ可相納、

夫ナラハ商法差留候儀無之、

　今晩出帆イタシ候ハヽ、税納可致、左無之節ハ又談判スヘシ、

税不納商法之公法有之歟承リ度、税納レハ子細無之、

　萬國之公法ハ、ヨウロッパ之法ト日本トノ違ヒアルナリ、何レ共、今晩出帆之上、公使ヘ伺フヘシ、左無之節ハ、又處置モ有ルヘシ、

税ハ納ル歟、

　夫ハ今晩出帆之處置ニアルヘシ、

税ハ如何、

今晩出帆スル故、税納スヘシ、
扠色々議論ニ至リ、甚氣之毒ニ存スル、併シ辨論スル所ナリ、
夫ナラヨロシ、
洋人モ日本人モ分別イタシ、亂ハ不好處ニ候、平穩ニ有タシ、
聊隔意ハ無之、
内亂ハ不好、諸事平穩ヲ望メリ、何事モ公使ニ告テ取計フヘシ、
御深情ハ忝シ、其タメ斯ク心配スル所ナリ、厚意忝シ、
何レ何事モ命令通リニスヘシ、今晩出帆スヘシ、過刻ハ種々議論ケ間敷申募リ候ハ、全ク我支配頭タルミニストルヨリノ命ニヨリ申立候事ニテ、拙者一己ニオイテハ決テ別意無之候、
此方モ國王之命ヲ請テ取計フヘシ、
於此方モ隔意ハ無之、只々職掌ヲ盡シ候而已ニ有之候。長崎縣記　吉井正澄手記

○

辰正月十八日、於運上所孛漏生國、亞米利加國、白耳義國、丁抹國、葡萄呀兒國、各國士ヘ應接、
孛リンドー
各國コンシュル申談シ仕候儀申上候、
一一承リ度候、
奉行出立之時ニ、肥、筑ニ取扱之儀申殘有之、其他之諸藩方ヘハ引合之筋申殘無之ト承リ、尤其他之諸藩ト申テ差支モ無之、
奉行ヨリ申殘之儀、肥、筑ヘ有之候共、此方ノ主人ヘ申越候儀、間ニ不合、引受候儀答モ不致内、奉行退去致シ、依之、諸藩申

談、取扱イタシ候義、名前ヲ御知ラセ申候、何レ　帝ヨリノ御下知アル迄ノ事、
是迄、大君ノ政府ト申處テ警衛カアリマス、然ル處、此程ヨリ政府ノ代リ、其諸藩ノ人々ヲ承知イタシ度、
成程、諸侯カ十三藩、夫レト長崎ノ地役、此程書付通リ、
諸藩御列座ノ内テ、筑前ノ御方ハ承知、其外ノ御人ハ存不申故、御名前書御認被下、
夫ハ無程諸藩十三、其外長崎地役人名前書、且土地警衛一體ノ義、書附ヲ以テ御知ラセ可申、
是迄先奉行在勤中ハ、都テ日本人ノ儀モ訴ヘ致シ居申候、此後、右同様ニ取計之儀致シ可申、
成程何事モ是迄ノ通ニ致シ置候故、各國ノ人々ヘモ御迷惑ノ儀無之様ニイタシ度故、各藩心配致シ居候、
萬事外國人迄モ安全ヲ祈リ候故、此上ハ御引受ノ儀、是迄ノ通訴ヘ候儀、諸向ノ事モ、都テ各様ヘ訴ヘ可申、
夫ハ尤ノ事、何事モ西御役所ヘ御屆可被成候、
是迄、私共ヨリ屆出候諸事出入ノ儀、是迄奉行所ヘ屆致シ置候儀ハ、改テ各様迄書附差出可申哉、
其儀ハ、此方ニテモ篤ト取調イタシ候上、
只今迄、各國コンシユルヘ種々訴ヘノ儀、奉行ヨリ有之候儀ハ、御承知ノ儀有之候哉、
其儀ハ取調候上、政府ヘ掛リ候儀ハ、政府ヘ御引合、當地ヘ掛リ候儀ハ、當地ヘ御引合被致、
譬ハ諸侯ノ船代金拂方滯候節ハ、各方ニテ其船御差止出來候哉、
夫ハ政府ニテ承リ候、
訴ヘ候人ニ限ラス、道理ニ不叶儀ハ誰テモ訴ヘ可申、其政府ハ此座ノ諸侯ヘ訴ヘ可申、
左様ニテ候、
是迄ハ、各國岡士名代ヲ私一人ニテ申上候處、是ヨリハ、孛國リンドーガ一分ノ存付テ申上候、
リンドウ

長崎ニ字國王ヨリノ命ニテ參リ居、此節國亂ニ付、大君政府ハ被廢候故、鎭臺相極候迄ハ、諸君ヘ御引合申上候、何レ國王ヘ申遣シ、其命令相待、命令次第ニテハ、今日、拙者ヨリ御談申候事情モ相變候哉モ難計候、
夫ハ宜敷、此方モ國王之命ヲ受テ取計フナリ、
只今御咄ノ通、命令有之迄ハ、諸藩ニテ御取計可被成故、其處ニイタシ置可申、
此後ハ別テ取計ノ儀、公平ニ取扱イタシ可申、
白アテリヤン
諸事太平ノ儀相好候故、日本人、外國人ノ義モ、公平ノ論ヲ相好可申、
其儀ハ御案シ無之樣、御安心被成、
米コンシユル
諸コンシユル申通、自分モミニストルヨリ申越候迄ハ、是迄ノ通ニ致シ置候、
リンドー
蘭コンシユルハ只今迄參リ不申故、私共ヨリ右之次第申通シ候、異存ハ無之ト被存候得共、若不同意ニ候ハヽ、早々御知ラセ可申、書翰差出不申候ハヽ、異存無之ト御承知可被下候、
宜敷御頼申候、
各藩諸侯ノ命ニ依テ、取扱イタスト申儀、此書附ニ御書載無之故、其儀御認入レヲ願マス、
此節ノ儀ニ付、出崎イタシ候儀ニハ無之間、主命トハ難認、乍併兼テ蒙命出崎罷在候故、何レモ肩書有之候、
自分ノ處ハ、肥前藩、筑前藩同樣、其外諸藩ノ御方モ相心得申候。
長崎縣記
吉井正澄手記
○各國岡士ニ贈ル書
今般、長崎奉行退崎後、公之事務、　朝廷ヨリ其任職之者被差越候迄之事件ハ、在崎之諸藩、竝土地之役々申合、我國民共、

貴國人民ヘ對シ暴行ハ勿論、諸事不取締之儀無之樣手當致シ置候間、聊無懸念交易等、是迄之通取行候樣可被相觸、且貴國人民之儀ハ、尙又暴行ハ勿論、不取締之儀無之樣有之度、此段申進候、謹言。

慶應四年辰正月

薩州藩 松方助左衛門	肥後藩 宮村莊之丞
筑前藩 栗田貢	藝州藩 石津藏六
肥前藩 重松善右衛門	越前藩 木内甚兵衛
土州藩 佐々木三四郎	對州藩 岩崎浪江
宇和島藩 井關齋右衛門	島原藩 石川治部右衛門
平戸藩 服部源五右衛門	唐津藩 杉江會輔
大村藩 稻垣治部右衛門	五島藩 奈留帶刀
土著 藥師寺久左衛門	同 久松土岐太郎

貌利太尼亞岡士
マルキユスブロウルス エスクワイル

各國岡士宛各通 長崎縣記 吉井正澄手記

○英國領事答書

在長崎貌利太尼亞官事廳、
千八百六十八年第二月十三日 皇國正月二十日

貴人

一當月十一日我正月十八日、附、貴翰ヲ以テ鎭臺被引拂候ニ付テハ、何レ 朝廷ヨリ御委任之有司被命候迄ハ、當地之事務爲取扱、當分各位方ニテ政府御預リ相成候儀、布告之次第令披閲領承候、

一外國人性命、並所持物等ハ、足下方ニテ御守衛被下、且萬事條約面ニ遵奉イタシ候樣トノ尊示ニ付、拙者ニオイテモ、當時在阪女王殿下ミニストルノ下知ヲ受候迄ハ、各位政權御預リ之儀承知イタシ候、此段乍憚及回答候。

女王殿下コンシュル

足下之恭謙從者　マルキュスフロウルス

長崎政府御預

大名方士官衆

長崎縣記
吉井正澄手記

○鶴津一掃記ニ云、將軍ノ上國ニ一敗セル其報、崎陽ニ到ル區々ニシテ、市民之レカ爲ニ紛擾ス、或ハ云、愼臺河津伊豆守、大ニ土兵ヲ募リ、薩邸ヲ放火シ、土州人ヲ追捕シ、併セテ諸藩正議ノ徒ヲ捕フト、巷說紛々、之ヲ久シテ俄ニ傳フ、河津伊豆守及ヒ附屬ノ吏、此地ヲ脫シテ東歸スト、市街增々騷擾、家什ヲ山野ニ運ヒ、竊ニ避居ヲ計ル、且ツ聞ク、港内ニ碇泊セル英國ノ艦士等是ノ時ニ當ツテ覬覦ノ念ヲ放マヽニセント欲スト、在崎ノ諸藩密カニ物議アリ、而シテ進取ヲ欲セス、是ニ於テ我佐々木三四郎等、一二同志ノ士相議シテ曰ク、今天下紛々、上國ノ戰爭、官軍ノ捷報イマタ其確タルヲ聞カス、此ノ紛擾ノ際ニ當ツテ、內外交際ノ要港ヲ棄去リ、外夷ヲシテ覬覦ノ念ヲ逞フセシメハ、神州ノ地、坐シテ香港、上海ノ覆轍ヲ見ルヘシ、我徒、苟モ崎ノ任ヲ辱フシ、徒ラニ傍觀スヘキニ非ス、宜ク先ツ西邸ニ到リ、河津伊豆守ニ對シ、內外樞機ノ重職ニ任シ、何ニ因ツテ脫去スルヤ、且ツ後事ヲ誰レニ託セルヤ、精細ニ面論スヘシト、正月十四日夜十二字ノ頃、吉井源馬、渡邊剛八、橋本基之助等ト意ヲ決シテ西邸ニ到ル、野崎傳太、深尾泰吉、依田小平太、菅野覺兵衞、野村要輔、堀内慶助、佐々木榮、關雄之助等續テ到ル、到ルトキハ伊豆及ヒ附屬ノ吏既ニ去リ、纔ニ土著ノ吏人岡田實明等兩三輩ヲ看ル、伊豆在リヤト問フ、皆答テ曰ク、既ニ去ル、後事ハ肥、筑兩藩ニ託ス、而シテ兩藩ノ士吏、猶未タ到タラスト、因テ彼輩ニ謂テ曰ク、今天下紛々、醜夷釁隙ヲ伺ヒ、實ニ皇州危急存亡ノ秋也、然ルヲ豆州故ナクシテ、斯ル內外交際ノ要地ヲ棄去ル、我具ニ之ヲ面責セント欲ス、彼レ既ニ去ル、悔レトモ及ハス、然リト雖トモ、此ノ要港寸陰モ放在スヘケンヤ、足下、我レトミナ王地ノ人ナ

リ、我徒、宜ク此席ニ列シ、各藩出崎ノ士ヲ會シ、今ヨリ内外政務ヲ與カリ聞クヘシ、願ハクハ足下モ亦タ努力セヨ、皆曰ク、唯々、敢テ尊意ヲ奉セント、因ツテ使ヲ列藩出崎ノ官ニ報知ス、薩、藝、先到ル、諸藩續イテ到ル、此際隊士及ヒ深尾、依田等ト相トモニ官門ノ外ニ在リ、土著ノ兵、遊撃隊ト唱フル者、誰何ス、仍テ答テ曰ク、今宵、河津伊豆守故ナクシテ東ニ走ル、我官長佐々木三四郎等、往テ其非ヲ責ム、事體ニヨツテハ相互ニ彈丸ヲ接スヘシト、言終ツテ直チニ入リ玄關ヲ護ス、之ヲ久フシテ遊撃隊長等乞フテ曰、今夜鎭臺脫行、中外大ヒニ騷擾、我徒素ヨリ土著ノ兵、今ニ至ツテ措置ヲ知ラス、幸ニ聞ク、貴藩今宵ヨリシテ政務ヲ與カリ聞キ、且ツ内外ヲ鎭スト多幸之ニ過キス、請フ今ヨリ我輩ヲシテ守衞ノ人員ニ充タシメハ、敢テ努力セント、因テ此兵ヲシテ原ノ如ク市街ヲ巡撫セシメ、且ツ分ツテ玄關ヲ衞ラシム、肥、筑出崎ノ官到ル、仍テ伊豆ヨリ後事ヲ託セラル、ヤ否ヲ問フ、肥答、一昨鎭臺我藩ニ後事ヲ託セントス、我答テ曰ク、至重ノ事件、現今出崎ノ吏輩、決然承諾スル能ハス、乞フ藩令ヲ得ルノ後、敢テ命ヲ奉セン、且ツ崎陽ノ地タル、肥、筑年ヲ更ヘテ交々之ヲ護衞ス、今ヤ筑其ノ期ニ當レリ、或ハ筑ヘ其命アツテ可ナラント、筑答、前條云々、出崎ノ吏、速カニ命ヲ奉スル能ハス、鎭臺重テ曰ク、今歳筑前家護衞、其期ニ當レリ、乞フ辭スル勿レト、强イテ之ヲ命ス、僅カニ一二ノ後事ヲ受領ス、而シテ俄然脫シ去ル、去ルニ臨ンテ、亦寸楮ノ報アルナシ、豈悉ク之ヲ託セラル、ノ理アランヤト、此ニ於テ兩藩ノ吏ニ語ルコト、先キニ土著ノ吏ニ語ルカ如クス、二人又大ニ之ヲ然リトス、因テ依田、深尾、菅野ノ三士ヲシテ、急ニ之ヲ朝廷ニ奏シ、新ニ鎭臺ノ任選アランコトヲ乞ヒ、尋テ急ニ之ヲ外國岡士ニ布告ス、初、伊豆守ノ脫スルヤ、官庫ノ藏金一萬四千餘ヲ齎ラシ去ル、土著ノ吏白木久風、野村全吉、高松精一等、乞フテ船中ニ至リ、原註、久風一人、伊豆守ノ船ニ乘移リ應接ス、遂ニ金ヲ收メテ歸ル、先是、伊豆守應對シテ、英艦一艘ヲ幕府ニ購ヒ、其代價年賦ニ米穀ヲ遞與シ、期年マテニ償却センコトヲ約シ、乘試ノ爲メ崎陽ノ船手士官白木久風、野村全吉、成瀨鷹之輔等乘組ミ、江戸海ヘ航廻ノ準備央、正月十一日、伏見、淀等ノ戰報、市街ニ傳説ス、鎭臺ノ諸吏、勝敗ノ確報ヲ得サルヲ以テ、泰然トシテ騷ケル形容ナシ、十二日佛艦入港、水師提督直ニ河津伊豆守カ官舍西邸ニ來テ、合戰ノ顚末ヲ報ク、鎭尹以下愕、僉色ヲ失フ、提督退散後、各集議、或ハ速ニ歸府シテ主從進退ヲ共ニセント云ヒ、或ハ委任ノ地ヲ私ニ去ル

ハ、義ニ於テ恥ル所、假令死ストモ此地ハ去ルヘカラスト云ヒ、其論一ナラス、豆州默然言ヲ發セス、思案ノ體ナリシカ、遂ニ衆ニ對シ、各位ノ議論何レモ理アリ、今俄ニ退去モ勇ナク、又義ナキニ似タリ、然リトテ、老幼婦女ヲ止メ置クモ、變ニ臨ミ進退安カラサルヘシ、因テ先老幼婦女ヲカエシ、而シテ後時機ヲ計ルニ如クヘカラスト云フ、衆僉其言ニ同シ、遽ニ家族歸府ヲ布達ス、吏邸ノ騷動火場ノ如シ、十三日、准備悉ク調ヒ、十四日、未明ヨリ荷物調度ヲ大馬頭ニ運送ス、前ニ購得タル英國船ニ乘ルナラメト思ヒノ外、別ニ外國船ヲ雇ヒ、其船ニ乘組ノ結構ナルヲ見テ、地吏ヲ始メ、市井ノ衆庶ノ說ニ、購得ノ船ハ鎭尹以下歸府ノ用ニ備フルヲ以テ、家族ハ雇船ニテ送ルナルヘシトイヘリ、十三日ノ夜、遽ニ布令アリ、鎭尹官舍海岸ニ臨ミ非常ニ便ナラス、明日、立山ノ官邸ニ移徙ス、運搬ノ人夫ヲ出スヘシト、コノ令ニヨリ、十四日早朝、西邸ニ人夫群集、記錄ヲ始メ、廳舍附屬ノ諸品諸具ヲ西ヨリ東ヘ運ヒ、屬吏家族歸府ノ雜物ハ、東ヨリ西ニ送リ、其馳違フ混雜、今ニモ變アル如ク、諸人薄氷ヲ蹈ム心地ス、蓋シ伊豆守ノ胸算、實ハ十二日京攝ノ確報ヲ得、十三日肥、筑兩藩ノ聞役ヲ呼ヒ、豫メ土地ノ處分ヲ託セシナレトモ、肥藩ハ筑藩ニ讓リ、速ニ承諾セス、各其藩主ノ存意ニヨラン事ヲ主張シ、至急ニ決スヘキ體ナシ、然ルニ當時諸藩ノ有志及草莽ノ浮浪、勤王ヲ稱スル者市鄕ニ潜匿シ、鎭臺邸ヲ襲フノ說囂々、異變ノ崩ナキニモアラネハ、遂ニ意ヲ歸府ニ決シ、或ハ騷擾ヲ生センコトヲ思慮シテ、立山轉居ノ布達ヲハナシタリシ也。

○諸藩士誓書

誓盟者長大之事件ニ就テ、萬世不易之國論ヲ以テ同盟スルノ後ハ、舊事ヲ問ハス、隔意ヲ生セス、互ニ併力補助シテ、此向キ如何樣之紛擾相起ト雖モ、　天朝之御爲メニ、各鐵石之心ヲ以テ盟誓シ、誠心ヲアラハスモノ也。

慶應四年戊辰正月日

薩州　野村宗七　長州　楊井謙藏
土州　佐々木三四郎　藝州　國枝與助
大村　稻垣治部右衞門　宇和島　井關齋右衞門
對州　岩崎浪江　加州　高橋莊兵衞

柳河　山上九左衞門　越前　木内甚兵衞
筑後　今井新左衞門　肥後　宮村莊之丞
筑前　栗田　貢　肥州　大隈八太郎
平戸　服部源五右衞門　五島　奈留帶刀
島原　眞田源五右衞門
長崎縣記
吉井正澄手記

○

事件、

今度、長崎奉行當地退去之擧動、脫走同樣之筋ニ有之、其前區々之浮說等申觸シ、人心動搖之折節、右樣之次第、外國交際之土地、片時モ難捨置譯ニ付、卽夜ヨリ出崎之各藩追々ニ出會、土地之役人等申談、地下鎭撫ハ勿論、外釁之侮蔑ヲ受ケス、皇國之御武威ヲ不辱之主意ヲ以テ、一統會議シ、是迄之規則、條理アルハ其儘閣キ、不條理ナルハ臨機之所置ヲ以テ取計ヒ、天朝之御命令被爲下候迄之間、公平赫々タル處ヲ以テ、諸藩各粉骨盡力シ、土地鎭靜、各釁ニ至迄モ承諾ニ及ヒ候、然ル處、京攝之間戰爭之確證ヲ得、德川氏　朝敵タルヲ知ル上ハ、鎭撫之事當地ニ限ラス、九國一圓ニ相及ホシ、旣ニ肥之天草、豐後之日田等ニ至迄、其事ニ及ヒ候、右會議ニ預之藩々如左。

慶應四年戊辰正月日

薩州　長州　土州　藝州
大村　宇和島　對州　加州
柳河　越前　筑後　肥後
筑前　肥前　平戸　五島
島原

追テ、同盟之藩々ハ、此後ニ書加フヘシ。
長崎縣記
吉井正澄手記

○初メ舊幕府、水戸降人（田丸稻之右衛門ノ黨事ハ元治元年ニアリ、）ヲ忍、壬生等十九藩（藩名詳ナラス、）ニ幽ス、是ニ至リ、其罪ヲ赦シ、諸藩ニ令シテ、之ヲ江戸ニ致サシム。

○壬生藩ヘ達書

御預降人共之儀、此程被仰出モ有之候處、江戸表ニテ請取候間、手續次第爲致出府可申、右引渡方等ノ儀、堀錠之助、平岡庄七ヘ可被申談候、依之申達候。

正月十八日　戸川伊豆守

鳥居忠文家記

○忠文家記ニ云、十二月二十五日、當時我藩ト同ク、預人有之藩、松平下總守家來初筆十九人、連名シテ舊幕府ヘ左ノ趣ヲ窺候處、附紙有之、

常、野降人、兼テ御預相成居候處、先々申上候通、追々悔悟謹愼罷在候事故、方今非常之御時勢、旁以何分之御處置有之候樣御含被下度、此段奉願候、以上。

十二月

附紙、

書面降人共ノ儀ニ付、此度大阪表ヨリ被仰出候儀モ有之ニ付、御預被成御免候間、別紙ノ趣可申渡候。

別紙、

常野州　降人共

其方共、兼テ御預ノ諸家申立ノ趣モ有之、謹方モ宜由ニ相聞、此度大阪表ヨリ被仰出候儀モ有之候間、別段ノ譯ヲ以御預被成御免、上阪被仰付、尤、都テ是迄御預被置候家々ノ差圖ニ隨、早々出立、道中筋等穩便ニ致シ、御時勢ノ程厚相辨、國

家ノ爲忠勇ヲ可抽候事、

一常、野降人共、上阪被仰付候ニ付テハ、海陸何レニテモ不日立様、可成丈穏便ニ取計、入費等不相嵩様仕度、早々出立可爲致、且入用高之儀ハ、追テ取調可申聞候、尤委細ノ義ハ、水戸表御用取扱候向ヘ可承合候事。

○又云、二月二十二日、水戸降人稲田理八郎以下十人、江戸ニ護送シ、舊幕府ニ引渡ス。

○案スルニ、此事、壬生藩ノ外考フル所ナシ。

○舊幕府麾下士勝義邦、官軍三道東下スルヲ聞キ、書ヲ沿道ノ諸侯ニ致シテ、其首鼠兩端ヲ持スルヲ責メ、若シ兵ヲ率ヰテ東下スルコトアラハ、直ニ軍門ニ進テ、是非曲直ヲ問ハントスルヲ陳ス。

其形ヲ取テ其情ヲ盡サヽルハ、天下之公平ニアラス、伏見之擧、小卒之誤ニ發ス、既ニ先五六年、毛利家　闕下ニ不敬アリトイヘトモ、其情實判然タル時ハ、亦今日ノ如シ、　天朝トイヘ共、一モ誤ナシトイハンシヤ、況、我德川氏ニ於テチヤ、其誤ヲ誤トシ、其情實ヲ盡シ、其條理ヲ正シ、初テ公私如何ヲ決スヘキナリ、事倉卒ニ發シ、大令倉卒ニ出ツ、侯伯ノ職、其忠諫盡力一死ヲ以テ國ニ報スヘキ時歟、聞ク三道之侯伯、其城邑ヲ火セントスル風聞アリ、或ハ首鼠兩端不決ナリト、殊ニ痛哭ニ不堪處ナリ、既ニ舊歲、協力同心、　皇國ヲ富强シ、萬民ヲ撫育スルノ令アリ、　天朝亦擧賢一新之大令アリ、然ルヲ思ハス、其情實ヲ捨テ、主家ニ敵セントスルカ、忠諫之事ナキハ尤以テ怪ムヘシ、　皇國土崩ヲ不愁歟、空議今日ニ及フハ、小臣至愚トイヘ共解セサル所ナリ、一朝曖昧之軍ニ列リ、猛卒百萬ヲ率ヰテ東下ストモ、決シテ臣輩ノ恐ルル所ニアラス、軍門ニ推參シテ、是非曲直ヲ問ハム、今先一書ヲ以テ呈進ス、空ク擲捨スルナカレ、謹言。

辰　正　月　　　　　　　　勝　　安　　房

三道之城主机下　勝安芳私記

○安芳私記ニ云、京師ヨリ問罪ノ官軍東下ス、三道之小侯議論紛々トイヘトモ、多クハ驅役セラレ、我ハ其城邑ヲ燒カムト云フ說、日夜不絕、東府之諸士ハ、軍ヲ率ヰテ箱根、笛吹ニ待タムトイフ者アリ、或ハ軍艦ヲ以テ、大阪ヲ衝カムト云、紛々擾々、其方向ヲ辨セス、十八日、三道之城主ヘ一書ヲ呈ス、使ヲ以テ差立ヘキニアラス、公ニ達セムハ僭ナリ、酒井左衛門尉之留守居ヘ託シテ、同席ヘ示サレム事ヲ望ム。

復古記　巻二十二　終

總括兼纂修
一等編修官　臣　長松　幹

校　　勘
一等編修官　臣　長　炗
一等掌記　臣　四屋恒之

校　　錄
六等掌記　臣　澤渡廣孝

繕　　寫
二等繕寫　臣　小川長和
二等繕寫　臣　小島　春

復古記　卷二十三

明治元年戊辰正月十九日ニ起リ二十日ニ至ル

○正月

十九日、是ヨリ先、假ニ學習院ヲ以テ金穀出納所ト爲ス、是日、更ニ會計事務裁判所ヲ置ク。

會計事務ニ拘リ候儀、都テ會計事務裁判所ヘ可申出候事。
但シ、裁判所ハ金穀出納所内ニ被設候事。　有栖川宮家記　中御門經之家記

○參與廣澤眞臣、中根師質、神山君風ヲ以テ内國事務掛ヲ兼シメ、眞臣ノ海陸軍務掛ヲ罷ム。

各通　廣澤兵助
中根雪江
神山左多衛

内國事務掛、被　仰付候事。　毛利元徳家記　中根師質履歴書

○君風履歴書、二十一日トス、然レトモ元徳家記、及ヒ三職分課回達書、三人ヲ連署シテ本日トス、今之ニ從フ。

○池田慶徳引咎ノ請ヲ慰藉シ、命シテ入覲セシム。

因幡中將

徳川慶喜反逆顯然ニ付テハ、骨肉之間柄深恐懼、進退窺之儀被　聞食候、頃日來、本家始追々出兵、勤　王ノ旨趣ハ分明之

儀ニ付、不被及　御沙汰候間、早々上京奉公可有之被　仰出候事。（池田輝知家記）

○徳川慶篤ノ奸邪ヲ任用シ、宗家ヲ匡輔スルコト能ハサルヲ責メ、命シテ鈴木重棟、（石見、）市川弘美（三左衛門、）等ヲ罰シ、藩屏ノ職ヲ盡サシム、又其泉涌寺守衛ヲ罷ム。

水戸前中納言

先年以來、　御沙汰之次第モ有之候處、贈大納言遺志ヲ取失、先代譴責之奸人共致登用、加之、徳川慶喜親戚之身トシテ、諫爭之道モ不行屆、今日之次第ニ至候儀、如何被　思食候、速ニ鈴木石見、市川三左衛門始、奸人共加嚴罰、忠邪之辨ヲ明シ、藩屏之任ヲ不失樣、處置可致　御沙汰候事。（徳川昭武家記）

○昭武家記、守衛ヲ免スルノ達書ヲ佚シ、本文ノ儀ニ付、御守衛人數一同歸藩ストアリ、大槻文彦筆記ニ、水藩大場主膳正以下三百七十人計歸國、烈公ノ遺志ヲ繼キ、勤王盡力可及段奏聞相濟、出立被仰付トアリ。

○都下ノ居民、賊徒ノ兵仗器具ヲ藏スルモノハ、悉ク之ヲ市中取締所ニ納メシム。

今般、　朝敵相成候面々ヨリ、武器類ハ勿論、荷物等預リ置候向ハ、品物取揃、市中取締役所ヘ早々可差出事。（島津忠義家記）

○備前藩ノ老臣日置忠尙ヲ召ス。

日置帶刀

御用有之候間、早々登京可有之　御沙汰候事。（池田章政家記）

○（附錄）備前藩上申書

備前守家老日置帶刀儀、　御用被爲在候間、早々上京仕候樣被　仰出候ニ付、夜前御當地參著仕候、此段御屆申上候、以上。

備前少將内

正月廿二日

澤井宇兵衛

池田章政家記

○附錄忠尙申狀

去ル十一日、西宮爲出張兵庫驛出立、同勢繰出、神戸町通行之砌、先手行列之中ヘ外國人兩人、左手ヨリ右ヘ通掛候ニ付、差押候內、通詞之者取扱、相止申候、尙又一人、右手ヨリ左ヘ通掛候ニ付、差押候處、次之隊ヘ掛リ割込候ニ付、色々取扱、手眞似ヲ以、供先ヘ相廻候樣申諭候處、殊之外憤怒之顏色ニテ大聲ヲ發シ、理不盡ニ押通リ、同時左手人家ヨリモ一人、短銃ヲ以出合、狙掛候ニ付、其場之勢不得止、得道具ヲ以突掛候處、淺手ニ御坐候哉、何レモ家內ヘ逃去、其儘追掛候處、裏口ヨリ供先ヲ濱手ヘ相廻申候、先手銃隊共、右之擧動ヲ見請、直ニ搏出候ニ付、種々相制候內、彼モ濱手ヨリ及發砲候ニ付、一先人數ヲ山手ヘ繰込、見合候內、外國人共、更ニ銃卒押出シ、頻ニ搏掛候ニ付、尙又此方ヨリモ及發砲申候、尤右ハ不慮之儀ヨリ差起リ、此上大事ニ立至リ不申候樣、早々人數引揚申候、以上。

正月

備前少將家來

日置帶刀

池田章政家記

○章政家記ニ云、廿一日、宇和島侯下坂ニ付、兵庫一件書取差出ヘキ旨ニ付、差出ス。

○永井直諒、其所管舊幕府領地ノ措置ヲ稟ス、命シテ、其舊ニ依リ、且昨年負欠ノ數ヲ錄上セシム。

永井日向守支配所

一高三千九百石餘　攝州島上郡村々

一高四千二百石餘　同州島下郡村々

一高六千五百石餘　同州能勢郡村々　一高一萬四千石餘　同州川邊郡村々
一高三千四百石餘　河州茨田郡村々　高合、三萬二千石餘、
右支配所村々、去卯收納米之内、夫々引渡仕候、殘米一萬石餘之分納方之儀、如何相心得可申哉、將亦前書村々、此度　御所御料ニ相成候得ハ、是迄之通御預ヶ被成下候哉、宜奉願上度、依之、此段奉伺候、以上。

正月十九日

永井日向守家來
鈴木治三郎
福山繁三郎

○批紙
伺之通被　仰付候、石數以下、且昨冬未納之分等モ委細取調、帳面一冊ニ書認、早々可申出事。永井直諒家記

○九鬼隆義ニ命シ、舊ニ仍テ、神崎川津攝ヲ警守セシム、又稻田邦植ノ家臣三田某等、書ヲ上リ、邦植ノ西ノ宮守衞ヲ罷メ、專ラ高松ノ應援ニ從ハンコトヲ請フ、征討應援ハ四條隆謌ノ令ニ係ル、之ヲ聽ス。

○十日隆義伺書
兼テ關東之命ニ依、攝州河邊郡神崎川筋警衞罷在候處、去ル七日引拂候樣、是亦關東之達ニ付、大體引拂申候、乍併、右警衞之儀ハ、素ヨリ外國渡來之爲、京師之御守衞ト相心得罷在候ニ付、萬一之手當トシテ、器械等其儘近傍ニ預ケ置、少々人數殘置候、以來如何心得可申哉、此段奉伺候。

正月　九鬼長門守

○本日口達
神崎川筋警衞之儀、總テ是迄之通可心得事。九鬼隆義家記

○

奉申上覺、

九郎兵衞儀、未成童ニ候得共、先代九郎兵衞之志ヲ繼キ、　王室之爲不顧幼愚、日夜杞憂罷在候處、過日勅書ヲ以、累年勤王之旨趣被　聞召候段、被　仰出、君臣一同感涙ニ不堪、雀躍罷在候、其節西ノ宮、備前御警衞之權、應援勉力可仕樣被　仰付、則人數差向罷在候、然處、淡州之儀ハ、天下緊要之地ニ御座候得ハ、兼テ　先帝ヨリ防禦可仕樣被　仰付、奉畏罷在候處、猶又、今般一大御變革ニ付、何時事變出來モ難測御旨趣ヲ以テ、嚴重警衞可罷在樣被　仰付、成丈戒備罷在候折柄、讃州高松御討伐被爲在候ニ付、諸藩應援之爲、人數差向候樣被　仰付、用意罷在候、乍去、九郎兵衞儀ハ、小家之事ニ御座候ヘハ、數處手分仕候テハ、所謂任數勞テ無功之場ニ相成可申、且西ノ宮警衞之義ハ、浪華ニ屯集罷在候姦徒ヲ、遠捲仕候事歟トモ奉存候、然處、既ニ姦徒潰散仕候上ハ、最早蛇足トモ奉存候、何樣前顯ノ懸リ、九郎兵衞儀ハ、小家微力ニ御座候得ハ、數處手分候テハ寸功難建、折角之　思召ニ難奉答、彼是心配罷在候間、何卒西ノ宮御警衞御免之上、高松ヘ差向候樣被　仰付候得ハ、國表ヨリ繰リ出シ人數ト一心戮力之上、精々驅馳仕度心得ニ御座候、此段奉申上候、以上。

正月十九日

三田升馬

內藤彌兵衞

林轍之丞

稻田家出兵記

○

稻田九郎兵衞家來

三田升馬

內藤彌兵衞

林　轍之丞

出願之趣、尤ニ被　思召候間、西宮表警衛之儀被免候、尚又其方等三人之義、御用有之被　召寄候得共、前顯之趣有之候ニ付、申合一人在京ニテ、餘ハ引取候テモ不苦旨　御沙汰候事。

正月　稲田家出兵記

○案スルニ、昇馬等三人ヲ召サレシハ客臘ニ在リ、三人、本月十五日ヲ以テ京ニ抵ル、是ニ至リ、又是命アリ、其事由詳ナラス、蓋シ稲田氏夙ニ勤王ノ志アレトモ、常ニ本藩ノ拘束スル所ト爲リ、其志ヲ暢フルヲ得ス、故ニ朝命ヲ以テ三人ヲ召サレシナルヘシ、出兵記、又云、轍之丞京師ニ滯在スト。

○毛利敬親、及ヒ廣封、阪城討伐ノ命ヲ拜シ、不日ニシテ軍ヲ發スルヲ稟ス。

徳川軍兵、伏見表ニ出張、反逆之色顯然ニ付、追討　官軍可被差向候間、私父子之中、大兵引率、急速發途、華城襲撃可仕之旨蒙　勅命、謹テ奉承仕候、以微力奏功之儀萬々無覺束、不堪惶懼候得共、私父子之中、不日發途、華城襲撃可仕微衷罷在候、此段　御奏達所仰御座候。

正月十日　各通　長門宰相

長門少將

輦下日載

○輦下日載ニ云、桂太郎、十八日浪華著、朝廷ヘノ御請書持參ト、然レハ之ヲ出セシハ、翌日ニアルヘシ、故ニ本日ニ收ム。

○稲葉久通、織田長易、兵ヲ京師ニ出ス、長易又鷲尾隆聚ノ令ヲ以テ、守兵ヲ慈恩寺村大和〇伊賀越街道ニアリ、ニ置クヲ稟ス。

○

先達テ御届申上置候、大坂木津川詰之者共引拂、同所藏屋敷へ控罷在候處、此節之依　御達、不取敢別紙書付之通、昨夕御當地へ引越申候、付テハ少人數ニ御座候得共、相應之御用向被　仰付被下候得ハ、難有奉存候、此段申上候、以上。

正月　　　稻葉右京亮内
　　　　　村瀨角衞

稻葉久通家記

○

別紙人數、妙心寺塔頭智勝院へ止宿仕候、此段御届申上候、以上。

正月　　　稻葉右京亮内
　　　　　村瀨角衞

別紙、

家老　壹人　　物頭　二人　　目付　一人　　士分　十五人

徒目付　一人　　徒士　拾二人　　小頭　二人　　足輕　十五人

農兵　十五人　　醫師　一人　　祐筆　一人　　小役之者　三拾人

又者　二拾二人

〆百拾八人

以上。　稻葉久通家記

○

覺、

物頭　壹人　　士分　五人　　伍長　壹人　　足輕　拾人

右之通著京仕候、此段御屆申上候、以上。

正月十九日

織田攝津守家來
竹村眞一郎

織田長猷家記

○

口上覺、

紀州高野山御出張被爲在候鷲尾侍從殿、御使十津川鄕士野崎和兵衛、宮本勇之助ヲ以被仰越候ニハ、當時之形勢ニ付、御警衛筋嚴重相心得、坂城落人等有之候ハ召捕、南都興福寺裡十津川鄕士取締リ所ヘ差出可申、且大坂ヨリ伊賀越街道慈恩寺村ヘ、人數差出候樣仰付越候ニ付、早速差出置、猶領內往還筋警衛等仕居候處、去ル十六日、步兵隊之內伊太郎、熊吉ト申者召捕候ニ付、其段御同所御取締リ八木村ヘ御屆申達、差圖之上、人體ハ南都取締所ヘ引渡申候、此段在所役人共ヨリ申越候、此段御屆申上候、以上。

正月十九日

織田攝津守家來
坂井權右衛門

織田長猷家記

○附錄二十二日上申書

去ル十九日、御屆申上置候、大坂ヨリ伊賀越街道慈恩寺村ヘ、差出置候人數引拂申候、猶領內間道筋等、嚴重警衛罷在候段、在所役人共ヨリ申越候、此段御屆申上候、以上。

正月二十二日

織田攝津守家來
竹村眞一郎

織田長猷家記

○是ヨリ先、金穀出納所、三井某（三郎助）等三人、（島田八郎左衛門、小野善助、並ニ京都ノ商）ニ諭シ、金穀ヲ豫備シテ、不時ノ需ニ供セシム、是日、某等、金壹萬圓ヲ獻ス。

○十七日諭達書

御復古ニ付テハ、其筋追々御取調可有之儀ニ候得共、即事金穀御用途之處、御手支之程モ難計、何時御用被　仰付候哉ニ付、各分相應用意可致置、尤被借召候次第ニ有之候事。

但、相對取引之分ハ可爲勝手候得共、本文之通ニ付、大金融通之儀ニ於テハ、一應金穀御役所ヘ伺出之上、取計可致候。

京都府記

○

一金壹萬兩、

右ハ報恩之タメ、書面之通獻金之旨、神妙之至ニ候、正請取申處如件。

金穀出納所

役　所　印

慶應四年辰正月十九日

○議定之印

○參與之印

三　井　三　郎　助

島田八郎左衛門

小　野　善　助

京都府記

○脇坂安斐、谷衛滋、永井直哉、京ニ至ル。（脇坂安斐、谷衛滋、永井直哉家記）

○長門藩兵、松平慶倫ノ向背ヲ問フ、是日、慶倫ノ老臣、連署シテ、大義滅親、奉上貳ナキノ誓書ヲ致ス。○松平康倫家記 輦下日載

○徳川慶喜、諸藩ノ老臣ヲ江戸城ニ召シ、三日以後ノ事體、及ヒ其心情ヲ陳シ、諸藩ニ屬シテ、之ヲ救解セシム、松平容保、松平定敬、慶喜ヲ勸メテ再擧ヲ謀ラシム、慶喜從ハス。

今般、　皇國之御爲ヲ以テ、政權奉歸候次第ハ、何之懸念モ無之、誠忠可盡存念、一統モ盡力致呉候儀ニ有之、登京之節、奏聞之次第モ承知之通之儀ニ候、然ルニ、京坂戰爭モ行違之儀ニテ、追々承候得ハ、　朝敵抔トノ風聞モ有之由、兼テ之素願モ不相立、殘念ニ存候、併此上、誠意相盡候存念ニ候、就テハ、　朝敵等無之趣ハ申立度存候得共、貫徹致間敷ニ付、右之處、一統ヨリ盡力致シ、京地ヘ申立呉候様頼存候。春嶽私記

○春嶽私記ニ、十九日、江戸西丸ヘ同席重役一同被爲召、御直ニ上意有之ト。

○老中演說書

今般、宇内之形勢ヲ御量リ、政權ヲ御返シ被遊候譯ニテ有之、　皇國之御爲ニ不相成ト　思召、御建白モ被遊候處、　朝廷ニテモ段々　思召被爲在、其段ハ一統承知之通、且京坂之間、御先手戰爭ハ、全ク行違ヨリ相生候事ニテ、追々御承知モ被遊候處、　朝敵抔ト申風聞モ相聞候得ハ、兼テノ御誠忠ヲ御立可被遊御素願モ不相立、御殘念ニ思召候、右之次第ヲハ、精誠被　仰上候事ニハ候得共、猶又一統モ、此段相心得候様被申渡候事。藤堂高邦家記

○水野忠敬家記ニ云、於江城重役呼出、京坂戰爭之儀ハ、薩、長ヨリ及發砲候儀ニテ不得止處、却テ朝敵之蒙汚名候ニ至リ、殘念至極、就テハ恭順謹愼之取計之存寄ニハ候得共、屆兼候上ハ、猶取計之品モ可有之候間、右之心得ニテ勉勵、盡忠勤候様口達有之。

○上杉茂憲戊辰事情ニ云、徳川氏面示ニ曰、三日　召ヲ奉スルノ擧、前驅ノ過誤、圖ラス戰鬪ニ至リ、忽チ　朝敵ノ名ヲ蒙

ルコト、痛憾之至也、素ヨリ　朝廷ニ對シ奉リ、毛頭無異心ノ旨、百方陳疏ニ及フト雖モ、勢ヒ爰ニ迫リ、　天闕九重貫徹ニ由ナシ、此上列藩之力ニ倚リ、汚名ノ寃ヲ雪カンコトヲ企望スト。

○仙臺藩記ニ云、正月二十日、徳川家ヨリ重役之者登城致シ候樣、老中ヨリ申來、詰合執政坂英力出頭シ候處、慶喜自ラ出會、同人大政奉還已來、正月三日上洛之途中、伏見邊ニオヰテ先手之者共、理非ノ辨モナク率然兵端ヲ開キ、終ニ朝敵ノ名ヲ蒙リ、臣子ノ分ヲ失シ、恐愕至極、手足ヲ措クニ所ナク、速ニ正月十二日ヲ以テ退京、東下、一向恭順謹愼、仝ク奉對　朝廷、毫髪逆意無之、畢竟指揮不行届ヨリ、先手之者トモ輕擧率爾ノ擧動ニ至リ候段、其身ハ伏罪、何レトモ奉仰　天裁候心得ニ候得共、六師既ニ　御發向之由、上ハ天兵ヲ奉勞、下ハ萬民塗炭之苦ヲ受シムルニ忍ス、伏テ願ハクハ、六師　御發向控ヘ下サレ候ヤウ周旋ニ預リタキ由、深ク依賴有之、慶喜ヨリ慶邦ヘノ自書原記ヲ失ス、恐クハ本書ト同文ナラン、相渡候由、其節承リ申候、其后英力ヲ以テ依賴之事、速ニ周旋シ呉候ヤウ懇願ノ由ニテ、老中又ハ大目付中ヨリ、幾度トナク責付ヲ受候ヘ共、先其儘ニアシライ置申候、就中、大久保一翁申候ハ、討會御奉命ニ付、貴藩ニテ願之上、白河城ヲ屯所ニ御引受、軍事局ヲ御取建ノ由ニ承候處、同所ハ徳川家大政奉還以前、陸奥守殿御周旋ニ依テ、阿部家一旦棚倉ヘ移シタルヲ復領サセタルコト、御心得之通ニテ、徳川、伊達兩家ノ義、舊來他家ノ比ニ非ル親ミヲ以テ、萬端懇談ヲ盡シ所置セシニ、一朝ニシテ如此ナルコトハ、人情アルヘキ筋ニコレナク、阿部氏モ既ニ令アル上ハ、復領スルニ疑ナシト思ヒ、既ニ荷物ノ運輸ニ迄取付タル由、其迷惑察シ玉ヘ、如何ニカシテ此事ハ控ヘラレ度由、屢依賴有リケレトモ、私ハ元ヨリ番詰ニテ出府シ居、是等ノ事迄ハ關係不致由、申擴ヒ肯ヒ不申候。

○附錄二月八日加賀藩上申

今度、京攝ノ模樣ハ一同承知ノ通ニテ、不容易時勢ニ至リ、何共恐入候次第、右ハ豫テ　皇國ノ御爲、盡力罷在候得共、人心折合兼候邊ヨリ、此方誠意モ不徹、却テ奉惱　叡慮候次第ニ付、先般、政權ヲモ奉歸候、然ルニ今度、上京之儀被　仰出、發坂ノ途中、不計モ行違ノ邊ヨリ兵端相開、不容易場合ニ臨ミ候付、一ト先東歸致シ、恭順謹愼罷在候處、方今　朝敵ノ名ヲ

負セ候哉ニモ有之、誠ニ以恐入候次第、此上何國迄モ尊敬ヲ盡シ、奉對　朝廷異心無之趣、御詫申上候儀ニ決心致シ候ニ付テハ、諸藩ニ於テモ此趣ヲ汲取、奉對　朝廷、弓矢ヲ彎候趣意ニテハ決シテ無之段ヲ、厚周旋盡力候樣、一偏ニ賴入候、此段銘々ヘ申入候樣、

右之通於江戸申聞候旨、國許ヨリ運越候間、此段御屆可申上旨申付越候、以上。

二月　　　　　　　加賀宰相中將内
　　　　　　　　　　里見亥三郎

輦下日載

○案スルニ、春嶽私記、輦下日載、載スル所、其文同シカラス、又酒井忠寶家記モ亦、口達アリ、其文、忠敬家記ト少異同アリ、蓋シ藩ノ内外、席ノ區分等ヲ以テ、異同アリシナルヘシ。

○中村武雄手記ニ云、初メ我公、已ニ江戸ニ著キ玉ヒ、邸内ニモ入リ玉ハス、晝夜御登城被爲在、會津侯ト共ニ、大坂ノ御趣意、今一度思召被爲立候樣、種々言ヲ盡サルトモ、前將軍更ニ用ヰ玉ハス、却テ寡人ヲシテ、此ニ至ラシメシハ、肥後ト越中トノ業ナリ抔仰セラル、程ノ事故、今ハ致シ方無之トテ、築地ノ邸ニ歸ラセ玉ヒ、是ヨリ閉居シテ出テ玉ハス、江戸ノ議論ニハ、桑名モ已ニ罪ニ服シ、德川氏ニモ御恭順ノ上ハ、御謹愼ノ外有之間布トテ、謝罪狀ヲ肥後藩ニ托シテ、御謹愼在セラル。

○附錄開成所會議概略

○開成所囘達書

別紙之通、諸藩梜ヘ御通達之儀、開成所ヨリ申立候ニ付、右壹通及御申合候、國家存亡極切迫之時勢ニ付、諸藩御有志之方御議論有之樣トノ趣意ニ付、被　仰合御出席有之樣致度、此段及御申合候、以上。

赤阪

正月十三日

帝鑑間御席

御留守居中

別紙、

國家重大事件ニ付、會議致度候間、盡忠有志之諸君ハ不拘貴賤、明十四日ヨリ小川町開成所ヘ御入來可被成候、以上。

但、毎日朝五半時ヨリ八ツ時迄之内、銘々腰辨當之事。

正月十三日　　會議一同

○赤阪ハ紀伊藩ヲ云フナリ。

○

一辰正月十四日、開成所會議席ヘ罷出候所、出席一同、床机ニテ並居候所ヘ、左之書付出候間、書取退引、

但板間ニテ稽古場之模様ナリ。

一條

此度會議之趣意ハ、戮力同心シテ、義ヲ唱ヘ、兵ヲ集メ、國家ヲ再興スルヲ主トス、外他議不可有之、

二條

會議ニ預ルモノハ、定日刻限、急度出席之事、

三條

毎會、會中ヨリ壹人ヲ撰ヒ、演說方トナスヘシ、

四條

各人存寄ヲ申出ル時ハ、是ヲ書面ニイタシ、演說方ニ渡スヘシ、

五條
演說方、右書面ヲ受取、存分其意ヲ熟覽シ、不容易不審之廉アラハ承リ正シ、明細ニ理解スヘシ、
六條
次ニ演說方、書面ヲ高聲ニ讀上ケ、衆中ニ出スヘシ、
七條
衆中、答說之者ハ論難スヘシ、其節演說方ヨリ應對スヘシ、返答之難キハ、說ヲ立テ候モノヘ承リ正スヘシ、始終說ヲ立タルモノト難者ト、直ニ應對スヘカラス、左候テ演說方其間ニ居リテ、雙方之意味ヲ貫徹シテ、成丈一致ニ歸セシムヘシ、
八條
雙方之意味、行違ヒ一致シ難キ節ハ、衆說ニ從フヘシ、
但、任撰ハ入札ヲ以テ定ムヘシ、
九條
衆說ニ歸スル說ハ、私心ヲ屈シテ衆ニ從フヘシ、自己ノ說之行レサルヲ以テ、不平ヲ懷キ、戮力同心之本意ヲ失フヘカラス、
十條
衆議一定之上ハ、一紙ニ認メ、出席人數之姓名ヲ記シ、政府ニ呈シテ裁斷ヲ乞フヘシ、
十一條
政府ヨリ下問之廉アラハ、又右之手續ニテ答奉ルヘシ、
十二條
新聞アラハ、必會中ニ吹聽スヘシ、會中、是カ爲ニ新聞帳ヲ設ケ、悉ク記錄シ、會中ハ人ノ觀覽ニ便ニスヘシ、
軍機之事ハ、封書ニテ演說方ヘ差出シ、其儘大君ヘ呈候事。

○

滿說

此度會議相始候ハ餘之儀ニアラス、國家危急之場合ニ付、同心唱義、　皇國之御爲、　德川氏御再興之儀ヲ計リ候ニ付、御銘々御見込之趣、何事ニヨラス御申出被下度、會議之上言上仕、夫々御採用相成候樣仕度也、御見込、今日被差出候共、御歸リ之上、御認御持參相成候共、兩樣之内イツレニテモ、諸君ノ御說ニ附キ會議可致候。

開成所頭取

倉橋但馬守　西尾錦之助　田中哲助

小田切莊三郎　目賀田帶刀　河田相模守

同教授職等

津田眞一郎　神田孝平　林正十郎

加藤弘藏　柳河春三　渡邊一郎

小林鼎輔　榊令助

攻守、

右見込ヲ可申立旨也、各攻、或守ノ一字ヲ記シテ投票セリ、予ノ差出セシ書面ノ大意ハ、攻ルノ力有テ、而後ニ守ル可シ、今日ノ勢、一二ノ大藩義擧シテ助クルアラハ、戰フモ可ナリ、然ラスンハ、日本全國ヲ敵ニ受ルノミナラス、外國ヲ敵ニ受クルモ知ル可カラス、宜ク注意セサル可カラス、云々。一然ルニ、攻ノ入札多カリシニヤ、十六日、右會合之面々、西城ヘ出仕、慶喜公ヘ謁見シ、再擧ヲ慫慂セント議ス、慶喜公、敢テ見ス、空シク退城セリ。武内孫助筆記

二十日、伊達宗城、後藤元燁、大坂ヨリ至リ、昨日ニアリ、各國公使神戶ノ事ヲ論セシ書ヲ上ル、廷議遂

ニ其言ニ從フ、是日、東久世通禧ニ命シ、之ヲ各國公使ニ報セシム、又之ヲ池田茂政ニ諭ス。

各國公使ヨリ、備前家來暴發一條ニ付、御處置之儀ハ尤之儀ニ付、彼等如申立被聞召、御處置可相成候間、此段早々、各國公使中へ御通達可有之候事。

正月二十日　伊達伊豫守
三條前中納言

東久世前少將殿　外務省記

○

千八百六十八年第二月九日出、六ヶ國公使ヨリ之貴書致披見候、然ハ、備前家來之儀、御申立之通處置可致旨、今朝別紙之通（前條書東ヲ指ス）申趣候間、左樣御心得可被下候、尤政府ヨリ之詫書之儀モ、追テ可差出候、此段御返答如斯御坐候、以上。

辰正月二十一日　東久世前少將

佛・英・伊・米・孛・蘭
公使姓名閣下　外務省記

○

備前少將
家來へ

家老日置帶刀、攝州神戸村通行之砌、外國人ト及砲戰候始末、公法ヲ以テ、　朝廷ヨリ御處置可有之旨御決定候間、其段相心得可申、尚御處置振之儀ハ、追テ可被及御沙汰候事。

正月二十日　池田章政家記　春嶽私記

○備前藩へ達書

右者上京候ハヽ、其屋敷ヘ預リ置、直ニ相屆可申出事。池田章政家記

○春嶽私記ニ云、十九日、議事ハ外國事務總督豫州老侯、同掛リ後藤象二郎、大阪ヨリ上京、外國應接之次第申上タルニ就テナリ、應接ニ相成起原ハ、去ル十一日、備前ノ人數、兵庫ニ至ル途中、神戸村ニテ英人ト取合ヒ出來、佛亞ノ人數モ繰出、救援及砲戰、互ニ少々之殺傷有之ニ付テナリ、外國公使共ヨリ、此度事勢變革ニ付、外國ヘ御布告之儀ハ致承知候由、乍併、備前取合之一件、公正之御裁決ニ無之テハ、和親之約ハ難致トノ趣ニ付、東久世殿ヨリ、裁決ハ如何樣ニイタシ、列國公使滿足ナルヤト被申處、返翰之要旨ハ、　御門陛下、十分ニ詫タル書面ニテ、今後之處、急度爲致間敷ト請合之段申來候ハヽ、本國ヘ可申遣旨、又及暴行候樣差圖致タル役人ハ、外國人之見ル前ニテ、刑罪ニ行ヒ候樣トノ二件ナリ、此返答、二十二日迄ニ可有之趣ヲ申越タリ、此段於議事席、豫老侯、象二郎ヨリ總裁宮ヘ申上、夫ヨリ公使ヨリ之來書翻譯セシヲ、上參與、公卿ノ内ニテ高聲ニ被讀上、夫ヨリ下參與之面々、一人ツヽ、列ヲ進ミ、意見及言上處、何モ大同小異ニテ、歸スル所、萬國之公法ニ被任ヨリ外無之トノ趣意ナリ、夫ヨリ公卿、議定、參與衆之評議ニ相成處、或ハ姑息、或ハ利害、或ハ蒙昧說等ニテ、更ニ不相決、下參與ハ及退席、堂上方之論ニ時刻ヲ經テ、不決ニ付、下參與再出、屢及催促處、岩倉殿ヨリ堂上方一人ツヽ、質問ニテ、漸クニシテ決シ、下參與ヘハ何レモ建議之通リ、萬國之公法ニ被任段被申聞、已ニ決議ニテ、片時モ早ク阪地ニ可申越トノ事ニ相成處、公帥宮迄御申達有之ハ、外國交際ニ付、日本人之刑戮、　御親政後御手始之事候得ハ、　御奏聞ノ上、御取計ヒニ不相成候半テハ、備藩之屈服、如何可有之哉ト御申入ニ付、子半刻頃、三條中納言殿、中御門中納言殿參　朝ニテ御奏聞有之、　叡裁之上、直樣外國事務總督ヨリ、外國公使希望之通御處決ニ相成段、兵庫出張之東久世殿迄、急飛脚ヲ以被申達、此度之事ハ軍隊ニ起リシ故、償金ニテハ難贖由ナリ、備前侯モシ奉　命無之候得ハ、御征討之御含ニ有之、且又朝裁之趣、日本全國ヘ御布告ニ相成トノ御評議ナリキ、翌二十日、於太政官備前重役御呼出、御達ニ相成タリ。

○戸田忠至ヲ以テ、參與、兼會計事務掛ト爲シ、參與楫取素彥ヲ以テ、制度寮事務掛ヲ兼シム。

参與職、會計事務掛、被　仰付候事。島津忠義家記　戸田大和守

○忠至家記口達トアリ、故ニ回達ノ文ヲ收ム。

○

制度寮懸、被　仰付候事。日載下　楫取素彦

○参與酒井忠溫ヲ罷メ、北陸道鎭撫ニ隨ハシム、小原忠寛大垣ニ赴キ、官軍ノ糧食ヲ措辦センコトヲ請フ、之ヲ聽ス。

○春嶽私記ニ云、此度高倉、四條之兩卿、北陸道鎭撫使トシテ御發向ニ付、御家ヨリ參謀之者御指出ニ相成度御頼談有之、藝州ヨリハ寺尾淸十郎指出ニ付、御家ヨリハ參謀之者ハ御斷ニテ、御國中爲御案内、酒井十之丞、大井彌十郎、被差添事ニ相成、今日兩人共、官代出勤、兩卿、竝尾寺淸十郎ヘ及示談、二十日、酒井十之丞、北陸道勅使差添トシテ、御國行キ被命ニ付、參與役之儀相願ヒ被免。

○

此度　官軍、東山道ヘ御發向ニ付テハ、兵粮其外御軍費等之儀、其御手配モ被爲在候御事ニハ可有御座候ヘ共、美濃路邊之儀ハ、當手ヘ御不都合無之樣可仕旨、此間中御沙汰モ御座候間、私儀一應立歸リ、大垣迄罷越、右之手配仕置申度奉存候、是モ會計事務之一端ニ御座候間、何卒早々、暫時之御暇被下置候樣、偏ニ奉願上候、已上。

正月二十日　小原二兵衛

仲儀革正錄

○革正錄ニ云、本書岩倉卿ヘ差出、則御聞屆ニ相成ル。

○是ヨリ先、竹澤邦光寛三郎○淡路郷士、ヲ美濃ニ遣ハス、是ニ至リ、郡上藩ニ令シ、邦光ト謀リ、旁近ノ舊幕府領地、及ヒ士民ノ向背ヲ按撿シ、以テ鎭撫使ヲ迎ヘシム。

竹澤寛三郎

東山道爲鎭撫、總督岩倉大夫、同副岩倉八千丸等ノ進軍被　仰出候、依之、先發向門弟等糺合、命令可奉待　御沙汰候事。

正月

内密御演說之旨、

勤王不勤王之者、可討者討問敷者、取糺可致言上候、飛驒險惡之地ニ候間、早々勤　王可致樣取計へ。 東山道總督府叢紙

○郡上藩へ達書

其藩事、報國之志不淺、屬　官軍候段、　神妙ニ被　思召候、今度東山道鎭撫使被差下候付、其領地最寄之儀ニ候間、是迄幕領笠松支配所之内、和良郷、及其隣國飛驒地方取調之儀、被　仰付候間、士民之情實、篤ト相糺シ、　天使御下向相待候樣可仕旨　御沙汰候事。

但、竹澤寛三郎事、美濃、飛驒等之地理熟知之上、門生モ多ク有之趣ニ付、先達テ被　仰付候間、申合同心盡力可仕候事。

青山幸宜家記

○郡上藩受書

此度　天使御下向ニ付、笠松支配所之内、和良郷、及隣國飛驒地方取調之儀、委細御書取ヲ以被仰出、奉畏候、即刻江戸表峯之助方へ可申遣候得共、最早　天使御發駕ニモ相成候儀ニ付、私儀今日御當地發足、在所へ急々罷越、夫々取調可仕候、不取敢御請奉申上候。

正月二十一日　青山峯之助家老
鈴木兵左衛門
青山幸宜家記

○加藤明實、封内既ニ定ルヲ以テ、再ヒ京ニ至ル、乃チ復タ内侍所、及ヒ建春門ヲ守ラシメ、新谷藩ノ守衛ヲ罷ム。

能登守儀、在所表鎮靜仕候ニ付、領内取締等、重臣之者へ申付置、爲　御守衛今日參著仕、卽刻爲窺　天機參　内仕候、此段御屆申上候、以上。

正月二十日　加藤能登守家來
西村均兵衛
加藤明實家記

○明實へ達書
内侍所御守衛、如元被　仰付候事。
正月二十一日　加藤明實家記

○案スルニ、達書中、建春門ノ事ナシ、之ヲ舊水口藩士中村鼎五ニ質スニ、建春門ノ錦旗モ舊ニ仍リテ之ヲ守ルト、蓋シ二所相接スルヲ以テ、之ヲ兼ネシナルヘシ。
○加藤泰令家記ニ云、二十日、内侍所、竝日之御門御警衛、無滯被免。

○綾部藩ニ令シ、舊ニ仍リテ、塚原口ヲ守衛セシム、平戸藩、征討府ノ令ヲ以テ、闇嶺ノ守兵ヲ奈良ニ移スヲ稟ス。

○七日申請書

去ル亥年四月、織田山城守、竝大隅守ヘ、京都爲御警衛、城州塚原村陣屋拜領被　仰付、同沓掛村、長野村ヘ番所取建、人數出張相勤居申候處、出雲守儀ハ、去ル三日、此度之形勢ニ付、從　御所被爲召候ニ付、總人數召連參　内仕候間、差向私方一手ニテ、陣屋下見張番所警衛勤番罷在候處、何卒從　朝廷、改テ右陣屋下見張勤番被　仰付被下度奉願上候、左候ハヽ、少人數ニハ御座候得共、可相成丈ケ、嚴重警衛可仕奉存候、此段宜敷御執奏被成下候樣奉願上候、以上。

九鬼大隅守家來

内田武左衛門

正月七日

○本日批紙

城州塚原村陣屋下見張番所警衛之儀、更ニ從　朝廷被　仰付候事。九鬼寧隆家記

○

織田出雲守、兵隊引率被爲　召候ニ付、更ニ一手ニテ御警衛被　仰付候事。九鬼寧隆家記

九鬼大隅守ヘ

○

先達テ、闇峠御警衛被　仰付、人數爲致出張置候處、烏丸侍從殿、爲鎭撫大和路ヘ御越之節、闇峠御通行、最早大坂平穩ニ付、此處相固メ候ニモ不及申、早々人數引拂候樣御差圖有之ニ付、引拂、南都迄罷越候處、於同所、猶又爲鎭撫、暫ク人數差置候樣、從烏丸殿御差圖御座候ニ付、其儘南都ヘ人數在留仕居候段、出張頭役之者ヨリ申越候、此段御屆申上候、以上。

松浦肥前守内

淺山九郎左衛門

正月二十日

松浦詮家記

○熾仁親王、牛車ノ永宣旨ヲ辭ス。

牛車之儀、於　當宮ハ從　後西院帝永々　宣旨、　叡慮之御沙汰被爲在候得共、今度就　朝政御一新、御辭退被仰上候、此段宜　御沙汰之儀、御賴被仰入候事。

正　月　有栖川宮家記

○有栖川宮家記ニ、御辭表議定衆ヘ被差出候處、落手相成候ノミニテ、倉卒ノ折柄ニ付、別段御聞屆有無御沙汰書等ハ無之トアリ。

○松平慶倫、書ヲ上リ、備前藩兵來討ノ聞エアルヲ稟訴シ、其奉命ノ狀ヲ得ンコトヲ請フ。

道路之風說ニハ可有之候得共、備前人數ニ近隣人數差加リ、私持國ニ打入候勢ニテ、先日來、人民動搖不大方奉恐入候、尤其旨趣曖昧ニテ、明了不申越候得共、何歟　朝廷御究問之次第モ被爲在候ニ付、近々錦旗モ御差向可相成段、其人數中ヨリ傳聞仕候、右ニ付、先日來、以使者無疎意段申遣候得共、其城下ヘ入レ不申、尙又昨今、押テ使者差遣中ニ御坐候、一體從前幕政之折柄、美作全國取締仕候樣承知罷在候處、御一新相成候共、宜敷筋ハ其儘施行可被成旨、先般御達御坐候間、其旨相心得候テ宜敷哉、扨又備前守、今般如何成　詔命ヲ奉蒙候哉、通達無之ニ付、右等之風說不審ニ不堪奉存候、此段御付紙ヲ以、御差圖可被成下候、私儀德川慶喜、去ル三日、伏見暴動ニ付御達之趣、不肖私謹テ奉畏候、乍去、宗家ニ係リ候者、右奉犯重罪候段、敎戒之儀モ可有之處、無其儀、深奉恐入候、則明後廿二日出足、冐病氣、罪ヲ　闕下ニ奉待候覺悟ニ御坐候、固ヨリ奉對　朝廷、毛頭別心無御坐候段ハ、天地モ明覽アル處ニ御坐候得共、御指圖不被成下內、如何程陳情辨解仕候共、聞入無之、先方過激ニ出テ、兵端相開候ハヾ、家來之者共、悲憤罷在候折柄、私出立前後ニ不拘、一戰ニ可及モ難計奉恐縮候、是全武道之意氣地、幾重ニモ御瞭察被成下度、伏テ奉懇願候、誠恐頓首頓首。

正月廿日　松平三河守

松平康倫家記

○本條、上達ノ日ヲ失ス、故ニ本日ニ收ム。

○本多忠鄰、京ニ至ル、本多忠明家記、大河内信古、病ヲ謝シ、遠山友祿、疾アリ、且喪ニ居ルヲ以テ、並ニ老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム、秋元禮朝ノ家臣、河内ノ別邑ニ在ル者、役夫ヲ發シテ事ニ從ハント請フ。

刑部大輔儀、舊冬、依　召早々上京可仕處、先達テ中、御猶豫之儀奉願候通、何分病氣ニテ追々延引仕候段奉恐入候間、當月三日、大坂表ヨリ重臣共、爲御用承差出候處、不計モ同日騷亂モ相成、途中ヨリ引返シ、在所表ヘ著仕候、刑部大輔儀モ乍病中、去ル十二日、在所表ヘ引取申候間、押候テモ上京可仕處、何分病症難澁ニテ、不得其儀奉恐入候間、爲御用承重臣石川作右衛門、唯今上京仕候間、御屆奉申上候、以上。

正月二十日　松平刑部大輔家來

佐野久米治

大河内信古家記

○

過日來、不容易形勢、奉恐入候ニ付、急速刑部大輔儀、上京可仕處、兼テ之不快、聢ト不仕候ニ付、不取敢名代ヲ以、御用奉伺候間、相應被　仰付被下度、此段宜御差圖奉願候、以上。

正月二十一日　松平刑部大輔名代

石川作右衛門

大河内信古家記

○友祿家記ニ云、病氣、且忌中罷在、旁上京延引仕、奉恐入候ニ付、不取敢名代トシテ、重役一人、士分五人、卒十人、差出ス。

○十八日興朝家臣申請書

秋元但馬守、兼テ勤　王之儀申付置候處、今般之　御一新ニ付、急速江戸表、但馬守方ヘ申遣候得共、彼方ヨリ申越候迄之處、河州領分陣屋詰之者、人少ニテ不任心底、依之、鄕人足五拾人差出申候間、何レ之御場ヘ成共御用途被成下候樣仕度、此段奉願候、以上。

秋元但馬守内
陣屋詰家來
多賀谷彥九郎

正月十八日

秋元興朝家記

○興朝家記ニ、二十日、鄕人足五十人、戸田大和守ヘ引渡スヘキ御達アリトアリ。

○北陸道鎭撫總督高倉永祜、副總督四條隆平、京師ヲ發ス、酒井忠義兵、先鋒タリ、淺野茂長兵、之ニ屬ス。○北陸道先鋒記

○中國、四國征討總督四條隆謌、明石城ニ至ル。○松平直致家記

○德川慶勝ノ藩ニ赴クヤ、淸洲驛（尾張）ニ駐リ、成瀨正肥（隼人正○食封三萬五千石、尾張藩附家老、後犬山藩ト爲ル）等ト謀リ、誅奸ノ策テ定メ、是日、藩城ニ入ル、諸臣皆上謁ス、乃チ黨首渡邊某（新左衛門）、榊原某（勘解由）、石川某（内藏允）ヲ拘シテ、自刄セシム、尋テ其黨塚田某（愨四郎）以下十一人、亦自刄ヲ命ス、其餘禁錮退隱、各差アリ、是ニ於テ藩論始テ定ル。

〇德川義宣家記ニ云、慶勝、十五日、京師ヲ發シ、十八日、淸洲驛ニ次ス、渡邊新左衞門、始ハ兵權ヲ有スル者ニシテ、卒爾手ヲ下ス可カラサルヲ以テ、速ニ城中ニ入ラス、隼人正等ト其處分ノ方法ヲ密議シ、部署既ニ定マル、二十日、國城ニ入リ、留守ノ老臣等ニ　勅書ヲ示シ、斬姦ノ處置ヲ命ス、是ノ時ニ當リ、老臣ノ中、猶遲疑スル者アリ、慶勝、聲ヲ勵マシテ曰ク、既ニ　朝旨ヲ蒙ル如此、何ソ二念アル可キ哉ト、是ニ於テ、衆皆悚服、復タ異論ナシ、是日、慶勝ノ著城ヲ賀スル爲メ、渡邊新左衞門始メ、盡ク登城ス、卽時、其罪狀ヲ申渡シ、巨魁三人ニ自盡ヲ命ス。

家老列　渡邊新左衞門

大番頭　榊原勘解由

馬廻頭格　石川內藏允

右巨魁ノ處分ハ、機會ノ間髮ヲ入ル可カラサルヲ以テ、直チニ二丸ニ於テ自盡セシム、自餘黨與ノ者ハ、日ヲ逐テ處分スル、左ノ如シ。

二十一日

手筒頭格　塚田愨四郎

錦織奉行格表番　安井長十郎

使番格　寺尾竹四郎

二十三日

使番格寄合　馬場市右衞門

馬廻組　新五郎祖父隱居　武野新右衞門

二十五日

同　三津太郎祖父隱居　成瀨加兵衞

寄合　孫太郎父隱居　横井孫右衛門
同　鎰彌父隱居　澤井小左衛門
家老列　伊折介嫡子　横井右近
普請奉行格　松原新七
先手物頭格表番　林紋三郎
中奥小性格　竹居新吉郎

右之通處分ノ上、新左衛門始家族家來ハ、夫々家臣ノ内ヘ預ケ禁錮セシム。

家老列　成瀨豐前
同　鈴木嘉十郎
大番頭　大導寺主水

右家祿ヲ奪ヒ禁錮

寄合　龜松父隱居　瀧川一樂
城代格　平右衛門父隱居　千村十郎右衛門
寄合　加藤五郎左衛門
錦織奉行格　本杉錄兵衛
使番格　名倉鉞之助
同　進八郎

右家祿ヲ減シ、退隱、禁錮、

右禁錮、或ハ退隱、

使番　天野儀兵衛

右禁錮、

右處置既ニ畢ル、反側ノ者ヲ安ンセン爲メ、嘗テ渡邊新左衛門始ニ附屬スル兵隊中ヘ、左ノ旨ヲ相達ス、

今般、　朝命モ有之、姦臣主謀ノ者共誅戮等、夫々處置申付候、付テハ誤テ右黨與ニ入候者有之候トモ、歸順致シ候輩ハ、決テ其罪ヲ苛責不致候間、一統深ク此意ヲ相辨ヘ、心ヲ安シ、大義ニ心ヲ盡シ候樣可致候事、

正　月

尋テ大小家臣ヲ城中ニ集メ、勤　王遵奉、二念ナカラシメン爲メ、各血誓セシメ、左ノ書付ヲ一同ニ相示ス、

今般、奉　朝命、國政一新之折柄、非常ノ刑典ヲ擧ケ候得共、全ク惡ヲ懲シ姦ヲ除候主意ニテ、濫ニ殺戮ヲ相好候譯ニハ無之候、此上ハ同心一和シテ、　王室藩屛ノ主任ヲ辱メサル樣致度意衷ニ有之候間、何レモ危懼之心ヲ不抱、爲國家可抽誠忠事、

正　月

斯ニ於テ國論一定シ、大小家中勤王ノ一途ニ出テ、始メテ虞慮スルトコロ無キニ至レリ。

○松平賴聰、征討ノ令下ルト聞キ、罪臣二人（小夫兵庫、小河又右衛門、）ノ首級ヲ征討府ニ獻シ、（使臣四條隆謌ノ營所ニ詣ルハ、二十四日ニ在リ、）城ヲ出テ、佛寺（淨願寺、）ニ屛居ス、是日、土佐藩兵、高松城ヲ徇ヘテ、之ヲ下ス○（松平賴聰家記）

○初メ花山院家理（前左中將○家威ノ父、）罪アリ、河内ニ屛居ス、客臘、西海道鎭撫ノ内旨ヲ受クルト稱シ、浪徒ヲ率ヰテ、周防室積港ニ至ル、其黨ノ赤馬關（長門、）ニ在ル者、肥後天草、豐前四日市ヲ鹵掠シ、遂ニ馬城峯（豐前ニ在リ、）ニ據リ、旁近ノ諸藩ニ移檄シテ、家理ノ義兵ヲ擧クルヲ報ス、是日、長門藩、吏ヲ

室積ニ遣リ、家理ヲ拘留ス、長崎會議所モ亦、兵隊ニ小ヲ天草ニ遣リ、之ヲ鎭ス。

○檄文

今般、幕府以詐術奉歸政權、却テ動干戈逼　朝廷、大逆無道不過之候、於是、我花山院正三位前左中將殿、西州之官軍爲召募、被爲遊御下向、馬城峰ヘ被爲定御本陣候間、勤　王之事業被留御心候ハヽ、御應援被下度存候、追々以使者可致應接候得共、御擧動有之候テハ氣之毒ニ候間、先以書中申達候、恐惶謹言。

花山院殿御内

正月十五日　小山田帶刀　高來左門　淸原靜麿

藤原六郎　兒島備後

松平主殿頭殿

御執事

木下飛驒守殿

御執事

各通　長崎縣記

木下俊愿家記

○俊愿家記ニ云、正月十四日夜、浪士三百人程、豐前四日市御役所、竝ニ同所御預リ之久留米藩ヨリ相詰罷在候東御坊、竝ニ莊屋宅ヘ砲發致シ、不殘燒拂、武器其外品々奪取、御許山ヘ楯籠リ、錦之旗ヲ押立、陣幕打廻シ、砲臺ヲ築立、其外宇佐宮近邑ヘ、兵粮焚出シ爲致、人夫、呼出シ驅使シ、中須賀御藏米ヲ御許山ヘ爲運候由、同十九日夕、檄文到來。

○十八日、浪徒、天草ニ於テ布告

今般、　皇朝御一新ニ付、　花山院前三位中將家理卿、九州爲鎭撫　被奉　内勅、豐州ヘ渡御被遊、就テハ當島、兼テ人心不居合、内々混雜之趣モ相達、深被遊御憂念候、依之、拙者共、人心一致居合之基本モ相立度、諭達方トシテ出張致候、決シテ麤暴輕擧之義無之候間、安心致、郡中役人共一同、集會之上決議、聊奉報　天恩度存念ニ候、異心無之面々、早々受書可被差

出候、以上。長崎縣記

○肥後藩士ニ贈ル書

以飛札得御意候、今般、皇朝御一新ニ付、九州爲鎭撫、花山院前三位中將公被奉　内勅、豐州ヘ渡御被遊、就テハ、兼テ當島人心不居合之趣、被致傳聞候ニ付、諭達方致候樣被命、今日富岡ヘ出張仕候處、詰合之役人共、如何相心得候哉、先刻不殘引拂候由、尤他藩ト交戰等之存念ハ毛頭無御座、全右之意趣ニ御座候、貴藩ヘハ兼テ當島爲警衛、御人數モ被差出候事故、倶ニ鎭撫方御談判申度候、此段貴報可被下候、頓首。

正月十八日

兒玉備後之介

結城下總之介

肥後御出張

御役人衆　長崎縣記

○答書

御飛札致拜見候、然ハ今般、皇朝御一新ニ付、九州爲鎭撫、花山院前三位中將様被奉　御内勅、豐前ヘ被遊　渡御、付テハ、兼テ當島之人心不居合趣、被遊御傳聞候ニ付、諭方被成候樣被　命、昨日富岡ヘ御出張被成候處、詰合セ之役人引拂候由、尤、他藩ト交戰等之御存念ハ毛頭無御座、御趣意之趣、當藩ヘハ兼テ、當島警衛トシテ人數モ出置候事故、共ニ鎭靜方等御談判被成度段、御同意ニ奉存候、此段貴報迄、此如御座候、恐々謹言。

肥後出張

役人中

正月十九日

結城下總之介様

兒玉備後之介様　長崎縣記

○長崎會議所ニ贈ル書

以飛札得貴意候、方今、　皇朝一新、拒　王命候逆徒、天誅ニ漏レ候ハ、深花公之御憂念ニ候、總シテ天草ハ逆徒巣穴之地、尤苛政之甚敷處、臣等不肖不顧微賤之身、辱奉花公之證書、戮力決進、昨十八日、天草渡海イタシ、不差置逆徒ヲ攘ヒ、姦人ヲ退ケ、一時窮民之塗炭ヲ救候ハ、聊奉報　花公之眷恩候處、奪掠等之所存ニハ毛頭無御座候、依之、此後土地鎭撫、人心折合等之所置、仰貴藩正義之御應援處ニ候、早々御人數等被差向、哀レ從來之苛政ヲ除モ、下民安堵之御處置被下置候ハヽ、無此上大慶ニ候、早々御應援之程所希候、此段以飛札如斯御坐候、恐々謹言。

正月十九日

兒玉備後之介
結城下總之介
佐々木三四郎　㭭
大山壯太郎　㭭
吉井源馬　㭭

今般、　花山院殿前三位中將家理卿、被奉　內勅、議奏傳奏御兩役衆御議論之上、豐州ヘ被遊御下向、隨テ拙者共、天草被命發途之儀、及一掃候、乍併、跡鎭撫方等之儀ハ、尊藩始薩州、藝州、大村、平戶其外勤王之輩、精々御隔意無御坐樣御熟談之上、早々御人數等御差向被下度、委細ハ讓本文、此段別紙得御意候處、如斯御坐候、早々頓首。

正月

兒玉備後之介
結城下總之介
佐々木三四郎　㭭
大山壯太郎　㭭
吉井源馬　㭭　長崎縣記

○富岡僚吏ニ贈ル書

以飛札申入候、拙者共、去ル十八日、富岡出張致候處、各一應之應接ニモ不及、致逃去、爾後五領邊相匿レ、當郡農兵ヲ集メ、交戰之用意專之由致承知候、實ハ無名之儀ニ有之候得共、好戰之樣子無是非儀ニ付、當所ヘ押寄候歟、此方ヨリ人民煩無之土地ヘ出張、交戰可致哉、戰地之儀ハ可被任望候、尤當陣屋、竝ニ近邊ヘ打捨有之候大砲一挺、ケベル十挺、藥等之軍器ハ必用ニモ可有之、其外雜具等ニ至迄、聊無違亂相渡可申候、早々決議之上、可被返答候、頓首。

正月十九日

兒玉備後之介

結城下總之介

富岡逃去

役人中

長崎縣記

○答書

御札致拜見候、然ハ去ル十八日、御出張之處、私共一應之御面會モ不致逃去、爾後五領邊迄農兵ヲ集メ、交戰之用意專之由御承知、實ハ無名之儀有之候得共、好戰之儀無是非儀ニ付、御地ヘ押寄候歟、貴所㧾方ヨリ煩無之候土地ヘ御出張、交戰可致哉、戰地之儀可相望、尤其御陣屋、竝ニ近邊ヘ打捨有之候大砲、ゲヘル藥等之軍器、必用ニモ可有之、其外雜具等ニ至ル迄、聊無御違亂御渡可被成間、決定之上、可及御報旨、御紙面之趣承知仕候、右ハ如何之御聞込ニ候哉、御地陣屋之儀ハ、平日不要害之場所ニモ有之、兼テ陣屋場所替之積ニ付、追々取片付置、然處、去ル十八日、御先觸モ無之、數十人之渡海有之旨、風聞ニ付、若哉不意之儀有之候テハ、纔之農兵、迚モ防禦モ六ケ敷、幸ヒ出立仕候儀ニ御坐候、且此度、皇朝御一新ニ付、花山院樣、九州爲御鎭撫　御內勅、豐州ヘ渡御被遊御憂念、依之、貴所㧾方人心一致、居合之基本モ相立度、諭達方トシテ御出張被成候段、委細村々ヘ御達之趣屆出、承知罷在候儀ニテ、右ニ付、好戰之存寄無之、且農兵之儀ハ、是迄附屬罷在候上、非常備之タメ召連候迄ニ御坐候、且武器之儀、好戰之存寄無御坐ニ付、御預ケ申上置候、尤右之趣ハ、早速治部右衞門方ヘ

申遣置、否之儀、猶可申越儀ト奉存候、此段御報迄、如此御坐候、以上。

正月廿日

志賀又四郎
大羽英二郎
鎌木悟三
村田覺左衛門

結城下總之介殿
兒玉備後之介殿

長崎縣記

○去秋來、豐前宇佐浪士下村次郎太、豐後佐伯浪士青木猛彦等、馬關ニ至リ、報國隊（長府藩隊名）寄食ノ筑前浪士藤村六郎、及ヒ佐田内記兵衛、小川潛藏等ト倶ニ同志ヲ募リ、花山院家理（時ニ罪アリ、河内ニ潛居ス）ヲ迎ヘ、兵ヲ擧ケ、九州舊幕領ヲ領略センコトヲ謀ル、次郎太、猛彦、及ヒ山口兵部、京ニ詣リ、澤爲量雜掌兒島備後ニ介シ、家理ニ說ク、十二月十日、備後ト倶ニ家理ヲ奉シ、周防大島郡久賀ニ至ル、革新ノ報ヲ得ルニ及ンテ、備後、再ヒ京ニ入リ、三條公ニ就テ、家理ニ征西ノ朝命ヲ下サンコトヲ請フ、許サレス、正月六日、家理ヲシテ歸京セシメ、及ヒ糾合ノ徒、亦入京從事スヘキノ諭ヲ承ク、初メ次郎太ノ京ニ赴ク、浪士宇佐野次郎、大島捨之助、島田唯作モ亦、長崎ニ赴キ器械ヲ購フ、十二月五日、浪士結城小太郎、本田忠太、松本太五郎、松浦次郎、吉見甚三郎、秋月五郎、（元中村藏之助ト稱ス、天草ノ莊屋ナリ、此者嚮導タリ）蜂須新之助、（薩藩菊池謙藏ノ從僕）等ト、天草代官所ヲ襲ヒ、數人ヲ斬リ、金八千餘圓ヲ奪ヒ、火ヲ近傍ニ放チ、長崎ニ歸リ、金ノ半ヲ結城小太郎ニ付シ、器械ノ資トシ、其半ヲ齎シ馬關ニ歸ル、正月、藤林六郎、若月隼人、（報國隊士）、及ヒ佐田内記兵衛等ヲ遣リ、十四日、四日市代官役所ヲ鹵掠ス、捨之助、唯作、新之助、及ヒ宇佐野次郎、山本土佐ハ久賀ニ赴キ、家理ヲ迎フ、家理、備後ノ報ヲ待タス、倶ニ室積ニ到ル、沿道往々暴威ヲ振フ、又游蕩ヲ爲スモノアリ、廿日、備後、京ヨリ至リ、室積ニ追及フ、兵部ヲ併セテ七人、遂ニ皆捕ヘラル、次郎太、猛彦ハ遁去ル。

花山院一件記
備後以下口書節錄

○花山院一件記ニ云、花山院家理卿ヘ、隨從ノ暴徒、速ニ御引渡之儀精々申入候得共、終ニ御承引無之、廿日七ツ時、斷然御渡不被成段御決答ニ付、不得止、御旅宿ヘ差迫候處、一同短銃ヲ搆ヘ手向候付、從是モ少々及砲發、無難暴徒召捕申候、家理卿ノ儀ハ、聊御怪我モ無之、早速御介抱申上、一應專光寺ヘ御立除、御附尾崎山城、佐々木舍人相添、岩田村鄉士國光武右衛門方ヘ御引移相濟候。

○長崎縣記ニ云、天草島之儀ニ付、兒玉備後之介、結城下總之介ヨリ、土州佐々木三四郎外二人ヘノ飛札到來、同島混雜之儀有之ニ付、薩州ヨリ兵士二小隊差遣、薩州野村宗七、土州吉井源馬、大村松田次郎兵衛、緒方久藏、地下定役久保山寬二、尾上與一郎出張。

○天草事記ニ云、正月廿三日、結城下總之介、兒玉備後之介、土地引拂出帆。

復古記　卷二十三　終

總括兼纂修
一等編修官　臣　長松　幹

校勘
一等編修官　臣　長　熒
一等掌記　臣　四屋恒之

校錄
六等掌記　臣　澤渡廣孝

繕寫
二等繕寫　臣　小川長和
二等繕寫　臣　小島　春

復古記　巻二十四

明治元年戊辰正月二十一日ニ起リ二十四日ニ至ル

○正月

二十一日、議事條規、及ヒ朝參放衙時限、休假日ヲ定ム。

一毎日巳ノ刻出勤、申ノ刻退出、
一一六ノ日休、
一議事ノ體、總裁ヲ始下參與迄、總テ出席無之向ハ不相預、次官ニテ可決事、
一毎日巳ノ半刻ヨリ、議事相始可申事、
右之通、總裁宮被　命候、仍申入候也。
正月二十一日　　博房

島津忠義家記

○鎭臺ヲ大和ニ置キ、參與久我通久ヲ以テ之ヲ督ス、十津川兵之ニ屬ス、又東園基敬中將ヲ參與ト爲ス。

大和國鎭臺、被　仰付候事。　　久我中納言

久我通久履歴書

○十津川郷兵出張事錄ニ云、久我中納言殿、今般、大和國鎭臺下向被　仰出候間、其郷兵一小隊隨從被　仰付候旨、口達有之。

○

東園中將

參與職、被　仰付候事。五辻安仲手記

○池田慶德、支族池田喜通彈正、時ニ松平氏ヲ稱ス○交代寄合、後福本藩ト爲ル、ノ爲ニ上請スル所アリ、喜通ニ命シテ入覲セシム、又小笠原貞孚、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシメ、且兵士入京ノ命ヲ請フ、是日、命シテ、兵ヲ師ニ出サシム。

播州福本ニ居住罷在候交代寄合松平彈正儀、弊家庶流ニテ、不外成家筋ニ御坐候處、此度高松彌九郎ト申者、爲使者爲差登、今度、　朝政御一新之御時節、座視難仕、御用之一端ヲモ奉蒙　仰度候處、微祿之小藩、如何共仕方無御坐、心外之至奉存候、就テハ、何卒弊藩ノ一手ニ附屬仕候テ、小身相應之御用向相勤度、此段奉願度旨申出候、右ハ如何申達候テ可然候哉、早々御沙汰奉窺候、以上。

因幡中將家來

正月二十一日　河毛文藏

○批紙

尤之筋ニ　思召候、　天氣相窺候樣被　仰出候事。池田輝知家記

○小笠原貞孚上申書

私儀、此度御變革御一新ニ付、更ニ被爲　召候ニ付、急速上京仕度志願ニテ、重臣之者差出候モ遷延仕、病氣療養、種々差加

へ候得共、兎角同扁ニテ登京難仕、病床ニ罷在、乍居御沙汰奉拜承候儀ハ、甚以恐入候間、賤臣一人、爲名代差出不苦御座候得ハ、　御用向被　仰渡被下候樣、伏テ奉願上候、病氣少々モ平愈ニ趣候得ハ、押テ登京仕候心得ニ罷在候、且時今、不容易之世態、不取敢少人數、途中迄差出申候得共、　御沙汰不被爲在候處、入京爲仕候儀モ恐懼戰慄之至、依之、御内慮奉伺候、以上。

正月十七日　　小笠原幸松丸

○本日批紙

伺之通、人數早々可差登候。　小笠原貞孚家記

○加藤明實、大河内信古、東海道鎭撫總督橋本實梁ノ令ヲ以テ、兵ヲ桑名ニ出スヲ稟ス、建部政世、征討府ノ令ニ因リ、姫路征討ニ應援スルヲ以テ、在京ノ兵ヲ撤囘セント請フ、之ヲ聽ス。

今般、蒙先鋒之　命候ニ付、能登守人數、上下百五十人、重臣之者引纒、昨廿日出陣仕候、右之段不取敢御屆申上候、以上。

加藤能登守家來
正月二十一日　　西村均兵衛

加藤明實家記

○

此度、桑名　御追討ニ付、御鎭撫使橋本少將殿、柳原侍從殿ヨリ、重臣一人、　御宿陣へ罷出候樣被　仰下、依之、去ル十九日、水口御旅館へ罷出候處、來ル廿二日迄ニ、四日市　御陣所へ相應之人數可差出候得共、日合モ無之ニ付、當月中人數召連、刑部大輔桑名御陣所へ可罷出處、病氣ニ付、名代重臣差出候樣被　仰渡、奉畏、　御請仕候、猶又桑名表ヨリ、船路ニテ漏脱之者差押爲手當、吉田領分海岸ニ人數差出候樣被　仰付、是又御請仕候趣申越候間、此段奉申上候、以上。

大河内刑部大輔家來

正月　佐野久米次

大河内信古家記

○信古家記ニ云、去ル二十日、水口驛ニテ御達ニ付、四日市驛迄人數差出候處、同所濱川御警衞被仰付之。

○

去ル十六日、　征討將軍樣御下知、松平備前守、姫路攻入候ニ付、三二郎ヨリモ有合之人數、爲加勢差出申候段申越候、猶此上形勢難計御座候間、早速人數引取、用意仕度奉存候、此段奉伺候、以上。

建部三二郎家來

正月二十一日　松本元太郎

建部揆家記

○揆家記ニ、伺之通被　仰付トアリ。

○毛利敬親、及ヒ廣封、上表シテ、復官ノ恩ヲ謝シ、藩内兵禍ノ餘ヲ承クルヲ以テ、入覲遲緩スルヲ稟ス、又其占有スル所ノ豐前石見ノ地（事ハ慶應二年ニアリ、）ヲ上ラント請フ。

誠恐誠懼、拜手稽首、謹テ奏言上候、臣敬親父子、國家内外多難之折柄、　皇威之不振ヲ憂ヒ、慨然敵愾之志ヲ抱キ、勤　王之微衷不能自已、殊ニ恐多クモ屢　明詔ヲ蒙リ、親ク　龍顏ヲ拜シ、　天杯御劍ヲモ奉頂戴、彌以感憤激勵仕、　王政萬分之一ヲ裨補奉リ、涓埃之報効ヲ圖ラント、私ニ奉期望候處、癸亥之秋、不圖モ臣敬親父子以下、入京ヲ被停、雲路杳隔、芹曝之寸誠、通スル事ヲ得ス、　叡慮之所被爲向、微力ヲ盡スト雖モ、又其成功ヲ奏スル事能ハス、加之、家臣等、臣敬親父子素志之貫徹セサルヲ悲ミ、指揮ヲ待タス過激之擧動ニ及ヒ、血ヲ　輦轂之下ニ蹀ミ、卻テ風雲之遭遇ヲ失ヒ、妖霧益蔽塞シ、攀

蹐之路絶エ、其後東兵屢四境ニ蟻集シ、士民聊守禦ヲ爲ニ至リ候モ、不得止儀トハ乍申、畢竟臣敬親父子、誠心之未孚ヨリ天下之動搖ヲ生シ、奉惱　宸襟候次第、忠愛之素心ニ出ルトイヘトモ、彼是、不行屆之至ト深奉恐懼候、爾後、益謹愼恭順、浮雲解散、　天日之餘光ヲ拜セン事、多年渴望候折柄、今般、　王政復古、維新之美化ヲ施シ賜フ首ニ當ツテ、不圖モ　明廷仁覆之　御德澤ヲ奉蒙、殊ニ宜位如元被免入洛、再造之　至恩、不奉堪感激悲泣之至、就テハ、直ニ　闕下ニ拜趨シ、可奉謝聖恩心得ニテ罷在候處、去夏以來防戰之後、農民、賦役運輸之繁苛ニ疲レ、士卒、死傷糜爛之慘毒ニ堪エス、今日ニ至リ、鎭撫其道ヲ失フ時ハ、國勢維持シ難ク、終ニハ藩屛之任ヲ失ヒ、重テ罪ヲ　闕下ニ得ン事ヲ恐ル、故ニ臣敬親父子、專ラ士民ヲ慰恤シ、兵備ヲ充實シ、私ニ　皇基ヲ奉護、素誠之萬分ヲ表セント、日夜勵精罷在候、依之、老臣出雲ヲ　闕下ニ差出、天恩之辱ヲ爲奉拜戴候、臣敬親父子、區々之愚衷、　御洞察ヲ賜リ、暫ク　闕下拜趨、緩怠之罪ヲ御海容被爲下度、不奉堪懇願之至候、臣敬親父子、誠恐誠懼、拜手稽首、謹テ奉言上候。

十二月　　長門宰相　大江敬親

毛利元德家記

○

臣敬親父子、誠恐誠懼、謹テ奉言上候、去夏、東兵俄ニ四境ニ相迫リ候砌、防戰追擊之餘、土地ヲ利シ、人民ヲ掠メ候私心毫モ無之、唯爭亂相尋、海內一致之期ニ不立至、萬民塗炭之苦ヲ受ケ、乍恐、　皇基之御安危ニモ可立至歟ト、深ク杞憂ヲ抱キ、彼是應接ニ及ヒ、互ニ解兵和議之時至リ、禍亂ヲ未萌ニ相防度奉存候處、就中石見、濱田、豐前、小倉領主之如キ、自ラ其城郭ヲ燒キ、其人民ヲ棄テ、立退相成候ニ付、其比隣之諸藩ヘ一書ヲ投シ、臣敬親父子之素意ヲ通達仕置候處、更ニ隻辭ノ報答モ無之、眼前土地之荒廢、人民之流離ヲ傍觀仕候ニ不忍候間、不取敢守兵ヲ置キ、役方ヲ遣シ、保護撫恤ヲ加ヘ置申候、今般、　御沙汰之旨奉拜戴候テ、雲路相開候上ハ、石、豐二國ハ、素ヨリ　王土ニシテ、臣敬親私有ニ無之、且幕府奉歸政權、不日復古之典ヲモ被爲擧行、速ニ名實相擧度次第ニ付、右二國之地、　朝廷ヘ奉差上、　御處分奉仰候、臣敬親父子、誠恐誠惶、

不奉堪懇願之至、稽首再拜、謹テ奏言上候。

十二月　　長門宰相　大江敬親

毛利元德家記

○元德家記ニ、正月二十一日、老臣毛利出雲ヨリ、德大寺大納言殿ヘ差出ストアリ、蓋シ其藩ヲ發セシハ、去年十二月ニアリ、而シテ途上淹滯、是ニ至テ上達セシモノナリ。

○松平武聰、德川慶喜ノ至親タルヲ以テ、書ヲ上リ、屛居シテ罪ヲ待ツヲ稟シ、且老臣ヲシテ、代リテ京ニ至ラシム。

德川慶喜反逆之趣承知仕、誠ニ以驚愕仕候、實兄之儀、於私深恐入奉存候、依之、謹愼奉待罪候、宜　御沙汰被爲下候樣奉願上候、此段奉窺候、以上。

正月　　松平右近將監

松平武脩家記

○

德川慶喜太政返上仕、恭順ヲ盡候樣被　思召、既往之罪ヲ不被爲問、寬大之御處置可被　仰付處、去ル三日以來之擧動、反狀明白ニ付、御宥恕之道モ絕果、不被爲得止、　御追討被　仰付候旨之御書付拜見、謹テ承知仕候、㢓々御寬裕之　御趣意、厚感戴仕候、私儀、小藩微力ニ候間、德川氏ニ附屬、　皇國ヘ之盡忠仕候心得ニ御座候處、不圖モ慶喜之反逆、誠ニ以驚愕之至、恐入奉存候、附テハ格別ニ奮發仕、勤　王之素志相立候樣仕度奉存候、依テ不取敢、家老上京爲仕、御用奉伺候儀ニ御座候間、可然御差圖被爲下候樣奉願上候、此段御請旁、奉申上候、以上。

正月　　松平右近將監

參與御役所御中　松平武修家記

○武聰老臣上申書

德川慶喜反逆之趣承知仕、右近將監儀、誠以驚愕、深恐入奉存候、依テ格別ニ奮發仕、皇國之御爲、微力ヲ盡シ、勤王之素志相顯シ度儀、右近將監ハ勿論、臣下迄之志願ニ御座候、然ル處、一昨秋退城、領地ヲ離レ候以來、勝手向必至困窮ニテ、方今、一藩糊口モ仕兼候次第ニ立至候故、本高相應之人數、差出候事ニモ至リ兼、何共殘念至極、且恐入奉存候、右之次第申上候テモ、聊モ因循打過候ニハ無之、心底御洞察ヲ奉願上候、付テハ少人數ニテモ差出、相應之儀爲相勤度、其旨奉伺候樣被申付罷登候處、既ニ在京之者ヨリ、人數差出方等之儀、奉伺置候趣ニ御座候間、右之御差圖可奉待候、此段奉申上候、以上。

正月　松平右近將監家老

河鰭監物

松平武修家記

○東山道鎭撫總督岩倉具定、副總督岩倉具經、京師ヲ發ス、大垣藩兵先鋒タリ、尾張、土佐二藩兵、及ヒ山科多田鄉兵、之ニ屬ス。○東山道總督府日記

○外國事務總督東久世通禧、佛、英、伊、孛、蘭、米六國公使ニ移書シ、其國人ノ兵器船艦ヲ德川慶喜、及ヒ其臣屬ニ、販賣貸與スルヲ禁ス。

以手紙致啓上候、然ハ今般、德川慶喜致反逆候ニ付、仁和寺二品親王へ征討將軍被　命、征討相成居候、右ニ付貴國政府ニ於テハ、何方ニモ偏頗無之筈ニ付、德川慶喜、又ハ其命ヲ承ル大名之兵卒ヲ運送シ、又ハ武器軍艦ヲ輸入シ、又ハ貴國之指揮官、兵卒ヲ貸ス之類、總テ彼之兵力ヲ助候儀有之間敷候間、此旨、各國臣民へ御申達被下、其政府ヨリ御取締可被下候、此段御掛合申入候、以上。

正月二十一日　東久世前少將

各國公使各通（外務省記）

○各國公使ノ囘答、原記ヲ佚ス、但局外中立ノ布告ハ、二十五日ニ在リ。

二十二日、鎭臺ヲ大阪、及ヒ兵庫ニ置キ、醍醐忠順（大納言）ヲ以テ、參與、兼内國外國事務掛ト爲シ、外國事務總督伊達宗城ト共ニ、大阪鎭臺ヲ督シ、外國事務總督東久世通禧ノ軍事參謀ヲ罷メ、兵庫鎭臺ヲ督セシム、忠順、外國事務掛ヲ辭ス。

參與職　内國事務掛　大坂鎭臺（攝、泉兼勤）　外國事務掛

右被　仰付候。（醍醐忠順家記）　醍醐大納言

○

大坂鎭臺　外國事務兼職（伊達宗德家記）　宇和島少將

○

兵庫鎭臺、被　仰付候事。（東久世通禧履歴書）　東久世前少將

○忠順家記ニ、外國事務掛ヲ辭シ、餘ハ御受トアリ、宗城ハ廿五日、參與ヨリ諸藩ヘ囘達書ニ、可爲攝州鎭臺被仰出候事、外國事務總督兼職トアリ、通禧履歴書ニハ、廿六日トシ、同日歸京トアレトモ、嵯峨實愛手記ニ、廿二日、在坂壬生、平松ヘ書狀申遣、東久世參謀被免、兵庫鎭臺被仰付ノ事、又忠順卿、宇和島、大坂鎭臺ノ事モ申遣ストアリ、然レハ大坂ニテ拜

命セシユヘ、歸京ノ日、更ニ命セラレシヲ記セシモノナルヘシ。

○大宮御所經營課金、二月ヲ限リ之ヲ出サシム。

准后新殿御造立ニ付、昨年中被　仰出候國役金不納之向ハ、來二月中限リ、金穀、御役所ヘ上納可有之候事。

正　月　藤堂高邦家記　輦下日載

○松平直克ヲ召ス。

松平大和守

被爲有御用候間、早々上京可致旨　御沙汰候事。松平直方家記

○郡山藩ヲシテ植松雅言、西洞院信愛、愛宕通旭、東園基愛、五辻安仲ノ衞兵各二人ヲ出サシム。柳澤保申家記

○德川茂承、書ヲ上リ、大阪ノ敗兵ヲ討セス、上京遲緩ノ情由ヲ陳謝シ、更ニ入京ノ命ヲ請ヒ、且藩兵ヲ以テ、東征ノ先鋒ト爲サンコトヲ請フ、是日、竝ニ之ヲ聽ス。

○二十日上申書

臣茂承、謹テ奉言上候、舊冬被爲　召候付、病中押テ國許出立、浪華迄罷出候處、再發仕候付、爲養生一ト先歸國之儀奉願候處、快氣次第、速ニ上京仕候樣蒙　御許容、難有仕合奉存候、精々療養罷在候處、豈計哉、今般之大變動ニ付テハ、侵病苦、不取敢、爲　朝廷御警衞、上京仕度旨奉伺候處、速ニ被爲聞召、難有仕合奉存候、早速上京可仕之處、坂兵叛逆之色顯然ニ付、官軍同心戮力仕、華城可乘落旨　勅命奉畏、速ニ御請奉申上候、折柄敗走坂兵潰來候付、速ニ可討取之處、放逐仕候付、奉蒙御疑惑之段、在京重臣共ヨリ注進有之、誠ニ以恐懼至極奉存候、併於臣茂承ハ、闔國從前勤　王之道ハ、精々相盡度、一

藩中末々迄、兼テ申付有之候儀ニ御座候、殊更、卽今大號令之御趣意等、深奉恐承罷在、畢竟祖先之親戚ニ御座候得共、此期ニ至リ、坂兵ニ關係可仕儀、毛頭無御座、尤、家老共ヘ　御內命之御趣意モ相畏候付、精々遂放逐候事ニ御座候、就テハ速ニ上京可然之處、右奉蒙　御嫌疑候段、誠ニ以、恐懼之限リニ御座候付、此段一應奉　奏上候、尤宿痾中、是迄上京遲滯仕候儀ハ、幾重ニモ奉蒙　御許容、何分上京之上、諸藩ト相倶ニ同心戮力仕、益勤　王之道、勉勵貫徹仕度奉存候、微衷厚　御垂憐被爲成下、何卒　御宥免之上、入京之儀偏ニ　御許容之程、伏テ奉懇願候、誠惶謹言。

正月　　紀伊中納言茂承

徳川茂承家記

○同上

臣茂承、謹テ奉言上候、今般、征東諸大將御進發之趣、奉拜承候付、不取敢、人數差出申度奉存候間、右御人數ニ被爲　召加、御先鋒被　仰付被下候ハヽ、誠以難有仕合奉存候、私儀宿痾押テ不日上京仕、伏テ可奉願候得共、先家老久野丹波守ヲ以、此段奉懇願候、誠惶謹言。

正月二十日　　紀伊中納言茂承

徳川茂承家記

○本日達書

紀伊中納言

上京之儀ニ付、伺之趣被　聞食候、速ニ上京可有之旨　御沙汰候事。（徳川茂承家記）

○同上

紀伊中納言

今度、征討使進發ニ付、爲先鋒人數指出度趣、神妙之至ニ候、願之通被　仰付候間、早々用意人數立、總テ書取、言上可有之

旨　御沙汰候事。

但、何レ兩道先鋒可被仰付候間、其旨可相心得候事。

正月

徳川茂承家記

○松平定安、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ、代リテ京ニ至ラシメ、且出雲旁近地方、檢査ノ命ヲ得ンコトヲ請フ。

出雲守儀、舊臘、三ヶ月詰御警衛被　仰付、尚去卯十二月十八日、御下問之儀被爲在候ニ付、上京可仕旨被　仰出、依之、急々上京可仕之處、所勞ニ付、爲名代、今般私先上京仕候間、御用筋奉伺度、尤出羽守儀、引續上京仕仕候、就テハ往年堺町御門、乾御門等御固蒙　仰、深畏、乍不都束相勤來候先蹤モ御坐候ヘハ、於此度モ登京之上ハ、何卒九重御近邊之内、可然御場所御警衛被　仰付被下度、兼テ奉懇願置度奉存候、且唯今ニテモ、先達テ御屆仕置候通、聊人數上京仕居候間、相應之御用等モ被　仰付候ハヽ、何時ニテモ御受可奉申上候、以上。

正月

出雲少將家來

平賀縫殿

松平定安家記

○

今般、太政御一新之折柄ニ付テハ、諸國御料所御取調等之儀、可被爲在御事ニ御坐候ハヽ、乍憚於弊藩モ、近國之所ニテ相應之御用向奉蒙　仰度、殊更近國之儀ハ、從來、土地風土仕來之次御柄モ有之、且萬端案内等、委細御用向相勤度、何卒御取調之御用等、被　仰付被下候樣奉願度奉存候、以上。

出雲少將家來

平賀縫殿

松平定安家記

○松平慶倫、再ヒ書ヲ上リ、備前藩兵、朝命ヲ齎シ來リテ、一藩ノ向背ヲ問ヒ、且其東上ヲ止ムルヲ以テ、發途ノ期ヲ愆ルヲ稟シ、入覲ノ朝命ヲ得ント請フ。

去ル二十日、池田備前守人數、美作國境迄出張候テ、　天朝思召如何被爲在候哉、國内人民恐怖動搖仕候折柄、御差圖奉伺、且御差圖無之内、備前守其旨趣明了不申聞、唯兵器ヲ以テ亂入ニ及候節ハ、家來之者共慨歎悲憤之餘、無據一戰ニ及候モ難計、御屆申上候處、書中申上候通、其節、備前守ヘ差遣候使者、既ニ數日ヲ經候得共、反告不致、愈以疑惑不少、乍去、先日京都詰家來共ヨリ御屆申上候通、既ニ先供人數、追々差登置候間、今日出足可仕、旅裝罷在候處、昨日備前守ヨリ使者差越候ニ付、家來共應接爲致候處、去ル十四日、從　朝廷、作州全國取調可申旨、長、藝、備三藩蒙仰候間、糺問罷越候旨申聞候付、兼テ無別心、　朝命遵奉可仕、微衷罷在候間、別紙一通差遣候、右備前守旨趣、始テ明了申聞候間、聊安心仕候、但　朝命之重キ、感泣ニ不堪、恐縮罷在候、愈以發足、　天機相伺、慶喜及族之罪、伏テ　闕下ニ可奉待奉存候、右使者、備前守、竝長、藝兩藩ヘ、此二通相示シ、沙汰致候迄ハ、出立抑留可致旨申聞候間、既ニ近々出立可仕旨、御屆申上置候間、出立不仕候ハテハ奉恐入候得共、一介使節モ　天使ト奉存、　王命難默止、今日出立延引仕候、　天日清明被爲在候得共、外人疑惑有之、今日ニ及候段、殘念至極奉存候、急速入京御差圖無御坐候テハ、國情愈其主ヲ疑、方向如何難計奉恐入候、此段御屆旁奉歎願候、誠恐誠恐、頓首頓首。

正月二十二日　　松平三河守

松平康倫家記

○本書モ亦、上進ノ日ヲ失ス、故ニ本日ニ收ム、別紙ハ之ヲ略ス。

○竹澤邦光、美濃笠松舊代官所、ヲ收メ、其狀ヲ上ル。

徳川慶喜、去ル十二日、江戸表へ脫歸、軍勢ヲ催候聞有之、其段美濃、飛驒へ移リ合候儀有之由ニ付テハ、片時モ早ク、濃州ヲ　朝廷之御領ト仕候儀、急務ト奉存、盡力之處、先日、飛州ヨリ先ツ手ヲ下シ候樣申上有之ニ付テ、直ニ飛州堺迄入込候得共、何分雪深ク、彼ニ少々兵備モ有之趣ニ候得ハ難入込、若入込候得ハ、飛驒、濃州笠松ト謀ヲ合セ、挾ミ打候儀難計形勢差見候ニ付、實ニ兵備少キ邦光敵地ニ陷リ候事故、重々策略ヲ廻シ、岐阜表迄相戾リ候處、濃州之儀ハ成丈平穩ニ所置致候樣、兼テ御沙汰之次第モ被爲在候ニ付、笠松陣屋へ說諭シ、土地人民返上爲致候儀良策ト相察、此節段々盡力、說諭ニ相及候處、彌承服仕、支配地村々差上度旨申出ニ相成候テ、右役人共退去ニ就テハ、　朝廷へ速ニ不被　召上テハ、人心瓦解、賊徒再起差見候ニ付、臨機之所置ヲ以、陣屋へ入込、差向候儀ハ號令鎭撫仕、擾亂ニ不相及候樣取計居申候、笠松支配地十二萬石餘、邦光之獨力ニテ、　朝廷御領ト相成候、右村々　天朝御領ト申高札ヲ爲立候間、定テ賊徒モ膽ヲ寒シ候方ト相察候、然處、人心固結候樣、鎭定方肝要ト奉存、種々號令布告有之故、人民鎭定向、見込之處ヲ以所置仕候樣、　御許容奉願上候、今日之形勢ニテハ、飛州之儀モ、定テ恐縮仕居候儀ト奉存候、是モ不日盡力、　朝廷御領ト相成候樣仕度候、先此段急飛脚ヲ以奉申上候、以上。

正月廿一日　　　　源　邦光

東山道總督府叢紙

○上達ノ日ヲ失ス、故ニ本日ニ收ム、按スルニ原書、紙尾ニ前中將岩倉氏、樣へ申上候書付、此通ニ御坐候ト署ス、蓋シ京師ノ報狀ヲ、總督府ニ出セシナラム。

○澤宣嘉、前主水正、長門ヨリ至ル。

澤前主水正殿御事、先達テ御歸洛　御召之御沙汰被爲在候由之處、今日河原町陣屋迄御歸著相成候、此段御屆申上候、以上。

正月廿二日

長門宰相内 寺内暢三

毛利元德家記

○此事、本人家記、見ル所ナシ、故ニ長門藩ノ上申書ヲ塡ス。

○備前藩兵、津山城美作、ニ至リ、其向背ヲ問フ、城主松平慶倫、及ヒ老臣等、奉命他ナキノ證書ヲ呈ス。○松平康倫家記

○米國公使館書記官アルセ、ホルトメン、書ヲ德川慶喜ニ致シ、討薩表三日ニ見ユ、ヲ得テ、之ヲ本國政府ニ報セント請フ、是日、之ヲ贈ル。

千八百六十八年第二月十四日、正月二十一日、江戸ニアル合衆國公使館於テ、

江戸ニアル御老中閣下ニ呈ス、

余聞ク、今月三日、大君ノ名代人瀧川播磨守、京都ニ出立セル時、此都及ヒ其他ノ地ニ於テ、薩摩公ノ罪條ヲ記シタル書翰ヲ持チ行キタリト、余願ハクハ、閣下、余ニ其書翰ノ寫ヲ惠ミ、余ヲシテ合衆國政府ニ報告スルヲ得セシメン事ヲ、恐惶謹言。

アルセ、ホルトメン手記

外務省記

○答書

御書狀致披見候、然ハ我本月三日、瀧川播磨守上京之節、持參イタシ候松平修理大夫罪條之儀ニ付、大君ヨリ、御門へ

御奏聞相成候ヶ條書寫、御一見被成度旨御申越之趣致承知候、則別紙寫一通差進申候、此段拙者共ヨリ御報可申進旨、小笠原壹岐守被申聞候、右可得御意如斯御坐候、以上。

正月廿二日　杉浦武三郎
糟屋筑後守
江連加賀守
川勝近江守

アルセ、ホルトメン様　外務省記

二十三日、議定嘉言親王ヲ以テ、內國事務總督ヲ兼ネ、博經親王ニ會計事務總督ヲ兼ネシメ、寺島宗則、町田久成、民部、五代友厚才助○並ニ薩摩藩士、ヲ參與、兼外國事務掛ト爲シ、宗則ヲ兵庫ニ、久成ヲ長崎ニ派遣シ、木村貞通得太郎○肥後藩士、ヲ參與、刑法事務掛ト爲ス。

○

內國事務總督、被　仰付候事。　聖護院宮

聖護院宮家記

會計事務總督、被　仰付候事。　華頂宮

華頂宮家記

○兩宮家記、被仰以下ノ字ナシ、案スルニ、議定ニ任セラレシ時ハ宸翰ニシテ、此ノ如キ書體アレトモ、事務總督ニ至リテハ宸翰ニ非ス、故ニ有栖川宮ノ書例ニ依テ之ヲ補フ。

○

各通　寺島陶藏
町田民部
五代才助
徵士、參與ヲ以テ、外國事務掛、被　仰出候事。
但、兵庫在留可致事。島津忠義家記
○久成ノ但書ハ、長崎在留可致事ニ作リ、友厚ハ但書ナシ。
○
木村得太郎
徵士、參與可爲刑法掛、被　仰出候事。木村撫松履歷書
○他例ヲ以テ之ヲ推スニ、刑法ノ下、事務ノ二字ヲ脱ス。
○比年來、人ヲ道路ニ暗殺スル者多キヲ以テ、令シテ之ヲ嚴禁ス。
近來於處々、致暗殺候內ニハ、罪狀相認、死骸ニ添有之候モ不少、何レニ陰惡陰謀等ヲ憤リ候テ之所業ニ可有之、全體不埒之者共ハ得ト吟味之上、刑典ヲ以、嚴重之御裁許被　仰付事ニ付、大政御一新之折柄、猶更御爲筋ヲ心懸、公然ト可申出處、其儀無之、私ニ致殺害候ハ、　朝廷ヲ不憚致方ニ付、右等之者有之ニ於テハ、吟味之上、屹度嚴刑ニ可被處候間、心得違無之樣可致事。中御門經之家記 戶田氏共家記
○參與、會計事務掛三岡公正、紙幣製造ノ議ヲ上ル、是日、之ヲ可シ、公正ヲシテ其事ヲ掌ラシム。
○春嶽私記ニ云、方今、大政復古之運ニ向ヒシカトモ、天下多事多難ナル上ニ、　朝廷ニ金穀乏敷、民ヲ賑シ兵ヲ出スニ由

ナキ而已ナラス、殆今日之供給ニ迫レル勢故、數々濟時之議事アレトモ、更ニ其術ヲ得サリシニ、二十一日、會計掛リ三岡八郎、日本全國之石高ニ應シ、楮幣ヲ製シ、一時之急ヲ救ヒ、十三年之後ヲ待ツテ、楮幣總テ、現金ニ復歸スヘキノ起法ヲ建議セリ、此法取捨之衆議、疑懼紛々トシテ、兩端更ニ決シ難クシテ、席ヲ竟ヘ、翌二十二日モ亦爾リ、二十三日ニ至ツテ、楮幣ヲ製造アルヘキニ決シ、其主宰全權ヲ八郎ヘ命セラレタリ。

○公正ノ建白書ハ、原記ヲ佚ス。

○池田慶德ノ請ヲ允シ、山陰道公文布達ノ事ヲ專掌セシメ、松平定安ノ分管ヲ罷ム。

事件觸達之儀ニ付、去ル十二日、諸藩御呼出之上、山陰道觸口、弊藩雲州持分ニテ相達シ候樣トノ御下知ニ御座候處、元來弊藩儀ハ、先達テ山陰道鎭撫使御出張ニ付、　王化ニ不服者有之候ハヽ、總督ノ命ヲ奉シ掃除仕候樣、　御沙汰被　仰下候次第ヲ以、既ニ雲州本末三藩之儀ハ、近々弊藩ヘ引受、　王化向背之應接、懸合ニ及候場ニ立至リ、向背何レノ道、弊藩ヨリ手ヲ下シ、一定爲致候上ハ、　勅使ヘ報命可仕候處、右等觸達之儀、因、雲竝立候テ、山陰一道ノ觸口、持分ニ相成候樣ノ御仕出シニテハ、　勅使御出張先ノ御意味ト、廟堂ノ御下知ト齟齬仕候樣ニテ、唯今弊藩ヨリ雲州向背ノ應接ニ及候ニ差響候場モ可有之哉ト奉存候ニ付、此段條理明亮、一定ノ　御沙汰相窺度奉存候、以上。

因幡中將内

正月　山田宗平

○批紙

尤之儀ニ付、雲州被免候間、以後一手ニテ達方可被致候。　池田輝知家記

○

事件觸達之儀、山陰道觸口、因州ト持分可被相達旨申付置候處、自今被免候事。　松平定安家記

雲州

○本願寺光澤、近畿ノ門徒ヲ募化セント請フ、之ヲ聽ス。

○二十二日申請書

舊冬、書取ヲ以被申上候、　御卽位料之内、御手傳獻備被致度ニ付テハ、攝州、河州、泉州、和州等ヘ、往昔調獻之砌、直諭被致候任先蹤、且方今時勢、門末心得違無之、愈人氣致調和候樣教諭旁、來ル二十五日發途、右方角ヘ新門主、質素ニ下向盡力被致度、此段被相伺候、以上。

本願寺御門跡内

正　月　　村上左源太

○本日批紙

伺之通。本願寺記

○東本願寺光勝、時ニ近江ニアリ、書ヲ上リ、滋野井公壽、其門徒兵及ヒ糧食ヲ徵求セシノ狀ヲ稟ス、令シテ、專ラ東海、北陸二道官軍ノ糧食ヲ措辦セシム。

口上覺、

去ル二十日、高宮驛通行之砌、官軍赤報隊ト申御掛札御座候ニ付、早速　朝廷御用ニ付、致通行候趣、御届之上致通行候處、其後二十二日朝、官軍滋野井殿御附屬之内山本太宰ヨリ、當隊甚少勢ニ付、門末之内ヘ精々勸諭加勢等可仕樣トノ御事ニ付、兼々建言仕置候通、僧家ノ儀、且無祿ノ儀ニ付、一民モ領シ候儀ニハ無之、就テハ門末共ヘ、報國之爲　朝廷ヘ遵奉ノ儀心得違無之樣、門主ヨリ直ニ教育、其上粮米火急ニ上納可申樣、是亦精々盡力、勸諭巡行中之折柄ニ候旨相答候處、彼御方ニモ同ク官軍之事ニ候間、萬一應機之節、粮米闕乏候ハヽ、相送リ申候樣トノ御談ニ付、右兩條如何相心得可申候哉、一應御指圖之程奉願候、以上。

東本願寺門跡使

正月　和田主殿

東本願寺記

○達書

去ル二十二日朝、官軍滋野井侍從、門末之内精々勸誘加勢可致申聞候趣ニハ候得共、於今度ハ粮米闕乏無之樣可致、兼テ御沙汰ニ相成候故、東海、北陸兩道ヘ出張、彌盡力可有之　御沙汰候事。

正月　東本願寺

參與

東本願寺記

○本願寺記ニ云、二十二日、近江國長濱ヨリ、參與御役所ヘ伺書、二十三日差出ストヽ、但シ、指令ノ日ヲ佚ス。

○池田茂政、疾ヲ以テ、其弟政實鼎五郎ヲシテ、松山征討ノ事ヲ督セシメシヲ稟シ、且備中、美作諸藩以下歸順ノ狀、及ヒ松山備中藩ノ老臣熊田短芳恰、自刄ノ事ヲ奏ス。

爲備中松山御征討、　御旗下賜候ニ付テハ、私儀病中ニ御座候得共、力疾早速出發可仕筈之處、近日別テ病威相募、起臥不任心次第ニ御座候ニ付、不本意之儀奉恐入候得共、名代トシテ一族鼎五郎ヲ以守護爲致、　御旗相進メ申候、此段御屆申上候、宜樣御執奏奉希候、以上。

正月二十一日　備前少將

池田章政家記
諸道記概略

○

備中足守 木下備中守　同 岡田 伊東播磨守
同 庭瀬 板倉攝津守　同 淺尾 蒔田相模守
同 撫川 戸川主馬助　同 高松 花房近江守
同 三須 蒔田鐐太郎

右藩共、兼テ依頼之儀申出居申候處、今般、德川慶喜反狀明白、追討被　仰出候ニ付テハ、尙又去就相尋候處、孰モ主人留守中ニ候得共、在所家來共ニ於テハ、主人從來之趣意ヲ守リ、勤　王之外無他事之旨申出候ニ付、實効之爲人數爲差出、松山征討討乎ニ相加ヘ、或ハ作州爲取締出張爲致候、此段御執奏奉希候、以上。

正月二十三日　備前少將

池田章政家記

○

備中新見 關伊勢守　同 成羽 山崎主稅助

右主人儀、留守中ニハ候得共、家來共去就相尋候處、主人從來之趣意ヲ守リ、勤　王之外無他事候旨申出候ニ付、實効之爲、證書、竝人數差出候付、松山追討手ニ相加ヘ申候、此段御屆申上候、以上。

正月　備前少將

岡山藩松山追討始末

○

作州勝山三浦備後守、兼テ依頼之儀申出居候處、今般、德川慶喜反狀明白、追討被　仰出候ニ付テハ、尙又去就相尋候處、朝命違背仕間敷旨申出候ニ付、勤　王實効之爲メ、作州取締トシテ、人數爲差出申候、此段宜樣御執奏奉希候、以上。

正月二十三日　備前少將

池田章政家記
諸道記概略

○
備中松山落去以後、同國玉島湊ヘ落入致上陸候趣相聞候ニ付、家老伊木若狹手勢引分、同所ヘ差向候處、落人百餘人、寺院町家等ニテ兵器捨置、謹愼罷在候付、一應及糺問候處、板倉伊賀家來之者ニテ、大坂ヨリ罷歸候旨申出候付、征討之儀申聞候處、重役熊田恰ト申者、殘徒助命之儀歎願申出置、自殺仕候付、首級請取、右旅宿警固爲致居申候旨、出先之者ヨリ注進申越候付、不取敢御屆申上候、此段御執奏奉希候、以上。

正月廿三日　備前少將

岡山藩松山追討始末

○本條、上申ノ日ヲ失ス、故ニ本日ニ收ム。

○織田信成、鷲尾隆聚ノ令ヲ以テ、兵ヲ慈恩寺村ニ出スヲ稟ス。

先日ヨリ和州路殘賊致通行候趣ニ付、鷲尾侍從殿ヨリ十津川野崎和平、宮本勇之助ヲ以テ、非常之節人數差出方、猶又、初瀨街道慈恩寺村ヘ見張人數差出候樣御達ニ付、去十六日ヨリ同所ヘ人數差出置申候段申越候間、此段御屆申上候、以上。

織田筑前守家來

正月二十三日　溝口勇

織田信及家記

○附錄信及家記ニ云、正月二十七日、人數引拂ノ儀申越、屆書差出ス。

○伊東長𤁋、伊東長𤁋家記京ニ至ル、松平忠和、美作勝山藩主三浦弘次、備後守○美作勝山藩主、食封二萬三千石五島盛德、飛驒守○福江藩主、食封一萬二千六百石疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。松平忠和、三浦顯次、五島盛德家記

○附錄長諳家臣上申書

播磨守儀、去十一日御屆奉申上候通、病氣未タ全快不仕候得共、舊臘十八日、更被 仰出候御旨被爲 在候ニ付、當月七日、押テ江戶表發足、明二十一日上著仕、奉伺 天氣、且乍小身相應之御用向奉伺度旨、兼テ申付越居候ニ付、先般中、在所表ヘ人數差登候樣申遣置候、然ル處、今般備中松山城御追討被 仰出、松平備前守人數差出候ニ付テハ、隣領之儀、播磨守ヨリモ人數差出候間、彼是行屆兼候得共、近日乍小人數上京爲仕候筈ニ御座候、此段御屆申上候、以上。

正月二十日

伊東播磨守家來

加藤治平

伊東長諳家記

○東海道鎭撫總督橋本實梁、四日市伊勢、ニ至ル、昨日ニアリ、松平定敎、萬之助○定敬ノ義弟、時ニ年甫テ十二、及ヒ其老臣松平某帶刀、等、總督府ニ詣リ、罪ヲ謝シ降ヲ乞フ、實梁、之ヲ納レテ法泉寺ニ幽シ、龜山伊勢、藩兵ヲシテ之ヲ監守セシム。○東海道先鋒記

○山陰道鎭撫總督西園寺公望、宮津城ニ至ル、二十一日ニアリ、其老臣沼野某半太夫、等、奉命他無キノ證書ヲ呈ス。○時ニ城主本莊宗武、父宗秀、皆江戶ニ在リ○西園寺公望家記、

○德川慶喜、大給乘謨ノ請ヲ許シテ、其陸軍總裁ヲ罷ム。○老中格、故ノ如シ、○大給恒家記

二十四日、成瀨正肥、尾張犬山、三萬五千石、竹腰正舊、龍若○美濃今尾、三萬石○竝ニ尾張藩附家老、安藤直裕、飛驒守○紀伊田邊、三萬八千八百石、水野忠幹、紀伊新宮、三萬五千石○竝ニ紀伊藩附家老、中山信徵、備中守○常陸松岡、二萬五千石○水戶藩附家老、ヲ藩屛ニ列ス。

各通　成瀨隼人正
水野大炊頭
竹腰龍若
安藤飛驒守
中山備中守

今般御一新ニ付、以來藩屏之可爲列、被　仰出候事。
但、是迄取扱來候國政向、難手放儀モ候ハヽ、從國主願立可申事。　成瀨正肥以下家記　新宮藩記

○正舊家記、二十七日トス、恐クハ藩地拜命ノ日ナルヘシ。

○尾、紀、水三藩ヘ達書

尾、紀、水三藩、附屬五家之輩、已來藩屏之可爲列、被　仰出候事。
但、是迄取扱來候國政向、難手放儀モ候ハヽ、其旨從國主願上可申事。　德川茂承家記　德川昭武家記

○參與土倉正彥ヲ以テ、軍務掛ヲ兼シム。

土倉修理助

海陸軍務掛、被　仰付候事。　土倉正彥履歷書

○特旨ヲ以テ、島津忠義、毛利敬親ニ金各二萬兩、德川德成、淺野茂長、松平茂昭、山內豐範、伊達宗德ニ各一萬五千兩ヲ賜フ。

各通　薩州
長州

思召有之、金二萬兩被下之候事。

正月　島津忠義家記 輦下日載

○

各通 尾州　藝州　越前

上州　宇和島

同上文。金一萬五千兩ニ作ル、 徳川義宜以下家記、春嶽私記

○綾小路俊實ニ命シテ、大原氏ニ復歸シ、重徳ノ嗣タラシム。

被爲　思召在候ニ付、大原家家督相續、被　仰付候事。 有栖川宮家記

綾小路前侍從

○宇和島藩ノ宜秋門、及ヒ御旗守衞ヲ罷メ、阿波藩ヲ以テ之ニ代フ。

○伊達宗徳家記ニ云、公卿御門御警衞、竝御旗御預之處、宗城下坂ニ付、依願被免候。

○

宜秋門内御警衞、被　仰付候事。

阿波少將

但、是迄宇和島ヘ被　仰付有之候間、同家ヨリ可引受候事。

正月　蜂須賀茂韶家記

阿州

○二十五日達書

宜秋門内外警衛、更ニ被　仰付候事。（蜂須賀茂韶家記）

○郡山藩ニ令シ、東園基敬ノ衛兵ヲ出サシム。（柳澤保申家記）

○是ヨリ先、清水谷公考、（侍従）金ヲ叡山ニ募ル、是日、召シテ之ヲ責メ、其罪ヲ問ハス。

清水谷侍従

去八日、山門ヘ行向、献金之儀催促候風聞有之、御改政御一新之折柄、背御趣意候ニ付、被及糺問候處、於志ハ情實ヨリ出候儀ニ候間、今度之所、以　御憐愍不被咎候、猶以來心得違無之様被　仰出候事。（有栖川宮家記）

○島津忠義、英國ノ醫生ヲ京ニ召シ、兵士ノ瘡痍ヲ治セント請フ、之ヲ聽ス。

此度戰爭ニ付、手負之者夥敷御坐候處、療醫砲瘡イマタ不精處ヨリ、追々及死亡候者不少、實ニ不被忍次第ニ御坐候、就テハ其術ヲ究、治養方穿鑿仕候折柄、兵庫滯在英國熟練之醫師頼入申度、無據爲致相談候處、人命ニ相拘候儀、不容易事候間速ニ可差出旨致許諾候ニ付、當邸ヘ召呼、療治相加度御坐候間、何卒入京御免被仰付被下候様、宜敷御執　奏奉願候、以上。

正月二十四日　薩摩少將

○批紙

願面之趣、無餘儀事故承届、往來番所ニハ可相達候得共、及遲延候ハヽ、其藩ヨリ直ニ相届、可爲致通行事。（島津忠義家記）

○織田長易、京ニ至ル、（織田長猷家記）

○中國、四國追討總督四條隆謌、姫路城ヲ檢シ、備前藩ニ命シテ、之ヲ監守セシム。

○諸道記概略ニ云、廿四日、總督姫路城巡檢爲案内、備前家老池田隼人、池田信濃守、在城ニ付出迎候事。

○

當城之儀、從　朝廷御沙汰有之迄之間、預被　仰付候、且城内ヘ預リ居候證人之儀、當藩ヘ可引渡候事。

備　前

慶應四年戊辰正月　　　總　督

諸道記概略

○浪徒ノ馬城峯ニ據ルヤ、長門藩兵、小倉ニ在ル者、撃テ之ヲ平ケ、旁近ノ諸藩ニ移檄シテ、其逋逃者ヲ逮捕セシム。

此度浮浪ノ徒、本國下ノ關ヘ潛伏シ、士民ヲ誘導シ及脫走、豐前四日市ニ於テ暴發ノ末、御許山ヘ楯籠リ、花山院家理卿ノ内命抔ト唱ヘ、浪徒ヲ募リ、士民ヲ妨ケ、且長州ノ名ヲ假リ候者モ有之哉ニ相聞、當今　王政御一新之折柄、國名ヲ穢シ候段、氣ノ毒ノ至リ不堪傍觀、依テ取糾シノ爲、各出張應接ノ上、及說諭候得共、頑兇ノ徒不致承引、彼ヨリ粗暴ノ擧動有之、不得止、頭長ノ者共召捕、誅戮シ、巢窟ヲ掃除致シ候、付テハ殘逃ノ者共、自然近隣ニ潛伏、再ビ餘燼ヲ攪シ候樣ノ儀可有之モ難計、顯然賊徒ノ儀ニ付、迅速御逮捕有之度儀ト存候、爲其以廻文得御意置候也。

長藩小倉出張

各　中

近隣諸藩

各　中

毛利元敏家記

○附録長門藩上申書

此度、浮浪之徒、私領内長門國赤間カ關ヘ潛伏、士民ヲ誘導仕、豐前ヘ脫走、同國四日市ニオイテ暴動之末、御許山ヘ楯籠、花山院御隱居家理卿之内命ト唱ヘ、黨ヲ募リ士民ヲ妨、且長州之名ヲ借候モノモ有之哉ニ相聞、當今　王政御一新之折柄、

國名ヲ被汚候段、何共氣之毒不忍坐視、依之、小倉ヘ出張之家臣共取糺之爲メ、應接及說諭候得トモ、頑兇之徒承引不仕、殊ニ粗暴之擧動ニ及ヒ候ニ付、不得止、頭長之者召捕、誅戮ヲ加ヘ、巢窟ヲ掃除仕候段申出候付、不取敢御屆仕候、此段申上候。

毛利元德家記

○元德家記、上申ノ日ヲ失ス、故ニ此ニ收ム。

○毛利元敏家記ニ云、宗家ヨリ花山院氏、周防ノ海島ニ出沒スルノ報アリ、卽チ報國隊ヲ探テ藤林六郎ノ事實ヲ得、正月十三日、之ヲ馬關ニ捕ヘ、二十日、先ツ之ヲ刑シ、其黨數人ヲ獲タリ、而テ報國隊中リ士若月隼太ナル者、モト宗家管內ノ產ナリ、遁レテ、去ル人ヲ遣テ近傍ヲ索シム、宗家ノ臣野村右仲、出テ豐前ニアリ、故ノ小倉ノ地ヲ守ル、隼太四日市ニ在ヲ聞キ、之ヲ赤間關ニ告ク、馬關市令福原和勝、其報書ヲ贈達シ、直チニ海ヲ渡リ、之ヲ右仲ニ議シ、單騎之ニ馳ス、四日市ハ小倉ヲ去ル十餘里ニ在リ、兇徒、宇佐之御許山ニ據リ、花山院氏ノ命ト唱ヘ、諸祠官、及ヒ頑民ヲ募ルニ會ス、和勝單騎ニシテ到ルヲ聞キ、隼太、及ヒ村豪佐田內記兵衞原註、內記兵衞、故佐田村ノ村長、僅ニ辨才アリ、依テ應接ヲ任ス、出テ之ニ接ス、和勝懇諭シ之ヲ罷ント欲ス、渠聽カス、和勝怒テ其名義ヲ犯スヲ責ム、內記兵衞走リ出ントス、追テ之ヲ斬ル、隼太自殺ス、又追テ其徒二人ヲ斬リ、首ヲ四日市ニ梟ス、尋テ宗家ノ兵小倉ニ在ル者一中隊ヲ以テ、其巢ヲ襲フ、兇徒狼狽シテ散去ス、事平キ、又右仲ニ議シテ、檄ヲ近隣ノ諸藩ニ投ス。

○木下俊愿家記ニ云、檄文二十日載ル、兒島備後等ノ檄文ヲ指ス、中、花山院樣之眞僞相辨兼候ニ付、御許山ヨリ二十町內外、山野續ノ小村內之義ニテ、浪士ヨリ驅使被致候樣子ニ付、右村中之者ヘ內々申含、探索之手筈仕リ、猶又居城ヨリ三里位、御許山ヨリ一里餘之領邑中迄、正月二十五日、騎士六人、步卒二十人程引卒、竊ニ出張爲致候處、其前夕ヨリ夜ニ掛、長州ヨリ兵隊差向、右浪士ト御許山上ニテ暫時銃戰、浪士盡敗衂逃散致候、依之、別段出兵等不仕鎭靜仕リ候。

○長崎縣記ニ云、正月十四日、長州脫走之浮浪士三十五六人、豐前長洲ヨリ上陸、同夜四日市ヘ亂入、陣屋、並莊屋一郎右衞門宅、西本願寺出張所一ヶ寺、百姓家三軒、町家三軒燒拂ヒ、金錢衣類盜取、陣屋詰久留米家來小者貳人討取、武器大砲貳挺

玉薬共盗取、宇佐八幡御許山へ楯籠、臺場ヲ構、同山坊中ヲ本陣ニイタシ、近邊之士民三十人計手下ニ付ケ、翌十五日中、須賀御米藏ヲ開キ、米千石計盗取、此内少ハ四日市類燒之者トモヘ分遣シ、餘ハ山上ヘ持登リ候事、

一大砲一丁、小銃三拾丁計、船ヨリ送來候由、

一右之趣、追々日田永山郡代陣屋へ相聞候付、右探索トシテ窪田治部右衞門、日田製勝組田島團次ト申モノ、十五日、四日市表へ差遣候處、同十七日、宇佐宮境内ニテ被見顯、取子ニ相成、終ニ手下ニ付ケ、山上へ被相伴候ヨシ、

窪田治部右衞門在勤已來、日田ニテ百姓町人等取交、製勝組ト唱、千三百人程、小銃隊取立、郡中大困窮之由、右田島團次ハ製勝組ニテ、日田大原八幡宮下社家田島村團次ト申モノ也、

一十八日夜、花山院樣、長州ヨリ御渡海ニ付、御迎ニ罷越候樣、豐前中津表ヨリ申來候由ニテ、賊徒共四拾人計、下山〔原文闕〕申所ヨリ、長州勢六拾人計上陸有之候付、賊從共ハ直ニ引返、右六拾人計之人數ハ、長州本藩之人數ニテ、同二十日、四日市東本願寺出張寺ヘ宿陣、夫ヨリ山上ヘ使ヲ以、賊徒頭立候モノ罷出候樣申來候ニ付、平野四郎其外兩三人下山、萩勢之宿陣ヘ罷越、一旦宇佐迄引取、

一同二十三日七時頃ヨリ、御許山山下ヨリ、大勢小銃打掛、段々押登リ、追々賊等討取ラレ、同夜五時比、山上火之手相見ヘ候、

一同日八時比、宇佐ニテ平野四郎被討取候由、

一同夜、團治ハ御許山逃下リ、翌二十四日朝、東谷之方へ落行、同二十六日、在所日田へ歸鄕イタシ候由、

一賊徒、萩勢ニテ討取、頭分四人、四日市梟首イタシ有之由、

一萩勢ハ其儘、四日市下宿陣之由、

一山上ニテ賊徒共之言ニ、花山院樣、最早當地へ御出有之ソフナモノト、度々申居候ヨシ也、

一賊徒共、中須賀弦屋七左衞門方ニテ、金千兩押テカリ受候由。

○俊愿家記、長崎縣記、日ヲ記スル同シカラス、姑ク家記ニ據ル。

○德川慶喜、再ヒ榊原政敬ヲシテ、東叡山ヲ警守セシム。榊原政敬家記

復古記　卷二十四　終

總括兼纂修
一等編修官　臣　長松幹

校勘
一等編修官　臣　長炗
一等掌記　臣　四屋恒之

校錄
六等掌記　臣　澤渡廣孝

繕寫
二等繕寫　臣　小川長和
二等繕寫　臣　小島春

復古記　卷二十五

明治元年戊辰正月二十五日ニ起リ二十六日ニ至ル

○正月

二十五日、澤宣嘉ヲ以テ、參與兼九州鎭撫總督、外國事務總督ト爲シ、澤宣嘉履歴書木戸孝允ヲ總裁局顧問ト爲シ、鷲尾隆聚、及ヒ伊藤博文、林通顯玖十郎○字和島藩士ヲ參與ト爲シ、博文ヲ以テ、外國事務掛ヲ兼ネ、兵庫ニ駐在シ、通顯ニ海陸軍務掛ヲ兼シム。

○

木戸準一郎

總裁局顧問被　仰出候事。毛利元徳家記

○

鷲尾侍從

參與職被　仰付候事。中御門經之家記五辻安仲手記

○

伊藤俊介

徴士參與ヲ以、外國事務掛被　仰出候事。

但シ、兵庫在留可致候事。毛利元徳家記

○

林玖十郎

右、今般下参與、海陸軍務掛被　仰付候事。　島津忠義家記

○宣嘉ノ宣旨、原記ヲ失ス。

○苞苴、私謁ノ禁ヲ嚴ニス。

苞苴私謁之儀ハ古賢之誡モ有之、誰彼モ所知ニ候得共、弊政御一洗之今日、從前之頽風ヲ襲ヒ、賄賂ヲ以テ、役人へ及囑託候輩於有之ハ、固不可然事ニ候、自然右樣之儀被行候テハ、自ラ依怙贔屓之取計ニモ及ヒ、無偏無黨公平之御政道ヲ破ルニモ立至リ可申、大事ニ候間、以來金幣ハ勿論、瑣屑之音物タリ共、堅可爲停止、萬一不愼法令、密々ニ餽受候者有之、其儀相知レ候ハヽ、雙方共屹度可被及　御沙汰候事。

正月　中御門經之家記

○黑田齊溥、鍋島茂實ニ命シ、舊ニ依リテ、長崎ヲ警守セシム。

各通　筑前宰相

肥前侍從

長崎表警衞、從前之通、被　仰付候事。　黑田長知家記　鍋島直大家記

○上杉齊憲、南部利剛、佐竹義堯ニ命シ、伊達慶邦ニ應援シテ、會津ヲ討セシム。

各通　米澤中將

盛岡中將

秋田中將

思召有之、別紙十七日ノ書ヲ指ス之通、仙臺中將へ被　仰付候、隨テハ、其藩ニ於テ兼テ被　聞食入候儀モ有之候ニ付、倶々勉勵

應援、可奏成功之旨　御沙汰候事。

正　月　上杉茂憲、佐竹義脩、南部利恭家記

○利恭家記、二月十六日ニ係リ、蓋シ本藩ニ達セシ日ナリ。

○

仙臺中將

今度、會津本城襲擊被　仰付候ニ付、上杉彈正大弼、佐竹右京大夫、南部美濃守等應援之儀、被　仰付候間此段相達候事。仙臺藩記

○分部光貞ノ請ヲ聽シ、在京ノ兵ヲ撤シテ、專ラ叡山旁近ヲ警守シ、小泉藩兵ニ八幡山ノ間道ヲ警守セシム、又因幡藩ニ長谷信篤ノ衞兵ヲ出サシム。○池田輝知家記

○二十四日申請書

先年來勤役罷在候雲母坂、叡山邊御警衞之儀、今度御一新ニ付、更ニ從　朝廷蒙　仰、冥加至極難有仕合奉存候、然ル處、此節朝敵之賊藩等、叡山邊潛伏、且變裝通行之儀モ難計ト深懸念仕候付テハ、是迄、右御固所ヘ差出置候人數、少勢之事故、自然不行屆之儀出來候テハ深奉恐入候間、今般猶又番所等取建、晝夜見廻リ申付度、依テ先日參著御屆申上置候人數、卽今、先、右御守衞所ヘ爲致出張、賊徒等探索、一際嚴重爲仕候テハ如何御坐候哉、乍恐謹テ奉伺候、何モ宜御取繕御執　奏奉賴上候、以上。

正月　分部若狹守

參與御役所

○本日批紙

伺之趣神妙之至ニ候、京都出張之人數ハ、勝手ニ可引拂候。 分部光謙家記

〇小泉藩へ達書

腰折地藏八幡ノ西麓、西山村ニアリ、邊、見繕警衞可有之旨　御沙汰候事。 片桐貞篤家記

〇參與大久保利通、遷都ノ議ヲ上ル。

今日ノ如キ大變態、開闢以來未曾テ聞カサル處ナリ、然ルニ尋常定格ヲ以テ、豈是ニ應セラルヘキヤ、今一戰　官軍勝利ト成リ、巨賊東走スト雖トモ、巣穴鎭定ニイタラス。各國交際永續ノ法立タス、列藩離叛之方向定ラス、人々洶々、百事紛紜トシテ、復古ノ鴻業未タ其事ニ至ラス、纔ニ其端ヲ開タルモノト言ヘシ、然シ、　朝廷上ニ於テ一時ノ勝利ヲ恃ミ、永久治安ノ思ヲナサレ候テハ、則北條ノ跡ニ足利ヲ生シ、前姦去ツテ後姦來ルノ覆轍ヲ踏セラレ候ハ必然タルヘシ、依テ、深ク　皇國ニ注目シ觸視スル所ノ形迹ニ拘ラス、廣ク宇內ヲ洞察シ給ヒ、數百年一塊シタル因循ノ腐臭ヲ一新シ、官武ノ別ヲ放棄シ、國內同心合體、一天ノ主ト申奉ルモノハ、斯ク迄有難キモノ、下蒼生トイヘルハ、斯ク迄ニ賴モシキモノト、上下一貫、天下萬人感動涕泣イタシ候程ノ御實行擧リ候事、今日急務ノ最急ナルヘシ、是迄之通リ、主上ト申奉ルモノハ、玉簾ノ內ニ在シ人間ニ替ラセ玉フ樣ニ、纔ニ限リアル公卿方ノ外、拜シ奉ルコトノデキヌヤウナル御サマニテハ、民ノ父母タル天賦ノ御職掌ニハ乖戾シタル譯ナレハ、此御根本道理、適當ノ御職掌定ツテ、初テ內國事務ノ法起ルヘシ、右ノ根本推究シテ、大變革セラルヘキハ遷都ノ典ヲ擧ケラル、ニアルヘシ、如何ントナレハ、弊習トイヘルハ理ニアラスシテ勢ニアリ、勢ハ觸視スル所ノ形迹ニ歸スヘシ、今、其形迹上ノ一二ヲ論セン、　主上ノ在ス處ヲ雲上トイヒ、公卿方ヲ雲上人ト唱ヘ、龍顏ハ拜シカタキモノト思ヒ、玉體ハ寸地ヲ踏給ハサルモノト、餘リニ推尊シ奉リテ、自ラ外ニ尊大高貴ナルモノ、ヤウニ思召サラレ、終ニ上下隔絶シテ、其形今日ノ弊習トナリシモノナリ、敬上愛下ハ人倫ノ大綱ニシテ論ナキコトナカラ、過レハ君道ヲ失ハシムルノ害アルヘシ、　仁德帝ノ時ヲ天下萬世稱贊シ奉ルハ外ナラス、卽今、外國ニ於テモ、帝王從者一二ヲ率シテ國中ヲ歩キ、萬民ヲ撫育スルハ、實ニ君道ヲ行フモノト謂ヘシ、然レハ更始一新、　王政復古ノ今日ニ當リ、本朝ノ聖

時ニ則ラセラレ、外國ノ美政ヲ歴スルノ大英斷ヲ以テ、擧ケ給フヘキハ遷都ニアルヘシ、是ヲ一新ノ機會ニシテ、易簡輕便ヲ本ニシ、數種ノ大弊ヲ拔キ、民ノ父母タルノ天賦ノ君道ヲ履行セラレ、命令一タヒ下リテ、天下慄動スル處ノ大基礎ヲ立、推及シ給フニアラサレハ、皇威ヲ海外ニ輝シ、萬國ニ御對立アラセラレ候事叶フヘカラス、遷都ノ地ハ浪華ニ如クヘカラス、暫ク行在ヲ被定、治亂ノ體ヲ一途ニ居ヘ、大ニ爲スコト有ヘシ、外國交際ノ道、富國强兵ノ術、攻守ノ大權ヲ取リ、海軍ヲ起ス等ノコトニ於テ、地形適當ナルヘシ、尚其局々ノ論アルヘケレハ贅セス、

右內國事務ノ大根本ニシテ、今日寸刻モ置クヘカラサル急務ト奉存候、此儀行レテ內政ノ軸立チ、百目ノ基本始テ擧ルヘシ、若眼前些少ノ故障ヲ顧念シ、他日ニ讓リ給ハヽ、行ハルヘキノ機ヲ失シ、　皇國ノ大事去ト云ヘシ、仰願クハ大活眼ヲ以テ一斷シテ、卒急御施行アランコトヲ千祈萬禱奉リ候死罪。

正月　　大久保一藏

春嶽私記

○春嶽私記二十五日ノ條ニ、此日、岩倉殿ヨリ御廻シニ相成、大久保一藏建白如左ト、其上申ノ日ヲ失スルヲ以テ、本日ニ收ム。

○是ヨリ先、本多忠貫、舊山田奉行、伊勢太廟及ヒ三別宮遷宮ノ經費ヲ稟請ス、是ニ至リ、再ヒ其例規ヲ陳シ、且三別宮ノ費ヲ獻セント請フ。

○十八日申請書

伊勢三別宮正遷宮、當辰年式年ニ付、御下行米、猶來巳年　兩宮正遷宮式年御下行米等、造工共ヘ取計振モ御坐候ニ付、於河內守ハ深奉心痛候、右三別宮正遷宮ハ卽今ニ差掛候儀ニ御坐候間、　御沙汰ニ寄奉伺度儀モ御坐候間、可相成儀ニ御坐候得ハ、急速之御下知被成下置度、此段奉願候、以上。

本多河内守家來
神谷平左衞門

正月十八日

本多忠貫家記

○本日申請書

三別宮正遷宮、當辰年式年ニ付、御入用方御下行米等、昨卯年四月以來伺立置候處、御下知無之故、再三其筋ヘ催促及候テモ、否之沙汰モ無之候、別テ近來　御尊崇手厚之被　仰渡モ有之、猶　兩宮正遷宮ハ、來巳年式年ニ付、御下行米之取計振モ御坐候ニ付、於河内守ハ深恐入奉心痛候、陳ル處、今般不量之御形勢、何共恐入奉驚入候、不取敢、　兩宮御守衞之儀ハ增人數等仕、神領動搖無之樣取締罷在候得共、右三別宮之儀ハ、卽今ニ差掛リ候儀ニ御坐候間、急速之御下知被成下置度、自然遲滯仕候テハ、　神慮之程モ奉恐入候、且人民共浮說之取沙汰等仕候テハ、河内守全之不行屆共相成、偏ニ奉心痛候、可相成御儀ニ御坐候得ハ、　三別宮之御入用筋、凡見込金五千兩餘、御下行米六百五十石一斗餘、右河内守爲　御國恩御用相勤度、乍微力精忠奉盡力候間、此旨謹テ奉懇願候、以上。

本多河内守家來
清水宗十郎

正月廿五日

○二十八日批紙

御警衞之儀ハ寬之通、　爲御國恩御用相勤度、盡力之段神妙ニ被思召候、尤神宮ニ於テハ格別之御儀ニ付、御入用筋ハ　朝廷御沙汰ニ被仰出候、乍去、三別宮之儀ハ、急速調達無之テハ差支之筋モ有之候得ハ、當分其方御取替申上、追テ被返下候間、夫々注進可有之候事。

本多忠貫家記

○本日申請書

御樋代木、

尾張領分木曾山ヨリ被下置候例ニテ、尾張家老中ヘ被　仰渡次第、御造宮役人共山入、御用木伐候事、右先格式例ニ御坐候間、　御沙汰被成下候哉、此段奉伺上候、以上。

本多河内守家來

正月廿五日

清水宗十郎

○二月六日批紙

尾州ヘ御達相成候間、可相心得候事。本多忠貫家記

○二月五日尾張藩ヘ達書

徳川元千代

別紙申請書ヲ指ス、之通願出候間、先規ノ如ク可致商量候事。

二月　徳川義宜家記

○本日申請書

兩宮

地曳祭料　御萱料

當辰年式例御下行

內宮　千七百十五石

外宮　千六百四十一石

右、河內守證文ヲ以、大坂御金藏ニテ請取候例、

御神寶、御衣、御裝束、御金物等之中、借米三千石御渡可相成例、

右、河內守證文ヲ以、大坂御金藏ニテ請取候例、

右之通式例ニ御坐候處、近來諸價沸騰ニ付、作方共ヨリ增御下行願出候間、例外ニ相當之勘辨可仕哉、奉伺上候、以上。

本多河内守家來

正月廿五日　清水宗十郎

本多忠貫家記

○忠貫家記ニ云、右伺書ハ御附紙不相成候哉、留記無之候。

○徳川徳成、柳生俊益、京ニ至ル、（徳川義宜、柳生俊郎家記）黒田齊溥、疾ヲ以テ、其子慶賛（下野守）ヲシテ入覲セシメントスルヲ稟ス。

追々被仰出之趣奉拜承候上ハ、迅速上京可仕之處、持病之疝邪不相勝、何分指向旅行難仕候、依之、忰下野守儀、追々上京爲仕儀ニ御坐候、此段御屆申上候、以上。

正月　黒田美濃守

黒田長知家記

○徳川慶喜、江戸ノ諸郭門ヲ開キ、之ヲ各國書記官ニ報ス。

以手紙致啓上候、然ハ先般別紙之通、（十二日ニ見ユ）拙者共ヨリ各國書記官ヘ申遣置候處、別紙御門御門、此程ヨリ御開相成、出入共平常之通ニ有之候間、乍御手數、貴樣於方御引合序、其段前文書記官ヘ御申入有之候樣致度、右可得御意如斯御座候、以上。

正月二十五日

杉浦武三郎

平岡和泉守

菊地丹後守

江連加賀守

水野若狹守　拙
依田伊勢守　拙　外務省記

○本書、所謂別紙原記ヲ失フ。

○佛、英、伊、孛、蘭、米六國公使、其國人ニ局外中立ヲ布告ス。

公告、

下名ノ拙者、職務ヲ以テ、當國ニ於テ天皇陛下ト大君ノ間ニ戰端ヲ開キタルコトヲ告ケ、而テ右雙方ノ戰爭ニ付、總テ英國ノ臣民ハ、嚴密公平ナル局外中立ヲ遵守スヘキ旨ヲ告ケンカ爲、爰ニ日本在駐英國皇帝陛下ノ特命全權公使ナル下名、總テ英國皇帝陛下ノ臣民ニ、右雙方ノ内何レカニ對シテ戰爭ニ加ハリ、或ハ其一方ノ爲、或ハ其一方ニ對シテ戰爭センカ爲、或人ヲ輔佐シ、或ハ從悪スルコトヲ戒ム、而シテ内外ノ戰爭ニ於テ、局外中立ヲ固守センカ爲ニ議定アリシ、英國ノ律法、即右ニ關係シタル萬國公法ニ背犯セサランコトヲ要ス、下名爰ニ英國皇帝陛下ノ臣民ニ告諭センカ爲、英國皇帝陛下第三世ヂョーヂ」ノ治世、第五十九年ニ決定アリテ、通例「ホレイン、インリストメント、アクト」ト名クル律法、即左之三章ヲ爰ニ布告シ、以テ英國皇帝陛下ノ臣民ニ、總テ下條ノ趣ヲ命ス、即若人アリテ局外中立ノ權限、又ハ交戰ノ律例ニ關スル萬國公法ヲ違背スルコトアラハ、譬ヘハ雙方ノ内、何レカノ軍籍ニ入リ、或ハ雙方ノ内亂、孰カニ屬スル船、或ハ之ニ雇ハレタル船、若クハ軍艦、又ハ運送船ノ内ニ乘組ミ、或ハ自ラ其役ニ雇ハレ、或ハ他人ヲシテ爾ク爲サシメ、或ハ爲サシメントシ、或ハ雙方ノ内何レカニ由テ軍艦、或ハ運送船トシテ用ヰラルベキ船舶、若クハ軍艦ヲ戰備シ、或ハ艤裝シ、或ハ雙方ノ内一方ニ士官、兵卒、信書、兵器、彈藥、兵粮等ヲ運送シ、其使用ニ供シ、或ハ萬國公法、或ハ萬國輓近ノ律例ニ因テ、戰時ノ禁制物ト考定アル物品ヲ運送スルコト等、是ナリ、總テ此等ノ禁ヲ犯セル英國臣民ハ、皆前件國律、或ハ萬國公法ニ由テ、定立アル種々ノ罰則及ヒ刑律ヲ受クベキ者ニシテ、併テ英國皇帝陛下ノ保護、及ヒ大不列顛國ト日本國トノ間ニ取締ヒタル條約中ニ掲ル權利、及ヒ其特典ヲ要スルノ權ヲ失ナフ者ト爲スベシ。

紀元一千八百六十八年第二月十八日兵庫ニ於テ手記ス

日本在駐英國皇帝陛下ノ特命全權公使

ハルリー、エス、パークス手記

英國皇帝陛下ノ免許ナク、陛下ノ臣民、外國ノ用役ニ服キ、及ヒ陛下ノ所轄内ニテ、戰爭ノ目的ヲ以テ、諸船ヲ艤装スルコトヲ禁止スル議定ノ拔萃。（一千八百十九年七月三日）

第二章

爰ニ又、左ノ趣ヲ議定ス、若シ英國皇帝陛下及ヒ其相續後嗣ノ本國出生ノ臣民、英國皇帝陛下及ヒ其相續後嗣ノ手記、又ハ議院ノ決議、或ハ皇帝陛下及ヒ其相續後嗣ノ布告ニ由テ、前以テ皇帝陛下及ヒ、其相續後嗣ノ免狀ヲ得ルコトナク、或ハ戰爭ノ委任ヲ受ケ、或ハ之ヲ受ケンコトヲ約シ、或ハ又有任士官、或ハ無任士官トシテ軍役ニ服キ、或ハ自ラ兵卒トナッテ入籍シ、或ハ自ラ入籍センコトヲ約シ、或ハ士官兵卒、或ハ他ノ軍任ニ付、或ハ外國ノ君主、又ハ外國ノ國外有權者、又ハ外國ノ殖民、或ハ地外國ノ州郡、或ハ外國州郡ノ一部、或ハ外國人民ノ一部、或ハ或外國ノ國外殖民地、外國ノ州郡、或ハ外國州郡ノ一部、或ハ外國人民ノ一部、或ハ或外國國外ノ殖民地、外國ノ州郡、或ハ或外國州郡ノ一部、或ハ外國人民ノ一部ノ内、或ハ其上ニ政權ヲ柄リ、或ハ之ヲ柄ラントスル或人ノ使役ニ服キ、或ハ其支配ヲ受ケ、或ハ其輔助ヲ與フルコトニ於テ、若英國皇帝陛下ノ本國出生ノ臣民、前件ノ免許ナク、士官トナリテ委任命令ヲ受ケ、或ハ之ヲ受ケンコトヲ約シ、或ハ水夫海兵トシテ自ラ使役セラレンカ爲入籍シ、或ハ外國國外ノ君主、外國ノ有權者、外國ノ殖民地、外國ノ州郡、或ハ外國州郡ノ一部、或ハ外國國外ノ殖民地。外國ノ州郡、或ハ外國ノ州郡ノ一部、或ハ外國人民ノ一部ノ内ニ、或ハ其上ニ政權ヲ柄リ、或ハ之ヲ柄ラントスル或人ノ使役ニ服キ、或ハ其爲ニ服役シ、或ハ其配下、或ハ其輔佐ニ用ヒラレ、或ハ戰爭ノ目的ニ用ヒンカ爲艤装スル諸船舶ニ乘組ム者、又ハ若英國皇帝陛下ノ本國出生ノ臣民、前件ノ免許ナク、自ラ或外國ノ君主、外國ノ政府、外國ノ有權者、外國ノ殖民地、外國ノ州郡、或ハ其州郡ノ一部、或其人民ノ一部、或ハ外國國外ノ殖民

地、外國ノ州郡、或ハ其州郡ノ一部、或ハ其人民一部ノ內ニ、或ハ其上ニ政權ヲ柄リ、或ハ之ヲ柄ラントスル人等ノ使役ニ服キ、或ハ其爲ニ服役シ、或ハ其配下、或ハ其輔任ニテ士官兵卒、或ハ其他ノ軍任、或ハ士官水夫海兵トシテ、自ラ海陸ノ戰爭ニ用ヰラレン主意ヲ以テ、或ル外國國外ノ殖民地、外國ノ州郡、或ハ其州郡ノ一部、或ハ海外ノ地方ニ行キ、或ハ之ニ行クコトヲ得シ、或ハ前件ノ諸船ヲ送リ出ス者アラハ、假令前件何レノ場合ニ於テモ、入籍ノ報酬ヲ同人ニ拂ヒ、或ハ之ヲ受取リシコト非スト雖モ、其ニ拘ハラス、若又大不列顛及ヒ愛爾蘭ノ合衆王國、或ハ其他皇帝陛下所轄タル何レノ部分、或ハ皇帝陛下ニ屬スル何ナル國、殖民地、開拓地、島及ヒ彼ニ屬スル場所ノ內ニテ、外國ノ君主、外國ノ政府、外國ノ有權者、外國ノ殖民地、外國ノ州郡、或ハ其州郡ノ一部、或ハ其人民一部ノ爲、或ハ其配下、或ハ其輔助ヲ以テ、或ハ前件ノ如ク政權ヲ柄リ、或ハ之ヲ柄ラントスル或人ノ爲、或其配下、或ハ其輔助ニ因テ、海陸ノ論ナク、前件ノ如キ使役職務ニ於テ、士官、兵卒、水夫、海兵トシテ或人ヲ雇入、或ハ入籍セシメ、或ハ之ヲ雇入レ、或之ヲ入籍セシメント企ル者、或ハ前件ノ如ク入籍セラレ、或ハ雇入ラレン目的ニテ、皇帝陛下所轄ノ或部分ヲ去リ、或ハ去ルコトヲ約シ、或ハ其所轄ヨリ出帆セントスル者アラハ、事實其入籍ノ報酬ヲ請取ル受取ラサルヲ問ハス總テ此等ノ件々ヲ犯ス者ハ、總テ之ヲ罪科ト見做シ、其告狀ニ由テ、其罪ヲ證セハ、贖金及ヒ禁錮ヲ以テ之ヲ罰シ、或ハ右犯罪ヲ證シタル裁判所ノ量見ニ任セ、右ノ內一則ヲ以テ之ヲ罰スヘキモノナリ、

第七條

合衆王國ノ或ル部分、或ハ海外ニアル皇帝陛下ノ領地ノ或ル部分ニ住スル或ル人民、陛下ノ免許ナクシテ、或ル外國、其殖民地、其州、或ハ或ル州、或ハ人民ノ或ル部分ニ於テ、或ハ或ル州郡ノ人民、或ハ政府ノ或ル權ヲ專ニスル或ル人々ニ使役セラレンカ爲、又ハ船舶ヲ裝ヒ、或ハ之ニ軍備ヲナシ、又ハ之ヲ務メ、或ハ之ヲ助ケ、或ハ之ニ關係スル者、或ル外國ノ諸侯、國君主、皇帝陛下ヨリ合衆王國、或ハ陛下ノ或ル領地、或ハ陛下從屬ノ或ル殖民地、殖民領知島、或ハ場所ニ於テ上ニ陳述シタル如ク使役セラレンカ爲、皇帝陛下ヨリ別段免許ヲ受サレハ、或ル諸侯國、或ハ君主、或ハ其幕下ヘ對シ、或ハ或ル殖民地州或ハ或ル州、或ハ國ノ部分ニ於テ、政府ノ權ヲ取リ行フ人ヘ對シ、或ハ或ル外國ノ殖民地、州、或ハ或ル州、或ハ國ノ

住民ヘ對シ敵對ヲナサンカ爲、運送船、或ハ貯船トシテ或ル船舶ヲ裝ヒ、又ハ之ニ軍裝ヲナシ、或ハ軍裝センコトヲ務メ、或ハ軍裝セシメ、或ハ其不正ヲ知リナカラ軍裝ヲ助ケ、或ハ之ニ關係スル者ハ、過失ノ罪アル者ト見做シ、其罪證ヲ示シ、之ヲ言ヒ渡スノ後、罰金及ヒ禁錮ニ所置スルカ、或ハ又之ヲ決裁スヘキ法院ノ裁判ニヨリ、命スル處ノ罪科ノ何レカニテ之ヲ罰スヘシ、而シテ右ノ如キ船舶ハ、器械、船具、家財並ニ右船般中、或ハ之ニ附屬スル諸物品、武器、軍備及ヒ貯品等、盡ク沒收セラルヘシ、而シテ成規通、則、貿易及ヒ航海ノ法則ニヨリ任セラレタル皇帝陛下ノ稅關、及ヒ陛下ノ海軍士官ハ、上ニ述タル如キ船舶ヲ沒收スルノ權アルヘシ、而シテ陛下ノ稅關ノ士官、及皇帝陛下海軍ノ士官等、各、稅關ノ法、或ハ貿易、及ヒ航海ノ法ニヨリ、右ノ如キ船舶ヲ取押フヘキ權ヲ特有スルノ士官ハ、之ヲ取押ユルノ權ヲ有スヘシ、而シテ右ノ如キ船舶ハ、器械、船具、家財並ニ右船舶ニ附屬スル諸物品、武器、軍備及ヒ貯品等、盡ク稅關保護ノ爲ニ設ケタル法則、或ハ貿易及ヒ航海ノ法律ヲ破リタルヲ以テ、右船舶ヲ所置スルト同一ノ方法、及ヒ同一ノ法院ニ於テ、之ヲ所分スヘキナリ、

第八條

若、大不列顚及愛倫ノ合衆王國、又ハ海外ニ在ル英國皇帝陛下ノ領地内ニ於テ、前以格段英國皇帝陛下之免許免狀ヲ不得シテ、船ニ大砲ノ數ヲ增スカ、又ハ備フル處ノ大砲ヲ他ノ大砲ト取リ替ルカ、又ハ軍備ヲ增スカ、又ハ合衆王國内、或ハ英國皇帝陛下之領地内ニ到著セシ時、已ニ外國國君、或ハ外國政府ノ命ヲ奉シ、又ハ殖民地州郡、或ハ其一部、或ハ其一部分ニ於テ政府ノ權ヲ執リ行フ人、又ハ人々ノ命令ヲ受ル者、又ハ外國國君、或ハ外國政府之配下ニ屬ル人民、又ハ政府ノ權ヲ執行スル人、或ハ人々ノ管屬タル殖民地州郡、或ハ其一部分住スル人ニ屬スル人民之指圖ヲ受ル船舶、軍艦、巡洋船、其他軍備アル船舶ノ軍勢ヲ增加シ、若シクハ之ヲ知リナカラ之ニ關係スル人、或ハ人々ハ犯法ノ罪アル者ト見做シ、而テ知告ニ依リ有罪ニ決スレハ、罰金並ニ禁錮ヲ以テ、之ヲ罰スヘシ、或右犯人ヲ有罪ト決シタル裁判所之裁量ニ依リ、罰金或ハ禁錮ノ一ヲ以テ罰スヘキヲ又決定ス。　外務省記

○

普告、

日本國中ニテ、　御門陛下ト大君ノ間ニ戰鬪ノ起レル趣、公報アリシニ因リ、米國臣民等、偏頗ナキ中立ヲ固守スル法ヲ設ケン事ヲ欲シ、其民等ニ普告スルハ、軍艦、或ハ兵糧、運送船ヲ賣却シ、或ハ賃貸シ、兵器彈藥ヲ賣リ、兵卒、兵士、軍務ニ關ル書狀、又ハ兵士ヲ運輸スル等、都テ戰爭ニ關スル事ヲ、右對敵雙方ノ孰レヘニテモ務ムルヲ、此戰鬪ニ乘シ志スノ所業ハ、萬國公法ニ基キ、右中立ノ法ヲ破ルモノトシ、仇敵ノ所爲トスヘシ、

右雙方ノ内、一方ニ奉職スルモノハ、軍律ニ服從スヘシ、又中立ヲ破ル所ノ船、並ニ其他運送ヲ助クルモノハ、取押ヘ入牢スヘシ、且右ノ法ハ、中立ノ人ニ屬スル荷物迄押及ホスヘシ、

右中立ヲ破ルモノハ、人、船共、米國政府ノ保護ヲ失ヒ、米國ト日本間ノ條約ニテ許サレアル正理ヲ失フヘシ。

在日本米國ノミニストルレシデント

ファンファルケンボルク

千八百六十八年第二月十八日於兵庫　外務省記

○

同上文。米國臣民ヲ阿蘭臣民ニ作リ、モノハ、人、船共、米國ノ八字ヲ都テノ阿蘭人ハ共ニ作ル、

日本ニ在ル阿蘭コンシュルゼネラール兼ボリチーキアゲント

ドテクラーフファンホルスブルック

千八百六十八年第二月十八日於兵庫　外務省記

○

今度、天皇陛下、大君ノ間兵端ヲ開キ、既ニ戰爭相起リシニヨリ、日本ニ在留スル孛漏生國王陛下ノ事務司配下ノ人民ヘ、

左ノヶ條ヲ布告ス、

我國ノ法律ニ於テ雙方ニ偏倚セス、戰爭中ハ雙方ノ請ニ應シ、軍艦ヲ商ヒ、及ヒ我國商船ニテ、兵士、書翰、軍中禁制ノ器械ヲ運送シ、雙方ニ助勢スルコトヲ禁ス、屬國セルメン國人民モ、同一ニ此令ヲ奉スヘシ、假令我國政府ト日本政府ト結ヒシ條約中、無禁ノ品ト雖モ、此規定ヲ犯シ、此示告ノ旨ヲ守ラス、禁制ノ武器等ヲ輸入シ、且密商スル者アラハ、其人ヲ糺明シ、軍中規則ノ通リ嚴罰ニ處シ、罰トシテ其船ヲ孛漏生國政府ヘ取上ヘシ。

於兵庫神戸一千八百六十八年第二月十八日　孛漏生事務司ブラン　長崎縣記

○外務省記中、當時神奈川奉行書東ニ云、各國布告書大同小異、英國ハ規則書相添、長文ニテ飜譯出來兼、孛國ハ獨逸文故、發輝ト難相分ト、今載スル所、英國ハ、後外務省ニ於テ稲垣某等之ヲ飜譯シ、子安宗峻校正スルモノニ係ル、孛國ハ長崎縣記ニ據ル、佛、伊二國ハ布告ノ原文ヲ佚ス。

二十六日、大村純熙ニ命シ、九州鎭撫總督ト謀リ、長崎ヲ警守セシム。

長崎表取締被　仰付候間、九州鎭撫總督申談、取締方行届候樣盡力可致候事。

大村丹後守

正月　大村純熙家記

○是ヨリ先、高松實村、左衛門權佐○保實ノ子、私ニ京師ヲ去リ、本月十七日ニアリ、兵ヲ甲、信ノ間ニ募リ、舊幕府ノ領地ヲ收メ諸藩ノ向背ヲ問フ、父保實、其遁走ヲ稟ス、是日、保實ニ命シテ、之ヲ召還ス。高松保實家記

○達書、上申書、皆原記ヲ失ス。

○木下利恭、京ニ至ル、木下利恭家記 青山忠敏、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム、青山忠誠家記 織田長

易。大和鎮臺ヲ置クヲ以テ、其事ニ從ハンコトヲ請フ。

今般、大和國爲鎮臺久我中納言爲御下向之旨、御達之趣承知仕候、右ハ住國之儀ニ付、小家ニハ御座候得共、相應之御用被仰付被下候樣、攝津守申付候、此段奉願候、以上。

正月二十六日

織田攝津守家來
坂井權右衛門

織田長猷家記

○徳川慶喜ノ江戸ニ歸ルヤ、譜第諸藩及ヒ其臣僚、或ハ防守ノ說ヲ持シ或ハ恭順ノ事ヲ說キ議論紛作統歸スル所ナシ、前橋藩、竊ニ同志者ト議シ、慶喜ヲシテ謝罪セシメ、以テ社稷ヲ存センコトヲ謀ル、岩倉具視之ヲ聞キ、意ヲ松平慶永ニ授ケ、松平直克等ヲ勸勵シテ、其實ヲ擧ケシム、慶永及ヒ中根師質、乃チ書ヲ直克ト其老臣某トニ致シ、謝罪ノ事ヲ陳論ス。

○春嶽私記ニ云、二十三日、岩倉殿御內談之儀有之、其後雪江ヘ御申聞有之候ハ、卿之御家從、去ル十六日江戸ヲ發足シ、昨日歸京ニテ申出候趣ハ、於江戸表、前橋藩家老山田太郎右衛門、豆州韮山縣附屬柏木總藏申合、大ニ奮發シ、徳川氏之廢立血食ヲ謀リ、麾下モ七分ハ及荷擔候得共、前橋侯之方向定リ兼、其事難成趣ナリ、就テハ、公ニテ此處ヲ御周旋アツテ、謝罪之道相立候得ハ、社稷之保存ニ於テハ、岩倉殿死ヲ誓ツテ御請合候間、生靈之爲、宗家之爲、此御周旋ハ公ニ限リ候ニ付、其段公ヘ御申上之處、公ハ雪江ヘ御談ニ相成候樣トノ御挨拶ニ付、御示談有之旨ニ付、雪江及御答候ハ、不容易大事候得ハ、主人存寄モ篤ト相伺ヒ、熟考可仕旨申上候處、兎角早々決定無之テハ所詮無之、薩ハ國ヲ護ル兵ヲ除テ、三萬ノ兵アリ、長ハ四十八隊アリ、是ヲ以テ關東ヘ海陸ヨリ討入ル時ハ、大亂ハ不及申、死傷無數ナルヘケレハ、此急ヲ救ハヽ、大功此ニ過ル者

ナシ、井伊、藤堂抔モ相談可然ト、大ニ御勸誘有之候ニ付、何分篤ト勘考可仕ト申上タリ、御歸邸之上、執政初御呼出ニテ、右件御評議ニ相成處御調和之道モ相開ラケ可申、屈竟之好機會候得ハ、是非御周旋可被爲在候儀ニ候得共、衆之力、於關東行ハレ安ク可有之、且岩倉卿御譜代衆へ相談可然トノ口氣モ有之候得ハ、旁在京五侯御談ニ可相成トノ御決評ニテ、猶又、明朝、雪江、岩倉殿へ參上、今一應篤ト相伺ヒ候樣ニト被命タリ、岩倉殿家從、去ル十六日迄江戸事情探索書、

一正月十一日夜半、慶喜濱殿へ著、十二日五半時頃、會、桑、板倉伊賀、酒井雅樂等ト共ニ入城、

一會、桑藩ハ十五日ニ至ル迄、尙戰爭說ヲ確守シテ不動事、

一十五日、開成所ヲ局トシテ關東士民ニ令ヲ下シ、急務筋之見込聞候ニ付、建白之徒、市ヲ成シ候由、

一紀州藩モ同所ニオイテ、同局ヲ開キ、同樣之次第、大ニ德ヲ助ケ、力ヲ盡シ候、

一是迄勤　王ニモナク、又一概ニ佐幕ニモナク、只々　皇國ノ委靡シテ振ハサルヲ憤リ、一豪傑ヲ得テ、共ニ國家之事ヲ成サントセシヲ以テ、慶喜ノ利口ニ惑溺シ居ル者ハ、今般、慶喜浪華脫走ニヨッテ、彼ノ利口ニ欺カレシヲ憤リ、　朝廷ノ御處置ヲ伺居候徒モ多ク有之事、

一前橋松平大和守等、慶喜、會、桑等之失策ヲ嗳（恐クハ憂ノ誤）ヒ、謝罪ニヨリ、德川家之血食ヲ謀候、前橋一藩ハ決議之模樣ナレトモ、十五日マテニハ、イマタ德川一同之大議論ニハ不渡、何レ十六七日中ニハ、謝罪之說ヲ於城中發スヘシト云、

一卽今、德川一家中ノ情態ニテハ、恐ク十方ニクレ、未タ今日迄防戰ノ策モ不立候得共、　朝廷ヨリ嚴重之　御沙汰有之候ハヽ、皆己之死、又ハ飢餓ヲ憂ルヨリシテ、一和スルノ機モ相見へ候、何分、關東人ハ名分ハ更ニ不辨候間、只々寛大ヲ以駕馭スレハ、終ニハ前橋等之謝罪說ト、會、桑之戰爭說ト必二タ分レニナリ、刄ヲ用ヰスシテ落著スヘキ歟、

一今般、御國內之發動ニ付テハ、蝦夷地之支配人、金ニツマリ、今年夏迄、右之金出來セスハ、必定魯夷之ニ代ツテ蝦夷人ヲ撫育スヘシ、左スレハ、蝦夷ハ全ク彼レニ歸スヘシト、大ニ憂ヘテ蝦夷ノ支配人四十餘人馬喰町ニ止宿シ、日々評議之由、

二十四日、雪江、岩倉殿ヘ參邸拜謁之上、昨日御內談有之候一件、於江戸表御家從探索之出處、相伺候處、舊幕ニテ周旋方川村惠十郞ヨリ原註、惠十郞ハ雪江モ知己ニテ頗有志也、傳聞之由、慶喜東歸ニ付テハ、麾下一向ニ落合不申、不服甚敷之由、 和宮樣ヨリ御願之御直書、卿之手裏ニ有之、何時ニテモ公ヘハ可有呈覽トノ事也、昭德院樣御遺言ニテ、橋公ハ誠ニ御好無之御承統有之候テハ、奪ハレタル如ク思召トノ御儀モ有之、原註、私ニ云、御遺言云々不審ナリ、何分御內々之御手續ハ出來之事候得ハ、是非表向之御周旋有之樣被成度ト、斷テ御申聞有之ニ付、如此御時態、江戸表モ混雜之折柄候得ハ、乍不及雪江罷下リ盡力可仕ト申上候處、敵地ヘ無左ト踏込候ハ無謀ノ至リ、決テ不可然候間、書面ヲ以申越候樣トノ事ニ付、左候テハ、往返手間取有之候得ハ、其內御出兵ニ相成候テハ所詮無之ト申上候得ハ、此手段ニ取懸リ候得ハ、其一左右有之迄ハ、大兵發向無樣心得居可申候間、成丈ケ早使ニテ指越候樣御申聞有之ニ付、其段直ニ官代ヘ出勤、公ヘ申上之、此夜公ヨリ前橋侯ヘ之御直書、御認ニ相成、如左、

密翰致拜啓候云々、此度宗家傾頽之一條、御同然恐縮血淚之至、 朝廷之 御赫怒モ御當然之御次第ニ御座候故、其際ニオイテ可奉救援道路モ無之、當惑心痛、而已ナラス、在 廷之處、昨日岩倉前中將ヨリ內談有之候ハ、中將家來、昨日關東ヨリ罷歸リ申達候趣ニテハ、錦地モ殊之外御混亂ニテ、旗本モ落合不申候、仍之、貴兄大ニ御奮發ニテ、廢立謝罪之御主張有之由、方今爲御征討、遂ニ大兵被指向候御手配有之候得共、自然右等之正議行ハレ、謝罪之道相立候得ハ、國內ハ不及兵亂、生民之塗炭モ無之、 朝廷ヘ對サセラレ大忠盛勳無此上候得ハ、何卒、愈御主張ニテ謝罪之筋相立候樣御盡力之程、拙者ヨリ及陳啓、御示合申樣ニハ相成間敷哉トノ事ニ候、尤何トカ御謝罪之道相立候樣、內國之動亂相止候樣致度ト申ハ、此表之輿論ニテ、於拙子モ元ヨリ同論、別テ慶喜公ニハ無比之御懇命モ相蒙候事故、宗家ト申、御一身之儀モ、晝夜按勞致居候得共、慭成儀及發言候テハ、却テ御爲ニ不相成時勢ニ付、胸ヲサスリ默止罷在候處、中將ヨリ內談之趣ニテハ、先ツ 朝廷ヨリ無事ヲ御好之御淵底ト被奉察候得ハ、此秋ニ當リ貴兄ニモ一層御憤激有之、爲 皇國、爲宗家、爲生民、干戈ヲ止メ、社稷ヲ被存候樣御盡力之儀、於拙子モ御依賴懇禱致候、此時ニオイテ、慶喜公御憤懣之御胸中ハ萬々拜察罷在候得共、何分形迹上之御過失、今更可奉彌縫樣無之形勢候得ハ、唯今ト相成候テハ、乍恐何事モ御一身ニ御引受被遊候

テ、天下生靈之爲ニ、御謝罪之御道ヲ被爲立候樣所仰冀御座候、方今、天下之治亂ハ唯御一心之御所向ニヨリ候事之處、其條理御辨ヘ無之、天下之動亂モ、生靈之困苦モ御貪著無之、公無形之御前議御押張、御抗命之御姿ニ被成御座候テハ、御暴逆ト申上候ヨリ外無御座次第ニ候得ハ、是等之御筋合十分御會得被爲在、判然御悔悟ニテ、御反正之御所置モ被行、御伏罪ニテ　朝廷之降命ヲ被爲待候樣無御座候半テハ、被對御祖家御濟不被成儀ニ候得ハ、呉々此邊御徹底相成候樣、御鼎力之程所希望御坐候、其上ニテ御社稷之儀ハ、　和宮樣ヨリ御願之事ニ相成候ハヽ、天下之公議モ有之候得ハ、イツレニ御不當之儀ハ無之道理候得ハ、其邊ハ猶更公議ニ被任、御未練ケ間敷御願等ハ無御座方、御敬上之御趣意モ相立、却テ公議之爲ニモ可然歟ト致考察候、尾、紀初於此表成丈ケ申談、夫々之手續次第、周旋心力ヲ盡シ候筈ニ御座候間、於錦地モ、又夫々被仰談候運ヒニモ可相成哉、何分、兎モ角モ御興廢之御場合候得ハ、御精々御盡力御座候樣、偏心御倚賴申候、已ニ問罪之　勅使御發遣之朝議モ有之候得ハ、其已前ニ御運ヒ付キ候得ハ、重疊之御都合ト存候事ニ御座候、尚、家來中根雪江ヨリ御老家山田太郎右衞門迄申越候次第モ御座候得ハ、御聞取御參考之、上惟々偏ニ爲宗家御粉骨之儀、千祈萬禱之至御座候、恐々頓首。

正月二十四日

同時、中根雪江ヨリ山田太郎右衞門ヘ差越内書、如左、

上略、御宗家之御儀ナカラ、此節被對　朝廷御恐縮之御次第ニ付、是迄御默止之處、昨日岩倉卿ヨリ極御内談有之趣ハ、岩倉卿御家來、一昨日、錦地ヨリ罷歸申達候趣ハ、御東下後、都下殊之外混雜ニテ、更ニ落合不申、中々函、碓兩關ヲ鎖シ、割據ト申勢ニモ至リ兼候形勢處、尊藩竝江川家ニオイテ、元内府公ヲ廢シ、　和宮樣御願モ有之、旁、田府公ヲ立、社稷之保存ヲ御謀リ被成候ニ付、旗下モ七分通リハ御左袒申上候事之由、就中賢兄、隨テ松木氏御奮發御主張之旨相聞候由、此表ニテハ大坂城御明退キ後、彼是旬餘ニ及候得共、御謝罪之廉モ不顯候ニ付、追々追討使代リ鎭撫使モ被差立、猶薩兵三萬二千計、長兵四十八大隊、海陸ヨリ被指向御手筈ニモ相成由、右樣之御運ヒニテ、次第ニ時機切迫ニ及候得ハ、實ニ　皇

國之大亂トモ相成、雙方幾多之人命ニモ相拘リ、且ハ生民之塗炭無申計場合ニモ可立至運ヒニ有之、然ル處、錦地之御模樣、前書尊藩初之御議論ニ致歸著候ハヽ、治亂易地、　皇國之幸福無此上御儀ニ候得ハ、御同姓之御間柄、宗家之御爲、大和守樣ヘ大藏大輔樣ヨリ何分右等之御取計ニ相成候樣御申入、大和守樣モ十分御盡力被爲在候樣被成度トノ岩倉殿御内意ニ有之候、此地之論輿論モ、於錦地ハ如何樣ノ被仰譯有之ニモイタセ、先何トカ御謝罪之筋不相立候テハ、益々　朝敵之御汚名御遁レ難被成、此御惡名有之内ハ、何等之御趣意モ難相立ハ日本流之公法候得ハ、何卒其邊之御運ヒニ致度モノト申事ハ、有志之諸藩論モ同一ニ有之、大藏大輔樣ニモ、是非此御道筋被爲立候處ヨリシテ、追々公議之歸著モ昭明ニ可相成事トハ思召候得共、唐突御發言モ難被成、日夜御痛心被成御座候處、右樣之御沙汰ハ渡頭之舟候得ハ、何分ニモ於錦地、君侯樣御始御鼎力御座候樣被成度、内府公之御胸中モ御深察ハ勿論之御儀候得共、方今之治亂ハ、内府公御方寸之御決著ニ致歸著御場合ニテ、　皇國厄難之起伏候得ハ、億萬之生靈之爲ニ、何事モ御一身ニ御引受、御强忍被遊候テコソ、日頃之不被爲渝御恭順之御誠意モ相顯レ、　皇國之鎭定、　宸襟モ御安著可被爲在候儀候得ハ、此處ヲ能々御了辨被爲在候樣、御周旋有御座度トノ大藏大輔樣思召ニ御座候、大藏大輔樣ニモ、已ニ去暮已來、尾侯ト御一所ニ御周旋之節モ、御手違之儀出來哉否ヤ、當今之形勢ト可相成ハ指掌先見之譯柄ニ付、呉々御恭順之御一筋ニテ、トコ迄モ御忍被下候樣、必至ト御盡力ニテ、　朝廷之御首尾ハ全ク九分通リハ御整イニテ、今五六日御鎭靜候得ハ、御上洛御入　朝、御職掌被仰蒙、更始一新之御政令モ御平易ニ行ハレ可申儀ニ候ヒシヲ、會、桑之妄動ヨリシテ、御成功ヲ一簣ニ缺候テ、今日之時勢ニ立至候儀、大藏大輔樣ハ不及申、關西一同之憤歎ニテ、實於　朝廷モ甚御殘念思召候事ニ御座候、此度モ右同樣ニテ、此一箇之忍ノ字ヲ御開悟無御座候得ハ、勢ヒ兵亂ニ不相成事ヲ得サル秋ニ相運ヒ候得ハ、夫ヨリ以往ハ　皇國之紛亂申迄モ無之、遂ニ外國之呑噬ト可相成ハ必定候得ハ、大藏大輔樣ニモ深ク御辛勞被成、先達テハ、既ニ御出府ニテ可被仰上歟トモ御汰沙被成、御國ヘモ被仰遣候程之御儀候得共、又此表ニ無御據御次第有之、不被任思召、唯々夜白御按勞之處、御移リモ有之事ト相成候得ハ、御宗家之御開運、此期ヲ御失ヒ被遊候テハ、乍恐最早御滅却之外ハ有御座間敷ト思召

候間、繰返繰返、　皇國、御宗家之爲ニ、無比絶倫之御盡忠被爲在度思召、御直書ヲ以テモ被仰進候得共、猶、老夫ヨリ賢契迄委細可及拜啓旨被仰付候ニ付、御大任賢勞ハ萬々御推察被成候得共、偏ニ御依頼思召事ニ御座候、此段御含、可然樣御取成被仰上可被下候。

臆斷私說、

岩倉卿御內意ト申條、是非御同志之御方ニ御內談之上之儀ト致推察候、卿云、大藏殿定テ宗家之儀候得ハ、按勞勿論ナカラ、口外難致時勢故、不得止ト相察居候處、家來ヨリ關東之模樣相聞ヘ、前橋之正論幸之儀故、此方ヨリ致發言候、何卒一ト盡力有之度、大藏殿ヨリ外ニ擔當スヘキ人無之ト、殊之外乘懸リ被申候、

一此件ニ付テハ、大藏大輔樣老夫ヲ錦地ヘ御指出之思召ニ付、今朝岩倉殿ヘ罷出及御談候處、家來一人之申口ニテ、虛實モ難計、且敵地之事ニ候得ハ、如何樣之次第ニ相成歟モ難計候得ハ、罷下候儀ハ決テ不可然候間、早々以書面申越、返答之模樣ニヨリ、順境ニモ候ハヽ、其節罷下リ可然、唯今黑白不分明之處ヘ踏込ハ、無謀之至ト被申ニ付、書面往復ニ相成候テハ、彼是手間取モ難計、其內遂ニ出兵等ニ相運ヒ候テハ、詮モナキ事ト相成候、其處如何可致ト相答候處、唯今雙方隔絕之勢故、是非共御征討ヨリ外ハ無之候得共、如此、是ヨリ手ヲ附候事有之候得ハ、其一左右相分候迄ハ、大兵ヲ發候事ハ無之樣心得居候間、其儀ハ不及懸念、何分早速之往返相成候樣被申聞候、是ニテモ成丈ケ穩便ニ相濟候樣トノ　朝儀ハ、粗相分リ候、

一昭德院樣御遺言ニテ、田安公御跡目之事ハ、兼テ　和宮樣ニモ御承知被爲在、此度御家御相續ヲ　和宮樣御願ヒ、御直書ハ岩倉卿手元ニ有之由被申候、夫故御一人樣サヘ御伏罪ニ相成候得ハ、御宗家之儀ハ、身命ニ換ヘテモ御相續御取持可申ト被申聞事ニ御坐候、此卿一亂前ハ、舊內府公之爲ニ實ニ不容易盡力有之處、是ハ水泡ト相成候得共、此上ハ德川氏ノ爲ニ、又盡力致候モ、矢張朝廷之御爲、　皇國之爲ト被申居候テ、誠意相違無之候、

一卿云、御伏罪之上ハ、割腹テモサセネハナルマイカ、夫レチ直ニ言レタ次第ニモ無之候得ハ、書面之方カヨイテハナイ

カトモ被申候、實ニ恐入候口上ニハ候得共、　朝敵ト見テ征討誅滅之御題號候得ハ、主將切腹シテ、士卒之命ニ代リ候蹤跡モ數多有之事候得ハ、其邊ヲ褒論有之事ト被存候、此儀ハ御伏罪ニテ、　天裁ヲ被爲仰候事ニサヘ相成候得ハ、其上之寛典ハ、公議之歸スル處ニ可有之事候得ハ、兎角之儀、御自儘ニ御決定有之候テハ、却テ御不敬ニ相當リ可申ト奉存候、會、桑之處、十分之御寛典ニテ、君侯之生命ヲ被保候迄之事、血食ハ迚モ難計可有之候、此處ヘ御未練ケ間敷御所置有之テハ、宗家之御故障トモ可相成候得ハ、御深考被成下候樣仕度候、　朝廷ヨリ夫テハ足ラヌ、是テハ濟ヌト御イトイ無之樣、事理至當之處、十分ニ御所置御坐候テ被仰上度、其上ニテ、タトヒ、彼是御注文有之候テモ、夫ハケ樣、是ハケ樣ト條理分明ニ、如何樣ニモ御聞入レ有之樣ニ有御坐度奉存候、

一御謝罪之御次第、此地之輿論ハ、舊内府公之思召ヨリ出、會、桑始閣老諸有司之内、暴發之事ニ關リ候向、夫々ニ御罰殛有之、御自身ニモ御恐縮御謹愼ニテ御伏罪、斧鉞ヲ被爲待候御手續ト相成候得ハ上等也、○舊内府公御悔悟無之ニ付、他ヨリ先ツ内府公ヲ禁錮シ、指次キタル會、桑始ヲ誅罰シ、而後徳川氏社稷之爲ニ嗣ヲ乞フハ第二等也、○徳川氏之臣子事ニ關ル者、各自刑シテ罪ヲ顯ハシ、内府公之御罪ニ代リ、御惡名ヲ雪メ可申ハ、臣子之當然ナルヘシ○閣老、參政、其他事ニ關ル諸有司割腹シ、瀧川等之首惡ハ刑戮スヘシ○會、桑君侯タトヒ事ニ關カラサルモ、其家來ヨリシテ宗家ヘ傾覆ヲ釀成シ、天下之大亂ヲ引起シタリ、先ツ家來ヲ誅シテ、自ラモ割腹シテ、罪ヲ謝スヘシ、會、桑之家來自刑シテ、其主ノ罪ヲ贖フ事モアルヘシ○會、桑、頑然トシテ其罪ヲ知ラスンハ、徳川氏、或ハ其親族、又譜代ヨリシテ、是ヲ討伐シテ　朝廷天下ニ謝スヘシ○御上洛御先供カリ事起リシハ鳥羽之方也、伏見方ハ如何、始ヨリ實ニ御先供計ナラハ、事爰ニ及ハサルヘシ、晦日已來、會、桑兵戎裝ニテ北上スル故、反形顯然ト稱シテ、關ヲ鎖シ、伏ヲ設ルニ至レリ○反ヲ以テ誣ラル、程成形迹アルカ上ニ、無形之除姦討伐ヲ口實トセラレ候テモ、其實ヲ不被遂故、只飾非之遣言ト相成、愈逆罪ヲ重ネラレ候勢ニ候事、

一卿又此謝罪之道相立候樣、大藏大輔樣ヨリ尾、紀始何方ヘ成共被仰談、精々御行屆ニ相成候樣御周旋有御座度トノ御

申聞ニテ、大藏大輔樣ニモ何卒此筋御成就、少モ早々御宗家之御先途モ御定リ、御安堵ニ相成候樣トノ御懇願故少モ尊藩之御力ニモ相成候樣之思召ニテ、岩倉卿御内意旁、今夕ハ尾、紀之御家老被仰遣、右之御次第御相談ニ相成、猶彥根、藤堂其他外藩之御方トモ被仰談、所々ヨリ御申入ニ相成候樣之御積ニ御座候間、此儀モ御心得置被仰上可被下候、

一錦地之御模樣如何有之哉、實ニ難計候得ハ、調不調之御見込ハ、一日モ早ク御報告相願候、成敗ハ後日之事、先ツ御調和之方ヘ御取懸リ可被遊御儀候ハ、、其御心組ト申儀ヲ　朝廷ヘ申上候得ハ、夫ヨリ先之御運ヒ方ハ、御順序モ可有之事故、左樣ニ御急キニモ不及候得共、向背兩途之分別ハ、精々早急不相分候テハ、此地ハ已ニ御征討御手被下シニモ相成候上之御儀故、イツレトモ不相分、因循日ヲ經候テハ、　朝廷之方モ甚御不都合ニ相成候得ハ、無據又出兵之運ヒニモ可相成、左候テハ挽回甚六ケ敷事ト相成候、此處ヲ篤ト御推量ニテ、指向之御見込、和戰イツレノ方ト申儀ヲ呉々御報知相願候、實ニ此度ハ治亂之境界、亂ニ成候テハ相濟不申、大亂ヲ救フヘキ期ニ至ツテ救ハス候テハ、千載遺憾ニ御座候、

一社稷御保存之大小輕重ニヨッテ、御謝罪之輕重有無之論ニ及ハレ候樣之事ニテハ、利害ヲ先トセラレ、御誠意ニハ無之候得ハ、迚モ社稷之御保存ハ難被遊候、已ニ先達テモ、御官祿之事御雙方ヨリ御直切リニテ、大藏大輔樣モ其間ニ御立被成、所謂上下交征利之勢ヒ故、殊之外御苦心被成、漸ク御折リ合ニ相成候處、御暴發ヨッテ御直ニ切リ之事ハ扨置、御官祿共ニ御無ニ被遊候御次第ニ相成候、夫カ指見ヘ有之候故、左樣ニ不相成樣トノ御周旋ニテ御座候ヒシカトモ、既往之事ハ不及是非、此度事モ亦其通リニテ候、此御場合ニ相成候得ハ、御十分御罪ヲ御引受被遊、社稷ト共ニ御一身モ御投ケ出シ、　天裁ヲ御仰キ被遊候得ハ、其上之儀ハ、天下之公議有之候得ハ、決シテ御不當之事ニハ相成不申候ハ道理ト申物有之、其場ニ相成候テハ、御愛憎之御政道ハ行ハレ難キ事ト相成候ハ必然ニテ、其儀ハ大藏大輔樣ニモ萬萬思召込レ候御次第モ御座候得共、唯今夫ヲ彼是ト御申出ニ相成候テハ、前轍之如ク相成、却テ御爲ニ相成リ不申候、先ツ臣子之道ヲ御盡被成候得ハ、自カラ　君臨之御仁惠行ハレ可申ハ倫理之當然ニテ、御疑ハ有之間敷事ト存候、

一昨日、問罪之　勅使發遣之　朝議有之候、其御次第如何ト申儀ハ、御治定無之候得共、何分御糺問之筋ニハ相違無之候得ハ、右　勅使御東下已前ニ、御謝罪狀御持出シ之御運ヒト相成候得ハ重疊之儀、夫迄ニハ御行屆不被成候ハヽ、問罪之節御指出ニテモ宜候、唯　勅使御指付ケニ御罪ヲ御問ハレ被遊、御狼狽ト申樣成御次第ト相成候テハ、最早夫限ニテ、遂ニ御割腹之御場ヘモ可被爲運候、

一先達テ大藏大輔樣御出府モ可被成哉之御內評有之、折柄越前丸岡藩之家老有馬帶刀（原註、御面識之樣ニモ承候、）致出府候事故、大藏大輔樣御出府ニ相成候ハヽ、是非御下タ働キ可致ト御謝罪論相立、大ニ意氣込ミ居候處、御出府御止メニ相成、甚力落ニハ有之候得共、何分此時ナラテハ盡忠之時節モ無之ト存詰、出府之上ハ是非貴藩ヘ御手寄申上度ト申居候、罷出候哉如何、弊藩之見込等ハ此者ヘ厚申談置候事ニ御座候、是迄ニ罷出居候ハヽ、此度之一儀モ被仰聞可被下候、イマタ不罷出候ハヽ、御呼出シ、御手先キヘ被召使候ハヽ、閣老初廣ク立廻リ候者ニテ、隨分御間ニモ合ヒ可申、小藩ニハ中々感心ナル者ニ御座候、乍序及內啓候。（下略）

正月二十四日　　中根雪江

山田太郎左衛門樣

同日夕、尾ノ渡邊對馬守、紀ノ久能丹波守彼召呼候所、對州ハ痔痛ニテ御斷リ申上、丹州計參邸ニ付、御前、宗家廢立周旋之儀御談ニ相成候所、何分厚可申談旨、且於江戶表ハ、水府侯御盡力有之御都合ニモ可相成儀候者ハ、御同所ヘハ安藤飛彈守御懇意之譯有之候得ハ、此件同人ヨリ爲申上候テモ可然歟、飛州今日上著仕候得ハ、猶申談之上、御請可申上段申上候、

廿五日、尾藩渡邊對馬守參邸、於御前關東一條御談候所、乍恐　御一人樣之御上ニテ御事濟ニ相成、御宗家御立被成候御事候得ハ、誠以重疊之御儀、御跡目田安公ヲ和宮樣ヨリ御願ニ相成候得ハ、無此上御都合ト奉存候旨、幸明日ハ尾州ヘ罷越候得ハ、老侯ヘモ委細可申上ト、欣然トシテ及御請タリ、

同日、前橋侯ヘ御直書被進ニ付、飛脚指立手筈之處、此節柄嫌疑モ多キ世態候得ハ、今一應、岩倉卿ノ公正之御談ニ相成候

樣、相伺ヒ可然トノ邸議指起リ候ニ付、於官代、鹿之介ヨリ岩倉殿へ此件公然ト御手續ニ相成候樣仕度ト申入候處、卿內談トハ申條、何方へ發露致シ候テモ聊不苦、少モ差支無之トノ事候得共、於邸中家老共不服之譯申立、御內談之趣御書面ニテ御渡被下候樣申達候處、御承知ニハ相成候得共、良久不被相渡候ニ付、及催促候處、御用多ニテ今日認出來兼候間、明朝罷出候ハヽ、御渡可有之トノ御事也、二十六日晚、岩倉殿ヨリ爲御持越ニ相成御直書、如左、

愈御安康珍重不斜候、然ハ今度德川慶喜進退、實ニ不可言次第、百事去候儀ニハ候得共、尙今日ニ至リ爲宗家御苦心之條令推量候、若條理上ニオイテ齟齬スル事ナク、其道相立候樣有之候ハヽ、豈血食之事懸念有之間敷歟、聊見込之旨モ有之候間、足下內々周旋之儀後難ナカルヘシ、乍併、素ヨリ廟議ト申儀ニハ無之、臣一己之見込之儘申進候迄ニ候也。

正月二十六日　具視

越前宰相殿

右、御書一條ニ付、飛脚延引、二十六日夜戌刻、早飛脚指立。

○長門藩、征討總督ノ令ヲ以テ、山陽ノ兵ヲ轉シテ、松山征討ノ先鋒タルヲ稟ス。

私一手山陽道罷登、藝、備二藩申合、沿道之諸藩去就相糺、備後福山、作州津山等、證書爲差出、播州姬路へモ兵隊差遣候處、備前ヨリ居城竝人質受取居候得共、尙又誓詞爲差出、於明石城下、四條殿、五條殿御兩卿へ相伺候處、山陽道之儀ハ都合平均仕候間、此一手直樣豫州松山先鋒仕候樣御指揮ヲ蒙リ、今二十三日、片上驛ヨリ渡海仕候、此段御屆申上候事。

長門宰相內

辰正月二十三日　堅田大和

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　藩下日載

○本書、上達ノ日ヲ失ス、使者二十五日ヲ以テ大阪ニ至リシコト、日載ニ見エタリ、故ニ本日ニ收ム。

○北陸道鎮撫總督高倉永祜、小濱ニ抵ル、城主酒井忠氏ノ老臣、奉命他ナキノ證書ヲ呈ス。

酒井忠禄家記

○島津久光、使ヲ遣リ、檄ヲ西海道諸藩ニ傳ヘテ、其方向ヲ問フ。

○檄文

天ニ無二日地ニ無二王、是天地ノ大經萬世ノ通義ナリ、往時、　皇國衰弱ノ弊ニ乘シ、德川氏兵馬ノ權ヲ掌握セシヨリ已來、王室愈不振、其漸終ニ　至尊徒ニ虛器ヲ擁シ給フノミ、萬姓ヲシテ　天朝有ル事ヲ不知シメ、近代ニ至リテハ、畏クモ奉輕蔑　朝威之罪枚擧スルニ遑アラス、天下ノ人々切齒悲憤スル所、就中、西洋異邦ニ對シ、自ラ日本大君ト號シ、異邦ノ人亦日本大君ト稱スレハ甘シテ是ヲ受ケ、君臣上下ノ名分、地ヲ掃ニ至レリ、

朝廷厚ク寬典ニ處セラルヽト雖モ、動スレハ上ヲ欺キ下ヲ誣ノ奸跡多ク、今ノ德川慶喜事、飽マテ　天恩ヲ蒙タル身トシテ、頃日ニ至リ　王政復古ノ大典ヲ怨望シ、陰ニ禍心ヲ包藏シ、松平肥後、松平越中等、其凶謀ヲ助ケ、天下ノ亂魁ト成リ、既ニ本月三日、暗ニ大坂ヲ發シテ干戈ヲ　王畿ニ動シ、恐多クモ奉襲　鳳闕之逆謀顯然タルニ依リ、卽チ尾、越、薩、長、土、藝、其他誠忠有志ノ諸侯、勤　王ノ義兵ヲ以、賊徒ヲ鳥羽ニ破リ、伏水ノ賊陣ヲ討チ、官軍大ニ勝利ヲ得テ、賊ノ將卒敗走シ、淀河ヲ經テ大阪ニ北ケ行ヲ追擊シタリ、

新天子神聖叡武ニマシマシ、速ニ斧鉞之任ヲ仁和寺親王ニ下賜ヒ、征東大將軍　宣下アリテ、諸參謀副將各々　勅命ヲ奉戴シ、同九日、大坂城ヲ攻拔キ、逆賊ヲ追散シ、黨與等悉ク伏誅シ、或逃隱タリ、官軍山崎ノ賊關ヲ破リ、八幡山ニ據リ、大坂落城ノ後ハ、攝海ハ勿論、城市共ニ官軍堅固ニ守リ、翌十日ニ至リテハ、東賊一人モ不見落去セリ

天兵ノ向フ所枯タルヲ摧カ如ク、彼之親從タル井伊、藤堂、稻葉等之輩ヲ初、悉迯款歸順シテ官軍ニ屬セリ、爾後、賊魁德川

慶喜、松平肥後、松平越中、身首ノ所在ヲ不知ト雖トモ、天網疎ニシテ不漏之理ナレハ、自然束縛ニ附ヘキ者ナリ、率土ノ濱王土ニ非ルハ無ク、普天ノ下　王民ニアラサルハナシ、誰カ今日　天朝多難之際ニ當リテ、王家ニ勤メサルヘキ、仍テ遍ク列藩各士ノ將士、四民萬姓ニ布告ス、早ク賊魁徳川慶喜、松平肥後、同越中等ヲ誅伐シ、天地不容之罪ヲ正シ、上ミ奉安　宸襟、下ハ萬民塗炭之苦ヲ解キ、皇國之全疆ヲ靜鎭スヘシ、若今日ニ至リ名分大義ニ暗ク、誤テ　王師ヲ拒ミ、逆敵ニ私黨スル者ハ、忽天誅ヲ可加、假令徳川慶喜之親族姻類タリトモ、大義滅親之義ヲ守リ、勤　王ノ志アル者ハ其効ヲ顯シ、可奉報　天恩、一旦逆賊ニ詿誤セラレシ黨タリトモ、自新之意ヲ發シ、反正歸順之輩ハ不錄舊惡、　王師ノ内ニ可召加ニ付、速ニ去就ヲ決シ、盡力竭忠、共ニ可翼戴　王室、首鼠兩端ヲ抱テ、擬議猶豫スルノ族ハ、邪正曲直、判然タル　天裁アルヘキ者也。

正月　　島津中將

○

使者口上之大意、

此節、大隅守ヨリ私共ニ差立候使節之趣ハ、追々御傳聞ニ御座候通、徳川ハ勿論、會津、桑名等之黨與、於伏見逆心ノ色ヲ顯シ、征討ニ被及候處、悉ク致敗亡、大坂迄モ速ニ落城、實以　皇運挽回、一同難有仕合御座候、仍テハ於各藩勤　王補佐之忠志ヲ磨候儀ハ申迄モ無之候得共、至此節候テハ人心難量、於其御方樣ハ勤　王否哉之御存慮ヲ屹ト承屆、彌以勤王御別儀於無之ハ、其御墨付ヲ頂戴罷歸候樣、左候ハヽ、彌御互ニ　王事ニ拋身命候樣イタシ度、尤於京都修理大夫ヘ　勅諭之趣、此通ニテ差上置候間、御答復願上候事。

菱田傳兵衛
肥後直次郎

島津忠義家記
伊東祐歸家記

○

右、熊本、久留米、柳川、福岡、佐賀

薗田彦左衛門

久保田新次郎

右、飫肥、高鍋、延岡、中津、小倉、岡、杵築、府内、森、臼杵、日出、佐伯

橋口與一郎

川崎強八

右、島原、唐津、平戸、五島、大村

右之通、正月二十六日、御使トシテ出立也。慶明雑録

○徳川慶喜、公議所ヲ置キ、其下ニ令シテ各所見ヲ陳シ、家政ヲ匡救セシム。

皇國御制度之基本ハ、全國之公議ヲ以テ定ムヘキハ至當之義ニ付、政權ヲ奉歸　朝廷、諸藩公議ヲ被爲盡候樣奏聞致候儀ニ有之、然ルニ是迄之家政向ヲ熟考スレハ、士民之心ニ稱ハサル事少カラス、實以耻入候、就テハ、此度公議所ヲ設ケ、廣ク衆人ノ公議ヲ採リ、上下之情相通シ候樣致度候間、銘々見込之趣、不憚忌諱申聞候樣可致トノ上意ニ候。牧野康民家記

○

別紙之通　上意有之候ニ付テハ、御目見以上、以下次三男、厄介、且諸藩士、並百姓町人ニ至ル迄、有志之輩ハ見込ノ次第、書面ヲ以テ公議所ヘ可被申立候、尤事柄ニ寄リ口上ヲ以テ申立候テモ不苦候事、

但、公議所御取建相成候迄ハ、評定所ヘ可被申立候、尤、日限之儀ハ追テ相達ニテ可有之候、

右之趣、向々ヘ不洩樣可被相觸候、

正月　武内孫助筆記

○

此度、會議御開相成候ニ付、布衣以上ノ御役人、並寄合有志之面々、來ル二十九日四ツ時ヨリ、大廣間ヘ可被罷出候事。

正月　武内孫助筆記

○

此度、公議所御取建相成候ニ付、布衣以下小役人ニ至ル迄、頭支配ニテ壹人ツヽ、撰擧致シ可被差出候事、

但、一役五人ニ不滿向ハ差出候ニ不及候、多人數ノ向ハ、五十人ニテ壹人ノ割合ヲ以テ可被差出候事、

右之趣、向々ヘ可被達候事、

正月　武内孫助筆記

○附錄大廣間掲示

公議規則

一公議之作法、總テ公議掛ノ指揮ニ從ヒ、座順ヲ不亂、混雜無之樣可致候事、

一公議掛頭取、議題差出可申事、

一公議中、題外之議論決シテ致間敷事、

一議題中、不審之廉有之候ハヽ、公議掛ヘ可承合事、

一頭取ヨリ同意不同意相尋候得ハ、異論之有無可申聞事、

一公議中、頭取ヲ差置、銘々之議論、或雜話一切致間敷事、

一列坐之内ニテ議題差出度向ハ、公議掛ヘ差出、頭取之取捨ニ從ヒ可申事、

一各局總裁ヨリ議題差出候節ハ、頭取ヘ相渡出坐可致事、

一議論二樣ニ分レ候得ハ、頭取之指揮ニ從ヒ可申事、

右之趣、堅可相守者也。武内孫助筆記

○附録紀伊藩士武内孫助筆記ニ云、正月二十九日發會、丸ノ内評定所ヲ以テ公議所トシ、諸藩ヲ招ク、監察津田眞一郎、加藤弘藏、其外出頭、諸藩ニ質問セシハ恭順ノ事件ナリ、曰ク、大君恭順ヲ以テ　天朝ニ謝罪セラル、抑恭順ハ如何シテ可ナラン、此日、諸藩士各見込ヲ演述ス、戰爭ノ激論モ多ク有リシ樣子、町人體ノ者モ出頭、何カ見込申立シ由、何事ニヤ不詳、此後右公議所ヘ出頭セス、諸藩ノ議論等一向ニ聞込無之、監察ヨリ諸藩ヘ歎願ノ儀ヲ依頼セラレ、留守居役等少々ツヽ、小田原其外ヘ出張、大總督府ヘ歎願書ヲ持參セシ由。

復古記　二十五　終

總括兼纂修

一等編修官　臣　長松　幹

校　勘

一等編修官　臣　長　熒

一等掌記　臣　四屋恒之

校　録

六等掌記　臣　澤渡廣孝

繕　寫

二等繕寫　臣　小川長和

二等繕寫　臣　小島　春

復古記　巻二十六

明治元年戊辰正月二十七日ニ起リ二十九日ニ至ル

○正月

二十七日、太政官代ヲ二條城ニ移ス。

一太政官代、是迄被用九條家候得共、従明二十七日、以二條城太政官代ニ被用候事、
一參與役所、同城内ニ被設候間、總テ是迄之通取扱候事、

正月二十六日　有栖川宮家記　中御門經之家記

○本日達

是迄以學習院金穀出納所、竝會計事務、裁判所ニ被用候處、従今二十七日、二條城内ニ被設候間、總テ是迄之通取扱候事。

正月二十七日　中御門經之家記

○

太政官代下馬之事、
一總裁宮、堂上、諸大名以上、四脚門前柵門外ニ下乘札有之、
右之處ニテ下馬之事、
一非藏人、諸官人以下藩士ニ至迄、總門外下馬札之所ニテ下馬之事、
下乘之事
一親王、丞相車寄切石之上、

一堂上、大名四脚門外、
一非藏人、諸官人、藩士總門外、

正月　　　　　　　　制度寮

諸局中　（有栖川宮家記　中御門經之家記）

○參與大久保利通ヲ以テ、總裁局顧問ト爲ス。

　　　　　　　　　　大久保市藏

總裁局顧問被　仰出候事。　（島津忠義家記　大久保利通事蹟）

○忠義家記二十四日トス、案スルニ、利通顧問ノ命ヲ辭ス、許允ハ二月二日ニアリ、蓋シ命ノ下リシハ二十四日ニシテ、本日ニ至リ姑ク之ヲ拜シ、後遂ニ之ヲ辭セシモノカ、其故ヲ詳ニセス、姑ク事蹟ニ從ヒ本日ニ收ム。

○大坂鎭臺ヲ改テ、裁判所ト爲シ、醍醐忠順ヲ以テ、總督ト爲シ、伊達宗城之ニ副ス、（忠順參與內國事務掛、宗城議定外國事務總督故ノ如シ、）又宗城ニ命シ、其臣二人ヲ選テ、忠順ニ從ヒ、且其衛兵ヲ出サシム、又岸和田藩ニ命シ、大坂市中ヲ巡警セシム。

　　　　　　　　　　醍醐大納言

改大坂鎭臺　爲同所裁判所總督。　（醍醐忠順家記）

○

　　　　　　　　　　宇和島少將

改大坂鎭臺　爲同所裁判所副總督。　（伊達宗徳家記）

○宗城へ達書二通

今度、醍醐大納言大坂へ下向ニ付、其藩士之内、是迄國政ニタツサワル者兩人附添被　仰付、尤一人丈ハ是非國政ニ參候者可相附候、右之者　御沙汰候事。

正月二十七日

○

今度、醍醐大納言大坂へ下向ニ付、途中警衛其藩へ被　仰付候旨　御沙汰候事。

但、來月五日頃出立ニ付、人數附取調可申出候。伊達宗徳家記

○

岸和田藩

其藩事隣國之儀ニ付、大坂市中取締被　仰付候間、其旨可相心得候、諸事大坂鎮臺へ申談可取計旨　御沙汰事。岡部長職家記

○案スルニ、本日鎮臺ヲ改テ裁判トラ爲ス、本條鎮臺ノ字、蓋シ一時ノ誤謬ニ係ルナルヘシ。

○大ニ東征ヲ議スルヲ以テ、大將軍嘉彰親王ヲ召還ス、又滋野井公壽ヲ召ス。

將軍宮

今度、東征御進軍可有ニ付、大御軍議被爲在候間、早々御歸洛可有之、被　仰出候事。東山道總督府叢紙　島津忠義家記

○東伏見宮家記ニ云、二十七日、以　勅使石山右兵衛權佐、就征討大軍議被爲在、一應御歸洛之旨被　仰出。

○

滋野井侍從

今度、東征大軍議可被爲有、三道進撃可有之ニ付、　御沙汰ノ次第有之間、一先上京可有之、被　仰出候事。

尤當時附屬ノ兵士召連候テ、早々上京可有之事。東海道先鋒記

○一條、共ニ發令ノ日ヲ失ス、故ニ東伏見宮家記東海道先鋒記ニ據リ、本日ニ收ム。

○東海、東山、北陸三道鎭撫使、及ヒ淺野茂長、池田茂政、池田慶德、龜井茲監、山內豐範、伊達宗德遠江守○宇和島藩主、食封十萬石、ニ命シ、舊幕府領地ノ東海、東山、北陸、山陽、山陰、南海ニ在ル者ヲ撿シテ、其人民ヲ安撫シ、圖籍ヲ上ラシム。

今般　王政御一新ニ付、是迄天領ト稱シ來候德川采地、及賊徒之所領等念入取調可致、右ハ從前苛政ニ苦ミ居候哉之趣モ相聞、患難疾病相救之道モ相立兼候ニ付、先無告之貧民、天災ニ罹リ困難之者ヘハ、夫々御取糺之上、御救助モ可有之候間、右之旨申諭、億兆人民　王化ニ服シ候樣、精々盡力可仕　御沙汰候事。

各通　橋本少將
高倉三位
岩倉大夫

但、代官支配地所、石數、人數帳、地圖面等揃ヘ、早々上京可致候、若代官立去候地所ハ、最寄之國主當分御預リ可申、尤石高圖面等、早々可差出候事。

東海道先鋒記
北陸道先鋒記

○本條、發令ノ日ヲ失ス、山陽、山陰、南海皆本日ニアルヲ以テ此ニ收ム、又東山道ハ原記ヲ失ス、今之ヲ補入ス。

○

今般　王政第一新ニ付、卽今之處、山陽道取調之儀被　仰付候間、兩藩共申合、諸藩之情實探索之上、巨細言上可致　御沙汰候事。

備前
藝州

但、諸國之中、是迄天領ト稱シ居候德川采地、其他賊徒之所領等、別テ念入取調可仕、右ハ從前苛政ニ苦ミ居候哉之趣モ相聞、患難疾病相救之道モ相立兼候ニ付、先無告之貧民、天災ニ罹リ困難之者ヘハ、夫々御取糾之上、御救助モ可有之候間、右之旨申諭、億兆人民　王化ニ服シ候樣、精々盡力可仕　御沙汰候事、

一代官支配地處、石數、人數帳、地圖面等擕ヘ、早々上京可致候、若代官立去候地所ハ、最寄之國主當分御預リ可申、尤石高、地圖面等早々可差出候事。池田章政家記

○　因州　津和野

同上文。山陰道ニ作ル、池田輝知家記　龜井茲監家記

○　土州　宇和島

同上文。四國ニ作ル、山内豐範家記　伊達宗德家記

○附錄章政家記ニ云、正月十四日、今般復古ニ付、卽刻之處、山陽道取調云々御達御文中ニ、租稅半減之儀有之、尙又、同月二十七日、今般王政御一新ニ付、卽今之所、山陽道取調云々御達有之候ニ付、前記十四日御達之儀ハ如何可心得哉ト相伺候所、右ハ御取消相成候旨御口達有之候、依テ租稅半減云々ハ、實際被行候儀ニ無之。

○案スルニ、諸道租稅半減停止ノ事見ル所ナシ、然ルニ章政家記ニ據レハ、其同一ナリシコト知ルヘシ。

○諸藩ノ九門警衛及ヒ征討兵ヲシテ、菊章ノ旗幕ヲ用ヒシム、又諸侯ノ松平氏ヲ冒稱スル者

ハ、其本氏ニ復セシム。

今般御制度御改正ニ付、諸藩　宮門警衛被仰付置候銘々、御旗、幕、竝挑灯等ニ至ル迄、菊御紋相用候樣可仕　御沙汰候事。

但、追討被　仰付置候諸藩出兵ノ面々、以來一隊ニ一流宛、菊御紋御旗被下候間、於家々可相調候、左候テ家之紋相用候儀ハ、可爲是迄之通候。池田章政家記 池田輝知家記

○

德川慶喜反逆ニ付テハ、松平之苗字ヲ稱シ居候族ハ、向後大小名共、速ニ各本姓ニ復シ候樣　御沙汰候事。池田輝知家記 池田章政家記

○春嶽私記、一條ヲ合シテ一通トシ、十四日布達トス、蜂須賀茂韶家記ハ、下條一通十七日ニアリ、然レトモ諸家家記多クハ本日ト爲シ、文字モ亦刪潤アリ、故ニ此ニ收ム。

○池田茂政ニ令シ、其沒收セシ所ノ舊幕府貢米ヲ大坂ニ輸送セシム。

備前少將

德川元領地作州村々年貢米、其藩東川積下ニ相成候總計凡三萬七千九百俵之處、川口ニテ取押候段、盡力之儀　御滿足ニ被思召候間、無滯大坂表迄相廻候樣可取計候事。

正月　會計裁判所　池田章政家記

○松平慶倫ノ請ヲ聽シ、命シテ、入覲セシメ、又之ヲ池田茂政ニ諭ス。

○慶倫申請書批紙

美作中將儀可有上京書面之旨趣、早々備前ヘ相達候間、可得其意候事。松平康倫家記

○

美作中將願之趣有之、上京被　仰出候間　爲心得相達候事

備前少將

正月

池田章政家記

○康倫家記、批下ノ日ヲ失ス、茂政ヘノ達シ、本日ニアルヲ以テ此ニ收ム。

○是ヨリ先、舊幕府、細川慶順ヲシテ豐後ノ四郡速見、大分、直入、國東ヲ管シ、且日田、天草ヲ守衛セシム、是日、慶順其去就措置ヲ稟ス、令シテ、姑ク其舊ニ仍ラシム。

徳川慶喜領地之内ニテ、豐後國速見郡、大分郡、直入郡、國東郡村々ノ儀、昨年越中守ヘ相預、政事向私領同樣取計、非常之節ハ防禦筋ヲモ致指揮候樣依賴有之、且又肥後國之内天草郡、竝豐後國日田表之儀ハ、前々ヨリ非常警衛筋、越中守ヘ永任ニ付、相應ノ人數差出置候處、此節ニ至候テハ、朝敵之領地ヲ致守衛候形ニ相成、早々引揚可申處、此以後ハ　朝廷之御料ニ歸入可仕候間、追テ御措置相定候迄ハ、猶更守衛之人數差出置、鎭靜方指揮可仕哉、又ハ引揚可申哉、不蒙　朝命候テハ、甚以疑惑仕候段、越中守申付越候間、急々御差圖被成下候樣奉願候、以上。

細川越中守内

青地源右衛門

正月二十七日

○批紙

追テ御差圖可有之候間、當分是迄之通可心得候事。細川護久家記

○毛利敬親、其子廣封ヲシテ兵ヲ率ヰテ、命ヲ闕下ニ待タシムルヲ稟ス、又上書シテ、諸藩ノ方向ヲ一ニシ、復古ノ基本ヲ立テ、而シテ後、徳川氏ヲ處置センコトヲ建議ス。

徳川軍兵伏見表ニ出張、反逆之色顯然ニ付、追討官軍可被差向候間、敬親父子之中、大兵引率、急速發途、華城襲撃候樣蒙

勅命、謹テ奉承仕候、以微力奏功之儀萬々無覺束不堪惶懼候得共、廣封手兵少々引率仕、來ル二十二日發途可仕覺悟ニ罷在候、然處、頓ニ德川兵坂城脫去之樣子相聞候付、不取敢　闕下ヘ罷出何分之　御沙汰ヲ奉シ、進擊之心得罷在候、此段　御奏達所仰御坐候、以上。

正　年　十　九　日　　　長　門　宰　相

毛利元德家記

○

臣敬親誠惶誠懼謹テ奉言上候、方今　王政復古無偏無黨公平至當之　御處置被爲遊候　御旨、竊ニ奉伺上候、抑德川氏反跡顯然タル上ハ、疾ニ御誅鋤被遊候儀ハ勿論ニ奉存上候、左候テ、右逆賊ヘ與シ、反側不常國々ヲモ、素ヨリ　御同樣可被仰付候、就中、其他之諸藩疑惑ヲ抱キ、依違觀望進退不定モノハ、速ニ　勅書御下シニ相成、銘々疾ニ兵馬ヲ具シ、　御征討之御手傳仕ラセ、某賊ハ某藩討手ト御手分被　仰付、其國々方面之賊徒ヨリ手ヲ下シ候樣、專任被　仰付度候、右樣被　仰付候ハ、、漸々逆賊之羽翼ヲ殺キ、自新之路相開ケ、首鼠兩端之諸藩モ、頓ニ方向相定リ、勤　王一途ニ相成、海內和睦、皇國之御基本確乎可相立候、左候テ、　天下一新之上ハ、王政彌以御更張被爲遊、　御兵政ヲ始メ、外國之御交際、諸侯之御駕御、大學校之御規模等大略相立、然ル上、德川氏御處置十分被爲著候樣被爲遊候儀、御順序歟ト奉愚考候、臣敬親　鄙陋ヲ不顧、管見之儘奉言上候、　御採擇被爲成被下度、御執達所希御座候。

正　月　十　九　日　　　毛　利　宰　相

毛利德家記

○以上二條、上申ノ日ヲ失ス、元德家記ニ井上馨ヲシテ上奏セシムトアリ、馨ノ入京、本日ニアルヲ以テ此ニ收ム。

○德川慶喜、書ヲ松平慶永、山內豐信等ニ致シ、其素志ヲ陳シテ、解救ヲ請フ、是日、慶永、其書

ヲ上ル。

此程、別紙之通被　仰出候趣承及驚愕之至、素ヨリ途中行違ヨリ、不料先供之者爭鬬致候迄之儀ニ候處、斯之通之　御沙汰ニテハ、甚以心外之至ニ候、殊ニ　靜寬院宮樣ニモ深御心配被爲在儀ニ付、積年微誠御諒察之上、御周旋有之樣致懇希候、不一。

正　月　望　　　　内　府

大　藏　大　輔　殿　春嶽私記

○別紙、原記ヲ失ス、蓋シ征討ノ令ヲ指ス。

○慶永副書

一翰令啓達候、春寒難退御坐候處、御兩卿愈御安泰珍重奉存候、抑去ル十七日、江戸表西丸城ヘ重役呼出ニ付罷出候處、戸川伊豆ヨリ慶喜直書渡有之ニ付、右直書國許ヘ差遣シ、夫ヨリ昨日以急飛脚差越候ニ付、右慶喜直書、別紙共、御兩卿迄差上候間、總裁宮迄御呈達奉希上候、此段申入候也。

正月二十七日　　　　慶　永

正親町三條前大納言殿

德大寺中納言殿

慶喜直書中、上包前内府ト有之、書中内府ト有之、右ハ從　朝廷列藩ヘ布告有之迄ニテ、德川慶喜ヘ官位被止候　御沙汰書等ハイマタ出不申故、本文之通内府ト認有之儀ト相考申候、此邊モ可然被仰入被下度候也。春嶽私記

○春嶽私記ニ云、二十五日、後藤象二郎ヨリ青山小三郎迄申出候ハ、元内府公ヨリ容堂樣ヘ御直書來リ、御先供ヨリ事起リ、御恐縮之御次第、宜御周旋御依賴之旨、五藩尾張、肥後、安藝、越前、土佐、ヘ御同樣トノ御趣意ニ付、容堂樣ニモ御取計方不被成御坐候ニ付、今日　朝廷ヘ御差出ニ相成候段、公ヘモ爲御知申上呉候樣ト之事、公ヘハ御國表ヲ經テ二十六日ニ達ス、右御書面更ニ

御悔悟之御様子不被爲在、御周旋可被遊様モ無之ニ付、唯此儘ニ明日太政官ヘ御差出ニ可相成ト之思召ナリ。

○池田茂政、松平武聰ノ家臣尾關某金八郎、等、大坂ヨリ敗歸シ、其封内金岡港ニ抵ルヲ以テ、之ヲ拘留スルヲ稟ス。

松平右近將監家來尾關金八郎初十七人、去ル十三日、領分金岡港ヘ上陸致シ候ニ付、同所警固之者ヨリ及糺問候處、大坂敗軍之由申出候付、取押置候折柄、右近將監在所家來ヨリ申出候ハ、今般金八郎等擧動、奉對　朝廷恐入候儀ニ付、金八郎其外頭立候者、在所ヘ引取居申候者共兩三人召連罷出、軍門ニ謝罪仕、尤一藩議論ニテハ、　朝廷奉戴之外他事無之趣願出可仕旨ニ付、此段相違無之トノ證書、右近將監家老松倉丹後ヨリ請取置、金八郎ハ右護送トシテ罷越候同藩森江轍ト申者ヘ引渡、殘之者共ハ、何分之　御沙汰相下候マテ、其儘於金岡右近將監家來共警固居申候得共、尚此方ニテモ嚴敷取締申付置候、右委細之儀ハ彼藩ヨリ申出候ト奉存候、此段宜様御執奏奉希候、以上。

正月二十七日　　　　　　　　　　備　前　少　將

池田章政家記

○出雲藩兵、京ニ至ル、松平定安家記伊東長雜、兵ヲ姫路ニ出スヲ稟ス。

去ル二十日御屆奉申上候通、播磨守儀、乍小身相應之御用向奉伺度旨申付越居候ニ付、在所表ヘ人數差登候様申遣候處、備中松山城御追討被　仰出、池田備前守人數差出候ニ付テハ、隣領之儀、播磨守ヨリモ人數差出候間、彼是行屆兼候得共、近日乍小人數上京爲仕候筈ニ御座候處、播磨守儀病氣氣ニ付、上京延引ニ相成候ニ付、實父連之助儀不取敢人數召連、去ル十八日在所表發足仕、池田信濃守人數ヘ相加リ、播州姫路表迄罷越候處、同表落城ニ相成、今般　御總督様、　副御總督様爲御見分御入城相成候ニ付、信濃守御警衛之爲加勢、右召連候人數、同表鍛冶町口ヘ差出、御警衛仕居候段申越候ニ付、此段

御届奉申上候、以上。

正月二十七日　伊東播磨守家來
加藤治平
伊東長諱家記

○東山道鎭撫總督岩倉具定、近江三上遠藤胤城ノ治所、ヲ收メ、加藤明實ヲシテ其地ヲ保管セシム。○東山道總督府達留

○中國四國征討總督四條隆謌、大坂ニ歸ル。○諸道記概略

○土佐藩兵、伊豫松山城久松定昭ノ治所、ヲ徇ヘテ、之ヲ下ス。○久松定謨家記

二十八日、百官ヲ會シテ、大ニ東征ヲ議ス、議遂ニ決ス。

○春嶽私記ニ云、二十七日、下參與不殘御呼出ニテ、岩倉殿被申聞候ハ、仁和寺宮モ今晩ハ浪華ヨリ御歸陣ニ可相成筈、右ニ付テハ、愈關東　御征伐之大兵ヲ被擧候御決評ナリ、三道之鎭撫使抔ニテハ迚モ行キ足リ不申ニ付、海陸ヨリ大兵進發之廟算也、右ニ付熟考之上見込モ有之候者ハ、明朝申達候樣御演達有之、二十八日關東　御征伐御決定之議事有之、下參與之面々意見御尋ニ付、出席之上座中根雪江ヨリ及御答候ハ、關東今日ニ至リ、更ニ悔悟之體不相聞候得ハ、早々御征伐御當然之御儀タルヘキト奉存候、御軍略ニ至ッテハ、唯今申上候程之見込無之段申達、衆議大同小異ニテ、遂ニ御決評ト相成ル。

○參與井上馨ヲ以テ、外國事務掛ト爲シ、九州鎭撫使ニ屬セシム。

井上聞多

徵士ヲ以テ、外國事務掛九州鎭撫總督附屬、被　仰出候事。

正月　毛利元徳家記

○毛利敬親ニ命シ、姑ク豐石占有ノ地ヲ管セシム。

此度、以家老申出候豐、石兩地返上之旨趣被　聞食候、右兩地之儀ハ、追テ御所分可被　仰出候得共、當分之處、其藩ヘ御預相成候間、是迄之通處置可有之候事。

長門宰相

正　月

毛利元德家記

○大將軍嘉彰親王、大坂ヨリ凱旋シ、錦旗節刀ヲ上リ、其狀ヲ奏ス、四條隆謌、五條爲榮等從フ。

○奏狀

四日出馬、鳥羽邊及伏水下流堤上之戰爭、官軍決死破賊兵、先以東寺爲陣營、五日、依淀邊戰爭出馬、進錦旗于戰場、官軍大得勝利、賊徒敗績、七日、出東寺入淀城、八日、八幡及橋本關門巡邏、九日、出淀城乘船、到牧方張陣營、十日、自牧方乘船到浪華、以本願寺假坊爲陣所、十三日、以四條前侍從爲軍事參謀、命四國・中國征討使、總督及以五條少納言爲監軍、同日、以平松甲斐權介爲軍事參謀加勢、十五日堺邊巡邏、十六日、以烏丸侍從爲大和國鎭撫使、二十一日華城巡邏、二十三日、烏丸侍從大和國鎭撫歸陣、二十六日天保山砲臺巡邏、二十七日、以　勅使石山右兵衛權佐、就征東之大軍議被爲有、歸洛被　仰出、同日、四條前侍從、五條少納言、中國・四國平定歸陣、二十八日拂陣乘船、到淀上陸、唯今　奏凱旋、返上錦旗節刀候事。

正月二十八日

東伏見宮家記

○松平定安、其管地隱岐國租稅貢納ノ方ヲ稟請ス、是日、令シテ、金ハ會計裁判所ニ納レ、穀ハ大坂ニ輸サシム。

○二十四日稟請書

出羽守預所隱岐國田畑高一萬二千五百石餘、今般大政御一新之廉ニテ可奉上納哉、尤是迄ハ海島之儀、年貢取立銀納ニテ、翌年四月取立、五月中ニ收納仕來ニ御座候處、差懸リ昨卯年年貢納方之儀、如何相心得候テ宜敷可有御座哉、此等之所差向奉伺置候樣、尙舊記等追テ國許ヨリ送越候旨申付越候間、宜敷御差圖奉願候、以上。

出雲少將家來

平賀縫殿

正月

○本日達書

松平出羽守

其藩預所隱岐國田畑一萬二千五百石餘之所、納方之儀、米納ハ大坂表、銀納之向ハ會計裁判所ヘ收納可有之候事。

正月

但、是迄之通、當五月中迄ニ收納之事。松平定安家記

○池田茂政、米五千苞ヲ獻セント請フ、之ヲ聽ス。

此度、御大政御一新ニ就テハ、御費用莫大之御儀ト奉恐察候、依之、些少之至奉恐入候得共、玄米五千俵進獻仕度奉願候、聊奉報　御國恩候寸志マテニ御座候、御用度之御差加ニモ相成候得ハ難有仕合奉存候、此段可然御執奏奉希候、以上。

備前少將

正月二十一日

○本日達書

備前少將

過日伺ニ相成候獻米之儀、神妙ニ被　思召候、尙納方之儀ハ、御用之節マテ御預ケ置之事。池田章政家記

○山名義濟主水助交代寄合○後藩屛ニ列シ、村岡藩ト稱スノ請ヲ聽シ、命シテ入覲セシム。

御內意奉伺口上覺、

主人主水助義濟先祖伊豆守義範者、　淸和天皇皇子貞純親王後胤、鎭守府將軍源義家三代新田大炊助義重長男、文治年中、爲平氏追討之賞被叙從五位、六代孫左京大夫時氏領但馬・因幡・伯耆等數國、正平年中、　南朝歸順、賜日月御旗桐御紋、被叙正四位、所領跨十餘國、其孫宮內大輔時熙爲司職、其子右衞門督持豐被叙正四位、子孫繼承領數國候處、至中務大輔豐國家運衰頽、天正年中、但馬・因幡落去、後從于豐臣公、慶長年中從于德川公、當分爲家臣扶助被給但馬國七美郡一圓六千七百石、儀仗准國主、客禮之待遇ニ有之、其孫伊豆守矩豐以來、代々柳之間席交代寄合、列萬石以上之格、乘輿准國主、隔年江府參勤仕候處、文久年中幕政變革ニ付歸邑仕、同三年但馬國海岸守禦、鄰國諸侯一列被命、元治元年京都動亂ニ付、不取敢登京、於　御假建所奉伺　天機、其後竹田街道警衞被　仰付、慶應元年警衞御免、江府參勤後、今以滯府仕、元來小封微力、殊更累年之形勢東西隔遠、警備難行屆、殆疲弊相極、日夜憂念仕候折柄、今般大政御復古、萬機御一新之趣承知仕、幸領地但馬國者京都接近ニ付、歸國之上、乍不及鞠躬盡力、奉報無窮之　聖恩度志願ニ御座候間、何卒消埃之微衷　御照察被成下、御沙汰之程奉仰願度、不顧恐　御內意之程奉伺度奉存候、以上。

戊辰正月　　山名主水助家來

池田勸一郎

○

口上覺、

主人主水助儀、元治元年京都動搖之趣傳承、不取敢上京、於　御假建所奉伺　天機、其後竹田街道警衞被　仰付、慶應元年警衞御免、江府參勤後、今以滯府仕、昨冬　大政御復古、萬石以上諸侯　召命有之候處、同列一同　召命無之、從來同列之儀ハ、諸事萬石以上同樣所置相成候ニ付、　召命奉懇願度示談仕候折柄、江府郭門警衞同列滯府之面々達有之、　召命懇願、彼是遲引相成、舊臘京都變動之趣承知仕、家來之者上京申付越、不取敢上京仕候處、去ル三日後異變ニ付、諸方周旋、見聞之

趣、江府、在所ヘ申遣候ヘ共、未タ江府ヨリ一左右無之苦慮心痛仕候、在所表重役共、小人數召連、不日上京奉伺候儀可有之候ヘ共、何分留守中、別テ難行屆、其内主水助上京可奉伺　天機、先此段奉申上候、以上。

戊辰正月

山名主水助家來
池田勳一郎

山名義路家記

○本條、日ヲ失ス、姑ク此ニ附ス。

○本日達書

山名主水助へ

其方儀一藩戮力、勤　王之志願不一方趣被　聞召、神妙之至候、小藩不得已之情可有之候得共、上京可致樣、別段被　仰出候事。

正月

山名義路家記

○長門藩、時々兵ヲ二條河東ニ操シ、且新選組ノ兵器、東本願寺ニ在ル者ヲ得ンコトヲ請フ、之ヲ聽ス。

御當地陣營屯宿之兵隊、時々於二條河東調練場ニ操調爲仕度奉存候間、此段　御聞屆被爲在度奉願候、以上。

毛利宰相内
寺内暢三

正月二十八日

○批紙

願之通、大砲之分ハ可相見合候。

毛利元德家記

○

口上之覺、

東本願寺ニテ新撰組武器置付之分、土州ヨリ最前相改、少々取歸リ候由之處、右後へ長州ヨリ罷趣封印付置候テ、土州へ懸合ニ及候處、長州へ引取不苦樣返答ノ趣ニ付、此段長州へ殘リ武器相渡候樣、本願寺へ御口達ニテモ奉願候事

正月二十八日　長州

○批紙

早々本願寺へ可及沙汰候事。　毛利元徳家記

○伊達宗城、大坂ノ舊奉行邸、及ヒ桑名邸ヲ假ラント請フ、之ヲ聽ス。

私儀大坂在留中屋敷手狹ニ付、公務難相勤候ニ付、西町奉行處、竝元桑名屋敷共拜借仕度奉願候、以上。

正月二十八日　宇和島少將

○批紙

願之通被借下候事。　伊達宗徳家記

○松平武聰、再ヒ書ヲ上リ、其臣隷伏見ノ事ニ與ルヲ以テ、屛居シテ罪ヲ待ツヲ稟シ、且其情由ヲ陳疏ス。

先般大阪マテ差出候家來共、徳川氏へ被相雇、上洛之爲先供相登リ、不圖伏見ニテ戰爭相發候節、　官軍御差向之儀トハ聊モ不相心得候趣之處、其後慶喜反逆之段承知仕、別テ驚愕戰標之至奉存候、尤別紙御屆申上候通、事情一切承知不仕候ヨリ

之事ニハ候得共、形跡勤　王之素志ニ相戻、甚以恐入奉存候、依之、謹愼奉待罪候、宜　御沙汰被爲下候樣仕度、且右家來之
儀ハ如何處置仕候テ宜御座候哉、此段奉窺候、以上。

正月十八日　　　　松平右近將監

松平武修家記

○

大坂城代牧野越中守ヨリ形勢柄ニ付、臨機差圖ニ及候儀可有之間、可心得候旨兼テ達有之處、大坂詰至テ人少ニ付、舊臘物
頭一人、差圖役一人、足輕二十五人登坂爲仕候、然ル處、一昨秋退城領地ヲ離レ候後、勝手向必至之困窮、一藩糊口モ仕兼候
程ニテ、大坂詰合之者、扶持米買入ニモ差支、其段同所詰家來ヨリ徳川役人ヘ申立候ニ付、十二月晦日ニ至リ、右家來共徳
川氏ヘ相雇候間、陸軍奉行差圖ヲ受候樣可仕旨、別紙之通リ以書附達有之、扶助等都テ徳川氏ニテ相賄候、扨當正月朔日、
竹中丹後守大坂詰之者呼出候テ、此度徳川慶喜可致上洛ニ付、相雇候者丹後ニ附屬爲先供出立可致、尤不虞之備ニ小銃玉
藥等貸渡候間、可致持參旨相達候、然ルニ前人數之外、物頭一人、差圖役一人、足輕二十四人差出候處、朔日ニ著坂相成候間、
其旨申述候ヘハ、是亦相雇候間、同樣可心得旨ニ付、總人數五十三人、二日ニ丹後ニ附屬、大坂出立、三日ニ伏見ヘ著相成候
ヘハ、同日夕、不圖戰爭相發候間、何故トモ一切不相辨候得共、被相雇候事故、丹後差圖ニ從ヒ進退仕、追々死傷モ有之、且
總體疲勞仕候故、丹後ヘ其段申置、五日夜大坂ヘ引取候趣、然ル處、慶喜七日曉ニ歟、大坂退城致東下候由、且又右戰爭ハ　官
軍御差向ニ相成候事之趣、七日夜ニ入始テ承知仕候ニ付、右人數卽夜ニ大坂出立ニテ、作州ヘ罷歸候次第柄申聞候、其後慶
喜反逆之趣、私承知仕、誠以恐懼仕候、前文之通、家來共徳川氏ヘ被相雇、其上聊モ子細ヲ不存候處、無據事ニハ候得共、形
跡　官軍ヘ無禮仕候姿ニ相成候、兼テ申上候通リ、勤　王之素志ニ相背、實ニ恐入奉存候、附テハ早速御屆可奉申上筈之處、
手負之者共船ニテ差下候ヘハ、海路手間取候哉罷歸不申故、萬一其儘脱走等仕候テハ不相濟ト甚心配、夫々及穿鑿候處、去ル
十三日、備前港ヘ著船仕候旨申越候間、早速見屆之者差遣候處、相違無御座、依テ右家來共、夫々謹愼申付置候、此段御屆申

上候、以上。

正月十八日

松平右近將監

松平武修家記

○別紙ハ之ヲ略ス。

○老臣上申書

右近將儀、一昨寅年以來大病ニ御座候處、先達大坂ニテ德川氏ニ被雇上洛、爲先供伏見ヘ罷越、不圖同所ニテ戰爭相發候節、竹中丹後之差圖ニ從ヒ進退仕候者、作州ヘ罷歸リ候後、德川慶喜反逆之趣承知仕、奉對　朝廷深奉恐入候事ト、不容易苦心仕ヲリ、甚病氣ニ相障申候、依テ右之者共之內、物頭佐野愼太郞、指圖役石倉國之進、同尾關金八郞ト申者申出候ハ、慶喜之反逆一切不相心得、唯々上洛先供ト之達故、伏見マテ罷越候處、官軍御差向ト承知仕候得ハ、假令被雇中ニテモ相斷、人數引揚候外ハ無之候處、聊モ承知不仕候故、丹後之差圖ヲ受及進退候儀ニ候得共、唯今ト相成候テハ、奉對　朝廷如何ニモ恐入候次第、且夫カ爲ニ右近將監勤　王之素志ニ戾リ痛心之餘リ、病氣ニモ障リ候ニ至リ候段、重罪ニ付、　朝廷ヨリ御糺問御座候節ハ、前文之通リ出先之者見計、不行屆ヨリ之誤ヲ判然申上、右近將監ニ付テ之御疑惑筋無之事ニ相成候得ハ、如何樣之嚴刑ニ被處候共、本懷之至ニ付、大坂マテ罷出、　御沙汰ヲ奉待度旨願出候、乍併、御處置向ハ右近將盡ヨリ奉窺候事故、作州ニテ謹愼仕居候樣ニ申諭候得共、何分ニモ登坂ニテ、　御尋等之節、早速ニ御答申上度旨强テ申立候間、不得止頭役森江轍ト申者ヘ道中警固嚴重ニ申付、出役爲仕候積ニ御座候、右之外、物頭伊東梓ト申者モ罷出討死仕候、其他ハ足輕共ニ御座候、是又同樣申立候得共、作州ニテ謹愼爲仕置候、此段御屆申上候、以上。

松平右近將監家老

正月二十五日

尾關隼人

松平武修家記

○本條、武脩家記ニ、二十五日差出トアレトモ、前條ト事相牽連スルヲ以テ、此ニ併録ス。

○酒井忠義、疾未タ痊エサルヲ以テ、再ヒ從軍遲延ヲ稟ス。

今度、北陸道鎭撫　勅使御下向ニ付、私儀右御先鋒被　仰付、誠難有仕合ニ奉存候、然ル處、從來持病之痔疾ニテ、乘馬ハ勿論、乘輿モ甚困難仕候、此度押テ上京仕候ニ付テハ强相障、起臥モ不自在罷在候次第、長途之出馬甚以無覺束、深心痛仕候、右ニ付、不本意之至、自由ヶ間敷、重々奉恐入候得共、爲名代一門酒井直江ヘ篤ト御趣意申含、人數差添、御先鋒爲相勤、私儀ハ妥許ニテ療養相加、少々ニテモ快候ハヽ、跡ヨリ出馬可仕旨、去ル十九日奉願候處、御聞濟被成下難有仕合奉存候、依之、其後之所モ追々無手拔療養差加罷在候得共、兎角同篇之内、不出來勝ニテ心配仕候ニ付、御醫久野出羽介ヘ診察相頼、同人藥服用仕罷在候次第ニテ、何分未發足等モ仕兼候儀深恐入奉存候、此段猶又御屆申上候、御聞置被成下度奉願候、以上。

正月二十八日　酒井右京大夫

○二月朔日批紙

北陸道出陣、所勞延引願之趣、被　聞食候事。酒井忠祿家記

○酒井忠惇ノ老臣書ヲ上リ、忠惇ノ父忠績ヲシテ上京セシメ、且藩兵ヲ出シ以テ謝罪ノ實効ヲ表センコトヲ請フ。

此度、主人雅樂頭義心得違ニ付、去ル十七日姫路城御取上ニ相成、誠以恐入奉存候、右ニ付可相成義ニ御坐候ハヽ、隱居閑亭早速上京仕、謝罪申上、一廉之御奉公爲仕度奉存候、依之、在所表ヨリ撰兵七八百人指出申度、就テハ不取敢右人數之内五小隊計、今明日兵庫邊迄著陣仕候心組ニ御坐候間、何卒出格之以　御仁慈、　御征討之御人數ニ御差加被成下候ハヽ、一藩擧テ奮勵可抽忠勤心得ニ御坐候、此段伏テ奉歎願候、以上。

正月二十八日　力丸五左衞門

○忠邦家記ニ云、於大坂表、薩州藩大山格之助ヲ以テ四校様ヘ差出ト。

池内太久磨 酒井忠邦家記

○柳澤保申、再ヒ京ニ至ル。○柳澤保申家記

○東海道鎭撫總督橋本實梁、桑名城ヲ收メ、尾張、津二藩ニ命シテ之ヲ管セシム。○東海道先鋒記 德川義宜家記

二十九日、吉井德春ヲ以テ參與兼海陸軍務掛ト爲ス。

薩藩

吉井幸輔

右爲徵士參與、海陸軍務掛被 仰付候事。島津忠義家記

○福知山、出石、龍野三藩ニ命シテ、假ニ舊幕府領地ノ其封内旁近ニ在ルモノヲ管セシム、尋テ福知山、出石二藩ヲ罷ム。

○本日達書

朽木近江守

丹波國元代官宮崎達次郎是迄之支配地、今般 御領ト相成候間、當分其藩ヘ取締被 仰付候條、萬端取調、早々 太政官ヘ可申出候事。辨事局記

○二月二日達書

仙石讚岐守

但馬國舊代官宮崎達次郎、横田新之丞、是迄之支配地、並生野銀山等御領ト相成候ニ付、當分其藩ヘ取締被　仰付候條、萬端取調、早々　太政官ヘ可申出候事。

二　月

○本書附箋

別書之通ニテ、尙請取候上、　朝廷之御沙汰可相待候事。　仙石政固家記

○脇坂安斐家記ニ云、二月三日、二條太政官代ヘ留守居之モノ御呼出ニテ、徳川家ヨリ預リ地之儀、　御領ニ相成候ニ付、追テ　御沙汰有之候迄ハ、是迄之通可相心得、且松平右近將監ヘ引渡之儀モ不及其儀旨、參與衆被相達候、但預リ地之内、作州二萬石、松平右近將監方ヘ可引渡旨、徳川家ヨリ兼テ申渡有之、未引渡前ニ有之候事。

○九日再達書

仙石讃岐守

但馬國元代官生野支配地之儀、先般其藩ヘ取締被　仰付候得共、兼テ山陰道鎭撫使西園寺殿ヨリ同所取締向之儀ハ、役方折田要藏ヘ御委任被　仰付儀ニ付、前件其藩ヘ御達ニ相成候儀ハ、追テ西園寺殿歸洛之上御沙汰ニ可相成候間、夫迄之處ハ、其藩取扱ニ不及候、尤生野表非常守衛向ハ、兼テ可被相心得候事。

二　月　仙石政固家記

○再達書

朽木近江守

元代官支配地但馬久美濱、先般其藩ヘ取締被　仰付候得共、兼テ山陰道鎭撫使西園寺殿ヨリ同所取締向ノ儀ハ、小笠原美濃之助ヘ御委任被　仰付候儀ニ付、前件其藩ヘ御達相成候儀ハ、追テ西園寺殿御歸洛之上御沙汰ニ可相成候間、夫迄ノ所ハ其藩取扱ニ不及候事。

二月十三日　朽木綱鑑家記

○附録諸藩申請書三條

一當辰年收納米、正取米之半高御用捨ニ相成候儀ニ御座候哉、

一民政都テ便宜之儀ハ、依舊取扱候儀ニ御座候哉、

一是迄之縣令附小吏、廉直之者兩三人召抱度奉存候、不苦儀ニ御座候哉、

一追々土兵御募之御見込モ有之義ニ御座候ハヽ、今ヨリ有志之者面著帳取調置可申哉、

一御預リ支配所之儀ニ付テノ入費諸拂ハ、御收納米之內ニテ賄候テ不苦儀ニ御座候哉、

右之箇條、差寄當地詰合之者心附候ニ付、此段奉伺候、以上。

朽木近江守家來

二月朔日　中野齊

○批紙

第一條　租稅之義ハ如舊可相心得、尤無告之窮民等有之ハ可調出事、

第二條　伺書之通　第三條　伺書之通、

第四條　募兵之義ハ追テ朝議モ可有之歟、先指向其義ニ不及事、

第五條　伺書之通、尤雜費之儀ハ、歲末ニ至明細ニ可申出事。　內國事務局記

○十日申請書

丹後國元代官宮崎達次郎是迄之支配地、今般　御領ニ相成候ニ付、當分弊藩ヘ取締被　仰付奉畏候、乍不及精々勉勵鎭撫可仕、此段御請奉申上候、乍去、右同所ハ此前　西園寺殿弊邑御通行之砌、御指揮ニ依テ、人數少々爲取締差出、長藩士ヲ總轄トシ、家來共夫々奔走爲仕候事ニ御座候、實ニ右地所ハ　帝都御守衛要衝之場ニテ、苟モ民心一致不仕候テハ不御爲奉

存候間、何卒今暫之所、人心居合候迄、今度被　仰付候迄之姿ニテ、長藩士兩三人上取締御出役被　仰付被下度奉願候、左候得ハ、俱ニ談判所置可仕、此段御採用伏テ奉願候、以上。

二月　　　朽木近江守

辨事局記

○

今般、但馬國御領取締被仰付候付、左之通奉伺候、

一生野銀山請取方之儀、如何仕候テ宜御座候哉、

一生野、久美濱兩所支配地、但馬國郷村書類受取方之儀、如何仕候テ宜御座候哉、

一横田新之丞、竝手附地役人共、如何樣之御所置ニ相成居候哉、右取扱方之儀如何仕候テ宜御座候哉、

右之條々不取敢奉伺候、猶取調之上可奉伺候、以上。

仙石讃岐守家來

二月四日　渡邊新之丞

○批紙

第一二條　一二條取調中可受取事、

第三條　鎭撫使ヨリ所置之儀モ可有之候間、追テ　御沙汰ニ可被及、尙亦向背可相糺候事。

仙石政固家記

○附錄二月五日因幡津和野二藩ヘ達書

因州

津和野

山陰道取調之儀、兼テ被　仰付候處、左之藩々改被　仰付候間、取調掛リ等、夫々申送リ可引渡候事。

但州　仙石讃岐守
丹波　朽木近江守

池田輝知家記

各通　肥　後
　　　筑　前
　　　深溝主殿頭

○肥後、筑前、島原三藩ニ令シテ、花山院家理ノ餘黨ヲ追捕セシム。

九州筋浮浪有志之輩、元花山院家理之募ニ應シ所々屯集、不法亂妨之所業モ有之趣相聞、以之外之儀ニ候、固ヨリ勤　王正義之士トシテ、貨財ヲ奪ヒ人民ヲ苦メ候事、決テ有之間敷事ニ候ヘハ、篤ト吟味ヲ遂ケ、右等狼藉之輩ニ於テハ厳重所置ヲ加ヘ、九州鎮撫總督ヘ可申出候事。

正　月　細川護久、黒田長知、松平忠和家記

○案スルニ、松平忠和ノ祖參河深溝ノ城ニ居ル、故ニ深溝松平ト稱ス、蓋シ前日令シテ松平氏ヲ冒スルヲ禁セシヲ以テ、本書深溝ト署ス、然レトモ其本氏ニ非サルヲ以テ、忠和遂ニ深溝氏ヲ稱セス。

○會計事務總督中御門經之、淺野茂勳、京坂ノ豪商ヲ召シ、度支ノ事ニ服セシムルヲ諭シ、且紙幣準備金三百萬兩ヲ課ス。

此度、於　太政官萬機被　聞召候ニ付テハ、金穀其外民間戸口賦役等之儀、總テ會計局御取扱ニ相成候ニ付、其方共向後會計御用被仰付候間、何レモ厚相心得、正路ヲ以、上下共差支無之樣、精々盡力可有之事　尤是迄仕來リ融通ハ勿論、新規取引之廉モ、尚慥成引當ヲ以、手廣融通サセラレ度御趣意ニ候間、心付之次第有之候ハヽ、早々可申出事、

金子三百萬兩

右ハ此度會計爲御元立調進可有之事、右返辨之儀ハ、地高ヲ以　御引當ニ被成下候筈ニ候得共、尚好之筋モ有之候ハ、可申出事。京都府記

○京都府記ニ云、中御門中納言樣、安藝少將樣等御列座ニテ、爲替方三軒始、兩替屋六軒、其外ノ者御召出、中御門樣ヨリ一同盡力可申旨被　仰渡、大坂町人十人、兩替始ヘモ同斷。

○東海、東山二道鎭撫使ニ令シ、横濱居留ノ外國人ト釁隙ヲ開クコト勿ラシム。

此度外國御交際御布告ニ付テハ、於横濱表居留外國人ニ對シ、干戈ヲ相用間敷候、尤逆徒ニ與力不致樣御達置相成候間、心得違無之樣相觸可申候事。

正月二十九日　東山道總督府叢紙　柳原前光輒誌

○池田茂政、再ヒ松山降伏ノ狀及ヒ其藩情ヲ陳シ、且措置ノ旨ヲ稟請ス。

今般、徳川慶喜奉欺　朝廷反逆之擧動有之候處、板倉伊賀儀、多年徳川氏之暴政ヲ助、今日ニ至リ段候、其罪不輕相考候付、在所家來共去就質問之爲、備中松山表ヘ人數差向申候處、去ル十三日、同家老大石隼雄、同見習井上權兵衞、同國宿村ヘ出迎歎願之次第モ有之候得共、受納不致、同十四日、猶又淺尾陣中ヘ權兵衞罷出、種々歎訴仕候付、應接役之者、松山領分美袋驛迄差出、右隼雄、權兵衞、取締役三島貞一郎、大目付横屋讓之助等ヘ應接爲致候處、謹愼恭順ヲ盡シ、城地領内不殘差出、御沙汰奉待度旨哀訴仕候付、同十五日、右歎願書受取申候、乍然、彼等詐謀難計、猶兵備ヲ調ヘ、人數相進メ候處、同十六日、追討之　勅命相下候趣、國元ヨリ出先之者ヘ相達候付、早々此旨申聞候處、益恐謹之外無他事、神明ニ誓ヒ、更ニ　朝命違背不仕段申出候得共、尚間者等ヲ以内情探索爲仕候處、彌恭順ニ相違無御坐、市井村落ニ至迄謹愼行届、重役以下改服ニテ道路ニ拜跪シ、　王師ヲ迎フル之敬禮不盡處無之候付、同十八日總軍入城仕、此度之　朝命申渡候處、深奉恐入、別紙目錄竝

一族板倉千代太郎十八歲、家老外記悴金子寛人三十二歲、右兩人爲人質差出、家來末々迄城外へ立退謹愼、　御沙汰奉待候旨申出候付、心得違無之樣嚴重ニ申付置候由、注進申越候、此段宜御執奏奉希候。

正月二十九日　　備前少將

別紙、

松山遺士共動靜見聞探索爲仕候處、上國之報聞有之候故、三晝夜於城内大評議仕、重臣共大義ヲ以、去就糺問仕候處、一同異存無之候付、爲實効諸士已下佩刀之外、武器盡ク爲指出、一庫ニ收置、異心無之趣、各血盟仕候處、追々大坂之殘兵玉島表へ歸著之樣子相聞、出先之者所存難計ニ付、一人モ領内へ立入事ヲ嚴敷禁シ、親子兄弟タリ共絶交可致旨、是又血盟仕、郊外へ立退、至極謹愼罷在候趣、且玉島爲追討人數差出候節、爲實効人數差出可申旨申聞候處、欣然領掌仕、半大隊計モ先鋒ニ差出度旨申出候得共、却テ人心如何敷相考、都合十五人、此方先手へ差加へ出陣爲仕候、尤玉島落著仕候付、此方人數ト共ニ爲引取、猶又謹愼爲仕置候。

別紙、

備中國玉島港へ松山勢致上陸候趣相聞候付、人數引分爲追討出勢爲仕、去ル二十二日手配仕、追々押詰、先應接之者差出、此度依　朝命追討之師差向候旨申聞候處、重臣熊田恰、其他頭役之者五六人、脱刀ニテ罷出、此度主人伊賀隨從在坂仕候得共、元來德川家軍事ニ預リ候儀ハ毛頭無之、何等之故ニ候哉、先手開兵端候付、不取敢慶喜東歸、伊賀儀モ隨從致候間、一統勝手ニ引取候樣以書付申聞、獨身脱走仕候付、家來共一統狼狽、誠ニ急遽之間、更ニ何事ヲモ辨ヘス、何分一先引取候上、在所表家來共合議仕度、是迄罷歸候處、官軍城下ニ御討入之趣承リ、恐縮之外無御坐、素ヨリ奉對　朝廷、聊モ異心無御坐、兼兼勤　王之筋心掛候儀ハ、家來共一統之素志ニ有之候得共、此度之次第一言申譯無御坐奉恐入候ニ付、如何體之嚴科ニ被處候共、更ニ御怨筋無之候得共、自然右之意趣御聞上被下候得ハ、生々世々　朝恩忘却不仕候段申出、且別紙歎願書差出、衆人ニ代リ、恰儀割腹仕度相願、直樣居腹仕候付、首級請取、殘兵百五十餘人佩刀預リ、二ヶ所へ抑込置、番士付申候得共、

同所ニテハ警固行屆兼候付、岡山表へ引取、厚ク警固申付置候、此段宜御執奏奉希候、以上。岡山藩松山追討始末

○追討始末ニ二十九日御屆ト署ス、然ルニ、第一書ノ銜日ニ據レハ、本日ハ書ヲ發セシ日ニシテ、上達ノ日ニ非サルヘシ、別ニ考ル所ナキヲ以テ、此ニ收ム、又別紙目錄ハ原記ヲ佚ス、別紙歎願書ハ之ヲ略ス。

○松山措置稟請書

一松山城之儀　御裁許被　仰出候迄、家老伊木若狹初、總人數其儘差置、領分末々迄取締爲致置可申哉之事、

一故松山家中、上下城外ニ立退謹愼罷在候者共へ、先當城之有米ヲ以扶助仕居申候事、

一領內通用之銀札、一日モ不融通ニテハ人民困窮ニ及申候故、先其儘通用爲仕候、尤有金拂底ニ付、備前表ヨリ其筋之者差遣、談判之上所置爲仕候事、

一城付之武器盡ク預リ置申候、非常之節臨時彈薬等、取遣候テモ不苦哉之事、

一長陣ニ相成候テハ、出張人數粮米廻達之義難澁仕候ニ付、當城有米之內借用仕度事、

一證人之儀、當時備前表へ其儘差置可申哉之事、

一於玉島降伏之者共、同故ニテハ警衛行屆兼候付、備前表へ引取爲相愼置申候、熊田恰死後歎願之次第、萬一御許容モ被爲在候ハヽ、松山表へ爲引取、同樣爲相愼置可申哉之事、

右夫々、早急　御沙汰之程奉懇願候、以上。

正月　　　　備前少將

○批紙

第一條　伺之通可心得、尤無罪之萬民困窮不致樣可用深意事、

第二條　伺之通、不迷道路樣所置之儀ハ勿論、衣食住之儀厚手當可有之事、

第三條　伺之通、宜可遂吟味候事、

第四五六條　伺之通、

第七條　熊田恰歎願之趣ヲ以、御宥免之筋無之候得共、兵卒之者可被處其罪道理無之ニ付、謹愼罷在候ヘハ、松山表ヘ爲引取、一同同樣爲愼置可申候事、

但、長官之者、備前表ヘ謹愼爲致置可事。（岡山藩松山追討始末）

○是ヨリ先、島津忠義、兵ヲ日田、長崎地方ニ出シテ、之ヲ鎭撫ス、是日、其兵ヲ撤スルヲ稟ス、青山忠敏モ亦山陰道鎭撫使所屬ノ兵ヲ罷ムルヲ稟ス。

此度賊徒御誅罰相成候處、豐後日田、並長崎邊司吏悉逃去、人民騷然之折柄、無賴之者、其虛ニ乘シ亂妨之聞ヱ有之、不取敢國許ヨリ少々之兵隊差出、鎭撫方ハ勿論、　王政歸順之道手ヲ付置候得共、最早粗人心相定候向御座候付、都テ人數引揚候樣申越候間、右之趣被　聞召置被下度、此段御屆申上候付、宜敷御執奏奉願候、以上。

正月二十五日　　薩摩少將

（島津忠義家記）

○

今般　西園寺中將殿御下向之節、爲御警衞左京大夫人數差出置候處、正月二十四日、於丹後宮津表、別紙之通御達御坐候ニ付、役人共上下五人ハ供奉仕、殘人數同二十五日同所發足、在所表ヘ引取申候此段御屆申上候樣、在所表重役共ヨリ申付越候、以上。

正月　　青山左京大夫家來

駒澤三九郎

篠山藩記

○別紙ハ之ヲ略ス。

○徳川慶喜、再ヒ書ヲ浅野茂勲、松平慶永等ニ致シ、退隱ノ意ヲ陳シテ、救解ヲ請フ、是日、慶永、其書ヲ上ル。

一翰拜晋、然ハ去ル三日、先供之兵隊鳥羽、伏見兩道ヨリ內京之處、薩藩士指留候、應接中伏兵一時ニ起リ發砲ニ及候ニ付、兩所共無據應砲、怪我人モ多人數有之、實ニ意外之次第ニテ、不料奉驚　宸襟人民ヲ損傷イタシ、兼テ之素意ニモ相背候間、斷然大坂城ヲ御兩家ヘ託シ、兵隊ヲ爲引揚、全ク一時供先之爭鬪傅會シテ、或ハ朝敵之惡名ヲ負シムル哉ニモ承リ、實ニ意外恐歎之至ニテ、畢竟華城ヲ弃テ、赤心ヲ表候得共、何分近來事々素心ニ背候事ノミニテ、遂ニ病魔ニ被侵、事務取扱兼候間、退隱イタシ、跡式之儀ハ相選申付候積、何卒是迄之御厚誼不相變御盡力被下、　朝廷ヲ初、外藩ヘモ御說諭、前文意外之汚名相雪候樣、此上ニモ御戮力千萬拜囑スル處ニ御座候、書不盡言萬面罄。

正月　慶喜

大藏大輔殿

春嶽私記

○附錄勝義邦松平慶永ニ贈ル書

邦內之事、今日ニ到リ、亦何ヲカ陳可申、閣下當節之御動靜如何候哉、深御案申上候、小臣唯分ヲ守リ、今一死アル而已、付テ別紙之旨趣、其御筋ヘ被仰立度、偏ニ奉希候、東都別ニ說モ無之、空論紛々タル而已、何卒區々タル微忠、可然御採用御坐候樣奉願候、別ニ申上度者海山御坐候得共、非所盡筆紙、宜御高推ヲ奉仰候、謹言。

正月十八日　安房

越前老侯　下机

近々　官軍問罪之御擧アリト、臣子之分唯一死アル而已、何ソ患トスルニ足ラン、其曲直是非ニ至ツテハ、強テ今分別ヲ論セス、暫ク空漠ニ附シ、百歳公議之人ヲ待而已、昨今米利堅之報告ニ云、　官軍兵庫之居館ヲ襲フ、ユヘニ墩ヲ築キ、兵士ヲ分チ、其地ヲ固守シ、猶軍艦ヲ呼ト、英佛亦然リ、長崎地方之如キハ、イマタ其確示ヲ不得トイヘトモ、恐ラクハ同轍ニ過キサルヘシ、臣愚聞之而痛哭悲歎ニ不堪、遠クハ印度之破レ、近クハ支那之地、長毛官兵其是非曲直ヲ鳴シテ、同族相食、西洋諸國其虚ニ乘ス、今哉、　皇國殆ト同轍ニ陷ラントス、口ニ勤　王ヲ唱トイヘトモ、其形勢今日ニ及ヘリ、公平ヲ唱ヘテ大私ヲ挾、　皇國土崩、萬民塗炭ニ陷ルヲ不察、是ヲ何トカイハム、臣上途シテ微衷ヲ愬訴セムトスレトモ、今ハ有罪之小臣、我主ト一死ヲ待而已、然共、此千載之遺恨ヲ如何ニセム、臣カ斬首前ニ逼レトモ默止スルヲ不得、希クハ此微志ヲ以テ、參與閣下ニ代訴セラレンコトヲ、誠恐謹言。

德川陪臣

辰正月　勝安房

春嶽私記
勝安芳日記

○春嶽私記ニ云、慶喜公御直書、去二十一日、江戸御留守居御呼出、平山圖書頭殿御渡、在京諸侯ヘモ御同様被進、藝侯ハ昨日既ニ上中ニ相成由、是日、公、勝安房殿書面等ト併セテ之ヲ上ラルト、案スルニ、慶喜書中兩家ノ字ニ據レハ、德川慶勝、慶永ト連署セシモノニ似タリ、然レトモ別ニ考フル所ナシ。

○松平定安、京ニ至リ、大村純熈、京ヲ辭シテ長崎ニ赴ク、本莊道美、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシメ、三宅康保疾ヲ以テ、上京ノ期ヲ延ヘント請フ。○松平定安以下各家家記

○初メ德川慶勝、使ヲ勢、濃、參、遠、駿、信、野七國ニ遣シ、諸藩以下ノ向背ヲ問ヒ、其老臣ヲシ

テ名古屋ニ來會セシム、吉田、岡崎二藩、首トシテ之ニ應シ、倶ニ其事ヲ助ク、是日、松平乘秩ノ老臣、連署シテ、勤王ノ證書ヲ致ス。

○慶勝使者口上書

勤　王遵奉之道御守相成候者、御主人御名印之證書、尾州ヘ御差出可被成候、御在府御留守候者、御重役御連名之證書御差出、追テ御引替可被成候事。内藤文成家記

○松平乘秩家臣證書

今般之形勢ニ付、御館様ヘ御指揮御請被成度段、本多美濃守様御家來ヨリ被相願候趣被仰上候處、右ハ尤勤　王之道被成御守候様御導可被遊、附テハ彌勤　王御遵奉ノ御底意ニ候ハヽ、其段　朝廷ヘ可被仰上候條、御請書御館様ヘ急速可被差上、並三河御譜代ノ諸侯始ヘ御打合ノ上、美濃守様御家來同様ノ底意ニ御座候ハヽ、是又證書差上可申旨被仰達候段、右同所御役人ヨリ通達有之敬承奉畏候、於和泉守在所家來共ハ、一統勤　王之道相守申度底意ニ御坐候、急速之被仰達ニ付、江府和泉守ヘ申達候日間無御座候間、不取敢先家來限ノ御請奉申上候、何分ニモ宜御執成被仰上被下候様仕度、伏テ奉願候、以上。

辰正月二十九日

鈴木與右衛門印
松平三郎九印
荻野五右衛門印
今井圖書印

尾州様
御役人衆中様　徳川義宜家記　松平乘承家記

○德川義宜家記ニ云、正月二十日ヨリ勢、信、參、遠、駿、野、濃ヘ使者ヲ派出シ、近傍列藩舊幕旗下ノ者ニ正邪ヲ辨別シ、向背ヲ決シ、勤王可致旨ヲ懇諭シ、勤王ノ證書ヲ可差出旨ヲ申傳ヘシム、就中、參州ハ舊幕府譜代諸侯多候間、時日延引難計ニ付、遠州以東ハ二番手、三番手ト追々可爲致出張間、參州限誘引可致申付、本月二十九日使者發足、二月朔日岡崎ニ著、是ヨリ先キ同藩士來リ、主人始一藩勤王致度、且隣藩竝舊幕旗下ハ岡崎ニ來會候樣周旋致度申出候付、先同所出張候處、吉田藩モ近傍相誘申度旨申出、兩藩周旋ニテ追々岡崎ニ來會、萬石以上ノ分ハ、重臣名古屋待賓館ヘ可罷出申談、以下ハ證書ヲ受取。

○德川慶喜、榊原政敬ヲ以テ、甲府城代ト爲ス。

其方儀甲府御城代被　仰付、入念可勤旨被　仰出候條、可被存其趣候、恐々謹言。

正月二十九日　　小笠原壹岐守　長行判

板倉伊賀守　勝靜判

榊原式部大輔殿

尙以六七日之支度ニテ其許發足、彼地ヘ罷越候樣可被致候、以上。（榊原政敬家記）

是月、酒井忠經、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。（酒井忠經家記）

復古記　卷二十六　終

總括兼纂修
一等編修官　臣　長松幹
校勘
一等編修官　臣　長　熒
一等掌記　臣　四屋恒之
校錄
六等掌記　臣　澤渡廣孝
繕寫
二等繕寫　臣　小川長和
二等繕寫　臣　小島春

復古記　卷二十七

明治元年戊辰二月朔日ニ起リ二日ニ至ル

○二月

朔日、大和鎭臺ヲ廢シ、久我通久ヲ以テ大和鎭撫總督兼內國事務掛ト爲シ、參與故ノ如シ、管理撫御ノ方ヲ授ケ、總裁局顧問木戶孝允ヲ以テ外國事務掛ヲ兼シメ、大坂ニ派遣ス。

久我大納言

大和國鎭撫總督吏ニ被　仰付候事。

但シ、爲內國事務掛。

二　月

東海道先鋒記　久我通久履歷書

○通久ヘ達書

所々裁制所ヲ被置候ニ付テハ、於總督府公事訴訟等裁決可有之事、併大事件ハ　太政官ヘ被伺、其上裁斷可有之事。

但シ、褒賞、勸善之方、刑惡、懲創之品、是又大事ハ　太政官ヘ被伺、其上可被取計事、

第一仁恕ヲ以百姓ヲ養育セラル可事、

但シ劇郡平郡ニヨリ寬猛之所置有之ハ勿論之事、

德川舊領巨細被取調、石高、人數帳、地圖面等可被差越候事、

但シ、此迄ノ代官、竝手附、手代等ノ邪正、村民ノ古老ニ被尋問、取捨可有之事、

若叛逆異心等之者致發覺候ハヽ、早々　太政官ヘ可被申越、尤形勢ニ寄、近隣之諸藩被示合、時宜相當之取計可被致候事、

譬誤リ來リ候事有之トイヘトモ、民之便不便ヲ被察、熟考之上可被相改事、

郡莊村里ノ賤民タリトモ、其質ニヨリ擧用可然事。久我通久履歴

○本文ノ意ヲ案スルニ、各地裁判所總督ニ頒ツモノニ似タリ、蓋シ鎭撫使ノ職相似タルヲ以テ、亦之ヲ頒チシナルヘシ、但シ、通久ノ外見ル所ナシ。

木戸準一郎

外國事務掛被　仰付、早々大坂表罷越可申候事。

正月　毛利元徳家記

○孝允ノ達書、正月ト署スレ共、元徳家記ニ本日承命ストアリ。

○再ヒ松平慶倫ヲ京師ニ召ス。

美作中將

早々上京可有之旨　御沙汰候事。松平康倫家記

○渡邊章綱、和泉海岸警守舊幕府ノ命ニ係ル、ノ撤否ヲ稟ス、是日、令シテ之ヲ撤ス。

渡邊丹後守家來

泉州泉郡宇多大津村ヨリ磯上村迄海岸御警衛、去ル癸亥年被　仰付相勤罷在候得共、今般御一新御變革被　仰出候ニ付テハ、如何相心得可然儀御坐候哉、此段奉伺候、以上。

長坂九郎右衛門

辰正月廿二日

渡邊章綱家記

○本日達書

渡邊丹後守へ

泉州宇多邊海岸御警衛被　免候事。

正月（渡邊章綱家記）

○章綱家記ニ云、二月朔日、軍務掛ヨリ御達有之。

○寶曆年間、舊幕府、天文方ヲ江戸ニ置キ、曆法授時ノ事ヲ管ス、是日、土御門晴雄、（陰陽頭）上書シテ、之ヲ京師ニ復セント請フ、之ヲ聽ス。

推曆之儀ハ京師之測量ヲ本ト仕、前々ヨリ於當家測量推步仕來候處、寶曆四年、新規於江戸頒曆役所被取建、當家之曆算之者澀川圖書被乞候ニ付、段々相斷候得共、强テ所望ニ付、不得止差遣候處、其後ハ天文方ト名付、於彼方測量推步之儀掌握之樣ニ相成、他所之測量不本意候得ハ、此度　王政復古　御一新之折柄、何卒右流弊相改、如元於當家京師之測量ヲ以推步執行候樣仕度、此段宜御沙汰之程願度存候也。

慶應四年二月一日　　晴雄

久我中納言殿

萬里小路右大辨宰相殿（土御門晴榮家記）

○晴榮家記ニ云、右於官中御直願之所、卽日御聞濟之旨被仰達候事。

○佐竹義堯ノ老臣京師ニ在ルモノ、書ヲ上リ、本藩ノ地勢節候等ヲ陳シテ、討會應援ノ事ヲ申禀ス、是日、令シテ再命ヲ俟タシム。

會津容保、今度徳川慶喜之反謀ニ與シ、錦旗ニ砲發シ、大逆無道可被發征伐軍候、仙臺候一手ヲ以本城襲撃、速ニ可奏追討之功旨被　仰付候、隨テ中將ニ於テモ、兼テ被　聞食入候義モ有之候ニ付、倶々勉勵應援可奏成功之旨、奉蒙　御沙汰奉畏入候、然ニ會津之儀ハ、隣國トハ乍申、行程九十里餘相隔、且羽州之儀ハ雪深之土地ニテ、三月下旬ニ無御坐候テハ馬足不相立、就テハ兵器其外兵粮之運送難澀至極ニ有之、猶又、先日奉申上候通、羽州一國如何樣共鎭撫仕度申上置候所、數十里之外へ應援差出、其上一國中之鎭撫兩樣行屆候儀如何可有御坐候哉、甚以心痛至極奉存候、併御沙汰之御旨ハ、仙臺侯一手ニテ追討、手ニ餘リ應援申越候節、人數差出候儀ニ御坐候哉、此旨如何相心得可然哉、速ニ中將へ申達度、差向　御下知之程奉願候、委曲平田大角演說ニテ奉申上度、御聞揚被成下度奉存候、以上。

秋田中將家老

正月　眞崎兵庫

佐竹義脩家記

○本日達書

秋田中將

會津征討應援之儀ニ付、申立之趣、尚追テ　御沙汰可有之候事。

正月　佐竹義脩家記

○本條、上申ノ日ヲ失ス、又達書ハ正月ト署スレトモ、義脩家記ニ、二月朔日御渡トアリ。

○日置忠尙、再ヒ神戸爭鬪ノ事ヲ上陳ス。

○正月二十九日達書

備前

兵庫港發砲之一條、外國人ヨリ申出候趣ニテハ、各國公使館ニ向テ彈丸ヲ飛候哉ニ相聞、其藩ヨリ之書付、右之境相分不申

候間、其節之始末、今一應委敷書付ヲ以可申出事。池田章政家記

○

兵庫港發砲之一條、外國人ヨリ申出候趣ニテハ、各國公使館ニ向テ彈丸ヲ飛候哉ニ御聞込ニ相成、先日差出候書付モ、右境相知不申候間、其節之始末、今一應委敷以書附申上候樣、御達之趣奉承畏候、然ル處、右之事情ハ先般奉申上候通、先手銃隊中之儀ニテ、於私ハ前後相隔、巨細之儀目擊不仕候得共、元來不慮之事ヨリ差起候儀ニテ、公使館ヲ襲擊仕候抔之考ハ決テ無御座候、乍併、其場之勢、自然彈丸飛至候哉ハ難計旨、右隊長共ヨリ申出候、此段奉申上候、以上。

備前少將内

二月朔日

日置帶刀

外務省記
池田章政家記

○池田慶德、支族ノ江戶ニ在ルモノヲシテ、力ヲ王事ニ効サシメント請フ。

私一族左之者共、兼々勤　王一途ニ罷在候處、此節關東ヘ罷在、空敷消日仕居候段、背本意候次第ニ付、小祿之者共ニハ御座候得共、以　朝命、相應之御用被　仰付候ハヽ、於私モ難有仕合、本人ニ於テモ重疊畏入奉存候、此段奉懇願候。

二月

因幡中將

○別紙

池田播磨守　池田右近將監　松平久米之助

池田槍三郎　池田保之助

池田輝知家記

○凡ソ諸侯ノ支族、勤王ヲ請フノ類、別ニ事故アルモノニ非サレハ、後之ヲ錄セス。

○關長克、兵ヲ出シテ、備中巡撫ノ備前藩兵ニ屬セシムルヲ稟ス。

今度、備中國爲御取締備前少將殿御人數出張ニ付、伊勢守儀勤　王爲實効、去月十五日、人數、少將殿御人數へ差加申候段、在所表役人共ヨリ申越候ニ付、此段御屆申上候、以上。

二月朔日

關　伊勢守家來

蜂屋篤郎

辨事局記

○丹羽氏中、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシムルヲ京ス。○辨事局記

○東山道鎭撫總督岩倉具定、大垣美濃、ニ抵ル。○東山道總督日記

○是ヨリ先、池田慶德、使ヲ出雲ニ遣シ、松平定安ノ向背ヲ問フ、定安既ニ入覲ノ途ニ就クニ會ス、留守ノ老臣等、奉命貳ナキノ證書ヲ呈ス、山陰道鎭撫總督西園寺公望、鳥取域ニ抵ルニ及ヒ、慶德再ヒ使ヲ遣シ、兵ヲ率ヰテ之ヲ訊問ス、是日、定安ノ子直應琢彩磨、及ヒ老臣等、書ヲ呈シテ他ナキヲ矢フ。○松平定安池田輝知家記

○小笠原長國、佐渡守○唐津藩主、食封六萬石、老臣ヲ長崎會議所ニ遣リ、其子長行壹岐守○舊幕府老中、罪ヲ犯スヲ以テ、之ヲ廢シ、立功自贖センコトヲ請フ。

口上覺、

舊冬中、　王政御復古之儀、從　朝廷被　仰出候趣、謹テ奉畏候、就右テハ被爲召候ニ付、佐渡守儀早速上京可仕候處、病氣ニテ延引罷在候間、不取敢家老上京爲仕、彼是心配爲仕候折柄、今度京攝變動之儀承知仕奉驚入候、就中、同氏壹岐守儀、

關東閣老任職中ニ付、此節之處、佐渡守ニ取テ、　朝廷御差含之程深奉恐入、不一方痛心仕候、於是、一同評議仕候處、壹岐守職事ニ付テハ、東西懸隔罷在、一切在所表ヘ關係仕候儀ニ無御座候、此末、　朝敵之名目ヲ蒙候テハ名義難相立、彌以奉恐入候、於佐渡守ハ、猶此上別テ　朝命遵奉仕、　朝敵御追伐之先鋒被　仰付候ハヽ、一藩盡力實効相立申度、確然決評仕奉歎願候、依之、壹岐守方ハ父子義絶、斷然不通仕候、乍恐、右歎願之趣御執成被下、　御仁慈之御沙汰被成下候ハヽ、重疊難有仕合可奉存候、右之趣奉歎願候様、佐渡守申付出崎仕候、宜鋪御執成之程泥空奉懇願候、以上。

辰二月朔日

小笠原佐渡守家來
高畠勘解由
差添
渡邊多門
杉江會輔
小笠原長國家記
長崎縣記

○徳川慶喜、阿部正靜ヲ陸奥白河ニ移封シ、仍棚倉城ヲ管セシム。

○阿部正功家記ニ云、戊辰二月朔日、於西丸、奥州白河ヘ所替、棚倉城ハ當分預ケ候旨被申渡候、右ニ付、西京ニ係ル蓋シ追稱ヘ可相伺處、奥羽騒擾ノ際ニ至リ不能其儀候。

○松平慶永、慶喜ロニ恭順ヲ稱スト雖モ、曾テ反責ノ意ナキヲ以テ、書ヲ致シテ、其形迹ノ叛逆ニ渉ルモノヲ數ヘ、速ニ謝罪ノ實ヲ表シテ、朝命ヲ待タンコトヲ勸ム。

○春嶽私記ニ云、二月朔日、過日舊内府公ヨリ御直書御到來ニ付、御請可被仰含人物、關東ヨリ御呼寄之儀、却テ　朝廷御嫌疑モ可有之哉ニ付、今日早飛脚御徒高木要助ヲ以、御請之御書被指立候、原註、但此御書不相見、同時、大久保一翁老ヘ御返書代リ中

根雪江ヨリ指遣ス書面、如左、

去ル廿一日御認、大藏大輔ヘ之御呈書拜見仕候、段々貴勞之御樣子奉拜承、爲宗家　皇國降心大慶仕候、御紙表之趣、且大藏大輔ヘ被遣候御直書ヲ奉拜見候テモ、此表之事情ト、錦地之御見込トハ、實ニ反對之事ト相成候ハ、此地之儀委敷御承知不被爲　在御儀故ト想察仕候、右ニ付、既往之事ヨリ略々陳述仕候、抑此度之御一條、最初ヨリ聊ニテモ御妄動被爲在候得ハ、忽　朝敵之惡名ヲ可被爲負事ハ必然指見ヘ候儀故、老生ヨリ御直ニモ再三言上モ仕、閣老、參政等ヘ御恭順御鎭撫之儀ハ反覆丁寧、幾百囘及懇請候得共、不肖之者共之申上方徹底モ仕兼候哉、御採用ニモ相成不申、事遂ニ今日ニ至候儀、千歳萬歳之遺憾ニ御座候、其子細ト申ハ、兎角　朝廷ニテハ、最初ニ一發致候降官削地之餘論消滅致兼候テ、種々御難題出テ、又一條ニテハ降削之所謂無之トノ御趣意故、尾、越其中ニ立、周旋困苦ヲ極メ、漸クニシテ　朝議ヲ宥メ、寛宥之御趣意之御書面、尾、越ヘ御渡ニ相成候儀ニ付、夫ヲ御承知ニサヘ相成候ヘハ、直ニ御參　參內、引續キ御職掌迄モ可被仰出樣之處マテ相運ヒ候ニ付、則寡君右御書面持參、尾老公ト一同下坂ニ及ヒ言上被仕候處、一々御承知ニテ、御請書モ御渡ニ相成、猶又御上京之御模樣思召相伺候處、何時ニテモ御上京可被遊間、　朝廷之向嚮ト取調ヘ御上京、直樣御參　內等之御都合宜見込ヲ立、御懸念無之處ニテ御御案內可申上トノ御直約ヲ申上、二十九日夕乘船ニテ歸京仕候事ニ御座候處、翌晦日、瀧川播州御地ヨリ上坂ニテ煽動有之由、坂地俄ニ兵事之議蜂起、在坂之諸藩ヘハ出兵御催促有之事ニ相成候、是ヨリ先キ、何故カ不存候得共、淀、伏水、橋本、牧方等ニ御配リ置之兵隊原註、此頃朝廷ニテハ、頻ニ坂兵北上之由ヲ風聞ス、如何如何ト御不審有之、モ、朔日以來北ニ向フテ追々御繰出、會、桑等モ戎裝ニテ動キ出候風聞、二日夕京地ヘ相聞候ニ付、夫ニテハ看ス看ス　朝敵ト可被爲成勢故、何分早々御鎭定相成候樣爲言上、老生ヘ下坂被命候得共、微力ニテハ迚モ行屆申間敷ト、細川家老溝口孤雲、津家老藤堂歸雲、土州家老深尾鼎、柳河家老十時攝津等ヘ、老寡君ヨリ老生ト共ニ、唯々御忘動有之テハ、大事敗レ、忽　朝敵之惡名ヲ被爲負候間、速ニ御鎭撫相成候樣可申上旨被申談候處、何レモ決然トシテ下坂可仕ト致承引、三日曉ヨリ逐々下坂、老生ハ猶又　朝廷之御模樣如何ト存シ、三日朝下坂前、岩倉前中將殿迄罷出仕候處、使者之間ニ薩ノ內田

仲之助並長人罷出居候、何モ暫時對談ニテ引取、其跡ニテ老生拜謁候處、岩倉殿御申聞ニハ、薩、長ヨリ伺ヒ、昨夜ヨリ唯今迄三度ニテ、其子細ハ坂兵甲冑ニテ次第ニ指迫リ候勢、反狀相違無之、打拂ヒ可申哉、如何可致トノ事ナレトモ、唯今一發致候哉否大事敗レ、　朝廷ノ厚キ　思召モ、内府公之恭順モ、尾、越之周旋モ、乍不及拙者共盡力モ、悉ク水ノ泡ト相成而已ナラス、今後之見込モ付兼候ニ付、御沙汰有之迄ハ、決シテ手出シ不可致ト、三度共ニ申聞、唯今モ相返シ申候、是ヨリ總參　内御大議ニ可相成候間、大藏大輔殿ニモ早々參　内候樣可申聞トノ事ニ付、老生申達ニハ、如此危急之場合ニ相運ヒ候得共、猶一ト盡力仕度ニ付、唯今ヨリ致下坂候、箇程迄之形勢ニハ立到リ候得共、何トカ鎭撫之道相立、内府公上京相成候ハヽ、過日來及御談候通リ、直樣參　内等之運ヒハ相違有之間敷哉、今一應相伺度、下坂之上、折角鎭定イタシ、上京ニ相成候テモ、此度之過失ニヨリ、參　内モ不被命ト申樣成事ニテハ、再度及動亂候故、念ヲ入レ候ト、箇條書ヲ以相伺候處、上京之運ヒニサヘ相成候ヘハ、兼テ申談候趣ハ、萬々請合フトノ事ニ付、夫ヨリ歸邸之上、猶又、差當リ伏見表鎭撫之儀、尾州申合セ等ヲ申談、午後發程、四ツ塚關門邊ヘ罷越候處、薩兵所々屯集、英氣ヲ畜ヘ、敵ヲ相待候勢ヒ、夫ヨリ鳥羽村ヘ入候處、坂地之第一大隊勢揃ヘ最中ニ御座候、是ハ大抵未ノ刻頃ニ可有之候、此景況ニテハ、無事ニ鎭撫ハ無覺束ニ付、一驚ヲ吃シ、殆落膽仕候得共、强テ精神ヲ勵ミ、南下仕候處、伏見並鳥羽之方ヘ繰出候坂兵、陸續トシテ蟻行之如クニ御座候故、胸中不穩候得共、道ヲ急キ罷越、橋本之關門ヲ過テ數丁ナラス、薄暮前八幡山ヲ打越シ、伏見之方ニ當リ火光天ヲ焦シ候故、大事了ト大息仕候得共、今朝岩倉殿口上ニテ考候テモ、　朝延ヨリ容易ニ御指圖ハ無之模樣ト申、大藏大輔モ參　内、精々押留之含ミ候故、タトヒ兵端開ラケ候テモ、　朝廷ヨリ之御指圖サヘ無之候ヘハ、薩ト坂兵トノ私鬪候ヘハ、又取直シ方モ可有之、何分一應華城之御安否モ相伺度ト、牧方ヨリ船ニ乘リ、四日曉七時頃、中ノ島ノ弊邸ヘ著船仕候處、留守居之者ヨリ先刻御達之由ニテ、彼除姦之御發令ヲ一見之處、軍隊ニ可馴加トノ御文段ヲ拜見、是迄度々申上候事ヲ御用ヰナク、御私ニ凶器ヲ動カサレ候テハ、正敷姦計之陷穽ニ御落入、　朝敵之御名義御免レ難被遊相成リタリシト、長息虹霓ヲ吐キ悶絶辟地仕候事ニ御座候、又此曉ハ坂地薩邸ヲ御攻擊之沙汰ニテ、御手配リ御嚴重

之由抔物語居候内、地雷二發、中ノ島邊迄震動、薩邸忽燃上リ申候、事之體以之外故、直樣登城、永井君へ拜謁、如何之御樣子ト相伺候處、御奏聞狀上達致兼候内、御先供之行違ヨリ戰鬪ト相成、只今之御爲體、上樣始御當惑トノ口氣、今後之御施策如何ト相伺候處、御無策之由ニ付、夫ニテハ猶以御大事ト、誘引之諸藩老モ御城中ニ會シ、種々申談、閣老衆御初ヨリモ御談シ有之候得共、思ヒ込ミ下坂致候一條ハ、何レモ途中ニテ戰爭相起リ候故、徒然ト相成、今後之處モ除姦ニ付、軍隊へ可馳加トノ御布告有之候テハ、御名義更ニ不相立、如何トモ致樣無之ト、顏ヲ見合セ歎息致候テ、今五六日御堪忍ハ難被成候ヒシカト、既往ヲ恨ムル迄ニテ、總テ無策ニ歸シ、孰レモ致退散、老生ハ卽夜乘船、橋本邊ニテ平明、淀邊ニテ大小砲聲動地之勢ト相成故、上陸イタシ、間道ヲ經テ、五日暮時前京著、扨三日已來之模樣承候處、三日夕、伏水、鳥羽ニテ一砲相發候哉否、錦旗翩飜、將軍宮ヲ被　命、宮中ヨリ直樣御進發ト相成、朝敵之名義ヲ十分ニ揭ケ顯ハシ候事ニ候、戰爭手始メ前後之論モ、已ニ發砲ト相成候テハ、其前後ハ更ニ論セス、晦日已來之儀ヲ初、會、桑戎裝等ヲ以テ總テ反狀等ニ歸候故、國何トモ申譯之道無之、頃來、尾、越、土藩ト及密議、如何程之難題モ總テ御恭順之二字ヲ以取消シ居候事ニテ、可惜其頃ト相成候テハ、縉紳中ニモ御上京希望之向モ出來、晦日歸京、元日ハ休日、二日ニハ已ニ上樣御上京之御運ヒニ付テノ　朝議ニモ相成候處、卽夕ニ前書相認候通リ、何ソ料ラン、大藏大輔ハ前内府公御請濟、復　命之途中ニ罷在候晦日來、坂地ニテハ最早兵事御催シノ聞エ有之事ニ相成候ハ、御運之末トモ可申哉、尾、越之二藩モ、是迄恐ラク二心ナク盡力之積ニハ候得共、猶御嫌疑モ候ヒシヤラン、一應之御談モナク、坂地ハ坂地之御仕出ト相成候故、此表之手筈悉ク齟齬、　朝廷へ對候テモ申譯無之、諸藩へ向ヒ候テモ宗家之無算不體裁、實ニ面目ヲ失ヒ申候、華城御明ケ退キモ、御誠意ヲ被表候思召之由候得共、是以餘リ成御不體裁、閣老監察位ハ御居殘リ、御城附之御武器錢穀等モ、御目錄ニテ御立派成御託シニ相成候ヘハ、ムサムサト御建物ハ燒却、器械金穀モ分捕ニハ相成間敷候ヲ、多宮唯一人居殘リニテ、兩藩（尾、越ヲ指ス、）之者ナレハ一人ニテモツラマヘ口先キニテ相渡シ、逃支度而已之爲體ニ御坐候故、火之元吟味モ不行屆候哉、彼是申内出火ニ相成、誠以埒モナキ御事共故、御誠意モ何モ相立候事ニハ無之、御退去ハ天下之笑ヒ物ニ御坐候、有體ニ申候

へハ、此表之事情ハ右樣之次第ニ御坐候故、中々御先供之御行違ヒ抔ヲ被仰立候テモ、其已前ニ戰爭之御趣向有之候事ヲ致承知居候故、實之御先供ニテモ、決テ左樣ニモ請取リ不申候、ホンノ御遁辭之樣ニ冷笑致居候勢ヒニテ候、實ニ御意外ニ候ハヽ、御承知被爲在候哉否、閣老ニテモ被遣、早々御引揚ニ相成處、御承知之上ニテモ、尙交戰之儘被指置候テハ、被對錦旗　朝敵ニ相違無之、六日ニ至リ大坂城ヲ御託シ、兵隊御引揚ニ相成候テモ、御赤心之被仰譯ニハ相立不申候故、世上ニテハ狼狽ト唱へ、手ヲ拍テ笑ヒ居申候、

又前ニモ相記候通リ、御上京之御一途ニハ無之、會、桑モ取付キ居リ、除姦之御目論見ト相混シ候而已ナラス、御奏聞已前之御發令等、御手違ヒトハ乍申、御形迹ニ於テ御恭順之道ハ更ニ相立不申候故、別紙ニ相認候通リ、何事モ反形ト取成サレ候テ申開キ無之候、且　朝敵之御惡名御殘念思召候モ、乍恐御尤至極ニテ、一ツ御手違ニ相成候へハ、其御殘念ニ思召候御惡名ヲ被爲負候ハ、眼前指掌ニ御座候故、不被爲負樣ニト、大藏大輔初乍不及周旋力ヲ盡シ、九分ハ仕課フセ候處、一分之際ニテ御堪忍嚢切候、果シテ御惡名ヲ被爲負候御儀ニテ、唯今、此地之名分名義上ニテハ、負セ奉リシニハ無之、御負ヒ被遊候ト申カ正議ニ御坐候、御心術上之御誠赤、御形迹上ニ於テ貫徹可仕樣モ無之次第ニ相成リ居申候、此處ヲ能々御洞察無御坐候テハ、偏ニ御恭順之御誠意ヲノミ御主張御坐候テモ、無形之儀故、於此表大藏大輔口外仕候儀ハ難相成候へハ、此上ハ唯此度之御始末、何トモ御恐入被遊、御一言之被仰譯モ不被爲在候へハ、如何體之　御沙汰御坐候テモ、兎角被仰上候儀ハ不被爲在ト、御悔悟御謝罪之御筋道不相立候テハ、　朝廷ニオカセラレ候テモ、御聞屆被遊度候テモ、難被遊御次第ニ御座候、右樣ニサヘ被仰上候へハ、御恭順モ御誠意モ御貫徹之御道モ相立可申歟、彼是ト愍成被仰譯ハ、却テ御名分上之御障リニ相成候へハ、只管御悔悟御謝罪之外ニ御條理ハ相立不申候、此御筋サヘ相立候へハ、又　朝廷上ニテモ夫々御寬宥之御廷議モ相立可申ハ、自然之道理ト奉存候、尤、御悔謝モ乍恐御口上計ニテハ相濟不申、其御實跡ヲ可被相立事ニ御坐候、第一、會、桑之二藩、心術上之忠赤ハ可憐可感歟候得共、　朝廷へソムキ、原註、蛇蝎之如ク御嫌ヒ被遊故、歸國被命候テモ、其儘滯在ノミナラス、戎裝北上、官軍ニ向フテ戰フ、天下ヲ騷カシ、原註、此亂二藩ヨリ起レリ、宗家ヲ倒ス、原註、所謂贔屓之引倒シナリ、罪惡必誅不可免ハ關西之輿論ニ

御座候上、坂地ニオキテ事ニ闘リシ諸有司ハ、夫々御罰無之候テハ、御實跡相顯ハレ不申候、此處迄十分ニ御落入御悔謝ニ相成候ヘハ、年來之御誠忠モ、御逆心可被爲在樣モ無之御儀モ、無御據譯ニテ御反形ト相成候事モ、是亦天下萬人之知ル處ニ候ヘハ、必雪寃之議起リ可申モ、必然之勢ニテ候得共、卽今之處ニテハ、御形迹上ニオイテハ御遁レ難被遊御名義故、一人トシテ口ヲ開ク者無之候、書ハ不盡言難及禿筆而已ナラス、甚以不敬多罪ニ亘リ恐入候得共、心付候儀ハ申上候樣トノ御書面ニ付、大藏大輔申付、旁、此地之見込ヲ申上候、何分方今之長策ハ、兎モ角モ干戈之動カヌ樣、人心之安著スル樣ニ御鎭定被遊候テ、天定之時ヲ被爲待候ヨリ外ハ無御座候、是皆乍恐上樣御一心ヨリ外ニ出ル處無御座、唯々奉恐入候、何タル御形行ニ相成候哉覽、長生キ仕候テ、如此憂目ヲ見候事歟ト書ニ臨ンテ落涙止兼候、

一右ニ反シ、　和宮樣ヘ何カ御和平御取計ヒ之儀、被仰進トモ相聞エ申候、又　和宮樣ヨリ田安於御相續御願被成トモ相聞エ申候、

一昨日　朝議ニ、愈謝罪之體モ無之上ハ、海陸之大兵ヲ發セラレ、　御征伐可被遊ト御決定相成候、

一廿七日ヨリ二條城ヲ太政官代リニ相成、宮公卿始御出勤有之罷出候テモ、黍離之有樣不堪感慨之至候、

一當月三日以前迄ハ、諸藩竝縉紳中之有志ハ、上樣御參內之御運ヒニサヘ相成候得ハ、天下ハ靜謐ナルヘシ、夫ヨリ後ハ王政一途ニ力ヲ盡セハ濟事ト、一同ニ是ヲ目的依賴トシ、其事ニ而已力ヲ用ヒ候處、世態一變シテ、算外之事ト相成候ニ付、「王政モ名計ニテ、實ハ望洋ナリ、嗚呼御謝罪之筋タニ立候ハ、罪ハナシ、人材ハ棄ヘカラス、　朝堂ニ立テントイヘル論モ、　朝野ニ聞ク處アリ、

一岩倉殿ヨリ內意有之、同姓大和守迄申越候儀モ有之、定テ御承知相成候半ト奉存候、

一有馬遠州家來有馬帶刀ニ囑候儀モ有之候、是モ定テ御承知ニ相成候半ト奉存候、是等之諸說モ御參考被下、何分ニモ爲　皇國、爲宗家御黽力偏以奉仰望候、勝君ヨリ老寡君ヘ御呈書有之、老生ヘモ御投書候得共、拜答候儀ハ前書之趣申上候ヨリ外ハ無御座候ヘハ、乍恐宜御傳聲可被下候、下略、

私曰、先月廿六日著之飛脚ニ、内府公御直書御到來之處、一向ニ御悔悟之御樣子不被爲在、又廿七日著、一翁老呈書、同人ヨリ雪江ヘ之投書等之趣ニテモ、内府公御始御恭順ト計ニテ、御謝罪等之儀ハ更ニ御心附無之御模樣ニ付、雪江ヨリ之返書ニ、此表之實說委敷申越可然トノ御沙汰ニ付、廿八日一書相認、紀藩東行之一士人ヘ相託候處、同人東行延引之都合ニ相成候付取戻シ、日附其儘、今便一緒ニ相達書面、如左、

抑此度之御一擧ニ至ツテハ、御不臣之御形迹不一方ニ付、唯御先供之行違ヨリトノ御申開キ而已ニテハ、中々以貫徹可仕樣モ無之、不顧忌諱其條件ヲ數ヘ候ヘハ、第一ニハ、 朝廷ニテ殊更御嫌惡被成候會、桑、已ニ御暇ニテ、海路歸國ヲ被命候ト迄被仰上置候處、夫ヲ御上京之御沙汰已前、追々伏見、淀邊迄御指出ニ相成、且步兵モ伏見、淀、橋本、牧方等ヘ御繰出ニ相成候ハ、何等之御趣意歟、更ニ難相辨事故、事敗ニ歸候後ハ、 廷議反逆之企ト名付候テモ申開クヘキ道無之、第二ニハ、晦日ニハ追々兵事御手配リ有之候ハ、除姦之御下タ搆ヘニハ可有之候ヘ共、除姦之 御奏可無之程之事ニ候ヘハ、是以叛逆之御企ト名付ケ候テモ、更ニ申釋ヘキ道無之、第三ニハ、朔日已來、會、桑甲冑ニテ北上致シ、兵隊モ追々御繰出ニ相成候爲體、御上京之御先供トハ相見ヘ不申故、是亦叛逆之御企ト申テモ、申解クヘキ樣無之候、第四、御奏可ハ勿論、御奏聞ニ相成候哉否モ御貪著ナク、於坂地ハ除姦之號令ヲ被發、可馳集トノ御布告ハ御不都合之尤甚敷モノニテ、事ヲ除姦ニ託シ、 闕下ニ迫ラントスル叛形顯然ト指斥サレテモ、更ニ申解クヘキ樣無之候、第五、除姦之實不被遂上ハ、皆託言ニシテ、 闕下ニ逼ツテ別ニ姦謀アリトイフトモ申釋ヘキ樣無之、第六、鳥羽、伏水之戰鬪ハ御先供之行違ト申ニモイタセ、淀ワタリ之戰爭ハ何事ニ候哉、除姦之擧ニ候ハヽ、進戰勇鬪、御立派ニ其實ヲ被遂候ヘハ、 朝廷ヘ被對御異心無之儀モ現然可致候得共、會、桑死戰之坂兵モ頻リニ被進候ヘトモ、悉ク及敗走候得ハ、除姦ハ口實ニテ、謀反敗レタリト稱スルモ、更ニ申解クヘキ樣無之、第七、四ツ塚、鳥羽畷之一戰、御先供之行違ニ候ハヽ、一戰之後ハ速ニ兵隊御引揚ニテ、早々御悔謝被仰譯モ可有之處、其儀無之而已ナラス、將軍宮御進發後モ猶兵隊ヲ被進候ハ、叛形ニアラスシテ何事ナルヘキ、如此反狀ト名付ヘキ形迹現然候上ハ、無形之口舌ヲ以申譯ヘキ樣ハ無之、頻ニ御恭順御鎭撫ヲ 朝廷ヘ申上候

拙生迄モ、奉對　朝廷恐入、申譯モ無之次第ニテ、年來之御誠忠ハ、心ヲ以テ心ヲ知リ候上之儀ニテ、知ラサル者ニ至ツテハ、形迹ヲ認メテ其心ヲ察候外ハ無之、　朝廷之御赫怒御至當之儀ニテ、今日ト相成候テハ、御誠忠モ御恭順モ、王莽之謙恭同樣之姿ニ相成候テ、愁訴之道モ絶果候、如斯反狀明白之上ハ、不日ニ征討之大兵ヲ不被爲發候半テハ、　朝憲モ相立不申候ハ當然之事ニ候、左樣ニ相運ヒ候ヘハ、祖宗二百餘年之御盛業モ水泡ニ相成、　朝敵之汚名、千歳之青史ヲ穢サレ、且ハ生民之塗炭、生靈戰鬪之慘毒ヲ受ケ、剰ヘ外夷其虚ニ乘ルニ至候ハヽ、其罪惡ハ實ニ天地間不可容事ト相成可申ト、不堪恐悚悲歎之至候、今之時ニ當ツテ、御誠忠モ御恭順モ、　朝廷ハ元ヨリ天下萬人、見テ信スヘキ證據ヲ形迹之上ニ顯ハサレ候テ御謝罪有之、干戈ヲ熄メ、天下ヲ穩ニシ、　宸襟ヲ被爲安、罪戻之萬一ヲ御償ヒ被成候ハヽ、御祖宗之御遺業モ今後ニ及ヒ、德川氏之社稷モ御後昆ニ御傳ヘ可被遊御條理モ相立可申候、卽今、天下之治亂モ、　宸襟之御安不モ、悉ク御一身之御方寸ニ相迫リ候事ト相成候、此處御深考御熟思之程、　皇國之爲、御宗家之爲、御身上之爲千祈萬禱、泣血頓首。

正月二十八日

○太田資美、慶喜ノ令ヲ以テ、駿府城ヲ守リ、疾ヲ稱シテ、朝召ヲ辭ス、慶喜謝罪ノ狀ヲ聞クニ及ヒテ、形迹ノ嫌アランコトヲ恐レ、是日、從兵ヲ留メテ、其邑ニ歸ル。

○德川氏ヘ申狀

總次郎儀駿府御警衞被　仰付、去月二十三日駿府表到著仕、本多紀伊守殿、佐久間鐇五郎殿ヘ被申合候上、御警衞行屆候樣相心得罷在候處、兼テ御達相成候步兵頭多賀上總介殿始兵隊共、關東ヘ御引揚相成、猶又、御達モ有之段承知仕、其上、去ル十九日御達相成候御書付之趣ニテハ、　上樣御謹愼モ被爲在候折柄、軍裝ヲ以、駿府表出張罷在候テハ如何可有之哉、殊ニ兼テ御屆申上置候通、重役之家來上京旅中、京師變動之御模樣ニ付、在所ヘ爲差扣置候處、舊臘、京師ヨリ更ニ被爲　召候

間、迅速上京可致旨之御達モ有之、猶又、上京之儀、彼地用達共へ催促モ御座候間、總次郎病氣ニ付上京難致旨、重役之家來差出申達置候傍、駿府表ニ出張罷在候テハ不都合之次第ニ付、同所御警衛之儀ハ、本多紀伊守殿、佐久間鏴五郎殿へ御打合之上、相應之人數へ重役爲取締殘シ置、總次郎儀ハ在所掛川表最寄之儀ニモ候間、一ト先引揚、自然非常之節ハ、速ニ駿府表へ出張盡力仕候心得ニ御座候段、各殿迄申上置候樣、駿府表ヨリ申付越候、尤右之段御差圖之上進退可仕之處、遠路之儀ニ付、御差圖ヲ不相待在所表へ引取候上、猶御届可申上候、以上。

二月朔日

太田總次郎家來

鹽川三藏

太田資美家記

二日、近衛忠房ヲ以テ神祇事務總督ト爲シ、鷹司輔熙ヲ制度寮事務總督ト爲シ、小松淸廉ヲ總裁局顧問ト爲シ、顧問參與大久保利通ノ顧問ヲ罷ム。

○

神祇事務總督被　仰出候事。

近衛新前左大臣

近衛忠房履歴書
東海道先鋒記

○

制度寮事務總督被　仰出候事。

鷹司前右大臣

鷹司輔熙履歴書
東海道先鋒記

總裁局顧問被　仰付候事。

小松帶刀

東海道先鋒記

○利通事蹟ニ云、總裁局顧問辭退被聞屆候事。

○兵庫鎮臺ヲ改メテ、裁判所ト爲シ、東久世通禧ヲ以テ總督ト爲ス、又長崎裁判所ヲ置キ、九州鎮撫總督澤宣嘉ヲ以テ裁判所總督ヲ兼シム。○二人參與外國事務總督並ニ故ノ如シ、

東久世少將

攝州兵庫裁判所總督兼被　仰出候事。　東久世通禧履歴書 東海道先鋒記

○

澤主水正

長崎裁判所總督被　仰出候事。　澤宣嘉履歴書 東海道先鋒記

○案スルニ、裁判所ヲ置クノ達書、諸記一モ見ル所ナシ、故ニ其總督ヲ命セシ日ヲ以テ創置ノ日ト爲ス、爾後置ク所ノ京都以下裁判所、及ヒ府縣等ソノ創置ノ達書ナキモノハ、皆之ニ倣フ、又東海道先鋒記、東山道總督府叢紙、載スル所ノ回達文、宣嘉ノ宣旨、九州鎮撫總督兼長崎裁判所總督ニ作ル。

○池田茂政及ヒ日置忠尚ニ命シ、外人ト神戸驛ニ爭鬪セシ隊長ヲ兵庫ニ押送シテ自刄セシメ、五日間ヲ期ス、且忠尚ニ謹愼ヲ命ス。

○茂政ヘ達書二通

備前少對家來

日置帶刀

神戸通行之節、行列ヘ立障候由ニテ、英人ヘ兵刄ヲ加ヘ、剩ヘ逃去候亞佛人、並公使ヘ及砲發、理非之應對ニモ不及、如何ニ

モ妄動之所爲不屆之至リニ候、卽今、更始御一新國事多難之折柄、深被爲惱　宸襟、就中外國御交際之儀ハ、御國體ニ相抱(拘歟)候重大之事件ニ付、宇内之公法ニ基キ、不損皇威、至當之筋御履行可被遊　思召之處、御時節柄ヲモ不奉顧、返テ御耻辱ヲ釀候儀、重疊不容易罪科ニ付、發砲號令之者、各國見證ヲ受、可致割腹旨被　仰付候事。

但、罪科人體、明三日ヨリ五ケ日ヲ限リ、兵庫表ヘ護送致、外國事務掛リ之者ヘ可申出候。

二　月　池田章政家記　外務省記

○

備前少將家來

日置帶刀

神戶通行之節、從卒共外國人ニ對シ暴發、不容易所業ニ付被處罪科候、全同人下知不行屆之事ニ被　思召候間、謹愼爲致置候樣被　仰出候事。

二　月　池田章政家記　外務省記

○

日置帶刀

去月十一日、神戶通行之砌、外人ヘ兵刄ヲ加ヘ發砲ニ及候儀ニ付、公法ヲ以御處置可相成段ハ御達之通ニ候、卽今、不可謂多難之御時節、些少之事件ヨリ御安危ニ相抱(拘歟)大害ヲモ可釀出、別テ如何之至ニ付、公論決定、　叡斷之上、發砲號令之者罪科ニ被處候ニ付、早々可差出被　仰付候條、　皇國之大事ヲ體任シ、可奉安　宸襟候事。

二　月　池田章政家記

○按スルニ、前ノ二書ハ茂政ニ達セシモノニシテ、少將ノ下家來ノ二字、日置ノ上ニ移シ、本文ト爲スヘキニ似タリ、二書ノ奉答ハ茂政之ヲ上リシヲ以テ之ヲ徵スヘシ○三月十三日、忠尙ノ謹愼ヲ釋ス。

○章政家記ニ云、二月二日、岩倉輔相ヨリ、此度神戸之一條ニ付テハ、嘸々其藩一統苦心之程察申候、於　朝廷モ御同様、彼是三日モ御評議ニ相成候得共、兎角不決、此上ハ　主上御叡斷之外無之ト存、則相伺候處、實ニ其邊被爲惱　叡慮、彼是事情言上ノ上、如此　御叡斷御沙汰ニ相成候事ニ有之、此度、當人儀彼之爲ニ死スルト思ヒ候テハ、如何ニモ殘念ニ被思候得共、實ニ　皇國更始御一新之折柄、右之次第ニテハ如何様之大害ヲ可醸モ難計候ニ付、無據公法ヲ以テ　御所置被　仰出候間、何卒　天朝之爲、　皇國之爲、次ハ備前一國、日置一家之爲、甘シテ罪ヲ受候様懇々被　仰聞候ニ付、京都詰合之者、神戸表ヘ罷越、帶刀家來共ヘ　御趣意之趣詳ニ申聞、斯迄厚キ　叡慮ヲ奉蒙候上ハ、爲國家彌感發、　御國威不相汚様覺悟可有之段及說諭候處、本人初一同甘心仕候。

○附錄四日布告書

備前家老日置帶刀、去月十一日、神戸通行之砌、外國公使ニ對シ發砲致シ候ニ付、於　朝廷以公法御處置號令致シ候、上官死罪、帶刀謹愼被　仰付候間、爲心得申達候事。

池田章政家記
非藏人日記

○三日奉答書

右之通、昨二日、御達ニ通、之趣奉畏候、此段御請奉申上候、以上。

二月　　備前少將家老代
池田靭負

外務省記

○

去月十一日、神戸通行之砌、外國人ヘ兵刄ヲ加發砲ニ及候儀ニ付、公法ヲ以御處置可相成段ハ御達之通ニ付、卽今不可謂多難之御節、些少之事件ヨリ御安危ニ相抱（拘歟）、大害ヲモ可醸出、別テ如何之至ニ付、公論決定、　叡斷之上、發砲號令之者罪科ニ被處候ニ付、早々可差出被　仰付候條　皇國之大事ヲ體任シ、可奉安宸　襟候旨、　御沙汰之趣謹テ奉畏候、右御請奉申上

候、以上。

二月七日　　　　　　　備前少將家老
　　　　　　　　　　　　日置帶刀　外務省記

○備前藩兵ノ西ノ宮警守ヲ罷メ、久留米藩兵ヲ以テ之ニ代フ、又郡山藩ノ西洞院信愛ノ衛兵ヲ罷メ、愛宕通旭ノ衛兵ト爲ス、柳澤保申家記尋テ備前藩兵ヲ京師ニ徴ス。

被　免西宮御守衛候旨、被　仰下候事。　　　　備前へ

二月二日

但、久留米ト申合、可引拂之事。池田章政家記

○有馬頼咸家記ニ云、西ノ宮警衛ノ仰ヲ蒙リ候事。

○但、達書ヲ佚ス。

○五日達書

西之宮御警衛被　免候上ハ、右人數引纒、速ニ可指登候事。　　　　備前少將へ

二月五日　池田章政家記

○大村純熙ニ申命シ、長崎警守ノ事ハ、裁別所總督ノ指揮ヲ受ケシム。　　　　大村丹後守

長崎表取締勤方、市中警衛向、竝不法亂行之輩取締等、總督指揮次第相勤可申候事。大村純熙家記

○附錄純熙上申書

先度各藩ヨリ御屆申上候通、去ル十四日夜、河津伊豆竝附屬之者共、長崎表引拂候後、兎角人心不穩、依之、別段市中爲鎭撫、立山役所、私方ヘ守衛仕候樣、各藩會議一決ニ付、元ヨリ微力之儀ニハ御座候得共、同所之儀ハ外國交際之地、領分接近之場所ニテ、舊來之由緒モ有之、殊更、頃年頂戴仕候　勅諚之趣モ御座候付、斯ル切迫之折柄、旁以難閣、直樣重役竝兵隊繰込、一際精力市中鎭撫罷在候段、在所ヨリ申越、於大坂表承知仕候、此段御屆申上候、以上。

正　月　大村純熙家記

○純熙家記ニ云、本書、二月八日差出スト、而シテ末尾、正月ト署ス、案スルニ、文中於大坂云々ノ字アリ、蓋シ純熙ノ發途ハ正月二十九日ニアリ、此月小盡ナルヲ以テ、之ヲ考フレハ、著坂ノ即日、此書ヲ發セシナルヘシ、其遷延シテ八日ニ至リシハ疑フヘシ、姑ク此ニ附記ス。

○橋本關門警守ノ加賀藩兵、外國人經過措置ノ事ヲ稟請ス。

橋本關門ヘ外國人相向指懸リ、致入京度旨申聞候節ハ、差留置可奉伺心得ニ御座候得共、强テ罷通度旨申聞候ハヽ、如何相心得可申哉奉伺候、急速御差圖奉願上候、以上。

二　月　加賀宰相中將内

廣瀨五十八郎

○批紙

伺之通リ、通行之節ハ差抑可屆出、若押テ差通候ハヽ、搦捕可申出、決テ及殺ニ不及樣申達候事。辨事局記

○三浦弘次、藩兵ヲ發シテ、美作駐在ノ備前藩兵ニ屬スルヲ稟ス。

今度、爲作州御取締、池田備前守殿御人數出張ニ付、備後守儀、爲勤王實効人數差出、備前守殿御人數ヘ差加置申候、此段御屆申上候樣申付越候、以上。

三浦備後守内

二月二日　　渡邊恒太郎

三浦顯次家記

○顯次家記ニ云、丁卯維新之際、作州邊爲御取締、池田備前守殿人數出張之節、備後守儀ハ池田家ヘ屬シ、兵隊等差出シ、勤王實効ヲ表シ候ニ付、備後守父子勤王ノ誠意、備前守殿、洞察上申ニ付、別段勤王之證書ハ不差出相濟申候也。

○鍋島茂實、其父齊正ニ代リテ京ニ至ル。○鍋島直大家記

○松平喜德、書ヲ上杉齊憲ニ致シ、其父容保ヲ救解センコトヲ請フ。

○米澤藩戊辰事情概旨ニ云、二月二日、會津嗣子ノ使者鈴木丹下、土屋哲之助來ル、嗣子若狹ノ親書アリ、概旨ニ曰、父肥後、戊年以來千辛萬苦、公武御合體ノ事ニ力ヲ盡シ、恐多クモ　先帝深ク御依賴ノ　宸筆ヲ賜ヒ、病氣ノ節ハ　御親禱マテ被成下候處、去ル三日、洛外ノ戰爭、彼ヨリ兵端ヲ開キ、却テ關東所爲ト申立、宗家一同朝敵ノ寃罪ヲ蒙ル儀、子トシテ涕泣憂憤ニ堪エス、何卒　朝廷ヘ御申立、汚名ヲ御雪キ被下度トナリ、二使又命ヲ鄭重シテ曰、小寡君、日夜號泣憂悶スルモ告訴ニ由ナシ、偏ニ貴中將閣下ヲ煩ハス、孝子ノ至情御亮察、寃罪ヲ辨白セラレンコトヲ企望ノ外他ナシト。

三日、天皇、太政官代ニ臨ミ、三職以下群臣ヲ會シテ、親征及ヒ大總督ヲ置クヲ議ス、議既ニ決ス、乃チ列藩ニ詔シテ、軍備ヲ爲サシム、日晡車駕宮ニ歸ル。

○朔日達書

今般御一新ニ付、明後三日、二條城太政官代へ　御親臨被爲在候旨、被　仰出候事。
但、行幸之儀、總テ御輕便ヲ主ト被遊、月中數ヶ度　御親臨之思召候間、猥リニ供奉等不相願樣兼テ申達候事、於武臣モ供、堂上同樣、侍二人、僕兩人可被召連候事。（春嶽私記）

○

今度、慶喜以下賊徒等江戸城ヘ遁レ、益暴逆ヲ恣ニシ、四海鼎沸、萬民塗炭ニ墮ムトスルニ忍ヒ給ハス、　叡斷ヲ以テ　御親征被　仰出候、就テハ御人撰ヲ以被置大總督候間、其旨相心得、畿内七道大小藩、各軍旅用意可有之樣、不日軍議御決定可被　仰出御旨趣可有之候間、　御沙汰次第奉命馳集ヘク候、宜、諸軍戮力、一同勉勵、可盡忠戰旨被　仰出候事。

二月三日　（非藏人日記　東海道先鋒記）

○春嶽私記ニ云、今日（二日）、議事、浪華行幸ニハ御決ニ相成候得共、御趣味意柄兎ヤ角ト御据リ兼ニ付、公被仰候ハ、　御親征又ハ外國御交際、或ハ遷都抔、多端曖昧之御趣意ニテハ不可然、御交際ナラハ御交際ニテ、公然ト　臨幸被爲在可然、遷都之事ハ諸侯會議ノ上ニテ御治定可然、　御親征之儀ハ將軍宮ヘ御委任御當然タルヘクトノ御議論之儀、又議院　臨御モ不被爲在候テ、外國御交際之臨幸ハ、御順序無之御不都合タルヘキ旨、三條、岩倉之二卿ヘ被仰達、御嘉納有之由、三日巳刻、主上太政官代へ　行幸被爲在、　御親征之儀被　仰出之、　御垂簾ニテ群議被爲聽、下參與之向ヘモ　御下問有之、何モ奉畏候段御請申上候。

○細川護久家記ニ云、二月三日、　主上始テ太政官代二條城へ　御親臨、喜廷（護久ノ初名）、供奉ス、夫ヨリ議定所へ　出御、三職ノ役員、喜廷等、下參與共一同拜伏、　御親征ノ　勅諚總裁有栖川帥宮傳之、　畢テ各退座、再　玉座前へ被爲召、御菓子ヲ賜ハリ、且又於御庭乘馬　叡覽アリ、　喜廷モ其一ニ與ル、夕刻　還幸ノ供奉モ勤ム。

○（附錄）德川慶喜以下罪案

第一等　　慶喜

第二等　　會津　桑名

第三等　　豫州松山　姫路　備中松山

其主人滯阪人數差出、　官軍ヘ發砲シ、剩ヘ慶喜一同東行セシ部、又ハ人數差出發砲之聞ヘ無之トモ、其主人滯坂、且東行セシハ、戰不戰ヲ不論同等ニ可有之、或ハ近年閣老、其外要路ニ在勤、別テ慶喜之逆意ヲ補佐セシ部、

第四等　　宮津

其主人滯阪中、出先之家來不心得旨ヲ以、官軍ヘ發砲シ、　大號令ヲ拜戴、速歸國、其家來ヲ謹鎭申付、身柄上京謝罪セシ部、

第五等　　大垣　高松

其主人在國中、滯阪元家來共、不心得ヲ以官軍ヘ發砲シ、速ニ其家來ヲ取糺謹愼申付置、身柄上京、先鋒願書等、謝罪申出候部、

右五等ヲ以　御裁斷被爲在、三等以上ハ其罪不輕ニ付追討、開城ニモ立至リ候得ハ、直樣其城領地共御預ケ、追テ關東平定之上、何分御所分被　仰出度、四等、五等ハ大同小異、大區別ハ有之間敷ニ付、其主人上京、先鋒願出候得ハ被　免、實効相顯之上、追テ何分御宥免之御所置被　仰出候テハ如何哉、

但、五等之外、慶喜親藩ニテ御疑惑有之藩々ハ、御督責難行詰ニ付、寛宥之　思食ヲ以、其家來先鋒等被爲仕、主人之儀ハ必上京被　仰付度事、

附リ、四等、五等之部ニテ、償金ハ先鋒實効ト申譯共違ヒ、追テ之御所分ト申邊ニ御差湊可有之ニ付、被差止度事、

右如何哉、御氣附筋御附札奉賴候。　東山道總督府叢紙

○五等ノ罪狀、蓋シ議參ノ擬案ニ係ル、其決裁何如ヲ審ニセス、然レトモ當時ノ處置大略之ニ據ルニ似タリ、故ニ錄シテ參考ニ備フ。

○職制ヲ更定シ、七科ヲ改メテ、總裁局、及ヒ神祇、內國、外國、軍防、會計、刑法、制度ノ七局ト爲シ、總裁局ニ總裁、輔弼、顧問、辨事、史官、筆生、官掌ヲ置キ、七局ニ督、輔、判事、書記、筆生、局掌ヲ置ク、○局皆司アリ、當時闕ク、

三職

總裁職宮任之、副總裁公卿諸侯任之、
萬機ヲ總ヘ一切ノ事務ヲ裁決ス、

議定職宮公卿諸侯任之、
事務各課ヲ分督シ議事ヲ定決ス、

參與職公卿諸侯徵士任之、
事務ヲ參議シ各課ヲ分務ス、

八局

總裁局

神祇事務局
神祇、祭祀、祝部、神戶ノ事ヲ督ス、

內國事務局
京畿庶務及諸國水陸運輸、驛路關市、都城港口、鎭臺市尹ノ事ヲ督ス、

外國事務局
外國交際、條約、貿易、拓地、育民ノ事ヲ督ス、

軍防事務局
海軍、陸軍、練兵、守衛、緩急軍務ノ事ヲ督ス、
會計事務局
戸口、賦稅、金穀、用度、貢獻、營繕、秩祿、倉庫及商法ノ事ヲ督ス、
刑法事務局
監察、彈糺、捕亡、斷獄、諸刑律ノ事ヲ督ス、
制度事務局
官職、制度、名分、儀制、選叙、考課、諸規則ノ事ヲ督ス。太政官日誌
○
總裁局
總　裁一　人總裁職宮任之、　副總裁二　人議定職公卿諸侯任之、
輔　弼二　人議定職宮公卿任之、　顧　問　無定員參與職徵士任之、
辨　事四　人參與職公卿諸侯徵士任之、　史　官六　人徵士吏任之、
筆　生十二人吏任之、　官　掌
神祇事務局
督　一　人議定職宮公卿諸侯任之、　輔　二　人議定職公卿諸侯任之、
權　輔　判　事四　人參與職公卿諸侯徵士任之、
權判事　書　記吏任之、

筆生　　局掌

司　　頭一人公卿徵士任之、

助一人徵士吏任之、　　屬

内國事務局

外國事務局

軍防事務局

會計事務局

刑法事務局

制度事務局　水萍貽孫録

○本件、日ヲ失ス、但シ、中山忠能以下ノ新官ニ拜スル本日ニアリ、故ニ此ニ收ム。

○

權官試補之事、

一諸局輔本員二人トス、外ニ權官一人ヲ置クヘシ、

一辨事本員五人トス、外ニ權官一人ヲ置クヘシ、

一諸局判事本員三人トス、外ニ權官一人ヲ置クヘシ、

右三官、其人ニ因テ權官トナル、權官ハ必シモ置カサルナリ、且三官ノ外ハ權官ヲ置クヘカラス、三官本員中權官ヲ置ク、亦其人ニ因ルヘシ、

一諸局判事試補、徵士タルヘシ、參與タルヘカラス、總裁局史官、諸司頭助及屬ノ如キ中外ノ者ヲ撰擧シ、徵士タラサル者ヲ試補官トス、其官ノ員中員外共ニ置クヘシ、但員外ハ二人ヲ過クヘカラス。　水萍貽孫録

○本條、蓋シ議案ニ係ル、太政官日誌載セサル所ナリ、然レトモ當時ノ制之ニ據リシニ似タリ、故ニ之チ錄存ス、但シ權官ハ初加勢ト稱シ、試補ハ見習ト稱ス、其改稱セシハ本月下浣ニ在リ。

○議定中山忠能、正親町三條實愛ヲ以テ輔弼ヲ兼ネ、參與萬里小路博房ニ制度事務局輔ヲ兼シム。

中山前大納言
正親町三條前大納言

自今可爲輔弼被　仰下候事。
但、總裁局出仕之事。　中山忠能履歷　嵯峨實愛履歷

○

萬里小路中納言

制度事務局輔被　仰付候事。　萬里小路博房履歷

復古記　卷二十七　終

總閱
一等編修官　臣　長松幹
纂修兼校勘
一等編修官　臣　長　熒

一等掌記　臣　四屋恒之

原纂

十二等出仕　臣　石津發三郎

校錄

六等掌記　臣　澤渡廣孝

八等掌記　臣　松浦辰男

繕寫

一等繕寫　臣　小川長和

二等繕寫　臣　小島春

二等繕寫　臣　藤園賢意

昭和五年十月一日印刷
昭和五年十月五日發行

（復古記　全拾五冊　非賣品）

東京帝國大學藏版

發行者　東京市小石川區竹早町三十二番地　川俣馨一

印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞

發行所　東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京八九六〇番
電話小石川(85)一〇五四番・三二六九番

凸版印刷株式會社本所分工場印刷